神宮司廳藏版

禮式部二

古事類苑

古事類苑刊行會


LIBRARY
MAR 23 1967
UNIVERSITY OF TORONTO

古事類苑

禮式部第二冊目錄

古事類苑

禮式部十三

婚嫁二

古事類苑

禮式部十三

婚嫁二

合[illegible]式

江家次第二十執聟事（近代例）

聟公入帳内、姫公出（必用監濃得、供不待人之心後出云云、）聟公解裝束、掩衾（物吉之女上臈覆、○中略）次供餅（○中略）次奉烏帽子狩衣、（妻家儲之）聟公著之出帳前、次供膳（陪膳、本家親昵之四位若五位、）近代用臺三本（不用六本儀、）一本箸臺加銀箸木箸、追居四種二、窪器二、次第二臺、追居乾物五盃、生物五坏（是賤赤切也、）供飯（居中盤、居第二臺南、）陪膳分盛於分器、居第一臺、次供酒器（三物不居盤、相從銚子、）冷汁（相加追物、）次温汁（同上、）次居菓子臺（五坏、立一臺南、○中略）次夜陪膳如此、

久世家婚儀次第婚儀次第

先男君令著簾外座給

家司取脂燭前行、令一人取御劒相從（御左方、）御著座之後、指入御劒於簾中（母屋東南角、）女房請取之、置帳代御枕上之方（刃東、柄南、）

次姫君下車令入帳中給

但當日入輿之間、此度男君令著簾外座給之間、自便宜所（簾中）御出座、

次男君令入同所給

女房褰御簾（母屋東南之方）

次男君被脫御裝束

其儀被撤御冠御直衣等以下不被脫之
此間女君於同所令脫小袿給自除不被撤之、女房奉扶持、
次相共臥給男君南、女君北、
兼並置張枕一雙於帖東頭
次物吉女房奉掩御衾
依有例被用御直垂衣、兼置帳中、
次進三日夜餅納蒔繪御筥、小餅三坏、有鶴形等臺、
其儀女房於辨備所簾下母屋東面之角取之、自御枕上之方奉之退居、
次男君先令食給、次姬君同然、
其儀先男君取餅三坏之內、上一枚宛、或取一枚、兩說、但不食切云云、被食、更取之被授姬君、食事同前、了各令置筥之內給、
次御箸鳴男君之間、女房參進撤之、下初所、三ヶ日以後、餅可埋御生氣方之地、
次男君著御冠直衣、著簾外座給、女房奉褰簾如初、御劍如元在御帳內、
次姬君著御小袿、著寢殿代北方座給、御扶持如初
次男君供御前物高坏三本、三獻等如例、
其儀先持參打敷、各居了令掛箸匙於飯給、先箸被立南方、次匙被立向方、奉酒盞持參銚子、拔箸取盞令飲給三獻了
撤之、此間又被掛箸、次第撤之間、箸匙共被拔之、家司陪膳、下臈役送、
次姬君進御前物同前
女房陪膳、下臈役送、供撤如前、陪膳女房奉扶持、但不進御酒、
次二所君、入帳內令寢給、此度對御單衣袴等、悉被脫之、
〔季光日次記〕寛延三年四月十五日丁亥、充賢入來、婚禮之次第、○中略

刻限主人出座給、次姫君著座給、陪膳女房取打敷參進敷之、姫君前同之、次供御前物、御臺三本女房役之、此間並居折櫃物二十台於庇、次一獻、主人飲之授姫君給、主人陪膳女房役之、次二獻姫君飲之授主人給、姫君陪膳女房役之、次三獻如一獻、次撤御前物、次撤打敷、次主人姫君、令入便所脫御裝束給、次主人姫君更著御裝束出座給、次式肴有三獻事、女房役之、次主人姫君、令入便所給、

〔婚禮法式上〕婿迎之部

一御祝の時、聟殿御料人待女房著座の次第は、御料人休息所にて休息有て後、待女房御參候て、御料人より先に立、御祝言の御座鋪へ案內申て、御なほし申され候て、偖聟殿御出有べし、御料人の御著座の所は、御調臺の口の前也、聟殿は御料人に向ひ合て座し給ふべし、待女房は御料人の次に著座有べし、御料人の御なほり候座鋪は、何方にてもあれ御調臺の有方也、是御料人御なほり候座也、左右も同前、御調臺に付、飾も左右心得あるなり、萬待女房の指圖也、

左右も同前とは、御調臺左の方に有りても、御調臺右の方に有りても、御調臺の前に御料人御なほり候事也、

御調臺に付、飾も左右の心得有也とは、祝の座敷のかざりも、御調臺有方によりて、御調臺の出口の前に、座敷の飾のなきやうに心得有事也、御調臺左の方に有るとも、右の方に有るとも、其心得也、

一聟殿御料人へ御對面の時、詞懸られ候事はなき事也、待女房取つくろひて、めでたう候由を申され候事也、

一、御夫婦御著座、待女房も座せられ候事、御祝の御座鋪に、御夫婦の御ゑとね敷被申、御料人其上に御座被成候、其時聟殿も御出有て、御擶に御座被成るゝ時、殿方の大上臈、飾の御手懸を持參候て、御料人の前にすゑ進らせ、又それを殿へすゑまゐらせ、又待女房へもすゑまゐらせて、本の所

に置被申候、扨今の殿方の大上﨟、御料人の御前へ參られ候を見申され、御料人方の大上﨟罷出候て、御料人の懸させられ候、御胸の御守を取て、殿方の大上﨟に渡し申され候時、殿方の大上﨟請取て、殿の御前へ持參進上申され候時、御手添られ、そこ御いたゞき候て、大上﨟に懸よと被仰候、其時大上﨟、胸の守を持て立て、御床に向ひ候て、左の方の柱に有折釘に懸られ候、又胸の守を衣桁の端に懸る事もあり、胸の守は、あいぎやうの守なる故、聟殿にもいたゞかせ可申爲に如此する事也、また式三獻過て後、むねの守を請取て、柱又はいかうの端にも懸られ候、兩樣何れも苦しからず候、祝過候て後は、御料人方のみづし棚のつぼねの内に納置るゝなり、又手懸を略して、箸初の臺を右のごとく持て參りて、箸にて小さくきざみたるのしあはびを挾み進らする事も有也、本式の手懸有時は、箸初の臺は不用也、本式の手掛は、人にすゑたる迄にて、挾進する事なし、此次に式三獻參らるべし、式三獻は、壹人前に御膳三ッ宛すゑ申候、本膳に盃三ッすわり候、待女房共に、三人前出申候、御銚子ひさげ出申候、待女房差圖申候て、御料人より御盃始られ、次に殿、次に待女房參り候也、上の盃にて一ッ目を御請候時は、初に酒をそと二度入、偖三度めに多く入べき也、二ッめの中の盃、三ッめの下の盃、酒の入樣同じ事也、一ッ盃にて、三度ヅゝ酒を入させて參り候、三ッの盃にて三三九度也、提子は出候へども加へ申さゞる也、盃も御取かはしはなき事也、式三獻は、すわりたる儘にて、食候事なき事也、御盃御とりかはしなき内は、御料人を客人の心にて、御酒なども御料人より參り始られ候樣に待女房差圖有べく候、御盃御とりかはし濟候以後は、何事も聟殿より參り始られ候事也、扨銚子提子にいれ、御膳共揚り申候、此次に初獻出申候、初は雜煮也、雜煮の事ほうざふ○雜煮といふ、是は箸を御取候て、雜煮のうは置にある五色の上のかざり物を少し參るべし、初獻出候て、御吸物を二の膳の如く居申べし、是を添肴といふ也、扨吸物を少參るべし、是も待女房共、三人前出申候、いつもかくのごとく可心得、雜煮は餅にて御座候、點

心と申て、菓子の類にて候ゆゑ、御酒出不申候、獻の數には入不申候間、鯉の御吸物を出し申候て、御てうし出申候、此吸物を添肴といふ也、此添肴にて御酒參る也、御盃は三方にすゑ、面々の御前に置申候、又足付にもすわり候、其身の位ほどに有べし、盃の數は一ッ宛なり、御銚子提子出、是も御料人より御盃始られ、次に殿方へ進し、次に待女房參り候、各壹度ヅヽ參りて、御銚子ひさげ共入、御膳ども取申候、此時も盃に、酒入樣、二度そゝと入れ、三度目に多く入候べし、いつも如此心得べし、此次に二こんめ參り候、二こんめまんぢう、是も點心にて御座候間、添肴出申候、添肴は、鶉の羽盛を、まんぢうの膳へ組付て出候、御盃同前、御銚子提子出る、二こんめは數あしく候間待女房より御盃始られ、次に御料人、次に殿方參り候、各壹度ヅヽ參候而、御銚子提子入、御膳取申候、盃へ酒の入樣如前、此次に三獻目參り候、三獻め鯉のあつ物出候、御盃同前、御てうしひさげ出る、三獻目は御料人より御盃始られ、次に殿方、次に待女房參るべし、各一度ヅヽ參りて、御銚子提子入、御膳取申候、盃へ酒の入樣前のごとし、此次によこんめ參り候、よこん目蒸麥、是も點心にて候間、添肴餅の一こん煮の吸物出申候、御盃同前、御銚子提子出る、四こんめは數あしく候間、待女房より御盃始られ、次に御料人、次に殿方參るべし、各壹度ヅヽ參りて、御てうし提子入、御膳取申候、盃へ酒の入樣如前、此次に五獻目參候、五獻目羊羹、又はすゐせんかんにても、是も點心に候間、添肴出候、添肴はむし蚫を羊羹の膳に組付て出候、御盃同前、御銚子提子出る、五獻目は御料人より始られ、次に殿方、次に待女房參るべし、各一度ヅヽ參候て、御銚子ひさげ入、御膳取申也、盃へ酒の入樣、前のごとし、是にて五獻相濟申也、是迄は御盃取かはし無之也、右五獻は七五三の内の五也、扨殿がた、御料人待女房何も此次に七五三の内の七を參らする也、是は御ゆづけ七の膳まで出て、參候て御膳とも取申也、扨次に殿方御料人待女房、何れも七五三の内の三を參らする也、これ饗の膳也、一二三と三膳宛すゑ申也、御盃三方にすゑ如前進候、御銚子提子出る、此度は御盃取かはし有、

扨此度は殿方より御盃始られ、其御盃を御料人へ參らせらる、此時むすび酌をして御料人へ進らする也、扨待女房へも御酒參候、扨御てうし提子はいらずして其儘居べし、其時一ッの吸物と申て、餅の丸ながら御吸物にして參らする、此時御銚子御料人へ參る、御料人へ、別の三方に新しき盃をすゑて參る、其時新盃にて參り候て、其盃を殿方へ參らせらる、此時又結び酌をして、殿へ御酒進らせ候扨御てうしひさげ入、御湯進らせ候、御膳取申なり、御盃新盃を出候事は、互に御盃を、もとの所へ御返し無之故也、結酌も殿方御料人の前にて一度宛也、是より外はむすび酌はこり不申候、常の酌にて候、饗の膳より前は銘々のみ也、初の獻より饗の膳迄の事也、饗の膳にて殿方御料人、御盃とりかはし有之也、是は本式也、

七五三と云は、初獻の雜煮を初め、五獻までを五と云、めしにても湯にても、七の膳迄參るを七と云、きやうの膳三膳を三と云、是にて七五三也、

一二獻めを數あしく候といふ事は、切腹する人、又は軍中にて切たる、敵の大將の頭に酒のまするには、酒を二ッ重ねて出して、二獻のまする事有故、數あしく候と云也、盃二ッ重ねて出す事を常に嫌ふも此故也、四獻めは四の字を忌む也、死ぬなどと云事を忌む故、字は違ひ候へども、四の字をいみ、四獻目をきらふも此故也、獻々の分り申候事は、一獻々々にて銚子入、又改めて出候へば何獻と云、てうし不改、其てうしにて幾度も飲ても、其獻の內にて候、御料人殿方待女房、幾度にても盃銘々にすゑられべし、

一きやうの膳は、何も高盛三膳に定たる物也、すゑやうは、二の膳に汁懸飯すゑ候、二の膳の汁は、常の所にすわり候、其かた〳〵に汁懸飯すゑ申候、此きやうの膳參候樣は、飯高盛なり、箸を御取、飯高盛高くもりたる上にちひさく飯をしたため置べし、それをまゐるべし、むかしは能參候樣にゑたゝめ候へ共、近年は左樣の沙汰無之、古は高盛の飯をわけ候かはらけを、二の膳の汁かは

らけの下にゑきて出申候、そのかはらけにて高盛の飯をわけ候て參候、是は向に居候かいゑやくの女房の役也、汁は二の膳にすわりたるを可參候、本膳には汁はすゑ不申候、此時汁懸飯を、殿方御料人、兩方の大上﨟、各三方にても足付にてものせ候て參、殿の二の膳へ、殿方の大上﨟すゑ、御料人の二の膳へ、御料人方の大上﨟すゑられべし、たべやうは、さいは本膳の中もりより參らせべし、扨御すわり候左の方よりさきへ參るべし、二の膳三の膳同前也、飯を參り、さいを一色まゐり、又飯を參り、さいを一色參る物也、必二色とはくはず候、いやしき事也、飯をわけて參候かはらけにて、湯をも參り、そのかはらけ本のごとく汁かけの下にゑき申也、

一御てうしは、かた口白めつきたるべし、

一此御とりかはしの御盃のかはらけ、殿方にても御料人方にても、兩方共に能納置物にて、御座候、いよ〳〵御緣ふかきと申傳ふる也、若子御誕生の時、御產屋より御色直の御祝の節、其盃兩方共に出して、御祝有之物也、○中略

一御祝の時、女房衆へ御盃被下候事、きやうの膳出て、扨御夫婦御盃とりかはし濟て後、御盃被下候事なり、別の盃を殿方へも御料人へも參らせて、殿方きこしめして、御料人方の大上﨟へ御盃御さし被成、其盃段々座なみ次第にさし、御料人方の御つぼね給りて納申候、是にて御てうし入申候、御兩人の御盃のをさまりこれなり、是法式也、前にて御夫婦御盃とりかはし濟て後、何もへ御盃被下候事ある也、又式三獻の後、さらにまゐり、扨ぐごまゐり、次に三こんまゐり候て、おのおの女房衆御とほりに參られ候事も候、時宜によるべきことなり、三こんとは、御盃とりかはしの事也、又女房衆、何も式三獻よりすわり候て相伴也、兩方小上﨟迄は、同座敷に居被申候、中らうがしらより下は、次の座敷迄ならばれ候、○中略

一二日め三日めも、初日のごとく、式三獻以下御祝あり、盃は殿より初らる、御盃とりかはしはな

し、三日め、本式は色直しの御祝有之事也、よめ入の夜、色直し相濟候へば、其儀無之候、たゞ三日めの御祝計也、○下略

〔婚禮推陳記〕相盃の時、座配の事、男は客位の方、女房は主位の方に著座すべし、○中略嫁著座の品は、假粧の間にて、けはひ裝束をよくつくろひ、待女房と同道して御主殿江出られ、しとねの上へ著座有べし、待女房も對座にし、とねに座して、雙方の局と宜挨拶ありて、御時分能よしを聟江しらせ申べし、男し、とねに著座あらば、手かけのしを出すべし、○中略御介副は、嫁の下座に居て、御對面の時は少退、御時分を見合、七種の御土產を持出懸御目べし、其時待女房、聟江宜挨拶有べし、扨男の局請取、表江出すなり、むかしは男其夜、此七種を著して、合盃七五三、五五三の膳を祝と言り、近頃は相盃過候て、自分の衣服にて直に表江出、與貝桶の役人江對面し、盃終りて後に、女房持參の衣服に著更る事となれり、是男の色直し也、○中略御土產の披露終たる時、長敷(オトナシキ)女房二人出、床飾の瓶子を一雙ともに取て、下座の目通江さがり、並置ひかへべし、是を酒改め役人と云也、次に御酌加の女房二人出て、飾たる銚子提子を取、瓶子の役人に渡し置、其身は勝手江退居る也、○中略酒改終たる時、夫婦待女房江引渡の膳を据て、扨夫婦江計、捨土器を左の方へ銘々に引べし、扨添は引渡の御膳へ手を添、嫁の前江直し、捨土器は御側に置べし、扨御酌加出、待女房の方を窺ひ居べし、其時御酌まゐれと仰有時、御酌取、銚子持ながら上座江往て、銚子を下に置、床に飾たる三ッ土器を取、左手に持、右に銚子を持候て、盃を嫁江持參すべし、其時も扨添、盃を取て嫁江渡すべし、又公卿を請取、盃をとらせ申事も有、嫁いまだいさけなければ、御酒迄をうけ參らする事も有、くはへともに三獻飲れ候はゞ、扨添御盃をとりて、盃の下を捨土器江こぼし、本のごとく上にかさね、御酌江渡す也、酌請とり、上座の飾物の方へ向ひ立て、聟江盃を持行、一獻呑れ候時、酌くはへに

立也、此時七種の土產を持出披露申べし、待女房聟江向ひ、嫁の御土產のよし挨拶あらば、其儘納候て聟の局へ渡す、請とり表江出す也、扨御酌まゐり加へて二獻目をまゐらせ、又加に立たる時、嫁の襟にかけられたる愛敬の守を、介添取て物にのせ候て、御酌を賴べし、御酌銚子を下に置、御守を請取、待女房江渡す、待女房請取、聟江みせらるゝ也、年比により、聟いたゞき襟にかけられたる古例も有、聟或はいたゞかれたる計にて、待女房江被渡たる例も有、或はちらと誰の方を被見たる計の品も有、近比多は此作法なり、その守を待女房上座へ持ゆかれ、客居の柱の(男者座の方也)折釘にかけおかれ、本座江著座せらる、これは待女房輕き時也、又酌御守を待女房より請取、折釘に懸る事も有、是者待女房位高き時也、扨御酌參りて三獻參らせ候て少退き上のぬれたる盃を一の下へかさね、銚子持ながら、本のごとく盃を上座江持行飾置、銚子は持て、末座の瓶子の女房の側へ持行渡置べし、此時加も酌江立向ひ、肩の往違所にて、我身をくるりと廻りて、提子を瓶子の女房江渡し御勝手へ入べし、これを末座の大むすびと云て、くはへの役定りて、御盃の納る度每にする事なり、瓶子の役は銚子提子をうけとりて、前のごとく兩瓶子の酒を提子へうつし、提子より銚子江酒をつぐなり、○中略

愛敬の守を男へまゐらするに色々有、○中略輿より出る時、男迎に出る時、守を渡したる例もあり、守は床の柱に七十五日かけ置也、七十五日の數は、七十二候に、天人地の三ッの數を表する也、○中略

二獻目に、內躬の膳を三人江、二の膳のごとく、右の方江並べ据べし、扨御酌加出て、右のごとく銚子提子を酒改の女房より請取、御酌銚子持ながら上座江往、盃を取、此時は直に男江持參する時、加ともに三獻のみ、其盃を嫁江持參するとき、右の方待女房江向ひ、廻り立て持往べし、これを中の結と云て、かならずする事也、かいぞへ盃を取てまゐらせ、一獻のまれ、酌加に立時、男より女房

江出す色直しの小袖を披露すべし、此時待女房嫁江むかひ、殿より御祝ありて、御色直しまゐらせらるゝよしを申さるべし、その小袖納り候はゞ、御酌まゐり加て、以上三獻まゐらせべし、盃のふたをこぼし候て酌へ渡す時、一の下へ重て、前のごとく上座へ置て、酌下座へ退時、くはへの役出て大結して、銚子提子を瓶子の女房江渡し置、次へ入べし、又まへのごとく兩瓶子の酒を提子へうつし、さて銚子へつぐ事同前也、○中略

三獻目は腸煎の膳出、三人江三の膳のごとく、左の方へ据べし、酌加出て銚子提子を請取、酌銚子持ながら盃をとり、嫁へ新盃を持參すべし、加ともに三獻飲、男江指、酌上座へ向ひ持行べし男加て三獻のまれ盃納るなり、これを三三九度の相盃と申也、終候はゞ盃を上座へ持行置、銚子を持、下座へ退時、加出向大結して、酌加瓶子の女房の側にひかへ居べし、此時通の女房二人出候て、捨土器を取、次に三人出、腸煎の膳より次第さげ申なり、此時瓶子より本のごとく床に飾、銚子提子も、初飾たる所に置べし、○中略

相盃濟、三獻の膳をさげ、次に七五三の膳部、本膳二三と据置、盃捨土器出る也、食は祝言の時は大飯に盛、上に生飯を握置也、通の人、御鉢を公卿に組付持出る時、本膳に組付これ有、湯土器へ、鉢の食を少入まゐらす、此食をもまゐるに不及也、扨置盃にて御酒一へん參、次に吸物出、盃臺公卿の物これを近代はさへ臺と云銘々に出し、御酌加出、男の前へ御酌參、盃臺の盃にて男飲初られ、其島臺嫁へまゐり、嫁にて納る也、又嫁の前の島臺の盃にて飲初られ、男へまゐらせ、男にて納る也、盃の獻數、五獻程宛也、公卿の物の肴は、局出て挾上べし、御銚子加、御勝手へ入、其次に御湯出る、御湯は公卿に据出候て、通の女房、三方にて湯かはらけを取、湯の役人江渡し、御湯をつぎまゐらする也、御湯もまゐるに不及也、扨御湯を引、御吸物より段々取なり、此次に十二組の菓子、銘々に出る、是も据り申迄にて其儘引、次に五五三出る也、是は參料に仕立まゐらする也、此喰料の上に、島臺おさへを

出す事も有、〇中略

合盃終、男表へ立たる跡にて、別の吸物出、嫁待女房と盃事有、其外男の局江も、嫁の盃被下、大上﨟小上﨟江も盃給候て御祝有也、

〔禮容筆粹五〕婚禮之次第

三ッ盃饗膳獻々本式之事

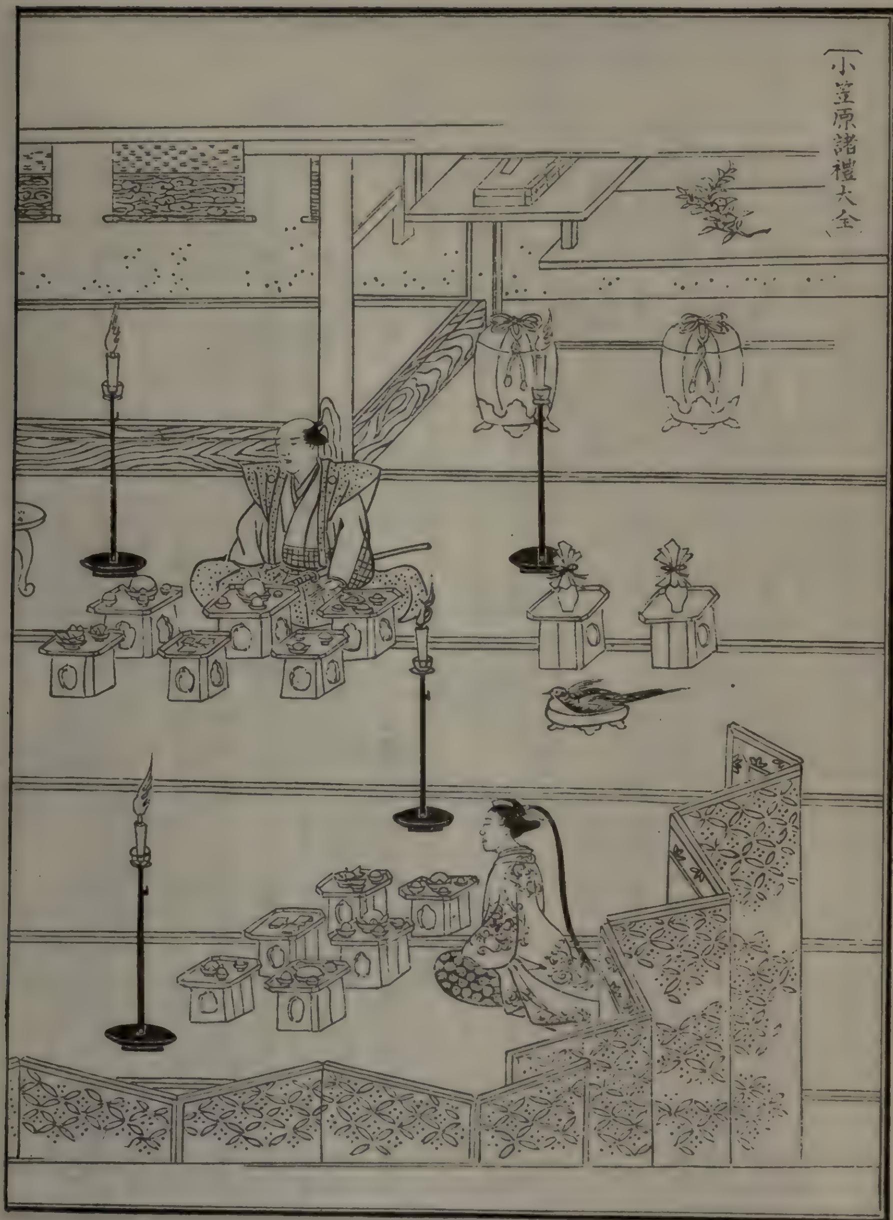
床の上に、かねてかざり置べきものは、二重手掛、饗膳、せきれいの臺、蓬萊の臺、置鳥、置鯉、瓶子、三盃、銚子、提也、待女房、けしやうの間にて衣紋を直させて、座鋪へ誘引すべし、此時夫は客位、女は主位に座すべし、あまり眞向に座せず、少すみかけて直らする也、先手かけを出す、此時待上﨟、めでたきあいさつして、二人に搗栗、こんぶ、のしを取まゐらする時に、おとなしき女房二人出て、床にかざりたる瓶子を一ッ宛取て、下座にをさるべし、次に酌にたつ女房二人、銚子、提をとりて、同じく下座に著べし、其時瓶子持たる女房、瓶子の女蝶をとつて、あふのけて下に置、酒を提へうつし、又男蝶をとり、女蝶の上に俯て置、酒をひさげへうつし、又提より銚子の中へ、よき程酒をうつし、扨てうしひさげを酌と加と取て、ひざをなほし、よき程を待つ、此時眞の引渡し出る、尤夫婦と待上﨟とにすゆる也、本酌三ッ盃を夫に持參する也、三ッかさねたる上の盃にて、夫二獻のむ時、ひさげの酒を少銚子へかふべし、此時むすぶ酌の口傳あり、夫已上三獻呑て、其盃を上﨟にさす、婦又三獻のむ也、加へは始のごとし、此時の盃、女より始て男へさすと云説あれども、然るべからず、此等は民間の惑へる說にして、官家の作法を見ぬ者のいへる事也、扨介副の女房立て、婦ののみ給ふ盃を三ッ目の下に重ねて、初のごとく床の上に直す也、此時嫁こんくの間、介副の女房は、右の方へ引そひて、始終盃のさばきをいたす也、其後內躬を出し、引渡しの右にすゑ、扨本酌の女房、件の三盃を持來て嫁の前に置也、嫁第二の上にある土器にて、三獻のみて夫にさす也、又男三獻のみ


〔女重寶記大成〕
志んの志うげん
さうの志うげん

て、土器を下にかさぬる時、酌あとへ去さるべし、此時膓煎を出し左にすゆる也、酌又三盃を夫の前に持參る也、夫第三の盃にて、又三獻のみてよめにさす、よめ又三獻のみて收むべし、扨酌盃を本座に置、右の三膳をあぐべし、其時男座を起てくつろぐ也、嫁は其儘座に有、次にひれの吸物出て、待上らうつぼね二人のかたへ盃事あるべし、此盃は土器一ッ三方にすゑ、銚子も別に勝手より出す、取肴勿論也、此盃過て嫁おくへ入、色なほしを著し座に著給ふ也、又夫婦と待上﨟に雜煮を出し、吸物を出す也、此時金銀の土器を高砂の臺にすゑて出す也、銚子も提も、おの〳〵金銀の蝶を付たるにかゆる也、扨此度の盃は、上らうのみて夫にさすべし、互に三獻づゝのむなり、此時待上﨟、おさへの肴を夫婦へまゐらすべし、待上﨟に賜り、已上三三九度の獻々あるべし、其次湯漬鯛の吸物出、酒をあたゝめて出す也、爰において饗膳十二組の菓子茶出て、次に本膳也、七五三を出すべし、其外故實すくなからず、〇中略已上の説は、條々官家高家の御儀式にして、民間のものの見聞もせぬ事也、平人の上に、たとへ其家計は財寶にくらからず、金銀米錢に滿足したりとも、かならず矩にこゆべからず、婚禮之法式は、物毎内は〳〵としたるぞよきと、師説に承し、物毎唯節にあたる事をおもひて、奢侈をいたすべからず、

同民間之作法之事

民間とは、士農工商の間、官とも位とも、二ッながらかけたる者の上をいへり、當代は唯貴となく賤となく、富めるを以て貴とし、みだりに借して禮法を犯すこそあさましけれ、武士は直參陪臣たりとも、必分限相應なるべし、いはんや、農工商の類をや、手かけ三盃はかならず可有之也、引渡じ出て、三獻上臺の法式のごとし、次に雜煮三獻常のごとし、次にひれの吸物、又三獻同じ、三盃の次第は上のごとし、扨座を立ッ時吸物出て、待女房などゝの盃事あり、次に色を直すべき也、扨膳を出す、大方五五三たるべし、尤高砂の臺を出し、菓子を出し、茶出て、男たちて休むべし、


小笠原諸禮大全



〔婚禮問答〕祝の時、女より男へ盃をさし候物に候由、中說御座候、如何、よめ入は、人一生の祝、是より大なる事はなく、禮儀を正すべき事に候、女より盃を男へさし候は、男女の道にたがひ、夫婦の禮儀にては無之候、有まじき事に候、

〔女諸禮集〕婚姻盃の事

婚姻の夜、娵より盃を取あげ聟にさす事、いづくの浦までも、能く人の知りたる所なり、然るに此ごろ、もろこしの書のかたはしをよみならひし人、是を大に笑ひていふやう、女より盃を始る事、順にあらず、嶋鶏の時をうたひて、其家に災の有といふ事もあり、殊に中華の書には、曾て無き事也、兎角男より始るを順とすべしといへり、尤一應の理は聞えたるやうなれ共、我朝のならはしにて、漢土とは相違ある事、是のみに限らず、志かし此盃は、何れより始めたりとて、さのみ大事になる事は有まじけれ共、女より始る事、古實ある事と見えたり、神代卷を考るに、伊弉諾伊弉冉尊の二神、〇中略交通の術を得給ふとあり、然れば婚姻の盃は、先女より飲始る事、陰神の先唱へ給ふ事を表し、其後部屋に入て盃事あり、是を部屋の盃といふ也、此時男より飲始め女へ遣す、是二尊めぐり會給ひ、陽神より唱へ給ふをかたどりし物と見えたり、かやうの古實ある事を知らずして、みだりに我好む方にて、片意地は云れまじきなり、

〔武家故實祝事大概中〕婚禮

勝休云、夫婦盃は聟より初むる也、式三獻等は、御料より初る也、是は客人の心なり、此事諸禮家者流之人々、取違たる說あれば志るす、

〔榮花物語十四淺綠〕二月〇寬仁二年になりぬれば、大殿の尙侍殿〇藤原道長女威子内〇後一條へまゐらせ給、〇中略さていらせ給ぬれば、この、うへおはしまして、御ふすままゐらせ給ほど、げにめでたき御ありさまにて、ことわりに見えさせ給、いらせ給てのちの事は志りがたし、御めのとたちみ帳のあたりに

さぶらふ、どの丶おまへ、よろづおぼしつゞくるに、ゆ丶しうて御めのごはぜ給、あかつきにはおりさせ給、

〔増鏡 六 おりゐる雲〕康元元年にもなりにけり、大きおとゞ〇藤原實氏の第二の御むすめ〇東二條院、後深草后公子、女御にまゐり給ふ、〇中略御大刀一條殿、御きちやうあせち殿、御ひとり中納言もたれたり、〇中略御ふすまは、紅のうちは四方なるに、かみにはうはざしのくみあり、いとのいろなど、きよらにめでたし、れいのことなれば、准后〇實氏妻定子たてまつり給ふ、大きおとゞも、三日がほどはさぶらひ給ふ、かんだちめにけんはい有、

〔榮花物語 三十四 暁待星〕一ほんの宮、〇後一條皇女章子、母藤原道長女威子、そのとし〇長曆元年の冬はすの十三日に、御もたてまつりて、やがてその夜、春宮〇後冷泉にまゐらせ給べしといそぎたゝせ給にたり、〇中略御まゐりの程三日は、どの〇威子兄頼通おはしまいて、よるは御くつをいだき、御ふすま參らせ給などあはれにこまかに、まことの御おやなどのやうにあつかひきこえさせ給も、むかしの御事をいみじうおぼしめすにこそ、

〔山槐記〕保元元年三月五日、今夜姫宮、〇鳥羽皇女姝子入太子〇二條宮、〇中略抑先是被獻御衾、其儀御衾紅打張、長九尺、弘九幅也、面小葵綾、裏平絹、[illegible]件衾二重、重之、押合有上差、[illegible]各押折二幅、四折八幅也、今一幅所殘半分折之、九幅之故也、長三折之、入打平裹居衣筥、以銀蒔松鶴藤置口口金物折立等、入蒔繪辛櫃、蓋普通二重織物、鼻[illegible]等西糸、蒔繪洲濱千鳥等也、仕丁二人著退紅持之、〇中略次東宮御方女房、參姫宮御方、申可令昇御之由、有綠云々、〇女房裝束一具渡御之後、東宮著御沓、入御夜御殿御帳、大理殿入自寢殿西面妻戸、取御沓退出、被授五品、五品取之向宿所置之、于時甚雨如注、次良久又大理殿入同妻戸、〇女房令告申歟、被奉覆御衾、〇件御衾可設、然無其沙汰云々、仍大理殿令調進給、御衾被用之云々、此御衾者、可被設宮御方御帳內也、今度事、凡總右大辨朝隆卿沙汰也、次差脂燭於夜御殿燈樓火、令退出給歟、二筋炬之、先是敷筵居大土器於折其上置脂燭三筋、相設候硯下、大折進帷方傳取之、奉大理也、

〔長秋記〕元永二年十月廿一日、巳刻著束帶、行向二位經營所、藤原公實女嫁源有仁、中略、聟公入自東間障子、暫居給帳前、○中略 次女主入帳中、次聟公入自帳東面、解脫、此間右兵衛督、入自東面、奉覆衾、作衾儀在帳中歟、良久右兵衛督、自枕上方供餅、聟公食了鳴箸、右兵衛督撤之給女房、次各著裝束、本直衣不出衣、出自帳東居給南面、供膳、陪膳實能朝臣□□三本、無打敷、一本、菓子、樣器、其外皆銀器、陪膳分取御飯、燃分器居御臺、於殘御飯者取下居御盤云々、御膳了出御寢殿東面出居、○中略 三箇日間食事、陪膳同人云々、

〔兵範記〕久壽三年二月廿八日庚子、申刻許向權辨亭、於四條東洞院新造家被經營也、右衛門佐光宗令嫁第三女子也、○中略 客人降自車參入、○中略 客人留帳前、○中略 次馬助清則示前駈可昇侍所由、○中略 此間客人羞膳歟、女房陪膳云々、○中略 次客人出出居手水、則盛爲陪膳、次權辨於出居對面、次客人歸入、○中略 不羞餅如何、又無衾覆儀歟、

〔兵範記〕保元三年二月九日庚子、今夜執聟事、密々營之、藏人大夫被來居也、○中略 吉時亥刻客來、○中略 男女相伴被入帳中、下官信範○中略覆衾、平直垂也、○中略 客於帳前座羞膳、臺二本銀器、女房陪膳、次被出出居方、下官對面、寢後羞餅盛樣器、箸一前居同樣器、硯筥蓋敷薄樣居之、下官羞之、兩人同被食之、其後安母屋厨子內、今明夜此定可羞之、三日以後、可埋生氣方、

〔玉海〕治承四年六月廿三日甲辰、此日密々有嫁娶事、右大將良通、通花山院中納言兼雅卿娘、○中略 亥刻吉時也、先女房年十一歲、入座帳中、次大將著直衣冠、經南庇東障子、出立自日來曹司、依省略、不經簾外、自內々行向也、先居帳前茵、此間女房大貳局持劒相從、彼方女房上﨟受取之、置帳中枕上、外刃西柄、又召贊殿打火、燃付塗籠中燈樓、禮用臨燭火、今度無此儀、仍以略儀用打火、即大將入自帳西面、永元、入自南面、應保入自西面、今日依應保例、解裝束、單衣下袴不脫之、暫臥、此間居餅、禮於南面可供、是執聟儀也、今度非其儀之上、省略也、仍不供五菓、只於北面供例餅也、居訖女房申案內、即大將如元著裝束、就之如食、無其實、即罷出侍所、其儀女房於西面北妻戶叩手、職事參上取之、次供嫩、次大將出西面出居、即歸入向樋殿、在日來曹司、如元著裝束、歸入帳中、脫裝束、今度皆脫之、付寢、職事三人著侍大盤、○中略 今夜民部卿資長卿、相具其息右

中辨兼光來、（戸部直衣、兼光束帶、）余（○藤原兼實）密々謁戸部、抑今夜依路儀不調歟、只可用宿衣云々、而女房方宿衣爲浮線綾、雖用吉事、大將方又兼非可用意之事、日來宿衣唐綾也、忽雖新調不可叶、今夜之要事、已欲闕、然間大將母云、余時衾在御倉、是已雖爲吉例之物、爲路儀之上、又難用意物、仍不及沙汰之處、事已闕如、於今者無計略、偸取出彼衾用之、自然叶吉例、又不可闕今夜事歟云々者、事尤可然、仍取出件衾、兼置帳中、即大將母置之、雖須覆衾三箇夜同宿無便宜、此程路儀有衾覆儀、還可謂忘禮、是只爲不闕事所廻權儀也、仍無衾覆之禮、事訖余及女房歸宅、

〔玉蘂〕嘉禎三年正月十四日、此日左府（○藤原兼經）被迎第二娘、（○藤原道家女、中略、）委旨見高嗣記、（○中略）

嘉禎三年正月、右少辨高嗣朝臣注送文（○中略）

大臣殿令入御帳中給、女房兼御座此所、令脫御裝束給、次大臣殿著御裝束、令歸出南面座給、供御膳、（御臺六本）一條局爲陪膳、中下﨟役送、大臣殿御方贄殿須持參也、付刀自、刀自傳下仕、下仕傳女房也、事訖罷出也、（不出侍所、）次女房出北面、供御膳如初、但不供御酒、此間時高申吉書、（加賀國御封解文）付女房覽之、返給下政所、如常、次兩所入御御帳、（○中略）

今夜簾中之儀、委不知之、然而今朝依殿下仰、內々書假名次第進女房了、大概無相違之由、後日督典侍相語、仍記之、

〔山科家雜記〕文明十三年二月十七日、今日よめむかへの座敷のやう、又いはひのやう尋候也、上はごきちやうを立る、御まへのものは、二ぢうからへいじ、こぐちつゝむ、おきざり、こいかたくちてうし、上は御づし、ひとり、いはひしき三ごんの時、むねのまほりをさりて、みづしのうへにおく、次にきやう、ゆづけ、男女のそ、とりちがへ候なり、のちは、こんこん候はん、次の日のいはひは、ぬしのまゝ、

〔滋草拾露（婚嫁）〕御嫁娶獻々次第（略儀）

西園寺大納言、通廣幡故入道大納言息女時次第、
刻限聟公御著座（北面陳設御茵、諸大夫取脂燭、）　次姫君御著座（自簾中御出座、南面陳設御茵、女房相從、本扶持、）　次陪膳女房取打敷参進敷聟公御前、　次姫君御前同之、　次居第一御高坏（初獻）聟公御前、　次姫君御前同之、　次持参御酒盞（土器二枚重之、）居姫君御前（御右方、）　次持参御銚子、姫君令受御酒給、（一獻、無加、）棄澆濁給陪膳女房、陪膳女房、持参聟公御前（御右方、）　聟公取御盞令飲御酒給、（一獻、無加、）棄澆濁給陪膳女房、陪膳女房又持参姫君御前（御右方、）　姫君取盞令受御酒給、（一獻、無加、）不令棄澆濁給陪膳女房給、　次居第二御高坏（二獻）聟公御右方、　次姫君御前同之、　次持参御酒盞（土器二枚重之、）聟公御前（御左方、）　次持参御銚子、聟公令受御酒給、（一獻、無加、）棄澆濁給陪膳女房、陪膳女房持参姫公御前（御左方、）　姫公執御盞令受御酒、（一獻、無加、）棄澆濁給陪膳女房、陪膳女房、又持参聟君御前（御左方、）　聟公執御盃令受御酒給、（一獻、無加、）不棄澆濁給陪膳女房撤之、　次居第三御高坏（三獻）聟公御左方、　次姫君御前同之、　次持参御酒盞（土器二枚重之、）居姫君御前（御右方、）　次持参御銚子、姫君令受御酒給、（一獻、無加、）棄澆濁給陪膳女房、陪膳女房持参聟公御前（御右方、）　聟公取御酒盞令受御酒給、（一獻、無加、）棄澆濁給陪膳女房、陪膳女房又持参姫君御前（御右方、）　姫君取御酒盞令受御酒給、（一獻、無加、）不令棄澆濁給陪膳女房撤之、　次御高坏次第撤之（此後撤打敷、陪膳女房退入、）　次姫君御起座令入簾中給、女房相從、
次聟公御前居餅（諸大夫陪膳之）　次御起座、（諸大夫取脂燭如初、）於御休所被改御裝束、　次有御膳并御盃事、

〔大江俊光記〕元祿十三年六月朔日、今入夜、間屋長左衛門方能登祝言ノ云入遣、　十八日、今日能登婚禮、（○中略）初夜前嫁女輿入、舅長左衛門、姑おさい、媒庄兵衛、同さつ、座敷ニ居、待上﨟樂（マユ作リ、サゲ髮、）主税、能登、座ニ著、能登、おちよへ引わたしスユル、（三方、カチグリ、五、コンブ、ノシ、）夫婦へスヘ、待上﨟盃初、おちよへさし三獻、（三獻目ニクハヘ、本膳ノ右方ニ居、）ソレニテ結ニ成、おちよヨリ、能登へさし三獻、又能登方ニて三獻ノミ、お千代へさし三獻、又お千代方ニ而三獻のみ、能登へさし三獻、互ニ九獻ツヽ呑、待上﨟治而、次雜煮吸物出、何も盃事有、盃されて石見出、各へ知人ニ成、追付被立、

〔將軍德川家禮典附錄十一〕享保十六辛亥年十二月十五日、大納言様○德川家重御婚禮、御入輿御規式書、

御下段より御上段へ向、御右之方、

姫宮様○邦永親王女 大納言様御着座以後ニ、御着座被遊候事、

同断御左之方

大納言様 姫宮様御着座以後ニ、御着座被遊候事、

一姫宮様御著座被遊候而、御愛敬御守、女中衆大納言様へ入御覽、直ニ御床之折釘へ懸置被申候、

一御床飾ニ在之、御箸初、

姫宮様御前へ居置、直ニ元之所へ直シ申候、

式御三獻

御三ッ盃 御下段より御上段へ向、御床際、御左之方へ、少寄候而置申候、

此御三盃、御引渡御膳出候と、直ニ姫宮様御前へ居、御盃御取かはし被遊候、

御星之物 御下段より御上段へ向、御床際御右之方へ寄、御三盃之御三方え並置候、

御初獻、御引渡、

大納言様、姫宮様御二方様へ御引渡御膳居、御酌、御加出る、

御三盃、姫宮様御前へ居、姫宮様被召上、大納言様御納め、御酌、御加入る、

大納言様、姫宮様、御二方様へ、御二獻之御膳居、御酌、御加出る、

御三盃、大納言様御前へ居、大納言様被召上、姫宮様御納め、御酌、御加入る、

御二獻之御膳、下り申候、

御三獻、御膳、

大納言樣、姫宮樣、御二方樣へ、御三獻之御膳居、御酌、御加出る、御三盃、姫宮樣御前へ居、姫宮樣被召上、大納言樣御納、此時御むすび酌有之而御酌、御加入る、

御三盃御星之物、御三獻之御膳共下ゲ申候、

〔大江俊章記〕寶暦四年二月廿六日、俊興元、今夜婚儀、仍夕飯聊設美肴、入夜有盃、先引渡（昆布、熨斗、栗盛、小角箸臺）小土器、膳者白木足打也、二前盃臺、（白木足打）銚子、（用鍋二ツ）瓶置洲濱於座上、（此物、上總宮二品宣下之時、北堂ヘ拜領之物也、今日依母命置之、後同之、）兩人（衣服）略儀出座、各三度（有加）飲之、先燕尾、次巡流、次巡流、（以上三度、三獻ツヽ也、）終撤之、（以上之義隨俗、又思古儀所制也、且略儀也、○中略）夕膳酒肴等同上、千秋萬歳可悦云々、爲榮繁之基本、

〔滋草拾露婚嫁〕御婚禮次第（明和三年十一月十四日、男君少將殿〔實右〕十六歳、姫君興正寺僧正女、十六歳云々、）

當日寢殿御裝束　御調度等省略不及沙汰、

當日時剋、御車引入南面御門、寄南面妻戸、下御之後、立御車於御車宿、　次寄出車對西面妻戸、　次御調度等受取之、（於便宜所渡之）　次男君入帳内給、（今度此儀略）此間有俗禮盃酌儀、　次兩所改著物御裝束給、男君自姫君被進御狩衣指貫、姫君自男君被進御小袖等、　次供兩所御前物（三本、色目在前、）御陪膳役送女房、　次相共脱御裝束入帳中給

〔滋草拾露婚嫁〕御嫁娶次第

天明元年四月三日、今出川大納言實種卿、迎水戸宰相妹婚禮式、依懇望代女房作進之、

御吉事之間、兼て奥端に相對して御茵をしく、　端男君奥女君著御料

吉剋姫君御茵に著給ふ　上臈女房、御扶持として御傍にさぶらふ、

次男君入らしめ給ふ　そだいぶ、ましそくさして御前にあゆむ、同一人、御劒もちて御うしろにさぶらふ、　御簾のもとにて、女房いで、御劒をとりて、男君の御座かたはらにおく、

次御さかなものをすゆ御三方にのす　まづ男君、次に女君、
次御酌の女房、御盃土器三枚、御三方にのせて、片手に御銚子をもちていでゝ、姫君の御前におく、
次御ひさげの女房、いさゝかしぞきてさぶらふ、
次御ふちの上らう、御盃をとりて、酒をうけて、姫君にたてまつる、姫君のませ給ひてかへし給ふ」
御ふちの上らう、又御酒をうけて奉る、以上三獻三こんめ御くはへあり、　酌の人、むすぶといふこと、
この時あるべし、　姫君のませ給ひてかへし給ふ
御ふちの人、御盃をとりて、御肴の土器にそゝぎて、御三方にのす、
御酌の女房、御三方を御さかづきのせたりもちて、片手に御銚子をもつ初のごさし男君の御前にすゆ、
男君御盃をとらせ給ひて、三獻のみ給ふ、三こんめにくはへあり女君の時の如し、男君此盃を三方にのせ
給ふ、　御酌の人、御三方をとりてしぞき入る、　御提の人、おなじくしぞき入る、
次御肴ものをすゆはじめのごさし　次御酌の人、御盃を三方にのせて、片手に御銚子をもつ、はじめの
ごとし、　御ひさげの女房、はじめのごとし、　男君御盃をとらせ給ひて、三獻のみ給ひて、三獻目のくは
へ初の如しそゝぎて三方にのせ給ふ、　御酌の人これをもちて、姫君の御前にすゆ、はじめのごさし　御ふ
ちの人、御盃をとりて、御酒をうけて、姫君に奉る、先のごさし三獻目の加へ、はじめのごとし、　姫君の
み給ひて返し給ふ　御扶持の人、御三方にのす、　御酌の人、これをとりてしぞき入る、　御提の
人しぞき入る、はじめのごとし、
次御さかなものをすゆはじめのごさし　次御酌の人、御さかづきをもちてまいる、はじめのごさし姫君の御
まへにすゆ、　次御ふちの人、御盃をとりて、姫君にたてまつる、三獻初の如し　次御ふちの人、そゝぎて
御盃を御三方にすゆ、　次御酌の人、御三方もちて、男君の御前にすゆ、皆はじめのごさし
次男君三獻のみ給う御くはへありて、御盃を三方に置給ふ、御酌の人、とりてしぞき入る、　御提の人し

ぞき入る
次御肴ものをてつす、はじめすゆる時のごとし、次男君御座を立て出給ふ、女房御銚子をとりて、いでそだいぶにわたす、(はじめのごさし) 次姫君御前物を供す、(三本、御酒たてまつらす、) 上らう御はいせんにさぶらふ、 次男君御前物、(三本、御酒も供す、) そだいぶ御はいせんをつとむ、 次男君女君、御裝束をあらため給ふ、 此のち內々御祝儀の事あり

〔大江俊矩記〕享和二年二月二日癸卯、おまつ事おあや、今夕良辰ニ付、河原町北小路美濃守俊任朝臣息、同山城權守俊廣妻ニ入輿也、○中略
河原町にての時宜、先兩人座敷ニて、濃州、おてる、おふき出會、挨拶之後、直ニ新座敷へ兩人通り、其所へ權介被出、(麻上下也、) 新建ニて祝言盃有之、りつは直ニ待女郎役勤、獻々之次第、某時之通、お雛ゟ申合置也、瓶子ハ錫一對ニ男女蝶付、肴物ハ無之、三方ニ長のし、席上ニ居有之計云々、酌人ハ下女兩人共雇女也、其跡ニて、塗盃ニて、家內不殘獻酬、吸物二ツ、(給、ひれ、) 肴物五六種、(島臺なし、) 無滯相濟、

〔大江俊矩記〕文化元年十月一日丙辰、今宵同姓木工助俊常婚姻也、(廿四歳) 新婦、聖護院宮坊官、故雜務法印二女、稱お道、(二十歳) 當雜務法橋、幷內室お恒(お道姉也、宮雜務ハ養子也、今大路能登守子分にて、實は儒者西依丹右衛門二男か三男之由、)同道、媒酌人山本上總介等入來也新婦乘輿、其餘步行、上總介ハ暮前入來、お恒其次ニ入來、雜務ハ新婦ニ引添入來也、先座敷次ノ間ヲ休息所ニ致し置、輿は玄關へ昇上、待女郎誘引、先休所へ通し、暫令休息、其後座敷上の間ニて、式の盃事執行、其儀先聟著座、(狩衣南面) 次待女郎誘引新婦著座、新婦北面、待女郎良面、次陪膳女二人居前物、(三肴三方) 先待女郎、次聟、次新婦、居了各懸箸、(掛ニ龜足也) 次持參盃、(土器三枚重ニ三方) 置聟前、次執銚子至座前執酌、三獻之時有加、(以下皆如此) 聟禮節次人、三獻飲了、盃持參新婦前、三獻了、到待女郎前、同三獻飲了、其土器取重新土器二枚下了、禮節次人、取上第二盃、三獻飲了、到新婦前、以下次第如左、取酌儀同樣之事、撤提銚子盃等、次撤前物、(以上陪膳女二人役之)

先聟著座（南面）
次待女率新婦著座（待女艮面、新婦北面）
次居前物（先待女、次聟、次新婦、）
次各掛箸
次有三獻之儀
一聟　二新婦　三待女　四待女　五新婦　六聟　七聟　八待女　九新婦
次撤前物（箸各拔、）　次聟起座　次待女率新婦起座　此後聟嫁兩人手水神拜（平野、御靈、神棚、祠堂、）次兩親禮、

〔大江俊矩記〕文政三年六月廿八日壬子、今夕八木東啓女米（諱爲子、二十歳、）爲客分引取、內密婚姻取結也、○中略客衆入來以下取向獻立等、備忘認置如左、
酉刻各入來（步儀）取次出迎、郎誘引於次間、暫令休息、　蒔繪平烟草盆一面　茶人別持參
一媒灼人出會有挨拶
一待女郎誘引新婦於部屋、令著白衣、（待女從之）
一聟著狩衣、著奥間奥座（南面）
次待女率新婦著端座、（待女乾面、新婦北面、）
次居前物、（三着用三方、先待女、次聟、次新婦、）居了各立箸、
次一獻（先聟　次新婦　次待女）　次二獻（先待女　次新婦　次聟）　次三獻（先聟　次待女　次新婦）
次撤前物（各拔箸）
次聟起座　次待女率新婦起座

寢所雜事

一聟率嫁、先參父前致禮、
次到參會人前、人別致禮、　次家禮者對面、了改衣裳、
一此間客衆令移上間（撤茶烟草等）
各出會述挨拶
〔言成卿記〕弘化三年正月廿七日、予妻婦（豐姫、儀同愛公養女、）今日就吉辰入輿、○中略酉半刻許姫來（兆也）、如形祝儀了、（昆布鮑三々九度、昆柄銚子在加、先姫飮之三度、予飮之三度、次盃予飮之三度、姫飮之三度、次盃姫飮之三度、予飮之三度、了撤昆布鮑了、）出座之時、先姫出座、次予出座、（時衣切袴、）祝儀了、姫入便所、予退座、
〔娶入記〕よめ入の條々
一むしろしく事は、のぶると申なり、しきやうは、女房のをば、まづしき候て、そののち、をとこ方のをのぶる也、はこには、どのがたのを上に入る也、とりいだして、まづそばにうちおきて、女房のをしくなり、たゝむ時は、をとこがたよりたゝむなり、
一まくらおく事、殿がたのをば、そばに上になして、よこにおく、にようばうのをば、ふせて、ひらみを上になしておくなり、およらぬまへに、むしろばかりのべてはおかぬ事なり、まくらきるものなど、いかやうにもおくべし、○中略
一なんによおよる時は、をとこはみなみのかたに、女は北に、をとこの左に女のなるやうに、ひがしまくらとも、又みなみまくらにと申せつあり、兩せつなり、
〔婚禮推陳記〕嫁御寢所へ入らるゝ前に、御手水を參らせ樣の事、角盤の内江穗長草（裏白の事也）を敷て、その上に青目の小石を三ッ、金輪に置て、ゆとうに湯を入、角たらひの中に置て、角盤の兩角を左右江なし持參し、御手水めさする時、角の方を嫁の御前へ向置候て、御手水をかけ申もの也御小袖のすそを押るため也、裏白は本を水引にて結也、草の本を姫の方江するもの也、湯の懸ケ樣は、

かけきらぬ樣に、御うがいの内もどろ〳〵と湯をたらひの内へつぎながすもの也、右の裏白は、里より用意して持參すべし、手拭は手拭かけともに持參し、御取之時、臺ともに持上參らする也、」嫁を御床へ入、御寢ならせ候て、局方より男の方江御案内申べし、男御入候て、御座移のいはひをまゐらすべし、

御座移の盃の事、打合の餅をあつき小餅にしてまゐらせ、鰭の吸物、取肴にて、男より飮初め、女房江つかはし、男にて納る也、御酌は小上﨟の役なり、

師傳に、御座移の時、打合の餅を雜煮にして出す事も有、又小餅にして赤豆を付て出す事も有、然ども新枕の時は、年ゆかせられ候ても恥敷ものなれば、此餅吸物を略し候て、錫の酌にて、御肴取肴そへ、御枕の傍に置事もあり、

〔婚禮式法之書乾〕七五三、五五三通、

一御ね間入の御盃事有之候やうに申習し候、左にはあらず、御ね間の床に飾ある鶺鴒臺いなばの作り物の押を御枕元に置、かんなべにかん酒を入、塗盃一ッ臺にのせ、にしめ物重に入、ふたをして箸を付置、心得たる女中方せうじを引たて、燈ほそく〳〵かゝげ、勝手へ入べし、自身自もりの酒盛とは是を云也、能々心得べし、

〔婚禮問答〕よめ入の夜、夫婦寢所にて盃とりかはし有之候を、とこ盃と申由、法式如何、とこ盃の事知らず候、下々などに左樣の事有之由聞及候、古法は無之候、寢所にて酒のむ事、下々の習し成べし、

〔貞丈雜記祝儀一〕一今時婚禮の夜、床盃(トコサカヅキ)と名づけて、夫婦ねやに入りて、盃を取かはし酒のむに、法式ある樣に云、然れども古は無き事にて、當世のはやり事也、ねやにて打とけて、夫婦酒のむ事に法式はなし、寢ながら酒など呑む事、下々の賤き者などは、左樣の不行義なる事をするなり、よき人

色直

などはせぬ事也、

〔大江俊矩記〕文化元年十月一日丙辰、今宵同姓木工助俊常婚姻也、○中略床盃の獻、一升枡ニ（但つる掛也）白米山盛、其上ニ鰹節二本ヲ水引にて結、青石二ツヲ水引ニて結たるを乘せ、三方ニ乘せ、其傍三方ノ上ニ土器三枚乘せ置、拐錫一對蝶花形付テ、陪膳ノ老女取酌、聟嫁共脫禮服、寢衣ニて先聟三獻飲了遣婦、婦三獻飲了其盃ヲ下へ取重、次ノ盃ニて又三獻飲了進聟、聟又三獻飲了又下へ取重、三枚目ノ盃ニて又三獻飲了遣婦、婦三獻飲了取納撤之、酌人一人故加へ略也、錫一對出し置のみ、

〔大江俊矩記〕文政三年六月廿八日、今夕八木東啓女米（諱爲子、二十歲）爲客分引取、內密婚姻取結也、○中略客來入來以下取向獻立等、備忘認置如左、○中略

一部屋盃之事、兩人脫禮服、於閨中取結之、酌人老女（こさ）一人役之、土器三枚、先初獻聟飲了授婦、（各三獻、究、加略之、以下同）次二獻婦飲初進聟、次三獻又聟飲了授婦、都合三三九度、畢撤盃酌肴物、（逃合用三方、一膳遍箸、）白米二升計、其上鰹節二本、（以水引結之）青石二ツ（上置）以上盛三方、（敷紙）蝶花形付錫一對共具之、事了直撤之、

〔江家次第二十〕執聟事（近代例）

到第四日放荅筵、（女房陪膳）童女著宿裝束、

〔久世家婚儀次第〕婚儀次第

依近例御膳了、兩所君（○新夫婦）入簾中、（女房取御劍）於常御居所、有御盃酌之義、（俗禮御色直）

〔幸充日次記〕寬延三年四月十五日丁亥、充賢入來、婚禮之次第幷覺書、○中略

聟君改著小直衣（自婦君方所送之烏帽子小直衣、白紋紗、浮織、薄立涌指貫、末廣、賭指）出座給、次婦君（自聟公所送之小袖著之）出座給、（著紅梅紅袴）陪膳已下

不色直、式肴有三獻事、（各往來儀、無逢）

〔宗五大雙紙〕人の妻むかへの事、○中略先初日より二日まで、男女ともに白色を著すべし、三日めには色直しさて、色ある物を著候、

〔嫁迎記〕御いろなほしは三日めにて候、そのうちは、かみさま御とものにようばう衆、いづれもしろきをめされ候、御いろなほされ候てより、御よめごの御ともしゆ御みやづかへ候、御いろなほされざるうちは、そのよの御ゆはひ、御しやく、御はいせん、いづれもとのがたの御女ばう衆御みやづかひ候、

〔禮容筆粹 五〕婚禮之次第

色直し之事

いにしへは三ッめ五ッめに、色を直したるよし、しかし三日四日の間、白しやうぞくなるもあまりなれば、近代は九獻の後、其儘色を直す也、色直しは、嫁は迎小袖を著し、夫は嫁持參のしやうぞくに改めて著座あるべき也、

〔御祝言御盃事御次第〕婚禮略式

一緣女休息にたゝるべし、男方より被進候衣服を著替らるべし、但此所にて、色直しあるべし、されど略儀にても、さより色ある衣服なる共、著かへて出らるべし、是色直しの略也、

一男方も緣女より被進候衣服を著かへらるべし、

一御二方侍上臈著座定り候はゞ、色直しの膳部出べし、

一色直しの膳部は、三汁五菜、引菜二ッあるべし、但略儀には二汁五菜たるべし、其家の分限に應ずべし、

一色直の祝盃取かはしの事、三方に塗盃を三ッのせ、銘々にすゑ申候、男方先始られ候、次に緣女、次に侍上臈と、順々に參るべし、三獻ヅヽなりとも、又は九獻にても、其時の定めに應ずべし、

〔婚禮法式 上〕婚迎之部

一御色直の事、其夜御色なほされ候はゞ、座敷へ御料人御なほり候て、御手かけまゐり候はゞ、む

ねのまぼりを大上﨟とり申され候、とのがたへまゐらせられ候、雜煮より五獻迄參り、きやうのせん參て、三獻の祝濟て、御色を直され候事も有之、是はりやくぎにて候、其時は三獻は御盃のとりかはしの事、御盃は殿より初られ、御料人御納め有べし、待女房へも參るべし、又色なほしは御ざふにの時、色をなほし候事も候、その時はざふに色なほしの御祝になり申候、又色直し御立候事、ぐごのまへに御入候ても、ぐご過ても色直し申され候、總別は三日目に色直し御入候事に候、當世は三日目に色なほしは、しやげたることて、その夜色直し御入候事に候、其夜色直し候はゞ、二日目の朝、座敷のかざりみなとり申され候、夫より御料人かたより、座敷のかざり有べし、男方より座敷のかざり、殘らずしうとの方へ進候、

〔婚禮式法之書乾〕七五三、五五三通、

男表へ被出、道りの乘娶の里の家老に對面有、〇中略扨表の居間にて休息有也、〇中略娶も待上﨟、年寄、妳添總女中色直し可有、しさねも紅梅織と敷替、何もかみまゆ裝束等あらためられ候て、御主殿へ入せられ候はゞ、男の年寄、表へ御時分能候由申遣候と、男娶の土産の長上下にても半上下ニ而も著かへ候はゞ、奥江入せられ候て、しとねに直られ候はゞ、色直しの引渡色餅吸物さするゝ、したみ土器、向の右方膳の向ふに置するゝ、酌出る、此時は男の方、先盃持行候て、をとこゟ初娶へ遣、又娶ゟ男江遣す、男にて納とり申候、〇中略此時の酌は、思ひ歸ひらき酌にとるべし、加へも二獻つぎ加へて三獻につぐが吉、三度に一度のくはへにてよし、

〔婚禮推陳記〕色直しの事、むかしは三ッ目の朝迄、嫁も供の女房も、婚禮の夜に著たる白裝束を脫更ず居候て、三ッ目の朝、染小袖を以、白小袖に更るを色直と云也、色とは素キ事なり、女房は男より出たる色直小袖を著て、祝言有べし、

師傳に、今は其夜、色直しするゆゑ、俗これを一夜の直しと云也、此時嫁は眉の中にしんを指、こ

れ色なほしの法也、腰卷縫帶も更る也、嫁、の髮、脇明の內は童髮に結也、近代すべらかしの平髻も、色なほし前は銀紙を用ゆ、色直の時は、金紙の平元結を用る也、待女房も雙方の女中も、一度に色を直す也、長かづらにても、中のかもじにても、結樣の口傳、色直し前と、色直し以後の樣體は、女中書の化粧の卷を見べし、

裝束をあらため、夫婦着座の時、先手懸熨斗を出し、次に引渡を夫婦待女房江据、捨土器を銘々に引て、酌銚子盃を持出、此時は男の前江持行時、加ともに三獻飲て女房江指、女房三獻のみ、待女房江指、三獻のみ納る也、酌盃を勝手江引、上の盃を一の下へ重る也、本酌加の結樣、大結同前也、次に三人江內躬か雜煮の膳を据、酌盃を女房江持行、加共に三獻飲、男へ指、男加へて三獻飲、待女房へ指、三獻のみ納る也、酌盃を勝手江取、一の下に重る也、樣體同前也、次に鵰煎か鰭の吸物を三人江据、酌盃を持、女房江持行、三獻のみ嫁へ指、嫁三獻飲て男江指、男三獻のみ納る也、是にて互ニ三々九度也、此次に高盛の五々三出、据かへに喰料出る也、此時に嫁の供ミたる女房江も、聟の盃を給るなり、これむかし三ッ目の色直しの祝也、

〔明月記〕建曆三年四月十七日、今夜通光卿娘、參二六條宮雅成親王一云々、　十九日、傳聞竹園吉事、有二三箇夜儀、如二前夜一　御裝自二女房方一調二儲之一獲レ之、大納言妻擬レ之云々、

〔桃花蘂葉〕廣季記平治元年七月一日、六條攝政〇藤原基實迎二信賴妹一給、〇中略　四日、今夕女房以下給二裝束一、

女房廿人　各女郎花單重袷　紅生袴　二藍唐衣　朽葉裳村濃腰

童女二人　各薄色單重袷　紅生袴

半物四人　各萩立青單重袷　紅生袴

雜仕四人　薄青單重袷　濃蘇芳帷　白裳

御樋洗二人　各朽葉單重　紅裳
下仕二人　薄蘇芳單重　紅生袴

〔桃花蘂葉〕忠順記永暦二年正月廿九日、中納言中將(○藤原兼實)嫁娶、(中略)二月二日、中納言殿渡御、第四日也、是日人々改著裝束、

女房上﨟四人　表白六(立涌雲文、裏紅濃薄、青濃薄、薄色濃薄、)　紅單　蘇芳織物表著(龜甲文)　紅打衣　萌木織物唐衣(龜甲文)　紅袴

中下﨟十六人　表白五(同文、裏紅濃薄、青濃薄、薄色、)　紅單　蘇芳織物表著(龜甲文)　紅打衣　萌木織物唐衣(同文)　紅袴

童女　表白三(裏紅、青薄色)　紅單　紅打衵　柳汗衫　紅袴　扇(薄散)

下仕用初夜裝束

半物　衵五(龜甲文)　紅單　紅打衵　柳唐衣　摺扇

雜仕　山吹白四ツ　青單　紅衵　二藍帷(薄物、袵懸閉付濃糸、)　白唐綾懸紳　村濃表著

御樋洗用初夜裝束(○中略)

一女房御裝束事(○中略)

元暦二二二、中納言中將、嫁娶後第四日裝束、皆紅御衣六、(小葵文)紅御單、白二重織物御表著、(鸚鵡丸文)松重小打著、紅張御袴、

〔玉蘂〕嘉禎三年正月十四日、此日左府(○藤原兼經)被迎第二娘、(○藤原道家女)十六日、近衞亭、自今日女房以下改著色々口、

〔將軍德川家禮典附錄十一〕享保十六辛亥年十二月十五日、大納言樣御婚禮之次第、

御色直し御著座之次第

御下段ゟ御上段江向
御右之方
　姫宮様
同断
御左之方
　大納言様
　　御三献
御三盃（御下段ゟ御上段江向、御床際御左之方江少寄候而置申候、）
此御三盃、御引渡御膳出候と直ニ大納言様御前江居、御盃御取かはし被遊候、
御臺之物（御下段ゟ御上段江向、御床際御右之方寄、御三盃之三方江並居候、）
　　御初献御膳
大納言様姫宮様御二方様江、御引渡御膳居、御酌御加出ル、
御三盃、大納言様御前江居、大納言様被召上、姫宮様御納メ、御酌御加入、御初献之御膳下ゲ申候、
　　御二献御膳
大納言様姫宮様御二方様江御二献之御膳居、御酌御加出ル、
御三盃、姫宮様御前江居、姫宮様被召上、大納言様御納メ、御酌御加入、御二献之御膳下ゲ申候、
　　御三献御膳
大納言様姫宮様御二方様江、御三献之御膳居、御酌御加出ル、御添肴出、
御三盃、大納言様御前江居、大納言様被召上、姫宮様御納メ、此時御むすび酌無御座候、御酌御

舅姑以下親族對面

加入、御三盃、御星之物、御三獻之御膳共に下ゲ申候、

七五三御膳

御本御二御三、此順御居渡し、御鉢出ル、御湯出ル、御膳段々下ゲ候而、緣高御菓子出、直に下ゲ申候、

〔江家次第二十〕執聟事 近代例

聟君父、取吉日渡、諸有親昵人公卿等以下來會、遣與出物馬二疋幷送物、

〔辛丑日次記〕寬延三年四月十五日丁亥、允賢入來、婚禮之次第幷覺書、○中略

聟君父、渡婚君方有禮、舊例吉日渡御、今度當日渡給、

〔嫁迎記〕三日め御ゆはゐの事、いろいろ御入候、御たるもこなたよりまいり候、御しうとたち、御一家のしうの御れいも、このときにて候、

〔婚禮法式上〕婚迎之部

一御色直の事、○中略本式は三日目也、○中略此時分男方の御一門御一家、幷家中に至迄、祝儀申上られ候、御しうとの方御一門御一家、幷家中に至迄、御祝物進上申、又下され候事けふにて候、

〔禮容筆粹五〕婚禮之次第

舅見參之事

右數々の祝言過て、待上臈いざなひて、舅の方へ參るべき也、舅姑へよめより、小袖樽肴持參あるべし、多少は分限に應ずべし、扨手掛を出し、三ッ盃をも出し、引渡しを舅姑嫁の三人へすゑべし、舅三獻のみて嫁にさす、嫁又二獻のみ候時、引出物出すべし、其上一獻加へて舅へかへす、しうと三獻のみ收る、爰にてうち躬出る、平人は雜煮なるべし、扨第二の土器にて、姑三獻のみ嫁にさす、嫁又二獻のむ時、姑より引出物を出す也、前のごとく一獻加へてかへす也、姑三獻のみてをさむ

べし、扨わたいりを出す、平人は吸物也、さて第三の土器にて、嫁一獻のみて舅にさす也、舅又三獻のみて嫁へかへす、よめ又此時は二獻のみて姑へさす、姑三獻のみて納むべし、三人にて三々九度、扨其外小舅あらば、それとも盃事あるべし、小舅の位によつて其次第あるべし、此時も酌はむすぶ酌を用ゆべし、

〔婚禮推陳記〕三ッ目色直し濟候はゞ、嫁は聟の兩親江對面に往べし、色直し不濟前者、對面せぬもの也、

師傳に、今は其夜色直しゆゑ、同屋鋪にも舅姑御座候へば、其夜對面の方多し、時宜によるべし、」

土產物之事、舅二人江者小袖卷物樽肴、隱居方、子舅江も卷物結綿の類、其外召遣の男女江も、それぞれに土產物有也、○中略男の兄弟姉妹江も、小袖卷物樽肴持參有べし、召遣の女中江も金銀、男の家老の妻女江も、小袖卷物等給べし、とかく分限により、進物の多少不定也、

祝の次第、嫁對面の時、先手掛のしを出し、扨舅姑嫁三人江引渡しを据、捨土器を銘々に引、酌三ッ盃を先姑へ持行もの也、加て三獻のみ、其盃嫁江指、加の所江、姑より嫁へ引出物出ル也、以上三獻飮、姑へ盃もどり、三獻飮納る也、酌盃を勝手にて一の下に重置べし、次に內躬出る時、酌盃を舅江持行べし、舅三獻のみ嫁江指、加への所江、舅よりの引出物出すべし、三獻のみ、舅江盃もどり、三獻飮て納也、酌盃を一の下へ重る也、次に膓煎出る、此時は盃を嫁江持行べし、嫁一獻のみ舅江指、舅三獻のみ嫁江戻す、嫁一獻呑姑江指、姑三獻呑嫁江もどし、一獻飮納候へば、互に三々九度なり、酌加勝手江入、捨土器より引、膓煎より內躬引渡と引也、此跡にて別に吸物出候て、隱居方聟の姉妹と嫁盃事あり、

師傳に、本式は、舅姑嫁と式三獻か、又は雜煮三獻にて、三々九度の盃事法也、略儀者、雜煮吸物とり肴にて、舅姑隱居方聟の姉妹同座にて盃事有、此時は隱居方舅姑の盃は嫁藏べし、子舅江者

嫁より盃指事も有、其座の時宜によるべし、

〔空穗物語田鶴の村鳥〕あなたの十君平中納言に、十一君をばこゝう中將ゆきまさに、こなたの十二君をば兵部卿宮に、十三君遣す宮をば右大辨するふさと、八月廿八日にあはせつ、三日の夜、よところながら、たいめむし給て、御せむごとに、かづけもの、れいにおとらず、ゆたかにいきほひたり、

〔榮花物語十三木綿四手〕さて院の御事、〇小一條院敦明親王妃藤原道長女寛子けふあすあるべしとの、しるは、まことにやあらん、〇中略四五日ありてぞ、御ところあらはしありける、〇中略御だいまゐりてのほどに、大との〇道長いでさせ給て、うるはしき御よそひにて、御かはらけ參らせ給ほど、いへばおろかにめでたし、

〔中右記〕永久六年〇元永元年十月廿六日甲辰、今夜内大臣殿、〇藤原忠通始渡給民部卿姫君許、十一月二日庚戌、今夕内府御露顯也、〇中略事了民部卿冠直衣有對面、

〔兵範記〕久壽三年二月廿八日庚子、申刻許向權辨亭、於四條東洞院新造家被經營也、右衛門佐光宗令嫁第三女子也、〇中略亥刻客人來臨、〇中略次權辨於出居對面、次客人歸入、

〔兵範記〕保元三年二月九日庚子、今夜執聟事、密々營之、藏人大夫被來居也、〇中略次被出出居方、下官〇平信範對面、

〔將軍德川家禮典附錄十一〕享保十六辛亥年十二月、大納言樣御婚禮之御次第、

一於西丸大奥御祝之次第

公方樣〇德川吉宗大納言樣〇吉宗子家重姫宮樣、御上段被遊御著座、御のし鮑、姫宮樣被進物ニ有之候御引渡、御雜煮、御吸物、右御銘々上之、

奈良臺、御押、御肴御加、

公方樣御一獻被召上、大納言樣御肴被進之、被遊御加、其御盃大納言樣江被進之、公方樣御肴被進

露顯以下雜事

之、御加有而、其御盃公方樣江被進、大納言樣御肴被進之、其御盃姫宮樣江被進之、公方樣より御肴被進之、御加有之而、其御盃公方樣江被進之、姫宮樣より御肴被進之、御加有而、其御盃大納言樣江被進之、御肴被進、御盃大納言樣にて御納、

〔大江俊章記〕寶曆四年二月廿六日、俊興元、今夜婚儀、〇中略新夫婦出於北堂、予妻等之前、妹以下列座、吸物(鯛ハマグリヒレ、)酒肴、(有合ノ物品々取合)賜盃進賀儀、幷愛憐。三。從。等。敎訓。其後盃杓數巡、發聲及後更、

〔大江俊矩記〕寬政四年六月二十六日癸巳、嫁御律入輿、松尾宮內少輔殿誘引、〇中略直ニ婚儀式取整相濟、父母公始皆々近付ニ成、

〔大江俊矩記〕文化元年十月一日、今宵同姓木工助俊常婚姻也、〇中略聟嫁兩人手水神拜、(平野、御靈、兩神棚、祠堂、)親禮、此後おきし引合にて、石見丹後飛驒等近付、次家來向四五輩對面、予岩坊抔も面會、了色直也、

〔言成卿記〕弘化三年正月廿七日、予妻婦、(豐姬、儀同實愛公養女、)今日就吉辰入輿、〇中略如形祝儀了、〇中略次更家公已下御出座、燗酒如形獻盃了、如形祝飲了、(眞實如形、實素重疊也、併幾久數可契々々、)

〔貞丈雜記〕(一祝儀)古書に、婚禮の三日めを露顯と云事有、露顯と書て、あらはるゝとよむ也、婚禮の當日より二日めまでは、其家人親類ばかり知りて、他人へは知らせず、三日めより、廣く婚禮の由を他人へ知らしむるを露顯と云也、婚禮をあらはす心也、

〔江家次第〕〔二十〕執聟事(近代例)

近代露顯(トコロアラハシ)一夜也

〔幸充日次記〕寬延三年四月十五日丁亥、充賢入來、婚禮之次第幷覺書、〇中略後朝露顯日(一夜露顯近例)直出頭、(舊例擇吉日出仕、當時無其儀、)婦君方持參從三位位記、(內記持參、著障子上、)下家司(著衣冠紫奴袴)出逢、取位記宮入上達部座于簾中、付女房出宮、下家司授空宮於內記、內記退出、當時非政所、始自今日稱政所、及午斜、公卿殿上人地下等來集設饗、(依舊例三箇日止音物)及晚退散、(祿之儀、今度略之、)

〔婚禮法式上〕婚迎之部

一御色直の事、〇中略御色直しの御祝儀、ない／＼の御祝まゐりて、表へ聟殿御出あるべく候、御表じき／＼の御能などあるべく候、御ふるまひも、御湯づけなどしかるべく候、御座敷のやうは、客人により申候て、よろづそのこゝろえあるべく候、〇中略

〔女諸禮集〕婚禮首尾能く調ひしよろこびとて、聟の方にもひろめと號け、赤飯を調じ、知音の人を初め、これを遣すなり、此時娶の方より持參せし、雛はりこを付て送る、又菓子折など添る事、心まかせ也、赤飯或は白蒸を用ふ曲禮云、爲酒食以召郷黨僚友、以厚其別と云るなるべし、

〔婚禮罌粟袋下〕婚禮弘めのむしもの強飯用意の事、糯米積り、百軒に附、壹石貳斗、但し一軒に一升貳合つもり也、重の大小によるといへども、大の重箱に、此つもりにて見ぐるしからぬなるべし、糯米は江州米よし、〇中略鹽の包やう異行草有、

〔民事慣例類聚婚姻〕婚姻之後、披露ト號シ、親類組合ヲ招宴シ、或ハ其所役人ノ宅江伴行スルヲ例トス、此式ヲ行ハザル内ハ、夫婦ノ權義ナキ者トス、伊勢國阿能郡

〔榮花物語八初花〕宮、〇具平親王この左衞門督殿〇藤原道長子頼通を、こゝろざしきこえさせ給へば、〇中略御すくせにや、おぼしたちて、むことりたてまつらせ給御ありさまいまめかし、〇中略かくて日ごろありて、御ところあらはしなれば、御ともにまゐるべき人々、みなとの、おまへ、〇道長えりさだめさせ給へり、そのよのありさま、いさゝかこゝろもとなきことなく、しつくさせ給へり、

〔榮花物語十三木綿四手〕さて院の御事、〇小一條院敦明親王娶藤原道長女寛子けふあすあるべしとのゝしるはまことにやあらん、〇中略四五日ありてぞ御ところあらはしありける、院、皇后宮〇敦明親王母三條后娍子に申させ給、〇中略こよひは、もちいの夜とかきゝ侍りつる、おとゞ〇道長も物せらるべきやうにこそきゝ侍しかど、聞えさせ給へば、げにいかにとおぼしめして、御裝束どもに、えならぬかごもとめさせ給、

さやうのかたにはなべてならぬ宮の御ありさまに、心ことにはづかしうおぼしめして、したてさせ給ほどおしはかるべし、かくて御ともにまゐる人々、すこしもかたくなしきはえりすてさせ給、おはしましていらせ給へば、左衛門督（〇道長子頼宗）など、れいの君達參らせ給へば、なますゞろはしうおぼしめされていらせ給、殿上人の座には、懸盤の物どももいみじうしすゑたり、御隨身所めしつぎ所數しらず、机の物どももしすゑたり、もてなし給さま心ゆくさまなり、ゐましくさすがにみゆ、いらせ給へば、御となぶら、ひるのやうにあかきに、女房三四人五六人づゝ、うちむれつゝ、えもいはぬ有さま、まどもにて、こぼれふたがりて、あふぎどもをさしかくしてみなさぶらふ程、いみじうおどろ〳〵しきものから、はづかしげなり、おんしつらひありさま、かゞやくとみゆ、〇中略かくてものまゐらせ給、御まかなひは、左衛門督つかうまつりたまふ、とりつぎ給ふことは、二位中將三位中將（〇道長子能信長家）などせさせ給、御だいまゐりてのほどに、大とのいでさせ給て、うるはしき御よそひにて、御かはらけ參らせ給ほど、いへばおろかにめでたし、〇中略かくて御ともの人々の祿ども、れいのさはうに、いますこしまさせ給へり、御隨身所、召次所御車副舍人ども、さま〴〵いとおどろ〳〵しう、おぼしおきてたり、大殿はとくかへらせ給ぬ、餅にや御破子の蓋、御帳のうちにさしいれておはしましぬる程、ものいみすまじう、あはれにみえさせ給、

〔榮花物語十日蔭の鬘〕四條大納言（〇藤原公任）の御むすめ、〇中略此左衛門督のきみ（〇藤原敎通）をと思ひきこえさせ給て、〇中略四條の宮（〇公任妹圓融后遵子）の、にしのたいにてむことりたてまつらせ給、〇中略さて日ごろありて、御ところあらはしなど、心もとなからずせさせ給へり、

〔榮花物語三十六根合〕右の大いどのゝ大納言（〇藤原敎通子信家）は、〇中略源大納言殿の姫君（〇師房女麗子）を、をさなくおはしましゝより、御子にし奉らせ給ひて、かしづき奉らせ給、〇中略とのゝ大納言殿（〇藤原師實）をおはしまさせ給、〇中略四月（〇康平二年）十日、所あらはれさせたまふ、なでしこにこきうちたるすはうの

おりもの、うはぎ、おをくちばのからぎぬなどあれど、心々に菖蒲あふちなど、をりにあはせたる色々をつくして、ふたへ織物うち物おり物など、さま〴〵につくしたり、

〔おちくぼ物語四〕左のおとゞ、いかでこの君たちに、よきむこどりせんと覺してみるに、○中略中なごんのつくしのそちにてくだるに、はかにめうせたりけるをきゝ給ひて、○中略さるべきをりに、この事のすぢをほのめかし給ひければ、いとよき事に侍なりと申ちぎりてけり、○中略夜うちふけて、そちいましける、少將まるべしして、みちびきて入れぬ、○中略かくて左の大殿には、三日の夜の事、今はじめたるやうにまうけ給へり、○中略くれぬれば、そちいましぬ、御ともの人々に、ものかづけ、きやうなどせさせ給ふ、四日よりは、日たけつゝ、なん出ける、もの〳〵しくきよげにめやすし、

〔爲房卿記〕寛治四年六月二十二日乙卯、甲州、衣冠、○藤原爲隆今夜渡權左中辨四條宅、長女前驅二人、衣冠、左衞門尉定遠、式賢等也、雜色八人、無長、備後守家明、和泉前司差脂燭、茲夜有露顯事、每事遍差丁寧、

〔中右記〕永久六年○元永元年十月廿六日甲辰、今夜內大臣殿、○藤原忠通始渡給民部卿姬君許、十一月二日庚戌、今夕內府御露顯也、仍申時許、先遣後朝使勘解由次官實親、○中略此間予、○藤原宗忠馳向民部卿亭、帥中納言、左兵衞督、修理大夫、右大辨、束帶院內殿上人十餘人、諸大夫十人許來會、○中略一獻少將重通、次居肴物、五寸器二本、二獻少將宗能朝臣、此間掌燈、三獻頭中將宗輔朝臣、○中略此間所々掌燈、侍所幷雜色政所皆居饗饌、亥刻內府來臨、如日來者、於門前下從御車、給入御、御冠直衣、紅打出衣出之、前驅衣冠、如初之夜、家保朝臣相示、令著前驅於侍所、一獻侍從宗成、二獻少將成通朝臣、三獻權右中辨伊通朝臣、○中略入御帳中、後奉三夜餅、民部卿之上、奉之云々、次御帳南面茵前供御膳、御臺二本、著御裝束著御、陪膳新宰相中將信通、束帶、解劒供之、事了民部卿衣冠、直有對面、又家司左中辨爲隆朝臣、著束帶著政所、敷高麗端疊、居饗饌、成吉書、則參御出居御覽吉書、入覽筥、今夜有宿申、十四日壬戌、大臣殿申時許著直衣、先參殿下、申萬事、

後參內大臣殿御所三條大宮亭、寢殿東渡殿四間、指筵高麗端疊二行、對座復立四尺屏風、藤大納言、經民部卿、治部卿、能別當、忠帥中納言、重新宰相中將、信殿上人頭中將宗輔朝臣、顯國朝臣、宗能朝臣、忠宗朝臣、着座末、家主以下皆冠直衣、此外雲客四五人、依所狹不著其座、次居饗饌、盃酌及五六獻、人々淵醉、予有朗詠、佳辰令月、德是北辰等之句、數度令詠之、

牽出物馬一疋、給藤大納言、是依家禮也、自本所候、隨身冠者原牽之、

大納言被退出後、召雜色長左近府生敦利、內大臣、民部卿、新宰相中將信通、給御衣、是敦利依爲候院者、殊有饗應也、又召府生公胤、伊通朝臣、成通、源顯口雜色長也、俱依殿下隨身也、戌時許人々退出、

（長秋記）元永二年十月廿一日、巳刻著束帶、行向二位經營所、○藤原公實女嫁源有仁、中略、御膳了、出御寢殿東面出居、讃岐守顯能爲家司代覽吉書、入覽宮三位殿○源有仁取之開見給、宮侍覽之、覽文事爲用意、下官(源師時)敎申之、而存文及儀事了還入給、顯能敎申之、下官失也、令入宮御相違、入宮文、於宮上可覽之、口之給下家司、件吉書未給封尸、仍家庄美作國豐浦解文云々、○中略今夜自父宮○有仁父輔仁親王御許有御使、忠宗云々相模守雅職、可補家司之由有議定、而俄博陸○藤原忠實被鬱申、仍相模前司有兼、可申吉書之由有議定、下官云、彼未公文歟也、可有憚歟、顯隆朝臣同之、以顯能所令申也、

（長秋記）長承二年六月十九日壬寅、巳刻許、付右近將監近方、薫物一褁、送右衞門督、○藤原實能、中略、今夜中納言中將、賴長可嫁彼長女之訪也、　廿七日庚戌、右金吾露顯云々、朝間差散位爲基有書、○中略深雨間主人來給、前駈如前、雜色十人、外左近將曹敦利、院御隨身同府生武正、關白隨身爲長、主人入簾中給後羞膳物、陪膳少將公能、前駈勸盃、同書使諸大夫取瓶子、次給祿、季成朝臣、公隆朝臣、忠盛朝臣、公能朝臣、憲俊、政敎、公通、忠成、實明、親隆云々、隨身所獻盃、範陰、友兼、光成、雜色所獻盃、淸仲、懷遠、光俊、牛飼車副獻盃、共忠行、仕丁十人、各給腰指、政所始、家司著饗、六前二行居之、完光、知信、有盛著了、式部大輔敦光朝臣、雖補家司不著座退出、總四人也、宗光申吉書云々、爲助成入來上達部、按察使、左京大夫、右兵衞督、新宰相中將、皆著直衣、

〔本朝世紀〕仁平二年正月十日丙午、今夜參議師長朝臣、通故民部卿顯賴卿第二娘、於近衞高倉家有此事、來十六日有露顯事、

〔吾妻鏡四十九〕正元二年三月廿七日甲午、將軍家〇宗尊親王御吉事、有露顯之義、相州以下人々參布衣下括候、未剋入御中御處、御直衣頃之有進物、御劒武州、砂金百兩銀匣、置相模太郎殿、南庭置同匣、相模四郎、又女房一條局分砂金三十兩、秋田城介泰盛持參、別當局南庭、三宮內權大輔時秀役之、此外、賜風流被帖絹紺絹等、於女房之中、又被下細櫃二合各納帖絹二十四、於刀自等、其後將軍家還御寢殿、

〔晴富宿禰記〕明應二年六月十四日丁丑、左少史安倍盛遠十九歲嫁妻、高橋丹後守女也、　十六日己卯、盛遠妻、三ヶ日祝言、餅以下盛俊沙汰進之、

〔大江俊光記〕貞享三年四月九日、早川源左衞門知行千石、住宅堀川屋敷、仲三以姉お常十八歲今日祝言、盃振舞アリ、中根彌助、分部樣左衞門、北澤善庵、生島元庵、狩野十左衞門、木屋ノ波村屋次郎左衞門、某一座也、道具や忠兵衞、天野や一郎兵衞見舞、內證ニては、愚妻樂計取持也、

〔柳營秘鑑十〕比之宮樣御婚禮之式

一享保十六亥年、伏見殿御息女比之宮樣、大納言樣〇德川家重江御婚儀ニ付、〇中略極月御入輿、御祝儀等之大概、〇中略

一御婚禮之爲御祝儀、今日御三家方初、諸大名、諸番頭、諸物頭、諸役人、寄合之面々、四ツ時登營、西丸へも同斷、

一同十六日、右御祝儀、御三家諸大名ゟ、公方樣大納言樣姬宮樣江、御樽代箱肴進獻之、但公方樣江者、御本丸大廣間四之間に於て、當番之御奏者番之家來請取之、大納言樣江者、西丸ニ而同斷、姬宮樣江者、坂下御門之內、御先手番所江、御奏者番之家來罷出請取之、右使者熨斗目麻上下着之、

一同十九日、爲御祝儀御三家方幷溜詰、其外諸大名各登營、御饗應御能有之、但出仕之面々、無地熨斗目、返し小紋無之、

大納言樣卯中刻被爲入、辰刻兩上樣大廣間江出御、御襖明キ、諸大名一同御目見相濟、於御舞臺御能初之、○中略

一二番目ヶ段々御饗應はじまる、四品以上は金銀の御料理、其外は常の御料理なり、紀伊殿は竹の間、國持は御白書院に而出之、

一三番目相濟御中入、要脚五百貫廣蓋舉而町人共ニ芝居有之大圈二ッ、瓶子に酒を入、御緣江神保源五左衛門組御徒持出之、町奉行大岡越前守、稻生下野守、御緣において申渡之、圈は引之、町人退散之節、大廣間入口にて、右御菓子を紙に包、銘々渡之、今朝より御中入迄、御中入より祝言までと二立に割見物仕ル、

一七時御能過、今朝のごとく御襖明キ、一同に御目見入御、

〔大江俊矩記〕文化元年十月一日、今宵同姓木工助俊常婚姻也、○中略予は媒酌人、敬子は待女郎故、座敷へ出、○中略次客衆座敷へ通し、中仕切襖取放、主人以下出席面會、○中略各上下體、挨拶了、茶、烟草盆、口祝、組盃、島臺、吸物、包雜煮各盃土器等添、銚、重箱、肴、一獻巡流、二獻目取替盃結之人別了、緒吸物出、お從是三ッ組盃始羽盛、舟盛、硯蓋、肴、湯鯛、浸物等五種限、盃酌數巡、木工助取納、目出度客衆四ッ過散座、

〔將軍德川家禮典附錄十一〕右大將樣御婚禮之次第天保十二辛丑年十一月廿五日

一今度右大將樣家定○德川御婚禮相濟候爲御祝儀、御能就被仰付、御三家、松平加賀守始、國持大名、溜詰、御譜代大名、外樣大名、嫡子共、交代寄合、表高家登城、○中略

一御能初、若年寄勤之、○中略

一御能三番過、要脚廣蓋有之、幷芝居之町人江折櫃御酒鳥目被下之、落橡ニテ町奉行申渡之、

一右相濟而御中入

竹之間

紀伊大納言殿

一尾張大納言殿

松平加賀守

右御饗應（膳部薄盤）老中出席及挨拶、二獻過而盃臺出之、此節御使老中、畢而膳部撤之、茶弁餅菓子出之、

御白書院御下段御次之間迄、但御上段者御簾垂之

表向侍從以上

右御料理被下之、御使老中、

菊之間

溜詰

右御料理被下之、但御使は無之、

菊之間屛風を以仕切

右御料理被下之、御使老中、○中略

松平三河守○以下五人姓名略

紅葉間

右之外、前々より此席江罷出候面々、御料理被下之、

表大名四品共

柳之間

同　嫡子

御譜代大名同嫡子

右之外、前々より此席江詰出候萬石以上及交替寄合、表高家、御料理被下之、

〔寬のすさみ 二〕阿部喜左衛門とて、老先生あり、〇中略德の厚き人にて、人々尊敬しけり、下谷邊に住居して、近隣門人猶多しとぞ、其あたりに婚禮の家あり、近隣の人を招て、婚禮のひらきせんとするに、酒客のあばれん事を憚りける、その頃はかゝる祝儀の寄合には、酒客あばれて、闘爭におよぶ事、時々多かりし故とぞ、先生を上客にして催しければ、滿座の賓、始終膝をくつろげずして、宴終りてみな歸りける、先生の門弟といふにもあらざれども、人々恐れ敬ふゆゑなり、

〔寬のすさみ 三〕鴻巣の民家、妻を迎へけるに、所のならひにて、樽を入と稱して、大勢集り酒肴を贈りぬれば、夫々を呼て酒宴する事也ける、所の溢れものの十八人組に樽を贈りけるを、これを見れば、樽を白布にて包、その廻り妻の法名を製して大く書たり、主人妻に向ひて、如此の上は、打果さでは一分立がたし、是非なく暇遣する間、里へ歸りて給へといふ、かくて妻は一間へ入一通を認めける、これはわれらに付ての事なりと見え候、祖父には所のもの、金などかりしよしに候、祖父隱居して後、父になりて田地も多く持そへて富有候、金貸する事をやめるを、處にて疾み候と承りおよび候、左樣の事にて、われらに對しかくの如きの事に存られ候、我等自害申、此者どもを切殺して給はれと書置て死ける、夫も此上は是非に不及とて、さあらぬ體にて、今夜みな／＼御出候て、祝ひ給り候へと云やりける程に、夜に入各來りけるが、かたの如くもてなし、酒三獻の上、家内の者をこと／＼く外へ出し、門を內より閉させ置、客へ向て、今夜の設、三程調じ置候といひ出したるを見れば、妻女を切てまな板にのせ座中にひきける、人々驚きたる所を急ぎてより、頭取と知りたる男二人、先一人を切り倒し、三人深手負せける、殘るものども遁散んとせしかども、門へ出る事ならず、塀を越んとして大溝にころび入れり、合せて大に疵を蒙る者十二三人に及べ

後朝使

り、恙なく逝去しは二三人ばかりなり、領主にて吟味あり、妻の敵うちに立て、夫は罪なかりけるとぞ、

〔江家次第二十〕執聟事近代例

近代書顕一夜也、仍無後朝使云々、

〔増鏡六おりゐる雲〕康元元年にもなりにけり、大きおとゞ〇藤原実氏の第二の御むすめ、〇後深草后公子女御にまゐり給ふ、〇中略十二月十七日、豊のあかりのころなれば、うちわたりはなやかなるに、〇中略その日御せうそこを聞えたまふ、〇中略廿三日又御せうそこまゐる、御つかひ頭中將通世、こたみも殿かゝせ給ふめり、此ごろとのときこゆるは、太政大臣のおとゞ、〇藤原兼平をかの屋どの〇兼経の御せうそこぞかし、のちには稱念院と申けり、御手すぐれてめでたくかゝせ給ひしよ、たかつかさどのゝ御家のはじめなるべし、

朝日かげけふよりしるき雲の上のそらにぞ千世の色も見えける、御返し大きおとゞきこえ給ふ、

朝日影あらはれそむる雲のうへに行すゑとほき契をぞしる、女のそうぞくほそながそへてかづけ給ふ、

〔榮花物語二十八若水〕二月〇萬壽四年十九日ばかりにきけば、皇太后宮〇三條后妍子の一品宮〇禎子内親王の春宮〇後朱雀にまゐらせ給べしといふ事、世にいできて、〇中略關白殿〇藤原頼通御手とらへて、おてのぼりたてまつらせ給へり、〇中略鳥しば〱なけば、御むかへの人々殿ばらつゞきて參らせ給へど、とみにおりさせ給はず、あかうもこそなれと思ふほどに、おりさせ給ぬ、〇中略うちには日さしいづる程に御つかひあり、權亮よしなりのきみまゐれり、〇中略關白どの、こと殿ばらみなおはしまして、御つかひいみじくしはさせ給、此御使のきみも、もとよりさけのむ人なれば、いみじくしひさせ給

程に、むげにゑひたり、みちの程などめとゞめられたり、いたうあかみてしどけなげにみだれ參りぬ、

〔榮花物語十三木綿四手〕さて院の御事、〇小一條院敦明親王、娶二藤原道長女寛子一、けふあすあるべしとのゝしるは、まことにやあらん、〇中略冬の夜なれど、はかなくあけぬれば、いでさせ給ふもじとあかぬさまにおぼさる、〇中略かへらせ給ひぬれば、女御の君、御帳よりもいでさせたまはず、院よりは、やがておはしましけるまゝに、やさとみゆる程に御つかひあり、二位中將〇寛子兄能信などいであひたまひて、えもいはずゑはし給ふ、女房のかはらけ、さしいづるそでくちなどこそめもあやなれ、御かへり給て、女の裝束、えびぞめの小掛そへてたまはりてまゐりぬ、扨日くるゝも、こゝろもとなくておはしましぬ、四五日ありてぞ御ところあらはしありける、

〔榮花物語十四淺緑〕侍從中なごん行成〇藤原のむかひばらのひめぎみ、十二ばかりなるを、〇中略この中じやうのきみ〇藤原道長子長家をさてあらせたてまつらばやとおぼして、〇中略三月〇寬仁二年廿よ日に、おぼしさだめたるに、〇中略くるゝやおそきとおはしたれば、みんぶの大輔きみ、をはり權守など、しそくさしていれたてまつる、〇中略さてあかつきにいで給て、すなはち御ふみあり、

けさはなどやがてねくらしおきずしておきてはねたくくるゝまをまつ、とあり、とのゝおまへ〇道長の御くちつきとしるくおぼさる、いへなりぞ御つかひなりける、たいふのきみ、いであひてもてはやし給ふ、つぎににようばうのかはらけたび／＼になりたれば、いとたえがたげなり、にようばうの裝束に、さくらのおりものゝうちぎそへ給、

あさみどりそらものどけき春の日はくるゝひさしき、ものとこそきけ、ひめぎみはづかしうおぼいたれど、なほ御てづからとおぼいて、きたのかた、せちにそゝのかしきこえ給へば、わりなけれどかき給へるを、おほとの御らんずるに、たゞ中なごんの御てのわかきとみえて、えもいは

すをかしげなれば、あはれに御らんせらる、

〔おちくぼ物語二〕中納言殿には、その日になりて、しつらひ給ふことかぎりなし、○中略人々さうぞきぞしてまつに、おはしたり、○兵部卿といへば入奉りつ、○中略女○四の君かゝるしれものさもしらでふし給にけり、あけぬれば出ぬ、少將、いかならんとおもひやられてをかしければ、○中略さぶらひに出たまひて、せうのがりふみやり給ふ、いかにぞ、ふみやり給ひつや、まだしくば、かうかきてやり給へ、いとをかしきことぞとて、かきてやり給ふ、

世の人のけふのけさにはこひすとかきゝしにたがふこゝちこそすれ、たま〳〵なきのとかきてやり給へれば、せうふみやらんとて、うたをよみをる程に、かくて給へれば、よきことゝ思ひて、いそぎかきてやりつ、○中略かの殿には、御文まつほどに、もてきたれば、いつしかとり入て奉りつる、見給ふに、かゝれば、いみじうはづかしくて、えうちもおきたまはず、すくみたるやうにてゐ給へり、○中略北のかたうちみて、あやしうさま〳〵のむことりのふみ見る中に、かゝればいかならんと、むねつぶれぬ、おとゞ、おしはなち、ひきよせてみ給へど、めうとくてえみ給はで、いろごのみの、いとうすくかきたまひけるかな、これよみ給へといへば、ふとこりて、藏人少將の、つとめての文の覺えけるをうちよみて、たえぬは人のとなん、かき給へりといへば、おとゞうちゑみて、すきものなれば、いひしりたんめり、はや御返事をかしくし給へとて、たち給ふをきくに、四の君かたはらいたくわびしく覺えてよりふしぬ、北のかた、三の君と、いかにのたまへるならんとなげけば、女の御かた、いみじく思ふとも、かういはんやは、なほおしなべて、けふは戀しといはんことのふるめきたれば、やうかへてとおもひ給へるにや、心えずあやしくもあるかなとの給ふを、北のかた、さなり、色ごのみは人のせぬやうをせんと思ふなるべしといひて、はや返事し給へと申給へど、おやはらからゐたちて、かくあやしがりなげき給をきくに、さらにおきあがるべき心

ちもあらでふし給へれば、われきこえんとて、北のかたのかき給ふ、

おいの世にこひもししらぬ人はさぞけふのけさをもおもひわかれじ、くちをしうなん、女はおもひきこゆるとて、つかひに物かづけてやりつ、四の君は起きあがらでふしくらしつゝ、くれぬればいととくおはしぬ、北の方、さればよ物しくおぼさましかば、おそくぞおはせまし、げにかうやうかへて、の給へるなりけりとて、よろこびて入たてまつり給ひつ、〇中略藏人少將の君、〇中略殿上のこまと名づけて、かしらもえさしいでぬしれ物〇兵部丞の、いかでよりきにけん、そこたちの見はかりてし給ひつるならんと、わらひてうろうし給へば、三の君、さらにしらぬよしをいひて、いとほしがりなげき給、かゝるひがものなれば、よづかぬ文はかきいだしたるなりけりと、人しれずおもひて、いみじくいとほし、

〔おちくぼ物語四〕左のおとゞ、いかでこの君たちに、よきむこどりせんと覺してみるに、さるべきかなとおぼしいたるほどに、大やけのえらびにて、中なごんのつくしのそちにてくだるに、にはかにめうせたりけるを、きゝ給ひて、人がらもよき人なりとおぼしきざして、うちにまゐりあひたるにも、心とゞめてかたらひ給ひて、さるべきをりに、この事のすぢをほのめかし給ひければ、いとよき事に侍るなりと申ちぎりてけり、〇中略夜うちふけてそちいましける、少將しるべしてみちびき入つ、〇中略あけぬれば出給ぬ、〇中略四のきみ、まだ丁の内にね給へり、北のかた、おき給へとおこし給ふ程に、そちのふみもてきたり、をとこ君とり給ひて、まづ見侍らまほしけれど、かくさんとおぼすこともかきたらんとてなん、のちにはかならず見せ給へとて、木丁のうちにさしいれ給へば、北のかた取て奉り給へど、ふさしもとり給はず、さはよみきこえんとてひきあけ給ふ、四の君、〇中略よみ給ふをきけば、

逢事のありその濱のまさごをばけふ君おもふかずにこそとれ、いつのまに戀のとなんあり

ける、御かへしはやきこえ給へとあれど、いらへもし給はず、おとゞ、そのふみとばしとて、せめてのたまへば、なにのゆかしうおぼすならんとて、さしいだし給へれば、いたうかきそへためるはとて、御かへり給へとて、又さしいれ給ふ、はや〳〵と、すゞりかみぐしてせめ給ふ、四の君、返事もこの殿の見給つべかなりと、いとはづかしくて、えとみにかき給はず、あなみぐるし、はや〳〵との給へば、物も覺えでかく、

我ならぬ戀ぢもおほくありそうみの濱のまさごはとりつきにけんとてひきむすびていだし給へれば、おとゞ、あなゆかしのわざや、けふの返事は、みでやみぬるこそくちをしけれど、いひゐ給へるさまいとをかし、つかひにものかづけさせたまふ、(〇中略)かくて左の大殿には、三日の夜の事、今はじめたるやうにまうけ給へり、

〔中右記〕永久六年(〇元永元年)十月廿六日甲辰、今夜内大臣殿(〇藤原忠通)始渡給民部卿姬君許、十一月二日庚戌、今夕内府御露顯也、仍申時許、先遣後朝使勘解由次官實親、著布袴給御書、被書紫薄樣、(書二重、結之、引墨、又裹一重、以紙結之引墨、)此間予馳向民部卿亭、帥中納言、左兵衛督、修理大夫、右大辨(束帶)院內殿上人十餘人、諸大夫十人許來會、女房打出衣白、御使立門下、行佐(束帶)相逢申事由、少將重通示可昇之由、進南面簾前、奉擧御書於女房、取(副筥)地下五位一人置圓座、人々被示可著件座由、實親在圓座傍、一獻少將重通、次居肴物、(五亭器二本)二獻少將宗能朝臣、此間掌燈、三獻頭中將宗輔朝臣、女房從簾中被出御返事幷祿、(女裝束)實親取具筥退出、

〔長秋記〕長承二年六月十九日壬寅、巳刻許、付右近將監近方、薫物一裹送右衛門督、(〇中略)今夜中納言中將(頼長)可嫁彼女之訪也、廿七日庚戌、右金吾露顯云々、朝間差散位爲基有書、式部少輔國能出合、馬助雅遠、取圓座敷寢殿東向戸前、四位少將公能引令著座、居肴物勸盃、一獻左少將公能朝臣、二獻左中將公隆朝臣、三獻同季成朝臣、次給祿、有返事歟可尋、

〔禮容筆粹五〕婚禮之次第

迎小袖之事

嫁入の夜、むこの方より迎小袖とて、小袖酒肴を遣すもの也、此時の小袖は、ゑりとゑりとを合せて、絲にてとぢ付て、臺につむ也、尤壻の位によりて、供の女房どもへも遣す作法也、他國より呼時は、親の內を出る日、小袖を持參るつもりに使者を遣すべし、

〔晉書倭人九十七〕嫁娶不ㇾ持錢帛、以ㇾ衣迎ㇾ之、

〔婚禮推陳記〕婚禮の日、輿の出る前に、聟の方より輿迎の使者を遣也、此使者には、小袖一重、酒肴を添遣なり、是を迎小袖と云、○中略迎小袖一ッは、白綾幸菱の白裏、一ッは練の白小袖也、上前のこつま先と下前のこつま先と白き糸にて閉合、糸を不ㇾ切して、小袖の前と前と向合積也、魚も腹を合て積也、此積樣常には替也、聟の分限により、大上臈小上臈局などへも、それ〴〵に遣物有べし、師傳に、近比は迎使者にも不ㇾ及也、○中略是によりて迎小袖の沙汰もなし、然ゆゑ此迎小袖の積樣と、魚鳥の積樣を、今は結納の時に用る也、

〔婚禮法式上〕婚迎之部

一色直しの時、聟殿より御料人へ、小袖一重にても、三重にても、五百疋にても、千疋にても、相添參らせられ候、折紙にて、かなに五百ひき千ひきと書て被ㇾ進ㇾ之、小袖の上に折紙を置べし、○中略

一御料人のさとへ、婚禮の夜の座敷のかざり進候時、しうと夫婦の方へ、御料人よりいしやう、やうきやく、肴樽、目錄にしたゝめ遣はさるべく候、此ほか三日のもちひなどもそへ候はゞかきのせべし、そうべつ精進の物は、はじまりに書くものなり、此もくろくは、かなにとゝのへべく候、御料人方よりのつかひなるゆゑなり、殿方へも鳥目何千疋も何萬疋も進ずべく候、しうと夫婦よりもおほくしんぜらるゝ物にて候、目錄にとゝのへまゐらせられ候べく候ほどは、そのしんだ

いにおうずべしきはまりなく候、

〔婚禮推陳記〕三ッ目の祝過て、聟の方より女房の里江使者を遣べし、床に飾たる二重手懸置鳥置鯉饗の膳に、五百八十の小餅を行器江入、棒肴を添遣也、行器は三對にも五對にも入遣也、此時の棒は、指棒を古法は用ゐたり、

師傳に、近比より嫁江据たる式三獻にても、雜煮三獻にても、高盛の七五三、五五三の膳部にても、不殘里江遣也、五百八十の餅を、むかしは餅ちひさきゆゑ、不殘行器江入ると云ども、今は餅諸家共に大にして取扱ゆゑ、行器一對には月數程入候て、殘はかますに入、上を細引にて十文字にからげ、叶結に留て封印をする也、又木地の行器一對に、紺靑にて鶴龜松竹を書て、殘はかます三十にも、廿八かますにも、又は十二かますにも入る也、又行器には不入、皆かます計に入る時は、かますを臺に据る事もあり、臺に据る時は、指臺にして、かます一ッ宛据るなり、又皆臺に据るに不及して、かます三ッか五ッ臺に据たるもよし、披露の時も、臺に据たるを出す也、一說に、ちがやを靑苧にて編、かますにして餅を入、其上に糸花を指て、二ッ宛臺に戴、四ッの角に蝶高立を付て、臺三ッにかます六ッするゑ、殘はつり臺に入遣たるも有、萬事一篇に心得べからす、

聟より男江床飾遣時目錄之事

進上

二重臺一飾　手掛臺一飾

饗膳一膳　置鳥一飾

置鯉一飾　五百八十餅十二圦

昆布一折　鯛一折

鍋一折　　御樽二荷

已上　　名字官

右床飾を目錄に認る時、如此紙一重横に折、三ッに疊書也、七五三の膳式、三獻の膳は、目錄に書込には不及也、又蓬萊に置鳥置鯉を飾たる時、是を里江遣時も、先蓬萊置鳥置鯉を書て、扨餅樽肴を書べし、○中略

嫁の里よりも、聟の方江五百八十の餅、樽肴を贈る也、これ近代の風俗也、雙方刻限を申合、道筋の不違樣に、道にて餅持參の使者往合やうに遣もの也、これを結と云、

〔女諸禮集〕三箇日振舞の事

今日聟の方より餅を搗て、舅の方へ贈る也、是を世に五百八十七まがりと云ふ也、餅の升目三石三斗三升三合にて、數を五百八十七に取る也、形を飯櫃にして、少し押しを掛け、白と赤と二色にすべし、赤は小豆の煮汁にて色を付る、白二百九十三、赤二百九十四、舅の方には、是を親類朋友出入の者などへ送り遣す事也、

〔冠婚抄〕諸禮筆記に、三ッ目、二重手かけ置鳥置鯉饗膳等のかざり、長持等に入、舅の方へ遣し、行器に餅五百八十入て可遣とあり、餅五百八十と限りたるは、何等の數なりや未考、かた〳〵いぶかしきは、水島氏の傳にも、古は五百八十也、近代は五十八、三ッ目の朝、樽肴まで添へ、刻限を申合せ、道筋不違樣に雙方より遣す、道にて行合なりとあり、猶又二重手掛置鳥置鯉饗膳等の飾り、長持に入、舅の方へ遣すも心得がたし、中にも置鳥置鯉饗膳は、婚禮の床上の神供ならずや不審なり、

〔江家次第二十〕執聟事近代例

奉烏帽子狩衣、美家儲之聟公著之出帳前、

〔滋草拾露嫁娶〕聟取次第予作

聟君來、○中略次有送物、直賜其人、如烏帽子狩衣指貫等類、聟君以此物具、可令著改給、但略儀不然、

〔嫁迎記〕よめいりのよいしやうの事

一とのへのこそでは、うちおきのおりもの何にてもあはせ、すはうはかま、もんはまひづる、

〔婚禮法式上〕婚迎之部

一婚入の當日、御料人より聟殿江進物は、小袖三重計、其時は袷添ふべし、袷は袖を通して重ぬる也、小袖は袖を通して重ぬる事なし、一ツ宛疊て重ぬる也、ひた、れすあをそふべし、此小袖のわき、どぢやうの事、小袖を一重ねかさねて、下がひを上になし、堅に二ツに折て、兩方の脇の下の方を一ツにとぢ申べし、左右を白糸にてとぢて、眞結にむすぶ也、すあをひた、れなどの紋には舞鶴を付る、又は紋に鶴龜をも付るべし、色は淺黃に染べし、大口勿論そふべし、烏帽子は無之、扇も添ふ事なし、又御料人より殿の方へ刀をまゐらする事、法式には無之事也、五千疋萬疋被進之也、

一男方の兩親へ、御料人より二千疋三千疋に、板物添へて可被出之、

〔冠婚禮書〕よめ入の條々

一よめむかへの時、とのがたへ、女房のかたより、かたなをまゐらする事、しきにはなき事也、

〔禮容筆粹五〕婚禮之次第

上臈より殿へ持參之事

小袖一重、緘やうは口傳にあり、上下一具、上帶、下帶、扇壹本、疊紙七組計、刀壹腰、以前こしの内より取出したる刀是也

右の七種を廣ぶたにすゑて出す也、男右の七種にてしやうぞくして、座敷へ出祝言あるべし、

〔婚禮式法之書乾〕婚禮結酌取様

一土產物披露所、古は七種にて、無官衆江は、ゑぼし、すわう、はかま、小袖、小サ刀、疊紙、扇也、是を七種と云、○中略御色直しの時、男是にてしやうぞく有べしと古より申傳候へども、今は半上下、長上下、小袖、帶、疊紙、扇のみやげ也、○中略

〔婚禮推陳記〕嫁假粧の間へ落つかれ、休息ありて、○中略其內に御拵添者、七種の土產を廣蓋江積て御調臺の傍に置也、

師傳に、○中略本式は七種の土產とて、折烏帽子、素袍、袴、短刀、扇、疊紙、小袖、帶、以上七色也、近比は烏帽子、素袍、袴、短刀、持參の方稀也、今は大形小袖一重、長上下、帶、扇、疊紙、以上五種也、人により長上下、半上下、二具被添方もあり、他流に帶も二筋、扇も金銀の地紙を二本、下帶一筋添たるも在、然ども當流より、下帶等を持參の差圖有べからず、其所により是非遣度さ有ば、時宜にも隨べし、扇も包が本也、また不包ともよし、帶も不包、小袖の上に四ッ折にしても置、又包たるもよし、一の上に熨斗包置也、嫁より土產の品々を、局より覺書に認る事あらば、左の順のごとく認遣がよし、

烏帽子は、折烏帽子也、聟官位有ば、風折を用ユ、調度懸は、紙捻を用ゆ、○中略

素袍袴の色、深綠又は淺綠、又は深縹に聟の紋付て、菊閉紐革は黑革藍革なり、紐革の幅は八分也、」

師傳に、婚禮は外事の禮法にあらずして、內々の禮なれば、官位の有無に不構して、皆素袍袴にて祝たると見えたり、○中略寛文九年の比、越前の御家より、鍋島の御家江御入輿の刻に、御緣女より信濃守殿江、栗梅色の紗の狩衣一領、淺黃の指貫一行、烏帽子一頭、小袖一重、子持筋熨斗目、下著白小袖、子持筋の長上下一具、半上下一具、帶、扇末廣、疊紙、此十種を臺二ッに積て御持參也、

如此の法も覺悟すべし、

小袖一重の時、上は板の物、下は官位の有無によりて、白小袖又淺黃たるべし、昔は荷一對に七種を入往ゆゑ、片々の荷には小袖を入懸也、小袖の疊樣、下著も上著も、別々に夜著疊にして、下著はあふむけて下へ入、上著はうつむけて上に置、其上にのしを置たり、片々江者、素袍、袴、烏帽子、扇、疊紙、帶を入て、のしを置也、短刀は輿の中江入るゆゑ、荷には不入なり、

師傳に、近代は男へ褐子持筋の熨斗目なり、夏の婚禮にも帷子持參は略也、暑天にも袷持參が式也、又單物もあり、下著は帷子の事も有、

帶は紗綾綸子を用ゆ、くけ帶也、色は不定、黑か茶類をよしとす、

短刀は五所物か、七所物にもすべし金物金銀赤銅を用ゆ黑鞘也、柄糸縫緒の色、好によるべし紫縫緒者嫌也、

師傳に、近比長上下などの持參に、短刀脇差を被添方稀也、短刀の五所物とは、目貫、小柄、笄、縁、裏口也、七所物は、右の五所の外に、彫方、追金なり、九所物と云は、右の上に、柄頭、小尻也、

扇は白骨、金地に白粉にて、鶴龜松竹を書たるを一本添たる也、折形に包べし、

師傳に、繪樣、鶴に根芹を書たるを用ゆ、黑骨は不用、

疊紙の事、椙原一重宛を竪に三ッ折にして七折、是を雌羽に段々入違重て、中より横に二ッに折也、一上の紙の一折目を殘し置きて、紙の間へ入る也、口傳、

師傳に、如此四角に折疊紙は、誕生蟇目の的に用ゆる時の儀也、婚禮の夜の疊紙は、小杉紙の類を竪に三ッ折にして、雌羽に重たるをよしとす、紙數は見合にすべし、大抵一折の數、十枚程然べし、

熨斗包は、男への持參ゆゑ、眞に包べし、數は五本も七本も十本十二本も包也、

師傳に、婚禮の時、夫婦間に取扱のし包は、常の折形とは違なり、二重臺に置いわし包のごとく、

丸紙一重を兩方より二襞宛折て、紙先往合樣に折也、

右七種、荷より取出し、廣蓋に積て出し樣の事、一の下に小袖一重、袖を不返、其上に長袴、腰を襟の方へして、裾は下へ折也、其上に素袍を上がへ上へして、襟先を小袖のゑりの方へして積、袖を折、短刀は笄の方を上へして、柄を襟の方へして置、疊紙の上に扇を組付、短刀と一所に置べし、扇の

要は、小袖の裾の方へ成也、帶は袖の方に置、烏帽子は、素袍の中程に額を向へして置、其脇に熨斗包を置べし、○中略

師傳に、近比は、小袖、上下、帶、扇、疊紙、此五種なり、此積樣は、小袖一重、下がへ上へして積、其上に袴、其上に肩衣を置なり、肩衣の襟と袴の腰の方を、小袖の襟の方へして積也、扇、疊紙、帶は襟先の方よりこづまの方に置なり、

〔宗長息女婚禮記錄〕從甲斐守殿〈○武田晴信〉三目に宗長御兩方江御祝言之次第、使者兩人也、

御進物之覺

宗長江

御大刀　一腰〈秋廣〉　御馬　一疋〈鹿毛〉

御局方江

二重　手懸　置鳥　置鯉

右長持ニ入

行器　二荷〈五百入拾の餅也〉　御小袖　二重

肴　十種　御樽　十荷

右以兩使被獻之、則使者御禮、白銀拜戴之退出、其後武田家の親屬方より、追日[illegible]御祝言之使者有之、

〔大江俊光記〕元祿十年九月八日、おまん、今夕暮而、舟ゟ直ニ吉田元格所へ祝言[illegible]肴物、元格へ黑小袖一十德、一弟恐請へ金二百疋ニ扇五本入、弟子ノ元林へ百疋、三本入、若黨市郎兵衛へ上下ニ百疋、若黨宮五平へ百疋、眞綿一把、小坊主へ銀二兩、男二人へ銀一兩ツヽ、六尺四人へ銀三匁ヅヽ、岸田・源之進へ三百疋、母義へ眞綿二把、内義へ帶二筋、

〔大江俊光記〕元祿十三年六月十八日、今日能登婚禮、〇中略嫁女おちよ土産物持參、目六アリ
貰目、（能登士税）請取手形遣、

〔大江俊光記〕元祿十四年四月廿一日、上御靈別當、小栗栖雅樂頭春原元規、從五位上、廿二歲、父ハ法印祐玄、母はおれん、小倉大納言女、今日雅樂頭より照方へ、祝言の印來、ひじわた一把、熨斗二把、玄長內弟迄來、此方より取に遣、神々先祖父母へ備了、　廿三日、申半刻計、御照上御靈へ遣、〇中略

御照々土產物

一法印祐玄へ　二本入扇子箱
一おきん方へ　のべがみ五束
一成久へ　木綿足袋三足
一同　五十疋　（おてて）平左衛門
一同　同　（おきんおち）おかの
一わたぼうし　一　（同）母へ
一同　一　（澤井千代）きさ
一半紙　二束　（源八子）志津磨
一鳥目　百疋　（男）三人へ（女）二人へ

一雅樂頭へ　三本入扇子箱
一お吉の方へ　同三束
一鳥目　五十疋　（術玄おち）澤井へ
一同　同　（雅樂頭おち）藤木へ
一同　三十疋　三哲
一そめぼうし　一　（物し）きよ
一鳥目　三十疋　（侍）源八
一同　一束　かうみん
一門番茶屋へ參候時、鳥目遣答也、

〔寶曆集成絲綸錄二〕寬延元（辰）年十一月
閑院宮姬宮五十宮御方、來年御下向ニ付、爲御用意御金三千兩被進候、
一被召連候女中
金百兩宛上﨟貳人　金百兩御乳人壹人　金七拾兩宛若き衆三人　金七拾兩小性壹人
金三拾兩中居壹人　金拾兩宛半下三人　金三拾兩宛閑院宮より御附被差越候醫師貳人

右之通被進被下候段、牧野備後守方ニ而相違候、
右之趣可被得其意候
十一月

〔大江俊矩記〕享和二年二月二日、おまつ事おあや、今夕良辰ニ付、河原町北小路美濃守俊任朝臣息、同山城權守俊廣妻ニ入輿、○中略土產物之事、今日晝後下部定介一人にて爲持遣、是緣約也書狀目錄左之通、使へ吸物、酒二折、二百文出由、

猶々任御心易略使御宥恕可被下候、乍慮外殿方へも宜被仰傳可被下候、家族も同樣申上度由ニ候也、

一筆啓上仕候、春寒之節御座候所、御全家彌御淸福、奉恐賀候、然は今夕良辰、艶女おや爲致參上候ニ付、乍些少目錄之通進上仕候、幾久敷御祝納可被下候、餘は明日參上拜顏、萬々可申伸、草々如此御座候、恐惶謹言、

二月二日　俊矩

北小路美濃守殿 參人々御中

一御上下一具
一鹽鯛一折
一御酒一樽
右山城權介樣
一御扇子一箱
右北小路主稅助樣

一羽二重一端
右美濃守樣
一御琴一面
右御てる樣
一羽二重一端
右御ふきさま
以上
右小奉書橫目六三ッ折
一南鐐一片　一包
一白銀一朱　二包
一同　一封　四包
一青銅二百疋　但三十疋包二、二十疋包七、
一白木綿　一端
右御家來中へ
右同上

〔大江俊矩記〕文化五年六月廿七日壬辰、おこう事、今夕松室山城へ婚禮ニ付、秉燭頃ゟ、敬子同道にて下立賣へ行、禮服にて候無之○中略爲土產目錄には、奉書竪書二枚重、但のし二筋、目六中に入置也、
御扇子　一はこ
御上下　一具
するめ　一はこ

御たる　一か

右之通認遣といへども、任二兼約一其品は略レ之、但五本入涼銀扇一箱杉宮塗乗計持參、其外ニ越中公へ同扇三本紙包おてるへ紅縮緬板〆三寸幅六尺之帶一筋、さのへ晒木綿一反、下女へ封銀三匁、雇男へ二百文一包等持參、一ツヽ文匣ニ入差出也、引貳折貳百文入來、

但庭働之人數不レ知故三包計兮用意持參、内々さのへ敬子ゟ尋合處、一人之由故、一包差遣、跡は持歸了、

〔大江俊矩記〕文化十二年二月廿一日、順子、依二吉辰一今夜内々嫁二堀河三品家一、〇中略

一土產物幷次々之祝儀等如レ左、於二家來祝義一者、自二帶刀一兮引二渡蜂須賀帶刀一也、

三品公へ　紋綾一端　鍚貳連

大夫殿へ　羽二重一端

登丸殿へ　羽二重一端

御姫へ　島繻子帶地一筋

得壽院へ　紫縮緬帶地一筋

松嶋へ　飛驒紬一端

雜掌へ　南鐐一片包杉原雜殿受レ之云々

侍中貳人へ　白銀一兩ヅヽ

乳母へ　同斷

仲居下部貳人へ　鳥目三百文ヅヽ

〔言成卿記〕天保十二年二月十五日、今酉刻、舍妹操内々阿野家へ入輿、客分云々爲二土產一被レ贈二白襖、狩衣、當帶、打裏樽代金十五兩、干鯛宮等於二聟朝臣一、自餘各々、土產物等有レ之云々、　十六日、今日舍妹、爲二部屋見

鮮、井籠饅頭百一荷、鯣二連等、以女房多ツ分遣給云々、先是今朝齒黑鐵漿也、壺一對附給、不聞ニ落手、唯差置、吉例云々、

〔將軍德川家禮典附錄十一〕右大將樣德川家定御婚禮之次第

天保十二辛丑年十一月廿二日

一五百八十餅、御取かはしに付、越前守、堀田攝津守、六半時登城、各加珍無地熨斗目、同色麻上下、

一右大將樣より鷹司殿江

御使　本多越中守加珍ノ持筋熨斗目、同長袴、

五百八十餅

十種　十荷

西丸より御本丸御廣敷へ罷越、御目錄御留守居江渡之、御廣敷ニ而熨斗鮑出之、過而御本丸へ罷出、御使相勤候段、越前守江申達之、於御用部屋雜煮吸物御酒被下之、

一鷹司殿より右大將樣江

鷹司殿家司　牧式部少輔

五百八十餅

十種　十荷

御本丸御廣敷より、西丸江參上、於柳之間謁河内守、目錄渡之、高家御留守居等伺候、雜煮吸物御酒被下、拜領物被仰付之、

但五百八十個御樽肴、雙方より先達而廻し置、御使計蓮池御門ニ而行合、

御取かはし御目錄品書但用紙は大高檀紙

五百八十餅十二臺　熨斗二十把　御樽十荷　鯣二十連　干鱈二十枚　干鯛十掛　鯉二十本　昆布二十把　鹽鮭二十尺　鰡二十本　からすみ三十掛　干鱚三十本

以上○中略

御婚禮之節御取替御品之内

右大將樣江姬君樣〈○家定配鷹司有子〉より被爲進

一御長上下　二具
　御紋付加賀無地子持筋　一
　御紋付花色小紋　一
一御半上下　二具
　御紋付加珍無地子持筋　一
　御紋付花色小紋　一
一御小袖地　五
　御紋付御熨斗目　二
　御紋付羽二重花色無地　二
　御紋付羽二重憲法無地　一
　御裏地茶羽二重　二疋一端
　御中綿　百目充
一御白小袖兩面地　二
　御中綿　百目充
一紗綾御上帶地　二
　花色　一
　茶色　一
　御引綿　二十五匁充
　御中入木綿　一丈充
一御扇子　一箱〈二本入〉
　但繪地金、千歲繪樣。
一御鼻紙　二折
右大將樣より姬君樣江被爲進
一御小袖地　五
　綸子御地赤　二
　綸子御地白　二
　綸子御地黑　一

御紫地紅羽二重　二疋一端
御中入綿　百目充
一御白小袖兩面　二
羽中入綿　百目充
一御帶地　三
繻子御地白御紫縫　一
繻子御地黑御紫縫　一
繻子御地黑縫金糸鹿子入　一
御引綿　七拾目充
御中入木綿　一丈充
一御末廣　一箱二本入
但總地金、千歳繪様、
一御鼻紙　二折

〔言成卿記〕弘化三年正月廿七日、予妻婚、〇中略今日就吉辰入輿、〇中略
土產物
家公江ひだい、綸子一反、予江奴袴、二種一荷、内藏頭江羽二重一疋、春風夫々在土產物、

〔將軍德川家禮典附錄十〕和宮樣〇仁孝皇女親子京都より御下向幷御入輿御婚禮之記
萬延元庚申年十二月十一日、今日和宮樣御本丸江御入輿、〇中略
一公方樣〇德川家茂江和宮樣より
御烏帽子　御小直衣　御衣　御單
御下袴　御差畳　御大帷　御末廣
御唐櫃兩面覆但御品物は、先達而大奥江相遞る、
右御入城ニ付被進之
一和宮樣より天璋院樣〇德川家定妻江

御手鑑十二ヶ月　一箱
御衝立　一基
一本壽院樣〈〇家茂生母〉御軸物二幅對　一箱
御歌書　一箱
右伺濟ニ付被進之

出仕行始

〔江家次第　二十〕執聟事〈近例〉
擇吉日、聟公出仕、

〔民事慣例類聚　婚姻〕婚姻ノ翌日ニ至リ、新嫁ノ婿、隣家五人組、又ハ親戚ノ宅ヘ初步行ト唱ヘ、廻訪スル事ナリ、〈甲斐國都留郡〉
婚姻後兩三日中ニ、村步ト唱ヘ、新婦ヲ伴ヒ、親類組合、幷ニ役場ヘ到ル、〈美濃國厚見郡、各務郡、方縣郡、〉

〔中右記〕天仁元年四月八日戊子、今夜四位少將、爲權右中辨因緣、　十四日甲午、依吉日、〈〇中略〉今朝少將初出仕、著吉衣冠、參殿下〈〇藤原忠實〉許也、後日著諒闇裝束、〈〇前年七月堀河帝崩〉可令參內也、

〔中右記〕永久六年〈〇元永元年〉十月廿六日甲辰、今夜內大臣殿〈〇藤原忠通〉始渡給民部卿姬君許、　十一月二日庚戌、今夕內府御露顯也、　八日丙辰、申時內大臣殿御出仕、〈御直衣、二重浮文、御指貫、紫、敎利、紅打衣、出白衣三領、此外雜色長二人、〉檳榔御車、前駈八人、〈五位六人、盛家、盛季、廣房、仲光、春兼、清業、六位二人、高基、盛定、已上皆給新裝束、白菊、〉御車副四人、牛飼童一人、先令參殿下〈〇藤原忠實〉給、次院內宰相中將信通、〈直衣〉權右中辨伊通、〈束帶〉四位少將成通、〈束帶〉少將重通、〈直衣〉連車扈從了、

〔長秋記〕元永二年十月廿一日、行向二位經營所、〈〇藤原公實女、嫁源有仁〉　廿六日、二位殿送消息云、今日三位中將殿〈〇有仁〉可有御行、參入可令奉出立也、又雜色等可令獻也者、令申承由、午刻參彼殿、三位中將殿令著裝束間也、〈直衣、蘇芳衣、紅打衣、不得心、〉網代御車、御隨身布衣、御前衣冠、敎利自院參仕、新中納言、中宮權大夫、右

兵衛督、中宮權亮實能朝臣、爲扈從人、先令參院給、依內御物忌不可參給之由有議定、而院宣云、雖御物忌參殿上可退出給也、於御前參者可有憚云々、此間下官(師時、源)與源兵衛佐同車參、三宮前齋宮渡給、申刻三位殿參給、如院仰參內給云々、於此宮供御膳、自設間退出給、有賜物、(野剱入袋)自取出給、實能朝臣給之、給御前令授付、仰可持參彼殿之狀、下官申宮云、今日可令奉饗應御也、不可事□召敎利可纏頭□□也、宮廳之召入給御衣一重、人々云、於院□□入御車御覽云々、

〔長秋記〕長承二年六月十九日壬寅、巳刻許、付右近將監近方、薰物一裹送右衛門督、(○中略)今夜中納言中將(賴長)可嫁彼長女之訪也、　廿八日辛亥、今日中納言中將執聟後始出行、辰時右金吾、調車二兩立車宿、一檳榔毛、一網代、各裝束、次馬二疋置移、一疋院鹿毛、右衛門尉光房、兵衛尉行方引之、一疋駿、右衛門尉行則引之、牛一頭、馬允時雅引之、自西渡東乃出給、乘檳榔毛車、前駈六人、家時、顯憲、爲信、高基、六位二人、憲行、仲行、雜色十人給當色、長二人同給之、敎利二藍、武正萌木、扈從殿上人季成、公隆、公能、雅國云々、先參東三條、(○賴長父忠實)次參關白殿、(○賴長兄忠通)次參院、(○鳥羽)次參女院退出、

〔兵範記〕保元三年二月九日庚子、今夜執聟事、密々營之、藏人大夫被來居也、　十六日丁未、大夫初出行、調渡新車牛等了、小舍人童牛飼等給裝束了、(車蘇芳二藍、形木等、)

〔玉海〕嘉應三年八月十日壬子、今日攝政(○藤原基房)娶前大相國(○藤原忠雅)嫡女云々、　廿二日甲子、此日攝政室家、嫁娶之後初被行、(被向花山院云々)攝政廟御車、前駈廿人、(不論君達諸大夫殿上人等也)四位四人、無六位、權右中辨重方朝臣在御車後、刻限亥時云々、先是被始政所、家司五人云々、

〔山槐記〕承安五年(○安元元年)八月十日戊午、中宮權大夫、(時忠)今夜始被渡、(去二月三日女房(藤原忠親女時忠妾)被渡此亭、三月廿八日女房幷予、(忠親)始向彼亭、四月十日權大夫、可被渡此亭、而厭比重備及今日、但不例之後、未被出仕、來十六日可被出仕云々、)前駈二人、(布衣)車副一人、遣車左少將時實(束帶)宅、共被入門、前越中守行雅、侍從兼季、散位親家、下立中門廊外庭、予(布衣平禮)向客亭簀子、相共著座、面謁之後被入簾中、侍從褰御簾、數刻對面、出二棟廊東面、(此所飛泉)構著饌、(上達部前四本、飯比日實例、飯也、汁瓜等也、殿上人前三)

(本、但物員同上、達部、廿居折數也、)兼居之、陪膳親家、役供諸大夫等、一獻二獻三獻、(每度權大夫被取盃、頻固辭、然而予不許之、予向彼亭之時、如此、予每度取之、)次奉劍、(紫檀地螺鈿細劍、紫革裝束、赤地錦袋、押以細劍爲贈物之時、付平緖也、然而是爲密儀、又三位中將是基元服之時、右府爲加冠、不付平緖也、)者兼季取之、置大夫前、又引馬、(葦毛、自閑白殿給之、自奧方可引出也、然而隨便只自中門引入也、)左馬允家孝取松明前行、今一人不參、右兵衞尉久良、右馬允高清引之、一廻之後、中門前駈請取之、時實朝臣取劍前駈、此後被歸了、于時過半漏云々、

抑劍此亭設長櫃令入之、令持仕丁、相副出納送彼亭、

〔玉海〕治承四年七月四日甲寅、此日左大將(○藤原良通)嫁娶之後始出行、申刻來余(○良通父兼實)第、其儀著冠直衣、(不帶劍、不取笏、)乘半蔀車、(懸下簾、車副二人如例、)隨身上臈布衣冠、(女郎花上下、引倍支、)下臈五人布衣、(其色思々、)帶劍前駈六人、(五位四人、六位二人、)右兵衞佐盛定(殿上人)爲扈從、呼大將於前、羞膳、(女房陪膳、)少將歸了、余行始之時毛車、隨身褐衣、又參院內、今度每事用略儀之上、無參公所、只自彼第來此宅、其程不遠、其儀可略、依爲初度、引移馬許也、　八日戊午、此日大將室始出行、戌刻來余第、其儀半蔀車、(車副二人、簾懸如例、)大將番長兼重、著布衣在車後、雜色十餘人、出車二兩、(右馬權頭定雅、右兵衞權佐盛定等、也、共殿上人也、各衞府二人副之、)左少將兼宗朝臣(忠親息)連車扈從、前駈五位八人、(著)車於寢殿南面、大將著布衣、自中門來會寄之、頃之歸了、(銀鶴入蒔物、爲引出物、女房取之入車中也、)今夜大將女房渡東面也、

〔玉海〕建久二年七月八日甲寅、此日左大將(○藤原良經)渡新所之後行始也、檳榔毛車、(本所新調、)牛、(安女斑、院御牛云々、)直衣薄色、浮文織物指貫、(文菱、)唐白生單衣、松重織物三重表著、(縫重ヌリ中陪、裏薄物也、)白下袴等也、前駈八人、(五位六人、六位二人、)隨身上臈冠、(二藍上下、白帷、不著引陪支、依新制也、)下臈五人、(萠木一色也、已上上臈下臈皆給當色、本所給之、)共殿上人、左少將保家一人、(束帶、)衞府長秦兼次、(布衣虫襖上下、不著引陪支、)雜色十人許也、移馬舍人、(蘇芳眞、形木文龜甲、)居飼仕丁牛飼(黃香上下)等皆給當色、申刻先來此亭、(○良經父兼實、)羞酒饌、(女房陪膳、)其後參內、及晚退出云々、院依御今熊野不參云々、大理今日隨身給馬云々、　廿五日辛未、大將女房行始、來此亭、半蔀車、前駈十人、(四位二人、五位七人、六位一人、)雜色兼長次在共、大理并保家朝臣等連車云々、大將懇網代車、兼以來、少時女房歸、余與贈物、手本付銀枝、宗國朝臣取之、保

聟入

家受取之、

〔吾妻鏡四十九〕正元二年〇文應元年四月一日戊戌、將軍家〇宗尊親王御吉事已後、依可有入御于入道陸奧守〇北條重時亭、供奉人事有其沙汰、如例召總人數記、被下御點云云、二日己亥、御出事明日也、而式部太郎左衞門尉外舅、於若狹國他界事、達期之後達遠聞之間、勘日數、禁忌之殘日不幾之處、有此御出事、仍始者雖被仰可有憚之間、今日有沙汰、被問鶴岡別當、申不可憚由之間、可被召具者、次以鎌田三郎左衞門尉可爲光政替之由雖被仰、本人出仕之上不及子細云云、三日庚子、入御于入道陸奧守亭、御息所〇藤原親經女、北條時賴猶子、御同車、供奉布衣〇中略、相模太郎殿、同四郎等、豫被參候御所、兼被置御衣櫃等於出居、輕御衣一具、御衣、指貫、小袖十具、七ッ御衣一具生御單、御小掛、紅御袴、御小袖十具、懸之、御盃酒之後、奉御引出物、御劍尾張前司時章、砂金越後守實時、南庭秋田城介泰盛、

一御馬　新相模三郎時村　式部太郎左衞門尉

二御馬　武藏五郎時忠　淺羽左衞門次郎

三御馬　相模太郎殿　波多野出雲次郎左衞門尉

御息所御方進風流、遣蓬萊、女房中絹百疋、公卿劍、殿上人馬、五位六位沓行騰也、

〔江家次第二十〕執聟事近代例

聟公父取吉日渡、有餘親昵人公卿等以下來會、遣曳出物馬二匹幷送物、

〔冠婚抄〕聟部屋入式

蓬萊山、床前ニ飾りあり引渡熨斗、各へ居ゑる、

ひれ吸物　媒人

上座　三方かちぐり こんぶ かずのこ　蝶花形加へ銚子 長柄銚子　女房

三組盃　娶

舅より娶戴きて下へ組、姑より中の盃、娶戴きて下へ組、媒婦より上の盃、娶戴きて直ニ媒婦に結ぶ、これにて相濟也、

〔婚禮推陳記〕舅入の事、聟の父子江大刀馬小袖樽肴姑江も小袖卷物酒肴、子舅江茂小袖卷物結綿、男女により持參有べし、其外聟の召遣の男女江茂それ〳〵に土產有べし、祝の次第、手掛熨斗を出し、雜煮三獻にて、舅と聟と夫婦にて、三々九度の盃事同前、扨表振廻の上に、舅馳走に島臺押への物出る、舅より挨拶によりて、盃を聟より初て、舅江指、初獻被請、加の前に舅江進物有べし、其後聟より肴を參らする也、扨盃事雙方廻りて、聟の納に成也、其後舅の供したる家老を呼出し、聟の盃給、引出物有べし、

〔中右記〕天仁元年四月八日戊子、今夜四位少將、〇藤原宗忠子宗能爲樓右中辨因緣、

裏書曰、八日夜四位少將、遣權辨許、

十四日甲午、依吉日、早旦文書劒帶等、初送四位少將許了、未時許行向少將亭、七條依吉日也、頭爲房、紀伊守有佐、家主權辨爲陸會合、聊有盃酌事、晚頭歸、

〔玉葉〕嘉禎三年正月十四日、此日左府、〇藤原兼經被迎第二娘、〇藤原道家二女十七日、來廿七日、前關白〇兼經父家實可向左府亭云々、其間事以有長朝臣爲使、進左府女房、可有贈物哉否事也、十九日、有長朝臣、申一昨日左府返事、女房可有贈物、左府可有引出物之由被存云々、廿六日、明日前關白始可被來、女房方、左府引出物、贈物劒、女房贈物琵琶、予沙汰遣之、是左府用意無念之由被稱云々、馬二疋、黑駮、黑葦毛以顯朝爲使、厩司也野劒、入錦袋琵琶、同以有長朝臣爲使遣之、長悅之由有返報、廿七日、此日前博陸、始被向左府亭、後朗烏帽子直衣、八葉車、長物見、牛童遣之、前駈二人、布衣殿上人、資俊伊成等朝臣在共、衞府長隨身一人候云々、於門外被下車、室町面北門左府、權大納言、二條中納言、藤宰相、下居地上、先入坐南面簾中、女房褰簾督典侍參會謁之、北面中障子開之、女房立几帳出袖、女房等列居御前、殿兩三度有祝言詞、此間

女房自東面妻戶出贈物、(筥)右衞門督公雅卿、(予猶子也、依誠仰參候、)取之參、西面簾前、稱物名、歸出給、其殿上人、次前殿出居西面妻戶、左府候南面、(備中守時高參上卷簾、)二位中納言取野劍、參御前、歸出給、其殿上人、次引出物馬二匹、(昨日予所進之馬也、)諸大夫各二人引之、(各布衣著半靴、)兩三廻之後、前殿前駈受取之、左府共諸大夫二人(衣冠)衞府長武茂、初候云々、次前殿被向左府出居方、左府以下在共、須臾歸出於門外、乘車被歸、猪熊了云々、

二月十七日己亥、此日參內之次、向左府亭、(近衞)女房相親緣始所向也、必雖不可然以事次所向始也、未刻行向、網代車、車副四人、隨身不論上下、卽皆布衣在車後、前駈五人(衣冠)殿上人能忠朝臣、資季朝臣、雅繼朝臣在共、於近衞西面北門外下車、此間、左府、權大納言、二位中納言、降立庭上、予入門過作列前、向左府相揖、左府强敬折、予到沓脫下、一兩度相讓、左府辭之、仍脫沓於地昇沓脫、經西簀子入南面西第二間(女房褰簾)坐奧疊、左府同昇同所端簀子、入自東面、經大盤所、被來坐東間端疊、予暫對面言談、次入北面謁女房、此間被出贈物、(箏入錦袋、左右端引合テ裹之、其上以組三所結之、是正說也、)權大納言取之、經西南簀子、於東方給共殿上人、(資季朝臣)次向出居西面二門、(敷唐錦茵)左府坐南間、時高參上卷簾、次二位中納言取野劍、(入袋)自北方來跪予座、卽向南方給雅淸朝臣、(是左相賜物也)次引出物馬二匹、(諸大夫各二人引之)三匝之後、盛長兩度受取之、引出門外了、次時高參上垂次向南簾中、可謁前關白云々、卽被來、烏帽子直衣、女房褰簾、坐東間奧疊、謁談及往事、小時予起座歸出、左府降立、予於地著沓、於門外乘車、參內於常御所入見參、少時退出、今日儀、希代之勝事也、絕常篇了、

〔寒川入道筆記〕甲斐國武田信虎の御女を菊亭殿へ御祝言の御約束あり、いまだ往來もこれなき以前に、先聟殿見にとて、案內なしに菊亭殿へ信虎御出の沙汰ありければ、一首かくばかり、

　聟入もまだせぬさきの舅入きくていよりもたけたふるまひ

〔淺井三代記十三〕信長卿江州佐和山に來長政と初て對面の事

天正十一年七月二十八日に、信長卿より淺井備前守(長政)〇方へ、使節を以申させ給ふは貴殿數年

我等と對面の儀を被申越けれども、路次のたよりもいかゞと思ひ、堅く留置候、相談を遂べき儀候條、來る八日に、犬上郡佐和山の城にして對面可申候間、内々左樣に心得給へと被仰越ければ、備前守は、佐和山の城主磯野丹波守が方へ被申越けるは、信長はじめて當地へ被越事なれば、隨分掃除等とりつくろふべしと、ありければ、丹波守、畏候とて、其催をぞ致たりける、備前守は一門家老召連、佐和山へ罷越、相圖の日限には、すり針峠まで迎に罷出て待たまふ、かくて信長卿は、小性馬廻雜人二百四五十騎にて出させ給ふ、備前守御迎に是迄被出る事不淺とて、御感悅不斜、先へ被參候へと被仰けるに付、長政は佐和山へ、信長卿もそれより佐和山へ御著座あり、備前守には、一文字宗吉の御大刀、幷に鑓百本、ちゞら百端、具足一領、御馬一疋を引給ふ、父久政には、黃金五十枚、御大刀一振を給はる、淺井が家老一門不殘御禮申上ければ、それ〳〵に引出物を賜はる、中にも磯野丹波守には、銀子三十枚、祐光の大刀一振、御馬を給はる、三田村、大野木、淺井玄蕃三人には、御大刀馬代をひかれける、かくて備前守不斜に悅び、善をつくし美をつくし御馳走申ばかりはなかりけり、御酒宴數獻めぐり、幾千歲と舞うたふ、翌日小谷の御前〇信長妹長政妻にも、久く對面不被成候故、御逢被成度と被仰、則小谷より迎よせ、信長も奥へ御入なされ、むつまじく語らせ給ふ、

〇按ズルニ、是ヨリ先キ永祿十一年ニ、淺井長政、織田信長ノ妹ヲ娶ル、長政屢、壻入ノ儀ヲ行ハント乞ヘドモ肯ゼズ、此ニ至リ信長壻入ニ先ダチテ舅入ノ儀ヲ行ヒシナリ、猶ホ壻入ノ條參看スベシ、

〔駿河土產　三〕其年〇慶長三年北條氏政氏直父子、領分の堺目爲見物國廻りの序に、三島へも可被相越旨風聞候ニ付、權現樣〇德川家康より氏政へ被仰遣候は、我等儀、多年御隣國に罷在、其上近年の儀は、御緣者〇家康女督子嫁氏直に罷成候へども、未だ御息氏直江も對面不致候處、幸今度三島迄御越之旨承り及候間、御父子へ御目に掛り候樣に仕度と有之旨被仰遣候處に、氏政返答被申候は、被仰越候

趣致承知候、兼而此方にも左樣に存寄り罷在候事に候間、今度三島迄罷出候節、木瀬川を隔て、可懸御目との返答被申候ニ付、木瀬川を隔て御對面申と有而ハ、悉く皆隣國會盟之作法の如くにて、御緣者に罷成たる詮も無之、世上への聞えも如何に被存候間、我等三島へ參り可懸御目ニ候、御旅館の儀と申、御心安き事にも候へば、御馳走ヶ間敷儀をば必御無用に候との儀を〇中略被仰遣候へば、氏政殊之外成喜悅に有之大道寺孫九郎、山田紀伊守兩人を以、御馳走奉行に被申付、御出之日限相極り候ニ付、前日ニ至り、沼津の城迄御越被遊、當日に成り三島へ御越被成候處に、終日終夜之御馳走有之候と也、

〔幕朝故事談〕公方家

文廟〇德川家宣の御臺樣の御鄕、近衞樣〇基熙御對顏被成度に付、御上洛の義、御勸め被成候得共、年寄も不承知に付、近衞樣江戶へ御下り、御用屋敷に御逗留にて、日々御登城、御廣敷にて御對顏なり、老中御玄關迄御迎に罷出候と云事は此時なり、近衞樣は圓滿院樣なり、

〔將軍德川家禮典附錄十二〕享保十六辛亥年十二月十五日大納言樣〇德川家重御婚禮之御次第

御婚禮相濟西丸江　公方樣〇家重父吉宗被為入候節

一於西丸大奧御祝之次第

公方樣大納言樣姬君樣御上段被遊御著座

御のし鮑〇姬宮樣被進物ニ有之候

御引渡

御雜煮

御吸物

右御銘々上之

奈良臺

御押

御酌

御加

公方様御一献被召上、大納言様御肴被進之、被遊御加、其御盃大納言様へ被進之、公方様御肴被進之、御加有而、其御盃公方様へ被進、大納言様御肴被進之、其御盃姫宮様へ被進之、公方様より御肴被進之、御加有而、其御盃公方様へ被進之、姫宮様より御肴被進之、御加有而、其御盃大納言様へ被進之、御肴被進之、御盃大納言様にて御納、

〔翹楚篇〕天明三年三月の事也、世子顯孝公の御室に松平土佐守豐雍の御娘采姫君を御縁約ありて、始て土州公御招請の時、表御座敷御祝の御饗應も既に闌に及たれば、追付御勝手御座處に移らせ給ふべし、御勝手御饗應の物數如何滯も無やと、御膳番の蓼沼友四郎、御膳番の番侍を呼て尋けるより、夫々御獻立に向て調べたれば、御勝手御座附の始に供し參らする御餅菓子御用意は落になりたり、御臺所役人の申出に、御獻立の表をもて、御菓子やへ可申付を、何としたる事にや、取まぎれて申付ざるゆゑ、御臺所の不調法に止ると云、御膳部の申出に、縦令御臺所の間違あればとて、御獻立の表は、全く御膳部の大事なれば、疾にも其品のしらべにも可及を、斯迄の間違に至らせしは、畢竟の處は御膳部の不調法に止ると云、此時友四郎差圖して、指懸り今と云今に至り、不調法の申出しは先々よすべし、早々多人數を出し、近町の菓子屋共へ觸渡し、餅菓子の品品取寄よ、其内を撰まば相應の品もあるべしと、爰に於て人數を出して呼しかば、各ありあふ餅菓子もて、數軒の菓子屋馳集る、然共御念に御念被入て、其品珍しき菓子組なれば（安永十年三月、御老中招請し給ひし時の菓子組をもて、御下知被成し菓子組也、）元來出來合の菓子に可有にもあらず、止事なくして彼と是とを取合

婿入

たれば、品こそ惡けれ、先は可也にも御間のかけぬ事にはなりぬ、か丶りしま丶に友四郞、卒と公〔○上杉治憲〕御呼立參らせ、云かく〳〵の間違あり、差懸り止事なければ、是々の品を組合てと言上せしに、其菓子組の書付をつくづく見給ひて、扨も〳〵其人共のする事は各別のもの也、前に差圖せし菓子組にくらべては、又雲泥懸隔に能なりと、ひたすらに譽給ひし程に、夫々ゟ不調法を詫たれ共、御叱にも及ばで濟し、

〔言成卿記〕天保十二年二月十五日、今酉刻、舍妹操内々阿野家へ入輿、廿一日、今日著諒闇〔○前年十一月光格先帝崩〕狩衣奴袴、行阿野家、以前肴一折爲土產贈遣了、家公〔言知〕雖被招引、此日御所勞以籠居之間、臨期御不參之由也、俗稱舅入、在饗應、爲諒闇中之間、萬事穩便之沙汰也、亥剋頃歸畢、

〔禮容筆粹五〕婚禮之次第

婿入之事

むかしは三ッ目の祝過て、婿、舅の方へ行し也、是も路次の遠近にしたがひ心得有、近代は婚姻より前に婿入をする事になりぬ、本法は三ッめの祝ひの手掛置鳥置鯉饗膳等の飾を長持に入、行器には餅五百八十入て遣すべし、行器はいくつにも入べし、樽肴三荷三種より、十荷十種までも分限にしたがふべし、扨婿の持參は、舅へ大刀折紙小袖、姑へ小袖、小舅へも夫々に祝儀あるべし、手掛を出し、次に引渡し出、三盃出て、舅三獻のみ婿にさす、むこいたゞきて三獻めをのむ時、引出物出べし、一獻加へて舅へさす、舅三獻のみて納る也、酌は各結ぶを用ゆべし、臺にて吸物出、盃も土器一ッを公卿にするゟ出し、子舅其外に盃事ありて、亂酒になり、其後引出物の事は心次第にて、又禮法の外也、

〔婚禮法式上〕婚迎之事

一聟入舅入は、幾日めと日數定め無之候、心次第たるべし、遠國よりのよめ入は、猶以延引たるべ

し、
一聟入の時、聟殿舅殿、たがひに引出物進せらるべし、刀計進上するに限たる事にてもなし、すべて刀を人の給りたる時は、さして禮を申事、いつも如此有べし、但刀とは長サ九寸計にて、はなし目貫つばもなき刀也、さや卷とも腰の物とも云物也、常に帶したる物なり、打刀を進上の事あらば、打刀は座敷にてさす物にあらず、人の給りたる時は、手計そへて、いたゞきて禮申べし、すべてきつとしたる時は、祝の次第七獻也、一獻々々に引出物とも云也、先一こんには馬、二こんには大刀、三こんには鎧又ははら卷、四こんには弓征矢、五こんには沓むかばき、六こんには刀、七こんには小袖也、是を則七こんの引出物とも、式の引出物とも云也、聟殿始て舅の方へ參られたる時も、舅殿はじめて聟の方へ參られたる時も、七こんの引出物有べき也、人の分限によりて、三獻又は五こんに略せらるゝ事もあるべし、一こんと云は、先何にても食物を出して、扨酒を參らせ、次に引出物進上する也、二こん以下同じ事也、むかばきは、秋二毛をば用ざる也、

〔婚禮推陳記〕聟入の事、舅江者大刀一腰、鞍置馬、小袖樽肴、姑江茂小袖又は卷物に樽肴、其外女房の兄弟姉妹隱居方江茂男女により小袖卷物結綿等持參有べし、多少は分限によるべし、舅江持參の大刀は、金物に舅の家紋を付、鞍皆具も紋付に新敷すべし、近代は木大刀に馬代を專用るなり、師傳に、近代取扱大刀は、俗呼て銀劍と云、銀馬代に添ゆゑ成べし、木大刀は天正以前より世に取扱物也、銀馬代も近き比より世に用ゆ、以前は鳥目三貫文を馬代とす、今舅江者黃金馬代、家督の子舅江茂黃金馬代、又は白銀五十兩卅兩、又は廿兩十兩も分限により用ゆ、目錄は結納の時のごとく認べし、其外舅の家老用人役人、姑附の家老局幷添總女中江茂、卷物上下綿金銀等給べし、○中略

聟表書院江著座の時、先手掛熨斗を出し、扨持參の大刀折紙小袖樽肴を披露すべし、舅江大刀目

鍛を直に參らする事も有、又舅の前に置、披露申事も有、舅一禮の時、聟御禮申さるゝなり、扨姑の方より聟の方江、局使にて奥江御通あれと申出さるべし、追付舅聟と媒を同道して奥江いらるる也、

祝儀の次第、一番に手懸熨斗出、次に姑江の進物を披露終、其後舅姑聟江引渡を据、捨土器銘々に引、酌盃を舅江持行時、三獻飲れ聟江指、加の所江舅より引出物出す也、此時は長敷老女持出參らする也、聟より禮終て三獻のみ、盃を舅江戻し、舅三獻飲納る也、酌盃を勝手へ持行、一の下に重るなり、酌加の結樣大結等同前也、次に内躬の膳を三人江据、酌盃を姑江持行時、三獻被飲聟江指、加の所江姑より引出物に、小袖卷物等廣蓋に積、聟の前へ持出披露すべし、聟よりの禮終て、加へて三獻のみ、姑へ盃を戻し、姑三獻のみ納る也、酌盃を勝手へ持行、又一の下に重る也、酌加の結樣大結同前なり、次に膓煎出る、此時は酌盃を聟の前へ持參する時、聟一獻のみ舅江指、三獻飲、聟へもどす、聟一獻呑、姑へ指、姑三獻のみ聟へもどす、聟一獻のみ盃納る也、これにて互に三々九度也、酌加の結樣大結同前也、○中略此後別の吸物出、隱居方子舅等の盃事有べし、

師傳に、聟入の時は、初獻の盃を舅初て聟江指也、嫁見參の時は姑より初獻の盃を初て嫁へ指法也、これ男女對面の禮節を分たり、又舅より聟江出す引出物、昔は奥にて局にもたせ出せり、近比は舅よりの引出物は、表振廻の上にて盃事の時、多は媒か、舅の一門衆の中被持出被渡也、聟腰物を請取、御禮終候へば、道具の折紙、又は札に捺の覺書を添、聟の家賴を座敷へ呼上、刀箱江入候て引渡す也、○中略

聟引出物出たる時に舅江向ひ禮節の事、腰の物を、媒の人か、一家の人被持出時、盃を下に置、兩手を突て挨拶を聞て、扨刀を請取、柄を左江成樣に取直し被持出人に向て輕く戴、扨跡江退、脇江向て刀を指候て又摺出、舅江向ひ一禮をなし、扨刀を拔置たるを、媒の人勝手へ被取也、脇差の時は、

差替一禮する也、刀脇差出たる時は、我が脇差を拔、給たる刀脇差を指て一禮する也、何にても指候て舅江禮する事異也、又媒の人より請取申時は、先其持出たる人に對し輕く戴、刀にても脇差にても右手に持、左手を摺出て舅江向ひ、兩手に持ながら深々と戴て跡江退、右脇に置て、三獻目を請飮事も有、これは草也、

刀脇差拵の事、三所物也、彫物何も祝儀の物を用ゆべし、柄糸鍵緒等の色は不定、紫下緒は、色さめるとて嫌也、

師傳に、刀の柄鮫、塗たるを被用方多し、これ古法の利方を用る成べし、脇差も大小出る時は、當日には、刀と合口の小脇差を引出物にして、聟入の後に膝直しとて、改て聟を振廻時、差料向の脇差を被出也、これ歴々の聟入の法也、無左も方は、常のごとく刀計、又は刀に差料向の脇差を被出也又刀の三所物は、目貫笄小柄也、脇差の三所物者、目貫小柄縁なり、古法は聟引出物に長刀を出したる例もあり、出し樣請取樣品有、

聟引出物に、馬を出す時は、酒の中に庭江牽建べし、乘方を牽人を上手と云て、一家の年寄など牽出る也、馬の左を牽人を下手と云、番頭など牽也、立髮の馬に鞍置を本とす、かり帽子の馬は略儀也、かり帽子とは髮をかりたる馬也、鞍も海有の鞍に三界大總かけ、熊の泥障也、聟公家の時は、虎の皮の鞍覆也、聟の前江馬を引立る時、聟庭江出る也、此時上手を牽たる人、手綱の曲をとり捧るを、聟曲をうけ取舅江向ひ戴也、是者舅を賞翫之たる禮也、聟の位により、庭江出て不戴時は、上手を牽たる人、馬の正面と乘方を聟江見せる時、聟一禮する也、馬は中門江牽出る時、聟の方にでも歴々請取也、裸馬にて出すは略儀也、鞍も海なし用ゆべからず、詞の響を嫌也、

〔中右記〕永久六年元永元年十月廿六日甲辰、今夜内大臣殿、藤原忠通始渡給民部卿姫君許、　十一月廿六日甲戌、今夜内大臣殿、初渡給民部卿高辻東洞院、檳榔毛車、與女房同車、冠御直衣、是爲可有方違

也、後々不ㇾ當吉日也、仍今日依吉日渡御始也、曉更還御云々、民部卿被ㇾ奉ㇾ牽出物馬一疋、〈諸大夫牽之也〉劒〈新宰相中將殿下〉

〔玉蘂〕嘉禎三年正月十四日、此日左府〈○藤原兼經〉被ㇾ迎第二娘、〈○藤原道家女〉廿六日、今日左府吉事之後、始出仕云々、先前博陸亭、〈猪熊堂等〉次被ㇾ來此亭、半蔀車、〈袖文々也、不ㇾ此家文、是法性寺殿御車一樣也〉車副四人、〈不ㇾ平禮著ㇾ下袴〉牛童持ㇾ榻、〈二藍上下〉衞府長左府生下毛野武茂、〈帶ㇾ劒〉前駈六人、〈五位〉右少將資俊朝臣、右少將伊成朝臣、侍從忠氏在ㇾ共、於ㇾ門外下ㇾ車、昇ㇾ中門廊坐ㇾ公卿座、〈客亭裝束不ㇾ舉、常居置ㇾ疊足硯等〉以ㇾ皇后宮權大夫、示ㇾ可ㇾ被ㇾ來此方ㇾ由、予坐ㇾ寢殿東庇簾中、〈件庇東西二行敷ㇾ高麗疊六枚、南東庇懸ㇾ御帳帷、但不ㇾ懸ㇾ東面妻戸、依ㇾ爲ㇾ出入路ㇾ也、是先例也〉左府入ㇾ東面妻戸、〈權大夫褰ㇾ簾〉坐ㇾ給疊、予對面暫言談、自ㇾ是可ㇾ被ㇾ參內ㇾ云々、〈○中略〉次自ㇾ東孫庇南面妻戸ㇾ出ㇾ野劒、〈入ㇾ錦袋〉右中將雅繼朝臣參進取ㇾ之、居ㇾ東面妻戸前ㇾ候ㇾ氣色、予仰ㇾ可ㇾ給ㇾ共人ㇾ之由、雅繼朝臣、取ㇾ劒歸出授ㇾ共殿上人、〈資俊朝臣〉次左府起座歸出、〈權大夫褰ㇾ簾如ㇾ初〉此間自ㇾ西方ㇾ引出物、〈左馬權頭盛長引ㇾ之〉一兩度引ㇾ廻之、此間左府坐ㇾ公卿座、馬引ㇾ出東中門、前駈爲永受取也、次左府出ㇾ中門廊戸ㇾ被ㇾ歸了、今日無ㇾ指先規、粗准ㇾ據元永例ㇾ所ㇾ計行ㇾ也、

〔太平記〈劒卷〉〕白河院、熊野御參詣ノ時、此山ニハ別當アリヤト御尋アリケルニ、未ダ候ハズト申ケレバ、爭カサル事有べキ、別當ノ機ヲ尋ラル、〈○中略〉境ヨリシモ權現ノ御前ニ、花備テ籠リタル山伏ヲ別當ニ成べキ由、スズキ計申ケレバ、我身其器量不ㇾ足トテ、敎眞別當ノ始ナリ、別當ハ重代スべキ者也、聖ニテ不ㇾ可ㇾ叶、妻ヲ合セヨトテ、誰カハ有べキト尋ヌルニ、爲義ガ娘、タツタバラノ女房、ヨカルべシトテ敎眞ニゾ合ケル、爲義傳聞テ云、爲義ガ聟ニハ、源平兩家ノ間ニ弓箭ニ携テ秀タラン者ヲコソト思ツルニ、諸寺諸山ノ別當執行ト云事ハ、好モアリ惡モアリ、行德群ニ拔ケヌレバ、左樣ノ官ニモ、職ニモ成トコソ聞ケ、行末モシラヌ者ニ、押テ合スランコソ不思議ナレトテ、音信不通シ、不孝ノ娘ニテゾ在ケル、〈○中略〉カヽル處ニ源平タテ分テ、合戰アルべキ由聞エケリ、〈○中略〉敎眞別當、是ヲ聞テ、我身ハ不孝ノ者ナレ共、カヽラン時、力ヲモ合テコソ不孝モ許サルべケレトテ、常住

ノ客僧、山內ノ惡黨等、上下ヲ不嫌催シ立テ、一萬餘騎ノ勢ニテ都ニ上リケリ、人々是ヲ見テ、是ハ何ナル人ヤラン、和泉紀伊國ノ間ニハ、加樣ノ大名アルベシ共不覺トテ、委ク是ヲタヅヌレバ、爲義ノ聟、熊野別當敎眞也、聟ノ方人ノ爲ニトテ上タル由云ケレバ、爲義モ是ヲ聞テ、氏種姓ハ知ラヌ共、甲斐々々敷者也ケリ、何ナル人ノ一門ゾト尋ヌレバ、實方中將ノ末孫也ト申ケレバ、サテハ爲義ガ下スベキ人ニハ非ザリケリ、今マデ對面セザリケルコソ悠ナレトテ、請ジ寄セ始テ對面ス、志ノ餘リニヤ、重代ノ一具ノ劒ヲ取分テ、吼丸ヲ聟引出物ニゾシタリケル、

〔宗長息女婚禮記錄〕甲斐守殿〇小笠原宗長聟武田晴信參入之節御引出物

從宗長、

初獻　御馬　　二獻　御大刀　　三獻　御鎧

四獻　御弓矢　　五獻　御沓行縢　　六獻　御刀

七獻　御小袖

從御局方、

古筆手鑑　一箱　　唐繪卷物　一箱　　御小袖　二重

以上

〔水谷蟠龍記〕常陸國久下田ノ城主水谷蟠龍ハ〇中略廿二ノ年、天文十三年正月元日ニ、政勝仰ケルハ、水谷ハ當年ヨリ某聟ニ望ムト仰、頓テ其月ノ廿八日ニ御輿入給フ、中々聞ケ敷事也、〇中略聟入ノ祝儀トシテ、御所領五ケ村ヲ拜領ス、

〔總見記一〕齋藤山城守於富田對面事

同年〇天文十八年ノ四月下旬、齋藤山城入道ヨリ、使者ヲ以テ申サルヽハ、聟舅トナリタレドモ、一度モ對面不申事、誠ニ本意ナキ次第也、某近日富田ノ庄、正德寺ノ院內マデ可參候、信長モ彼寺マデ參

向有テ對面アラバ、甚ダ可レ爲二祝著一也ト被レ申越一ケル、（中略）道三ハ先立テ富田ニ至リ、相待給フガ、道三ノ思按ニハ、信長ハ實目ナキ無造作人ト聞カラニ、古風ヲ構ヘテ仰天サセ、其體ヲ見ント巧マレケル間、古老ノ者共七百餘人、折目高ナル衿肩衣ヲ著用サセ、慇懃古風ナル裝束ニテ、正德寺ノ御堂ノ緣ニ行列ヲ正シテ並居サセ、信長ハ其前ヲ御通リ有ル樣ニ座敷ヲ構ヘテ相待タリ、扨道三ハヒソカニ富田ノ町末ニ小家ヲ借リ隱レ居テ、信長ノ御出ノ樣子ヲ伺ヒ見ラレケリ、信長其日ノ御出立、イツモニ增リテ異風ナリ、先ヅ御髮ハ萌黃ノ平打ノ糸ヲ以テ、卷立々々茶筌ツブリニ結セラル、湯カタ染ノ明衣ノ袖ヲ、ホソメ打著給フ、熨斗付ノ刀脇指大小共ニ長柄ニテ、ワラ繩ニテ卷セラレ、太キ苧繩ノ腕拔ヲ付給フ、腰ノ廻リニハ、猿引ノ腰ヲ見ル如ク、燧袋瓢簞以下、七ツ八ツ著サセラル、虎ノ皮豹ノ皮ニテ、四ツ替リテ縫タル半袴ヲ著シ給ヒ、太ク逞シキ馬ニ乘テアユマセラル、御先ヘ弓鐵炮ノ者五百挺、三間柄ノ朱鑓五百本ヲ押立、健ナル步走ノ若黨百人餘リヲ先ニ步マセ、後ノ御供都合七百餘人ナリ、路次中ノ見物ノ者、耳目ヲ驚ス、御寄宿ノ寺ヘ著セ給ヒテ、屛風ノ內ヘ入給ヒ、俄ニ引替、一生ノ始メニ御髮オリワケニ結セラル、扨イツ用意シ給ヒケン、カチンノ長袴ヲメサレ、人ニ知ラセズ拵ヘ置レシ、チヒサ刀ノ公道ナルヲ、成程キヤシヤニ指給ヒテ、專ラ古風貞異ナル御出立也、御家人等皆是ヲ見テ、扨ハ日比ノ風俗ハ、態トタワケテ御作リ候ヒケルヨ、心ノシレヌ大將哉ト、皆々舌ヲ振ヒケル、扨御堂ヘ御通リアリ、緣ヲスル〳〵ト御上リアル時、齋藤ノ家老、堀田道空、春日丹後、差向ヒ早ク御出候ヨト會釋申シタリケレドモ、シラヌ體ニモテナシ給ヒ、オメズ臆セズ、諸侍ノ居ナガレタル緣ノ前ヲ、スルリ〳〵ト御通リアリ、緣ノ柱ニモタレ懸テ坐シ給フ、扨道三ハ、町末ヨリ早ク歸リケルト見エテ、屛風ノ陰ニ居給ヒケルガ、屛風ヲ押ノケテ、道三進ミ出給フ、信長公ソレニモ不レ構シテ、シラヌ顏ニテ事漉ク坐シ給フガ、堀田道空指寄テ、是コソ山城守殿ニテ御座候ト申上ル、ソコニテ信長公、左樣ニテアルカト仰セ

ラレ、敷居ヨリ内ヘ御入有テ、道三ヘ御禮アリ、其マヽ座敷ニ直リ給フ、其フルマイ言語道斷ノヲトナシキ様子也、扨道空、湯漬食ヲ奉ラル、道三諸共ニ互ニ御盃事アリ、首尾無殘所御仕廻有テ、一禮畢テ御退出ナリ、

〔總見記六〕淺井備前守長政爲御緣者事

扨モ信長公ハ、御妹子數多有ケルニ、御市ノ御方ト申ケルヲ、今年永祿十一年四月下旬ニ、淺井方ヘ御輿入有テ、婚禮ノ儀式ヲ調ラレケリ、○中略扨長政モ聟入ノ爲、不日ニ岐阜ヘ參上申テ、御禮可申上ト、再三被申越ケルガ、信長公御返答ニ、我等方ヨリ望テ御緣者ニ罷成候上ハ、先々我等方ヨリ小谷ヘ參リ、御目ニ懸リ申ベク候、其後ニ當國ヘモ御出ナサレ候ヘ、必々我等不參候前ニ、此方ヘ御出有マジク候、○中略只能々分國ノ御仕置肝要ニナサレ候ヘトテ、聟入延引セラレケレバ、イマダ長政ニ御對面ノ儀ハナカリケリ、

〔淺井三代記十三〕信長卿江州佐和山に來長政と初て對面の事

信長卿もそれより佐和山へ御著座あり、○中略其の夜信長卿仰けるは、備前守長政は、義深き仁にて候へば某が方へも可參などとおもはるべし、只今天下の御大事をかゝへて置ながら、あなたこなたと日をついやすもいかゞなり、明朝は當城をかり、爰にて禮をうくべきと被仰ければ、長政辭退す、信長達て被仰に付、其御請を申ける、扨其夜は信長長政兩人、奧へ御入被成、夜中密談し、給ふ、後に承るに、箕作攻の事、三好退治の御談合、諸事義昭公○足利の御上洛の御相談とぞ聞えける、翌朝は長政父子を信長卿佐和山の城にて御振舞なり、其時長政は家重代の備前兼光の大刀、名を石わりといふ一腰、近江綿二百把、同じく國の名物布百疋、月毛の馬一匹、定家卿の藤川にて被遊し、近江名所づくしの歌書二冊進上して御禮申上る、父下野守久政は大刀折紙にて、常ある通のさゝげ物、一門家老それ〳〵のさゝげ物にて御禮す、長政よりは、今度信長卿供の者共に、不

饗あらみの大刀脇指をひかれける、今度信長卿へ進上せらる、備前の兼光の大刀は、亮政秘藏せし打物なり、備前守より備前兼光を信長へ送られしは、備前守長政、信長の爲に滅亡せられし前表なりとは、後にぞ思ひ去られたる

○按ズルニ、信長ハ、長政ノ婿入ニ先ダチテ舅入ノ儀ヲ行ヒ、同時ニ婿入ノ禮ヲモ受ケシナリ、

〔大江俊矩記〕享和二年二月三日、おまつ事おあや、今夕良辰ニ付、河原町北小路美濃守俊任朝臣息、同山城權守俊廣妻ニ入輿、　八日、山城權介婿入、おあや里開也、皆此方へ入來也、

〔大江俊矩記〕文化五年六月廿七日、おこう事、今夕松室山城へ婚禮ニ付、乘燭頃より、敬子同道にて下立賣へ行、　八月三日、お恒(おこう改名)里開、心形付後初入來、お照同道、さの、むめ、下部等、付添來也、土產杉原二帖、後刻越中公、山城、聟入心ニ可有入來筈故、其土產三本入扇箱一、大內烟草入二ツ等、一緒ニ贈來也、さの以下三人へ吸物、祝酒(硯蓋肴一、鉢肴二ツ、)一組、祝儀等出之、さのへ銀三匁、むめと下部へ二折百文づゝ遣、皆々送り込歸也、支度者不出、お恒は一兩日逗留、お照は晩刻迄殘り居也、未刻前、越中公、山城、同道入來、(供下部一人、今朝之同人故、別ニ不遣祝儀也、越中公讓上下、山城者麻上下也、)祝酒一獻進上申、申半剋過、おてる同道にて御歸也、

〔言成卿記〕天保十二年二月十五日、今酉刻、舍妹(操)內々阿野家へ入輿、　廿日、今日內々聟朝臣老尼等入來、(老尼不染院也、)依諒闇(○前年十一月光格帝崩)儀、不被爲披露、以內々儀聟朝臣初入來、先老尼(不染院也、)入來、(土產肴一折、)家公(○言知)予等著狩衣(吉服)對謁了、未半刻頃、聟朝臣(公誠)入來、(諒闇狩衣)先之土產物先方雜掌持參、大夫入來之後披露云々、品々家公へ大刀一腰、馬一疋(代金五百疋)干鯛宮(副目六)予へ大刀一腰、馬一疋(代金三百疋)干鯛宮(副目六)眷屬(百疋宛)自餘各在贈物、可有家司一件帳、聟朝臣入來、直於八帖間、家公御對謁、新婦(舍妹)著、聟朝臣次座、在威儀之御獻酬、(前物昆布、鮑、搗栗、五菓居小折敷、)三方、(三々九度之盃也、)銚子提、(加在)老女陪膳、了御對語、予時予出頭申祝詞、尚幾久萬事可有敎示、宜賴申入了、互ニ挨拶了雜談、頃之進爛酒、老尼同席、家公予等相伴、互ニ

獻酬、晡時撤酒具、進飯、同相伴了、後進祝酒、（召先方之家司、從家公賜御盃、）事了、戌刻頃、幾久目出度納盃了、夫婦尼公等、和睦被歸了、幾久珍重、

〔言成卿記〕弘化三年十二月十二日、妻婦豐姫里開、幷予始而日野家江行向之事、諒闇（○此年二月仁孝帝崩）中、且日野家雖重喪中、非無例歟、加之內々之義、年內中無異遂行度、以家僕、先方家僕江應對之處、當主權辨（○資宗）被聞屆、漸治定、日限兩三日間日被申越、明後十四日、彌可遂行約諾云々、十四日、今朝遣祝使於日野辨、今日內々予始渡彼亭、依之贈麁末之進物、品々如左、

干鯛壹箱　樽代（方金）三百疋

以上當主權辨（竪目六添之）

長綿（貳屯）壹臺　權辨之母公（秀玉院）

同　辨妻女（操姫方）

小文匣壹臺　辨女子

文匣之內（長綿壹屯）　故儀同（○資愛）母公梅林院

同斷　故儀同妾松壽院

各相贈之、（口演切紙副之）目出度受納云々、（○中略）未半刻比、予狩衣奴袴、（諒服）始渡于日野亭、先謁于辨、於表方被出昆布鮑、（長熨斗也）了、於內儀冷酒三獻了、燗酒互二獻酬了、祝飲了、（祝儀了、向于故儀同靈前燒香、心中祝著申了、元來此緣、件公薨前病中、被是及內約、爲件公養女、內々入輿、無程薨去、殘念之至、然而內々今日及初入、依之向于牌前謝禮了、）戌剋許開了、頃之豐姫開云々、雖內々初入、無異遂行、幾久珍重々々、猶々鴛鴦契可深者也、今日之儀、元來質素、加之諒闇、幷權辨重喪、旁如形已、（今日如形、引出物雖可有之所、存當時權辨重喪、服後可被贈、）

〔言成卿記〕弘化四年六月廿六日、家公被仰云、昨日日野家家來（辻丹下）來、昨冬於豐方里開予行向、其節引出物延引、乍麁末被贈、（其節被贈分云々）棒鞘大刀、入赤地錦袋、（以紫段平組爲上差、上下以赤組紐結之了、）目出度落手云々、

里歸

〔醒睡笑三〕鈍副子

わかき男の聟入するといふに、知音の者異見し、かまへて時宜をでかせ、心得たるよしにて行しが、一圖言のはなし、あまりほいなくおもひ、立ざまに手をきつとつき、此中柱はこなたので御座るか、ぞれからまゐりたるぞ、

〔近代世事談五〕里歸

婚姻の三日に至て、新婦父母の家に歸る、此禮唐にもあり、五雜狙に云、漢以來の禮は、二月に男女會し婚姻をさだめ、五月五日に親の家にかへりて父母に逢ふ、是を歸寧といふ、大明の禮は、三日の後、女壻同道にて父母の所へ行を回鸞と云、此禮を以、日本にもなす事ならん、いつの世にはじまるといふ事をしらず、

〔婚禮法式上〕婚迎之事

一御料人、里入の事、幾日めと定りたる事無之候、人々の心次第にて候、遠國よりの婚禮ならば、遠國へ里入は、猶以延引に及べし、定法はなき事也、

〔婚禮推陳記〕聟入の事

師傳に、略○中今時三ッ目か五ッ目に聟入の時、夫婦共に里江往事、俗呼て里歸と云、嫁よりも兩親江、小袖卷物樽肴、兄弟衆江も卷物樽肴を持參有べし、此外表奥の家老用人女中等へも、金銀等持參有べし、

〔女諸禮集〕五日歸りの事

婚禮の日より、第五日にあたる日、早朝より娶親里へ行く事なり、翌日聟の方の親類より、里へ人を遣し安否をとふなり、里見舞などいへり、

〔婚禮罌粟袋下〕三日目嫁里行也、幷に里より迎の女義可遣事、略○中嫁里行祝義土產物の事

強飯　行器に入、輕き器には入る、
樽肴（或は三種五種七種也、尤つり臺にのす、）
右嫁に先達、宰領人付送るべし、○中略　里方土産のこわいひ親類知音披露の事、嫁里にあるうち、聟方より見廻音物之事、嫁里より歸り候時、聟の方より男女むかひに遣す事、○中略　嫁里より歸り候節土産の事、
餠（行器に入）　樽肴
右先同事准んず、○中略
聟の方嫁の土產餠、親類中或者知音披露の事、

〔民事慣例類聚婚姻〕婚姻後三日目ニハ、三日戾リト稱シ、夫家ヨリ新婦ヲ連レ、家內舉テ舅家ニ行キ宴會ス、此時世乞持（ヨゴウモチ）ト唱ヘ、餠ヲ樽ニ添テ齎ス例ナリ、（壹岐國石田郡）

〔玉蘂〕嘉禎三年正月十四日、此日左府（○藤原兼經）被迎第二娘、（○藤原道家女）　二月一日癸未、今夜左府北方吉事之後行始也、可來此亭也、其間事一向左府之沙汰也、出車女房裝等、自是沙汰遣、亥剋許已寄出車畢之由告來、依爲咫尺遣見也、予密々於一條室町見物、大納言同車、隨身賴□有□少時渡給、

〔梵舜日記〕慶長十二年十一月廿六日乙卯、豐國社務萩原兼從、嫁娶政所姪女、　十五年正月五日、萩原殿同女房衆、政所樣ヘ里返之禮儀、二位殿御禮料金子一枚百貫、大坂ヨリ來、樽五荷五種肴悉被進了、

〔大江俊光記〕元祿八年六月二日、生島玄蕃頭娘、（おさみ十六）大膳亮了安子北小路大膳亮ヘ緣組相定、云入等參候由、　九年一月廿九日、生島玄蕃頭ヨリ使札、昨夜娘里歸に、聟も押懸參、首尾調申候、此強飯生鯛一、聟持參候裳分（スソワケ）ニ而候間、進候と申來、

〔大江俊光記〕元祿十三年六月十八日、今日能登婚禮、　廿日、おちよ三日目里歸祝義ニ、此方ヘも強

飯來、白黒豆ふや町中知音中へもくばり候由、

〔大江俊光記〕元祿十四年四月廿三日、申半刻計、お照、上御靈へ遣、七月五日、おてり祝言後、初而里歸、○中略爲土產荷桶ニ白コハ飯一桶、三升入とびうお十持來、神々へ進、家內上下祝、

〔天明集成絲綸錄十七〕天明七未年十一月

來ル廿七日、種姬君樣御入輿ニ付而、○德川家治女、嫁紀伊德川治寶、明後廿五日服紗小袖麻上下著用、四時可爲總出仕候、○下略

右之趣可被相觸候

十一月廿三日

來月朔日、種姬君樣、初而大奥江被爲入、幷紀伊殿御父子、登城御禮有之候ニ付、殿中詰合之面々、無地熨斗目半袴可有著用候、

右之通向々江可被達候

十一月

〔大江俊矩記〕寬政四年六月廿六日、嫁御律入輿、廿八日乙未、律里開、午後宮內殿へ行、輿者三人、靑侍一人、女一人、下部一人、釣臺兩人、土產物するめ大一連一折、蒸物四重一組、子供衆へ手土產、饅頭小文匣ニ入贈之、

〔大江俊矩記〕寬政十一年四月六日、大賀肥後、內室お町同道、初て被行小野、勸修寺へも被立寄筈也、お町去冬引越後、今日初て也、里開也、十日頃迄滯留之由、肥後は今夜被歸也、

〔天保集成絲綸錄十〕寬政十一未年十一月

大目付江

來ル十五日、淑姬君樣御入輿付而、○德川家齊女、嫁尾張德川齊朝、明後十三日、○中略可爲總出仕候、○中略

右之趣可被相觸候

十一月十ム日

大目付江

來ル十九日、淑姬君樣、初而大奥江被爲入、幷尾張殿登城御禮有之候ニ付、殿中詰合之面々、無地熨斗目半袴可有着用候、

但中將殿ニ者、大奥江被罷出候、

右之通向々江可被達候

十一月

〔大江俊矩記〕文化元年十月一日丙辰、今宵同姓木工助俊常婚姻也、 三日戊午、お道里開也、午剋頃乘輿に而被參、輿者四人、侍二人、下部壹人等、供廻り也、女は里方之附女計、是は一足先へ遣す、尤下部壹人付添、土產には肴一折、且又晩刻也、贈物目錄幷錫一折等預置歸、侍壹人は左門遣ス、祝酒祝儀等出由、

〔天保集成絲綸錄十四〕文政九戌年四月

大目付江

文姬君樣〇德川家齊女當十一月中、松平讚岐守〇賴胤方江、御引移可被爲在旨被仰出候、此段向々江可被達候、

文政九戌年十一月

十二月六日、文姬君樣御本丸江被爲入候節、爲御先拂、御徒一組差出候樣可被致候、諸事盛姬君樣、〇家齊女、松平齊正妻、御本丸江御入之節之通可被心得候、尤向後御本丸江被爲入候節、御徒一組充差出候樣御徒頭江可被達置候、日限之儀者其節々可相達候、

大目付江

來月六日、文姫樣、初而大奥江被ㇾ爲ㇾ入、幷松平讃岐守、松平宮內大輔、登城御禮有ㇾ之ニ付、殿中詰合之面々、熨斗目半袴可ㇾ有ㇾ著用ㇾ候、

右之通向々江可ㇾ被ㇾ達候

十一月

〔言成卿記〕天保十二年二月十五日、今酉刻舍妹操內々阿野家へ入輿、十九日、舍妹操殿入來、土產饅頭百、鰻二達、

〔言成卿記〕弘化三年十二月十二日、妻婦豐姫里開、幷予始而日野家江行向之事、○中略明後十四日彌可ㇾ遂ㇾ行約諾云々、十四日、巳刻比、豐姫行ㇾ向于里亭日野家云々、家來供之人々直開、晡時迎云々、

地黑ノカイドリ、髮サゲル云々、

戌刻許開了、頃之豐姫開云々、雖ㇾ內々初入ㇾ無異遂行、幾久珍重々々、

古事類苑

禮式部十四

婚嫁三

古事類苑

禮式部十四

婚嫁三

室內裝飾及調度

〔正佐禮〕執聟

早旦家司奉仕裝束、其儀正寢南面母屋庇三箇間懸簾、(上母屋垂簾)母屋中央間垂障子帳、其內南北妻敷繧繝端疊三枚、其上敷錦緣褥、其上置沈香枕二、庇中間東西行敷同疊二枚、其上敷龍鬢、又其上加唐錦茵、同間西頭南北行(寄北樣)立泥繪屛風、居其中、(東也)二階一脚、(上層北置火、南置泔器、在層北置打亂筥、南置唾壺、下)二階南置唐匣筥、(在盤)其南置鏡筥、(在盤)其南立鏡臺、茵前頭東置脇息、其西置硯筥、母屋西第一間母屋際立几帳一基、其內南北行敷高麗疊一枚、其上加東京錦茵、南庇東西間副奧端二行敷高麗疊各二枚、同庇三箇間副庇簾立几帳各一基、(下格子也)東間東障子立燈臺、(在打敷)擧燭、西庇三箇間卷簾爲出居、南第一間副奧障子敷高麗端一枚(南北行)爲主人座、同第二三間副東障子立厨子一雙、同間副長押南北行敷高麗疊二枚、南第一間南邊擧燈、中門廊敷紫端疊一枚爲諸大夫座、侍障子上等如例、此外所々敷弘筵、

〔幸充日次記〕寬延三年四月十五日丁亥、充賢入來、婚禮之次第幷覺書、又疊紙色目等、幷供隨身記左、

○中略

(奉書橫)元祿十六年十二月十一日、(嫁娶)車寄(北面)東西南北懸簾、(但東方垂之)寢殿母屋東面第一二、三間垂簾、第一間南方垂簾、西方卷之爲聟司路、第二間北方寄東垂簾、寄西卷之、(引婿入路也)第三間西方卷簾、(爲陪膳路)北方寄西方垂簾、寄東方卷之、(引婿入路也)聟司南北西(但西方者、寄北垂之、)卷簾、母屋第一間東南方寄簾立廻六尺屛風、

寄屏風方艮坤行立三尺几帳、是婦座也、第二間東北方寄簾立廻六尺屏風、是聟座也、同西方寄南方置二階棚、(黑塗海部蒔繪、裏以和錦張之、)上置泔坏、(有盤子、臺等、)下左方置唐匣、(梨地獅子牡丹蒔繪、裏以和錦張之、)入雜具、(上納櫛二枚、平カウカイ一本、細カウカイ、一本、爽一、耳カキ一、毛拔一、櫛拂等、下納丸鏡一面、入筥、)右方置打亂筥、(黑塗海部蒔繪、裏梨地、納手巾、表朽葉、紋橫菱、裏黑、紋遠菱、兩面也、)其下置料紙筥、(同唐匣蒔繪、納同蒔繪硯筥、五色料紙等、)寄北方立八花形鏡、(有臺、付鏡枕、地赤、鏡臺木蒔地繪、織帷生白、)中央置鏡筥、(有臺、各兩面梨地、)各置東面、曹司東方懸釣竿、(黑塗、有黃金物、)上掛脫簀、(黑塗、以赤糸連之、)下掛打敷、(白綾、兩面、)其前置楾盥盤、(各沃懸地、紋獅子牡丹、有黃金物、)右方置手巾、(納柳筥、)西方置二階廚子、(黑塗海部蒔繪、裏以和錦張之、)上左方置草子、(三代集、表紙象眼、外題前源大納言筆、有覆、)筥、(沃懸地獅子牡丹蒔繪、裏以和錦張之、)右方置柳筥、(沃懸地獅子牡丹蒔繪、裏以和錦張之、)納雜具、(上納丸鏡一面、入筥、櫛九枚、差櫛一枚、平櫛十二枝、一本、纓枝一本、夾一丁、毛拔一丁、笄二本、櫛拂等、下納小櫛筥一合、其內銀龜一雙、銀鴛鴦一雙、銀鶴一雙、銀熊一雙、差櫛一枚、紫小本結二筋、火取玉、一玉、一袋入、銀錢二十、瑠璃玉、十二袋入、琥珀、一袋入、水精玉、一袋入、)下左方置藥臺、(四種入銀臺、有覆、)筥、(同蒔繪、裏以和錦張之、)右方置香具筥、(同蒔繪、裏和錦張、薰物四種入銀壺、有覆、)其下廚子、(內左方納料紙五帖、紅薄樣三帖、色々、右方納中高檀紙五帖、中央納一雙、入袋、裏箸臺、硯石、有覆、〇中略)

奉行橫二枚　婚禮具式

來日下家司奉仕殿御裝束、(往古用寢殿、當時以婦殿爲寢殿代、)先母屋庇懸亘御簾、垂之、東方當中央一ケ間卷之、(爲階下之路、)巳副西御簾南第一間立廻御屏風、(二帖、)其內敷繧繝端御疊二帖、(加茵、)爲聟公御座、(東面、)同母屋南第一間副東御簾敷高麗端御疊二帖、(加茵、)爲婦君御座、(西面、)御後立廻屏風、(二帖、)其前立几帳、(一基、)同間副西御簾設二階一脚、(上層、泔器南、火取北、下層打亂筥南、唾壺北、)二階北方置唐匣筥、(在臺、)其南置鏡筥、(在臺、)其前立鏡臺、座前設脇息硯筥、(此度依所狹置便宜、)

〔嫁迎記〕一そのよ御ゆはひのまに、御とこに御はしぞめさて、のしにて花けづりして、もり候もの、御入候まへよりかざりておかれ候、これを御よめごへ、こなたの上らう御まいり候て、御はしにてはさみてまいらせられて、又御さのへまいらせられ候事、さ候て、さき三こんまいり候べく候、

〔故實條々〕飾道具ハ、ヨメ方ノ衆飾ラレ候、殿方女房ニモ心得候者入ル事ハ、か樣之飾物ナドノ差イ候ハヌ樣ニ仕候事可然故也、ミヅシ棚ノ飾物ハ遣不申候、クロ棚ノ物ハ遣申物ニテ候、

〔禮容筆粹五〕婚禮之次第

夫婦の調度かざり樣之事

まづ床の上は、手懸、饗膳、鶺鴒の臺、蓬萊の臺、置鳥、置鯉、瓶子、三ッ盃、銚子、提等也、扨又男の衣桁には品々の衣服をかけ候べし、女房の調度は、前日より事になれたる女中來てかざるべし、貝桶は其夜とこの上にかざる也、書物は書棚違棚にかざるべし、御厨子黑棚は、勝手によりて床の左右にかざる也、女房の衣桁は、其數其夜は七ッ、三ッ目には取かへて五ッ、五ッ目に又取かへて三ッかけべし、尤衣桁は三ッも五ッもあるべきなれば、衣桁每にかくのごとし、是等の事は定數あつてなきがごとし、婦人の心にもより、時宜にしたがひて、一へんに究りがたし、

〔婚禮問答〕御づし黑棚などは、姬君御持參のをかざり申候哉、聟殿の方にて新敷こしらへて、それをかざり置申候、三日の朝、それを取て、姬君持參のを取出かざり申候、○中略みづし棚黑だな、かざり樣如何、又婚禮の祝ども相濟候はゞ、みづし黑だな取納め可申候哉、みづし黑だなは、いにしへは常に御てう臺に置て、常々の御手道具、何にても其ぬしぐの心次第に置たる也、婚禮のはれには新敷作る也、右申ごとくなる故、かざり樣とて、ことぐしききはまりたる法式といふ事もなき事なれども、よめ迎などには、其節しげく用る道具どもを、おもにのせおく事也、其入用の道具ども、取そろへかざり置く故、法式のやうに人々存る事也、かざり樣は別の書物に有之候、○中略婚入の祝儀濟候ても、取をさめ候には不及候、常々何にても置申さるゝ物にて候、繪軸の物、又は書籍、其外何にても、のせ置れ候事可然候、みづし黑だなは、婚禮の時ならでは入用無之物のやうに下々は存候事、上つかたの常々の御座敷の樣體知らぬ者どもの申事に而候、

〔婚禮法式上〕婚迎之部

一婚迎之時、座鋪の飾之事、床には三幅對めでたき繪を懸、立花二瓶あるべし、花の立樣などは、同

朋衆の方にて知る事也、床前置物は、瓶子一對、二重折一對、置鳥、置鯉、手懸をならべ置也、瓶子二重折置鳥置鯉は、いざなぎの尊いざなみの尊へ奉る也、此二神は夫婦之道を始給ひし神也、手掛は、夫婦幷待女房著座の時、各へすゑ申物也、此手懸を略する時は、熨斗鮑にて、はし初の臺といふ物を作りて置也、是等のかざりは、何も急度したる時には必もちゆるなり、婚禮に限らざる事也、中略

一御料人の御座鋪のそばに几帳を立つ、几帳は婦人の形をかくす爲に立る也、几帳は京都の職人のこしらふるもの也、○中略

一御厨子棚黑棚、かざり置事、是は御調臺の內にかざり置也、御厨子棚黑棚、男方の方にて新敷こしらへて、それをかざり置なり、三日目の早朝に、それを取申て、御料人持參のを取出てかざり申べし、

みづしだなも、くろだなも、常々は其ぬしぬしの心まかせに、常にめしつかふべき調度ども何にても置べし婚禮の時は、左の圖○圖略のごとく置候へば、其節めしつかふに、なによりよろしきゆゑ、左のごとく置なり、

一御調臺の內の床のうへにはすゞりばこ、ぶん臺あるべし、又床の兩方のわきには、小袖の臺二ツ、ひとつの臺には、どのいもの、一ツのには小袖、又そのそばにかいおけ一對、又はんぞう、たらひ、まづこれまでおくものにて候、此ごとこと云は、祝の座敷の床にはあらず、

一御調臺と云は、御調度臺也、調度とは道具の事なり、御調どもを置く所なる故御調臺と云也、御帳臺とも書也、御調臺の口に、ふすま障子の引手にあげまきを付る、御帳をかけ置也、御帳とは、のれんのごとくなる物也、神佛の前の御帳のごとく也、

〔推陳言語集〕婚禮にも香炷事不苦也、香を炷ば、寸善尺魔、退屋內清淨也、

〔文祿三年前田亭御成記〕書院飾本意之事

一婚禮之時は、掛物飾物共ニ、龍虎抔類戰事を嫌ふべし、花も河骨などのやうなる類、氣を付べし、

〔婚禮大體〕一床のかざりの事

床の飾りに、三幅一對をかけ、前に三具足を置、立花をさし候など、申人候、ひが事にて候、御祝言の間に、左樣の物の無き事に候、それも三ケ日の祝過ぎ、御振舞などの時、表の御廣間などには、さも候はん歟、

〔婚禮法式上〕婚迎之部

一御色直の事、○中略其夜色直し候はゞ、二日目の朝、座敷のかざりみなとり申され候、夫より御料人かたより、座敷のかざり有べし、○中略本式は三日目也、座敷のかざり早朝に取申べし、○中略婚禮の夜の座敷のかざり、二重折、瓶子、置鳥、置鯉、てかけ、のこらず御料人の御さとへ參らせられ候、

〔婚禮推陳記〕床の飾物は、三ッ目の朝取下し、その跡江嫁の御厨子黑棚を飾もの也、

飾傳に、床の飾物、今は婚禮の翌日取下す也、三ッ目の色直し前迄は、聟より床飾をなし、或は七五三などの饗應にて、女房を馳走するなり、色直し以後は、嫁より種々飾物して、聟を馳走申なり、

〔伊勢家禮式雜書九〕よめ君の御入候所をば、婚禮の前に、新敷立らるゝ也、よめ君の手道具も、聟殿の方にてこしらへ置るゝ事也、然るに當世は、大名なども、よめ君の手道具こしらへ置ずして、よめ君持參の道具を當日より用らるゝ人も間々有之、いやしき事也、聟殿の方にてこしらへ置たる道具を三日め迄用られ、三日過て、其道具共はよめ君の方へ取納めて、よめ君持參の道具を取出し用らるゝ事本式也、

〔婚禮式法之書乾〕妗添年寄中老心得之事

一古しへは三ッめに色直し有しゆゑ、三日迄白裝束して有し也、中頃より其夜の御合盃過、御色直しあり、〇中略殿表へ出られ、御新造も御居間へ被ㇾ爲ㇾ入、御休足之間にても、又は御寢間江入せられ候あけの朝成共見合、御床の飾物蓬莱二重の物、但兩脇にあり置鳥置鯉、但貳ッ宛四角の臺に口口よりめうが作り物四角にあり、瓶子臺にあり搾箸初の臺抔も下げ、其跡に御厨子黑棚を直す、又小笠原流床飾に、中に雜膳さて膳一膳あり、今は蓬莱なり兩脇に二重手掛置鳥いびつの臺にすうる壹ッ置鯉同一瓶子、此類をさげ置くべし、〇中略御厨子黑棚の小道具は、あけの朝早く女中方持出られ、妳添か年寄中老の心得られたる方の差圖を受られ、夫々に直し置飾るべし、御厨子は上座のかた、黑棚は下座に直し可ㇾ置、又祝の掛物三幅對二幅對掛られ、其前に御厨子黑棚を直し置るゝ事も有、若御假粧之間に、みづし黑棚飾る時は、蓬莱の跡には中央卓香爐置べし、此香爐はをしの、かうろあらば置べし、若しなき時は、何香爐にても置べし、され共けむり返しなき香爐見合置べし、

一床と並び、袋棚の下に違棚有物也、袋棚には歌書の類を入おくべし、又いれずともくるしからず、違棚には軸の物長盆にのせ、繪雙紙香爐香盆にきやうし、こし立に、灰をし、火ばし、鶯、銀ばさみ、香箸杉にて制、長五六寸、組付、下の棚には、香箱臺に陶飾、みだれ箱、たき物ばこ、家鏡、名物の盆抔にのせ置べし、然ども御厨子黑棚爰に飾る時は、御厨子黑棚にかざらぬ道具抔、能々見合置べし、御厨子黑棚に、火取の香爐抔置くならば、違棚に香盆に香匙、火箸立に品々あれば、火ばし、うぐひすは、裏紅紙、表行成紙か金銀紙に龜甲形有紙に包、本を水引にてゆひ置べし、かやうなる事はそく座に成がたし、兼て拵置たるがよし、違棚上に折敷抔飾るべし、

一違棚の下には碁盤將棊盤雙六盤抔置、又重食籠の類かざるべし、爰に貝桶かざる事もあり、〇中略

一書院床にも珍敷掛物をかけ、卓香爐、又は生花、其外硯料紙抔置事あり、硯料紙は、床の下座に置

べし、料紙の上に硯置べし、
一附書院に、硯、けん屏、筆架、水入、唐墨置べし、木の枝抔、筆架に用たる事有、心得べし、其外長盆に軸の物、歌書、手鑑の上には文鎮置べし、是も女中の方にて口し抔おかれたる例有、筆などは包形に包ても置べし、筆架、墨ごめ、筆洗抔置所、能々心得べし、重印籠、細口の瓶になげ入抔、か樣の類、置合つり合肝要也、
一御假粧之間床には、貝桶一對置ならば、かもじ箱、櫛箱、鏡、まゆ作箱、元結箱、はぐろ箱、此類を置也、幷御厨子黒棚此所に置時は、道具に心つけ、同じ物置ざるがよし、○中略
一硯箱の內には、筆、墨、ごみとり、墨柄、ふうじ切、此類入置物也、大かた女中硯は、ひつたひ硯とて、兩方に筆入、中に硯石あり、
一此所に袋棚違棚あらば、歌書の類、其外十種香、源氏香、宇治香、矢かず香、小鳥香、けい馬香抔の香の札、香盤、重硯、沈劑のこぎり、槙のみ、箱に入ても飾、杉原奉書の紙抔置べし、
一同座敷には、かもじ掛に、尺のかもじ、中のかもじ掛飾べし、若かもじ掛なき時は屛風に掛べし、但かもじ掛には七ッ懸べし、屛風には一雙に懸るならば十二掛べし、片々には七ッ懸べし、下にきぬを敷とてかもじの先を休申也、
一御寢間の床には、弓蟇目長刀、其外御伽の天兒か、又ははふこか、御伽の犬抔飾べし、天兒に神酒洗米御膳など備る事故實也、天兒の膳は、小笠原にては一膳也、左の方にわらび、右に海月、中に梅干、相の土器にめし、
一御居間には、より替見臺に歌書抔置て飾るべし、乍去婚禮三めまでは遠慮あるべきか、源氏若菜の卷、又はぶんゑやう抔の類よし、此間に床あらば掛物かけ、盆石砂物、或は卓香爐抔置べし、
一御居間には、長刀御守脇指御刀、其外連臺大角赤抔置べし、御納戸ぎわには、殿方ゟ夜の物ふと

ん御枕杯をおかるべし、又おかれざる方も有、一遍には定りがたし、

一御納戸には、小袖箪笥、衣唐櫃、臺の皮籠、衣桁帶かけ、表刺袋、廣蓋の類、次第々々に飾べし、四季の土用に小袖かけ據習有、帶杯も懸る也、祝言の內は衣桁、納戸にて吉、其後居間へ出す也、

一御新造のおはします所には、位に依、夏冬にしとねを敷、几帳、夏はれんだいを立る、又大かたは屛風たて、しとねなし、

一緣がは杯に手掛かけ置べし、御座敷床に、三方に御口祝のしを置、御客御入の節出べし、

一違棚に見合置品々有と云へ共、女中方には硯料紙、文臺か、ゝむり棚、歌書、軸の物、重香爐臺に陶マヽたき物、香道具、打枝、香爐杯は袋に入ても飾るべし、香會札、ついまつ、歌の重硯、丁子がま、盃石、たき物箱、鏡臺、手鑑、何も歌書手鑑の類には、上にぶんちん置べし、軸の物は長盆にのせかざるべし、〇中略

歌書は、古今上下か、源氏にては、わか菜上下か、一さつにては、初ねの卷か、

一上段の間附書院有、御合盃の御座敷には、附書院に表方ゟ兼て殿の御刀懸置べし、若おかれざる事あらば、此かたゟ置べし、併附書院、殿ゟ遠くあらば御後の方に置べし、殿入せられ候はゞ是に置るべし、先江參られ候、年寄中老衆心得のためしるし置也、

一御婚禮當日、御先江被參候女中、先御けしやうの間に、御假粧道具、水入杯にも水を入置、御色直しに被爲召候御裝束杯、廣蓋に入出置べし、扨めん／＼の裝束手ぢかくに置べし、長持か風呂敷杯に、何れも一ツに包入置時は、めん／＼の名の書札を付置たるがよし、ことの外取込いそがしき折なれば隨分心掛肝要也、

〔中右記〕永久六年〇元永元年十月廿六日甲辰、今夜內大臣殿〇藤原忠通始渡給民部卿姬君許、〇中略申時許行向民部卿經營所、三條大宮、播磨守基隆宅也、寢殿裝束立帳幷母屋庇圍度了、

〔長秋記〕元永二年十月五日、早旦依招引向伊豫守許、執聟間事、依日次宜所示合也、姫君客人裝束調始、又調度半作今日取出加調備、又侍所隨身所雜色所三箇所大盤、燈樓灯臺衣架唐櫃楾手洗等類調始、又檳榔網代車等令作始之、　廿一日巳刻著束帶行向二位經營所、（上皇御所大炊殿○藤原公實女嫁源有仁、中略、）實行、通季等卿、顯隆朝臣、所々令立調度、寢殿東四間南廂幷孫廂三四五間（孫廂東二間放出也、仍不懸簾、）敷廣筵、母屋第三間立帳、其前敷繧繝端疊二枚、其上地敷二枚唐錦茵等、其前立脇息、下置重硯筥、同間西立四尺屏風一帖、傍東面之北立二階、上階（北火取、南泔坏、）下階、（北唾壺、南打亂筥、）　二階南立唐匣、其南立鏡筥、其南立鏡臺、母屋四間、卷簾（其高當四尺几帳上程、）各立几帳、母屋四面懸亘壁代、廂西二間卷上簾、東二間幷孫廂三間、同廂東面戸簾皆垂之、立亘四尺几帳、廂東二間傍簾敷高麗端帖二枚、孫廂三間又傍南敷同帖三枚、南廂第四間立四尺屏風一帖、南北帳西間傍西立五尺屏風一帖、其前立中持一雙、有覆、又懸燈樓帳三面、後間帳中敷繧繝疊三枚、南方置沈枕一雙、跡方置大壺、同方柱懸鏡幷總角等、（西南東也、）擧帷立四尺几帳、（其中不見、）帳東面敷繧繝疊二枚、其上敷東京錦茵、其前立三尺几帳、傍北障子立五尺屏風一帖、其前立二階厨子一雙、上下階居筥八合、其東間不立屏風、東廂際障子前立衣架一雙、（未懸裝束、後聞件衣架南懸束帶、北懸直衣、聟公所著裝束、懸加件衣架、）其前敷高麗端帖一枚、南緣廂東二三間敷弘筵、（東一間不敷之、）傍東廂母屋際障子立五尺屏風一帖、其前立竹棡厨子一雙、南厨子上置冠筥一雙、北厨子上置泔坏、（南）搔擧筥、其前敷高麗端一帖、其前立脇息、其南置硯筥、（皆棡竹蒔繪也、自院件出居具居之云々、）件東廂東面卷上簾、（南面不然、）北東西廊母屋廂東間懸簾三進也、母屋西立四階牙象黑漆厨子一脚、（有伏輪、）　上階置琵琶、次階置箏、次階置和琴、次階置笛筥、（納橫笛、太笛、笙、篳篥、狛笛、拍子、）其北方置硯筥、第二間西立實立障子、入大鏡、其間敷高麗端帖三枚、其東立蒔繪二階文机一脚、第三間東障子際立厨子一脚、上階置火取泔坏、次階置檀紙幷置小硯筥等、其南邊置螺鈿手筥一雙、當中間御座居黑漆火爐、（有金物伏輪組也、）　其傍敷滿高麗端帖、同廊遣戸東敷紫端帖二枚、（二行、）其東間爲御樋殿、（有大盥紙置壺等、）　西南懺法廊立出居具一具、居火爐、（件物具儲本家、而臨期自院給桐竹調度、仍立件所、）是父宮（○有仁父輔仁親王）渡給時、依可爲

御所立儲云々、中門廊壁下敷紫端帖二枚、爲役諸大夫座、同東廊障子上敷紫端疊四枚、（二行）侍大盤居埦飯廿坏、敷紫端帖於其南北長押下、敷滿紫端帖、地火爐積獸炭、車宿西妻立黑漆臺盤一脚、爲隨身所、（不懸垂布、是暫居所也、）同東妻爲雜色所、立黑漆臺盤、掛紺垂布、（須懸白布也、而依可爲隨身所懸紺也、今度許可爲雜色所也云々、）御厩舍居大盤饗二前、爲牛飼車副座、（本居二一座、而後車副依申、居別由所後聞也、）大略見廻了、

〔長秋記〕長承二年六月十九日壬寅、早朝少納言來、今夕故大納言能實第六娘可嫁也、其間之事、一主人料車可用自車、女房料車可用誰人車哉、答云、彼家雖無主人、累代相門也、不可輕、屈從女房料可用師仲車、前驅六人計、又侍諸司允體者、二人計可相具、日來彼人祖母、與下官通事、遁不可懸人之由成其約所思立也、又云、二條宿所家體、極見苦、然而依此事不可求他所舍屋等、諸事無便宜、又女主重喪間也、然而所儲之几帳帷、幷疊等用尋常物具也、二階叢爐手筥硯筥計也、枕上可置劒歟、答云、可置、又云、佐保可懸女裝束也、然而不諸上、最前調服裝束、於事有憚、仍不儲之云々、

〔兵範記〕久壽三年二月廿八日庚子、申刻許向權辨亭、於四條東洞院新造家被經營也、右衞門佐光宗、令嫁第三女子也、寢殿中央母屋立障子帳、其中敷繧繝緣疊三枚、安張枕二、置白堅文織物直垂衣、不敷表筵、不置劒、頗無謂歟、又不安沈枕不審也、帳前敷同緣帖一枚、其上敷東京錦茵、立三尺几帳、其座右方（四）副母屋柱立二階、置居鬪度等如例、其後立泥繪四尺屛風一帖、如例、母屋西間副西障子立衣架一脚、懸客人幷女房裝束等、客人裝束者、束帶一具、向北懸之、（角帶同懸之）女房衣紅匂褂七、青單衣、蒲染小袿、紅袴、向南懸之、夫妻裝束相對懸之、故實云々、衣架北方（戌亥角）懸燈樓、居油坏、北母屋際副障子立二階廚子一脚、居手筥硯筥等、自餘儲如例、北妻爲常居所、居火爐、立棚、樣々物具、種々盡美、東北卯酉廊爲出居、南庇西間敷高麗緣帖一枚、（南面）其前置脇息、（左）硯筥等、（右）其西（右方）立二階廚子一雙、置居冠筥搔上筥泔坏臺等、其後副立四尺五寸屛風一帖、廊母屋（北）爲內出居、敷高麗緣、立蒔繪二階廚子、置硯筥鏡筥檀紙白麻等、立棚居菓子、居火爐積炭、侍所作法如常、大臺居饗廿前、其廊北妻爲隨

身所、立黒漆蟹床子、敷黃緣帖二枚、居蟹、車宿立新車、(調装束、)其東妻爲雜色所、鋪設如常居蟹、牛飼占近邊小屋、加鋪設居蟹、

〔兵範記〕保元三年二月九日庚子、今夜執聟事、密々營之、○中略寢殿東北兩面鋪設裝束、障子帳懸引物、其內置沈枕織物直垂(白)劒等、(入錦袋、)副母屋西壁釣二階棹、懸男女裝束、男布衣向南、女白衣五袴向北、相對懸之故實也、依密儀不懸東帶、不可爲例、

〔玉海〕治承四年六月廿三日甲辰、此日密々有嫁娶事、右大將良通(○藤原兼實子)通花山院中納言兼雅卿娘、○中略早旦仰家司季長朝臣奉仕裝束、(於日來女院御所有此禮、以女院殿上渡余家、以渡御爲名、其實密々御坐東面方也、)其儀寢殿南面母屋庇三箇間懸簾、(上母屋、垂庇、)母屋中央間立障子帳、(御渡之時被立帳也、依略儀不立如法帳、)其內南北妻敷繧繝疊三枚、其上敷例筵、(著錦緣、禮須用茵、依略儀敷例筵也、)其上置沈香枕二、庇中間東西行敷同疊二枚、其上敷唐錦茵、(禮敷龍鬢、其上可供茵、依略儀不敷龍鬢、)同間西頭南北行(著北緣如例、)立泥繪屏風、居其中(東也)二階一脚、(上層北置火取、南置泔器、在蓋、下層北置打亂筥、南置唾壺、)二階南置唐匣箱、(在蓋、)當其南置鏡筥、(在蓋、)其南立鏡臺、茵前頗東置脇息、其西置硯筥、(已上依前狹、疊上置也、)母屋西第一間母屋際立几帳一基、其內南北行敷高麗端疊二枚、其上加東京錦茵、南庇東西間副奧端二行敷高麗疊各二枚、同庇三箇間副庇簾立几帳各一基、(下格子也、)東間東障子際立燈臺、(在折敷、)舉燭、西庇三箇間卷簾爲出居、南第一間副奧障子敷高麗端疊一枚、(南北行、)爲主人座、同第二三間副東障子立厨子一雙、(禮其後可立屏風、依略不立也、)同間副長押南北行敷高麗疊二枚、南第一間南邊舉燈、中門廊敷紫端疊一枚、(依間數縮、敷一枚、)爲諸大夫座、侍障子上等如例、本上達部座如元、凡依略儀不敷所々弘筵、晚頭女房參彼御方、(候女院御所也、)秉燭余同行向見廻裝束、子細載右、以寢殿北面爲常居所、以其北子午廊爲中居、以北對爲女房局、

〔明月記〕建曆三年四月十七日、東洞院大路見物車多立、今夜通光卿娘、被參六條宮、(雅成親王)云々、十八日、前民部大輔仲能(本名賴房)示送昨日吉事、亞相先參六條殿、(已始)御所裝束了歸亭、其儀以寢殿母屋東一間并南庇一間東妻廂爲女房御方晝御座、傍母屋南柱立御帳、(吉時午時)南廂西障子下立厨子二脚、置母

屋調度、以東妻庇中間爲平敷御座、立庇調度御帳、西間（母屋）立衣枷一基、（長保例、常二基、依狭立一基云々、）懸御衣二具、常公卿座并備饗、（上達部、東西殿上人座、）

〔玉蘂〕嘉禎三年正月十四日、此日左府（○藤原實經）被迎第二娘、（○中略）委旨見高嗣記、（○中略）

嘉禎三年正月、右少辨高嗣朝臣注送文、（○中略）

御所御裝束無殊事、然而大概記之、御亭近衛以北、室町以東也、日來前關白（○藤原家實）殿御同宿也、依此事自舊年移渡武者小路猪熊亭給、此御所未被立寢殿、室町面南有板棟門、北有土門、而今棟門被葺檜皮、以土門被改了檜皮葺唐門、又日來無中門、只廊許也、而今差加廊被立中門、（無別廊、只廊而已、）東方（當中門也、）有子午屋、日來爲左府御方云々、當侍廊之北東有三間四面卯酉屋、（日來前殿下御方也、）以件所爲女房御方、母屋三箇間東第一間、（棟分、次北間也、）北爲障子、東面爲壁、立亘屏風、其中敷高麗端（大文、）置□□二枚、（南北行、以南爲枕、）其東疊上頭被置蒔繪（蒔鬢子）野劔、（不入袋、）其中央置御直衣、（白平絹、依略儀不被儲御衾、）其疊二枚上頭、置御枕一雙、（以白打紙裹也、）其南間爲塗籠、其中釣燈樓、其下儲火桶、（三箇日之間爲不消火、依有此用意、）御帳以西母屋二箇間、棟分皆有中障子、其北西二箇間懸母屋御簾、（御帳北障子同懸之、三箇間也、）卷之、御帳前敷高麗端帖（大文、）二枚、（東西行、）其西立小几帳、（白綾物帷、）其西敷高麗端帖一枚、（南北行、西第一間也、）其西不敷滿疊、是如褻御厨子爲被置云々、件御厨子以下、自女房御方可被渡也、北庇三箇間、各敷高麗端帖二枚、但中央間敷一枚、其前置御爐也、（蒔繪蝶文也、積炭如常、）炭取、擧燈、（切燈臺、也、有寫、）件間置紙檀紙十帖許、是褻御方也、棟分以南母屋二箇間、懸母屋御簾卷之、東間副東壁并北障子、立亘屏風、敷高麗端帖三枚、（大文、）二枚上又敷一枚也、其西南邊敷一間、副西障子立三尺屏風、立二階厨子一雙、（唐草蒔繪也、藤宰相召此御厨子、以四條宮小調度爲本樣新調也、）北一脚上階置檀紙手筥一雙、南一脚上階上置火取、第二階上置硯、南庇二箇間各敷高麗端帖二枚、東方擧燈、（高燈臺、打敷如常、但面白生絹色練絹也、自餘所々皆如此、）西面庇四箇間、北二箇間爲蔀、卷御簾敷高麗端帖二枚、（東西行、）擧掌燈、北障子懸覆御簾出几帳帷、卿相以下參仕候時、女房爲相逢被儲此座歟、其以東二箇間（所謂南庇也、）各敷高麗

端帖二枚、其以東一間敷同帖、東庇南第一二間爲臺盤所、敷紫端帖、當塗籠前立黒漆棚一脚、上階置菓子十合、(泥繪折櫃、居二牙象一、)又下階置硯筥、(爲張)又置紙檀紙棟手洗座、中央居火櫃座取帳臺東間停中央、(中間也、)釣棹立衣架、其東間中爲通路、東面又庇有三箇間、南第一間爲御湯殿、同第二三間敷紫端帖、北面又被差加庇一間、隨便宜各出几帳帷、又西面三箇間之外、四方有立蔀、當御所有六箇間對屋、(御妻西對)西第一間爲女房車寄、出几帳帷儲屏風、但無打板疊、刻限可引出壺禰(ツボネ)中疊云々、件六箇間、皆爲女房壺禰、各上口敷高麗端帖、下口敷紫帖、(下口同懸御簾、有鉤丸、又屋捲如常、)釣呈(黒○呈恐誤)染棹、置泥繪火櫃炭取等、立燈臺置棕手洗、但東一間爲刀自候所、敷紫帖置火櫃炭取、又立棚置菓子、當御所東又有六間對屋、(午子妻)雑具等如對、但東戸一間爲下臺所、敷紫帖、釣白木棹、當北對東有三間貸殿、御所太狭、不及御裝束之沙汰歟、然而猶爲後隨覺悟記之、訛謬多端者歟、猶可尋存一定、

〔將軍德川家禮典附錄十一〕享保十六辛亥年十二月十五日大納言樣(○德川家重)御婚禮之次第(○中略)

御入輿御規式書

御祝御座敷

白繪御屏風

置鳥　御銚子

二重小餅　御瓶子

蓬萊御臺

せきれい御臺　御箸初

御床

白繪御屏風

二重小餅　御瓶子

置鯉　御提

〔大江俊矩記〕文化五年二月十一日、近衞內大臣(基前公)尾張宰相殿姉姫維(サナ)君御方御婚禮也、(○中略)

一寢殿有敷設、東面每間垂簾之內立美麗几帳、出妻於簾外、北廂北面戸亦同之、東面中央簾內平敷

御座（大紋端二帖、縹繝御茵、）南方二階棚御冠筥、御鏡筥、御鏡、御泔坏、打亂筥等置之、以山水押繪御屏風圍之、其西方又有平敷御座、其上繧繝御茵二枚並敷之、其東並置御枕二、（檀紙包也、）御裾方有如御衾者一帖、南北西等以山水御屏風二帖圍之、御枕方立美麗几帳一基、其北方釣燈樓一基、（擧燭、）其餘之儀、巨細不覺申、談諸大夫、密々令拜見、

〔近衞殿御婚儀次第〕文政八年二月六日、近衞內大臣殿（忠熙）○薩摩國守息女（島津齊興養女）御婚儀、

當日平旦、家司奉仕、寢殿以下御裝束、其儀正寢東廂垂御簾、立四尺几帳、（出帷、）其西東面敷繧繝端疊二帖、上供錦御茵、其上（長）立三尺几帳、爲御座、其前設御脇息、供御硯筥、其南方北面立四尺屏風一帖、其中設御鏡臺、（懸御鏡、）其西並居御鏡筥、同臺、御冠筥、同臺等、其西相並立二階棚一脚、上階供火取泔器、下階設唾壺打亂筥、母屋中央間、立廻御屏風、爲御帳代、（今度不立、如法帳、）其中敷繧繝端疊二帖、（東西行、以東爲御枕、）其上敷表筵、（白唐綾、青地縁、裏濃打、）其南疊上頭置蒔繪（獅子）野劍、（柄南刃東、不入袋、）其中央置御衾、（今度白平絹御直垂衣、被略御衾、）其疊二帖上頭置沈御枕一雙、（以白打紙裹之、）其左右立小几帳二本、（八字立之、）其東立几帳、其北釣燈樓、其下儲火桶、（三箇日之間、爲不消火也、）北廂東面垂御簾、立几帳、（出帷、）其西東面敷高麗端疊二帖、上供錦御茵、其北立三尺几帳、（二倍織物帷、）爲姫御方御座、其以西副北簾立衣架一脚、向北懸男裝束之、（上層御直衣御衣御單衣懸、下層御奴袴御下袴懸之、）女裝束等、（上層懸御表著衣裳、下層懸御袴、）相對懸之、其西迫簾下立御屏風、（東面、）其前立二階厨子一雙、北一脚上階置檀紙手筥、南一脚上階置火取、第二階上置御硯筥、南廂同懸御簾、（東西北垂之、南卷之、）爲公卿座、東第一間副北簾敷高麗端疊一帖爲御座、（無對座、）東第二間以西迫南長押上敷高麗端疊二帖爲上達部座、其西方敷紫端疊爲非參議大辨藏人頭等座、以西廂爲臺盤所代、懸御簾、（垂之、北一間爲妻戶代、）立八尺臺盤二脚、（南北行、）奧端敷紫端薄疊各二枚、爲女房候所、副南簾儲御手水具、（打敷、御脇息、御盥、二口、貫簀、御手巾筥、在臺、）西簀子敷紫端薄疊一枚、爲刀自候所、以便宜所爲贄殿代、立黑漆棚二脚、儲四膳、中門廊敷紫端薄疊爲辨少納言座、東寄戶南柞立侍宿申簡、障子上奧端相對敷紫端薄疊爲殿上人座、侍所立臺盤、奧端二行敷紫端薄疊爲諸大夫座、其座

奥方倚文杖、其西置名簿辛櫃、今度略之其西倚日給簡、自餘御裝束如常、

〔武家嚴制錄〕二

一同御代〇徳川家綱雜事御條目

條々〇中略

一嫁娶之儀、幷養子之儀ニ付て、貪たる作法不可仕事、

右之條々依先制之旨損益、今度定候畢、堅可相守之、若於有違犯之族者、糺科之輕重、急度可處罪科者也、

寛文三年八月五日

〔令條記〕寶永七庚寅年四月十五日

武家諸法度

一婚姻は〇中略嫁娶の儀式、すべて舊制を守りて、各其分限に相隨ふべき事、

附近世の俗、婚を議するに、或は聘財の多少を論じ、或は資裝の厚薄を論じ、甚しくしては貴賤相當せざる者と婚をなすに至る、此等の弊俗、一切に禁絕すべき事、

〔翁草〕百三十九白川侯の書也とて流布する物有、不知實否、

某存るは以後養子致とも嫁取致とも、緣金と申を令停止、姓を糺、婚姻すべき時節を延す、相互に可取結事に候、不勝手なる族、娘を片付候金銀の用意無之、自然と其時節を後れ候時は、男女の道自ら正しからざる事に至候、此所を深く可相考事に候、頭たるもの能々心を用ゐ、最初緣邊願出候節、可遂吟味事に候、

〔學山錄〕三言論婚姻求財

文中子嘗有云、婚姻論財、夷虜之道也、誠哉言乎、然風俗之衰、士大夫不知廉耻之爲何物、而唯貨財

是貧、是以其於娶婦、或不論門地、不擇婦德、務議其納財之多寡耳、故有女者苟非有財、則不可得嫁、而使貧者至多失其期焉、宋之末衰、既有此風、故丁隙疏其君曰、近年進士登科、娶妻論財、全乖禮儀、衣冠之家、隨所厚薄、則遣媒約、往返甚於乞丐、小不如意、棄而之它、市井駔儈、出捐千金、則貿貿而求、安以就之、名掛仕版、身被命服、不顧廉恥、自爲得計、玷辱恩命、虧損名節、莫甚於此、竊仕之初、已爲汚行、携而從政、貪墨可知、伏欲乞下御史臺嚴行覺察、如有似此之人、以與法從事、庶幾惇厚風教、以懲曲士、又蔡襄著五戒、其一論之曰、娶婦何謂、欲以傳嗣、豈爲財也、觀今之俗、娶其妻不顧門戶、直求資財、隨其貧富、未有婚姻之家不爲怨怒、原其由、蓋婚禮之夕、廣靡費、已而校奩橐、朝索其一、暮索其二、夫虐其妻、求之不已、若不滿意、至有割男女之愛、輙相棄背、習俗已久、不以爲怪、此生民之大弊、人行最悪者也、嗟呼二子所嘆息而言、信然信然、欲維持風化者、安可棄而不問哉、

〔婚禮推陳記〕婚禮前に嫁の道具來る時は、聟方にて道具を並ル場江筵を敷、請取渡すべし、これ近世の法也、むかしは國を隔而ての婚禮なる故、其日行列の跡先にもたせ來る也、衣桁連臺手拭懸を、紅の絹にて臺より横竿へかけ給也、

師傳に、道具來る時は大門を開かせ、臺所か奥の玄關前へ筵二枚通も長く敷、其上に並させ、先の役人、道具の覺書を以次第に引渡すべし、此方の役人も書付に合、封の儘請取べし、道具持參の下々は表門江不返、裏門より歸べし、初結納持參したる時の道筋より嫁の道具も持參し、婚禮の日の道すぢにもすべし、遠近により道具一日に兩度程も來ル時、初に道具持參の使者江は、三方熨斗出、料理給る事もあり、是は聟も對面ありて、舅江の御返答あるべし、以後は對面にも不及也、道具渡の役人、馬上にて道具の前後を乘事も有、毎度道具持參の時、役人より覺書を此方にて寫直し判形を加へ遣事も在、使者より不望時は、時宜に任すべし、道具の前後江、日和よくとも合羽傘菅笠を輪具に入もたするなり、

〔婚禮里出之部〕嫁諸道具遣樣の事、婚禮前申合次第、朝夕にも嫁の道具を遣す也、縱ば朝遣す時は、一番に御厨子黑棚荷唐櫃、其次に黑塗の長持、其次に溜塗長持、其次に小袖簞笥、其次に屛風箱、其次に葛籠杯、わくに入たる物は皆跡なり、
覺書付渡樣の事、竪紙續立、次第々々に一ツ書にして書也、使者の覺書故、不殘御の字を入る、假ば長持は一棹共一合とも書く、書物擔子に袖簞笥等は一ツ二ツと書、御厨子黑棚は一飾と書く、衣桁達臺も一飾と書也、奥に以上と留め、月日と計書也、

〔民事慣例類集婚姻〕凡ソ新婦タル者入嫁ノ節、富家ハ簞笥長持等數荷ノ嫁具ヲ運搬シ、貧家ハ風呂敷包一個ヲ携ヘ、其品多少アリト雖モ、衣類手道具ヲ持參スル事、一般ノ通例ナリ、嫁具ノ外ニ、金圓ヲ齎スヲ持參金ト稱シ、地所ヲ齎スヲ持參田畑、或ハ化粧田ト稱シ、其所有權ヲ夫ニ移スモノ、或ハ時ニコレ有リト云ヘドモ、多クハ身體不具、面貌醜惡ノ償料ニ充ルニ過ギズ、故ニ百人中一人、財產ヲ持參スル者アレドモ、夫家ノ耻辱トシテ、內密ニナス習慣ナルヲ以テ、其間ニ慣例アル事無シ、○中略
新婦重緣等ニテ、偕老ノ見込アル時ハ、持參ノ長持ヲ倉庫ヘ入レ、其見込無キ時ハ、之ヲ新婦ノ部屋ヘ置ク事ナリ、羽前國置賜郡
村方ニテハ、嫁資トシテ耕地山林ヲ持參スル者アレドモ、其所有權ハ皆新婦ノ名前ニシテ、夫家ニテハ其所得ノミヲ受ル例ナリ、町方ニテハ持參金アル者稀ナリ、手道具類、大抵五荷七荷ヲ通例トス、中ニ貧ナル者ハ空櫃ヲ齎ス者アリ、紀伊國名草郡、海部郡、

〔武家故實祝事大概中〕婚禮
一女房調度入器の事
一十二の手箱に入物

丸鏡、家さも毛たれ箱、元ゆひ箱、小鼠、かうばこ、ふしばこ、香具ばこ、折かゞみ立、くし入、おしろいとき、あぶら桶、びん水入、化粧水入、

異說に、丸かうばこ、丸鏡家二、

小鼠は眉墨也、油煙を蠟に油を少し入てねりたるもの也、小鼠と云は、凝らし煉りたるすみと云事也、すべて物をこねると云詞は、凝らし煉ると云事也、

一亂箱に入物

あぶら桶、おしろい、香合、大小かけこ、丸香合、小ねり、から箱、かみなで、はさみ、くしだい、

一旅手箱に入物引出しあり、硯など仕込、

かみそり箱、楊枝箱、手掛入、丸鏡家入、柄付鏡一面、折鏡立、水入、油桶、眉作箱、小ねり墨香合、元ゆひ箱、白粉箱、白粉とき香合、ふしばこ二ッ、はさみ、櫛拂、

一眉作箱に入物

まゆはき、大女郎拾本、小女郎十四本、紅筆八本、かね付筆八本、きはおき三本、白粉すり一本、大ぼんぼり、小ぼんぼり、ねりすみ箱、

一鏡臺但ばらひ箱とも云には、くし掛三枚入と云々、此事ふしん也、用ひがたし、

かゞみ立、かゞみ、あぶら桶、水入、三櫛、二具白粉とき、ふし箱、大小四ッかみなで、はさみ、毛ぬき、くしはらひ、

一五ッぐしと云ふは、どかし一ッ、あらはすきぐし二ッ、小は水つけぐし二ッ中は云々、

〔嫁迎記〕一とのいもの二、御小おぞ二、御まくら二、御むしろ二あるべし、四月より九月九日までは、とのいもの丶御うら、御むしろのうら、すゞしたるべく候、

一御かちやう二はりあるべし、みづいろ、すみ、あかきぞんす、かぎかづき、くり梅じゆす、かぎ、ちや

くどう、

〔婚禮法式下〕夜具之部

一とのゐ物二ッの事、位ある人は、表は唐織物、その外はから物、其下は何にても用候、四月朔日より九月九日まではうらすゞしなり、うらの色は、將軍家むらさき、其外は何色にてもするなり、九月九日より四月朔日迄は、うら赤緞子なり、ふさの色何にても、但赤を用べし、ふさ長サ五寸計なり、

一小おんぞ二ッ、表綾、うらとのゐ物と同じ事也、常の小袖より少大也、ふさなどはなし、

一夜の御しとねの事、御寢なり候時敷候御しとねなり、夜のおましとも云、數不定、色なども不定也、大サハ、中鏡三幅、長サ六尺なり、地は綾、へりは唐織物なり、へりのはゞは五寸なり、へりのさし樣、上は一文字にして、下はすみちがへに、すみを合せぬふべし、四すみにふさを付る也、

一まくら二ッ、箱まくら也、黑ぬりまき繪にて、一方には獏、一方は家の紋をかく、是本式也、寸法等定法なし、

一まくらの繪に、獏といふけだものを書く事、獏はあしきゆめをくらふといふ事あれば、獏をかく也、

一うはむしろ二まい、むしろのへりは、おり物などのたぐひにて取べし、表は疊の表、うらはすゞし也、へりの寸、表は二寸四五分、又三寸にも、うらは見よきやうにあひはかるべき也、上の方はへりをよこにとほす、すその方はすみあはせたるべく候、おつけ有べし、〇中略

一むしろのふさの色、何にてもする、但赤を用べし、長サハ五寸六七寸計にもあるべし、

一御かちやう二はりあるべし、みづいろのすゞし、すみ、あかきしゆす、かぎ、しやくどう也、かちやうのまはり幷すそ、すみに同じ、是は東山殿の御かちやう也、かちやうの色、すみ、へり、すそなど、定

法もなし、

〔秋齋閒語四〕竹取物語、うつぼ物語、世つぎ物語、いや世つぎ物語、續世つぎ物語、大鏡共云ます鏡、榮花物語、狹衣、水鏡、伊勢物語、已上是を十語と云、徒然草、少納言枕草紙、四季御飾の記、御湯殿の記、已上是を五草と云、是十語五草とて、嫁入の具なり、集棚にかざるなり、飾樣は小笠原の習とするなり、

〔貞丈雜記一祝儀〕婚入の時、貝桶を第一の調度調度トハ道具の事也とする事は、はまぐりの貝は、外の貝に合はするに、ふたあはぬ物也、たとへば貞女兩夫に見ずとて、身持正しき女は、兩人の男に身をまかせざるが如し、婚入して、又ふたゝび婚禮せぬまじなひの心もあり、又いましめの爲にもなる故、貝桶をよめいりの調度の、うはおきにするなり、うはおきとは、いろ〱の物の第一の上座におく也、うはおきといふ詞ふるき詞なり、

〔婚禮法式下〕調度之部

一貝桶こしらへやうの事、角口のひろさ九寸三四分、たかさ九寸、紙にてはりこにして、以上四所にかつらを可入、二すぢヅヽならべて、そこぎはに一所、ふたと身との合めに一所、中ほどに一所、ふたのまはりと甲の板のさかひに一所、かつらを入なり、かつらとは、ほそき輪を入る事也、身の方にのみいれをするなり、紙にてはり、ごふんにてぬりあげ、金はくをおき、上下雲がたの繪は、龜甲をおきあげ繪にするなり、總の繪には源氏の繪、また松竹鶴龜の繪を書く、ふたに鶴龜など、二ツヅヽむかひ候てゑかるべし、足はつかぬ物なり、是は請取渡の貝桶なり、兩方にくわんを打、紐を付る也、此貝桶には蓋足などはなき事也、貝一ツを二ツにわりて、かた〱づヽ一ツ貝桶に入也、左の貝桶へは、左貝をうつむけて、貝桶のそこの中に置て、白紙をほそくたちて、のりを付て、十文字にかけて、貝をおさへて、はり付て、うごかぬやうにする也、右の貝桶は、右貝をのけて貝桶に入、是も細き紙を十文字にかけて、はり付る也、貝かた〱ヅヽ入る事也、只いるればこけ候てあ

しきゆゑ、うごかぬやうの爲也、貝の内は金箔にてだみて、松竹鶴龜をかくべし、是請取渡の貝桶也、貝桶一ッづゝ、白木にてわくをさして、わくに入て棒をとほし、一荷になふ物也、棒とほしの金物有べし、貝桶兩方にくわんを打て緒を付ふたの上にて兩わなに結ぶ也、貝桶のゆたんなど法式なし、好にまかすべし、請取渡し、又座敷に置ときは、ゆたんは取べし、此受取渡の貝桶の内へ入る貝は、おひ貝三百六十の貝の内にてはなし、別に貝一ッこしらへ候て用る也、

一はりこの貝桶の紐の長サ一尺、ふとさ六分、四筋共に、二ッ分也、かた〳〵にふさつき、かたかたにつぼをつくる、くわんさほし也、貝桶ひものむすびやう、兩わなにむすぶ、何の事なし、貝桶の紐の色紅也、是は請取渡の貝桶の事なり、

一貝桶を婚禮の調度のうはおきにする事は、第一の祝儀也、すべてはまぐり貝は、外のはまぐり貝に合するに、必外の貝にはあはぬ物也、その子細は、烈女は二夫にふれずとて、本文の心をこめすなり、正しき女は貞女とも烈女とも云て、二人の男に逢事なし、はまぐりの外の貝にあはぬと同じければ、いましめとし、祝ともするなり、

一こしの先へ遣し候請取渡の貝桶は、わくに入て、一荷になひ候也、わくに寸尺なし、よき程にすべし、貝桶わくに入たる圖前に見えたり、貝桶二ッを一人してになふなり、

一おい貝桶、是は寸法定なし、常のとほりの貝桶にて、板にて作りたる物也、此おひ貝桶へ、貝おほひの貝を入る也、貝の數は三百六十なり、これは年中の日の數を表したり、貝一ッを二ッにわりて、左貝は左の貝桶へ入、右貝は右の貝桶へ入る也、三百六十同じ事也、貝一ッを二ッにわりたる數七百二十也、何も貝の内、金箔だみ、源氏の繪、又は花鳥の繪、極さいしき也、左貝右貝一對に書也、左貝を地貝と云、右貝を出し貝と云也、

一おい貝桶の紐の長サ四尺三寸、ふとさ一寸三分、八筋共に、かた〳〵につぼあり、かた〳〵にはふさつき候、是は貝桶ふたつぶん也、

是は板にてしたる貝桶の緒は、どんぼう結等也、此紐の色紅也、

〔婚禮推陳記〕貝桶は六角なり、高サ一尺貳寸、指渡壹尺、蓋は合口にして、內外梨地蒔繪也、又外を梨地蒔繪にして、內を紋紗錦今織などにて張も有、砂子紙にて張もあり、蒔繪は源氏の繪樣か、四季の體か、又は鶴龜松竹に家の紋を書も有、これ迄內の桶也、是を桶形の臺に据て、其上に六角の外家有、これは打ぎせ也、外家は黑塗家紋を蒔繪にする也、臺の緣の高さ二寸、足は六角より六足付る也、今は外家なくて、中の桶計を臺にのせて、其上に覆を掛る也、又桶を張子にして、外を金箔にだみて、源氏の繪樣を極彩色に書、內に砂子を蒔もあり、足より通す緒は、眞紅の八打也、添有、長さ通法一丈五尺也、

師傳に、蜻蜓結は、四翼に結といへども、近比諸家の婚禮に、出來合たる緒を通參たるにては四ツ羽に結がたし、此時は兩方江羽一ツ宛出したるがよし、雄蜻蜓は叶結の裏の上へ見ゆる樣に尻を結、雌蜻蜓は叶結の表の上へ見ゆる樣に尻を結也、又雄蜻蜓は尻を五形、雌蜻蜓は尻を叶に結も有、叶は陰、五形は陽の結也、

覆の事、錦金襴今織にても用ゆ、家紋を色々の糸にて縫也、裏は紅梅の薄板物、又は白き生絹にて打なり、天井は六角に入天井也、竪田町二幅にして、裾を一二寸も縫放すなり、

貝は耳白の大成を用ゆ、昔より伊勢の國桑名浦の貝を上品とす、灰汁にて煮れば、表の形はげて、雪のごとく貝白く成也、貝數三百六十也、內に金箔を置て、對々に四季の草木、源氏の繪を書也、對(ツイ)末(マツ)を見るがごとし、

師傳に、對まつとは、俗に云歌がるたの事也、雄貝雌貝の名利は、丸貝をわけて見る時、左を雄貝と云、右を雌貝と云、雄貝には耳出る、雌貝には耳出ざる也、口傳、

桶に貝入樣事、丸貝十二を二ツに分れば、廿四に成、雄貝十二はうつむけにして、頭を內の方へし

て廻り詰にして、雄貝十二はあふむけて、頭を內へして廻詰にして、貝のすれあはぬ樣に綿にて能詰て入、蓋をする也、殘は別の箱へ入る也、如此して貝桶を片々宛、人夫にもたせて、むかしは二行に成て步也、

師傳に、綿は木綿の打綿よし、古法は請取渡の時、桶を取扱所作あるゆゑ、三百六十の貝を一對に入ては重きゆゑ、如此十二宛つめたり、今は桶を一對、輪具に入るゆゑに、雌貝三百六十を片片へ入、雄貝三百六十を又片々の桶に入る也、〇中略輪具を今の人かいこ舟とも云、輪具長さは三尺高さ五寸、幅は內のり一尺五六寸、前後の棒通の長さ一尺九寸、木二本宛立て、上に棒通をする也、檜の木地をも用ゆ、又墨にて塗事も有、〇圖略

〔榮花物語十六本の雫〕かゝるほどに、霜月〇治安元年になりぬ、このころ中宮大夫にて、法住寺のおとゞの御子〇藤原爲光子齊信の、大納言におはする、御子あまたおはしぬべかりしを、みなうしなひ給て、たゞ姬君一人をぞ、えもいはずかしづきたてゝもたまへる、〇中略此殿の三位中將〇藤原道長子長家ひとりおはすれば、それにやとおぼしたちて、むことりきこえ給、としごろは、何ごとをかは、たゞこの御かしづきよりほかの事なくおぼしたれば、御てうどどもよりはじめ、よろづの御具どもかゞやくやうに、漢書の御屛風、文集の御屛風どもなど、ゑあつめ給なれば、げに內東宮にまゐり給はんとたえてみえたり、さてむことりたてまつり給、女房もとよりいとおほかるとのなれど、心ことにえらばせ給て、二十人、童四人、ゑもづかへおなじ事也、物ごのみをし、むかしより物のはなやかなるわたりにて、いみじうゑつくし給へり、

〔赤松記〕政則御緣邊定り、細川勝元勝元號龍安寺殿の御娘、洞松院殿と申て、比丘尼御所にて御座候をおとし被申、政則へむかひとり御申候、めし樣と申たるは此御事なり、然れば安田中村高田三箇鄕地頭分を勝元よりめし樣へまいらせられしにより、めし樣わたし領所と被仰候、

〔建内記〕嘉吉三年六月三日丁亥、九州大内娶山名故中務大輔熙貴女、十六歳 熙貴者、當時山名修理大夫入道常捷養子也、仍彼女者養孫女口歟、官仕普廣院殿、義教足利 其後退出云々、山名總領右衛門佐持豐爲猶子之分遣大内許云々、大内三千貫送修理大夫入道許爲出立料云々、今夜門出、先向大内之京之雜掌安富烏丸宿所、今夜卽進發、路次之間爲兵士、右衛門佐出五十騎云々、金吾者播州新守護也、匠作者作州新守護也、寺領本所領任雅意振威勢之時分也、彌爲扶彼助力者歟、莫言々々、

廿三日丁未、傳聞山名大夫入道女、爲嫁娶下向九州大内許之口口遇海賊奪取衣裳等、失財寶口口口兩人切腹云々、山名一黨奪取寺社本所之口口爲我物之間、逢不慮之賊難歟、莫言々々、

〔藩翰譜七上山内〕土佐守藤原一豐は、○中略 織田家に出て仕へし初め、東國第一の名馬なりとて、安土に引來て商ふ者あり、織田殿の家人等これを見るに、誠に無雙の名馬なり、されども價餘りに貴くして、買ふべき人一人もなく、空しく引て返らんとす、其頃一豐は猪右衛門尉と申せしが、此馬ほしく思へども求る事如何にも叶ふべからず、家に歸りて、世の中に身貧しき程、口をしき事はなし、一豐仕の初めなりか、る馬に乘て見參に入たらんには、屋形の御感にも預るべき者をと獨言いひしに、妻はつく〲と聞て、その馬の價いかばかりにやと問ふ、黃金十兩とこそ云ひつれと答ふ、妻さほどに思ひ給はんには、その馬もとめ給へ、あたひをばみづからまゐらすべしとて、鏡の筥の底より黃金十兩とり出しまゐらす、一豐大きに驚き、この年頃、身貧しく苦しさのみ多き頃には、この黃金ありとも知らせ給はず、いかに心づよくは包み給ひけん、されども今此馬うべしとは思ひもよらざりきと、且は悅び且は恨む、妻はのたまふ所ことわりにこそ侍れ、さりながらこれはわらはが父の此家に參りし時に、この鏡の下に入れ給ひて、あなかしこ、これよのつねの事に用うべからず、汝が夫の一大事あらん時に參らせよとて賜ひき、されば家まづしく苦しむなどいふ事はよのつねのならひなり、これはいかにも堪へ忍びても過なまし、まことか此

度都にて御馬揃へあるべしなど聞こゆ、もしさもあらんには天下の見物なり、君また仕へのはじめなり、か丶る時ならでは、屋形にも傍輩にも見知られ給ふべきよしもなし、よき馬めして見參に入れ給へと思へばこそまゐらすれと云ふ、一豊やがて其馬もとむ、程なく都にて馬揃へのありし時織田殿、この馬御覽あつて大に驚き給ひ、○中略山内は年頃久しき浪人と聞く、家もさぞ貧しからんに、買得たる事の神妙さよ、且は信長の家の耻をもす丶ぎ、且は武士のたしなみ、いと深しと感じ給ふ事大かたならず、これより次第に身を起せしといふ、誠にや、

〔甲子夜話六十九〕林子云キ、頃日豚兒、皝寄合阿部大學家モト忍チ領シ、白川ニ轉封セルノ支流ニテ、五千石ノ家ナリ、宅ノ文字集ニ赴シ席上ニテ、ソノ家ノ舊コトドモノ話アリテ、池田勝入ガ笹ノ雪ノ刀ヲ見タリトテ、歸テ咄シケリ、此刀ノ其家ニ傳ハレル來由ハ、永井傳八郎直勝、長湫ノ戰、勝入チ討取シコト、世ノ普ク知ル所ナリ、笹雪ハソノ時ブン取物ナリ、直勝後封侯セラレ、右近大夫トイヘリ、永井右近大夫女子ノ中、醜女アリテ、年長クル迄緣談スル人ナシ、大學ガ祖コレヲ聞テ、人ヲシテ永井ノ家ニ緣組ヲ申込、聟引出ニ笹ノ雪ヲ所望ス、右近大夫承諾シテ緣ヲ結ビ、約束ノ如ク引出物セシ故ニ、今ニソノ家ニ傳ハレリト云、此頃武邊ノ盛ンナルコト、百載ノ後ニ聞テ、儒夫モ志ヲ立ベキ許リノコトナラズヤ、愛妾換馬ヨリハ、何カ許リカ愉快ナル故事ニテ、武夫ノ鑑タルベキコト也ト、

〔大江俊光記〕元祿十年九月八日、おまん、今夕暮而、舟ヨリ直ニ吉田光格所へ祝言、○中略

おまん道具

小袖たんす	一	桐長持ぬりため	二	白長持	一
葛籠	一荷	挾箱	一荷	衣桁	一箱
屏風	一雙	貝桶	一對	長刀	一振
小袖上下	十三	帶	九筋	夜物	二

ふとん　二　鏡臺具　櫛臺具
長持引出挾箱蒔繪類、何某肝煎、

〔大江俊光記〕元祿十三年六月朔日、今入夜、問屋長左衛門方、能登祝言ノ云入遣、　十五日、亥刻計ニ、中西長左衛門ヨリ嫁女ノ道具來、○中略

長櫃　五（內塗三、白二、）　小袖單笥　一對　葛籠　一荷
道具置棚　一　衣桁手拭掛　一箱

〔大江俊矩記〕寛政四年五月廿九日丙寅、善次郎妹、彌差越度旨、相談治定也、　廿五日壬辰、今宵秉燭過荷物來、長持三棹、簞笥二ツ（各有油單）也、靑侍一人、口上ニて右之通爲持差越之旨演說、蛤吸物三種肴ニて酒爲給、下部向十三人同樣、相濟後、使ノ侍へ引延紙二束、白銀一分、下部十三人へ半紙二折、鳥目二百文ヅヽ一統遣之、

〔大江俊矩記〕寛政十年八月一日壬辰、小野本間故兵部卿法眼息女お町、（未廿四歲、當年）大賀肥後守宗跡江緣組、　十月十四日甲辰、お町引越ニ付、爲誘引山口相模守殿、晝頃より此方へ來駕、荷物長持二棹、簞笥一對、雜具五品、釣臺乘、已上五荷、今朝小野より差登、先御里坊ニて人足支度、宰領使者兼帶、文治一人添、此方へ來、何か申含且荷物目錄（竪）壹通、土產物目錄（竪）壹通、同橫目錄一通、手前にて書認置、文治へ渡、相模守殿へも相談申、共ニ點檢有之、亥刻頃、荷物大賀家へ差遣、文治へ引祝儀、延紙二束、封銀壹ツ、人足へは兼約ニ付、其席ニては不出、內々本間家へ渡有之也、支度は無之、祝酒計出候筈也、

〔天保集成絲綸錄十一〕寛政十一未年十月
　大目付江
淑姬君樣（○德川家齊女、嫁尾張德川齊朝、）御道具通り候於屋敷々々、上下著候家來、熨斗目著候格之者江は、常

之熨斗目上下著させ、外之者ニ者、服紗小袖麻上下爲ㇾ著可ㇾ申事、

一對之羽織著候足輕

右之通爲ニ警固ㇾ出し可ㇾ申候、人數之多少者、高ニ應じ可ㇾ爲ニ心次第ㇾ事、

一御道具通候節、何茂つくばい可ㇾ申事、

一水桶者、出し申間鋪事、

一往還之人、留ニ不ㇾ及候、

但見物之者ハ拂可ㇾ申事

右御道具、屋敷前通リ候面々江可ㇾ被ニ相觸ㇾ候、

十月

寛政十一未年十月

淑姫君樣御入輿御道具參候初日、殿中詰合之面々、幷掛り之面々、服紗小袖麻上下著用、二日目より平服之事、

一御道具參り候日割幷刻限

十一月

朔日　朝巳刻　夕未中刻　　二日　朝辰刻前　夕午中刻　　四日　右同斷

右之通伺相濟申候、依ㇾ之爲ニ御心得ㇾ申達候、以上、

十月　　横田十郎兵衛

蜂屋源八郎

〔政化間記〕寛政十一年十一月朔日、今日淑姫君樣御入輿御道具、尾張殿御守殿江被ㇾ遣、御留守居衆差添、右ニ付高家詰衆御奏者番、御禮過居殘御歡申上、於ニ席々ㇾ御老中御謁、

但今日御道具、巳上刻兩度參候、二度目御道具參候迄、殿中服紗小袖麻上下、明日より平服之旨、

同二日同三日御道具參る、

〔大江俊矩記〕享和二年二月二日癸卯、おまつ事おあや、今夕良辰ニ付、河原町北小路美濃守俊任朝臣息、同山城權介俊廣妻ニ入輿、萬事此方世話にて形付、則今夜りつ誘引、步行ニて遣、萬端殊外質素之取計也、

一荷物之事、表向ハ昨夕遣候分ニて、書狀目錄等ハ、今日土產物と一所ニ遣了、實ハ長持二棹、簞笥片、琴箱等ハ、舊臘廿九日夜、密々にて贈遣也、雇人兩人にて、三度に運候也、勿論祝儀物酒等之世話無之ため也、殘ル簞笥片ハ引越後、跡より爲持遣候筈也、今日遣候書狀昨日附也目錄等如左、

猶々略使御宥恕可被下候也

一筆啓上仕候、春寒之節、彌御安全可被成御凌奉賀候、然者明夕、艷女爲致參上候ニ付、今夕良辰、荷物類目錄之通送進仕候、目出度御請取可被下候、恐惶謹言、

二月一日　俊矩

北小路美濃守殿

右之通杉原橫文、美濃紙上包也、同樣之返書來、

覺

一長櫃　貳棹　一簞笥　一對　一金子　三十兩

以上

〔大江俊矩記〕文化十二年二月廿一日丁丑、順子依吉辰、今夜內々嫁堀河三品家、○中略

一持參金三十兩相渡、帶刀爲持遣、於彼家、儲渡、蜂須賀帶刀令披露由、卽彼家雜掌名前之印形、幷年寄松崎名前書も載、連印之請取書來、　廿三日己卯、今夜殘之荷物、長持一棹、簞笥一棹、白木之雜長

持一棹、以上油單、有ニ春慶塗櫛簞笥一、足袋箱一等相添、清介以下六人相雇、帶刀付添、清八提燈持にて運遣、

〔言成卿記〕天保十二年二月十三日、今日舍妹殿樣荷物、九荷半密々阿野家ヘ被遣了、家司小野政春爲使、祝酒引出物等有之、

〔將軍德川家禮典附錄十一〕右大將樣御婚禮之次第天保十二辛丑年五月廿八日

一右大將樣江、家定公、有君御方御緣組被仰出候ニ付、總出仕有之、○中略

姬君樣御入輿御道具出來之內

一御貝桶　濃梨子地、若松唐草兩御紋ちらし、　一對

御覆唐織七寶、御紋から草兩御紋付、御日覆猩々緋、御紋付、

一陰陽御弓　黑塗名書　一箱

一御輿　黑塗、若松唐草兩御紋ちらし、　一挺

內御摸樣、御日覆猩々緋張、兩御紋二つ充、白ぬめ黑蛇腹、總ふち黑糸、御金物濃めつき、兩御紋唐草毛彫、紅唐糸四ツ打紐付、御雨覆猩々緋、兩御紋付、白羅紗蛇腹、裏紅綸子、御紐紫皮付、

一御長刀　濃梨子地高蒔繪、若松唐草兩御紋ちらし、　一振

御袋猩々緋、兩御紋付、御裏紅綸子、御紐唐糸、御房付、御雨覆黑羅紗、御紋猩々緋ニ而兩御紋五ツ、御裏紅綸子、唐糸之御緒房付、

一御挾箱　黑塗、若松唐草兩御紋ちらし、　一對

御覆唐織七寶、兩御紋、御雨覆猩々緋、兩御紋、

一御日傘　一本

裝束紫糸總、朱塗、ほね黑塗、兩御紋、御柄蠟色塗、若松唐草兩御紋ちらし、御金物濃めつき兩御

紋付、唐草毛彫七子入鍍金、御紐唐糸房付、御雨覆猩々緋、兩御紋付、御紐唐糸房付、

一御傘　一本

天井青紙張、すそすが糸かけ、御柄黒塗蒔繪、御金物鍍、御紐何も御日傘之通リ、御雨覆同斷、

黒塗、若松唐草兩御紋ちらし、
一御茶辨當　一荷

御覆猩々緋、兩御紋付、

同斷
一御裝箱

御金物濃めつき兩御紋付、唐草毛ぼり七子入、紅唐糸緒付、御覆黒羅紗猩々緋、兩御紋付、

濃梨子地、若松唐草兩御紋ちらし、
一御厨子棚　一飾

御覆花色純子、兩御紋付、

御飾御道具

一十二御手箱之內御小道具

丸御鏡二面　角御香合四　丸御香合二　長御香合四　御小道具一通

一御短冊箱　一

御硯石一面　御水入一　御筆一對　御墨一挺　御封一本　御短冊十二枚

一御元結箱　一

御繪元結一對　御元結包一對

一御料紙硯箱　一通

御石一面　御水入一　御粘入一　御封一本　御錐一本　御筆一對　御墨一挺　御墨
さし一本

一御沈箱　一

四角御香合六

一御香盆

御つぼ香爐一對　御重香合一　御香ばし

一御卷物　二卷

一御色紙箱

御色紙十二枚

一小御文箱　二

一御古元結箱　一

一御拂箱　一

御拂紙二　御櫛三十三枚

右御疊紙十二枚

御櫛拂一對

右御疊紙一對

濃梨子地、若松唐草兩御紋ちらし、
一御黑棚　一飾

御覆花色純子、兩御紋付、

御飾御道具

一御掛物　二幅對

村梨子地、若松唐草兩御紋ちらし、
一御軸盆　一

同斷
一御香盆　一

御小道具

同斷一御冠棚　一
御香爐付
一御手鑑　二通
一御軸物　二通
一源氏物語　一箱
一十二ヶ月歌仙　一箱
村梨子地、若松唐草兩御紋ちらし、一御碁盤　一面
碁笥共
同斷一御將棊盤　一面
同斷一御雙六盤　一面
一御料紙硯箱　二通
村梨子地、若松唐草、內兩御紋ちらし、一通、村梨子地、摸樣蒔繪、一通、
濃梨子地蒔繪一御見臺　一
村梨子地蒔繪一御文臺御硯箱　一通
御小道具共
同斷一御文臺　一
同斷一御硯箱　二
同斷一御色紙箱　一
村梨子地、若松唐草兩御紋ちらし、一御十種香御箱　一通
○中略
一御式正御夜物　七對

紅厚板一對　唐織一對　純子一對　綸子御地黑縫箔竇盡し、一對、縮緬御地赤、竇盡し、一對、綸子紅白横段一對　紅兩面御小寢卷一對

一御蒲團　六

緋綸子御縁附一對　純子御縁なし一對　紅兩面一對

一御祝御枕（御祝御くゝり枕之外）　一對

一御輿蒲團　一

一御火燵蒲團　二

〔言成卿記〕弘化三年正月廿五日、豐姫荷物被贈、簞笥一荷、二ツ長棹六荷、釣臺一荷、別段自儀同芳志金子二十片、内々被贈云々、廿七日、予妻婦豐姫、儀同賢受公養女、今日就吉辰入輿之都合、依之荷物廿五日被送、前日雖多分家公御精進日、先方無差支八、前々日可被贈御臺對有之候、

〔賤のをだ卷〕翁○森山孝盛が姉なる人、大久保伊兵衛（五百石、大御番酒井飛驒守組）と云人の許へ婚姻有しに、道具の役遣、幷婚禮の日の腰迎（御先手青木右京）、腰おくり（兩番與頭加藤傳左衛門）の作法、聟入舅入の時、大刀馬代の取かはし、彼是中々當時小身物にて、其位の婚禮は絶てなし、久しく聞も及ばず、扨一年ばかり有て、彼大久保氏、吉原の遊女を連來りて長屋に圍ひ置たり、此事に依て夫婦の中も睦しからず、終に此方より姉を取戻されたりしが、道具はいふに不及、土産金六十兩、耳を揃へて使者をもてかへしたるに、仲人は父の甥なりける依田四郎左衛門とて、（大久保氏相番なり）翁が爲には從弟なり、此時二條の取人に登りて留守なりけり、此使者への挨拶に父の申さるゝは、此金子に於ては、仲人依田四郎左衛門、在江戸に候はゞ御挨拶の申分も可遣之候へ共、仲人留守のことに候儘、先預り置候と申やられたり、此事日記に志るして今に有、其頃はかやうにこそ有つれど、今の縁組は、先家筋よりも緣女よりも土産金の多少を論じ、又離縁の時も、始より彼金の無相違戻らんことを氣遣ひ、聟の

服裝

方にては、戻さざらんことを工夫することになりぬ、昔とは大なる違ひにて耻かしきことなり、

〔蛩の燒藻下〕大久保彌三郎と云し人は、御先手をつとめて、翁〈○森山孝盛〉が爲には養母方の伯父なりけり、〈○中略〉飛兵衛〈○彌三郎姪〉が幼きより伯父の養ひ置れて、後は賴母〈○彌三郎孫〉にめあはすべきあらましにて養育せられたり、〈○中略〉ゑかるに彼德右衛門〈○彌三郎家人〉がすゝめけるにや、伯父の養ひ置ける三輪が娘を戻して、別に妻を迎ふべきよしを、信敬院〈○彌三郎妻〉もて言出たり、初めかの娘を養ひとり侍る時、持參金百兩、支度金二百兩そへ侍るべき內約あり、然るをかの德右衛門がゑわざに、まだ彼女の命の厚薄もゑらざるに、いつしか內約の金をば追々に乞取てつかひはたし、わづかに殘金五十兩計になりたるゆゑに、其後は三輪も無心許思ひて、翁と甲州〈○彌三郎妻親族〉の印書なくば、何事も內用を辨へまじきの由云切て、其後は信敬院をそゝのかして、德右衛門が色々に申遣せども、三輪更にうけひかず、ゆゑにはや殘れる金は少なし、云やることはうけひかず、彼女を戻して、又餘所より金もて來りぬべき女を迎へ侍るべき工みなり、〈○中略〉餘り惜に、未だ緣も結ばぬ內に、內約の金子を乞取てつかひはたす程の仕合にて、行末返濟の手だて侍るべき、幼女差戻さるゝ事に於ては、某はいつまでも挨拶に及びがたしと云切て歸りぬ、

〔江家次第二十〕執聟事〈近代例〉

聟公來、〈布袴、往年留勅下、重着衣冠歟、近代一夜例無其事、○中略〉聟公解裝束、掩衾、〈○中略〉次奉烏帽子狩衣、〈妻家儲之〉聟公著之出帳前、次供膳、

〔婚禮法式上〕婚迎之部

一聟殿の衣裝の事、下には肌と云て、白き袷也、中には何にても、上には白綾のさいはひびしを織たるを著也、烏帽子ひたゝれすあをうらうち、何にても著用あるべし、是も人體によりて著用有

べし、只薄き色を用申さず候、何色にても不苦也、色直し候時は、御料人より參候衣裝を著用有べし是法式也、

〔婚禮推陳記〕男裝束の事、濃縹(とは俗に云濃花色也)の板の物、下著白小袖、或は縹の下小袖、濃縹の上下を著する事、世の風俗なり、むかしは男も白小袖に白直垂を著用して、三ッ目まで白裝束にて、色直し有と申傳へたり、色とは白色を申詞也、

〔我衣〕町人衣服之事、貞享年中迄は、夏麻ノ單羽織ニサイミノ帷子ヒトヘ多上田島ツムギ、或ハキヌ郡内ノフトリ、是ヲ聟入リニモ、寺參ニモ著シタリ、

〔江家次第二十〕執聟事(近代例)

姫公出(必用二藍濃袴、依不得人之心、後出云々、)

〔娶入記〕よめ入の條々

一衣裳は、うは著にさいはひ菱、白き小袖うちかけたるべく候、したぎはねり、中には何にても著用有べし、

一なつは、まるすゞし、こしまきたるべく候、たゞしたんだいによるべし、

一むねのまほり御かけの事

〔嫁迎記〕よめいりのよいしやうの事

一はだのうへに、こうばい、そのうへに、ぬひにてもはくにてもしろあや、もんはさいはひびし、かづきは、しろをりもの、是もさいはいびし、うきをりものにて候、

〔婚禮法式上〕婚入之部

一婚禮の當日、御料人の衣裝の事、將軍家の姫君、其外高位の家の姫君は下に白き練の袷に白き小袖を重ねてめし、其上に紅梅にても何にても練貫をめし、白き細帯をして緋の袴をめしうち

かけには、ひとへの上に何色にても五ッぎぬ、其上に白綾の表著をめし、からぎぬをめし、裳をめして、扇をもたせらるゝ也、五ぎぬ、表著、からぎぬ、裳、緋袴などの拵樣故實は、公家高倉殿などの沙汰し給ふ事也、公家に尋ねらるべし、又大名などの娘は、肌に白練の袷、うらも白き絹也、其上に白練に、うら白絹の小袖二ッほど重ね著て、其上に紅梅にても縫にてもはくにても、此内一ッめし、扨白き細帶をして、緋の袴をめして、さてうちかけには、さいはひ菱を浮織にしたる白綾の小袖をめすなり、うらも白き絹也、右何れもかづきをめし候、此かづきも幸菱の浮織にしたる白き綾のひとへ也、かづきは女の顏をかくす爲也、御輿よりおり給ひ、御座鋪迄いらせらるゝ、時にかづき給ふ也、小袖は寒暖によりてうすくもあつくもめし候、紅梅とは、經糸は紫、緯糸は紅にて織たるもの也、筋はなし、縫とは、地は白綾、又白綸子などのうへに摸樣をぬふ也、裏は白き絹也、はくとは、是も地は白綾又は白りんずなどのうへに、金銀のはゝにて摸樣を置也、ねもじ　は練の事也、紅の袴著ぬほどの人の帶の地は、厚板薄板にて、ひとへ廻りにして、中に鳥の子の紙をいれて、摸樣を金みがきに玄たる物也、帶の巾は、一幅を六ッに剬、又は八ッ剬也、結樣は前にて結び下る也、此帶は裳の引こしをかたどりたる物也、將軍家の大上臈小上臈も、常の時、紅の袴を略し給ふ時は、此帶をむすび給ふ也、厚板とは唐織をあつく織たるもの也、薄板とは唐織をうすく織たる物也、から織とは、地はき糸にて、紋がらは五色のねり糸金糸等をまじへて浮織にしたる物也、金みがきとは、一面に金にする事也、かづき著やう、右の袖を頭の上へおりかけ、其上へ左の袖を折かけ候也、見えぬ樣に針をさしても不苦候、仕立やうは常の小袖のごとし、ひとへなり、えりを廣く、ひたひへふかくかゝるやうにする、兩袖を頭の上へさげ重ねて、針にてさし置也、かづきは御こしより御出候て座鋪までめして、座敷へ御なほり候時、かづきは御ぬぎ候也、少の間かりそめにかづくさきけ、そでもあげず、針しささぬ也、○中略

一夏の衣服の事、四月朔日より肌に白練の袷をめし、是もうらは白絹、上著は白綾又はりうもんなどのあはせめし候、うらは白絹也、帶は冬の通り也、其上にこしまきをめし候、高位の女房は裳をかけられ候故、こしまきは用られず候、將軍家の大上臈小上臈などは裳をめし候、中臈なども式正には裳をめし候、何れも略儀の時は、五ツぎぬ、うは著、から絹裳を略して、紅の袴にこしまきを用られ候、上らう抔は、丸すゞしを用らるゝ也、丸すゞしとは裏表共に白きすゞし也、こしまき仕立やう、常の小袖のごとし、袖も身も少し大にする、背中に襟をあてゝ、兩腋の下へまはし、ひぢにておさへ置也、見えぬ樣に糸にてとぢ付たるもよし、これは本式にはあらず、夏はうちかけはせぬ物也、かづきは白ねり也、五月四日までおなじ、五日より肌に白ねりのひとへをめし、そのうへに表ねりぬきにて、うらすゞしの袷めし、帶をして、こしまきをめし候、かづきは白ねり也、帶こしまき、前におなじ、ねり貫は、たて糸を生糸にして、ぬきはねり糸にて織たる物故、ねりぬきといふ也、此ねりぬきはかうしにて、碁盤の目のごとく、たて横に筋を織たる物をめし候也、是を格子の織物と云、五月中同じ、六月朔日より肌に白帷子をめし、其上に同じく白帷子をめし、帶をして、こしまきをめし、白練のかづきをめし候、帶こしまき前におなじ事也、七月中同じ、八月中同じ、九月朔日より、袷其外前に同じ、九日より小袖なり、是も小袖其外前に同じ事也、四月朔日より九月八日迄こしまきをめし候、かづきは四季共にめし候、かづきは顏をかくし候爲也、九月九日より三月晦日迄、うちかけをめし候事なり、

〔貞丈雜記三小袖〕一婚禮に、白き小袖を用る事、葬禮の學び也と、今世上にいふ人あり、甚あやまり也、葬禮に白色を用るは、悲しみの時なれば、美麗彩色をもとめず、物をかざらざるを本意とする故也、婚禮に白色を用るは、婚禮は人倫の大本、白色は五色の大本也、故に白色を用る也、用る所の白色は同じけれども、本意は同じからざる也、又產の時白色を用る本意も、婚禮に同じ、

〔婚禮推陳記〕嫁の出立の事、肌にねりの白小袖壹ッも二ッも著候て、其上に綾の白小袖、帶も白き菱の綾、其上に白幸菱の小袖をかいどりに著るなり、袷の比も下に白き袷、上に白幸菱の袷、縫帶に腰卷也、帷子の比、麻の帷子は略儀也、幸菱又はねりの袷か、或は單物は式也、(中略)師傳に、女中の出立に、一ッ襟二ッ襟と云事あり、四月朔日ゟ九月八日迄の間は、一ッ襟なり、九月九日より三月晦日迄は、かい取を上に著るゆへ、二ッ襟と云也、縫帶は四季ともにするが法なり、かいどりの比は、前の右の方にて結さげる也、板の物、から織、地無綾の類を著る、女中方は冬も縫帶めさるゝ也、下つかたの女房も、かいどり著る時、常の帶を前にて結は、是をかたどる也、九月九日より九月中迄は、下著の白小袖の上に帶をして、あい著するに不及、上にかいどり也、十月朔日より下著にあい著をして、其上にかいどりなり、時節により下著に白小袖二ッ著し、其上にあい著をして、上にかいどり著る事も在、色直しより前は、あやねり、白輪子、銀箔、地無の類也、腰卷は、四月朔日より九月八日迄、練に白生絹うらを付たる袷也、色直し前は、右の脇にて左前に合る也、色直し以後は、常のごとく本前に合る也、又かづきは、ねりの袷も有、ひとへも有、地によるべし、常に用るかづきは、黒紅紅梅の板のものに色々の縫有、かづきに箔はおかぬもの也、祝言には練を本とす、おちつかたは紗綾を染て用ゆ、年比によりて、丸袖ふり袖の替有、かづきは輿の中より〔著〕し出候て、著座の所にて御かいぞへとりてまゐらするもあり、又待上臈御出向の所にても、とりてまゐらする也、

〔婚禮問答〕婚禮の姫君、わたぼうしかぶらせ可レ申哉、わたぼうし、古法に無レ之候、姫君は白あやさいはひびしのかづきをめさせ可レ申候、めしつかはれ候女房衆は、白ねりのかづきたるべし、かづきは常の小袖にかはる事なし、かづきて右の袖をかしらの上へをりかけ、其上へ左の袖を折かけ候物也、みえぬ樣に針をさしても不レ苦候、

〔民事慣例類集婚姻〕婚姻ノ席ニハ、新婦必ズ打掛(其品ノ粗悪ハ論セズ)ヲ著スル例ナリ、町方ニハ此例ナシ、駿河國有渡郡安部郡

〔我衣〕寶永迄ハ、大名ハ格別、平人ニ白晒笠緒ヲ付ルコトハ、婚禮或ハ山王ノ祭禮ニカブルヨリ外ハセズ、享保ニ至リテハ、黒チリメン綿入ニナル事ナリ、

○按ズルニ、俗耳鼓吹ニ載タル神樂獅子ノ曲ニ、鶴のあゆみのゆたやかに、よめり小笠の菅搔や、トアリ、娶入ニ笠ヲ被リシハ蓋シ被キト同ジク、面ヲ掩フ爲ナルベシ、

〔婚禮法式上〕婚入之部

一婚入の時御料人、幷召連候女房衆髮結やう、髮にはかづらを入れ、わけめを三所立、入元結にてむすび、其下を水引にて三所結也、若き人は一ところゆひ、又其を平元結にてゆふ也、眉は本まゆを作るなり、此法式は祝の書を見るべし、

〔婚禮問答〕姫君幷召れ候女中、髮は下げ髮たるべきや如何、髮はかもじを入れ、わけめを立て、大元結にてゆふべし、今時すべらかしと申體也、眉は本まゆ成べし、童女はわけめ一所、ぼうまゆを作るべし、

〔婚禮推陳記〕嫁の出立の事、○中略かみはすべらかして童に結、眉は年比によりほう〳〵眉にも、大かた眉にも、三か月まゆにも帚て、玄んを指べからず、○中略其外は、○中略すべらかし、又はさげがみ也、

〔後松日記十四〕今の世の手ぶりは、やんごとなきも、わがなみも、わらは女にて(はなそめたるばかりにて、まだ童姿也、)嫁す常の例也、右き代にも有事なれども、思へばひが事なるべし、父母嫁をゆるせし上は、男子は冠し、女子は笄して後こそ、婚禮をば行ふべきなり、されば女御などは、必著裳の後に入内し給ふにて知べし、

〔婚禮法式上〕婚入之部

一御料人むねの守懸候事、襟にうちかけの上に懸られ候、守袋の緒の長さは、鼻紙所へ屆候程にする也、懐などへは入不申候、是は愛敬の守也、守の法は、神主出家などの覺悟する事也、常には胸の守は、懐の中に懸る也、式正の時は、うちかけの上に懸る也、

〔婚禮里出之部〕婚禮胸守用意の事、是は夫婦愛敬の守と云、縫立七寸四方の袋を片々江六ひだづつ十二ひだ取、緒を五尺二寸にして、一方を七寸宛打分て守袋江通し、一方はあげまきに結ぶ、一方は叶結にして打添あり、本尊は、當流は昔より如意輪觀音を用る、猶其姫の守本尊も、一ツは杵、一ツは臼、本尊と同じく入る、本尊厨子入也、本尊の長ケ一寸八分也、袋の地、白綾幸菱、紐も白し今

一替袋、赤地の錦、又は今織赤裏、紐も赤し、寸法右のごとし、

〔婚禮法式上〕婚入之部

一婚入の時、供の侍衣裝の事、何色にても濃色のすあをひたゝれを著する、すべて薄き色をば忌申候、小袖は練貫也、摸樣かたより裾まで、皆横筋を織たるを用ゆべし、

一鞘卷の刀を帶し、大刀打刀をば、供の者に持する也、○中略

一婚入の時、供のもゝだちは、返しもゝだちとらぬもの也、返し股だちとは、裏をそとへ返して取をいふ、是は忌也、袴の兩のそばを帶におしかふべし、是を小もゝだちといふ也、

一輿舁の人夫、諸道具持荷ひ候人夫などの衣服の事、十德に四幅袴を著し帶をする也、著し樣は四幅袴を著して、その上に十德を著し、又其上に帶をする事也、十德は、布を濃花色に染て、紋は白く出す也、仕立やうは、すあをの上のごとし、但兩脇を縫ふさぎたる物也、むなひもきくとぢもなし、紋はすあをにおなじ、四幅袴は、布を濃花色に染て、紋を白く染出て、四幅を縫合て袴にする也、長サひざの少下まで屆程也、前にも後にもひだ二ツ宛あり、左右に一づゝ也、相びきの所と裾と

に菊とぢの皮を付る、まちの左右と裾とにも菊とぢあり、紐は前ごしの紐長く、後ごしの紐短く、腰板なし、常の袴の紐のごとし、著る時、先後ごしをあて、前にて結ひて、偖前ごしをあて、紐を後ごしの上へ廻して前にて結ぶ也、帶は白布、又は白絹を四ッに疊む、兩はしは中へをりこみて帶にする也、帶の長さは、一まはしまはして、前にてむすぶ程の長サにする也、此帶といふは、十德の帶の事也、十德の上にする帶也、

四幅袴の下には、きやはんをする也、すべて股立をとりて、赤ずねの見ゆるは尾籠なる故、侍は繻子のきやはんをする也、輿舁の人夫抔は、きぬ又は布のきやはんをすべし、

〔婚禮推陳記〕輿舁、貝桶持、諸道具持人、裝束の事、動烏帽子には素袍四田町袴也、素袍袴の色は、かちんにして、紋に四ッ菱を付る也、素袍の紐は黑革、紐の幅八分にする也、半物草を履也、近代は小素袍に子持筋を付るなり、

師傳に、小素袍を打懸と云、身は一田町にゑり肩を明て、ゑりの付樣、肩衣のごとく、袖二幅、袖長一尺七寸、身長二尺五寸、かちん子持筋、割菱を五所紋に付る也、袴は前二田町、後二田町、まちは一幅、裾に括を入る也、腰板なし、著用小素袍より先に袴を著し、小素袍の前は帶に挾、後は放置也、古法は動烏帽子とて、〇中略烏帽子を著て、茶筅髮(俗に烏帽子下地と云)に結也、近代は烏帽子は略し、髮を常のごとく結て、小素袍四田町袴計也、略儀は廣袖に羽織のごとく仕立、かちん子持筋付たるを著す、俗に是を八德とも十德とも云、凡て物持下々皆著す、此時は四田町袴はなし、猶略す時は、召替、本輿舁、貝桶、挾箱、長刀、弓蟇目持は、十德を著し、外は對の羽織もよし、

輿渡人、貝桶渡人、其外供の侍は、折烏帽子に素袍袴也、衣類に二重染の服著べからず、盲刀、差べからず、鮫鞘黑骨の扇を不持、袴に括入てよし、返股立を嫌也、海なし鞍、螺鈿の鞍鐙用ゆべからず、梨地の鞍鐙を用ゆ、鞭も陰陽に籐を卷たるを用ゆ、

師傳に、官刀と云は、菷を不差短刀なり、鮫鞘を嫌は、鞘は刀の家也、家さめるといふ詞を嫌也、二重染とは、淺黃がへし、うのめ返しなど丶云を嫌也、其外薄淺黃、薄柹など丶云、惡敷響あるは不用也、黑骨の扇は、不祝儀に用ルゆゑ、吉事に不用、螺鈿の鞍は、靑貝の事也、梨地を梨金とも云、又遠所の供にて、袴の寄括にて步れざる時は、返し股立を取事も有、其時は妻どり妻挾にすると云て、返し股立とは云べからず、近代は烏帽子素袍袴を著す事なく、輿渡貝桶渡人は褐子持筋の長上下、かちん子持筋熨斗目、自餘は無地花色の半上下、無地花色の熨斗目を用ゆ、腰の替たるのしめを不用、折烏帽子とは、〈○中略〉俗に是を帆掛烏帽子とも、侍烏帽子共いへども、折烏帽子と云が本也、されば小笠原治部大輔宗長の御息女、武田甲斐守殿〈江○晴信〉婚禮之時、輿請取役人、烏帽子素袍袴に末廣を持、鼻高の沓を履たるといへり

〔婚禮問答〕婚入の供之侍共衣服、かちんの上下、無地のしめ、何れも子持筋付可申哉、古法上下の色、かちんにかぎる事無之、何色にても心次第也、すべてうすき色をば忌申候、無地のしめと申事、古法に無之候、のしめは、成長の人の著る事、古は無之候、練貫の衣ゞらを、のしたるを、のしめと云、練貫はいくらも筋を織たる物なり、されば のしめも筋を織たるこそ本式にて候へ、當時世上のしめ著用候事に候間、筋あるを用らるべし、無地のしめと云事は、古はなき事なり、今時のしめにこしがはりと云事ある故夫をきらひて無地を用るなるべし、こしがはりと云事を忌む儀ならば、總様肩よりすそ迄皆横筋を織りたるを用らるべし是本式にて、こしがはりにも無之て可然候、筋は横筋を用べく候、こうしに筋を付る事は、高位の人ならでは古は用不申候、子持筋之事、古法には曾而其沙汰無之事に候間、知らず候、〈○中略〉こしかきの人夫、諸道具持荷ひ候人夫などの衣服如何、十德に四幅袴たるべし、十德はすあをの上のごとし、但兩脇を縫ふさぎたる物也、むなひも丶なし、きくとぢもなし紋はすあをに同じ、四

幅袴は布に紋を染めて、四幅をぬひ合て袴にする也、長サひざの少下迄とゞく程也、前にも後にもひだ二ツづゝ有、左右に一ツづゝ也、あひ引の所と、すそとに菊とぢの皮を付る、まちの左右と、すそとにも菊とぢあり、紐は前ごしの紐長く、後ごしの紐短し、常の袴の紐の如し、きる時先後ごしをあてゝ、前にて結て、扨前ごしをあて、紐を後ごしの上へ廻して前にて結ぶ也、又十德の上に帶をする也、帶は白布、又は白絹を四ツにたゝむ、兩端は中へ折こみて帶にする、一まはし廻して前にて結ぶなり、

〔貞丈雜記三小補〕一今の世婚禮の時、腰かはり、腰あやなどゝ云名の、輿かはり、輿あきと云に似たるを忌みて、無地のしめと云物を著す、其無地のしめと云物筋を織らぬねりぬき也、昔は腰替り、腰あき、無地のしめなどゝ云事は、曾てなかりし也、末の世に至て、かやうの事はやり出て、法式の如くなる也、

〔婚禮法式上〕婚入之部

一婚禮の時、供之女房衆衣服の事、多は肌に白ぎぬの袷、其うへにしろ絹のわた入二ツ程著し、其上に縫又ははくなどの小袖を著し、帶をして、幸菱のうちかけを著す、裏は皆白絹也、白ねりのかづきを著し候也、かづきはひとへ也、帶は一幅を八ツ割りか六ツ割にして、ひとへまはりなり、中に鳥の子の紙を入る也、地は厚板薄板にて、こしを色をかへ、うす紅梅抔に染て前に下る、分金みがきにする也、是をこしあけといふなり、かづきの縫やう、前におなじ事也、かづきをぬぎ候時分は、座敷へあがり候節、何もぬぎ候事也、

一同じく夏の衣服の事、四月朔日より、肌に白ねりの袷を著し、そのうへに白綾などの袷を著し、帶をして、こしまきをして、かづきをめし候、帶は冬と同じ事也、こしまきは、表はすゞしにて、うらははりうらとて、絹をこはく張てうらにする也、表裏ともに色は白きなり、こしまき仕立やう前

に同じ、かづきは白ねもじのひとへ也、仕立やう前に同じ、五月四日迄此通り、五月五日より肌に白ねりのひとへを著し、其上に大上﨟小上﨟は、表は格子を織たるねりぬき、裏はすゞし也、御つばね中﨟頭中﨟衆は、表はすぢみすとて、筋を多く簾のごとく織たるねりぬきにて、裏はすゞしの袷を著し、帯をして、こしまきを著し、かづきをめし候、帯は前に同じ、こしまき幷かづき前に同じ、五月中おなじ、六月朔日よりしろかたびら二ツ著し、帯をして、こしまきかづき著し候、帯こしまきかづき前に同じ、七月中同じ、八月中同じ、九月朔日より、袷其外前に同じ、九日より小袖、是も小袖其外前に同じ、四月朔日より九月八日迄こしまきを著し候、九月九日より三月晦日迄うちかけをめし候也、

一うちかけは、帯したる上にうちかけきる也、うちかけは、九月九日より三月晦日迄著し候事、夏の内はうちかけせぬ物也、こしまきは、四月朔日より九月八日迄著し候事也、冬の内は腰卷はせぬもの也、

婚迎之部

一婚入候て二日目も、兩方の衆、白衣裝たるべし、

〔我衣〕寛永十六年頃迄ハ、武家ハ格別、町人百姓ノ妻トモニ、衣服甚麁相ナリ、女モ百姓町人ノ妻ナレバ準之、正保慶安頃迄、年々キヽンニテ、輕キ貧家ノ妻娘、武家ヘ奉公ニ出ル、次第々々ニ立身シ、上方ノ御服ヲモ拜領シ、我家ヘ歸ツテ、嫁スニモ右ノ拜領物ヲ著シ、〇中略故ニオノヅカラ世上ノ女子、目ヲ奢ラセ、有德家ノ妻子等ハ、手前金ニテ拜領物ノ如クコシラヘ著シ、右ノ麁服ヲ忘レタリ、

〔榮花物語三十六根合〕右の大いどのゝ大納言〇藤原教通子信家は、〇中略源大納言殿の姫君〇師房女麗子を、をさなくおはしましゝより、御子にし奉らせ給てかしづき奉らせ給、〇中略とのゝ大納言殿〇藤原師實をおは

しまさせ給、ぎしき有さま世のつねならず、三月（○康平二年）廿日の程なり、ごきうすきふたつゞ、うらうへのいろなる十二、くれなゐのうちたる、もえぎのおり物のうはぎ、蘇芳のからぎぬなどなり、日ごとにかへて、三日の程いとめでたし、

〔長秋記〕元永二年十月廿一日、巳刻著束帶行向二位經實所、（○藤原公實女嫁源有仁、中略、）三位殿（○源有仁、中略、）著裝束、（織物直衣、著織物紫指貫、濃打衣出之、裏濃蘇芳衣三、濃單衣、濃下袴等也、）著用了帶野劍持笏扇給、（件扇下官調進、施泥繪、不用橫目、是名義也、）乘檳榔毛御車、

〔兵範記〕久壽三年二月廿八日庚子、申刻許向權辨亭、（○中略、）右衞門佐光宗令嫁第三女子也、（○中略、）秉燭以後、女房等列居東西幷所々、上臈女房二人、著織物表著裳等、次四人、例五衣著裳、已上皆著濃袴、童女二人、蘇芳衵五、青單、濃打衵、濃袴等著之、雜仕二人、山吹匂衵三、（在帷、）

〔桃華蘂葉〕忠順記永曆二年正月廿九日、中納言中將（○藤原實家）嫁娶、今夜女房已下裝束、

女房廿人裏蘇芳衣五、（龜甲文）青單、濃打衣、柳唐衣、白裳、濃袴扇、各無表著云々、

童二人、裏濃蘇芳衵五、（龜甲文）青單、濃蘇芳衣、著濃打衵、裏濃蘇芳衿衫、濃袴、泥繪扇、

半物二人、裏濃蘇芳衵五、（龜甲文）青單、濃打衵、柳唐衣、（立鶼文）濃袴、扇沓、

下仕二人、白衣五、白單、濃打衣、白打唐衣、濃袴、扇、

雜仕四人、裏濃蘇芳衵四、（龜甲文）青單、濃打衵、赤文□（帷、二人顯文紗、二人布、）懸紳（二人柳、二人白、）白裳、扇、（相橫目、所々續、）笠、尻切、

御樋洗二人、裏山吹衵、（立涌雲文）青單、白裳、扇、笠、尻切、

〔玉海〕治承四年六月廿三日甲辰、此日密々有嫁娶事、右大將良通（○藤原兼實子）通花山院中納言兼雅卿娘、（○中略）大將著直衣冠、（依略儀著直衣、但著濃袴、禮須著衣冠若布袴也、○中略、）女房等只著裳唐衣、不著表衣打衣張袴等、依略儀也、

〔吾妻鏡十一〕建久二年六月九日丙戌、大理（○源賴朝姉夫藤原能保）姬君、可嫁左大將（○藤原良經）給、其儀已在近々云云、仍姬君御裝束、（○御臺所御沙汰、賴朝妻政子、）女房五人、侍五人、裝束幷長絹百疋、（○幕下御分、賴朝、）可被沙汰送之由、兼日有

其定、被宛御家人等、女房裝束者、親能廣元等、於京都可調進之由申領狀之、惟義重弘朝綱等、又可進侍裝束云云、絹者所被宛善信義澄盛長知家遠元遠平已下也、而五龍分致沙汰、所殘分參期遲々、御氣色不快、召奉行人俊兼盛時等、於御前被仰其由、諸人恐怖之處、善信申秀句云、先立參著絹者、付早馬早參、未到絹者、練參之間遲引歟云云、于時御入興、彼輩事、無沙汰而止之、此間面々絹進云云、仍令請取于安達新三郎、明曉可持參京都之由云云、

〔玉海〕建久二年六月廿五日壬寅、此日左大將、〔○藤原兼實子良經〕渡別當能保卿、〔一條室町亭也○中略〕先是著裝束、〔布袴不著半臂、是故實也、布袴之時、不著半臂、表衣下襲如例、龜甲浮文織物指貫、白張單、白張下袴等也、白檜扇、帖紙付鏡、無文玉帶、蒔繪野劒帶之、余渡六角亭之時、所帶之海浦之劒也、持京極殿御笏、〕

〔吉記〕建久三年九月卅日、九條三位相尋云、亮陰中執聟裝束、可調儲吉服歟、初度出仕同可著歟、答云、予始通權辨定經母事、保元亮闇之時也、彼儲布衣裝束二具、〔一具練白濃推渡黃衣、一具無紋數薄色白裏白衣、〕共被平絹、幼少者料如此歟、依亮闇歟、平三品者、時之有職、世以許之、定有被存之旨歟、可被逐彼例歟、專可爲吉服也、

〔宗長息女婚禮記錄〕女中方衣類附諸道具寸法之事

一扇の繪やうの事、上﨟はうす地のつけ骨草花、中﨟はみがきつけの白骨、下﨟はさきひろく黑骨にねこま有繪に生類、女中にこのまざる事也、

一袖の紙の事、紙をもみて四ツに折也、先紙を能もみて夜露にうたせ、三枚重て二ツに折、又ひらの方より二ツに折、形一寸のべに四寸五分の楊枝一寸五分のべにさき、袖紙のうちへ入、右の袂にもち、左のたもとには、太布の手巾九寸四方二ツに折、その内へ八分の鋏を入るゝ也、

〔將軍德川家禮典附錄十一〕享保十六辛亥年十二月十五日大納言樣〔○德川家重〕御婚禮之御次第

大納言樣御召物、御婚禮之節、御色直前は、かちん無地御熨斗目、同色御長袴被爲召候事、

御色直後、かちん子持筋御熨斗目、同色子持筋御長袴、被爲召候事、

此御召物は姫君樣〔○伏見宮邦永親王女〕より被進候事、

亥五月十八日　　小笠原平兵衛

〔貞丈雜記三小袖〕或說に、古播磨國飾磨の里にて、藍をこく染て、かち色にしたる染物を出しけり、古歌に、

我戀はしかまのかちにあらね共あひそめてこそこさはしらるれ、トよめるを本として、婚禮には必かちん色を用ると云へり、舊記には、軍陣に用る事は見えたれ共、婚禮に用ると云事は見えず、こき色なる故、婚禮に用るも相應なる事なれば用べき事也、されども此色に限て必用ると云法はなし、

〔貞丈雜記五裝束〕一婚禮の時、すあふ、かたぎぬなどに、肩のあたりに子持筋とて、太き筋と細き筋を付る事、今時世上、法の如くに成たり、古は曾てなき事なり、舊記には見えず、ある說に、昔猪熊大納言と云人有しが、此人の裝束に、かの筋を好み用られしを、其頃世にゐの熊筋といひけり、此人子孫多かりし故、後には子持筋といへり、依之婚禮には、必此筋を用と云々、然れどもかの大納言、何の時代といふ事も知れず、何の書にも見えず、用ひ難き事なり、たゞ太き筋をおや筋とし、細き筋を子筋として、子持筋とはいふなるべし、後世の作意なるべし、足利殿時代の舊記、婚禮作法の書に、子持筋用る事なし、

〔幸充日次記〕寬延三年四月十五日丁亥、充賢入來、婚禮之次第幷覺書、又疊紙色目等、幷供隨身記左、御衣紋之切等貼紙、後日蝙蝠扇幷疊紙等圖可記之也、盃酌之後次第不同寫之、

覺　御婚禮御當日ニハ

一御所樣付のとし寄乘、あひねもじ、白りんずのかいどり、

一御色なをし、らんぎくもんの紅りんず、

一上らふ樣御ちの人は、紅りんずにおりすじのかいどり、

一若き衆は、羽二重のあい、白りんずのかいどり、
一御色なをし同道のひりんず
一ゑもどゆひも、銀金にかはり申候、
一何れもかみはすべらかし
一御所樣付御姫樣付計、その御さほうの御兩方計にて御とりもち、
一姫君樣の衆、つねの通、地くろ地白にてかもじかけ申候、
一御姫樣御めしもの、御あいねもじ、さいわいびしあや、
一御色なをし、紅さいわいびしの御あい御かいどり紅、かうばい御ふしかねの御はかま、
一姫君樣へ御たいめんも、御たがひにかうばいに御はかまにて候、
一あいぎやうの御守の事、こなたにては御座の御とこに御かざりあそばし候、御姫樣の御かけ遊し候御まもりは、上らふ樣の御はづし被成候と承候、
一まち上らふ樣、こなたにてはなんば中納言樣の御かみ御額あそばし、白裝束御色なをしまでも、こなたにて出來被下候、
一男方殘らず金色のしめ、かちんの上下、諸大夫衆かりぎぬにて御座候、(中略)幸充云、以上者美濃紙二枚横閉、女筆、案近衛殿女中より來乎、御簾中尾州姫君、

婚禮、(異式中略)○智公(著烏帽子、直衣、紅單、松重衣、雲立涌指貫、檜扇、帖紙)著座給、(女房相從、蒔繪野劍持之、置御座右方、)次婿君著座給、(白小袖、著打衣、松重濃袴、)陪膳女房、(著白小袖、練打掛袴、略之、○中略)

春　梅、表白、中紅、裏蘇芳、(從十一月至二月)　柳、表白、中花田、裏萌木、(同)　櫻、表白、中薄紅、裏赤花、(冬春)　花山吹、表薄朽葉、中白、裏黄、(同)　裏山吹、表黄、中朽葉、裏紅、(同)　躑躅、表蘇芳、中白、裏萌木、(三月四月)　藤、表薄紫、中白、裏萌木、(同)　棣櫻、表蘇芳、中紅、裏赤花、(二月三月)　櫻萌木、表萌木、中白、裏赤花、(同)　ツボミ紅梅、表紅、中

薄紅、裏蘇芳、(從十二月至正月)　紅梅、表裏トモ、中薄蘇芳、(從十一月至二月)　桃重、表薄紅、中白、裏萌木、(三月)　花橘、表
朽葉、中紅、裏萌木、(三月四月)

夏　卯花、表白、中蘇芳、裏萌木、(四月五月)　菖蒲、表萌木、中紫、裏紅、(四月五月六月)　瞿麥、表紅、中白、裏萌木、(五月六月)

盧橘、表朽葉、中白、裏萌木、(五月)

秋　萩、表蘇芳、中紫、裏萌木、(七月八月九月)　女郎花、表朽葉、中黄、裏萌木、(秋)　菊、表蘇芳、中白裏萌木、(九月十月)

白菊、表白、中摺紙代銀ハク紙、裏蘇芳、(九月十月十一月)　黄菊、表黄、中朽葉、裏萌木、(九月十月)　移菊、表紫、中薄紫、

裏萌木、(十月十一月)　龍膽、表蘇芳、中花田、裏萌木、(十月十一月)

冬　黄紅葉、表黄、中朽葉、裏蘇芳、(九月十月)　櫨紅葉、表コキ蘇芳、中紅、裏黄、(同)　蝦手紅葉、表薄萌木、中紅、

裏黄、(秋冬春)　青紅葉、表萌木、中花田、裏朽葉、(八九十月)　氷、表白ミガキ銀紙、中裏白、(十月十一月十二月)　雪ノ下、表

白、中薄紅、裏紅、(十一月十二月)　枯色、表白、中朽葉、裏薄色薄紫、(冬)

四季通用　松重、表萌木、中朽葉、裏紫、　蒲陶染、表蘇芳、中紫、裏花田、(自冬至春)　蘇芳香、表裏共蘇芳、中黄、

鳥子重、表白ミガキ、中銀、裏蘇芳、(幸充云、高橋采女正ヨリ、攝政公江當進所之疊紙御中陰用之色目也、本書横折二枚、○下略)

〔天明集成絲綸錄七〕天明七未年十月

種姫君樣(○將軍家治女、紀伊德川治寶)嫁ニ御入輿御供之面々

御留守居　大御番頭　大目付　御廣敷御用人　御留守居番　御目付

御徒頭　小十人頭　御廣敷番之頭

右加珍熨斗目同色半袴筋なし、

加珍熨斗目同色小持筋半袴、　種姫君樣御用人

法眼之裝束　御醫師

加珍熨斗目同色半袴筋なし、　御用達

半袴筋なし　　御同朋

右之外者、常之熨斗目、常之半袴可ㇾ爲ㇾ著用ㇾ候、

但腰替返小紋之上下無用ニ候

一常ニ熨斗目不ㇾ著筈之分者、此度も熨斗目著候事可ㇾ爲ㇾ無用ㇾ候、

御入輿之節

加珍熨斗目　　種姫君樣御臺所頭

同色半袴筋なし　　御臺所組頭

右之通向々江可ㇾ被ㇾ達候

十月

〔天保集成絲綸錄九〕天明八申年十二月

寺社奉行江

覺樹王院

御婚禮御日限之儀、來酉二月三日四日五日、此内ニ而吉辰相考、書付差出可ㇾ申候、且又公方樣、〇德川家齊姫君樣、御愛敬御守、御祝御枕入御守、差上候樣可ㇾ被ㇾ申渡ㇾ候、

天明九酉年正月

寺社奉行江

覺樹王院

銀拾枚

公方樣姫君樣御枕江入候御守、幷御愛敬御守、差上候ニ付被ㇾ下ㇾ之、

〔大江俊矩記〕享和二年二月二日癸卯、おまつ事おあや、今夕良辰ニ付、河原町北小路美濃守俊任朝

臣息、同山城權守俊廣妻ニ入輿、(中略)○りつは、かいどりに、長かもじ付て參也、おあやも、内よりかいどり、兩人共かづき也、おあや、先方ニて祝言盃の時、白小袖は略、此方ゟ著用之儘ニて、初より色直之體也、

〔言成卿記〕安政四年二月十五日、西本願寺家中大西右京、(當家門弟)今度新門主、來十七日婚禮ニ付、袴下絓用絹口、去十二日大西右京持參願、奴袴大紋緯白、(因紋)而絓ハ白紫也、甚雖二不都合一、法中之儀、且里亭之事、旁相宥、腹白(亂)可二絓遣一、家公(○山科言知)被レ仰、隨レ仰絓了、(予案、於二薄色袴一ハ不レ用二腹白一、可レ用二鼠精一之旨、裝束抄多々所見、不可説之事也、)件絓之事、從二大西右京一願ト申テハ不レ然、外々差支ニモ可二相成一間、自二本願寺一願之振合可レ然被レ仰了云云、

〔新撰字鏡 女〕媒(莫來反、平、妁也、奈加太豆、)

〔類聚名義抄 女二〕媒(音枚、ナカダチ、)

〔字鏡集 女十〕媒(バイ)(ナカダチ)

〔下學集 態藝下〕媒(バイ)介(カイ)

〔節用集 奈〕仲(ナカ)人(フド)(中媒)

〔源氏物語 五十東屋〕中。だ。ち。の、かくことよくいみじきに、女はましてすかされたるにやあらん、(中略)われもわれもとむこにとらまほしくする人のおほかなるに、とられなんもくちをしくてなんと、かの中。人。に、はかられていふもいとをこなり、

〔催馬樂 律〕淺水

あさづのはしの、とゞろとゞろと、ふりしあめの、ふりにしわれを、たれぞこの、なかびとたてゝ、みもとのかたち、せうそこし、とぶらひにくるや、さきんだちや、

〔催馬樂譜入文(抄)〕淺水

たれぞ此なか人たて、　誰ぞ此媒立而と云にて、誰ぞといへるに、行めたる意あり、一首の意は、既に舊りたる我を、誰しの人の仲人たて、思ひもよらぬ御許のやうすを案内しつゝ、たづね問に來ることよ、さきんだちよ、聞て給はれといふにて、是は國司などの其國にして、年ふりたる女をよび入置けん時の、ちまたのうたなるべし、

〔禮記註疏(二曲禮)〕男女非有行媒、不相知名、(見媒往來傳昏姻之言、乃相知姓名、)

〔倭訓栞(前編十九)〕なかうど　仲人口といふ諺は、世範に、古人謂周人惡媒、以其言語反復と見ゆ、(中略)源氏にも此旨見えたり、

〔源氏物語(二帚木)〕女のこれはさもと、なんつくまじきは、かたくもあるかなと、やう〳〵なん見給へしる、(中略)みる人おくれたるかたをばいひかくし、さてありぬべきかたをばつくろひて、まねび出すに、それしかあらじと、そらにいかゞはおしはかり思ひくたさむ、

〔源氏物語湖月抄(二帚木)〕彼女を媒する人の其女のわろき事をばかくし、さもあるべき事ばかりをいひきかする也、

〔平治物語(一)〕源氏勢汰事

別當惟方ハ、(中略)生得勢少サク御坐ケレバ、小別當トゾ申ケル、ソレニ信賴ニ與シテ、院(○後白河)内(○二條)ヲ押籠奉ル中媒ヲナシ、今又盜出シタテマツル中媒シケレバ、時ノ人中小別當トゾ云ケル、大宮左大臣伊通公ハ、此中ハ中媒ノ中ニテハアラジ、忠臣ノ忠ニテゾアラン、光賴ノ勇ニ依テ、忽ニ誤ヲ改メ、賢者ノヨクンヲ以テ、忠臣ノ擧動ヲナセバトゾ宜ケル、

〔徒然草(下)〕世にありわぶる女の、にげなき老法師あやしのあづまびとなりとも、にぎはゝしきにつきて、さそふ水あらばなどいふを、なかうど、いづかたも心にくきさまにいひなして、知られず

しらぬ人を迎へもてきたらんあへなさよ、〇中略すべてよその人のとりまかなひたらん、うたて心づきなき事多かるべし、

〔民事慣例類聚婚姻〕凡ソ媒介人ハ、雙方ニテ一人ヲ任ズルモアリ、各一人ヲ任ズルモアリ、或ハ雙方ノ家ニ出入シテ、其庇蔭ヲ受ル者、彼此ノ協議ヲ取次ギ周旋スルヲ下媒介人ト稱シ、一郷中、身分人望アル者、約定ルノ後、結納ノ式、及婚姻ノ式ヲ取扱フヲ本媒介人ト稱ス、媒介人ハ夫婦出座シテ、祝盃獻酬取持ノ職アルヲ以テ、鰥寡ノ者ヲ用ヒズ、他日婚姻上ヨリ生ズル紛議ヲ裁決シ、或ハ離縁ニ及ブ時ハ、嫁具引返リ迄ノ事務ヲ擔任スル事、一般ノ通例ナリ、

〔玉葉〕建曆二年三月廿二日　宣旨左大臣 右大辨

一可停止京中媒輩事

抑比來天下有下女、京中稱中媒、其號大背法度、其企淺渉罪因、和誘窈窕之好仇、配偶陋賤之匹夫、或僞號英雄華族、或謀稱西施下蔡、偏蕩人情、只爲身要、姧罪已載本條、証誕添重科者歟、慥仰使廳、且實錄其宅、且糺彈其身、

藏人民部權少輔藤原資賴奉

〔日本書紀十一仁德〕四十年二月、納雌鳥皇女欲爲妃、以隼別皇子爲媒、時隼別皇子密親娶、而久之不復命、

〔日本書紀十六武烈〕太子〇武烈欲聘物部麁鹿火大連女影媛、遣媒人向影媛宅期會、

〔太平記十五〕賀茂神主改補事

葢久〇賀茂神主ニ一人ノ女アリ、〇中略此宮々〇後伏見、後醍醐、如何ナル玉簾ノ隙ニカ被御覽ケン、此女最アテヤカニ臈ジトゾ被思食ケル、〇中略御消息傳ヘタル二リノナカダチ、次デヨシト思テタラチメノ諫メモ理リニコソ侍ルメレ、早一方ニ御返事ヲト、カコチ顏也ケレバ、女云バカリナク打佗テ、イサヤ我トハ爭デカ分ク方可侍、タヾ此度ノ御文ニ、御歌ノ最憐レニ覺エ侍ラン方ヘコソ

參ラメト云テ、少シ打笑タル氣色ヲ、二リノ媒、嬉シト聞テ、急ギ宮々ノ御方へ參テカクト申セバ、〇下略

〔日本書紀〇皇極二十四〕三年正月乙亥朔、中臣鎌子連議曰、謀大事者、不如有輔、請納蘇我倉山田麻呂長女爲妃、而成婚姻之昵、〇中略中大兄〇天智聞而大悅、曲從所議、中臣鎌子連卽自往媒要訖、

〔住吉物語〕右大臣なる人の御子に、四位の少將とて、世にすぐれたる人侍ける、いかにもおもふさまなる人もがなと、あさゆふは御心もそらにあくがれて物かなしきに、右大臣のはした物に、そらさへといふ物のをとこにてありける、下づかへになりて、ちくせんと聞ゆるなん、中納言の宮の世までは、とのものの大夫といふものゝをとこにて侍ければ、あさゆふにこのひめ君をば見聞けり、ちくせん右大臣の家のきたのかたにて、人のよしわろき事かたるついでに、中納言の宮ばらの姬君こそ、をさなおひめでたく、ふたばのこはぎをみる心ちせしか、いかにおひ出給たらん、故は、宮のうせ給てのちは、四五年は見侍らずといふを少將たち聞給て、いとうれしきことを聞つる物かなとおぼして、わがさうしにちくせんをよびて、見るらんやうに、さもとある人あまたあれども、物うくのみしてすぐす、中納言の宮ばらの姬君はみしかとたづね給ひければ、ちくせん、をとこにて侍しもの、故は、宮に侍しかば、よくみ奉りて侍し、世にうつくしくさぶらふ、中納言どのは、宮づかへをとの給へども、うちかなはでおぼしなげくとぞうけたまはるといへば、その人の事いひよりて、ふみなどつたへてんやとの給へば、かなはんことはしらず、御ふみをもて參りてこそは見侍らめと聞ゆれば、よろこびて、十月ばかりに、もみぢがさねのうすやうに、

初時雨けふふりそむる紅葉ばの色の深きを思ひしれとぞ、とかきて、ひきむすびてやり給へば、その日のくれかゝる程に、ちくせんは、中納言のもとにまかりつれば、〇中略ちくせん、侍從をよびいだして、右の大いどのゝ御子に、少將どのと申人の御文なり、かやうのことはくち入しにく

く侍りながら、やんごとなき人の、いたくおほせらるゝ、ことのいなみがたさにといへば、いざやおぼえずながら、の給ひあはする事なればとて、ひめ君に玄か〳〵の文とて、引ひろげて御かたはらにおきたれば、御かほうちあかめて、とかくの御ことも聞えたまはねば、ことわりと思ひて、かくなどいへば、ちくせん、そのつとめて少將どのに參りて、ありのまゝに聞ゆれば、さても〳〵いかゞおひ出させ給たるとゝへば、まことにこの世ならず、かたはらひかる程になん、ことのねかきならしておはしましゝに、ちくせん參りて、その昔の事ども人々にかたらひ侍しかば、母宮の御事ども、おり〳〵なげき給ひし御すがた、いへばおろかにこそ、をみなへしの露おもげにて、まがきの外にたふれ出たる心ちして、その事となくあはれにいとほしく、よそのたもとまでも所せきほどになどいへば、いよ〳〵心そらになりて、はじめはさのみこそは、又々も聞えさせよ、この事かなへたらば、此世ならずおもひ侍なんとの給へば、すき〳〵しきやうに侍れども、君のかくまでおぼしたらんことをば、いかでおろかにはと聞ゆれば、いとうれしくて、又文かきて給ければ、とりて侍從に取らすれば、ならはせ給はねば、いみじくわびしげにおぼしたることのいとほしさになどいへば、ちくせん、おのれもいやしきことならば、なにしに申さんずるに、おぼえすくなき御宮づかへよりは、このきんだちにおはしまさば、中々めやすき事にてこそ、うけたまはるやうにては、その御宮づかへの御事もかたくこそ、この少將どのは、今の后の御せうとなれば、たゞ今世に出給はんずる人なり、御かたちよりはじめて、なにはのことにつけてもひとしき人やはおはする、御ためうしろめたき事をば、いかでかといへば、いざや中納言どのも、うち參りの事より外にの給はず、なみ〳〵ならんさまにおぼしよらんことは、よもといへば、ひめ君うれしと聞ゐ給へり、略○中日ごとにゆきてほのめかせども、行水にかずかく心ちして、いひわづらひありくほどに、まゝは、此ことほの聞て、ちくせんをよびて、略○中さやうのきんだちは人にいた

はられんとこそおぼすべけれ、は丶もなき人よりは、三の君のねびまさり給たるに、さるべきさまとおもふに、み丶よりにこそたばかり給へかし、さらばそこをこそ、このよならずおもひ侍らめと、心ふかくいひければ、さすがにいなみがたさに、まことに、たび〳〵聞え侍れ共、御返も給はねば、少將殿、ちくせんをのみせめさせ給ふもわりなく侍る、さりとても、のちまで申えんこともかたげにみゆるも心ぐるし、さらばさもこそはといへば、よろこびて、志ろきこうちき一かさね、これは三の君のとて出し給ひければ、よろこびて、さらば少將殿には、もとの御心ざしの文なりと志らせ奉らんと申ければ、よくの給ひたり、そのよしにてこそはとて、よろこび給けり、○中略三の君たばかられることをば志り給ず、はぢ志らひたるすがた、いとめやすくいとほしきさまなり、すゞりかみとりいだして、それ〳〵とせめられて、かほうちあかめて、

ふじのねのけぶりときけばたのまれずうはのそらにや立のぼるらん、とかきて引むすびたるを、ちくせんとりて、少將殿のもとにゆきて、御返とて聞ゆれば、少將たばかられるも志らず、いそぎあけて見給へば、手なんど、をさなびれてみえけれども、よろこび給ふ事かぎりなし、又々もかよはしけり、たいの御方の人々、このよしほの聞て、いとをかしくおもひあひ給へり、かくしつつ、日かずもへずして、かよひ給ける、少將何心もなくてぞすぐし給ける、をさなきさまもことわりとおもひつ丶、ひるもとゞまりてみ給へば、き丶し程にはあらねども、なべての人には侍らざりければかよひ給けり、中納言もたばかられるも志らず、少將にあひて、よろづ聞え合てぞ侍ける、ま丶は丶かしづき給ふ事かぎりなし、志んでんのひんがしおもてにすませければ、少將すきざまにしのたいをみれば、よしあるさまなれば、いかなる人のすむにやとゆかしくおぼして、○中略これはいかなる人のことの音ととひ給へば、わがあねにて侍る人のひき給なりとの給ひければ、兵衞のすけぞの丶かととひ給へば、さにはあらず、宮ばらにておはするなり、常に心をす

して、ことをひき給なりき、なに心もなくかたるもいとほしながら、心のうちには、あさましくたばかられにける物かなとおもひつゝ、たいの方に、いかばかりをこがましくおもふらん、ちくせんがくちをしさよとおもひて、明もはてねど出て、ちくせんをよびよせてうらみ給けるに、いひやるかたなく、かたはらいたくおもひてぞ有ける、今はいふにかひなし、猶去らぬかほにて過さん、あのあたりにだも、あなかしこ〳〵聞えさすなとの給ければ、ちくせんかほうちあかめて、なにしにかとてぞたちにける、

〔源平盛衰記〕三十八　小宰相局附慎夫人事

越前三位通盛ハ、〇中略小宰相局ト申女房ヲゾ相具シ給タリケル、彼局ト申ハ、故刑部卿憲方ノ娘、上西門院〇鳥羽皇女統子ノ女房也、〇中略通盛御所ノ舍人ヲ語ヒテ、御文ヲ書テ是ヲ持テ、小宰相局ニ奉テ、散ヌ所ニ打置トテ給テケリ、舍人御文ヲ給テ隙ヲ伺ケルニ、局女院御所へ參給ケリ、折節御所近成テ、車ノ物見ヨリ投入テ、使ハハヤ失ニケリ、小宰相局、車ノ内ニテ忍騷給、是ハ如何ナル人ノ傳ヘゾヤト宣ヘ共、御伴ノ者モ知ズト申ケレバ、大路ニ捨ンモ流石也、車ニ置ンモツヽマシク、思煩ヒ、イカニスベキ樣モナク、袴ノ腰ニ挾ミテ、御前へ參ラセ給ヌ、隙ナキ御遊ニ打紛テ御坐ケル程ニ、女院ノ御前ニシモ此文ヲ落シ給ニケリ、女院御衣ノ御袂ニ引隱サセ御坐シテ、御遊ノ後、女房達ノ中ニテ、懸ル文ヲ求タリ、主誰ナラント仰ケレバ、我モ我モ不知ト申サセ給ケルニ、小宰相局、ユヽシク淺増氣ナル有樣ニテ、アキレテゾ見エ給フ、女院此文ヲ取出サセ給ヘバ、〇中略是ハ逢ヌヲ恨タル文也、何ト思ナルベキ人ヤラン、左衞門佐〇通盛ノ申トハ聞召シカドモ、細カニハ不知召、アマリニ人ノ心ヅヨキモ讎トナル者ヲヤ、〇中略一夜契、何カ左程苦シカルベキトテ、〇中略女院御媒ニテ渡ラセ給ヘバ、力及デ終ニ靡給ニケリ、

〔宗長息女婚禮記錄〕小笠原孫太郎治部大夫宗長之息女、同信濃守貞宗之妹也、歲十六歲に成給ふ

に付、南條左衛門尉尊氏之臣、家法式知也、媒となりて、武田甲斐守○晴信方江縁組相濟、

〔藩翰譜七上池田〕參議源輝政卿は、○中略太閤○豐臣秀吉の御媒にて、文祿三年九月、德川殿○家康第二の御娘、輝政の家に入らせ給ひ、督姫君、北條左京大夫氏直の許へ入らせられし御方なり、男子五人女子二人を設けさせ給ひけり、

〔藩翰譜七上淺野〕彈正少弼源長政は、○中略又右衛門長勝が子なり、○中略初め長勝、同國の住人木下七郎兵衛家利が娘を妻とす、妻の姉杉原助左衛門に相偶して二人の娘あり、長勝その二人の娘、養うて子とし、姉は織田殿の家人、前田又左衛門利家がなかだちにて、木下藤吉にあはせ、○註略妹をば、我子の長政が妻とす、

〔神代餘波下〕むかしより男女の婚嫁、養子の緣談、其外奉公人の媒妁するを慶安といひて、こゝにもかしこにもあまたありし事、今も同じ事ながら、今は多くは下男下女の口入のみにて、高貴の方々の緣談、富祐の者の取結びは、多分こゝかしこに出入する醫師のするわざとなれり、寛文五年、木挽町邊に町醫大和慶安といふ者、同志の謀計をなりはひとする伊達三郎兵衛、長谷川助右衛門とはかりて、酒井家の御息女の緣談口入して、持參金五千兩の内二千兩、三人してかすめ配分せんとはかりしに、露顯に及び、同年九月廿四日、三人ながら追放に行はれたり、慶安といへる惡名は、口入商人の方にのこりて、中々に醫師の方にのこらぬもあやし、

〔季連宿禰記〕元祿九年十一月六日己未、今日備後國三原城預戸田佐次右衛門勝元之使者小林忠兵衛來、子細大輔御局養女、御滿、或侍男森村五郎兵衛女也、十箇年以前以來被養育、予爲子分、勝元之妻可迎取之由、或琵琶法師所媒也、依之爲其賴此使者來、品々物到來之、予對面之後、於次間着膳、頗及大飲、約千秋萬歲了、

〔大江俊光記〕元祿十四年四月十三日、玄長內、おいく來、被申候は、今日上御靈法印祐玄被參、玄長夫婦へ被申候は、○中略娘照ヲもらい申度候、此由岡崎衆へ御申可被下由被申トテ、おいく被申聞、玄長此由可申之由被申也、○中略猶相談候て、後より返事可申由申、暮に被歸、　十八日、朝飯後、玄長內

隨從及附人

おいく來臨、玄長被申、昨日法印祐玄被參候故、先日ノ返事申、石見娘もらい被成度事申上候、〈○中略〉彌以もらい可被成思召ニ候はゞ、成程相心得可進と、石見樂も被申と申上候、祐玄も不淺大慶被申候、　廿三日、申半刻計御照上御靈へ遣、

〔大江俊矩記〕寛政十年二月廿八日壬戌、進藤播磨守婚禮也、予媒妁、秉燭前行向、上下體也、

〔大江俊矩記〕文政三年六月廿八日、女米〈諱爲子、二十歳〉爲客分引取、內密婚姻取結也、表。。。向。。。媒。。。酌。。。人同姓民部丞相賴、自先方者、親類仙石靭負相賴也、內。。。々。。。仲。。。人。。。者、近藤帶刀自先方者久藏母也、

〔言成卿記〕天保十二年二月二日、昨一日、滋野井前亞相〈阿野家本家〉爲媒妁被來、當家彌、阿野大夫家室ニ、舍妹被爲所望度旨被願申云々、〈元來發端示談之時、彼卿一向不被拘義也、然而依時宜、彼卿爲媒仁云々、〉家公〈○言知〉更而無承知、後乍御不案心被任所望之旨被答云々、

〔言成卿記〕弘化二年十二月十日、予妻緣之事、〈○中略〉媒約日野中納言〈隆光〉可相賴、自本家有沙汰、家公一兩日中、令向柳原亭給、可令賴給御所存云々、　十一日、家公令向柳原黃門亭給、件義予妻緣、日野儀同〈○資愛〉養女、媒約之義令賴給云々、〈但北小路家へ、內外共不拘樣、篤ト令熟談給云々、〉家公還御之後、日野黃門〈隆光〉向于日野儀同亭、被爲媒約之處、目出度可被送治定云々、

〔婚禮法式上〕婚入之部

一御輿の兩方に、步行にて供せらるべし、是をこ。し。添。といふ、騎馬は五騎三騎、又遠路は七騎可有之候、輿の跡より參らるべし、こし貝桶わたし候役人は、このうちにあり、

〔婚禮問答〕こ。し。む。か。へ。こ。し。送。り。親類衆を賴可申哉、左樣にて可然候、古法親類に限らず、重き家來など相勤候、

貝。桶。受。取。渡。の。役。人。は、家老可勤哉、貝桶の役人、家來の內、重き人體可然候、家老にも不限候、

こ。し。受。取。渡。役。人。も家老可勤哉、是は必家老の役たるべし、兩方たがひに大刀目錄を取かはして、

受取渡相勤候、

〔婚禮推陳記〕婚禮の日、輿より先へ、侍兩人程に、帳付の役人を差添遣べし、此役人二行に連立、左右の辻堅の侍へ向、主人の御名を聞て帳に記すべし、此役人は、聟方よりも舅方よりも出すべし、

〔婚禮法式上〕婚入之部

一御料人の方の殿原衆同朋衆など召連候事、是は何れも、殿方にも御料人へ奉公申べき人にて候儀、參るべき也、

一つぼねと申は、乳の人の御なり候、大藏卿のつぼね、宮內卿のつぼね抔と申て、御わかごの御乳の人にても、御祝言など候て御なり候、

婚迎之部

一侍女房は、一かどの御人のする事也、一族の衆か、又は隨身の女房たるべし、不然ば家老の妻たるべし、物の巧者なる女房のする事也、年ばへ成人可然也、御料人のそばに居て、萬御差圖さし引取持せられ候間、若輩初心の人は、いかゞたるべし、○中略

一宮仕の女房衆は、その夜の御いはひ御しやく、待女房のうれられ候女房の役、御はいせんは、いづれも殿方の御女ばう衆中らふの役にて御みやつかひ候、御膳など持て參られ候を受取て引直され候事は、殿方へは、殿方の大上臈の役、御料人へは、御料人方の大上臈の役、待女房へは、待女房の大上臈の役にて候、三日め御色直しなされ候てより、御料人の御供の衆御みやづかへ候、

〔婚禮問答〕御こしよりおり給ひ候時御かいしやくの女中は、聟殿方の女中にて候哉、御こしよりおりさせられ候時は、姬君方の大上らふは、先へ參り、御こしをまちうけ、御こしよりおりさせられ候時、御かいしやくあるべし、聟殿方の衆は、かまひ申まじく候、

御こしよりおりさせられ候時、御迎に出候女中、何程の人體にて候哉、御こしより下させられ候

時、待上﨟、聟殿の方の大上﨟小上﨟、御迎に御出あるべく候、

〔為房卿記〕永保二年四月十六日丁卯、今日殿中將、經實嫁春宮大夫娘、於土御門第有此事、前駈六人、散位仲宗、圖書頭季綱、助知房、守宗季、兵部□□□□右衛門尉重綱、脂燭、頭中將保實朝臣、右中辨季仲、執咨、丹後少將仲實、即夜有露顯事云々、頭辨通俊可差脂燭之由雖有先儀、貫首之人、有憚之樣有天氣、改定右中辨者、

〔中右記〕元永二年十月十七日、今夕件中將○源有仁成女二位聟云々、於院御所大炊御門萬利小路亭有此事、脂燭少將實能、實衡朝臣、咨取藏人侍從季成、今夕露顯、陪從少將實能、衾覆事右兵衛督實行、最前使左近大夫高階家行、

〔玉海〕建久二年六月廿五日壬寅、此日左大將、○藤原良經渡別當能保卿、○中略

脂燭二人頭中將實明朝臣、左少將公經朝臣
咨取左馬頭高能朝臣
陪膳左中將基宗朝臣
褰簾三位中將公衡卿
示前駈可著座之由事讃岐守隆保朝臣
所々有饗祿云々
今夜御出事
檳榔毛車新調、物具簾緒等、皆悉新調也、
車副二人賜装束、材平禮、
黄牛牛童薬師丸、給装束、前木上下白帷、
仕丁持雨皮張筵等
前駈十人故平大納言御時、前駈十人、追彼例也、

四位二人（前攝津守橘以政朝臣、右馬權頭源兼親朝臣）
五位六人（內藏權頭源國行、散位高階仲資、（御厩別當）散位源兼資、筑前守藤親房、中宮少進源兼時、左馬權助源國基、）
六位二人（殿下勾當文章生高階奉俊、大將殿勾當源國時、御書使、）
此中兼資兼時、依㆑爲㆓物吉人㆒勤㆘燃㆓付脂燭㆒之役㆖、
已上各撰清也
隨身六人（番長染狩袴也、騎㆓移馬㆒如㆑例、舍人居飼前行如㆑例、（不㆑着㆓當色㆒各帶、余參上云々））
下﨟五人、襖袴垂㆑之、已上皆壺胡籙也、隨身等不㆑給㆓裝束㆒也、
雜色十二人
衛府長二人（余左府生下毛野忠武、（余方長）同右府生秦兼次、（大將殿長））
已上兩人白襖上下、濃引陪支、指帶、平禮、
走長二人（友弘、（右方長、今役着御共也、）武久、（隨㆓大將殿方㆒））
列八人
今夜參入侍男共等（各著㆓布衣㆒云々）
五位四人（民部大夫宗季、下野權守康家、大和權守重永、民部大夫賴重、）
有官
宮內丞藤孝行（所司）
彈正少忠紀久佐
修理少進中原爲言
左衛門少尉中原信弘
右衛門少尉平貞時

藤重經
藤康基
左兵衛尉豊原泰基御衣使
右馬允源康長
藤原親康忠弘男、中宮侍二臈也、
紀久時久佐男
中原弘綱
無官
已上十六人、元永例也、各撰其人、

〔玉藥〕嘉禎三年正月十四日、此日左府、○藤原兼經被迎第二娘、○中略委旨見高嗣記、○中略
嘉禎三年正月右少辨高嗣朝臣注送文○中略
女房御方恪勤侍五人、今夜進名簿於大臣殿、高嗣内々付藤相公了、各別之條無便宜、仍如此、今夜各可勤參云々、

〔桃花蘂葉〕廣季記平治元年七月一日、六條攝政、迎信頼妹給、
出車。女房廿人。裝束薄蘇芳單重の引つぎ、蘇芳織物表著、三重、龜甲文、女郎花唐衣、宮形織物、薄色裳、大文薄白腰、濃袴、泥繪夏扇、
。童女。文裝束、同單重、袙、濃引陪木、濃蘇芳織物表著同色、汗衫、濃張袴、泥繪扇、
半物。四人、薄蘇芳單重、袙、濃引陪木、濃張袴、同扇、沓、
下仕。二人。白單重、濃引陪木、濃張袴、同扇
雜仕。四人、蘇芳單重、袙、濃蘇芳帷、白裳、同扇、懸紳、尻切、

賜祿

御桶洗二人蘇芳單重、袴、白裳、扇

已上下仕以下、自閑路參入、

〔藩翰譜 四上井伊〕右中將藤原直孝は、侍從直政の二男なり、

直政の室は、松平周防守康親が娘なり、それに隨來りし女の直孝をば生めるなり、

〔政化間記〕寛政十一年十一月十五日、今日淑姫君様御入輿〇德川家齊女嫁尾張德川齊朝ニ付、〇中略

御貝桶渡安藤對馬守、御輿渡松平伊豆守、御供立花出雲守、於御座之間御目見

〔將軍德川家禮典附錄 十一〕一和宮様京都より御下向幷御入輿御婚禮之記

一御下向之節、御所より御差添之女中名前、

上臈　宰相典侍

下臈　能登

三仲間之内　うめ

松江

茶阿

たき

右御附人之内茶阿たきは、御婚禮濟ニ而相開き、能登うめ松江は、三箇年目御戻に相成、

〔賤のをだ巻〕翁〇森山孝盛が姉の縁談定りて、里附の女を抱ゆるとて、あれ是奉公人の目見に來りけるに向屋敷の藤掛數馬と云人の家來の娘なりとて、目見えに來りしが、〇中略家司の取極る沙汰を聞ば給金三兩と云ことなりき、其比は女奉公人もよかりけり、

〔江家次第 二十〕執聟事近代例

侍所饗三獻藏人五位勸盃汁物追物如常、賜祿、五位掛一重、六位袴、次隨身所勸坏、衞府五位勸坏、給被物祿、諸司官人

又給隨身小舍人裝束、次雜色所勸盃、長二人、各給掛一重、(掛隨時)次牛飼勸盃、給裝束幷祿、(隨時)次出下飯、次夜陪膳如此、(出居方○中略)次以吉日、乳母許遣物、近代不遣裝束、(禁忌之心也)

〔婚禮法式上〕婚迎之事

一御料人の御供の人々へ殿方御對面の事、三獻の御祝濟候はゞ、表へ出て御對面有て、何にても引出物被下事、常に替る事なし、御供の人、大刀馬そのほか時にふれ候小袖かたびらから物など進上候て御禮申さるゝ事也、其夜にても、又は三日めの御色直しの時にても、殿方へ御禮申され、進物上ゲ申候事也、引出物も、其節被下候事也、三獻の御祝濟てとは、御盃とりかはし濟て御對面有べし、

一殿方より、こし幷貝桶渡候仁へ引出物被下候事也、こし貝桶渡候仁へ、式三獻七五三御祝濟候て、男方きやうの膳過、御出候時分、すひ物などにて盃給候て大刀刀を給はり候、幷こしぞへに參候者、彼迄此方に居申候、是も右の次に盃給大刀刀にても給はり候、男方より、御料人方の衆、尤男方の衆、兩方男女共に、玄たく〳〵に至迄御祝儀の物衣裝鳥目の類それ〳〵に下され候、こし貝桶渡たる人へ、殿方より御盃被下事、御色直し其夜にて候はゞ、きやうの膳參り、くわしなどすわり候て、色直しにたち申され候、この間に男方、表向へ御出候て、すひ物にて御盃被下、引出物給はり候、

〔婚禮問答〕御祝の時、女中へ御盃被下候事も候哉、きやうの膳出て、男女御盃とりかはし濟て後、別の盃を殿へも姫君へも參らせて、殿きこしめして、姫君方の大上臈へ御盃御さし被成、其盃段々座なみ次第にさし、姫君方の御つぼね給りて納申候、又姫君、別の盃にてきこしめし、殿方の大上臈へ御さし被成、其盃段々座なみ次第さして、殿方の御つぼね給りて納申候、是にて御こうし入申候、

〔婚禮推陳記〕嫁の供の女房馳走の事、大上臈小上臈局等へは、むかしは婚禮の夜雜煮三獻の上に、高盛の五々三を出し引替に五三々を出す事を法とす、其外の女房へは、雜煮三獻も高盛も不出、喰料まで也、○中略

嫁より聟方の下々江被下物は婚禮の翌日成共、三ツ目に成共出すべし、待女房江者、小袖二重三重たるべし、男の局扮添酌加の女房江も小袖壹重、又は卷物を遣也、其外の女房江者金銀たるべし、待女房の局扮添江も同事也、輿請取貝桶請取、家老脂燭剌輿副の役江は、小袖か卷物上下金銀にても遣也、膳部供御、庭の松明、打合の餅の役人、かつらへも、小袖上下、金銀鳥目等、分限によりそれぞれに遣べし、多少は人によるべし、

師傳に、膳部とは、高盛の膳部を仕立たる人也、供御とは奥方の御食炊人也、かつらとは、聟方江出入申、山城の國葛(カツラ)の鄉にて祓する人也

〔宗五大草紙〕色々の事

一人の妻むかへの事○中略三日にあたる日、男の方へ、女房の方より引出物候、男方よりはなし、女房達ひちやうなどには引出物あるべし、又こしよせたる役人の女房には、必女中方より引出物あるべし、

〔禮容筆粹五〕婚禮之次第

引出物之事

上臈より引出物賜るべき役人は、庭の炬火の役人へ鳥目、紙燭さしの役人二人、輿よせ役人二人へ小袖まき物等、つき合せの餅の役人へ鳥目を出すべし、多少は定るべからず、又其外にもあるべし、其夜に限らず、三日め計の内にあるべし、

〔婚禮法式上〕婚迎之部

一御料人のさとへ、婚禮の夜の座敷のかざり進候時、〇中略御料人より、男方の男女共に御引出物給はり候、下々までも同じ事也、待女房には、御料人より今日ひとかど御しうぎ、時分の衣類から物、又は鳥目のたぐひ進せらるべし、これも目錄たるべし、

〔婚禮推陳記〕新枕の明の日、女房の著たる白小袖の下前の小妻へ、紅粉にて愛敬を引て、其小袖を大角赤に入て、樽肴を添て局に持せ、里の垂乳母へまゐらする事祝儀也、流によりて姬の耳袷の新敷にも色を引て遣と申す一說もあり、

〔婚禮法式上〕婚迎之部

一三日め御しうぎ過て、御料人今日御湯めして、御湯かけ候おごに、下めしの御あはせを給はり候、御湯入てあがり候おけに入て被下候なり、又外にきるものなどを給候事もあり、

〔榮花物語六かゞやく藤壺〕おほとの、〇藤原道長のひめぎみ〇一條后彰子十二にならせ給へば、〇中略かくて參らせ給事、長保元年十一月一日の事なり、〇中略よき日して、御めのとゞも、命ぶ、くら人、陣の吉上、衞士、仕丁まで、おくりものを給はすれば、としおいたる女官とじなど、世にいひしらぬまで、御いのりを申いのりたてまつる、御めのとたちさへ、きぬあやおりものゝ、しやうぞくども、かずおほくかさねさせ給て、ころもばこにつゝませ給て、さま〴〵のものどもそへさせ給へり、

〔榮花物語十日蔭の鬘〕四條大納言〇藤原公任の御むすめ、〇中略此左衞門督のきみ〇藤原道長子教通をと思ひきこえさせ給て、〇中略四條の宮のにしのたいにてむことりたてまつらせ給、〇中略さて日ごろありて、御ところあらはしなど、心もとなからずせさせ給へり、〇中略日頃ありて、御めのとのくらの命婦のもとに、はかなき御ぞのおろしなどに、よろづあたらしき事どもなどそへさせたまへり

〔榮花物語十三木綿四手〕さて院の御事、〇小一條院敦明親王、妻藤原道長女寛子けふあすあるべしとのゝしるは、まことにやあらん、〇中略つごもりになりぬれば、高松殿〇寛子母明子には、やがてそれにぞ院の御めのとたち

にさべき事どもせさせ給ひ、裝束ひとくだり、おり物のきぬ、又たゞのきぬなどそへさせ給へるに、又院の御そどもそへさせ給へるに、またあるものもあるべし、

〔左經記〕寬仁二年六月廿七日戊午、今夜少將御方初著膳、先於帳中羞餅、二位宰相調進之也、二坏入筥有蓋、次羞御臺四本、侍隨身雜色六位、白掛一重、隨身二人、各白單重一重絹三匹、雜色五人、小舍人一人長絹二匹絹二匹、乘中手作一百端、牛童絹二匹、手作五段、以件所々皆可然五位六位等勸盃、但長者左近番長武方也、爲攝政殿御隨身、別給白褂一重、

〔中右記〕永久二年八月十日壬子、今日源大納言男大夫君經營事沙汰、○中略僉議源大納言北方、沓取升宗今夜則露顯、○中略

裏書

十日經營　祿法

前駈六人衣一重、五位加袴、

雜色所白布二百段、絹三百疋、長府生兼信、衣重白袴、殊加給蘇織單衣重、

牛飼裝束一具、白布廿段、絹五十疋、

末仕手作布五段、絹十疋、

小舍人童裝束一具

書使

給女裝束、依民部卿命也、但大藏卿云、最前使、全不給祿事也、專不可給者、

〔中右記〕永久六年○元永元年十月甲辰、今夜內大臣殿○藤原忠通始渡給民部卿姬君許、十一月二日庚戌、今夕內府御露顯也、○中略侍所幷雜色政所皆居饗饌、亥刻內府來臨、○中略家保朝臣相示、令著前駈於侍所、○中略前駈立簀、次日院殿上人取祿給、四位女裝束、五位被物一重袴、六位被物一重、其後起座、恪勤侍六人著大盤、有官者、此

外侍十餘人、又雜色所勸盃及三獻、長二人、敦利公胤參仕了、次布五百段、絹五百疋、被物各一重、布廿段、御車副牛飼童各給祿、

〔長秋記〕元永二年十月廿一日、行向二位經營所、○藤原公實女、嫁源有仁、中略、前駈著侍所垸飯、有三獻、初獻侍從公隆、二獻藏人侍從季成、三獻但馬守忠隆、瓶子諸大夫、次給祿、五位綾羅芳□一重、青單濃袴、六位無袴、長實朝臣、雅忠朝臣、基隆朝臣、家保朝臣、顯輔朝臣、宗章朝臣、有賢朝臣、師隆朝臣、六位料越前守顯盛、土佐守顯保取之、前駈等給了次第退出、此間隨身所勸盃三獻、內藏助、民部大夫云々、又召次所三獻、初獻式部大夫盛仲、近衞府生、牛飼車副三獻、諸司允勸之、各有御物、召次中白布三百段、貲布二百段、凡絹五百疋、長敦利料六丈布廿段、八丈絹十疋、綿百兩、已上於雜色所給了、其後顯隆朝臣、召敦利給紅葉重衣五領單、御隨身預給物之間、武忠男與兼久男論座、武忠男退出云々、顯隆云、座席事可依父臈之由院宣下、何更有此論、早可召著兼久男等之由召仰敦利了、仍歸有給祿云々、先之檳榔毛御車引立車宿、牛飼車副著饗座、件饗一行居之、而車副可別居之由申之、仍居直云々、牛飼給祿之後、召本家牛飼、渡御牛退出、本家下牛粥料云々、

〔兵範記〕久壽三年二月廿　庚子、申刻許、向權辨亭、○中略右衞門佐光宗令嫁第三女子也、○中略馬助清則、示前駈可昇侍所由、[illegible]盛等著座、次勸盃、一獻清則、五位侍衣冠取酌、二獻爲範、瓶子同前、三獻經國、瓶子同、次與祿、蘇芳掛一重濃袴、○中略

次恪勤侍六人、諸司允二人、馬允保遠、盛賢、春宮帶刀二人、著侍座、

次出下飯、○中略

侍所居加合子例飯令食之

小舍人童在長押下座、居折敷饗、

隨身所五位侍勸盃、下家司取杓、次與祿各裝束一具、赤色狩襖袴山吹衣、他事如例、水干袴十段、

雜色所六位侍勸盃、次與祿長二人、各掛一重、例祿白布、三百反

牛飼色々布卅反、牛粥料五石、下文六位侍奉行之、有饗、同末仕布五反、有饗、

牛童小舍人童裝束祖出行日可下給云々、侍雜仕賜裝束、樋雜仕一人同前、

〔宗長息女婚禮記錄〕從御簾中（小笠原宗長女嫁武田晴信）諸役人江御引出物

一紙燭さし輿寄の役人江、御簾中御對面有之、祝言之次第、雜煮吸物肴まで也、廣敷江被召寄、局供饗に口祝持て出、挨拶有之退入、

雜煮之次第

田つくり小角足付　淺漬小角足付　雜煮上置如常　吸物餅、肴鯨鱛、梅干熨斗もみ、

傳曰、紙燭指輿寄之役人江、御簾中簾之中ニ而御對面也、勿論翠簾者上下有之、御盃は御流也、

右吸物の上にて二獻給候時、輿江被召、御簾中對面有て御盃を下され、則板の物幷銀子拜領して退出する也、

一庭の續松、打合之餅役人、膳部へ者、局出合あいさつ有之、引物頂戴之、

一貳千疋　續松役人

一貳千疋　餅之役人

一千疋　膳部

一五百疋　膳部□

一千疋　遊者

右之外、それ〳〵に隨て御引出物不及記之、

〔寛明間記〕明曆三年四月廿八日、女院樣方役人ニ、銀子ヲ被下、所謂、

白銀十枚　伊澤六兵衛

同斷　横田勘左衛門

同斷　　福井十兵衛

水野石見守、野々山丹後守、靑木遠江守、右之與力九人ヘ銀廿枚宛被ㇾ下、次ニ牧野佐渡守家來彥坂仙右衛門ニ銀廿枚被ㇾ下、

右之者共ハ、今度伏見宮御姬宮樣〈○貞淸親王女、顯子、德川家綱妻、〉御下向、其御供仕ル所之者共也、

〔大江俊光記〕元祿十三年六月十八日、今日能登婚禮、〈○中略〉おちよ〈○新婦〉より銘々ニ土產有、淸心公へ白輪子ノ帶、石見ヘ三本入扇箱、樂ヘ染輪子帶、

〔柳營秘鑑〕〈十〉比之宮樣御婚禮之式

一十二月〈○享保十六年〉十六日、御婚禮御用相勤候ニ付而、御褒美被ㇾ下候面々、

御手自

御刀〈左之弘行代金廿五枚〉　松平左近將監

時服七　本多伊豫守

右於二御前一被ㇾ下之

一同十八日、御褒美被ㇾ下之面々、

時服四　諏訪美濃守

同　三　松波筑後守

同　二　小笠原平兵衛

同　石川庄九郎

同　北條新藏

同　佐野六右衛門

右於二芙蓉之間一被二仰渡一之

賀儀

金壹枚　御膳数番之頭　加藤甚右衛門
萩原源兵衛
銀拾枚　奥御右筆　坂原佐左衛門
大八木吉之允
同五枚　遠山吉十郎
御細工頭　森長四郎
同十枚　上野三大夫
同斷　御勘定組頭　小林孫四郎
同斷　御臺所頭　池永清右衛門
同斷　御勘定　加藤源之允
同斷　飯島總右衛門

右御右筆部屋縁頰ニ而被仰渡之

〔榮花物語若水二十八〕二月〇萬壽四年十九日ばかりにきけば、皇太后宮〇三條后藤原妍子道長女の一品宮〇禎子内親王の春宮〇後朱雀にまゐらせ給べしといふ事、世にいできて、〇中略廿三日〇三月のつとめてに成ぬれば、さるべき人々御志つらひに皆あかれ參る、〇中略女院〇一條后彰子中宮〇後一條后威子よりの御つかひまゐりたりけれど、あさましくさわがしきまぎれにまゐりにけり、くちをしくおぼしめさるべし、女院よりの御裝束は、やへざくらをえもいはずにほはせたまへり、御あふぎ、たき物などこまかなり、御こころも箱など、わざと本文をかゝせ給へり、中宮よりは、藤をぞむらさきにこくうすくおりかさねさせたまへるに、小一條院〇敦明親王式部卿〇敦儀親王中務宮〇敦平親王よりも、御あふぎ、かずもこゝろすめでたうせさせ給へり、關白殿〇頼通道長子より、童の裝束めでたくせさせたまへり、くれなゐのあ

こめ、もえぎのおりもの、あこめ、やまぶきさくらのかざみ、みつがさねのはかま、あふぎまで、いみじくせさせ給へり、

〔爲房卿記〕寛治五年十一月七日辛卯、今日亥刻勘解由顯隆朝臣通備前守娘、○中略深更送烏帽子狩衣等、

〔殿暦〕長治二年十月三日、今夜左大辨聟取、仍以待タキモノヲヤル、左大辨むこ、但馬守仲章、

〔中右記〕永久二年八月十日壬子、今日源大納言○俊明男、大夫君經營事沙汰、早旦行向左衛門尉爲平宅、○中略今夜則露顯、○中略殿下賜御牛幷女裝束、右衛門督顯右兵衛督忠按察大納言送扇、大藏卿爲扇、二枚、被物一重、

〔中右記〕永久二年十二月廿五日丙寅、今日伊通少將通顯隆朝臣女子云々、送畫扇二枚、

〔中右記〕永久六年○元永元年十月廿六日甲辰、今夜內大臣殿○藤原忠通始渡給民部卿姬君許、○中略今日從中宮給姬君御裝束、入蓋少進資光著衣冠、爲御使、民部卿衣冠直相逢給祿、盛經取蘇芳衣女裝束女房廿人、童女二人、下仕四人、半物四人、雜仕四人云々、

〔長秋記〕元永二年十月廿一日、巳刻著束帶、行向二位經營所、上皇御所大炊殿○藤原公實女嫁源有仁、納扇一雙於懷中、付權亮實能令奉之、

〔長秋記〕長承二年六月十九日壬寅、早朝少納言來、今夕故大納言能實第六娘可嫁也、其間事、○中略退出時贈薰物一壺、是予女房之志也、巳刻許、付右近將監近方薰物一褁送右衛門督、盛水牛坑、以心太薄樣褁、其上以唐松枝鶴下繪、薰付雲母、其體如入水精、返事有神妙之由、今夜中納言中將賴長可嫁彼長女之訪也、○中略當日自上皇給裝束二具、御使勘解由次官資憲、按察使大納言取女裝束授之、又御馬一疋、牛一頭、右兵衛尉某丸牽給、式部大夫爲職取御馬、左近將監忠光取牛、御使給祿、自女院給女裝束衾等、件裝束白織物單衣、二重白綾單衣、凡三重也、於單衣領引出重之、濃打ひへき、白二重織上著、蘇芳二重織小袿、

濃袴、三重中有副幅、ひとはたばりなふふくさばりなり、かみごしにさしつけて、すそはをりかへして、又かみにおよぶ、裏赤色裏、(織物也)有扇、使判官代親隆、皇后宮同使大夫進是忠、齋院同使範宗、前齋院同使憲房、各有祿、件前齋院薫物入物、依院宣下官令圖繪樣、鴛鴦一雙居銀洲濱、

〔後法興院記〕文龜元年十二月十日甲寅、晚景參大樹、(○足利義澄)御臺(○日野永俊女)依參入也、爲其禮也、雖不先規分明、依飛鳥井宰相指南也、折節申次不祗候云々、仍無對面、

〔御日記〕明曆三年七月十日、伏見院殿御姫公、(○貞清親王女顯子、德川家綱妻、)去ル四月御下向御輿入、十六日、右御祝儀御三家ヨリ獻上物、

公方樣エ　三種二荷
姫君樣エ　銀子五十枚
銀子二十枚　於阿古
同十枚　於七
同二十枚　總女中
同十枚宛　於龜　近江
同五枚宛　岡野　於差
同五枚　川崎
同二枚宛　表使三人

右御三家御同斷

〔忠利宿禰記〕明曆四年(○萬治元年)五月十二日、久我右大將祝言有、爲祝儀大生鯛壹懸遣、伏見殿御姫君也、密々ニ而祝言有、

〔玉露叢二十九〕同月(○延寶六年十二月)十三日、昨日水戶少將殿、婚姻相調ニ付テ、大久保加賀守ヲ以テ、御祝

儀ヲ遣ハサル、所謂水戸宰相殿ヘ三種二荷、同少將殿ヘ白銀百枚、御小袖廿、同キ少將殿簾中ヘ金十枚、綿二百把ヲ遣ハサル、

〔萬天日記〕延寶七年十二月廿一日、甲府殿綱豐〇徳川御祝言相濟ニ付、爲上使以土井能登守、御祝儀被遣之、

銀三百枚時服二十　甲府殿ヘ
銀三百枚緞子廿卷三種二荷　御簾中ヘ
銀二十枚二種一荷　順性院殿ヘ
銀五十枚時服五　岡野肥前守
同　戸田伊勢守
同　岡野出羽守
銀三十枚時服五　渡邊平左衛門
同三十枚同三　藤枝丹波守
同二十枚同三宛　用人三人
同斷　奏者番四人
銀二十枚時服二宛　留守居衆三人
同十枚宛　小性十八人
同斷　小納戸十二人
同二十枚時服三　諏訪主殿
同斷　山口孫太郎
同斷　戸田十左衛門

同斷　藤枝帶刀
女中
銀二十枚　小倉
同斷　富小路
銀十枚　クメヂ
同斷　山野
銀二十枚　小上臈
同斷　カイ添
同斷　局
同斷　サシ
銀二百枚　總女中へ
同二十枚時服二　奥家老
廿六日、甲府殿御祝言相濟ニ付、爲御禮、綿二百把、金三十枚、眞御大刀國綱、（代銀七枚）獻上之、於御座ノ間
御目見、則備前介眞御腰物（代金五十枚）拜領之、
〔季連宿禰記〕貞享二年三月四日甲戌、大樹姬君（○德川綱吉女）紀伊中將殿（○德川綱教）御嫁娶之事、去二月廿二
日有其事、依之諸家衆參耶代稻葉丹後守許、被申賀儀之由風聞之間、示合局務師庸、今日參丹州許、
令申賀儀了、
〔季連宿禰記〕貞享三年十一月廿八日戊申、今日女二宮、（當今第二宮、御母中宮、去九月廿日內親王、○靈元皇女榮子）御移徙二條殿
御所也、○中略公家幷春宮御使等祗候、大納言殿（○二條綱平）有御對面、（自公家御祝儀拜領、御鯛一、桶糸也、）獻蛼、被相饗、依辭
退歟、無其事、無程退出、（返參禁裏春宮、依被申御返事之旨歟、）　廿九日己酉、早旦御祝儀物獻之、二條殿、御大刀馬代、綱

二喉、女二宮、杉原十帖、さあや一卷、箱殺一箱、女五宮、御樽代二百疋、鯛二喉、巳刻計著狩衣、參禁裏、長橋局中宮、二條殿、女五宮、女二宮等、奉謝昨日之賀儀了、　十二月五日乙卯、自二條大納言、御簾入御祝儀物、大刀馬代幷御肴等令拜領之、

〔妙法院日次記〕正德五年九月廿六日、八十宮、〇靈元皇女吉子大樹公〇德川家繼へ御入輿之御事御治定付、爲御祝儀、法皇江、昆布一箱被獻之、八十宮江、御昆布一箱、幷右衛門佐殿江、御昆布一折五十本、〇吉子生母被進之、〇中略

一兩傳より來口上覺

八十宮樣、公方樣江御入輿之御事、一位樣、月光院樣、〇德川家宣妻輝子御願ニ而、御契約之事被仰出候、今月中、御勝手次第、御參內御院參候而、御祝詞被仰入可然候、此段爲御心得各迄可申入由、兩傳被申候付、如此ニ候、以上、

九月廿六日　　兩傳雜掌

〔享保集成絲綸錄〕三正德五未年九月

法皇姬宮、女〇靈元皇吉子御入輿之儀被仰出候ニ付、左之書付渡之、

覺

一隱居又者病氣幼少之面々者、今日中、老中越前守中務大輔若年寄中宅江、以使者御祝儀可被申上候事、

一在國在邑之面々者、被承候以後、以使札御祝儀可被申上候事、

但隱居在邑之面々も同前

右之通可被相觸候、以上、

九月

〔享保集成絲綸錄〕六元祿十丑年四月

八重姫君樣〈江、〇鷹司兼熙女、德川綱吉養女、〉從水戸少將殿〈〇吉孚〉御言入之御祝儀被進付而、御臺樣三丸樣〈江戸、〉自諸大名御祝儀獻上之儀、自大目付中以書付相觸之、如左、

八重姫君樣御祝儀差上覺

御臺樣

三丸樣

右御二方江も、八重姫君樣御同前ニ、御樽代御肴、明晦日御一同ニ御祝儀可差上之、

一國持衆中、大名衆者、四時ゟ九時迄之內、以使者百人組番所迄可被差出候、

一御譜代衆詰衆奏者番衆ハ、九時ゟ八時迄之內、是又以使者百人番所迄可被差出候、

一御臺樣三丸樣江之御祝儀も、八重姫君樣江之通、二丸御持之番所迄可被差上候、

四月

〔季連宿禰記〕元祿十年十一月十四日庚寅、綾宮〈仙洞皇女准后御腹〇靈元皇女福子〉可被配伏見殿〈〇邦永親王〉之由、昨日御治定、仍諸家參內被賀申、又准后御方各申賀儀云々、此事去十月一日歟、有或人密語、其後强而無此沙汰之處、今日各有參賀事等云々、　十五日辛卯、綾宮御方之事、參賀所々之事、尋遣大外記了、

十六日壬辰、大外記入來、相伴之參仙洞准后松木前內府等、綾宮御事賀申之、

〔百一錄〕元祿十一年六月十三日、八重姫君〈〇鷹司兼熙女、德川綱吉養女、〉水戸少將〈〇吉孚〉亭へ入輿、大將〈〇德川綱吉〉御養子、實鷹司前殿下〈〇房輔〉孫女、諸司諸家中、枉駕被申賀儀事、來廿三日也、

〔妙法院日次記〕元祿十一年六月廿一日、今月十三日、八重姫君樣、水戸少將殿へ御入輿被遊候、依之來廿三日、松平紀伊守殿迄、御祝儀之御使被進可然候、此段各迄可申入旨、兩傳被申候付如此候、以上、

六月廿一日　　　　正親町家　雜掌

御坊官衆中

柳原家
雜掌

〔季連宿禰記〕元祿十一年六月廿一日甲子、大外記師庸朝臣來臨、被命云、只今依使向傳奏、正親町前大納言家、以雜掌被命云、大樹姬君來廿三日令入水戸殿給、依之所司代松平紀伊守迄、諸家參賀之事、自傳奏家被觸之、外記官幷催方之中、若先年如此之事參賀哉云々、大外記云、先年不及參賀、近者大樹姬君、(鶴姬君)御緣組御沙汰之前後不及參賀云々、然者今度不及參賀歟之由傳奏被命之、大外記云、就而當時之儀、令參賀可然者、重而可計給之由被申之云々、尙催方之中、鶴姬君之時、令參賀輩有之者、內々可尋示之由示約之了、　廿二日乙丑、昨日大外記示合參賀之事、今日尋遣行事官季雄之處、鶴姬君之時、參否不覺、尙尋亮仲、若彼時參賀者、今度之時、窺申傳奏可參賀云々、　廿三日丙寅、今日公家衆、參賀所司代松平紀伊守二條館之由風聞、是今日大樹姬君、令入水戸殿給之事歟、

〔先哲叢談續編一〕鵜飼鍊齋

鍊齋嘗爲其男文平娶婦、公(○水戸藩主德川光圀)賜鷹一隻賀之、婚儀將給包厨煮之、小緘封十圓金、繫在鷹翼、鍊齋始知之、拜謝、公曰、文士貧窶、則胸裏壅塞、操觚授簡、爲之縮屈不能暢達、甚害述作、故賜與之、

〔有章院殿御實紀十四〕正德六年(○享保元年)閏二月廿二日、御納采女(○靈元皇女吉子)を賀し、群臣出仕して宰臣に謁す、萬石以上の人々、宿老御側用人少老の宅にまかりて賀す、　廿三日、きのふの事により、萬石以下の人々、諸老臣に謁賀す、致仕臥病幷に幼稚の輩、使者を出し、在封の人々より使札を献ず、

〔柳營秘鑑十〕竹姬君樣御婚禮之式

一享保十四酉年十二月十一日、竹姬君樣、松平大隅守繼豐方江御入輿之行列、幷御道具獻上之覺、

御三家幷諸大名獻上之品

一御屛風五雙宛　尾張殿紀伊殿

一同三雙　水戸殿

一御書棚一　松平加賀守
一金入五卷　松平長門守
一十種香箱　松平筑前守
一呉服箱ツニ　松平右衛門督　松平兵部少輔　松平丹後守　松平淡路守
一十二手筥　松平肥後守
一源氏一部　狹衣一部　有馬中務大輔
一御純張　松平出羽守
一御文臺　御硯筥　一面　上杉彈正大弼
○中略

一御臺子壹飾宛　松平陸奥守　細川越中守
一御挾箱壹荷宛　松平安藝守　藤堂大學頭
一御勻棚　松平大炊頭
一御純張　井伊掃部頭
一御提重壹組宛　佐竹右京大夫　松平甲斐守
一御小袖簞笥一對　松平民部大輔
一紅綸子十五卷　松平大和守

獻上、都合貳百七箇條
人數貳百七拾七人内　貳百六拾壹人　萬石以上　五人　五位御役人　拾壹人　小役人

〔續百一錄〕婚禮
享保十六年六月三日申來ル、伏見宮○邦永親王姫宮比宮、大納言樣○德川家重へ入輿御治定、爲御悅ニ一條江戸御行向、四日五日
廿五日、今月十八日、大納言樣ゟ姫宮樣へ御結納被進候ニ付、廿七日廿八日兩日之內、二條御行向、
十二月廿五日、西丸大納言樣御婚禮、今月十五日被爲濟候御祝、廿四日廿五日兩日之內、二條行向、

〔享保集成絲綸錄七〕享保十六亥年十二月
大納言樣○德川家重御婚禮相濟候爲御祝儀獻上物
公方樣
大納言樣　江
二種千疋　拾萬石以上

二種五百疋　五萬石より九萬石まで
二種三百疋　壹萬石より四萬石まで
二種五百疋　嫡子之侍從
同斷　隱居之侍從
姬宮樣江
二種五百疋　拾萬石以上
一種五百疋　五萬石より九萬石まで
一種三百疋　壹萬石より四萬石まで
一種五百疋　嫡子之侍從
同斷　隱居之侍從
右之通可ㇾ被ㇾ獻候
公方樣江之獻上物者、御本丸御玄關より、大納言樣江之獻上物者、西丸御玄關より、姬宮樣江之獻上物者、坂下番所迄、來ル十六日朝六時より五時迄之內、在國在所之面々共ニ、一同ニ以使者可ㇾ有獻上候、以上、

〔天保集成絲綸錄十五〕文政十一子年十一月
永姬君樣〇德川家齊女嫁ニ德川齊位ー御結納御祝儀獻上物
公方樣
內府樣江
二種二千疋宛　三拾萬石以上
二種二千疋宛　拾萬石より貳拾九萬石迄

一種千疋宛　五萬石より九萬九千石迄

一種三百疋宛　壹萬石より四萬九千石迄

御臺樣

御簾中樣　江

永姬君樣

一種千疋宛　三拾萬石以上

一種五百疋宛　拾萬石より貳拾九萬石迄

一種三百疋宛、　五萬石より九萬九千石迄

一種宛　壹萬石より四萬九千石迄

公方樣

內府樣　江

一種五百疋宛　拾萬石以上嫡同隱居

御臺樣

御簾中樣　江

永姬君樣

一種宛　同斷

右之通可レ有二獻上一候、公方樣江之獻上物者、御本丸御玄關より、內府樣江之獻上物者、西丸御玄關より、御臺樣永姬君樣江之進上物者、平川口御門番所迄、御簾中樣江之進上物者、坂下御門番所迄、御結納御祝儀之翌日、朝六時より五時迄之內、在國在所之面々とも、一同以二使者一可レ有二獻上一候、

十一月

盃酌飲食

〔三寶院日次記〕天保六年十二月十日、東本願寺樣衆下間式部卿、川那邊帶刀、坊官宛來狀之趣、○中略此御方、○伏見宮貞敬親王女增子新御門主○淨光ニ御緣組、御願之通被仰出、○中略明十日御入輿御治定ニ御座候、○中略就夫當時嚴敷儉約中、旁以此度取扱之義、諸事御省略之御事ニ候得者、右御祝儀御音物等被進候儀ニモ御座候ハヾ、乍御失禮堅御斷被仰出候、此段各樣迄、可得御意旨ニ付、如斯御座候、以上、

十二月九日

〔言成卿記〕安政三年十二月十九日、昨今日兩日之內、脇坂淡路守役宅へ、諸家行向之義、篤姬君、○島津齊彬女、近衞忠熙養女、大樹○德川家定緣組歡云々、家公○山科言知予○言成內藏頭○言縄等、稱所勞以使者申入了、近習公卿行向、順番池尻三位被行向云々、次順番爲予之由、依之行向順番帳被送落手了、差當來年正月可行向者也、　四年正月八日、關東大樹姬君婚禮、舊臘十八日遂行、右歡諸家所司代行向、今明日可行向、依所勞以使者可申入、過日雜掌觸來云々、家公予內藏頭等、稱所勞以使者申遣了、予內藏頭等非順番也、但以來姬君可稱御臺云々、

〔言成卿記〕弘化四年六月廿八日、從柳原鶍壹臺進二被贈云々、予今晚婚禮爲祝儀被送云々、件媒約之綱、依之被贈云々、自常家ハ、昨年祝儀挨拶、博代二百疋肴等遣、今度披露ニ付、今日被贈云々、

〔婚禮推陳記〕酒改樣の次第、先雌蝶を指たる瓶子の口を拔、仰て置、酒を提子の中江能き程に移し、次に雄蝶を指たる瓶子の口を拔て、雌蝶の上へうつむけ置、酒を提子へうつし、提子の酒を銚子江能程に入て、酌加出候はゞ渡すべし、瓶子には本のごとく口を指て待べし、引渡出る前と、內另の出る前と、膓煎出る前とに、必酒を改る也、

師傳に、古法は瓶子を臺に不据、直に飾置たるとみえたり、今は三方に瓶子を別々に据て飾置也、たとひ古法のごとく下座へ取下るとも、三方共に抱へ取おろす也、此時は蝶と蝶を重るに

も及間敷か、蝶は拔ても面々に置たるが然べし、古法は床に瓶子を直に置たるゆゑ、雌蝶の上に雄蝶を重ざれば、又瓶子へ口を指時の爲に如斯ゑたると見えし、瓶子を公卿に載る時は、三方の銚の中江下水板をして、瓶子のかうだいの入樣にゑたるがよし、三方の天井より、瓶子の腰のみえる樣に穴を彫せたるは惡し、近比は古法のごとく瓶子を下座へ取下し、酒改る所作をせずして神酒を入、上座の飾物計にして、銚子提子江酒を入置、台盃をする事專用ゆ、他流にては木にて瓶子を挽せて、銀箔にて彩色、紺青にて鶴龜松竹を書たるを用ゆる事、粗見えたり、

通の女房は、聟へ一人、嫁へ一人、待女房へ一人と、如此定べし、通も酌も長かもじ、夏は腰まきにて勤むべし、何も二親持女房を用ゆ、膳の据樣の事、式三獻は、膳の緣と緣との間を三寸程宛明て、出入のなき樣に据べし、雜煮三獻の膳も同前也、七五三、五々三の膳は、本二三の膳、緣と緣との間、各五寸宛明据べし、加樣にするゑざれば置盃捨土器の臺も本二三の間におかれぬ也、

師傳に、通も酌加も長かもじ御免あらばかけべし、又中のかもじにすべらかしもよし、通は其女房を定て、誰は聟江、誰は嫁江、誰は待女房江と兼而稽古の時より定置、三獻を出すにも、七五三、五々三を出すにも、次第不替樣にすべし、相盃の時は、三獻を据るに、一番に嫁より据べし、其日の正客ゆゑ也、扨聟、待女房と据べし、三獻を取時は、据留よりあける也、据留とは、式三獻にては鵬煎が据留也、雜煮三獻にては吸物を据留と申也、若略し候て引替にすれば此沙汰なし、當時は相盃過候へば、直に色直し有ゆゑ、其上にて七五三、五々三出るとも、又は喰料出るとも、色直しの以後は、男より御膳を先ニ据、扨嫁待女房と次第に据る也、二三向等も同事也、○中略

酌取樣の事、常には替り結酌を本とする也、本酌は二足退提、くはへは六足出て加へべし、これ合盃の時、酌くはへの足數也、合盃の時は、酌の振廻、右へ廻ること心得べし、上段にて酌の時は、本酌は

はい酌にすべし、加へば上段の上へまゐるべからず、其身は下段に居て、提子計を上段の縁より内へ入て加べし、

師傳に、婚禮は結酌を本とす、酌の結といふは、嫁の盃を男江持行時は、上座の飾物の方江向ひ立て持行べし、男新盃にて被飲初、其盃を嫁へ持行時は、酌わが右の方江廻り、下座江むかひ立て嫁へ持行也、これを酌一人の中の結と云は此事也、女中酌の書に、相盃の時は、酌右へ廻ると有は此事を申也、男の新盃にて被初たる盃を女房へ持行時、酌上座江向ひ立て持行時は、ほどく酌に成て常には用れ共、祝言合盃の酌には嫌也、又酌と加、出合頭のむすびと云は、銚子へ提子より酒をくはへて後立時に、本酌右の方へ往時は、くはへもわが右の方へ廻り立候へば、酌と加の肩と肩と行違也、これを酌と加への結と云也、又加へ一人の結と云は、夫婦共に三獻宛飲、盃納り、其盃古法のごとく上座へ置とも、又勝手江持入とも、本酌は不構勝手へ入時、くはへ計本酌江立むかひ、肩の往違所にてぐるりとわが身を廻りて、本酌に打つゞき入る也、これを末座の大結と云て、加一人の所作とす、總じてむすぶ酌、つぼむ酌、思ひ歸と云は、名はかはれども所作一ッ也、此酌の取樣は、嫁聟取舅入の時に用ゆ、わかれ酌、ひらき酌、ほどく酌と云は、名は三ッにて所作は同事也、此内わかれ酌といふは、嫁里出の時に用て、常には不用也、加て後本酌右江立て往とき、加へは左のかた江一度に立わかるゝ事也、ひらき酌と云は、本酌右の方江立て、二三足あゆみたるを見て、跡にて加は靜に立、左へ廻りて下座へ歸、上座を後にせぬ樣に居向居るなり、是を俗にひらき酌と云て、正月、五節句、官位、元服、髮置、袴著、萬事の祝儀に用る也、むかしよりたとへにも、酌する人はあれども、加をする人まれなりと申傳る也、子細は、くはへ不調法に立振廻時は、結酌にとれども披酌に成事有、ひらき酌に取とおもふ時、結酌に成事有、能能鍛錬すべきは酌くはへの習なり、

〔女諸禮集〕酌とりやうの事
よめ入聟入の時は、むすぶ酌肝要也、たとへば、右の方へ盃下り候はゞ、酌の左の方へ行べし、又向座へ渡り候時は、酌の右の方へむくべし、此時に其儘左の方へ向ひ、上座を後ろになせば、是を結ぶといふ也、左座の時も此心得也、末座までも上座を後ろにせぬ物なり、左右共に上座の方へ向き候て、末々までも取べし、
娶とりの酌の事、二足あゆみて加ゆべし、くはへは六足行くべし、此時は加へは右たるべし、銚子の口と、提の口との合やうにて心得べし、何れも結び酌なり、
聟入の酌の事、一足半あゆみて加ゆべし、加へは七足半行て、右の膝を立候てくはふべし、聟入酌は、兩親ある小姓の役なり、

〔婚禮合盃之部〕引渡据様の事、○中略女房三人一行に並び、引渡を持出据様、嫁珍客故、先之出たる通ひは嫁江据、其次は聟に据、其次は待女房江据るもの也、扨立様、先待女房の通ひ立、其次に嫁の通ひ立、其次に婿の通ひ立也、如斯待合せる様に指南したるがよし、子細は流に寄、夫婦對座に居れば、當流は男は天に比する故、嫁よりは上座に著座也、待女房と嫁と對座する也、此心入を以て、縦流違たり共指南する也、先色直し前は、兎角嫁を賞翫する也、昔の待女房は、聟の家來故に、三獻を据るに不及、夫婦計也、今は上々の待女房は猶以、縦家來たりとも三獻を据候ねば座さびしき也、かやうの時は、夫婦江三方、家來の待女房は足付膳にて、高下を別る物なり、
通ひ人數の事、通ひは三人なり、誰は聟、誰は嫁、誰は待女房と、混亂せぬ様に兼て定め、人數を名代に作り置、通ひ致たるがよし、本式は床の瓶子は取下し、其兩瓶子の酒を提子に壹ッに入合せ、夫を銚子に入、酌加江渡す故、瓶子を取扱女房二人、酌と加二人、通ひ三人、以上七人撰むなり、近代の婚禮は、瓶子の酒を改るに不及、瓶子は木又は鈴にて作りたるにても飾り物にし、盃をさせる故、

瓶子取下し、銚子加改入るに不及、酌壹人、加壹人、通女房三人、是はなくては不叶也、右の役人、聟方にて用意也、若嫁の家來勤る首尾の時は、聟方より獻立を當代は取寄せ、其趣を以て此方にて致遣也、尤人數を名代に立、膳の据樣、酌の取樣等、指南申者也、婿方の座鋪の繪圖をも取寄せ見て、其通りに、爰は嫁爰は聟爰は待女房、座作りして指南すべし、○中略

床飾眞行草の事、當流の聟方にて眞の床飾といふは、床の眞中江饗の膳、一膳聟の居る方に、二重臺、男瓶子、置鳥、嫁の居る方に、手掛臺、饗の膳と、手掛の間に置鯉一ッ、女瓶子一ッ、床緣より下に三方に三ッ土器、銚子、提子、但から銚子、から提子也、是を眞と云、行といふは、床の眞中に、芳萊の臺、又はせきれいの臺、兩端に置鳥、置鯉、瓶子一對、床緣の下に、三ッ土器、銚子、ひさげ也、夏の婚禮には、置鳥、置鯉、作り物也、草の飾は、床の眞中に、鏡餅一重、餅の上に、昆布栗熨斗の三を、兩脇三方の上に瓶子一對、又は鈴(ヘイ)を蝶花形に包飾、是にて眞行草三段也、兎角聟の著座の方江、男蝶の瓶子を置と心得べし、○中略

七五三、五々三、五三三の高盛の事、七五三といふは、本膳に汁を付す、食一ッに菜七ッ、二の膳に汁二ッ、菜五ッ、三の膳に汁二ッ、菜三ッ也、四汁十五菜也、是を本朝の饗應の眞と云、高盛の七五三を飾七五三といふ、喰料の七五三を服紗七五三といふ、又平の七五三とも云也、常は七五三、五々三ともに、食湯漬成共婚禮の時は、五計土器に食を高盛にする物なり、五々三といふは、本膳に高盛の食汁菜五ッ、二の膳に汁一ッ菜五ッ、三の膳に汁一ッ菜三ッ、是にて三汁十三菜也、是を饗應の行といふ、五三三は、本膳に食汁菜五ッ、二の膳に汁一ッ菜三ッ、三の膳に汁一ッ菜三ッ、是にて三汁十一菜也、是を饗應の草と云、猶輕き人に、五三二迚テ、本膳に食汁菜五ッ、二の膳に汁一ッ菜三ッ、三の膳に汁一ッ菜二ッ、是にて三汁十菜也、此時の口傳には、引落の菜といふ事なく、皆組付也、掛盤杯にも、喰料の七五三五々三あり、皆此時は鱠燒物和物香の物、都て腰高に盛也、此類を服紗

盛と云、縦土器に盛ても、挾給へるごとく盛たるは皆服紗盛也、高盛といふは、婚禮十日も前より、のりにて盛立る也、喰ぬが賞翫也、

色直し祝の膳部の事、○中略奥表色直しの時は、夫婦待女房江契餅とて、小餅に小豆を付て汁椀に盛り、かさを蓋にして出す、是は略也、或は土器に五ッ程盛り輪に据る、右の手先の向に菓、土器に數の子輪に据る、左手先の向菓、香の物又卷鯣輪に据る、箸は一尺二寸、尺の箸、耳土器に据る、扨吸物は鱈又は蛤、是もともに土器、向菓二ッ、是も土器なり、一方はからすみ也、一方は海老、又はたこ、何にても、扨三方盃取肴出る、○中略

喰料の事、是は合盃雜煮三獻にて澄、其跡に高盛五々三も五三三も出さぬ時は、常の振舞のごとく三汁九菜、又は三汁七菜、二汁五菜にも分限に應ずる也、かやうの略義、小身の人は、縦喰料にても夫婦待女房の食は高盛、上にさば一ッ置、末のかさ蓋にして据候て、跡より本膳に常のごとく食を盛、三人江通ひ持出引時本椀の食を取替立也、

〔婚禮推陳記〕嫁見參聟入舅入の時膳部の事、互の分限により、高盛七五三、又は五々三の上に喰料の引替出る也、

師傳に、聟馳走に、盃臺おさへの臺を聟の前へ出し、舅被出挨拶の上にて、盃臺の盃にて舅被飲初、加有て其盃聟江被指、初獻被請と挾肴有、其上にて二獻被飲時、引出物出、以上三獻被飲候て、聟の盃舅江戻るとき、別の押へ臺を出し、其肴を聟被挾る也、それより舅の盃、聟の兄弟一門衆江被指、雙方の一家盃事有て、盃舅被納なり、聟の父入來の時者、盃臺一面父子の前江出し、聟の父被飲初たる盃は、嫁の兄弟か、一家の衆へ被指、夫より段々盃事有也、其座の時宜挨拶、媒の人に任すべし、下座に諸の者ひかへ居て、雙方盃事の内に小謠をうたふ也、昔は自分に謠事を一分の規模の樣にせしと也、近代貴人の聟舅入には自分の謠稀成事也、盃事終て、聟の御供申た

る家臣を召出し、舅の御盃被下、腰物等を給也、

〔婚禮法式 上〕婚迎之部

一手懸仁重折のこしらへ様、瓶子の口包様、銚子提子かざり様、式三こん七五三の膳部の事、庖丁方にてする事也、御てうしひさげの柄をばつゝまぬ事、殿中にては此分なり、將軍家には、庖丁は進士流、大草流の兩家なり、兩家共に、てうしひさげの柄をば包む事無之事也、○中略ひさげのかざり物、蝶花形の折様、瓶子の口包様、置鳥置ごいなど、すべて呑物食物にかゝはりたる式作法の事は、庖丁人の流儀により、違有之事に候、庖丁の流儀は、其家々に用られ候庖丁人に申付らるべし、

〔貞丈雜記 祝儀一〕一何の祝にも、置鳥、置鯉、二重折、瓶子壹對、上座に置て、神に供へ奉る、○中略常の祝には鯉一ツ、雉子の男鳥(山結かけて)一ツ也、婚禮の祝には、鯉二ツ、雉子(男鳥、女鳥、)二ツ也、(山結はかけず)是置鳥置鯉の調様のかはりめ也、

〔冠婚抄〕水島氏傳曰、手掛熨斗の事、木地三方には紙をしかず、熨斗一把をおく、前に結び熨斗を置也、塗三方には紙をしきたるよし、結のしは長サ二寸計に切てむすぶ、此熨斗を夫婦對面の所へ出すなり、

一同傳云、引渡雜煮吸物之事、一番に引渡、二番雜煮、三番鰭の吸物也、引替にせぬ也、三度にする故ならぶるなり、引渡のこんぶ栗熨斗、小角にのり付、雜煮も煮ざる也、吸物も生にて煮ず、手持の鰭を付出す也、

〔女諸禮集〕婚禮

式三獻の時は、引替の湯漬飯を出す、式法ある事なり、略したる時は、二汁五菜或は一汁三菜など、心にまかすべし、本式を好む時は、料理人の古實をよく知りたる人を頼みて、萬事調ふべし、秘事口傳有事にて、なか／＼筆紙の及ぶ所にあらず、右にしるしたるは草の祝言、略したる趣と知る

べし、

雜煮引替の事

男盃を飲をさめし時、てうしひさげは末座にひかへ居るなり、其時雜煮を出す也、待女郎もつぼねもすはるべし、此時皆々盃とりかはすなり、雜煮の膳出す時聟は座を立て入べし、其座に居るべからず、雜煮喰終りて、鮒の吸物出し、酒をも出す也、其後引替の膳を出す也、獻々の盃事有べし、此席長座にならぬ樣に心得べし、

婚禮の夜高盛の事

婚禮の夜、式々の盃事すみて、雜煮引替、本膳を出す、女房達は膳を一樣になし、聟ばかり常器の椀膳を用ひて、飯を殊の外高く盛り上る事なり、かいぞへの女、是を少し盞へ分けて、聟にすゝむる也、

〔婚禮推陳記〕色直しの事

師傳に、金銀の膳部と云事、四條六條の流にあり、色直し前は、小角龜の甲土器の輪三方龜足高立に至まで、皆銀にて彩る也、色直後は金箔にて彩る也、式法は木地を本とす、後世如此飾に彩るを專法式の樣に申習はせり、喰料は、塗木具にても、かけ盤にても出す也、女中方江出す喰料の菜は、つまみ盛とて、膾などもかさ高に盛て出す也、まゐり候ても箸にて直し出すゆゑ、何方をまゐりたるも不知樣に盛事法也、總じて祝言の膾は、盛形のわからぬ樣につまみ膾にする也、わけるといふ事嫌也、むかしは世質朴にして、大こんのさゝがしに、鯛を入たるなますを用ゆといへ共、後代世花美になり口上魚を用れども、今に至て古實を不捨して、祝言の膾には、さゝ吹大こん田作を入交、膾とするは此ゆゑ也、

〔隨意錄四〕方俗婚禮、貴賤必供蛤汁、是權輿乎享保中薩侯大婚云、然而昏義有合卺之事、卺、說文作𢀿、

云、盞也、盞蚌蛤也、然則供蛤汁有由也、而禮說則曰、卺破瓠爲杯也、雖瓠也雖盞也、不二合之義、則同意耳、

〔草茅危言 五〕町方婚禮ノ事

一婚禮ニ蛤ノ吸物ハ、享保中ニ、明君ノ定メ置セ玉フヨシ、蓋ニ蛤ハ數百千ヲ集テモ外ノ貝ニ合ザルユエ、婚儀ヲ祝スルニ、是ホド目出度モノハナシ、ソレ故ノ御定メ也、恐ナガラ味アルコト也、蛤ハ四季トモニ澤山ナル物ニテ、儉ヲ表スル第一也、其餘風京師ニハ傳ハリタレドモ、大坂ニハ曾テ用ヒズ、有マジキコト也、是ハソノ澤山ナルヲ鄙ミテノコトナルベシ、然ルニ旣ニ上巳ニハ專ラ蛤ヲ用ヒテ祝儀トス、旣ニ風ヲナセバ、誰モ鄙トセザルヲ見ルベシ、且蛤ハ宰割モイラズ、烹飪モ際ヲ取ラズ、鹽梅モ易ク、是ニテ祝儀ヲ表シ事濟メバ、至簡至當ト云ベシ、實ハ先世ノ遺美ナレバ新ニ號令アリタキモノナリ、

〔類聚雜要抄 一〕聟妻御前　臺三本〈普通定〉

第一進、臺一本、居酢鹽二口箸臺、〈匙例箸二雙〉

二進、臺一本、〈不居物〉

三進、大盤一枚、干物五坏、〈ヨリ切、蒸鮑、燒蛸、干鳥、楚割、干鯛、〉

四進、大盤一坏、生物五坏、〈フスマ切鯉、鯛、鱸、鳥、雉、〉

五進、臺五菓、〈松子、栢子、干棗、石榴、搗栗、〉

六進、中盤飯

七進、中盤、蚫汁加居、〈鯛平燒、鹽坏、海月、生蚫、蚫味噌、〉

八進、酒盞〈但返給中居之〉

九進、酒銚子

第二三日ニハ不進五菓子、例菓子進之、又進追物、(時美物八種計也)

銀器

飯垸一口　汁坏一口　酒盞窪坏二口　酢鹽二口　箸臺一口

自餘深草例平盤用之

〔二中歴(八供膳)〕執習供膳

先箸臺匙(作居之、居盞)　次飯(居中盤在盞、對箸臺居之、)　次四種(酢、醬、酒、鹽、居箸臺右、汁燒物供居之、)　次干物五坏(對四種、)　次窪垸物四盃(四種右居之、酒器居之、)　次生物五坏(對窪垸物、)　次餅(居箸臺左、)　次木菓(對餅、)　次小垸(分燒小土器居中盤、皆遍取出供之、)

〔久世家婚儀次第〕婚儀次第

御臺三本色目御打敷

海月　零餘子燒

第一

干鯖　酢(御箸二雙)　魚丁　熱汁鯉

卷鍋御飯　居耳土器

第二

蒲鉾(追物)

干鱠　鹽(御匙一支)　干鳥　冷汁鮑

字仁　平燒

松子　赤粉餅

第三

柑子

具桃子　白粉餅

次御酒盞(盞擎子)居中盤

次御銚子

三日夜餅納筥有心葉

餅 餅鏡御箸一雙 餅木御箸一雙 居鶴形臺

〔幸充日次記〕寬延三年四月十五日丁亥、充賢入來、婚禮之次第幷覺書、又疊紙色目等、幷供隨身記左、

御厨子所預高橋若狹守調進

奉書橫折一枚、右別筆、

元祿十六年十二月十一日、御嫁娶御前物、臺三本 有松重打敷、第一乾物五坏、干鮎、干鯛、酢小器 小猪燒蛸、御飯居二分坏 御箸匙、在臺、鋺右同 鮭魚條、乾鳥、第二生物、五坏 鱸、鯛、海月、器同 追物平燒、鯣、御汁物、鮑 追物生鮑、鮑味噌右同 鯉、生鳥、第三菓子五坏、榧子、干棗、干柿、柘榴、搗栗、御飯、居中鋺 御酒盞、有臺、居中鋺 擎子 御銚子、銀片口之銚子也 右御二方前同、之御酒盞御銚子亦同、以上、

〔幸充日次記〕享保六年二月十八日丁未、先是二月十六日、西本願寺新門主光澄、九條家晴男 充姬御方へ大門主光常女 御結納、廿四日癸丑、右西門主御獻之次第、

初獻　平角 熨斗　小臺 かちぐり 小臺 こんぶ　三盃御箸

御銚子提子 白色　但御銘々

新門主三獻 光姬御方三獻

二獻　平角小臺 名吉 數子 御雜煮　御箸臺

御銚子提子 銀兩口　光姬殿三獻參り 新門主へ納ル

三獻　平角 煎海鼠 小臺桐足 蛤 小鯛　御箸

御銚子提子 金兩口　新門主上り 光姬殿へ納ル

紙鋪 御口祝 長熨斗 切熨斗 昆布 搗栗　御箸

御三寶　三土一重

平角 卷鯣 平角 數子 御雜煮 御茶碗　御箸

御吸物鯛鰭　御箸

松梅立テ公卿御肴海老船盛　カラスミ、メザシ、ロカメ

右引替御本膳

御鱠鯛栗ケン　御汁鳥ナメスゝキ皮牛蒡

御香物　御飯

御二

御煮物和アン掛　スマシ御汁藻魚青昆布柚

青ミソ御アヘ物メヒラギタド

御引物

燒鮒平がつうな　指味鯉いり酒みる

臺引雲雀生干きすご

御吸物小はまぐり

御肴

一たこ　一巻いか　一かまぼこ

御茶菓子西王母花ぐり

御菓子羊かん昆布　かき　ゆきやき

〔將軍德川家禮典附錄十一〕享保十六辛亥年十二月十五日大納言樣〇德川家重御婚禮之御次第

御婚禮御祝御獻立是ハ御臺所人頭池永清右衛門相勤

御祝御膳部

式御三獻御膳部、銀だみ御紋白繪土器、下繪甲立銀、

一御三盃
一御肴之物
　御初獻
海月盛　熨斗盛　三御盃
　御二獻
內粥　酢　御箸臺
　御三獻
膓煎　鹽　御箸臺
　羹御膳（御膳部、銀だみ御紋所白繪土器、下繪甲立龜足共に銀糸花、相生の松、五色の糸かけ、）
　御本
鯛盛　鳥盛　ほや盛　削物　御羹（[illegible]）[illegible]　御箸臺（手鹽手鹽）
鱸　松笠盛　うづ盛
　御二
かど盛　鳥盛　はね魚　鱠　御羹（[illegible]）[illegible]　御箸臺
かど盛　芋込　酢蓋
　御三
雲雀盛　ふり白髮　かさみ　御汁懸御飯　御箸臺
角盛　酒浸
　御與
擧鰹　海月　御汁（[illegible]）　にし

熊引　たこ　御汁ひしほいり

御五

のし蚫　御汁たい

さゞえ

からすみ　御汁こい

御湯

蓬萊御菓子　十二種

御色直し（御構部金だみ御紋土器、下輪甲立共ニ金、）

一御三盃

一御臺の物　御箸臺

御初獻

こんぶ

のし　三御盃

かちぐり

御二獻

結のし

色之餅　御箸臺

小豆粉

大豆粉

御三獻

差味
鶴御吸物　　　　　　　　　　　御箸臺
小刺
御添肴あいきやう
七五三
御本
鹽引盛　　　　小桶　　　　　　燒物
和交　　　　　御食　　　　　　御手鹽　御箸臺ゝ
香の物　　　　纐目　　　　　　かまぼこ
御二
たこ　　　　　海月　　　　　　御汁菜
貝盛
からすみ　　　たこ　　　　　　御汁鯛
御三
羽盛　　　　　　　　　　　　　御汁たい
さゞえ
舟盛　　　　　　　　　　　　　御汁こひ
御湯　　　　　御鉢
糸花
緣高御菓子　九種

祝餅

右相濟、御引次に服紗御膳、三汁十菜之御料理御島臺押ともに出る、　以上

〔幸充日次記〕寛延三年四月十五日丁亥、充賢入來、婚禮之次第幷覺書、又疊紙色目等、幷供隨身記左、

御みす入

一初こん　ゑきざかな御めん〳〵御さかづき

一二こん　こいの高もり

一三こん　たいの高もり

右壽宮樣より御はじめ、帥宮樣江進まゐらせ候、壽宮樣御をさめ、

御わたましの夜

一三ぼんだての御膳、三こんの御さかづき出る、此時御さかづきは、帥宮樣より壽宮樣へ進じまゐらせ候、帥宮樣御をさめ、

一御とこさかづき、御すゞ御さかな、帥宮樣より壽宮樣へ、又帥宮樣へ、又壽宮樣へ進じまゐらせ候、御をさめ、〈幸充云、是者奉書一枚横折、閑院帥宮へ、壽宮中御門院姫宮、御婚禮之御盃之次第、男筆ニ而御到來、〉

〔江家次第　二十〕執聟事〈近代例〉

聟君解二裝束一、掩レ衾、〇中略次供レ餅、銀盤三枚、〈有レ尻各盛二小餅一〉加二銀箸臺、銀箸一雙、木箸一雙、件箸臺多作二鶴形一、

已上居二紫檀地螺鈿宮蓋一、

件宮蓋螺鈿云々、多令二夫婦年久、子孫繁昌者作一レ之、又令レ儲二件餅一、聟公食二餅三枚一、〈不レ食切云々〉件陪膳、是男陪膳也、

〔婚禮法式　上〕婚迎之部

一二日め三日めも初日のごとく、式三獻以下御祝あり、〇中略又三日の餅の御祝あり、餅をかはらけにもり、三方にすゑて、いざなぎのみこと、いざなみのみことにそなへ奉る、二神へめい〳〵に

一そなへづゝ、殿よりそなへらるゝ、分二そなへ、御料人よりそなへらるゝ、分二そなへ、都合四そなへ也、三方も四ッ、かはらけも四ッ也、此餅御料人の里へも進申候、折に入て、肴樽折紙なぞそへて參らせらる、〇中略餅をかはらけにもりて、三方にする爲、御夫婦の御前へも參らせ、御吸物參りて、御てうし參り、御祝あるべし、

〔婚禮推陳記〕五百八十の餅の事、五百八十の小餅を行器に入て、樽肴を添て、新枕の夜、聟の方へ嫁里よりむかしは贈遣事を祝儀の法とせり、これを子の子の餅とも申、又五百八十の餅とも申也、此餅を夫婦江まゐらせ樣は、公卿に紙一重敷て、小餅を五百八十宛、杉形に盛、上に熨斗昆布栗を置て、夫婦江まゐらせる作法也、

〔婚禮問答〕三ッめ、皆子の餅數は五百八十八にて候や、かますに入て、途中にて舅殿の使と出合餅を取かはし候由、法式如何、三日めの餅の事は、舊記にも有ㇾ之候へども、皆子の餅と云名目知らず候、三日の餅、數定なし、かますに入取かはす事しらず候、折に入て參らする事、人々の分限により、折の數は何合もあるべく候間、餅の數も定無ㇾ之候、又舅殿の方にて、餅被ㇾ申付ㇾ事も知らず候、聟殿の方にて餅の祝有ㇾ之は、昔より定たる事に候、

〇按ズルニ、餅ヲ舅家ニ贈ル事ハ、婚姻兩家贈答ノ條ニ詳ナリ、參看スベシ、

〔幕朝年中行事歌合下〕卅六番　左　御婚儀

榮え行ためしをいほつ八十餅の數よりこえて數へおかなむ〇中略

御婚儀は、大かた攝家宮方の姫君を迎へさせ給へり、あらかじめ下向の事在て、本城に入らせ給ふ、納采納幣等の式は、かぞへ立んも言の葉たるまじければもらしつ、其後吉日をゑらびて御婚儀あり、五百八十餅の取かはしを始め、御祝ひの饗膳の作法、うるはしき限りを盡したためれど、うち〳〵の事なれば、くはしく知るものなし、是より御臺所と稱し奉り、西の御所のは簾

中と申奉る也、三家の方々をはじめまゐらせ、執奏及び近侍の面々百の有司も、有合かぎりは宴を給ふ、溜詰をはじめ無地のしめ半袴にて出仕し、老ぞくに謁して悦びをのぶ、此事うけ給はる輩は、かちの無地のしめ同じ色にすぢ付たる上下を著す、

〔後拾遺和歌集二十雜〕三條太政大臣〇藤原賴忠のもとに、侍ける人のむすめを、忍びてかたらひ侍けり、女のおやはらだちて、むすめをいとあさましくつみけるなどいひ侍りけるに、三月三日、かのきたのかたの、三夜のもちいくへとて、いだしけるによめる、　藤原實方朝臣

みかの夜のもちいはくはじわづらはしきけばよどのにはゝこつむなり

〔源氏物語九葵〕そのよさり、ゐのこのもちひまゐらせたり、〇中略こなた〇紫上ばかりに、をかしげなるひわりごなどばかりを、いろ／＼にてまいれるをみ給て、君〇源氏みなみの方に出給て、惟光をめして、このもちゐかうかず／＼にところせきさまにはあらで、あすのくれにまゐらせよ、けふはいま／＼しき日なりけりと、うちほゝゑみての給ふ御氣色を、心とき物にて、ふと思ひよりぬ、惟光たしかにもうけ給はらで、げにあいぎやうのはじめは、日えりして、きこしめすべきことにこそ、さてもねのこは、いくつかつかうまつらすべう侍らんとまめだちて申せば、みつがひとつかにてもあらんかしとの給ふに心えはてゝ、たちぬ、ものなれのさまやと君はおぼす、人にもいはで、手づからといふばかり、さとにてぞつくりゐたりける、〇中略のたまひしもちゐ、忍びていたう夜ふかしてもてまゐれり、少納言は、おとなしくてはづかしうやおぼさんとおもひやりふかく心志らひて、むすめの辨といふをよび出て、これ志のびてまゐらせたまへとて、かうごのはこをひとつさしいれたり、たしかに御まくらがみにまゐらすべき、いはひのものにはべる、あなかしこあだになぞいへば、あやしと思へど、あだなることはまだならはぬものをとてとれば、まことにいまはさるもじ、いませ給へ、よもまじり侍らじと、いふ、わかき人にて、氣色もえふかくおもひ

よらねば、もて參りて、御枕がみの御木帳よりさしいれたるを、君ぞれいのきこえしらせ給らんかし、人はえしらぬに、つとめて此はこをまかでさせ給へるにぞ、したしきかぎりの人々、思ひあはすることゞもありける、御さらどもなど、いつのまにかしいでけん、花そくいときよらにして、もちゐのさまも、ことさらび、いとをかしうとゝのへたり、少納言は、いとかうしもやはとこそおもひきこえさせつれ、あはれにかたじけなく、おぼしいたらぬことなき御心ばへを、まづうちなかれぬ、さてもうち〳〵にの給はせよかしな、かの人もいかにおもひつらんと、さゝめきあへり、

〔河海抄五葵〕亥子餅は色々也、三日夜餅は白一色なれば、かず〳〵にはあらでと云也、いま〳〵しき日とは重日を忌也、○中略亥子の次日なれば、子の子と惟光が當座申たる也、ふるくよりの名目にはあらざる歟、秘說あり、○中略

一說云、三日夜餅は、女の年の數を調する也、紫上十四なれば、十をば置て、その餘を四といはんをいむ心地に、三が一といはれたるか、もとより員數さだまりたる物ならば、惟光いくつかと尋申べからず、紫上の年齡を惟光しらざる故也、

〔源語秘訣〕今案、此餅むかしは銀器四坏に盛たるを、中比より四の數をはゞかりて三坏に、成たるべし、されども此物語は、いまだ四坏にもりし時分の事なれば、四坏の說を用ゆべきなり、三が一とは、四の數をいみて、源氏の君のとりあへずの給ふ也、河海は中古よりの儀をもて注せり、それが時分相違すべき故なり、次に三が一と云名目、左傳十九卷にあること也、絳縣の老人といふもの、人に年をとはれて答るやうは、臣生歲正月甲子朔、四百有四十五甲子矣、其季於今三之一也云々、此老人は七十三になるものか、ありのまゝには答ずして、生れたるより此かた、今日迄の日の數をかぞへていへるなり、たとへば甲子の日は、六十日に一度まはる物なるを、

生れてより此方四百四十五度の甲子の日にあひて、其最末の甲子の日より今日までは、三が一にあたると云り、六十日の三が一といふは廿日なり、甲子の日よりかぞふれば癸未にあたれり、今此問答は十二月廿七日癸未の日の事なり、四百四十五の甲子は、六十日にまはる物なれば、是をあはせてかぞふれば、日の數二萬六千六百六十日なり、是を横算におきて、たてざまに取なして見る時は、亥といふ字になるなり、二万六千六百六十の算のすがたかくのごとし、亖亥の字に似たれば、亥字の算とは名付たるなり、亥の子の餅につきて、亥の字の算の三が一といふ詞をとれり、又甲子の數をとれば、子のこともいふなり、周代の十二月は子月を正月にする故に、今の十月の亥の月は十二月なり、ゐのこも十月の事なれば、自然に相叶へり、十月は一陽はじめて地下に生じて、萬物をはらむ月なり、嫁娶のはじめのいはひにたよりある月なるべし、

〔花鳥餘情六〕嫁娶の三日にあたる夜、餅を枕がみにおく事は、まづはよからぬ事也、人の死せる時には、世俗にまづ餅を供する事あり、枕づゑといへり、それにかたどる也、たとへば女の男のもとへよめ入して、二たび父母の家にかへるまじきなれば、偕老同穴の契となづけて、とつぐといふもじは歸の字を用たるは、女は夫の家をわが家と思べきよし也、さて餅を用るも、つひにをとこのもとにて身ををへたる心也、嫁娶の日、ゑろき衣裳などを用るも此故也、榮花物語第十三にも此事有、中略〇三が一を、諸抄に三坏一具の心にいへるは、あやまれること也、むかしは此餅四坏もりたる故也、

〔おちくぼ物語一上〕夜さりは三日の夜なれば、いかさまにせん、こよひ餅、いかで參るわざもがなとおもふに、又いふべきかたもなければ、いづみ殿へ文かく、中略〇大きなる餌ぶくろに、ゑろ米入て、紙をへだて、果子、乾ものつゝみて、いとくはしくなんおこせたりける、こよひは、たゞをかしき

さまにて、もちひを参らんと思ひてとりて、よろづにくだ物菓などかきつくろひゐたり、○中略あこぎ、此餅を箱のふたに、をかしう取なして参りて、これいかでといへば、君いとねぶたしとて、おきたまはねば、なほこよひ御らんせよとて聞ゆれば、なにぞとて、かしらもたげて見あげ給へば、もちひを、をかしうしたれば、少將、誰かくをかしうしたらん、かくて待けると思ふに、ざれてをかしければ、もちひにこそあめれ、くふやうありとか、いかゞするとのたまへば、あこぎ、まだやはしらせたまはぬと申せば、いかゞひとりあるには、くふわざかはとのたまへば、あこぎ脚て、三つとこそはと申せば、まさなくぞあなる、女はいくつかとのたまへば、それは御こゝろにこそとて笑ふ、是參れと女君にのたまへど、耻てまゐらず、いとじほうに三つくひて、藏人の少將も、かくやくひしどのたまへば、さこそはといひてゐたり、

〔源語秘訣〕都記經信云、寛治三年正月十九日、嫁娶、知足院殿藤原忠實○盛餅三坏、被送、螺鈿沃懸地筥、銀坏三口、洲濱立、銀鶴一雙、盤上置、銀箸一雙、

〔中右記〕永久六年○元永元年十月廿六日甲辰、今夜內大臣○藤原忠通始渡民部卿姫君許、十一月二日庚戌、今夕內府御露顯也、○中略入御帳中後、奉三夜餅、民部卿之上奉之云々

〔山科家雜記〕文明十三年二月十七日、今日よめむかへ座敷のやう、又いわゐのやう尋候也○中略次の日のいわゐは、ぬしのまゝ、三日のいわゐ、あかきもちい、しろきもちい、三ど入に一つづゝ入て、くぎやうにすゑ候て出口さかづき男女に一せんづゝ、もちいのおほきさは、ゐのこの御まいりきりのほどにたかくつむ、かず候へども、たゞつみほうだいに入候、又しろきもちいばかりを、かはらけ二にもつみ候となり、今度甘露寺殿御方のは如此候也、このもちいも、とりかへもし、又もちばかりも、せんをもさた候也、

〔近衛殿御婚儀次第〕文政八年二月六日近衞內大臣殿薩摩國守息女御婚儀

石打水祝

兩御方就寢給、○中略 次供三夜餅、盛銀盤三枚、加御箸、入蒔繪筥、其儀女房持件筥、開蓋供御枕上、退、次大臣殿令嗚御箸給、女房參進撤之、納姬御方之御厨子、三箇日後、埋生氣方、此儀依近代每度御例、第三夜被供之、

〔後宮名目〕御火ざまり

是は夫のかたにて祝ふ事には侍らず、妻の家にて、親のいはゝせ給ふことにて侍る也、○中略 白川の院の中宮賢子の內へおはしての後、承曆元年七月九日御誕生おはしける、そのまゝへ御懷胎の御けしきとて、中宮御心地例ならずおはしける、つとめての睦月中頃、關白藤原師實公參內おはして、ゆくりなく御まがりのたまり水を主上にうちかけさせおはしける、主上おぼしかけさせ給はざる御事なれば、いかにぞや〳〵とばかりにて、あきれさせおはしけるを、辨內侍と云人、年四十を過有職なれたる內侍にておはしけるが、これはさ御けしきなさせ給ひそ、中宮の御火ざまりの料に、殿のいはゝせ給ふにてさふらふらむと申されければ、主上も御ほゝゑませ給ひて、おもはゆきことぶきは、丸がまうけとゝえおぼえずとてなん、うつぶし笑はせ給ひぬ、○中略 后宮のことわざに、體水を火と名付來たる事は對屋に出、別火をかまふる事よりぞおこりける○中略 火は水を以て消すものなれば、水をして火を留て、いよ〳〵御火ざまりの末ありて、御誕生うたがひなきことをことぶきおはしての事なるべし、それより後に例と成て、建武年中には、家ごとにはかなきものども迄も此ことぶきをなして、嫁娶過てつとめての睦月には、かならず妻の緣家より、水いはひとておこなひ侍る事にて侍る也、

〔滑稽雜談正一月〕水祝

和俗の去年新に娶し男に、歲首若水を祝とて、水を浴することあり、是を水いはひ、水かけなどいふ、往昔はなき事也、永祿の比、管領三好が家臣松永彈正が姪女を我家の寵臣に妻合せし時に、此たはぶれなし初しとかや、年わかき輩、血氣の盛たるに任せて此戲をなし、身をそこなひ、或は口

論闘諍に及ぶ事侍る、慎て相止、強て好むべからず、近世は心有世風に慣て、水懸のことぶきとて、金銀に濃たる手桶に、鶴龜松竹など書て、一雙にして、新に娶たる男の許へ相送る、是を受納して、謝禮のため招請して酒飯をくはせ、水懸振舞と稱す、

〔嬉遊笑覽八方術〕水祝　金箔を置て手桶を飾り、笠鉾などを用ひし事は、西鶴が武道傳來記などに、金箔置の手桶、銀箔の柄杓、衣裝づくしの笠鉾、落書の大團扇、竹馬、籠張の立烏帽子等の事をいへり、思ふに此事、寛永の末よりはやりし事なるべし、それより前にも、稀には有もやしけん、幸木をもて新婦を打など、みなおなじ類なり、江戸に盛に行はれしは、承應萬治の頃なるべし、○中略子を設くる祝ひながら、火とまるの義は、婦人にかゝれり、水を浴する心は、火とまれとにや有ん、○中略甲子随筆に、尾張甚目寺村に、去年妻を迎たる家々に、正月十一日湯を設て、同じ所の人を招きて入湯せしめ、浴後一盃をすゝむと云るも、水あびせ止て、其名殘なり、

〔日次紀事一正月〕京師俗、○中略有娶新婦者、則朋友聚其家、入水於桶、大灌其人、是祓除之謂也、日本紀中、孝德帝紀、粗有其儀、而後其人設酒食、開浴室而謝之、是謂水懸振舞、倭俗灌水曰加倶留、饗應曰振舞、

〔日本書紀二十五孝德〕大化二年三月甲申、詔曰、○中略有亡夫婦、若經十年及二十年、適人爲婦、幷未嫁之女、始適人時、於是妬斯夫婦、使祓除多、○中略如是等類、愚俗所染、今悉除斷、勿使復爲、

〔御定書百箇條〕婚禮之節石を打候者御仕置之事

寛保二年極　延享元年極

一婚禮之砌、石を打、狼藉いたし候もの、　頭取百日手鎖　同類五十日手鎖

〔公儀觸之認二〕一婚姻之節、礫打之事停止之、○中略

辰元禄十三年十一月十三日

〔御觸書留〕享保九辰年九月覺

町方に而、婚禮之砌、石。を打。戸障子等まで打破り、理不盡之仕方有之由相聞、不屆候、自今右之類有之ば早速捕へ、月番之番所へ召連可來、若其儘に打捨置候はゞ、後日ニ相知候共、名主五人組まで越度可申付候、此旨町中可觸知者也、

〔武江年表 二〕明暦二年正月、水。あ。び。せ。の事、自己の屋敷にて其家の者へあびする事は苦しかるまじき旨を令せらる、

〔嬉遊笑覧 八方術〕水祝　寛文二年寅正月三日、舊冬も相觸候通、正月の水。あ。び。せ。笠餅作り物巳下仕、大勢寄合、躁敷風情仕間敷候、幷に湯屋風呂屋へ召連參申間敷候事、銘々屋敷之内にて、あびせ可申候云々、辰正月八日、町中にて水。あ。び。せ。候事、自今已後は、親類縁者、幷召仕候者迄、銘々屋敷之内にて水あびせ可申、他人は壹人も出合申間敷候、右笠餅作り物巳下、何にても一切仕間敷候、是より今に此法度ふれあり、御制止ありて、此事止しかば、後には只町中水あびせ無用とのみふれ出づ、

〔武江年表 三〕元祿二年十月、婚姻の時の水。あ。び。せ。御制禁あり、

〔享保集成絲綸錄 四十九〕享保三戌年十二月

一町中ニ而、水。あ。び。せ。彌以堅仕間敷候、縱令男たりとも、一切無用たるべき事、〇中略

右之通町中家持者不及申、借屋店かり召仕等迄、少も違背不仕候樣可申觸候、若隱置、脇ゟ相知候共、家主五人組迄、曲事可申付者也、

十二月

〔草茅危言 五〕町方婚禮ノ事

一婚禮ニ石。打。水。祝。ナド、惡少年ノ猥雜ハ、制禁ノコトナレドモ、今ニ遺風未ダ絶エズ、在邊ニテハ樽入トテ、大ニ人ヲ惱マスコトモアリト聞及ベドモ、ソレハ他所ノコトニテ詳カニセズ、大坂市中ニテ、中分以上ノ嘉儀ニハ、夫ノ石水ヲ畏レ、往々ハ男伊達ナルモノヲタノミ防閑シ、日々是ヲ

モテナシ、日柄モ別事ナク濟メバ、厚ク謝スルコトニテ、俠者肩ヲイカラシ得色アリ、若シ石水ノ黨ニモ俠者アレバ、雨俠相遇テ爭鬪ニモ及ブコトマヽアリ、何分ヨカラヌ風習ニテ、第一禁ヲ犯スノ罪アルコトナレバ、尙又嚴命下リテ、又ソノ場所ニテ五六輩モ召捕レナバ、此風忽チ已ミテ、市中安穩ナルベシ、俠者ニ男ヲ賣ノ地ナカラシムベシ、是ハ瑣細ノコトナレドモ、迚モ太平ノ民タルカラハ、少シノ橫害モナカラシメタキモノカ、

〔資勝卿記〕寬永十一年十二月四日、來ル十一日、女二宮〇昭子内親王近衛右大將〇尚嗣へ御移徙、十四年正月一日辛丑、予退出歸宅已後、長橋殿ヨリ御使ニテ、七ツ時分、五攝家衆參內之間、伺公可仕承候、猶時分ニ人ヲ可被下由也、申下刻五攝家御參內ニ付、伺公可仕由御使ニテ則參內申、伏見殿、八條殿、太閤殿、九條前關白殿、近衛前關白殿、右大將殿等也云々、如例御大刀折紙也、長橋殿獻之、中大乳人御出ニ而、大御酒ニテ、予モ罷出申候云々、右大將殿へ、大岡美濃守、催水ヲ掛申由也、則御服奥ヨリ被遣候而被改候、又御酒之由也、右大將メサレ候小袖ハ、非藏人ニ被下候由也、

〔將軍德川家禮典附錄十一〕天保十二辛丑年十二月四日

一右大將樣御婚禮相濟候爲御祝儀、公方樣へ御膳被進候ニ付、公方樣四時之御供揃ニ而、西丸へ被爲入候ニ付、老中若年寄一同、御白洲ニ召出、〇中略

一右相濟而御水祝有之

一右大將樣御座間御下段御著座、御吸物御酒被召上、御肴出之、御側衆を以、越前守下總守被召出、越前守御盃可被下旨上意有之、御內緣に而頂戴、此節下總守江御酒被下候土器出之、越前守江御肴可被下旨上意有之、御次江退脇差取之、此間に下總守江も御酒被下候樣にと上意有之、直に御前之御銚子にて頂戴、越前守罷出御肴頂戴之、復座加有て御盃其儘差置之、目出度御水を可奉祝旨申上、此節堀田攝津守、御水桶を兩手に二つ提出、攝津守、笹を越前守へ相渡之、御水桶御下段御

敷居の上迄持出之、則御水桶之水に浸し、御肩衣へ水をそゝぎ、下總守も差添罷出、相濟て御盃を申上之、上意有之、越前守御盃を持退座、○中略

御召御熨斗目一　御召縮緬御小袖一　越前守
下總守
御召麻御上下一具　御召御熨斗目一　堀田攝津守

右御水祝に付被下旨、於御座間御二之間、御側衆申達之頂戴、

御水桶　御盥　越前守
堀田攝津守

右同斷に付被下旨、於同席、御小納戸頭取申達之、

〔枕草子〕一十五日○正月はもちがゆのせくまゐる、かゆの木ひきかくして、家のごたち女房などのうかゞふを、うたれじとよういして、常にうしろを心づかひしたるけしきもをかしきに、○中略こぞよりあたらしうかよふむこのきみなどの、うちへまゐるほどを、こゝろもとなく、ところにつけて、われはとおもひたる女房ののぞき、おくのかたにたゞずまふを、前にゐたる人は心えてわらふを、あなかま〳〵とまねきかくれど、きみ見しらずがほにて、おほどかにてゐたまへり、こゝなる物とり侍らんなどいひより、はしりうちてにぐれば、あるかぎりわらふ、をとこ君も、にくからずあいぎやうづきてゑみたる、ことにおどろかず、かほすこしあかみてゐたるもをかし、

〔辨内侍日記〕下十五日、○建長三年正月頭中將○爲氏まゐりたりしを、かまへてたばかりてうつべきよし仰事ありしかば、殿上に候を、少將内侍げさんせむといはすれど、心えて大かたたび〳〵になりて、こなたざまへまゐるおとす、人々つえもちてよういするほどに、なにとかしつらむ、みすをちとはたらかすやうにぞ見えし、かへりて少將内侍うたれぬ、ねたき事限りなし、十八日よりはうち

〈〇後深草〉には、たゞ御所のやうとてうつべきよしおほせごとありしに、十六日に、さぎ丁やかれしに、たれ〳〵もまゐりしかども、頭中將ばかり、ながはしへものぼらで出にけり、いかにもかなはでやみぬべかりしに、十七日、雪いみじくふりたるあした、どばどのへ、院〈〇後嵯峨〉の御幸なりて、此御所の女房まゐるべきよしありしかば、〈〇中略〉爲氏うちかねたることを、きかせおはしましたりけるにや、御所には、つえを御ふところに入て、もちてわたらせおはしまし、これにて爲氏けふうちかへせ、たゞ今つかひにやらむずるを、こゝにて、まちまうけて、かまへてうてとおほせごと有、少將内侍よういしてまつ程、おもひもいれずとほるを、つえのくだ〳〵とをるゝほどうちたれば、御所をはじめまゐらせて、公卿殿上人、とよみをなしてわらふ、さもそにくうちにせさせ給とて、にげのきしもをかし、

〔民事慣例類聚〈婚姻〉〕正月中ニ、一村ノ者、新婦アル家ニ至リ、其臀ヲ打ツ舊習アリ、是ハ菓實アル樹木ニハ、正月十五日ノ小豆粥ヲ干シ置、其幹ヲ打テバ、善ク實ヲ結ブトイフ諺アルニ因テ、其子ヲ擧ン事ヲ祝スル心ナリト云、町方ニテハ、新婦ヲ迎ヘシ男アレバ、其十二月ニ必ズ河川ヘ連レ行キ、水浴セシムル舊習アリ其所由ヲ知ラズ、〈駿河國安倍郡有渡郡〉

〔昔物語〕百二三十年以前〈享保の末より元文年間〉は、女のさうどう打といふ事有レ之よし、たとへば妻を離別して、五日或は一箇月の內、又新妻を呼入れたる時、初の妻より必さうどう打企る、功者成親類、女と打寄談合して、男は曾てかまふ事にあらず、手前の女五三人も有レ之ば、親類中の達者成る女かり、二十人三五十人百人も身代により催し、新妻の方へ使を遣す、是は家老の役なり、口上は、御覺可レ有レ之候、さうどう打、何月幾日何時可レ參候、持參道具は、木刀成とも、棒成共、しなひ成共、其譯を申遣す、大方はしなひなり、先にても家來取次、新妻何分にも御侘こと可レ申と申も有レ之、左様によわげすれば一生の大恥なり、成程相待候段返事有レ之、男の携はるは、此使取次計にて、其後は男一切不レ

出合法なり、扨日限に、離別の妻乘物にて、供女は皆かちにて、くゝり袴たすき髮を亂し、又かぶり物鉢卷などし、甲斐々々敷出立、ゑなひを持押寄るなり、門を開らかせ臺所より亂入、鍋釜障子當るを幸にこはす、其時を考へ、妻の仲人と待女郎、先妻の時の待女郎、同時に出會、眞中へ入り、さまざま言葉を盡し返す、昔はさうどう打に、二三度賴まれぬはなし、七十年以前、八十計のばゝ有之に、さうどう打に、十六度賴まれ出しなど語りし、百年以來すきとなし、

禁忌

〔今川大雙紙〕食物之式法の事

一むことりよめとりの雜ゑやうの事、肴にも御飯のぐそくにも、あゆのうを、すべからず候、其故は一年魚なるが故なり、

〔宗五大草紙〕色々の事

一よめ入の供に、猿毛の馬に乘べからず、猿皮うつぼ付させず、うみなしの鞍にのらず、故實也、

〔三議一統大雙紙〕騎射門第三

一從の鞭皮の事、鹿の皮本也、昔は猿の皮をば嫌はず、今は聟入嫁娶の時は嫌なり、只をりによるべし、

一物詣社參むこよめとりの時の騎馬の事、女房迎の時は、紫竹の鞭ばかり指べし、出立は同前なり、從、さか皮、にくの皮、熊の皮付べからず、馬左目馬、足毛鴾毛、乘べからず、

〔女諸禮集〕婚禮の時忌べき事

かへす　もどす　又々　かさねて　おくる　さる　いさま　猶々　彌々　などの詞をつゝしみていむべし、又むらさき、ゑまうのめがへし　無紋などの衣服を着る事をいむべし

又男子もじのかた衣を忌むべし、かへし股だちをさるべからず、

〔婚禮法式上〕婚迎之部

一婚禮の節忌むべき詞、返す、もどす、かさねて、又々、去るなど、申詞は、いみ申候、婚入の時かへしも、ただち取べからず、○中略猿毛の馬、ねずみ毛の馬、乘るべからず、猿毛と鼠毛と似たる故、二色なる間、鼠毛も用申さゞる也、ぶち馬も二色の毛なる故、二毛をば用ず也、猿皮のうつぼ付べからず、うみなしの鞍に乘べからず、七こんの引出物の內、五こんめの引出物の、むかばき、秋二毛のむかばき引出物に用申さゞる也、病氣といふ詞も憚りて、歡樂といひし也、歡樂と書てよろこびたのしむとよむなり、如此婚禮には忌也、いむ詞を申たればとて、何の事もあるまじく候へども、其祝に付て、いむ事を申出すは無禮にて候間、つゝしみて申まじき事にて候、萬一あしき事など有之候へば、前にいむ詞を申たる者、うらみられ候事も有之物に候、すべて人の祝には、いま〳〵しき事申さぬを禮儀といたし候、

〔安齋隨筆後篇五〕一婚禮には、俗に返す出すと云詞を忌は、婦の夫に別れて返る事、婿家より出さるゝ事を深く恥とするが故に、其詞をだにも忌は婚を祝る意也、然るに夫婦酒盃を交るに返盃する事、近年俗間の習也、昔は返盃せずして、盃を交る禮あり、又婚禮を賀する狀の文に、目出度と書て、出の字を忌む事を忘る、別に文言あるべし、又唐にて、婦の婿家に入るを歸と云は、カヘルの訓義に非ず、字彙に入也とあり、おもむき入るの義也、

〔武家調味故實〕一鳥付ル樣、○中略春は花の枝に可付、但さくらは、祝言の所へははゞかりある故に、不可付と云々、其故は花はひらきてより、七日をかぎりて散行間、日限をさして程なきによりて忌之、

〔松屋叢話〕今俗三月は花月なりとて婚姻をいむも、かゝるためしによれるなるべし、

〔婚禮推陳記〕婚禮に嫌品々、午の日、申の日也、一說に、三八の日も不用といへり、婚禮の所江往時、戾子肩衣、戾子の素袍を不用、年魚を不遣、歸雁を不遣、腰がはりの板の物、海無の鞍、朱塗の鞍、折紙の

裏書嫌也、○中略

座鋪の立花に、退眞狂眞、用ゆべからず、

合盃する內は、極寒にても、其間に火燵火鉢など出すべからず、色直し以後は、置ても不苦といふ事俗語也、

〔書簡故實〕嫁取以下祝言之書狀には、かへりてんを一番に書間敷也、如此など、一字かへるは、不苦故實也、

〔秋齋閒語三〕さかなの字、又肴と書事をいんで、婚禮の進物などの時は、假名にてさかなと書、字にては書かざるを口傳に云傳ふ、甚可笑、さかなの字、從又從有肴也、俗從又從有の字は誤なり、是を忌て不書は、甚愚說也、取るにたらず、婚禮之時に、秋の字を忌こと、秋いとふの義也と云、又伊勢流の書法にも、婚禮の狀には、千秋萬歲を不書、千春萬歲と云々、此說難信、

〔秋齋閒語評〕貞丈云、又伊勢流の書法にも、婚禮の狀には、千秋萬歲を不書、千春萬歲と書とあれ共、予が家に傳來の書に、千春萬歲と書と云事、曾て見えず、伊勢流の名を借りたる僞書ある成べし、近世市中に、ゑつけかた者、諸禮者などゝいふ者、渡世の爲に、伊勢流何流などゝ號して、無學文盲の輩、みだりに妄作の書をあらはして、人を欺く事多し、あざむかるゝ者も亦多く、識者の賤しめを受る事あり、歎くべき事也、小笠原流と號するも、其類多かるべし、

〔幸充日次記〕寬延三年四月十五日丁亥、充貫入來、婚禮之次第幷覺書、○中略

三箇日忌僧尼、服者不忌、重服者、不從其役、

〔方角禁忌撰〕大將軍方禁否事

執聟所事、不憚之方、會合始之後、不忌之、　可忌○中略

同方、○相王禁否事

執聟所弟子不レ塞之方、始會合之後不レ忌レ之、可レ忌○中略

同方○太白禁否事

執聟　可レ忌

〔源氏物語九葵〕少納言は、○中略むすめの辨といふをよび出て、○中略まことに、いまはさるもじいませ給へ、よもまじり侍らじといふ、

〔源語秘訣〕いまはさるもじを、今はと句をきりて、さるもじとよむ人あり、あやまれるなり、いまはさるもじとよむべし、不諱とは死する事なり、いみても、いまれぬこゝろ也、乍レ去祝言の夜の事なれば、さすが又あらはにはいはずして、餅四坏をも三が一といふは、四の聲をいむなり、いまはさるもじも死の字なり、惟光が辨にいひきかせたれば、辨も心得て、詞にもつかはぬといふこゝろに、よもまじり侍らじと云るなり、

〔山槐記〕仁安二年五月四日辛丑、藏人右衛門權佐經房示送曰、執聟所、三箇年不レ葺二菖蒲一之由有二巷説一、如何者、答二不レ知之由一了、不レ憚事歟、是越後守時實爲レ聟、仍相尋歟、法住寺殿葺二菖蒲一、去年十二月御移徙也、新屋三ヶ年不レ葺之由、有二閭巷訛言一、仍所レ記也、不レ憚事也、

〔玉海〕治承四年七月七日丁巳、嫁娶之後三ヶ年、不レ取二入索餅於家中一云々、

〔玉蘂〕嘉禎三年正月十四日、此日左府○藤原良經被レ迎二第二娘一、○中略委旨見二高嗣記一、○中略

嘉禎三年正月右少辨高嗣朝臣注送文○中略

今夜宿侍人々、三箇夜不レ可二他宿一、又人々不レ可レ著二淺黄奴袴一、三箇夜不二掃除一、

〔將軍德川家禮典附錄十上〕和宮樣京都より御下向幷御入輿御婚禮之記

文久元辛酉年十月廿九日

一左之書付大目付御目付江達レ之

和宮樣御著輿之節可レ憚色目

薄花田　薄靑　香　淺黃　櫻　枯色　苔色　薄色　檜皮　萌木　赤色

右之通ニ候、尤色目ハ聊似寄候共、染色之名、唱違候得者不レ苦候、此段御通輿筋江罷出候面々江、可レ被二達置一候、

文久二壬戌年正月廿五日

一左之書付御側衆江達レ之

御婚禮之節衣服之事

一御側衆

加珍無地熨斗目、加珍無地上下、

一奧向之面々

無地ニ而も、腰明キニ而も、花色、かな色熨斗目、上下は返し小紋に無レ之上下、

一御給仕等に出候面々

加珍花色之內、無地熨斗目、無地上下、

以上

一左之書付大目付御目付へ達レ之

來月十一日御婚禮ニ付、溜詰、御譜代大名、雁之間詰、御奏者番、菊之間緣頰詰、同嫡子、布衣以上之御役人、四時、無地熨斗目、返し小紋にて無レ之半袴著用、可レ有二登城一候、

一右爲二御祝儀一、同十三日、御三家始、諸大名、諸番頭、諸物頭、諸役人、寄合之面々、四時、無地にても腰明にても熨斗目、且又返シ小紋にて無レ之半袴著用、登城可レ有レ之候、

〔醒醉笑 六〕戀の道

七十にちかきうばあり、にあひたるもの丶方へ、よめいりをする、孫なるわらは、牛にのせてゆく、道にさはる荷物のあるをみて、孫牛に鞭をかけ、のいて〳〵とほれといひけり、うば是を聞、そふてとほれといはんこそ本意ならめ、のいては不吉なり、いや〳〵けふはゆくまいと、よめ入をやめけるも興あり、

古事類苑

禮式部十五

婚嫁四

古事類苑

禮式部十五

婚嫁四

〔令義解四繼嗣〕凡王娶親王、臣娶五世王者聽、唯五世王、不得娶親王、

〔延喜式十二中務〕凡諸王以上、娶臣家女爲妻者、不得准夫品位、其內親王及女王、亦不得准夫品位、但五世王者得准夫位、

〔日本紀略桓武〕延暦十二年九月丙戌、詔曰云々、見任大臣、良家子孫、許娶三世已下、但藤原氏者、累代相承、攝政不絕、以此論之、不可同等、殊可聽娶二世以下者云々、

〔玉勝間十三〕臣の王を娶る事

古は皇女はさらにも申さず、すべて臣の王の女を娶ることはゆるされぬことにて、さる事かつてなかりしを、繼嗣令に、臣娶五世王者聽とあるは、令の時、はじめての御制にや有けむ、そのかみ萬の事、さしも漢風にうつされしかども、これらはさすがに、人情の安からざることなれば、延暦のころになりてすら、なほ上件のごとくなりけらし、令のかの同じつゞきに、王娶親王、唯五世王、不得娶親王とも見えて、諸王は四世までも皇女をも娶しを、臣はそのかみわづかに五世ノ女王を娶ることをゆるされしを以て、王と臣と、すぢの尊き卑きけぢめ嚴なりしことを知べし、夫婦のむすびをなすことも、尊き卑きけぢめ、かばかり正しかりしを、そのゝち何事も、みな漸に漢風にうつりはてゝ、つひに今のごとくにはなりぬるなり、世の人たゞ、同姓不娶な

どいふ、漢風のことをのみ思ひいひて、皇國の古に、かばかり尊き卑きけぢめをわけしことをばしらざめる故に、今いさゝかおどろかすなり、かの漢國の王などは、もとよりすぢなきものにはあれども、當時の王の女をも、むげにすぢなき男にもあはすなるは、あまりにわきためなく、みだりなる國俗にぞ有ける、

〔草茅危言一〕皇子皇女ノ事

皇女降嫁ノ事ハ、古代ヨリ定リタル例ニテ、華域ニテ帝乙ノ妹ヲ歸スルヨリ、歷代帝王ノ公主皆然リ、就中唐太宗ノ公主ノ、王珪ノ子ニ降嫁アリテ、舅姑ノ禮ヲ正シクセシハ、尤美事ト稱ス、此類外ニモ見エタリ、我邦ニテモ、皇女入内ノ外ハ、内親王宣下有テ、伊勢加茂ノ齋宮齋院ニ立セ給フモアレドモ、大抵ハ皆群臣ニ降嫁有シコトナリシニ、中古ヨリ前條ニ述ル如ク、尼トナラセ給フ事次第ニ多クナリ、後世尼御所ノミ相增テ、御幼齡ヨリ尼ト定マリ給フコト前條ニ見エシ如ク、實ニ歎ズベキノ甚シキ也、殊ニ女人ハ、貴モ賤モ髮飾衣裳ヲ生涯ノ一樂トスルコトナルニ、何ノ慽悔發起モナクテ、綠ノ髮ヲオロシ、墨ノ衣ニ身ヲ終ラセ給フハ、是ノミニテモイカ計痛ハシキ御事也、近世ニテモ親王家攝家マデハ降嫁ノ例少ナカラズ、サレドモ此二家ニ止マル故、雀屛ノ選ミ其人ニ乏シク、自ラ尼御所ノ方多ク成ユクナルベシ、今其撰ミヲ廣クシテ降嫁ノ禮ヲ定メ、親王家攝家ハ言ニ及バズ、華族以下迄モ宜キニ從ヒ、武門ハ御三家御三卿、又ハ御家門ノ大侯マデハ苦シカルマジキカ、偖神ノ御末ト雖モ、既ニ降嫁アレバ、唐太宗ノ芳躅ヲ追テ、舅姑夫妻ノ禮義ヲ正シ、堅ク婦道ヲ守ラセ給フベシ、サアレバ主ニ尙スルコトヲ願フ家モ多カルベシ、カクアレバ尼御所ハ天下ノ長物ナレバ、悉ク停廢シ、宮趾ハ火除ケノ空地トナシ置カ、又ハ農商ニ配分シ、家司ノ分ハ、皆親王家ニ移スベシ、寺祿ハ官ニ收メテ、降嫁ノ裝奩ノ資トナスベキ者ナラン、凡ソ此皇子皇女ノ處置、大抵此姿ナルコトニアランニハ、天理

ニ於テモ、人情ニ於テモ、恐ラクハ至當ノ義ナルベシ、

〔中原友俊記〕當時諸家婚姻の事
親王家にては、武家のとりやり、是まではなく候こそ、近頃は姬宮と申ながらも、武門にかたづきも有かた候、それはあづまにては、武家の造作たるべし、○中略閑院若宮太宰帥典仁親王、寬延二年二月七日御簾入、同月九日移徙、姬宮○中御門皇女成子內親王廿四歲、若宮十七歲といふ、攝家にては、近衞家二條家にても配せらるゝ事近代あり、

皇女被ㇾ配ニ親王攝家一例

二條綱平公北政所、靈元院女二宮榮子也、二品榮子內親王女二宮、延享二年三月廿三日薨去、
近衞家凞公北政所、憲子內親王、○靈元皇女天和三年十一月十一日入輿、元祿元年四月十五日薨、廿歲
靈元院皇女福子內親王、戒英宮ト號ス、綾宮、母敬法門院右入ニ輿於伏見邦永親王一、
九條關白輔實公室、後西院益宮內親王、賢宮ト號ス、貞享三年七月廿七日入輿、元文三年正月一日薨、披露ハ十七日也、
靈元院吉子內親王、將軍家繼公御入輿治定、正德五年十二月廿四日、六年○享保元年二月十八日結納、廿九日○四月家繼公薨去、無ニ御下向一、同年七月御賄料五百石、西院村、石田村、中島村、

女王婚例

基宮　享保八年九月廿四日、今出川公詮卿室、
女王比宮　享保十六年十二月十五日、將軍吉宗公嫡家重卿室、
女王美目宮　享保十四年十二月十日發ニ京洛一、伊勢高田一身院專修寺圓猷室、
京極家仁親王女王登興宮　寬保二年九月二日發ニ關東一、筑後國久留米有馬中務大輔爲ㇾ室、

〔日本書紀十七繼體〕男大迹天皇更名彥太尊、○繼體譽田天皇五世孫彥主人王子也、母曰ニ振媛一、振媛活目天皇○垂仁七世孫也、天皇父、聞ニ振媛顏容姝妙甚有ニ媺色一、自ニ近江國高島郡三尾之別業一、遣ㇾ使聘ニ三國坂中井一、中此云ㇾ那

納以爲妃、遂産天皇、

〔日本書紀繼體十七〕七年九月、勾大兄皇子○安閑親聘春日皇女、○仁賢皇女

〔日本書紀敏達二十〕五年三月戊子、有司請立皇后、詔立豐御食炊屋姬尊爲皇后、是生二男五女、其一曰菟道貝鮹皇女、更名菟道磯津貝皇女也是嫁於東宮聖德、○用明皇子廐戸、中略、其三曰小墾田皇女、是嫁於彥人大兄皇子、○小墾田皇女異母弟

〔日本書紀天武二十八〕天渟中渟中此云農難原瀛眞人天皇、○天武天命開別天皇○天智同母弟也、幼曰大海人皇子、○中略納天命開別天皇女、菟野皇女爲正妃、

〔文德實錄五〕仁壽三年五月乙巳、无品齋子內親王薨、親王嵯峨太上天皇第十二女也、母正五位下文室眞人久賀麻品之女、從五位上文子也、親王適三品太宰帥葛井親王、○桓武皇子內外戚皆恥其非成禮、

〔文德實錄八〕齊衡三年六月丙申、正三位源朝臣潔姬薨、潔姬者、嵯峨太上天皇之女也、母當麻氏、天皇選聟未得其人、太政大臣正一位藤原朝臣良房、弱冠之時、天皇悅其風操超倫、殊勅嫁之、淸和皇太后○明子即其長女也、

〔大和物語上〕先帝○淸和の五のみこ○貞平親王の御むすめは、一條の君といひて、京極の御息所の御許にさぶらひ給ひけり、よくもあらぬことありてまかで給て、ゆきのかみのめにていますかりて、たまさかにとふ人あらば和田の原なげきほにあげていぬとこたへよ

〔一代要記光孝〕皇女　繁子配伊豫介連永朝臣

〔一代要記宇多〕皇女　傾子賜源姓、適眞信公、○藤原忠平

〔一代要記醍醐〕皇女　慶子內親王配叔父敦固親王、

〔日本紀略醍醐一〕延喜十年二月廿五日、均子內親王○宇多皇女薨、敦慶親王室、年廿一、

〔一代要記醍醐〕皇女　雅子內親王配右大臣師輔、生太政大臣爲光、

〔皇胤紹運錄醍醐〕康子内親王（一品准三宮、配九條殿（師輔）仁義公（公季）母、）

〔大鏡五太政大臣公季〕このおほきおほとの（○藤原公季）の御は、うへは、延喜の御門（○醍醐）の御女、女四宮（○康子内親王、女四宮、女十四宮誤、）ときこえさせき、（○中略）さてうちずみしてかしづかれおはしまし〻を、九條殿（○公季父師輔）の女房をかたらひて、みそかにまゐらせ給へりしぞかし、よの人びなき事に申、むらかみのすめらぎも、やすからぬ事におぼしめしおはしましけれど、いろにいで〻とがめおほせられざりしにも、この九條殿の御おぼえのかぎりなきにより、さて又人々うちさゞめき、うへにもきこしめさぬほどに、あめのおどろ〳〵しくふり、かみなりひらめきし日、この宮うちにおはしますに、殿上の人々、四宮の御方にまゐれ、おそろしくおぼしめすらんとおほせごとあれば、たれもまゐり給ふに、小野宮のおとゞぞかし、まゐらせしは、おまへのきたなきにとつぶやき給ふは、のちにこそ、みかどおぼしめしあはせけめ、さて殿にまかでさせたてまつりて、思ひかしづきたてまつらせ給ふといへば、さらなりや、

〔一代要記醍醐〕皇女　靖子内親王（配二大納言藤原師氏一、無、生二一女一、）

〔大和物語上〕おなじおとゞ（○陽成皇子源清蔭）かのみや（○醍醐皇女韶子内親王）をえ奉り給うて、みかど（○朱雀）のあはせたてまつり給へりけれど、はじめごろ、しのびてよる〳〵かよひ給ひけるころかへりて、

あくといへばしづ心なき春夜の夢とや君をよるのみはみん

〔日本紀略二朱雀〕天慶元年十一月五日、四品勤子内親王薨、（先帝（醍醐）第二皇女、中納言師輔室、○第二恐第四誤）

〔榮花物語三様々の悅〕村上の先帝の御女三みや（○保子内親王）は、按察のみやすどころときこえし御はらに、をとこ三宮、女三宮生れ給へりし、その女三宮を、此攝政殿（○藤原兼家）心にく〻めでたき物におもひ聞えさせ給て、かよひきこえ給ひしかど、すべてことのほかにて、たえたてまつらせたまひにしかば、そのみやもこれをはづかしき事におぼしなげきてうせ給ひにけり、

〔榮花物語八初花〕殿の左衛門督〇藤原道長子賴通を、さべき人々、いみじうけしきだちきこえ給ふところどころおれども、まだともかうもおぼしめし定めぬ程に、六條の中務のみや〇具平親王ときこえさするは、〇中略女みやみところ、をとこみやふたところぞおはします、〇中略その宮この左衛門督殿をこゝろざしきこえさせ給へば、大殿〇道長きこしめして、いとかたじけなき事なりと、かしこまりきこえさせ給て、をのこはめがらなり、いとやんごとなきあたりにまゐりぬべきなめりときこえ給程に、うち〳〵におぼしまうけたりければ、今日明日になりぬ、さるはうちなどに思し心ざし給へる御事なれど、御すくせにやおぼしたちて、むことりたてまつらせ給、

〔榮花物語八初花〕小一條の中の君〇藤原濟時女ときこゆるは、宣耀殿〇三條娍子の御おとうとのきみ、殿もうへも、ともかうもなさでうせ給にしかば、いかで女御殿におとらぬさまのことをなどおぼしかまへて、東宮のおとうとの帥宮〇三條皇弟敦道親王に聞えつけ給へりしかば、南院にむかへ給へりしかど、年月にそへて御心ざしあさうなりもていきて、いづみのかみみちさだがめ〇和泉式部を覺しさわぎて、この君をばことのほかにおぼしたりしかば、ゐわづらひて、小一條のおばきたのかたの御もとにかへり給にしぞかし、

〔日本紀略十三後一條〕萬壽三年二月五日壬子、今日前三條院第二内親王禔子、配内大臣、〇藤原敎通

〔榮花物語三十四晩待星〕内大殿の三位中將、〇藤原敎通子信家いまは中納言にてものせさせ給、小一條院の高松どの、姫君〇儇子内親王にぞ、むことりきこえさせ給へる、

〔增鏡七北野の雪〕この貫川〇宮人を御門〇龜山忍びて御らんじて、姫宮一所いでものし給ひき、その姫宮は、すゑに近衛關白家基の北のかた政所になり給ひにき、

〔勘仲記〕弘安七年八月十四日己未、抑今夕内大臣殿、〇藤原家基令迎新院〇龜山皇女、十六歲日來與按察二品御同宿云々、俄有此儀、頗希代之例也、上皇密々御幸二品第、御出立事有叡覽云々、御車自内府被

進之、侍二人、殿上人一人云々、密々儀云々、忠仁公嘉例云々、頗勞緊歟、今度時宜、定有子細歟、

〔北條九代記 下〕永仁三年十二月廿七日、將軍家（〇久明親王）有御嫁娶之儀、入道將軍（〇惟康親王）御娘、

〔二水記〕永正十八年六月廿一日、入夜參伏見殿、明日未明、姬宮御方、（〇邦高親王女玉姬）土佐國（〇一條房家）有御下向事、仍爲御暇乞也、　廿二日、早旦御下向云々、從鳥羽御乘船云々、午刻參竹園、各被惜御名殘、上下淚痕難休者也、

〔陰德太平記 十七〕大友義鑑之事

大友左馬頭義鑑入道宗玄ハ、初メ伏見殿貞常親王ノ御息女ヲ娶テ、男子一人女子一人ヲ誕生セラル、嫡女ハ土佐國一條房基公ノ室ニシテ、兼定公ノ母公也、

〔皇胤紹運錄 後陽成〕淸子內親王（准三后、鷹司關白信尚公室、敎平公母、母中和門院、）

〔孝亮宿禰記〕元和二年十一月廿一日戊子、八條殿（〇智仁親王）御娶有之、丹後京極修理女參之云々、

〔孝亮宿禰記〕元和九年十一月廿四日庚辰、於女院御所、二條殿（〇康道）御祝言之事有之、後陽成院姬宮、當今御妹宮也、（〇貞子內親王、後水尾皇妹、）

〔資勝卿記〕寬永十一年十二月四日、來ル十一日、女二宮（〇昭子內親王、後水尾皇女、）近衛右大將（〇尙嗣）へ御移徙、（〇中略）秉燭以前、國母樣（〇後水尾后德川和子）へ祗候、供奉之人々殿上ニ伺候、此間書立之衆皆御供、水無瀨所勞快、是モ御供也、近衛殿諸大夫御供ニ參候、北面年寄四人ハ御輿添、其餘ハ前ニ松明ヲ取御供之轅五挺也、布衣兩人、松明二丁ヅヽ也、第一公卿殿上人打コミ、御輿之跡ハ、諸大夫又板倉周防守也、

〔忠利宿禰記〕正保二年正月廿一日、參攝政殿、（〇二條康道）へ、來廿八日、御方內大臣殿、（〇康道子光平）令入女院御所給、女五宮（〇賀子內親王、後水尾皇女、）御婚禮之儀云々、　廿八日、攝政殿へ參、光平公（廿二歲）女五宮賀子（十四歲）今日御祝言也、女御御所（江）御成、家禮衆御供奉、淸閑寺大納言、同中納言、同左兵衛佐、中御門宰相、同子、治部少輔御理、白川三位、同伯、四條前宰相、差次藏人重房、各先（江）少參、かり衣也、大夫木工權頭、尤か

り衣也、諸大夫四人ぬのひたゝれ也、布衣下々參、曉歸御、珍重々々、

〔寛明間記〕明暦三年四月廿八日、今度伏見宮御姫宮樣〇貞清親王女顯子下向、〇中略是ハ將軍家〇德川家綱之御臺所トシテ御下向也、當春有火事、世上困窮スル時分、美々敷御事、世ヲ憚被思食、隱密之御風情ナレバ、東海道ハ晴ガマシトテ、中山道ヲ御下向、今日先、中ノ丸樣ヘ入輿、御祝ハ七月中ト相定ルヨシ也、　七月十日、伏見宮殿御姫君、去四月御下向、御輿入御隱密ニテ、諸大名衆登城無之、使者モ上リ不申、

〔以貴小傳〕嚴有院御所〇德川家綱の御臺所は、伏見貞清親王の姫宮にてわたらせ給ふ、御諱は顯子、淺宮と申奉る、明暦三年の四月、江戸にくだらせ給ひしに、そのころ御所回祿のわざはひにかゝり、いまだ新造の功ならざりしかば、七月十日、西の御所にして大昏の禮行はせたまふ、さればよろづ事そぎたる儀にて有しとぞ、

〔玉露叢十四〕同年〇明暦三年九月廿七日ニ、紀伊相公光貞卿へ、伏見殿姫君〇貞清親王女照子入輿ナリ、是公方家綱公御臺所ノ姉君ナリ、

〔三寶院日次記〕明暦三年十一月十二日、紀伊宰相殿〇光貞御祝言、伏見樣姫宮、〇貞清親王女照子今日アケ六ツ時ニ、紀伊國屋形へ渡御、大タヾ敷結構成樣子也、伏見ハ水野淡路守、其外馬乘六七十騎御迎ニ上ル、近日紀伊國へ御下リノ上、御祝言之御沙汰也、

〔忠利宿禰記〕明暦四年〇萬治元年五月十二日、久我右大將〇廣通祝言有、爲祝儀大生鯛壹懸進、伏見殿御姫君〇貞清親王女梅子也、密々ニ而祝言有、

〔續史愚抄後西院〕寛文四年十二月廿三日庚辰、無品常子內親王〇後水尾皇女、中略、嫁左大將基熙家、派有聚儀入等、日缺、

〔季連宿禰記〕天和三年十二月三日庚子、憲子內親王〇靈元皇女者、近衞大納言家熙卿可爲北御方之由、內

內有₂御沙汰₁云々、十一日戊申、今夜近衞大納言殿（○家熙）北御方（憲子內親王）御婚禮之由風聞、十五日壬子、近衞大納言殿北御方御婚禮之事、今日奉₂參賀₁也、

〔百一錄〕貞享三年七月廿五日、今夜九條大納言殿（○輔實）御₂簾入于賢宮御方₁（○後西院皇女益子內親王）中筋通故准后新廣義門院舊御所云々、廿七日賢宮移₂徙于九條殿新造之御殿₁（從₂二條₁因₂勤之₁）辻前驅殿上人扈從公卿三輩、綾小路、清閑寺相公、伏原三品、

〔十三朝紀聞（○靈元）〕貞享三年十一月、榮子內親王（○靈元皇女）降₂嫁二條藤原綱平₁、

〔百一錄〕元祿九年十月廿四日、伏見殿姫宮、可ᵣ爲₂勢州一身田門徒簾中₁云々、同若君爲₂仙院御養子₁、爲₂常修院宮御弟子₁、可ᵣ爲₂新大納言局母代₁云々、

〔季連宿禰記〕元祿十年十月一日戊申、或人告云、綾宮（仙洞皇女、准后御腹、○靈元皇女福子內親王）可ᵣ被ᵣ配₂伏見殿（○邦永親王）之由、昨夜被ᵣ定ᵣ之、關東計申歟云々、

〔百一錄〕元祿十一年四月廿九日、綾宮御方、（但准后亭、○福子內親王）伏見殿（○邦永親王）御翠簾入、仙洞（○靈元）姫宮廿有餘歟、　五月二日、綾宮御方、今夕伏見殿亭へ渡御、御堂上北面等數輩供奉、

〔季連宿禰記〕元祿十五年十二月四日庚辰、東本願寺前大僧正光性、被ᵣ迎₂有栖川殿姫君、（○幸仁親王女幸子）女御御婚云々、今夜姫宮御方、令ᵣ入₂東本願寺₁給、路頭貴賤、爲ᵣ群奉ᵣ見ᵣ之、

〔百一錄〕寶永三年三月十一日、伏見殿姫宮、今日發駕、江戶下向、紀州（○德川吉宗）へ御入云々、從₂今出川₁至₂室町₁出₂三條₁、御迎紀州家中數十輩供奉、行粧寔美々、

〔以貴小傳〕有德院御所（○德川吉宗）の御配は伏見貞致親王の姫宮にて、御諱は理子、眞の宮と申す、いまだ紀伊殿にておはしませしとき、むかへさせたまひしが、寶永七年の六月四日にうせたまふ、

〔輝光卿記〕正德五年九月廿六日、昨日觸來、法皇（○靈元）姫宮八十宮御方、大樹公（○德川家宣子家繼）へ御入輿之事、一位御方月光院殿（○德川家宣妾）御願故、御契約被₂仰出₁之由也、

〔以貴小傳〕有章院御所〇徳川家繼は、わづかに八歳にてかくれさせたまひしかども、正德五年のはる、靈元院上皇の姬宮八十の宮御諱は吉子と申まゐらせしを御配偶の事さだめられ、ことしの七月御いはひのものども、豐後守正喬の侍從御使にて、うちにもゐんにもたてまつらせ給ふ、いくほどなくして御所かくれさせたまひければ、宮もくだらせたまふまでもあらず、されどすでに定まらせたまひし御事なれば、この宮の御事は、よろづ關東の御さたにて有けり、享保元年の七月、山城國葛野、紀伊宇治等の郡の内にて、御料の地五百石まゐらせ給ふ、

〔幕朝故事談〕公方家

章廟〇徳川家繼御臺樣の御結納使者、京都へ阿部豐後守上り候跡にて薨去なり、其故右の宮方は、終身後家にて被為有候なり、平御所樣と申て四五歲なり、德廟〇徳川吉宗の時に至り、比丘尼に御成被成度と御願被成候得共、矢張其まゝ被為入候樣にと被仰遣候となり、是は禁裏附大久保備後守物語なり、比丘尼に御成被成候得ば、一寺御建立有之、御物入故也云々、

〔百一錄〕寶永七年八月十日、今度松平紀伊守上京之節、申來新女院姬宮、〇東山皇女秋子内親王伏見殿若宮〇江貞建親王御入輿之御事、

〔百一錄〕享保四年正月廿六日、今夜伏見宮〇貞建親王御翠簾入、寄宿于女院御所、尙東山院姬宮御方、〇秋子内親王二月朔日、酉刻女院姬宮御方、入御于伏見宮御殿、

〔登春卿記〕享保七年十一月十九日庚子、參伏見殿、岩ノ宮〇邦永親王女尼子出雲國主松平出雲守家〇宣維御入輿之事、大樹依御取以、此間相調之由有風聞、仍奉賀之、

〔百一錄〕享保八年九月廿四日、酉半刻、伏見宮御方基宮、〇邦永親王女輔子入輿于今出川宮、〇公詮靑侍七八人、布衣五人、諸大夫五人、各大紋、布衣侍乘松明、隨行兩人、白輿號腰輿者也、

〔月堂見聞集〕享保九年十月廿二日伏見宮御姬宮、松平出羽守殿へ御入輿ニ付、午刻御發足、

〔幸充日次記〕享保十年正月廿八日丁卯、伏見比宮樣、〇邦永親王女培子江府若君〇德川家重君吉宗子御簾中御定之旨申來云々、

〔以貴小傳〕惇信院御所〇德川家重の御臺所は、伏見宮邦長親王の姫宮にて、御諱は增子、比の宮と申す、享保十六年五月七日にくだらせ給ひ、十二月十五日、西の御所にわたらせ給ひ御婚禮あり、

〔月堂見聞集〕享保十三年、月日欠京極宮御姫君西宮御方、〇文仁親王女美日宮勢州一身田專修寺御門跡〇闕へ御婚禮、十四年十二月十日、京極宮樣御姫君、今度伊勢高田御門主方へ御入輿ニ付、今日京都御發足、

〔幸充日次記〕寬延二年二月五日甲申、五十宮閑院姫宮御首途、下賀茂、是東武亞相公(德川家治)御臺、來月御發輿ニ付而也、依而御道中筋御入用之御湯道具等入札有之、餞別入札遣り物也、奉行所三月五日癸丑、五十宮閑院姫宮御發輿、關東御行粧拜見無用之由、兼而被觸之、自町奉行所

〔以貴小傳〕浚明院御所〇德川家治の御臺所は、閑院一品之宮直仁親王の姫宮にておはします、御諱は倫子、五十の宮と申たてまつる、寬延二年三月くだらせたまひ、寶曆四年の十二月朔日、西の御所にて御婚禮あり、

〔續史愚抄桃園〕寬延二年二月七日丙戌、太宰帥典仁親王、於仙洞櫻町入于無品成子内親王壽宮、中御門院皇女方簾中、九日戊子、無品成子内親王號壽宮、廿一歲、中御門院皇女、母源内侍局、自櫻町殿院御所移徙太宰帥典仁親王第、閑院、嫁娶扈從公卿皇太后宮大夫宗長已下五人、六條前中納言有起爲人數前駈殿上人右中將實觀朝臣以下九人、

〔續史愚抄桃園〕寶曆四年十二月十日甲寅、今夜故彈正尹直仁親王女格宮嫁上總太守公仁親王家、

〔續史愚抄後桃園〕安永六年十一月廿四日丙戌、從三位董子女王號泰宮、故一品職仁親王女、〇中略自院御所移徙左大將師久第、〇中略今夜有嫁娶、密儀

〔政化間記〕文化六年十二月朔日、大納言樣〇德川家慶婚禮に付、溜詰御譜代大名詰衆御奏者番菊之間

縁類詰、右嫡子共、布衣以上之御役人登城、於席々御老中御謁、今辰刻姫君様〇有栖川宮織仁親王女喬子御本丸御廣敷御出輿、西丸大奥江御移徙、巳刻大納言様、大奥江被爲入、御婚禮御規式有之、姫君様御事、今日より御簾中様と可奉稱旨被仰出、

(政化間記)文化七年十一月十五日、清水御屋鋪は、清水中納言重好卿御住邸なり、重好卿は惇信院様〇德川家重御次男、〇中略御簾中者、伏見一品兵部卿貞建親王姫宮、〇田鶴宮と稱す寶暦十三年十二月四日入輿、

(三寶院日次記)文政四年四月十三日、有栖川宮様江、〇韶仁親王仙洞御所寶枝宮御方、〇閑院宮美仁親王女宜子、光格猶子、来ル廿三日巳刻御入輿被仰出候、御吹聽被仰遣候事、　廿四日、仙洞御所寶枝宮様、有栖川宮様へ、昨日御入輿被爲濟候ニ付御歡使、

(三寶院日次記)文政九年十一月十四日、伏見宮様衆小野舍人ゟ、御留守宛來狀、

此御方姫宮幸宮御方、〇貞敬親王女韶子松平下總守殿〇忠堯へ御縁組ニ付、來ル十七日御發輿、關東へ御下向被爲在候

(三寶院日次記)天保六年十二月十日、東本願寺様衆下間式部卿、川那邊帶刀、坊官宛來狀之趣、

伏見兵部卿様御息女壽賀宮御方、〇貞敬親王女增子近衞故前左府様〇基前被成御養女、此御方新御門主〇光淨ニ御縁組、御願之通被仰出、則壽賀君御方輿被改、明十日御入輿御治定ニ御座候、且御婚禮之儀者、追而御催之事ニ御座候、〇中略此段各様迄可被得御意旨ニ付、如斯御座候、以上、

十二月九日

(三寶院日次記)天保十年十一月十日、伏見様衆ゟ來狀、

以手紙得御意候、然者此御方姫宮潤屋宮御方、〇貞敬親王女種子江州錦織寺新御門跡〇慈歡へ、御縁組被成御治定候、此段各方迄、爲御知可得御意、如斯御座候、以上、

十一月七日

〔政化聞記〕天保十一年十二月廿日、閑院宮妹女、（○孝仁親王女光子）右衞門督殿（○田安德川慶頼）へ緣組之義、明廿一日被仰出候、

〔三寶院日次記〕天保十二年六月十七日、伏見樣來吉田式部ゟ、御留守居宛來狀、
此御方御妹東明宮御方、（○貞敬親王女直子）當十月中、西丸へ御下向筈ニ候處、十月十三日京都御發輿、十一月三日御本丸へ御入城御治定ニ付爲御知也、

〔言成卿記〕天保十二年十月十三日、傳聞伏見宮女宮、（○直子）關東三卿（田安慶頼）入輿、今日發駕云々、

〔言成卿記〕嘉永四年七月十二日、和宮、（先帝（仁孝）皇女、御歳六歳云々、）有栖川帥宮（○熾仁親王）御緣組被仰出候、

〔議奏言渡〕萬延元年八月廿六日、從殿下（○九條尚忠）以御世話卿、和宮江被申上相濟、御緣組御延引御理被聞食候旨、可申渡于有栖川宮殿下垂命、則被申渡候旨、武傳被示、少選御受被示候、此由以大御乳人申入候、

〔言成卿記〕萬延元年十月十九日、廻文到來、和宮御緣組之事、自關東（○德川家茂）再三被懇願候ニ付、正德年中、八十宮御約定、（○靈元皇女吉子內親王許嫁德川家繼）幷東福門院（○德川秀忠女、後水尾后和子、）御入內之御例茂有之候儀、且深思召モ被爲在候間、御許容被仰出候事、
別紙之通、右大將被申渡候、仍申入候也、
十月十八日　實德

文久二年二月二十日、和宮、今月十一日御婚禮濟、

〔今日抄三孝明〕萬延元年八月十八日、大將軍使婢勝光院橋本氏入京師、奏請尚皇妹和宮、先是和宮、命適有栖川王府、故敢辭、帝亦弗聽、然橋本氏固請不止云、　十一月、帝以幕府請尚和宮再四、依吉子內親王東降等例許之、　十二月二十五日、幕府使所司代侍從若狹守酒井忠義入納幣黃金百枚物若干品、分金一萬五千兩于大臣親王堂上堂下、

文久元年十月三日、親子內親王、〇和宮乘牛車詣祇園祠、以爲東下首途、權大納言藤原忠能、權中納言藤原實順、參議右近衞中將藤原實麗、左近衞中將藤原定國、藏人頭右大辨藤原長順等從焉、王車所謂絲葺也、懸紫絲、貼金碧、畫美極華、　二十日、親子內親王東下、其母觀行院與侍局庭田氏、雜婢清水谷氏、與藤原忠能以下公卿少老遠江守加納久徵、高家右京大夫大澤基暢以下多從、觀行院故大納言橋本實久之女、

〔秦山集雜著甲乙錄二〕後光明帝皇女女一宮、〇孝子內親王、中略、板倉內膳正、爲所司時、諸卿議、欲嫁九條兼晴公、議已定告兼晴公、公辭曰、吾爲鷹司弟、與九條姬君婚、繼九條家生二男子、不幸吾妻早世、今又與皇女婚、萬一於二童不免有疎心、則於九條家有何面目邪、固辭不肯、後又欲嫁醍醐冬基卿、諸卿相與白女一宮、而宮不肯、何者女一宮、立諸皇子之上、醍醐爲清華、婦人從夫之班、則降位數等也、諸卿无奈何、叉手而退、

〔光臺一覽三〕扨御家門の北の御方は、御三家方國取上大名の息女、又は御仲ヶ間の姬君なり、何れも御家門江御緣邊候へば、何君樣と稱し、はや一段御出世なり、御攝家も國取方も、從古御緣邊之因無之旨は、少難叶由にて、一度御緣邊有之後は、不絕互に御音信有之、又相當相當に、常に御合力被進方も有之也、凡は近衞樣は薩摩、九條樣は尾州安藝、二條樣は加州、一條樣は備前、鷹司樣は長門讃岐などなり、其外武家樞機方有之略之、親王家清花諸家同前也、扨又何君樣と稱せし御方御連相攝關を懸たまへば、政所樣と申候、又他家に關白渡り、政所出來候へば、先之御方は大政所樣と稱申候、〇中略又御皇女にて候へば、內親王宣下有之、御一代何々宮樣と申計に候、また親王家の北の方も、皇女は其通にて御攝家の娘か、武家之女なれば、一代何君樣にて御暮し被成候、扨御家門方御子方は、〇中略姬君方は女御、或は關東の御臺所、御三家樣方の御簾中、國取之奧方、清花親王之北の方にも片付たまふなり、

〔榮花物語三様々の悦〕この三位殿〇藤原道長此ひめぎみ〇源雅信女倫子をいかでと、心ふかう思ひきこえ給ひて、けしきだち聞え給ひけり、されどおとゞ〇雅信あなものぐるほしことのほかや、たれかたゞいまさやうに、くちわききばみたるぬしたち、いだしいれてはみんとするとて、ゆめにきこしめしいれぬを、はゝうへ、れいの女ににたまはず、いとこゝろかしこく、かどかどしくおはして、などてか、たゞ此君をむこにてみざらん、ときどき物みなどにいでゝみるに、このきみたゞならずみゆるきみなり、たゞわれにまかせ給へれ、かしこの事あしうやありけるときこえ給へど、とのすべてあべい事にもあらずとおぼいたり、〇中略かくて此はゝうへ、此三位殿の御ことをこゝろつきにおぼして、たゞいそぎにいそがせ給ふを、とのはこゝろにゆかずおぼいたれど、たゞいまみかどいとわかうおはします、東宮もさやうにおはしませば、内、東宮とおぼしかくべきにもあらず、又さべい人などの、物々しうおぼすさまなるも、たゞいまおはせず、〇中略たゞこの三位殿をいそぎたち給ひて、むことりたまひつ、そのほどのありさまいとわざとがましく、やんごとなくもてなしきこえ給へれば、攝政殿〇道長父兼家くらゐなどもまだいとあさきに、かたはらいたきこと、いかにせんとおぼしたり、いとかひあるさまにかよひありき給ひける、

〔榮花物語三様々の悦〕この大ちよぎみ〇藤原道隆子道頼は、くにぐにあまたしりたる人の、やまの井といふ所にすむ、〇藤原永頼が、むすめおほかるむこになりたまひぬ、〇中略こちよ君〇道頼弟伊周は、六條の中務の宮ときこゆるは、村上の先帝の御七の宮におはしましけり、御はゝ麗景殿の女御の御せうと、源中納言重光ときこゆるが御むこになり給ぬ、御めまうけの程、あにぎみにこよなうまさり給ぬめり、

〔榮花物語十日蔭の鬘〕大殿の左衛門督〇藤原道長子教通を、むすめおはする殿ばらけしきだち給へど、おぼしさだめぬ程に、四條大納言〇藤原公任の御むすめ、〇中略たゞこのひめ君をいみじきものにおもひ

聞えさせ給へるに、此左衛門督のきみをこ思ひきこえさせ給て、ほのめかし聞え給けるに、心よげなるみけしきなれば、覺したちていそがせ給、〇中略あべいことゞもしたてさせ給て、四條の宮のにしのたいにてむこさりたてまつらせ給、しん殿にてこおぼせど、みやの御前などおはしましつきたれば、いまさらになどおぼしめすなるべし、みやもろこもにたて奉らせたまひて、むこさりたてまつりたまひつ、ひめぎみ十三四ばかりにて、御ぐしいこふさやかにて、御たけにたらぬほどにて、すそなどいこめでたし、御かほつきなど、いみじううつくしげにおはすれば、をとこ君おもふさまにいこうれしうおぼさる、〇中略大ごのも、いこめやすきわざなめり、かの大納言は、いとはづかしう物し給ふ人なり、思ひのまゝにふるまひては、いとほしからんなど、つねにいさめきこえさせ給べし、

〔古事談二臣節〕堀河左府〇俊房知足院殿〇忠實ヲ聟ニ取、賞翫之餘、常被奉仕陪膳、毎進汁物、先嘗試テ氣味調タルニ飯ヲ漬テ被奉ケレバ、無便トオボシナガラ食給ケリ、其由大殿〇忠實父師通ニ被語申ケレバ、皆御案アリテ被仰云、左府モ可然之人也、有何事哉云々、

〔源平盛衰記三十四〕法皇御歎并木曾縦逸附四十九人止官職事、
木曾〇義仲近衛殿〇攝政藤原基通ヲ奉止テ、師家〇藤原基房子ヲナシ奉ケル事ハ、松殿〇基房最愛ノ御女、ミメ形イト麗ク御坐ケルヲ、女御后ニモト御勞リ有ケルニ、美人ノ由傳聞テ、木曾推テ御聟ニ成タリケル故ニ、御兄公トテ、角計ヒナシ進セケルトゾ聞エシ、淺增キ事共也、

〔吾妻鏡二十三〕建保六年二月四日丙午、尼御臺所〇源頼朝妻政子御上洛、〇中略以此次令伴故稻毛三郎重成入道孫女年十六、綾小路二品師季卿女給、依可被嫁于土御門侍從通行朝臣也、

〔太平記二十六〕執事兄弟奢侈事
武藏守師直、今度南方ノ軍ニ打勝テ後、彌心奢リ、擧動思フ樣ニ成テ、仁義ヲモ不顧、世ノ嘲弄ヲモ

知ヌ事共多カリケリ、（○中略）加樣ノ事多カル中ニモ、殊更冥加ノ程モ如何ガト覺テウタテカリシハ、二條前關白殿（○道平）ノ御妹、深宮ノ中ニ被レ冊、三千ノ數ニモト思召タリシヲ、師直盜出シ奉テ、始ハ少シ忍タル樣ナリシガ、後ハ早打顯レタル振舞ニテ、憚ル方モ無リケリ、角テ年月ヲ經シカバ、此御腹ニ男子一人出來テ、武藏五郎トゾ申ケル、サコソ世ノ末ナラメ、忝モ大織冠ノ御末、太政大臣ノ御妹ト嫁シテ、東夷ノ禮ナキニ下ラセ給フ、淺猿カリシ御事ナリ、

〔後法興院記〕文龜元年十一月廿八日癸卯、去夜迎二武家（○足利義澄）之室一云々、故廣福院（○日野永俊）息女也、日野侍從高光、連枝之契約云々、自二彼亭一被二出立一云々、

〔以貴小傳〕大猷院御所（○德川家光）の中の丸殿と申せしは、鷹司攝政家（信房）の姬君にて、御諱は孝子とまうす、元和の末にや、江戸にくだらせ給ひ、寛永のはじめ御婚禮ありけり、（二年の八月九日といふ）御所には、御年ひとつふたつまさせ給ひしとぞ、當家にて攝關の御むすめむかへさせ給ひしはじめなり、御子のよきたぐひにておはしましけんに、琴瑟のあひやはらがせ給はぬ故も侍りしにや、御子などもおはせず、さう〴〵しくすぎさせたまひしとうけたまはる、

〔忠利宿禰記〕明曆四年三月十九日、夜入九條殿大御所（江）參、仰云、信房公御子さえ君と云、十三歲也、東本願寺御孫のよめに被二成度一由御內意承了之仰也、　廿日、家君ゟ松壽院殿へ昨日九條太閤仰之通申候て參候處、御返事御談合尤之由申來、

〔政化間記〕文化四年十月廿五日、常憲院樣、（○德川綱吉、中略、）御臺所は、鷹司關白房輔公息女、（諱信子）寛文三年十月十五日御緣組被二仰出一、同四年九月廿一日、從二京都一神田御殿へ御入輿、卽日御婚禮、延寶八年七月十日御本丸へ御入、卽日御臺樣と奉レ稱、

〔以貴小傳〕甲府殿（○德川綱重）は、この頃（○寛文十一年）にや御繼室をむかへさせ給ふ、これも二條家の御いつきむすめときこえしが、まことは綾小路中納言俊景卿の息女にておはす、

〔百一錄〕延寶五年九月廿八日、鷹司大納言殿婚禮、松平讃岐守入道源惠息女(十四歲歟)也、　六年十月廿六日、菊亭亞相息女、發駕赴江戶、水戶少將婚姻之約也、

〔季連宿禰記〕元祿九年九月廿七日庚辰、今日松平安藝守(安藝廣島之住○綱長)女(七歲云々)令迎九條殿給、是少將殿(○輔實子師孝)北御方云々、今日午終許、令入九條殿給、路次見物成群、蓬門前令通給、風聞云、彼姬君者、爲大樹御養子云々、不知實否、

〔季連宿禰記〕元祿十二年十一月廿四日戊午、今日招引北面河端右衛門大夫景福、幷左官掌紀氏辰、遣酒饌及大飮、此事予娘峯、依嫁娶之事口入也、件事今日治定、自彼方事結之祝儀物到來、其品縮緬二卷、肴物三種、樽一荷等也、件聟者廣橋家綏光卿之息、有馬式部之男也(貞光卿家茂卿之連枝也)件式部者、壯年之時、爲越前國守松平越前守之陪臣也、其後籠居、當時移住廣橋家敷地之內、其子千代丸當時廿四歲歟、呼名民部云々、彼民部予爲養子、予辭職之後、家督可相續之由約之了、予無男子之故、所思企此事也、今日其結治定了、祝著無限者也、後日可委記、又予小女峯、爲伊豫御局猶子、此事去廿二日有其結、其日遣彼局治定了、　十二月三日丁卯、今日依日次宜、入夜向有馬式部許(廣橋屋敷地之中也)式部被相逢、賜酒肴、次相逢民部(式部男也)之後、相伴民部歸宅、於大輔殿居所、民部幷予娘峯召出之、令致嫁娶之盞、次於予之居所、召出民部男、予成養子養父之結、大輔殿伊與御局幷妻女等列座、傾盃及數巡、成千秋萬歲之思了、

〔百一錄〕寶永元年十一月十四日、淸水谷少將婚禮也、意山座主息女、

〔季連宿禰記〕寶永二年六月十三日乙巳、近衞大納言殿、(家久卿)今日令迎松平薩摩守女給、(去月廿七日入洛、于直參)近衞殿給云々、今日被召御輿、御婚禮之儀歟、不知其儀、

〔百一錄〕寶永二年六月十三日、近衞大納言家久卿、今日辰刻婚禮、松平薩州息女龜姬御方也、先月廿七日、入于近衞殿新亭、

武家婚嫁

(百一錄)寶永二年八月廿一日、正親町亞相息女、赴于關東、松平讃岐守方へ入輿云々、

(百一錄)寶永三年十一月七日、烏丸故亞相光雄卿息女、發于京都、赴武陽、爲松平越中守息分、於武城令嫁於子息因幡守、

(百一錄)寶永三年十一月十日、轉法輪前右僕射息女、爲井伊掃部頭夫人、東武下向、今日發亭宅、

(百一錄)寶永四年五月廿三日、正親町大納言御息女下向于東武、尾州松平但馬守內室云々、一萬石歟、

(百一錄)寶永八年(○正德元年)二月十三日、今夜裏松尙書娶吉田二位息女、

(百一錄)寶永八年(○正德元年)十二月廿七日、細川丹後守息女、嫁于久我中納言之家、

(百一錄)正德二年十二月廿三日、近衞內府婚禮、薩摩守女十三歲、先頃上京、在于屋敷內、

(百一錄)享保三年六月廿五日、一條家婚禮之儀被遂行、備前刺史息女智姬、從去年上京有之、

(百一錄)享保八年九月十八日、九條右大將河原新造御亭へ移徙、　廿三日、尾州息女上京、著河原新造第、　廿七日、九條右大將尾州千姬婚禮、

(幕朝年中行事歌合下)四十一番　左　姬君御入輿

若葉さすみその丶桃の一枝は折得し袖も色ことにみゆ(○中略)

姬君御入輿は、ひめ君の御かた〳〵御深そぎの事口口出て三家もしくは家がらの大名にとつがせ給ふ也、御衣服てう度をはじめ萬の事、宿老及び有司の輩のうち承りて是を閲し、萬石以上の人々より各祝ひ物奉る、其後納采納幣等の式あり、御入輿の日は、此事にあづかる宿老小老御供に參らせ、その餘はくり屋の前まで送りまゐらす、百の司は城中の道に出、譜代之大名をはじめ、大手門のうちに並居て見送りたてまつる、此日無地のしめ上下を著する事、御婚禮の時のごとし、

〔奥州後三年記上〕永保のころ、奥六郡がうちに、清原眞衡といふものあり、〇中略眞ひら子なきによりて、海道小太郎成衡といふものを子とせり、年いまだわかくて妻なかりければ、眞衡成衡が妻をもとむ、當國のうちの人はみな從者となれり、隣國にこれをもとむるに、常陸國に多氣權守宗基といふ猛者あり、そのむすめ、おのづから賴義朝臣の子をうめることあり、賴義むかし貞任をうたんとて、みちの國へくだりし時、旅のかり屋のうちにて彼女にあひてけり、すなはちはじめて女子一人をうめり、祖父宗基これをかしづきやしなふ事かぎりなし、眞ひらこの女をむかへて、成衡が妻とす、あたらしきよめを饗せんとて、當國隣國のそこばくの郎等ども、日ごとに事をせさす、陸奥のならひ、地火爐ついでとなんいふなり、もろ〳〵のくひ物をあつむるのみにあらず、金銀絹布馬鞍をもちはこぶ、

〔吾妻鏡二〕養和二年〇壽永元年正月廿三日甲午、伯耆守時家、初參武衛、〇源賴朝是時忠卿息也、依繼母之結構被配上總、司馬〇千葉常胤令賞翫之、爲聟君、

〔吾妻鏡四十九〕正元二年〇文應元年二月五日癸卯、酉剋故岡屋禪定殿下〇兼經公御息女、御年二十爲最明寺禪家〇北條時賴御猶子御下著、則入御山内亭、是可令備御息所給云云、十四日壬午、將軍家〇宗尊親王入御最明寺御亭、三月廿一日戊子、戌剋御息所入御、〇中略吉時將軍家御烏帽子直衣土御門黃門役御劒、相模太郎殿獻御沓給、御傅母覆御衾、取御沓令退出給、

〔相州兵亂記三〕氏綱公方ヲ聟ニ取ル事

氏綱〇北條ニ最愛ノ女アリ、容顏美麗ニシテ、楊貴妃李夫人トモ云ツベシト沙汰シケレバ、古河ノ公方左馬頭高基〇足利御家督ノ晴氏ノ御臺所ニ成申サントテ、此旨被仰下、氏綱畏テ承リ、御返事申ケルハ、當家ノ曩祖、王氏ヲ出テ年久シ、代々衰ヘ、匹夫ノ武臣ト成ル、無官無位ノ凡下ト成リ、將軍高位ヲ聟ニ仕奉ランコト其恐アリト辭退アリシカドモ、重テ御使アリ、昔伊與入道賴義、奥州

へ御下向ノ時、上野介直方ガ聟ニ成玉ヒ、八幡太郎以下ノ君達出來玉ヘリ、源氏今ニ繁昌ナリキ、亦賴朝卿流人ノ時、時政〇北條ノ聟ニ成リ、御子孫目出度トミエタリ、其ヨリ北條モ權勢ヲ九代マデトリシタメシ、上下目出度吉例ナレバ、トカク宮仕ニ參ラルベシトテ、御迎アリ、北條殿ヲ公方ノ御後見ニ御賴アリテ御代ヲ治ラルベシトテ、兩方トモニ御祝著ハカギリナシ、

〔續應仁後記一〕柳本彈正遭殺害事

政則ハ、故細川右京大夫勝元ノ吹擧ニ依テ、箇樣ニ一家ヲ再興シケル、其報恩ト思ケルカ、又ハ管領勝元ノ聟ト成テ、威ヲ募ラント思ケルカ、其比勝元ノ息女ニ、洞仙院ト云フ比丘尼ノ極メテ醜女ノ在ケルヲ無理ニ所望シ、還俗セサセ、是ヲ娶テ政則ガ妻室トシ、一族郎黨モ皆此室家ヲ崇敬シケルニ、一人ノ女子ヲ儲テ後、去ル明應五年四月廿五日、政則四十二歲ニテ死去シケリ、

〔妙法寺記下〕天文六年二月十日、當國屋形〇武田晴信御息女樣、駿河屋形〇今川義元ノ御上ニナホリ被食候、去程ニ相模ノ氏綱、色々サマタゲ被食候ヘ共、成不申候而、終ニハ弓矢ニ成候而、駿河國ヲ興津迄燒被食候、去程ニ武田殿モ須走口ヘ御馬出シ被食候、

〔妙法寺記下〕天文廿一年霜月廿七日、駿河義元御息女樣ヲ、甲州晴信樣御嫡、武田大吉殿樣ノ御前ニナホシ被食候、去程ニ甲州一家國人ノキホヒ不及言說候、武田殿ノ人數ニハ、更ニ熨斗付八百五十僕、義元殿人數ハ五十僕御座候、輿十二挺、長持廿カラ、女房衆ノ乘、鞍馬百疋御座候、兩國喜大慶ハ後代有間敷候、其內ニモ小山田彌三郎殿、一國ニ而御勝レ候、

〔妙法寺記下〕天文廿三年七月、駿河ノ屋形樣〇今川義元ヘ、相州屋形樣〇北條氏康ノ御息女樣ヲムカヒ申候、御供人數ノキラメキ、色々持道具、我々ノ器量程被成候、去程ニ見物、先代未聞御座有間敷候、請取渡ハ、三島デ御座候、

〔妙法寺記下〕天文廿三年極月、武田晴信樣ノ御息女樣ヲ相州氏康ノ御息、新九郎殿ノ御前ニ被成

候、去程ニ甲州一家國人色々樣々ノキラメキ、或ハ熨斗付、或ハカヒラケ、或ハカタ熨斗付、或ハ金覆輪鞍、輿ハ十二挺、氷岐女ノ役ハ小山田彌三郎殿被成候、御供ノ騎馬、甲州ヨリ三千騎、人數ハ一萬人、長持四挺□□二挺、請取渡ハ上野原ニテ御座候、相州ヨリ御迎ニハ、遠山殿、桑原殿、松山殿、是モ五千計ニテ罷越候、去程甲州人數ハ、皆悉小田原ニテ越年被食候、小山田彌三郎殿ノ御內ニハ小林尾張守殿、氏康ノ御座ヘ參候、加樣成儀ハ末代有間敷候間書付申候、

〔甲陽軍鑑十〕霜月〇永祿十年廿一日に、織田信長より、織田掃部助を使に被成、信玄公御料人、御さし七歲に成給ふを承及、信長嫡子城介內方に申請度と被仰越なり、武田の家老衆、各打より談合して、信玄公へ被申上は、織田信長、はや卅四歲に被罷成候、廿七歲の時義元をうち、庚申より去年まで七年の間に、美濃尾張を治め、今は美濃岐阜に居住ありて、殊更當年は、公方鹽陽院殿義昭公を都へ御供申、信長の被官柴田修理、野村越中、兩侍大將を都に付置申され候へば、信長望多して、自然何樣の儀にて、信玄公と緣を結び申度と申さるゝも不存候間、是をば先さし置給へといさめ申上る、信玄公聞召、それは各異見尤なれども、近年信長、信玄に入魂仕たがる儀、少も僞に見えず候、其子細は、信長音信に小袖を送り、信玄めし候をば別にいたすと云て、入て送る箱を削らせてみるに、殊の外堅地にして、蒔繪も我家の菱實を、同ころ成は町物にてなく念を入、態と申付るとみえてあり、勝賴と緣者に成べき、二年前より如此也と被仰、各に其唐櫃を取出させ、年々のを見せ給へば如御意也、信玄公被仰は、人の眞實不眞實は、音信にて之るゝ者也、一度二度は念をいるゝ共、三度迄は、主か親のけては、其外只の者には、重て念を入る事、小身成者さへならざるに、況や國持は我も人も事多ければ、年々此ごとくにならず候、信長一年に七度宛、定て使をくるゝ、夫迚も此方より使をやるならば、其返報とも可存候へども、二年に一度も、此方より人をやりたる事なきに、親主のごとくに信長仕り候上は、緣者に信玄と成度と信長存るは、一段眞實ならんと被仰、

御合點有て御返事なり、さありて織田掃部、長坂長閑をもつて申上るは、此上はこまか成儀をも、可申上候、我等自然隙さしあひて、佐佐權左衞門、赤澤七郎左衞門が參候時、誰を以て可申上候と申せば、信玄公被仰出は、高坂彈正に就て申せと有、掃部又申上る、高坂彈正殿は、信州川中島に被罷居候、甲府に彈正居られざる時川中島迄參るもいかゞに候、少義に大名の彈正を是迄共申惡く候間、御膝下にて奏者を被仰付候はゞ、其上にても大荒ましの事は、高坂彈正殿へ可申候と、織田掃部申に付、原隼人佐、跡部大炊助、兩人を被仰付、織田掃部と原隼人跡部大炊助を、長坂長閑迄よび引合する也、○中略掃部、岐阜へかへり、やがて其年十二月中旬に、御祝言の御樽肴もたせ、甲府へ參り、御申す時の祝、目出度事なり、仍如件、

〔多聞院日記〕天正三年二月八日、筒井順慶、岐阜ヨリ被歸了、　十一日筒井順慶ヘハ、信長ノムスメ歟妹歟ヲ女中ニ可被遣云々、實否如何、　廿四日、今度筒井祝言、諸方被官衆ヘ銀カヽル道具以下被備之、公卿音信ニ各取亂、花見無之歟、　廿六日、筒井ヘ信長ヨリ今日祝言トテ、ムカキ衆與力悉上了、晩ヨリ大雨下候間延引、　廿七日、信長ヨリ筒井順慶ヘ祝言在之、塙九郎左衞門遣テ來、手播祇園ノ前ニテ禮在之、筒井諸與力迎ニ出、美々敷事也、都鄙ノ見物衆、事々敷云々、

〔甲陽軍鑑十九〕高坂彈正、勝頼公ヘ御意見申五ヶ條ハ、

一駿河遠州、氏政ヘ差上られ、北條氏政の幕下にならせられ、勝頼公は、甲州信州上野三ヶ國にて、氏政の御先をなさるべきと被仰、御尤もに候事、

一右の上、氏康御娘子御座候由承及候間、是をむかへ取、勝頼公、氏政公の御いもうとむこに御成、御尤に候事、○中略

勝頼公御合點なく候て、五ヶ條の内、小田原北條氏政の御妹聟に御成候事計に御點を懸られ候、天正五年丁丑に、小田原より甲府へ御輿入候て、氏政公の御妹聟に勝頼公御成候、高坂彈正、長篠

の後、三年已來、初めて今夜心安く候て、夜能くねいり申候は、小田原より御輿入たる故也と、おのおのにかたり申され候なり、

〔陰德太平記十六〕小早川系譜附隆景小早川家相續之事

小早川ノ一族、〇中略僉議シケルハ、繁平、兩眼盲給ヘバ、誰ヤノ人ニテモ、一族ノ中ニ器量ヲ撰テ、當家相續セシメント欲スレ共、其任ニ堪タル人ナシ、倩世間ノ形勢ヲ見ルニ、諸國動亂シテ、攻戰止時ナク、一將一士、各自立ノ功ヲ建ントスル者、東西ニ據、南北ニ分レタリ、其間ニ於テ智勇相兼テ文武雙行スル大將ハ、毛利ノ元就ニシテ、比肩ハ不及云、雁行スベキ者モナシ、惟フニ已來ハ中國ヲ幷セ領シテ、諸將ノ上ニ可立人也、今彼人ノ子息ノ中、養子トシテ家系ヲ續シメバ、先祖ヲ顯著シ、末裔繁茂ノ基ナルベシト衆議一決ノ上ニテ、元就ヘカクト告テ所望シケレバ、尤神妙也ト悅給、三男又四郎隆景ヲ小早川家出贅ノ契約有テ、噸テ正平ノ息女ヲ以テ妻、禮式慇懃ヲ被盡ケリ、

〔太閤素生記〕太閤素生之事

一太閤本妻ハ、同國津島ニ、淺野又右衞門ト云有德人アリ、又右衞門姪ナリ、淺野彈正從弟淺野又右衞門妹ノ娘ナリ、同國朝日村ト云所ヘ緣ニ付被行、〇中略

一妹幼名彌々御料人、後政所、後號高臺院、位牌高臺寺ニアリ、太閤本妻也、淺野又右衞門姪ナリ、太閤藤吉郎ノ時、淺野又右衞門長屋ヘ、入聟ト成テ來ラル、其長屋茅葺スガキ藁ヲ敷、上ニ薄緣ヲ敷キ祝言シッルト政所殿ザレ物語、

〔祖父物語〕一太閤御親父ハ、尾州ハザマ村ノ生レ、竹アミト申テ、信長公ノ同朋ナリ、太閤ハ申ノ年六月十五日、清須ミズノヽガウ戶ト申所ニテ出生レ玉フ、幼名ヲコチクトゾ申ケル、〇中略淺野又右衞門ト申者、是ハ信長公ノ御弓大將ニテ有ケルガ、女房ニ語リケルハ、小竹ハ利ハツモノナリ、我聟ニシテ、娘オチヽヲ遣ベシト語リケレバ、女房ハ、小竹タメニハ伯母ナリ、一段然ルベシトテ

夫婦ニシタリケル、後ニ北ノ政所ト申セシハ、オチヽノ事ナリ、オチヽ祝言ノ時ノ上著ハ、信長公、左義長ヲナサレシ時、モヨギトスワウ染ノモメンノハタナリ、ソレヲ才覺シテツギアツメ、婚禮ノ上著ニゾシタリケル、中々アサマシキ體ナリ、

〔雨窻閑話〕太閤秀吉公奥方素性幷明智次左衛門が事

一太閤秀吉公の御簾中は杉原入道といふもの丶娘也、彼杉原の娘、幼年の時はおまんといひて、尾州にて、信長の家中奉公を勤め居る、杉原も信長の足輕也、爰に又信長の馬廻に、伊藤右近といふもの有り、おまん出生の時より、此右近方にて世話いたし遣しける故、始終右近が世話にて、彼方こなたを勤め居けるが、○中略其頃木下藤吉は、いまだ足輕にてうこぎ長屋といふ所に居れり、表にうこぎ垣ありて、内に長屋あり、一間に仕切て足輕住居する所なり、勤の隙々には、うこぎをつみて賣りけるとぞ、妻を離別して後妻なければ、雜澁に及びける故、何とぞ岩卷が方に居るおまんを妻女に求め度くいひ入けるに、おまんは早速に返事もせずして、先伊藤右近が方へ行き相談に及びける、右近申すは、彼藤吉といふは、名高き發明なる者なれば、隨分相談して末々の爲にも宜しかるべし、支度は我方にていたし遣すべき間、夜著ふとん鏡臺までも遣すべし、されども知らる丶通りの困窮なれば、錢金の世話は出來まじ、其方の伯父淺野彌兵衛へ參りて借り申すべし、渠は勝手能く暮すなれば、恥敷とも無心を申すべしとて淺野方へ遣し、彌兵衛は郷士也、後淺野彈正大弼長政と言ふは此人なり、金子一兩と、木綿一反はな紙三折を貰ひて來れり、右近大に歡び、夜著蒲團なぞせんたくいたし、其外當分入用の道具ども取揃へ、さくと申す下女に同道させ、日柄を撰び、藤吉が方へ遣し婚姻いたさせけり、然るに藤吉、段々立身出世有りて、終に太閤秀吉公と仰がれまし〳〵ける、折しも彼右近が事を思ひ出され、○中略夫婦共大坂の城へ呼ばせ給ひ、御懇の御意を蒙り、昔の事共言ひ出だし給ひ、落涙を催され、糯子の夜著ふとんに、白銀五十枚、鶴の香合と言ふ名器を簾中の手づから、淸右衛門夫婦に下し給ふ、

〔蘆名家記 二〕蘆名家養子之事

天正十三年夏ノ比、蘆名龜王殿早世シ玉フ、サルニ依テ四天ノ宿老、十六人ノ蘆名御一家ノ衆、執權金上遠江守、皆々ヲタ山ノ城ニ集テ、御聟名跡之義評定有ケリ、○中略執權金上遠江守申サルヽハ、サレバ正宗ノ舍弟正道ヲ聟ニ取ランコトハ、且ハ蘆名ノ武勇スタナキニ似タリ、其故ハ伊達ト蘆名トハ、ヤヽモスレバ確執ニ及ビ、國ヲ爭フ事數年ノ儀ナリ、其上正道ヲ聟ニ取、假天下ノ望ミ有トテモ、正宗公ハ兄ニテマシマセバ、正宗コソハ天下ノ主トハ成玉ハンズレ、其儀ニ及ナラバ、蘆名家ハ正宗ノ家來ト成ベシ、然ラバ蘆名ノ家ノ疵ヲバ、方々ト我等ノ分別ニテ付タルニテハナキヤ、左アレバ佐竹義重ノ御子義廣ヲ聟ニ取候ベシ、殊更佐竹ノ御家ハ元來蘆名ト御一家ナリ、是ニ遇タル御養子不可有ト何モ一決シテ、頓テ佐竹ヘ使者ヲ遣シ、其年八月中旬ニ、義廣ヲ會津ヘ呼越シ奉リ、盛興ノ御息女ヘアハセ奉リ、義廣ヲ盛重ト改メ、蘆名ノ家督ヲ相繼ナサセ、各安堵ノ思ヲナシケル、

〔藩翰譜 一越前〕三河守殿○豐臣秀吉養子秀康德川殿○家康第二の御子、○中略御名をば於義丸殿と申奉る、○中略十八年○天正の春、下總國の大名、結城右衞門督晴朝、家人多賀谷安藝使として、晴朝年既に五十に餘りて、いまだ家つがすべき男子なく、たゞ獨の娘あり、實は晴朝の孫女にて、一族水戸但馬守が娘、是卽忠直卿の御母なり、あはれ殿下○秀吉の御一族を賜て聟君とし、我家を讓らばやと望む、關白殿悅ばせ玉ひて、於義丸を下すべしと仰ありしに、使者申次の人に近づきて、いづれの御事にわたらせ給ふにやといひしに、關白殿大きなる御聲にて、秀吉が子に、何條疑かあると仰られしかば、愼みて仰せ承て下る、

〔永祿以來大事記〕慶長六年、○中略今年秀忠公○德川令女、○子々姫嫁前田利常入加賀國、

〔玉露叢 二〕同年○慶長八年七月廿八日ニ、秀忠公ノ姫君○千姫ヲ以テ秀頼公ニ嫁サシメ玉フ、○是天樹院殿ノ御事ナリ此時大久保相模守忠隣、乘輿ニ從ガフ、淺野左京大夫幸長ヲ以テ、秀頼公ヨリ乘輿ノ迎ヒトス、

〔玉露叢　五〕同廿六日(○元和元年三月)ニ成瀨隼人正、名護屋ニ趣ク、是ハ宰相殿(○尾張德川義直)婚姻ニ依テナリ、淺野紀伊守幸長女(○中略)同日(○十四日月二)戊剋、宰相殿簾中、熱田ヨリ御輿入、供ノ輿五十挺、馬上ノ女房四十三人、長持三百棹、宰相殿ヘ簾中ヨリ白銀二千兩、御服十領、同宰相殿御母儀ヘ白銀千兩、御服十領進上ナリ、

〔元寬日記〕元和元年八月十二日、尾張權中將義直卿、被嫁於淺野左京大夫幸長女、

〔玉露叢　二十四〕寬文十三年正月十五日ニ、松平大膳大夫綱廣娘松平攝津守義利緣組ヲ仰セ付ラル、　同月十六日ニ、酒井雅樂頭忠清娘松平右京大夫賴常ヘ緣組ヲ仰セ付ラル、

〔政化間記〕文化十三年六月三日、德川式部卿御事、(○德川家齊子齊順)紀伊大納言殿(○治寶)息女豐姬方ヘ御聟養子被仰出候ニ付、紀伊殿江御使靑山下野守、同斷ニ付德川式部卿江御使松平伊豆守、同斷ニ付尾張中納言殿、水戶宰相殿、水戶中將殿江御使酒井若狹守、今日紀伊大納言殿御登城、於御座之間御對顏、御禮被仰上、御手自熨斗鮑被進之、畢而於西湖之間吸物御酒御祝、右ニ付尾張中納言殿、水戶中將殿、(宰相殿御所勞)御登城御對顏、同斷ニ付松平修理大夫、松平左京大夫登城、於大廊下御老中御謁、紀伊殿水戶殿初め、西丸江も爲御禮登城、

同日同斷ニ付、布衣以上詰合之面々ヘ、於芙蓉之間御老中御列座被仰渡之、

豐姬方ハ、紀伊大納言治寶卿第□□之息女、

同廿八日、式部卿殿、今卯上刻御登城、夫より紀伊殿江御引移、卽日御婚禮有之、(殿中常日服紗小袖麻上下)同日式部卿殿爲御迎紀伊殿家老水野飛驒守登城、於芙蓉之間御老中謁、右相濟、於柳之間吸物御酒被下之、其外御同所より御迎之御供方江、檜之間醫師溜、蘇鐵之間ニ於て、吸物御酒被下、

但式部卿殿引移之節、被召連候小性六人、近習番四人、去ル十月廿七日、於御祐筆部屋緣類被仰渡、

式部卿殿、今日より紀伊中將殿と被稱、

〔甲子夜話 十七〕數馬上○井 悴專吉後圖書ト改ム妻ハ、山田肥後守、始之名ハ、十大夫ト云、御目付之節貰候、數馬事、一體不如意、御目付勤役、土用ニ入候テモ、縮帷子所持無之樣子ニテ、染帷子ニテ勤候ヲ、十大夫見兼申候ハ、未ダ御目付間モ無ク、縮抔御到來モ有之間敷、自分ハ餘程頼モ有之、縮到來モ候間、一反進ジ可申由ニテ贈リ候處、辱由ニテ受納、翌日ヨリ右縮仕立著用イタシ、扨々十大夫ハ、頼母敷者之由ニテ支度持參少シモ無之、十大夫娘ヲ娶ニモラヒ候由、

右娶貰候譯ハ、或時十大夫方ヘ數馬參リ、家內ノ者ヘモ對面ノ上、十大夫三女、相應ノ方モ有之候ハヾ被遣間敷哉、高ハ千五百石、兩親計、悴一人有之、右悴モ勤居候、持參支度モ一向望ミ不申候由咄候ヘバ、十大夫返答ニ及候ハ、當春總領娘相片付、其上御存知之不勝手、當時緣組相談モ難致段申聞候處、則貰主ハ自分ニテ、悴ヘ娶ニ致度候、御直談申候上ハ、聊持參支度入リ不申、此儘ニテ直ニ申受度由申候處、十大夫挨拶ニ、一通リ親類共ヘモ相談之上、可及御挨拶ト申候處、自分御役モ相勤メ居、悴モ御奉公勤候者故、御親類迚モ貴樣サヘ御承知ニ候ヘバ、決テ御異存モ無之事ト存候間、直ニ此席ニテ御相談相窮メ可申由申候テ、直ニ緣談相整ヘ候、

〔窻のすさみ 二〕井上相模守正任の室は、本多能登守忠義の女なり、故河內守正利、井上ある時忠義の許に來り、物がたりどもありし後、息女はよき生質にて、某心に愛し候間、某に給り候べし、正任が妻にいたし度とありければ、それは大幸の義なり、妻且兒にも、云聞せて追て答へ申べしとありしに、さては只今御聞ありて、決定あるやうに仕度と申されしほどに、則是を母子に談じて、いづれも領掌ありしかば、いよ〳〵御望にまかせ申べしと答へられける時、正利さあらば某が駕籠に入同道し、某は馬にて歸るべし、裝飾又は附人など云事どもは、心次第に跡より御催有べし申請る上は、後日を待におよぶべからずとて、直につれて歸られしとぞ、

平人婚嫁

〔草茅危言 五〕町方婚禮ノ事

婚禮ハ人倫ノ始ニテ、重ンズベキコトナレドモ、禮壞レテ千載、士大夫ヨリ民間迄、夫々ノ仕來リ、自然ト式ニナリタルコト多ク、先ハ夫ニテモ禮意ハ存スルガ、タヾ都會ノ地ハ、花美ヲ專ラトシ、定マリタル制度ナキ故、面々ニ外見ニ競フヤウニナリ、家柄ハ宜シク、內分不勝手ナル者ノ難儀トナルコトナリ、又婚姻ニ財ヲ論ズルハ夷虜ノ道トモ見エ、容儀ヲ主トシ性行ヲ擇マザルナド古人ノ戒ナレドモ、是等ハ禮數積年行ワタリタル上ナラデハ風化シガタカランカ、元祿中、婚儀質素ニスベキ號令下リシト聞ク、又其ノ比凶年アリテ、酒造減少ノ命アリシ時、婚儀ヲ始メ、諸事ニ酒ヲ用ヒマジク、據ナキ事ニハ酒料ヲ贈リ、飮酒無用トノ令モ下リシト聞ク、其後ハイカヾアリシヤ詳カニセズ、今日ニテハ是等ノコトニ及バズトモ、差當タル所ニテハ、マヅ結納資裝ノ制ヲ立タキモノ也、タトヘバ結納ニ、上ハ樽肴熨斗昆布絹綿等三品マデ、中ハ樽肴絹綿ノ內一品、下ハ樽肴バカリ、資裝ニ、上ハ十五荷ヨリ二十荷マデ、中ハ七八荷ヨリ十荷マデ、下ハ二三荷ヨリ五荷マデト極メ、富室溫戶ニ餘計ノ用意アリトモ、追々ニ遣シ、荷物ノ數ニハ入ベカラズ、嫁入ノ時ノ供ノ女ハ、五六人、中ハ三四人、下ハ一二人ニ過ベカラズ、是又據ナキ增人アラバ、前後ニ別ニ遣シ、供ノ數ニ入ベカラズ、勿論末々細民ノ至テ事ソギタルハ此ノ外ナレバ言ニ及バズ、サテ嫁入婿入舅入ノ料理ハ、上ハ一汁五菜、中ハ一汁三菜、下ハ一汁二菜ニ過ベカラズ、二汁五菜ハ、士大夫已上ノ膳部タルベシ、平民ニテモ、豪家ニ貴人大賓ノ臨マルヽカ、又ハ一分ニ尊敬スベキ珍客ニテモアル時ハ格別タルベシ、是ソノ人ニ因テ用ルナリ、タヾ一家ノ儀式ニ於テハ分ヲ守ルヲ是トス、元服年賀神事佛事ナド、皆右ノ式ニ准ズベシ、コノ三箇條必ズ一致ニシテ、上ナラバ上ニシ、中下ナラバ中下ニシテ、上中下ヲ混ズベカラズ、此制一ツ立チタラバ、花靡ノ風、自ラ廢スルモノ半ニ過ンカ、

〔婚禮罌粟袋上〕嫁休息所、或化粧の間より、待上﨟手を引座敷に出、主居の方に直す、かいぞへ嫁の右の方にそふ、待上﨟左りに坐すべし、聟勝手より出、客居に直る、○中略式三獻治らば、引渡し銚子、初のごとく手かけに雙て床前に直し置べし、○中略聟引渡し引と、其まゝ勝手に入、嫁はやはり其所をすさり本座に居るべし、かいぞへ嫁の右に居べし、待女郎休息所へ行、嫁の親たちを座しきへ案內し、客位床の方へ直す、聟の親兩人、主居の方嫁の居たる上座に直る、聟客居の方、嫁の兩親の次に居る、媒人夫婦聟の次に居る、聟の舍弟兩人、嫁の次に居る、右之ごとくにて座定る、○中略聟の父盃のみ初、嫁の父にさす、是より酒盛は亂べし、さかなは組重箱三重かずのこ卷するめ午蒡、盃廻りて、後亭主預る、燭臺蠟燭改る、眞を切事をいむ本膳を出す、○中略本膳引、茶菓子出す、茶はせんじちやたるべし、うすちやなど出すことをいむ、嫁の兩親座敷を立れ候はゞ、聟の兩しん勝手まで送り出べし、嫁は勝手口迄送り出べし、聟は表口、或は式臺まで送り出づべし、初のごとく兩人手燭持出べし、其夜に聟入の式あらば、嫁の里、かねて役人に申付置、兩親歸られ次第、聟迎ひの人、袴又は上下にてちやうちん爲持可遣、聟の方、むかひの人へ口取引、其上馳走時宜に順ふべし、聟入當世は兩親媒人夫婦誘引す、聟の舍弟達は多分ゆかず、聟入留主之內、あとにぎはしとて、親類よめと近付成盃事有、嫁よりの土產の一禮あるべし、○中略里より聟入すみ舅姑歸られ候節、嫁勝手または玄關迄もむかひに可出、○中略床とり終らば、先嫁を待上﨟案內をし、床にいざなひ、又聟を同道して床に直す、扨三寶に白米を高くもり、鰹節を二ふし杉原紙につゝみ、眞中を水引にてゆはへ、米の上に居置、土器を二枚重ね持出、酒は冷酒なり、聟盃を取上のみて嫁にさす、嫁いたゞき、其盃むこにさし、聟盃を納る、尤待女郎挨拶たるべし、○中略かいぞへこしもと、次の間に靜に臥すべし、

〔渡世身持談義〕世盛の花嫁御寢覺の心安い貧家の祝言

嫁入盛りの娘持し人、我より𠏹高き聟を望み、又若男子ある親は、己より分限者といはるゝ人の娘を嫁にと好み、仲人を賴みて、互に世間を繕うて、跡先の考へなく、物入構はず約束固めて、結納の祝儀夥多しく釣臺にて荷負込すれば、嫁の方の手代共、袴いため付て出合、荷負來りし男共迄も樣々に饗應し、たらふく酒を强て、其上に過分の溜錢を取せ、ついて來たる女にも、滿足がる程祝儀を取せば、立歸つて萬吉品に申て、三國一の聟取濟したと悅び、はや婚禮の夜になれば、聟の家内は、萬燈の如く蠟燭立並べ、嫁御の御乘物、直に奧座敷へ舁入て、愛敬の守取替す抔、貝桶渡し、奉公雛の置所、腰卷したる女共、長柄くはへの品を盛り、千代重ねの白無垢、皆紅に著替へ、介添仲居腰元さゞめき、釣夜著長枕帶掛の屛風、初床の盃事納り、御機嫌よく、お休みあれば、勝手にはお目出度酒にたわいはなく、今宵を晴の廊上下著ながら橫に成て、正氣なる者は一人もなきに、○中略是を思へば下々の心易き、中居腰元の風俗、我目に入しを宿の噂、仲人に賴んでいひこみ、印に木綿一反、銀三匁、二升樽一つ遣し、祝言の夜も、朽木盆に盃載て、淸水燒の皿に、飛魚引裂入て、ちろりに小半入れて、千代の結びの盃事、世にある人の海老のふなもり、尉と姥の島臺、金銀の土器にて、夫婦の結びするも心は同じ事、相借屋の噂が、待女郞がてら、前垂掛て來て取持、○中略おか樣、今夜は初々しうて畏からふ、早う寢やしやれと燈心減して歸る抔、此祝言の寢覺の心易さ、釣夜著で寢た人の節季の辛苦とは、格別樂な事ぞかし、

〔宇治拾遺物語九〕昔ばくちの子の年わかきが、目はな一所にとりよせたるやうにて、世の人にもにぬありけり、ふたりのおや、これいかにして世にあらせんずると思てありける所に、長者の家にかしづく女のありけるに、かほよからん聟とらんと、母のもとめけるをつたへきゝて、あめのしたのかほよしといふ聟にならんとの給といひければ、長者よろこびて、むこにとらんとて、日をとりて契てけり、そのよになりて、裝束など人にかりて、月はあかゝりけれど、かほ見えぬやう

にもてなして、ばくちどもあつまりてありければ、人々しくおぼえて、心にくゝおもふ、さてよるよるいくに、晝ゐるべきほどになりぬ、いかゞせんと思めぐらして、ばくち一人、長者の家の天井にのぼりて、ふたりねたるうへの天井をひし〱とふみならして、いかめしくおそろしげなるこゑにて、あめのしたのかほよしとよぶ、家のうちのものどもいかなる事ぞとき、まどふ、聟いみじくおぢて、おのれをこそ世の人天のしたのかほよしといふときけ、いかなる事ならんといふに、三度までよべばいらへつ、これはいかにいらへつるぞといへば、心にもあらでいらへつるなりといふ、鬼のいふやう、この家のむすめは、わが領して三年になりぬるを、汝いかにおもひて、かくはかよふぞといふ、さる御事とも知らでかよひ候つるなり、たゞ御たすけ候へといへば、鬼いと〱にくきことなり、一ことしてかへらん、汝命とかたちといづれかをしきといふ、聟いかがいらふべきといふに、しうとしうとめ、なにその御かたちぞ、いのちだにおはせば、たゞかたちをとの給へといへば、をしへのごとくいふに、鬼さらばすふ〱といふときに、聟顔をかゝへて、あら〱といひてふしまろぶ、鬼はあよびかへりぬ、さてかほはいかゞなりたるらんとて、指燭をさして人々みれば、目はなひとつ所にとりすべたるやうなり、聟はなきて、たゞ命とこそ申べかりけれ、かゝるかたちにて、世中にありてはなにかせん、かゝらざりつるさきに、かほを一たび見え奉らで、大かたはかくおそろしき物にりやうせられたりける所にまゐりけるあやまちなりとかこちければ、しうと、いとほしと思て、このかはりには、我もちたる寶を奉らんといひて、めでたくかしづきければ、うれしくてぞありける、所のあしきかとて、べつによき家をつくりてすませければ、いみじくてぞありける、

〔半日閑話八〕祇園可音物語

半右衛門といふものは、大石氏の家來也、大石忠臣を輔して、江戸寺院にて忠死の後は、離散して

沙汰もやみぬ、茶屋宗古事、計らずも此半右衞門浪人の折から入魂にして、五六年内外むつまじく語らひけるが、ある時宗古の嫡子に娶取度おもひけれども、歷々は聟のいたみあれば、大名の末娘や、御旗本公家衆腹の子も、私事にはあしく侍るべし、併内證のいたみは先き次第の事也、何〻にしても筋ある者の娘を娶に致し度と折々語りぬ、半右衞門尤也、よろしき緣もあれかし、聞糺し申べしとて、其後來り、扨考へ候得ば、よき娶あり、舅も正敷者也といふ、宗古夫は然るべし、萬端半右衞門へ賴入、よろしく御身にまかせ侍るとて喜悅しけり、さあらば能々承り可ㇾ申とて、五六十日も宗古の方へ來らず、されば宗古方にても、いかゞ半右衞門は致されしや、久敷音信もなし、若〻や身まかりし事もかなと案じ、家へも人なんど越し侍れども、前住ぬる家は引移、しらぬ人替り侍るに、いよ〳〵心元なく過しに、七十日計も過て半右衞門來り、數々の物語ありて、さて兼て仰の如くよき娶有て、しうとめへも語り侍りぬ、先方にても一段の事に悅びぬ、さらば結納こされ候べしと申、宗古もさし當りいかゞとおもへども、半右衞門のけしき、いかゞとも有ば討果すべくも見ゆるけんまく故、宗古心におもふ樣、結納は互に聟舅の方へ能懸合、雙方知り合ふ上の事、天下に通例也、さもなくて結納計、唯今越されよとの事、扨々心得がたく、殊に宗古ともいはれしもの、卒爾に娶取しなどゝ沙汰あるも恥し、しかし今さらいなみもならず、奧へ入て内方へもかくといふに、此上は是非なし、娶をとりて、此末家を潰すといふ共、宗古の家運夫迄の事なり、我又半右衞門に久々入魂故、麁末の者とも思はずして萬事賴入、其元次第と申せしはあやまり也、先ヅ半右衞門にしたがひ申さんとて、熨斗一把、杉原二束、半右衞門に渡すに、半右衞門受取一段めで度候、是にて結納萬事相濟たれば、明後日婚禮あるべし、明日中道具を越し可ㇾ申とて歸りけり、宗古はいよ〳〵案じ、歸り道に人を付て見けるに、半右衞門家に歸り、御姫様、今日結納持參致し侍るとて悅ぶ聲きこゆ、忍びの者もあやしく、歸りて宗古にかくと告、いづれもふしぎにおも

ひしが、扨翌日の夕方、道具數々、長持三十棹、其外釣臺簞笥等あまたにて、人數も三百人にて、夫々上下著たる侍分附添、半右衛門は長の人として來る、宗古も又々驚き、一昨日の結納のおろそかなるに引替、てうちんも百張ほど、丸の內に鷹の羽付たる紋にて、あたりもかゞやかし來りし故、家內大におどろき、俄に夫々申付、饗應の仕度し、半右衛門江も祝儀の目錄多く出したれども、いさゝか取らず、其外者へは遣すべしとて、壹人前鳥目三百文ヅヽ取らせ、重立たる侍分は、金子百疋ヅヽ出したれども、是は半右衛門じたい致し、今日は皆々日雇にて侍る故、日雇の心に叶ひ候程遣べし、御心入の段過分也とて、五十疋ヅヽは返しぬ、扨宗古は以前と違ひ、道具も數々越したる事、此男はいかゞの人やと又々案じけるが、內義のおもふやう、定て宗古方は、代々の分限とて、人々もしりぬる事、おそらくは盗人の同類にもせんとて、こしらへ遣したる物歟、又は今夜忍び入りて、家財をこと〳〵く奪はんはかり事にて、長持の內、もしや手下どもを入置て持込しものや、あらんと、重き長持をまづあけて見んど、あたりに用心の人を置て、突棒さすまたなんどにてかため、あひかぎを以て長持を明て見るに、大夜著二重ねありて、其下にかけ硯箱と又箱壹つならべあり、此重さ四五百兩ヅヽも入たると覺ゆ、さればいよ〳〵あんじ、ふしぎに思ひけるが、其夜は何事なく濟み、翌日は婚禮の事故、夫々の人々、近所よりもあつまり待居る也、宗古おもふは、かくの如き樣子にては、定て當人駕籠にて來るべし、萬一見めあしきかたわものにてもあらんも去れず、さるに依て乘物は玄關にて待請おろし、いよ〳〵あしき容體の者ならば、すぐにそこより追ひ返すべしとて、一同に申聞待けるに、やがて挾箱長刀箱てうちん多く持せて、乘物に半右衛門付添、下女も三人付來りぬ、是に依て定の通り玄關にておろさせ、是より御越あるべしと案內するに、娶は綿ぼうしをも取のけ、ゆう〳〵と奥へ通る、その姿を人々見るに、中々たぐひなき容體にて、うつくしくけだかくいふに及がたし、宗古夫婦も大におどろきながら安堵のおも

ひをなし、別而めでたしとて、半右衛門をもあつくもてなし、段々婚禮の式も整ひて首尾よくをさまりければ、半右衛門もひらきけり、扨も宗古は、とかくあんじ、かやうなる仕方に舅の樣子心元なし、定て今夜は舅の方へ半右衛門も參るべしとて、又々人を付てうかゞひけるに、半右衛門は歸るべしとて、人を付越しぬ、寺の內を通り、前の家に歸り、家のひろ〳〵敷、座しきも有故、物見したる違ひなき家なれば、外に替りし樣子もなく見ゆる故、何卒家の近くへ寄り見んと、勝手の壁のすみに穴を明てうかゞひ見るに、半右衛門は殊の外に悦びたる體にて、扨々一段の首尾也、皆々も酒のめとて、寺の住持をもよび、酒なんどふるまひ返し、召仕のもの共も心よげに寢させけるに、半右衛門は上下袷のしめのまゝ寢入しが、夜の八時分過る頃とおもふに、半右衛門起て召仕をよび、夜もはや明るべし、おきよ〳〵といふに、宵よりの酒にていづれも起きず、半右衛門は火打取出し打付て燈明をともし、位牌に向ひ拜禮し、扨御姫樣を御預ヶ故、むなしく御供にはづれ、無念ながら今日迄存命しぬ、もはや年月の大望もとげ、おもひ殘す事なし、いざ是迄なりとて押肌ぬぎ、刀を拔て腹につき立、心よく殉死なしぬ、忍びの者、此體を見て大に驚き、其內召仕のものもきゝ付さわぎまよひぬ、物見の者は立歸りて、宗古にかくと云に、宗古も再三驚き、娶に此事を尋ねけるに、扨々不便の事に侍れども、兼て左樣の心底也、はづかしながら私事は、大石內藏之助娘也とて泣こづみける、宗古は半右衛門の忠義を感じ、其寺の內に厚く葬り、住僧も忠義を感じ悲しみて、法事等ねんごろにせしと云、○中略右は寶永六丑四月上旬聞書也、

〔先哲叢談前編三〕二山義長、字伯養、○中略伯養娶妻、其儀一遵文公家禮、家禮有壻乘馬文、伯養家不畜馬、乃借之人而行其事、

〔近世江都著聞集三〕新材木町白子屋お熊仇名の辨

仲人ありて、白子屋正三郎方へ申入けるは、お熊殿も年頃に相成り被申、外に男子も持給はねば、

似合の聟養子をして、家に根繼の石ずゑして、富貴繁昌に、子孫のさかゆるすゑを見給へと、白子屋夫婦にす、めければ、此せつ白子屋も女房のおごりつよく、家內猥がちにて、身上も少し不廻りに成り、問屋向にも不埒多く、居屋鋪も書入て、借金等も出來ければ、金子持參すべき聟も有ならば相談すべしと申に付、仲人其段を聞屆け、大傳馬町一丁目地主彌太郎手代を、五百兩の持參にて聟養子として、其名を又四郎と呼けり、やがて相談相究め又四郎を引取、お熊と婚姻を結びけり、

〔江戸眞砂 三〕胡麻鹽八左衞門が一生之事

八左衞門が、親の讓り減じては不孝なりとて、始末第一とす、○中略娘二人持、我相應の方より聟入申來れども、相談せずして、岡町鹽町へ行て、米屋奉公人、角前髮の伊勢より下りしに目を付、姉娘に添はせ、妹には我召仕を見立、小坊主上りの者を引あげて、家を二ッにして暮しぬ、外より相應の緣組は、諸道具の仕立に金が入、其外出入にも入用有り、家の滅亡の下地也との斷し、もつとも成る仕方、○下略

〔寺川鄕談〕此鄕寺川村○土佐國にて娘を嫁に貰ふ時は、先ッ仲人、袋に小豆を貳升入うちかたき、扨向原へ參りいひけるは、おぢ○父うば○母もあいよ○兄らも、じんばあ聞てたもれ、こちのめろべを、越裏(リ)門(モン)村の猿松が伽にくれてんやといへば、夫は成程お心入れ忝し、猿松も同じ所內、殊に筒井のちやきちやき、山畠もよふちまふ、みちのめろべとても、バアの氣にも入り、ずびかねもせまい、うら迚も、伊東の末筋目にわるい事もなければ、今の內は、おぢうばがか、り子、兄めに伽雇ふてやらぬ內は得こそ遣る事はなりませぬ、どうも得ゑんせまい、先ヅ此袋の祝儀ものは、取ていんでたもれといふ、いや〳〵何分うらがいひが、り、夫ではならぬとて、彼袋を置て歸らんとすれば、いや先づ取てござれ、夫程ならばこんたのおばにも、鎌籔の從弟達へも、相談してみやうと言を聞入れ

ず、袋を投込歸れば、跡よりおはべ出て先づ取て御座れといふ、いやならぬ、くれねばかたいで行と云て、引合ねぢ合、つひに袋を置歸へれば、娘をくるゝなり、何分人頼みして戻せばくれぬ也、首尾能袋を取納め置ば、彼めろべも出て、三度いたゞき、袋の緒ときときめ直し取置るとなり、扨日柄を改めゆいれをやる、サスカミ、クマワウジ、此兩日を嫌ふ也、日塞り時ふさがりを山分の人はよく知る事なり、さす神くまわうじ共に方角あるよし、挽茶を贈る、紙に包へだを取る、九へだ七へだ五へだなり是ゆいれ第一の品にて、貧福共に送る、互に大切にするなり、其上を水引わらしべなどなりにてくゝる、男ゆすび女ゆすびなどゝ云、扨舅の方にては、親戚不殘呼集め、今日は日柄よし、茶の口を切祝ふと云て、其茶の口を切り、いづれも祝ひのみける、其茶碗の名をづんぎりと云、いざ〳〵づんぎりの皮むかしやれと云時、蓋押明け、豆腐田樂を茶請にして、挽茶二服づゝ呑ける、此茶を一家不殘のみ、是にて彌和談して、萬端事調也、此外の事は、ひんふくに志たがふ、誠に殊勝に見へ、いにしへの風なるべし、昔數寄者の茶碗など持たる者本川に有しよし、與州商人などへわづか成價にてうり、或はにしき手の茶わんなどにかへ申由公儀へも言上、江戸品川の御數寄屋へむかし納り今に有よし、其外能腰物もむかし與州へやり申由をしき事なり、扨むこ入有其時は、親兄弟は不及云、伯父姨いとこもはとこも九族引具し、樽をおふて行もあり、あめごと云魚をすぼにして行も有、もこ殿は鐵砲をかたぎ道すがらさん〳〵と幾つも打はなし、是は道の惡魔拂と云て打也、又舅の方には、けふは聟入ぞ、若い衆はやしてたもれとて、若い男を數々道へ出し、聟來れば、もこどの〳〵見事々々、鐵砲がようなつて〳〵さきのめろべがうれしかろ、鼻が高いはさへこけてさらかふを、打みしやるな、さらかふも、はやばんから用の有る所ぞ、だんぢにせよなどと口々樣々に云はやしけり、扨おち付とて坪へむしろ敷ならべ、聟をはじめ兩家の一門不殘集り、いもでんがく肴し、おやごき五ッ六ッ出し、よめもすぐに酌をとり、はらふくるゝ程うたひて

早婚及晩婚

内へ入る事也、内にては婿者は長柄の蝶子にてひへもちのぞうにいも吸物にて本盃を出しける、長柄は今物にあらず、隨分黑くふすぼり甚久敷物也、扨事濟むこ歸る時は、又右の若者共大難所の廻り道もならぬ所へ竹のふしをぬき、小石砂を入二重三重に竹垣をして結ふさぎ置、此所へむこきかゝりければ、聟脇指をぬき、垣を切破り通る也、此時彼はやして山上に數々遠見し見事切れて〳〵ひかるは〳〵、はづみがよいぞ〳〵と言も有、庖丁ではないが錆が見ゆるぞ、めろべが來たら研でもらへといふも有、切るれば譽、きれざれは惡口して、どつと笑ひけり、此垣を脇から外のもの切る事ならず、あら道あけ迚、聟がひとり切り破るなり、竹の節をぬき、石沙を入置ければ、脇差をいためる、是も所のならひ珍敷戲れ也、津野山鄕にも垣をして、かやうの事ありと、

〔浮世床隱居〕おらが御婚禮は、下女の引越のやうにして、仲人が葛籠を脊負て、左の手に、鐵藥壺をさげて、右の手に酒を一升提げて來たは、イヤ又恥を言はねへぢやア理が聞えぬ、ソコデ己はあきないから歸て、今に大方花娶が來るだらうと思ふから、豆腐を小半挺買て來て、鰹節をかいて、居る所へ、御輿入よ、夫から仲人が指圖して、直に花娶が茶釜の下へ焚付る、仲人が味噌を摺る、ソコデ仲人の懷から出して、三枚の鍋を燒て、三々九度よ、ナントどうだ、夫から辛苦して取立た身上だから、アノ婆どのも能く骨を折て呉れた人さ、

〔大鏡六内大臣道隆〕大姫君（○藤原道隆子定子）は、一條院の十一にて御元服せさせ給ひしに、十五にてや、まゐらせ給ひけむ、やがてそのとしの六月一日に后にたゝせたまふ、

〔榮花物語十四淺緑〕二月（○寛仁二年）になりぬれば、大殿の尚侍殿（○藤原道長女威子、時歲二十、）内（○後一條、時歲十一、）へまゐらせ給、（○中略）御門の御有樣よりは、かんのとの、こよなくおとなびさせ給へり、（○中略）御門いとわかくおはしまして、いかゞとよの人聞え思へり、さき〳〵もおぼつかながら、すみたてまつりかはさせ給へる御中なれど、かんのとのは、さしならびたてまつらせたまはん事を、かたはらいたく覺しめ

して、みかどは、ひた道にはづかしうおぼしめしかはす、ぶ〳〵にのぼらせ給へるは、よるのおとゞにいらせ給ほど、いみじうつゝましうわりなうおぼしめされて、いかにもうごかでゐさせ給へれば、あふみの三位まゐりて、あなものゝくるほしなど、かうてはさて、御帳のもとにおはしまさすれば、うへおきゐさせ給て、御袖をひかせ給ほど、かんのとの、むげにゑらせ給はざらん中よりも、まばゆくはづかしく覺しめさるべし、

〔増鏡四三神山〕仁治二年にも成にけり、御門〈〇四條〉はことし十一にて、正月五日御げんぶくし給ふ、御いみな秀仁ときこゆ、そのとしの十二月に、さうゐんこ攝政殿〈のりざね〉の姫君、九になり給ふを、おほぢの大殿〈〇藤原道家〉御をぢの殿ばらなどゐたちて、いとよそほしくあらまほしきさまにひゞきて、女御まゐり給へば、〈〇中略〉うへもきびはなる御ほどに、女御もまだかくちひさうおはすれば、ひゝなあそびのやうにぞ見えさせ給ひける、

〔増鏡六おりゐる雲〕康元元年にもなりにけり、大きおとゞ〈〇藤原實氏〉の第二の御むすめ〈〇東二條院〉女御にまゐり給ふ、〈〇中略〉上〈〇後深草〉は十四になり給ふに、女御は廿五にぞおはしける、御門きびはなる御程を、中々あなづらはしきかたにおもひなし聞え給ひぬべかりつるに、いとざれてつゝましげならず聞えかゝり給ふを、准后〈〇實氏妻定子〉はうつくしと見たてまつらせ給ふ、

〔増鏡七北野の雪〕右大臣〈〇藤原實雄〉ときこゆる、姫君あまたもちたまへる中に、すぐれたるをらうたきものにおぼしかしづく、今上〈〇龜山〉の女御代に出たまふべきを、やがて其ついで、文應元年入内あるべくおぼしおきてたり、〈〇中略〉十月廿二日まゐり給ふ、〈〇中略〉女御〈〇龜山后佶子〉は十六にぞなり給ふ、御門は十二の御としなれば、いとおとなしくおよすげ給へれば、めやすきほどなりけり、〈〇中略〉西園寺の女御〈〇龜山中宮藤原嬉子〉も、さしつゞきてまゐり給ふを、いかさまならんと御胸つぶれておぼせざさしもあらず、これも九にぞなり給ひける、冷泉のおとゞ〈〇公相〉の御女なり、

〔榮花物語十六本の雫〕二月(〇治安元年)には、かんの殿、(〇藤原道長女嬉子)東宮(〇後朱雀)へ參り給へければ、その御いそぎをしの、しる、(〇中略)かんのとのは御年十五ばかりにおはします、春宮は十三にぞおはしますに、いみじうめやすき程の御なからひにおはします、

〔榮花物語三十四晩待星〕一ほんの宮、(〇後一條皇女章子内親王)そのとし(〇長曆元年)の志はすの十三日に、御もたてまつりて、やがてその夜春宮(〇後冷泉)にまゐらせ給べしといそぎた、せ給にたり、(〇中略)春宮は十三、宮は十二におはします、

〔榮花物語十四淺緑〕との、中じやう、(〇藤原道長子長家)このころ十五ばかりにおはするに、(〇中略)侍從の中なごん(〇藤原行成)のむかひばらのひめぎみ、十二ばかりなるを、またなうおもひかしづき給ふ、むまれ給けるよりこ、ろことにおぼしおきてたりけるを、この中じやうのきみを、さてあらせたてまつらばやとおぼして、さるべきたよりして、との(〇道長)の御けしき給はらせ給へば、ひ、なあそびのやうにてをかしからんなどの給はせて、にくげならぬ御氣しきをつたへき、給て、とのもきたのかたも、いみじううれしうおぼして、にはかにいそぎたち給、(〇中略)三月廿よ日(〇寛仁二年)のほど、おぼしさだめたるに、その日いはしみづのりんじのまつりのつかひに、このきみおはすべかりければ、との、おまへ、こと人にさしかへさせ給ほどの御こ、ろおきてを、中なごんはおろかならずおぼしよろこびたり、よろづのことと、のへ給て、(〇中略)くる、やおそきとおはしたれば、みんぶのたいふぎみ、をはり權守(〇實經、良經、並行成子、)など、志そくさしていれたてまつる、さてその夜はとのもきたのかたも、なにごとかあらんとけぢかきほどに、いもねであかさせ給、あはれにおぼしつゞけらる、

〔爲房卿記〕永保二年四月十六日丁卯、今日殿中將、(經實)嫁㆓春宮大夫娘㆒、(十二、實孫也、公實嫡娘、母實政嫡女、)

〔兵範記〕保元三年二月九日庚子、今夜執㆑聟事、密々營㆑之、藏人大夫被㆓來居㆒也、(各年、男十五、姫君十三、)

〔玉海〕治承四年六月九日庚寅、此日花山院中納言兼雅卿女子、(攝政養子)以爲初參女院、來廿三日娶大將(○藤原良通)云々、(○中略)件女子生年十一歲、入道相國(○平淸盛)外孫也、

〔平家物語七〕これもり都おちの事
三位の中將(○平維盛)まことに人(○藤原成親女、維盛妻、)は十三、我は十五より見そめ奉りたれば、火の中、水の底へも、共に入、共に沈み、かぎり有別ちまでも、おくれさきだゝじとこそ思ひしか、(○下略)

〔吾妻鏡二十七〕寬喜二年十二月九日丙寅、將軍家(御年十三○藤原賴經)御嫁娶事、內々有其沙汰、(○中略)亥剋竹御所(御年廿八○源賴家女)入御于營中、是御嫁娶之儀也、雖起楚忽、爲密儀之間非晴儀、

〔吾妻鏡四十八〕正嘉二年四月廿五日甲辰、今日相模三郎時利、(十一歲)嫁小山出羽前司長村娘、

〔吾妻鏡五十〕文應二年(○弘長元年)四月廿三日甲寅、相模太郎殿(十一歲○北條時宗)御嫁娶、(堀內殿)

〔總見記五〕武田信玄來歷事附結婚姻和睦事
永祿六年、德川殿ノ嫡子岡崎三郎信康ヲ、信長ノマコトノ御息女ト御婚姻ノ御結合セアリ、然レバ互ニ未ダ御幼稚ナレバ、御輿入レハ無リケルニ、是モ今年吉年ナリ、御婚禮アルベシトテ、同ジク永祿十年ノ夏五月十七日、御息女岡崎へ御入輿アッテ、三郎殿ノ御室家トナラセ給フ、三郎殿モ御室家モ、永祿二年己未ノ御出生、御同年ニテ九歲ナリ、御輿添ノ侍ニハ生駒八右衞門ヲ被指遣、式正ノ御祝儀相調ヒ、信長公モ德川殿モ御悅ハカギリナシ、

〔蒲生氏鄉記〕永祿十一年秋九月、(○中略)賢秀、鶴千代丸ヲ人質トシテ觀音寺ニ來リ、信長ニ目見ス、信長、鶴千代丸ヲ見給テ、蒲生ガ子、目ツキ只ナラズ、必名將ニナラン、我聟ニセント契約シ給テ、岐阜へ被遣、同十二年五月、鶴千代丸於岐阜元服、號蒲生忠三郎教秀、卽祝言アリ、忠三郎十四歲、姬君九歲也、祝言ノ後、姬君トモニ日野へ被遣也、

〔藩翰譜一越前〕參議忠直卿は、中納言殿(○德川家康子、豐臣秀吉養子、秀康、)の御嫡子、童名は長吉丸、父の御跡つがせ給

以養子女與人

ひ、慶長十六年の春、將軍家〇徳川秀忠の御前にて元服あり、〇中略今年九月、將軍家第四の姬君を北の方に參らせられ、越前の國に趣せたまふ、勝姫君と申、時に御とし九歳、一說に十二歳とし申す、

〔百一錄〕元祿九年九月廿七日、松平安藝守息女、今夜遷入九條殿亭、婚禮歟、年序及六歳云々、

〔百一錄〕元祿十五年十二月四日、有栖川故式部卿宮幸仁親王女、ヨシ君十二歳嫁東本願寺、

〔玉葉〕嘉禎三年正月十四日、右少辨高嗣朝臣注送文、〇中略今夜左丞相春秋廿八〇藤原兼經可令通攝政殿御息女御年廿七、故藻璧門院御同胞、第二御娘也、給也、

〔十三朝紀聞 三靈元〕天和二年四月、安東守約、〇中略師瑜、〇明人朱氏授經學文章之訣、得關西巨儒之稱、年過四十未娶、瑜贈書曰、虧孝道、乃初娶云、

〔玉海〕治承四年六月九日庚寅、申刻參女院、〇平淸盛女、高倉后德子、御方入夜歸來、此日花山院中納言兼雅卿女子、攝政(藤原基通)養以爲子初參女院、來廿三日、娶大將〇藤原兼實子良通云々、須待彼日也、而入道相國〇淸盛先令參入女院、其後密々可會合之由、便被申女院、仍先以所參入也、件女子生年十一歳、入道相國外孫也、參上儀、偏以密々事也、乘實父納言車、諸大夫二人、騎馬在車後、出車一兩、侍從忠經車也、卽兼雅卿息男也、侍二人相具之、雜仕二人小女一人、出立自花山院云々、今夜女院有御對面、以西子午廊爲其居處、自今日付女院進物所著膳也、此人可親大將之由、此兩三年雖有其儀、殊不進思、自然逃過之處、去月晦、只可進入女院御所之由、忽然而被申請、其上不能是非、若又辭遁者、豈安生涯哉、仍愁所被請取也、　廿三日甲辰、此日密々有嫁娶事、右大將良通、通花山院中納言兼雅卿娘、件人去九日參女院、子細見先日記、非執政之禮、非追媒之儀、最略密々沙汰也、凡儀關白爲子、可被迎大將云々、而忽遷都〇福原事出來、仍其儀相違歟、

〔吾妻鏡 四十九〕正元二年〇文應元年二月五日癸卯、酉剋、故岡屋禪定殿下兼經公御息女、御年二十爲最明寺禪家〇北條時賴御猶子、御下著、則入御山内亭、是可令備御息所給云云、　十日戊申、於最明寺御亭、將軍家〇宗尊親王御吉事有其沙汰、

〔御湯どのゝ上の日記〕天正三年三月廿八日、のぶなが、子にして、はりまのまご、二でう大納言(〇昭實)ところへよめいりあり、大雨ふる、上らう御なかうどなり、

〔多聞院日記〕天正三年四月十日、京ヨリ連宗下、二條殿へ去廿八日ニ、信長ヨリ祝言在之、

〔玉露叢〕三同月同日(〇慶長十九年五月八日)ニ、加藤肥後守忠廣ノ名代トシテ、加藤右馬允正方、參著シテ御禮申上ル、是ハ會津秀行息女、大御所(德川家康)ノ御孫女也、幕下(〇家康子秀忠)御養女ニナサレ、忠廣ト嫁サシメ玉フ、是ヲ賀シ王ヒテ、緋繻子二十卷、黑繻子二十卷、御小袖十領、白銀二千兩進上ス、右馬允正方、自分ノ御禮申上ル時、御小袖五領、白銀三百兩獻ジ奉ツル、

〔以貴小傳〕元和二年の四月、水戸中納言賴房卿をも、この局(〇おかぢの局)の養君にさだめらる、ことし東照宮かくれさせ給ひしかば、局はかしらおろして、英勝院殿と申す、其後賴房卿の御女を養君にせらる、左大臣家(〇德川家光)その御女をとりて御子としたまひ、加賀の光高朝臣にあはせ給ふ、これ大姬君と申せし御方なり、

〔元寬日記〕寬永十年八月三日、今年將軍家(〇德川家光)之姬君、松平筑前守光高(加賀守綱利父)方へ入輿、老中幷旗本之健士隨御輿、供奉儀式尤嚴重也、此姬君、實水戸中納言賴房卿之息女、將軍家爲御養子及此儀、

〔玉露叢〕二十四同月(〇延寶元年十月)廿七日ニ、千代姬君御養女(實ハ廣橋ノ女德川家綱養女)〇有馬中務大輔へ緣組ヲ仰セ出サル、

〔玉露叢〕二十六同月(〇延寶三年五月)八日ニ、尾張中將殿御養女(實ハ中納言殿ノ姬)松平安藝守へ緣邊ヲ仰セ付ラル、

〔季連宿禰記〕元祿十一年六月廿一日甲子、大外記師庸朝臣來臨、被命云、只今依使向傳奏正親町前大納言家、以雜掌被命云、大樹(〇德川綱吉)姬君、來廿三日令入水戸殿(〇德川吉孚)給、〇中略件姬君者、鷹司前殿

下房輔公之若公之内御旨目、（すけのぶの御方と申之、御名字不ㇾ知之、）此御方之姫君、先年爲ニ大樹御養子、令ㇾ渡ニ關東ニ給、此姫君今度令ㇾ嫁ニ水戸殿ニ給云々、

〔百一錄〕寶永元年十二月廿五日、角藏與市妹、嫁ニ于油小路羽林家、施藥院爲ニ養女、從ニ施藥院ニ出ㇾ輿了、

〔百一錄〕寶永五年十一月廿四日、去十八日、於ニ東武ニ大樹（綱吉○德川）養君松姫御方、入ニ輿于松平加賀守亭、諸家二條江抂駕、

〔翁草十二〕利根姫君仙臺御入輿之事

利根姫君は、元紀州の姫君也、有德公（吉宗○德川）の思召には、先達て竹姫君を薩州へ進られぬ、今度此姫君を公儀の御媒酌にて、仙臺（伊達氏○）へ御入輿あらば、御因みの御爲にも宜るべきとの御事にて、閣老の面々へその御沙汰仰出されければ、各打寄被ㇾ評ㇾ之、上意の段、尤御因の爲然るべき御事ながら、彼家は他家と違ひ、古來六ヶ敷事多ければ、卒爾に仰出されては如何也、自然表向にて被ㇾ仰入ㇾ時に、もし彼家に故障有て御斷など有ては、なにとやらん上意徒なるに似たり、先づ彼家の長臣を呼て、御内意を申試んと評定の上、長臣片倉小十郎を列座へ招かれ、件之趣演說有けるに、片倉卽答して曰、當家は代々、攝家淸花の御方と緣結仕候得者、他家緣談之事、御請難ニ申上ニ候、此儀陸奥守へ申聞るに不ㇾ及、御斷申上候と憚所なく答ければ、老中の面々も、重ての言なく、片倉は其座を退出す、諸老中打寄評せられけるは、尤表向と違ひ、内意之事とは云ながら、列座へ呼て議ㇾ之は、畢竟表向に等し、然るを係る返答之趣にては、執にも上意之趣難ㇾ濟と、尙御内聞を經て、昔日池田輝政の女を、台德公（秀忠○德川）の御養女に被ㇾ成、御家の先祖忠宗へ遣されし舊例抔を考、此上は御養君と被ㇾ成、可ㇾ被ㇾ遣との御内評にて、重て片倉を被ニ召呼、老臣より其趣を達せられける處に、此時も片倉卽答して、公儀御養君の御事に候はゞ、何しに家例のこと申上べきや、是は當家の眉目に候へば、是又陸奥守へ不ㇾ及ニ相達ニ御請申上候、何時も表向〻の御沙汰を奉ㇾ冀候旨申上て罷立しとなん、

右の譯に寄て、始は御媒酌のみの思召成しを、片倉が一言に仍て、御養君の御沙汰に成しさかや、

〔十三朝紀聞光格六〕天明七年十一月二十七日、右大臣經熙〇近衞養二鹿兒島源重豪女一爲ㇾ子、嫁二大將軍一、〇徳川家齊

〔泰平年表大御所〕御臺所〇徳川家齊妻ハ、松平薩摩守重豪三女、御母市田氏、安永二年六月十八日、鹿兒島御誕生、御名篤姫、同五年七月十九日御縁組、家治公方、茂姫さ被ㇾ進二御名一、(中略)天明元年丑年閏五月十九日、薩摩守屋敷方一ツ橋館へ御引移、同七月廿三日被ㇾ爲ㇾ入二御本丸一、同日被ㇾ爲ㇾ入二西丸一、同日可ㇾ奉ㇾ稱二御縁女樣一旨、同六年十一月廿七日御本丸へ御引移、同七年十一月十五日、近衞右大臣經熙公御養女、御名寔子ト奉ㇾ稱、同八年四月十八日御結納被ㇾ爲ㇾ受、寛政元年二月四日御婚禮、當日より御臺樣さ奉ㇾ稱、

〔將軍徳川家禮典附錄十一〕天保十二辛丑年十一月廿一日右大將樣〇徳川家定御婚禮之次第

有姫御方ハ、鷹司准后殿〇政熙姫君、鷹司關白殿〇政通御養女、文政六未年九月五日御誕生、天保二卯年九月十五日御下向、御本丸へ御著輿、

〔今日抄孝明一〕嘉永二年七月、前關白忠良〇一條養二菊亭藤原公久女一爲ㇾ子、嫁二幕府世子權大納言一、〇徳川家定幕府遣二甲斐守渡邊輝綱等一迎ㇾ之、去歲鷹司氏卒、故再娶、

〔言成卿記〕安政三年七月十九日、今度松平薩摩守殿〇島津齊彬息女篤姫御方、右府殿〇近衞忠熙被ㇾ成二御養女一、篤君御方輿被ㇾ稱、大樹公〇徳川家定御縁組、御願之通被二仰出一候、仍御吹聽御使を以被二仰入一候、此段御門流一統江も御通達、〇中略十一月十二日、家公〇山科言知被二仰曰一、陽明門流御廻文御到來、廣橋觸出云々、右府公御養女篤君御方、當月七日御廣敷御入輿、十一日比御結納、十二月十七日頃、御婚禮御内約之由御風聽云々、十二月十九日、件篤姫君、稱二姫君一之旨、過日雜掌觸來云々、位記拜領之後、稱二御臺一歟、件姫君薩州娘、陽明右府公御養女云々、

〔言成卿記〕弘化三年十一月一日、今日陽明内府公〇近衞忠熙御養女靜君、眞實ハ東本願寺門主(光朗)之娵云々廣幡三位中將忠禮妻縁、内々引越、母皐君方へ引越云々、依二亮陰一也、門前通行、爲二馳走一手桶等出云々

〔伊勢物語上〕むかし男、むさしの國までまどひありきけり、さてその國にある女をよばひけり、父はこと人にあはせんといひけるを、母なんあてなる人に心付たりける、父はなほ人にて、母なん藤はらなりける、さてなんあてなる人にと思ひける、此むこがねによみておこせたりける、すむ所なんいるまのこほりみよしのゝ里なりける、

みよしのゝたのむのかりもひたぶるに君がかたにぞよるとなくなる

むこがねかへし

わが方によるとなくなるみよしのゝたのむのかりをいつかわすれん

〔撰集抄九〕行賀大德發心事

御堂の大殿〇藤原道長の二郎の御子、高松ばらの馬頭顯長〇長恐信誤と申人いまそかりける、〇中略御堂の御子にておはしませば、御もてなしもさこそ侍りけめ然あるに但馬守高雅と云人、大殿に夙夜して、忠勤人にことなりければ、殿さりがたく思し召れ侍りけるまゝに、御子の馬頭を聟に成たまへと仰られ侍りけるを、我身いやしと申ながら、忝き御子の末葉とまかり成て、心には竊に氏の長者にあがらんことを思侍り、されば受領を父と賴侍らんこと何かと度々辭し聞え給ひけれ共、殿すべて其もちひおはしまさねば、力なく月日を送り給けるなんめり、或時此馬頭、閑に思給へりけるは、父の命にしたがはんとすれば、此世は徒に成なん、我志をとげんとすれば、不孝の身に成ぬべし、しかじ飾をおろして、一筋に後世の良因を結ばんと思ひなり給ひて、手づからもとゞりを切、比叡の山によぢのぼりて、僧賀上人の折節山へ出られける室に尋至り給て、受戒なんどし給へりける也、

〔陰德太平記十八〕陶隆房相良武任不和之事

武任、〇中略隆房ト中違テハ、行末身ノ大事ニ可レ極ト思シカバ、如何モシテ陶五郎長房ヲ聟ニ取テ

親シク成リ、我身根ヲ深スル謀ヲナサバヤト巧ミ、義隆卿〈○大内〉ヘ、内々此事ヲゾ歎キ申ケル、義隆卿、此儀如何可有ト思案シ煩ヒ給、分明ノ返答モナカリケレバ、武任ヤガテ義隆卿ノ御臺所ノ乳人、新少將ト云女房ニ、吾娘齒黑メノ契約シテ、イト懇ニ云昵ビ、扨其後新少將ヲ頼テ、御臺所ヘカクト申入、新少將能ニ執申ケル故、御臺ヨリ義隆卿ヘ、武任ガ望申所、實左モ可有ト覺候、能ニ計セ給候ヘト宣ケレバ、義隆卿頓テ領掌シ給ケリ、〈○中略〉陶五郎長房モ、内々彼女ノ事傳聞、哀此女ヲ得テシ哉ト思ヒ、女モ此男ヲコソトゾ思ケル、〈○中略〉其後義隆卿ヨリ、杉豐後守、靑景越後守ヲ以テ、陶隆房ヘ、長房ニ未ダ妻室ナシ、相良遠江守ガ娘ヲ嫁娶ノ契約セラレ候ヘカシ、隆房、領掌ニ於テハ、武任ニ下知スベキ也ト有ケレバ、隆房、兩使ニ向ヒ、有難キ上意ニ候、長房ニ申聞セ、重テ御返事可申上ニテ候トサラヌ體ニハ言ケレ共、思内ニアレバ、色忽外ニ顯レテ、兩眼ニ千入ノ紅ヲ淋ギ、忿レル氣色、藏スニ所ナシ、暫有テ吐息二ツ三ツ突出シ、齒嚙セラレケルガ、堪兼テ又兩使ニ向ヒ、長房ガ婚姻ヲバ、當家ニ於テハ、杉、内藤、右田等ノ大身ノ家老衆ナドヲコソ仰モ可被合ニ、アノ坊主落ノ相良ガ娘ヲ長房ガ妻ニトノ上意ハ、案ノ外ナル御事哉、舅ハ親ニテハ候ハズヤ、長房ガ親ニ、武任ハ過分ニ候ヤ、不足ニ候ヤ、各ハ如何思召レ候ヤ、御分別ノ所承度コソ候ヘト、疊ヲ丁々ト打テ、サモ高聲ニ吐散シ、兩眼ヨリ泪ヲ波羅々々ト流サレケレバ、兩使モ暫ハ何ノ返答モ無リケルガ、良有テ隆房ノ宣所、至極ノ理ワリニ候、サレ共屋形モ、先隆房ノ内意ヲ聞召レン迄ニテコソ候ヘ、ソレヲ加程ノ御立腹ハ、以ノ外ノ御事ニテ候、餘リニ慮リ短キ仰コソ、サシモノ隆房ノ仰トモ覺エ候ハヂ、能々御思惟候ベシトテ退出ス、此事イツシカ武任ガ方ヘ泄聞エテ、武任申ケルハ、長房ノ舅ニ、武任不足也ト賤シメ給事、陶ハ當家ノ家ノ子ナレバ、宣所尤左モ可有、然共婚姻ノ道ハ、強チ貴賤尊部ヲ不撰、其故ハ、上一人ノ皇妃ニハ、赤帝王ノ皇女コソ立ベキナレ共、代々大臣納言ノ御息女、女御入内有テ、後ニハ中宮ニ立給フ、〈○中略〉近クハ屋形ノ御母公ハ、内藤殿ノ御息女也、義

婚嫁擇富貴家

與公ノ御爲ニハ、正シク臣下ノ息女ニハ非ヤ、相良ハ筑前ノ國人、公方ノ直ノ御家人ナレ共、時ノ盛衰ニ因テ、近代大内ノ臣ノ樣ニナレリ、陶ハ代々大内ノ家ノ子ナレバ、種姓、陶相良、何カ勝レル、大内ノ家人陶ガ舅ニ、公方ノ御家人ノ庶流相良武任ハ過分ニハ有共、不足ニハ候マジ、〇中略此武任一旦衣ヲ墨ニ染ル共、代々弓馬ノ家ニ生レタレバ、還俗ノ某、勇モ智モ隆房ニ至劣ル事候ハジト腹立スレバ、是ヲ又或人隆房ニ告テケリ、是ヨリシテ陶相良、互ニ虎狼ノ心ヲ挾ミ、如何ニモシテ讐ヲ報ゼント思ケルコソ、大内家、永ク斷絶スベキ鑰倪ナレ、

〔大鏡 五太政大臣兼通〕閑院の大將殿〇藤原朝光は、のちにはこの君達のは、をばさりて、びはの大納言のぶみつの卿のうせ給ひにしのち、そのうへのさしおいて、かたちなどわろくおはしけるにや、ことなる事きこえ給はざりしをぞすみ給ひし、さくにつき給へるさぞ世人申し、さてよおぼえもおこり給ひにしぞかし、〇中略このいまのうへの御もとには、女房卅人ばかりもからぎぬきせて、えもいはずさうぞきて、すゑならべて、しつらひありさまよりはじめて、めでたくしたて、、かしづききこゆることかぎりなし、大將ありきてかへり給ふをりは、冬は火おほらかにうづみて、たきものおほきにつくりて、ふせごうちおきて、けに著たまふ御ぞをば、あた、かにてぞきせたてまつり給ふ、すびつに、しろかねのひさげ廿ばかりをすゑて、さま／＼のくすりをおきならべてまゐり給ふ、又ね給ふた、みのうはむしろに、わたいれてぞしかせたてまつらせ給ふ、ね給ふさきには、大なるのしもちたる女房三四人ばかりいできて、かのおほとのごもるむしろをば、あた、かにのしなで、、ぞねさせたてまつり給ふ、あまりなる御よういなりしかば、おほかたのしつらひありさま、女房のさうぞくなどはめでたけれども、この北方は、ねりいろの、きぬのわたあつきふたつばかりに、しろばかまうちきてぞおはしける、さし四十よばかりなる人の、大將にはおやばかりぞおはしける、色くろくて、ひたひにはながたうちつきて、かみちゞけたるにぞおは

しける、〇中略さばかりの人の北方と申すべくもみえざりけれど、もとの北方しげあきらの式部卿の宮の姫君、ぢやうくわでんの内侍のかみの御はら、やむごとなき人と申ながら、かたちありさまめでたくおはしけるに、かゝる人におぼしうつりて、さり事らせ給ひけむほどおもひ侍るに、たゞ。さ。く。の。あ。り。て。かくもてかしづききこゆるに、思ひのおはしけるにや、

〔源平盛衰記 三十九〕時頼横笛事

三條齋藤左衞門大夫茂頼ガ子ニ、齋藤瀧口頼時入道ト云者也、彼時頼ハ小松大臣殿〇平重盛ニ候ケルガ、高倉院御位ノ時、建禮門院后宮ニテ渡ラセ給ケルニ、二人ノ半物有、横笛刈萱トゾ云ケル、共ニミメ形類ナク、心ノ色モ情アリ、刈萱ヲバ越中前司盛俊相具シケリ、横笛ト云ハ本ハ神崎遊君長者ノ娘也、大方モ無雙ノ能者、今樣朗詠ハ所ノ風俗ナレバ云ニ及ズ、琴琵琶ノ上手歌道ノ方ニモ勝タリ、太政入道福原下向之時召具タリケルヲ、女院未中宮ニテ渡ラセ給ケルトキ被進タリ、小松内府如何思ケン、横笛ト名ヲ付ラレタリ、時頼人シレヌ見參シテ白地ト思ケレ共、松蘿ノ契色深、蘭菊ノ情匂細ヤカニシテ志切ニシテ思ケル、父此事ヲ聞テ瀧口ヲ呼ツヽ、横笛ハ當時殿上ノ官女也、ソレニ汝ガ契ヲ結通フト云事世普ク披露アリ、此事若達上聞珍事出來リナン、加樣ニ尾籠ナランヲ其親トシテ不教訓之條奇怪也ト被仰下ハ、身ニ取テ一期ノ大事、可失面目、其上憑。シ。キ。人。ノ。聟。ニ。成。テ。世。ニ。立。ベ。キ。振。舞。モ。有。ベ。シ。、加樣ノ獨人ヲ相憑テハ、遂ニイカナルベキゾ、由ナキ事也ト樣々云ケレドモ、可然先世ノ契リニヤ、ツユ難忘カリケレバ、夫母ノ諫ニモカヽハラズ、イトヾ志淺カラズ通ケレバ、父茂頼重テ時頼ヲ呼向ヘテ、樣々教訓シテ、所詮不隨親命者不孝也ト云ケレバ、仰畏テ承候ヌト申テ父ガ前ヲ立、〇中略生年十八ノ歳菩提心ヲ發シツヽ、嵯峨奥法輪寺ニシテ出家シ、法名阿淨ト名ヲ付テ行澄テ居タリケリ、

〔太平記 十五〕加茂神主改補事

基久〇加茂神官ニ一人ノ女アリ、〇中略其比先帝ハ、未ダ師宮ニテ、幽カナル御棲居也、是ハ後宇多院第二ノ皇子後醍醐天皇ト申シヽ御事也、今ノ法皇〇後伏見ハ、伏見院第一ノ皇子ニテ、既ニ春宮ニ立セ可ㇾ給ト云時メキ合ヘリ、此宮々、如何ナル玉簾ノ隙ニカ被二御覽一タリケン、此女最アテヤカニ靡シトゾ被二思食一ケル、サレドモ混スラナル御業ハ如何ト思食煩テ、〇中略イヒシラヌ御文ノ數、千束ニ餘ル程ニ成ニケリ、女モ最物ワビシウ哀ナル方ニ覺エケレドモ、吹モ定ヌ浦風ニ、靡キハツベキ煙ノ末モ、終ニハウキ名ニ立ヌベシト心強キ氣色ヲノミ關守ニナシテ、早三年ヲ過ニケリ、父ハ賤シテ母ナン藤原ナリケレバ、無二止事一御子達ノ御覺ハ等閑ナラヌヲ聞テ、ナドヤ今迄御イラヘヲモ申サデハヤミニケルゾト最痛ウ打侘ブレバ、〇中略女云バカリナク打侘テ、イザヤ我トハ爭デカ分ク方可ㇾ侍、タヾ此度ノ御文ニ、御歌ノ最憐レニ覺エ侍ラン方ヘコソ參ラメト云テ、少シ打笑ヌル氣色ヲ、二リノ媒、嬉シト聞テ、急ギ宮々ノ御方ヘ參テ、カクト申セバ、頓テ伏見宮ノ御方ヨリ、〇中略

思ヒカ子云ントスレバカキクレテ泪ノ外ハ言ノ葉モナシ、ト被ㇾ遊タリ、此上ノ哀、誰カト思ヘル處ニ、師宮御文アリ、〇中略

數ナラヌミノヽヲ山ノ夕時雨強面松ハ降カヒモナシ、ト此御歌ヲ見テ、女ソヾロニ心アコガレヌト覺テ、手ニ持ナガラ詠ジ伏タリケレバ、早何レヲカト可ㇾ云程モナケレバ、師宮ノ御使、ソヾロニ獨笑ミシテ歸リ參ヌ、頓テ其夜ノ深ケ過ル程ニ、牛車サハヤカニ取マカナヒテ御迎ニ參リタリ、瀧口ナリケル人、中門ノ傍ニヤスラヒカ子テ、夜モハヤ丑三ニ成ヌト急ゲバ、女下簾ヲ褰サセテ被二扶乘一トシケル處ニ、父ノ基久、外ヨリ歸リマウデ來テ、是ハイヅ方ヘゾト問ニ、母上師宮召有テト聞ユ、父痛ク留テ、事ノ外ナル態ヲモ計ヒ給ヒケル者哉、伏見宮ハ、春宮ニ立セ給ベキ由御沙汰アレバ、其御方ヘ參テコソ、深山隱ノ老木迄モ、花サク春ニモ可ㇾ逢ニ、行末トテモ憑ミナキ師

婚嫁擇才[illegible]

宮ニ參リ仕ヘン事ハ、誰ガ爲トテモ可待方ヤ有ト云留メケレバ、母上ゲニヤト思返ス心ニ成ニケリ、瀧口ハ角トモシラデ、簾ノ前ニヨリキテ、月ノ傾キヌル程ヲ申セバ、母上出合テ、只今俄ニ心地ノ例ナラヌ事侍レバ、後ノ夕ベヲコソト申テ御車ヲ返シテケリ、帥宮、カヽル事侍トハ露モオボシヨラズ、サノミヤト今日ノ憑ミ昨日ノ憂サヲ替テ、度々御使者有ケルニ、思ノ外ナル事候テ、伏見宮ノ御方ヘ參リヌト申ケレバ、オヤシサケズハ、東路ノ佐野ノ船橋サノミヤハ堪テハ人ノ戀渡ルベキ、ト思ヒ沈マセ給ニモ、御憤ノ末深カリケレバ、帥宮御治世ノ初、基久指タル咎ハ無リシカドモ勅勘ヲ蒙リ、神職被解テ貞久ニ被補、

〔人鏡論〕津の國難波の里に、德大夫とて賤きもの有、あくまで富さかえけるが、男子五人女子三人有ける、かの德大夫云けるは、嫡子の太郞は總領なれば、難波の里の住人となさむとて、太郞一人に、家財田畠殘らずゆづり與ふ、嫁をば位高き人の娘をとらんとて、京なる人を賴て、四位の殿上人なりし人のむすめをむかへとりたる、○中略むすめ三人をば、一人は北國大名の室となり、一人は何の大納言とやらん申御方の內室なり、一人は河內國主判官の御前になる、倩此事を思見るに、彼德大夫が富貴より事起りぬ、

〔十訓抄十　一〕小野篁、三守の大臣に、その娘を望ける文をもて、手づからわたりけるとかや、其詞に、

才非馬卿、彈琴未能、身異鳳史、吹簫猶拙、

大臣是を見て、感じて聟になしてけり、

〔本朝文粹書七〕奉右大臣三守藤原　野相公

學生小野篁、誠惶誠恐謹言、竊以、仁山受塵、沼漢之勢蹇峙、智水容露、浴日之潤良流、是以尼父結好於縲紲之生、呂公附嬪於驛亭之士、剛柔之位、不可得失、配偶之道、其來尙矣、傳承賢第十二娘、四德無雙、六行不闕、所謂君子之好仇、良人之高媛者也、篁才非馬卿、彈琴未能、身非鳳史、吹簫猶拙、獨對

寒窻、悵日月之易過、孤臥冷席、歎長夜之不曙、幸願蒙府君之恩許、共同穴偕老之義、不堪宵蛾拂燭之迷、敢切朝蕣向曦之務、篁誠惶誠恐謹言、

年月日

〔古事談 六 亭宅諸道〕延喜御時、相人相者參來、(○中略)貞信公(○藤原忠平)爲淺﨟公卿、遙離列候給、相者進申云、彼候人、才能心操形容旁叶國定久奉公歟、寬平法皇(○宇多)聞食此事、(○中略)以第一女王(○源順子)於朱雀院西對有嫁娶之儀、于時貞信公大辨參議云々、法皇同御于東對云々、

〔陸奧話記〕頼義者河内守頼信朝臣子也、(○中略)上野守平直方朝臣感其騎射、竊相語曰、僕雖不肖、苟爲名將後胤、偏貴武藝、而未曾見控弦之巧如卿能者、請以一女爲箕箒妾、則納彼女爲妻、令生三男二女、長子義家、仲子義綱等也、

〔源平盛衰記 三十五〕巴關東下向事

畠山(○重忠)半澤六郎ヲ招テ、(○中略)木曾ノ內ニハ、今井、樋口、楯、根井、此等コソ四天王ト聞シニ、是ハ今井樋口ニモナシ、サテ如何ナル者ヤラント問ケレバ、成淸、アレハ木曾ノ乳母ニ、中三權頭ガ娘巴ト云女也、ツヨ弓ノ手タリ、荒馬乘ノ上手、乳母子ナガラ妾ニゾ、內ニハ童ラ仕フ樣ニモテナシ、軍ニハ一方ノ大將軍シテ、更ニ不覺ノ名ヲ不取、今井樋口ト兄弟ニテ、怖シキ者ニテ候ト申、(○中略)世靜テ右大將家(○源頼朝)ヨリ被召ケレバ、巴則鎌倉ヘ參、主ノ敵ナレバ心ニ遺恨アリケレ共、大將殿モ女ナレ共無雙ノ剛者、打解マジキトテ、森五郎ニ被預、和田小太郎是ヲ見テ、事ノ景氣モ尋常也、心ノ剛モ無雙也、アノ樣ノ種ヲ繼セバヤトゾ思ケル、明日頸切ベシト沙汰有ケルニ、和田義盛申預ラント申ケルヲ、女ナレバトテ心ユルシ有マジ、正シキ主親ガ敵也、去剛ノ者ナレバ、隙モアラバ伺思心有ラン、叶マジト被仰ケルヲ、三浦大介義明ガ、君ノ爲ニ命ヲ捨、子孫眷屬、二心ナク君ヲ守護シ奉テ、年來奉公シ奉、爭思召忘給フベキ、義盛相具シテ候共、僻事更ニ在マジキト樣々申立

預ニケリ、郎妻ト憑テ男子ヲ生、朝比奈三郎義秀ト八是ナリケリ、

〔吾妻鏡十七〕正治三年(〇建仁元年)六月廿八日丙午、藤澤四郎清親、相具囚人資盛姨母(號二板額一女房)參上、其疵雖未及平減、相構扶參云云、左金吾(〇源頼家)可覽其體之由被仰、仍清親相具參御所、左金吾自簾中覽之、御家人等群參成市、重忠、朝政、義盛、能員、義村已下候侍所、通其座中央、進居于簾下、此間無聊諂氣、凡雖比勇力之丈夫、敢不可恥對揚之粧也、但於顏色殆可謂陵園妾云云、　廿九日丁未、阿佐利與一義遠主、以女房申云、越州囚女被定既配所者、態欲申預云云、金吾御返事云、是爲無雙朝敵、殆望申之條有所存云云、阿佐利重申云、全無殊所存、只成同心之契約、生壯力之男子、爲奉護朝廷扶武家也云云、于時金吾、件女面貌雖似宜、思心之武、誰有愛念哉、而義遠所存、已非人間之所好由、頻令嘲哢給、而遂以免給、阿佐利得之、下向甲斐國云云、

〔陰德太平記二十三〕吉見賴信與陶道麒刺違事

爰ニ吉見大藏大輔源正賴ト云人有、(〇中略)嫡子賴信、勇一途ハ、其比西國ニ又ナキ人也ケレバ、大内義與、嫡女ヲ以テ妻セ、聟引出物ニ金銀至寶ヲ盡サレケルガ、猶モ飽ヌ心ニヤ、吉賀一千貫ヲゾ引レケル、

〔雨窻閑話下〕小野木家妻女幷かちんの事

一細川幽齋侯の和歌の門人に、小野木縫殿助言卿と云人あり、丹州福智山の城主たり、(〇中略)此縫殿助、始には小身にて、年若の時よりして和歌を好めりや、妻を設けんとするに、うたに志ある者を妻に定めんとて、品々求められけるに、其節古田織部正妹、歌に志ざし厚きよし聞及ばれ、媒して緣をむすばれける、

〔甲子夜話十八〕昔ノ緣組ハ、今トハ心入レ、ハルカニ違ヘルモノナリ、阿倍四郎五郎(二千石)ガ先祖ハ、加藤主計頭清正ノ婿ナリ、今モ其家ニ當時ノ物件アリ、大小不釣合ノ事ナルガ、定メテ清正ヨリ

婚嫁傳事

阿部ノ武勇ニメデヽ緣組セシナルベシ、又偃武ノ後ノコトナルガ、加州前田家ヨリ四辻家納言ノ息ニ緣組アリ、是ハ加侯、京都ニテ、四辻幼息ノ樂舞ヲ見テ、其容止ノ閑雅ナルヲ稱スルノ餘リ、結姻ヲ申込レシトナリ、

〔續近世叢語七〕賢媛

百合住京郊葛原、有一女名町、百合愛其有才情、常欲爲得一佳婿、無適意者、有池生者、又住葛原、賣書畫爲活、貧不自給、人皆易之、百合獨心奇之、終以女妻之、池生、後以書畫成名海內、稱大雅先生、町號玉瀾、與夫齊名、

〔日本書紀二十四皇極〕三年正月乙亥朔、中臣鎌子連議曰、謀大事者、不如有輔、請納蘇我倉山田麻呂長女爲妃、而成婚姻之昵、然後陳說、欲與計事、成功之路、莫近於茲、中大兄聞而大悅、曲從所議、中臣鎌子連、卽自往謀要訖、而長女所期之夜、被偸於族、(族謂身狹臣也)由是倉山田臣、憂惶仰臥、不知所爲、少女怪父憂惶、就而問曰、憂惶何也、父陳其由、少女曰、願勿爲憂、以我奉進、亦復不晚、父便大悅、遂進其女、奉以赤心、更無所忌、

〔源平盛衰記四十四〕時忠卿罪科附時忠聟義經事

時忠卿、子息讃岐中將時實モ、判官(○源義經)ノ宿所近クオハシケリ、心猛人也、カホドニ成ヌル上ハ思切ベキニ、尙モ命ノ惜ク思ケルニヤ、中將ニ語テ、如何ガハスベキ、散スマジキ狀共ヲ入タル皮籠ヲ一合、判官(○源義經)ニ取レタリ、彼狀共、鎌倉ニミエナバ、損ズル者モ多、我身モ難遁死ト歎給、中將計申、判官ハ大方モ情アル上、女ナドノ打堪歎事ヲバ、モテハナレズト承侍、懸ル身々ト成ヌレバ、非可苦、親ク成給ヘカシ、サラバナドカ情ヲモカケザラント云、時忠卿涙ヲハラ〳〵ト流シテ、我世ニ在シ時ハ、女御后ニモト思テ、ナミ〳〵ノ人ニ見セントハ不思トテ、袖ヲ顏ニ當給ヘバ、中將モ同涙ヲ流シテ、今ハ云ニ甲斐ナシ、只疾計ヒ給ベシト宣ヒケレバ、當時ノ北方帥典侍ノ腹ニ、今年

十八ニナル姫君ノ不レ斜厳(ウツクシキ)ヲゾ中將ハ申ケレ共、其ヲバ猶劣ク覺シテ、先腹ニ二十八ニ成給ヘルヲ、内々人シテ風(ホノ)メカシケレバ、判官モ可レ然トテ迎取ヌ、○中略中將ノ計、少シモ不レ違、ヤヽ相馴テ後、彼文箱ノ事申タリケレバ、判官封ヲ不レ披返送ケリ、大納言○忠時大ニ悦テ、坪中ニシテ燒レ之、何事ニカ有ケン、惡事共ノ日記トゾ聞エシ、

〔三好別記〕永祿十年十月十日、○中略篠原駒雲、阿波淡路の勢三千にて上洛し、三好の諸將にちからを合、河内のかたのに陣をとつて、松永と義繼河州若江城主との通路をとりきりければ、兩將迷惑して、信長公にてうじ合、義昭將軍を京都へまねき入奉る、其時信長公の計策にて、將軍の妹君を義繼に嫁せしめ、兩方遺恨なきよしを諸人にすゝめし、三軍を調和し、大功を立らると云々、

〔甲陽軍鑑十〕永祿八年乙丑九月九日に、尾州織田信長公より、織田掃部といふ侍を甲府へ御使にこし給ひ、信玄公に仰らるゝは、恐がましき申事に候へども、信長事、○中略大方今明年の間に、美濃國も信長支配に仕べく候、さ候はゞ、信玄公御持の木曾郡とうちつゞき候間、在々の往來も、たがひに申事なきために、伊奈の四郎勝頼公へ、信長養子のむすめを進じ度候、此女子は、信長ちゝ、彈正忠存生の時、美濃國ない木勘太郎と云ふ侍を聟に仕り、則信長ためには妹むこ也、むかしより美濃國ない木の城に居住候なり、彼者むすめを幼少より信長養ひ置、姪女と申せ共、實子よりはいたはり候、信長息女も候へども、我等當年三十二歳なれば、總領の男子さへ十歳のうちそとにて、廿歳に成給ふ四郎殿内方になさるべき息女をもち申さず候と、種々の信長申されやうありて、乙丑霜月十三日に、ない木殿むすめ、信長姪女を養親に成て、伊奈の高遠へ御こし入、四郎勝頼公は、尾州織田信長の聟に成給ふなり、

〔關八州古戰錄十〕上杉謙信逝去附春日山城動亂事

喜平次景勝、全輝虎ノ遺跡ヲ相ツギ、當弓矢盛ナル織田武田北條三家ヲ敵ニ受、諸方ヘ軍ヲ出す

ン事、景勝ノ弓矢ニ於テ危キ配立、老臣越後赤田ノ城主齋藤下野守朝信秘計ヲ廻シ、甲陽ノ奸臣長坂左衛門入道長閑齋、跡部大炊介信春ニ、南鐐二千枚ヅヽ與ヘテ賺シ拵ヘ、勝頼ヘモ銀子一萬枚贈、心ヲ攪、景勝ト和ヲ爲シテ、東上野ノ抱地ハ、景勝心次第ニ支配スベキ旨、油川刑部大輔信守ガ女ノ腹ニ產レシ菊媛丸ト云勝頼ノ妹ヲ、景勝ノ北方ニ緣約シ、同乙卯〇天正七年ノ七月廿日、越後ヘ入輿アリ、此ニ於テ越甲、先ハ無事ナリ、

〔關八州古戰錄七〕太田三樂岩築城離散附源五郎氏資戰死事

同ジ歳〇永祿十二年ノ五月、小田原萬松軒〇北條氏康法花ノ僧ヲ使价トシテ岩築ノ城ヘ遣シ、太田三樂齋ヲ賺サレケルハ、〇中略所詮向後和親ヲナシ、無二ノ入魂ヲ希フ處ナリ、左アラバ嫡子源五郎ヘ家督ヲ讓リテ、三樂ハ隱居アラレ、心安餘年ヲ送ラレンカ、然ラバ氏政ノ妹ヲ以テ源五郎ヘ娶セ、北條一家後栖ト成テ、永ク社稷ヲ保護セラレン樣ニ執計フベキ條、枉テ此義ニ同心アルベシト兩度ニ及テ申送ラレケレバ、三樂モ知慮深キ男ナル故、〇中略一先和平ニシテ後日ノ術ヲハカランニハト、多年ノ本意ヲ抛テ、サラバ氏康ノ旨ニ應ズベキ由返答ニ及ビケレバ、萬松軒父子、大ニ歡ビ、頓テ吉日良辰ヲ撰テ息女後長林院ト號スヲ岩築ノ城ヘ送リ、婚姻ノ禮ヲ修シ、千龜萬鶴ノ祝ヲナシテ、殊更ニ懇情ヲ加ヘラレケレバ、實ニ無爲トゾ、見エタリケル、

〔豆相記〕北條氏盛姉、爲今川義忠夫人、義元妹爲氏康室、故今川北條世結婚親、而久爲親戚、所以兩家和睦異他、而義元氏康不和也、故義元求救於武田信玄、而以駿甲之勇卒、對營北條富士大宮、而于茲有日矣、於此今川義元以駿陽臨濟寺長老雪齋、言結離於兩家、終二家和睦、此時要約、以信玄女妻氏康長子氏政、以氏康女妻義元長子氏眞、以義元女妻信玄長子義信云々、

〔里見軍記〕小田原〇北條氏ハ、〇中略里見ト和睦シ、我娘ヲ義頼ノ妻トセバ、緣者闕クナリ、末ノ爲ニモ成ント思ヒ、使札認、正月中旬ニ和睦ノ使者ヲ遣シケル、里見モ兼々思ニハ、カホド衰タル上ハ、萬喜

始、或ハ他國ヨリ寄來ランモ不レ知、左モアル時ノ爲ニハ縁者ナリ、味方ノ廣コソヨケレトテ、相違ナク返書ニ使者ヲ相添テ遣サレケル、氏政ハ悅、六月中旬ニ岡本ニゾ使者ヲ立、追付娘ヲ遣サントテ、先祝儀ヲ遣ケル、已ニ吉日ヲ定テ、天正元癸酉六月廿八日ニ、義賴婚禮ナサレケリ、

〔武將感狀記 五〕尾張ノ國主織田上總介信長ハ、美濃ノ國主齋藤山城守道三ト地ヲ爭ヒテ相戰ヘドモ常ニ克ズ、信長コレヲ憂ヘテ、道三ノ君臣ヲ離スベキ謀ヲゾ運ラサレケル、先兩家老ニ就テ使者ヲ遣シ、我ハ道三ノ敵ニアラズ、道三ノ濃姬ヲ我ニ許サレバ、嫁娶ヲ調ヘテ旗下ニ屬シ、難ニオモムキ危キヲ救フベシト云送ラレケレバ、道三同心セラル、信長濃姬ヲ迎テ後、一年ホド過テ、濃姬ノ熟睡スルヲ伺テ、ヒソカニ興テ外ニ出、曉ニ至リテ歸ルコト一月計ナリ、濃姬コレヲ怪ミテ君忍テ心ヲ通ハシタマフ者アラバ、アラハニノ玉ヘ、何ゾ身ヲ窶シテ深クツヽマセ玉フゾヤ、妾イサヽカ妬心ハ侍ラヌ物ヲ、此ゴロノ御氣色イブカシクコソト恨顏ナレバ、〇中略信長セン方ナキ體ニモテナシ、城州ト我トハ深キ仇ナリ、一旦和圖シタルハ我ガ本意ニアラズ、城主ノ兩家老我ト心ヲ合セ、城州ヲ殺害シ、子丑ノ間ニ火ヲ揚ベシト固ク約束シタリシガ、早五六十日ニ及テ、每夜星ヲイタヾキ霜ヲ履デコレヲ望メドモ、未揚ラザルハ、定テ其便ヲ得ザルナラン、火ノ揚ルト均ク、軍兵ヲ卒シテ、美濃ニ亂入テ其地ヲ取ベシ、アナカシコ、口ヨリ出ス事ハサテ置ヌ、心ニモ思フベカラズトテ、濃姬ノ方ヨリ使モ文モ守者ヲ付テ止ラレヌ、兩家老ニハ、屢使ヲツカハシ書ヲ送リテ、人ノウタガヒヲ起サシム、尾張ノ將士ニハ、深夜俄ニ師アラン、用意シテ下知ヲマテト令セラル、道三尾張ニ入置タル間者、コレヲ告グ、道三何事ナラント思フ處ニ、五七日スギテ、守者イツハリテ少緩弛ス、濃姬ソノ隙ヲウカヾヒ、具ニ右ノ事ヲ書テ告タリケレバ、道三怒リテ、兩家老ヲ斬罪ニ行ハル、是ヨリ道三ノ鋒稍衰ヌ、

〔總見記 六〕淺井備前守長政爲二御緣者一事

織田上總介信長公、其比岐阜ニマシ〳〵テ、天下一統ノ大義ヲ心ザシ、○中略長政ニイマダ妻室ナシ、能キ時節ナレバ、備前守ヲ某ガ妹聟ニシテ味方ニセント思フナリ、誰ニテモ此内ニ、淺井家ニ傳手アル者ハ媒人セヨト仰セケレバ、諸人皆此智謀ヲゾ感信シケル、○中略淺井父子家老ヲ集メ、又此事ヲ相談ス、久政申ス樣、信長ト一味シ、承禎ヲ押倒ス程ナラバ、即時ニ都へ攻入テ京都ニ旗ヲ立、天下ノ政事ヲ助ケン事ハ、鏡ニカケタル如クニ見エタリ、然レドモ斯ニ一ツノ難題アリ、○中略子々孫々、朝倉ニ對シテ弓引事有マジキト約束ヲ堅メシ所ナレバ、イツトテモ朝倉ニ向ヲ敵對ヲナシガタシ、然ラバ信長朝倉ト鉾楯ノ時ハ、當家ソレヲ如何トスベキヤト案ジ煩ヒ申サレケリ、家臣中島日向守進ミ出テ、御諚尤ニ候間、只今其カタメヲナサレ、信長同心ナラバ、約束ノ上ニテ御緣組被究可然哉ト申ス、皆々衆中此儀ニ同ジ、安養寺三郎左衞門河毛三河守兩人ニ委細ヲ申含メ、信長ヨリノ兩使者ニ指添テ、又岐阜へ指遣シ、此旨一々申シ達ス、信長頓テ淺井家ノ兩使者ニ御對面有リ、委細ヲ聞召、被仰出ケル樣ハ、淺井家へ我等方ヨリ望テ緣者ニナル上ハ、其方御所望ノ事、イト安キ儀ナリ、我等一身ノ微力ヲ以テ、ダトヘ天下ヲ切從へ候共、朝倉義景ニハ、少モ異變申ス間敷ナリトノ給、○中略右ノ趣相違有之間敷由、即時ニ御誓詞ヲ書セラレ、兩使ノ者ニ被相渡、其後樣々御馳走ノ御饗應アリ、御盃ヲ被下ケル時、安養寺三郎左衞門ニハ長光ノ御大刀、河毛三河守ニハ國次ノ御脇指ヲゾ下シ給リケル、兩人モ種々忝由御禮申シ、小谷へ歸テ、淺井父子ニ御誓詞ヲ見セ申シ、口上ノ段々殘ナク申聞セケレバ、久政長政大ニ悅ビ、其外一門家老ノ面面、此上ハ子細アラジト喜悅ノ眉ヲヒラキケリ、扨モ信長公ハ、御妹子數多有リケルニ、御市ノ御方ト申ジケルヲ、今年永祿十一年四月下旬ニ、淺井方へ御輿入有テ、婚姻ノ禮儀ヲ調ラレケリ、御祝儀ノ品々、諸事ノ御仕立、結構ニ被仰付、專ラ美麗ヲ盡サレタリ、其上オイチノ御方ハ、近國無雙ノ美人ノ由聞エアリ、又信長ヨリ長政ヲ御崇敬有テ、諸事御舍弟ノ樣ニ御シタシミアリ、御一門

御家老下々ニ至ル迄、皆々陰ニテモ備前守殿ト稱シ申シテ渴仰致シケル程ニ、後ノ事ハ未知、皆人アハレ淺井殿ハ、大果報ノ人哉トゾ申合ケル、○中略御婚禮ノ時、不破河内守内藤勝助ヲ御輿添ニ被遣、藤掛三河守ヲバ、御市ノ御方ノ執事ニ被仰付ケリ、

〔勢州四家記〕一大川内籠城五十日計の時、信長公織田掃部助を使者にて和睦の儀あり、城よりは朽木隼人祐を使として、信長公の次男茶筌丸十二歲なるを、具教卿○北畠の嫡子信意之養子として和睦せらる、則具教卿の聟に定られ、織田掃部助をもりにつけ、其外生駒半左衞門、城戸内藏助、天野佐左衞門、池尻平左衞門、津田源三郎、土方喜三郎等の侍共つけおかる、

〔陰德太平記十六〕元春娶熊谷信直之女事

毛利元就、兒玉三郎右衞門就忠ヲ召テ、吉川伊豆守森脇和泉守ヨリ、元春妻女ノ事ヲ願フ、誰ヤノ人ノ娘カ、婚姻ヲ可結好逑モ哉ト思案ヲ廻スニ、指當テ思設ル所ナシ、汝先元春ノ内意ヲ伺聞候ヘト宣ケレバ、就忠畏テ、軈テ元春ヘ參テカクト申ケレバ、元春聞給テ、吾妻女ニ望ナシ、兎ニモ角ニモ元就公ノ仰ニコソ從ハメ、乍去吾心ニ任スベシト御内意ヲ承ル上ハ、胸裏ヲ非可殘、吾所望ハ熊谷信直ノ嫡女也、就忠承テ、仰ノ趣元就公ヘ可申ニテ候、乍去信直ノ嫡女ハ、世ニ又ナキ惡女也ト承及テ候、若御容色ノ被聞召及タランニ近劣シ給ナバ、御後悔ヤ候ベキト申ケレバ、元春莞爾笑テ、吾彼ガ容貌美麗ナルト聞テ、望ム樣ニ思フランコソ、就忠ガ心モ恥シケレ、夫一家一國ヲモ治メン者ハ、第一ニ可愼ハ好色也、○中略サレバ信直ガ嫡女、形醜ケレバ人是ヲ不娶、父ノ歎キ又何許ゾヤ、然ニ今予是ヲ嫁セバ、信直吾志ヲ感悅シテ、世ノ人ノ聟ヨ舅ヨト珍重ニ百倍センカ、左アラバ信直コノ志ヲ報ゼンニ、爭カ身命ヲ不擲、今中國ニ信直ニ勝ル士大將ナシ、予是ヲ伴テ元就ノ先陣ニ進マバ、如何ナル强敵大敵タリ共、ナドカ挫ガデハ有ベキ、然ラバ元就ノ武德ニ於テ髓骨ヲコソ得ザラメ、皮カ肉カハ爭カ得ザルベキ、信直無二ノ忠志ヲ勵レナバ、元就ノ御弓精逐

日テ盛ナルベキ事、掌ヲサシテ覺エタリ、是ヲ思ヘバ惡女ヲ嫁セン事、父ニ對シテ孝トナリ、又身ヲ立、名ヲ可發謀共可成、吾何ゾ色ヲ好ミ情ニ耽リテ、婦女ノ擇ミヲバ成ベキヤト有ケレバ、兒玉此一言ヲ聞テ、カヽル大丈夫ノ志氣マシマスヲバ露許モ存知候ハデ、徒事ヲ申ツル事、御心裏誠ニ恥シクコソ候ヘ、ゲニヤ公ハ天ノ縱セル大丈夫ノ器ニテ渡ラセ給、〇中略元就公モ此金言ヲ被聞召バ、如何許カハ悅セ給ベキ、急ギ云々ノ趣申候ハントテ、立歸テ元就ヘカクト申ケレバ、尤神妙ナル志也、此一言毛利吉川兩家ノ弓矢、益盛ニ可成前表也、元春ハ竹馬ニ策シ時ヨリ、龍駒鳳雛ノ器アリト思シガ、愚眼毫髮モ不違ケリト大ニ悅ビ給、軈テ信直ノ息女、元春ヘ嫁娶ノ儀宜ケレバ、信直不斜喜ビ、婚姻ノ祝儀ヲゾ被執行ケル、元春ノ宣シ如ク、自是信直、元春ニ對シ身命ヲ不惜、戰功ヲ勵ケル故、勇將ノ名、衆群ノ上ニ在ヲ、遠クハ先祖吉川駿河守經基、鬼吉川ト唱ラレシ蹤ヲ追、近クハ實父元就ノ明將ノ名ヲ繼給ゾ有難キ、

〔毛利元就記〕元就、隆家に語給ふは、今度大敵の尼子を退治し本望を達す、此上は存命の内に、備中備前、其外及處迄取出度候、然共上方の手遣、海上不任心しては不可叶、伊豫の河野引入度候、然れば隆家長女は元就が孫也、隆家同心に於ては、河野を聟にとり、國を靡度候と宣ければ、隆家承て、常々の事にては、姬を遠國への事不存寄事に候へ共、かく思召の上は、可任御意と申さる、元就感悅なされ、熊谷信直が手筋を以て、河野が內、平岡左近と相談し、河野常信を聟に成し給ふ、野島久留島いよ〳〵馳走仕り、海上自由になりぬ、其後隆家申されけるは、河野と緣邊の儀は、上方へ御取出あるべき爲と承候、時節は能と存候、隣國にて候へば、備中へ御出張可然候、隆家先鋒可仕也、御分國相催され、急度思召立可然と申さる、元就御感悅不淺、則一門其外大名へ觸させ、敵國を引率し備中へ出陣也、

〔土佐軍記 一〕元親娘嫁本山式部少輔事

本山吉良山田大平ハ、一旦ノ憤ニヨリ、元秀ヲ討亡シ、領地ヲ配分セシカドモ、○中略中ニモ本山某ハ、張本タルニ由テ、何トゾ後難ヲ遁ンタメ、或時國司○一條氏ノ御所ヘ參リ、家老土居羽生ヲ以テ言上シケルハ、○中略宮内少輔○元秀子元國女子多ケレバ、一人申受、某ガ一子式部少輔ニ妻合セ、一家ノ好ミヲ結ビナバ、某元秀ニ遺恨ナキ心底モ顯レ、宮内少輔モ心解、國中靜謐ノ基ナラント存候、乍恐此旨御披露アツテ玉ハリ候ヘト餘議ナク申入ケレバ、國司此由聞召、○中略宮内少輔ヲ召レ、此事ヲ仰セ談ゼラレケレバ、元國承リ、○中略夫父ノ讎ニハ不戴天トコソ申スニ、況ヤ彼ト婚姻ノ睦ビヲナサバ、武名ノ瑕瑾、千歳ノ嘲哢ナルベシ、本山元來某ガ宿意有ンコトヲ恐テ、假ニ好ヲ求ム、乍去餳飴ヲ以テ小兒ノ啼ヲ留、石牛ヲ粉テ蜀侯ガ弊ニ乘ントスル折ヲハ、某愚蒙ナリトイヘドモ、苟モ所不執ニ候、此儀ニ於テハ全ク御免ヲ蒙ベシト、言葉ヲ放テ申上ケレドモ、國司再三、當然ノ理ヲツクシ、御敎訓アリシカバ、不及力、吉日ヲ擇ミ、嫁娶ノ儀式結構シ、本山ガ館ヘ、總領ノ女ヲゾ送ケル、

〔陰德太平記六十五〕龍造寺隆信殺蒲池鎭並佐賀勢筑後國所々合戰附島津大友勢合戰之事
鎭並、武威ノ盛大ニ成ニ從テ、自立ノ旗ヲ擧ント議ス、隆信速ク是ヲ察シ知テ、久家家晴ニ命ジテ、其是非ヲ糺明セラレシニ、鎭並全ク野心ヲ不存由堅ク陳ジテケリ、サレ共隆信猶狐疑ノ心不解ケル故、頓テ息女ヲ以テ鎭並ニ嫁セシメ、田原伊勢守ヲ媵臣トシテ遣シ、鎭並ガ底意ノ程窺セケルニ、反心ヤ正シカリケン、彌渠ヲ誅センニ一決シテ、天正九年五月、須古ノ城ニ鎭並ヲ招イテ、猿樂ヲ興行シ、○中略兼テ討手ヲ定置ケレバ、夜半計ニ四方ヨリ切テ入ル、鎭並ハ上下皆沈醉スト云、殊ニ小勢也ケル間、迚モ叶ハヌ物故ニ、雜兵ノ手ニカヽラジトテ、頓テ自裁シテ失ニケリ、

〔末森記〕一抑天正十二年、其頃者北國加賀內石川河北二郡、能登一國、前田又左衞門尉利家卿分國ニテ、加州石川郡金澤ニ居城仕タマフ、佐々內藏助成政越中一國ノ守護トシテ、新川郡富山ニ居

城仕タマフ、上方ハ羽柴筑前守秀吉公ト尾張内大臣信雄卿〈誠ニ後常眞〉天下ヲアラソヒ取アヒ隙モナシ、〇中略其コロ徳川家康卿ハ、内大臣信雄卿ヲ見付タマフニヨリ、伊勢美濃境ニテ度々合戰アリシ時、北國ヨリ切テマカリ出、御味方ヲ可仕候間、加州濃州越前三箇國、御本意ヲトゲラレ候ハヾ内藏助ニタマヘカシト、内府公ヘモ徳川殿ヘモヨク〱申入、又サラ〱越ヨリ歸リ申サレ候、陣觸ヲモシテ人數出度思ハレケレドモ、又左衛門殿爲ニハ、内藏助大敵ナリト心ノウチニ工夫シテ、表裏ヲクハダテ、佐々平左衛門神保安藝守ナドヲヨビ出シ、評議區々ナリ、成政娘二人有之、一人ハ秀吉公ヘ人質ニ出シオカレ、上方ニアリ、其姉一人有之ヲ、利家ト古傍輩トイヒ、國ナラビナレバ、二男又若利政、後ハ孫四郎殿能登守ヲ婿ニ取、ノチニハ内藏助跡ヲモツガセ可申由、下々マデモ風聞セサセタバカル間、内藏助ヨリ佐々平左衛門出申、利家卿ヨリハ村井又兵衛尉出申、スデニ縁邊相定、ソレヨリ向後ハタガヒニ申入候ハンヨシニテ、先佐々平左衛門ヲ同年七月廿三日ニ使者トシテ金澤ヘマヒラセラレ、祝儀ヲピタヾシク持參シテ、城ノ堅固ヲモ見セラレ候、結句ハ利家卿ヨリコソ、先祝儀ヲ可被遣事成ニ、内藏助ヨリ先ニ參候事、能々チナミヲ深クアリ度體ト、越中上下トモニ申アヘリ、利家卿二心ナキ大將ナレバ、夢ニモ知タマハズ、家老共可然儀ト思、事ノ外馳走ニテ、又若殿ニ能ヲサセマイラセラレ、引出物ニ刀脇指馬ナドヲ平左衛門ニ給リ返サレケリ、

〔肥陽軍記〕二龍公之御母堂鍋島清房公〈江〉御入輿之事

故六郎次郎周家公の後室は、龍公の御母堂にて、御智惠かしこく、萬づにさが〱敷御事にてぞ渡らせ給ひける、其頃鍋島駿河守清房公に御子あまたましまず、中にも左衛門大夫信生公は、此跡千葉胤連に養子にをらせし彥法師主是也、〇中略然るに御父清房公、去る頃家室におくれさせ給ひ、御袂をほるゝ由、龍公の御母堂聞召及ばれ、つく〱思召けるは、今天下一に定まらずして、

諸侯攘奪の最中也、隆信其間に出て、或は急難をさけて、他州に苦しみ、或は隣端に軍立して、自國に身心を惱ます、國中の諸侍、きのふは味方に組し、けふは又敵と成、此時もし人を得ずんば、大功をなし難し、今一族の中をみるに、鍋島左衛門尉信生にすぐれたる器量の人なし、隆信と信生と兄弟の緣をなさしめ、當家一族の長となさば、たとひ世に不慮の變有とも、箕裘をそだつべき者は信生なるべしと思召定られ、ある時、清房公御登城まし〳〵けるを、局小侍從を以て御簾ちかく召仰出さるゝ、御邊妻女におくれ、悲歎の泪袖にみちぬるよし聞召ところなり、われ御邊に媒すべし、吉日を撰みたまへとなり、清房公、仰の趣はうけ給り候へども、あへて存寄らざる事也と御辭退まし〳〵て退出し給ふ、其後吉日に、御母堂自から御輿にめし、清房公の御たちに入せ給ふ、清房公は案の外なる事なれば、更にとかうを辨へさせ給はず、憫然たる樣なり、かゝりけれども簾中の仰事いなみがたく、終に御夫婦とならせ給ひければ、信生公は龍公に御兄弟の緣をむすばる、凡善惡につきて、人の口はさがなければ、輕忽なる御振舞と聞にさみし申人も有りしかども、龍公御逝去の後信生公御家をつがせ給ひ、加州太守直茂公と申て、國家をたもたせ給ひける時にぞ、御了簡露違はざりけりと、皆人こしかたをば感じ奉りける、

〔翁草百五十三〕小牧長久手の御一戰、御和融有と雖、其後內府公〇德川家康御上洛もなく、夫切にて御音信不通也、秀吉公上方にいまして、〇中略是を敵にしては天下併呑の障り也、何共して我に歸屬させんと、羽柴下總守を使として濱松へ差越さる、下總守說客と成て、蘇張が辨を以、さも慇懃に口上を伸て、久々上方御遊覽も無之間、御上洛を冀ふ所也、秀吉公にも御和融以後、染々御面會もなく、御懷敷思召に付て、御上洛を勸られ候との趣を演說すれども、公一圓御承引なく、〇中略是非なく下總守歸洛して、件の由を秀吉公へ申上れば、秀吉公又色々思惟有て、所詮辨佞を以せん事は叶べからず、此上は我いもうとを家康へ緣結して、其よしみを以、上京させんと、其儀をまた下

總守を以仰入らるゝに、公稍く御許諾あり、下總守仕濟したりと潤色して立歸り、其旨を言上す、仍夫より無程秀吉の妹君、濱松城へ御入輿有、此上は御參洛有て、御緣結の御交會あるべしと又下總守罷下りて勸め奉れども、公御得意無して仰遣るは、御緣者と成し上は、家康に於て、聊別心なし、但參洛の事は時節有之べし、〇中略兎角時節を待て御交會有べしとの御返答也、秀吉之を聞、大に退屈し玉ひて、然上は御母公大政所を人質として濱松へ遣さるべし、左有んには、やはか家康參洛せでや有なんと此儀を催され、其趣は、御緣結以後母公婦人の事故、我妹の遠所に在を慕ひ、罷下り度由に付、其意に任せ候、寬々御留置れ候樣にとの趣也、公も天下の主將たる人より、人質を以招かるゝ上は、參洛せずんば叶まじとて、御母公へは井伊兵部、本多作左衞門を馳走人に付置れ、御國の事、萬づ御手當有て御參洛なり、道すがらの列侯、之を傳聞て、殿下と內府、實に御和平整ぬるは、誠に泰平の基也と、銘々領分の道橋を修造し、驛々へ家來を出し、其馳走類ひなし、

古事類苑

禮式部十六

婚嫁五

古事類苑

禮式部十六

婚嫁五

〔日本書紀 神武三〕其年寅〇甲十月辛酉、天皇〇中略行至筑紫國菟狹、菟狹者地名也、此云宇佐、時有菟狹國造祖、號曰菟狹津彥菟狹津媛、乃於菟狹川上造一柱騰宮而奉饗焉、一柱騰宮、此云阿斯毗苔徒鞅餓離能宮、是時勅以菟狹津媛賜妻之於侍臣天種子命、

〔日本書紀 應神十〕十一年、是歲有人奏之曰、日向國有孃子、名髮長媛、卽諸縣君女也、是國色之秀者、天皇悅之、心裏欲覓、十三年三月、天皇遣專使以徵髮長媛、九月、髮長媛至自日向、便安置於桑津邑、爰皇子大鷦鷯尊〇仁德及見髮長媛、感其形之美麗、常有戀情、於是天皇知大鷦鷯尊感髮長媛而欲配、是以天皇宴于後宮之日、始喚髮長媛、因以上座於宴席、時撝大鷦鷯尊、以指髮長媛、乃歌之曰、〇中略於是大鷦鷯尊蒙御歌、便知得賜髮長媛而大悅之、報歌曰、〇中略大鷦鷯尊與髮長媛既得交慇懃、

〔沙石集 五〕和歌之道有深理事

一故鎌倉右大將家〇源賴朝京ヨリアヤメト云ハシタ者美人成ケルヲ召下シテ陰シ置レタリケルヲ、梶原三郎兵衛尉所望シテ見タリケレバ、同齡十七八計ナル女房美女ノ見モ知ヌヲ十人裝束サセテ雙スヘ置テ、此中ニアヤメヲ見知タラバ可給仰ラレケレバ見分カタクシテ、

マコモ草アサカノ沼ニ茂リアキテイヅレアヤメトヒキゾワヅラウ

ト云タリケレバ、アヤメカホアカメテ袖ヲチトヒキツクロキケルヲ見テ、アレコソト申シテヤ

ガテ給リケル、

〔源平盛衰記十六〕菖蒲前事

鳥羽院御中ニ、菖蒲前トテ世ニ勝タル美人アリ、○中略或時頼政菖蒲ヲ一目見テ後ハ、イツモ其時ノ心地シテ忘ルヽ事ナカリケレバ、常ニ文ヲ遣シケレドモ、一筆一詞ノ返事モセズ、○中略何ニシテ漏タリケン、此由ヲ聞食ニ依テ、君菖蒲ヲ御前ニ召、實ヤ頼政ガ申言ノ積ナルト綸言アリケレバ、菖蒲顔打アカメテ御返事詳ナラズ、頼政ヲ召テ御尋アラバヤトテ、御使有テ召レケリ、○中略菖蒲ガ歳長ケ色貌少モ替ヌ女二人ニ、菖蒲ヲ具シテ、三人同ジ裝束同重ニナリ、見スマサセテ被出タリ、○中略勅定ニ、菖蒲ハ實ニ侍ルナリ、疾給テ出ヨトゾ被仰下ケル、御定終ラザリケル前ニ、搔繕ヒテ頼政カク仕ル、

五月雨ニ沼ノ石垣水コエテ何レカアヤメ引ゾワヅラフ、ト申タリケルニコソ、御感ノ餘ニ、龍眼ヨリ御涙ヲ流サセ給ナガラ御座ヲ立セ給テ、女ノ手ヲ御手ニ取テ引立オハシマシ、是コソ菖蒲ヨ、疾ク汝ニ給也トテ、頼政ニ授サセ給ケリ、○中略京童部申ケルハ、二人ノ志、ワリナカリケルコソ理ナレ、媒ガ痛ク見苦シクモナケレバトゾ咲ヒケル、

〔吾妻鏡二〕治承五年○養和元年二月一日戊寅、足利三郎義兼、嫁于北條殿○時政息女、又加々美次郎長清、爲上總權介廣常之聟、兩人共存穩便、挿忠貞、御氣色快然之餘、依別仰今及此儀云云、

〔吾妻鏡十二〕建久三年九月廿五日甲午、幕府官女、號姫前、今夜始渡于江間殿○北條義時御亭、是比企藤内朝宗息女、當時權威無雙之女房也、殊相叶御意、容顏太美麗云云、而江間殿此一兩年、以耽色之志、頻雖被消息、敢無容用之處、將軍家○源頼朝聞食之、不可致離別之旨、取起請文、可行向之由、被仰件女房之間、乞取其狀之後、定嫁娶之儀云云、

〔太平記二十〕義貞首懸獄門事附勾當内侍事

或夜月冷ク風秋ナルニ、此勾當ノ内侍、半簾ヲ卷テ、琴ヲ彈ジ給ヒケリ、中將〇義貞新田其怨聲ニ心引レテ、覺エズ禁庭ノ月ニ立吟、アヤナク心ソヾロニアコガレテケレバ、〇中略アマリニセン方ナキマヽニ、媒スベキ人ヲ尋出シテ、ソヨトバカリヲシラスベキ、風ノ便ノ下荻ノ穗ニ出ルマデハナクトモトテ、

我袖ノ泪ニ宿ル影トダニシラデ雲井ノ月ヤスムラン、ト讀テ遣サレタリケレバ、君ノ聞召レン事モ憚リアリトテ、ヨニアハレゲナル氣色ニ見エナガラ、手ニダニ取ラズト使歸テ語ケレバ、中將イトヾ思ヒシヲレテ、云ベキ方ナク、有ルヲ憑ノ命トモ覺エズナリヌベキヲ、何人カ奏シケン、君等閑ナラズト聞召テ、爽心ノワク方ナサニ、思ソメケルモ理也ト哀レナル事ニ思召レケレバ、御遊ノ御次ニ、左中將ヲ召レ、御酒タバセ給ヒケルニ、勾當ノ内侍ヲバ、此盃ニ付テトゾ仰出サレケル、左中將限ナク忝シト悅テ、翌ノ夜、軈テ牛車サハヤカニシタテヽ、角ト案内セサセタルニ、内侍モハヤ此年月ノ志ニ、サソフ水アラバト思ヒケルニヤ、サノミ深ケ過ヌ程ニ車ノキシル音シテ中門ニナガエヲ指廻セバ、侍兒ヒトリ二人、妻戶ヲサシカクシテ驚破メキアヘリ、中將ハ此幾年ヲ戀忍テ、相逢フ今ノ心ノ中、優曇花ノ春マチ得タル心地シテ、珊瑚ノ樹ノ上ニ陽臺ノ夢長クサメ、連理ノ枝ノ頭リニ驪山ノ花自濃也、

〔甲陽軍鑑一〕駿河今川義元公御肝入にて、勝千代殿十六歲の三月吉日に御元服ありて、信濃守大膳大夫晴信と忝も禁中より勅使として、轉法輪三條殿甲府へ下向し玉ふ、卽勅命をもつて、三條殿姬君を晴信へとて、其年の七月御こし入なり、

〔武功雜記下〕忠次ノ息女御トラ殿、生質美麗也、牧野右馬允娶ラントコフ、忠次被存ハ、右馬允ハ大膽モノナリ、ワルク致タランニハ、謀叛ヲ發シ、三河一國ヲモ手ニ入ベキ男ナリ、アノ樣ナル者ニ娘ヲ遣ハス事ハ、罷成マジト也、此儀ヲ權現樣キコシメサレ、アノヤウノ器量モノニ、其方ナドガ

娘ヲツカハシテ、家來ニナシタルガヨキゾト御意ナリ、依レ之婚禮トヽナフ、手柄ナル緣邊カナト時人ノ美談ナリ、

〔藩翰譜松平櫻井二〕左馬允源忠頼は、〇中略忠吉が兄、與一郎忠正死して後、德川殿の仰として、兄の妻迎へて、伊豆守信吉、左馬允忠頼兄弟の子設たり、

〔元寛日記〕寛永四年七月五日、松平中務大輔ニ、內藤左馬介長政女、緣邊被二仰付一、祝言相調、

〔窻のすさみ二〕神崎與五郎は、故淺野內匠頭長矩殿の乳兄弟なりしとぞ、其母上方に居たりしが、與五郎、少し進みがたき氣色あるを見て、我故心引れて少したゆむ心見えたり、さる故に我は死侍る、心がゝりなく、本意を達すべしと書置して自害しけり、〇中略一說に、與五郎妻は內匠頭殿奥方の小姓なりしが、或時表にて見物事ありて、奥方にも見物ありしに、彼小女、與五郎が起居に目を附て涙ぐみたるけしきなり、事終りて後、內匠頭殿局を召て、小女奥方に障りなくば我もらひて與五郎に嫁せしめたしとありければ、やがてそのむねに應じられける程に、與五郎に給りて妻としける、內匠頭、後に物がたりに、かの少女の容體、類なく戀慕ふと見えし、そのまゝに置なば、行するゑ密通などしたらば大切の事なり、さるゆゑにかくはからひしとありけり、後自害したるは母にはあらず、此妻女なり、

〔玄桐筆記前篇〕一年一度に鉗鋼せられし酒井權六、小野喜大夫、遠山伊助が娘三人を西山に被レ召置て、〇中略其內權六が娘は、可レ嫁年頃なりければ、江橋六助にあふせて、可レ然方聞合させ玉ふに、海走澤津役杉浦藤十郎可レ然に定られて、十月十三日、吉日なれば可レ被レ遣候由かねて被二仰付一しに、其日御氣色〇德川光圀危急に渡らせ給ひければ、誰存出す者もなかりき、未刻許に漸く御脈も出、〇中略かのむすめに御暇可レ被レ下、御くひつみ持來れと被二仰出一、〇中略箸にて御のしを二ツはさみ給はんと被レ遊しに、御手御不自由にて、はさみあふせ給はぬを、やゝしばらくとかう被レ遊て、はさみあふ

辭婚嫁

せ給ひて、むすめに被下、つとめて繁昌せよとて御いとま被下畢、其御言葉も聞えかぬるほどに有し也、娘も涙に暮れて御前を罷立つ、是程の御事也、今日は參るまじき由申けれども、結句御意にさかふべし、其うへもはや御氣遣も有まじければ、仰の通り吉日に罷越候て可然とて、人々すすめてつかはしける、

〔日本書紀 十三 安康〕四十二年〇允恭 十二月壬午、大泊瀨皇子、〇雄略 欲聘瑞齒別天皇〇反正 之女等、女名不見諸記 於是皇女等對曰、君王恆暴強也、儵忽忿起、則朝見者夕被殺、夕見者朝被殺、今妾等顏色不秀、加以情性拙之、若威儀言語、如毫毛不似王意、豈爲親乎、是以不能奉命、遂遁以不聽矣、

〔續日本後紀 十 仁明〕承和八年三月癸酉、右京人、孝子衣縫造金繼女、居住河內國志紀郡、年十二歲、始失親父、泣血過人、服闋之後、親母許嫁、而竊出住於父墓、旦夕哀慟、母不復謂嫁事、其後還來定省、

〔愚管抄 五〕信西は、時にとりてさうなきものなれば、義朝淸盛とてならびたるに、信西が子に是憲とて、〇中略 さかりのをりふしにしありしを、さゝへてむこにとらんと義朝がいひけるを、我子は學生也、汝がむこにあたはずと云、あらきやうなる返事をしてきかざりけるほどに、やがてほどなく當時の妻のきの二位の腹なるしげのりを、淸盛が聟になしてけり、こゝにはいかでか其意趣のこもらざらん、

〔愚昧記〕安元三年〇治承元年 十一月十五日庚戌、傳聞大納言實定卿、去九日可嫁邦綱卿女、件女、主上御乳母也、別當三位是也、仍臨夜前駈二人、雅亮、今一人不聞其人、車幷出車二兩、送邦綱六條亭、而忽稱有風病氣、返迎車幷共人等了、子細頗不審、邦綱卿、日來在備前國、今日上洛、但不歸六條家、在相物家、謂相物者、則是實定卿妹、公能公女也、白川殿女房也、然間左馬頭重衡、禪門子也、則是邦綱卿聟、入來有密語、其後邦綱送書於六條家、其條忽返迎車了云々、不便々々、彼實定卿、家燒之後、借居婦女房冷泉院局家、世間頗以傾謗歟、是彼女房邦綱相物也、彼家邦綱所授彼女房也、而此娶之間事、又在人口之處、其間事等不便、彌以人口不安歟、可彈指々々々々、〇又見玉海

〔徒然草上〕因幡の國に、何の入道とかやいふもの、むすめ、かたちよしときゝて、人あまたいひわたりけれども、この女たゞ栗をのみくひて、さらによねのたぐひをくはざりければ、かゝることやうのもの、人に見ゆべきにあらずとて、おやゆるさゞりけり、

〔寬のすさみ二〕忠義〇本多の息女多かりし中に、一人を白川侍從忠弘〇松平下總守、從四位、の妻に與ふべしと上より仰下されしかば、かしこまり奉るよし御うけして、退出以前に先づそのよしを宿元へ云越されければ、二男長門守忠利、少年なりしが、忠弘は、神君〇德川家康の御外孫なれば、殊にめでたき緣組なり、但忠弘は黑白の辨へなき人なりと專ら沙汰ありしよしなり、此所御心うくとありしかば、息女聞て、さほどに世にとなふる人に嫁せん事は得もせじ、忠義の退出を待得て、君の仰はかたじけなき事なれども、世にまれなる愚なる人の妻になり申事は得せまじとて、君の仰をそむき申上は、一生嫁し申事はいたし申まじとありしほどに、忠義もちからにおよばず、病氣など云て、終に婚姻に及ばざりけり、長門守は、予が云出せるより、女君一生寡たるを憂ひて、終に妻を迎へられざりしとかや、

〔折たく柴の記上〕當時天下に雙なしなどいふ富商の子の、學ぶ友となりぬる事出來しに、その子のいひしは、我父たるもの、見まゐらせて、必天下の大儒とも成給ふべき御事也、我亡兄のむすめの候なるにあはせまゐらせ、黃金三千兩に求得し宅地をもて、學問の料となして、ものまなび給ふやうにと某が心のやうに申せとこそ侍れといふ、我此事を聞て、御心ざしのほどわするべからず、我むかしある人の申せし事を聞しに、夏の頃、靈山とかにあそびしものども中、池に足ひたし居けるに、小しきなる蛇の來りて、其足の大指を舐るあるが、〇中略初其蛇の小しきなりしほどは、わづかにさすがをもてきりし所なるが、すでに大きくなりしに至ては、一尺餘の疵とはなしり也、我今身まづしく窮りたれば、人忘れるものにもあらず、此身のまゝにて、そこの亡兄の

あとをうけつぎなんには、其疵なほ少しきなるべし、もしのたまふ所のごとく、世にしらるべきほどの儒生ともなりなむには、その疵は、殊に大にこそ成ぬべけれ、三千兩の黃金をすてゝ、大疵あらむ儒生となしたてられん事は、謀を得給ひたりともいふべからず、たとひさしきる所の小しき成とも、我もまた疵あらむ事をねがはず、我かくこそ申たれと答へ給へといひたり、後にきけば、然るべき儒生のその娘にはあひぐせしなり、(その富家は河村といひし、その孫女の夫は、黒川とかいひて、父祖ともに儒名ありし人也、)

〔令義解 二戸〕凡結婚已定、〇中略雖已成、其夫沒落外蕃、有子五年、(謂稱子者、男女同也、若夫婦在同里、而不相往來者、卽比無故三月不成離也、)無子三年不歸、及逃亡、有子三年、無子二年不出者、並聽改嫁、

〔令集解 十戸〕釋云、稱子者、男女同、其男女同里不相住者、比逃亡、而有子三年、无子二年待耳、跡云、已成在同里不相通者、比已成逃亡之法、令離、穴云、問同里絕往者何、答比逃亡、以嫁也、朱云、問在同里不相住、比逃亡者、未知雖已離明定、猶比逃亡不也、依下條、依有七出之狀、夫手書弃之等、則改嫁聽何、答未明知離狀、故尙比逃亡耳、但夫手書弃之等則聽改嫁耳、古記云、有子謂女子不同、一云、女子同例、妻妾亦同也、

〔伊勢物語 上〕むかし男、かたゐ中に住けり、男みやづかへしにとて、別をゝしみて行にけるまゝに、みとせこざりければ、待わびたりけるに、いとねんごろにいひける人に、こよひあはんとちぎりたりけるに、此男きたりけり、此戸あけ給へとたゝきければ、あけで歌をなんよみていだしたりける、

あら玉の年の三とせを待わびてたゞこよひこそ新枕すれ

といひいだしたりければ、

あづさ弓まゆみつき弓年をへてわがせしがごとうるはしみせよ

〔おちくぼ物語 四〕左のおとゞ、いかでこの君たちに、よきむことりせんと覺してみるに、〇中略中な

ごんのつくしのそちにてくだるに、にはかにめうせたりけるをきゝ給ひて人がらもいとよき人なりとおぼしきざして、うちにまゐりあひたるにも、心さゞめてかたらひ給ふて、さるべきをりにこの事のすぢをほのめかし給ひければ、いとよき事に侍なりと申ちぎりてけり、左のおほいどの、北のかたに申給ふ、しか〴〵の人をなんいひちぎりたる、かんだちめにもあり、人がらもいとよしとなん思ふ、三の君にやあはすべき、四の君にやあはすべき、いづれにかとのたまへば、いざ御心にさだめ給へ、まろは四の君にとなん思ふ、いとほしき事ありしかば、おもひもなほし給ふばかりにとの給へば、このつごもりにくだるべかなり、とくしてん、北のかた〇四君母にさの給へ、よろしう思ひたらば、こゝにてあはせんとの給へば、〇中略北のかた、かう〴〵の事なん、かの大いどのゝの給ふなるを、をこに人のおもほしたりし御身を、いともよき事となんうれしくおもふを、いかゞおぼすとの給へば、四の君、おもてあかめて、いとよきことに侍るなれど、かゝる身をしらぬさまにや、なでうさる事か侍るべき、人のおぼさんも、かつはかの殿の御はぢならん、いとみぐるしからん、心うき身なれば、尼になりなんと思へど、おはせんかぎりは、れいのかたみに見え奉るをだに、つかふまつるに思ふたまへてなん、いまゝでだに侍るとてなき給ひぬれば、〇中略北のかた、あなまが〴〵し、なでう尼にかなり給べき、しばしにても、なほはなやかなるめ見給はんぞ、人もかくぞありけりとおもふべき、おのがことにしたがひ給ふとおもひて、この事したまへとのたまふ、〇中略北のかた、四の君のゝたまひけることをあはれがりて、さもおぼすべきことなれど、世にある人は、かゝるたぐひおほかなりと覺しなすべくとの給ふ、殿聞給ひて、北のかただに、さのたまはゞ、さうじみものしとおぼすともとくしてん、いとよき人なり、この月のつごもりにくだるべし、おなじくはとくとのたまひき、はや四の君こゝにわたし給へと少將にのたまへば、曆とりにやりて見給ふに、此七日いとよか也けり、何事にかさはらん、人々のさうぞくは、こ

こにしおかれたらん、まうけのものして、にしのたいにてせんとおぼして、西の對しつらはせたまふ、四の君、はやわたり給へときこえ給へば、はや〳〵といそがし給へど、ほいなきことなれば、いとうたてものうく覺えて、いま〳〵といひて、さらにおもひもたゝねば、この事ならずとも、わたり給へとあらんはおはすまじくやあらん、あなひが〳〵しといひてわたし奉りつ、おとな二人、わらは一人、御ともにはありける、御むすめ〈○四君、先夫子〉は十一にて、いとをかしげなり、いかまほしとおぼしたるを、みぐるしからんとてとゞむるを、いとかなしとてうちなかれぬ、左の大いどの、待うけ給ひて、たい面し給ひて、有べき事ども申給へど、中々はじめよりもはしたなくはづかしうおぼえて、御いらへもをさ〳〵きこえ給はず、この北のかたの三つが弟にて、廿五になんおはしける、面白の駒〈○四君、先夫〉は、十四にてむことりて、十五にてうみ給へりける也、

〔一代要記醍醐〕皇女

普子内親王〈始配參議源清平、後配和泉守藤原俊遠、〉

韶子内親王〈始配大納言源清蔭、後配河内守橘惟風、〉

〔大和物語上〕おなじ右のおほいどのゝみやすどころ、〈○藤原定方女善子〉みかど〈○醍醐〉おはしまさずなりて後、式部卿の宮〈○敦實親王〉なんすみたてまつり給ひけるを、〈○中略〉宮おはしまさずなりにければ、左のおとゞ〈○藤原實頼〉の左衛門督におはしましける頃、御文奉れ給ひけり、

〔大和物語上〕本院の北方〈○藤原時平妻〉の、まだ帥の大納言〈○藤原國經〉のめにていますかりけるをりに、平中〈○平貞文〉がよみて聞えける、

春ののに緑にはえるさねかづら我きみざねとたのむいかにぞ、といへりける、かくいひ〳〵て、あひちぎることありけり、その、ちの左のおとゞ〈○時平〉の北のかたにて、のゝしり給ひけるとき、よみておこせたりける、

行末のすくせもしらずわがむかし契しことはおもほゆや君、となんいへりける、

〔大鏡三太政大臣實賴〕このおとゞ〇藤原實資の〇中略北方は、花山院の女御、ためひらの式部卿の御むすめ、〇婉子院そむかせ給ひて、この女御殿にさぶらひたまひしなり、

〔榮花物語八はつ花〕一條院うせさせ給ひて後、女御更衣の御ありさまども、さま〴〵にきこゆるに、承香殿の女御〇藤原元子に、故式部卿宮の源宰相の君、賴定の君、忍びつゝかよひきこえ給ふ程に、右のおとゞ〇顯光、元子父きゝ給て、まことそらごと、あらはしきこえんとおぼしけるほどに、御めにまことなりけりと見給ひてければ、いみじうむづからせ給て、さばかりうつくしき御ぐしを、てづから尼になしたてまつり給ふに、うき事數志らずみえたり、あさましうあやしきことに、よ人も殿のうちにもいひさわぐ程に、其のちもなほしのびつゝかよひ給ひければ、そのたびはいづちもいづちもおはしねとあれば、女御の御めのとゝあるは、實譽僧都といふ人のくるまやどりなり、その家にわたり給ぬ、宰相もさるべきにこそと思ひつゝ、おろかならずかよひ給ふ程に、おのづから御ぐしなどもめやすくなりもていく、あやしうひが〳〵しきことに、よの人も思きこえたり、おなじきわかきんだちといへ共、これは村上の四宮源帥殿の御むすめのはらなれば、いとものきよくものし給を、あやにくにこの殿の給をぞ、かへす〴〵あやしき事に人きこゆめる、又くらべやの女御〇藤原尊子と聞えしには、母の藤三位、いまの宣耀殿の御はらからの、すりのかみ〇藤原通任をぞあはせ聞えためる、

〔平治物語三〕牛若奥州下事

サテモ常磐〇源義朝妾ヲバ淸盛最愛シテ、近所ニ取居テ被通ケルトゾ聞エシ、去バ其腹ノ男子三人、流罪ヲモ遁レテ、兄今若ハ醍醐ニ登リ、出家シテ禪師公全濟トゾ申ケル、〇中略母ノ常磐ハ、淸盛ニ被思テ、姬君一人儲タリシガ、スサメラレテ後ハ、一條大藏卿長成ノ北方ニ成テ、子供數多出來タ

リ、

〔源平盛衰記 二〕清盛息女事

御娘八人御坐ケルモ、皆取々ニ幸シ給ヘリ、〇中略七ニハ安藝嚴島ノ内侍ガ腹ノ娘也、〇中略母ノ内侍ハ、越中前司盛俊ガ賜テ具シタリケルガ、盛俊一谷ニテ討レテ後ハ、土肥次郎實平ガ具シタリケルトゾ聞エシ、

〔源平盛衰記 十八〕文覺頼朝勸進謀叛事

伊豆國住人伊東入道祐親法師ハ、重代家人也ケレ共、平家重恩ノ者ニテ、當國ニハ其勢人ニ勝タリ、娘四人アリ、〇中略第三ノ女、未ダ男モナカリケレバ、兵衛佐〇源頼朝忍テ通ケル程ニ、男子一人出來ニケリ、〇中略祐親申ケルハ、商人修行者ナドヲ男ニシタランハ、中々サテモ有ナン、源氏ノ流人聟ニ取テ、平家ノ御咎メアラン折ハ、イカヾハ申ベキトテ、〇中略娘ヲバ呼取テ、當國住人江間小次郎ヲゾ聟ニ取テケル、

〔吾妻鏡 二〕養和二年〇壽永元年七月十四日壬午、新田冠者義重主、蒙御氣色、是彼息女者、惡源太殿〇武衛舍兄義〇源平後室也、而武衛〇源頼朝此間、以伏見冠者廣綱、潜被通御艶書、更無御許容氣之間、直被仰父主之處、義重元自於事依廻思慮、憚御臺所御後聞、俄以令嫁件女子於帥六郎之故也、

〔異本曾我物語 二〕河津〇助道が女房、〇中略一百日にあたる時、かならず尼にならんとて、袈裟を用意して、佛事の日をぞ待ちにける、舅の入道〇伊東祐親このよしをつたへきゝ、人をしていはせけるは、妻をかへなんと聞くは誠やらん、稚者を誰にあづけ、何となれと思召すぞ、〇中略いかなる人にも相見え、二人の子供をも身にそへて、亡人〇助道の形身とも御覽候へ、〇中略それにつき疎き人のかたへもおはしまさば、たがひに見もし見え申さんこともかなふまじ、相模國の住人、曾我太郎助信と申すは、入道がためにも姉の子なれば甥なり、鹿野の前の大介殿の御孫なれば、御身のため

にも、また従弟なり、折節女房におくれ候へば、この宿所へ入れまゐらせんと存ずるなり、御歎きをもなぐさめ、をさなきものどもをもそだて給へ、かの助信は、御身にも一家といひ、よもや幼なきものどもに疎略は候ふまじ、入道も委しく申し含むべきなり、かく申すも、偏に御身または孫どもの後のことをおもふゆゑにて候ふなり、よく／＼御心を靜めて御思案候へと申つかはして後は、もし尼になる事もこそあれと、人をつけ日夜きびしく守らせける、これをきくにも女房は、いとゞうきことにおもひわび、唯ふし沈みてぞ居たりける、かくて伊藤入道は、消息こま／＼と認めて、曾我の里へ送りけるは、これに候ふ三郎が女房、助道におくれて後、一向にふし沈つゝ、命も絶えぬべく見ゆれども、とかくに慰めてもなぐさめかねて候ふ、そなたにも歎きあることにも候へば、あはれ二人の孫どものゆくすゑをも見届けて給はるべく候はゞ、この女房をむかへとり、御心をもとりのべられ、女房の歎きをも慰めて給はり候へ、左もとおぼしめし候はゞ、入道が館へ來り給へ、この女房、幼き時は御邊もたがひに相見え給ひしことなればなど、こま／＼と書き送りければ、助信、大きによろこび、案内しらざる他人よりは、尤心やすかるべしとて、使とうちつれ、伊藤が館へぞ來りける、入道使を立て、河津が女房にいはせけるは、曾我より御迎ひに人參りたり、かね／＼申すごとく御出立あるべしとありければ、女房このよしをきゝ、二人の子どもを左右の膝におきすゑて、あなくちをしのありさまや、己等が父におくれずば、かゝるうきことは聞くべきかと悶えこがれ泣きにけり、ひそかに守刀をとりいだし髻に押しあてけるを、守りたる女房どもはやく見つけうばひとる、入道にかくと告げゝれば、大きにおどろき、河津が館へ來りつゝ申しけるは、御承引なくば、入道自害し候ふを御覽じ、其の後御心に任せらるべしと偏袒をぬぎければ、女房ども、あつとたちて走りあつまり入道の刀をとりて、とく／＼曾我へ入らせ給へとくち／＼に申しければ、河津の女房、あさましくはおもひながらも、今はいなまん

力なく、既にいでたち給ひける、まづ河津殿の墓へ詣て、去るしの五輪にとりつきて、いとま申すよ河津殿、わらは、まゝ人に見えんとはおもはねども、殿の父うへ伊藤どのゝ、御はからひに力およばず、曾我の里へうつり候ふなり、わらはにも子どもにも、逵き守りとなり給へ、身はいづちに侍るとも、後世をばとぶらひ奉るべしと、くどきたて泣きければ、五歲になりし一萬も、もみぢのやうなる手を合せ、祖父御前の仰せによりて、母御前の御供仕、曾我の里へまゐり候ふ、御敵宮藤一郎助經を討たんまでは、息災に守らせ給へとなく／＼くどきければ、きく人みる人、袖をしぼらぬはなかりけり、その後河津の女房はなく／＼輿に扶けのせられ、二人の小供は、めのと、ともに輿にのり、曾我の里へぞ移りける、かくて月日を經るほどに、曾我殿の子ども、多く出生し、永き妹脊となりにけり、

〔富樫記〕或說曰、政親妻ハ、尾州熱田大宮司友平息女也、女ヲ或公家ノ養子ニシテ政親ニ嫁ス、長享ノ亂ニ、彼妻尾州ヘ歸ル、大宮司、則其息女ヲ勢州高田宗一身田專修寺ニ嫁ス、是故政親彼宗旨信仰ノ遺志ヲ繼者歟、

〔雜話筆記 二〕江州小谷ノ城主、淺井下野守祐政ガ嫡子備前守長政ハ、信長公ノ妹聟ナリ、於市殿トテ、無雙ノ美婦人ナリシトテ、長政ガ方ニテ、此婦人女子三人ヲ產リ、然ルニ元龜年中、長政信長ノ爲ニ亡サレテ後、於市殿ハ三人ノ女子ヲ連レテ、再ビ信長公ノ方ヘ歸リ給ヒシヲ、信長ノ計ヒトシテ、柴田修理亮勝家ガ方ヘ再嫁セシメラレタリ、三人ノ女子モ、〇中略秀吉公是ヲ養育シテ、成人ノ後、宗領淀殿は、秀吉公ノ妾トナリ秀賴ヲ產給ヘリ、其次ハ京極宰相高次ノ室トナレリ、〇中略其次ハ將軍秀忠公ノ御臺所崇源院殿是ナリ、始佐治與九郎ト云者ノ妻ナリシガ、秀吉公、淀殿ヲ妾トシ給ヒテ後、與九郎ハ、我相聟ニハ不足ナリトテ取戾シ、後大和大納言秀長ヘ嫁セラレ、女子一人設ケラレシガ、秀長早世セラレシカバ、秀吉公ノ御計ヒトシテ、台德公〇秀忠ヘ嫁セシメ給ヘ

リ、將軍家光公ノ御母儀是ナリ、俗ニ大御臺樣ト云ヘリ、

〔以貴小傳〕西郷の局〈○德川家康妾〉は、鵜殿藤助長忠が女なり、〈○中略〉第二御女、普字姫君の御方を生り、はじめ北條左京大夫氏直朝臣の北の方になり給ひしが、氏直うせられしかば、豐臣太閤のなかだちにて、池田參議輝政に嫁したまふ、

武田氏は、おたけどのといふ、父の姓名詳ならず、第三の御女をうめり、〈娥姫君と申す、さいふ、○中略〉この姫君は、初蒲生飛驒守秀行朝臣の室となり、後に淺野但馬守長晟に嫁したまふ、

〔藩翰譜〈一保科〉〕肥後守源正光は、〈○中略〉彈正忠正直が男なり、〈○中略〉初め正直、長子正光、〈童名喜五郎〉二男正重〈初頁〉設けて妻を失ひしかば、德川殿〈○家康〉異父同母の御妹を賜て彼妻となされ、〈久松佐渡守の長女なり、初松平與八郎忠正に嫁して、内藤正家康をまうけ玉ひ、忠正死して、忠正の弟與二郎忠吉の妻となり、安房守信吉、左馬允忠頼をまうけらる、忠吉もまた死ぬれば、保科が許にゆきたまひしなり、〉男子二人女子四人を設く、

〔元寛日記〕元和二年正月十一日、蒲生飛驒守秀行〈幼名ハ藤三郎ト云、氏郷ノ子ナリ、〉後室、〈蒲生下野守忠郷ノ母儀ナリ、〉家康公姫君也、秀行死去後、懸御子下野守在シケルヲ、秀忠公仰ニシテ、可嫁淺野但馬守長晟之旨被仰出、長晟畏ヲ稱、忝退出、其追付入輿、　四月七日、家康公姫君、〈蒲生秀行後家、忠郷ノ母儀也、〉今日淺野但馬守宅ニ入輿、以前此緣組被仰出、然レ共急ニ祝言有べキトモ不思處ニ、家康公就御煩、早速及此儀、是依仰也、

〔國師日記〕元和二年七月十八日、近松寺、六月廿七日之狀來、〈○中略〉

一大坂之姫君樣、〈○德川秀忠女千姫、豐臣秀頼妻、〉桑名平八郎殿江〈○本多忠刻〉九月御祝言相定由候、

廿一日、松平土佐殿使者來、〈○中略〉大坂姫君樣、桑名平八殿江祝言之事なども申遣す、

〔元寛日記〕元和四年五月十日、坂崎出羽守貞盛、如何有所存哉、俄ニ召集家人等、取籠ル誓願寺前屋敷ニ、此貞盛、慶長元和兩度之合戰供奉之、殊夏陣秀頼自害ノ時、城中へ火懸ケル烟中へ飛入、秀頼御臺所、奉抱取タル人也、江戸中大ニ騷動、則達上聞ニ、可誅戮之由近所命大名等ニ、取圍彼左右、旣

ニ破長尾欲攻入ト、時貞盛老臣遠藤某、俄ニ變心、傍輩等示合賺貞盛、斬主人之首出寄手中、依之無事故靜謐ス、遠藤ガ事御沙汰アリシニ、一旦雖似有其忠、弑主罪不輕、非可被宥其罪トテ、終ニ被刎頭、遠藤行跡尤無道不足論ルニ、坂崎召仕侍大勢浪人シケレドモ、主ニ不義ノ者共ナリトテ扶持スル人無之、抑今度坂崎ガ籠居事、後ニ沙汰シケルハ、元和之年、夏大坂之城落居之砌、此坂崎烟中ニ飛入、姫君奉取負背進セ、本多佐渡守奉渡之、家康公御感ノ餘リニ、汝ニ可給ト被仰シトカヤ、翌年坂崎ニ可給由大姫君へ御內談アリケルニ、坂崎方へ被遣バ御自害アルベシ、若本多中務方へ被遣バ、可隨命ト被仰ケル故ニ、兎角ノ御沙汰不及一兩年過タリ、今年本多中務大輔忠刻ト大姫君御緣邊儀被仰出、五月十五日可有入輿之由也、坂崎聞之、大權現御ケイ約ヲ被變、賜大姫君於本多事失面目、今生存生非可向面于人、所詮大姫君入輿之刻、出向于途中、奪取姫君奉刺殺、腹切ント取詰、家老郎等ヲ召集、潛此事賴ム、家人等無全事ト乍思、主人ノ前賴雖否ビ、尤ト同心、然ンニハ心ヲ變ズベシトテ飲神水契約ス、仍テ家人等、潛ニ調武具改兵具、故ニ彼屋敷、何トナク物忩也、坂崎ガ家人ニ田中道悅ト云もの有、兼日ヨリ能此企シリ、此儀遂本望トモ、吾身迚モ不可安穩、所詮出奉行中此企、爲忠節人ト思ヒ、認一通、時町奉行島田彈正方へ捧彼一通、彈正內見ス、驚入老中披見、其後御評定何トカ極リケン、被遣奉書於坂崎方、御用之儀有之間、土井大炊頭宅へ可參ト云ニ坂崎拜見シテ、內々之企露顯推量シ、奉畏御請シテ不出、老中集大炊頭宅雖相待不來、仍御步行目付ヲ遣シ、何モ相待罷有之間、早速可被參由申之、坂崎御步目付不對面、以家人返答シテ曰、可罷出用意候所ニ、俄ニ持病指發、身體不自由、及平復之期可參ト云々、其後表裏閉門不許出入、其儘ニ可差置ニ非ズトテ、酒井左衞門尉家次、堀丹後守口口松平伊豆守信吉、松平將監長重、古田大膳亮重治、加々爪甚十郎、豐島主膳等、共打向テ圍屋敷ノ四面、于時坂崎ガ首ヲ出スコト前ニ如記、

〔台德院殿御實紀 四十三〕元和二年九月廿九日、御所第一の姫君は、豐臣右大臣秀賴公の北方にま

しましけるが、大坂の城陥りける後は、關東に下りましたるを、今度本多美濃守忠政が長子中務大輔忠刻へ降嫁せらるべきに定まりぬ、本多家譜に、七月の事とす、然れども國師日記に九月とす、今これに從ふ、元和年錄も同じ、これは忠政が妻は、岡崎三郎君○信康の御女なり、此北方、先に大御所御病のさまうかゞはんとて、駿府におはしけるとき、御病牀にまゐり、懇に此事こはせ給ひ、御ゆるしありとぞ、(中略)此事、東武實錄には、元和三年九月とし、元和日記には、三年五月とし、元寛日記には、四年五月とす、しかれども、この姫君、本多が家に入輿の事、その家譜に二年とし、國師日記にも、又二年九月の記に見えたるときは、坂崎が事も其ときの事なれば、二年なるに疑なし、(中略)さても季親が、かゝるひが事思ひ企てし事も、異説區々にして、いづれか是なるをしらず、といへども、世にひろく傳へしは、大坂城陥るにおよび、姫君は秀頼公母子の御命をこはせ給はんとて、五月七日の夕方、城を出給ひしを、熊野新宮の住人堀内主水がくさ見て御供に侍けるに、季親道よりむかへて、御本陣におくり進らせたる事は、天元實記、大坂聞書等に、さだかに見えたり、季親これを功とし、姫君をおのが妻にたまはらん事懇願せしかど、姫君はいまだ二八の御齢、季親は五十餘のをのこ、しかも季親が身の分際にて、[illegible]させらるべきにもあらず、本多が家に御再婚あるべきに定まりしかば、季親ふかく恨み奉り、御入輿のとき、輿を奪取て讎遂へ死せんとはかりしといふ、元和年錄には、季親大坂の武功にほこり、本多何ばかりの功勞ありて、姫君を拜嫁せられ、そのうへ無田十萬石を給ふならん、我本多と對決し、姫君をも、十萬石をも、我にこそ賜はらめと、憤りしよし聞え、世上すは大事よと騒動に及ぶにより、柳生宗矩、御使にまゐりしよしにしるす、

〔藩翰譜〕十二下坂崎出羽守三宅某は、出羽守が名、諸記に見えし所、直行、成正、直長、直盛、信顯等の異ありて疑はしかるが故に、しるさず、○中略石見の國津和野の城を領す、三萬石其後名をも氏をも改て、坂崎對馬守と申し、又出羽守に成てけり、大坂の戰に隨てのち、元和三年將軍家を怨み參らすることあつて、終に自害してこそ失せにけれ、

將軍家第一の姫君○德川秀忠女千姫は、豐臣家○秀賴の御臺所にてまします、大坂の城破れし日、希有にして逃れ出させ給ふを、熊野新宮の住人堀内主水といふ者御供に侍ひて、將軍家の御陣に參らせ給ふ、爰に坂崎は、昔宇喜多が家に在りし頃、常に都にさむらひて、知れる人多しと聞召され、此君の御事、攝家華族などの公達の御中に媒し參らせよと密に仰せ承りて都に登り、然るべき人いひ語らひ、歸り參りて此由申上ければ、將軍家深く悅ばせ給ひ、頓て其家に入れ參らせらるべきにぞ定りける、姫君かくと聞召され、去る人に見えん事こそ心うけれとて、御飾お

ろさせ給ふべしなど聞えさせ給へば、將軍家大に驚せ給ひ、此事叶ふべからざりけりと仰せ下さる、出羽守承りて、かほどに契り置かせ給ひし事を、今いかで叶はぬよしの御使をば仕り候べき、只いかにもして御言葉の替らせ給はざらん樣にこそ、あらまほしく存ずれと申て罷り出づ、とかく日數ふるほどに、姬君、本多中務少輔忠刻が家に入らせ給ふべしと聞ゆ、坂崎大に恨み參らせて、かくては如何で世の人に再び面を向くべき、よし〳〵御輿奪ひ取て、都に伴ひ參らせずるものを、命を捨てば安かりぬと、己が家子郞等召集めけり、關東に在合ふ大名、すは事こそ出來たれと、家々に兵を集むること大方ならず、將軍家も、出羽守が怨み申す所、其謂れなきにあらずとて、御使度々下されて、彼が心を慰めらる、出羽守承り、せんずる所、某が首を刎ねられん後は、とにもかくにも候ひなん、生きて世に候はん限りは、えこそ御輿をば人手には渡すまじきにて候へとぞ申切たる、此上はとて、執政の人々、彼が家人等に奉書下して、汝が主の恨み申す所、其謂れなきにあらず、去ながら彼が謀る所の如きは、君臣の禮、か丶るべからざるに似たり、さればとて今はた反逆の例に准せられん事、返す〳〵も愍み思召さる所なり、斯ても猶上下の分を亂らず、其信を守りて死したらんには、一族の中を選みて家を繼がしめられ、彼が生前の恨を死後に慰めさせ給ふべきものなり、累代の家、忽に亡びんも、永く餘慶を其子孫に留めんも、すべからく汝等が計らひによるべき者か、汝等又何ぞ事ふる所に其忠を盡し、其義を謀りて、各死を以て諫めざるべきとぞしるされたる、彼家の老等仰を承て、主の自害を勸めて、其首取て參らせたり、實は主の晝寐ねて在りしを、薙刀取て首刎ねしとぞ聞えける、將軍家、以の外に怒らせ給ひ、出羽守が振舞ひ、既に反謀にわたりぬといへども、恨み申す所は其謂れなきにあらざるが故に、彼の家人等が諫により、彼尙君臣の義を存じ、おのが信をも失はで自ら死したらんには、約の義を以て、一族の中を選みて、其家つがせ給ふべきとぞ思召

されたる、それにおのが主の首切て參らする事こそ無道の至りなれ、まづ彼の家人等、大逆の科に處すべし、又出羽守、遂に初の謀を改めずして、家人の爲に失はれし上は、今又其家立てさせ給ふべきにあらずと仰せ下されて、所領沒收せられぬ、然るを今其事よく知らぬ人のあらぬ虛事えるし置きたるあり、大に誤れるなり、

〔藩翰譜三松平久松〕因幡守源康元は、初は勝元久松佐渡守俊勝が男、德川殿には異父同母の御弟なり、○中略俊勝、初め彌九郎長家といふ、男子一人まうけて妻を失ふ、德川殿の御母公、○お大の方岡崎より出されて、御兄水野殿下野守信元の許に歸り住み玉ひしを迎へて、男子三人、女子四人をまうく、

〔藩翰譜四上酒井〕忠次、譜代重職の家を繼ぎ、又岡崎贈大納言○德川廣忠家の御妹君にそひ參らせ、德川殿○家康の御伯母聟なりければ、忠次の室は、初め長澤の松平上野介政忠に嫁し、源七郎康高を設けらる、政忠、桶狹間の戰に討れ玉ひし後、忠次に嫁し玉ひしなり、當家に於て肩を並ぶる人なし、

〔藩翰譜九下有馬〕大御所○德川家康の御曾孫にて、御養君なりし姫君ひとり住みし給ひしを、直純○有馬晴信子迎へ參らすべしと仰ありしに、謹て領承す、悅ばせ給ふこと斜ならず、頓て俱しまゐらせて本國に歸る、

これ本多美濃守忠政が娘、○國姫、家康子信康女所生、大御所御養君として堀越後守○忠俊に配せられしに、堀罪ありて流刑に處せられしかば、此頃獨り住ませ給ひしなり、

〔百一錄〕元祿九年六月口日、難波羽林宗尙娶甘露寺故頭辨輔長後室、當時唯見利不見義、以不再嫁爲道之道、今亡矣噫、

〔大江俊光記〕元祿十四年四月十三日、玄長內おいく來、被申は、今日上御靈法印祐玄被參、玄長夫婦へ被申候は、內輪にて心安、何之用意も無之、著ノ儘ニて、娘照をもらひ申度候、此由岡崎衆へ御申可被下由被申トチ、おいく被申聞、玄長此由可申之由被申也、答、成不成は緣次第、此方娘もごりと

不改嫁

云、年も長、御存之通成生付ニて、其上如何様ノ方々も御招可ㇾ有之ニ、某娘御もらひ有度との事、由緒を御思候ての事ニて可ㇾ有ㇾ之ト思召寄、先大慶ニ候、猶相談候而、後より御返事可ㇾ申由申、暮ニ被ㇾ歸、廿二日、お照上御靈へ遣、

〔有徳院殿御實紀附錄五〕竹姬のかたと聞えしは、實は清閑寺中納言熙定卿の女なるを、常憲院殿、〇徳川綱吉御養女となされ、江戶の御所にむかへとりかしづかせ給ひしが、松平肥後守正容が子、久千代に降嫁あるべしと仰下されしに、いまだよすがさだまらざるうちに、久千代世を早うしければ、ふたゝび有栖川式部卿孝仁親王の北方に定まり玉ひしが、これも身まかり玉ひしかば、今はものさびしげにておはしけり、公〇徳川吉宗御位につかせ玉ひて後、この姬君まださし若くて、かく世をあぢきなく過さるゝをいとほしく思召れ、さき〳〵定まり玉ひしかた〳〵、皆すみつき玉はざる先にうせられしうへは、今ことかたに嫁し玉ふとも、實は再醮といふにもあらずと仰ありて、よく其御心をいひこしらへ玉ひ、つひに松平大隅守繼豐に嫁せられしに、いとよくすみつかせ玉ひ、菊姬といへるをんな子をさへまうけさせ玉ひけり、竹姬君にも、終身かたじけなきことにおぼしければ、公かくれさせ玉ひしのち、御在世に賜はりし御文の殘りしをあつめて、みづから阿彌陀佛の像をつくられ、竹芝の源光寺に安置し、供養せられしとなむ、

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜三年十二月壬子、壹岐島壹岐郡人直玉主賣、年十五夫亡、自誓遂不ㇾ改ㇾ嫁者卅餘年、供ㇾ承夫墓、一如平生、賜ㇾ爵二級、幷免ㇾ田租、以終ㇾ其身、

〔類聚國史五十四人〕弘仁十四年三月甲戌、下野國芳賀郡人、吉彌侯部道足女、授少初位上、〇中略道足女、同郡少領下野公豐繼之妻也、夫死之後、誓不ㇾ再醮、常居ㇾ墓側、哭不ㇾ絕聲、

〔類聚國史五十四人〕天長元年十一月戊午、下野國人、三村部吉成女、〇中略故主帳外大初位上勳八等輕部豐益妻也、夫死之後、常掃ㇾ墳墓、操志貞潔、無ㇾ心再嫁、量ㇾ彼志行、可ㇾ謂ㇾ節婦者、

〔類聚國史人五十四〕天長四年正月丁亥、節婦豐前國人、難波部首子負賣、免其戶課役田租、終身勿事、子負賣、年十有八歲、適下毛郡擬大領蕨野勝宮守□□□□廿箇年、夫宮守死去、子負賣獨守空室十歲于玆矣、遠近庶士求之不少、而有諒同穴无心再醮、愛亡夫之遺衣、置獨守之牀上、朝夕每見追攀不息、亦得甘珍、必供亡靈、隣里无不稱歎、

〔類聚國史人五十四〕天長五年三月甲申、筑前國人、難波部安良賣、○中略年十有六、嫁宗像郡大領外正七位上宗形朝臣秋足、秋足死于今十五年、遠近聘之、誓死終志、本之名教、孝節可嘉、

〔文德實錄六〕齊衡元年三月癸巳、賜下野國節婦、秦部總成女爵二級、復終其身、旌表其門閭、總成女者、秦部正月滿之妻也、性至謹篤、正月滿亡後、撫養遺孤、不復再醮、持節彌固、常修功德、追資其夫、兼願及一切衆生、國內稱之、

〔三代實錄八清和〕貞觀六年二月五日壬戌、攝津國武庫郡節婦、日下部連氏成賣、年十六、適右京人文室眞人武庫麻呂、歷二十七年、武庫麻呂死、○中略日不再食、遂不改醮、○中略卽表門閭、以旌貞操、

〔三代實錄十清和〕貞觀七年三月廿八日己酉、近江國言、伊香郡人石作部廣繼女、生年十五、始以出嫁、三十七失其夫、常守墳墓、哭不絕聲、專期同穴、無心再嫁、量其意操、可謂節婦、○中略卽表門閭、

〔三代實錄十一清和〕貞觀七年十一月二日己卯、阿波國名方郡人、忌部首眞貞子、伉儷亡後、經三十餘歲、○中略遂不再醮、將終一生、○中略卽表門閭、以旌節婦之貞焉、

〔三代實錄二十七清和〕貞觀十七年十月八日丁巳、但馬國節婦、美含郡人、日置部小手子、叙位二階、小手子、年十六、適權大領外從八位上日下部良氏、年二十九夫亡、守節不移、無意再醮、及至晚齡、執志彌固、鄕黨推敬、故褒美焉、

〔三代實錄四十八光孝〕仁和元年十二月廿九日己卯、節婦加賀國加賀郡大野鄕人道今古、授位二階、免戶內田租、表其門閭、以旌貞節也、今古生年十三、適故前加賀權掾大神高名、經二十餘年、高名身死、今古

廬于墳側、歷年不去、哭泣之聲、日夜不斷、今古母、箭集清河子、年二十一、始適於人、其夫死後、不更再醮、全守一節、齡七十六、終於室內、母子繼踵、貞潔无虧焉、

〔吾妻鏡 三〕壽永三年〇元暦元年四月廿一日己丑、自去夜、殿中聊物忩、是志水冠者〇木曾義仲子義高雖爲武衞〇源頼朝御聟、亡父蒙勅勘被戮之間、爲其子、其意趣尤依難度、可被誅之由內々思食立、被仰含此趣於昵近壯士等、女房等伺聞此事、密々告申姬公御方、〇頼朝女義高妻

六月廿七日甲申、堀藤次親家郎從被梟首、是依御臺所〇頼朝妻政子御憤也、四月之比、爲御使討志水冠者之故也、其事已後、姬公御哀傷之餘、已沈病床給、追日憔悴、諸人莫不驚騷、依志水誅戮事有此御病、偏起於彼男之不儀、縱雖奉仰、內々不啓子細於姬公御方哉之由、御臺所強憤申給之間、武衞不能遁逃、還以被處斬罪云云、

〔吾妻鏡 十四〕建久五年七月廿九日戊子、將軍家姬君自夜御不例、是雖爲恒事、今日殊危急、志水殿有事之後、御悲歎之故、追日御憔悴、不堪斷金之志、殆沈爲石之思給歟、且貞女之操行、衆人所美談也、

八月十八日丙午、姬君御不例、復本給之間、有御沐浴、然而非可有御時始終事之由、人皆含愁緒、是偏御歎息之所積也、可令嫁右武衞〇高能給之由、御臺所內々雖有御計、敢無承諾、及如然之儀者、可沈身於深淵之由被申云云、是猶御懷舊之故歟云云、武衞傳聞之、此事更不可思召寄之由、屬女房被謝申之、

〔續近世叢語 七〕賢媛

伊與久氏民、嫁十餘年、夫病死、日夜哭泣、其家憫其無子而早寡、屢勸再醮、不肯、既而親戚故舊、交強不置、民乃佯諾曰、請得終三年之忌、唯命之從、咸信之、先大祥之六月、沐浴改服、焚香拜夫主、家人不以爲意、拜畢自裁而死、〇伊與久氏、名民、伊勢崎藩人伴七之女、嫁爲武藏國本庄亭長諸井五左衞門之妻、爲人美而貞淑、能幹家事、鄉里稱之、寬政五年死、年三十五、

〔續近世叢語 七〕賢媛

寡婦理慧、江都杵築邸、山本安兵衞妻也、嫁未數年喪夫、無子養他姓爲後、放蕩亡命、山本氏亡、姑謂理

慧曰、家之不淑、至于此、我將歸鄉里以依親舊、汝也妙齡、良圖再醮、理慧聞之、愀然曰、惡是何言也、兒一醮誓無他、且尊姑日已傾西山、兒雖不肖、代先君護視、固其職也、無間遠近兒當從尊姑所之、姑數喩之不可、姑曰、如是我子猶不死也、乃與俱出郎、棲居北郊、

〔續近世畸人傳四〕浪華鶴女

鶴女は、浪花靱場、鐵屋吉左衛門が妻なり、十四にして嫁し、良人によく仕へ舅に孝あり、十六歲の春一男子を產しが、其年不幸にして良人吉左衛門病死す、其忌もみちぬれば、親族集ひて、今男子ありといへども、まだ當歲なり、婿を撰みて鶴女に配んとてしか〱かたらひければ、鶴女淚を流し、吾若しといへども、兩夫にまみえざるの教をきけり、はた良人の忘がたみに男子さへあれば、我心の及ぶほどは、あるじに代りて舅に仕へ、此子をも養育せばやと語に、人々感じあへり、〇中略さて年もかはり、一周のいとなみも過しかば、先の人々、去るものは日々に疎しといふ諺をや思ひけん、又つどひて、今はかく家事も整ひぬるものから、まだ齡のわかければ、行末覺束なし、唯まげて吾々が言にしたがひ玉へといひければ、鶴女なほさきのごとく誓ひていなみければ、せんすべなく止みぬ、

〔今日抄一事明〕弘化四年九月廿三日、三條臺村農夫富次女時、事親孝、其壻辨吉爲富次所逐、人勸更迎新婿、時慨誓不復背父母、辭之、

〔今昔物語三十〕夫死女人後不嫁他夫語第十三

今昔、□□ノ國□□ノ郡ニ住ケル人、祖有テ娘ニ夫ヲ合セタリケルニ、其ノ夫失ニケレバ、祖亦他ノ夫ヲ合セムト爲ルニ、娘此レヲ聞テ母ニ云ク、我男ニ具シテ可有キ宿世有ラマシカバ、前ノ男コソ不死シテ相具シテ有ラマシカ、男ニ不具マジキ報ノ有レバコソ彼モ死タラメ、譬ヒ夫ヲ儲タリトモ、身ノ報ナラバ亦モ死ナム、然レバ此ノ事可被止シト、母此レヲ聞、大キニ驚テ父ニ此ノ

由ヲ語ケレバ、父ノ云ク、我レ年既ニ老ヒタリ、事近キニ有リ、汝ヂ其ノ後ハ、何ニシテカ世ニ有ラムト爲ルトテ、尙合セムト爲ル、娘父母ニ云ク、然ラバ此家ニ巢ヲ作テ子ヲ產メル鷰有リ、雄鷰ヲ相具セリ、其ノ雄鷰ヲ取テ殺シテ、雌鷰ニ注シヲ付テ放チ給ヘ、然テ明ケム年、其雌鷰他ノ雄鷰ヲ具シテ來タラム時ニ、其レヲ見テ我レニ夫ヲバ合セ給ヘ、畜生スラ夫ヲ失ヒツレバ、他ノ夫ヲ儲クル事无シ、況ヤ人ハ畜生ヨリモ心可有シト、父母現ニ然モ有事トテ、其家ニ巢ヲ作テ、子ヲ產タル鷰ヲ取テ、雄鷰ヲ殺シテ、雌鷰ニハ頸ニ赤キ糸ヲ付テ放ツ、然テ明ル年ノ春、鷰ヲ待ツニ、其雌鷰他ノ雄鷰ヲ不具シテ、頸ニ糸ハ付乍ラ來レリ、巢ヲ咋テ子ヲ產ム事无クシテ飛ビ去ヌ、父母此レヲ見テ、實ニ然ル事也ケリト云テ、娘ニ夫合セムノ心无クテ止ニケリ、然テ娘此ナム云ケル、カゾイロハアハレトミラムツバメソラフタリハ人ニチギラヌモノヲ、トゾ云ケル、此レヲ思フニ、昔ノ女ノ心ハ此ナム有ケル、近來ノ女ノ心ニハ不似ケルニコソ、

〔秦山集（雜著甲乙錄一）〕予（○谷重遠）問、垂加翁、婦事二夫固非也、惟納幣而夫死則嫁、亦似無害、垂加曰、名既定矣、不可再嫁也、

〔萬葉集十八〕兩妻例云、有妻更娶者、徒一年、女家杖一百、離之、

〔唐律疏議（十三戶婚）〕諸有妻更娶妻者、徒一年、女家減一等、（○中略）各離之、

〔古事記上〕爾其后（○大國主命后須勢理姬命）取大御酒坏、立依指擧而歌曰、夜知富許能、迦微能美許登夜、阿賀淤富久邇奴斯許曾波、遠邇伊麻勢婆、宇知微流、斯麻能佐岐邪岐、加伎微流、伊蘇能佐岐淤知受、和加久佐能、都麻母多勢良米、阿波母與、賣邇斯阿禮婆、那遠岐氐、遠波那志、那遠岐氐、都麻波那斯、（○下略）

〔日本書紀（三神武）〕戊午年八月乙未、天皇以其酒宍班賜軍卒、乃爲御謠之曰、（○中略）固奈瀰餓、那居波佐麼、多智曾麼能、未避那鷄句塢、居氣辭被惠禰、宇破○奈○利○餓、那居波佐麼、伊智佐介幾、未廼於朋鷄句塢、居氣儴被惠禰、

〔釋日本紀二十三和歌〕固奈瀰餓謂二前妻一○中略宇破奈利餓謂二後妻一也

〔大和物語下〕よしいへといひける宰相のはらから、やまとのぞうといひて有けり、それもとのめのもとに、つくしより女をゐてきてすゑたりけり、本のめも心いとよくかたらひゐたりけり、かくて此をとこは、こゝかしこ、ひとのくにがちにのみありければ、ふたりのみなんゐたりける、○中略かくて心のへだてもなくあはれなれば、いさあはれと思ふほどに、をとこは心かはりにければありしごともあらねば、かのつくしにおやはらからなど有ければいきけるを、をとこも心かはりにければ、とゞめでなむやりける、もとの女なむ、もろともにありならひにければ、かくていくことをいとかなしと思ひけり、山ざきにもろともにいきてなん、ふねにのせなどしける、をとこもきたりけり、このうはなり○後妻こなみ○前妻ひとひとよ、よろづの事をいひかたらひて、つとめて舟にのりぬ、

〔大和物語下〕昔やまとのくにかづらきのごほりにすむ男女有けり、この女かほかたちいときよらなり、としごろおもひかはしてすむに、この女いとわろくなりにければ、おもひわづらひて、かぎりなく思ひながら、め○新妻をまうけてけり、○中略かくほかにありけど、さらにねたげにも見えずなどあれば、いとあはれと思けり、心ちにもかぎりなくねたく心うくおもふを、忍ぶるになん有ける、とゞまりなんとおもふよも、なほいねといひければ、わがかくありきするをねたまで、ことわざするにやあらん、さるわざせずば、うらむる事も有なんなど、心のうちにおもひけり、さていでゝいくとみえて、せんざいの中にかくれて、男やくると見れば、はしにいでゐて、○中略いといたううちなげきてながめければ、人まつなめりと見るに、つかふ人のまへなりけるにいひける、

風ふけば沖つしら浪たつた山よはにや君がひとりこゆらん、とよみければ、わがうへを思ふなりけりとおもふに、いとかなしう成ぬ、このいまのめの家は、たつた山こえていく道になんあ

りける、

〔空穗物語藤原の君〕むかし藤原の君ときこゆる、一世の源氏おはしましけり、○中略よろづのかんだちめみこ達、むこにとらんとおもほす中に、時の太政大臣のひとりむすめに、御かうぶりし給夜むこどりて、かぎりなくいたはりて、すませたてまつり給ほどに、ときのみかどの御いもうと、女一のみこときこゆる、きさきばらにおはします、父御門、母きさきにの給、この源氏、たゞいまのみるめよりも、行さきなり出ぬべき人なり、我むすめ此人にとらせてんとの給てむこどり給、三日の夜御かはらけとりて、愛にかくものするとて、かのおほいまうち君のむすめをわすれず、ひとしくかよひ給はん、よかるべきなんどの給て、

岩のうへにならべておふる松よりも雲井におよぶ枝も有なん、源氏まさより御かはらけ給はるとて、

松のねをうつるけふよりいはのうへをひろき林と人にみらせむ、○中略きさいの宮、三條大宮のほどに、四町にていかめしき宮あり、○中略こゝにうつり給て、ひとかたには大い殿の御むすめ、おとゞまちには宮すみ給ほどに、おほんこどもうみ給こと、かずあまたになりぬ、

〔源平盛衰記一〕兼家季仲基高家継忠雅等拍子附忠盛卒事

或人ノ語ケルハ、○中略村上帝ノ御宇、左中將兼家ト云人アリ、北方ヲ三人持タレバ、異名ニハ三妻錐ト申ケリ、或時此三人ノ北方、一所ニ寄合テ、妬色ノ顕レテ、打合取合、髮カナグリ、衣引破リナンドシテ、見苦カリケレバ、中將ハ、穴六借トテ、宿所ヲ捨出給ヌ、取サフル者モナクテ、二三日マデ組合テ息ツキ居タリ、二人ノ打合ハ常ノ事也、マシテ三人ナレバ、誰ヲ敵共ナク、向フヲ敵ト打合ケルコソ咲シケレ、

〔大鏡七太政大臣道長〕この殿は、北の政所、二所おはします、○中略まさのぶのおとゞの御むすめを、今

の入道殿下の北政所と申なり、〇中略又高松殿のうへと申も、これ源氏におはします、延喜〇醍醐御子高明親王、〇中略太宰權帥にならせ給ひて流され給ひし、いとゞ心うかりし御むすめにおはします、

〔小右記〕長和四年十月十五日壬辰、右金吾云、主上〇三條以女二宮、可合權大納言頼通之由被仰左相府、〇頼通父道長但有妻如何、相府申云、至有仰事、不可申左右者、御恙間深依貪給寶位、思食事、恐偏有御好歟、可悲々々、可彈指々々、臣下彌何爲無方措身、

〔榮花物語十二玉村菊〕殿の大納言〇藤原道長子頼通どのを、今は左大將ときこゆ、みかど〇三條の御ものゝけ、ともすればおこらせ給ふも、いとおそろしくおぼすに、皇后宮〇三條后娍子、藤原濟時女、の女一のみやは、齋宮にておはしましにき、女二宮〇禔子内親王をちごよりとりわきかなしくし奉らせ給に、我御身だに、心のどかにおはしまさば、いかにもく\あべき御ありさまなれど、ともすればけふかあすかとのみ、こゝろぼそくおぼしめしたれば、いかでこの御ためにさるべきさまにと覺しめすに、たゞいま覺しかくべき事なければ、この大殿の大將などにや、これをあづけたてまつりてまし、おんめわれかくてあれば、えおろかならじとおぼして、大殿の參らせ給へるに、うへ此ことをけしきだちきこえさせ給へば、殿ともかくも奏すべきことにもさぶらはずとかしこまり申させ給て、また中務宮の女〇具平親王女祇子ぞかし、それいかばかりかあらん、さりともこの宮にえまさらざらん、またかでさせ給て、大將どのをよび奉らせ給ひて、かうく\の事をこそおほせられつれども、かうも申さでかしこまりてまかでぬ、はやうさるべきよういして、そのほどゝおほせ事あらむをり、まゐるばかりぞかしとの給はすれば、大將殿、ともかくもの給はで、たゞ御目になみだぞうきたるは、いみじううへを思きこえさせ給へるに、この事はのがるべきにもあらぬが、いみじうおぼさるゝ、なるべし、殿その御けしきを御らんじて、をのこは、めはひとりやはもたる、忠れの樣や、いま

までこもなかめれば、とてもかくてもたゞ子をまうけんとこそ思はめ、此わたりは、さやうにもおはしましなんとの給はすれば、かしこまりてたゝせ給ぬ、大將殿、我御とのにかへらせ給て、うへをみたてまつらせ給へば、〇中略つねよりも心ようものがたりきこえ給に、うちとけたらぬ御けしきを、れいの事ながら、ありつる事、ほの聞えたるにやと、御心のをにゝくるしうおぼさるゝに人志れずむねさはがせ給も、あやしうをゝしからぬ御心なりや、〇中略内には人志れず御よういどもありて、つくも所に御調度の事、心ことにおほせらる、皇后宮にもうち〳〵にはいみじうおぼしめしいそがせ給を、この事いかでかもり聞えけん、うへきかせ給て、たゞともかくもおぼしの給はせで、御こゝろのうちにこそはおぼすらめ、うへの御めのとは俊遠が妻なり、これをきていとあさましうおもふ、れいの人よりはこゝろざまはか〴〵しく、心かしこき人にて、え忍びあへず、とき〴〵くね〴〵しき事などいふを、うへいとかたはらいたきことにおぼす、さばれかういはであれかしなど、せいしの給はするほども、なべてならぬ御心なりかし、さて皇后宮こ内とより、志きりに御消息かよひ、宮達などいそがしういで入給ふ、かゝる程にいかゞしけん、大將殿、日比御心ちなやましくおぼさる、〇中略いとけおそろしき聲々したる、ものゝけいできたる、これぞこの日ごろなやましたてまつりつるものなめるとて、なりかゝりてかぢしのゝしりて、かりうつしたるけはひ、いとうたてあり、いかに〳〵とおぼすほどに、貴ぶねのあらはれ給へるなりけり、〇中略かの内わたりよりきこゆることにより、此上の御めのとなどのそれを申させたる程に、おのづから神の御心はかくわづらはしく聞え給なりけり、うへいときゝぐるしくおぼさるれど、いかゞはせさせ給はん、〇中略御ものゝけ、とのちかくよらせ給へと申せば、よらせ給へれば、〇中略此大將をやん事なきあたりにめしいれられぬべくおぼしかまふめるを、ひごろやすからぬ事と思ひ侍れど、さばれたゞまかせきこえてみんとおもひ侍に、いとやすからぬことに

おぼえて、みづから聞えんとばかりおもひしに、いとほしく此君のかくおどろ〱しくものしたまへば、いと心ぐるしくてなむ、かくもきこゆるとの給はするは、故中務宮の御けはひなりけりと心えさせ給つ、とのかしこまり申させ給て、すべてが返々ことわりにはべれば、かしこまり申侍、されどこれは、このをのこのおこたりにも侍らず、又みづからのする事にも侍らず、おのづから侍ことなりと申させ給へば、いかにさはかなしくおぼすやと、せめてたび〱申させ給、この事をながくおぼした丶ねとなるべし、殿の御まへに、御覽せよ、げにさること侍らばと、ことわりのよしたび〱申させ給へば、さは今はこ丶ろやすくまかりなん、さりともそらごとは、おとど去給はじとなむおもひ侍、もしさらばうらみ申すばかりとて、さりぬべき法文のあはれなる所うち誦しなどし給、まことにたがふ所なくて、去ばしうちねてさめぬ、〇中略さてもあさましかりける御心地にもあるかな、かねてか丶る事のあるは、いとうれしき事なり、さてのちに、かやうの事あらましかば、たが御ためにもひなからましとの給はする物から、くちをしうなんおぼされける、

〔榮花物語十三木綿四手〕さて院〇小一條院敦明親王の御事、けふあすあるべしとの丶しるは、まことにやあらん、ほりかはの女御〇敦明親王妻、藤原顯光女延子この事をき丶て、御むねふたがりて覺しなげくべしさて去はすにぞむことりたてまつらせ給べき、その御ようい心ことなり、此おまへをば月比みくしげ殿〇藤原道長女寛子とぞきこえさせける、〇中略日ごろありて、院ほりかはにおはしまして、御らんずれば、わざと道もみえぬまであれたり、哀と御らんじていらせ給へれば、女御殿は、御帳のまへにぞ、御すゞりのはこを枕にてふさせたまへる、〇中略かく物をおもはせたてまつる事、などかとき〲は、こ丶にもとまらざらん、されど人のいみじうもてなしおぼいたる事のわづらはしければ、ただいまはいかでかは、いましばしもありてこそはなどおぼすも、いとあはれなり、

〔住吉物語〕むかし中納言にて左衛門督かけたる人侍けり、うへ〇妻二人をかけてぞかよひ給ける、一人は、時めく諸大夫のむすめ、そのはらに女君二人いでき給へり、いまひとりは、ふるきみやばらの御むすめにておはしけるが、いかなるすくせにて、この中納言よな〳〵かよひ給ける程に、やがて人めもつゝまず成てすみわたり給けるが、ひかる程の女君いでき給ける、

〔とりかへばや物語〕一いつの頃にか、權大納言にて大將かけ給へる人、〇中略北方ふた所ものし給ふ、ひとりは、源宰相ときこえしが御むすめにものし給ふ、御心ざしはいとしもすぐれねど、人よりさきにみそめ給ひしかば、おろかならずおもひきこえ給ふに、〇中略いま一所は、藤中納言と聞えしが御むすめにものし給ふ、〇中略御ありさまはいづれもいとしもすぐれ給はぬを、おぼすさまならず、くちをしき事におぼしたりしかど、いまは君たちのさま〴〵うつくしうておひ出給に、いづれの御かたをもすてがたきものにおもひ聞え給て、今はさるかたにおはしつきにたるべし、

〔今昔物語〕二十六参河國始犬頭糸語第十一
今昔參河國□□郡ニ一人ノ郡司有ケリ、妻。ヲ。二。人。持。テ、其ニ蠶養ヲセサセテ、絲多ク儲ケル、而ルニ本ノ妻ノ蠶養、何ナル事ノ有ケルニカ、蠶皆死テ養得事无リケレバ、夫モ冷ガリテ不寄付成ニケリ、然レバ從者共モ、主不行成ニケレバ、皆不行成ニケレバ、家モ貧ク成テ、人モ无ク成ヌ、然レバ妻只一人居タルニ從者僅二人計ナン有ケル、妻心細ク悲キ事无限、其家ニ養ケル蠶ハ皆死ニケレバ養蠶絶テ不養ケルニ、蠶一ツ桑ノ葉ニ付テ咋ケルヲ見付テ、此ヲ取テ養ケルニ、〇中略其家ニ白キ犬ヲ飼ケルガ、前ニ尾ヲ打振テ居リケルニ、其前ニテ此蠶ヲ物ノ蓋ニ入テ桑咋ヲ見居程ニ、此犬立走テ寄來テ此蠶ヲ喰ツ、〇中略此犬鼻ヲヒタルニ、鼻ノ二ツノ穴ヨリ白キ絲二筋、一寸計ニテ指出タリ、此ヲ見ニ怪クテ、其絲ヲ取テ引バ、二筋乍ラ絡々ト長ク出來レバ、籰ニ卷付ク、〇中略尚

再嫁嫠婦

其ニモ盡セヌバ、桶共ニ卷ク、四五千兩許卷取テ後、絲ノ畢被給出ヌレバ犬倒テ死ス、〇中略夫ノ郡司物ヘ行トテ、其門ノ前ヲ渡ケレバ、家ノ極テ□□氣ニテ人ノ氣色モナケレバ□□ニ哀ト思テ、此ニ有シ人、何ニシテ有ラント絲惜ク思ケレバ、馬ヨリ下テ家ニ入タルニ人モナシ、只妻一人多クノ絲ヲ繰居タリ、此ヲ見ニ、我家ニ蠶ヲ養富テ、絡懸ル絲ハ黑シ、節有テ弊シ、此絲ハ雪ノ如ク白シテ光有テ、微妙キ事无限、此世ニ類ヒナシ、郡司此ヲ見テ大キニ驚テ、此ハ何ナル事ゾト問ヘバ、妻事ノ有樣ヲ不隱語ル、郡司此ヲ聞テ思ハク、佛神ノ助ケ給ケル人ヲ、吾愚ニ思ケル事ヲ悔、ヤガテ留テ、今ノ妻ノ許ヘモ不行シテ棲ケリ、

〔今昔物語三十〕住丹波國者妻讀和歌語第十二

今昔、丹波ノ國□□ノ郡ニ住ム者アリ、田舍人ナレドモ、心ニ情有ル者也ケリ、其レガ妻ヲ二人持テ、家ヲ並ベテナム住ケル、本ノ妻ハ其ノ國ノ人ニテナム有ケル、其レヲバ靜ニ思ヒ、今ノ妻ハ京ヨリ迎タル者ニテナム有ケル、其レヲバ思ヒ增タル樣也ケレバ、本ノ妻、心踈シト思テゾ過ケル、而ル間秋北方ニ山鄕ニテ有ケレバ、後ノ山ノ方ニ、糸哀レ氣ナル音ニテ鹿ノ鳴ケレバ、男今ノ妻ノ家ニ居タリケル時ニテ、妻ニ此ハ何トカ聞給フカト云ケレバ、今ノ妻、煎物ニテモ甘シ、燒物ニテモ美キ奴ゾカシト云ケレバ、男心ニ違ヒテ、京ノ者ナレバ、此ノ樣ノ事ヲバ興ズラムトコソ思ケルニ、少シ心月无シト思テ、只本ノ妻ノ家ニ行テ、男此ノ鳴ツル鹿ノ音ハ聞給ヒツルカト云ケレバ、本ノ妻此ナム云ケル、ワレモシカナキテゾキミニコヒラレシイマコソコヱヲヨソニノミキケ、ト男此ヲ聞テ、極シク哀レト思テ、今ノ妻ノ云ツル事、思ヒ被合テ、今ノ妻ノ志失ニケレバ、京ニ送テケリ、然テ本ノ妻トナム棲ケル、

〔後撰和歌集戀十一〕もとのめにかへりすむと聞て、をとこのもとにつかはしける、

讀人不知

わがためはいとゞあさくや成ぬらん野中の清水ふかさまされば

〔倭訓栞前編二十三〕のなかのしみづ　歌林良材に、野中清水は、播磨國印南野にありといへり、〇中略倭語抄には、唯野中にある清水のさまに書なせり、能因歌枕には、もとの妻をいふと見えたり、此說まことにざりけり、

〔大和物語上〕越前權守かねもり、兵衞のきみといふ人にすみけるを、としごろはなれて、又いきけり、さてよみける、

夕されば道もみえねど故里はもとこし駒にまかせてぞゆく

女返し

駒にこそまかせたりけれはかなくも心のくると思ひけるかな

〔窻のすさみ追加下〕浪花の富人の子、小四郎とてわか者有、娼妓と相なれ、終に買得て、かくれたる所におきて行かよひ妻としけり、父是を聞て大にいかり、かゝる事なす者、行末計がたしとて追出しければ、かたへなる小家を借りて夫婦在けるが、〇中略したしき友ども、あはれがりていたはりけれど、それもかぎりなければ、力におよびがたく、如何せむといふうちに、一人の云、かくては復讀に及びなん、此ごろ丹波の笹山なる富家に、女一人持たるが、養嗣を望者有、此かたへ往てんやとす、むるに、小四郎は、我身を立んとて、妻を流浪させん事、本意にあらず、思ひもよらずと云、その妻、物陰にて是をきゝ、立出て云樣、此〓比わらは故、夫の漂泊ある事、かへす〱悲しく、夜の目もあはず居申なり、〇中略わらはが事は、少も御心に懸られまじ、存る旨候へば、倒死ぬるやうにも候まじ、此こゝろを失れば後に悔てもかひ有まじ、かへす〱このはかりごと、とゝのふやうにといさめけるが、其夜ひそかにのがれ出て、本の靑樓に行て、此由を云、もとの如く身を賣、その趣を文に認め、その價を旅裝の料にこしければ、此上はとて丹波へ往て養はれ、一年あまりも居

離緣

けり、明けの年に及て、婚禮もすべきになりぬれば、さすがこゝろよからざりしにや、且は養母のいたましくやすからぬよしにて、暇こひて浪花にかへりぬ、〇中略かくて舊友どもうちよりて、父にこひけるは、わかげにて、そゞろなる事有べけれども、本の人がらは、まめやかにあれば、ゆるされよと云けるに、元より外に子はなし、戀しくおもふをりからなれば、此たびはやすくうけてよびかへし、殊によろこびあへりければ、をりをえて友人ども、さきに妻の心をつくし、こたび身をうりて、夫を志たてたる事ども語出て、又妻としたらばよかりなんと云に、父も其誠なる志を感じてゆるしければ、靑樓に通じて其よしを云、再請出すべき代などの事談じけるに、主人云けるは、此子は始より人がら殊にすぐれて、外の者のさほふを正しくする爲に、前にもをしみながら進じき、此たび參候ても、取あつかひよく、おのづから家も繁昌して悅しゆゑ、緣につけ、つかはし可申と存候、ところの間、代金などの沙汰にはなく候とて、さま〳〵にはなむけて、こしけるとぞ、

〔令義解〕二戸凡棄妻、須有七出之狀、一無子、（謂雖有女子、亦爲無子、更取養子故、）二婬泆、（謂婬者、蕩也、泆者、過也、須其姧訖、乃爲婬泆也、）三不事舅姑、（謂夫父曰舅、夫母曰姑、上條云、母之昆弟曰舅、父之姉妹曰姑、一字兩訓、隨事通用也、）四口舌、（謂多言也、婦有長舌、維厲之階、是也、）五盜竊、（謂雖不得財、亦同盜例也、）六妬忌、（謂以色曰妬、以行曰忌也、）七惡疾、皆夫手書棄之、與尊屬近親同署、（謂尊屬近親相須、卽男家女家親屬共署也、）若不解書、畫指爲記、雖有棄狀、有三不去、一經持舅姑之喪、（謂持猶扶持也、）二娶時賤後貴、（謂依律稱貴者、皆據三位以上、其五位以上、卽爲通貴、但此條曰貴者、直謂娶時貧苦下賤、弃日官位可稱而已、不必五位以上也、）三有所受無所歸、（謂無主婚之人、是爲無所歸、言不窮也、）卽犯義絕淫泆惡疾、不拘此令、

〔令集解〕十戸凡棄妻須有七出之狀、（朱云、文稱弃妻、則知弃者任夫意、弃者、未明、穴云、問、於弃妾亦依此例以不、答、可任夫意、不可用此例、古記云、問、妻有七出之狀、不弃、其夫科罪不、答、不科、聽不離也、但稱義絕不離者、科罪亦令離也、或云、妾已卑微、故唯稱妻耳、在釋皆、）一無子、（跡云、子者男子也、朱云、无子者、雖取養子猶弃離耳、无正子故者、私案任夫意歟、先不同、穴云、无子謂妻年五十以上无子也、夫年限不見令條、縱六十以上、更取繼妻耳、若取養子者、不合出妻、違者依律科罪也、[illegible]抑合勘律也、養子條无子者、縱有女子、爲无子、名例養者條節已說了、但於此條可勘、[illegible]古記云、无子、謂有女亦同爲无子、得養子、故謂五十以上也、〇中略）皆夫手書棄之、與尊屬近親同署、（或云、三等以上尊屬也、[illegible]釋云、妻之親屬也、一云、下條由祖父母父母是、但妻祖父母亦署、唐令釋云、男及父母伯姨舅、並女父母父及伯姨、東鄰西鄰、及見人皆署也、跡云、與尊屬近親同署、謂依下條由夫祖父母父母、若无祖父母父母父

母者亦是、此條云由近親、依令由三等以上親、若无三等親、亦依下條、夫得自由、朱云、下條一端、由祖父母父母者、舅從母等亦可由者、未知此親、雖并三等以上親、入近親句同耳乎、何、問云、尊屬近親讓孝答一事也、尊屬之近親耳、反問、近親何者、等以上親、凡此人親屬、答、下條所由諸親者、未明、然則尊屬者尊長也、近親者卑幼者、近親者凡三等以上也、穴云、手者進官司、以計帳時除弁耳、尊屬讓夫之祖父母父母也、近親謂依文更三等親等共署、案下无祖父母父母、前一端生文、近親共署故也、尊屬近親共无者、故上條舅從母從父兄弟、凡无此親及經妻之狀、悉故上條後定耳、[illegible]令釋、妻之親屬者、爲非說也、令釋依云、得理、又依唐令釋、男及男之親屬、東鄰西鄰及見人皆署也、未知女之祖父母等俱署儀以不、答、有令由知事耳、但不見共署、可求、古記云、皆夫手書弃、謂夫自子細共七出之狀記耳、與尊屬近親同署、謂下條云祖父母父母也、妻祖父母父母亦署也、若无祖父母父母者、伯叔姑兄弟等爲近親故也、若不解書、畫指爲記、古記云、謂夫不解書、書貸値人、合作牒狀、年月日下、夫姓名注付、食指點署、但食指爲記、注用此間與本令異耳、其記文遂里長也、朱云、若不解書指爲記、未知爲何、又云、若夫并親屬皆約文歟、○中略、娶時賤後貴、釋云、律內釋貴、多據三位以上及五位以上爲通貴、但此條稱貴、理色不必然、何若假令有貴竊自丁欲壞濟濱、賴妻貴給官仕、讓官若新之徒、不稱後貴、此令本意、塞而不通、隨事原情、於義允愜也、

〔大戴禮本命十三〕婦有七去、不順父母去、無子去、淫去、妬去、有惡疾去、多言去、竊盜去、不順父母去、爲其逆德也、無子、爲其絕世也、淫、爲其亂族也、妬、爲其亂家也、有惡疾、不可與共粢盛也、口多言、爲其離親、詩云、婦爲長舌、維厲之階、竊盜、爲其反義也、婦有三不去、有所取無所歸不去、與更三年喪不去、前貧賤後富貴不去、

〔令義解二〕凡結婚已定、謂已許婚訖也、無故三月不成、及逃亡一月不還、若沒落外蕃、一年不還、謂若遣使不歸者、計其應歸年、更復待一年也、此條無期年月者、皆計日也、及犯徒罪以上、謂本犯徒罪者、雖不身配、亦是、但過失疑罪者非也、女家欲離者聽之、

〔令集解十〕凡結婚已定、穴云、問、結婚何、答、許嫁訖是、仍自許訖日始爲三月、若有期約者、依期約日始許也、但此文稱許訖時、爲唐令云爲婚故也、[illegible]耳、朱云、問、結婚已定、未會之間、男死者、尙如夫著服、雖亦財物、又於夫何、答、不見可求者、無故三月不成、古記云、男夫无障故不來也、○中略、若沒落外蕃、一年不還、朱云、沒落外蕃、謂若被遣使不歸者、不限年遠近、常待者、云謂未明、遠令釋、或云、依下條因示事沒落外蕃不還、有親屬同居者、其身分之地、十年乃追者、比此文、可待十年者、此亦未明、後反云、同令釋、稱月者計日也、穴云、往蕃國使而不歸者、除可還年、而更待一年、不依待十年論也、三月、謂准服紀條耳、稱年亦如之、以案一年功過行能之心等耳、毛人抄略、亦徵外蕃也、古記云、沒落外蕃、謂被抄略及遭逆風流離之類、遣使者、非遣使、限終身待耳、及犯徒罪以上、朱云、犯徒罪以上、未知貴情特配色、并比徒之徒罪以上何、答、不離、不在本犯徒以上故者、此犯免所居官爲郡主耳、〔中略〕古記云、杖罪以上、若願、杖若爲、答、雖贖亦是也、過失并疑罪亦同、一云、除眞決以外、贖杖不合聽改嫁也、

〔令義解二〕凡弃妻、先由祖父母父母、若無祖父母父母、夫得自由、謂自由猶云自專也、卽將手書與之、里長遣籍帳時、令知國郡、據上條、若無尊屬者、須由近親、而此條唯擧祖父母父母者、文之省略也、若還其所賚見在之財、謂自妻家賚來之財物、妾亦同也、若將婢有子亦還之、

〔令集解十〕凡棄妻先由祖父母父母、（朱云、未知誰祖父母父母、或云、夫之祖父母等者、以何所棄、答夫之祖也、先云、何者患人方親故也、上條同署、亦此親耳者、穴云、妾不在此例、假弃留任男夫祖父母、謂男之祖父母也、○中略）夫得自由、（釋云、自由如猶言任意也、假令告知可由人弃耳、但以手書送里長、籍帳之時、共國郡知耳、○中略）若將婢有子亦還之、（穴云、家女馬牛亦還也、或云、同將婢有子者、奴子何、答不還、唯生婢）

〔令義解二〕凡毆妻之祖父母父母、及殺妻外祖父母伯叔父姑兄弟姉妹、若夫妻祖父母父母外祖父母伯叔父姑兄弟姉妹自相殺、及妻毆詈夫之祖父母父母、（謂、須舅姑告、乃爲義絶也、）殺傷夫外祖父母伯叔父姑兄弟姉妹、（謂、或毆或傷、皆是也、）及欲害夫者、（謂、若欲陷罪及害身並是、但毆夫者、輕於陷罪、故不入義絶、凡諸條稱妻者、繼妻亦同、但妾者弃、其夫死之後、妻妾犯此七出義絶者、亦依此例也、）雖會赦、皆爲義絶、

〔令抄戸上令〕義絶

戸婚律云、犯義絶者離之、違者杖一百、同律云、妻無七出及義絶之狀而出之者、徒一年、雖犯七出、有三不去而出之者、杖八十、追還若犯惡疾及姦者、不用此律、（○又見法曹至要抄）

〔永正記上〕一夫婦假服有無事

假令夫沈病席之時、爲通假服乞去狀之手書、太不可然、但雖爲病席互忘芳契、與手書令離別絶音信者、不可受服假、

〔御定書百箇條〕密通御仕置之事

同二年（寛保）極

一離別狀不遣、後妻を呼候もの、　所拂

但利欲之筋を以之儀に候はゞ、家財取上江戸拂、

從前之例

一離別狀不取、他江嫁候女、　髮を剃親元江相返す

但右之取持いたし候もの　過料

同

一離別狀無之女、他江緣付候親元、　過料

但引取候男同斷

〔ひとりね〕むかし神代の後までは、女房は目すきにしてたのしみける故、離別の三行半もすくなかりしが、親父欲にて、棟の高き家の娘のへんはをいとはず、子心親まらずとやらにて、めつたと緣を結びけるによりて、二廻ねのよろづ物いひさがなく、歸緣の種となる事ねがはしけれ、

〔翁草百三十九〕白川侯の書也とて流布する物有(不知實否)

妻と云は、元傍輩の娘を迎取候事、假初の事にては無之、上江申上、御免しを蒙たる上の事に候得者、いか樣の事有共、輙く離緣の沙汰に不可及といへども、我朝に於は、夫婦の和順を第一と致せば、是等に於ては、唐土の風に習ふべきにても無之候、離緣不致とも、夫の心得次第にて、いか樣にも事の靜まらざると云事不可有、既に離緣致せば、傍輩の娘を瑾を付、其親兄弟に間出來、於殿中面會致と雖、相互に言語をも不交、憤を含候事、是御奉公の妨にも成候へば、不忠の筋にては無之哉、此等之所迄も相考可申事に候、

〔日本書紀神代一〕一書曰、伊弉諾尊、已至泉津平坂、故便以千人所引磐石、塞其坂路、與伊弉冊尊相向而立、遂建絕妻之誓、

一書曰、絕妻之誓、此云許等度(コトド)、

一書曰、伊弉諾尊、追至伊弉冊尊所在處、便語之曰、悲汝故來、答曰、族也勿看吾矣、伊弉諾尊不從猶看之、故伊弉冊尊恥恨之曰、汝已見我情、我復見汝情、時伊弉諾尊亦慙焉、因將出返于時不直默歸而盟之曰、族離、又曰、不負於族、

〔釋日本紀六述義〕建絕妻之誓

私記曰、問何故讀建爲度(ト)哉、答案古事記曰、度事戶(コトド)矣、故今尋彼文而讀之、度者猶如言度、言絕斷夫妻之交也、古本云、古止止多知支(コトドタチキ)、但先師依古事記也、

〔日本書紀通證三〕私記曰、建絕妻之誓、古事記作度事戶、言斷絕夫妻之交也、(重遠曰、蓋互立異言之意、今按萬葉集云、玉桙(タマボコ))

之道附出立、往吾者、公之事跡乎、負而之將去、是離別之歌、則用此故事也、事跡之義、足以證焉、春秋傳曰、遂誓施氏、杜註、約誓不復爲之婦也、今按夫婦和合、而萬物育焉、雖則好合、而陰陽本自殊塗、或有一路、其坎則陽反爲陰所襲、於是諸尊能逃纒綿之情、遂建絕妻之誓、以死生相訣、蓋造端平浮橋以還、或合或離、或絕或續、蔑非書所以明陰陽之道也、讀者其致思焉、古今集云、流禮氏波、妹背山乃、中爾落留、吉野川乃、櫻也世乃、中顯照謂、此言、妹兄山、尙有吉野川流以隔之、世間夫婦之際、亦猶此、蓋比與離至睦、於其不趣乎別離之堺者、故總部尾載之、其旨深矣、

〔古事記上〕其妹伊邪那美命、身自追來焉、爾千引石引塞其黃泉比良坂、其石置中各對立、而度事戸之時、伊邪那美命言、愛我那勢命、爲如此者、汝國之人草、一日絞殺千頭、爾伊邪那岐命詔、愛我那邇妹命、汝爲然者、吾一日立千五百產屋、是以一日必千人死、一日必千五百人生也、

〔古事記傳六〕度事戸は、許登度遠和多須と訓べし、書紀には、建絕妻之誓と書て、絕妻之誓、此云許等度と あり、私記曰、按古事記曰、度事戸矣、故今尋彼文而讀之、度者猶如言度云々、今俗言に、人に受持さむべき事を言付るを、申渡すと云、よく似たり、引導を渡すと云はさらなり、さて書紀に書れたる字にて、大意は聞えたれども、許登度てふ言の意は詳ならず、故案に其誓の辭を指て云か、そは書紀一書に、盟之曰、族離、又曰、不負於族云々、これ即事戸の御辭にや、さて次に、次掃之神號泉津事解之男、○中略註とあるを思ふに、事戸は事解言の約りし語にもや有む、（中略）此記なるをば、師は舊本の如く、許等度邇和多留と訓て、夫婦同室に住しが、離て別戸に度り往意なりと云はれき、されど此の樣を思ふに、然意とも聞えたれど、書紀の字の如く、夫婦の交を絕つ謂の事と思はるゝなり、

〔古史傳五〕族離、○中略此は夫婦の御むつびを斷給はむとなり、其は上件の穢く畏き有狀を御覽じしかば、御怵を追て來坐る御心の失給ひつればなるべし、

〔伊勢物語上〕むかし紀の有つねといふ人有けり、○中略としごろあひなれたるめも、やう〳〵とこはなれて、つひにあまになりて、あねのさきだちて成たる所へゆくを、男まことにむつまじき事こそなかりけれ、今はとてゆくをいとあはれと思ひけれど、まづしければするわざもなかりけ

り、思ひわびて、ねん比にあひかたらひける友だちのもとに、かう〳〵今はとてまかるを、何事もいさゝか成事もえせで、つかはす事とかきて、おくに、

手ををりてあひみしことをかぞふればとをといひつゝよつはへにけり、かの友だちこれを見て、いとあはれとおもひて、よるのものまでおくりてよめる、

年だにもとをとてよつはへにけるをいくたび君を頼みきぬらん

〔伊勢物語上〕むかし男女いとかしこく思ひかはして、こと心なかりけり、さるをいかなる事かありけん、いさゝかなる事につけて、世の中をうしと思ひて、出ていなんと思ひて、かゝる歌をなんよみて物にかきつけゝる、

出ていなば心かるしといひやせん世のありさまを人はしらねば、とよみおきて出ていにけり、此女かく書おきたるを、けしう心おくべき事ともおぼえぬを、なにゝよりてかかゝらんと、いといたうなきて、いづかたにもとめゆかんと、かどに出て、とみかうみけれど、いづこをはかりともおぼえざりければ、歸り入て、

おもふかひなき世なりけり年月をあだにちぎりてわれや住ひし

〔大和物語上〕男女あひしりて、としへにけるを、いさゝかなることによりて、はなれにけれど、あくとしもなくてやみにしかばにや有けん、男も哀とおもひけり、かくなんいひたりける、

逢ことは今はかぎりとおもへども涙はたえぬ物にぞ有ける

女いとあはれとおもひけり

〔大和物語上〕故式部卿宮、三條のみやすどころ（〇醍醐女御、藤原定方女善子、）にたえ給ふて、又のとしのむ月のなぬかの日、わかな奉り給ひけるに、

故郷とあれにし宿の草のはもきみがためとぞまづはつみける

とありけり

〔拾遺和歌集 十四 戀〕くにもちがむすめを、ともみつ、まかりさりて後、かゞみを返しつかはすとて、かきつけてつかはしける、

影たえておぼつかなさのます鏡みずば我身のうさも忘られじ

〔拾遺和歌集 十九 雜戀〕忠君宰相まさのぶがむすめにまかりかよひて、ほどなく、てうどどもをはこびかへしければ、ぢんの枕をそへて侍けるを返しおこせたりければ、

涙川水まさればやしきたへの枕のうきてとまらざるらむ

〔古事談 二 臣節〕惟成辨、清貧之時、妻室竭善巧不令見耻云々、而花山院、令即位給之剋、離別之爲滿仲之聟、因茲件舊妻成怨、詣貴布禰祈申曰、不可怨卒、只令成乞食給ト云ヒ、百ケ日參詣之間、夢ニ告給ハク、件ノ惟成、無極幸人也、何忽成乞食哉、スコシキ有可構之事云々、不歷幾程、花山院御出家、惟成同出家、行頭陀云々愛件舊妻、辨入道、長樂寺邊ニコソ乞食スナレト聞得テ、饗一前白米少々隨身シテ隱居テ、抱キ入テ談往事、或哭或怨云々、入道承諾云々、

〔大鏡 五 太政大臣兼通〕この閑院の大將殿 ○藤原朝光 は、のちにはこの君達のは、○重明親王女 をばさりて、びはの大納言のぶみつの卿のうせ給ひにしのち、そのうへのとしおいてかたちなどわろくおはしけるにや、ことなる事きこえ給はざりしをぞすみ給ひし、○中略 もとのうへ御かたちもいとうつくしく、人の程も、やむごとなくおはしまし、かど、ふかうにおはすとて、かゝるいま北方をまうけて、さり給ひにしぞかし、○中略 あはれおきならが心にだに、いみじきたからをふらして、あつかはんといふ人ありとも、としごろの女どもをうちすてゝ、まからんは、いとをかしかりぬべきに、さばかりにやんごとなくおはします人は、ふかうにおはすといふことも、おきならが、やどりのやうに侍らんやは、○中略 さばかりの人だに、かくおはしましければ、それよりつぎ／＼の人の、い

かなるふるまひもせんことわりなりや、おきならがこゝらのとしごろ、あやしのやどりに、わりなきよをねんじすごして侍りつるこそ、ありがたくおぼえ侍りつれ、

〔大鏡 六 内大臣道隆〕三の御かた〇藤原道隆女は、冷泉院の四のみこ、帥宮〇敦道親王と申しをこそは父殿むことりたてまつらせ給へりしも、後々はやがて御中たえにしかば、すゑのよは、一條わたりにいさあやしくておはするとぞきこえ給へりし、まことにや御心ばへなどの、いとおちゐずおはしましければ、かたへは宮もうとみ聞え給へりけるとかや、そう客人などのまゐりたるをりは、御簾をいとたかやかにおしやりて、御ふところをひろげてたち給へりければ、宮は御面うちあかめてなむおはしましける、さぶらふ人も、面の色たがふ心ちして、うつぶしてなむ、たゝんもはしたにすぢなかりける、宮のちにはみかへりたりしまゝに、うごきもせられず、ものこそおぼえざりしとこそおほせられけれ、

〔源氏物語 二 帚木〕そのはじめのことすき〴〵しくとも申侍らんとて、〇中略はやうまだいとげらうに侍りし時、〇馬頭あはれと思ふ人侍りき、〇中略ものゝゑんじをいたくし侍りしかば、心づきなういとかゝらでおいらかならましかばと思ひつゝ、あまりいとゆるしなくうたがひ侍しもうるさくて、かくかずならぬ身をみもはなたで、などかくしも思ふらんと心ぐるしきをりをりも侍て、じねんに心をさめらるゝやうになん侍し、〇中略そのかみ思ひ侍しやう、かうあながちにしたがひおぢたるひとなめり、いかでこるばかりのわざして、おどしてこのかたもすこしよろしくもなり、さがなさもやめんとおもひて、まことにうしなども思ひて、たえぬべきけしきならば、かばかり我にしたがふ心ならば、おもひこりなんとおもひたまへて、ことさらになさけなくつれなきさまをみせて、れいのはらだちゑんずるに、かくおぞましくば、いみじきちぎりふかくとも、たえて又みじ、かぎりと思はゞ、かくわりなき物うたがひはせよ、行さきな

がくみえんと思はゞ、つらきことありとも、ねんじてなのめに思ひなりて、かゝる心だにうせなば、いと哀となん思ふべき、人なみ〳〵にもなり、すこしおとなびんにそへて、またならぶ人なく有るべきなど、かしこくをしへたつるかなと思ひ給へて、我だけくいひそし侍るに、すこしうちわらひて、よろづにみだてなく、物げなきほどをみすぐして、人かずなる世もやとまつかたは、いとのどかに思ひなされて心やましくもあらず、つらき心を忍びて思ひなほらんをりをみつけんと、年月をかさねん、あひなだのみはいとくるしくなんあるべければ、かたみにそむきぬべききざみになんあるとねたげにいふ時に、はらだゝしくなりて、にくげなることどもをいひはげまし侍るに、女もえをさめぬすぢにて、をよびひとつをひきよせて、くひて侍しを、おどろ〳〵しくかこちて、かゝるきずさへつきぬれば、いよ〳〵まじらひをすべきにもあらず、はづかしめ給める、つかさ位いとゞしくなにゝつけてかは人めかむ、世をそむきぬべき身なめりなどいひおどして、さらばけふこそかぎりなめれと、此をよびをかゞめてまかでぬ、

　手ををりてあひみしことをかぞふればこれひとつやは君がうきふし、えうらみじなどいひ侍れば、さすがにうちなきて、

　うきふしを心ひとつにかぞへきてこや君が手をわかるべきをり〈略○下〉

〔源平盛衰記〕二清盛息女事

御娘八人御坐ケルモ、皆取々ニ幸ヒシ給ヘリ、一ハ本ハ櫻町中納言成範卿ノ相具シ給シ程ニ、彼卿下野ヤ室ノ八島ヘ被流後、花山院左大臣兼雅ノ御臺盤所ニ成給ヘリ、實ハ成範卿ト左大臣家トハ兄弟ノ契リニテ、無内外中ナリケリ、〈略○中〉大臣或時、御乳人ノ三位局ヲ召テ御物語アリ、去々年ノ春、成範ノ女房ヲ雲上ニテ風ト見タリシヨリ心苦シキ思アリ、〈略○中〉三位局宿所ニ歸テ、大臣ハ由々シキ大事ノ病ハツキ給ニケリト歎ケリ、此局妹ノ侍從ヲ呼テ此事ヲ語、侍從申樣、其事ニ

ヤ、一日中納言殿ノ仰ニ大臣殿ノ御景色ハ、如何ニモ人ヲ戀給ト見エタリ、イカナル人ニ思ヲ殘シ給フヤラン、哀成篤ガ妻ナンドナラバ奉リナン、隔ナク申呪ビ奉ル詮ニハ、是コソ實ノ志ナレト被仰、カバカリ思ヒ奉ルトハ、ヨモ思給ハジト御心苦氣ニ候シゾヤ、參テ申テミン、トテ、立歸リツヽ中納言ニ私語申タレバ、打咲給テ、去バコソ能見タリケリ、嬉ク聞セ給ヒタリトテ、三位局ヲ召、見參シテ宜ヒケルハ、無隔角聞エ侍ル事、返々神妙ニコソ、是ヘ可奉入カ、其ヘ可進カ、御心ニ相叶ハン事ヲ計ヒ給ヘト、三位申ケルハ、〇中略是ヘ入進センモ、アレヘ入ラセ御坐サンモ、旁其憚アレバ、御心安モ思召バカリ、只離別シ給フト御披露候ヘカシト、中納言宜ヒケルハ、避ト申タラバ、我志ニハアラズ、如何ニモ奉公ノ爲ニコソ、悲キ別ヲセンズルニト聞エケレバ、三位、其ハ二三日モ過侍テコソ、此由ヲバ悉申入侍ラメ、兼テ申タラバ、定テ御心元ナク思召ベシト計ヒ申ケレバ、サラバ其義ニコソトテ、中納言、北方ニ此由被申ケリ、女房ハ、事ニ觸テ我ヲ捨ントオボスニコソ、懸ル樣ヤ有ベキト無限涙ニ咽給ヒケレバ、中納言モ袖ヲ絞テ、此世ニハ隔ナク志ノ色ヲ顯シ、後世ニハ繋念無量劫トカヤノ罪ヲモ遁給ヘカシト、爲我爲人、カク思侍ルニヤ、愚ノ御事ニハ非ズト樣々誓言ヲ申給ヘバ、其上ハ不及力トテ、心ナラヌ別ヲシ給ケルコソ糸惜ケレ、此由角ト披露有ケレバ、三位局ノ計ニテ迎取給ヒケリ、大臣ハウツヽナラズトゾ思ハレケル、中納言ハ、サスガ飽ヌ別ノ道ナレバ、忍ノ涙ヲ流給ヒケリ、彼朱明ガ妻ヲ避シ志、管寧ガ金ヲ斷シ情モ、角ヤト覺テ最ヤサシ、其後三位局、大臣ニ角ヤト申ケレバ、大ニ驚給テ、カクゾ送給ケル、

タグフベキ方モナギサノウツセ貝クダケテ君ヲ思フトヲシレ、ト中納言此歌ヲ見テコソ、サテハ御心ニ相叶給ケルヨト、歎ノ中ニモ悅給ヒケレバ、例ナキ情也ト人申ケリ、

〔吾妻鏡三十六〕寛元二年八月三日辛未、市河女子藤原氏事、於在柄社、不密通落合藏人泰宗之由書起請文、令參籠之間、以御使寂阿西佛、被加檢見之處、七日七夜、無其失之由各申之、仍市河掃部助入

道見西、所訴申之信濃國船山内青沼村、伊勢國光吉名、甲斐國市河屋敷等者、可令氏女領掌之、至市河屋敷者、氏女一期之後、可賜見西子孫之由、今日被定之、氏女者見西舊妻也、令相嫁之始、若離別者、可知行件所々之旨、成契約之間、任契状可充賜之趣、有氏女訴訟之時、令密通秦宗之旨、見西申之、依難被聞之、及起請參籠等沙汰云云、

〔淺井三代記〕十長政妻を送る事

長政十三歳の冬、父思案に、〇中略江南佐々木家の老臣に、平井加賀守と云者は、江南にての剛の者、佐々木とも縁者なり、此者の姫一人養女にして、長政と一所にせんとこはれけるに、平井も同心してけり、此姫容顏無雙なりとぞ聞えける、其後に永祿二年正月、新九郎年十五歳なれば備前守長政と名を改め、右の平井加賀守が姫とめあはす、其時に長政に理不盡に縁を組せける、〇中略其年四月、長政江南へゆかれ、平井と親子の盃せられよと久政被申候に付、其催し侍れば、長政遠藤喜右衛門尉、淺井玄蕃允などを近付申されけるは、我佐々木が家臣平井加賀と聟となるさへ口惜存、いかゞと思ひ候へども、父の命の背きがたくて過せしに、今剰へ江南へ立越、平井と親子契約を可仕との儀、以の外の所存なり、總じて弓馬の家に生を請るよりしては、其治亂の首尾を窺、天下に旗をあげ、武門の棟梁をも心がけてこそ武士の本意なるべし、其一國の内をさへ治かねる平井などに縁を組事、前代未聞のしわざなり、とかく平井が娘を送かへし可申と思ふなり、家老の者共にも内意を汝等兩人曲さに語りてたべと被申ければ、玄蕃允も喜右衛門も御尤とぞ申ける、かくて此旨家老共に潜に語りければ、尤と云者もあり、又國の騷動なるべしといふ者もありて、しばらく相談決定せず、其内に赤尾與四郎、同美作守、木村日向守など相談して、兎角久政へ此事案内なしに可被返、江南へは誰か可遣とありければ、長政、玄蕃允喜右衛門兩人、與ぞへに相定、永祿二年四月初に縁を切、平井が方へ被送遣る、平井大に驚き、立腹かぎりなし、この時より

南北鬪爭の初とぞなりにける、

〔藩翰譜五酒井〕岡崎の贈大納言家、〇德川廣忠伊勢の國に渡り給ふ時、御一門の人々、譜代の御家人等と謀て、再び岡崎の城に迎へ納れ參らせ、安部石川の人々と議して、水野右衛門大夫忠政の娘〇お大の方を迎へて北の方となし參らす、程なく若君御誕生ありしかば、德川殿の御事〇家康岡崎殿の御悦淺からず、〇中略斯て天文十二年の秋、德川殿の御外祖右衛門大夫殿卒去の後、下野守殿〇信元父の跡を繼ぎ、程なく尾張の國の織田に心を合て、今川殿に背き玉ふよし聞えければ、岡崎殿、大に驚き給ひ、廣忠むかし今川の力を頼みて、本國に歸る事を得たり、されば今に彼の芳恩を忘れず、然るに今川に向ひ弓を挽き矢をはげん者の妹、廣忠が妻にせん事、本意にあらずとて、同き十三年八月、北の方いたはらせ給ふことありしかど、忽に苅屋の城に送り返させ給ひけり、政親〇酒井心に思ひけるは、若君姫君渡らせ玉ふ御事なり、如何でかくつれなうはおはすべき、今川殿の好み絶たじとてこそ出し參らせ玉ふなれ、よし〱後日の御勘當は蒙るとも、此御所勞の最中に返し參らする事やあるべきと思ひ定め、おのが家に入れ參らせ、よきにいたはり奉り、若君姫君をへへ入れ、御名殘をしませ參らせ、御心地たひらがせ玉ひし後、士數多つけて苅屋の城にぞ送り奉る、かくて城のほとり十八町といふ所に至らせ玉ひし時、若君より御送りの爲に參らせし侍、淺羽金田二人を御輿のほとりへ召れ、自ら思ふ所あれば、此所に捨置て、おことらはとく岡崎へ歸るべし、竹千代殿〇家康の御事は、人々を頼み思召し、返す〱もかの御名殘こそをしけれと御涙と共に仰せければ、二人謹て承り、こは思ひも寄らぬ御事を承り候ものかな、如何で此所には捨置き奉るべき、只御館へこそ渡らせ玉ふべけれと申す、其時泣く〱仰けるは、みづからが兄にてまします下野守殿、さる腹あしき御人にて、おことら一人も生て歸らん事叶ふべからず、自らこそ思はずも岡崎殿に別れ參らせども、竹千代殿おはしませば、其方ざまの人々をば、如何ばか

りいとほしと思ふぞや、また竹千代殿めでたう生立ち給はん後、さすが遠からぬ間なり、なぞか終には下野守殿と親しうならせ給はざらん、夫に今おこどらが命失はれば、永き恨みの種となり、親しうなり給はん事如何にも叶ふべからず、自らが方ざまにて、竹千代殿の御爲に、ゑたしうも又便りにも御覽ずべき人は、下野守殿計りにこそおはすれ、おこどらをいとほしう思ふばかりにもあらぬものを、たゞ自らに任せよと泣きくどかせ玉へば、二人の者、おのれ等が命は、初めよりわが君に參らせ置きぬ、をしむ所いさゝかも候はず、去りながら御行末を遠く思召し謀らせ玉ふ御心を空しくなさせ參らせん事、げにも若君の御爲ゑかるべからず、此上は如何で仰に背き奉るべきとて、此所の里人等を召集て、是にまします御方は、下野守殿の御妹君にて渡らせ玉ふぞ、汝等御輿よく仕て、刈屋の御館へ入れ參らせよと云ひふくめて立歸る、餘りに御行方の覺束なさに、行きもやらず、五六丁が程を隔てゝ、遙かに御跡を見送る、案の如く、信元の兵、混甲百騎ばかり此方に向ひ、鞭鐙を合て馳來る、送り參らせし輩、稀有にしてこそ遁れたれ、松平紀伊守家廣も、岡崎殿の北の方の御姉に添ひしかば、是も刈屋へ返しけるに、送りし者共、一人も殘らず討れてけり、されば女にてわたらせ玉へども、海道第一と聞えさせ玉ひし弓取の御母にてましませば、御思慮の程いみじく、又政親が計ひ情ありとぞ申ける、

〔藩翰譜二 松平形原〕家信が曾祖紀伊守家廣、水野右衛門大夫殿の長女を妻とす、贈大納言家、（廣忠卿の御事、）岡崎殿の思北の方を、（徳川殿の御母、傳通院殿の御事、）返へさせ玉ひし時、家廣かの御姉に添ひまゐらすべきこと、岡崎殿の思ひ給はんこと憚り有とて、女子壹人設けし中なれども、刈屋に送り返してけり、

〔藩翰譜七下 細川〕忠興は、（〇中略）嫡子與一郎が妻の如何に女の身なればとて、正しく姑の自害せんを見棄てゝ、落ちたりし事の不覺さよと怒つて、與一郎に命じ、その妻をきつと追出すべしといひければ、與一郎仰せ謹みて承りぬ、某もかねて其よしを存じて、きつと推問に及びし所に、妻にて候も

の、幷に附き從ひし輩が陳じ候は、事急なるに臨みて、母上、妻にて候者に、か丶る時、大勢打連れ落ちんは、如何にも叶ふべからず、まづ疾く忍び出で給へとかくして追付侍らんと仰ありしに依て家を出でたるにて候、かく御自害あるべしと知りて候はんには、いかで忍び出づべきと申し訖んぬ、さらば其誤りなきに似て候かと云ひければ、忠興大に怒つて、父の命に背くの條、甚だ以て奇怪なり、向後のこと、長く對面に及ぶべからずとて、忽に勘當す、〇中略其後與一郎は妻に向ひ、我れ思はずも、御身のためか丶る不幸の身となりぬ、かくても連れ添ひ參らせてあらんには、世の人、忠隆が妻に惑ひてこそ、父に思ひかへたれと思はんも耻し、忠隆既に貧賤の身となりたり、妻の兄、加賀中納言が大名なるを便にこそなど云はれんも口をしとて、妻を出し、やがて入道し、休無とぞ號しける、

〔藩翰譜十二下山崎〕或人の語りしは、家盛が妻は池田紀伊守入道勝入が娘にして、參議輝政の妹たり、この妻極てみめわろく、手足さへふつ丶かに、力は普通の人には遙に超えたりけり、されば年頃夫婦の間も睦からず、されど怨むる氣色もなし、大坂の奉行等が軍起りし時、輝政は東國の御供にて、北の方は大坂にまします、此北方と申すは、德川殿〇家康の御娘にて、家盛が妻の爲には兄娵にてわたらせ給ふ、家盛大坂に留められ、中の渡の新關を守りしかど、元より東國に心を寄せければ、とかく謀りて輝政の北の方を盜み出して、おのが妾と其腹に設けし子後に甲斐守といふをば、おのが三田の城に落す、〇中略大坂に在合ふ人々の質參らせよとありしかば、家盛は妻を參らせんとするに、妻は夫に近きて無手と捕へ、護刀を引拔て、心元に差當て丶、古より女の夫の身に代りしためし珍しからず、されば如何に年ごろ情なうましますとも、夫となし妻とならんからに、御身に代りぬべき人なからんには、仰にこそ任せ申さめ、是はそれにも侍らず、まづわらはが兄娵にて侍ふ人をば、内府の姫君なればとて、自らの命捨て丶盜み出し參らせ、又いとほしと思ひ給ふ

人に幼き人をつけて、是も同じく落し、命に代へん料に、わらはは止め置きて、人々の手にわたれと承るは、餘りに恨めしき御計らひにも侍るかな、わらはつれなき人の爲に命うしなはんとも覺えず、猶もわらはに參れとや思し給ふならば、わらはも亦思ふ所あり、いかにやいかにと云はれて、家盛大に恐れ、宣ふ所ことわりにこそ侍れ、我過ちをば免し給へ、此上は如何で參らせ侍るべきと云ふ、さらばあやまらせ給ふとの言葉の末、いつはらぬよし誓ひ給ひなんやと、神に佛に掛けて誓はせて、年ごろ怨み思ひ參らせぬにはあらねど、色に出しても見せ參らせざりき、今はかく顯して言ひ出でなん、後再びまみえ參らせんとも思はずとて、供する女二三人召具し、傳馬かりて打乘り、三河國さして兄輝政の城に下り、やがて尼になりて天久院と云ふ、

〔紳書四〕松平豆州信綱の女を土井遠州に嫁す、琴瑟不調の事年久し、遂に奥方を鎖せし也、此事豆州聞て、○中略我女何の過ありて、かゝるはづかしめを請べきとて、川越の五十騎を急に呼て、在府の士三十騎を加へ、八十騎をしてむかへ取る、○中略水戸故中納言殿、御和調あれども豆州きかず、豆州息、甲州などは、黄門の仰なれば、ともかくも有べしやと有しに、豆州大に笑て、汝らは不覺の事を申ものかな、此女取返さんとせし時、伊豆守が身上にかへて奪ひし所也、しかるに本意のごとくになしおほせたる事幸といひつべし、しかるを今黄門の仰なればとて、ふたゝび嫁したらん時に、遠江守よりやめられて、かへされたらむにおいては、再び耻を見るべき事也、汝等短慮の至りなりとて、終に和を不聽、こゝにおいて豆州、女に髮あればむつかしとて、落飾せしめられしなり、

〔紳書四〕松平備前守子の彈正忠、織田殿の女をめとりてけり、○中略奥のつぼね憤りて、色々すゝめける故に、内室ふかく妬みて、里へ歸りてふたゝび歸らず、松平の一族より合ひて、むかしより女を出す夫はあれども、夫を棄る婦なし、ひらに御返しありて、扨奥方本意のごとく返すべしとあ

れ共織田更に承引なし、甲斐庄彈正、其時は喜右衞門といひしが取扱て、與方を彈正裏門より入れて、表の玄關へ乘物を寄せて、表門より出しかへすべきと云て事濟たり、

〔半日閑話 四〕於通、〇中略生國は播州網干の產也、池田輝政の臣鹽川喜太郞が妻にて、女子一人有しが、後に離別せり、是はお通は才智發明なるに、其夫喜太郞はさほどもなき故、耻辱のみ多かりしゆゑ離別すとかや、

〔大江俊矩記〕寬政十年十一月三日壬戌、入夜屋敷おかめ病氣ニ付、自分望ニよつて、新四郞離緣之上、心儘ニ養生致し度ニ付、弟初瀨川來方へ、喜代次郞一人連、今夜引越被行、此儀此間より治郞右衞門ニも相談之上、治定之事也、近日新四郞より、頭へ離緣願書被差出由也、賄料年分拾五石宛被行との事也、おかめ病氣は好酒也、全快之上は、如元呼戾し候との事、此後迚も、不通と申にては無之由、氣毒成仕合也、

〔大江俊矩記〕文化七年八月八日庚寅、渡邊權頭方へ、お柔不緣一件ニ付、先達及契約置、此節迄延引致し有之故、今日金五兩爲持遣贈之了、使佐門、手紙添、是はお柔不緣之儀、懸合甚六ヶ敷、緖形家一向承引無之ヲ、權頭段々取計を以、先々無風波雙方相治也、其以前、右緖形家不承知之儀ヲ、平和ニ可爲致承知ニ付而者、少々御出金無之而者難整、其意味は、お柔兩親之氣ニ不叶、家風ニ不向故、折角引取、內緣迄も相濟候へ共、乍氣毒御返し申度、併諸支度等も無之儀、笑止ニ有之事故、實ニ少分之儀ニは有之候得共、再嫁之節は、聊之寸志祝儀可相贈所存と兩家よりは被申趣ニ丹州へ申遣、右之邊迄ニ被懸懇情被申越儀故、此上は致し方も無之次第と緖形ヲ押へ、兩家ニ而は御疎意無之趣、申遣し度由予へ內談故、其節彼是愚存申談、其趣治定、扨出金之員數等申談之處、五兩ニ而可然旨也、迚も兩家よりは壹兩も可差出所存無之事故、申旨埒明不申事、却而示談之妨ニ可相成なれば、無致方予可出金、併予は自最初掛り合候事ニ而も無之、必竟舊冬權頭進退及難澁候節、無據被相願

中へ這入、彼是取扱候畢、縱今日雙方之平和ヲ相願ばとて、予之進退ニ無構、誠ニ横合より指出たる事、殊更大儀千萬成事故、少は權頭も推察有之、助力可給旨其節及應對處、彼方も必覺、お柔不縁後引取せ、話可有之存心之處故、夫ヲ直ニ笹山へ可被返樣ニ相成ニ於テハ、少々出金有之共、却而其方宜敷道理ニ付、是等之意味を以申談處、權頭も無是非承引、其邊ニ而令治定處、尤員數者、誰より何程可出ト云事ハ不申合置、即三位殿へ申入書面ニ、右再嫁之節、乍少々可相贈と云事御認有之、權頭へ被遣、其書面を以、權頭引請、笹山へ懸合、首尾能相濟、扨右出金之儀、再嫁之節と最初御相談申置候得共、笹山より申越候趣も有之候得者、何卒不縁治定、本人引取之節御渡可被下樣致度、且五兩御取揃御渡可被下旨、其後書面ニ而被申越、不縁之儀、大方落著之由被申越故、差當其節用意之金子迚は無之事故、予引請罷在上は、本人御引取之後といへども、金子差出ニおいて掬鬮無之儀、何分先達御引合申置候程之儀は、拙者相心得罷在間、御氣遣被成間敷、出金之儀、盆前後迄御猶豫可被下旨申答置、尤此節員數之事、彼是相爭候得者、お柔引取邪魔に相成故、態と如此申答置、去によつて六月朔日、無事故渡邊迄お柔引取相濟也、此書面到來は、五月廿六日頃也、其後權頭へ直面ニ、予兩三度面會候事雖有之、態と金子員數之論は不申出、只延引之斷而已申居也、此事予有深慮、三品公御了簡、一向難之御出金も無之樣子、前以令承知事故、中々不被申出時儀、權頭方者、右之所存故、是非是程之儀者、致し不遣者難成、成程外見ニモ、左程之儀者可有之筈之事也、此事以道理三品公へ申入者、却及御立腹のみならず、渡邊家さ往々不和之基たるべし、同社中ニ而、是式之儀ニ依テ、如是相成ん事、深欺敷事故、予其中へ入、雙方無風波樣可取治事、予本心也、金子員數之事、強テ論之セメ專隔也、全雖令出金不過五兩、予依御懇近來免困窮、又當年世俗所謂厄年也、仍以厄除之心五兩共悉於令出金者、無事平和可相治、勿論此儀不告三品公、於告者可歎御憤、故誠ニ予一己之取計ニテ、可相濟令決定所也、兩家近來困窮、仍如此仕合也、仍今日爲持遣、兩家へ者、出會之節たりとも、挨拶等無用之趣申遣、且先達及御懸合時、權頭にも少々出金有之、夫を以五兩之都合ニ可致筈之處、其後書面ニ、取揃可差出旨被申越故、今度五金共差送之趣、書面ニ申遣候處、權頭返書ニ、先達而御懸合之節、愚家よりも出金可仕樣ニ御聞取ニ候得共、其後五金共御取揃被遣候樣にと得貴意候故、此度五金被遣候旨、如何之間違に有之候哉、此方より右之内江出金仕候樣に者、夢々御懸合者不申、當方ニ而は、右等

雜載

之儀ニ不抱、彼是諸雜費多分、其上是等之出金覺悟も無之事ニ御座候、言語且御聞取之間違ど奉存候、左樣之儀ニ而は、一入御氣毒彌增し、御拜面ニ萬々可申解候趣返書ニ申來也、

〔言成卿記〕天保十三年三月二日、家公〇知言被仰曰、妹操阿野家夫婦不及和睦迚、雖順熟之間、及不緣之旨、從先方以媒士醫師齋藤章造被申、無左右次第令及領掌給云々、就之二ヶ條計御應對之儀在之云々、予奉之殘心徹骨髓、家公賢慮奉察、血泣洗襟袂、而無是非次第也、予心痛奉察家公賢慮已、

〔昨日は今日の物語〕一くわんとうの事なるに、いま井殿と云人のむすめを、かすが殿へよめにとられしが、いかなる事か有けん、やがてあくる日おくり返されし事、おぼつかなし、此時市川ひせんのかみ、

するとげてとてもいまゐのむすめ子に一夜のやどもかすがどんなり

〔草茅危言一〕公卿百官ノ事

一婚禮ハ人倫ノ始メ邦家ノ基ニテ、甚ダ大切ノ事ナルニ、我邦ニテハ如何ノ故ニヤ、古來雲上ニ於テ、婚姻ノ禮ハ絕テ見エズ、大寶ノ令條ニモ、嫁娶ノ式ハ曾テナシ、至尊ノ配ニ皇后中宮冊立ノ事ハ正ケレドモ、其始メヲ娶スレバ壻奚ノ拂ヒガタキニ出タルモ多シ、況ンヤ宗室群臣ニ在テ帷薄ノ修ラザル事、一切ノ風習ナリ、今ノ京トナリテ朝廷隆盛ノ間ハ、聘唐ノ命相繼テ、何事モ唐禮ヲ受行ハセラレ、典章文物彬々タルコトナリシニ、婚儀ノ式ノ事ハ何ノ沙汰モナク、舊風益々盛ナルコトニテ、伊勢源氏空穗竹取等ノ諸草紙ハ、往々寓言假托ニ出タルモノナレドモ、其時世ノ風ヲ模寫スルハ、皆信ジテ徵アリト云ベシ、和歌ノ專ラニ行ハレシモ此故ノコトナリ、紀秘書〇紀貫之ノ古今集ノ序ニ歎息ヲ發シ傚レシモ將ニ爰ニアリ、其風習終ニ朝廷ノ衰紐迄ニ及ビタリ、其後喪亂久シクシテ後ニ定マリタレバ、事一變シテ誰始ムルトモナク縉紳間ニ婚禮ノ儀起レリ、或說ニ慶元間ノ官命ニ出タリト雖モ、御式目ニ見エザレバ、其如何成ヲ知ラズ、其後追々武門

ト婚ヲ通ゼラルヽニ及テハ、公武打交リテ益々式モ定マリタル樣ニ見ユレドモ、唯家々ノ仕來リト云樣ニテ、今ニ雲上一統ノ通式アリトハ聞エズ、總ジテ儀文制度ノ備テ、天下ノ根本トナル朝廷ニ、此事ノミ闕如タルコト實ニ惜ムベシ、唯今堂上ニテ互ニ嫁娶アルハ、モトヨリ父母ノ命、媒妁ノ言ニテ聘スレバ、妻ト云フニマガヒハナキヲモ、朝士ノ間ニテコレヲ稱スルニハ、誰某ノ女ヲ御スヽミト云フ、其言今ニ存スルヨシ、大ニ義ヲ害スルコト也、何トゾ奏議ヲ經テ、禮官ニ詔リアラセラレ、先王ノ古禮ヲ斟酌シ、今日ノ式ニトリ合セ、朝廷ノ永制ヲ立置レタキ御事ナリ、是治定リテ禮ヲ制スルトアル意ニモ叶フベキ者也、

〔南留別志〕一吾邦は冠婚喪祭の禮なし、あるに改めたらんは僭なるべし、なきに定めたらんは王者の師なるべし、

〔政談七〕人扱

一妻ハ夫ニ從フコト道ナリ禮ナリ、然ルニ今ノ世ノ風俗、夫ノ家ノ格ニ不構、其妻ノ家ノ格ヲ夫ノ家ヘ持行テ、奢ヲ恣ニスル事以テノ外ノ事也、天子ノ姫宮トイヘドモ、人臣ニ嫁スル時ハ降嫁ト號シテ、天子ヲ親本ニ不立、同姓ノ諸侯ヲ親本ニシテ、天子ノ禮ヲ捨テ、諸侯ノ禮ヲ用、諸侯ノ女モ其家中ヘ嫁スル時ハ、父ノ諸侯ヲ親本ニセズ、同姓ノ家來ヲ親本ニシテ、諸侯ノ禮ヲ捨テ、大夫ノ禮ヲ用ユ、因是天子ノ姫宮ヲ公主ト云ハ、諸侯ヲ親本ニスル故也、諸侯ノ娘ヲ翁主ト云ハ、大夫ヲ親本ニスル故也、是古聖人ノ法也、後世ハ此禮捨レテ、公主ヲ尙スルト云事出來テハ、夫ハ妻ヲ主君ノゴトクアヒシラヒ、諸事格式以ノ外ニ超過シ、樣々ノ惡事生ジタルコト、歷代ノ先蹤明カ也、當時ノ有サマハ、異國ノ後代ノ例ノゴトクニテ、其害甚シク、夫ノ家法ヲ破リ、物入莫大ニシテ、夫ノ身上以ノ外ニアシク成、公家ノ娘大名ヘ嫁シ、大名ノ娘旗本ヘ嫁シ、又我家中ヘ嫁スルモ、皆此風俗ノ樣ニ成テ、志アル夫モ是ヲ制スルコトナラズ、是ハ上ヨリ制度ヲ立玉ハズンバ有ベカ

ヲザル事也、

一婚姻ニ金ヲ取ルコト當時ノ風俗也、是ニヨリテ娘多ク持タルモノ、身上アシクナル、金ヲ望ユエ相手有リガタク、男女トモニ年ヲフル迄獨身ニテ、子孫乏キ類モ多シ、又不相應ナル人ヲ、娘ニ取親ヲシテ妻トスル類モ多シ、獨身ニテ久ク居テハ、傾城町ヘアリキ、金ヲ使ヒ、惡キ病ヲ受テ、妾ヲ置、サマ〴〵ノ惡事是ヨリ出ル、總ジテ堂上方、又田舍ノ百姓ハ、大形廿歲ヨリ内ニテ婚姻スル故子孫多キ也、旁アシキコトナレドモ、内證ノコトナレバスベキ樣ナシ、武家ヲ知行所ニ置タラバ、自ラ此惡敷風ハ止ムベシ、サナクバ當分緣組ヲ用ル役人ヲ立テ願ヲ用ヒズ、上ヨリ極メ被仰付レバ此風止ムベシ、

〔十訓抄五〕抑妹せのなからひは、偕老同穴のゆゑありて、只うちある友にはなすらへがたければ、妻をもとむるには、上﨟は品をもえらぶべし、次さまにはみめ品をさきとすべからず、心をえらぶべきなり、○中略秦中吟と云に、

富家女易嫁、嫁早輕其夫、貧家女難嫁、嫁晩孝於姑、

などあれば、いみじく便有ても、夫のためなほざりならむ、女よしなくこそ、すべて妻を定る事法令の敎あり、

淳和帝の御代に、夏野大臣承て、律令をぬき定らるゝ時、男女の振舞を分ちことわらるゝ内に、妻を不去道三つ、可去道七あり、○中略又君ひとり臣を不可撰、臣又君を可撰と云事あれば、女もよく男をえらぶべきにあたれり、○中略長谷雄卿は、貧女吟を作て、男を撰ばむには心を見よ、人を見ることなかれと敎へ給へり、中にもあるまじからんふるまひは、よく〳〵つゝしむべし、

〔本朝文粹一賦〕貧女吟　紀納言○長谷雄

有女有女寡又貧、年齒蹉跎病日新、紅葉門深行跡斷、四壁虛中多苦辛、本是富家鍾愛女、幽深窻裏

養成身、綺羅紛粧曙無暇、不謝巫山一片雲、年初十五顏如玉、父母常言與貴人、公子王孫競相挑、月前花下通慇懃、父母被欺謀介言、許嫁長安一少年、少年無識永無行、父母敬之如神仙、肥馬輕裘與鷹犬、毎日群遊俠客筵、交談扼腕常招飲、一日之費數千錢、產業漸傾遊獵裏、家貧徒竭醉歌前、十餘年來父母亡、弟兄離散去他鄉、蕭夫相厭不相顧、一去無歸別恨長、日往月來家計盡、飢寒空送幾風霜、秋風暮雨斷腸晨、憶古懷今淚濕巾、形似死灰心未死、含怨難追舊日春、單居抱影何所在、滿鬢飛蓬滿面紅塵、落々戶庭人不見、欲披悲緒遂無因、寄語世間豪貴人、擇夫看意莫見人、又寄世間女父母、願以此言書諸紳、

〔兩朝平攘錄 四日本〕天王子娶于其族關白子、又娶諸大臣家、

〔源氏物語評釋 首上〕時世のありさまの事

夫婦のなからひなどの事は、上古よりのなごりにて、たゞよりくる緣にのみまかせて、これは本妻、かれは側室など、きはやかに名をつくる事だに、さばかりきよくはなかりしさま也、○中略これ今世もろこしざまの婚禮のさまとはいたく異なり、そのあるやうをかつ〴〵いはゞ、此物語また他し書どもに見えたるごとく、同じほど、それより少しづゝ上下の品はあれども、相偶ひてよろしきほどの家に、女などありと聞ては、たよりにつけつゝ文をやりて、其返事のさま、歌のよしあしなどを考へ、手のよしあしなどをも見て、いみじく心にかなへるには、心ざしを盡して、ひたぶるにいひより、又媒をたのみても心を盡すほどに、つひには事とげてかよひそめ、後にはあらはに女のかたへゆきて住などもするを、其女の父母など打聞ても、よきほどの事なれば、初はしらずがほして打すておき、後にはその婿に對面する類ひもあり、或はまた其男の心にかなはぬをば聞出すと、やがて制するもあり、又いと心にかなへるには、其女に文の返事などをしへてかかせなどもすることなりき、されば文をおくるばかりの事は、大かた何のつゝむこともなく、そ

の歌のかへしなどのめでたければ、なか〳〵いみじくいひはやして感ずることなりしさまは、帝に奏覽する世々の撰集にだに、その歌どもに作者の名をあらはしかゝれたるなどにて思ふべし、かゝるならはしなりしかば、まれには案外なる事ども、いでくめれど、それさしも名分をたて、いひさだめたる妻妾といふにもあらねば、大かたの事は、いみじき曲事とはおもはぬさまなりし也、貴き人だにかゝりしかば、ましていと〳〵下ざまには、さこそはさま〴〵なる事もありけめ、〇中略今世にしてさる事おこなひたらばこそあらめ、其世にはこれすなはち其世の夫婦の道なりしかば、誰一人ひがごとゝおもへることはなかりし也、〇中略猶いはゞ、我皇國は氏姓のすぢを重くする國俗なれば、男女の緣も、あまりに貴き賤しき事たがひたるは、ふさはぬ事なれば、いかに妾なればとて、あやしくやうたがひたる者の女などを、貴き人の側に近づくる事などは、昔はをさ〳〵なかりし事也、

〔信友隨筆下〕不娶同姓

按ずるに、周天下を奪ひて後も、なほ國人の般に事を忍びあへること、諸書にも其趣きかず〳〵みえたり、さるから件の禮制りたる主意は、婚嫁のひろくなりて、親みのあつくなる爲にしたることなるべし、

皇國にても唐國にても、戰國の後には、必ず女緣を以て親を厚くするならひなり、周公は其れをおもひはかりて、これを禮儀として、暗に其宿志にかなへたるものなり、

〔北史九十四倭國〕婚嫁不取同姓、男女相悅者卽爲婚、婦入夫家、必先跨火、乃與夫相見、婦人不淫妒、

〔禮記集註內則一〕取妻不取同姓、（鄭氏曰、爲其近禽獸）故買妾不知其姓、則卜之、（卜其吉凶）

〔秦山集雜著甲乙錄一〕予問垂加翁、〇中略神武帝時、諸臣奏以事代主大姬媛蹈鞴五十鈴姬命爲正妃、綏靖帝亦以事代主小姬爲正妃、安寧帝亦以事代主孫鳴王女爲正妃、此皆同姓婚姻也、事代主、目出雲及

中國領大國數國、諸臣有遠慮、奏以爲妃、是以天下太平矣、今之御三家婚姻亦如此也、我國多源平藤橘之姓、如避同姓、則不幾孤立乎、且堯爲黃帝五世孫、舜爲軒轅氏八世孫、是同姓也、相婚以授天下、此爲深慮、周室不娶同姓、婚姻僻求小國、成康以後、衰微不振、如與晉吳大國相婚、豈不爲唇齒之輔乎、垂加又不答、只稱美天文焉、蓋有微意乎、媛蹈鞴五十鈴姬、載神代上卷之末、舍人親王亦有微意而然歟、

〔玄桐筆記前篇〕紀州南龍院樣(○德川賴宣)姬君にお松樣とて、公(○水戶德川光圀)と御同年位なるおはしき、さもに養珠院樣に御座ありて、朝夕馴睦敷し給ふ、養珠院樣、南龍院樣をはじめ、御一所になし參らせ度思召けれども、御。三。家。の。御。緣。組。は、御。公。儀。御。制。禁。に。て。あ。り。し。か。ば、何卒して私に通せさせまゐらせて、御公儀へは、かやうの御私事あれば、外へ被進事も成がたし、此上は一所に取結びまゐらせ度と御願あれば、事濟べき御内談を定られて、局乳母と被仰含て、ひたと出合まゐらするやうにこしらへけれども、公穎悟なりければ、やがて推量し給ひて避給ひたり、○中略其比御書籍を御覽じて、同姓娶らぬ聖賢の式法を破ぶらん事無念に思召し、武士たる者の惜き命を擲げいだし、腹を切て、につこと笑て死するは何のため、畜類の屬に陷らん事、いひ甲斐なき事なりと嚴重に堪へ忍て、終にあやまちなくて過し給ひき、

〔桑山集雜著甲乙錄一〕稻荷神主大山佐兵衛無男子、同族議欲養同姓某爲子與息女婚、(左兵衛室、稻荷神主主水女、養子主水)姪、大山謂同姓不可婚而不聽、予(○谷重遠)語大山曰、不娶同姓西土之法也、然堯舜皆軒轅姓也、堯妻舜以二女、是亦爲天下婚同姓也、我國神武帝時、智臣有遠慮人、奏以事代主命女五十鈴姬立正妃、五十鈴姬自日神四代之庶流、神武帝自日神五代之正統、世遠族漸疎、則結婚復合族、是以天下泰平、當世與尾紀常三家婚、皆此意也、如不娶同姓、則如周家親族日疎、與小國婚、輔寡勢孤、而終爲他姓之天下、不可爲法也、且我國雖曰八十姓、今僅爲十餘姓、如固避同姓、迂恠亦多矣、大山不聽、遂去稻荷矣、秦姓爲彼神主、幾千歲、大山去後、養子亦早世、秦氏竟不傳守、是乖於神慮也、

〔南留別志 五〕一周防國に畜生谷といふ里有、母子兄弟の間にて婚姻をなすといふ、平家の餘類なるべし、敵をさけて人の通はぬ所に隱れ居て、子孫を長じたらんは、おのづからに一族の外に婚姻すべき族なかるべければ、里のならはしとなりためれ、

〔御定書百箇條〕密通御仕置之事

一寛保二年極 養母養娘、幷娘と密通いたし候もの、　男女共　獄門

一同 姉妹伯母姪と密通いたし候もの　男女共遠國　非人手下

○按ズルニ、本文婚嫁ノ正條ニアラズト雖モ、近親ノ犯姦ヲ處刑スルヲ以テ、其婚嫁ヲ禁ゼシコト明ナリ、

〔甲子夜話 四〕我〇松浦清曾祖松英君〇篤信ノ養女ヲ、乘賢〇美濃岩村松平氏養子ノ能登守乘薀〇林衡父ニ嫁シケリ、コレヲ敬信夫人トス、林氏ハ此夫人ノ襁褓ヨリ鞠養セラレシ人ナレバ、夫人ノ舊事ヲ能知リテ談ゼリ、夫人新ニ嫁セラレシトキ、其當日ニ禮儀畢リテ、ソノ舅ナル乘賢此時加列伴ヒテ表ニ出デ、親類衆ニ引合セ、又御先手頭奥御右筆組頭御同朋頭等、其事扱タリトテ招レ饗應アリシガ、其席ヘモ伴ヒ引合セ、世話ニ成シナド會釋アリシト云、實ニ世風ノ質實ナルコト、今ノ薄俗ヨリ見レバ驚ク計ノコトナリ、又ソノ婚儀一宗ノ簿冊數卷アリ、兩家ノ家來、互ニ掛合コトハ少クシテ、多クハ皆雙方頼ノ御先手衆同士ノ掛合ナリ、ソレ故ニ禮儀モ手重キコトニテ、中々今ノ世ノ省略ヲ專ラトスル類ニ非ズ、是等ニテモ其時俗ヲ見ルベキナリ、必竟事ヲ省ンドシテハ、サマ〲アラヌコト迄モ鄙劣ニ相議スルヤウニ成行テ、イツカ擧世家來同士ノ談計ノ世風ニ成リ堅マリシナルベシト林氏話、

〔大猷院殿御實紀附錄 二〕寛永十五年九月、千代姫君、尾藩へ御入輿の事仰出されし頃、名古屋へ阿部對馬守重次御使し、明年御入輿により、第宅華美に結構せらるゝよし聞し召れぬ、されども天

下敎戒の爲にも麗美を省かれ、いかにも手輕く構營あるべしと仰下され、また十六年四月白木書院に出まし、○中略彌儉約を守り沙汰すべしと面諭あり、

〔秦山集雜著甲乙錄四〕當春御入內、從關東爲其用脚金五千兩、被進上有栖川殿、雖是儉約御車也、諸大名婚禮用數萬金、蒔繪乘物雖極豐華、比御車鄙野之物也、

〔隨意錄八〕今世士大夫、男女嫁娶者、隨婿家之祿、而附之金、以其十分一、乃百石十金、千石百金、斯嫁娶之備、非固無官制焉、然世俗相習以爲常焉、則人不得守其制也、而百石之祿邑、其賦斂之實、大抵三十五石、此價率三十五金、而嫁一女之費、應婿家之祿、而附之其十分一之金、而且其衣服器物之備、亦流俗之弊、侈靡過其分限、則一歲之賦納、不足以償其費、是以無其備豫之家、則及女之年長、乃不能許嫁焉、或稱貸其財用、强得以嫁之者、亦至其負債難償、而竟窮困不可救也、斯不唯嫁娶、凡世祿之家、多疎乎活計、而服食器用、敝化奢麗、以至貧困者、萬世同流、以前所引恒產瑣言觀之、今彼淸之俗亦同此弊歟、

〔國俗變更歎識錄〕諸士の婚禮に壻入の時、舅より引手物に刀を贈る事は、古よりの禮式の殘れるにて、士の大禮なればさもあるべし、しかるゆゑに其翌日これを帶て舅氏に至り、厚く禮謝すべき事勿論なれども、近時は小身の士、白木の棒さやに入たるを引手物として贈るもあり、このゆゑに舅の家へ佩ゆきて禮謝の事をしらず、婚禮用の諸品を聞に、長持、乘懸櫃、挾箱、行水道具、扨は壻夫妻の定器の膳椀、又は四組の重箱なぞやうのものをはじめ、夜具ふとん衣服等、尤こゝろを盡しそなふる事と聞えたり、御上の御命令の旨にそむき、無用の品に財を費すの事多し、中にも行水道具抔は、湢浴を共にせざる程の大家の外、小身の面々には無用のものなれども、心を用ゆる所あらざるよりかくの如くなり、これらすべて御命令の旨にわきまへなきゆゑに、其制度の當然の所をしらず、士たるものゝ、道にそなふべきは、平常帶する大小刀よりして、兵具馬具等、利

方を専に考へ、何時武用の責を塞ぐ事のみをこゝろとすべき事なれども、治世久しきより婦女の好みに從ひて、知行俸祿を得るは、何の爲なりといふにも心なきより、世俗すべてかくの如く也、家人に常々よくさとし聞て、幾久しくこれをたもち行ふにおいては、衰たる世のならはしなりとも、などか小身なりに士人の矜式とならざることあらんや、

〔甕尻四十六〕今の婦女、多くは奏墮遊手にして、織紝を以て野卑の業と思へり、故に妓藝淫樂を習ひて、是を女家の業とす、亦謬ならずや、嫁の前へ必筬箱粘木を齎は何の爲、〔貞按、シンシ、キヌバリ、則機の具なり、洗張の爲にてばなしさいふ也、〕夫れ女は紡績織紝を以て其業とし、布帛を作りて夫家の用とす、故に婦女の針器より重きはなし、故におゐし絹張を第一とはせし也、後世は琴三味線等を目立ばかり持することそ、さらずとも覺えし、我先人、汝等嫁し遣す時、世人の俗に從へといひしに、先人曰、我婿を撰て只謹厚の人を求めし、彼家何ぞ妓器を用ゐんやとて、終に琴類を贈らず、皆汝等が知る所也と、皆謝して退く、

〔秦山集雜著甲乙錄七〕小笠原家、長女嫁時、有乘先輿婦人、謂之加津良、常住京都、臨有嫁娶來執事、次女以下不及此儀也、小笠原遠江守息女、嫁稻葉長守時予見之、先輿開戶、乘這子似七歲許人、八重姬君嫁水戶殿時、先乘白輿開戶、有婦人手執志伊之絹張、蓋式正也、白輿取其不飾之義、

〔秦山集雜著甲乙錄三〕天鈿女命、隨猿田彥神所乞、遂以侍送、女御御入內之時、有先御車乘者、此則鈿女命之故實也、俗亦作人形夫婦、前導新婦輿、亦古之遺法也、小笠原家一女居京都、有婚姻則下向、爲前立役、今猶有此法、

〔塵塚談下〕嫁娶の節、祝言に小謠の事、我等〇小川顯道若年の頃迄は、庶人町家の婚禮に、親族盃事の時には、必ず一座の者、小謠を諷ふ事定式にて有けり、近歲小謠の沙汰絕てなし、田舍にはこれ有事もあらんや、是等の故にや、其比の小童の手習師匠は、稽古終には、小童に謠を敎ふる事一統に有

しが、今は謠を敎ふる稽古所はなき樣子なり、

〔昔物語〕五六十年以前〇貞享元祿間の昔は、男立の若き衆も、緣組抔相談、自分よりする事は耻かしく思ひせざりし、親々より遠き親類、又は心易き友達を賴、悴(セガレ)へ云ひ含、兄弟迚も直談なし、今は子の方より親へ直談す、

〔婚禮推陳記〕婚禮の以後、振廻の日限は、三ッ目、五ッ目、七ッ目、九ッ目などゝ申也、

師傳に、出生の時は、三夜七夜などゝ、夜の字を云、死たる時者、三日七日などゝ云、日の字を付る、

婚禮は生死の間に執行ゆゑ、三ッ目五ッ目などゝ、目の字を付と知べし、

〔秋齋間語評〕尾州知多郡邊にて、よめ入のこと、富る人新に船をこしらへ、へさきに婿とよめの紋をするゑ、是にのせておくる、されば よめを御新艘とも云也、名ごや堀川へ來る海船に、ふたつ紋付たる多し、古風成ることにや、

貞丈云、よめの事をしんざうと云ことは、よめの居る家を新に造る故、その新宅をさして新造と云也、尾州の新艘のことは、其所の風俗のみにて、世上へはわたらぬ事也、

〔貞丈雜記一祝儀〕近世江戸にて、婚禮にかちんの上下、かちんの無地のしめを著し、腰に筋を織たるを、こしあきとて嫌ふ事、又三日の祝の餠は、古よりある事なるを、その餠の數五百八十と定め、かますといふ物にいれて、聟舅の使者、途中にて出逢ひ取替る事、又鯨尺をも取替る事、又かつらめと云女、婚禮の供をする事、とゞわげと云女(あくまはらひさもいふよしなり)を婚禮に召連る事、又よめ輿入る時、聟の門内にて、打合せの餠とて、老人夫婦餠をつく事、又よめ入の日、娶の輿を前をうしろへさかさまにかき出す事、又柳樽を屋内喜多留と書付をする事、又召がへのこしに、筒守、はふ子、犬はりこをのせて、戶をひらき、人の見物に備ふる事、又鴛鴦の衾、長まくらなどゝ云ものを作る事、此外常に替りたる事ども多し、是小笠原流なりといふ、小笠原の先祖は、信濃國の大名にて有ければ、

信濃の國の風俗歟、古京都にては無き事どもなり、右の事ども、我家傳には無き事なり、若し人、右の事ども尋ねとふ事ありとも、我家傳になき事に候故知らず候と答べし、右の事ども用べからず、世間にはやるとて、右の事どものまねをすべからず、家傳を守るべし、近世水島卜也と云浪人、小笠原流と名のりて故實にも無き作り事をして、弟子に敎え、世間にはやらかす、世間にもまた是を用ひもてはやす、今は江戸皆これを用る事になり來れり、かりそめにも彼の水島などのまねをして、故實に無き事を作り出す事なかれ、家傳に無き事を人尋るには、家傳にはなし、知らず知らずと答べし、

〔將軍德川家禮典附錄十下〕文久元辛酉年和宮樣御下向ニ付爲御迎罷登候役々書留

一御仲居之內一人　御婚禮之節百々面相勤るよし

但百々面と申は、御規式中の秘事にて、奥向女中抔も拜見不相成、著類其外、都而和宮樣御式之如く、屛風かこひの內にて、膳部其外の事共、御同樣なるよし也、

〔享保集成絲綸錄十七〕享保十六亥年十二月

覺

一明十五日大納言樣〇德川家重御婚禮ニ付而、町中火之用心之儀、家持者不及申、借屋店かり裏々迄、今明日別而大切ニ相守候樣、名主月行事無油斷、急度可申付候、尤萬事物噪敷事無之樣可仕候、此旨町中不殘入念可被相觸候、以上、

十二月

〔將軍德川家禮典錄十二〕家督緣組隱居家督願相濟候規則

一緣組、七月極月にかぎらず、折々可被仰付候事、〇中略

緣組願濟月

正月二月願候分　三月中相濟
三月四月願候分　五月中相濟
五月六月願候分　七月中相濟
七月八月願候分　九月中相濟
九月十月願候分　十一月中相濟
十一月十二月十五日迄ニ願候分　十二月十五日以後相濟
十二月十五日以後願候分　十二月晦日迄ニ相濟

右於御白書院緣類被仰付、老中申渡之、老中列座、

〔天保集成絲綸錄九〕寛政元酉年二月

寺社奉行江

二月十六日、御婚禮家齊○德川御內祝相濟候付、增上寺惇信院樣家重○德川御靈前江、　御名代　老中
白銀貳拾枚
東叡山浚明院樣家治○德川御靈前江　同
同斷　同斷

右之通御名代相勤候間得其意、增上寺幷上野執當江も可被達候、

〔天保集成絲綸錄十一〕文化六巳年十二月

寺社奉行江

十二月六日、大納言樣家慶○德川御婚禮相濟候爲御祝儀、東叡山浚明院樣御靈前江、　御名代　對馬守
白銀貳拾枚

右之通御名代相勤候間被得其意、執當江可被達候、

〔天保集成絲綸錄 九〕天明八申年四月

寺社奉行江

銀三枚　豊後檢校

鳥目貳百貫文　座頭盲女

今度御結納爲御祝儀被下之

〔天保集成絲綸錄 十〕寛政十一未年十一月

寺社奉行江

銀五枚　北尾總檢校

鳥目貳百貫文　座頭

同百貫文　盲女

淑姬君樣御入輿爲御祝儀被下之

〔天保集成絲綸錄 十一〕文化六巳年五月

寺社奉行江

鳥目貳百貫文　座頭盲女

今度大納言樣より姬宮樣江御結納被進候爲御祝儀被下候間、大場檢校江可被申渡候、

五月

〔天保集成絲綸錄 十一〕文化六巳年十二月

寺社奉行江

銀三枚　大場檢校

鳥目三百貫文　座頭盲女

大納言樣御婚禮相濟候御祝儀として被下之

十二月

〔寶暦集成絲綸錄 六〕寶暦四戊年十一月

今度大納言樣○德川家治御婚禮相濟候御祝儀之赦ニ、可成輕罪之者可被書出候、

〔天保集成絲綸錄 十〕寛政十一未年十一月

御勘定奉行江

淑姫君樣御入輿ニ付、赦被仰付候、輕罪之者可被書出候、

十一月

〔台記〕久安三年七月廿日壬午、人傳參議忠基、敎長等卿、中務少輔敎良、今夕行婚姻之禮云々、三人兄弟、一夜婚姻、人以謳歌、世以嘲哢、

〔藤葉榮衰記 中〕重隆御娘伊達白川御緣軍之事

抑東奥ノ側ラニ岩城ト號シテ、纔カ五郡ノ掟ニ備フ平重隆ト稱シテ、桓武天皇ノ末孫、代々弓箭ヲ執リ、繼踵テ政途不誤處ニ、一人ノ息女アリ、是ヲ幕下舟尾式部大輔、白川ヘ御緣ノ奏者ヲス、志賀方ハ伊達ヘ依奏者各荷擔ノ偏頗ニ諍ノ條、誠ニ以テ不只事、○中略然ルニ重隆、彼ノ姦佞倍々被唱サセ給テ、貞女不見兩夫處、一人ノ息女、兩夫ノ兼約、兩方ノ相論、於儒釋二門、前代未聞ノ爲時儀、畢覺ノ處、白川ヘ落著シケレバ、依此胸恨、志賀方伊達ヘ退散シ、爲始植宗、若干ノ軍ヲ率シ白川ニ出張リ、○中略白川ノ騷動止事ナシ、

〔先哲叢談 八〕高惟馨、字子式、號蘭亭、○中略十七爲瞽、○中略吾祖少年在江戸時、與蘭亭親善、嘗謂祖曰、余覔婚、媒媪云、有二氏、一則多姿色、而拙女工、一則有才德、而貌甚醜、吁才色並茂、自古爲難得焉、苟有一於此則足矣、余何之爲妻、祖曰、愛色者、目見而後心悅之也、未始有見、則醜美何論、不如納其善刺繡以

使理家事也、醐亭歎曰、誠然誠然、非交以信、孰能言之、然終令才德妻姿色、夫婦人雖不必責以德而亦不可以色爲主也、醐亭惑焉、果六娶終無子、

〔今日抄 三孝 明〕安政六年十二月十日、賜大宮街孝子源吉白銀七枚、○中略 母命取妻、而頤口增母飢、後喪之後初娶云、

〔平治物語 三〕牛若奥州下事

サラバ奥ヘ通ラントテ、先伊豆ニ趣テ兵衛佐殿○源賴朝ニ對面シ、此由ヲ申テ、若平家聞ナバ御爲不可、然去バ奥ヘ下リ侍ラントテ宣ニ、佐殿、上野國大窪太郎ガ娘、十三ノ年、熊野參ノ次ニ、故殿○賴朝父義朝ノ見參ニ入下リシガ、父ニ後テ後、人ノ妻トナラバ、平家ノ者ニハ契ヲジ、同ハ秀衡ガ妻トナラントテ、女夜逃ニシテ奥ヘ下ル程ニ、秀衡ガ郎等信夫小大夫ト云者、道ニテ横取シテ、二人ノ子ヲ儲タリ、今モ後家分ヲ得テ、トモシカラデアナルゾ、其ヲ尋テ行給ヘトテ、文ヲ書テ進ゼラル、

〔曾我物語 二〕たちばなのゆらいの事

さるほどに、すけどの○源賴朝ときまさ○北條に、むすめあまたあるよしきこしめし、いとうにもこり給はず、うはのそらなるものおもひを、風のたよりにおとづればやとおぼしめし、なひ〱人にとひ給へば、たうばら二人は、ことのほかあくぢよなり、せんばら二十一のかたへ御ふみならば、給はりてまいらせんと申けり、伊とうにて思ひしもまゝは、ゆゑなり、いかにわろく共、たうばらをとおぼしめしさだめられて、十九のかたへ、御文をぞあそばしける、どう九郎もりながは、これを給はりて、つく〲思ひけるは、たうばらどもは、ことのほかあくぢよのきこえあり、きみおぼしめしとげん事あるべからず、さあらばほうでうにさへ御中たがはせ給ひては、いづかたに御入あるべき、くわほうこそおとりたてまつる共、ゑゆせきは、いかでおとりたてまつるべきとて、御ふみを、二十一のかたへぞかきかへける、さてせうゑやうのつぼねしてまゐらせたりけれ

ば、○中略そののち、ふみのかず、かさなりければ、よな〳〵しのびて、つまをぞかさね給ひけり、かくてとし月をおくり給ふほどに、ほうでうの四郎ときまさ、きやうよりくだりけるが、みちにて此事をきゝ、ゆゝしき大事いできたり、へいけへきこえてはいかならんと、大きにさわぎ思ひけり、さりながら、しづかにものをあんずるに、ときまさがせんぞ、かづさのかみなほたかは、いよどの、○源頼義くわんとうげかうのとき、むこに取たてまつりて、八まんどの○頼義子義家いげのしそんいできたり、今にはんじやうありつる事、よにかくれなしと思ひけるが、いかゞせましとぞおもはれける、

かねたかをむこにとる事

かくてほうでうは、此事いかにせんとあんずるに、よにきこえなくば、すゑあしざまにはあらじと思ひけれ共、へいけのさぶらひに、山きのはんぐわんかねたかといふものをぞうだうしてくだりけり、みちにてなにとなき事のつゐでに、御ぶんを、ときまさがむこにとらんといひしことばのちがひなば、げんじのるにん○頼朝むこにとりたりとうつたへられては、ざいくわのがれがたし、いかゞせんと思ひければ、いづのこうにつき、かのもくだいかねたかにいひあはせ、しらずがほにてむすめを山きはんぐわんにとらせけり、され共すけどのにちぎりやふかゝりけん、一夜をもあかさで、そのよのうちにげいで、ちかくめしつかひける女ばう一人めしぐして、ふかきくさむらをわけ、あしにまかせてゆくほどに、あしびきの山ぢをこへ、よもすがらいづの御山にわけ入給ひぬ、

〔寛のすさみ追加上〕奥平傳八、父の讎隼人を討し時、○中略其中に一人の士、妻は稲葉丹後守殿の士の女なりければ預置けるが、或時來て、存ずる旨ある間離別すべし、何方へも再家して、親君の苦労にならざる樣に有べしと云ければ、多年睦じく過つる中、俄にさやうに仰あるは、大志有ての

事ならん、さもなくて徒に暇給りては、親に向て申分なく候間、其趣を語てたべとわりなく云ければ、夫もつゝみ難く、實は一味の義なれば、五三年中には大事に及べし、その時は討死又は刑罪に逢べし、御身は年若き身のいつ迄も流浪して、親君にもてあつかはれんこと、いたましくて申也と云ける時、妻は口口立入て本結のきはより髮を切、御利運にて御目に懸り候迄、此髮いろひ申まじと誓てなく〳〵別ける、かくて年月經て讎をうち、彼士もすくよかに助大刀して功成ぬれば來けるに、本結の間より髮のび出て、本結はその儘有しとぞ、貞節の婦人なりとて、細井廣澤の話し、

〔雜和筆記 一〕予嘗ヲ享保九年ノ夏、○中略宇治橋ニ到リ、橋姫ノ宮ノ前ヲ通リテ橋ヲ渡リ、通圓ノ茶屋ヲ右ニ見テ、落方町トカヤニ一夜ヲ借リヌ、○中略鄉導シケル老翁ノ申ケルハ、世ニハ不思儀モアルモノニテ候、當所ニテ謹ニ依ラズ婚禮ヲ致スニ、橋姫ノ宮ノ前ヲ通リテ行クコトナラズ、若シ宮ノ前ヲ通リテ婚禮スレバ、必ズ重病ヲ受テ身死ルカ、或ハ離縁セラレテ、再ビ夫妻ノ縁ヲ結ブコトナラズト年久シク申傳ヘ侍リヌ、其故ニコソ今ノ世ニ至ルマデ、橋ノアナタヨリ來ルモ、亦橋ノ此方ヨリ行クモ、皆小舟ヲ用意シテ、宇治橋ヲ除ケテ、遙カノ川下ヨリ往來シテ、婚姻ノ禮ヲ行フ、當所ノ古キ事業也ト物語セリ、

〔艶道通鑑 二〕釋の淨藏は、十三の歳に、早日本第三の驗者といはれて、法の驗を唐まで傳へ給ふ、○中略十五の歳、廻國の志有て中國にくだり、出雲の國に至りて、杵春の社に籠り給ふに、折しも十月の初、諸神出雲に集ひ給ひて、六十餘州の男女の結びをなんせさせ給ふ、有がたく面白き事に思ひ奉りて、耳をかたぶけたまふに、其國の神達、我氏子々々の才能年齢の給はせ給て、一人々々、女に男に窮させ給ふ、座に交るの御利益、いはんかたなし、かくて山城の國と聞えしかば、我故鄉の緣組、忘れる人にやあらんと心をすまし聞給に、平の中興が姫はいかゞ侍らんと有しに、それは

淨藏に嫁てさたしかに結ばせ給ふ、こは思ひよらず、我本師の跡をふみ、濟度の願とこそ思ひ立しに、穢らはしとおぼして、本意なくつぶやきながら下向し、すぐに都に歸り給ふに、折ふし大内より召れて、供奉のつとめに二三日直宿ありしに、八歳ばかり成小女の淨藏を見て、目もはなさず、去かも愛情のうつりて、去ほらしさいはんかたなし、茶の通(カヨヒ)するとて、淨藏の呑給ふ殘りを、いたゞきて打のみぬ、その底祝の盃す成願ざし成き、淨藏すはや出雲の御示現は、是を告させ給ふにこそとむねつきて、懐中より細刀を取出し、件の小女を取て臥さし殺して、内裏をにげ出て、二十年來、都によりつかず、○中略上にもいよ〳〵崇給ひて、内裏の御もてなしつよく、後には何さぞ妻をあはせて、聖の種つがせんとて、夜々の御伽人、臥具のあげおろしに、色よき女あまたつけ置せ給ひけり、其中にわきて朝夕の宮仕の念比成ありて、いつしかいとほしみ深く成にける、かくて二人の子を儲給ふ、布施飯尾の氏、今にあり、或時小夜の寢覺に肌にさはり給ふに、女の乳の下に大なる疵あり、これはいかにと尋給へば、少き時修行者に殺されしと承りしといふにぞ、扨は他生の縁なりと去りて、いよ〳〵まめやか成し、

〔吾妻鏡四十〕建長二年六月廿四日戊午、今日居住佐介之者、俄企自害、聞者競集、圍繞此家、觀其死骸、有此人之聟、日來令同宅處、其聟白地下向田舍訖、窺其隙有通艶言於息女事、息女殊周章、敢不能許容、而令投榻之時、取者骨肉皆變他人之由稱之、彼父潜到于女子居所、自屛風之上投入榻、彼息女不意而取之、仍父已准他人欲遂志、于時不圖而聟自田舍歸著、入來其砌之間、忽以下不堪悲、及自害云云、

〔土津靈神言行錄下〕公○保科正之素蓄紀貫之文筆跡、其所書者井筒女之所詠也、其倭歌曰、加世布計波、遠幾都志良奈美、多都太也末、與波仁也幾美加、比登里由久良武、于時公第四女松子、將嫁于加州太守中將綱利公、以此一軸授松子曰、井筒女者貞婦也、散樂謠云、死後亦其靈魂、弔亡夫業平之塚也、凡

諸歌者皆妄誕之事也、雖然其貞女之心不ㇾ可ㇾ誣、是貞女之所㆓以貞女㆒也、是故擇ㇾ之云爾、

〔おちくぼ物語二上〕またはすのついたち五日とさだめたるほどは、また月のつごもりばかりよりいそぎ給ふ、御むこの少將、たれをとり給ふぞとゝひければ、左大將どの、左こんの少將どのとかの給へば、いとをかしき君ぞかし、うちかたらひて出入せんに、いとよきことかなとゆるしければ、北のかた、はえありてうれしと思ふ、かの少將は、きたのかたのいとねたくにくゝて、いかでこれにわびしとおもはせんとおもひしみにければ、心のうちに思ひたばかるやうありて、よかなりけりといふなりけり、〇中略かくて、あさてなん、さはまり給へりやと、いとほしくおぼしたれど、かくなん申せば、よかなり、まゐらんといらへ給ふて、心のうちには、いとをかしと覺しけるやう、北のかたの御をぢにて、世の中にひがみしれたる者におもはれて、ぢぶきやうなるが、まじらふこともなき人の太郎、兵部少輔といふ人ありけり、少將おはして、せう〇少輔はこゝにかとの給へば、ざうしのかたに侍らん、人わらふとてえいでたちもし侍らず、〇中略と申せば、少將、いかゞようなし侍らんとて、ざうしにおはして見給へば、まだふし給へり、しれがましうをかしうて、やゝおきたまへ、きこゆべきことありてなんまうできとの給へば、足手あはせて、いとよく〳〵伸々して、からうじておき出、手洗ひゐたり、〇中略君はめは、などていまゝでもたまへらぬぞ、やまめぶ〇やまめ、一本作やもめ、しまては、いとくるしきものをとの給へば、せうのいらへは、あはする人のなきうちに、ひとりふして侍も、さらにくるしくも侍らずといへば、少將さはくるしからずとも、めまうけでやみ給ひなんや、せう、あはする人や侍るとてまち侍るなり、少將いでまろあはせ奉らん、いとよき人ありとの給へば、さすがにゑみたるかほいろは、ゆきのしろさにて、くびいとながうて、かほつきこまのやうにて、はなのいらゝぎたることかぎりなし、ひゝといなゝきて、ひきはなれていぬべきかほしたり、むかひゐたらん人は、げにわらはではえあるまじ、いとうれしきことに侍

るなり、たがむすめぞといへば、源中納言の四の君なり、まろにあはせんといへども、え思ひすつまじき人の侍れば、君にゆづりきこえんと思ひて、あさてとなんさだめたる、さるよういし給へ、せうのいらへ、ほいなしとて、わらひもこそすれといへば、少將、○中略つれなくてよもわらはじ、の給はんやうは、おのれなん、しのびてこの秋よりかよふを、少將とり給ふと聞て、おのれにはなれぬ人なれば、かう〳〵也、いかでえ給ふぞとうらみしかば、いとことわり也、さらばふようにこそは、かのおやたちもしり給はねば、まろならぬ人もとり給ひてんもをこなり、このたびあらはれ給ひねといひしかばなんといらへ給へ、さらばなでう事かいはん、よもわらはじ、さておはしかよひなば、人も覺えありて思ひなんといへば、さなゝりとうなづきゐたり、さらばあさて、夜うちふかしておはせといひおきて出給ひぬ、○中略中納言殿には、その日になりて、しつらひ給ふことかぎりなし、けふといへば、少將、兵部のもとへ、かの聞えしことはこよひなり、戌の時ばかりにおはせよとの給へば、こゝにもしか思ひ侍るといへり、てゝにかう〳〵といへば、ひんしれ人は、びんなからんともおもはで、人にほめられ給ふことはよもあらじ、はやういけとて、さうぞくの事いそぎ出したてたりければうちさうぞきていきけり、人々さうぞきぞして侍るに、おはしたりといへば入奉りつ、そのよはしれも見えで、ひのほのぐらきに、やうだいほそやかにあてなりければ、ごたちは、人にほめられたまふ君ぞかしと思ふに、うちつけほそやかになまめきてもいり給ぬるかなといひあへるをきゝ給て、北のかたゑみまけて、かしこくもとりつるかな、われはさいはひありかし、おもうやうなるむこどもをとるかな、たゞいま此君、大臣がねとてふきちらし給へば人々もげにときこゆ、女かゝるしれものとも知らでふし給ひにけり、あけぬれば出ぬ、○中略くれぬればいととくおはしぬ、○中略四の君はづかしけれど、いかゞせんとて出給ひにけり、物うちいひたるこゑけはひ、ほれ〳〵しくおくれたれば、女君藏人の少將などにきゝあはするに

あやしげなれば、我こそ懸ざらめとはいはまほしけれとおぼす、夜ぶかく出ぬ、みかのまうけいといかめしうし給ふ、さむらひのいるべき所、ざふしき所などさま〴〵にものすゑなどしてまち給ふ、御むこの少將まで出給ひていそぎ給、たゞいまの御世のおぼえのたぐひなき君なれば、もてはやさむとて、おとゞも、出ゐてまち給ふに、まづこなたに入給へとよばすれば、ゆくりもなくのぼりてゐぬ、火のいとあかきにみれば、くびよりはじめていとほそくちひさくて、おもてはしろきものつけ、けさうしたるやうにてしろう、はなをいらゝかし、さしあふぎてゐたるを、人々あさましうてまもるに、このひやうぶのせうに見なしてはえねんせず、ほゝとわらふ中にも、藏人の少將は、はな〴〵ともののわらひする人にて、わらひ給ふ事かぎりなし、おもしろのこまなりけりやと、あふぎをたゝきてわらひてたちぬ、殿上にても、ものよりことにおもしろのごまはなれてきたりとてわらふなりけり、かくれにゐて、こはいかなることぞともいひやらずわらふ、おとゞはあきれて、え物もいはれず、人のはかりたりけるなめりとおぼすに、たゞはらだちにはらだゝれ給へど、いと人おほく見るとおぼししづめて、こはいかでかく覺えなく物し給ふぞ、いとあやしくとの給へば、かの少將のをしへしまゝに、ほれていひゐたれば、いふかひなしとて、さかづきもさゝで入給ぬ、ともの人々はかくわらはるゝもしらで、すゑたる所どもにつきて、くひののじりて、ざにゐなみたり、人ひとりもなくてたちぬれば、せう、はしたなくて、れいのかたより入ぬ、北のかたきゝて、さらにものも覺えずあきれまどふ、おとゞは、おいのうへに、いみじきはぢみつるかなとつまはじきをし、いりてゐ給へり、四の君は、きてうのうちにすゑたりけるに、ふといりきてふしにければ、えにげず、ごたちはいとほしがりあへり、なかだちしたる人とても、あだかたきにもあらず、四の君のめのとなれば、いふべきかたなし、たれも〳〵なげきあかすに、四日よりは、とまるといひしとおもひて、むごにふせり、藏人の少將の君、よに人こそおほかれ、かゝるお

もしろのこまをば、いかでひきよせ給ひしぞと、いといふかひなかりけるわざかな、かゝるものと出入せんこそわびしけれ、殿上のこまと名づけて、かしらもえさしいでぬしれ物のいかでよりきにけん、そこたちの見はかりてし給ひつるならんと、わらひてうろうし給へば、三の君、さらにしらぬよしをいひて、いとほしがりなげき給、かゝるひが者なれば世づかぬ文は書出したる也けりと、人しれず思ひていみじくいとほし、巳午の時まで、手もあらはせず、かゆもくはせで、ありとあるかぎり、その御かたにとて、おほかりし人々も、たれかそのしれものにつかはれんとて、出きにしもいでこず、つく〳〵とふしたるに、四の君見るに、顔の見ぐるしう、鼻の穴よりは人とほりぬべく吹いらゝぎてふしたるに、心づきなくあいきやうなく成てやをら物するやうにておきて出たるを、北のかたまちうけて、の給ふことかぎりなし、おいらかにはじめよりかう〳〵したりといはましかば、しのびてもあらましを、所あらはしをさへして、かくのゝしりて、我も人もゆゝしきはぢをみること、たがなかうどしてしはじめしぞ、いへとせむれば、四の君、あさましういみじうなりて、たゞなきになく、我かゝる物あらんともしらぬに、つき〳〵しくいひければ、あらがふかたなし、○中略せう、いつとなくふしたりければ、おとゞ、いとほし、かれに手あらはせよ、ものくれよ、かゝるものにすてられぬといはんは、又たぐひもなくいみじかるべし、すくせや、さしも有けん、今はなきのゝしるとも、ことのきよまらばこそあらめとの給へば、北のかた、あたらあがこを、何のよしにてか、さる物にくれては見むとまぞひ給へば、あしきことなの給ひそ、かゝるものにすてられぬといはれんは、いかゞいみじかるべき、北のかた、こすならん時やさも思はん、たゞいまはさもせまほしくぞ有との給へば、ひつじの時まで、人もめみいれねば、せう、くるしうて出ていにけり、夜さりきたるに、四の君なきて、さらに出給はねば、おとゞいとゞはらだち給て、かくおぼえ給はんものをば、なにしかは、しのびてはよびよせ給ひし、人のしりたるからにと、

かくいふは、おやはらからふたかたにはぢ見せ給はんとやと、そひゐてせめ給へば、いみじうわびしながらなく〳〵出ぬ、せうなき給ふをあやしと思しけれど、物もいはでふしぬ、かく女もわびしとおもひわび、きたのかたもとりはなちてんとまどひ給へど、おとゞのかくの給ふに、つゝみて出給夜、いでたまはぬよありけるに、すくせ心うかりけることは、いつしかとつはり給へば、いかで子うませんと思ふ、少將の君の子はいでこで、このしれ物のひろごることゝの給ふを、四の君、ことわりにて、いかでしなんと思ふ、藏人の少將、おもひしもしるく、殿上の君たち、おもしろのこまはいかに、このごろとしかへらば、御ひきにてあをうまにいだし給へ、君とあれといづれをかおもひましたるとてわらふに、ちりもつかじとおもふこゝろに、いとくるしとおぼゆ、もとよりもいと思ふやうにはおぼえざりしかど、いみじういたはらるゝにかゝりてありつるを、これにことづけてすてんとおもひなりて、やう〳〵こぬ夜のみおほかれば、三の君物おぼす、

〔源氏物語帚木二〕式部が所にぞ、氣色あることはあらん、すこしづゝかたり申せとせめらる、○中略まだ文章の生に侍りし時、○中略あるはかせのもとに、がくもんなどし侍るとて、まかりかよひしほどに、あるじのむすめどもおほかりときゝ給へて、はかなきついでにいひよりて侍りしを、おやきゝつけて、さかづきもて出て、我ふたつの道うたふをきけとなんきこえごち侍りしかど、をさをさうちとけてもまからず、かのおやの心をはゞかりて、さすがにかゝづらひ侍しほどに、○中略なつかしきさいしとうちたのまんに、無才のひと、なまわろならんふるまひなどみえんに、はづかしくなんみえ侍りし、

〔白氏文集二〕秦中吟、○中略議婚、○中略

主人會良媒、置酒滿玉壺、四座且勿飮、聽我歌兩途、富家女易嫁、嫁早輕其夫、貧家女難嫁、嫁晩孝於姑、聞君欲娶婦、娶婦意如何、

〔住吉物語〕中納言、内まゐりこそとゞまり侍らめ、さもあらん人にみせばやとおぼすほどに、内大臣の御子に、宰相にて侍ける人、左兵衛のかみにて、廿五六ばかりなるが、よろづ人にすぐれたるに、此よしほのめかしければ、中納言いとよき事とて、霜月とさだめてけり、おそろしき心ともしり給はず、まゝはゝにいひあはせ給へば、よき事にこそといひて、下にはいとむねいたき事におもへり、中納言、たいにたちよりて、侍従にむかひて、内參りのとゞまりしはくちをしながら、さてのみやはとて、たゝん月に、左兵衛のかみにとおもふなり、そのよし心えておはすべしとて、はは宮の三條ほり川なる所をしつらひて、そこにすませ奉らんといとなまれけり、○中略まゝはゝ、なほこの事をそねみて、むくつけ女にさゞめきあはせて、此姫君を、さしもなからんずるげすにぬすませばやといへば、むくつけ女うちゑみて、うばがあにのかずへのすけとて、七十ばかりなるおきなの、めうちたゞれたるが、このほどとしごろのめにはなれて、人をかたらはんとするに、聞入るものもなきに、おもひわづらひ侍るに、此よしを申さばやときこゆれば、いひあはするかひありて、いとうれしくこそ、とく〳〵といそぎてとの給へば、かしこにゆきて、しか〳〵と聞ゆれば、かずへのすけ、しわぐみにくさげなるかほして、ほゝゑみて、あなうれし、よき事かな、中納言どのや、心えずおぼしめさんずらんといへば、それは北の方のよく〳〵はからひてなどいへば、それはよき事、あなめでたし、とく〳〵いそがばやといふ、よく〳〵かためてかへりにけり、まゝはゝに、しか〳〵と聞ゆれば、ゑみたばふて、たゞ神無月廿日頃など聞ゆれば、十日よりさきとさざめくを、心よせのしきぶ聞て、うちさわぎて、侍従にしか〳〵とたばかり給ふなり、おそれは侍れども、ゆゝしくつみふかき事に侍れば、あはれさになど聞ゆれば、○中略侍従も、いかにともおぼえずなどいひつゝ、とかくあんずるほどに、故はゝ宮のめのとなる女の、宮におくれまゐらせて、のちにあまに成て、住吉になん侍けるをおもひ出て、○中略さてあま君のもとへ行て、かきくどき

こま〴〵とかたりければ、まことにおぼしたつも御ことわりにこそ、今も昔も、まことならぬおや子のありさまのゆゝしさよ、まゝはゝながらも、いづくをにくしとか見給ふらん、あさまし、かゝるうきよなれば、思ひすて侍る物をとて、すみぞめの袖をしぼるばかりにぞ有ける、

〔枕草子八〕たのもしげなきもの

心みじかくて、人忘れがちなるむこの、よがれがちなる、

〔枕草子十〕たのもしきもの

いみじうしたてゝ、むことりたるに、いと程なくすまぬむこの、さるべき所などにて、しうとにあひたる、いとほしとや思ふらん、ある人の、いみじう時にあひたる人のむこになりて、一月もはかばかしうもこでやみにしかば、すべていみじういひさわぎ、めのとなどやうのものは、まが〳〵しき事どもいふもあるに、其かへる年の正月に、藏人になりぬ、あさましうかゝるなからひに、いかでとこそ人は思ひためれなど、いひあつかふは聞らんかし、

〔徒然草下〕妻子といふものこそ、をのこの持まじきものなれ、いつもひとりずみにてなど聞こそ心にくけれ、誰がしが聟になりぬとも、又いかなる女をとりすゑて相住など聞つれば、無下に心劣りせらるゝわざなり、異なる事なき女を、よしと思ひさだめてこそ添ひゐたらめといやしくもおしはかられ、よき女ならば、此男をぞらうたくして、あが佛とまもりゐたらめ、たとへばさばかりにこそとおぼえぬべし、

〔本朝文粹一賦〕男女婚姻賦以情竊相慕然後妊身爲韻　朝綱

至剛者男、最柔者女、彼情感之交通、雖父母難禁禦、始使媒介、巧盡舌端之妙、繼以倭歌、彌亂心機之緒、原夫尋形難見、聞聲未相、思切切而含笑、語密密而斷腸、琪樹在庭、對貞松以契茂、嘉草植室、指金蘭以期香、徒觀夫其體徹和、其意漸感、婀娜以居、類野小町之操、閑雅而語、抽在中將之膽、思兮急發、興也方

生、親堂堂而盡美、勢巍巍而傾城、染紅袖於百和、猶耽芬馥、携素手於一拳、已迷心情、矧夫女貴其貞潔、嫁成其婚姻、結千年之契態、快一夜之交親、晩露濕時、潤楚楚之服、夜月幽處、顯輝輝之身、占魏柳於黛、點燕脂於脣、昔纒羅帷、雖慙骨肉之族、今背紗燈、俄昵胡越之人、於是忍其初親、其後解單袴之紐、更不知結、露白雪之膚、還忘厭醜、豈同穴之相好、是終身之匹偶、則知形美者其愛深、感通者其身妊、不啻夫妻之配合、宜頼子孫之庇蔭、入門有濕、淫水出以汚褌、窺戸無人、吟聲高而不禁、是知媚感難免、誰有聖賢、苟陰陽之相感、知造化之自然、心屈闘臥、若忘歸於桃源之浦、精漏流眄、似覺夢於華胥之天、意惆悵而無止、思耿介而不眠、俾夫嬬婦與角子、莫不聞之相憐、

〔扶桑殘葉集十〕賀水戸少將婚姻詞　契沖

松に高き陰あり、藤に深き根あり、深きをうゑて、高きにをよばゞしげき枝となり、ながきかづらとなりて、あひにあへるさかりを、朝日のとよさかのぼりにいまみつべし、水戸の源宰相の御太郞なる少將の君、まだきびはにおはするに、あるひめぎみのかたおひなるがたぐはせたまふとか、そのゆゑつたへうけたまはることしかく〳〵なれど、こもまたたかまの浦のよそにもまたみぬさかひは、おきつなみかけてもわれらがまうすべきにあらず、またほうしの身にて、この事をいはひ申さん、はいかにおぼされんにか、されどおのが名におへるもじ、そのかたにはゆるさるべくやとて、なにはのあまのさへづりを、やまとうたになずらへてたてまつるもの、ひとつふたつはたぐへるかずとてなるべし、

とことはのとはのあふみにたぐひなくなづさひ。そむるにほのひな鳥

ふたなみの思ひつくばにあしほ山そがひはかけじよそのうき雲

〔風のしがらみ下〕冷泉爲村卿の息女、出雲國の千家なる、國造のもさへ嫁し行給ひし婚禮の夜の歌に、

打つけに何とかこよひいひ出んかはしもなれぬうひの手枕

〔兎園會集說〕白川侯の御歌　　龜屋文寶

兩國藥研堀、うなぎや草加屋安兵衞は、紀名虎が末流のよし、娘は松平越中守殿〇信定へ仕へけるが、〇中略後にこの娘、御いとま給はりて、牛込御納戶町、近江屋半四郞といへる者のかたへ嫁すべき時に、殿の御歌、

一かたに心さだめよ小夜千どりいづくの浦に浪風はなき

といへる御歌を給はりしとなん

古事類苑

禮式部十七

算賀上

古事類苑

禮式部十七

算賀上

算賀ハ年壽ヲ祝賀スルナリ、書籍中多クハ四十五十等ノ賀ト云ヒ、後世俗間ニハ賀ノ祝ト云フ、算賀ノ算ハ年齡ノ謂ニシテ、文選、赭白馬賦ノ齊算延長、聲價隆振ノ注ニ、言長命而聲價盛振、トアルガ如シ、又益算、延算、促算、減算等ノ語アリ、皆年齡ヲ云フ、四十歲ヨリ始メテ、十年毎ニ之ヲ行フ、算賀ハ原ト支那ノ風俗ナレドモ、我國ニテモ東大寺要錄ニ、僧良辨等、聖武天皇四十ノ御齡ヲ祝セシコトヲ記シ、又懷風藻ニ、五八ノ年ヲ賀スルノ詩ヲ載セタレバ、既ニ奈良朝ノ頃ヨリ行レシコト明ナリ、

天皇ノ算賀ハ皇后若クハ太上天皇皇太子等ヨリ奉祝シ給フ所ナリ、其儀先ヅ時日ヲ簡定シ、諸寺ニ於テ諷誦ヲ修シ、京中ニ賑給ヲ行フ、當日紫宸殿ヲ裝飾スルコト節會ノ如ク、御杖ノ机御插頭ノ机等ヲ列置ス、天皇出御アリテ御膳ヲ供ジ、諸臣ニモ饌ヲ賜ヒ、樂ヲ奏スル等ノ事アリ、太上天皇及ビ皇太后ノ算賀モ、大略天皇ノ算賀ニ同ジ、當日天皇其御在所ニ幸シテ躬自ラ拜舞シ、及ビ壽盃ヲ獻ジ給フ、其異ナル所ハ、其前二三日試樂アリ、賀ノ翌日後宴アリ、並ニ王卿ヲ召シテ遊宴シ給フガ如キ是ナリ、

人臣ノ算賀ニ至リテハ、希ニハ天皇ノ之ヲ行ヒ給フコトアリト雖モ、多クハ子弟自ラ、親戚知友ヲ會シテ宴ヲ張ル、要スルニ、算賀ハ飲宴ヲ設ケ、樂ヲ奏シ、詩歌ヲ賦スルヲ以テ主トス、

凡ソ年賀ノ當日ニ奉獻若クハ贈遺スル所ノ物品ノ數ハ、其年齡ト等シクスルヲ以テ例ト

ス、例ヘバ仁明天皇四十ノ御賀ニ、佛像經卷ヲ始メテ、牛馬調度等、凡テ四ノ數ヲ以テ奉獻セルガ如キ、藤原基經ノ五十ノ賀、藤原良房ノ六十ノ賀ニ恩賜セラレシ所ノ物品ハ、何レモ五ト六トノ數ナルガ如キ、藤原忠平ノ六十ノ賀ニ社寺各、六十箇所ニ奉幣諷誦セルガ如キ、三條西公條ノ七十ノ賀、勸修寺尹豐ノ九十ノ賀ノ時、和歌ノ短冊ヲ年數ニ應ジテ送レルガ如キ是ナリ、

公私算賀ノ作法、大概此ノ如シト雖モ、時ニマタ異儀特例ナキニシモアラズ、清和天皇ノ貞觀十年、太皇太后(順子)自ラ算賀ヲ行ヒ給ハントシテ、僧侶ヲ宮中ニ請ジテ讀經シ、賑給セシメ給ヒシガ如キハ、希有ノ例ニシテ陽成天皇ガ皇太后(高子)ノ爲ニ、四十ノ御賀ヲ行ヒ給ハントセシニ、適、國喪ノ故ヲ以テ、延テ翌年三月ニ至リテ行ヒ給ヒ、源能有ノ五十ノ賀ヲ翌年ニ行ヒシガ如キハ延引ノ例ナリ、執柄ノ算賀ハ、太政官之ヲ行フヲ以テ常トス、然ルニ貞觀五年、藤原良房ノ六十ノ賀、及ビ仁和元年、良房ノ子基經ノ五十ノ賀宴ヲ並ニ內殿ニ賜ヒ、又永延二年ニ、藤原兼家ノ六十ノ賀宴ヲ常寧殿ニ賜ヒシコトアリ、村上天皇天德元年、藤原師輔ノ五十ノ賀ノ時、親シク御盃ヲ賜ヒ、後宇多天皇弘安八年、西園寺實氏ノ妻ノ九十ノ賀ニ、天皇東宮ト與ニ林竹ヲ合奏シ給ヘルガ如キ、是亦特例ト云フベシ、龜山天皇ノ文永六年、後嵯峨上皇ノ五十ノ御賀ヲ行ヒ給ハントセシニ、元寇ノ變ニ由リテ遂ニ之ヲ停止シ給ヘリ、御賀停止ノ事前後其例ヲ見ズ

足利氏ノ末葉ヨリ、齊數ナラザル年數ヲ賀スルコト俗間ニ行ハル、卽チ四十二、六十一、七十七、八十八ノ如キ是ナリ、四十二ノ賀ハ、原ト厄年ノ爲ニシテ、イハユル算賀ノ謂ニアラズト云フ、俚言ニ、四十二ノ賀ハ父自ラ祝スルモノニシテ、餘ハ子ノ爲ニ祝セラルト云ヘルハ、未ダ據ル所ヲ知ラズ、六十一ハ俗ニ本卦(ホンケガヘ)復リ、又還暦ノ賀ト稱シ、生年ノ干支ニ相當ル年ナル

ヲ以テ、其生日ヲ賀スルモノナリ、支那ニモ之ヲ華甲重逢ナド稱シテ祝スト云フ、七十七ト八十八トハ、一ヲ喜賀ト云ヒ、一ヲヨネノ祝ト云ヘリ、喜賀トハ喜字ノ草體㐂ヲ拆テバ七十七ト爲リ、ヨネノ祝トハ米字ヲ拆テバ八十八トナルヲ以テ稱スル所ナリ、

名稱

〔書言字考節用集〕二時候 年算賀(ネンサンノガ)人四十歲、古來稱始仕、故賀焉、相承延年到百歲、猶修此式、見活法、

〔日次紀事〕臨時 高貴年。賀。

〔年賀之式〕凡人壽四十歲ニ滿ル年ハ、老者ノ初ト稱シテ、始テ延ルノ祝ナス事、是往末之壽算ヲ數ヘ老ヲ延ルノ祝ナリ、世俗ニ四十ト云響ヲ忌、是五八之賀ト稱ス、ソレヨリ次第ニ拾年滿ル時ニ、五十之賀、六十之賀、七十之賀、八十之賀、九拾百之賀モ有、昔ハ上壽ハ百二十歲、中壽ハ百歲トイヘリ、人生七十古今稀也トカヤ、然ユエ八十ニ滿ル人ハ、大誕之賀ト申テ、一ニ入ノ祝也、八十八ニ年數滿レバ米ノ賀ト申テ、俗是ヲ祝、米ノ字ノ畫八十八ト書故成ベシ、猶壽命長久ノ人ハ、九十ノ賀祝人モ有ベシ、高貴ノ御年數ヲ賓算申也、

初見

〔東大寺要錄〕一天平十二年十月八日、於金鐘山寺、良辨僧正、奉爲聖朝、〇聖武 請審祥師、初講花嚴經、其年天皇御年四十滿賀之設、講初開講時、空現紫雲、

〔三國佛法傳通緣起〕中 厥年〇天平十二年 天皇四十滿賀、始弘一乘、叡感洋々、

〇按ズルニ、是レ算賀ノ史籍ニ見エタル始ナリ、然レドモ續日本紀等ノ國史之ヲ載セズ、恐クハ僧徒ノ私ニ賀セシモノナラン歟、

〔懷風藻〕正六位上刀利宣令二首 〇今錄其一

五言賀五八年、

縱賞青春日、相期白髮年、濟生百萬聖、岳士半千賢、下宴當時宅、披雲廣樂天、茲時盡清素、何用子雲玄、

從五位下上總守伊支連古麻呂一首

五言賀五八年宴

萬秋長貴戚、五八表遐年、眞率無前後、鳴求一愚賢、令節調黃地、寒風變碧天、已應鑿斯徵、何須顧太玄、

〔菅家文集 七哀傷 十九〕西風淚露下

國俗四十以上爲老境、故至四十、而無恙者皆賀之、懷風藻、有賀五八之算詩、則其由來久矣、歷代倭歌、五十之賀、六十之賀、七十之賀、八十之賀、往々有之、九十之賀者、藤俊成藤貞子之外罕聞焉、

〔新儀式 四臨時〕奉賀天皇御算事

可奉賀天皇御算之年、中宮被奉賀之禮、或太上天皇、若東宮諸親王、有修此禮、延喜十六年、太上法皇行之、承和□年、皇太弟獻賀、豫定其日、洩奏事由、先於諸寺被修諷誦、又於京中令行賑給、當日所司、設御座幷公卿座於南殿、如節會矣、但侍從座、在宜陽殿西廂、延喜十六年、太上法皇奉賀之日、宜陽春興兩殿西廂二間立床子、其前立臺盤、弁備肴饌、兩殿前立吳瓶酒器等也、五位已上皆悉參會、諸國國宰入京者、并未得解由者、未出御以前、大臣奏請、皆預之、中宮職立御厨子於殿西第三間、納御衣什物等類也、法皇被賀之時、無此御厨子、唯每屋四間副北御障子、立淨和御手跡御屏風三帖、御帳東立同御屏風一帖、障子北又立二帖、西壁下北一障子又立四帖、殿西壁下、立棚厨子四基、設威儀御膳、殿南廂西第四間、立御杖机、法皇被賀、無此御厨子、并御杖机等、第六間立御插頭机、法皇被賀、南廂東第四間立此御机、同第六間立巻數函机一脚、第八同南北相並立酒器机二脚、其北置風爐臺盤、四立□羹八足机二脚、其西置火爐、炭取等也、庭中東西、相分立屯物酒食、延喜十六年、有此屯食、諸大夫著座之次、左右近衛府率近衛等開長樂永安兩門、以官史史生各二人、率左右外衛府舍人參入、自兩門運出庭中、酒食於中衞分給所々、卽又閉兩門云々、當春興殿前、立樸辛櫃也、延喜十六年、無此辛櫃、時刻出御南殿、延喜十六年、未出御前、中務卿親王參入、奏院御消息、卽出御、先令內侍執卷數函、奏覽了返置之、內侍臨東檻召人、延喜十六年無召、左近次將稱唯、率近衛等陣於殿前、右近又相應共陣、次親王已下侍從已上、參自日華門、列立庭中、謝座酒訖、各著座、延喜十六年、無此列立謝座酒儀、親王已下五位已上、只取獻物、參入、列立庭中、獻物畢儀著座也、次親王已下起座、執御贄、入自同門、列立庭中、大臣獨尙留同之、貫首親王稱唯申久、中宮進留御贄物、各稱畢、內膳官人、入自月華門、受捧物退出、親王已下歸座、內膳從西階供御膳、釆女轉供、延喜十六年、供膳亦同、中宮職司給上下饌、大臣從內、令奏可供殿上饗手長大夫等交名之後、有此役、延喜十六年、無此奏詞、唯以饗饌、賜殿上男女房女官諸陣諸司所也、三獻之後、延喜十六年、三獻之後、先大臣奏從院被奉御馬之由、仰令早牽之、大臣稱唯、下殿宣之、卽牽御馬播足、入自日華門、各以大夫一人近衛一人爲口取也、仰令騎之、大臣宣令騎

（之、大夫退出、歸覽訖、仰令下、大臣宣之、近衛下馬、兩行奉列庭中、大臣喚内竪、令喚左右寮頭、兩寮頭趨參、列左近陣西頭、西面立也、大臣起座、臨南檻、仰令給御馬、頭稱唯、令奉御馬出自月華門、又此間采女調和若菜御羹供之、又采女以供進和羹、頒給侍臣、其次有奏樂事、）大臣奏請召雅樂寮、可許訖、雅樂寮相分、參入自日月華兩門、於庭中奏樂、奏樂終頭、第一親王進插頭机下、執花勝而跪奉之歸座、大臣仰參議、以時花賜王卿已下插頭、（延喜十六年、大臣從内令奏云、以中務卿親王、令獻御酒插頭等、可許擧、親王起座召采女、采女稱唯、欲[illegible]御酒之時、親王進跪唱平、即乾坏、御揖訖、稱親王下自南階、西向拜舞、上自東階復座、行酒者給親王酒之式、行酒者給獻者酒之後、可有拜舞、仍仰以親王爲失儀、賜罰酒、音樂終頭、親王大臣相議、獻御插頭、良久而大臣進机下執之、御帳東跪待、御揖後大臣跪奉插、退歸座、以參議一人令折梅花、賜侍臣如先、次仰大臣喚院別當等賜御酒、大臣召遣別當等、掃部寮立床子殿巽角簀子、并左近陣南邊、但別當[illegible]殿上床子、近衛次將勸盃、行酒、判官代主典代、著左近陣座床子、造酒司并將監等勸盃、行酒五六巡之後、仰令給祿、中少將殿東廂北戸執祿物給之、有差、内侍傳持祿物、候此戸内、近衛將監等、賜判官代已下祿、先是納祿辛櫃立東軒廊、此間内侍以御衣并褂等、賜中務卿親王、以今日爲御使也、親王并別當已下、於庭中拜舞退出、）樂訖、雅樂退出、左近衛開長樂門、大藏省入自此門積祿綿、大臣奏見參文、少納言唱見參給祿、侍從并中宮職司屬已上預之、又於左近陣所、以衣被給大夫已下屬已上有差、職司以祿辛櫃衣被、給殿上侍從臣童子已上、并女房命婦藏人等、（延喜十六年、大藏省入自長樂門積祿綿、辨官奏目錄、皆同上、院別當給祿之後、大臣以見參附内侍奏之、覽訖返給、大臣復座、給參議、下殿就祿所、少納言唱見參、親王已下五位已上綿、并院被物等、院司同頒、祿綿侍同上、又於日華門外、給院雜色人等祿有差、）于時還御大殿、即召殿上公卿并侍臣堪管絃者於御前、給酒膳、令奏歌管、（延喜六年、中宮奉賀例也、延喜十六年、法皇奉賀之日、以衣裳什物珍饌等、被送中宮、内親王更衣尚侍等也、明日行幸太上法皇宮、有拜謝之禮、其儀大略同元正拜覲之儀、又後日仰近衛次將、從院奉御馬、令左右分取之、）

〔新儀式（四臨時）〕天皇奉賀上皇御算事

前一二年、先定行事人、（殿上公卿納言已上一人、并藏人頭五位六位藏人各一人也、）召内藏寮穀倉院内給所、前二箇月、定調樂所行事人、（參議一人、殿上侍臣、堪其事者二三許人、）并可獻舞童人々、（以親王公卿辨官、若近國受領、有息子者充之、或童親王、別有勅舞之、）先三四日、差納言已上一人、令申事由於上皇、先十日、行事等、向可設宴宮、定裝束事、預前五六日、定吉日、修御諷誦并賑給、（延喜六年、於仁和寺被修八講法會、後日有宴會事、延喜十七年、於七大寺、延暦寺、東西寺、仁和寺、各八講、布五百端爲布施、其使仁和寺參議、延暦東西寺四位侍從、七大寺五位、差遣左右衛門佐於朱雀大路、以米五百斛施行、延長四年、於京邊七箇寺、并南京七大寺、只被修御諷誦、又被行施行、又被奉度者百廿人也、無有宴會、依上皇固辭也、）先二三日、有試樂事、構舞臺於仁壽殿東庭、立大床子御座於壇門、其南設皇太子座、（疊上着也、）是其東南高欄下并南殿北簀子敷公卿座、敷舞

童座、舞臺北三四許丈、敷樂人座也、時刻出御之後、樂所行事參議等、率樂人參入、著座亂聲、奏參入音聲、此間大臣依召參上著座、次皇太子參上、次殿上親王公卿等參上著座、（獻舞童王卿、雖非昇殿者、預此座、）次賜酒肴、次發音聲、舞童進矣、御厨子所供御肴、舞訖舞童給祿有差、（納言已上子、綾紫色小褂、參議已下子絹紫色小褂、親王若在舞童之中、儛了即召殿上、或其師別給祿、又或納言已上子、有召候殿上、又樂所行事樂人等給祿、）先一日、行事所令覽御調度、事畢運出、同日行事人、參朱雀院勤行裝束事、當日早旦、行寢殿御裝束、其儀母屋東第三間、立太上皇大床子三脚、（南面、延喜六年、供平敷御座、天皇御座亦同、）其上立御脇息、又置唾壺打亂御匣等、當御後施四尺御屏風四帖、其東西磬折南行、立御厨子各五基、（五基納夏冬御衣、五基積錦帛各五十疋、延喜六年四基也、二基立母屋戸前、二基立母屋東頭、）東第二間北邊、立大床子二脚、為御座、（西面、）當上皇御座南廂鋪地敷二枚、其上敷四幅帛、備舞踏所、（延喜六年儀、只鋪錦也、）東廂當母屋二間、曲折立棚厨子四基、置威儀御膳也、上皇大床子御座西北角、差退立鎰匣、（有基、）東北角少退立御杖机、（延喜六年、無此机、）庭中去南階二丈立舞臺、中邊設舞童樂人座也、以東臺為今上御休息所、（内侍藏人先參候之、）以西臺為上皇御座、栢殿西臺為親王已下侍從已上侍所、以東二臺為御膳辨備所、以宜陽殿為樂人候所、以藏人曹司為舞童休息之所、上皇先遷御後、時刻皇輿出自朱雀門東掖門、至朱雀院、入自北門、於北屏下下御輿、步行入御、（所司設緣道、）左右次將持御劒璽筥、奉從御前、令侍臣先候氣色、天皇把笏著靴、進從東臺著御寢殿、次將持御劒璽筥、候奉相從、（延喜六年、直參西臺、有拜舞之禮、）令大中臣（○恐大臣誤、）申可御御座之由、上皇到御座、天皇到地敷拜舞、訖出御矣、爰太上皇、使公卿一人令請可著御座之由、天皇隨被示、進而著御座、次親王以下侍從内竪諸衛判官、執御贄、進自東臺南邊、列立庭中、訖各稱物名、貫首親王、喚院別當名、（延喜六年、只稱物名退歸、同十六年、雖喚別當、依不參、直退出、）以次退出、諸衛舍人持屯物退出、（屯物未御之前、立流水東庭也、召使院司頒給之、）獻物之間、供上皇御膳、辨備御臺盤二基、安置御前也、參議一人陪膳、殿上四位五位供膳、（兼院殿上者用之、延喜六年、供銀御臺四基并高坏物矣、又獻物之前供之、）次供御膳臺盤二脚、（延喜六年、供御高坏、）次供御酒、（延喜十六年法、盞供御茶也、）三獻之後、日行事公卿令奏樂、樂所於西門內奏亂聲三度、訖奏參入音聲、參議二人、相分立童親王前行事、大夫二人立舞童前相牽參入、上下樂工者相隨在後、曲訖各

著座、于時行事人候氣色、敷平敷御座於南廂、(上皇御座鋪第三間、今上鋪第二間、)天皇先下座候氣色、上皇又下御座、著御平鋪、次天皇著御、次第奏舞、此間有上皇命、召第一親王、舞畢親王有勅又召加、親王大臣參上、候簀子敷、(延喜十六年、供御膳、次召大臣幷僧正聖寶、齊世親王令候、賜膳賜菜、次召上皇之親王等、)晩景天皇奉杯獻壽、訖復御本座、舞訖奏罷出音聲退出、次左右近衛次將馬助等、牽出御馬十疋於庭中、奉覽訖有仰、更召近衛官人番長已上堪騎乘者令騎之、訖大臣仰令給於御厩、又上皇有命召書司、令供御琴等、有絃歌之事、于時令近習間、仰請院司等可預賞之者、此間行事人、於西廊院司已下奉從之者給祿有差、近衛次將、進於庭中唱名給之、縫殿寮給扈從親王已下侍從已上衣被、中務省唱見參、非侍從幷未得解由者、外記注見參、後日給之、御輿還宮、明日院別當公卿大夫幷判官代、皆敍一階、(延喜十六年、以僧如無爲少僧都、以法皇近習僧也、)

〔江家次第十九〕攝政右大臣(○藤原忠實)於法勝寺奉賀上皇(○白河)六十算、次第(天永三年十一月)

前一日、堂莊嚴、(如常)

當日寅刻、發小音聲、(神分)

卯刻、打衆僧集會鐘、

僧侶參上、著金堂左右軒廊座、

辰刻、御幸、入御之間發亂聲、

次公卿、依召著堂前座、

次被仰左右樂行事、

次發亂聲、(振桙)次從僧等、左右相分、置草座香爐筥、

次樂人發音聲、(一越調)迎衆僧、(左右共發聲、安樂鹽、)

僧侶參上著座

次樂人發音樂、(左右共河曲子)迎導師呪願、

導師呪願、著禮盤禮佛、諸僧總禮

次登高座、樂止

次堂童子著庭中座、左右各四人

次樂人發音聲、十天樂

次菩薩、八人胡蝶、八人各擎供花、

二行相分傳供、樂止胡蝶著草墪座、

菩薩留立

次發音樂、菩薩供舞畢、左次胡蝶舞畢、右

次樂人發音樂、廻坏樂左

次唄師著座發聲、樂止

次堂童子分花筥、

次樂人發音聲、左右共遊河島行道一行、

左菩薩、四人胡蝶、四人舞人樂人、

右同前　左僧侶　右僧侶

次樂人發音聲、韻應樂右

讃衆進唱讃、畢歸座、北庭樂右

次樂人發音聲、一弄樂左

梵音衆進唱梵音、歸座、酒胡子左

次樂人發音聲、鳥向樂右

錫杖衆進供錫杖、畢歸座、無舞右

次堂童子起座、返置花筥、
次導師表白、讀願文、　次呪願、讀呪願文、
次揚御經題名、賜度者、
次御誦經　次佛經供養
次給衆僧祿、
次導師呪願、降高座、著禮盤、禮佛退下、左右共宗明樂
次左右互奏樂、左阿摩　萬歲樂　蘇合　陵王　右地久　新鳥蘇　納曾利
次給公卿以下祿、
次御送物
引出物
次還御、還城樂
〔新儀式四臨時〕天皇賀太后御算事
前一二年、定行事人幷數日行事之人試樂等事、承平四年、試樂於弘徽殿前行之、皆同奉賀上皇御算之儀、或登算明年行之、元慶二年(三恐六誤)例也、文先定吉日、承平四年、以前十日被修、被修御諷誦於諸寺、幷賑給、被奉度者、亦皆同、上、貞觀十年、遣使於近京卌ヶ寺、平城卌ヶ寺、修轉經功德、錢寺別有數、賀皇太后卌算也、元慶六年、承平四年、十一ヶ寺修御諷誦、東大寺、興福寺、元興寺、大安寺、藥師寺、延曆寺、各調布五百端、西大寺、法隆寺、東寺、西寺、極樂寺、各四百端、同年以米五百斛、前六日於朱雀門賑給。前一日、內藏寮懸御簾於常寧殿、元應二年(元應二恐元慶六誤)殿給宴於淸涼殿云々、其身屋帳臺上、立御屛風八帖、北方五尺四帖、東西□尺四帖也、南廂東中間北邊敷毯代、立大床子三脚、南面、太后御座也、南廂東第二間、立大床子二脚、西南、皇上御座也、帳臺東邊立三尺御厨子二基、一基納御藥宮一合、藥碗幷攪審宮一合、御硯宮一合、續紙宮一合、一基納御薰物宮四合、西邊立同御厨子六基、納御衣宮十二合、夏御裝束五具、冬御裝束五具、御調度等、太后御座之間、孫廂鋪地敷二枚、其上敷四幅帛、備舞踏所、南軒廊四間板敷上、立棚厨子四基、供威儀御膳、菓二(二恐子誤)干物各卅種、同廊南第一間敷樂所行事

座、（北面東上）同廊東庭立舞臺、（四角立柳枝也、）南廊敷舞樂人座、同廊東一戸內立屏幔、同中戸不開、弘徽殿東立屏幔、麗景殿身屋西面懸御簾、西廂敷親王公卿座、（公卿帶宮大夫者、横座南面、自餘西面北上、穀倉院儲饗云々、）同殿北廂敷殿上侍臣座、（同院饗之）御殿東反橋南立屏幔、其間昇立祿辛櫃、（承平四年、五十合、）裝束訖、皇上先令后宮近習侍女候氣色、太后著御大床子、（先是當日未明、御常寧殿西方、）天皇把笏著靴、進自東方到地敷拜舞、訖出御、更又參御大床子、王卿以下取獻物百捧、入從南廊東戸、列立舞臺東庭、一々稱名了、第一人更喚宮亮名二聲、亮稱唯、出從麗景殿北幔內、進受御贄退入、非參議已下進入、隨出自麗景殿北門、王卿引還、頃之令藏人先喚宮大夫、（承平四年、參議平伊望朝臣座召、）大夫隨召參入著座、次王卿以次著座、（先是備其饗、）座定造酒正把空盞授貫首親王、親王進而勸坏於宮大夫、王卿以次勸坏、此間內膳司供中宮御膳、（其道經殿北御橋、入自西戸、）次供御膳、傳供采女可考之（〇可考之三字恐衍）如常、次樂人於承香殿西方起亂聲、次發參入音聲、自廊西戸參入、（承平四年、舞童廿人、彈琵琶二人、彈箏二人、唱音六人、唱歌六人、吹笛打鼓者、皆著座敷、）此間行事人付近侍女候氣色、供平敷御座、當御座南廂敷地敷、（上置茵、）又孫廂東第二間供御座、次供御膳折敷四枚、（承平□□□□□用銀折敷紫檀臺黃金御□□廚子所供奉之□）又御廚子所供御菓子干物等、此間奏舞、又天皇計程、奉盃獻壽、訖復御御座、次仰外記、令註諸大夫見參、（承平、諸大夫外任、并未得解由者、皆候侍從所、大膳職儲其饗也、）舞之終頭、舞童等自舞臺下、更自軒廊舞昇、列御簾前、賜被物、先進者舞還、後進者舞昇、次樂人調罷出音聲退出、此間少納言取見參簡、立舞臺東北角唱之、訖王卿已下給祿退出、候侍從所諸大夫、後日給之、明日又有後宴、殿上御裝束如昨日、但早旦撤舞臺、以軒廊西為奏舞之庭、弘徽殿前屏幔後、敷殿上侍臣座、南廊中戸以西、敷舞童座、以東敷樂人座、行事座如昨日、時剋頗間以東砌上敷座、召殿上王卿、（必皆不盡其員、）內藏寮儲酒饌、侍臣益送、數巡之後發音聲、樂所行事人引舞童以下、從南廊東戸參入奏舞、此間王卿移候於軒廊座、（西面北上、）王卿子孫在舞童中者三四人、舞終召上於軒廊、給御酒菓子、軒廊西敷座、召樂所行事、并唱歌者彈絃者、賜盃酒、調絃歌、從御簾中給王卿祿、拜舞退出、宮司等以祿給樂所行事已下樂人已上、次調罷出音聲退出、次日宮司并奉仕陪膳侍女等、各敘一階、亦同上皇院司等例、（承平四年、康子

（内親王爲二品、藤原朝臣兼子爲從三位、大夫平伊望爲正四位上、亮藤原忠幹爲正五位下、大進上毛野常行爲從五位上、少進藤原令問、多治助縄爲從五位下、源褡子爲正五位下、藤原吉子爲從五位下、同時子爲從五位下、）

〔正佐禮〕賀

當日主人以下東帶、賀主座定、公卿以下各著座、次有饗、次一獻、次二獻、次居冷汁、殿上人座居了、下座卿候氣色、次下箸如常、次舞人樂人入自中門、（先之於樂座吹盤渉調調子、卽發樂吹鳥向樂參入、）經南庭大鼓北著樂屋座、（樂屋一字、左右同居、）著座之後卽止樂、次發安樂鹽曲、曲了各退出、次日主人公卿已下衣冠、次主人公卿已下著座、次供膳獻如常、次舞樂、有萬歲樂太平樂等之樂、舞了樂人吹長慶子退出、次殿上五位持參御遊具、次獻盃如常、次管絃、公卿殿上人、幷地下堪事者少々役之、次管絃欲終賜公卿祿、（自下﨟賜之、）次公卿起座、次賜主人祿、（家司取之、）次主人以器等獻賀主、次公卿復座、次主人獻駿馬於賀主、（五位幷隨身等引之、）是大臣之賀也、以下準之、賀之儀多用三月、

〔年賀之式〕一賀ヲ祝月之事、寅卯辰ノ年ハ正二三月ノ内、我ガ生レノ年日ヲ祝也、是ヲ花ノ賀ト云、巳午未ノ年ハ四五六之内ノ年日ヲ祝フ、是ヲ扇之賀ト云、申酉戌之年ハ七八九月之内、年日ヲ祝也、是ヲ紅葉ノ賀ト云、亥子丑ノ年ハ十十一十二月之内年日ヲ祝フ、是ヲ雪ノ賀ト云、

〔年賀之式〕一子ノ方ヨリ進物之事、父ノ賀ニハ小袖、上下、腰之物、

一母ノ賀ニハ小袖、卷物、樽肴、

兩親ヘハ右ノ外折重、饂飩、盃臺、押臺、屏風、掛物等捧ルナリ、

一懸物ハ壽老人、左右ハ松ニ鶴、竹ニ水龜ナド、一文字中、緣ニ壽之字織付タル今織ヲ用ル也、

一屏風ハ大小共ニ一雙、繪ガラハ鶴龜、松竹、花鳥之類、大緣ニ壽之字有織物ヲ用ユ、裏ニ鳥襷ニテモ、龜甲形ニテモ用ユ、此屏風ノ事、昔ハ子孫ヨリ賀ノ壽ヲ祿シテ參ラセケルト也、色紙短冊ヲ押タリトイヘドモ、今ハ祝ノ繪ヲ用ユ、

一小袖ハ一重又ハ二重三重モ分限ニ可依、ノシメ、染小袖、又ハ法體ナド仁體ニ寄ベシ、下著等迄目出度モヤウヲ用ユベシ、

一樽ハ柳樽、天野樽ニテモヨシ、

一肴ハ三種五種分限ニ寄ベシ、何茂目出度心得ナリ、

一盃臺ニ松竹梅、西王母、桃花、橘等ヲ用ユ、品ハ臺之畫ヲ考ベシ、土器ノ内ヘ壽ノ字薄ニテ置事モ有、押臺モ畫ヲ考ヘ、壽命草、福壽草、福湢草ヲ用ユ、

一賀人ノ前ヘ出ス口祝之臺ハ、公卿ニテモ龜甲ニテモ、鏡ノ廣サ壹尺三寸、緣壹寸五分、腰九寸、コン青ニテ松竹鶴龜ヲ書、緣ニ家ノ紋ヲ書也、是ヲ蕨手ニ三足ニスルナリ、親子草ヲ敷、米ヲ緣八分程ニ敷、

柿、榧、栗、梅干、密柑、熨斗、昆布、數之子、

右九種ヲ置テ賀人ノ前ヘ出スベシ、是ニテ口祝有之、結熨斗ヲ子孫ヘモ手ヅカラ參ラセラルルナリ、

一祝之法、用本式、賀人ヘ式三獻、雜煮三コン、三々九度之盃事有ベシ、略ハ取肴ニテ三獻五獻之祝有ベシ

一祝之膳ハ、飾七五三賀人ヘ出ス時ハ喰料之五五三附ナリ、常之料理ニテモ吉、分限ニ應ズベシ、

一賀人ヘ夏冬御褥有ベシ、床之花、掛物、香爐、飾モノ等、分限ニ寄ベシ、○中略

一米ノ賀、自筆ニテ子孫ヘ給ル、

四十賀

〔壽算名目抄〕四十歲　强仕　曲禮曰、四十云强而仕、釋名曰、四十云强、言堅强也、

不惑　論語曰、四十而不惑　紹惑○紹惑恐解惑誤、下同、　拾芥抄曰紹惑

初賀。俗。稱。謂、本朝。通。規。也。

五八賀　四十賀也、日本後紀曰、天長二年十一月己巳朔丙申、奉賀太上天皇嵯峨五八之御齡、白日既傾、繼之以燭云々、是國史ニ四十賀ノコト、初テミエタリ、此後仁明天皇四十算御賀ノコト、續日本後紀ニ在リ、是天子ヘ賀ヲ奉リシ始ナリ云々、

著白裏　諸臣服、及四十歲時、其裏ヲ白クスルナリ、其服トハ直衣狩衣等也、位袍ハ其制ノ定有故、此限ニ非ズ、飾抄云、俊成卿及四十玉フトキ、白裏ノ狩衣ヲ著シテ院參アル時、成道卿、白裏ノ狩衣著シ玉フカトテ、落涙ノコトアリ、

〔閑田耕筆二〕四十を年賀のはじめとすることは、代々の歌集に見ゆ、西土にも四十を賀すること、王賓の詩に、昔年嶽降產英雄、誕節奇逢曰西東、萬善作臺天必壽、一恒立性德何窮、文章五色鳴時鳳、豪氣千尋貫斗虹、四十古來稱始仕、桂秋留意爲君紅、と見えたる旨畑橘洲示さる、しかるに初老といふことの出所、かしこにはありやいなや、こなたにても例あること人多くしらず、おのれも近年に及びて、或書に、菅家文草を引たるにて見出たり、左金吾相公、於宣風坊臨水亭、餞別奥州刺史と題ある詩に、相公送君君知不、爲我君聞說本因、程里一千五百路、星霜四十六廻人、人是初老路何遠、所以流連歲再巡、下略　四十年滿に限らず、五句までの間を云べき證とすべし、

〔續日本後紀十九仁明〕嘉祥二年三月庚辰、興福寺大法師等、爲奉賀天皇寶算滿于四十、奉造聖像卅軀、寫金剛壽命陀羅尼經卅卷、助轉讀四萬八千卷、竟更作天人不拾芥子、天女羅○女羅、類聚國史作衣羅拂石、翻擎御藥、俱來祇候、及浦島子、暫昇雲漢而得長生、吉野女、眇通上天而來且去等像、副之長歌奉獻、其長歌詞曰、日本乃、野馬臺能國遠、賀美侶伎能、宿那毗古那加、葦菅遠、殖生志津津國固米、造介牟與理、瀛津波、起津每年爾、春波有禮度、今年之春波、每物爾、滋榮氏、天地乃、神毛悅比、海山毛、色聲變志、梅柳、常與理殊爾、敷榮、咲万比開天、鶯毛、聲改氏、八千種爾、奇事波、茜刺須、天照國乃、日宮能、聖之御子曾、瓠葛、天能、梯建、踐歩美、天降利坐志志、大八州、天津日嗣能、高御座、萬世鎭布、五八能、春爾、有氣利、我國之、聖乃皇波、尊毛御坐加、日宮

能、聖之御子能、天下爾、御坐天、御世御世爾、相承襲氐、每皇爾、現人神止、成給、御坐世波、四方之國、隣皇波、百嗣爾、繼云止毛、何氐加、等久有牟、所以爾、神毛順比、佛左倍、敬給布、益益爾、今我帝波、往古爾毛、不御坐志、將來毛、何申牟、釋迦之法、弘米給比氐、出家之人、法乃族、達罪有度、赦賜部、勞有止、宥米賜部、无譬岐、御恩乃、異廣久、御坐世波、出家人、法族波、御世御世爾、恒爾惜牟度、年月遠、堰加倍留天、不過須氐、鎮牟止許曾、誓願比、請申勢、然禮毛、度世之理度、歡之、春爾、有介利、何志氐、帝之御世、萬代爾、重爾飾里、奉、令榮度、栢之枝乃、由禮波、佛許曾、願成志倍、多、聖而已、驗波、伊萬世、所以爾、帝遠、鎮布爾、驗万須、陀羅尼乃、御法、卌卷乎、寫志、繕倍、護成須、聖之御像、卌軀、奉造氐、卌之師乃、悟開介天、行布、人遠、調倍氐、誠乎、致志、四萬爾、八千卷、添氐、誓願、奉讀利、飾○飾、類聚國史作飭、祈、鎮申世利、行倍留、此之所爲乃、態乎、何爾天、志陳倍、開江止、牟、茜刺須、終日須加良爾、烏玉乃、狹夜通左右、時日經天、思付爾○付、類聚國史作付、落端乃、堰○堰下、類聚國史有倍毛二字、賀爾天、世中乃、伊須賀志態遠、添飾利、申志曾、上留、就中爾、大海乃、白浪開氐、常世島、國成建天、到住美、開見人波、萬世能、壽遠、延倍津、故事爾、云語來留、澄江能、淵爾、釣世志、皇之民、浦島子加、天女、釣良禮來氐、紫雲之○之、類聚國史作泛、引氐、片時爾、將氐、飛往天、是曾、此乃、常世之國度、語良比氐、七日經志加良、無限久、命有志波、此島爾曾、許有介志、三吉野爾、有志熊志○熊志二字、類聚國史作態志爾三字、天母○母、類聚國史作女、來通氐、其後波、蒙譴天、毗禮衣、著氐、飛爾支度、云、是亦、此之島根乃、人爾曾、許有岐度、云那禮、五種乃、寶雲波、大悲者乃、千種乃、御手乃、人乃世遠、萬代延留、一種乎、別爾莊天、萬代爾、皇乎鎮倍利、磯上之、緣乃、松波、百種乃、萬爾、別爾、藤花開榮叡氐、萬世爾、皇乎鎮倍利、鷲波、枝爾遊天、飛舞氐、囀歌比、萬世爾、皇乎鎮倍利、澤鶴、命乎長美、演爾出氐、歡舞天、滿潮乃、無斷時久、萬代爾、皇遠鎮倍利、薰修法之力乎、廣美、大悲者之、護乎、厚美、萬代爾、大御世成波、如八十里城爾、芥子拾布、天人波、擧手氐、不拾成奴、如八百里磐根乎、毗禮衣、裾垂飛波志、拂人、不拂成天、皇乃、護之法乃、藥乎、擎持、來候布、如是鎮倍留、事者、每事、雖劣、每物、非數禮度、旅人爾、宿春日奈留、山階乃、佛聖乃、奉獻布里、奈大御世乎、萬代祈利、佛爾毛、申上流、事之詞波、此國乃、本詞爾、逐倚天、唐乃、詞遠、不假良須、書記須、博士不雇須、此國乃、云傳布良久、日本乃、倭之國波、言玉乃、富國度曾、古語爾、流來禮留、

神語爾、傳來（禮留）、傳來、事任（万留）、本世乃、事尋者、歌語爾、詠反（志天）、神事爾、用來留、皇事爾、用來（禮利）、本乃世爾、依遊氏、佛毛爾、神毛爾、擧陳氏、禱里志、誠波、丁寧度、聞許志氏、食牟、嬰兒乃、咳（○咳類聚國史作欬）語仁、折箸乃、本末不知、亂絲乃、亂天、有禮度、九重乃、御垣之下爾、常世雁、率連天、狹牡鹿乃、膝折反志、候聞曾止（○止字類聚國史无）言須、何爾以聞暮牟、（○暮類聚國史作春、下暮亦同、）汗流志、兢恐留、何爾以聞暮牟者、夫倭歌之體、比興爲先、感動人情、最在茲矣、季世陵遲、斯道已墜、今至僧中、頗存古語、可謂禮失則求之於野、故採而載之、於是大法師等、寓居右大臣（○藤原良房）家、遣右近衞少將橘朝臣眞直、宣勅慰之、即施御被、賜雜色卅餘人調布、各有差、　八月壬辰、參河國守從五位下安倍朝臣氏主、獻白馬四十匹、白牛四十頭、支子四十斛、爲是奉賀天皇寶算滿于四十也、　十月庚寅、是日藥師寺僧等、繕寫藥師經卌卷、盛之高机獻之、爲奉賀天皇寶算滿卌也、施僧等御被及襖子、　癸卯、嵯峨太皇太后（○仁明母后嘉智子）遣使奉賀天皇卌寶算也、其獻物、黑漆平文厨子十基、（盛彩帛）机二前、就中一前御插頭、（造沈香山、以純金爲鶴、令銜插頭花、）一前居和琴二面、黑漆厨子六前、（盛御菜）赤漆韓櫃八十合、（納衾幷衣）櫃飯八十合、中取五十二前、（各居折櫃食廿合、）缶四百口、（酒魚菜等）黑漆棚厨子卅基、（廿基盛菓子唐餅、廿基盛鮮物乾物、）凡厥山海珍味數百捧、既而天皇御紫宸殿、音樂遞奏、歡樂終日、賜諸大夫祿、　十一月壬申、皇太子（○文德）上表奉賀天皇卌寶算、其辭曰、臣諱言、臣聞三十而立、加之十年、德行可以治邦家、機事可以无疑慮、即知三十九前而通曰壯、聖人崇聽其名聲、四十以往而所謂中、先哲欲得其善理者矣、伏惟皇帝陛下、生知容哲、誕稟聖靈、端玉藻而御總章、懸金鏡而臨環寓、握七百八十代之皇曆、獨富春秋、推三萬六千歲之仙齡、唯盈五八、沈思下濟、漏玄澤而無涯、方略傍宣、截遐荒而有裕、斯乃一人有慶之日、兆民共賴之年、凡百臣下、歡心如一、況臣位爲諸子之長、虔奉皇慈、職爲群臣之首、祗居鴻緒、信可以顯君父之懿德、竭臣子之純誠、仍表延祚之情、設獻壽之禮、採紫珠之嘉寶、用供插頭之祥、調玉琴之叢絃、以充乖手之慶、肴核敢陳、恐其非儀、金石間奏、且將率舞、伏願中和所樂、德廣彌彰、保萬壽之無疆、懷百神之多福、人稱有道、我乃無爲、使群臣成鹿苹之歎、六方致鳧藻之咸、其獻物机二前、（一前居御插頭花、一前置純金御杖、）御厨子四前、（二前以紫香作之、納琴四）

面、二前以蘇芳作之、納箏譜八十卷、）御裝束机十前、黑漆棚厨子四基、（納御菓子）赤漆韓櫃卅合、（納衾掛衣）櫃飯卅合、折櫃食八十合、酒八十缶、魚菜各卅缶、水陸雜物數百捧、既而天皇御紫宸殿、音樂遞奏、歡樂終日、賜諸大夫祿、　乙亥、皇太子入覲於清涼殿、獻御贄百餘捧、兼設熟饌、右大臣藤原良房朝臣、及宰相兩三人、近習臣等、得陪宴席、夜深賜殿上侍臣祿、　丁丑、今上皇子十九人、源氏二人、相共獻物於清涼殿、御贄熟食、充庭溢閑、音樂終日、賜祿如例、

〔日本紀略 一醍醐〕延長二年正月十日己酉、太上法皇（〇宇多）奉賀今上卅御算、於十三箇寺被修諷誦、　廿五日甲子、法皇奉賀天皇卅御算、所司裝束南殿、百官賜饗、　廿七日丙寅、御賀之後、宇多仙院、被奉御馬卅匹、御覽之後、左右馬寮、親王左右大臣賜之、　二月三日、延曆寺興福寺僧等上書、奉賀天皇卅御算、　十二月廿一日乙酉、中宮（〇穩子）奉賀天皇御卅算、

〔河海抄 十三若菜上〕延長二年正月廿五日、御賀御記云、南廂自東第四間、立插頭机一脚、有銀山綠水金銀花樹等云々、

延長二年正月廿五日、御賀御記曰、御馬引出之後、主殿擧炬、雅樂寮入自日花月花兩門、東西相立承明門前、（時西三刻也）遞奏舞曲、唐高麗各二曲、

〔古今著聞集 十三祝言〕延長二年十二月廿二日、内裏御賀を中宮奉らせ給けるに、清涼殿にて遊宴有けり、彈正親王笛を吹、左大臣和琴を彈じ給ひけり、中宮の御かたより樂器を奉られける中に、北邊の左大臣（〇源信）の清和御時、手自かゝれたる春鶯囀の箏の譜を、木の枝に付て奉られける、めづらしくやさしき御おくりものなりかし、

〔貞信公記〕延長二年十二月廿三日、山座主三綱等、御賀卷數將來、卽差少將奉入、有勅答、布施等如山階、

〔日本紀略 四村上〕康保二年八月廿八日乙丑、藥師寺僧等參陣外、奏御賀算卷數、給布施、　十二月四日

庚子、是日天皇卅御賀算事、詠和歌、　九日乙巳、興福寺賀天皇卅御算、　十五日辛亥、延暦寺座主、參賀天皇御算、

〔本朝文粹十一和歌序〕奉賀村上天皇四十御算和歌序　藤後生

夫和歌之興來尙矣、自神代至聖朝、春花開時、詠歌之思不絶、秋月朗夜、謳吟之聲猶忙、行基菩薩、臨難波津、贈於婆羅門僧正、達磨和尙、至富緒河、寄於斑鳩宮太子、〇聖德況上古既有奉賀帝王之嘉什、當今何無奉祈寶算之謌音哉、〇下略

〔拾遺和歌集五賀〕天暦の帝〇村上四十になりおはしましける時、山しな寺に金泥壽命經四十八卷をかき供養し奉りて、御卷數鶴にくはせて洲濱にたてたりけり、其すはまのしき物に、あまたの歌、あしでにかける中に、　かねもり

山しなのやまの岩ねに松をうゑてときはかきはにいのりつるかな

〔類聚國史二十八帝王八〕天長二年十一月丙申、奉賀太上天皇〇嵯峨五八之御齡、白日既傾、繼之以燭、雅樂奏樂、中納言正三位良岑朝臣安世、下自南階舞、群臣亦率舞、投暮雨雪、輕花拂舞、冒夜而罷、賜祿有差、有詔未得解由大夫等、皆預賜祿之例、又別賜參議已上冷然〇嵯峨御被、　戊戌、皇太子臣正良〇仁明言、臣聞至禮不讓、天地同符、大音希聲、神明合契、堯以星辰欽若、藏白玉之神圖、舜以雷雨不迷、受黃金之符璽、孔子曰、必世然後仁、誠哉是言、漢興至孝文卌歲、凡四帝也、自桓武聖帝、訖於當今、推曆卌箇年、計世四帝、諱齡四十、總計三四十二、爲百廿歲、定聖政曆之祥也、伏惟天皇、卅年之後、四帝之初、聖運斯鍾、至德盛矣、行同虞舜、仁敎漢文、逾勤禮樂之方、亦當春秋之富、宸居初稔、仰仙齡之無凶、天下同歡、知黎元之有慶、已深私祚、更足欣誠、輙効獻芹、敢塵旋袞、謹上衣琴等、非加涓塵、貴表懇㲉、伏願陛下御此服色、彌隆垂衣之風、撫彼鯤絃、再發虞琴之操、壯年之慶、非無前儀、臣子之誠、不能默爾、凡雖聖人之算、自天祐之、華封之壽、更有何益、而中心所感、不勝形言、冀遙懸三辰、倶護北極之座、遠仰萬壽、每陪南山之

基、臣抜自髫年、夙蒙渥潤、辱具萬國、曾無三善、而聖情重疉、慈誨慇懃、榮深施道、寵優列軄、伐南山之竹、未足盡恩、抑崇海之瀾、那堪負德、因與群臣、伏表丹款、無任悚賀、謹奉表以聞、

〔日本紀略 一醍醐〕延喜六年十月廿三日、法皇(○宇多)卌御算賀、　十月廿六日、公家於仁和寺、寫金字法華經、限四日八座、奉賀法皇御春秋之算、天皇幸朱雀院、　十一月七日、行幸朱雀院、法皇院司、中納言源貞恒以下加爵、依御賀之慶也、(○又見一代要記、皇年代略記、作十七日、)

〔扶桑略記 二十三裏書〕延喜六年十月廿三日癸卯、中宮(○穏子)差諸寺修諷誦、爲奉賀太上法皇四十算也、　廿六日丙午、有勅於仁和寺修御八講之會、爲奉賀法皇四十算也、仍无政、又有賑給、

〔扶桑略記 二十三醍醐〕延喜六年十一月七日丙辰、天皇奉賀法皇四十算、行幸朱雀院、有侍臣等舞、院別當如無法師任律師、院司賞也、

〔西宮記 臨時五〕被物

延喜六年十一七、天皇依法皇御賀、幸朱雀院、宴了間、法皇令仲平朝臣脱横被、奉今上、拜舞後還宮、

〔三代實錄 十五淸和〕貞觀十年十二月五日甲子、勅遣使者於近京四十箇寺、平城四十箇寺、修轉經功德、嚫錢寺別有數、賀皇太后(○明子)春秋登四十、以祈餘算也、　七日丙寅、天皇曲宴皇太后於常寧殿、王公卿士並侍焉、歡樂竟日、群臣具醉、賜祿各有差、是日於朱雀門前、召集京邑貧人、賜物有差、　九日戊辰、詔授從四位上行皇太后宮大夫藤原朝臣良世正四位下、從四位下行左中辨兼皇太后宮亮藤原朝臣家宗從四位上、齋院長官從五位下兼行皇太后宮大進藤原朝臣忠主從五位上、外從五位下皇太后宮少進菅野朝臣愛甲從五位下、正六位上藤原朝臣淸生外從五位下、從四位下上毛野朝臣滋子正四位下、正五位下藤原朝臣宜子從四位下、藤原朝臣御康(○藤原上恐脱位階)正五位下、正六位上藤原朝臣貞子、多治眞人安子、无位大江朝臣告子、並從五位下、七日觴宴之餘慶、特有此殊獎焉、

〔三代實錄 四十一陽成〕元慶六年三月廿七日己巳、天皇於淸涼殿設酒宴、慶賀皇太后(○高子)四十之算也、皇

太后、去年春秋滿四十、天下遏密、〇四年十二月清和崩不申歡讌、故延而行之、命内藏寮、辨設衣被酒食、凡其獻物供具、不可算數、親王公卿皆悉侍宴、雅樂寮陳鼓鐘、童子十八人、遞出舞殿前、先宴二十許日、擇取五位以上子有容貌者、於左兵衞府習舞也、貞數親王舞陵王、上下觀者、感而垂涙、舞畢外祖父參議從三位行治部卿在原朝臣行平、候舞臺下、抱持親王、歡躍而出、親王于時年八歲、太上天皇〇清和第八之子也、日暮酒酣、勅喚親王公卿昇殿、絲竹合奏、樂飲極歡、竟酒之後、賜祿有差、　廿八日庚午、授參議從四位上行皇太后宮大夫藤原朝臣國經正四位下、亮從五位下藤原朝臣豐範、大進從五位下菅野朝臣直臣、少進從五位下藤原朝臣近野、並從五位上、少進正六位上藤原朝臣良範從五位下、雅樂少允從七位上春海連貞吉外從五位下、正四位下藤原朝臣榮子從三位、從五位上和氣朝臣德子正五位下、無位安倍朝臣睦子從五位下、榮子已下侍奉皇太后宮、故有此授焉、

〔日本紀略十一條〕長保三年九月十四日壬午、左大臣〇藤原道長奉賀東三條院〇一條母后詮子卅算、始修法華八講、侍臣奏舞、　十月三日庚子、奉賀東三條院御算、諸寺諷誦事、今日於右近馬場、檢非違使行賑給事、大炊寮米二百石、　七日甲辰、院御賀宴試樂、今日左大臣息舞陵王、天皇有叡感、賜御衣、仍左大臣不堪感、於庭上唱天長地久之由拜舞、彼童舞左賴通、右賴宗云々、　九日丙午、於上東門第、有東三條院卅御賀、仍天皇行幸、中宮〇彰子行啓、令侍臣奏舞、〇又見百錬抄

〔榮花物語七鳥邊野〕今年〇長保三年は、女院〇東三條院詮子の御四十の賀、おほやけざまにせさせ給ふべければ、春よりその御調度どもせさせ給ふ、春とおぼしめしゝかど、殿〇藤原道長の御心地の例ならざりしかば、それにさはりて、〇中略十月に御賀あり、土御門殿にてせさせ給ふ、行幸などあり、いといみじうめでたし、御屛風の歌ども、上手どもつかうまつれり、おほかれどおなじすぢのことはかゝず、八月十五夜に、男女ものがたりして、つまどのもとに居たるに、辨資忠、

天の原やどしちかくは見えねどもすみかよはせる秋の夜の月

かぐらしたるところに、兼隆、

神山にとるさかきばのもとすゑに群れ居ていのる君がよろづ世、などぞありし、舞人家の子の君達なり、ことどもやう〳〵はつる程に、殿の君達ふたところは、わらはにて舞ひ給、高松殿の御腹のいは君〇頼宗は、納蘇利舞ひ給、殿の上〇道長妻倫子の御腹のたづ君〇頼通は、龍王舞たまふ、殿のありさま目もはるかにおもしろし、山の紅葉かずをつくし、中島の松にかゝれる蔦の色を見れば、紅蘇芳の濃き薄き、青う黄なるなど樣々の色のきらめきたる、さいでなどをつくりたるやうに見ゆるぞ世にめでたき、池の上に、おなじいろ〳〵樣々の紅葉の錦うつりて、水のけざやかに見えて、いみじうめでたきに、色々のにしきの中より立いでたる船の樂、きくにすゞろさむくおもしろし、すべて口もきかねば、えかきもつゞけず、萬の事ゑつくさせ給へり、中宮〇一條后彰子西の對におはしまして、院は寢殿におはしませば、上〇一條も東の南面におはします、殿の上は、東の對におはしまして、上達部などは、渡殿につき給へり、諸大夫殿上人などは、あげはりにつきたり、院の女房、寢殿の西南の渡殿にさぶらふ、御簾のきはなどいみじうめでたし、ことゞもはて〻、行幸かへらせ給、御おくり物、上達部の祿、殿上人のかづけ物など、皆ゑつくさせ給へり、神無月の日もはかなくくれぬれば、皆ことゞもはて〻、院は三條院に又の日ぞかへらせ給、さき〴〵の御賀などはいかゞありけん、これはいとめでたし、入道殿〇詮子父藤原兼家の六十の賀、院の后の宮ときこえさせしときゝ、せさせ給しも、いとかくはあらざりきとぞおぼされける、この公達の御うつくしさを、たれもたれも泪とゞめず見奉る人々おほかり、

〔拾遺和歌集十八雜賀〕東三條院の賀、左大臣のし侍けるに、かんたちめかはらけとりてうたよみ侍けるに、

右衛門督公任

君が世に今いくたびかかくしつゝうれしきことにあはんとすらん

〔後拾遺和歌集賀七〕東三條院四十賀し侍ける屛風に、子日して、をとこ女くるまよりおりて、小松ひく所をよめる、　源兼隆

かすみさへたち引野べの松なれば空にぞ君が千代はしらるゝ

〔玉葉和歌集賀七〕東三條院、四十御賀屛風の歌、　道濟

姫小松おほかる野べに子日して千世を心にまかせたるかな

〔性靈集三〕中壽感興詩幷序

覺日者也本常、妄時者也代謝、撫塵也、昨不惑也催矣、何忍日天矢運、奪人童顏、不分月殿疾來、令人變異、士流是日强占、羅門是歲勇進、俗家賀之酒會、方袍何事也、是不如閉目端座、思念佛德、粤有文殊讚佛法身禮卅行頌、文約義周、句句金玉、字字圓融、古文云、知命讀易、義趣易入、況復四十年、歲觀五八頌、豈不快哉、遂夜循環、感通在焉、其文易別、深義難解、聊爲童矇引而申之、以爲一百卅禮、兼作方圓三圖並撰義注、冀令生盲徒頓悟三昧法佛、本具我心、二諦眞俗、俱是常住、禽獸草木、皆是法音、安樂覩史、本來胸中、于時悲收忽過、日月云陳、雲雨含彩、或濕或霽、風葉調絃、乍吟乍寂、瀧水聲鼓、伐木柷敔、經貝長諷、鐘磬間響、懸蘿投袖、技猿頓足、曲根爲褥、松柏餚膳、茶湯一埦、逍遙也足、杳許由啄山藪、慧遠飮林泉、任其天稟、晝夜安樂者、誠是堯日之力也、其功負岳其德淵海、斗藪之客、遂爾忘歸、逸遊之士、曷不闔懷、對此景物、誰耐手足、乃寫志曰、

黃葉索山野、蒼々豈始終、嗟余五八歲、長夜念圓融、浮雲何處出、本是淨虛空、欲談一心趣、三曜朗天中、

〔古今和歌集賀七〕さだときのみこ〈○淸和皇子貞辰〉をばのよそぢの賀を、大井にてしける日よめる、　紀のこれをか

龜のをの山の岩ねをとめて落る瀧のしら玉ちよの數かも

〔古今和歌集賀七〕堀河のおほいまうちぎみ〈○藤原基經〉の四十の賀、九條の家にてしけるときによめる、

在原業平朝臣

櫻花ちりかひくもれ老らくのこんといふなる道まがふがに

〔古今和歌集賀七〕よし岑のつねなりが、よそぢの賀に、娘に代りてよみ侍ける、　素性法師

萬代をまつにぞ君を祝ひつる千年のかげにすまんとおもへば

〔日本紀略醍醐一〕延喜十三年十月十四日壬午、於内裏賀尚侍從三位藤原滿子四十算、即以神筆給正三位位記、

〔古今和歌集賀七〕内侍のかみ〇藤原滿子の、右大將藤原朝臣〇滿子兄定國の四十賀しける時に、四季の繪かけるうしろの屛風にかきたりけるうた、

かすが野にわかなつみつゝ萬代をいはふ心は神ぞしるらん〇以下略

〔玉葉和歌集雜十五〕尚侍藤原朝臣滿子四十賀、大納言清貫し侍ける屛風の歌に、石井あるところを、

伊勢

わくがごとめには見ゆれど我宿の石井の水はぬるまざりけり

〔日本紀略醍醐一〕延喜十七年十二月十六日辛酉、於御前賀中納言藤原定方卿四十算、

〔日本紀略醍醐一〕延喜十九年八月廿二日丙辰、右大臣〇藤原忠平室家源氏〇順子於東五條第賀大臣四十算、王卿集會、　十月十一日乙巳、女御藤原氏〇忠平女貴子於東宮賀右大臣卅算、　廿五日、勸學院賀右大臣四十算、　廿八日辛酉、官厨家賀右大臣四十算、修諷誦於極樂寺、

〔九暦〕天暦元年二月十七日、女御〇村上后安子爲賀予〇安子父藤原師輔卅算、〇下文缺

〔源氏物語三十四若菜上〕今年ぞ、よそぢになり給ければ、〇源氏君御賀のこと、おほやけにもきこしめしすぐさず、世中のいとなみにて、かねてよりひゞくを、ことのわづらひおほく、いかめしき事は、昔よりこのみ給はぬ御心にて、皆かへさひ申給、正月廿三日子の日なるに、左大將殿の北方〇玉鬘君

わかなまゐり給、かねてけしきももらし給はで、いといたく忍びておぼしまうけたりければ、にはかにて、えいさめかへしきこえ給はず、しのびたれど、さばかりの御いきほひなればわたり給ふ儀式など、いとひゞきことなり、南のおとゞの西のはなちいでにおましよそふ、屛風かべしろよりはじめ、あたらしくはらひしつらはれたり、うるはしく倚子などはたてず、御ぢしき四十まい、御しとね、けうそくなど、すべてその御具ども、いときよらにせさせ給へり、らでんの御厨子ふたよろひに、御衣ばこよつすゑて、夏冬の御さうぞく、かうご、くすりのはこ、御すゞり、ゆするつき、かゝげのはこなどやうの物、うち〳〵きよらをつくし給へり、御かざしの臺には、ぢんしたんをつくり、めづらしきあやめをつくし、おなじきかねをも色づかひなしたる心ばへあり、いまめかしく、かんの君、物のみやび、ふかくかどめき給へる人にて、めなれぬさまにしなし給へり、大方のことをば、ことさらにこと〳〵しからぬ程なり、人々まゐりなどし給て、おましにいで給とて、かんの君に御對面あり、御心のうちには、いにしへおぼし出ることさまざまなりけんかし、いとわかくきよらにて、かく御賀などいふことは、ひがゝぞへにやとおぼゆるさまの、なまめかしく、人のおやげなくおはしますを、めづらしくさし月へだてゝ見奉り給ふは、いとはづかしけれど、猶けざやかなるへだてもなくて、御物語きこえかはし給ふ、〇中略人よりことにかぞへとり給ひける、けふの子日こそなほうれたけれ、しばしは老をわすれても侍べきをときこえ給、かんの君も、いとよくねびまさり、もの〳〵しきけさへそひて、見るかひあるさまし給へり、

わか葉さす野邊の小松をひきつれてもとの岩ねをいのるけふかな、とせめておとなび聞え給、ぢんのをしき四つして、御わかなさまばかり参れり、御かはらけとり給て、

小松はらするゑのよはひにひかれてや野べのわかなも年をつむべき、などきこえかはし給

て、上達部あまた、南のひさしにつき給、式部卿宮は、まゐりにく、おぼしけれど、御せうそこありけるに、かくゑたしき御なからひにて、心あるやうならんもびんなくて、日たけてぞわたり給へる大將のゑたり顏にて、かゝる御なからひにうけばりて物し給も、げに心やましげなるわざなめれど、御むまごの君達は、いづかたにつけても、おりたちて雜役し給ふ、こものよそ枝、をりびつ物よそぢ、中納言をはじめ奉りて、さるべき限とりつゞけ給へり、御かはらけくだり、若菜の御あつ物まゐる、御まへには、ぢんのかけばん四つ、おほんつきどもなつかしく、今めきたるほどにせられたり、朱雀院の御くすりのこと、なほたひらぎはて給はぬにより、樂人などはめさず、御笛など、おほきおとゞの、そのかたはとゝのへ給て、世中にこの御賀より、又めづらしきよらをつくすべきことあらじとの給ひて、すぐれたるねの限を、かねてよりおぼしまうけたりければ、忍びやかに御あそびあり、とり〳〵に奉る中に、和琴は、かのおとゞの第一に秘し給ける御ことなりさるものゝ、上手の心をとゞめて引ならし給へるね、いとならびなきを、こと人は、かきたてにくゝし給へば、右衛門督のかたくいなぶるをせめ給へば、げにいとおもしろく、をさ〳〵おさるまじくひく何事も上手のつぎといひながら、かくしもえつがぬわざぞかしと、心にくゝあはれに人々おぼす、しらべにしたがひて、あとある手ども、さだまれるもろこしのつたへども、中々たづねゑるべき方あらはなるを、心にまかせてたゞかきあはせたるすがゞきによろづの物のねとゝのへられたるは、たへにおもしろく、あやしきまでひびく、父おとゞは、ことのをもいとゆるにはりて、いたうくだして、ゑらべひゞきおほくあはせてぞかきならし給ふ、これはいとわらゝかに、のぼるねのなつかしくあいぎやうづきたるを、いとかうしもはきこえざりしをとみこたちもおどろき給、琴は兵部卿宮ひき給、此御ことは、宜陽殿の御物にて、代々に第一の名ありし御琴を、故院螢〇桐の末つかた、一品宮このみ給こと

五十賀

にて賜はり給へりけるを、此をりのきよらをつくし給はんとするため、おとゞの申給はり給へる、御つたへ〳〵をおぼすに、いとあはれに昔のことも戀しくおぼし出らる、みこもゑひなき、えとゞめ給はず、御けしきとり給て、きんはおまへにゆづりきこえさせ給、もの〻あはれにえ過し給はで、めづらしき物ひとつばかりひき給に、こと〳〵しからねど、限なくおもしろき夜の御遊なり、さうがの人々みはしにめして、すぐれたるこゑの限いだして、かへり聲になる、夜の更行まゝに、もの〻ゑらべども、なつかしくかはりて、青柳あそび給程、げにねぐらのうぐひすおどろきぬべく、いみじくおもしろし、わたくしごとのさまにゑなし給て、祿などいときやうざくにまうけられたりけり、曉にかんの君かへり給、御おくり物などありけり、

〔齡壽錄〕惇信院樣家重公

延寶三年二月八日、御四十賀御祝儀、

〔壽算名目抄〕五十歲艾　曲禮曰、五十曰艾、服官政、云々、釋名云、五十曰艾、艾治也、治事能斷割、芟刈無所疑也、　養鄉　王制曰、五十養於鄉、　爵　王制曰、五十而爵、不從力政、　王制曰、五十不從力政、

杖家　王制曰、五十杖於家、　異粻　同曰、五十異粻、　知命　論語　命爲大夫　內則　練事

拾芥抄、五十曰練事、　事文類聚曰、胡廣爲三公、年已八十、而心力克壯、練達事體ト云リ、今爰ニ五十歲ヲ練事トスルハ、唯練事ノ字義ニ據ノミニテ、八十歲ノコトニハ當ラザルナリ、

〔日本紀略醍醐〕延喜十六年三月三日丁巳、太上法皇〇宇多可有五十御賀、於左近衞府廳試同御賀童等、又檢非違使等、請廩院米五百斛、於朱雀大路施行隱居高年飢病等、是爲法皇御賀也、　五日己未、天皇御南殿、覽陸奧國交易進御馬五十匹、法皇御賀料也、又御仁壽殿、贈太政大臣藤原公〇時平第三男、〇敦忠奏散手舞、　七日辛酉、辰時天皇幸朱雀院、奉賀太上法皇五十算、諸司獻物、童親王及五位以上子爲舞人、　八日壬戌、宇多院、僧俗別當以下判官代已上加級、　十二月廿一日、中務卿敦慶親王、

奉書寫金字壽命經、奉賀法皇五十御算也、

〔河海抄若菜上十三〕御記云、延喜十六年三月、御賀試樂、中務卿親王、〇敦慶 太宰帥親王、在階下唱歌、侍臣五六人亦唱歌、

延喜十六年御賀御記云、請中務卿親王、上野太守親王、太宰帥親王行酒、于時左衛門督藤原朝臣奉有命召坏賜給、即進坏飲訖舞、

延喜十六年三月七日御賀御記曰、左右少將、諸衛佐、馬寮助等、引御馬十疋奉覽、

〔殿曆〕康和三年十月二日、今日院御賀定云々、〇白河五十賀 行事上卿正三位大納言民部卿俊明、頭辨重資朝臣、五位藏人爲隆、六位藏人重隆等也、定文、頭辨重資朝臣、酉剋許持來、同剋爲隆來、各頃之退出、委事不參內間不記、定文云、院御賀事、　一御膳御臺盤二脚、蒔繪、銀器、　一御杖金三枝、銀三枝、可在洲濱、　一御調度御厨子十脚

〔中右記〕康和四年正月十七日、依召未剋許參內、終日御遊、御賀舞人等舞御覽、依雨南殿被舞、人々多直衣、及深更事了、　二月二日、終日候御前、入夜上皇〇白河 有御對面之次、俄於南庭御覽御賀舞、左右各三曲、藏人等立明南庭、左萬歲樂、宗輔朝臣、師重、能明、宗能、春鶯囀、太平樂、右地久、師時朝臣、顯國、 古鳥蘇、皇仁、舞人次將等、依可供奉行幸皆束帶、或有遲參輩不參會也、東渡殿爲樂人候所、樂人殿上人等祗候、亥剋許還御、少納言實明鈴奏、公卿名謁、畢退出、行幸之後、上皇還御高松、　五日、早旦馳參內、〇中略 人々參會之次、於東對中宮御方南庭御覽御賀舞、殿上人多以直衣、東廊中殿上樂人幷地下樂人等祗候、萬歲樂、地久、春鶯囀、古鳥蘇、殿上人外、被召樂人舞人等、布衣、輪臺四人、右中將宗輔、左少將實隆、師重、兵衛佐能明、四人舞之、 青海波二人、行高、光則、布衣、殿上人廿餘人、或束帶或直衣、立垣代、次散手、此間光景漸暮、還御中殿、予獨候御前、行事、左舞人行高光則二人舞、頗有相違、仍弟子君達等非一樣、承仰近召光末、被尋問舞不同事之處、申云、一流之習、皆以同樣也、但頗所々先後相違也、各非僻事者、重仰云、君達舞、不論左右、可調一樣由可仰光末者、予仰件旨、

畢、但君達被申旨、甚以喧嘩也、及深更退出、　八日癸巳、晩頭參內、今日御賀舞人樂人之殿上人等、於樂所始調樂、去年被始樂所、（馬場屋南四間、母屋東西南庇、前庭東南引幔、母屋敷疊、簾內藏家居饗饌、）入夜予著樂所、（束帶、）舞人樂人之殿上人廿餘人（束帶）參集之後、盃酌及三獻、（雜色所衆合遂、但無勸盃儀、）汁物之後撤饗饌、東南簀子敷爲樂人候所、（衣冠參入、或有布衣輩、）先亂聲三度、次大食調、次賀王、（地下殿上共合奏）是彼日參入音聲料、次平調、萬歲樂舞、（宗輔朝臣、實隆朝臣、師重朝臣、能明、通季、定能、）地久、（師時朝臣、顯國、家定、今一人不參、）次春鶯囀、（初六人舞人）依年首調樂不及四曲也、吹長慶子分散、依甚雨無參內儀、行事藏人右衛門尉惟兼、著樂所進見參、（一度許）一事以上必臨時祭調樂、是雖不知先例、只依仰所行也、且只爲遊興也、殿上人參入御所、而於南殿御覽輪臺皇仁等、殿上人、或直衣或束帶、垣代甚雨之間假入興、於南殿之上被舞也、　十二日、巳時許參內、（直衣）於東對南庭御覽御賀舞共、南池邊立大鼓、左右立鉦鼓、其前立左右桙、東透廊南四間引幔、爲樂人候所、新中納言、（國信）下官許、（皆直衣、依仰也、）祗候、殿上人束帶、舞六曲、（左萬歲樂、春鶯囀、輪臺、青海波、右地久、古鳥蘇、皇仁、）先舞以前、亂聲振桙、（左右中將宗輔朝臣、右左馬頭師隆云々、）事畢終夜御遊、中宮同御此對也、御賀舞習禮之間、如此習禮、每日之事也、及深更退出、　十五日庚子、依御方違、有行幸鳥羽北殿、○中略法皇有御對面、（今朝從高松有御幸也、）頃而於南庭、御覽御賀舞二曲、（左太平樂、右林歌、）依供奉行幸、舞人皆東帶、依無樂人、殿上人爲樂人、南砌下敷疊爲座、但博定一人召加、雨脚間濃、被止餘舞了、　十六日、候御前、於南透廊殿上人舞曲、（皆直衣、）入夜還御、　廿日、今日於北渡殿上、御覽御賀舞共、殿上人束帶、新大納言、（公）新中納言、（國、直衣、）被候御前、新中納言仲實卿子童舞、納蘇利、容顏華麗、舞神妙、人々感歎、入夜事了、　廿五日、晩頭參內、如例御覽御賀舞共、人々直衣、　廿八日、晩頭參內、入夜御覽御賀舞共、人々直衣、　三月朔日、晩頭參內、新大納言（公）被參仗座、頭辨仰云、御賀御祈、可有奉幣三社、（○伊勢、石淸水、賀茂、）日時使々可申定者、大納言移著端座、便仰頭辨勘日時、（明日午刻云々、頭辨行事、內々幣料用意歟、）頭辨仰陰陽寮令勘日時奉上卿、○中略件定文書了奉上卿、上卿入勘文幷使定文於筥、令頭辨內覽奏下、次召大內記兼衡、被仰宣命趣、去延喜十六年、被祈申件三社、雖見御記、奉幣之由慥不見歟、件事可尋見、又石淸水使被用參議、有其故歟、

二日、御賀御祈三社奉幣、於南殿有御拜、申刻使々進發云々、　五日、參內御覽御賀舞、共（人々直衣）右大臣殿候給、　七日、申刻許從內有召、忿參入、內大臣子、殿上童（名雅定）舞習了後、初被將參也、仍於宮上御曹局方、御覽件舞、（胡飲酒、令裝束）、右大臣殿令候給、殿上人皆爲樂人、宰相中將顯通打大鼓、舞之爲體優妙者也、人々感歎、　九日甲子、今日有御賀試樂、先中殿南庇、從西第三間、立大床子（上敷圓座、有地敷）、爲御座、一二間簀子、敷圓座、爲納言以上座、長橋爲參議座、其後廊中地敷疊、殿上人座、中殿巽角柱南行引幔、其前立樂屋一宇（西面）、其前立左大鼓一面（西面）、大鼓南北、立左右鉦鼓各一面、其前立左右桙各七、西中門南柱、南庭池前引幔（東西行）、暫撤弓場殿御所板敷、以其後小戶爲仙華門代、中宮御二間方（以東皆有打出、暫撤昆明池御障子）、（女房打出、萌木紅打衣）、未刻御出（御直衣、東帶例〇中略）、爰光景漸傾（此間居公卿衝重）、因之先不守次第、欲召胡飲酒、內大臣起座歸殿上、出從仙華門、渡前庭、被向樂屋、一家公卿、左衞門督（雅俊）、源中納言（國信）、宰相中將（顯通）、右兵衞督（師賴）相從之、爲令裝束胡飲酒被來向也、於東中門廊邊、童舞三人令裝束（內大臣子童、名雅定、胡飲酒、藤中納言子童、名季輔、納蘇利、下官四郞童、名宗重、龍王）、此間發亂聲、內大臣以下歸著御前座、胡飲酒出庭中舞一曲不誤、萬人感歎、生年九歲、雖年少恐全無其失、誠是可云神妙歟、去々年多佐忠父子、共被殺害之後、此舞已絕、內大臣、治曆三年、九歲舞此曲、今日初傳、世可謂勝事歟、召胡飲酒童、登從長橋（左衞門督扶令登之）相參上、候大床子西邊、天皇（堀河〇）脫御衵給之、（右大臣起座、進御座邊、傳取給之）、胡飲酒給之頗舞、內大臣起座、取御衣懸肩、於廣廂被舞（左手取笏舞之、此舞破也、萬人感歎）、見者驚耳目、是不勝拜感也、抑亦舊規也、童下南庭、懸御衣舞入樂屋、次內大臣下從長橋、進前庭舞踏、歸著本座、爲存先規、有此拜賀歟、頃而又亂聲、龍王童舞之、一曲依不誤、衆人頗感氣、次又亂聲、納蘇利、次輪臺、垣代殿上人皆悉立之、藏人頭左中辨（重資）、頭中將（顯雅）以下、殿上侍臣一人不殘（六位不立、頗奇恠也、依位階不如小朝拜儀、不）帶劒、而頭中將一人帶劒、（後聞、衞府人可帶劒者）、垣代立定之後、輪臺四人（宗輔朝臣、實隆朝臣、師重朝臣、宗能朝臣）、于時有仰、右衞門督（宗通歸）并下官立加垣代中、右衞門督吹笛（將竹）、下官吹笙（木作繪）、俊賴朝臣（篳篥）、有賢朝臣（唱歌）、左近將監光末、召加令詠、青海波二人（通季、宗能）、此間及秉燭、仍主殿寮官人六人、立明南庭、次散手、次太平樂、次皇仁、次賀殿、

次林歌、次長慶子、經本路出、從西仙華門代戸、此間始從行事參議、於弓場殿給祿、（殿上人取之、白褂一重、殿上人、舞人、樂人、白褂一重、）召人樂人於樂屋給之、地下召人各疋絹也、次有御遊、召管絃殿上人於年中行事障子邊、右大臣、（筝）右衞門督、（笛）下官、（拍子）左大辨、（琵琶）顯仲朝臣、（笙）有賢朝臣、（和琴）宗輔朝臣、（笛）俊頼朝臣、（篳篥）家保、（笙）呂（安名尊、席田、鳥破、）律（伊勢海、三臺急、）此間給祿於公卿、（殿上人取之、大臣御下襲、半臂、納言御和、宰相表袴、）事畢退出、于時亥刻許也、　十四日己巳、今日御賀由、差權大納言家忠卿被申院云々、勅使參仕之間、給祿有作法歟、御裝束行事藏人中宮大進爲隆、參鳥羽南殿、始彼日御裝束事云々、　十八日癸酉、天皇依被奉賀太上皇（白河）○五十算、可有行幸鳥羽殿也、下官子刻許參內、夜半依可有行幸也、而雨脚殊甚、陰雲難晴、頭中將顯雅朝臣、爲御使參院、依雨可延引哉否由云々、頭中將歸參申云、院御返事云、是希代勝事也、一日延引、誠以遺恨也、如此大事難遂歟、雖甚雨可有臨幸者、先中宮行啓、東對寄御車、權大納言、（家）權大夫（能實）新中納言、（國信）女房出車十兩、依雨幷夜半不出衣、從北陣出御、寅刻行幸、御出南殿、（反閇道言朝臣）左右近陣引、左次將渡、（中將俊忠一人參仕）公卿、右大臣、左衞門督、（雅）左宰相中將、（顯）下官、右宰相中將、（忠）左大辨、（基）源宰相、（能）少納言實明鎰奏、（先闈司奏）次寄御輿、（鳳輦、左中將俊忠、右中將顯雅二人相副、次將等未參達）從西陣出御、（于時卯刻）及愛大宮大炊御門程、行啓行幸御逢、有議可爲先行啓由宣下、（行啓從北陣出御、中御門大宮大路、）經行啓行幸、一度相續路間、近衞次將幷供奉諸司、或參會途中者多、經大炊御門大宮七條朱雀大路等、至鳥羽南殿西門、暫留御輿、（雅樂立樂）奏、令院司左衞門督雅俊卿奏事由、於西中門寄御輿入御、（人々退下休息）御裝束儀一如式、（入御之後、雨脚已止、但天顏陰、）午刻人々參集、上皇出御大床子邊、（當西角程云々）天皇進地鋪御拜舞、（先御拜以前、右大臣參進、數御拜地鋪、暫退歸之後、有御拜儀者、）雖上廂御簾、衆人不見其儀、（閉中門萬人被出外也）次上皇主上御大床子歟、（垂御簾、後聞不御大床子云々、）公卿以下執御贄、（獻物歟）進自西中門列立前庭中、（略）○中地下諸大夫等在列末、貫首左大臣召院司別當修理大夫顯季朝臣以下、至六位判官代十餘人出庭中、（進、從西中門）進公卿列前、各取公卿持獻物歸於西中門、（殿上人以下付院司、後付院司、）諸衞舍人持長物退出、（長物未有行幸前、預置西中門內外也、）付院司、次供上皇御膳、（民部卿陪膳、宰相等益供也、）次供主上御膳、（陪膳左衞門督、役供二所殿上四位、）此間垂御簾、供參議被止也、

供御酒儀同被止、上皇主上入御、次供平敷御座、母屋中央間以四御簾垂公卿以下座如式、上皇隨御旨主上出御、宰相中將二人候御裾藏人頭左中辨重資朝臣召公卿、一々著座、召法親王、仁和寺御室、右宰相中將顯敎召之、起座經殿北面召之、下官依爲樂行事、在西中門外、樂人之殿上人舞人等集會、隨氣色發亂聲三度、先左亂聲、次右亂聲、次左右合亂聲、尾張守長實朝臣、右中將宗輔朝臣、狛笛越前守家保朝臣吹之、次吹調子、大食調、參入音聲賀王恩、爰在勅左大辨基綱、相加爲樂行事、入從西中門、次第列立、渡南庭入東樂屋、先於中門外、左右舞人指插頭花、左櫻枝、右款冬、先一鼓童、納蘇利童也、左近將監狛光末著童裝束、取大拍子物具、行事宰相二人左右大辨相分列、雖可在一童前、有議今日在一童次、是依左大臣申請也、次童舞一人、龍王童也、胡飮酒童、今日不參也、所勞云々、左右舞人相並列立、左六人、右近中將宗輔朝臣、左少將實隆朝臣、同師重朝臣、左兵衛佐能明、右兵衛佐通季、左兵衛權佐宗能、列北上右四人、左馬頭師隆朝臣、右少將師時朝臣、藏人左少將顯國、左少將家定、一列上次樂人殿上人一列、右馬頭兼實、羯鼓侍從實明、揩鼓少納言實明、三鼓刑部卿顯仲朝臣、笙備後介有賢朝臣、同右衛門佐家保、同安藝守經忠朝臣、篳篥越後守敦兼朝臣、同尾張守長實朝臣、笛越前守家保朝臣同侍從伊通、同右京權大夫俊賴朝臣、大鼓、是侍從師親朝臣、依有所勞不參替、少納言實行鉦鼓、兵部大輔雅兼又相具、是右鉦鼓所役人也、仍只相從之也、行列次第異一々試樂、是有議被相直也、列立樂屋前、暫一鼓童來間上大鼓拍子右樂定左右舞人以下入樂屋、左北一間、右南一間、舞人出入路此儀也、此間又龍頭鷁首各一艘、同吹賀王恩、寄船於南岸邊、入樂屋、是召人樂人等、著童裝束乘舟參入也、召人樂人之外、雖有召乘、樂人三四人不入樂屋退歸、先是參議行事二人著座、樂屋前敷高麗端疊二枚、爲參議行事座也、次吹調子、平調左右各三曲、左歲樂六人、太平樂、龍王、胡飮酒童不參、仍俄召爲之也、右地久四人、古鳥蘇、[illegible]納蘇利、萬歲樂之間、居親王公卿衛重、公卿料、二所殿上五位六位等盃送、舞了於樂屋、給祿於行事宰相以下舞人樂人等、殿上人取之、召人博定、右大鼓、今日不參、榮職、左大鼓、獨著束帶、候樂屋、不乘船、樂人左近將監狛光末、左大拍子左近府生同行高、羯鼓同光則、左鉦鼓同末定、揩鼓、已上左舞師、右近府生多忠方、右大拍子右近府生公正、右鉦鼓、已上右舞師、左近府生公里、笙雅樂屬時忠、同左近府生時元、笙、右三鼓、左近將曹正清、笛、又狛笛、同府生元正、高麗笛、又横笛、各給祿、抑備後介有賢朝臣打右大鼓、殿上人樂人合奏音曲、晩頭舞了退出音聲、從本路歸西中門、長慶子行事參議爲前行、列次第如前、各取祿歸、但童舞二人、從樂屋後早退出、依年少也、仍退出音聲之間不行列也、次近衛次將馬頭等、引出物御馬十疋引渡前庭、移置近衛官人番長以上、

相從引之後、依仰騎之、依大臣仰、給院御厩、其後及秉燭供燈、主殿寮立明南庭、次御遊、天皇御笛、右大臣、(箏)宗忠、(拍子)左大辨(琵琶)右宰相中將、(笛)顯仲朝臣、(笙)俊頼朝臣、(篳篥)呂、(安名尊、席田、鳥破急、)律、(青柳、萬歳樂、)次給法親王祿、(源宰相能俊取之)次左大臣、於西中門令頭辨奏見參、左少將有家朝臣、於西中門內唱見參、院司公卿以下給祿、(於閑所廳官以下臺盤給之云々)上皇入御、天皇還御所、亥時許事了退出、

廿日乙亥、今日有御賀後宴事、○○○○○○(中略)午刻許人々參上御裝束儀一如式、先龍頭船樂六艘被相儲也、(左右近衞府各二艘、外衞各二艘、)於北殿南岸池頭人々乘船、左一龍頭、○中略　右一鷁首、○中略　左二龍頭、舞師光末打一鼓、召人左樂人等又召加之、合十人乘之、右二鷁首、舞師忠方一鼓、樂人合十人、第三左右龍頭鷁首下﨟樂人各十人也、皆吹鳥向樂、從左右各進出、上皇主上出御、藏人頭右近權中將顯雅朝臣召公卿、公卿著御前座、源宰相能俊召法親王、如一昨日、此間舟樂遲參、頗有其仰、下官依仰先候樂屋、(今日樂行事一人耳)殿上人樂船二艘、於南池岸邊下從船、左右一鼓童進御前、殿上人舞人樂人列立樂屋前、入樂屋、如一昨日、在第二龍頭鷁首、光末忠方早參進、取大拍子相具一鼓童、次召人樂人、寄舟於樂屋前參入樂屋中、第三龍頭鷁首、遙奏鳥向樂、差遣別島中了、次樂屋吹調子、(一越調)先春鶯囀、(舞人裝束如一昨日御賀)此間公卿座居衝重、次古鳥蘇、(闕國取蘇利古)此舞未出前庭之間、供主上御膳、權大納言家忠卿陪膳、參議等益供、次輪臺垣代、內殿上人卅人、(樂人所役如御賀日)修理大夫顯季朝臣以下、不論貫首立位階次第、但輪臺舞二人、(實隆朝臣、能明爲先、)殿上人等、後又輪臺二人、(師重朝臣、宗輔朝臣、)藏人大學助重隆、六位只一人在垣代列、(依爲院殿上人歟)青海波二人、不立此列、密々於樂屋中令裝束之故也、(於垣代中須令裝束也、然而依有議於樂屋爲之、)輪臺四人、(宗輔朝臣、實隆朝臣、師重朝臣、能明朝臣、)此間內大臣雅定、從御前來加樂屋、爰有仰右衞門督宗通卿加垣代中吹笛、下官唱歌、顯仲朝臣、(笙)俊頼朝臣(篳篥)左近將監狛光末、殊召加此列令詠也、青海波二人、(通季、宗能、)著青打半臂、(以銀押濱形海浦波文等)螺鈿細劒紺緒、(縫水文等)撤平胡籙、不放老懸出于舞臺、舉一二三返舞之後、詠四切又詠七切、上拍子舞之間、堂上地下衆人見者驚耳目、是則依爲珍重舞歟、次散手、此後內大臣率一家人々向樂屋、依可有胡飲酒也、令裝束了、內大臣復本座、發亂聲、胡飲酒(內大臣童)舞了欲

入樂屋、而左中將俊忠朝臣、取祿給胡飲酒、今日此舞許給祿也、次納曾利、童、宗輔、童舞等、依光景已傾、不守次第、先召之也、賀殿、青海波、舞人二人、次々舞間猶著水文半臂、林歌、三臺、皇仁、一々舞畢、吹蘇合急、爲退出音聲、但舞人等不乘舟、此間院引出物御馬十疋、不置移、牽渡前庭、左右舞人合十人、牽御馬、近衞官人相副爲綱、引出西中門外、給左馬寮、次有御遊、此間及秉燭、先令數召人座於階西砌下、地下召人、宗綱、孝清、博定、式部丞、俊重、今日被召加樂屋也、呂、櫻人、美作、眉刀自女、鳥破急、賀殿急、律、伊勢海、更衣、萬歲樂、陪臚、甘州、人々所役如一昨日儀、事了人々退下、公卿以下給祿、如恒行幸儀、次從院進御送物、笙笛御手本、付銀枝、左大臣、民部卿、權大納言、家被取之、又送物御手本、被奉中宮御方、右衞門督宗通卿取之、次被仰下勸賞、新中納言仲實卿、同國信、叙正二位、參議能俊叙正三位、顯季朝臣叙正四位上、已上院別當賞、中宮權大夫能實卿叙正二位、右少將師時、叙口四位上、中宮職事、已上行啓賞、少納言實明叙正五位下、民部卿讓歟、可尋之、仁和寺御室叙三品、天皇還御、但依法皇仰、寄御輿於寢殿南階前、次將稱警蹕、公卿不列立、無鈴奏、亥時許還宮、少納言實明鈴奏、公卿名謁、還御之時、行幸供奉舞人等、乍著青色裝束供奉之、

兩日已無風雨難、誠是天地和合歟、○又見續世繼、

〔古今著聞集 十三 祝言〕康和四年二月九日、御賀の試樂ありけり、左右內大臣○源俊房、藤原忠實、源雅實、以下參給けり、參入音聲に、賀王恩を奏す、先萬歲樂、右大臣御前にして箏を彈じ給、次地久、次春鶯囀、この間に管絃物具を樂屋へくだされける、左大辨琵琶を彈ず、宰相中將笛を吹、右大辨笙を吹けり、次古鳥蘇、次胡飲酒、中院右府童にておはしけるが仕給けり、內大臣、一家の人々を率て、樂屋へ向ひ給て扶持し給けり、內府歸著給て後ぞ舞をば奏し侍ける、年わづかに九歲の時なりけるに、一曲もあやまちなかりければ、萬人感歎する事かぎりなかりけり、去年資忠父子共に害せられて後、此曲絕けるを、父おとゞ治曆三年に九歲にて舞給ひけるを、けふ世につたへられぬる、めでたかりける事なり、胡飲酒の童をめして、御祖を給はせ給ひけるを、右大臣傳へ給ひければ、童領舞してかづかりけり、父のおとゞ座を立て、御衣を取てあふぎにかけて、左の手に笏を取て、弘庇にて此舞

の破を舞給ける、見る者目をおどろかしけり、童父の持給たる御衣つたへ取て、又舞て入給けり、内大臣拜賀申されけり、次右大辨子息の童、陵王を奏す、納蘇利、次に輪臺、兩貫首以下、垣代に立けり、右衞門督宗通卿、たちくはゝりて笛を吹、右大辨笙を吹、左京權大夫俊頼朝臣箏、篳篥備後介有賢朝臣唱歌、左近將監狛光季、左兵衞佐宗能ぞまはれける、次に散手、次太平樂、次に皇仁、次に賀殿、次林歌、退出音聲長慶子なりけり、次御遊、右大臣箏、右衞門督笛、右大辨拍子、左大辨琵琶、刑部卿顯仲朝臣笙、有賢朝臣和琴、左中將宗輔朝臣笛、俊頼朝臣箏、篳篥越前守家保笙、呂安名尊、席田、鳥破、律伊勢海、三臺急なりけり、十八日、鳥羽南殿に行幸なりて、御賀事有けり、廿日後宴を行はれける、舟樂などはてゝ、舞を御覽せられけり、春鶯囀、古鳥蘇、輪臺、青海波の曲の間に、主上時々御笛をふかせ給けり、垣代には殿上人ども立けるに、右衞門督笛、右大辨唱歌して、立くはゝられける、顯仲朝臣笙、俊頼朝臣箏、篳篥、光季詠をとなふ、青海波七切にて拍子をかふ、次散手、次胡飮酒、内大臣童舞れける、次納蘇利、童季輔、日暮ければ、次第をまもらず、童舞を先めされけり、次賀殿、次林歌、次三臺、次皇仁、退出音聲、蘇合の急をぞ奏し侍ける、

〔百練抄五 堀河〕康和四年四月廿七日、法勝寺、奉賀法皇○白河算、

〔帝王編年記二十 近衞〕仁平二年壬申三月六日、於鳥羽殿、奉賀法皇○鳥羽五十之壽、舞人樂人殿上人有童舞、○又見百練抄、一代要記、

〔本朝世紀〕仁平二年二月廿五日庚寅、今日御賀試樂也、在別先是權大納言公敎卿、參議敎長朝臣、資信朝臣、著仗座、被發遣御諷誦使於十二箇寺、是依御賀事也、敎長卿爲法勝寺使、資信朝臣爲最勝寺使、又於朱雀門有賑給事、於官厨家有施米事、依同事也、　三月六日辛丑、亥刻行幸鳥羽、依明日御賀事也、左大臣○藤原賴長内大臣○藤原實能中納言重通卿、公能卿、權忠雅卿、右近中將兼長卿、參議敎長卿、雅通朝臣、師長朝臣供奉、少納言實經候鈴奏、外記不可留守之由被仰下、依康和例也、左大辨資信朝臣、左

少辨資長、左大史三善良康等爲留守、七日壬寅、今日主上〇近衞於鳥羽南殿設法會、賀太上法皇〇鳥羽五十算、在別記 八日癸卯御賀後宴也、在別記 八月十六日戊寅、今日法勝寺三綱設齋會於本寺講堂、奉賀太上法皇五十寶算、仍未刻御幸、太政大臣、左大臣、右大臣、內大臣以下參入、以權僧正隆覺爲導師、終日有樂懸矣、事了還御鳥羽殿、

〔續世繼二鳥羽の御賀〕仁平二年三月七日、このゑのみかど、鳥羽院にみゆきせさせ給て、法皇〇鳥羽の五十の御賀せさせ給き、等身の御佛、壽命經も、ゝまきたまのかゝちをみがき、こがねのもじになむありける、僧はいそぢのかずひきつらなりて、佛をほめたてまつり、まひ人は、ちかきまほりのつかさ、雲のうへ人、あをいろのわきあけに、柳さくらのゑたがさね、ひらやなぐひのすゐしやうのはず、日のひかりにかゞやきあへり、つぎの日もなほさゞまらせ給て、法皇ををがみたてまつり給、さま〳〵のそなへども、庭もせにつらねてたてまつらせたまふ、池のふね、はるのゑらべとこのへて、みぎはにこぎよせて、おの〳〵おりて、左右のまひの袖ふかき、青海波、左のおとゞ〇頼長の御子〇隆長右大將〇實能の孫の中將〇實定の君まひ給、はてには左大將〇雅定の御子〇雅仲とて、胡飮酒わらはまひし給ふるきあと、いへのことなれば、かづかり給御ぞ、ちゝのおとゞとりて、袖ふり給ひて庭におりて、よろこび申のやうにさらにはいし給に、ゆふ日のかげにくれなゐのいろかゞやきあへり、

〔古今著聞集十三祝言〕仁平二年正月〇正月恐三月誤七日、法皇五十にみたせ給御賀有ける、前日鳥羽殿に行幸なりて、ふるき跡を尋ては法會行はれけり、大炊御門左大臣、妙音院太政大臣殿、ともに宰相中將にて、樂行事はせさせ給けり、舞人左少將宗持朝臣、右中將實長朝臣、定房朝臣、左少將隆長朝臣、實定、藏人左衞門佐忠親、右少將公親朝臣、左少將俊通朝臣、左少將公保朝臣、樂人左皇后宮亮師國朝臣羯鼓、治部大輔雅賴摺鼓、左馬頭隆季朝臣、攝津守守重朝臣笙、備後守季兼朝臣篳篥、上總介資賢朝臣、侍從成親笛、右中將師仲朝臣大鼓、大納言教宗鉦鼓、右少納言成隆朝臣三鼓、中務權大輔季

家朝臣、侍從信能ふえ、土佐守季行朝臣箏篥、頭中將伊方朝臣ふえ、右中將行通朝臣大鼓、少納言實經鉦鼓、かくぞ侍ける、右兵衞佐實國笛にて侍けるが、遲參せられたりけり、八日後宴に、御拜獻物御膳などはて丶、舞を奏す、右大臣、侍從大納言成通卿、新大納言公敎卿、仰を承て春鶯囀のとき、御階のまへをへて樂屋へ向ひて、右大臣は笙を吹、兩納言は笛をふかれけり、中宮權大夫將通卿も、同く樂屋に向て羯鼓をうたれけり、隆長朝臣、實定、靑海波をまはれければ、左大臣一家の人々を卒して、樂屋へむかひ給、垣代には左大臣笙、民部卿宗輔卿笛、季兼朝臣箏篥、舞人光時、樂の輪のほとりにゐて詠をとなふ、師仲朝臣童、胡飮酒を舞けるに、曲をはりて退きけるを、御座のかたはらにめされて、關白殿御あこめをとりて給はせけり、肩にかけて舞て退きけるを、右大臣、童を扶持し給て、右の肩に御衣をかけ、左手に笏を持て、西對垣代の南のはなちいでにて、一曲を舞給けり、童、階のもとにおりたちて後、右大臣、坤の庭にて舞踏し給けり、其後御馬ひかれて御遊あり、左大臣右大臣笙、内大臣拍子、民部卿箏、藤大納言琵琶、侍從大納言笛、資賢朝臣和琴、伊實朝臣付歌、季兼朝臣箏篥、呂律の曲畢、勸賞おこなはれけり、

〔貫首秘抄〕鳥羽院、五十御賀獻物之時、頭右大辨朝隆朝臣爲正下四位、立正上四位忠盛之上、是兼取御氣色云々、大辨頭、雖庭上不列人下故云々、

〔百練抄 七近衞〕仁平二年八月廿八日、入道太政大臣、（藤原忠實）於福勝院、賀法皇（鳥羽）五十算、（又見兵範記）

〔玉海〕承安五年（安元元年）七月四日癸未、藏人右衞門權佐光雅來、（中略）此次光雅語云、御賀事、去四月比、奉可奉行之仰、先是中宮大夫隆季、（上卿）以左中辨長方等、承仰云々、今度偏被康和（白河御賀）例云々、但御調度之中、御厨子事聊有沙汰、康和例、（八脚）仁平（鳥羽御賀）例、（六脚、其中二脚紛失云々、被用康和御厨子、）其數不同、可被用何例哉、且被問人々歟之由、中宮大夫雖被奏聞、只可用古物（六脚）之由、御定切了云々、又童舞事、人々被辱慢、各舞退、宗家卿被譴責、慭領狀云々、又煎茶具、任康和例、可被調之、（仁平無之）而彼度物具等、被求鳥羽御倉、

之處、已以紛失、仍今度開仁和寺圓堂、取出其具等、可爲本樣云々、康和如此 來月八日可被始行事所、十月可被始樂所云々、其後退出了、　十月五日壬午、今日御賀定云々、　十六日癸巳、今日樂所始云々、事訖亥刻許、經家朝臣來語曰、舞人樂人申刻許參集、以中宮御方北廊爲其所云々、東上對座奥上敷行事參議座、不絶席云々 先行事參議左近中將實家卿進樂所、次舞人樂人混合、依位次行列著座、衞府帶劒、皆悉持笏、依相當御物忌也、康和、依非御物忌不持笏、是則臨時祭調樂、殿上舞人不帶劒、凡殿上侍臣、非御物忌之外、無指故之時不帶劒也、御物忌之時帶之、外宿人不可昇殿上之故也、仁平、同依御物忌所帶劒也、各著座之後、先藏人長俊、以日時勘文下宰相中將實家卿、卽返給了云々、三獻、無勸盃之儀、雜色衆基持參盃、居折敷也、其後立箸、次改座於庇、一行著之云々、撤饗、皆悉撤之 次吹平調調子、先左萬歲樂、廿拍子舞之、康和不終一曲、或人云、僅三拍子也云々、仁平十拍子云々、今度舞人上首左中將賴實申事之由云々、仰云、至上不可知食舞人意也云々、于時可有廿拍子之由示樂人云々、以藏人長俊奏事之由、主上密々御見物、關白被候云々、次右地久、舞了廻北對北參殿上口、奏音聲賀王恩了、　二年正月廿三日己巳、此日法皇〇後白河始御覽御賀舞、日來御于南殿、而先例於可有御賀之御所、不覽御賀舞之由、其議出來、仍渡御北殿云々、 未刻著直衣、參院御所、北殿、七條殿御所是也、 先是舞始、關白以下公卿卅餘人、候南簀子幷中門廊等、皆冠直衣、宗家雅賴等卿束帶、大納言已上、候簀子及寢殿西廣庇等、余經中門廊透渡殿等加座、地久舞訖入之間也、先是萬歲樂舞了云々 當西透渡殿南北行、敷紫端帖二行、爲樂人座、任座次著之、其後中門北廊溜邊也 時秋已下樂人等伺候、光近忠時已下左右舞師等同交居、已上皆布衣也 當樂人座南妻東、立大鼓鉦鼓、其東立左桙六、南北行 舞、舞人皆淺履〇中略 舞訖、日沒程也 樂人等起座、無退出音聲、人々起座、關白先退出、次左大臣、次余退出了、　二月五日辛巳、此日法皇覽御賀舞、第二度、御所如初、

〔顯廣王記〕安元二年二月十七日癸巳、可有御賀之由被告三社、伊勢、八幡、賀茂、上卿新大納言實國卿、辨左衞門權佐光雅、使王經資王、中臣師親朝臣、忌部友平、卜部致貞、於神祇官有此事、依八省穢、八幡按察卿、中納言賀茂朝方卿、參議 廿一日丁酉、於內裏有御賀試樂、胡飮酒童、殊在饗應、親父權大納言定房卿、及

叔父隆季兩大納言、伯父雅頼中納言、立庭令引導舞童、曲了被召返、口入口被召上殿上、殿下取紅御衣纏頭、舞童父大納言、取御衣懸肩、一曲了下、射殿拜舞、陵王童、中納言宗家卿子、神妙、有祿、不被召上、

〇又見百練抄

〔帝王編年記〕二十二高倉安元二年二月廿一日、於内裏有試樂事、舞人樂人等爲殿上侍臣、有童舞二人、一人大納言定房卿、小舍人雅行、舞胡飲酒、一人中納言宗家卿息、小舍人宗相、舞龍王、先是於院御所法住寺殿、度々有舞衣御覽、裝束各裁錦繡、其體目不暫捨、觀者拭感涙、抑右大臣兼實公隨身祗候中門、平禮烏帽爲風飛來舞庭、終日飄揚、壯觀瑕瑾也、諸人驚目、件隨身長以逐電云々、

〔玉海〕安元二年三月二日丁未、今夕法皇〇後白河及建春門院〇後白河后滋子御幸南殿、供奉侍臣衣冠云々、是依明後日御賀也、傳聞今日左大臣付藏人右少辨光雅、以消息遂之被奏賀宴式、兩日載一紙光雅内覽奏聞院内、返給、下上卿中宮大夫云々、　四日己酉、此日公家被奉賀太上法皇五十寶算、於東山御所南殿有此事、世間之法住寺殿、任康和仁平例、於鳥羽南殿可被行之由、去年雖有議定、彼皆當時御在所、依爲勝地被用之、今又御所之體、水石有便、何求外哉、加之鳥羽殿、其地大荒蕪、專雖行此禮、仍重有議被改之、雖違亦爾度例之恨、猶有來庶煩之説、編業莫不甘心、有今度賀宴、偏康和例也、仍無法會、延喜康和無法會、天永仁平有法會、今曉先中宮〇德子行啓、次天子〇高倉臨幸、早旦修諷誦於七箇寺、賀茂、稻荷、春日、吉田、南圓堂、法成寺、日野、〇又見顯廣王記、

〔安元御賀記〕安元二年、としのついでひのえさる、彌生のはじめの四日、世治り時春なれば、鳥の木傳ふこゑ、花のゑめるいろ、折につけことにふれて、誠にいひしらず、今年太上法皇〇後白河いそぢに滿たまふによりて、我きみ〇高倉の御賀を奉らせ給ふなりけり、其日の曉、法住寺の南どのに行幸あり、百のつかさども參り隨へること、常のごとく、院の御所一町に及ぶ程に、さきの聲を停む、みこしを西のよつあしにかきたつ、神づかさ、御ぬさを奉る、うたづかさ、たち樂を奏す、院別當權大納言たかすゑ、事のよしを申す、其後中門に御輿をよせて入御、大刀契鈴印を中門の北のらうによせておく、人々まかり出、午の時に、關白基房左大臣、經宗右大臣、兼實内大臣、師長左大將大納言六人、定房、重盛、右大

將公保、隆實房、實國、季、中納言七人、邦綱、資賢、按察[illegible]宗盛、左衛門督兼雅、時忠、別當雅賴、實綱、二位中將兼房宰相八人、成範、左兵衛督賴盛、右兵衛督教盛、朝方、宗通、右實家、左中將實守、右中將賴定、三位七人、信隆、基通、右中將基家、信範、隆輔、俊經、右大辨修範、殿上人、藏人頭さねむね、中宮亮しげひら、なが〻たを始として殘るはすくなし、是よりさきに獻物百捧、中門よりとの南のわきにたつ、屯食百荷、おなじきらうの東の庭にたつ、しんでんの辰巳のすみ二間、東のこしんてん四間に、女院○後白河后建春門院滋子の御方のうちいであり、紅の薄やうのきぬ、白きいつへのひとへからきぬ、裳のこし赤地の錦、おの〳〵白かねこかねの紋をつく、西の對の南二間東四間に中宮○高倉后徳子の御方の打いであり、唐ぎぬ青にびの打たる、裳のこしすはうの匂ひの打たる、うち衣山吹の匂ひきぬ紫の匂ひ、ひとへ紅の匂ひ、櫻を結ひて付たり、釣殿の北のらうに、上西門院統子の打出あり、しろ薄やう、釣殿のうへにしもに、女院上西門院中宮の御方々のさうしはしたもの、色々さま〴〵の袖をつらねたり、南の島には、武者所其數並びゐる、樂屋の西の方に、院の御隨身ども、狩裝束にてふるまひあへり、汀の松には藤の花をむすびかけて、鶴の巣くひたるかたをすゑたり、軒の前の植木どもには、色々の花を作りつけたれば、風にもちらず、すべて山のいきほひ水の色、萬代をよばひ、十たびすまんけしき、かねてしりぬべし、その時法皇出御、大床子のいぬゐの方に立せ給へれば、仁和寺法親王○守覺三衣の箱を取て御前におく、つぎに關白、はかう○帛袷をしき給て後、天皇出御、すでに御拜果て二所入御、其後三所の殿上をかけたる五位參りて、御拜の座を改む、又法皇出御、法親王、三衣の箱を大床子のたつみのすみに置給、つぎに天皇大床子につかせ給をはりぬ、其後大臣以下、饗の座をたちて中門のとにいづ、藏人をへたる五位、籠物を取て公卿に奉る、藏人をへたる五位、殿上人にさづく、侍從よりしもつ方、みづからよりてとる、おの〳〵是を捧げて御前の庭にたつ、公卿一並び、殿上人侍從內豎諸衛判官以上一並び、たち定りて後、物の名をさなふ、左大臣、院の別當をめす、頭右大辨長方朝臣、中門のとより別當判官代をひきぐして、公卿の前によりて籠物を

給る、其後おの〳〵中門のとへ出ぬ、行事のすてんだい、ごんもち物〇獻を御づし所へはこび渡す、此度の上卿にて中宮大夫〇隆季事を行はる、ごんもち物のをりに、東の釣殿のうへに、院の殿上人、其數立出たりしを、御隨身近武を召て追入られぬ、次に院の御方の御前の物を參らする、陪膳權大納言隆季、役送宰相、内の御方の御前の物、陪膳左衞門督宗盛、役送四位、其後役送兩頭以下四位五位、重衡右頭馬經房右中弁時實少將親宗權弁資盛侍從入御、五位殿上人御裝束をあらたむ、母屋のみすをたれて、南の廂の西第七の間にうげん二枚を敷、其上に錦のへりのりうびんをのべて、唐錦の茵を敷て院の御座とす、東西北五尺屛風三でうをたてめぐらす、同じき間の南西のみすをたれて、同じき廂の第五の間、うげん二枚をしく、其上に東京のにしきの褥を敷て天皇の御座とす、はしの東のすのこに、菅の圓座を敷て法親王の座とす、同じきはしの西のすのこに、圓座を敷て公卿の座とす、左右近衞胡床をたつ、かもんれう、はしのもとに座をしく、次に近衞づかさ胡床につく、次に二所出御、關白御前の座につく、頭中將さねむね、公卿をめす、大臣以下御前の座につく、關白、右兵衞督よりもりを召て、法親王めすべきよしをおほす、次に三所の殿上人はしのもとの座につく、中宮大夫座をたちて音聲を催さる、行事よりはじめて舞人樂人中門に並びたつ、亂聲三度、まづ左、次に右、つぎに左右おなじく是をふく、〇中略此程藏人所の衆かざしの花をくばる、左は尾上の櫻、右は井手の山吹、既賀王恩を吹て御前の庭を渡る、〇中略をの〳〵池の汀を東にゆきて樂屋へ至る、左は左のほこの北より、右は右のほこの南より、南北の一のまよりいる、一の鼓、わらははは庭にとゞまりて袖をひるがへす、此程樂人舞人龍頭鷁首の船に乘て賀王恩を奏す、中島を漕めぐりて樂屋の岸につく、其後各座につきをはりぬ、樂屋の有さま誠にいかめしかりき、裏表唐錦のまんにかねのもんをつく、らてんの柱にからあかねのつな、むねには白がね鶴をすへたり、とばかり有て左右たがひに舞を奏す、左まんさいらく、太平樂破一反陵王破二反右地久小松の

にしのもとにて一のつら〇つら一本作二つゝみ一ばかりこまかなてある新鳥蘇あはせかひなをまふ、少將隆房左の舞人にはやうとすゝむれば、しばし有て權のすけ少將これもり出て落蹲入綾をまふ、青色のうへのきぬ、すほうのうへの袴に、はへたる顏の色おもゝちけしきあたり匂ひみち、みる人たゞならず心にくゝなつかしきさまは、かざしの櫻にぞこさならぬ、舞終りて歸り入時、院の御まへより殿上人を御使にてめして、けふの舞のおもてはさらに〳〵是にたぐふ有まじくみえつるをとて、女院の織物のかず、御ぞに紅の御袴ぐして關白御使えたまはするに、父の大將〇平重盛座を立て參りて御衣を取て右のかたにかけて院を拜し奉り給程のめいぼく、其時に取てはたぐひなくぞ見えし、かたへの人々もいかにうらやましう覺えけん、つぎに殿上人樂人にろくを給ふ、〇中略其後胡床をさる、御馬十疋、平文のうつしを置て院に奉らせ給ふ、殿上の衞府を口さりとして、近衞の舍人しなはをとる、左中將知盛、番長以上右中將通親、權左中將雅長、中宮亮重衡、左少將資盛、右少將清通、新少將親信、右少將時實、左馬頭信基、殊にほこりかにおもふ事なげなる人々のけしき也、たちともしらずいはえたるけしきは花山の麓にもかくやはあらんとおぼえたり、御まへをみめぐり引程に、左大臣仰られていはく、のれゝ、しなはさとりをの〳〵乘てうちまはす、おるべきよしを仰らるれば、をの〳〵おりて御前へ引たつ、又仰られていはく、院のみまやにたまへ、其後ひんがしの釣殿のめだうより引出てみまやとねりに給はす、次に管絃の具をめす、笙きさきえ笛こたか丸ひちりき名無びわ玄上箏ふしみ和琴すゞかこれらを殿上人もて參る、すでにして御あそびはじまる、關白御笛を箱の蓋に入て天皇に奉る、右大臣兼實琵琶、內大臣師長箏、中宮大夫隆季笙、大納言さねくに笛、按察使すけかた拍子、左宰相さね家和琴、さだよしひちりき、左中將知盛、きさかた、つけうた、まづそうでう、あなたうと、とりのは、むしろ田、賀殿のきう、次に平調、伊勢の海、萬さいらく、衣がへ、三たいのきう、さても御笛の音こそ今もたぐひなくいにしへもかくや有けむと聞えしか、夢か夢にあらざるか、神なり又神也、此間法親王にろくを給ふ、三重

の白き織物のうちき一かさね、紅のうちのほそなが一領、白き大褂二領、左兵衛督致盛是をとりかさねらる、是よりさきに左大臣公卿の座につきて見參をみる、中門に立て少將時ざねをめして院司の見參を給ふ、ときざね中門にして院司の名をとなふ、其時いち〳〵に座をたつ、中門のひんがしのみぎりにろくを給はりてかへりのぼる、つぎに御供の公卿以下にろくを給ふ、其後二所入御、上下みなかへりいでぬ、かくてあくれば五日に成ぬあすは後宴にて、けふはさしたる事なけれども、たゞにやは暮さむとて、關白以下宿直裝束にて參集れり、（○下略）

〔百練抄（高倉八）〕安元二年三月五日、仙蹕（○後白河）猶留、建春門院中宮等女房乘船、月卿雲客乘船、有管絃興、又有蹴鞠、

〔顯廣王記〕安元二年三月六日庚戌、御賀後宴也、夜半許有還御、被行勸賞、二品守覺法親王、正二位宗家、資賢、（已上院）從二位藤中將殿、（中宮）正三位信範、（院）基家、（上西門院）從三位藤隆忠、（建春門院）正五位下藤隆保、（上卿賞）從五位上同定經、（臨時○又見玉海、帝王編年記、）

〔百練抄（高倉八）〕安元二年三月六日、御賀後宴、主上令吹笛給、聞者莫不感歎、今日仙駕還宮、

〔玉海〕安元二年三月八日癸丑、此日御賀行事頭辨長方朝臣、藏人右少辨光雅、右衛門尉藤原能成、（六位使）等相具御調度目錄參入、各給祿、（紅褂）又左衛門督宗盛卿、持參勸賞位記、花山中納言兼雅傳奏之、宗盛卿給祿、（大褂一重）院司公卿之中、信範卿一人參合、仍便給件位記、自餘以主典代被分遣之云々、十六日辛酉、此日內裏臨時樂也、依康和四年三月廿四日例、被行之、依賀宴餘興所御覽也、

〔百練抄（高倉八）〕安元二年三月廿八日、上皇覽御賀舞、代々賀宴以後覽童舞、仁平（○鳥羽）例、後日舞人著襲裝束覽之、今度以彼是例、同時所覽也、（○又見皇帝紀抄、）

〔吉續記〕文永四年十月八日、今夜御賀（○後嵯峨五十賀）行事所始、（其所爲官廳）頭辨藏人皇后宮權大進著座奉行、六位出納二人著座、（○中略）日時、頭辨內覽奏聞、廿九日、參內、今日御賀定也、頭辨申沙汰、於晝御座被

定刻限、出御、御引直衣御殿御装束、只如日來、

〔増鏡八飛鳥川〕ひまゆく駒のあしにまかせて、文永も五年になりぬ、正月に閏あり、後の廿日餘りのほどに、冷泉院にて舞御覽あり、あけんとし、〇文永六年一院〇後嵯峨いそぢにみたせ給ふべければ、御賀あるべしとて、いまより世のいそぎにきこゆ、樂所はじめの儀式は、內裏にてぞありける、試樂廿三日と聞えしを、雨ふりて、あくる日つとめて人々まゐりつどふ、新院〇後深草は、かねてよりわたらせ給へり、寢殿の御階の間に、一院のおましまうけたり、そのにしによりて新院の御座、東は大宮院〇後嵯峨后姞子東二條院〇後深草后公子みな白御はかまに二つ御ぞたてまつれり、聖護院の法親王〇順助圓滿院〇性覺などまゐり給ふ、土御門の中務の宮〇宗尊もまゐり給ふ、上達部殿上人あまた御ともし給へり、仁和寺御室、梶井の法親王なども、すべて殘なくつどひ給ふ、月花門院〇後嵯峨皇女綜子花山院准后などは、大宮院のおはします御座に、御几帳おしのけてわたらせ給ふ、寢殿の第四の間に、袖くちども心ことにておしいださる、大納言の二位殿、南の御かたなど、やんごとなき上﨟は、院のおはします御簾の中に、ひきさがりてさぶらひ給ふ、いづれも白きはかまに二ぎぬなり、東のすみの一間は、大宮院、月花門院の女房どもまゐりつどふ、西の二間には、新准后〇後嵯峨妃平棟子さぶらひ給ふ、御前のすのこには、關白殿〇藤原基平をはじめて、左右大臣〇藤原基平、同基忠、內大臣〇藤原家經兵部卿、隆親二條大納言、良教源大納言、通成花山院大納言、師繼右大將、通雅權大納言基具一條中納言、公藤花山院中納言、長雅左衞門督、通賴中宮權大夫、隆顯大炊御門中納言、信嗣前源宰相、有資衣笠宰相中將、經平左大辨宰相、經俊新宰相中將、具氏別當、公孝堀川三位中將、具守富小路三位中將、公雄みな御階のひがしにつき給ふ、にし第二の間より又前左大臣、實雄二條大納言、經輔前源大納言、雅家中宮大夫、雅忠藤大納言、爲氏皇后宮大夫、定實四條大納言、隆行師中納言經任このほかの上達部、にしひがしの中門のらう、それより东もざま透渡殿うちはしなどまでつきあまれり、みな直衣に色々のきぬかさねたまへり、時なりて舞人どもまゐる、〇中略

陵王の童に四條大納言の子〇隆行裝束つねのまゝなれど、むらさきのろくたいのはん志り、かねのもん、赤地のにしきの狩衣、あをき魚綾のはかま、しやく木のみなえりぼね、紅のかみにはりて、もちたるよういけしき、いみじくもてつけて、めでたくみえ侍りけり、笛もちみち、たかやす、笙きんあき、宗實、ひちりき、兼行、大鼓、敎藤、かつこ、あきなり、三のつゞみ、のりより、左萬歲樂、右地久、陵王、輪臺、青海波、太平樂、入綾、實冬いみじく舞すまされたり、右落蹲、左春鶯囀、右古鳥蘇、後參、賀殿の入あやも、實冬舞給しにや、くれかゝるほどに、なにのあやめもみえずなりにき、御かた〳〵宮たちあかれ給ぬ、おなじ二月十七日に、又新院富小路殿にて、舞御らん、その朝大宮の院、まづ志のびてわたらせ給ふ、一院の御幸は、日たけてなる、冷泉殿より、たゞはひわたるほどなれば、樂人舞人けふの裝束にて、上達部などみなあゆみつゞく、庇の御車にて、御隨身十二人、花ををり、にしきをたちかさねて、こゑ〳〵御前花やかにおひのゝしりて、ちかくさぶらひつる、になくおもしろし、新院は御ゑぼうし直衣御はかまきは〇一本は字无にて、中門にてまちきこえさせ給つるほど、いとえむにめでたし、御車中門によせて、關白殿御はかせとりて、御匣筥殿につたへ給ふ、二重おり物のもえぎの御几帳のかたびらをいだされて、色々の平紋のきぬども、物の具はなくておしいださる、けふは正親町院〇土御門皇女覺子も御堂の角の間より御らんせらる、大臣上達部、ありしにかはらず、なほまゐりくはゝる人はおほけれど、もれたるはなし、〇中略萬歲樂をふきて、樂人舞人まゐる、池のみぎはに桙をたつ、春鶯囀、古鳥蘇、後參、輪臺、青海波、落蹲などあり、日ぐらしおもしろくのゝしりて、歸らせ給ふほどに、赤地の錦の袋に、御びは入てたてまつらせ給ふ、刑部卿の君、御すの內よりいだす、右大將〇通雅とりて、院の御前にけしきばみ給ふ、胡飮酒の舞は、實俊の中將とかねては聞えしを、父おとゞの事に、とゞまりにしかば、近衛前關白殿の御子、三位中將ときこゆる、いまだ童にて舞給ふ、別してこの試樂よりさきなりしにや、內々白川殿にて心みありしに、父の殿も御簾

のうちにて見給ふ、若君いとうつくしう舞給へば、院めでさせ給て、舞の師たゞもち、ろくたまはりなどしけり、かやうにきこゆる程に、むくりの軍といふ事おこりて、御賀とゞまりぬ、人々くちをしく、ほいなしとおぼすことかぎりなし、〇又見五代帝王物語

〔三代實錄三十四陽成〕元慶二年九月廿五日丁巳、太上天皇〇清和延屈碩學高僧五十人於清和院、大設齋會、講法華經、限三日訖、太皇太后〇清和母明子今年始滿五十之算、由是慶賀修善、祈請餘齡、親王公卿文武百官畢會、十一月十一日壬寅、太上天皇獻物於太后宮、雅樂擧樂、令太上天皇童親王舞、右大臣藤原朝臣男兒一人預焉、先是延五十僧講經薰修、是則解齋之宴也、親王公卿及五位已上畢會、歡飮竟日、賜祿有差、

〔三代實錄三十五陽成〕元慶三年正月十三日癸卯、授典侍從三位上毛野朝臣滋子正三位、從五位上藤原朝臣貞風從四位下、無位藤原朝臣近眞、藤原朝臣御夏、雀部朝臣宜子、太朝臣平子、並從五位下、滋子已下太皇太后宮侍執之人也、去年十一月五十賀、宴餘之賞、有此加授焉、

〔古今和歌集七賀〕さだやすの御子の、きさいの宮〇清和后高子の五十の賀奉りける御屛風に、櫻の花のちるしたに、人の花見たるかたかけるをよめる、　藤原のおき風

いたづらに過る月日はおもほえで花見てくらす春ぞすくなき

〔日本紀略二朱雀〕承平四年三月廿五日乙丑、依皇太后〇穩子御賀事、修諷誦於諸寺、賜度者五十人、廿六日丙寅、公家於常寧殿、奉賀皇太后五十算、〇又見扶桑略記

〔古今著聞集十三祝言〕承平四年三月廿六日、天子〇朱雀常寧殿にて、皇太后〇穩子の五十算の賀せさせ給けり、廿七日後宴に、式部卿親王以下參り給、舞曲を御覽せられけるに、左大臣、右大臣、右大將保忠卿、大納言恒佐卿、庭におりて崑崙を舞給けり、これ故實たるよし吏部王記し給ひて侍とかや、其後なほ管絃の興有けり、

〔新古今和歌集七賀〕七條の后の宮〈○穩子〉五十賀屏風に　伊勢

住の江のはまの眞砂をふむたづは久しき跡をとむる成けり

〔日本紀略二朱雀〕承平四年十二月九日、左大臣〈○藤原忠平〉爲太后御五十算、獻物於常寧殿、

〔妙法院日次記〕元祿十五年二月九日、女院〈○靈元后新上西門院鷹司房子〉五十御賀御祝儀トシテ、昆布一箱、白綿三把進之、

〔三代實錄四十七光孝〕仁和元年四月廿日甲戌、是日天皇於延曆寺、東西院、崇福、梵釋、元興寺五寺、請十僧、始自今日五十日間、轉讀大般若經、賀太政大臣〈○藤原基經〉滿五十算、兼祝壽命也、

〔三代實錄四十八光孝〕仁和元年十二月廿五日乙亥、太政大臣〈○基經〉今年始滿五十之算、帝於内殿、命宴賀之、杯案精華、絲竹間奏、促席談飮、通夜極歡、賜賚左右馬寮善馬五匹、夏冬衣裳五襲、臥具屏風等有數、又賜度僧五十人、以修壽祝算也、

〔菅家文草二〕右親衛平將軍〈○右近衞少將平正範〉率廐亭諸僕、奉賀相國〈○藤原基經〉五十年宴、座後屏風圖詩五首幷序、

古人有言、曰、聖人之養生也、必適其性、室大則多陰、多陰者致逆寒、室高則多陽、多陽者不能行、斯乃陰陽不適之患、居處空敞之弊、是故其爲宮室臺榭也、足以避燥濕矣、其爲飮食酏醴也、足以適味充虛矣、其爲輿馬衣裘也、足以逸身煖骸矣、其爲聲色音樂也、足以安性自娛也、其爲苑囿園池也、足以觀望勞形矣、五者聖人之所以節性、不必好儉而已、誠哉古人之有斯言也、近取諸身當施座右、故寄奇句以備用心云爾、〈將軍許余以言笑之好、元年(仁和)冬抄密語云、相國今年滿五十、予率諸僕可設遊宴、座後所施屏風、欲致妙絕、汝作詩、藤將軍(敏行)書之、巨金岡畫之、予願足矣、再三難辭、遂不寬放、〉

〈此序是呂氏春秋之成文也、爲叙本意、乃有此注而已、〉

〔菅家文草五〕右金吾源亞將〈○源當時〉與余〈○菅原道眞〉有師友之義、夜過直廬、相談言曰、嚴父大納言〈○源能有〉去年五十、心往事留、過年無賀、此春已修功德、明日聊設小宴、座施屏風、寫諸靈壽、本文者紀侍郎〈○紀長谷雄〉之

所抄出、新様者巨大夫(○巨勢金岡)之所畫圖、書先賜藤右軍(○藤原敏行)詩則汝之任也、談畢歸去、

〔北野緣起上〕寛平六年長月の頃、門徒の人々、貴も賤も吉祥院に集りて、五十の御年(○菅原道眞)のよろこびの會臨せしめけるとき、法會の庭のおもてに、翁のわらぐつはゞきしたるが、願文に砂金をとりそへて、やう〳〵あゆみよりて、堂前の案上におきて、いふ事もなく急ぎさりぬ、あやしと思ひてひらきたりければ、

傳聞、菅家門客、共賀知命之年、弟子雖削跡人間、無名世上、尙數記淳秋之風、多改悉昧之過、古人無(○無恐有誤)言、無德不報、無言不酬、深感彼義、欲罷不能、故福田地、捨此沙金、金以表中誠之不輕、沙以祈上壽之無涯、莫疑其人、可求其志、遠居北闕之以北、遙贈南山之和南、

とこそかゝれたりけれ、少僧都勝延、導師にて讃歎しき、忝も天子の修し給ひけるにや、希代の勝事とぞ、富樓那の辨舌をのべ給ひけるにや、

〔日本紀略醍醐一〕延長七年二月廿三日、六條院太上皇(○宇多)賀左大臣(○藤原忠平)五十算於法性寺、三月廿三日、右近中將藤原實賴、爲左大臣五十算於法性寺、設賀禮之法會、九月十七日癸未、右兵衞佐藤原師輔等、於法性寺、賀左大臣五十算、十二月十四日、勸學院衆等、賀左大臣五十算、十八日、天台僧千口、於講堂賀檢挍左大臣五十算、

〔扶桑略記醍醐二十四〕延長七年九月十七日、左大臣(○藤原忠平)子息四人、共於法性寺、設五十賀齋會、其儀本堂毗盧遮那像前、安置銀藥師如來像、安置六角佛殿內、畫藥師淨土、外金蒔繪殿頂安水精火炎珠、當戸懸兩金花鬘、代殿角蕨形懸金幡、七僧、講師尊意、讀師仁觀、呪願基繼僧都、三禮蓮舟、唄才淮、散花泰舜、堂達良僧、各送法服、五十僧自大門引入堂、群卿大夫皆在禮堂、大娘宮君諷誦、沙金百兩、納銀壺裹、靑朽葉紗、付五葉松枝、中宮職(○穩子)調布二百端、後院御息所(○褒子)調布百端、按察大納言(○仲平)左衞門督(○保忠)各百端、右近權中將實賴朝臣錢十貫、中君、調布二百端、右兵衞佐師輔朝臣、信濃布百端、師氏

朝臣、調布二百端、各諷誦了、名香以青朽葉羅裹、中宮御諷誦使、亮元方朝臣、(已上出吏部王記)

〔拾遺和歌集〕(五賀)清愼公(○藤原實賴)五十の賀し侍ける時の屛風に、

元輔

君が世を何にたとへんさゞれ石のいはほとならんほどもあかねば

〔日本紀略〕(四村上)天德元年四月廿二日己卯、女御安子、於藤壺賀右大臣(○藤原師輔安子父)五十算、天皇渡御、右大臣以下諸卿、有飮宴之禮賀算事、每事盡美、天皇以御盃給大臣、有音樂、大臣嫡孫小童奉仕舞、(伊尹朝臣子)大臣以下殿上侍從以上有祿、又以屯食給諸陣所々、又召左右馬寮御馬五匹給大臣、恩之深也、

〔拾遺和歌集〕(五賀)一條攝政(○藤原伊尹)中將に侍ける時、父の大臣(○藤原師輔)の五十賀し侍ける屛風に、

小野好古朝臣

ふく風によその紅葉はちりくれど君がときはのかげぞのどけき

〔拾遺和歌集〕(十八雜賀)九條右大臣(○藤原師輔)五十賀屛風に、竹あるところに花の木ちかくあり、

元輔

花の色もときはならなんなよ竹のながきよにおく露しかゝらば

天德四年、右大臣(○藤原師輔)五十賀屛風に、

淸原元輔

千とせへん君しいまさばすべらぎの天の下こそうしろやすけれ

〔日本紀略〕(十二三條)長和四年十二月廿六日壬寅、太政官、於法性寺賀左大臣(○藤原道長)五十算、左大辨源道方朝臣、諷誦文加署名、以當寺座主權大僧都慶命爲講師、

〔江家次第〕(二十)太政官賀執柄算事

長和四年十二月廿六日、(壬寅)爲左府(○藤原道長)於法性寺新造五大堂、太政官被行五十御賀、仍大辨以下、少納言、外記史、外記史生、左右辨官史生官掌等、皆以參會、其儀五大堂南庭立五丈幄一宇、(卯酉爲妻)其下立中取數脚、積信濃布五百端、爲諷誦布施物、同堂南廂佛面間、敷高麗端二枚、爲左右大辨座、其東

西敷紫端疊數枚、爲中辨以下少納言外記史座、凡以長筵皆敷滿廂中、立行香散華等机、懸華鬘幡等、皆如例、又西廂敷筵疊等、辨少納言等爲假著所、及未刻本寺座主慶命僧都來云、今日請僧卽以此御堂五僧請之、而供僧三人辭退、召寺中僧云々、未刻始事、先左大辨仰大夫史奉親朝臣令打鐘、次著佛前座、（左大辨著佛面座、左中辨余著西座、右少辨大夫史大夫外記著東座、六位外記史等不預著此座、權右中辨稱障不參、）各座定、御導師慶命僧都、著禮盤始事、以六位外記史等爲堂童子、（西方外記輔隆、史光隆、東方外記元規、史維信、）事畢行香、左大辨、左中辨、余、右少辨、大夫史、大夫外記、幷外記爲國親等立之、次行香畢、余取白褂一重施導師慶命、右少辨同取白褂一重、施呪願賀算、次本寺書卷數奉之、卽以厨家別當右少辨奉左府、（右少辨令持辨侍、則成持參左府、備中前司國平朝臣奉覽、卽以白大褂一領給辨云々、）自餘人、從法性寺各以分散、今日無飯酒、若是依先例歟、爲當時儀歟、未知其案內、又僧布施、僧都絹五匹、手作十端、凡僧絹二匹、手作三端、但無供養料、今日諷誦文右少辨所草案也、左大辨一人、被加日下署、余參左府、國平朝臣云、今日所被行殿下賀、有其數者（勸學院、極樂寺、法性寺、慈心院、興福寺等也、）又中宮於法性寺五大堂始從今日可被修五十箇日御修法、同爲殿下御賀也、

〔徂徠集九〕壽下館侯五十之初度序

是歲正德乙未、下館侯行年五十矣、覽揆之辰、實爲十二月辛丑、則自友邦六七君侯、或姻好或否、暨舊所與共事、先朝侍從之臣、暨御大夫、出而奉朝請者、以至於其它貴介公子、薦紳先生之徒、諸所與侯游處相厚善者、咸莫不各飾其儀、修其辭、以言其所爲欲祝侯之意、而致諸下執事、爲之壽也、是日蓋滿堂云、則有客遠自金華之陰來、見物子牛門之廬者、既見再拜以請曰、某者塞以外鄙人也、昔嘗仕于上國、有獲戾於其君焉、乃以不能自靖乎位也、承淅以去、去之日、舊君俾其士師大索國中、弗獲也、則將以窮諸海內、而錮某之所往焉、當是時、其殆乎不能逭其死矣、而唯侯之一言、乃得以紓舊君之怒、俾某不死者、豈非侯之錫乎、然侯未嘗有一日驩于某也、而直道以言之、是豈有德心哉、則天地之德矣、某惷愚、豈敢一日能忘天地之德邪、某昔在上國、亦嘗習聞於侯齒與其嶽降之日、則奮然思欲效一言之祝于侯、

以及今日之事、而不可遇也、以故不遠千里、裹糧南來、乃路過于常山之麓、侯之封國也、則見一丈人植杖其道傍、與少者相顧語焉、丈人曰、天邪父母邪、我侯之封於斯國也、十有餘年于玆、而民不死乎刑矣、以我燥髮所睹記、先祖考所傳道者、未有侯之盛也、少者曰、烏乎胡以能長我侯之齡、以終我世乎哉、胡以能俾我侯有子善肖之、以終我子孫之世乎哉、胡以能恢大我侯之封、以俾我親戚兄弟在竟外者、皆嘗其德乎哉、某怪焉、語以今日之事、則不識也、曰侯家典禮、何有乎我儕小人、小人每飯焉、則其心未嘗不在我侯也、是已、某於是皤然以爲、是雖古之善禱、莫之尙已、何必稱薦其辭侯之前、而後爲爲祝也、某居嘗所爲祝乎侯者、亦乃天保不啻哉、朝焉則欲其如日之升矣、莫焉則欲其如月之恒矣、瞻彼南山焉、則欲其壽之不騫不崩矣、瞻彼川流焉、則欲其福祿方至、以莫不增矣、于岡焉乎如岡矣、于阜焉乎如阜矣、于丘陵焉乎如丘陵矣、于松柏之茂焉乎、則亦欲其如莫或不承矣、是可以已邪、然未有以辯也、故又枉道子之廬、而敢子之敎是請、物子聞之、喟然嘆以興曰、侯之德其遠矣哉、遠者壽之徵也、夫有識焉、有不識焉、莫不皆頌侯之德焉、有至焉有不至焉、莫不皆欲侯之壽焉、其斯之謂遠也邪、夫今日之事、堂上之辭、亦莫不皆頌侯之德已、其友邦之君、則能言侯之善隣乎、姻好稱仁、否者義乎、其舊所與共事者、則侍從之臣稱忠乎、暬御大夫稱敬乎、出而奉朝請者、亦能言其同寅協共之懿乎、貴介公子以禮薦紳先生以道藝諸所與侯游處相厚善者、亦各莫不皆致其所爲欲祝侯之辭已、然是皆侯之所素識焉、而分當至焉者、其辭雖人々殊、要之豈皆出於華封天保之上哉、唯客與丈人之言、而後識侯之德遠矣哉、侯之壽豈有窮已乎、夫頌其德而至於天地焉、悠久之徵、非邪、不佞茂卿、侯之外臣也、適蒙弗鄙、延而相見一堂之上、歲時則五馬之貴、儼然以辱臨乎敝廬焉、則又以其同齒、而其雲漢之章、亦賞貴及其丘園焉、則欲一言以頌侯德祝侯壽、而不可得也、而今而後、乃始得其辭哉、夫有識焉、有不識焉、有至焉、有不至焉、分定故也、爾旋、吾其代爾而稱爾祝于侯之前哉、則常山丈人、亦與有榮哉、客大喜、再拜而去、遂錄其言、以致諸下執事、嗚呼侯之德遠矣哉、其不識焉而不至焉者亦何限、侯之壽、果乎其莫有窮已也、

〔書言故事 五 慶誕〕自稱生日曰初度之辰、離騷、皇覽揆余于初度、皇、皇考也、古人自稱死父爲皇考、初度之度、猶言時節、肇錫余以嘉名、

〔鳩巢文集 五〕奉賀白石新井丈人五十壽四首

花下芳樽對綺筵、交朋連騎滿門前、英聲昔記聞啼日、壽色今逢服政年、疏廣授經時望重、桓榮稽古主恩偏、故人應有重輪曲、吹入簫韶太史傳、

其二

今代重儒恩數優、從容官路不知愁、仙班晝接瀛州侶、鳳吹春陪洛浦遊、人似玉山依四座、壽如金鏡照千秋、相思遙寄南山壽、從此聲名共海流、

其三

佳氣樓臺十二欄、知君際會百年歡、關中豪傑推王猛、江左風流起謝安、天上並懸新日月、人間相見舊衣冠、太平待奏河清頌、未許鷹仙跨紫鸞、

其四

五十有聞君未衰、功名堪可保期頤、儒臣起草明光日、聖主徵詞上苑時、正是宋昌承寵後、非關楊震得官遲、謝家子弟多蘭玉、早報翩翩向鳳池、

〔有德院殿御實紀 三十七〕享保十八年正月廿一日、五十の御賀をひらかるゝよりて大納言殿より、黑田豐前守直邦して、越前綿百把、二種一荷、右衛門督宗武卿、小五郎君より、一種一荷、紀伊尾張兩中納言、水戶鶴千代の方より、二種一荷、松平加賀守吉德よりもおなじ、松平大隅守繼豐より、綱一折を獻す、大納言殿へは、松平伊豆守信祝御使奉り、縮緬廿卷、二種一荷まゐらせ賜ふ、

〔鳳のをがらみ〕享保十八年二月廿八日に、有德院〇德川吉宗將軍、五十賀ありしに賜ひし御製和歌、中御

門

わが代をばゆづるの後の八千とせもかくてともなへ老のゆくすゑ

皇太子御製、櫻町帝

ことしよりともなひなれて幾たびも千代をかさねよ鶴の毛衣

〔惇信院殿御實紀三十一〕寶暦十年正月廿五日、日光門跡公啓法親王歸寺ありければ、高家長澤壹岐守資祐して慰勞せらる、法王よりは五十の御年滿を賀して、二種一荷符籙を進らせらる、三月廿三日、五十の御賀筵をひらかる、よて右大將殿〇德川家治より、秋元但馬守涼朝御つかひして、綿百把、二種一荷進らせたまひ、簾中御方よりは、紅白縮緬二種一荷進らせたまふ、三家、并松平陸奥守重村、松平仙之助よりは、鮮鯛を奉る、また松平右京大夫輝高御使して、右大將に卷物二十、二種一荷、簾中御方に紅白縮緬十卷、二種一荷を進らせらる、右衛門督宗武卿〇田安、刑部卿宗尹卿〇一橋、宮内卿重好卿〇淸水には、一種一荷、壽丸の方豐之助方には、鮮鯛を遣はさる、又御賀の詩歌あまたの内、簾中の御方の詠、かしこくも君が惠に萬民千代も榮行するぞひさしき、日光門跡公啓法親王、すゑながき友とやなるゝ呉竹のちひろに千代の春をちぎりて、閑院太宰帥典仁親王、色かへぬ世々に千とせの春もなほこめてぞちぎれ庭の呉竹、これをはじめ、内外の諸臣醫員女房に至るまで、おの／＼たてまつりしとぞ、

〔五十賀和歌〕寶暦十年正月、賜將軍家〇德川家重五十賀和歌、

松契多年

榮えゆく砌の松に幾千世の齡も遠く契置てん〇以下略

〔賴言卿記〕寶暦十二年五月十九日辛巳、今日冷泉民部卿、五十年滿被賀ニ付、送盃臺一基、添詠歌、盃之包紙ノ中ニ書也、以盃包紙奉書、

くみかはし老をば松の木の花にめぐる盃千代も手にとれ

〔浚明院殿御年賀記〕天明六年三月七日、五十御賀御祝儀御規式、
公方様、〇徳川家治大納言様、〇徳川家齊御座之間御上段御著座、掃部頭年寄共丹波守、右御縁頰江罷出、御
熨斗鮑出之、
公方様　　御吸物
大納言様　御吸物　御盃臺　奈良臺　御押
公方様　　御捨土器
大納言様　御捨土器
公方様被召上、其御盃大納言様へ被進、被召上、御肴被進、其御盃公方様江被進、被召上、御肴御上ゲ
被遊、御銚子入、御吸物等引之、
右相濟而、掃部頭年寄共丹波守御祝儀申上、畢而若年寄井伊兵部少輔松平玄蕃頭御祝儀申上之、
御規式相濟、御料理三汁十菜、是ハ御意次第獻之、宮內卿殿民部卿殿御所勞ニ付、今日御登城無之
付御規式無之、今四時御供揃ニ而、大納言様、西桔梗ゟ御本丸江被為入候、
御取替之次第
公方様より大納言様江
巻物二拾　二種一荷　　御使牧野越中守
大納言様より公方様江
綿百把　　二種一荷　　御使鳥居丹波守
右御賀為御祝儀被進之
但越中守丹波守江、御使相勤候付、於両御丸巻物五宛被下之、
松平肥後守

井伊玄蕃頭
松平讃岐守
酒井雅樂頭

右登城御賀之御祝儀申上之、於御黒書院溜間謁掃部頭老中、

二種一荷　紀伊中納言殿使者　水野美濃守
二種一荷　水戸宰相殿使者　山野邊伊豆守
二種一荷　尾張宰相殿使者　玉置小平太
二種一荷　紀伊中將殿使者　服部角右衛門
右同斷　德川左衛門殿使者　荒川瀧助

右同斷ニ付被差上之、於蘇鐵之間主殿頭謁之、

松平加賀守
松平薩摩守
鯛一折宛
松平陸奥守
松平越前守

右同斷ニ付以使者差上之、於口之間謁松平伯耆守、

御賀御祝儀ニ付
公方樣ゟ種姬樣江　御使女中
一種一荷
公方樣ゟ御部屋樣　御使女中
右同斷

宮內卿殿へ　　御使高井兵部少輔
一種一荷
民部卿殿江　　御使橫田筑後守
一種一荷
但力之助殿へ、鮮御肴一折御使兼、
宮內卿殿御簾中江
一種一荷　　御使女中
安祥院殿江
鮮御肴　　文使
公方樣江 種姬樣ゟ
一種一荷　　御使女中
御部屋樣ゟ
二種一荷　　御使女中
宮內卿殿ゟ
二種一荷　　使家老吉川攝津守
民部卿殿ゟ
右同斷　　使家老林肥後守
但力之助殿ゟ、鮮御肴一折御使兼、
宮內卿殿御簾中ゟ
一種一荷　　女使

安祥院殿ゟ
右同斷
右之通御取替有之
但吉川攝津守、林肥後守、使相勤候ニ付、卷物三ツヽ於奥被下之、
御緣女樣者、御とりかわし無之、

使用人

掃部頭
老中
丹波守
若年寄西丸共
御側衆西丸共

鮮御肴一折宛

右御賀爲御祝儀獻上之

御賀爲御祝儀、溜詰幷松平越中守ゟ、鯛一折宛朝獻上之、

御內證獻上之品
御屛風一雙金無地
御印籠　五ツ
銀御銚子壹對
御香爐　壹ツ御香盆共ニ
御盃　五拾
但御盃內之方菊壽、印籠之わく成菊壽字、厚切金にて致候も有、やすり粉にて致候も有之、十枚ヅヽ五通りに替り、裏にも竹之蒔繪有之、

井伊掃部頭
松平周防守
田沼主殿頭
牧野越中守
水野出羽守

御手火鉢　貳ッ　　鳥居丹波守

但黒さはりに而、上に銀之菊有り、ひねり候へば、八重菊に成る、

御文臺　壹　　酒井石見守

御手爐　壹　　加納遠江守

御小廣蓋　貳　　稻葉越前守

御袖香爐　壹　　横田筑後守

御文鎭　壹　　本鄕伊勢守

御硯箱　壹　　小笠原若狹守

御花生　壹　御薄板共　　田沼能登守

御繪筆百對　御繪刷毛十八枚　　佐野右衛門尉

御根付　　御側因幡守隱居　松平定山

右同斷ニ付、御內證ニ而差上之、

掃部頭

老中

丹波守

若年寄西丸共

御側衆西丸共

右於奥御料理被下之、但三汁九菜、

酒井石見守七十二

白縮緬□□　加納遠江守七十六

白繻子三反ヅヽ

因幡守父　佐野兵衛門尉　八十三
不出　松平定山　九十
西丸御小納戸　小宮山利助　七十
奥御醫師　河野仙壽院　七十一

右七十以上ニ付、於奥御料理被下之、拜領物被仰付、

但石見守遠江守右兵衛尉定山江者、紅裏御免被仰付候、定山罷出不申候付、拜領物名代因幡守罷出、

御内之被下物

御伽羅　一箱　二百八十八タ
白縮緬　七卷　　老中奥兼帶　田沼主殿頭

白縮緬　七卷　　同　水野出羽守

御伽羅　一箱
白縮緬　五卷　　御用御取次御側　稻葉越前守

白縮緬　五卷　　同　横田筑後守

白縮緬　　同　本郷伊勢守

御伽羅　一箱
白縮緬　五卷　　小笠原若狹守

白縮緬　五卷　　同　田沼能登守

右御賀爲御祝儀被下之

但主殿頭、越前守、若狹守ハ、五十年已上相勤候ニ付、別段御伽羅被下之、

白縮緬三反ヅヽ

御留守居　正木左近將監
水谷信濃守
御廣敷　比留與十郎
竹尾喜右衛門
御部屋樣御用人　高橋平兵衛
荻原豐後守
御小納戸　松下掾人

白縮緬二反ヅヽ

同

奥坊主　山崎長全
組頭格　尾上壽全
林長三
組頭格御用部屋　森良南
奥坊主　濱名友圓
西丸奥坊主組頭格　木村養隆
四丸奥坊主　小川養泉

右六拾巳上ニ付、御料理被下之、○中略

右七十巳上ニ付、御料理被下之、○中略

天明六年三月七日、辛亥、成金、神よし、天恩、母倉、ちう日、母日、福日、將軍家知命之御賀、於奥有之、表向披露無之、

二月十三日、禁中臨時之御會有之、御懷紙被進之、

和歌之寫　寄鶴祝言

〔視聽草七集二〕文政五年壬午三月、大君家齊○徳川五十御年滿御祝儀として、仙洞格○光より御小屏風

一雙を被進、紺地泥畫の根引松に折枝竹を土佐光孚が筆にて、五色（青、黄、赤、紅、薄紫、）の小色紙に、左の和歌どもを花山院（江○愛徳）一筆に書しめ給ひしよし、或人其歌を寫しおけるをかりてこゝに寫す、

松

春秋もいくよみどりの久しきは松のかはらぬかげにしるしも　關白忠良

常磐なるみどりは千よを十返りの花さく松の春におふかな　左大臣政通

ちとせへん松に常磐の色そへて榮をみするかげの木高さ　兵部卿貞敬

契れなほおほきの、陰は千年へんかきはの松に立ならびつゝ　中務卿韶仁

竹

とことはにあらしをきかぬ陰ならし松のみどりの奥深くして（○中略）　式部卿孝仁

枝しげき竹のは風のかよひきて千ひろに千よをならす聲かな　關白忠良

すなほなる榮えはやまず呉竹に萬世ふべきかげは見えけり　左大臣政通

すぐなるを心の友と移し植て千よも榮えむたけの生末　兵部卿貞敬

末遠く生のほる陰はいくちひろみどりの竹のは山しげ山　中務卿韶仁

式部卿孝仁

植てしる人の心はなよ竹のよゝにすぐなるあとや見ゆらん〇下略

〔拾遺後集雜六歌〕白川少將君の五十賀に

そす國のしづめなれとて民草も千世もと君をいのらぬはなし

古事類苑

禮式部十八

算賀下 尚齒會附

古事類苑

禮式部十八

算賀下 尚歯會附

〔日本紀略醍醐一〕延長四年九月廿八日、京極御息所〔○宇多尚侍藤原褒子〕奉賀法皇〔○宇多〕六十御算、〔○又見一代要記〕

〔大和物語上〕故源大納言〔○清蔭〕宰相におはしける時、京極のみやすどころ、亭子院の御賀つかうまつり給とて、かゝる事をなんせむと思ふ、さゝげもの一えだ、二えだせさせて給へと聞え給ひければ、ひげこをあまたせさせ給ふて、としこにいろ〳〵にそめさせ給ひけり、しきものゝおりものどもいろ〳〵にそめ、よりくみなにかも、みなあづけてせさせ給ひけり、そのものどもを九月つごもりに、みないそぎはてゝけり、

〔扶桑略記醍醐二十四〕延長四年十二月十九日壬寅、奉為太上法皇増寶壽、京邊七箇寺、南京七大寺、修御誦經、施用絹六百疋、布六千端、京七寺、東寺、西寺、延暦寺、東塔、大和寺、以上五所、絹各百疋、浄福寺、圓城寺二所、各五十疋、七大寺、東大寺、興福寺、元興寺、大安寺、薬師寺五寺、布各千端、西大寺、法隆寺、二寺各五百端、其使七寺、遣五位侍従、仰事由、又以穀千二百石、行施行事、令検非違使及諸衛人等分行其事、検非違使於朱雀給會集者、大夫諸衛官人、給京中隱者病者等、勅言、今年當太上法皇六十算、欲算賀事、而去年五月、令公頼朝臣有仰旨、傳曰、聞可有奉賀事、更不可行、仰旨兩廻、事趣切至、難違勅命矣、已上御記〔○又見日本紀略、河海抄、〕

〔新古今和歌集賀七〕亭子院〔○宇多〕の六十御賀屏風に、わかなつめるところをよみ侍ける、

紀貫之

わかなおふる野邊といふ野べを君が爲萬代しめてつまむとぞ思ふ

〔中右記〕天永二年十月十三日、（壬寅、復日）早旦從殿下被仰云、只今可參會院、是依有可議定事也、著直衣則馳參、殿下、民部卿、修理大夫、（皆直衣）被候殿上、殿下被仰云、明春主（○主下恐脫上字）可被奉賀上皇（○白河）六十算也、仍件事、今日日次宜、內々可議定也、件事先例不定也、或廣博、或省略、但密々寛院（○白河）御氣色處、仰云、去康和五（○白河五十賀）之度、殿上人爲舞人、今度可改其事也、依爲同樣也、童舞何事有哉、又去康和例、御調度物具、其數多過差無極、甚無由事也、於今度者、如然事可隨省略、凡法會之儀、爲眞實所、然者止過差可企法會歟、民部卿被申云、院御氣色尤可然、但於院御賀者、雖及二ヶ度、主上（○鳥羽）令奉賀給、於當年者初度也、雖被行法會、猶有後宴、可有行幸歟、人々尤可然之由議申、大略可被行事、令藏人辨雅兼內々被書出、

法會（御佛、御等身釋迦佛、若又觀音、御經、藥師壽命經各六十卷、金泥同、此外六十、華嚴大般若六百軸、法華經同歟、色紙、）

請僧（六十口之外、七僧、但於七僧者、可有法服、凡皆僧前、被物布施、）

御誦經（音樂、雅樂寮、）

件法會、於法勝寺可被行歟、上皇可御幸歟、行幸不定者、

後宴

御調度（略定）　音樂（萬歲樂、延喜樂、五聖樂、地久、龍王、納蘇利、皆童舞、）

饗祿　牽出御馬十疋

獻物　掌燈

今日爲可有行幸也、鳥羽殿六條殿之間、追可有一定、

大略議定如此、但歸東三條、又々引勘舊定文、可一定申、殿下所被仰也、晚景與修理權大夫、參入東三

條、殿下引僞定文、令勘度々例給、但大略叶今朝議定也、入夜殿下令參內給、於御直廬先有五節、頭辨書之次被定御賀事、件定文頭辨實行同書之、於法會事者、今度不被定、只所被定後宴事也、舊定文中、雖被載佛經、今度聊有議、只後宴事也、是主上初依有此儀、先被定後宴事歟、但定文不書後宴、只院御賀と所被書也、

〔殿曆〕天永三年三月十六日、今日上皇〇白河六十御賀也、余早旦著束帶參內、〇中略頃之出御、其儀如常、今日事如式、但公卿座東西相分、而余依爲上﨟、可著東方、雖然主上〇鳥羽御所有西、仍余著西方、打鐘後余著座、以頭辨召公卿、各著座、唄師可進佛前、左府作式、雖然依無便宜、作居本座、有此事、舞之後院司向樂所、賜祿退出、音聲して可退出由見式、雖然依仰樂人暫候、諸僧退出時、發樂音送僧、其後退出音聲、長慶子口裏〇裏下恐脫書字今日有行香、余起之奏事由處、上﨟候方可、有行香之由、有仙院御定、仍西座有此事、事了公卿僧綱被物取之、余不取、依院仰也、左大臣以下取之、凡僧被物殿上人取之、今日兩方殿上人取之今日堂童子座、有公卿座末、殿上人四位一人、五位二人、各左右相分著座、分花筥、左方基隆朝臣雅兼五位藏人侍從實能、右方顯重朝臣、定通少納言、侍從成通五位藏人

〔中右記〕天永三年三月十八日乙亥、御賀後宴也、〇中略予倩見御賀儀式、誠希代之勝事、千載之一遇也、昔法王〇白河久雖在世、未有孫帝〇鳥羽賀算之禮、如我上皇者、再逢子帝〇堀河孫帝之世、久賀五十六十之算、尋之倭漢、問之古今、未有如此事、在座老少、皆垂感淚、就中兩日無風雨難、天地和合歟、

〔古今著聞集六管絃歌舞〕天永三年三月十八日、御賀の後宴に、舞樂はてゝ、御遊の時、中納言宗忠卿拍子、治部卿基綱卿琵琶、中納言中將〇藤原忠通箏、中將信通朝臣笛、少將宗能朝臣笙、伊通和琴、越後守敦兼篳篥、呂、安名尊、席田、鳥破、律、青柳、更衣、鷹子、萬歲樂、主上〇鳥羽催馬樂を付うたはせ給ける、めづらしく目出たかりける事なり、仰によりてさらに又更衣鷹子など數反有ける、興ありける事なり、

〔百練抄五鳥羽〕天永三年四月廿五日、法勝寺〇白河御賀、　十一月廿五日、攝政〇藤原忠實於法勝寺賀法皇

六十算、

〔吾妻鏡 六〕文治二年正月廿二日庚子、法皇〇後白河今年六十御寶算也、仍可被行御賀之旨、爲被申行之、上絹三百疋、國絹五百疋、麞牙等、此外斑幔六十帖、所令進上京都也、

〔吉續記〕乾元元年十二月廿三日壬午、冨小路法皇〇後深草六十賀禮被行之、兩法皇〇後深草、龜山、上皇〇後宇多中院〇伏見御幸云々、關白已下參仕、御導師忠源僧正、題名僧六人、頭辨定資朝臣奉行也、其儀可尋記、公卿直衣、殿下令取御加布施給云々、御願文前菅宰相草之、

〔公卿補任 光格〕寛政十一年十一月廿六日、上皇〇後櫻町六十算御賀、儀略

〔執次詰所記〕後櫻町院寛政十一年十一月廿六日、御六十賀、有堂上舞樂等御祝、

〔三代實錄 十五清和〕貞觀十年十二月廿二日辛巳、太皇太后〇仁明后順子請六十僧於東京宮、薰修講經、會京師貧窮者於朱雀大路、賜物各有差、后春秋始滿六十、賀以修善、

〔日本紀略 二朱雀〕天慶七年九月十三日壬午、二品康子内親王、奉賀中宮〇醍醐后穩子、康子母、六十御算、公家被修諷誦、

〔三代實錄 七清和〕貞觀五年十月廿一日庚辰、天皇宴太政大臣〇藤原良房於内殿、以賀滿六十之齡、有衣被寶物之贈、每色叶於六數、皆是乘輿服御之物也、特喚諸大夫年六十已上者於仗頭賜飮、太政大臣家令從五位下菅野朝臣弟門、並授從五位上、藤原朝臣直方從五位下、從四位下藤原朝臣儉子進從四位上、无位藤原朝臣多美子從四位下、從五位下上毛野朝臣滋子正五位下、慶賀之餘歟、恩弊及餘家人也、　十一月廿六日乙卯、中宮於太政大臣染殿第、大設齋會、演大乘經、賀太政大臣滿六十也、限三日訖、公卿大夫多參陪焉、　十二月廿四日壬午、中宮爲賀太政大臣齡滿六十、設廣讌、親王已下五位已上並侍焉、極歡而罷、賜親王已下衣被并綿、

〔扶桑略記 二十四醍醐〕延長五年二月廿五日、彈正尹親王〇克明爲民部卿〇藤原清貫六十賀、於桃園宮設法會、

奉造藥師佛像、奉寫法華經隨願藥師金剛壽命般若心經、雜染色紙金銀繪之、小野道風同忠則寫之、

〔拾遺和歌集 十神樂歌〕延長四年八月廿四日、民部卿淸貫が六十賀、中納言恒佐が妻、ㄙ侍ける時の屛風に、かぐらする所のうた、　貫之

あしびきの山のさかき葉ときはなるかげにさかゆる神のきねかな

〔古今和歌集 七賀〕藤原三善が、六十の賀によみける、　在原ㄙげはる

鶴龜もちとせの後はㄙらなくにあかぬ心にまかせはてゝん

〔日本紀略 二朱雀〕天慶二年正月四日丙午、興福寺、賀太政大臣○藤原忠平六十算、　三月十九日辛酉、延曆寺、西塔院、極樂寺、法性寺、淸水寺、廣隆寺等、賀太政大臣六十算、又穀倉院修諷誦爲賀禮、　八月廿日戊午、中宮職、於法性寺供佛經、賀太政大臣六十算、

〔本朝世紀〕天慶二年十一月十六日癸未、大辨以下、於國史所定太政大臣六十賀雜事、召陰陽寮令申奉幣日、今月廿七日　神祇官令申六十社數、　廿七日甲午、依太政官幷左右辨官奉仕太政大臣六十御賀、先奉幣諸社、畿內并近江丹波國諸社神六十神也　其使卽少納言辨已下外記史內記官掌以上也、幣物自大藏省請各記錄、於國史所裹幣、於官東廳發遣之、左少辨朝綱朝臣作祭文、社數祭文旨趣、別記之、　十二月十三日、今日太政官幷左右辨官少納言外記史內記史生官掌以上、擇六十寺修諷誦、爲賀太政大臣六十算也、其使辨少納言外記史內記官掌以下也、寺數諷誦文使夾名、別記之、右大辨源淸平、諷誦文加署、

廿五日、今日天皇、○朱雀　於六箇寺爲太政大臣六十賀修諷誦、延曆寺講堂、興福寺、東寺、西寺、法性寺、極樂寺、使殿上侍臣也、內藏寮修諷誦文、又今日大相國息子左衞門督藤原師輔卿、九　於法性寺爲賀彼六十算修善事、公卿或向彼所、

〔日本紀略 二朱雀〕天慶二年十一月廿七日甲午、辨少納言以下、奉幣於六十社、賀太政大臣六十算、　十二月十三日己酉、太政官、修諷誦於六十寺、賀太政大臣六十算也、　廿五日辛酉、天皇修諷誦於六箇

寺、賀太政大臣六十算、同日中納言左衛門督師輔卿家、賀太政大臣六十算、
〔九暦〕天德元年十二月十四日、左大將（○藤原實頼）六十賀法事有儀、於極樂寺有之、
〔日本紀略村上四〕天德三年正月廿七日癸酉、興福寺僧、賀左大臣（○藤原實頼）六十算、
〔日本紀略一條九〕永延二年三月十六日癸酉、攝政（○藤原兼家）於法性寺賀六十算、廿四日辛巳、是日也、賀攝政六十算、修諷誦於六十箇寺、以諸大夫爲使、法皇（○圓融）皇太后宮（○圓融后詮子）施綾千二百文、廿五日壬午、今日天皇、於常寧殿賀攝政六十算、左右大臣以下候、攝政孫兒二人奏舞、廿八日乙酉、攝政東三條第有賀算之後宴、四月廿六日壬子、於官東廳率遣六社幣使、爲賀攝政算也、
〔百練抄一條四〕永延二年三月廿五日、於常寧殿賀攝政六十算、
〔榮花物語三樣々の悦〕攝政どのは、ことし六十にならせ給へば、このはる御賀あるべき御よういどもおぼしめしつれど、ことゞもえしあえさせ給はで、十月（○永延二年）にとさだめさせ給へり、はかなう月日もすぎもていきて、東三條のゐんにて御賀あり、おほんびやうぶのうたども、いとさまざまにあれど、ものさわがしうてかきとゞめずなりにけり、いへのこのきみたち、みなまひ人にて、いみじうみかど（○一條）も、ぎやうかうせさせ給ひ、たうぐう（○三條）もおはしまして、とのゝ家司ども、みなよろこびしたる中にも、有國惟仲を大との（○兼家）いみじきものにおぼしめしたり、有國は左中辨、惟仲は右中辨にて、よのおぼえ才なども、人よりことなる人々にて、おの〳〵このたびも加階して、いみじうめでたし、
〔扶桑略記後冷泉二十九〕永承六年十二月廿五日、太政官大辨以下、就法性寺率賀關白左大臣（○藤原賴通）六十算、
〔百練抄後一條四〕治安三年十月十三日、鷹司殿（○藤原道長妻倫子）六十御賀、
〔榮花物語二十御賀〕治安三年十月十三日、殿の上（○倫子）の御賀なり、土御門殿を、日ごろいみじうつくり

みが、せ給へれば、常よりも見どころあり、面白きことかぎりなし、春秋の花のにほひ、其さかりならねど、心々の前栽の霜がれ、山の紅葉、いろをつくしたるも、ことさらめき、わざとつくりたてさせ給へらんやうに見えたり、庭の砂子なども、外のには似ず見ゆ、その日になりぬれば、大宮〇倫子女、一條后彰子、かんの殿〇倫子女、後朱雀后嬉子、は、やがておはします、日のうら〻かにさしいでたる程に、皇太后宮〇倫子女、三條后妍子、わたらせ給、御こしなどあれど、一品宮のたてまつらぬがあしければ、からの御車にてわたらせ給、二所たてまつりて、五の御かたつかうまつらせ給へり、女房の車おほからず、十五ばかりぞある、袖口きぬのかさなりたる、浦の濱ゆふにやあらん、いくへと知り難し、かくてわたらせ給ぬる程に、さしつゞき中宮〇倫子女、後一條后威子、おはします、それは御輿にて内よりいでさせ給、御どもの女房車、さきの車の如し、おまへたちのおはします所と寢殿との内に、おの〳〵御ぢしきよそひて御しとねまゐりつ〻、三宮一品宮かんの殿おはします、次に又すこしひきのけて、上の御料によそひたり、御裝束つかうまつる、殿上人宮人、みつるありさまをおもひまゐらするに、おはしまして列居させ給へらむ御ありさま、きこえさせんかたなく、おもひやるにめでたし、上の御方の女房、さき〳〵は宮の女房におとらぬ樣の裝束を、上のおまへなど、なまかたはらいたく覺しめすに、今日は、ところえ、うけばりさうぞきたるもことわりに見えてをかし、大宮の女房は、寢殿の南面、西の渡殿かけてうちいでたり、皇太后宮のは南のたいの東面なり、殿の上の御方は、寢殿の東面、中宮の御方は、東の對の西面、かんの殿の御方の女房は、東の對の西南面かけてうちいだしたり、御方々の女房の、こぼれいでたるふりども、千年のまがきの菊どもをにほはし、四方の山の紅葉の錦をたちかさね、すべてまねぶべきにもあらず、いろ〳〵の織物錦からの綾など、すべていろをかへ手をつくしたり、袖口にも銀こがねのおき口ぬひものらてんをゑたり、御几帳どももいろ〳〵樣々なり、この宮あの宮のおなじ色一つ樣にもあらず、聞えさせあはせ給へ

らん様に見えて、様かはりたるいみじうめでたし、敷島やこゝの事さは見えず、こまもろこしなどにやとまでぞ見えける、殿のありさま、中島などの大木、皆やけにしのちは、いとこよなけれども、今おもひいでうゑさせ給へるに、木ども前栽などは、今すこしおひゆくすゑたのもしげに見えたり、この頃はなつかしう今めかしくをかしきこと、四尺の屏風の繪めきたり、常則などがかきたるは古代なるべし、弘高よりすけなどがかきたらんは、なほあかぬ所ありぬべし、これはいみじうこそおもしろけれ所々の草前栽うちしもがれて、いかにぞやあるに、一本菊むら菊などの、或は盛りに或はうつろひたる、又花のなき程なればにや、今日はいとゞあいしさまさりぬべし、木々の紅葉もをりしもめでたきに、緑の松に蔦もみぢのめでたうかゝりたるに、まゆみのえもいはずてりておしはりいでたるも、今少しちかうて見まほしげなり、庭ははるぐ＼として、橋立の砂子などの様にきらめきて見えたり、所々のあげはり平幔などのいろけざやかに、つなのいろおどろ＼しきまで赤う見えたる程など、け高うめでたし、人々のいそがしきけはひの風に、木々の紅葉のすこしちりて、御前の池にうかびながれたるも、かの崑明の池の水の、春秋のいろのながれかはるらんも、かくやと見えたり、伊勢が散りかゝるをやくもるといふらん、とよみたりけんもおぼえ、はたばりひろきにしきとや、と觀敎法橋のよみたりけんなどにぞ、まづおもひよそへられける、おまへの近き遣水は、清くすゞしくすみて、黄河の水のすみはじめたるにやと、ゆくすゑはるかに見えたり、萬のこと六十せさせ給へるに、僧も六十人を撰びめしたり、御屏風の歌あたらしう讀ませ給はず、古き賀の歌どもをかゝせ給ふに、侍從大納言、いみじうかき給へらんも、すゞろにゑまゑう思ひやらる、かくて事はじまりぬれば、僧綱は寢殿の南の庇、凡僧は東の渡殿に候ふ、様々のことゞもあるべき限りにて、舶のがく龍頭鷁首こぎいでたり、此世の事と見えず、いみじうめでたし、事どもはつる際に、萬歳樂、家の子の公達舞人にて、四人まひ給、左衛

門の督の御子の右馬の頭兼房のきみ、前帥の御子の四位の少將やねすけ、おなじ兄君の藏人の少將よしより、帥中納言の御子の源の少將さねもとが、さゝれたりつるが、俄になやむことありて、え舞はずなりぬるかはりに、めされたるなりけり、かたては源の大納言の御子右近の少將あきもと、皇太后宮の權大夫の御子の左近の少將すけふさ、ともたふの源の宰相の御子右近の少將もろよし、近江の守なりまさの朝臣の子右馬の助みちなりなどなり、資通は藏人の侍從五位にてまふべきを、侍從は衞府ならねば、俄に右馬の助にはなさせ給へるなりけり、かざしの花ども、しろがねこがねの菊の花をつくりて、この公達みなかざしたり、其中にもよしよりすけみちなどは藏人なれば、むらぎくをおりたるふたへおり物のうへの袴どもを、心ばへおなじさまなれど、いろおりざまかはりてをかしう見えたり、殿ばら殿上人の、寢殿のおまへの庭にひらばりに皆つき給へり、事どもはつる際に、つねみちの右兵衞の督のれうわうまふ、いみじううつくしくをかしき程に、殿の御まへは、寢殿にかくれ居させ給て御らんじけるを、かうらんにゐさせ給てもてはやし御らんじけうせさせ給ふ、さるべき人々、皆ものぬき給に、又東宮の大夫殿のすまひ君、らくそむまひいで給へる、此君はありつるよりもちいさうおはするに、をれかへりまひ給ほど、そこらひろき庭に、人とは見え給はで、鳥などのかけるらん樣に見え給へば、内にも外にも、いみじうもてはやしけうせさせ給に、殿のおまへ、おいほうしの衣の色はゆゝしけれどとて、うすにびの袙の御衣一重をぬがせ給て、かづけ奉らせ給へば、此君の御舞の師、右近の將監まさかた、うちかづきて、いとゞもてはやしまはせ奉れば、關白殿たゝせ給て、ひんがしの對の南の簀の子にて、御衣をぬがせ給に、御あせにつきてえぬがせ給はねば、これかれ參りてとかくひきはなち奉れど、更にぬがれねば、たゞあこめの御衣の袖をひききりて、もてきてかづけたれば、その御衣の袖にかしらをさしいれて、くびにかけて、ありつる御衣をば肩にかけて、おとさでまふ程、さ

いへど、こち丶よしもちが子にはあめりと、殿ばら興じの給はせて、そこらの殿ばら御ぞをぬがせ給へば、皆はえかづきあへねば、只此君のまひ給ところの庭にぬぎあつめさせ給へればこのもとにいろ〳〵の紅葉のちりつもりたると見えて、いみじうをかし、まさかたあまりになりて、しあつかひにためり、故女院の御賀、このとのにてせさせ給しに、この舞どもは、關白殿と東宮の大夫とぞまはせ給し、明後年、殿の御賀には、内大臣殿のきんだちぞまはせ給はんずらん、このたびは、まだちいさうおはしませばなめりなど申て、なまおいたる人は涙もおちにけり、やう〳〵夜にいる程に、かんたちべ南のすの子にまゐりてあそび給ふ、ひるのがくよりも、これはおもしろきこと限りなし、月もとくいで丶遙かに見やらる丶に、處々のはしらまつどもに、又手ごとにともしたるなど、いみじうあかきに、又殿原の御かはらけもあまた丶びなれば、盃のひかりもさやかに見ゆる程に、四でう大納言、○公任

よろづ代とけふぞきこえんかた〳〵に深山の松のこゑをあはせて ○中略

これよりしもは、夜ふけぬればとゞめつ、かんたちべの御祿の見えわかねど、やみの夜のにしきかやとなん、かをりはかくれなきわざなれば、えもいはず見かへりたり、今は宮々かへらせ給御ありさまども、よそほしうあまりに見えさせ給ふ、いつも物のめでたき中に、さはこれを御賀とはいふにこそありけれ、これをめでたきもの丶ためしにはいひかたるべし、さき〳〵のむかしの御賀ども丶、いとかくしもやとぞおしはからる丶、

〔玉葉和歌集七賀〕從一位倫子、六十賀し侍けるとき、后三人○一條后彰子、三條后妍子、後一條后威子、行啓侍て、人々歌よみ侍けるつひでに、

二條關白太政大臣○藤原道長子教通

かぞふればまた行末ぞはるかなる千代をかぎれる君がよはひは

〔風のしがらみ〕寶永二年二月、常憲院將軍○徳川綱吉六十賀に朝廷より下し賜へる御屏風和歌、

正月子日の松のもとに人々あそぶ　　兼熙

打むれてけふは子日の小松原ちよの初のためしにぞひく○中略

此御賀に、松平美濃守吉保、御杖をまゐらするとて、

君にいまさゝぐる杖のふしておもひあふぎて祈る萬世の春

〔鳳のをがらみ〕おなじ少將○池田綱政六十賀の時、一條關白○兼輝の御もとより、御杖を送り賜ふとて

御杖の歌、　　中院通躬卿

つく杖はことし六十の老の坂越てもつきぬ千代のはるけさ

おなじ大政所○池田綱政妻、一條教輔女、の御もとより、盃の臺送り賜ふとて、盃のかはらけに、　　清水谷實業卿

君がよはひ今日よりゆづれ龜の上の山も手にとる春の盃

〔徂徠集九〕賀香國禪師六十叙

不佞茂卿之於香國禪師、曩者從友人田省吾所、稍々獲觀其所論著、叙記偈頌及陀羅雜事、心已慕說之也、嗣乃偕崎人岡玉成、一造品川精舍、實始接其丰采、聆其譚論、則與共揚扢、上下數千載、氣運所以醇澆、文章由是樸靡、材習倍蓰、心面人殊、代戴群遷、音因土限、古今不相及、而和弗華是若者、亹亹乎言之、驩然相際、莫逆乎懷也、爾後雖赤牘一二往還乎余護洲之舍、余故困病與嬾、不能躄躠十數里路、以繼見乎禪師、而禪師亦不忍塵土其袈裟以訪予市樓中、徒爾神交心照寥寥寞寞之外、三數年于茲矣、雖然余每飯、其心未嘗不在鉅鹿之下、又時時聞禪師口余事於朝紳間者、不啻如一日之雅也、越正德改元冬十月哉生明、善畫石生者、齎禪師書至、則謂是歲禪師甫開六袠、而初五適當其誕彌之辰、徵余一言、以俾稱壽堂下者、識友公方外之交、今日別有一許詢云爾、夫自南高二公、操華音以鼓吹其道、而緇林之間、遺徽緒餘響、高若靈皎、庳若九僧、駢然奏其技於左右者何限、復以禪師聲藉甚乎東都、而東都

人文所薮澤、家隋侯、人靈蛇、踵從籠麕至、輝煌煥映其前者又何限、是何所乏乎覼美、而不佞是問、旦也禪師師、乎禪、禪余所不解、余獨識禪師文、文自禪師土苴、辟諸美人美歌、耳目雙賞、賛者適昧其麗曼、但識縹緲之音、則在賛者、不可罪其無眸子、雖美人亦何嗔其從旁擊節哉、是禪師所以不余遐者爾、更上而論之、聖人至孔子、雖文雖儒、六籍不朽、木鐸徇行、暨乎諸子百家、分鑣背馳、皆循其轍、卽莊周拘儒滑稽、後衛道者不得弁髦其文、而瞿曇出世、獨踞三界之尊、猶且能儒其號、以文中自王、楞嚴維摩適爲藝苑逸品、則自非農賈工虞、凡諸不耕而食、不蠶而衣、四體不勤、五穀不分、口有誦、手有畫者、無適非儒、孰業不文、而況禪師之所長乎、是又余所以無封畛乎方內外者爾、故今者之役、請以文壽之、蓋嘗試論禪師所爲文者、邈焉眇覩無始、而秦漢以降、班馬韓柳、八家七子、氣格風調、色澤神理、纖乎莫不具也、超焉玄覽無外、而宇宙以內、風雲變態、山川融結、人情物狀、動植靈頑、云爲擾擾、宛乎莫不畢肖也、要之法不必拘、辭不期工、一取諸邈焉超焉之中、以出之唇脗也、宮商鏗如、以落之毫素也、丹青炳如、古人所謂風水相遇、猝然爲文者、唯禪師爲近之、是豈與世閉門覓句、仰梁著書、瘦爪嘔肝、拮据皆痡者、同年而論哉、大氐文士苦思、入心者滿寸、繇是往々夭其天年、而禪師則不然、何者遊戲所至、咄嗟便辯、手無待思、意隨筆至、萬物爲其使役、玩群象於股掌、以此爲文、何文不娛、以此爲壽、何壽不長、不則安有齡周甲子、而聰明矍鑠如禪師者乎、方今國家緝熙、奎璧騰輝、昌明敦龐之化、浹於海內、棫樸作成、故不乏才、而天又篤生偉人、俾其旁扶世教、以洋溢右文之懿於憲綱之外者、抑禪師不亦其人哉、是則其壽踰七跨八、以登期頤、而比隆龍樹之齡焉、何其可量也乎、何其可量也乎、予不佞亦將托禪師之庇、執觚翰而俟、以終今日之誼也、

〔後篇鳩巢文集　三〕賀青地浚新六十壽幷序

今歲青地浚新君、甲子一周、行年六十、某月某日、卽其初度之辰也、子姪爲君爲壽、君謙讓不聽、而子姪之情不可奪、夫生日張樂設宴、君子以爲唯具慶者可也、然唐宋以下行之、以爲故事、而本朝人家

習之、近世殊甚、其於禮爲可歟、爲不可歟、余謂此事自爲則不可也、子弟爲父兄爲之則可也、孔聖不曰乎、父母之年不可不知、一喜一懼、然則父母之壽、在孝子之情其可喜、莫大於此、其爲親祝初度介眉壽、宜爲君子之所與也、況淩新君、上在王母、而爲子姪請之、其可距乎、君走書告其事於余、余聞而嘉之、於是賦小詩一篇、以爲千里之贈、

子姪俱寶世所稀、介聞廣書共春輝、壽星暗與德星聚、青鳥還兼黃鳥飛、緗帙亂抽方朔史、綺筵雙舞老來衣、大邦山水多佳境、幾處仙遊採藥歸、

〔有德院殿御實紀五十七〕寬保三年正月廿一日、六十の御賀筵をひらかる、よて右大將殿〇德川家重より、綿百把、二種一荷、大納言殿〇德川家治より、綿五十把、一種一荷奉り給ふ、御使は松平能登守乘賢なり、右衞門督宗武卿、刑部卿宗尹卿よりは、各二種一荷、利根姬の御方より肴一折、尾張中納言宗勝卿、水戶宰相宗翰卿、右兵衞督宗睦卿、二種一荷づゝ獻せらる、使臣みな祿を給ふ、松平加賀守吉德よりも同じ、松平大隅守繼豐、松平越前守宗村、松平薩摩守宗信、松平下總守忠雅、松平肥後守容貞よりは、鯛一折づゝ獻ず、又土岐丹後守賴稔御使して右大將殿へ、縮緬廿卷、二種一荷、大納言殿へは、同十卷、一種一荷まいらせられ、右衞門督刑部卿の方々へも、一種一荷つかはさる、此日日光門跡公遵法親王よりも二種一荷奉らる、　廿二日、紀伊宰相より御年滿を賀して、二種一荷、また狩場にて得られし雁を獻せらる、

〔風のしがらみ〕おなじ將軍〇德川吉宗六十の御賀賜ひし御製、櫻町帝

色かへぬ竹の萬代かくて見よなほきになびく民のすがたを

將軍御歌

くれ竹のふしの間ごとにかさねきてむそぢの坂もやすく越なん

利根姬御歌

幾千世といはふ心は和田津海の濱の眞砂のかすもつきせし

月光院御歌

あひにあひておなし千とせの春にすむ鶴の齡を君にゆづらん

〔風のしがらみ〕明和四年、經平六十の賀に、五條少納言爲璞朝臣のもとより、詩一絶を賜ふ、

賀富山老人六十一　翰林爲璞

指爾今春甲子周、可知仙宴羽觴浮、共看壽域南山色、引得瑞煙來滿樓

これに和して和歌をよみて奉る　經平（土肥典膳、號ニ富山々人一）

ことの葉のめぐみもふかき松影にあふぎてなれん君が樓（タカドノ）

〔壽算名目抄〕六十一歳　老、戸令曰、六十一曰老云々、類書算要曰、六十歳ヲ老邁トシ、禮記ニハ七十歳ヲ老トス、

〔閑田耕筆〕二近世の俗、六十一を本卦と稱す、明陳憲章が詩あり、世間甲子是何年、母與雙孺子亦然、十數曾孫羅膝下、兩三杯酒笑燈前、尋僧野寺花迷路、吹笛江門月滿船、聖主萬年歌不足、黄河清了鳳翩躚、即題六十一自壽とあり、彼邦も六十一を壽することゝみつべしと、同じく橘洲話なり、

〔世事百談〕一華甲重逢

六十一歳を本卦かへりとて、生年の支干にあたるをもて、生誕の日を祝ふ事、世のならはしなり、唐土にてもある事にて、本卦かへりを華甲重逢といへるよし、明陳白沙集に詩あり、

〔梅園日記〕三花甲子

葛原詩話云、范成大丙午新正ニ、祝我剩周花甲子、謝人深勸玉東西ト、丙午ハ石湖本命ノ歳ナリ、花ノ字、華ニ作ルベシ、華ノ字、字畫成六十一、故ニ本命ノ年ヲ華甲子ト云、

夜航詩話云、六十一歳曰華甲、蓋拆華字爲六十一、猶四十八曰桒字年也、（何藝夢ニ井生ニ集、亦見ニ蜀志楊洪傳注一、）西遊記

第二十四問年壽幾何、道癡長六十一、行者道、好好、華甲重逢矣、按に本書花甲に作れり范石湖、丙午新正詩、祝我剰周華甲子、按に本書周花甲子に作れり丙午、石湖元命之辰也、などあるは、華字を離せば華となる故に、六十一となるといへり、是よろしき説ときこゆれども非也、石湖の詩意は、本命丙午の元日、周花甲子六十年に剰れるを祝せる也、周甲子の六十歳なる證は、如面譚二集の注に、六十爲花甲一周、翰墨瑣瑙の六十請人書に、浮生碌々、花甲初周、七修類稿に、杭劉泰、成化癸巳六月、適當六十、同時詩人皆以詩祝、張錫云、一週花甲等閑過、沈寧云、花甲循環喜一週、劉英云、花甲忽週遭、又六十を週甲ともいへり、陶澍が印心石屋文鈔に出たり、又六十一歳をも周花甲と云しは、魏禧が魏叔子文集外篇に、賀羅翁六十又一、文に、惟翁時値桂秋、歳周花甲、馮浩が孟亭居士詩稿に、乾隆壬子、鄉園孫男得舉に、一周花甲重、叨蔭とあるは、雍正壬子より一周なり、また仇遠が金淵集の丁未元日の詩に、花甲喜循環とあり、集中を按に、仇遠は、宋の淳祐丁未の生なり、是も支干循環して、元の大德丁未、本命の年となりたるを喜ぶと也、

〔爲家集雜下〕寛喜元年、入道前河内守光行六十算、

久しかれつもる六十の一とせに今ゆくすゑの千代をかぞへて

〔伊布伎廼屋歌集〕おのれ安永五年丙申の歳といひけるとしのはつき、寒露といふせちに入れる日の生れにて、ことし天保七年といふ年の八月の二十日まり六日の日は、いはゆる本卦がへりに當れば、子等孫等をしへ子など相議りて、世の習はしの如く其日ほぎ言白さむと云ひいでたるに、子等の心はげにさも有なむと諾ひて、

言靈の祐くるまにま祝ひてよともに千世へて神習はまし

六十とせを一つの數に計へつゝ玉の緒長く結びとめなむ

おなじ祝ひにほぎうた贈れる人々にかへし

七十賀

むそとせの一世を過て又更にうぶ聲揚るけふにも有かな

おなじをりに　鐵胤

若えます父の面輪にみな人のほぎの效しを見るぞ憘しき

〔日本紀略二朱雀〕承平七年十二月十一日庚寅、兵部卿元良親王奉レ賀二陽成院七十御算一、〇又見二帝王編年記、一代要記一、

〔三十六人歌仙傳〕伊勢　承平七年十二月十二日、陽成院七十御賀御屏風、伊勢獻二和歌一、

〔本院七十御賀懷紙之和歌〕元祿五年九月廿六日

鶴契二遐年一　仙洞御製〇靈元

蘆たづのよはひを君に祝ふよりなれもや安く千代はふるらん

〔本院七十御賀記〕元祿五年九月廿六日

本院〇明正七十御賀、從二仙洞一〇靈元被レ進二御屏風一、色紙之筆者、持明院基時卿、畫者、山本素軒、摸樣記二左一、色紙五色絹地、青黃赤白紫、大キサ長五寸八分橫八寸八分、

御屏風長サ五尺、但フチノケテ、幅一尺四寸七分間、〇有レ圖略レ之

一フチ黑塗、金物金滅金、菊水置紋七子、

一緣紅梅縫二蝶鳥一、陰以二白紫淺黃朽葉等之色糸一縫交摺レ箔、小緣淺黃綾、裏形常地タリ、梅蝶鳥大小入違ヘ歸ニ蝶鳥分、〇有レ圖略レ之

右以二加賀絹淺黃和物一包レ之、桐之箱ニ入、箱內裏紙張レ之、箱之金物煮黑メ、鐵塗錠鎰有、鎰ノ結付、

箱ノ上ニ付 月次御屏風　一雙

右筆者　北小路主稅助大江俊眞

同日本院ヘ被レ進二御杖一、但銀ニテ作レ之袋之和歌、關白基熙、清書內大臣家熙、

御杖長三尺五寸、御手がゝり三寸、大サ上ニテ六分半、下ニテ五分、銀ニテ節六ツ、上ニ鐘木、竹之摸

様節壹ツ、上ノ節目に枝アリ、篠葉五枚、已上節七つ、〇有圖略之

御杖之和歌

此杖にちよにや千代をこめてしもあかぬやきみがよはひなるらん

〔執次詰所記〕後櫻町院

文化六年十二月十四日、御七十賀、於禁中舞樂、以殿上人爲舞人、

〔三代實錄四十八光孝〕仁和元年十二月十八日戊辰、延僧正法印大和尙位遍昭於仁壽殿、申曲宴、今年始滿七十、天皇慶賀、徹夜談賞、太政大臣左右大臣等預席焉、

〔古今和歌集七賀〕仁和の御時、〇光孝僧正遍昭に七十の賀給ひける時の御歌、

かくしつゝとにもかくにもながらへて君が八千世にあふよしもがな

〔日本紀略一醍醐〕延喜元年九月十五日、左大臣〇藤原時平於城南水閣、賀大藏善行七旬算賦詩、

〔日本紀略一醍醐〕延喜十七年十月六日壬午、太上法皇〇宇多於河原院、賀大納言源昇七旬算、王卿宴飲、

〔日本紀略二朱雀〕天慶七年十二月二日、七親王〇有明北方、賀父左大臣〇藤原仲平七十算、

〔古今和歌集七賀〕もとやすのみこ〇仁明皇子の七十の賀のうしろの屛風によみてかきける、　紀貫之

春來れば庭にまづさく梅の花君が千年のかざしとぞ見る

〔日本紀略六圓融〕安和二年十一月廿八日辛未、太政大臣〇藤原實賴七十算、太政官賀之、十二月九日壬午、太政大臣子息、賀大臣算、十三日丙戌、大內賀太政大臣七十算、上卿不參、參議行之、十七日庚寅、辨官立太政大臣七十算御諷誦使、

〔拾遺和歌集五賀〕おなじ人〇藤原實賴の、七十賀し侍けるに竹の杖をつくりて、　よしのぶ

君が爲けふきる竹の杖なれば又もつきせぬよゝぞこもれる

位山みねまでつける杖なれどなほよろづ代の坂の爲なり

〔日本紀略後一條十四〕長元六年十一月廿一日癸未、中宮職（○威子）賀㆓母儀從一位源朝臣（○藤原道長室倫子）七十算㆒、有㆓佛經之營㆒、　廿八日庚寅、關白左大臣（○藤原道長子頼通）於㆓高陽院第㆒賀㆓母儀從一位源氏七十算㆒、上東門院（○一條后彰子）御㆓幸此處㆒、有㆓童舞事㆒、（○廿八日、百練抄作㆓廿九日㆒）

〔榮花物語歌合三十二〕鷹司殿の上（○倫子）七十賀せさせ給ふ、女院（○上東門院）中宮（○後一條后威子）など、例のわたらせ給、院はあかつきにわたらせ給ぬ、宮はひるうちよりいでさせ給、儀式ありさま、さき〴〵ふりにし事なれど、なほいとめでたし、御輿よせて奉る程など、うちのごせん、上の御つぼねの部とりのけて御らんず、弘徽殿藤壺のはざまのいとせばきに、かんたちめ殿上人たちこみ、近衞づかさ矢なぐひおひてたちやすらひたりな、對面の程などいとめでたし、內大臣殿（○藤原道長子教通）まゐらせ給て、御迎へにまゐれとさぶらひつるなり、大臣は、かしこの事ども、みくち入れさぶらふ事ゑげくてなど申させ給ふ、いともの〳〵しくきらゝかなる御有樣なり、東宮大夫、權大夫、權大納言など、御せうとの殿ばら皆まゐり給へり、（○中略）鷹司殿の上には、さばかり御らんじつくしてしかども、又今日も御淚こぼれさせ給、御堂供養に、四所わたりあはせ給、行幸行啓ありしをりになずらふべく〳〵もおもはくはあらねども、儀式あり樣かはることなくめでたければ、かくおぼしめすにこそ、むかしの御事をもおぼしめしいづべし、舞は殿の若君せさせ給べしとありしかど、さもあらで、諸大夫の子どもぞまひける、其の日の儀式ありさま、女のゑるすことならねばゑるさず、（○中略）夜さりは皆さま〴〵にかへらせ給ひぬ、樣々の御おくり物などいとめでたし、（○中略）まことや御賀の歌は、すけちか、赤染、出羽、經任頭辨の母にて物し給ふ、佐理の大貳のむすめぞかき給ける、

〔落窪物語三〕左の大臣の給ふ、老いもて行くまゝに、衞府つかさ堪へず、若うはなやかなる若男の職にてなんたへたるとて、かけ給ひつる大將、大納言にゆづり給ふ、御心にかなへりける世なり

ければ、誰かはさまたげん、いとはなやぎまさり給ふことかぎりなし、中納言いよ〳〵嬉しうよろこび給ふ、いと大事にはあらねど、起きふし惱み給ふを、大將殿の北の方、なげき給ひてあはれにの給ひしを、今すこし仕う奉らんと思に、いま暫しだにおはせなんと念じ給ふ、今年なん七十になり給ひけると聞き給ひて、大納言のおぼしける、ゆくさきとほく、またもしてんと覺ゆる人ならばこそ、のどかになども思はめ、人もしきりたるやうに思ふとも、七十の賀せん、わがせんと思ひし本意とげん、てうずべき限りはあまたゝびしてき、嬉しとおぼゆることは、たゞ一度にて止みなば、いとかひなし、死にて後には萬の事すれども、誰か見はやし嬉しと思はんとする、此度ばかりの事、力の堪へん限りはせんとおもほし立て、いそぎ給ふ、國々の守どもゝ、唯みけしきのまゝに仕う奉り、いかで〳〵と思ひたれば、ひとつづゝ物の給へと、いとやすう人々の御前の饗の事をなんあて給へりける、右衞門の尉は、かうむりを得て三河の守になりにければ、衞門はたゞ七日がほど、いとま申して率て降りけるに、女君旅の具しろがねの鏡一具、裝束よりはじめて、いとくはしくなんして降し給ひける、其が許にもかう〳〵のいそぎをなんする、絹少しと召しにはしらせにつかはしたりければ、すなはち守は男君の御許に百匹奉り、妻は北の方の御許に、茜に染めたる絹三十匹奉れり、舞すべき子どもの事など召し仰せなどし給ふ、御調度つくし給ふ、黄金なん多く入りける、父大臣など、かくしきりて、まうなる事はするとの給はす、さはあれど後の齢いくばくもあらじ、生ける時嬉しとおもほえさせよ、かゝなる子の事は、我せんとの給ひて、もろ心にいそぎ給ふ、大將殿をいみじくかなしくし給ひ、御心に入りたまふ事なればなりけり、十一月十一日になんし給ひける、此度我御とのに皆ひきゐて迎へ奉り給ひてなん、委しくうるさければ書かず、例の人の唯いかめしう猛なりけり、屛風の繪詞どもいと多かれどかゝず、〇中略廣くおもしろき池の鏡のやうなるに、龍頭樂人ども、船にのりて遊び居たるは、いみじう面

白し、上達部殿上人は、居あまるまで多かり、左のおほいどのおはしたり、かづけものなんかずまらずありける、中宮よりも大褂十かさね、中納言殿よりかづけもの十かさね、さまざまに奉り給へば、宮のごだちくら人も、皆もの見んとてまかんでぬ、中納言、忽に御こゝちもやみてめでたし、ひ一日あそびくらして、事はてゝ夜ふけてまかんで給ふに、物かづけ給はぬ人なし、やんごとなきには、御贈物そへてし給へり、左のおほいどの、中納言殿に、いとかしこき馬二つ、世に名だかき箏のこと奉り給ふ、御まへの人々にまたがひて、物かづけ給ひ、こしざしせさせ給ふ、越前守に、このことばかりは、我おもふやうにせよとて、あてたまひければ、いとめやすくしたり、二日三日ばかり、とゞめたてまつり給ひて、わたし奉りたまひける、女君かくし給ふことを、いとうれしと聞え給ふ、大將心とかひありておぼす、

〔扶桑略記後冷泉二十九〕康平四年十一月廿三日、太政官、就法性寺五大堂、賀關白〇藤原賴通七十算、

〔本朝續文粹十三〕子息等賀左大臣〇源俊房七十算　江帥大府卿〇大江匡房

弟子師賴等、異口同音前白佛言、歎之至深、莫深自人親壽考而願子之歎、賀之尤切、莫切自人子成長而報親之賀、恩愛之道、不其然乎、伏惟所天左丞相尊閣、以周南召南之德、歷山西山東之任、中階之影常明、既過三七於星霜、太宰之譽遠播、初滿七十於寒暑、龍虎韜量、自同呂望入兆之年、賢良擅名、未到孫弘開閣之日、弟子等不可不知、一喜一懼、仰罔極於昊天、與黃雀而相樂、感無疆於壽域、先奇鶯而來舞、將依鷹王之冥助、彌介君子之景福、奉圖繪藥師如來像一鋪、奉書寫金字金剛壽命陀羅尼經七卷、墨字同經七十卷、元年晚冬下旬五日、排進府展華筵、喔七僧祈萬歲、槐風棘露之爲枝葉、共期大椿之春秋、玉食綺膳之旌佛僧、欲代上藥之氣味、于時雜竹長、而千竿雪拂紫筝之色、窓梅開、而五出風傳白華之香、仰願以此功德、奉資尊閣、象岳之上、山引三呼之嵐、濟川之中、水俟一清之浪、佛法潛衛、匪啻于兹、借定力於邊際、比仙算於老彭、於戯啜菽飮水之孝、何忝年華、恒河微塵之算、必添歲實、志重千鈞、講

金字而慕上壽、精超百錬、禮鏡智而求長生、乃至法界、平等利益、敬白、

長治元年十二月廿五日　弟子從四位下行左近衞少將兼近江介源朝臣師重

從四位上行右近衞少將兼備中介源朝臣師時

參議正三位行左兵衞督兼備中權守源朝臣師頼敬白

〔續世繼 七 夢の通路〕このほりかは(○源俊房)どのは、七十になり給とし、御子のほりかはの大納言殿(○師時)の右兵衞督と申し、ちゝのおとゞの御賀せさせ給とて、長治元年しはすの廿日あまり、ほりかはどのにて、御賀したてまつり給とき、侍しこそ、むかしのことゞきゝ侍るやうにおぼえ侍りしか、その殿にまゐりし僧のかたり侍りしは、るりの御國のほとけの、人のたけにおはしますかきたてまつりてこそ、かのきしのみのりにかねのもじになゝまき、たゞのもじの御經なゝそちうつしたてまつりて、僧綱有職など、七人請せさせ給て、くやうしたてまつらせ給、一家の上達部殿上人、太政のおほいどの(○藤原雅實)内大臣と申しよりはじめてわたり給て、御佛くやうの、ちゝ、舞人樂人など左右のまひなどして、のちには御あそびせさせ給、御みき、きこえかはしなどして、いひしらずめでたくきゝたまへりしか、中院大將(雅定)わかぎみにおはしけり、十八ばかりにて、さうのふえふき給けるこそ、その日のめづらしく、なみだもおとしつべきことに侍けれ、

〔百練抄 七 近衞〕久安三年三月廿七日、入道前太政大臣(○藤原忠實)於高陽院七十賀、

〔台記別記〕久安三年三月廿七日庚寅、今日高陽院(○鳥羽后泰子、忠實女、)攝政(○藤原忠通)倶賀禪閤(○藤原忠實)七十算、去十三日、於攝政第(近衞)定雜事、(院司上臈)爲令者、以權大納言藤原朝臣伊通爲序者、各仰其由、昨日大將申令者作法舊例不詳由、禪閤及攝政亦不知之、因之止之、左大將曰、承保二年正月二日、養產有和歌、其後絕不行、今朝降雨之間、禪閤寫書云、今日降雨、唯行佛經供養之事、舞樂等事、明日可行之、(○中略)先例未有賀禮行曼茶羅供、禪閤素渴仰秘密之致、被行未曾有之例、又先例无贈于導師、今度導師、已爲親

王、因有贈、

〔新古今和歌集〕〔七〕日吉禰宜成仲、七十賀し侍けるにつかはしける、　藤原清輔朝臣

な、そぢにみつの濱松おいぬれど、ちよの殘り、は猶ぞはるけき

〔稱名院右府七十賀記〕ことし入道前右大臣、〔○三條西公條〕七十の算を賀せしめんがため、七十首の和歌をす、めて、彼亭にして歌人を招きよせ講賀せしめ、ひとへに萬歲を祝して一盃を勸む、漸酒酣にして、權中納言爲益卿、ふところより十首の詠歌を取出して遊宴の席に弘む、まことに五條三品〔○藤原俊成〕の長生のためしも引出ぬべき、かの苗裔たる人の心ざしも感情あるにや、入道前右相府和答ありとかや、抑此興行のこと翌日にきこしめし、一續の短冊御覽ぜられしに、七十首のうちに、浦月の愚詠、はま松が枝にたよらせ給て御製、

けふぞみる松のこぞのは七とせを幾十かへりの花にさかまし、となむ、かく叡慮のかたじけなきこと、入道のことはさらにもいはず、時にあたりてめいぼくのいたり、うちおきがたくて、

君が代に花は七とせ十かへりのめぐみの色や松は見せけむ

と申けるに入道前右府も

齡のみきこえあげつ、老鶴のつかへし道ぞ雲井はるけき、又の日、和歌の道にこ、ろざしある好士ども、此事の時にあへるをよろこび、南禪天龍相國の尊宿などを請じて、和漢を張行せしめ侍り、かれこれを一卷にしるし、おくに歲次をかぞふれば、逍遙院前内府、〔○公條父實隆〕八十の賀算の八十首の短尺の裏書、天文三年四月廿五日なり、けふしもおなじき日にあたれり、これ則八十の賀をとぐべき瑞相、かねてあらばる、ものならし、時に弘治二年卯月廿五日、いさ、かこれをしるるし侍り、〔○歌略〕

弘治二年四月廿五日賀入道前右相府七十算、

讀師　勧修寺一位
發聲　飛鳥井前大納言
講師　永相朝臣○歌略

およそ賀といへることは、其年のみてるを賀し、行末の遐算を祈るとかや、すべらぎの御賀は、淳和仁明よりはじまり、それよりしてたゞ人にも常のことなり、なかにも仁和のみかど○光孝遍昭に、とにもかくにもとの製作あり、まことに世すて人までも、その德によれるにや、されば五條入道三品も、そのあとをおぼして九十賀たまへり、花山の跡をたづぬる雪のうち、など黄門の詠じ給へる、千歳の美談ともなれる、こゝに九條博陸入道殿下、○道家野僧がおかしげなき身にしも、懸車の年をかぞへ給て、人々をあつめ、七十首の歌をよませ、講頌せしめ、鸞筵をのべ、羽觴を飛して、ひねもすに老を忘れ歡をつくせるに、冷泉黄門○爲家十首の詠歌を袖にしておはしたり、まめやかにかの三品の齡たかく德ひろき苗裔として、かくばかりの褒詞ども、かずならぬ身には、あまりなるまでおぼえて筆にまかせけり、

仍覺○公條法名

〔鵞峯文集四十啓札〕奉賀家君○林道春七十壽算啓

慶安五年壬辰正月朔旦、家君壽算、既杖於國、養於學、所謂一以喜一以懼之時也、今其强健康寧、七茵太快、何樂加之哉、舊臘老臣、傳旨有賜采邑、是因先大君顧命也、聞者無不慶之、然則其安穩無恙者、官家之助、而衆人之所悅也、況於我輩乎、且學而不厭、敎而不倦、無晝無夜勤勵、非强壯者之所及也、想夫如濂溪明道橫渠康節、其齡不長、以爲遺恨也、今春秋之高、與伊川老亭彷彿、則庶幾其齒超越龜山楊氏、而追隨濟南伏生、而後滿百之餘延、及伊呂周召之遐算也、嗚呼爵祿者天也、非所論也、其德之厚、名之大者、非短毫之可悉記也、爰迎歲初佳辰、以祝壽考無疆也、嘗聞大人不失赤子之心、

者、儒門之所誨也、其子白首而父猶存者、史家之所傳也、是我輩之所期望而願也、於是謹綴駢儷一篇、聊呈微忱、彌介景福云、

交泰三陽、感造物無盡藏、周流一氣、迎人生者稀〇七十年、開晨霞於東溟、對宿雪于西嶺、欽惟嚴君大人膝下、當時俊傑、閭國模楷、洙泗派濂洛淵、傳入閩水、京師營駿府壘、移居江城、有私淑艾、乃爲儒宗、唯獨賢勞、莫非官事、七旬登壯、既不踰矩、仰之彌高、四葉何濟、猶難懸車、優而則仕、應是松柏同操、欲與龜鶴保齡、想像太公望遇姬昌、封爵榮達、記得百里奚見任好、大器晚成、僕李雖散材、幸在庇蔭、謹獻椒觴、賀元日節、趨過椿庭、期八千春、

〔百一錄〕元祿七年九月廿九日、松木前内大臣〇中御門宗條七十賀、從内被仰出、今日宴會、命諸家五十餘輩令詠和歌、奉行萬里小路大納言、自禁裏被下御杖、銀作供鳩形、令書其羽翼于歌、以黑漆也、和歌者通茂卿、筆者持明院、

御杖之歌

百ちたびさかゆく杖の數そひてつきせぬ君が世をもかぞへよ

〔風のしがらみ〕中院内府通茂の七十賀を、元祿十三年正月晦日にし賜ひける時、屏風和歌、

正月澤邊にてわかなつむ所　清水谷大納言實業卿

春をまつ心を野邊の澤水にともなひ出てつむ若菜かな〇中略

色紙の清書は、清水谷大納言かき賜ふ、

此時杖の歌は中院大納言

此杖はいはひぞそむることしよりはるかに老の榮ゆかん世を

杖の笹の葉に、此歌を持明院大納言基時卿かき賜ふ、

内府返し短尺にて

はる〳〵と老のさかゆく杖なればつたへて世々に千世はかぞへん〇中略

此賀に盃臺を送るとて、入道常算、東園大納言基賢

老のなみ千とせ立そへ七十の春に心もわかの浦鶴

中院内府御返し

老のなみさきだつ友もしるべせよ和歌の浦鶴千世もへぬべし

備前少將綱政のもとよりも、雛鶴を送りまゐらするとて、

七十の齡にそへてことしより八千代かさねん鶴の毛衣

内府かへし

かさぬべき八千代もさぞと言のはの色に出たる、鶴の毛衣

〔年山打聞上〕七十賀

中院内府通茂公、前大納言、于時は、西山公光圀〇水戸と和歌の友がきむつまじく申かはさせ給ふ、元祿十三年四月十三日、かの誕生の日をえらみ、七十の賀をまゐらせられける、内府の御門弟なりとて、其賀使に爲章を京師へのぼせられ侍りぬ、目錄のうちに壽桃とあるは、大きなる饅頭に、紅をもておのおの壽の字をかきたり、長壽香は、大清よりわたりたる長き線香也、壽燭は、長き蠟燭を金銀の箔にて飾り、下の穴に、五色のながきいとをさし入たり、壽麪はいとも長き索麪也、仙禽は鶴にてぞ侍りし、

謹具

壽燭二樹

長壽香二百枚

壽麪壹匳

壽桃百顆
仙禽雙翼
壽酒明樽
壽詞一章
壬申　賀敬　　前權中納言西山源光圀拜

是より別紙なり、則五言律を賦て贈りたまふ、

賦短律一章、忝奉祝中院前亞相古稀初度

七旬華旦月、南極爛儲精、轆々蒲輪車、欣々槐木榮、嚴霜高氣節、藝圃擅歌名、仁者元惟壽、何爲美老彭、

庚辰四月十三日　　前權中納言西山源光圀拜

大納言殿より和し給ふ歌の書體

和壽章芳韻和歌　　散位源通茂

わかゑよとわかなにまさる七種をおもひつみける程も精しな
かぎりなく君もふるすな行すえのゑるべとたのむ千世の榮へを
もてはやすなさけぞくむに淺からぬ世に七十のかずならぬ名を

〔桃源遺事中〕西山公〇徳川光圀御家臣中山風軒が七十の賀を賜ひ、その以後人見卜幽が七十の賀を賜ひ、御一門及び諸家だも緣につきて壽賀、或は御詩歌、幷に色々珍らしき式法の御音物御贈り候、是よりして諸人心付、今程は關東にて、下々迄壽賀盛に行れ候、

〔鵞峯文集記十一〕鳩杖記

養老之禮尙矣、夏因於虞、殷因於夏、周因於殷、兼用虞夏、其禮備矣、自漢以來、亦間有之、其爲禮也儀條

不少、賜杖亦其一也、所謂五十養於鄕、杖於家、六十養於國、杖於鄕、七十養於學、杖於國、其品節雖異、所以養老惟同、此禮自天子達於諸侯通行之、杖之製亦不一、然賜老者多用鳩杖、其製如何、以鳩飾杖端也、以鳩飾杖如何、鳩不噎之鳥、故寓祝老之義也、權輿於漢志、而流傳於本朝也、本朝俗以四十為初老、是以五八之算以上、五十也、六十也、七十也、八十也、九十也、或有天子賜宴賀大臣、或有大臣設會饗其師、或有親戚就家敬其高齡、或有同僚尙齒厚其交、蓋夫冀四代養老之禮者乎、方今卜幽叟野壹旣反古希之年、感落花之時、家姪節篤與其嗣傳、就其家催詩酒之賀、敬高齡之禮不任玆乎、其友弘文院學士林恕、携子姪及生徒往會焉、聊尙齒厚交之勢躬乎、壹昔執贄前水戶侯、至今三十餘年、旣歷二葉、仕而優、優而學、老而無怠、恩禮有加、是日三品宰相君、聞催賀筵、辱枉華軒、壹遇不意之幸、不堪恐懼之至、且染親筆賜壽詞、其餘之賚若干品、鳩杖在其中、壹再拜稽首、不覺手之舞足之踏者、不亦宜乎、與彼藏外史受賀詩於水石亭、藤長秋賜鳩杖於屛風座者可相準、而古之養老之禮、達於諸侯者、再見於今日、不亦幸乎、壹多年稽古之力有効、而古希老林之榮、何以加焉、匪啻壹之榮、而闔國儒門之美談也、誰不美之哉、孔子曰、老者安之、宰相君之志可以嘉尙焉、傳不云乎、上老老而民興孝、故恤高年者、治國善政之一擧也、壹壽於此時、逢於斯嘉惠、實是一家之鴻慶也、嗚呼如叟、則無馮唐易老之嘆、而得梁顥白首之榮者乎、旣賜扶老之具、携不噎之鳩、則退而養、出之時至乎、然精氣猶壯、學習不已、則進而化、飛揚之塵乎、惟青春之深、喚晴喚雨、可以伴午寢、可以對　或植之佇立、或曳之徐步、遊於斯、息於斯、起居出入、隨意任脚、則安其樂、益得其壽者、可以祝焉、

戊申暮春

〔風のまがらみ〕寶永二年一條大政所〇一條教輔妻七十賀の和歌

早春　　一條前殿下兼輝公

かぎりなき千代幾かへりかぞへ見むけふ七十の春をむかへて〇中略

閏四月廿一日於一條前殿下亭披講之

おなじ大政所賀御杖の歌

七十賀御杖七節　　圓照寺宮

末遠くかぞへのぼらん千代の坂手にとる杖のつきぬよはひは

〔執次詰所記〕寶永五年三月廿八日、聽松院長老七十賀村、爲御祝儀、唐紙二百枚、昆布一折、本二十被遣之、

〔鳩巢文集四〕賀謙光翁七十壽二首

材名夙昔播幽燕、此日從容致仕年、坐對南山人不老、樽開北海客皆賢、明侯未許懸車退、豪俠猶應避馬旋、何用更尋蓬島去、地行元自有神仙、

其二

懸弧三月對年芳、七十知君鬢未霜、馬上據鞍猶矍鑠、朝中曳杖且倘佯、春風花映炎容模、初日霞流鶴鵠鵷、從此期願知不遠、幾回把酒上華堂、

〔雅筵醉狂集雜〕七十の賀しける人に、松、竹、菊、鶴、龜の臺を贈けるに、

松竹も千とせと菊の酒くみてなをそのうへをいはひつるかめ

〔近聞寓筆一〕頃在客座、恭睹今上皇帝〇光格賜伏原侍讀御製詩二首云、經業元傳絕世才、緋帷七十賀筵開、膝前孝養兒孫輩、同唱南山侑壽杯、聞說講堂促賀筵、氤氳佳景滿庭前、宵間玄鶴報獻舞園裏黃花呈壽鮮、御製前後凡四引、首曰、一人元良、萬邦以貞、後三日天產、曰鳳洲、曰惜花春起早、賞月夜眠遲、天章燦爛、光輝藝林、洵近代之盛事也、

〔近聞寓筆一〕寬政庚戌秋九月、門生及諸子等、壽余〇吉田篁墩七十□□□□榮莿之至、樽前屈指七十餘、座客當今唱九如、承之經筵沐恩久、肯將華髮促懸車、右淸原二位宣條卿詩、淸原又稱伏原、上條所載

御製詩、董此時所レ賜也、

〔琴後集 六雜歌〕おなじ人（○千蔭）の七十の賀に、くり、かへのみ、鳥の子をもりたるらいしに結つけたる歌、

くりかへし千世はよばなん思ふどちかひある春をいはふまごゐに

七十七賀

〔世事百談 一〕華甲重逢

七十七歳を喜賀、八十八歳を米年といへり、喜賀とは喜字の草體を㐂とかくによれり、

〔宗長手記〕大永四年正月一日、（○中略）試筆、於二酬恩庵一院主を奉レ賀一首、

七十にな、とせのけふをくはふれば君がちとせのはるはるかなり

〔大國隆正詠草〕㐂

七十七翁隆正

な、そぢに七つあまれるよろこびはあらたなる御世にあへるなりけり

八十賀

〔日本紀略 三村上〕天暦元年七月廿三日丙午、中納言源清蔭卿、（○陽成皇子）奉下爲二陽成太上天皇一賀中八十算上、仍修二功德於八箇寺一、十二月廿六日丙午、是日上野太守親王、賀二陽成院八十算一、

〔百錬抄〕延寶三年十一月十四日、於二禁裏一法皇御所（○後水尾）八十之御賀祝壽云々、堂上雲客幼年之輩、舞樂張行、地下樂人十二人、參列勤仕云々、且又有二和歌之御會一、題對鶴爭齡云々、

〔基量卿記〕延寶三年十一月十四日、今日於二禁中一、法皇（○後水尾）へ御賀被レ獻、御杖、御屛風、黄金五十兩等□進、諸家輩有二舞樂一、巳刻計各參入、（○中略）今日被レ進御杖之竹葉、御短册ヲ被レ付、

當今（○靈元）御製

君が手に今日とる竹の千世の坂越て嬉しき行へをもみん

法皇御返歌

つくからに千歳の坂もふみわけて君がこゆべき道しるべせん

法皇御製

〔後水尾法皇八十御賀詩歌〕

この春にせめて驚く身ともがなはぢおほしてふ命ながきを

唐堯盛化國家肥、祝得封人言不非、臣庶仰望萬春始、洞中自是有令威、

禁裏〈○靈元〉御製

仙人のいのちながきをためしにて八十ぢの春やもゝかへりへん

辱壽考彙新壽齡、二難幷得共天聽、皇城姑射春光一、風雅道長明六經、

新院〈○後西院〉御製

この春の八十路を千世のはじめにていのちながきぞかぎりしられぬ

永言冒志屬詩歌、孝道勤天事有疑、八十春壯姑射裏、千年風致豫應知、

〔古今和歌集 七賀〕仁和のみかど〈○光孝〉のみこにおはしましける時に、御おばのやそぢの賀に、しろかねを杖につくれりけるを見て、かの御おばにかはりてよめる、

僧正遍昭

千早振神のきりけんつくからに千年の坂もこえぬべらなり

〔拾遺和歌集 十八雑賀〕清和の女七のみこの八十賀、重明のみこ〈○醍醐皇子〉のし侍りける時の屏風に、竹に雪のふりかゝりたるかたあるところに、

貫之

しら雪はふりかくせども千世までに竹のみどりはかはらざりけり

〔續性靈集〕喜秋賀元興僧正大德八十詩幷序

沙門遍照金剛

夫翔天之雁、不失次第、蚑地之蟻、亦守陣列、何況天地最靈、含識爲首、道尊長老、貴眉壽乎、禮著鄉飲、經稱供宿、良有以也、元興寺大德僧正、年登八十、智明十二、無著世親之論採奧諸旨、慈恩惠沼之章括文綜義、晝則對筌蹄而忘食、夜則觀魚兎而廢寢、是故問津者、遠近雲集、懷疾者、小長霧合、二美彙修、六度

具行、可謂佛家之棟梁、法門之良將者也、鋭鋒易脱、皐響則達、弘仁太上、〈○嵯峨〉拔大僧都、天長今上、〈○淳和〉任僧正、人能弘道、聞之古、道能通人、見于今、貧道忝備下菜、思齊上聖、慨澆醨於禮義、悲陵遲於道德、是故取鄉飮上齒之禮、仰大士供尊之義、聊與二三子、設茶湯之淡會、期醍醐之淳集、是日也金風入管、玉露泣菊、閦婆奏樂、槃落則舞、八音寥亮、四衆忘味、言之不足、故事詠歌、乃作詩曰、

寂業遣敎、轉授其人、三藏稽古、六宗惟新、法相之將、推師當仁、瑚璉其體、龍象其身、辨挫邪鍔、智明正因、講經講論、乍秋乍春、聽者市井、學徒雲臻、著世幽趣、非公不陳、兩帝仰止、四衆梁津、名賓僧正、實德佛隣、伊余尙德、設饌迎賓、絲竹金土、感動鬼神、怨親旣歡、何況昵親、卓彼人寶、可謂國珍、天長六年九月二十三日、沙門遍照金剛上、

〔本朝文粹〈十一和歌序〉〕太上法皇〈○宇多〉賀玄宗法師八十之齡和歌序　紀納言〈○長谷雄〉

玄和尙、春秋始滿八十之年、所謂如來住世之期、凡夫希有數也、和尙以種智充發性之根、以木叉爲扶老之杖、卽知依不退之念力、得無漏之壽命者乎、夫仙家傳不死之藥、世間末全信、不可更求、我道有延命之法、和尙恒憶持、何暇相贈、所以寫一心之思、載八首之歌、假物以祝之、取喩以賀之、此間風俗勿相輕矣、其辭云、

〔日本紀略〈二朱雀〉〕天慶二年三月廿七日己巳、博士秦維興、弟子受業貴賤、集會廣隆寺、賀維興八十算、翌日於門亭、勸盃賦詩、

〔扶桑略記〈二十九後三條〉〕延久三年三月十二日丁酉、關白太政大臣〈○藤原敎通〉於宇治平等院、大設法會、被賀前大相國〈○敎通兄賴通〉八十算、諸僧六十口、

〔妙法院日次記〕寶永四年正月二日、菅谷大輔〈寛瑛〉八十賀付、御祝義トシテ銀子二枚昆布一折被下之、

〔妙法院日次記〕寶永五年正月元日、玄々院前大僧正八十賀付、御祝トシテ銀子二枚昆布一折被遣之、

十二月七日、今日玄々院前大僧正、〈堯憲〉從院〈○堯元〉八十賀被下、依被院參也、〈○中略〉玄々前大僧正拜

領物アリ云々、法服料黃金一枚、御脇息御杖鳩杖也、

〔風のしがらみ〕正德五年、同大政所〇一條敎輔妻八十賀和歌、

插頭梅　鷹司前關白兼熙

手折きてあかぬ梅が枝けふよりはまとゐに千代の春もかざゝぬ〇中略

おなじ大政所賀、御杖の歌、

八十賀御杖六節　中院大納言通躬

この春の八十かぞへていはふ杖手にとる末は千とせよろづ代

此大政所は、一條左府敎輔の政所、從三位輝子なり、備前少將光政御女、大猷院將軍の御養女にてまします、享保二年、八十二にて薨じ給ひぬ、

〔徂徠集九〕同齋越先生八十壽序

同齋先生、席累世膴仕之資、加以侍從之勞、業已儼然、顯爲諸大醫先生祭酒者數十年矣、是歲享保之辛丑、〇六年寔八十、而正月十有九日丁巳、爲其皇覽之辰也、則自親戚知友、曁乎門生義故、靄然聚而謀所以壽先生焉、適君瑞徵余文、余不佞、以諸侯之臣抱病乎、跧伏北門之郊、而甕牖箄戶之與鄰、唯丘里之言是嫺、則烏能脩辭樽俎之上、以中先生之睢睢、然先生者先子之執也、而余又辱君瑞從游、則又烏能辭、惟夫國家融朗敦龐之化、洋溢乎四海、旁皇乎天地、玉燭所燭、和風翔而甘雨施者、殆踰百年之久、而民之霑濡沐浴其德也、上焉文恬武熙、莫所事事、下焉鼓腹含哺、于我何有哉、是壽域也、時或燠寒之少忒、而淫厲札瘥之闕其化、則有諸大醫先生、操其刀圭、齊以湯液、解攣起躄、生死肉骨、以俾斯民克烝烝於壽、以輔皇上之仁於下焉、則古人等其功烈、亞諸良將之治者、豈虛語哉、是亦壽域也、然其或爲名高所使、或爲其稱而奔、趨營求之弗遑、籧篨戚施、無所不至、以滑其和、以夭其天年者、世豈尠哉、亦非天嗇其報也、適急其報於棄之過也、惟先生不然、先生之先人、起家勝國之際、其所以扶創夷於兵革之

餘、納諸曠蕩之澤、直與國家更始焉、遂守其鴻術、仁與世遷、益茂昌其業、以至先生之身、亦踰百年之久、是以望高家富、迥出儕輩、是豈世之食其伎者倫哉、余又聞之先子之言、曰先生者君子人也、亦惟神澹爲姓、孝友爲植、樂善博施、忠信以行之、不棄人之急、不利人之阨、專玷其名、孰若濟物、專喪其穫、孰若範我、又嘗聞至人之道、蟬蛻塵壒之表、金心不滓、皭若水雪、故無赫赫之譽、而有恂恂之行者、惟先生爲爾、是天之所以貺於先生、欲斂世之仁、厚集諸其身、而先生適薄享之、則先生之壽、固其所哉、方今君瑞、續學茀怠、克家弗殆、行將廓培其仁、以濟奕世之美、夫其所以孝事先生而養其志、豈徒滫瀡甘旨、溫凊與色已哉、則先生其無憂乎、惟人憂斯損壽、有子若斯、將又何憂先生之壽、殆未有艾也、八十曰耄、先生耄而未耄、由耄而耋、以至期頤、先生之壽、豈有艾哉、君瑞於是乎與再拜言曰、珪雖不敏、願服膺子之言、以長事家君焉、庶以免其罪戾邪、不翅家君之幸也、物子亦再拜曰、果爾先生之壽、愈益莫有艾已、不佞幸甚、則賦南山有臺之章、以爲先生壽、

〔大江俊章記〕寶曆二年二月廿六日、今日宮內權少輔俊包八十滿年賀儀、前內大臣光榮公筆一軸、桃枝折添、肴物等送之、饗饌終日、置酒入興、送愚詠、予不入門、仍不用短尺、又不詠三十體、只當座書之體也、當時不入門人、有所如此、

老の名のいくも、度もやすくへん八十の春の花のことぶき

種々贈物等アリ、俊民橘枝實ニ初者机物絹等也、申時計俊包四品勅許、不計設此宴、壽福誠是一家之光華不過之、中二年是侍中之勞先例也、可悅可悅、當家四品久絕、長壽之德也、更以愚詠賀之、

めぐみしる老もわかえてくらゐ山かさねかさねん春はいく春

其後座中連歌等有之、深更退散、

〔翁草百五十〕寛政元年春二月、我が八十の齡祝はんとて、むまごひ孫のやから、したしきざちあつまりて、燒原の新宅へ我を請じて之をことぶく、其むしろへ日野資枝卿より、おほけなくも壽賀の御詠を賜る、雀躍して拜吟すれば、

八十八賀

其蜩庵杜口の八十歳を賀して　　　　資枝

も、とせも早手にとれよ梓弓やそぢのはるをやすくいはひて、となん、われ此卿に何の御よるべもなけれども、一とせ予がくちなはの句の事を御聞に及れ、賞し賜ひし事あり、そがために陋しき老が身を知しめして、こたびも需めざるに御詠を賜ふ、おしむことの葉のかたじけなさ、かしこうそ、いきの松原むら／＼立人々へも、道のめいぼくを告まほしく爰にうつし畢、

〔理齋隨筆　二〕或人八十の年賀を祝ひけるに、人々に賀章を請ひけるとて、松契千歳とかいへるをもて、諸君子に勸進せるよしを聞て、蜀山人が讀るとかや、

八十の賀らくたおやぢ生きのびてまたも齡をまつに契るか

と聞えたるは、おかしからずや、

〔運歩色葉集　與〕米年（ヨネ）曰二八十八歳一

〔壽算名目抄〕八十八歯　與禰（ヨネ）ノ祝ト云、俗稱ナリ、是ハ八十八ノ三字ヲ約シテ書時ハ、米ト云字ニナル故也、東鑑ニ米ノコトヲ八木トイヘリ云々、此賀ノコト、何レノ頃ヨリ祝シケルヤ不詳、古ヘ俊成卿ヘ九十ノ賀ヲ賜ヘリシコトハアレドモ、八十八ノコトハ舊記ニ所見ナシ、田舍ノ諺ニハ、八十八ヲ升繫ノ祝ト云ハ、卽チ米ノ義ナルベシ、

〔通俗編　三十八識餘〕拆字　清異錄、以粥爲雙弓米、今謂米曰八木、茶曰草木中人、乃其類、

〔世事百談　一〕華甲重逢

八十八歳を米年といへり、〇中略橘窻自語に、四條隆蔭卿、權大納言正二位にて、八十八歳の時、依勅米字を書く、諸人貴賤八千七十五人に及べりと聞傳へたり、延文年中、既に米字をかく事ありと見ゆといへり、按に運歩色葉集に、米年は八十八歳のことゝす、また幸庵對話に、人八十八齡にして、米字を俗家にかく事誤なり、堂上方には八十歳にてかくなり、よねは八十の人とかく、よねな

りとあるを併せ思へば、八十歳を米年とする事據なしといふべからず、さて高年長壽の人は、古より尊敬する事にて、恩賜の厚かりしためし國史にも見えたり、近く江村專齋などのはなしは、畸人傳にも記して人のしるところなり、安永五年、世上高壽の者御尋ねありしに、都て書上たる者十餘人に及ぶ、皆江戸の人にて、百歳以上にて、九十歳を最下とす、大方武家の中、長壽の人多し、その中お玉が池の大工喜兵衛と云者の祖母、百二十一歳なりし、此老婆、八百屋お七が帶解の小袖を裁縫せしよし、常に物語りしけるといへる事、我衣に見えたり、

〔備前老人物語〕一溪道三、元日に紹巴法橋のもとへ、今朝令ㇾ逢ニ米。年。一、

我年は八。十。年。餘。り。八。の。年。よねといふ字にかなふことぶき

と書おくられしかば、返し紹巴、

新しき春に種蒔くたのみこそ百にかぞへむ君のゆくする

〔古學先生和歌集雜〕小原公以老母、八十八歳のことぶきを賀し侍りける、

八。十。あ。ま。り。八。歳。を經ぬる玉椿かねて八千代のかずはしるしも

〔雅筵醉狂集雜〕八十八の賀しける人に讀てやる

霜の眉八字にひらくけふよりや木へんに公の字とともにさかへん

八の字は二の句にあり、木偏に八とムの字は松也、千とせもさかえんといふ義也、字彙にム音思自營也、韋應物詩ニ、金丹擬駐千年貌、寶鏡休勻八字眉、韻瑞開ㇾ眉とあり、

同じく賀しける人に、一樽と鮭の筋を贈とて、

鮭の字の作りを米にかさねなんよはひたしかにかよふやそぢに

百十歳まではたしかなり

〔視聽草二集七〕朝比奈翁和歌

九十賀

石川君の母堂八十八の賀に、松延齡友といふ題にて、　朝比奈昌始
松もまれ今ぞ八十路の八幡山こえて千とせのかげたのむとは

〔百練抄　四後冷泉〕康平三年十一月廿六日、關白（賴通藤原）賀大僧正明尊九十算、

〔濫觴抄　下〕僧侶賀　後冷泉十五年庚子（康平三）十一月廿一日、關白於白川別業、被賀大僧正明尊九十算、左大臣以下皆參、大納言源師房卿作和歌序、

〔本朝續文粹　十〕法務大僧正（明尊）九十賀和歌序　土御門右丞相（源師房）

三年（康平）之冬子月下旬、關白尊閤、排白河之華亭、設緇素之宴席、蓋賀大僧正法印大和尚位九十算也、和尚戒定內明、智行外顯、遂爲一宗之棟梁、久經數代之朝廷、過八十八廻、如來猶以不等、超九々九歲、算師亦難量、是因無漏無爲之功德、證不老不死之妙文者歟、爰感此希代之鶴齡、命彼住會之鵷鸞、其詞曰、

〔定家朝臣記〕康平三年十一月廿六日辛亥、殿下於白河院、賀大僧正九十算、（件事去四月被設此事、有故障延引、其後連々有障、今日令遂給也、）寢殿母屋中央間立佛臺、懸等身釋迦一鋪、其前立香花佛供机、其南立禮盤、其前立拜經机、安色紙法華經一部、（入紫檀地螺鈿經筥、）南庇立散花机二脚、每間卷簾懸彩幡、母屋東一間爲殿下御所、（垂簾、）第二間爲大僧正座、佛臺以西敷卅僧座、其前立經机、各置經三部、公卿座在南庇左府別房、（東面、）一南榮爲殿上人座、馬場殿爲公卿殿上人饗座、寢殿西渡殿爲大僧正座、（立淺黃綾屛風二帖、同几帳二本、其內敷同色高麗端疊二枚、其上敷同色茵、其前立淺香懸盤四脚、飯用御器、銀杖倚立屛風、件杖頭懸洛書倭歌、伊勢大輔讀之、藏人辨書之、）馬場小廊爲大僧正休息所、釣殿南庇爲請僧參會所、其小廊設權僧正房、南庭立諷誦幄、瀉溪小橋東頭、引纐纈幔、爲伶人候所、其前立大鼓一面、（無鉦鼓、）巳剋殿下渡御、朱紫交會、午剋大僧正被參入、從馬場南法印已下弟子多以相從、即坐於休息所、頃之左府同從馬場南參給、未剋權僧正以下衆僧參入、樂人發聲、次大僧正被參、殿下避座、御坐東庇、敬師之禮、爰以揭焉也、左府以下同以動座、次權僧正爲導師、關白諷誦如恒、（左府令諷誦給、）行了施被物布施有差、（僧正被物、宮內卿取、）

之、他僧綱料、宰相取之、絹殿上人取之、次有音樂、左蘇合六人、右新宿德六人、殿上人各纏頭、次採桑老、右衞門志時資、內大臣賜御衣、此間日落山西、被止次舞了、舞後賜凡僧布施、此間供燈燭、次供肴物菓子、殿下并大臣僧正兩源人料、其外不居之、大納言書序代、殿下并兩丞相、把盃令詠和歌給、聽不及廣之、次金剛子念誦一連、付銀松枝、被物大僧正、二位中納言取之、僧正被退出、次有引出物、龍蹄一疋、左府令出給、頃之殿下還御、

〔扶桑略記二十九後冷泉〕康平三年十一月廿六日、關白從一位於白河別業、被賀大僧正明尊九十之算、圖繪釋迦如來像一鋪、書寫妙法蓮華經九十部、其詞曰、伏惟大僧正法印大和尙位、戒定瑩器、忍辱裁衣、一乘圓融之嶺、開顯之花春鮮、五部總持之園、智慧之菓秋盛、旁究學海之波浪、早爲佛家之棟梁、弟子從弱冠之始、迄携杖之今、依其護持之力、全此愚昧之身、方今和尙、春秋之算、九旬全盈、可喜可懼、正是其時也、仍掃白河之勝形、敬致丹地之懇念、彼姬公旦之在洛邑也、未開花文於禪林之月、智法師之老蘇州也、誰賀松年於巨川之波、今日之事、少超古人、又源亞相述和歌序、

〔元亨釋書四慧解〕釋明尊、武庫令小野奉持之子、道風之孫、篁之曾孫也、〇中略康平三年十一月、儀同三司藤賴通、於白河別業設法會、賀尊之九十之算、公卿大臣、多集其席、

〔袋草紙三〕明尊僧正ノ九十ノ賀ハ、宇治殿ノセサセ給フナリ、杖ノ歌ハ古伊勢大輔、

萬代を竹の杖にぞ契つる久しくつかん君が爲にと、〇中略此賀歌ハ、宇治殿、大二條殿、堀河大臣、土御門右大臣等讀ミ給ヘリ、序者土御門殿也、〇中略杖返歌ハ前律師慶暹歌也、彼僧正弟子也、

君をいのる年の久しくなりぬれば老の坂ゆくつゑぞうれしき、此律師ハ歌仙也、又無極聖人也、偏欲無上道、不思名利、〇中略又觀念ノ上人也、金色ノ阿字ヲ前ニ懸テ、墨字ノ阿字ヲ後ニ懸テ觀ズルニ、墨字變ジテ金色云々、

〔後拾遺和歌集七賀〕前大僧正明尊、九十賀し侍けるに、宇治の前太政大臣、竹の杖つかはしける返り事によみ侍りける、

前律師慶暹

君をいのるとしの久しくなりぬれば老の坂ゆくつゑぞうれしき

〔本朝世紀〕久安五年六月廿七日丁丑、今日宇治入道大相國〇藤原忠實於宇治新造阿彌陀堂、有令賀母儀九十算給事、當日早旦、主人先令渡御堂御所給、密々之儀、以東對代廊爲主人御所、堂中被懸兩界曼荼羅各一幅、其前立供養法壇一面、讃衆座前、

〔百練抄〕十後鳥羽文治四年五月十六日辛亥、日吉社禰宜成仲結構九十賀、好士多以行向、可然之卿相送和歌云々、

〔俊成卿九十賀記〕建仁三年十一月廿三日丁亥、今日於上皇〇後鳥羽二條御所、被賀入道正三位釋阿〇藤原俊成九十算、公家賜臣下賀之例、仁和二年、天皇〇光孝於仁壽殿賜遍昭七十賀、寛平法皇〇宇多賜玄宗法師八十賀、延喜十三年、天皇〇醍醐於清涼殿西面、賜尙侍滿子四十賀、件等例、年序久隔、記錄不詳、粗見三代實錄、延喜御記等、多以准據之例被計行也、去九月十三夜、欲被行此儀之處、依叡山行學之合戰、延引之事猶難默止、仍今日有此事、件屛風四帖被新調、延喜例四帖被調四季各一帖也、上皇以下、當世歌仙等詠和歌、撰定之後、仰繪師被圖之、予依仰今日書件色紙形、可被仰他人之由雖申請之、永可被留置御所、猶可書之由有仰、仍書之、屛風遲々間、入夜書了、和歌在別戌刻著直衣冠、上臈、庇車、隨身參院、和歌所六間爲其所、寢殿乾角子午屋號御所、去年被置撰和歌所也、南一間副障子懸御簾掩之、其前立新圖四尺屛風三帖、其前敷龍鬢錦緣御座二枚、爲上皇御座、第二第三間東障子掩御簾、第三間副御簾立同新圖屛風一帖、其前敷高麗端疊一枚、其上敷東京錦茵一枚、爲釋阿座、西面南北妻第二間簾前上也、釋阿座置法服裝束一具、平袈裟、白用浮線綾、以紫糸疊和歌、件歌女房宮內卿詠之、横被同之、袍裳表袴用唐綾、平裳用赤色浮線綾、入蒔繪衣筥置臺、先例多立廚子置之、今度依無便宜置板敷上、其傍置口鞋、其北置鳩杖、以銀作之、件杖竹形也、其上居鳩也、有一枝二葉、件葉書和歌、有家朝臣詠之、南第二間以北一行副西長押、敷高麗端帖、爲公卿座、東座釋阿口也東面第四五六間、北面二箇間、西面六箇間、御簾皆掩之、東西廣庇不敷座也、人々參集之後、上皇出御、御直衣、烏帽予即著座、以長房朝臣召

諸卿、大相國以下各著座、次予伺御氣色、以長房朝臣召釋阿、釋阿被扶持、成家卿、定家朝臣等參上、（法服白平袈裟、前大僧正被調進之、）著座、次供上皇御膳、陪膳源大納言、（通資）役送公信朝臣以下殿上四位、白地錦打敷、（檜木螺鈿懸盤六脚、御臺以下皆瑩玉、）次賜釋阿前物、殿上五位二人舁居之、（赤木螺鈿机一脚、居饗膳、）次居公卿衝重、（塗胡粉、有畫圖、院盛饌之、五位殿上人役之、予前五位藏人役之、）次殿上五位置御遊具、殿上召人三人、依召著廣庇、（無座）次御遊、（所作人皆參人中口之）

拍子（前中納言隆房卿）　琵琶（右衛門督公繼卿）

箏（權中納言兼宗卿）　和琴（民部大輔賴房卿）

笛（右中將經通）　笙（正三位經家卿）

篳篥（右少將雅經）

御遊了撤管絃具、次撤上皇御前物、（陪膳役送如常參上撤之、）次座上衝重一兩令撤之、（予幷大相國之前也、）講和歌之間、可無便宜之故也、次立切燈臺、置文臺圓座等、（役送五位殿上人）次序者左大辨資實卿置序、（公卿爲序者之時、或位次置之、今日先置之、）次歌人自下﨟次第置之、予依座近頗居寄置之、次大相國起座著讀師座、（不敷圓座、）講師大藏卿有家朝臣著座、先披序講之、公卿之中、隆房卿、範光卿、通具卿等、依召近參集、詠序大相國□□宗朝臣令重和歌、次第講和歌、（釋阿置歌之時、納言置之、大臣未置之前置之、講之時同前、）予歌講了、出女房歌二首、（薄樣書之、置殿之、）相國取之、講了講師退歸、以通具卿爲御製講師、賜相國、即披御製、（以文下爲講師方、）各詠吟、人々起座、予取御製入懷中、次釋阿退出、

次人々退出、

前物（机也）法服等、送遣釋阿許、

袈裟歌　女房宮内卿

ながらへてけさやうれしき老のなみ八千代をかけて君につかふる

杖歌　有家朝臣

百とせにちかづくさかにつきそめていま行すゑもかゝれとぞおもふ（○又見後京極攝政記）

〔風雅和歌集賀二十〕和歌所にて、皇太后宮大夫俊成に、九十賀賜はせける時、

後京極攝政前太政大臣

百年に十とせおよばぬ苔の袖けふの心やつゝみかねぬる

〔實冬卿記〕弘安八年二月廿八日辛未、御幸西園寺、是爲來卅日准后（○藤原實氏妻貞子）九十賀間、自今日兩院（○後深草、龜山）、大宮院（○後嵯峨后、姞子、實氏女）、東二條院（○後深草后、公子、實氏女）、姫宮（○後深草皇女、冷子）渡御、　廿九日壬申、行幸北山、（○後宇多）左大將、右衞門督、大炊御門三位中將、二條三位中將、近衞三位中將、洞院三位中將等供奉、　三十日癸酉、今日於西園寺、大宮院可被賀准三宮九十算、兼日右中辨爲方、奉院宣相催、仍領狀、而爲方輕服之間、左中辨信輔申沙汰、（○中略）

一御裝束

寢殿南面母屋三箇間、東面西廂、幷東南簀子等、敷滿弘筵、（長押上除妻戸間之外、逐鏠如常、每柱道置鏁子二、）同母屋東南西三方懸御簾卷之、同南廂五ヶ間、東廂二ヶ間（南間妻戸放之）同懸御簾卷之、同南同母屋此三ヶ間東廂北、幷西庇北面等、懸御簾垂之、同中央間副北御簾立佛臺一脚、奉懸釋迦像一鋪、其前立香花、佛供机一脚、其左右立燈臺各一本、供燈明、其前東西相對立高座、（在前机）其南立禮盤二基、同間南簀子立机二脚、（東西行立之、在覆地敷）其上置御經筥二合、御願文幷名香、杖倚御經机外方、（名香東、御願文西、）母屋廂每間懸幡花鬘代、母屋東第一間敷高麗端疊、（南北行、逼東柱）爲左方七僧座、南庇東二ヶ間幷東庇、敷高麗紫端等疊、爲左方題名僧座、（僧綱高麗、凡僧紫、）右方僧座以之可准據、衆僧座前立經机、南庭構舞臺、其上立行香机二脚、（東西行立之、在覆地敷也、）舞臺東西、立散花机各一脚、（南北行、在覆地敷）其西敷紫端疊各二枚、（南北行）爲堂童子座、寢殿母屋西第一間御簾中、敷繧繝端疊二枚、其上供唐錦茵等、爲主上御座、同御座北敷大文高麗一枚、爲東宮御座、其東間敷大文高麗端二枚、爲一院御座、其東間敷同疊二枚、爲院御座、其東間立廻五尺屏風、敷同疊二枚、爲大宮院御座、南面御座御簾出織物几帳、同西廂北御簾中立廻同屏風、敷繧

綱端二枚、其上加東錦茵、爲准后御座、南面御簾出織物几帳、同西卯酉廊作合間立廻屏風、敷大文高麗二枚、爲東二條院御座、東面御簾立織物几帳、其西二ヶ間南面御簾、出纐纈几帳帷、爲女房候所、毎間出綵袖、其西間爲准后女房候所、同前東卯酉廊西第一間立廻屏風、敷大文高麗二枚、爲姫宮御座、南面織物几帳帷、其東二ヶ間南面御簾、出纐纈几帳帷、爲大宮院女房候所、几帳毎間出彩袖、如東二條、其東間爲姫宮女房候所、同前寢殿南面階間東西、并東西簀子等、敷高麗端疊、爲公卿座、同東卯酉廊廣庇、并子午廊弘庇透渡殿中門廊等敷滿弘筵、中門廊東子午廊敷滿弘筵、臺上敷高麗端疊二行、關白座、無對座、爲上達部座、兼居饗赤木机、同東廂敷滿弘筵、其上敷紫端疊二行對座爲殿上人座、兼居饗黑木机隨身所立廻屏風、敷高麗紫端等、爲衆僧集會所、南庭當南階、輪懸南方立六間幄一字、東西妻爲樂所、奥端二行敷紫、當幄中央立大鼓、其左右立鉦鼓、其前立左右桙、以舍利古二雙插大鼓右傳緒、狛桙竿十支、倚樂屋東方三間幄右方一字、東西妻其內立案、取積御誦經物、中門東砌及殿上并屏車宿前等引幔、文柄居、當中門闕幔門、

東關白、楓下襲、螺鈿劍、左大臣、櫻下重、蒔繪螺鈿劍、右大臣、蒔繪大刀花山大納言、長雅、蒔繪大刀右大將、通基、平胡籙、螺鈿劍、紫緂平緒、土御門源大納言、通頼、螺鈿劍、大炊御門大納言、信嗣、蒔繪大刀、春宮大夫、實兼、螺鈿大刀、左大將、兼忠、平胡籙、螺鈿劍、紫緂平緒、權大納言、久守、螺鈿劍、三條中納言、實重、蒔繪螺鈿劍、花山院中納言、家教、蒔繪劍、左衞門督、公衡、平胡籙、螺鈿大刀、紫緂平緒、二條三位中將、兼基、蒔繪劍、壺胡籙、西四條前大納言、隆行、柳下重、大炊御門中納言、冬輔、蒔繪劍、予、吉田中納言、無文帶藤宰相、先是衆僧左方威儀師前行、呪願道耀僧正、讀師唄散花匿名僧十口、右方威儀師前行、講師憲實法師、三禮唄散花、二行引列入中門、經舞臺左右昇南階、入當間分著左右、散花行道儀、衆僧降南階、講師留座、廻舞臺著堂中座、次左右奏樂、左萬歳樂、賀殿、陵王、右地久、延喜樂、納蘇利、舞畢、右大臣於透渡殿、召舞人近康、左一仰一級事、次召右一久資、次樂人一多政秋、各二拜退出、次頭中將公朝朝臣仰度者、帶平胡籙、大刀取畢仰之、賜祿退出、二拜歟、次說法畢、人々於中門廊取布施畢、次撤堂莊嚴具、此間入夜、予大宮院御方御膳、可候陪膳之由有催、仍於中門指笏、取打敷入寢殿東第一間、就母屋

簾中進入、後拔笏退出、東二條院、左衛門督爲陪膳、自西供之、准后、四條宰相勤之、此後退出、　三月一日甲戌、始參北山、直衣（白衣白單指貫）網代車、指綱持一人下、給帶劍頃而兩院渡御南殿、御共公卿可詩記、午刻出御南殿、關白候御簾、先主上、次院、次新院、已上猶關白被候御簾、御隨身等、新院布衣冠負野矢、候東砌下、不追前、一院布衣候西、次春宮自東公卿座出御、大夫花山大納言候御供、關白著簀子、召信輔朝臣召諸卿、左大臣、右大臣、内大臣、兵部卿、花山大納言、右大將（有綾出衣、卷緌老懸持笏）、大炊御門大納言、春宮大夫、左大將（不出衣、貝蛮）已上直衣、左衛門督（束帶平胡簶）此外前藤大納言、四條宰相（直衣）三條宰相中將（直衣蛮）右兵衛督（直衣蛮）洞院三位中將（直衣蛮、紅打衣）、大炊御門三位中將（依無下不著）西、右大臣、儀同三司、前藤中納言（衣冠）予、三條中納言（已上直衣）侍從宰相（束帶）著座、先供主上御膳、陪膳花山大納言、院、大炊御門大納言、新院、春宮大夫、春宮、三條宰相中將等也、賜衝重於諸卿之由、雖被載、次第無此儀、次通御遊具、頭大藏卿忠世、持參御笛筥、關白取出他物、殘御笛（柯亭）持參主上令取御笛給之後、關白取空筥返著座、入他物、次第取下、春宮御比巴、五位持參、大夫取之獻之、次糸竹合奏、呂、安名尊、鳥破、席田、鳥急、律、青柳萬歲樂、

所作

笛　主上（柯亭）　兵部卿　花山大納言

比巴　春宮（牧馬）　大夫（閑君）　權大納言

柏子　德大寺大納言

笙　土御門源大納言　左衛門督

琴　左大將　敎經朝臣

和琴　大炊御門大納言

箏篥　兼行朝臣

次撤御遊具、關白參進、給御笛如前、次藏人治部少輔兼仲置文臺、(以御硯蓋爲文臺)春宮大進顯家置圓座、儀同起座置序、次少將爲道朝臣(直衣帶弓箭)取副懷紙於笏參進置之、次右中辨信輔朝臣置殿上人懷紙、頭中將公敦朝臣、可取具之由雖示信輔、信輔貫首、不可混殿上人之由返答、此後公卿自下﨟次第置之、東座人於新院御前跪、西座人於一院御前跪、各依過御眼路也、左大臣膝行置和歌、春宮大夫登長押蹲居、兩三步進寄、非膝行置之、一兩退更起下長押、予三條中納言同之、花山院大納言中納言等登長押、步寄置之、或如懸膝於長押、如膝行進寄、面々作法不遑記、右大將(出衣色)帶劒取笏揖、取副笏參進、右兵衞督取女房懷紙(自二棟被出之)參進置之、春宮移御圓座、(厚圓座、五位殿上人敷之)次頭中將公敦朝臣(束帶平胡籙)參進著圓座、右大臣著座講序之間、兵部卿前藤中納言依召參進、序畢前中納言退、四條宰相於長押下□□讀師、前中納言依召參進、春宮御懷紙、不令動座給、御座遠之間、兵部卿取之、非傳取之儀云々、公敦朝臣自侍臣至春宮御詠講之、公敦退出、被撤臣下和歌、兵部卿賜上皇御製置文臺、召左衞門督被講之、(束帶)參進揖撤上皇御製、又講主上御製、畢左金吾退、(揖)公卿起座、但關白、左大臣、內大臣、兵部卿、西右大臣、儀同三司候座頭、大藏卿忠世朝臣取女房織物褂一重參進、蒙關白目退出、自餘公卿祿、侍臣取之、次有蹴鞠之興、可參其事人々、改裝束之間退出宿所、北殿南面立切立、(賀茂信平立之云々)中始主上春宮渡御北殿、不被渡劒璽、關白、右大臣、內大臣、堀川一品、左大將、祇候主上春宮御共、兩院本自御坐北殿之間、出御不及御簾役人、先露拂、三條宰相中將公實、四條宰相重經、(束帶)範藤、爲實、爲忠、爲雄、隆氏、次主上令著御沓給、花山中納言持參獻之、新院春宮、於閑所令著給、主上令立給、新院、春宮、關白、前藤大納言、右兵衞督、□將宗繼立之、先是藏人季邦、置御鞠付松枝、(於便所)上皇取御鞠令上給一足、其後右兵衞督上之、又無請取人、其後次第上之、事未終以前退出之間、不見此後事、

〔增鏡十老の浪〕今年(○弘安八年)北山の准后、九十にみち給へば、御賀の事、大宮院(○後嵯峨后姞子)おぼしいそぐ、

世の大事にて、天下かしましくひゞきあひたる、かくのゝしるは、安元の御賀に、青海波舞たりし隆房大納言の孫なめり鷲尾の大納言隆衡のむすめぞかし、大宮院東二條院（○後深草后公子）の御母なれば、兩院（○後深草、龜山、）の御祖母、おほき大臣（○藤原實氏）の北のかたにて、天の下みな此にほひならぬ人はなし、いさやむ事なかりける御事なり、（○中略）かくて御賀は二月卅日ごろなり、本院（○後深草）新院（○龜山）東二條院、遊義門院（いまだ宮と申○後宇多后姈子）みなかねてより北山にわたらせ給ふ、新陽明門院（○龜山后位子）も新院のひとつ御車にておはします、廿九日の夜、まづ行幸（○後宇多）あり、雅樂司樂を奏す、院司左衞門督公衡、事のよし申てのち中門によせらる、そののち春宮（○伏見）行啓、門よりおりさせ給ふ、傅のおとゞ二條、御車にまゐり給へり、その日になりぬれば、寢殿のひがしおもてのもや廂までとりはらひて、釋迦如來の繪像かけたてまつる、道場のかざり、眞の淨土の莊嚴もかくこそと、めでたくきよらをつくされたり、御經の筥二合、金泥の壽命經九十卷、法華經入らる、名香、柳の織物に藤をぬひたるにてつゝみて、御經のつくゑによせかく、御簾のうちに西の一間に、繧繝二帖からにしきのしとねしきて、内のうへの御座とす、おなじ御座の北に大文のかうらい一帖しきて春宮わたらせ給ふ、西の庇にこれも屏風をそへて、繧繝二帖にしきのしとねに准后ゐ給へり、おなじ庇に東二條院わたらせ給ふ、はる〴〵と纐纈の几帳のかたびらをいだして、いろ〴〵の袖口ども、御かた〴〵けぢめわかれておしいでたるほど、龍田姫も、かゝるにしきのいろは、いかでかはといみじうこのましげなり、ことなりぬるにや、兩院、御門、春宮、大宮院、東二條院、今出川院、春宮大夫などうちつゞき、誦經の鐘のひゞきも、耳おどろくばかり所せくきこゆ、衆僧集會の鐘うちて後、上達部御前の座に著、階より東に、關白、左大臣、内大臣、花山院大納言、（長雅）源大納言、（通頼）大炊御門大納言、（信嗣）右大將通基、春宮大夫、（實兼）左大將、（公守）三條中納言、（實重）花山院中納言、（家教）左衞門督公衡などさぶらひ給ふ、階より西に、四辻殿、大納言、（隆親）春宮權大夫、（具守）權中納言、（實冬）四條宰相

隆保、右衛門督爲世など祗候せられたり、○中略おはしますらんとおもほすまのとをりに、内のうへ、つねに御まじりたゞならず、御こゝろづかひして御目とゞめ給ふ、樂人舞人鳥向樂を奏す、けいろうをさきだてゝ、亂聲左右桙をふる、其後一越調の調子を吹て、樂人舞人、衆僧集會の時にむかひて安樂鹽をふく、衆僧左右にわかれてまゐる、階の間よりまゐりて座につく、講師法印憲實、讀師僧正守助、導師高座にのぼりぬれば、堂童子花籠をわかつ、枝とりの使公敦朝臣、つゑをとりぞけて舞を奏するほど、けしきばかり打そゝぎたる春の雨、青柳の絲に玉ぬくかと見えたり、一の舞久助といふもの、すこしねびて、いとよし〳〵しうおもゝちあしぶみかうさびておもしろし、萬歳樂、賀殿、陵王、右地久、延喜樂、納曾利、久忠二の物にて勅祿の手といふ事つかふまつる時、右のおとゞ、座をたちて賞仰らるれば、うけたまはりて拜したてまつるほどいと艷なり、久助まさ秋などいふものども、賞うけたまはりて、笛をもちながらおきふし拜するさまも、つきつぎしうゆゑありて見ゆ、

〔新拾遺和歌集賀七〕弘安八年三月、從一位貞子に九十の賀賜はせける時よみ侍ける、

爲道朝臣

かぞへしるよはひを君がためしにて千世の始の春にもあるかな

〔長壽院内府九十賀記〕勸修寺前内府入道、○尹豐號長壽院九十ニ成給、俊成卿以後、稱名院入道ハ七十賀、九條禪閤紹巴被催之、九十賀俊成其外無之、今度勸修寺大納言晴豐卿尹豐孫○可被賀之由内々催有之、總別源氏ナドニモ、花賀紅葉賀ナド題無之候トイヘドモ、今度稱名院七十賀之時、七十首有之、又俊成九十賀記、紹巴法橋爲重自筆所口則可書寫之由被申寫留畢、○中略今度九十賀、兼々飛鳥井前大納言○雅春出題、九十首御短冊、次第ニ可被進上之由取沙汰候處、次第以下御存分有之由候、十二月○天正二十年九日飛鳥井大納言、兼而者可著座之由候處、所勞故不參、中山大納言、日野前大納言、民

部卿法印〇前田玄以紹巴法橋、昌叱、予參、短冊硯蓋二ニモリ、則予一枚ツヽ取之、悉稱號書付、引合ニ包、翌日被閲之、稱名院七十賀之時、稱名院卷軸被詠之、今度亦内府入道可然之由各被申、始取之置列、内祝關白殿被遊、尤可宜之由被進上之畢、〇下略

〔兼見卿記〕天正二十年十二月廿日丙午、參龍山、〇近衛前久今度勸修寺前内府入道〇尹豐九十賀、大納言晴豐卿被相催、短冊一持參、出題飛鳥井大納言雅春卿、予持來短冊、閑庭橘二首詠之、詠草令持參得御意訖、

千代もふる庭も閑に明そめて花橘の色かほるなり

うへしより千代や經にけん橘の匂ひをさそふ庭の夕風

龍山へも一首被申入了　廿四日庚戌、明日勸修寺入道賀式日也、倅者三人修理進喜介、平左衛門、民部、遣之、予自最前不可出座之分也、亞相可然之由入魂也、然共公家多分出座也、是非共罷出可然之由、民部閑合切々申來之條、出座用意了、一樽廿三日遣之、三荷三種、鳥一、鯉二、昆布、五十巴　廿五日辛亥、自私宅著衣冠出京、先向休庵、彼亭仕合聞之、十三人被罷出也、阿野同道向勸亞相、出座悅喜也、尤仕合也、未刻初之、八條殿、一條殿、聖護院門主、同新宮、竹門主、奧之座敷、屛風ヲ立切ラレ列座也、次諸卿雲客、任位次著座、次民部卿法印〇前田玄以紹巴法橋、昌叱等著末座、次誰カレ、次御酒各盞也、土器次スイ物、最前盃ヲ以テ御酒、三反此二獻已後、各起復於休息、次奧之間ヲ取御屛風、攝家門主各御安座、次諸卿任位次列座、雲客同前、次六條有廣朝臣短冊ヲ硯之蓋ニノセテ御座次之廣間ニ置之、奧之サイヨリ疊二帖隔テ置之、次左少辨豐光短冊之前ニ進寄、短冊ヲ取テ片膝ヲ立テ讀上之、歌九十首、元頭、前内府入道軸、閑此外サグリ題也、仍次第不同、軸元頭、此外攝家、大臣、諸門跡、三反講之、公卿雲客一反、及數剋、次御製、讀師中山大納言親綱、發聲飛鳥井亞相、講師左少辨、七反ヒカウ、付物四辻大納言公遠、樂人地下著直垂、御製七反已後、軸元頭ヒカウ三反、已上三首計ヒカウ也、講頌之衆各講師之近邊候也、次起

座、又如元、屏風立切在一獻之義、七獻之祝義、湯漬七五三奔走、七獻已後亂酒、折臺物已下不知數也、及深更、予夜半之過、左少辨理申罷歸了、

〔鵞峯文集五十二文〕賀石處士(○石川丈山)九十算文

壽者人之所欲也、然不能養生、則不能得壽也、養生之理、無如寡欲斷色薄味也、欲也色也味也、人々皆不能節之、故古來至七八十者猶希、況於至九十乎、東溪處士石翁、出自武門、曾紆金革、而辭祿不仕、高尙其事、可謂寡欲也、自壯至老、遂不娶妻、鰥居獨樂、精氣健養、可謂斷色也、不入高門、不向輦路、簞瓢晏如、藜藿澹然、可謂薄味也、是以今年九十、視聽不迷、無耄荒之倦、可謂養生之術、不求而自得者也、若以武門之素、而不改其志、以至今日、則如孺子之少、而治國之策、亦可胥議乎、唐且遊說可出兵馬乎、張萬福之形可以圖描乎、又以今日之所處言之、則其隱而讀書者、轅固治詩乎、君平善易乎、伏生誦典謨乎、其弄翰墨者、虞世南行草乎、從容於泉石之間者、趙昌甫退藏乎、若與香山九老同會、則胡果可讓座首也、遊潞公之園、則杖屨可肩隨也、熟稽載籍、則古之人多壽矣、避市朝居山林者亦壽矣、所謂山靜如太古者是也、處士生於今、得古之壽、而卜居於山水之勝、動靜各任其意、可以樂、可以安、宜哉得其壽也、傳聞小野右府、爲七朝耄老、而熟故實、貴則貴、終身於簪組、五條三品、爲一世歌仙、而賜賀宴、榮則榮、變姿於緇徒、如處士則晚食當肉、安步當車、釣竿不換簪裾、則雖小右非可願也、花鳥爲友、風雲爲賓、詩以述志、未肯易其介、則三品亦非所羨也、且夫利刀傍枕、弓銃在側、則雖在山林、未忘士林之素者、可以見矣、余於處士、出處不同、心交殊睦、參商遙隔、遞箇不絕、故其履歷曾粗敍之、再遊幽棲、面見勝地、則其景境亦吟詠之、然脚不向西、既垂二十年、想像其境愈佳、其景益多、乃知境與人相應、而傑靈共得者也、本朝之俗、四十五十以上、設筵以賀之例也、況至九秩之高、豈可箝口哉、人言處士者、軀壽堅久之仙也、余唯言能養浩然之氣、嘗道腴、以無是餒而健强者也、猶祝精神不衰、及期頤而無恙、千歲不朽、萬壽無窮也、於是爲處士歌曰、爲此春酒、以介眉壽、時維暮春三月、桃花浪漲之日也、臨流以贈焉、壬子三月

百歳賀

〔執次詰所記〕光子內親王

享保八年正月十六日、九十御賀、

〔雅筵醉狂集雜〕百歳の賀しける人の、松と鶴との繪賛望みければ、

百になる人やもろ手に握るらん松とつるとの二千年をも

〔老人雜話序〕爰ニ我祖父倚松庵先生(○江村專齋)ハ永祿八年乙丑ニ生レ、寛文四年甲辰季夏下六日ニ沒ス、壽已ニ百歳ニ滿リ、其始加藤肥州(○清正)ニ仕ヘ、其後森作州ニ遊事ス、醫術ヲ以テ京師ニ居セリ、誠ニ奇代ノ長壽ナリトテ、後水尾上皇勅シテ御杖ヲ賜フトナリ、(其時ノ和歌、并ニ辭世ノ歌、子孫ニ傳フ、)

〔先哲叢談後編一〕江村專齋、(○中略)專齋好詠和歌、衆稱其說、(○中略)寛文四年甲辰齡甫一百歳、自詠和歌三首、其一曰、報望徒㑥珥、娜壓馬提鵜惠壽、狹武賀囉蔿、民撥愛頬美譽野、味智貳比嘉列手、(○中略)其藻播傳入叡覽、至七月勅許院參、賜鳩杖一、黃金一、後又有扇紙等之賜焉、夫草莽之士、有至尊顧問、若斯寵可謂儒林之榮也、

雜載

〔後草紙一〕一御賀歌作法

書和歌不獻、唯一座之人、取盃曰ヅカラ詠之次人指、次人受盃、又詠歌次人差、次第如此展轉云々、凡昔歌宴如此歟、

〔下學集下器財〕鳩杖(老人杖頭刻鳩形、取其不噎之義也、鳩不噎之鳥也、)

〔年賀之式〕一鳩之杖之事、頭ニ鳩ヲ置、杖ハイカヤウニモ物好有ベシ、鳩ハ老ヲ養フト云、五八ノ賀ニハ杖ニ及バズ、

〔壽算名目抄〕拾芥抄曰、八十九十曰鳩杖云々、又續漢書ニハ、七十歳ヲ鳩杖トイヘリ、

〔後漢書五禮儀〕仲秋之月、縣道皆案戶比民、年始七十者授之以玉杖、餔之糜粥、八十九十禮有加、賜玉杖長尺、端以鳩鳥爲飾、鳩者不噎之鳥也、欲老人不噎、

〔溫故要略四〕鳩杖之中國造始ル事　古鈔引古今原始云、漢高祖與楚項羽戰敗時、隱井中、鳩鳴其上、逐者以爲無人去、高祖造鳩杖不忘、又和朝有此例、賴朝隱臥木中、鳩飛出、故免、（盛衰記第廿一卷）下學集下云、鳩不噎之鳥、老人取之、書言故事第一云、鳩不噎之鳥、欲老人不噎也、（大全第二亦故事掌珍七等往檢、鳩來爲前相、事實亦多、神功皇后討三韓時、鳩來、亦木曾義仲之拜神祠之時、鳩出喜之、盛衰記載之、）因云、凡杖頭作氣形事、造地藏十王經第一王下云、三尺杖頭、亦出感應錄下、造地藏杖之利益、又大唐杖頭作猿持之、出宋僧傳第十八、私云、老人用鳩杖、其所以多端如左、

〔年中行事歌合〕四十五番　右　御賀

つもりける君がよはひのさかさまに年月ゆかむ鳩の杖なり

右は御賀の意、鳩の杖撰集中に多くよみならはし侍る事なれば、委く註申に及ばず、

〔先哲叢談一〕林戇、一名信篤、字直民、號鳳岡、○中略子孫爲設壽筵、四方致幣稱壽、其饋陳滿座、而鳳岡不喜、人曰、翁之厚福、方今無比、以今日盛筵知之、然翁不喜何邪、鳳岡曰、若不知乎、壽筵瀕死之一關也、

〔閑田耕筆二〕近來年賀又追福の勸進を無緣の人にも乞こと流行す、心得がたき事なり、凡賀も悼も相識のうへ、千世も生延よとも、身まかるをばまことに悲しともおもへば、其意をよむなり、所謂秦人越人の肥脊を見るごとく、まだ志らぬ人には、情かつてうごかず、さるをよむ人はいつはりをいふなり、こふ人はおのが賀は何百首に及べり、高名の人々には誰々などほこるの料とす、甚うしては長崎に緣をもとめ、異國人の詩をさへもとむるに至るは笑ふべし、唐人旅館の徒然に、何の趣味もなく、よくもあらぬ詩をおこせたるが何の榮ぞや、近來尾張の士橫井也有といふ人、六旬の賀を勸れども、せぬよしの文章に、妻子こそ悅もすべけれ、他人にあづかることかはとかけるこそ、けだかく倣ふべき志なれ、

〔先哲叢談後編六〕淸田儋叟、○中略儋叟不好爲人作壽詩、或人爲其親請壽賀詩於當時諸名家、以多得

之而爲歟、來亦請之、僦叟曰、子弟能賀矣、爲人子者、壽其親矣、須多言、

〔理齋隨筆 二〕ある人年賀を祝しけるに、壽の字餅、數四十九あまりければ、四十九の餅の唱へを忌て、不興なりしをある人祝して、

七つゞ、七福神に配らばやかずは四十九あらう賀のもちと申たりしと、いづれもよき祝しやうなり、

附尙齒會

名稱

尙齒會ハ高齡ヲ尊尙スル謂ニテ、高壽ノ人ヲ會集シテ、詩ヲ賦シ、歌ヲ詠ジ、音樂歌舞ノ遊宴ヲナス、其儀唐ノ白居易ノ九老會中、殊ニ高年者七人ヲ本座トシテ、尙齒會ヲ作シヽ例ニヨリ、此方亦高年者七人ヲ選テ七叟ト爲シ、其他ハ垣下ト稱シテ、相伴人ト爲ス、

尙齒會例

本邦ノ尙齒會ハ、陽成天皇ノ元慶元年、南淵年名ガ其山莊ニ於テ行ヒシヲ以テ始トス、其後、冷泉天皇ノ安和二年、藤原在衡ガ粟田山莊ニ於ル、崇德天皇ノ天承元年、藤原宗忠ガ白河山莊ニ於ル尙齒會ノ如キハ、並ニ白居易ノ例ニ依リテ、詩賦ノ遊宴ナリキ、然ルニ高倉天皇ノ承安二年、藤原清輔、白川ノ寶莊嚴院ニ於テ、始テ和歌ノ尙齒會ヲ行ヒ、次テ養和二年、賀茂重保亦之ヲ襲ヒ、爾後詩賦ト詠歌トノ二樣ニ分レテ行ハル、德川氏ノ頃トナリテハ、年賀ノ筵ニ於テ兼テ尙齒會ヲ爲シ、又連歌俳句ヲ交ヘテ之ヲ行フモノアリキ、

〔名目抄 諸公事言說〕尙齒會(シヤウシクワイ)七叟作文也(スル)

〔皇年代略記 陽成〕首書 元慶元年三月、大納言南淵年名、設尙齒會宴、

〔濫觴抄 下〕尙齒會　陽成二年丁酉(貞觀十九)三月、大納言正三位南淵年名設之、同四月九日庚辰卒、年

〔白氏長慶集 三十七〕胡吉鄭劉盧張等六賢、皆多年壽、予亦次焉、偶於弊居合成尙齒之會、七老相顧、既醉甚歡、靜而思之、此會稀有、因成七言六韻以記之、傳好事者、

七人五百七十歲、拖紫紆朱垂白鬚、〈○中略〉除却三山五天竺、人間此會更應無、前懷州司馬安定胡杲年八十九、〈○中略〉刑部尙書致仕、太原白居易年七十四、

已上七人、合五百七十歲、會昌五年三月二十一日、於白家履道宅同宴、宴罷賦詩、

〔本朝文粹〈九詩序〉〕暮春南亞相〈○南淵年名〉山莊尙齒會詩　菅相公〈○是善〉

大唐會昌五年、刑部尙書白樂天、於履道坊閑宅、招盧胡六叟宴集、名爲七叟尙齒會、唐家愛憐此會希有、圖寫障子、不離座右、有人傳送呈我聖朝、卽得此障遍覽諸相、朱紫接袖、鬢眉皓白、或歌或舞、慠然自得、誰謂圖畫昭昭在眼、愛南相公、感歎顧告云、吾黨五六人、年齒雖衰邁、頗覺吟詩、未難酣樂、尙齒高會、何必盧白、請集山宅、續彼舊蹤、山泉足以感閑遊、琴酒可以寬老志、言畢相期、暮春之時、花未落盡、月宜及晚、漸驅下澤、詠歌將歸、此卽生前樂事、足傳子孫、是善官號同白氏、年齒校盧公、忝侍南氏之席、慙動北山之移、聊述六韻、貽之千載云爾、

〔菅家文草〈二〉〕暮春見南亞相山莊尙齒會〈南淵年名〉

逮從幽莊尙齒筵、宛如洞裏遇群仙、風光惜得靑陽月、遊宴追尋白樂天、占靜不依無影樹、避喧猶愛有聲泉、三分淺酌花香酒、一曲偸聞葛調絃、攜杖將供扶醉出、留車且待下山旋、每看吾老誰勝淚、此會當爲僞少年、〈○閑相公、(是善)在七人中、故云、〉

〔日本紀略〈五冷泉〉〕安和二年三月十三日庚寅、大納言在衡卿、於粟田山莊有尙齒會、七叟各脫朝衣著直衣擔貫、希代之勝事也、〈○又見百鍊抄〉

〔本朝文粹〈九詩序〉〕暮春藤亞相〈○在衡〉山莊尙齒會詩　菅三品〈○文時〉

尙齒之會、時義遠哉、源起唐室會昌白氏水石之居、塵及皇朝貞觀南相山林之窟、傳來數百萬里、絕後九十三年、藤亞相者、儒雅宗匠、國家耆德、憶舊遊於七叟、訪芳躅於二方、大相國尊閣、聞之嘉歎矣、乃見贈倭漢兩會寫眞畫障各一張、容鬢皆顯於後素、詞句足知其中丹、亞相悅之、顯示云、吾黨數人、生涯日

暮、其寬老忘須慣古賢、東山別業、有水有花、水可與人心斟而不竭、花欲與我道久而彌芳、暮春三月、煙景最好、風舞詠歌、不亦美乎、於是雲開分入澗戸、鳥迎分昇林堂、座以鬢髮而居、情因詩酒而暢、及至山漏既盡、歌舞興酣、猶且傍水移榻、蔭花銜盃、傲然怡然忘吾生、復將幾時耳、當斯時也、君子大夫之心、在敬老者、倩見其逍遙動履之拔俗、僉以爲王尚書之蓮府、麗則麗矣、恨唯有紅顏之賓、嵇中散之竹林、幽則幽矣、嫌殆非耆論之士、未若此會首上皆霜、膽中共露、進談王道於樵路、退混風情於雲心、一觴一詠、養性其閒焉、文時少於樂天三年、猶已衰之齡也、遊於勝地一日、非是老之幸哉、重之以敘事、誰敢謂當仁、慙無外孫之詞、猥從曾祖之蹤、各賦六韻、兼應實錄云爾、

〔粟田左府尚齒會詩〕暮春見藤亞相○在衡山莊尚齒會詩　學生賀茂保胤

此居幽趣是林泉、七叟交遊繼古賢、天惜多才延壽命、地容佳會供風煙、舞教野鶴呼相代、歌被流鶯助又傳、四皓添群爲酒叟、八公減數作詩仙、畫工定得圖花障、伶客兼應播管絃、移自白家今到此、少季初過第三年、此會始自唐家、傳於吾朝、總三箇度、故獻此句、

〔本朝無題詩一〕暮春見嚴閤亞相○在衡山莊尚齒會詩　藤原宗光

賓主連襟遊放辰、只徵結外許交親、漸臨暮齒頭爲雪、閑憶餘年後幾春、垣下競來風骨客、七老之後、會過之者謂之垣下、故云、花前會飲燕毛人、斯筵今古相逢少、引步慇懃容老身、

〔百練抄六崇德〕天承元年三月廿日、權大納言宗忠卿於白河山莊行尚齒會、

〔長秋記〕天承元年三月廿二日己未、中宮大夫○藤原宗忠尚齒會也、日來有招引、然而猶與間、不申一定可參之由、其故堀川中納言命云、予○源師時有招引、然而不入七叟內、實光時登、共與予同年也、彼入七叟、似有行段、是一障也、又拗先例、七叟外、非子族門生之人會由不詳、是二障也、仍不可向也、付此語廻案故也、倩案希代事也、又不可及傍難歟、仍當日綴蕪詞請書、申斜行向、著直衣、白河上座信口法橋岡崎房也、入自門之間、頭中將宗能、右少辨宗成、出向迎謁、南庭地上、敷讚岐圓座七枚、東上南面、大納言家令

被坐、而次被示云、兼日可會之由被約束、人々變改、一人無來事、年來本意、一日面目也、今日議略中略也、一事無存先例、自關白家可賜尙齒會軟障幷鵝衣之由有兼約、然而其事已後也、且是彼殿中不諧之所致也、自幼少若餘七旬、可企此會之由所令存也、而適有天運餘七十、仍不顧萬事、如形有遂事也、七叟中、先金吾基俊有病不會、只送詩、雖遺恨不可闕、如願、此後七叟著庭座、皆著衣冠、大納言直衣、以下傅士從五位上三善爲康年八十二前左衛門佐從五位上藤原基俊七十二不會、儲座、前日向守從五位下清原廣俊七十正二位行權大納言兼中宮大夫藤宗忠七十廣俊同歳也、然而依爲月先爲上、正四位下式部大輔藤敦光六十九正四位下行右少辨藤實光六十二從四位下式部少輔菅原時登六十二無盃酌事、只朗詠及數度、少於樂天三年口也、此後昇堂上講詩、七叟詩、序者時登、講師廣俊、講師實光朝臣、依年齒次第講之、次垣下詩、七言四韻講師篤昌、讀師行盛、博士文章生倚時、好文士十五人也、講了退出子族送、前例垣下詩六韻也、而今度可作四韻之由有主人命、不知其故、後左衛門督、押大納言本韻、

土御門大臣殿、欲此會時、尙齒會軟障障子七脚、有臺、硯七、鵝衣一領所儲也、然而其年二月薨給了不遂事云々、故殿御語也、

〔續世繼六唐人の遊〕右のおとゞ○藤原宗忠は、中御門のおとゞとて、○中略才學おはして、尙齒會とて、としおいたる、時の詩つくりのなゝたりあつまりて、ふみつくることおこなひ給き、からくにゝは、白樂天ぞ序かきたまひて、おこなひ給ひけり、このくにゝは、これくはへてみたびになりにけり、からくにゝは、ふたゝびまでまさりたることにきこえ侍りしに、ちかくわたりたるから人の、またのちにおこなひたる、○宋文彥博司馬光等ノ九老會ヲ云フもてわたりたりけるとぞきゝ侍し、としのおいたるを上らふにて、にはにゐならびて、詩つくりなどあそぶ事にぞはべるなる、このたびは諸陵頭爲康といふおきな一座にて、そのつぎにこのおとゞ大納言とておはしけん、いとやさしく侍りし、藏人頭よりはじめて殿上人垣下して、から人のあそびのごとく、このよのことゝもみえざりけり、

〔古今著聞集 文學 四〕尚齒會は、唐の會昌五年三月廿三日、白樂天履道坊にしてはじめておこなひ給ひける、我朝には貞觀十九年三月十八日、大納言年名卿、小野山莊にしてはじめておこなはれけり、又安和二年三月十三日、大納言在衡卿、粟田口の山莊にておこなはれける、其後天承元年三月廿二日、大納言宗忠卿、白河山莊にて被行けり、七叟、算三善爲康、年八十三 前左衛門佐基俊、七十六 前の日向守中原廣俊、七十 亭主、七十 式部大輔藤原敦光朝臣、六十九 右大辨實光、六十三 式部少輔菅原時登、六十二 此中に基俊は、病によりて詩ばかりを贈りけり、時登序をば書たりけり、垣下に中納言師時以下侍りけり、詩披講以前に朗詠、少於樂天三年の句をとなへて四五反におよぶ、右大辨式部大輔ぞ詠ける、又岸風論力之句、蓬鬢商山之句、醉對花の句等、再三詠じてすでに幽興に入けり、昔は此座にして盃杓有て、或は詩をつくり、或は管絃を命じて、心に任せて遊戲しける、今ぞかやうの事も絕え侍ぬる、口をしきかな、

〔百練抄 八 高倉〕承安二年三月十九日、於寶莊嚴院、有和歌尚齒會、散位敦頼以下爲七叟、清輔朝臣結講也、

〔愚昧記〕承安二年三月十九日、今日清輔朝臣、行尚齒會云々、於寶莊嚴院有此事云々、遙尋大唐大原之蹤、更酌小野小町之流云々、其七叟者、散位敦頼、年齒八十三 神祇伯顯廣王、七十八 祝部成仲、日吉社司、七十四 式部大輔永範卿、七十一 右京權大夫頼政、六十九 清輔、江維光朝臣、各衣冠云々、但清輔朝臣布袴云々、大貳重家卿取裾云々、公卿取侍臣之裾、希代例歟、又季經朝臣取沓云々、雖舍弟位階上臈、是又希有歟、於永範卿著直衣、抑敦頼衣冠、薄色指貫、出櫻衣、唐綾 携鳩杖、著烏皮云々、依霜鬢之次、坐月卿之上、則貽一身之榮耀、備萬人之壯觀云々、

〔清輔朝臣尚齒會記〕承安二年三月十九日於寶莊嚴院行之

前大長秋內給事藤原清輔 六十九

あはれすべらぎの君の御政事を、萬の民もうけ安き二とせの春、野邊の草、いやおひの月、はやしの鶯、かへりなんとする頃ほひ、百瀬川に近づきて、三つ輪くみ、やそ坂にかゝりて、腰ふたへなるどち相かたらひて、多く積れる年をあはれびて、高き齡をたうとぶ遊びは、唐土よりはじまりて、我國にも傳はれるをや、われら頭には雪の山を戴けど、心は消ぬものなりければ、はだへは凉のなしになりても、柿本の風を忘れがたみなり、いざや大原のあとを尋て、小町の詞にうつさんとならし、七の翁一つ所にともなひて、老が身の名もむつまじみ、白河のわたりにまうきたりて、水に臨み、花にたはぶるゝ、興にぞ有らし、清輔むかしは秋のみ山べの草の内にかすまへられて、おのづから色めかしき言の葉もいへりけん、今は日くれ道遠きなげきにそみて、春の心も忘れはてにしも、千年に一たびあへる事のよろこばしさに、萬代までのあざけりを殘しつるをなん、はぢおもひけるとぞかいふなり、〇中略

垣下和歌〇中略

承安二年くれの春中の九日の日、白川の邊にて、年頃の望み、よはひをたうとぶる會を行ふ、まづ午の時ばかりかしこにむかふ、たよりに隨ひて人々の座をしく、御堂の東向の南の弘廂に、北にそひて高麗はしの疊四帖をしきて、なゝの老人の座とす、南にそひてすこしひきさげて高麗はしの疊一帖、むらさきはしの疊三帖をしきて、垣下の人の座とす、公卿まさらする故に、高麗一帖を加へしけるなり、東を上なり、末にをれて紫はしの疊一帖をしきて、六位幷に僧の座とす、つゝしに膝つく、ひつじの始めに人々來りまさらす、とかくいふ程に、山のかひになく申の時になりぬれば、皇后宮亮座をたちて、菅のわらふだ七枚を東の座にしかす、さぶらひ人々とりて、南の簀の子じきのもとをへて、池の邊にいたりて次第にしく、東を上なり、次に七の翁一々にわらふだにつく、はじめに前馬寮助藤原敦頼年八十三たつみの、のぼりはしよりおる、判官代憲業むまご沓をと


白河尚齒會圖
敦頼
成仲
重家
季經
盛方
仲綱
政平


永範
清輔
維光
賴政
顯昭
尹範
允成
憲盛

る、式部大夫憲盛子息にたすけられたり、裝束は位のきぬに、青鈍の指貫、櫻の衣をいだし、くりかはの小沓をはけり、鳩の杖にすがれるすがた、桑を採る翁に異ならず、今日の盛りなる見ものなり、次にかみづかさのかみ顯廣王、年七十八相從へる侍のをのこ沓をとる、次に前の石見介祝部成仲宿禰、年七十四むまごのぬしまさ成沓をとる、皆位のきぬ、青鈍の指貫なり、次に宮内のかみ藤原卿、年七十一とのゐきぬにかぶり、青鈍の指貫なり、はかせがねまさのり賢息沓をとる、次に右京のごのかみ源頼政朝臣、年六十九束帶なり伊豆守仲綱賢息くつをとる、次に淸輔年六十九位のきぬ、青鈍の指貫に下襲を著たり、おひをさし笏をもたり、いさゝか見る所ある故なり、季經朝臣くつをとる、大貳卿、下襲の尻をとりて、はしのもとに至りておく、四位の下襲の尻を三位のとることと、むかしも聞かず、これ齡をたうとび、道を重くするあまりなり、見るもの目を驚かし、涙をのごふべし、次に前式部少輔大江維光朝臣、年六十三位のきぬ、青鈍の指貫なり、座定まりて見れば、池の水、千年の色をたゝへ、岩の苔、萬代をへたるけしきなり、梢の花はおちつきにけれど、庭のおもには春なほ殘れりと見ゆ、こばかりありて淸輔誦すらく、

　かぞふればとまらぬものを年といひて今年はいたく老ぞしにける

又誦

　老ぬとてなどか我身をせめきけんおいずは今日にあはましものか

宮内のかみ、又敎賴のぬし聲をたすく、たび〳〵の後敎賴のぬし誦して、

　おし照や難波のみつにやく鹽のからくも我は老にけるかな

又宮内のかみ誦

　鏡山いざ立よりて見てゆかん年へぬる身は老やしぬると

又淸輔誦す

老らくの來むと知りせば門さしてなしと答てあはざらましを

いづれも人々相ともに誦す、見るもの道俗高きいやしき、山上木下ことに群れたちむれ居て、目しばらくもすてず、又或は車をたてゝ見る女あり、或は堂の内に入てのぞく人もかずあり、過にし方も聞かず、末の世には、はた有がたき見ものなり、かゝるなべに、齡くれたる遊びにかなひて、永き日もくだりゆけばおの〳〵元の座にかへりのぼる、たすけもつ人々先の如し、次に講師のわらふだを宮内のかみの前におかす、又文臺蒔繪宮臺硯をおく、かの前にむかへたり、侍る是を宮内のかみ、わがかたにむかへる、便りなき由をいひて、座の上の方へおしやる、次に和歌をおく、席につきて清輔まづおく、南の簀の子じきを經て、文臺の邊りによりて、膝まづきて歌をおきて、元の座にかへりぬ、式部少輔維光朝臣おなじくおく、次々の人は間近ければ、便りに從ひつゝよりておける、齡の次第におくべし、人々相はからひて、成仲を講師とし、神つかさのかみを讀師と定むるを、かたういなびしなれば、右京の權の大夫賴政朝臣に讓る、次第に歌をよみあぐ、人々一つ聲に誦す、日もくれ竹のをりふしからにや、皆すみて聞ゆ、次に垣下の歌をおく、其人々大貳卿直衣皇后宮亮季經朝臣、前民部少輔盛方朝臣衣冠伊豆守仲綱、片岡禰宜政平、式部大夫憲盛、散位允成、給料學生尹範、衣冠僧顯昭等なり、おほくは扶持の人々なり、講師伊豆守仲綱、讀師皇后宮亮季經朝臣、垣の下の人にもへだて有まじとて、肩を並べ膝をかはして歌を詠ず、これも難波津のことばなればにや、あしくも聞えず、くらき時に及ばねば、くれなゐの燈火をかゝぐることなくて、歌の講はてぬれば、人々もちる花のにしきの茵たゝまくをしく、かたわれ月の草の席あかでまきつる事を、手をたづさへ袖をとりて、ゆきわかれがてにおもひけらし、○又見古今著聞集

〔古今著聞集五和歌〕養和貳年春、賀茂神主重保、又尚齒會行たりけり、七叟成仲宿禰八十四、勝命法師七十、一俊惠法師七十、片岡禰宜家能六十五、祐盛法師六十五、重保六十四、敦仲六十二、勝命法師、假名序書たりけり、

此たびはこと成事なかりけるにや、抑七叟の中に、僧まじはりたること、おぼつかなし、

〔風のしがらみ〕中院内府、通茂公 寶永四年十二月十一日に、七十七歲のとき、尙齒會を催し賜ふとき、

世にはまたあらじといひしむしろにもけふのまとゐは年ぞかずそふ

尙齒會七人

僧一峯 妙心寺派九十五歲　　伊藤宗恕 八十五歲松平兵部少輔内

小畠了達 猿樂大夫八十三歲　　坂口立益 八十二歲青山播磨守内

堯意 大佛玄雲院前大僧正七十九歲　　内府七十七歲

難波内藏權頭 一條殿諸大夫七十七歲

〔渡邊幸庵對話〕寶永五年子十二月、一位樣御取立の出家、空無の庵にて尙齒會あり、所は谷中感應寺の隣也、日光御門跡の御取立とあれ共、實は將軍よりとの沙汰也、其作法當時御門主の御力にては不ㇾ及儀式也、其樣子を荒增いはゞ、先上座は我也、則予が筆、

長生殿裏春秋富

不老門前日月遲

右御會の前、同筆跡の事申來る故、此句を予が了簡にて調遣申候、其期に至り、急に上座之者書事、古實か不ㇾ知、此筆跡を一夜に水表具にて、一文字計金入の切也、此懸物を其間の床に懸け、花二瓶、中に香爐卓、雙方に燭臺、其前に菓子食物類、品々三十三膳の飾也、又會の人數七人分、一束一本を前に並置、各謝禮有、我が一束一本は、あなたより調出され、予は左樣の事不ㇾ存、總て押立たる尙齒の會、此度ともに日本に三度とかやいへり、左もあるか不ㇾ知、連衆の年數に限り、有ㇾ餘りは不ㇾ宜、不ㇾ足はならぬ事といへり、年齡共詩か歌かに達し、其うへ手跡も入なり、今の作を自分に書く故、世にむく犬の如くに、年計り寄りたるとてはならず、是を撰ゆへに古今稀にある事といふか、殊に

儀式饗應等の雜用も、舊冬より三千兩計入といへり、然ば旁末々にては難成會なり、舊冬の連衆も、予に續て百七に成と申、南禪寺の出家也、去共予と違ひ、眼力うとく、耳は曾て聞え不申候、予には劣り申候、此出家に差續て又二人、是は俗人の由、此外は百歲よりはるか內也、何も七人の休息所、面々一軒に臺司を飾り、馳走人に付らるゝ者有之、儀式之間休息所等、過半新規に出來の體也、人々饗應は、七五三の高盛に悉く美を盡し、給仕したるは京極內記殿也、是は見知りたるなり、其座之式、樣々の事あり、永き事故、又追て可語と被申候、右尙齒の會以後、掛物は入上覽と云り、其後又日光樣より、予に壽の一字を被仰付書上、後に聞ば禁裏樣へ上り、御寶藏に納るとなり、沙汰なし沙汰なし、

〔嬉遊笑覽五宴會〕近ごろ長壽の聞えたる者は、渡邊幸庵なり、此人寶永五年十二月、谷中感應寺の隣なる草庵にて尙齒會をなす、其時幸庵百二十七歲にて上座したり、長生殿裏、不老門前の二句を書て壁上に懸、卽幸庵が筆なり、此人仕官の時さま〴〵功あり、仕を辭して後、便船に隨ひ西土に渡り、天竺阿蘭陀までも經めぐり、四十餘年殊域に在て、歸鄕したる時九十九歲、また諸州を徘徊すること十年にして、武州大塚に居れり、天正十年壬午、駿河國に出生し、寶永八年辛酉百三十歲にて沒す、幸庵物語を記せる物あり、

〔翁草三十八〕正德五年未三月、江戶にて、生島幽軒八十の賀に、老人七人集會あり、

榊原越中守家來　初名金五郎　志賀瑞翁　百六十七歲
醫師　小林勘齋　百卅六歲
松平肥後守內　左治宗見　百七歲
御旗本　初名權左衞門　石寺宗壽　九十七歲
醫師　谷口一雲　九十三歲

御旗本　下條長兵衛九十三歳

浪人　岡本半之丞八十三歳

御旗本　初名山田市之丞亭主生島幽軒八十一歳

此瑞翁は、百八十歳の頃迄存命なる由、享保の中頃、江府殿中の御沙汰書にも見えたり、正德五年に百六十七歳とあれば、後奈良院御宇、武將は光源院殿義輝公、天文十八己酉年の生れなるべし、寔に希世の老翁なり、

〔翁草三十八〕享保八癸卯年三月朔日、靈元法皇の御所より、高壽の人を召され、尙齒會に准られ御料理を被下、

御姉宮　普明院宮御年九十

醍醐水本　釋迦院大僧正有雅九十

西洞院大納言時成七十九

藤波正二位景忠七十七

仙洞之女房　大進八十二

醫官　法印浦野道英七十八

針師　法眼岸本壽賢百廿歳

上北面　松室仲觀八十二

同　松室洞然七十九

樂人　窪甲斐守八十七

針師　高谷玉泉七十六

此時岸本壽賢、卽席の詩あり、

恭賦㆓御苑松㆒奉㆑祝㆓聖壽㆒　法眼　岸本惟明

御苑青松尾上遷、靈苗獻日遠差肩、凌雲蒼色同㆓皇壽㆒、相共千年又萬年、

右獻㆑之、西洞院家藤波家幷釋迦院僧正へは、松の墨繪に富士綿を添被㆑下、地下の輩へは、同繪に白銀一枚宛添被㆑下㆑之、夫より壽賢は、式禮の日は、公武の御禮を勤め、鳩杖にすがりて、其體勞倦に見えたりき、

〔享保日記〕享保八年卯五月廿七日、當三月二十日、院御所〈○靈元〉有卦御祝義有㆑之、被㆑召輩、西洞院前大納言、〈七十九歳〉藤波三位、〈七十八歳〉釋迦院前大僧正、〈九十歳〉樂人窪甲斐守、〈八十七歳〉上北面松室洞然、〈七十九歳〉上北面同仲觀、〈八十二歳〉裏野道英、〈七十七歳〉法眼岸本壽賢、〈百廿歳〉按摩高谷玉泉、〈七十六歳〉右御料理被㆑下、御人堀池彌三郎、〈七十二歳〉御人數ニ被㆑召候、

〔武江年表　四〕享保十一年十一月十八日、大道寺友山翁尙齒會、〈志賀隨翁、其餘六人の翁會すると云、姓名未㆑詳、〉

〔視聽草　九集三〕武田長春院尙齒會

明和六己丑年、與御醫師武田長春院、仙臺河岸於㆓別莊㆒尙齒會有㆑之、

七拾四歳　柳生播磨守
七拾貳歳　青木文藏
七拾貳歳　戸田五助
七拾三歳　桂川甫筑
七拾三歳　望月三英
七拾四歳　寺町三智
七拾三歳　原　武大夫
七拾六歳　野村友松

七拾三歲　原雲庵
七拾七歲　梶原平藏兵衞
七拾八歲　今井玄周
七拾三歲、片山宗夢
七拾五歲　萬吉
九拾七歲　萬吉內喜太郞
七拾歲　武田長春院

以上拾五人

〔尾張名所圖繪前編二〕金剛山長榮寺

安永十年丑春三月九日、內藤閑水の催しにて、府下高齢の九老、此寺に集會して尙齒會をなし、各詩歌連俳を詠出す、其人々は、都筑高、字柔克、號千秋齋、俗稱道喜、一百四歲、詩賦清水成利、號集木軒、俗稱將作、九十三歲、和歌松平秀雲、字士龍、號君山、俗稱太郞右衞門、八十五歲、詩賦僧杲照、東昇寺前住、字逵仙、號幸山、八十四歲、和歌僧惠胤、當時隱居、字定保、號明星庵、八十三歲、詩賦小鹿存、字直興、號無孔笛、八十二歲、詩賦狂歌橫井箎明、字伯儀、號半掃庵、稱暮水、又也有、八十歲、和歌永田忠良、號烏集軒、俗稱古仙、八十歲、俳句僧覺融、天王坊前住、字安道、號白雲居、八十歲、和歌その外風雅人の書畫詩歌をのせ、尙齒會記一卷印行して流布す、

〔銀臺遺事中〕年老たる者を殊に憐み玉ふて、士にもあれ農商にもあれ、齡ひ九十に滿ちたるものは、其人の品に隨ひて、衣服金銀の賜あり、また百歲以上は、年毎に是を賜ふ、始は年の六月此事行はれけれども、夫まではまだ半年也、老木の風を待たぬ例しもあれば、命の內にこそとて、すべて正月十一日を定例となされたり、また一とせ關東にて、尙齒會とて、七十歲以上の人を招きて饗應あり、御內のものも、其齡たるは皆々召て酒給はる、三井孫兵衞親和とて、其頃高名の能書あり、これも七十餘歲なりけるに、壽の字を篆文にて書せて、夫を蒔畫にしたる盃を萬歲などゝ名付

て、各引手物として參らせられ、また賤きものには、金子に其日の鶏籠の料を添て賜ふ、扨また御内の其齡あるは、小君〇內大臣久我通兄女、細川重賢妻、の許に召て、同樣にもてなされたり、

御客

有馬備後守殿、七十九歲　柳生播磨守殿、八十二　津輕良策老、七十六　森宗乙老、七十二　戶田五助殿、七十九　水上楠右衛門殿、七十三　森宇兵衛殿、七十一　森雲碩老、七十一　寺町百庵、八十二　三井孫兵衛、七十八　高安是竹、七十三　馬場存、七十三　谷川梅川、七十九　家臣成瀨尉內、八十一　野坂源助、七十六　遠山瀨兵衛、七十二　奧田五郎助、七十二　桂助四郞、七十七　齋生文助、七十九　白井平次、七十九　吉野要助、七十二　林庄三郞、七十二

雜人七人　五郞兵衛、善四郞、中右衛門、平吉、富右衛門、願右衛門、中兵衛、

女拾九人

〔片玉集　三十六〕鶴老契齡　爲奉賀御出題尙齒會、寛政六年春三月、於二成島和鼎宅一得レ之、

朝なゆふな庭になれゐて友づるの老のよはひの千世よばふらん　〇本書每人二首、今錄二其一一、

岩村拾瑞　八十六歲

契おくちとせの後もいく萬世々をとおもふ老のともづる

中野正顯　八十四歲

老らくのよはひかさねて行末のちとせをちぎる鶴のけごろも

北尾加清　八十四歲

友鶴も七十あまりむつまじくちぎるよはひはいくよとかしる

石野遠江守廣通　七十七歲

いくちよをともにかさねん宿とひてきつゝなれたる鶴のけごろも

池上幸豐　七十七歲

高本康連 七十七歳

十かへりの松にちぎりていくちとせよはひかさねんつるの毛衣

成島和鼎 七十五歳

打むれて老の千とせもちぎるべき此ことのはの道の友づる

大橋道也 七十一歳

ちぎりつゝ惠の浪に立なれてことふきそへむ和歌の友づる

雅周 六十八歳

なれて住砌のつるはいくちよのをのがよはひを契おきけん

鈴木高朗 六十七歳

わかの浦や松もいくよの友づるの契つきせずあふぐことの葉

甲斐庄正方 六十二歳

千世よばふ老の友づるなれ〳〵てつきぬよはひを猶ちぎるらし

津村淙庵 五十九歳

打むれて聞ものどけし老らくの行末ちぎる友づるのこゑ

成島峯雄 五十五歳

ことのはの道の惠にちぎりおくよはひも春のわかのうらづる

成島司直

いくちとせつきぬ齢もかきつまむ契もとほき老の友づる

釋猶阿 七十三歳

ともに経んちよをちぎりて老も猶よはひかさぬる鶴のけごろも

萬代を鶴もともなへ契おく千とせの後は老にまかせて　釋良逢 七十一歲

喜多氏貞岸老 九十七歲

老の浪立かへりつゝわかの浦の田鶴のよはひをとほくちぎらん

水谷氏貞昌老 七十三歲

いくちよのおのがよはひも契おきてのどかにあそぶ老の友づる

新見大炊頭母 六十四歲

今よりのちとせをかねてちぎりつゝよはひかさねんつるのけごろも

成島和鼎女やす

かきつがむ老のよはひのいくちよも此ことのはにちぎる友鶴

〔視聽草 初集 一〕神戸老侯尙齒會

文化十三子年三月十八日、本多忠永入道隨翁、高輪の亭にして尙齒會あり、人名左の如し、

百三歲　加藤近江守家來 菊地貞翁

百歲　表御臺所人 田中權十郎

百歲　御材木藏同心組頭 石崎源八

九十六　御鷹匠同心 櫻井喜內

九十四　神保喜內家來 田中延壽齋

九十三　本多隨翁殿

九十二　田沼玄蕃頭、家來 龜山一古

九十二　御先筒杉木五郎左衛門組與力 市左衛門父隱居 矢野三無

九十一　　永井飛驒守家來　市川了和

〔中山尙齒會の記〕むかし白河のほとりにて、淸輔朝臣のものせられしにならひて、ことしこの中山のふもとの家に、尙齒會の宴をす、さるはおのれに、弟子の歌よむをくはへて、あやしう此里になゝたりの翁あればなりけり、抑このまとゐ、こゝにもからにも度々せしことなれど、大かたは、みやこわたりにて、みやび人おほければなり、鶯のなくにつけて春をしるといふ山人の中に、かかるはめづらしきことにこそ、さて此まとゐのありつるやうは、中村の子、くはしうかければただかくぞ、

天保六年の春　　松の屋老人〇藤井高尙

尙齒會の記

よはひを尊ぶといふまとゐは、ことさへぐから人の、そこのうたつくりなどしてものしそめつるを、三十もじあまり一もじのうたもてなせしは、淸輔朝臣のしら川のまとゐやはじめなりけん、うちびさすみやこわたりにては、をり〳〵ものする人ありぬべし、天ざかるひなにては、をさゝをさきゝわたらざりしを、天保六とせといふ年の正月十八日、眞がねふく吉備の道の中、中山のふもとにて、七たりの翁つどひたまへり、〇中略その七たりの人々は、眞野守貞八十、河本宜易七十六、高尙藤井宿禰七十二、有木居士白華七十七、藤井高俊六十九、藤井重政六十六、堀家常定六十五、このまとゐよ、もろこしの白氏、わが國の淸輔朝臣のあとをたづねて、かならずそのかずにものせんのこゝろならねど、おのづから七たりになん、おのれは六十にもまだみたざれど、師のしりへにしたがひて垣下に侍りぬ、このまとゐする家は、七たりの翁のうらなる高俊のきみのすみかにて、市の中なれど、門よりは遙に引いりて、そこらひろく建ならべられたれば、いとしづけし、ひと〳〵集ひたまひしは、巳の時ばかりにやあるらん、小床なるかけものをみれば、松蔭に鶴をゑがきたり、かゝる

まとゐには、いとつき〴〵し、西南の上座に、しら背の翼の、翁、さてつぎ〴〵に、ひとさとにてむつまじく行かひたまふひと〴〵なれど、ことさらにかくつどひたまふは、かたみにをかしとおぼさんかし、かくて三獻あり、そこん打鰒二こんとりの子三こんぞうに、この事はつれば、あるじたちて、俊成のきみの、きりの火桶によりそひて、歌おもひしたまふかたかきたるをとうで、、をゆかのかべにかけらる、このきみは、帝より九十の賀たまひたるほどのきみなれば、ふりはへてものしたまふ、あるじのこゝろしらひなるべし、よみたまふうたども文臺にそなへ、師、講じたまへり、からがくものするむしろをかたはらにまうけたり、こは大神につかへまつる宮人のあるが中に、そのかたのかしこきをえりいでられたればいはんかたなし、胡飲酒長慶子など耳ちかきごくはきゝしれど、ことごとはえしらず、守貞の翁、

圖ゐしてきくものどけし笛たけのあなおもしろのはるのしらべや、けふのまとゐは、おほかたのうき世の法にかゝづらふべくもあらねば、ざれたるかたのまじらむも、老をわする、よすがならめ、さのみうるはしうのみあらむやとて、ちかきわたりにて、いさうちとけたるいへにうつりたまふ、こゝにては、垣下の人々、からがくものせしも、ひとつにつどひゐてうちものがたらへり、かくするほどに、午のときもはるかに過にたれば、くさ〴〵のもの調じてあるじす、さるかたをなりはひとするいへなれば、いとこよなし、をかしげなる女のわらはども、瓶子かはらけもち出て、とり〴〵くみかはすほど、おとなもみたり四たり出來てすゝむるにぞ、みないたくゑひぬる、師ののたまへるやう、おのれもの、音をめづるあまり、若きとき、いまやうのことのごくならへり、かゝるふる人のつどひにとうでむは、なか〴〵につき〴〵しからむやなど、ざれてのたまふ、ひと〴〵耳とゞめて、こはめづらしかりぬべし、年頃ことゝりたまふいとま、とけがたき書どもときあきらめ、をしへ子をさへ數へみちびきたまへば、いつのひまにかものし給はん、いざ

とそ、のかせば、四季の友といへる組のごくを、ひとつひきたまへり、さればこそ、はやうもの、音のよしあし論ひたまひしもうべなり、明石の入道の、ゆの音ふかうひきすましけん、からめきたるこゑよりも、こよなかるべしなどつきじろひめくはす、いまひとつ、みつの絃ごとにあはせたまへとす、むるに、さらば六段のしらべ、けしきばかりものせんとのたまふ、さみせんの琴ひくわかき女どもつどひをれど、さし出ておのれひきはべらむとヽみにいらへするなし、居士白華のいざなひたまふ垣下の客人なる秋田秀信、か、るすぢにもたど〳〵しからず、とし老たればはぢずて、かの琴とり出て、いとよくしらべあはせたり、居士白華このおもしろさにえたへずや有けん、

かきならす琴の音きよし中やまの松ふくかぜもしらべあはせて、とうたひたまへり、かくてみつのを琴のかずそふまに〳〵、いまやうのごくさま〳〵舞いでつ、、その、えもくだいつべきたのしさなれど、や、夜もふけにたれば、ひと〳〵あかれてかへりたまへり、〇中略

この記作れる本意は、けふの圓居を、老の坂こえんしをりにして、あだし人々もいやつぎつぎにものせんの心なるを、垣下の人々、大かたは若き君たち、なれば、筆とることをかたみにゆづりあひて、おのれにといはるれど、さしすぎたらむやさしさに、とみにもうけひかぬを、あながちにそ、のかし玉へば、さのみはとてかひしるしつ、かくいふは松の屋にとし久しくきかよひてもの學ぶ、この中山に程近き二子といへる里のさと人、通都慈の屋のあるじ

中村寛、

〔傍廂後篇〕尙齒會

今年此月、嘉永四年十一月十日梅本爲山の催にて、老母の八十賀筵に尙齒會あり、七叟は飯田百十歲、廓翁九十四歲、蒼麻呂八十四歲、京山八十三歲、月窓七十七歲、武淸七十六歲、綾瀨七十四歲也、近き世に

はいとめづらし、昔寶永五年、谷中感應寺隣の空無庵にてありし尙齒會の高年は、渡邊幸庵、百廿七歳外六叟は詳ならず、正德五年、生島幽軒八十賀宴の尙齒會の七叟は、志賀隨翁、百六十七小森閑齋、百三十六古結宗見、百八石寺宗壽、九十七下條七兵衛、九十一谷口一雲、九十一岡本半之丞、八十三又享保十一年、大道寺友山翁尙齒會には、志賀隨翁は出席、外六叟は名詳ならず、又其頃長壽の人あまたありて、尙齒會なかりしは、志賀隨翁は先に歿まへられつれど、其外小出勘右衛門、百廿七伊東市右衛門、百十八石井勘右衛門、百三沼田伴藏、百一水野備中守殿、九十二柴田十右衛門、九十二下條七兵衛、九十二これを思へば、いにしへ承安の頃、藤原淸輔朝臣六十賀にありし尙齒會には、八十以上は敦賴只一人にて、源賴政卿七十以上、其外は多く七十以下なり、そは繪卷物に委しくあり、

古事類苑

禮式部十九

葬禮一

古事類苑

禮式部十九

葬禮一

葬ハ古言ニハフルト訓ズ、死屍ヲ放棄スル義ナリト云フ、我國上代ノ葬ハ、伊弉冉尊ヲ葬埋セシガ如キアリト雖モ其儀詳ナラズ、天稚彦ヲ葬ル時、持傾頭者、持帚者、舂女、哭女、造綿、宍人等ノ職ヲ設ケ、武烈天皇ノ朝、鮪臣ヲ葬ル時、死者ノ爲メニ、食ヲ携ヘテ柩ニ從ヒシガ如キハ纔ニ其一端ヲ見ルベシ、孝德天皇大化二年ノ詔、及ビ文武天皇ノ大寶令ニ、始テ貴賤ノ等ニ從ヒテ葬儀ヲ制定シ、喪官喪具賻物會喪、及ビ葬地等ノ諸法ヲ立ツ、皆唐制ニ準據セシナリ、蓋シ我國上代ノ葬儀ハ、甚鄭重ニシテ、其弊漸ク奢侈ニ流レシカバ、孝德天皇ノ大化二年、桓武天皇ノ延暦十一年、共ニ詔シテ厚葬ヲ戒メ、醍醐天皇ノ延喜式、亦之ヲ禁ジ、且ツ推古天皇以後ハ、歷朝多クハ遺詔シテ薄葬セシメ給ヘリ、後世ニ至リテモ、人多ク厚葬ヲ尙ビシカバ、德川氏及ビ其他ノ諸侯ニモ、屢之ヲ禁ジタリ、又上代ノ葬儀ニ殉死ノ事アリ、垂仁天皇ノ二十八年、詔シテ之ヲ止メ代フルニ土偶ヲ以テセシメ、孝德天皇ノ朝、亦之ヲ禁ゼラル、德川氏ノ時、將軍家康及ビ其子秀忠等、大ニ之ヲ憂ヘ、屢侍臣ヲ戒飭スルコトアリシガ、寛文三年ニ至リ、始テ海内ニ布告シテ、之ヲ嚴禁セリ、而シテ水戸會津等ノ諸藩ノ禁ハ、實ニ幕府禁令ノ前ニ在リ、

凡ソ我國ノ葬儀ニハ、神葬儒葬佛葬ノ別アリ、佛葬ハ、佛敎傳來以後、漸々ニ行ハレシモノニ

テ、持統天皇ノ登遐ノ時ニ、之ヲ荼毘シ奉リ、中陰ノ法事ヲ行ヒシニ至リテハ、既ニ大ニ行ハレシナルベシ、終ニハ天皇ヲ始メ奉リ、皇族搢紳ヨリ武家平人ニ至ルマデ、悉ク此式ニ頼ラザルハナク、殊ニ德川氏ノ時ハ、耶蘇教防遏ノ爲メ、僧侶ヲシテ衆庶ノ葬儀ヲ監督セシメ、何人モ宗門ニ頼ラザレバ、葬儀ヲ行フコトヲ得ザラシメタリ、然レドモ亦自ラ特例ナキニアラズ、神祇道ノ世襲タル白河吉田ノ兩家ニハ、代々神葬ヲ行ヒ、神職ニシテ吉田家ノ免許ヲ受クル時ハ、其戶主及ビ嫡子ニ限リテ神葬ヲ行フコトヲ得、其他伊勢神宮ノ神官等ニハ、古ヨリ早駈ノ式アリ、亦神葬ナリ、又神祇ノ家、神職以外ニモ神葬ヲ用キシモノアリ、將軍家康、會津藩祖等ノ如キ是ナリ、儒葬ニ在リテハ、幕府ノ儒臣林氏、土佐藩ノ老職野中氏等ヲ始メ、儒者ニシテ之ニ倣フモノ多ク、殊ニ水戶ノ如キハ、藩士自ラ之ヲ行ヒシノミナラズ、自葬ノ式ヲ制定シテ、封內ニ頒布シテ行ハシメタリ、並ニ幕府ノ特許シ又ハ默許セシ所ナリ、

抑神儒佛ノ三葬ハ、其式固ヨリ同カラズ、佛式ニ在リテハ、儀式ヲ擧ゲテ悉ク僧侶ニ託スルモノナレバ、導師以下ノ役僧、柩ニ從ヒテ寺院ニ至リ、讀經引導燒香禮拜等ノ式ヲ行ヒ、然ル後墓所ニ葬ルヲ常トスレドモ、神儒二式ニ在テハ、共ニ自葬ナレバ、喪主以下ノ人々、柩ヲ奉ジテ直ニ墓所ニ至リ、先ヅ其葬地ノ神ヲ祭リ、次ニ棺前ニテ祝詞ヲ讀ミ、香ヲ燒キ或ハ玉串ヲ獻ジテ拜禮ヲ行ヒ、死者ノ魂ヲバ神主ニ遷シテ家ニ歸シ、其魄ヲバ墓所ニ葬ルヲ例トス、然レドモ其葬儀ノ大體ニ於テハ、三者共ニ大差アルニアラズ、殊ニ神儒二式ノ如キハ、何レモ儀禮或ハ文公家禮等ヲ折衷摸倣セルモノニテ、其儀殆ド異ナルコトナシ、故ニ此編ニ於テハ、佛葬ト神葬ト儒葬トヲ分タズ、總テ葬儀ニ關スル事項ハ、初終以下、各、其順序ニ由リ、悉ク通載ノ例トス、

人ノ初テ死スルヤ、先ヅ其身ニ淨衣ヲ掩ヒ、北首ニ臥サシメ、圍ムニ屛風ヲ以テシ、枕頭ニ燈

ヲ點ジ、近親侍坐ス、其後沐浴入棺ノ儀アリ、近親又ハ僧侶之ヲ行フ、新衣ヲ製シテ之ヲ著セシメ、冠履佩刀等一ニ平生ノ服裝ノ如クシ、棺中ニハ種々ノ調度、及ビ近親者ノ人形ヲ併セ納ム、(佛式ノ時ハ、剃髮シテ法衣ヲ著セシム、)入棺畢テ之ヲ正室ニ殯シ、又ハ寺院ニ送リテ殯ス、(上代ハ喪屋ヲ作リテ殯セリ、蓋シ假ニ其處ニ埋ミシナラン、)殯ハアラキ、又ハアガリト訓ズ、アラキハ新城ノ謂ニシテ、アガリハ魂ノ天ニ上ル義ナリト云フ、是ヨリ葬送マデノ間ハ、朝夕饌膳等ヲ薦ムルコト、一ニ生前ノ如シ、蓋シ上代ノ殯ニハ、歌舞擧哀誄等ノ式アリ、中世以後ハ、專ラ讀經供養ヲ行フ、殯ノ期限ハ一定セズ、天皇院宮等ノ殯ハ、其間ニ葬儀ノ準備、山陵ノ經營等アリテ、上古ハ大抵一年ヲ期トセシカドモ、或ハ事故アリテ、數年ヲ經過セシコトアリ、後世薄葬ノ風大ニ行ハレ、或ハ用途ノ缺乏ニ由リテ、在位崩御ノ天皇ヲモ、直ニ院ニ擬シテ葬儀ヲ行フニ及ビテハ、殯ノ期限モ從テ減縮シテ、數十日若クハ數日ニ過ギズ、其他庶人ニ在リテハ、其期極メテ短ク、後世ハ大抵初終ノ時ニ於テ、殯ノ事ヲモ併セ行ヘリ、凡テ葬送ハ夜ヲ用キルヲ例トシ、預メ陰陽師ヲシテ入棺出棺ノ日時、造棺葬地ノ方位等ヲ勘ヘ定メシメ、出棺ノ時ニ至レバ、家人近親、各〻燒香シテ別ヲ告グ、又棺ヲ出スニ星宿ヲ推ス事アリ、而シテ其方塞ガル時ハ、墻垣ヲ壞チテ棺ヲ出シヽガ、後世ハ其方塞ガラザルモ、正門ヲ避ケテ故ラニ腋門ヨリ出シ、或ハ生時ノ儀ヲ以テ正門ヨリ出棺スルコト一般ノ風トナレリ、其行列ハ尊卑ニ由リテ一樣ナラザレドモ、前ニ炬火アリ黃幡アリ、柩ノ前後ニ、火輿香輿位牌等アリ、柩ヲ圍ムニ行障ヲ用キ、列ヲ蔽フニ歩障ヲ設ク、喪主以下死者ノ子弟、若クハ父兄ハ、喪服ヲ著ケ白杖ヲ執リ、徒歩シテ柩ニ從ヒ、其他會葬者、及ビ喪官役員役僧警固等之ニ次ギ、並ニ葬地ニ至リテ事ヲ執ル、式畢リテ土葬又ハ火葬トス、(火葬ハ佛式ニ限ル)土葬ノ時ハ、古ハ壙ノ三方ニ土壘ヲ築キ、其內ニ檜皮葺ノ假屋ヲ設ケテ柩ヲ藏ム、後世ハ直ニ土中ニ埋ム、火葬ノ時ハ火屋ヲ設ケ、火爐ヲ築キ、柩ヲ其上ニ置キテ

終夜之ヲ燒キ、天明ニ至リテ拾骨ノ式ヲ行ヒ、之ヲ壺中ニ納レ、近親者頸ニ懸ケテ、僧侶ト共ニ之ヲ墓中ニ藏ム、若シ日時ニ忌諱アル時ハ、數月又ハ數年間、假ニ之ヲ寺院ノ堂中ニ置クコトアリ、而シテ納骨ハ、必シモ一所ニ限ラズシテ、數所ニ分チ納ムルコトアリ、又遺骨ヲ燒キテ灰ト爲シ、之ヲ山野ニ散ジ、或ハ河中ニ、投ズルコトアリ、會葬者ハ、歸途必ズ河流ニ臨ミテ禊除ヲ行フヲ例トス、凡ソ我國上代ノ葬送ハ皆土葬ナリシガ、持統文武元正聖武等ノ天皇、相繼テ火葬ヲ行ハシメ給ヒシヨリ、歷朝多ク此例ニ倣ヒシガ、後光明天皇崩御ノ時、始テ其實ヲ土葬ニシ、僅ニ其式ヲ火葬ニシ給ヒシヨリ、數代此例ヲ用キラレ、先朝崩御ノ時ニ至テ、全ク土葬式ニ復サセ給ヘリ、庶人ニ在リテモ、中世以後ハ多ク火葬ナリシガ、德川氏ニ至リテ、將軍及ビ諸藩主等並ニ土葬ニ從ヒ、土佐會津等ノ如キハ、其封内ニ令シテ火葬ヲ禁ゼシカバ、天下土葬ノ風大ニ起レリ、

凡ソ天皇院宮崩御ノ時ハ、御葬長官、前後次第司、又ハ殯宮司、御裝束司、御竈司、山作司、作方相司等ノ葬官ヲ任ジ、導師呪願師、又ハ奠茶師、奠湯師、宣疏等ノ役僧ヲ定ム、其葬儀ニハ勅使若クハ院使ヲ發遣セラルヽコトアリ、而シテ土葬ニハ二度、火葬ニハ三度ヲ以テ例トス、而シテ親王大臣、及ビ百官在職ニシテ薨卒スル時ハ、朝使ヲ遣シテ弔賻ヲ賜ヒ、或ハ官人ヲシテ喪事ヲ監護セシメ、或ハ當司ヲシテ分番會喪セシム、又從軍征討シ及ビ車駕ニ從ヒ、並ニ公使ト爲リテ所在ニ死スル者ニハ、賻物ノ外ニ殯斂ノ調度ヲ賜フ、國司モ亦殯斂ノ料ヲ賜ヒシガ、淸和天皇ノ貞觀十二年ニ至リテ、賻物ノミヲ賜フコトヽナリ、凡テ賻物ノ外ニ、葬料ヲ賜フ者ハ、皆之ニ準ゼシメタリ、

喪具ハ、大寶令ニ、轜車鼓角幡楯帷帳等ノ制アリ、轜車ハ棺ヲ載ス、後世多クハ輿或ハ轎ヲ用キル、棺ニハ臥棺アリ、座棺アリ、桶棺アリ、貴人ハ大抵臥棺ニシテ、其他ハ多ク座棺桶棺ナリ、

清和天皇ハ、座棺ヲ用キ、後柏原天皇ハ、桶棺ヲ用キ給ヒシ如キハ、共ニ止ムヲ得ザルニ出ヅ、棺ノ外ニ槨アリ、又別ニ龕アリ、モコシト訓ズ、棺槨ヲ納ル小屋ナリ、此他改葬合葬假葬虚葬ノ例アリ、葬儀ニ屬スル位牌及ビ法號ノ事アリ、吊許香奠遺物等ノ事アレド、今一々此ニ贅セズ、

〔伊呂波字類抄 左人事〕葬送

〔運歩色葉集 佐〕葬禮 又裏 喪送

〔節用集 左〕喪禮

〔令義解 九喪葬〕喪葬令第廿六（謂、喪者、死屍稱也、葬者、藏也、）

〔類聚名義抄 八佛中〕葬（龍濵反、ハウフル、ツカ、カクス、ハカ、）

〔秦山集 雜著甲乙錄一〕葬訓波不流也、棄之義、重遠謂、今下賤之言、棄物曰波不流、蓋此訓也、重遠訓波爾不流是振土掩藏之義也、翁（〇保井春海）不是之、

〔倭訓栞 前編二十四〕はうふる　葬をいふ、〇中略日本紀に、はゝふるとも、はふることもよめり、もとうははをのべたる詞、八日をやうか、たぶをたうぶといふ如し、伊勢物語にもはふりと書り、はふらかすの意、溢と義通ふなるべし、〇中略蝦夷には葬をよしやといふ、

〔萬葉集 二挽歌〕高市皇子尊城上殯宮之時、柿本朝臣人麻呂作歌、
言左敝久、百濟之原從、神葬、葬伊坐而、〇下略

〔伊勢物語 上〕むかし西院のみかど〇淳和と申すみかどおはしましけり、其みかどのみこ、たかいこ〇崇子内親王と申すいまそかりける、其みこうせ給ひて、御はふりの夜、その宮のとなりなりける男、御はふりみんとて、女車にあひのりて出たりけり、

〔下學集 下態藝〕葬禮　茶毘（二字共梵音、葬送之義、）下火（二字共唐音也、禪家葬禮之法事也、火字或作炬字、）火葬（火燒）水葬（入河）野葬（棄野原）土葬（埋土）

制度

土中、以上四種葬禮也、功德多少無異說、

〔釋氏要覽下送終〕葬法天竺有四焉、一水葬、謂投之江河以飼魚鼈、二火葬、謂積薪焚之、三土葬、謂埋岸傍、取速朽也、四林葬、謂露置寒林、飼諸禽獸、

〔令義解九喪葬〕凡喪葬不能備禮者、貴得同賤、賤不得同貴、謂凡厚葬貴深葬、聖賢之情、故貴者得同賤、賤者不得同貴、

〔令集解四十喪葬〕釋云、備禮謂凶禮威儀也、中略○跡云、不能備禮、謂不堪備禮、假令貧人有紫絹无荒絹者、此非可用之人勢者、得用布不得用紫之類、中略○釋云、貴得同賤、假令如三位得同四位以下之類、賤不得同貴、如四位以下不得同三位以上之類、凡喪禮具當色以下得用、

〔令義解九喪葬〕凡皇都、謂天子所居也、及道路謂公行之道路皆是、側近、並不得葬埋、

〔延喜式四十一彈正〕凡喪葬盛飾奢僭、及淫祀之類、左右京職若不禁者彈之、

〔日本書紀二十五孝德〕大化二年三月甲申、詔曰、中略○迺者我民貧絕、專由營墓、爰陳其制、尊卑使別、夫王以上之墓者、中略○其葬時帷帳等用白布、有轜車、上臣之墓者、中略○其葬時帷帳等用白布、擔而行之、蓋此以肩擔與而送之乎下臣之墓者、中略○其葬時帷帳等、用白布、亦准於上、中略○庶人亡時、收埋於地、其帷帳等可用麁布、一日莫停、中略○凡人死亡之時、若經自殉、或絞人殉、及強殉亡人之馬、爲亡人藏寶於墓、或爲亡人斷髮刺股而誄、如此舊俗、一皆悉斷、或本云、無藏金銀錦綾五綵、又曰、凡自諸臣及至于民、不得用金銀、縱有違詔犯所禁者、必罪其族、

〔類聚三代格十二〕太政官符

應禁斷兩京僭奢喪儀事

右被右大臣宣偁、奉勅、送終之禮、必從省要、如聞、豪富之室、市郎○郎恐郭誤之人、猶競奢靡、不遵典法、遂敢妄施隊伍、假設幡鐘、諸如此類、不可勝言、貴賤既無等差、資財空爲損耗、既窆之後、酣醉而歸、非唯虧損風教、實亦深蠹公私、宜令所司嚴加捉搦、自今以後勿使更然、其有官司相知故縱者、與所犯人並科違勅罪、仍於所在條坊及要路、明加牓示、

延暦十一年七月廿七日

〔長曾我部元親式目〕掟

葬禮之事、爲二身上一上下共奢停止、可レ爲二桶箱一候、此外儉約に可レ仕事、附葬禮場へ、緣者親類可二罷出一、此外罷出候事停止、乍レ去親類無レ之者は、知音可二罷出一事、

慶長貳丁酉年三月朔日　　元親

〔享保集成絲綸錄十九〕寬文八申年三月

覺

一葬禮佛事、有德之輩たりと云共、目に不レ立樣に、成程輕く可レ仕事、

右之通江戸町中へ、從二町奉行一相觸候間、可レ被レ得二其意一候、以上、

三月日

〔備藩典刑四〕家中江申聞覺

喪祭之禮、分限に過おもく執行候者候得ば、夫におとらぬ樣ニと心得候ものも有レ之由ニ候、喪祭は心の誠を盡す處なるに、却而外聞を專一と存る樣ニなり行候へば、非二本意一候間、可レ應二分限一事、

右之條々堅固に可二相守一者也

六月寬文八年朔日

〔一話一言二十七〕町方葬送

一町方葬送之儀に付候ては、先年より度々御觸も有レ之候處、近年心得違、掛け無垢小袖數多棺へ掛け、目立候類も有レ之哉に相聞、不埒之至に候、此上右體心得違之者も有レ之候はゞ、急度及二御沙汰一候事、

七月

右之通奈良屋市右衛門殿被申渡候

右ハ當四月(享和三年)中、坂本町宇兵衛店、四郎兵衛忰三九郎妻てい葬送之節、てい親元富澤町家持長右衛門と存寄申張、掛無垢小袖七ツ棺へ掛け葬送致候趣風聞迄に付、御沙汰には不被及候得共、此上右體之義有之候はゞ、御咎めをも可被仰付候に付、當人共へ急度可申聞段、是又御同所にて被申渡候間、向後右樣之儀有之候ては不相濟事に候間、前書被仰渡候趣、早々家主より店々之者共へ、不洩樣急度可申聞置候、以上、

亥八月五日　　　　名主

〔公裁錄坤〕天保二卯四月御觸

近來百姓町人共、身分不相應大造之葬式いたし、又は墓所へ裴之石碑を立、院號居士號等附候類も相聞、如何之事に候、自今已後百姓町人共、葬式は假令富有、或は由緒之ものにても、集僧十僧より厚執行者致間敷、施物等も分限に應じ寄附いたし、墓碑之儀も高さ臺石共四尺を限、戒名へ院號居士號等、決而附申間敷候

〔町方用留〕天保十三寅年三月

一葬禮佛事、有德之輩たりといふとも、目に不立樣、成程輕く可致旨、寬文八申年三月相觸候處、年久敷儀故、心得違候哉、身分不相應、大造に執行ひ候もの有之候趣相聞候、以來葬送之節、忌掛り候ものの計麻上下著用可致候、且右之節懇意之もの、又者町內組合等之故を以、大勢附添參候儀、堅相止可申候、無據子細有之ものに候はゞ、四五人を限るべく候、何も葬送幷法事等迄、成程輕可致、若相背候はゞ急度可申付候、

右之趣寬政三年文政四巳年觸置候處、程經候事にて心得違之ものも有之哉、近年ハ又々橫行之執行致候もの有之趣に相聞、今般厚御趣意被仰出候上ハ、猶更質素に可致ハ勿論之事に候、

觸面之趣無違失、毎度可相守候、若於相背者、其ものは不及申町役人共迄急度可申付候、

右之通り町中不洩樣可觸知者也

三月八日

嘉永三年十一月

一葬式之儀、町方之分、大行に無之樣、前々より度々御觸も有之、猶寅年中被仰渡候には、施主人數等迄御沙汰有之候處、近頃大行に相成、其上富士講念佛講抔と唱へ、往還を大行に群立、右は其所家主五人組心付候得ば、右樣之儀は無之處、等閑に付、以來家主より申聞、相用ひ申間敷樣子之分ハ、早々支配名主へ申聞、御觸之通り爲相守候積り申合候、此儀其最寄にて、倶に立候ものハ迷惑に存候得ども、義理合にて大勢罷出候儀に付、右意味合、支配名主より厚心付候方可然候、

右廉々ハ被仰渡無之、御同役限り、御心付御取計ひ方御達申候、末々に至り心得違いたし張出等致候てハ不宜候間、各樣御組合限り、御總達振ハ、御逢懸り御勘考行屆候樣御取計ひ可被成候、以上、

十一月十一日

〔御咎異變〕貞享五辰年六月

一閉門遠慮之面々、家來ニ死人有之節、屋敷之内ニ被埋置候樣相聞候、向後左樣之節ハ、夜更密々寺へ遣し輕く葬之筈、

〔御定書百箇條〕變死の者を內證にて葬候寺院御仕置の事

從前々の例
一變死の者を內證にて葬候寺院　五十日逼塞

〔德川禁令考後聚刑律二十三條例〕變死のものを內證にて葬候寺院御仕置之事

寛保元酉年十一月牧野越中守、石河土佐守、水野對馬守伺之內、

伺　變死之ものを內證ニ而葬候寺院御仕置之事

一通例之死と不㆓相見㆒變死之ものを內證ニ而葬候寺院　五十日逼塞

朱書 是ハ元文三午年越後國蒲尾村由兵衛悴勘助神畑夜番いたし罷在候處、盗人兩人來に付追欠候處、右盗人横村杢右衛門彌助ニ被㆑殺候を、親由兵衛親類とも申合、證文遣、慶顔寺江葬候得共、疵有㆑之死骸親類共相候迚、役所江も不㆑斷內證ニ而取仕廻候段不埒ニ付、慶顔寺五十日逼塞之例、

寛保三亥年八月大岡越前守、石河土佐守、水野對馬守御届之內、

極 一變死之ものを內證ニ而葬候寺院御仕置之事

此箇條本文之儀、去戌三月差上候帳面ニハ、通例之死と不㆓相見㆒變死之ものを內證ニ而葬候寺院と認候得共、文言紛敷候間、通例之死と不㆓相見㆒と申儀相除、此度ハ變死之ものを內證ニ而葬候寺院と計相認申候、

〔三秘集四〕天明七未年六月、變死取計ニ付、平野左近右衛門より、久世備中守へ問合により御附札、

御書面疵受相果候ものゝ死骸は、最寄寺院へ假埋にいたし置、人相年齡著服疵等、幷相果居候樣子月日等、巨細に認め、村外往還抔へ致㆓建札㆒、六ヶ月見合、尋來候者無㆑之候ハヾ、建札取除、死骸假埋之儘、土葬ニ取置、雜物ハ取捨候樣、村役人へ御申付可㆑然候、尤御届ニハ及申間敷哉に存候、

〔德川禁令考四十二葬儀〕寛政四子年閏二月　脇坂淡路守江問合挨拶

野文と唱、極貧之者葬式之事、

極貧之もの、葬式不㆓行屆㆒、野文と唱候書付差遣、病死人等不㆓見屆㆒儀も有㆑之哉之趣、御書面之趣、役寺江相尋候處、別紙之通申出候ニ付、寫相添御達申候、

御尋ニ付申上候

極貧之もの致㆓死去㆒候節、引導之代り、野文と申を差遣取置いたし、住持又ハ同宿ニ而も、罷越不㆑申相濟事有㆑之哉、

一此儀極貧窮之もの致死去候節も、住持罷越引導之法修行致し取置事ニ御座候、然共施主方より至而之願に御座候得ば、院代を差遣し取置候儀も御座候得共、引導之代りニ、野文と申を遣し、同宿之僧も不相添候儀ハ、宗旨之定式ニハ無御座候、

右御尋ニ付御答申上候

子三月

彌勒寺
根生寺
圓福寺
眞福寺

〔令義解 職員一〕彈正臺

尹一人掌下肅二淸風俗一事上 謂肅者敬也、風者氣也、俗者習也、(中略)人居此地、習以成性、謂之俗焉、假令信濃國俗、夫死者、即以婦爲殉、若有此類者、正之以禮敎、是以爲肅淸風俗也、○中略

〔日本書紀 六垂仁〕二十八年十月庚午、天皇母弟倭彥命薨、十一月丁酉、葬倭彥命于身狹桃花鳥坂、集近習者、悉生而埋立於陵域、數日不死、晝夜泣吟、遂死而爛臭之、犬烏聚噉焉、天皇聞此泣吟之聲、心有悲傷、詔群卿曰、夫以生所愛令殉亡者、是甚傷矣、其雖古風之、非良何從、自今以後、議之止殉、

〔駿河土產 四〕松平薩摩守忠吉公江戶表江參勤御逗留之內御死去之事

一松平薩摩守忠吉公、尾州より江戶表迄參勤あられ、御逗留之內御煩ひ出し、○中略少々御快氣に付尾州へ御歸城あられ養生可然との義に而、江戶表をば御發駕被成候處、品川迄御出候へば、御病氣御差重り、御養生御叶ひ不被成御死去に付、增上寺に於て御取置に有之節、御近習之侍三人殉死を遂候由、權現樣家康○德川之御聽に達し候處に、其節江戶御老中より不被差留しては不叶義也、其上不留に於ては、上意を以急度御差留可被遊義也との仰に而、以の外御機嫌惡敷、其節上意被遊候は、此殉死と云事は、古來より有義なれ共、何の用にも不立義也、夫程に主人之義を大切に

思ふならば、いよ〳〵身命をなげうち、能奉公いたし、若自然の義も有之節は、肝要の用に立て、相果可申との心がけ有てこそ尤之義なるを、何の用にもたゝぬ追腹を切て死ぬるとあるは、犬死と云ふもの也、畢竟は主人がうつけ故の義也ぞと有、上意之趣江戸表江も相聞ゆ、依之其後越前中納言秀康公、越前北之庄之城に而死去あられ候段江戸表江相聞えければ、宿次ぎを以、家中之侍共之内に、若殉死を遂べきと申者在之候共、堅く禁制すべき旨、越前家老中と有奉書を被成下候となり、

權現樣には右上意之趣之思召に被爲成候に付、御在世の間、御厚恩に預被申たる衆中、大身小身へかけ、數かぎりも無御座、被居候得共、駿府に於て御他界被遊候節、御供としては壹人も無御座、台德院樣〇德川秀忠にも右之上意を御守り被遊候を以、殉死の衆とては無御座候なり、

〔譜牒餘錄五〕中納言秀康

慶長十二年丁未閏四月八日、卒于越前北庄、時三十四歲初爲結城以來之願寺、故葬于孝顯寺、曹洞宗後因權現樣〇德川家康上意、京都智恩院滿譽上人、來于越前建立一寺、改爲淨土宗、號淨光院、秀康卒去之翌日、土屋左馬助、永見右衞門尉殉死、本多伊豆守者、可止殉死之旨、從台德院樣〇德川秀忠被下御內書于伊豆守、猶又一切不可殉死之旨、從權現樣被下御內書于家臣等、〇中略

貞享元年甲子三月日　　松平越前守

〔藩翰譜五森川〕出羽守源重俊、〇中略寬永九年正月二十四日、大相國家〇德川秀忠かくれさせ玉ひし夜、宿所に歸り、一門の人々呼集め、夜一夜暇乞して、曉に至て腹切て殉死す、年四十九歲とぞ、

世の傳ふる所は、大相國家の世嗣の君いまだ定まらざりし時、御臺所國松殿を御寵愛あさからざりしかば、この出羽守等を先として、天下をば此君知し召さるべしと思ひ、竹千代殿には、常に參る事も疏りしが、大相國家かくれさせ給ひ、將軍家の御代になりなば、一定罪蒙

るべしと思ひ、前途後策を謀りて、かく殉死しけりといふなり、

○按ズルニ、駿河土產ニ、秀忠薨去ノ時殉死無シト云フハ、蓋シ殉死ノ事ハ、秀忠ノ素志ニアラザレバ、重俊ノ死ヲ以テ、殉トハ認メザリシナラン、

〔水戶義公行實〕寬文元年辛丑年秋七月、○中略是月二十九日、威公○德川賴房薨、○中略威公近臣、有欲自殺殉死者數人、公親往其家、敎諭百端以制止、時四方侯伯、以人殉死、靡然爲風、至以多相誇、台命禁天下殉死、職此之由、

〔土津靈神言行錄上〕寬文元年閏八月六日、禁殉死、是靈神○保科正之固所惡、而內藤源介承其美意、請急禁之、卽使源介演禁令、源介乃演之、上書以告、皆善率承之、靈神甚善、愜素懷、而親筆其善意於上書裏面、以及賜之、

〔御日記〕寬文三年五月二十日、今日始テ殉死御制禁ノ趣被仰出之、

覺

殉死はいにしへより不儀無益の事なりといましめおくといへども、被仰出無之ゆゑ、近年追腹のもの餘多有之、向後左樣之存念可有之者には、常々其主人より殉死不仕候之樣に堅可申含之候事、若以來於有之者、其主不覺悟之越度なるべし、跡目之息も、不令押留儀不屆可被思召ものなり、

寬文三年五月二十日

〔土津靈神言行錄上〕寬文三年五月二十三日、於營府出武家法度二十一條、諸大名登城、列座於御前、靈神挨拶、入御之後、令酒井雅樂頭演禁殉之旨、靈神嘆美曰、此埀仁孝德以來之仁政、而本朝之憲令也、

〔享保集成絲綸錄一〕天和三亥年七月　武家諸法度

一養子者、同姓相應之者を撰び、若無レ之ニおいては、由緒を正し、存生之内可レ致二言上一、〇中略

附殉死之儀、彌令二制禁一事、

〔享保集成絲綸錄　一〕寶永七寅年四月　武家諸法度

一殉死の禁、更に嚴制を加ふる所也、

〔藩翰譜　六奥平〕美作守忠昌、〇中略寛文八年二月、六十一歲にて卒す、家人等が不法の事有て家絶えぬべかりしを、別の義を以て、子息大膳亮昌能に出羽國山形の城を給ふ、九萬石これは父忠昌の卒せし時、家人杉浦右衞門兵衞といふもの、法を背きて殉死し、家老奥平內藏允、同隼人といふ者、葬送の折ふし爭論に及び、內藏允腹切て死す、かゝる事共打續き、家中物騷がしき事多かりしが故なり、

〔晤語　下〕葬儀

我御國は神代より此こと有つるは、古事記に醜男命の件に、其妻須世理毘賣者、持二喪具一而哭來と見え、神代紀天稚彥の葬儀云、〇中略八日八夜、啼哭悲歌云々見えたり、されば神代にあるにあらずや、式は孝德御宇に定めたまふなれど、後そのごとくにあらず、又續紀天應元年六月云、〇中略帝〇垂仁顧二問群臣一曰、後宮葬禮、爲レ之如何、群臣對曰、一遵二倭彥王故事一と見えたれば、神代の遺風ありしなるべし、然るを儒典の渡り、彼土と往來なせしより、儒法を用ひ、佛法を相加へて、今のごとくになりしは、棺中に瘞錢を入、又死者の頸に囊を掛るなど儒によれり、此こと事物起原に見ゆ幢花燭香爐等を用ふるは佛法にならひて、遂に我國ぶりは失へり、去かれども貴人の葬儀、又伊勢神宮には古風猶存すべし、

〔日本書紀　一神代〕一書曰、伊弉冊尊生二火神一時、被レ灼而神退去矣、故葬二於紀伊國熊野之有馬村一焉、

〔日本書紀纂疏　二〕上古無二葬禮一、孝子以二虆盛土籠也、梩土輿也一而掩二親之尸一、此葬埋之禮所二由起一也、然則葬儀

始于此時矣、

〔日本書紀通證三〕那智三卷書曰、有馬村有産田宮、○註略 乃伊弉冊尊神退之地、而其東有隱窟、亦曰産立窟、亦曰花窟、○註略 所葬伊弉冊尊岩窟也、○註略 每歲暮春以繩作花及幡旗、○註略 圍繞於窟、歌舞祭之、蓋往古遺俗也、○註略 玉木翁曰、此土俗之祭儀、而非國家之例典、雖然亦可謂墓祭之始也、○註略

今按葬祭二禮、始出於此、而上世葬儀亦用鼓吹、則疑土俗因葬儀之遺意以爲墓祭也、伊勢神宮書、中論祭法、謂宴樂歌舞如日少宮儀、夫神社山陵嚴別淨穢、蓋欲存亡之不瀆也、然亦不二之、良有以也、○註略

〔古事記上〕故其所神避之伊邪那美神者、葬出雲國與伯伎國堺比婆之山也、

〔日本書紀二神代〕天稚彦之妻下照姬、哭泣悲哀、聲達于天、是時天國玉○天稚彦父 聞其哭聲、則知夫天稚彦既死、乃遣疾風、舉尸致天、便造喪屋而殯之、卽以川鴈爲持傾頭者及持帚者、一云、以鷄爲持傾頭者、以川鴈爲持帚者、 又以雀爲舂女、一云、乃以川鴈爲持傾頭者、亦爲持帚者、以鴗爲尸者、以雀爲舂女、以鷦鷯爲哭者、以鵄爲造綿者、以烏爲宍人者、凡以衆鳥任事、 而八日八夜、啼哭悲歌、

〔釋日本紀八述義〕持傾頭者 私記曰、問是何物哉、答師說、葬送之時、戴死者食片行之人也、 造綿者 私記曰、問是又何物哉、答師說、謂今以綿濆水、沐浴於死者之人耳、 宍人 私記曰、問是何人哉、答師說、包丁之類也、

〔古事記上〕故天若日子之妻下照比賣之哭聲、與風響到天、於是在天天若日子之父、天津國玉神、及其妻子聞而降來、哭悲乃於其處作喪屋、而河鴈爲岐佐理持、自岐下三字以音 鷺爲掃持、翠鳥爲御食人、雀爲碓女、雉爲哭女、如此行定而、日八日夜八夜以遊也、

〔古事記傳十三〕此れ書紀の傳といたく異なり、○中略 岐佐理持、書紀に、持傾頭者とあるを、私記に師說に、葬送之時、戴死者食、片行之人也と云り、此說持傾頭の字に拘らで、如此註せるは、如何樣にも據ありつと見ゆ、此に從ふべし、書紀の武烈卷に、鮪臣が殺されし處へ、影媛が逐行てよめる歌に、拖摩該儞播、伊比佐倍母理、○中略 云々とあるなど、事のさまよく戴死者食行と云るに似

たり、〇註略さて書紀に持傾頭とは、いかなる由にて書れたるにか、〇註略定かならず、されど此字と私記の說とを合せて熟思ふに、笥飯背垂持と云事ならんか、笥飯は伎勢多は佐と約まる、背垂とは俗言に物を負ふを勢多真負と云ことあり、そは肩よりかけて背へ垂れ負と云意なり、されば私記に載とあるは、正しく頂上に置にはあらで、頭を前へ傾きて、頂より背へかけて、飯笥を居て行なるべし、(中略)さて私記に、片行とあるは、中に向字など脱て、片向行などにや、然らざれば片行と云こと心得がたし、彼此に此片行に、傾頭字の意ばへ有げに見ゆ、さて○河鳳の頭のさま、此伎佐理持の形状に類たることある故に、此役を充しなるべし、○中略掃持は波々伎持なり、〇中略此は葬の時、帚を持て行者を云なり、〇註略さて此役を鷺に任したるは、毛冠の帚に似たればなり、御食人は、殯の間、死者に供る饌を執行ふ人なり、書紀に宍人者とある、是に當れり、〇註略殯に進奠事、書紀の淨御原天皇の崩坐し段に見えたり、さて此役を翠鳥に任したるは、谷川氏說に、能取魚故と云り、〇註略碓女は宇須賣と訓べし、書紀には舂女とあり、〇中略さて此役は、まづ和名抄祭祀具に、粢餅、漢語鈔云、粢之度岐、祭餅也、粿米、漢語鈔云、加之與禰、淨米也、糈米、離騷經注云、糈精米、所以享神也、和名久萬之禰、とある(糈字は稰の誤なり、俗に稰に作る字書にあれば、これより誤れるか、)粢米は今云白餅、粿米糈米は、今云洗米なり、然れば上代に殯にも此等の物を奠し、その米を舂く女なるべし、さて雀に此役を任せるは、又谷川氏の說に、雀取躍而不歩如舂也と云る、信にさも有べし、哭女は、那伎賣と訓べし、さてこは又谷川氏の、晉聞紀熊野、若家有死者、備饒舌婆子、令之哭告郷黨、隨價高低、有哭泣輕重云と云る、(此事は己も聞けり、隨價高低とは、一升哭二升哭など云て定むとぞ、)此風俗を聞て、上代思ひやられたり、さて雉に此役を任せるは、聲高くて鳴鳥なるが故なり、書紀云、〇中略以鵄爲尸者、〇中略以鷦鷯爲造綿者、以烏爲宍人者、凡以衆鳥任事とあり(此中の尸者造綿者の二は、此記に無し、尸者と云者は、いと難はし、其故は、先漢國にて、尸と云者は、神象也と禮記にありて、先祖の祭祀にまうくる者なり、男を祭るには男、女を祭るには女を用ふ、さてそには孫爲王父尸とありて、孫を尸にはするなれば、父に還て子を父として祭る事なり、されど此尸と云ものは、彼國にても、古の風俗にこそあれ、いとあるまじきわざなれば、後世には絶て無き事なり、況て我國には、さるわざ有べくも思はれず、されば母能麻佐は後に漢籍を讀て設けたる尸の訓なるを、此設に似つかはしきことゝ思ひて、後人の書加へたるにやあらむ、若然らば漢國にても始て死たるをりの實には無き例なれば當らぬことなり、若又上代に、殯に母能麻佐と云もの實に有しならば、必漢國の尸とは異なりけんを、書紀に尸者と書れたるか當らぬにや、口决に、尸者著死衣而謂弔と云るは、死人の著衣を著て、

弔に來たる人にあふ人と聞えて、漢の尸とは同じからぬを、漢籍の趣にすがらで如此注せるは、當時さる風俗のありしにやあらん、それ若古より有しことならば、尸に似たる所もあれば、書紀に尸者と書れたるもあしからぬにや、左右に疑はし、造綿者は、私記に、謂今以綿漬水沐浴於死者之人耳と云へれど、そればかりの綿はいさゝかなれば、それ造者とて別に充べくもあらず、故思ふに、屍のゆるがざらん料に、棺内の空虚を、上代には綿してぞ塡めけん、其綿は多くいる事なれば、それ造る者なんと云にや、されど是等は、いと定め難きことなりかし、さて此喪のわざどもを、かくの如く皆鳥どもに任したるは、如何なる所以とも未慥には思ひ得ず、姑く書紀纂疏に、稚彥有雉禍故以衆鳥任葬官類之也、とあるに依て有なんか、

〔古事記中景行〕於是坐倭后等、及御子等諸、下到而作御陵、卽匍匐廻其地之那豆岐田、自那下三字以音而哭爲歌曰、那豆岐能、多能伊那賀良邇、伊那賀良爾、波比母登富呂布、登許呂豆良、於是化八尋白智鳥翔天而向濱飛行、智字以音爾其后及御子等、於其小竹之苅杙、雖足跡破、忘其痛以哭追、此時歌曰、阿佐士怒波良、許斯那豆牟、蘇良波由賀受、阿斯用由久那、又入其海鹽而那豆美此三字以音行時歌曰、宇美賀由氣波、許斯那豆牟、意富迦波良能、宇惠具佐、宇美賀波、伊佐用布、又飛居其磯之時歌曰、波麻都知登理、波麻用波由迦受、伊蘇豆多布、是四歌者皆歌其御葬也、故至今其歌者、歌天皇之大御葬也、

〔古事記傳二十九〕凡て上代の御葬の儀式、天皇のも御子たちのも、其餘のも、如何ありけん知がたし、喪葬令に、親王諸王諸臣の定をいさゝか載られたれど、凡て令の御制は、漢事多ければ、上代の據にはなりがたきうへに、委き事は見えず、天皇のは凡て載らず、世に天武天皇の御時に定められたる葬の式とて記せる物あれども、いみじき僞書なり、事總天智の御世より、萬事多く漢をまねばれたるほどに、其後のは葬も漢事多く雜り、其後は又おしなべて佛法に依るほどに、上代の式は大かた亡はてたるめり、されど邊鄙には今もなほ、上代よりの事の遺れりと見ゆることも多かるを、其も漸々に變りゆくは、いと惜らことなり、物知人の是ぞ上代の式よとて行ふ葬の式は、後の漢意以て考へ定めつるものなれば、中々にひがわざの多きぞかし、さて御々代々の天皇の大御葬に、此御歌等をしも唱へる所以は、まづ此倭建命は仲哀天皇の大御考尊に坐々て、萬を天皇に准奉ることはさるものにて、神とも神と坐々て、世に比なき大功を立賜ひて、終に白鳥と化て飛去坐ぬるなど、都て尋常ならざるうへに、壯の御齢にして旅行にしも崩坐ぬるなど、其悲哀さも又尋常ならず、此御歌ど

埴輪

もはた、殊に優れて悲哀さの甚深きなど、彼此を以てなるべし、

〔日本書紀 十六 武烈〕大伴連將數千兵、徼之於路、戮鮪臣〈〇平群氏〉於乃樂山、是時影媛逐行戮處、見是戮已、驚惶失所、悲涙盈目、遂作歌曰、伊須能箇瀰、賦屢嗚須疑底、擧慕摩矩羅、挖箇播志須擬、暮能娑幡儞、於褒野該須擬、幡屢比能、箇須我嗚須擬、逗摩御暮屢、嗚佐褒嗚須擬、挖摩該儞播、伊比佐倍母理、挖摩暮比儞、瀰逗佐倍母理、儺岐曾褒遲喩倶謀、柯㝵比謎阿婆例、於是影媛、收埋既畢、〇下略

〔日本書紀 十七 繼體〕二十四年、是歲毛野臣被召到于對馬、逢疾而死、送葬尋河而入近江、其妻歌曰、比羅哿駄喩、輔曳輔枳能朋樓、阿符美能野、愷那能倭倶吾伊、輔曳府枳能朋樓、

〔釋日本紀 十三 述義〕私記曰、毛野臣者、近江人也、今死他鄉、故俳人等殯斂、自海路還、尋菟道河、欲入故鄉之地、行葬送之事也、

〔萬葉集抄 二〕常陸風土記に信太郡となづくる由緣を記して云、黑坂命征討陸奧蝦夷、事了凱旋、及多歌郡角枯之山、黑坂命遇病身、故爰改角枯號黑前山、黑坂命之輸轜車、發黑前之山、到日高見之國、葬具儀、赤旗青幡、交雜飄颺、雲飛虹張、瑩野耀路、時人謂之幡垂國、後世言便稱信太國云々、

〔倭名類聚抄 十四 葬送具〕山陵 附埴輪、　埴輪〈和名波邇和〉　山陵緣邊作埴人形、立如車輪者也、

〔日本書紀 六 垂仁〕三十二年七月己卯、皇后日葉酢媛命〈一云、日葉酢根命也、〉薨、臨葬有日焉、天皇詔群卿曰、從死之道、前知不可、今此行之葬、爲之奈何、於是野見宿禰進曰、夫君王陵墓、埋立生人、是不良也、豈得傳後葉乎、願今將議便事而奏之、則使者喚上出雲國之土部壹佰人、自領土部等、取埴以造作人馬及種種物形、獻于天皇曰、自今以後、以是土物更易生人、樹於陵墓、爲後葉之法則、天皇於是大喜之、詔野見宿禰曰、汝之便議、寔洽朕心、則其土物、始立于日葉酢媛命之墓、仍號是土物謂埴輪、亦名立物也、仍下令曰、自今以後、陵墓必樹是土物、無傷人焉、天皇厚賞野見宿禰之功、亦賜鍛地、卽任土部職、因改本姓謂土部臣、是土部連等、主天皇喪葬之緣也、

〔文公家禮喪禮四〕治葬

造明器刻木爲車馬僕從侍女、各執奉養之物、象平生而小、准令五品六品三十事、七品八品二十事、非陞朝官十五事、

〔日本書紀十四雄略〕九年七月壬辰朔、河内國言、飛鳥戸郡人田邊史伯孫女者、古市郡人書首加龍之妻也、伯孫聞女産兒、往賀聟家、而月夜還、於蓬蔂丘譽田陵下、蓬蔂、此云伊致寐姑、逢騎赤駿者、其馬時濩略而龍翥、欻聳擢而鴻驚、異體峯生、殊相逸發、伯孫就視而心欲之、乃鞭所乘驄馬、齊頭並轡、爾乃赤駿、超攄絶於埃塵、驅騖迅於滅沒、於是驄馬後而怠足、不可復追、其乘駿者知伯孫所欲、仍停換馬相辭取別、伯孫得駿甚歡、驟而入厩、解鞍秣馬眠之、其明旦赤駿變爲土馬、伯孫心異之、還覓譽田陵、乃見驄馬在於土馬之間、取而代而置所換土馬、

〔續日本紀三十六光仁〕天應元年六月壬子、遠江介從五位下土師宿禰古人、散位外從五位下土師宿禰道長等一十五人言、土師之先、出自天穗日命、其十四世孫名曰野見宿禰、昔纏向珠城宮御宇垂仁天皇世、古風尚存、葬禮無節、毎有凶事、例多殉埋、于時皇后薨、梓宮在庭、帝顧問群臣曰、後宮葬禮、爲之奈何、群臣對曰、一遵倭彦皇子故事、時臣等遠祖野見宿禰進奏曰、如臣愚意、殉埋之禮、殊乖仁政、非益國利人之道、仍率土師三百餘人、自領取埴造諸物象進之、帝覽甚悦、以代殉人、號曰埴輪、所謂立物是也、此則往帝之仁德、先臣之遺愛、垂裕後昆、生民頼矣、式觀祖業、吉凶相半、若其諱辰掌凶、祭日預吉、如此供奉、允合通途、今則不然、專預凶儀、尋念祖業、意不在茲、望請因居地名、改土師以爲菅原姓、勅依請許之、

〔類聚三代格七〕太政官符

應停土師宿禰等預凶儀事

右太政官今月十四日論奏偁、臣等謹檢故事、上古淳朴、葬禮無節、屬有山陵之事、毎以殉埋生人、鳥吟魚爛而不忍見聞、爰及纏向珠城朝廷垂仁天皇御世、皇后薨逝、梓宮在庭、天皇甚傷、顧問群臣、後宮葬禮爲之奈何、于時土師宿禰等遠祖野見宿禰進奏曰、神聖之德伏濟民命、殉埋之禮殊乖仁政、因卽喚

來出雲國土師部三百餘人、自領取埴造諸物象進、天皇甚悅以代殉人、號曰埴輪、所謂立物是也、自玆厥後、歷代相沿、稱尋古風、野見宿禰獻策往帝、弘仁政於昔年、停殉陵次、垂遺愛於後世、傳曰、善善及子孫、惡惡止其身、然則野見宿禰苗裔、應霑延賞之澤、而職掌凶儀、不預吉禮、夫喪葬之事、人情所惡、專定一氏、爲其職掌、於事論之、實爲不穩、臣等伏望、永從停止、縱有吉凶、同於諸氏、其殯宮御膳誄人長、及年終奉幣諸陵使者、普擇所司及左右大舍人雜色人等充之、伏聽天裁、謹以申聞者、畫聞既訖、省宜承知、年終幣使者、依治部省移、差蔭子孫散位位子等充之、自今以後、永爲恒例、

延暦十六年四月廿三日

〔桂林漫錄下〕瓦偶人

去リヌル戊午ノ歲、或人上野國那波郡波志江村ノ相山ト云フ所ニテ見タリトテ、瓦偶人ノ像ヲ圖ス、其狀奇古ニシテ聊太古男女ノ服飾ヲ想像スルニ足ルモノナリ、往年毛利讃州侯ニテ和漢ノ古玩ヲ集ヘ給ヒシ時、予モ其席ニ陪セシガ、此偶人ノ腰ヨリ以下ノ缺ケ殘リタル物ヲ携ヘ來レル人アリ、何レモ明器ノ類ナルベシトハ云ヒテ、何タル事ヲ知リタル者ナカリシガ、近頃此圖ヲ得テ始メテ瓦偶人ノ下體ナル事ヲ辨ヘタリ、家兄國瑞法眼モ此偶人ノ下體ヲ藏ス、武州栗橋ノ邊ニテ堀リ得タル物ナリト云フ、其質城州ノ深草燒ニ似テ甚脆シ、

土人

隨園子不語云、劉刺史之隣孫姓者、堀溝得一石門、開之隧道宛然、陳設鷄犬罍尊、皆瓦爲之云々、亦有堀得土人作臥形者、中良按ニ、皇朝ノ古埴輪ヲ以テ葬ヲ送リタル事、唐土ニモ其例ハ有リケリ、

〔楢軒小錄〕人形原之事

右の序に、長準談じけるは、久留米城下の郊外何の方か人形原と云ふ處あり、餘多土偶人山の原に臥し倒れたるあり、大常人の如くにして樸體唐人の如し、古人何の爲にすることを知らずと

神葬

なり、凡べて土中より堀出す器物に、今の人の見ては何の用に成ると云ふ了簡の付かざるもの有り、いにしへの祭器明器の類にやあらん、本朝の古貴者の葬には生人を殉葬す、野見宿禰の奏に依り、土偶人を用ひらるゝこと明に國史にあらはる、彼人形原の偶人、もしくは殉葬の土偶にてもや有るべき、

〔德川幕府寺社奉行記錄六十二〕神葬祭之事

抑和朝神葬祭式之儀者、神代より之餘風、和國一般之葬祭ニ而、上皇帝を奉始、下萬民ニ至迄、一統神葬祭式を以、往昔ゟ葬り來候處、厩戸皇子佛敎被爲信、佛像經卷、幷儒經易曆醫等之博士僧俗、異國ゟ被召寄、普く萬民ニ被爲學、此御時より始而儒佛之二敎、幷易天文醫等之諸道、和國ニ被行候、依之我國一般之大道、自然と小道同樣ニ罷成、始而神道と號候樣ニ罷成、神儒佛之三敎と分チ候事、是國家廢衰之始ニ御座候、厩戸皇子御出世ニ於テ、始而寺僧之式を以、御自身の牌ヲ被爲建、爰ヲ切リ彼ヲ切、子孫有らせじと宜ひし事、佛經之意味ヲ信じ給ふ故也、是寺葬之最初ニ御座候共、靈は國風之神葬祭ヲ以、靈神ニ被鎭祭、尊號有之、此砌も佛敎信用之者希ニ而、專國學之行、大方神葬ニ取納候處、桓武帝之御宇ニ至、傳敎慈覺智證弘法之四大師、顯密之二敎ヲ立、顯經ヲ以、方便を說示シ、萬民ヲ敎化シ、密經ニ者、神秘を以寄特を顯し、胎金之兩部を分ち、胎者陽にして神と號、無體して有靈を以垂跡として、金は陰にして有體ヲ以て佛と號し、神佛一體にして、更ニ無別と、方便を以佛敎ニ被引入、是ゟ漸佛敎雖被行と、猶國風之式ヲ尊び神葬祭候族多、佛敎ニ歸依仕候者等、葬仕候儀ニ御座候、然ル處天正之頃、四海不穩、人氣不和、國風衰たる費ニ乘じ、蠻國より邪蘇宗門之徒押渡、邪宗門ヲ和朝ニ押及ぼし、蠻國ニ隨はん事を計ル、依之彼逆徒御誅罰有之候以後、是ヲ防がん爲、宗門御改之宗判御取被成候以來、職に預り候者共迄、一統宗門無之候而は御擬定ニ洩候道理ニ相當り候故、無據魄者寺院ニ葬候樣罷成候得共、魂者神葬祭式ヲ以、靈神鎭祭仕候儀

ニ御座候、尤神葬祭式未ダ傳授之輩ハ、本官江相願出、本官より神葬鎮祭被致、靈神位牌被下候儀ニ御座候、依之死骸取置之儀者、宗判之趣ニ隨ひ寺葬爲致、寺役ニ候事、〇中略

亥〇寬政三年十一月　白川神祇伯殿關東執役　佐々木大監物

寺社御奉行所

一神道葬祭之儀者、古ゟ我國一般之風俗ニ而、天稚彥神葬之祭を以、神祇伯王殿皆傳之輩、被相願候節者、古例ニ被准候而、神葬祭之式ニ致免許候、總而諸傳授等之儀者、一代限りニ而、子孫江相傳候儀、決而無御座候事、〇中略

一神祇伯王殿皆傳無之門人之儀は、切支丹宗門御改之砌ゟ、寺判御座候趣を以、死骸之儀者、寺葬ニ取行付、寺役ニ爲致候事、

右之通ニ御座候以上

亥〇寬政三年十一月五日　白川神祇伯殿執役　佐々木大監物

寺社御奉行所

〔德川幕府寺社奉行記錄〕六十二 神道葬祭願之節取計方

口上覺

神職輩神葬祭相願候節取計方之儀、就御尋左ニ申上候

一從當家職分之許狀差遣被置候配下神職共、神葬祭之儀願出候へば、是迄之仕來篤と承糺、無相違趣口書印形爲致、且其地頭役人ゟ添狀有之候得者、右等之趣二位殿江申達、聞濟之上、其當日掛り之家老一人之印形を以、神葬祭略次第差免申候、右相濟願人歸國之節は、地頭役人江右返書之外に、宗門證狀と申もの差遣候、其證狀之文面、

何國何郡何村何社職號何誰儀、宗門之事申斷候、抑爲神職者、代々ニ奉仕神、殊帶神祇管領之

許狀上は、全以切支丹邪宗之徒ニ無之候條、宗門御改之節、神職と事濟候樣、宜敷取計旨、家老共四人連名之以紙面、地頭役人衆ニ差遣申候、

一神葬祭次第願出證狀は不相願者有之候、神葬祭次第計ニ而相濟候所は、證狀差遣不申候、或領分之神職、領主役所江罷出、今度上京いたし、神葬祭之儀相願度候間、添狀申請度旨申候所、其儀承屆候へ共、此方より添狀は難遣候間、吉田家ゟ申來候樣可致抔と被申付添狀無之所も有之、是等之儀も諸國數多之儀ニ付、不一同御座候、

一神葬祭次第差免之儀は、其身一代之譯ニ無御座候故、二度とは差遣不申候得共、證狀之儀者、神職代替リニ、領主役人ゟ繼目之許狀願之添狀ニ證狀之儀も申來候處有之候、左樣之處は應其意、其度每ニ證狀差遣申候、是又同前不一同御座候、

一神主幷祠官下社家抔、數輩相立候社有之、神主江神祭次第差免候迚、祠官下社家迄も、神葬祭相成候と申譯ニ者無御座候、祠官下社家之輩も、願出候得者別段ニ許容之事、

一神葬祭次第不願出前々ゟ、家內一同、神道宗門ニ而相濟來候處御座候、

一吉田家之儀者、神代天兒屋根命ゟ、神籬之正印、一代不闕ニ致相承被成候譯ニ付、御綸旨ニ、神祇殿諸事、依爲神祇管領、古來一身之進退也と被爲載之、殊ニ者御代々被下置候神社御條目ニ、諸社之禰宜神主等、專學神祇殿と被爲載之候、則神祇殿者、當家職掌之儀ニ而、右之通家柄御立被下置候御趣意を以、國々諸社家江、職分之許狀、及神事之裝束免狀寫被與之、尤代々元本唯一神葬祭式を以被取行候事、往古ゟ今日ニ至リ、相替儀無御座候、右ニ付而者、神職輩我職分を存、乍不及も神祇殿を學候志之有之候者は、本所之法式を相守候ニ付、自然神葬祭之儀ニ及申候、又己が身分之勝手而已ニ心を委子、神祇殿ニ疎々敷族は、人前之見分計ニ而、天下國家五穀能成等之御祈禱も無覺束、且右體之者は、社法筋心得違居候事も間々御座候處、乍不如意も、神葬祭

之儀迄相心掛候者は、御條目之御趣意を大切ニ相守候心より、職分を職分と存候儀ニ付、於當家、尤之儀ニ被存候へ共、神葬祭願出候節、當家存意之趣申上置候、以上、

寛政四年子二月　吉田家 鈴鹿一學

寺社御奉行所

〔橘窻自語上〕近頃吉田卜部家の神祇道といふことを學ぶ神職のともがら、埋葬の時に、宗門ありて僧徒の供養引導にあづかることをいみきらひ、吉田に從ひて神道葬祭といひ、甚しきはいたりては神道宗門と心得たり、いといぶかしきことにて、むかし露ばかりもきこえぬ左法にて、にくむべきこと也、我〇橘經亮神職にありて、かやうのことをいはゞ、佛道を信じていふとおもふやからもあるべけれども、しかにはあらず、たゞ古今にわたりて、あらぬ新式をたて、、佛法にむかへつるをにくむ也、又ひとの國のことなれども、近思錄九治法條曰、正叔云、某家治喪不ㇾ用二浮圖一、在ㇾ洛亦有二一二人家化一ㇾ之とあるをみれば、から國とても、佛を用ひしことあたらしからぬことにて、宋の時すでに如ㇾ此みえたり、

〔德川幕府寺社奉行記錄六十二〕吉田家家司鈴鹿近江守申聞候趣神田明神神主芝崎美作より書上

脇坂中務大輔手留

寛政三亥年四月差出

口上覺

神道葬祭之儀御尋御座候御答

一當主嫡子正統之もの者、從二吉田家一葬祭傳授有ㇾ之候上、神祭ニ而取行、勿論之儀ニ御座候、

一次男等吉田家より烏帽子狩衣之免許授候儀無二御座一候、次男ニ而も嫡子正統ニ相立候得者、神祭ニ取行ひ申候、尤も無ㇾ之次男之名目ニ而者、都而免許之品無二御座一候旨ニ御座候、

一女木綿手繦之免許有之候迚も、神葬傳授無御座、神子兼帶罷在候者、神祭免許有之候、乍去其國ニ仕來ニ而、男女共神祭に取行ひ候族も御座候、旣、

奥州信夫郡餘目七松大明神神主
齋藤修理

此者吉田家門弟ニ而、當人者勿論、右注連下社家妻子共迄、古來より神道葬祭ニ取行ひ申候、代代神道葬祭傳授者無御座候得共、仕來りニ而、當主嫡子正統之通、家内も神祭仕候旨ニ御座候、

一親葬祭傳授相濟候上者、子孫共免許無御座候迚も、神祭取行ひ候而不苦、一代限りと申事茂無御座候旨ニ御座候、

神田明神神主
芝崎美作守

右御答之内、去々酉年正月、當御奉行所より御尋之節、書上候品も御座候、此度吉田家年頭使鈴鹿近江守滯留ニ付問合候處、大概心得罷在候趣申上候、以上、

亥四月

〔德川幕府〕寺社奉行記錄 六十二 安永度問合挨拶

神道葬祭問合挨拶、脇坂中務大輔手留、

一神主自身葬祭、吉田家より傳授を請候趣、地頭より菩提寺江申渡呉候樣申出ニ付、井上數馬問合、

安永七戌年閏七月戸田因幡守答書付

自身葬祭之儀、吉田家江相願、此度被差免候旨ニ而、菩提寺西蓮寺江地頭よりも申渡有之候樣致度之旨願出、吉田家家司よりも以書狀申來候由、別紙書付、吉田家家司より之書狀御差越、掛御一覽候處、神職之者幷嫡子者、吉田家より自身葬祭傳授有之上者、神主伊豆ゟ菩提寺江掛合、其身嫡子者、自身葬祭可致筋ニ而、地頭より菩提寺江申渡筋ニ者無之、尤妻子どもも自身葬祭之儀者難成儀ニ付、右之趣を以、御答有之候筋と存候、

一神主葬祭傳授相濟候神主、其身幷嫡子者離旦いたし、自身葬祭致度段願出候由ニ而、内藤伊織より問合、
安永七戊年十月土岐美濃守答附札
吉田家より葬式以切紙職方之作法受候得者、當職嫡子之儀者、自身葬祭不苦候、吉田家より申來候得者、猶又御聞届可有之と存候、尤神職嫡子之外、家内之者は旦那寺宗判を請、宗門帳差出、自身葬祭者不相成事ニ候間、其段御申達、若旦那寺不致承知候はゝ、觸頭添翰を以、寺社奉行月番江願出候樣御申渡可然存候、

府川寺社奉行記錄六十二
文政十一年子十月十二日下野守殿江直達　留帳六拾壹番
御老中方ゟ御尋ニ付神道葬祭之儀取調
神道葬祭之儀ニ付御尋之趣取調申上候書付
土井大炊頭
去月十一日被仰聞候、神道葬祭之儀ニ付、御觸又者奉行所ニ取極候書面ニても有之候哉、其外、吉田白川兩家より、奉行所江差出置候書面等有之候哉、取調可申上旨、御口達之趣を以取調候處、神道葬祭之儀、菩提寺より差障及出入候節者、吟味之上、吉田家より神道葬祭之傳授請候段無相違上者、當人幷神職相續可致嫡子者、神道葬祭ニ取行ひ、宗判相除、其餘家内之もの者、仕來之通菩提寺之宗判引導可請旨裁許仕候儀、前々ゟの仕來に而、諸向ゟ問合候節も、右之趣を以別紙の振合ニ挨拶仕、既文化四卯年、仁和寺御門跡大覺寺御門跡ゟ社人共新規離檀不相成樣被成度旨被仰立候節も、前書の趣を以、伺之上御口上書差戻候儀も有之候得共、神道葬祭之儀ニ付、御觸共勿論、奉行所ニも元濟等之書留等者無之、且吉田家ゟ神道葬祭傳授請候ものは、前書之通裁許、幷諸向問合等も數口有之候得共、白川家ゟ葬祭之傳授請候と申儀者、先例相見不

不申候、尤吉田白川兩家ゟ、寛政之夏差出候由ニ而、別紙之通書留有之候得共、右者如何之譯ニ而相尋候節差出候哉、子細相知不申候、

右御尋ニ付取調候趣、書面之通御座候、依之書拔三冊相添、此段申上候、

子十月

留帳二番

文化四年卯正月十九日、下野守殿江直達、同廿七日、尾島定右衞門を以、承付候樣御下ゲ承付いたし、翌廿八日、御同人江園田市郎左衞門を以再達、同二月六日御口上書差戻候、

諸國社人共、神道葬祭之儀、仁和寺御門跡大覺寺御門跡ゟ被仰立候儀ニ付伺書、

書面被仰立候趣を以、御沙汰可被及筋ニ無之旨可申達段被仰聞承知仕候、

卯正月廿七日　大久保安藝守

近來諸國社人共、於吉田家神道葬祭受傳授候由ニ而、神葬祭取行度、寺檀之宗門離檀之儀及掛合、夫々之寺院令迷惑之由、今更離檀相願候段、雖爲社人無謂候、神職之者にても、宗判人別相改候儀、從來寺院嚴密ニ取計來候處、新ニ離檀相成候而者亂雜之基、諸國末下一統之害、於仁和寺御門跡大覺寺御門跡寺法ニ差支不容易候間、全先規相立、新規之離檀不相成樣被成度旨、永代寺幷橋本道常を以被仰立候、

右之通被仰立候處、諸國社人共、依職業年來心願ニ而、吉田家ゟ神道葬祭之許狀受候を、菩提寺より差障、又者及出入訴出候節者、吟味之上、家內一統葬祭之離檀ニ相當難成筋ニ付、當人幷神職可成總領迄者、神道葬祭ニ取行、二男其外妻子等者、菩提寺引導宗判を受候得者、全離檀ニ者無之候間、右之趣を以其度々相伺、又者手限ニ而裁許仕來候儀に御座候間、被仰立ニよつて可被御沙汰筋ニ無之旨、永代寺幷橋本道常江相達、御口上書差戻候樣可仕哉、兩御門跡ゟ被仰立候儀ニ付相

伺申候、

卯正月

文政八年酉九月十五日差出、同十一月二日答下ゲ札相達之、

伊賀守領分ニ住居罷在候神主共江、吉田家ゟ神道葬祭之儀免許有之候由ニ而、以來神葬祭ニ仕度旨願出候節、宗判仕來候寺院江も示談之上致納得、差障無之分者、承屆不苦筋ニ御座候哉、

但神道葬祭之儀、宗判仕來候寺院江掛合候而も、何分承引不致旨神主申立候節者、如何相心得可申候哉、

一右葬祭之儀、當人幷神主職相續可致忰之儀者、宗判仕來候寺院ニ而致納得候得共、其餘家內之者葬祭之儀、不致承引節者、當人幷跡可致相續忰計承屆、其餘者難相成筋御座候哉、

但家內之者共ニ而も、宗判仕來候寺院ニ而差障無之節者、承屆不苦筋ニ御座候哉、

右之趣兼而心得罷在度、此段奉伺候、以上、

九月　松平伊賀守家來　山本市右衛門

書面神道葬祭之儀、宗判仕來候寺院納得いたし、差障無之候とも家內一同者難成筋ニ付、當人幷跡相續可致ものは承屆不苦候、且寺院ニ而承引不致分者、雙方とも糺之上、取計方之儀、其時ニ臨被問合候方と存候、

酉十月

酉十一月十四日請取持歸、同十二月廿六日答下札以手紙相達之、

松平伊豆守殿　石川主水正

小堀主稅御代官所攝州兎原郡御影村熊野權現神主上野介、神道葬祭之儀ニ付、別紙之通主稅相伺申候、如何差圖可仕候哉、則伺書相添、此段御掛合仕候、以上、

酉十一月

御書面之趣令承知、小堀主稅伺書をも一覽いたし候處、熊野權現神主上野儀、以來當人幷跡相續可致總領者、神道葬祭ニ可致積り、中勝寺も納得之上、神道葬祭之許狀請候迄者、願之通可申付旨、主稅江御差圖有之可然存候、被差越候別紙壹通令返却候、

酉十二月　　松平伊豆守

攝州御影村神主上野介神道葬祭願之儀ニ付伺書　　小堀主稅

拙者御代官所攝州兎原郡御影村熊野權現宮神主上野介儀、吉田家許狀を請、代々神職相續仕、宗旨者淨土宗同郡郡家村中勝寺旦那ニ而、家內一同宗判を請來候處、神職に御座候ニ付、不幸等有之節者、神職組合之もの、互ニ打寄世話致シ合候儀ニ而、彼是混雜仕、差支之儀も御座候間、以來上野介幷跡相續之伜共兩人は、神道葬祭仕、家內之ものは、是迄之通中勝寺之寺判を請、上野介幷跡相續之者は、宗門帳向後寺判相除、上野介一判を以、神職宗門帳別ニ差出度旨中勝寺にも掛合、得心之上、此度吉田家江相願候處、則神道葬祭之次第免許有之候間、向後當職幷跡相續人共、神葬執行仕度旨願出、吉田家ゟ授り候神道葬祭略次第本紙、幷右家より拙者方江之證狀差出候ニ付相糺候處、代々神職正統之ものに相違無御座候ニ付、右上野介願之通可被仰付候哉、右家司ゟ之證狀神道葬祭略次第書寫、上野介願書、中勝寺斷書共相添、此段奉伺候、以上、

文政八酉年九月　　小堀主稅印

〔德川幕府寺社奉行記錄六十二〕神道葬祭裁許伺物起本

寬政九年巳十二月伊豆守殿江直達、同廿三日承付候樣御下ゲ承付いたし、同廿五日御同人江尾島鍋三郎を以再達、同廿六日落著、

下總國田部村神主池谷山城、自身葬祭之儀、同村西雲寺差障候旨申立候一件吟味伺書、

書面伺之通可申渡旨被仰聞承知仕候

巳十二月廿三日　脇坂淡路守

當七月八日御渡被成候、内田伊勢守申上候、下總國田部村神主池谷山城、自身葬祭之儀ニ付、同村西雲寺差障候旨申立候一件吟味仕候趣、左之通御座候、

内田伊勢守領分下總國香取郡田部村日宮明神神主
池谷山城
巳四拾貳歲

同村天台宗西雲寺
貫豪
巳四拾參歲

右山城吟味仕候處、代々吉田家ゟ神主之許狀請、神職相勤候得共、自身葬祭ニ而執行不申、同村天台宗西雲寺之宗判請候段不相當之儀と存、去ル寅五月上京いたし、吉田家江罷出候節、神道葬祭幷領主江之證狀相願候處、故障之儀も無之候はゞ相傳可致由ニ付、差支之儀無之旨申達、此もの宛所ニ而神道葬祭傳授之書物、幷葬祭許容有之旨之證狀吉田家より相渡候間、請取罷下、

本文證狀之儀相糺候處、神道葬祭差許候旨、吉田家より領主江通達いたし候書面ニ御座候

右證狀領主江差出、神道葬祭之傳授請候段相屆、歸村之上西雲寺江罷越、吉田家ゟ自身葬祭之傳授相濟、證狀も領主江參候間、離檀いたし呉候樣申談候處、離檀之儀は、容易ニ難承屆由彼是難澁申聞候故、再應掛合候内、村役人共立入取扱候ニ付、家内之ものは是迄之通宗判請可申、此もの幷嫡子は宗判除呉候樣及掛合候得共、承引不致候ニ付、西雲寺得心有之候樣いたし度段、去々卯十二月領主江訴出候儀ニ而、村役人共任取扱ニ、家内之ものは宗判可請段一旦申候得共、吉田家ゟ神葬祭之許容請候上者、家内之もの一同宗判も受申間敷申之候ニ付、從來西雲寺

宗判請候はゝ及示談領主江も願之上可取計處無其儀差支無之趣吉田家江申立候始末不埒之旨吟味詰候處可申立樣無之由申之候

一貫豪吟味仕候處去ル寅六月下旬山城罷越同人儀吉田家ゟ自身葬祭之傳授請領主江證狀も參候間離檀致呉候樣申候ニ付離檀之儀は容易ニ難承請旨及答候處得心いたし呉候樣再應申聞村役人共取扱ニ立入山城家內之ものは是迄之通宗判可受間父子宗判除呉候樣掛合有之候得共最初對談も無之吉田家ゟ許容請離檀之儀申聞候段難心得右體押而取計候を承請候而者外檀方江之響にも相成檀家滅候而者迷惑ニ付山城儀前々之通宗判請候樣いたし度由申上候得共吉田家より神道葬祭之傳授相濟候上者親子正統之ものは自身葬祭に相成候共可差障筋ニ無之旨吟味詰候處可申立樣無之由申之候

右吟味仕候趣書面之通ニ御座候山城幷同人跡株相續可致嫡子者神道葬祭之積西雲寺宗判相除妻其外悴等家內之ものは是迄之通宗判幷西雲寺葬式を請可申旨申渡且池谷山城儀同村西雲寺之宗判請來候處自身葬祭執行度存候はゝ同寺江及示談得心之趣を以領主江も願之上可取計處吉田家江罷出候節差支無之趣ニ申成し神道葬祭之傳授請候上領主江申立宗判除呉候樣西雲寺江申談候始末不埒ニ付五十日逼塞可申付候哉相伺申候御渡被成候書付壹通返上仕候

巳十二月

御咎附之儀

內田伊勢守領分下總國香取郡田部村日宮明神神主
池谷山城

右一通り之不束より格別品不宜候間差當り例者相見不申候得共五十日逼塞ニ御咎附仕候

巳十二月

差上申一札之事

私共出入被レ爲レ遂二御吟味一處、吉田家ゟ神道葬祭之傳授相濟候上は、親子正統之ものは、自分葬祭ニ相成候共可レ差障筋ニ無レ之間、山城幷同人跡株相續可レ致嫡子者、神道葬祭之積、西雲寺宗判相除、妻其外悴等家內之ものは、是迄之通宗判幷西雲寺葬式を請可レ申旨被二仰渡一候、

一池谷山城儀、同村西雲寺之宗判請來候處、自身葬祭執行度存候はゞ、同寺江及二示談一、得心之趣を以領主江も願之上可二取計一處、吉田家江罷出候節、差支無レ之趣ニ申成し、神道葬祭之傳授請候上領主江申立、宗判除呉候樣西雲寺江申談候始末不埒ニ付、逼塞被二仰付一候、

右被二仰渡一之趣、一同承知奉レ畏候、若相背候はゞ重科可レ被二仰付一候、仍御請證文差上申處如レ件、

寛政九巳年十二月廿六日

内田伊勢守領分下總國香取郡田部村日宮明神神主　池谷山城

同村天台宗西雲寺　貫豪

寺社御奉行所

前書被二仰渡一之趣、拙僧儀一同罷出承知仕候、依レ之奥書印形差上申候、

上野執當代　明王院

〔德川幕府寺社奉行記錄 六十二〕多人數之神道葬祭裁許、但神子ニ候とも百姓之妻子ニ付、神道葬祭不二相成一裁許、

天保三辰年八月　留帳八拾九番

松平和泉守御差圖

豫州今治神職共神道葬祭之儀菩提寺差障候一件吟味伺書

書面伺之通可二申渡一旨被二仰聞一承知仕候

辰八月十八日　間部下總守

去卯十二月廿日、吟味いたし可申上旨被仰聞御渡被成候、松平采女正申上候、豫州今治神職共、神道葬祭之儀、菩提寺差障候一件、雙方總代共呼出吟味仕候趣、左之通御座候、

松平采女正領分豫州越智郡片山村天神神主西京石見外貳拾八人總代
西京石見
宇治殿島明神神主佐伯左馬之助外三拾三人總代
佐伯左馬之助
外二人
右宇治寺町浄土宗來迎寺親了外二拾八人總代
常照院
寛心
外五人

右西京石見外貳拾八人、并佐伯左馬之助外三拾三人總代共吟味仕候處、神主祠官下社家者、代代吉田家ゟ許狀申請、神職相續罷在、神子丹後は大鈍川村百姓又兵衞後家、大和は龍岡村百姓丈助女房、織居は同村百姓仁大夫娘ニ而、又兵衞丈助仁大夫家は、代々妻子之內神子ニいたし、吉田家ゟ許狀受來、右神主祠官下社家神子共、銘々菩提所者、今治淨土宗來迎寺外二拾八ヶ寺ニ而、右寺宗判幷引導燒香請來候得共、神職之身分、不相當之儀故、一同神道葬祭ニ執行度、年來之志願ニ付、銘々繼目等ニ而、吉田家江罷出候節ニ、右之趣意追々內願いたし置候處、佐伯左馬之助外三拾三人之內、神主祠官下社家三拾二人者、父又は祖父代、神子大和織居は母之代、文化五辰年六月中、此もの共一同總代之もの呼出ニ付、吉田家へ罷出候處、神職相續いたし候正統之もの神道葬祭傳授有之、尤其段證狀相添、領主役所江も通達有之候由ニ付、歸村之上、神道葬祭傳授相濟候段右役所江申立、銘々菩提所江も及掛合、人別帳宗判相除呉候樣申談候處、何れも不承知故、領主役所江尙申立、同所において菩提所寺院江彼是利害有之候得共、夫々本山等江相伺、答申出度旨ニて承伏いたし兼、本山等ニおいても不承知之趣ニ付、旁示談も難整、年來

手間取候內、左馬之助外三拾壹人之祖父神主、大和織居之母も、追々病死いたし、夫々跡職相續之節、銘々繼目之許狀請候得共、神道葬祭之傳授は子孫迄之許狀ニ而、一代切之儀ニ無之候間別段不申請、尤祖父親共病死之節は、論中之事故、菩提寺引導燒香請、葬式執行候得共、前書之通其身一代之儀ニ無之候間、祖父親代ニ傳授請候通、以後執行度旨猶菩提寺江及掛合、領主役所江も申立候儀ニ而、神子丹後外貳人は、外神職共取計ニ任置候旨申之候間、西京石見外貳拾八人儀、菩提寺へ對談も不致、領主へも不申立、吉田家江內願いたし、神道葬祭傳授請候段不埒之至、佐伯左馬之助外三拾三人之もの共も、祖父親代之取計ニ候とも、領主へも不申立、葬祭之傳授請候を如何の儀とも不心附罷在候段、不束之旨吟味詰候處、一同可申立樣無之由申之候、

一來迎寺觀了外貳拾八人吟味仕候處、前書佐伯左馬之助外六拾貳人者、年來之檀家ニ而、家內一同人別帳、宗判差出、葬式之節も引導燒香仕來候處、文化辰年六月中、左馬之助其外之もの共、吉田家ゟ神道葬祭傳授受候間、神職相續いたし候正統之もの共ハ、人別帳宗判除呉候樣申聞候得共、右者寺役第一之儀、不容易事故、不相成旨及斷候處、領主役所ニおいても、右傳授相濟候ものの而已之宗判相除、其餘妻子幷厄介は、宗判葬式等も是迄之通取計候儀ニ而、全離檀いたし候譯ニは無之候間、承引いたし呉候而も不苦事之よし利害受候得共、前々之仕來ニ違候儀ニ付、本山等江相伺候上、答いたし度旨申立置、銘々本山等江伺候處、取調之儀有之候間、追而及沙汰候迄は答可見合、其段は領主役所へも通達有之候由之差圖故、其儘打過居、其後尙右役所江呼出之上、前書趣再應利害受候得共、本山等江相伺置候儀故、同所より差圖次第ニ可相心得旨申立罷在、彼是年來手間取候內、佐伯左馬之助外三拾三人、祖父親共病死いたし、論中故銘々菩提寺引導燒香いたし、葬式執行候段者、右之者共申立候通相違無之、其後私方江差出ニ相成候儀之旨申之候間、吉田家より神道葬祭之傳授相濟候上者、是迄之通、宗判いたし度由之申分ハ難

立旨吟味詰候處、可申立樣無之申之候、

右吟味仕候趣、書面之通御座候、丹後大和織居は、神子之許狀受來候とも、元來之身分、百姓之妻子ニ候上者、神道葬祭之許狀受候段、不相當ニ有之、佐伯左馬之助外三拾壹人、神道葬祭許狀請候者、祖父親代ニ候とも子孫迄之傳授ニ付、其節一同傳授受候當人共、今般神道葬祭ニ相成候上者、右と差別附候筋ニ無之、依之以來佐伯左馬之助外五拾九人儀、吉田家より神道葬祭傳授相濟候上ハ、當人幷父神道職相續可致嫡子者、神道葬祭之積、人別帳菩提寺宗判相除、來迎寺外貳拾八ヶ寺ニ而不差障、其餘妻忰等家內之ものは、是迄之通、菩提寺宗判幷葬式受、丹後大和織居は、神子職之許狀受來候とも、元來之身分、百姓之妻子ニ付、神道葬祭ニいたし候儀は難成間、菩提寺宗判幷葬式等、都而是迄之通可取計旨申渡、吉田家ゟ神子江相渡候神道葬祭之許狀は取上、且西京石見外五拾九人儀、神道葬祭執行度候ハヽ、銘々菩提寺江及示談、得心之趣を以、領主江願之上可取計處、吉田家ゟ傳授請候上、領主江相屆、宗判除呉候樣菩提寺江申談候始末、佐伯左馬之助外三拾三人は、祖父親代之儀ニ候とも、右次第如何之儀共不心得罷在候段一同不埒ニ付、西京石見外貳拾七人者、五十日遏塞、佐伯左馬之助外三拾壹人は、一同急度叱り置、神子丹後外貳人は、外神職共取計ニ任置候儀ニ付、無構旨可申渡候哉相伺申候、御渡被成候書付壹通返上仕候、

辰七月

御咎附之儀

松平采女正領分豫州越智郡片山村天神神主
西京石見
外五拾九人

右寛政九巳年脇坂中務大輔先勤之節、手限伺之上御咎申付候、下總國田部村日宮明神神主池谷山城儀、同村西雲寺之宗判受來候處、自身葬祭執行度存候ハヽ、同寺江及示談得心之趣を以、領主

江願之上可取計處、吉田家江罷出候節、差支無之趣ニ申成、神道葬祭之傳授受候上、領主江申立、宗判除與候樣、西雲寺江申談候始末不埒ニ付、五十日逼塞申付候例ニ見合、西京石見外二拾七人者、五十日逼塞と御答附仕、佐伯左馬之助外三拾壹人は、祖父親代之儀ニ而、格別品輕急度叱りと申上候、

辰七月

〔德川幕府寺社奉行記錄六十二〕百姓より勤職之社人神道葬祭不相成裁許

文政十一子年

子十一月十九日下野守殿江下ツ物書付相添、太田備後守直達、同月廿二日、備後守御役替ニ付、割公事ニ相成、同十二月九日承付候樣、御同人直御渡承附いたし、翌十日御同人江直返達、同月廿三日裁許、

下總國大戸村大戸明神神主山口信之助外貳人相手同村地藏寺葬式出入吟味伺書

書面伺之通裁許可仕旨被仰聞承知仕候

子十二月九日　　土井大炊頭

太田攝津守

右吟味仕候趣、書面之通ニ御座候、先出入濟口證文ニ、剃刀式いたし死體相改候由者認無之、雙方爭之次第、互ニ心得迄ニ者候得共、變死吟味等之類、引導燒香をもいたしながら、死體ニ疵所有之候を不心得取置候寺院者咎申付來、勿論死體取置候節、剃刀式いたし候者寺法之段、觸頭共も申立候儀ニ付、宗判受ながら死體剃刀式を難澁いたし候者、全訴訟方心得違ニ有之、私領百姓ニ而社人兼職いたし候もの、人別帳に社家の肩書いたし、苗字相認差出、其外地頭屋敷ニ而、中間抔いたし候程之身分ニ而、神道葬祭之許狀受罷在候段、不相當ニ而、右者寛政以來、新規之儀ニ御座候、

依之以來社家共之内、百姓ニ而兼職いたし候もの共相果、葬送之砌、地福寺住職墓所江出會、引導燒香いたし候節、死體相改剃刀式いたし候儀ニ訴訟不差障、併薙髪之儀者、いづれ共施主之存意ニ任せ、且地頭江差出候人別帳認方區々ニ候得共、以後社家の肩書苗字共相除、都而百姓並ニ相認、百姓より兼職之もの、以來神道葬祭にいたし候儀者難成間、當主ニ而も地福寺宗判請、其餘者先濟口之通相心得、いづれも年回其外佛事附屆等、相當ニ可取計段申渡、刑部外八人江、吉田家ゟ相渡置候神道葬祭之許狀者取上、新右衛門外四人不屆之段者所拂可申付候哉、京極上總介ゟ石川左近將監江相渡候書付一通相添相伺申候、

子十一月

〔德川幕府寺社奉行記録六十二〕神道葬祭定例之趣意幷神子職之ものも同樣葬祭之積内證濟

文化二丑年

右京亮掛

一越後國西飯島村五十嵐近江、自身葬祭之儀ニ付、同國宮内村養泉寺差障候間申立候吟味、

差上申一札之事

溝口駒之助領分越後國蒲原郡西飯島村五十嵐近江より、同郡宮内村曹洞宗養泉寺江相掛自身葬祭出入申立、領主役所江相願候處、相手養泉寺方ニ而者、新規之儀ニ付、難相成旨申立、一通御糺御座候得共、相濟不申候ニ付去十月中、當御奉行所樣江御差出ニ相成、再應御吟味御座候處、去子十二月中、於國許和談仕度歸村奉願上、扱人立入熟談内濟仕候趣意、左ニ奉申上候、

一右出入雙方得と內實及掛合候處、近江儀、親代迄者祠官ニ御座候處、九ヶ年以前巳年神祇道取締以來、別而神職道忠勤之分於本所滿悅之由ニ而、五ヶ年以前酉年神主號も下、其後吉田家目

代宮川彈正上京ニ付、留守中假役相勤候、右爲賞美少宮司職號も下置、近江妻美濃儀は、去々戌年、是又吉田家より神子之許狀願受候處、神職之身分にて、寺院之宗判受候而者、不相當之儀と存、去々亥年正月中、自身葬祭之許狀相受候ニ付、正統嫡子神子共、葬祭致度由養泉寺江掛合候得共不得心ニ付、領主役所江願出候處、養泉寺ニ而、是迄家內一統宗判致來候處、新規ニ吉田家より免許相請候迚、宗判除候而者、檀中ニ多分社家も有之、響に相成候上者、寺相續之差障、殊ニ法中江對し甚歎敷儀ニ付、仕來通宗判可致旨申之候得共、吉田家の御證狀頂戴仕候上者、正統嫡子者自身葬祭可仕候得共、其外家族之儀者、是迄之通養泉寺宗判請候積、且同人妻之儀者、御利害之趣も御座候儀ニ付、自身葬祭難相成筋ニも候得共、一旦神子許狀相請候儀ニ付、正統嫡子神子共ニ自身葬祭いたし度、右ニ付是迄宗判受來候先祖江對し齋料差出、正統夫婦共自身葬祭仕候積ニ雙方熟談、納得之上內濟仕候上者、以來右一件ニ付、聊御願筋無御座候、依之爲後證連印濟に證文奉差上候處仍如件、

文化二丑年三月

濱口駒之助領分越後國蒲原郡西飯島村伊夜日子明神

訴訟人　少宮司　五十嵐近江

同領同國同郡宮內村

曹洞宗養泉寺代

相手方　弟子　祖明

寺社御奉行所樣

〔德川幕府寺社奉行記錄六十二〕神子職神道葬祭菩提寺納得不致上者佛葬ニ可相成處神葬ニ相成候裁許

文政十二巳年六月廿七日土屋相模守宅內寄合おいて評議卽日裁許

差上申一札之事

備中國井原村神主三宅長門、相手同國北山村古義眞言宗明星寺全覺、葬祭出入及出訴候處、相手全覺儀、目安御裏判難澁いたし候由、長門御訴申上候後、全覺儀、御裏判難澁いたし候ニ者無之旨御訴申上候ニ付、引合之者共一同被召出、再應被爲遂御吟味候處、訴訟方三宅長門儀、神道葬祭之儀、明星寺全覺一旦承知いたし、其後及違變候段難心得、既同人江遣候文通扣も有之候旨申立候得共、通書も無之上者、自己之書留迄ニ付、右申分者難御取用、相手方明星寺全覺儀も、享保之度、同派之寺院江先御裁許之趣も、國中古義眞言宗一派において、新規葬祭者不致仕來之由申上候得共、文化之度、備中國笠岡村同宗觀照院より、同村神主小寺常陸へ相懸り候葬祭出入、熟談之上、神道葬祭ニいたし候儀も有之、殊享保之出入者、葬祭之一事を爭候ニも無之、明星寺先住等加り候ニも無之上者、右御裁許之趣を以、仕來通宗判いたし度と之申分難立、其餘無證據、中年迄之義者、雙方共難御取用候、三宅長門儀、吉田家より神道葬祭之免許請傳授相濟候上者、以來神主正統之者共、幷神子之許狀請候母妻共、神道葬祭ニ執行、次男其外家內之者共者、仕來之通り明星寺ニ而、宗判引導燒香可致旨被仰渡候、

一三宅長門之儀、神道葬祭之免許請度旨、地頭陣屋江相願候而茂聞濟無之候迚、無沙汰ニ吉田家江罷出、地頭ニ而茂聞濟候趣ニ申成、神道葬祭之免許等請候段不埒ニ付、逼塞被仰付候、

一明星寺全覺儀、長門より目安御裏判相附候節、右目安一覽之書付江宗門帳通り長門事政之丞と不認候而者相成間敷と存候者、別段可申立者格別、宗門帳通りニ無之候而者不相成旨強而申立、村役人共より申聞候をも不承請、同樣申強罷在、目安一覽之書付差出候儀難澁いたし候段不埒ニ付、逼塞被仰付候、

右之通今日於御內寄合御別席被仰渡、一同承知奉畏候、若相背候者、重科可被仰付候、仍御請證文差上申所如件、

神葬式

池田修理知行備中國後月郡簗瀬村八幡井原村井原明神兩社神主
同村
訴訟方　三宅長門印
一橋領知同郡北山村古義眞言宗
相手方　明星寺
全覺印

文政十二巳年六月廿七日

寺社御奉行所

前書被仰渡之趣、拙僧儀も罷出奉承知候、依之奥書印形差上申候、以上、

高野學侶方在番
花王院印

〔鈴木叢書十五〕伯家神事式

葬所次第

先坑前敷白砂、上袴脚居、安置比登岐於保土古、長柄之儘、白丁以下從者退下次祭主家主親族等手水、訖各向比登岐一揖著座、次役人供燈明香爐饌物、清水一器、洗米一盛、次祭主進坑前中清祓、執大麻讀祓詞、以切麻散米祓之、訖復座、次祭主焚香二拜、三種祓三反拍手、二地鎮祝詞、三種祓拍手二拜、如初退下、次家主親族等進著祭主之座、各焚香再拜、次比登岐納坑中、以白丁役之、次家主覆土、此時靈體安瓦ヶ久土ニ歸瓦世給止申次覆土之上立眞賢木、三十ヶ日立置之、後立墓石碑、次家主親族等一揖退下、次祭主家主親族等、於途中便宜所、以賢木葉各身體祓之、次家主親族等歸家、於清間之外靈璽遙拜、

一六十四ヶ日之夜、靈璽靈社江遷座、供物奉幣如初日、○中略

地鎮祝詞

掛毋畏當某靈體實名大人、不意毋今年號月日壽死給比奴、依之靈魂波靈璽仁敬奉遷、靈體乎今時土中仁令納留、今日與利永久夜見乃國仁安久瓦介隱鎮利給倍止謹敬氐白須、

〔行治神道葬祭拾式錄〕吉田家葬祭式

行列之式

先松明、〇以下行列略、次拜法、如常、次取榊二拜、呪曰、阿奈某神靈安鎭志賜倍、次打鳴、次五重加持、次三種加持、次中臣祓一座、同音、三種祓無之、次元本加持、呪曰、口傳、安鎭加持、次拍手、大小、役人一同拍手、次棺治已前散米二度、次役人土於取氏棺へカクル事三度、治終後榊立墓上、

歸家之行事

先調靈札、寸法有作法、座八角、以檜作之、以筋立其前、筋記靈號、筋後之板、記姓氏名字位階年月日時、三日之間備膳、六根清淨祓中臣祓等任心、又日備膳、洗米灑水等任心、祓同前、又者前夜中臣祓十二座、當日備膳等、同音祓勤行、

〔神道葬祭家禮〕於靈坑乃前火盞乎向北、火盞乃前仁設案雲、供御酒御肴御果子等乎具布、敷圓座喪護宜唱、宜唱語給氏、拍手二津、唱鎭里賜江定理賜江、火盞ヲ靈坑ノ中ニ入、上下四方ヲ炭ニテツメ、其廻リヲ杉ノ板ニテ圍ミ、土ヲカケ封ジ、拜シテ退ク、立歸氏、行水志天、屋乃内倍入留、于時尸者唱曰、天道爾波無穢、地法爾波有穢、恩賴乃故乎以、穢事波天命也、無私乃禮地祇爾宜申壽、拍手一津、然後屋爾入ル、

〔和漢習合葬祭記略〕葬送ノ式ハ、古風ノ傳ハラザル事、今更云フマデモ無シ、諸家ニテ神道葬祭トイヒ傳フル物モ、皆儒法ニ倣ヒテ、近代ニ作レル物ト見ユ、今田舍ニテ行フ中ニハ、却リテ古風ノ存スル事有ルベケレドモ、後世ノ誤謬多ク、ソノウヘ佛意ヲ交ヘシ事ノミナレバ、詳ニ辨ヘ知リガタシ、予〇草鹿砥宣隆多年此事ニ心ヲ用ヒテ、此處ノ家說、彼所ノ傳ト稱スル物ヲ取集メテ合セ見レドモ、然ルベキ物有ル事无シ、然ルヲ一昨年來、浮屠氏ノ手ヲ離レタレバ、左モ右モ從來ノ風ヲ替テ行ハザル事能ハズ、コレニ仍リテ他日宜シキ式ヲ得ルマデノ爲ニ、諸家ノ式ヲ參考シテ、假ニ和漢混雜ノ法ヲ作リ、所管ノ神部等ニ行ナハセタリ、サレド其輩ミナ卑力乏財ナレバ、大ニ行フ事ヲ得ズ、タヾ簡約ヲ主トセリ、マタ禮記ニ、喪禮與其哀不足而禮有餘也、不若禮不足而哀有餘也、

祭禮與其敬不足而禮有餘也、不若禮不足而敬有餘也トイヘルハ、漢人ノ語ナガラモ、古意ニ適ヘリト常ニ思ヒ居ル事ナレバ、此意ヲ本トシテ定メタル事多シ、○中略

墓所ニ到リ、墓地ニ幕ヲ張ル事ハ、喪主ノ心ニ任ス、幕ノ製法ハ吉田家ノ傳アリ、葬穴ノ側ニ臺ヲ置テ棺ヲ居エ、机ヲ設ケ、或ハ机ノ代リニ辛櫃ヲ用ヒシ事モ有リ、正面ニ靈璽ヲ安ジ、葬主ノ席ヲ鋪ク、此時葬主著座シテ、辛櫃ニ入レタル供物ヲ居エ、奉幣祭文拍手再拜シテ座ヲ退ク、ソレヨリ、家族已下次第ニ拜スルナリ、近親ニハ木綿著ケタル榊ノ小枝ヲ銘々ニ手向サセタル事モアリ、コレハ葬主ノ心ト時ニ從フナリ、右畢リテ供物ヲ撤シ、棺ヲ窆ム、此時心得アルベキ事甚多シ、諸書ヲ見ルベシ、銘旌ヲモ棺ト共ニ埋ムベシ、上ニモ云ヘル棺ノ製作ト、此葬穴ノ用意ハ、委考書目ヲ擧タル儒家ノ書ドモ、及葬祭里神官儀終記ニ委シ[illegible]見[illegible]リ、必見ルベシ、葬具ノ花美ヲ書キテ、コレラノ事ニハ、力ノ及ブ限リ念ヲ入ルベキヤウニト、每度葬主ニ諭シ示ス事ナリ、

棺前ノ拜禮ノ間ハ、銘旌ハ棺ノ右ニ立、高張挑燈ハ棺ノ四邊ノ明ルキヤウニ立、鎗或長刀傘ハ後ニ立ツベシ、本來ハ役人持テ居ルベキナレドモ、狹キ所ニテハ然ハ爲シ難シ、

藏棺終レバ、葬主ハ靈璽ヲ守リ家ニ歸ル、ソレヨリ後ノ事ハ下ニイフベシ、

家ニ歸リテノ祭祀又後ノワザドモノ事

藏棺既ニ終レバ、葬主ハ靈璽ヲ守リテ家ニ歸リ、盥漱シテ靈璽ヲ假ノ靈墳ニ安シ、供物ヲ備ヘテ拜スル也、供物ハ出棺ノ時ノ如シ、隨分念ヲ入ルベシ、コレラノ事ハ留守ノ者ドモ取計ヒテ、深夜ニ及ブトモ早ク終ルベク爲スベシ、○中略

祭文

棺前

掛毛畏伎何某君乃御前爾白久、心盡氏種種爾療之奉利之加杼、得堪不給之氏終爾身罷給比奴、是以進毛不知退毛不知泣悲米杼毛、更爾驗无禮遠、世乃任爾奧城爾藏奉牟登須、故如此乃狀乎平氣久安氣久聞召氏、速久遷利坐登禮代乃幣帛乎捧持氏畏畏毛白、

墓所

掛毛恐伎何某君乃御前爾白久、此墓爾平氣久安氣久鎮給比、又靈乎分氐、本乃家爾毛歸給閉登禮代乃幣帛乎捧持氐恐恐毛白、

此文一昨年ノ正月臨時ニ作タリシヲ、後ニヨク見レバ、儒家ノ木主ヲ書終リテ唱フル祝文ト同ジ意ナルハ、モト此禮ノ漢風ニ習ヘルガ故ニテゾアルベキ、

歸家儀禮ノ初儀ナリ

前文同上此乃小牀爾鎮坐氐、今夕乎始氐、朝夕爾御祭仕奉狀乎平久安久聞召登白、

朝奠夕奠モコレニ同ジ

前文同上今日乃朝食、或夕御食平久安久聞召登白、

十日廿日マデ毎日アリ、五十日同ジ

顯世乎去給比之自利日乎數禮婆、既久十日或二十、三十、四十、五十日、爾奈毛成奴流、故是乎以氐、今日乃朝明爾此進流味物乎平久安久聞食登白、

〔早懸略記〕一早懸廟所マデ行列ヲ野送ト云、刻限ハ夜ニ入テスベシ、○中略場所ニ至、送祓靈鎮拜禮之順、荒增左ニ記ス、尤其時ノ見計次第ナレドモ認置ナリ、

祭司送祓祝詞濟テ、祭主拜家族順々拜禮ナリ、○圖略右前ノ祝詞濟テ、鋪設ハ前ノヲ用キル也、供物取替ル分也、前後トモ棺ノ前ニテ執行也、水ト榊ハ別臺ナレバ、位牌ノ前ヘ別ニ飾テモヨシ、見合次第也、忌服ニカヽル緣者拜スミ次第、穴ヘ納奉ル也

勿論丈夫ナル綱ヲ付、穴深キコトユヱ、ソット穴ヘ入ベシ、土ヲカケ上ヲ平ニナラシ、誌木立、玉垣立テ、幕張、クルリト榊立ル也、前ニ水榊葉少シ枝添テ手向、

前後送祓祝詞、祭主ノ心任ナレドモ記シ置、

前祝詞

謹美敬比畏美畏美申須詞乃由波、此所爾往古與利鎮坐遠御祖乃神等、代々乃御祖乃御靈、親族乃御靈乃御前爾申佐久、今度何某乃御靈平同久此地爾鎮祭禮波、各々御神靈等乃御意安良介久平介久和合坐、共爾永久久志久鎮利給比氏、祭主乃姓名家内禍事无久、彌益爾榮志免給比、夜乃守日乃守利仁幸邊給邊止畏美畏美毛申須、

爾時年號月日　　祭主姓名敬白

後祝詞

謹美敬比畏美畏美毛申、爾時年號月日以氏、此土地平清久淨免氏、鎮祭留某乃御靈乃御前爾申佐久、今日與利後千萬歲乃末代満毛、氏遠都御祖等乃御靈止共爾此土地爾鎮利給比氏、祭主姓名家内禍事无久守給比、子孫等次々彌増益爾家系榮邊免志賜比氏、命毛長久幸給邊止申事乃由平平介久安良介久聞食、守利惠美幸給邊止畏美畏美毛申須、

年號月日　　祭司姓名敬白

〔宇治葬祭次第〕路次ハ親族以下柩ノ後ニ隨テ行クナリ、先子タルモノ嫡庶次第ニ列ス、次ニ有服ノ親族、次無服ノ親族、次賓客等ナリ、女ハ男タルモノヨリ後ナルベシ、又親賓等先達テ墓所ニ待モアリ、又郭外ノ路ノ旁ニ居テ拜禮ヲナスモアリ、

葬地ニハ白幕ヲ張廻スモアリ、壙ノ前ニハ筵或ハ白布ヲシキ、其上ニ柩ヲスユ、柩ノ前ニテ親族拜禮アリ、但便宜ノ所ニ、男ハ左ノ方、女ハ右ノ方ニ列ヲナシ、嫡庶等ノ次第ニ任セテ、男タルモノハ一人ヅヽ進出テ拜禮ヲナスナリ、女ハ進出ズ居ナガラ拜ス、イヅレモ再拜ナルベシ、或ハ此時祝文ヲ讀アグルモアレドモ、土ヲカケザル前ニハ拜禮バカリニテ、土ヲカケテ後、清方ニテ祝文ヲヨロム順然ルベキナリ、

拜禮終テ柩ヲ壙ヘ下サシム、時ニ親族以下供奉人等少シ其場ヲ立退ク、是土ヲ掛ルニ及ンデハ、

其場ニ立合モノ、葬禮ノ觸穢ヲ免ルヽコトヲ得ザル故ニ、土掛ノ役者ノ外ハ、清方ニテ事ヲ行フナリ、仍速懸役人ハ、七ケ日ノ穢ノミナレドモ、土カケノ者ハ、三十日ノ穢、百ケ日ノ禁忌、葬禮役人ニ替ルコトナシ、此役者ハ神領ノ百姓ヲ呼ヨセテツトメシム、路次モ行列ノ先ニ立ルモアレドモ、先達テ葬地ヘ遣シ置宜キナリ、凡速カケ役人ハ、常服ニテ供奉ナレドモ、此役人ハ白布ノ淨衣ヲ著、笠ヲカブリテ、葬禮役人ノ出立ナリ、此者ハ鍬ヲトリ、壙ノ前ニスヽミ、三鍬土ヲ下スバカリニテ、鍬ヲ差置テ退ケバ、所ノ穢人受取テ、トクト土ヲカケ取シマフ事ナリ、棺槨ノ廻リヘハ土器炭ナドヲ入テ、後土ヲ下シヨク築カタメルナリ、棺槨ノミエヌ程ニ埋メテ、其上ニ平カナル石ヲ襲フ、又石ヲ置ザルモアリ、此石ヨリ下ヲ埋ルニハ、土ヘ石灰ヲ交ルモアリ、サテ平地ニナル程ニ土ヲカケ、ヨクカタメ、或ハ白砂ナドヲシキ、サテ其廻リニハ榊ナドヲ立並ベ、竹カ板ニテ垣ヲツクリ構フルナリ、榊ノ内ハ甲、垣ノ内ハ乙、垣ノ外ハ丙ナル故ニ、垣ノモトマデハ清方ノ人モ參リテクルシカラズ、此垣等ハ甲乙丙穢ノ界ヲ別ル爲ナレバ、三十日ノ穢ノ内ニハ取退ル事ナラズ、仍多分ハ三十五日目ニ取退ケテ、其後ニ石碑ヲスヱルナリ、或ハ此垣ヲ取退ル事、月マタギ、年越ニナレバ宜カラズトテ、三十日穢中ニ取退ルモアレドモ、甚然ルベカラザル事ナリ、其實ヲ知ザル故ナルベシ、

サテ壙ニ土ヲ下スニ及ンデ、親族等清方ニ列ヲナシ、コヽニ於テ初メテ哀ヲ擧ゲ、祝師一人、其列ヲスヽミ出デ再拜シ祝文ヲヨムナリ、于時其前ニ食案ヲ設ケテ、米酒水ナドヲ供スルモアリ、又コレヨリ先ニ地鎭ノ儀ヲ行ヒテ、土地ノ神ヲ祭ルモアリ、サテ祝師ハ遺骸ヲ清靜ノ地ニ葬ル狀ヲ知食テ、永久ニ鎭タマヘト其神靈ニ告ル事ナレバ、浮屠者ノ清方ニテ、無常ノ呪願ヲヨム禁忌ノ如ク、七ケ日ハ憚ルベキ事ナリ、多分ハ有服ノ親族ノ中ヨリツトムル故ニ其沙汰ニ及ザルカ、然ドモ吾家〇荒木田ニテモ、先考經林卿ノ時ニハ、猶子氏彦神主、祖父經晃卿ノ時ニハ、塙守世卿、イヅ

レモ無服ノ親戚ツトメケルナリ、地鎮ノ儀ハ、多分祝師一人ニテ兼行フナリ、然ドモ吾家ニテ經林卿ノ時ニハ松谷常有、經晃卿ノ時ニハ椿時範、イヅレモ一代權任ノ人ツトメケルナリ、勿論土地ノ神ヲ祭ル事ナレバ、禁忌ノ沙汰ニモ及ザルナリ、其後親族等一同ニ手ヲ拍、唏哭悲歌シテ退クナリ、祝文ハ炬火ニテ焚キ、家ニ持歸ルコトナシ、サテ垣ノ前ニハ、檜其外何ノ木ニテモ牓示ノ如クニ碑ヲツクリ、其官姓名ヲ記シテタテ置ナリ、但コレハ石碑ヲ建ルニ及ンデ取退ルナリ、其牌ノ前ニ食案ヲスヱ、其左右ニ土瓶ヲ置ク、コレハ時ノ花ヲモル料ナリ、又垣ノ上ニハ、路次ノ間、棺槨ノ上ニ覆ヒタルヤ子ヲスグニカケオクモアリ、又棺槨ノ四方ニ張タル布ヲ其儘垣ニ張オクモアリ、又傘ヲ垣ノ後ノ方ニ結ツケテ立オクモアリ、又白絁カ布ニテ幡ヲツクリテ立ルモアリ、喪葬令ナドニハ、幡等ノ員數ハ、其位ニヨリテ多少ノ差アレドモ、今用ユル幡ハ、位ノ高卑ニモヨラズ、多分ハ無位ノ男子、又ハ婦人ノ葬地ニ一竿カ二竿タテオクノミナリ、又官長ノ墓ニハ鳥居ヲ立ルナリ、其家ニハ入棺ノ後、臥蓐ヲ取退サセ、野送ノアトニテ、其間ヲ掃除シテ清ムルナリ、サテ枝屋ニテモ廟ノ間ニテモ、然ルベキ所ニ靈棚ヲ設ク、或ハ机ニモスルナリ、中央ニ榊ヲ立、其神靈ヲ降シテ、平生ノ如ク朝夕饌ヲ供スルナリ、多分ハ白木ノ膳ニ土器盛ナリ、清火ニテモ炊カズ、別火ニスルナリ、勿論イマレ屋ノ火ニモ混ゼズ、凡喪祭ノ間ハ亡者ノモテナシニテ、禰宜等ハ靈供ト同食セズ、吉祭ニナリテハ神靈ノモテナシ故、同食ヲ憚事モナシ、サテ菓子其外新熟ノ物、又ハ他ヨリ送ル賻奠盛モノヽ類ミナコヽニ供ス、又平生所用ノ裝束道具ノ類モ傍ニ陳子オクナリ、浮屠ヲ交ル家ニハ、野送リノ時、裝束等ヲ辛櫃ナドニ入テ行列ノ中ニアリ、葬後ニハ寺院ヘ送ル事モアレドモ、吾家ナドニハ然ラズ、又他ヨリ吊祭スル賓客モ、此所ニテ拜禮ヲナスナリ、但此所ニテ祭ルハ一周ノ間ナリ、五十日ノ後ニ取退ルモアリ、又靈棚ニ燈火ヲタツルハ夜バカリニテ、晝ハ用ヒズ、墓ヘハ五十日ノ間朝墓參ルナリ、米水榊時ノ花等ヲ供ズ、但七日ノ間ハ、トリワ

ケテ拜禮ヲ致スナリ、

〔民事慣例類集 葬埋〕葬埋ハ、○中略墓地ニ至ル迄ハ、死ヲ表セズ、柩ヲ駕籠ニ入レ、篤疾ノ形狀ヲ以テ舁送ス、道路ヲ穢スヲ忌ム故ナリ、葬埋ノ取扱ハ、總テ番非人ノ職掌ナリ、神葬ノ家ニテハ、忌掛ノ親族中ニテ祭主ヲ勤ム、若シ他人ニテ勤ムルトキハ、必ズ別火スルコトナリ、伊勢國度會郡

〔行治神道葬祭拾式錄〕引馬諏訪社神主葬祭式寫

杉浦信濃守從五位下藤原朝臣國頭府君　元文五年庚申夏六月庚午朔癸酉上刻卒

先孝子國滿隔二衾障一捧レ衣招魂　次門表以二白布一書二喪家一也○中略

行粧記別書

次欲レ到二於葬所一設二松明一、次戌中刻到二葬所一、孝子親族入二喪屋一哭、次魄車安二於案上一東面魂車者安二於便所一、次祭主諸祠官預立二列於清所祭場一北面次祭主進二於高案前一迎レ神、拜而復二本座一、次神部二人進而獻二神供一、次祭主進二祭座一玉串拜、次諸祠官進二祭主之後拜座一、次祝詞、次各復二本座一、總拜立列、次魂車進二於魄車前一而安二車共南面次祭主及諸祠官、拜二於魂車一而退下、次孝子進二於魂車之前一哭拜、次奠二供物一鏡代、千菓、生菓、御酒、魚、次孝子祝詞、次孝子拜禮而退、次親族進拜禮、次供奉人禮拜、次孝子從二魄車一入二帷幕內一、仰二事於老臣一出從二魂車一、次孝子及親屬、供二奉魂車一歸二於喪家一、次到二門外一而盥漱入二門內一、次安二魂車於上堂之上座一挑レ燈、次孝子奠二供物一拜禮、親屬隨レ之、次各退下、

后土神祝詞

惟當來年辰元文五年庚申夏六月初五日當時乎以二祭廷乎儲一、神所乎調氏迎奉利、仰貴掛毛畏幾埴安彥神埴山姬神止御名乎婆唱氏、大御酒乎貯、大御贄乎獻利、太玉串乎捧持、宇津御前爾宇津伏氏、稱言竟奉、

信濃守從五位下藤原朝臣國頭、身去爾由氏、此所乃埴地乎彫穿留、尸乎葬利藏女、奥津棄戶爾將臥

之事乎事不過聞食氏、黄泉平坂留坐須神毛祟无久、泉門留塞留神等毛障无久、常磐乃如久常長留、堅石乃如久幾久留、比土岐乃具、崩事无久、於保止古乃粧比、破事无久、守給比贓卜給止、従五位下藤原朝臣輝昌、恐美恐美毛稱言竟奉良止久白、

顯考信濃守従五位下藤原朝臣國頭府君、往昔延寶六年戊午八月乃下三日留生給比氏、六十有三歲能春秋乎經、今年乃夏五月乃朔日留、不圖毛病乃床留臥給比、六月四日乃曉留神去給奴禮波、衣乎捧氣復寸禮止毛魂不歸、胸打足磨志氏哭悲止毛言乃答无氣禮波、無所爲志氏、比止伎於保止古乎調陪、殯乃禮乎爲志氏、此月乃今日乃日隱乃夕留、葬利藏免奉奴禮波、今日與利以往、顯露乃事乎不所知食志氏、靈魂波日乃少宮留歸利、形魄波黄泉國乃幽乃宮留坐、靜留永久隱禮給倍止、所所乃故有神司與利親屬乃男女留至末氏、來利集比、葬乃禮乎助奉留狀乎所知食給止、元文庚申乃夏六月初乃五日乃夕留、孝子藤原國滿、美津奈乎携倍慕比悲美號呼申、

〔行治神道葬祭拾式錄〕濱松庄小池村神明社神主竹山日向秦茂睦葬祭行事

竹山太郎右衛門〈○秦茂似〉十月〈○寬延二年〉十四日卒

十五日到葬所、棺北向、次宗安寺法式、次寺寺拜法、次葬祭事畢退下、次親族家臣以下相會、棺坑倍入埋南向、次孝子榊ヲ爲荷到葬所、塚爲築上、榊爲植、次鳥居建、〈尤注連无州〉次灯燈、次松明、次哭拜、次奠供物、〈洗米干魚〉次陽聲、次拜、次祭文、次拜式畢退下、

〔行治神道葬祭拾式錄〕遠州佐久良池社神葬祭式〈祭主小池竹山日向〉

葬式

先剋限、祭主入喪屋、孝子出向拜、次祭主出喪屋、乘輿參向葬所、次出棺、〈輿祭主之列、少間列〉次到葬所、〈魂魄二車者、祭主祭事之間者、安便所、〉次祭主祭場之祭事、次祭事畢而退下、〈此時安可所於二車、〉次孝子魂魄二車前而祭事、次孝子之祭事畢而命事於老臣、次納於魄車葬所、引幕於四方、厭他見、次孝子供奉魂車歸家、次安魂車於出居、次供

物、酒肴次拜禮、次親屬以下禮拜、

〔垂加流葬祭式〕葬禮ハ、存生ノ通ニ衣裳ヲ改メ、沐浴シテ寺ヘ遣シ、其上ハ寺次第ト仰ラレ、萬事出雲路民部ニ打任セラル、天和二年壬戌九月十五日、伊勢ヨリ祓參リケレバ、肩衣ヲ著シ頂戴シ玉ヒ、其肩衣臨終マデ取玉ハズ、袴ハ著玉フコトナラズ、十六日民部ヲ始諸門人、中臣祓ヲ小聲ニ唱フ、翁モ口ノ中ニテ唱ヘ安座ス、午計終リ玉フ、民部尸者トナリ、入棺ノ時、髮ヲユヒ、上下ヲキセ、脇指ヲモ入、乘物ニテ夜ニ入テ寺ヘ遣リ、佛事ノ內書物ヤ武村二人付置、門人墓所ヘ參リ槨ヲ穴ヘ入、松脂ヲ板ニシテ持行、都ノ底ヘモアテ、角々ヲ松脂ヲワカシカケ、其外ヲ炭ニテ詰、ツキ堅メ、墓ノ廻リニ絲ヲ引置扱棺モ被ニテ丈夫ニサヽセ、槨ノ內ヘ納メ、間ヲ、松脂炭ノ粉ニテ、墓誌ハ瓦ニ、やまざきかゑもんつかトホリ付燒セ、棺ノ上ヘ入、扱槨ノ蓋ヲシテ、上ヘモ松脂ヲ流シ、土ヲ掛、何レモ中臣祓ヲ唱ヘ、神拜シテ退去、

〔梵舜日記〕元和二年四月十五日、辰上刻金地院ヨリ公方樣〇德川秀忠御用トシテ書狀來、則令登城、神道佛法兩義御尋之所也、　十六日、相國〇德川家康之御事、以神道之儀、神位ヲ駿州久能ヘ遷座之儀ニ相定被仰出也、　十七日、相國巳刻過ニ御他界也、夜入府中之御城ヨリ久能御城ヘ御移、金地院予俄罷越、雨降也、　十八日、當山御移之所地形ヲ、年寄衆本多上野、土井大炊頭殿、安東帶刀、鳴瀨隼人、松平右衞門、板倉內膳、秋本但馬、已上七人也、各評議ニテ定、夜入迄普請也、　十九日、假殿作、座次三間四方ニ立ツ、井垣鳥居雙灯爐二ツ立、次遷座也、亥刻左右絹幕ヲ引也、筵道絹布ヲ敷也、假殿ヨリ廿五間計也、絹布廿二帖、筵道絹布十端也、

久能本社事

御社西　御弓　御矢　楯　鉾此役者狩衣

神前西　散米　御鏡　御幣　鈴

御輿供奉烏帽子上下　御弓　御矢　楯　鉾
右此作法也、御幣ハ榊原內記持也、鈴ハ予振之也、閉之儀式、灯明已下ヲシメシ遷座也、次內陣出來之時、悉掃除申付、次鏡ヲ內々陣ヘ納之、散米悉以大麻ヲ祓之、御鏡ヲ予奉納也、次御神供一膳、後菜六膳也、後菜卅六味也、皆精進也、次机立、軾絹ヲ敷、備神供也、內記ヘ作法申付也、次三種加持、次三種大祓、百廿座誦之、次祝戶降文、

謹白、元和二年卯月十九日亥時、撰定天吉日良辰乎、太政大臣從一位源朝臣家康公乃御形像乎駿州有度郡久能乃高嶺仁奉葬、備御供御菜乎、此狀乎安久介鎭坐氐、天下靜謐、彌繁昌長久乃基乎守利坐與恐美恐美毛奉申、

辭別留申佐久、自然參集中仁、不心不淨乃者在止毛、御廣濃御心惠乎以天、守護幸給陪止恐美恐美毛申須、

次二拜、次拍手、次退下、次奉幣兩段再拜、榊原內記ニ作法之義敎申也、次年寄衆各一拜、本多上野、土井大炊、安東帶刀、鳴瀨隼人、松平右衞門、板倉內膳、秋本但馬、於內陣在之、予可然之由申入也、次各退下、其夜各府中ヘ歸也、

〔土津靈神言行錄下〕及公〇保科正之之晚年、深信本朝之神道、遂悟卜部之奧秘、故及其薨、遺命于子臣、不作佛事、自來國人、始知有儒禮神道者多、化之者亦有之矣、

〔家世實紀二十〕寬文十二年十二月十九日、土津樣〇保科正之神道御葬祭之儀、吉川惟足、稻葉美濃守樣ヘ申上、極秘御相傳之御方、格別之故を以被聞召屆、

土津樣には、御薨後、神道之式を以、御葬祭御執行候樣に被遊度、御在世中被仰置、終ニ御逝去被遊候、仍而何事も佛家之式を不受御執行在之候處、當時之振合、其事甚難澁に有之候故、御遺骸江戶御發輿之前者、於寺院諷經之御回向有之可然ト、上下一同僉議相決、此段美濃守樣ヘ被仰上被下候樣、稻葉丹後守樣ヘ友松勘十郞申上候ニ付、其通御物語有之候、然處惟足儀、神道之御

式御執行ニ付、御屋敷へ罷越居、此儀を承り、神道之御執行ニ、釋氏之法を雜用有之候而者、本朝之舊式を被正候詮無之事に候ト申候故、勘十郎致奮發、當時之流俗に迷候而、諷經之儀及評議候段、亡君之御遺言に背き、本朝之道を穢、無勿體事ニ候、併此儀丹後守様へ申上、美濃守様迄達御耳候間、何卒其元御働ニ而、諷經無之様取計給度候、悉皆此度之儀、拙者無調法に候、たとへ如何様之罪に被處候とも、其段は不苦候、何れも御遺意相立候様致度旨申候ニ付、惟足儀、今日丹後守様へ罷上り、委細申上候得者、諷經之儀、昨日美濃守へ爲申聞候間、定而御老中へ物語候事に可有之、此上者我等一人申候而も不叶儀も可有之候間、一同參候様被仰、丹後守様御同道にて、美濃守様へ罷上り、其次第申上候得者、今日同僚へも物語、事濟候上者、今更改候事難成候、尤中將殿屋敷にては、諷經執行も候はゞ、忌嫌候も理に候得共、外寺院に而致候事、道に於而相障候儀は有之間敷候、周く用候而不捨事、天下御仕置之大法に而、神道者に不似合狹き事を申候と被仰候ニ付、たとへ何國如何様なる所にて致諷經候共、中將殿之爲、執行仕候と申にては、唯一神道と申儀に而者無之候、此段被聞召分被下度旨申上候所、甚被成御立腹、此儀は其方了簡ニ而者有之間敷、定而勘十郎爲申候事に可有之、勘十郎は口之强き者に而、荒馬之如く、中將殿に無之候而者、制御難相成者に候、其方能承り候へ、中將殿ニ者、忠信成生質ニ而、公儀之御政事、害無之様ニと毎事被念入候仁ニ候得者、時勢之法度を闕き、所存を可遂とは被存間敷候、尾張大納言殿ニ者、嚴父之遺言ニ而、儒禮被取行候得共、諷經之執行者有之候事に候、若例も有之候はゞ、可申由被仰候故、豐臣太閤之舊例有之候、然れ共御當家へ對シ、すゐ惡敷仁に候得者、如何可有之哉ト申候得者、是者例ニ難相成ト益御立腹ニ候故、所詮爭候而者、道之爲身之爲不可然、無是非事に候間、一己計志を立、唯一を以、私宅ニ而奉祭土津様、年來之御恩ニ奉報外無之、申所不達相止候も天命と致覺悟再び申上候者、周用不捨之御仕置と被仰候得共、當時神道は廢れ、

佛道之盛成樣子ニ較候而者、九牛が一毛にも無之候、周用不捨之御仕置ニ候はゞ、神道は本朝之道ニ候得者、雙方釣合候樣ニ被成置候而も不苦事ト奉存候、尤左被仰付候共、本朝之道と、異域之法との事に候得者、本意とは不奉存、今更申上候迄も無之候得共、本朝は神明之國、萬人皆諸神之裔孫にて、御前も其御一人に御座候、道は天照大神之御敎法に候得共、星霜を經候ニ隨ひ、自然と其道に闇く罷成、異域之法を用來候事に相成、如此罷成候も、畢竟は歷代明王賢將も多く有之候得共、神道ニ達人無之故に候、然るをたまたま中將殿之如く、勝れ候器量之御方有之、其上神道之正道を中興被致候はゞ、却而是を被成御感賞、台聽に御達、其願に御任候事、明世之すなほなる御仕置、各樣御器量も顯れ、廢候道を被成御再興、後來迄之大成御功作、靑史に殘り、後世に至候迄、御德義を奉仰候事に可有之候、此度此願相立不申候はゞ、永々本朝之舊式、御再興之期有間敷候、花咲時之至らぬにも可在之哉と申上、甚愁傷致候體を美濃守樣つくづくと被成御覽、御立腹も漸散じ、其方持參之箱は、何品に候哉と被成御尋候間、是は中將殿神道之階級を被經候證明ニ而候、是を入御覽度と勘十郎願候故、致持參候と申上差出候得者、被成披見、中將殿は如何成仁と可申哉、數多之藝能、其極意を不被極者無之處、此神道之儀は、加樣迄奥秘被極候段、誠に凡人にて無之と被仰、深く御感嘆被成候上、此度之儀、悉被聞召届、我等には不爲知分に致シ、其方所存之通可致、併事穩便に執行候樣にと被仰候ニ付、難有旨御請申上候、此間丹後守樣ニは、美濃守樣御立腹ニ被成御迷惑、一言之仰事無之、退出後惟足を御稱美有之、扨惟足は再び御屋敷へ罷出、美濃守樣御聞屆之趣委細申候ニ付、何れも致大悅、殊ニ井澤茂右衞門は、此度貴翁之力に無之候はゞ、不相整事之由を申、深く禮辭致候、○中略

廿一日、土津樣へ明神號幷贈位贈官、公儀より被仰出候樣、書付を以稻葉丹後守樣へ友松勘十郎申上、

延寶元年三月廿七日、土津樣御尊骸、見禰山へ御葬送、○中略

御柩御出輿以前、吉川惟足幷西東左內太諄詞を捧、服部安休奉ㇾ抱ㇾ御形代、御壙內において御神事執行有ㇾ之、御取置は夜中ニ相成候を以て、申中刻御壙內之四方に大小之挑灯並能建ㇾ之、且御道筋へも庭燎と香爐を設、組付二十人爲ㇾ警固ㇾ罷出、同下刻御假屋御出輿、○中略殿樣御先へ、松明を燃爲ㇾ致ㇾ御案內、御柩御墓門內へ少シ御滯留被ㇾ成候節、殿樣御倚廬へ被ㇾ遊ㇾ御入、御墓門より晲近之役々御輿を舁、穴之東ニ奉ㇾ安置、御柩之繩、御輿之棒、並衣笠を取り、御壙中東北之隅に差置候而、御茵を御棺穴之中に設、其上に御柩を置、白練を以て製候御衾を奉ㇾ覆、御棺穴之北、御柩上之所へ小机長八寸、巾壹尺五分、高八寸、を設、白練之服紗を敷、安休座を立、御形代を机之上に奉ㇾ安置、勘十郎奎五郎兩人、交る〳〵致ㇾ御備物、畢而膝付を敷、惟足手をこまぬき、本座を立、膝付へ坐し、御壙內之燈を消し、暫御神骸を奉ㇾ靜、御棺穴へ木蓋を覆候而、再燈を繼、惟足膝付を立候後、御食案を設、御菓子御酒相備、於ㇾ是惟足膝突へ坐シ、振鈴にて祓を誦し、祝文を讀、御祝文を讀候由相見候神拜焚香、御香机を御柩前へ設、膝付を敷替、殿樣御燒香、畢而御退出、夫より御供物を撤し候後、安休又御形代奉ㇾ捧、丹羽勘右衛門、日向三郎左衛門御供に而、御壙內より御假屋に奉ㇾ遷、爰にて御葬御供一通りに而御用無し、面々不ㇾ殘致ㇾ退去、御柩へ之御衣笠掛り、明朝より奉ㇾ窆候を以て、其御用に相預候者計、於ㇾ御壙中ㇾ夜を明し、物頭望月新兵衛、杉浦淺右衛門、黑河內太郎左衛門、御子柴七郎右衛門、足輕五人宛召連れ、柵內を致ㇾ警固、

〔松屋文集下〕玄のぶぐさ

はづきついたちの日よりは、御ゆをだにつゆばかりまゐらず、いと〳〵たのみすくなくなりまさりて、四日の申のときばかりに、もの丶かれ行やうにきえはてたまひぬ、○中略さてをさむる所はむかひの山にぞ有ける、○中略此さほうあがりたる世のは、くはしくえられず、ほの〴〵ものに

みえたるも、今の世にはさなしがたき事どもまじりたればそはおきて、吉田の侍從の君の御さだめにぞしたがひける、さるは神の道の送葬とかいひて、もとより念佛の僧などをまじへず、道のほどの儀式も、しろきものきたる人の、弓箭はたゞさてはゆふしでかけたる榊の枝鈴などもちつらねて行さま、かう〳〵しきかたもありて、よろしければなり、申のときばかりにゐて奉るとて、榊の枝さしめぐらしたる輿を、すのこのはしにかきよするをみるに、目くるゝこゝちす、

たらちねはけふをかぎりのかどでぞと見るになみだもとまらざりけり、わが神のみや人の中に、みやしろの事とる高倘らは、おやのかゝるをりも、おくりせず、はかにもまゐらぬ、むかしよりのならひにしあれば、せめては見たてまつりおくらむとて、前なる小川の石ばしのあたりまでたちいでゝ、見まはすに、送りの人どもあまたこゝかしこにむれゐたり、ぎやうじする人のよみあぐるかきたてにしたがひて、例のゆゝしきものどももちつらねて行をみて、

しらはたの小ばた榊ばもちつれて行ひとみるもかなしかりけり、御まへわたりにはついゐてをがむ、

榊葉のかくるゝまでに見おくりてのちは山邊にゆくこゝろかなまことに身をすてゝ、行やしにけむ、

〔喪祭私說〕喪禮

佛葬

喪禮之廢久矣、今世之制、墳墓皆寓佛寺、不許自占塋域、蓋寬永中、以耶蘇之亂、官舉天下戶口、分屬浮屠宗派、以陶冶染俗、權時之法、因仍不更、遂以供司農版籍之用、是以浮屠殆有官吏之寄、上自邦君、下及士庶、皆不能不倚託佛寺、而隨以福田利益之惑、乃喪祭之禮、斂葬之儀、唯浮屠是聽、不復問古制、以成頑弊焉、至於愚夫愚婦信其誑誘、髡髮火化、不以爲異者、固不足論、若夫讀書知古之人、竊稽遺禮、欲以伸己意、往々爲其所沮格、不能得行、可勝嘆歟、抑是亦有自取者、蓋學者平居、視緇流如寇讐、排擊詬

儒葬式

屬不相通間、彼徒蓄忿之久、不能不得待死喪之時而一發以釋憾焉、以因時之勢、凌獨行之士、宜乎事事掣肘、不獲有所爲、但有孝子順孫、若能無事之日、接之以禮、有事之際、動之以誠、則彼亦秉彝之良、惻然感發、不能不聽受、乃自初終至祥禫、不必家設道場作佛事、而禮意有所伸矣、爲人子者、不可不豫於此也、

〔病間長語二〕世に儒葬と云へる目のあるは、昔の性理家の朱氏家禮に據て建たる葬式にて、佛家に對して云ふたる詞なり、冠婚喪祭は、上の制度にあることなれば、歷代の儒者も、制度に漏ることはあるまじきなれば、別に儒葬と云ふことはなき筈なり、今の世は過分な異なることさへせねば、差して制禁なきことにて、人々の勝手次第とは云ひながら、心得あるべきことなり、

〔愼終日錄〕今玆寬文元年、我君〈○水戶德川賴房〉就國、〈○中略〉丙子〈○七月二十九日〉我君薨于正寢、享年五十有九歲、召群臣發喪、老臣宜遺命固禁殉、群臣驚拊慟哭、不知所爲、不堪追悼、而固請從死者十餘輩、而皆不聽焉、〈○中略〉嗣君〈○德川光圀〉命儒臣野一、考文公家禮、喪事一從先王之制、彙通時宜不雜浮屠、其不可于今者略闕之、

〔秦山集〈雜著甲乙錄四〉〕葬法、皇都儒葬多矣、江戶決不許也、林大學頭下屋敷有葬所、吉川惟足宅地有葬所、此等各少伸其志耳、蓋有采地人可也、其他不得不從時俗也、會津儒葬多矣、未聞神道之葬法也、伊勢鴨有遺法、不尋問之可惜也、

〔秦山集〈雜著甲乙錄一〉〕浮屠葬法、創聖德太子、儒法之葬、始于羅山及土佐野中氏、京都儒葬、僅三十年來所見也、

〔喪祭私說〕送葬

柩至設奠、〈執事者、先布席於壙側、柩至脫載置席上、乃設茶菓之奠、但今世壙墓率寓佛事、及葬期浮屠設奠於佛堂、以待柩至、如此者奉轎置堂上、唆賓客辭歸、乃脫載就壙而窆可也、〉主人

以下焚香拜、各退就位、執事者、以席設位於墓道傍、衆主人各以叙坐、重服在上、輕服在下、侍者在後、賓客拜辭而歸、主人以下拜之、賓答拜、乃窆、用宋四條穿柩底環、不結而下之、竣柩坐正、抽索去之、大凡下柩最須詳審、用力不可誤、有傾墜動搖、主人兄弟宜忍哀親臨視之、實以灰、石灰、細砂、黃土、拌勻者、和木粘合、櫃下於灰隔內、每寸以杵築實之、乃篋灰隔第二層築之、既實復塞第三層、下三物而實之、及增之平而止、若三物有餘、則至此盡下之、不厭厚重矣、大凡三物要堅牢固密、專任役夫、易致簡忽、主人兄弟宜忍哀親臨視之、○中略、乃實土而築之、下土、每尺許、卽輕手築之、勿令震動柩中、漸上、乃須書杵堅築、既畢、封土成假墳、預識柩之正中、以立墓標、據以竹垣、題主、執事者、設卓子于墓前、以奉座蓋、置硯筆墨、主人盥手出主、臥置卓子上、其陷中主面皆預題之、但留主面主字一畫不書、至此墳之既畢、奉置卓子上、炷香、告以形歸窀穸、神返室堂、神主既成、伏惟尊靈、舍舊從新、是憑是依、再拜盡哀、兄弟親戚代拜畢、納主于座蓋、善按家禮使善書者題陷中粉面、邦俗葬期皆用午後、故其成墳必至昏黑、題主之儀雖得而備、且善書者亦親友中不可常得、今斷以預題主、而主人填畫爲儀者以是也、奉主遂行、以轎奉主、主人以下步從、如來儀、途遠者、主人上轎、乃安主於其轎中、奉而歸、尊長亦轎先歸可也、

反哭

主人以下在塗、徐行、哀至則泣、至家、奉神主入置于靈座、執事者先設靈座於適室、圍以屛風、以俟二驅喪假門、主人奉神主入就位櫝之、或姑用座蓋、以至謝亦可也、主人以下詣靈座前、拜盡哀止、

〔葬禮儀略〕棺ヲ出ス前ニ膳ヲソナフ、家ヲ出テ路次ノ間、棺ノ先エ銘旌ヲ持ベシ、或ハ平生持タル鎗長刀ナドモ先エ持スベシ、方相ニ擬スル心也、葬地ニ至テ、壙ノ前ニ席ヲシキ、其上ニ首ヲ北ノ方ニシテ棺ヲスエオク、棺ノ前ニ卓子ヲオク、其上ニ酒菓子ヲオキ、香爐香合燭臺硯宮神主ノ箱ヲオク、一人出テ卓子ノ上ノ酒ヲ取、壙ノ左ノ方エ灌テ土地ノ神ヲ祭ル、其祝文云、凡祝文ハ□□又ハヨマズ、禮ヲタスクル人ヨムベシ、後皆倣之、

維年號幾年歲次干支幾月干支朔越幾日干支、氏名乘敢昭告于土地之神、今爲某字某氏君營建宅兆、神其保祐、俾無後艱、以淸酌庶品、祗薦于神、尙饗、

讀ヲハリテ祭文ヲ埋ミ、其時主人以下、各棺ノ前ニテ燒香シテ拜ス、燒香ヲハリテ、棺ノ四方ニ繩ヲ付テ、静ニ灰隔ノ内ヘオロシ、首ヲ北トス、其上ニ銘旌ヲ杠ト趺トハトリノケ横ニシテ、棺ノ長サノ如ク字頭ヲ北ニシテ置キ、棺ト灰隔板トノ間ヲ炭ト石灰トニテツメ、棺ノ上ニモ炭石灰ヲ入レ、灰隔ノ蓋ヲシ、釘ニテヨタメ、其上ヘ土ヲ入テ、棺エヒヾカヌ樣ニ輕クツキカタメ、其傍ニ銘旌ノ杠趺幷

ニ魂帛ヲ埋ム、

其後卓子ノ上ノ神主ノ箱ヨリ神主ヲ取出シ、死人ノ姓名書付ベシ、先陷中ニ書シ、後ニ粉面ニ書ス、〇中略神主ヲハリテ、陷中粉面ヲ一ツニ合セ趺ニタテ、卓子ノ眞中ニ置キ、燒香シ拜シテ祝文ヲ讀シム、

維年號幾年歲次干支幾月干支朔越幾日干支、氏名乘敢昭告于某氏某字君、形歸窀穸、神返室堂、神主既成、伏惟尊靈舍舊從新、是憑是依、父者孤子孝子ト書ベシ、父存生ノ內、母ノ喪ニ逢ヘバ、孝子ヲ哀子ト書ベシ、凡神主祭文等、官位アル人ナラバ、其官職位階ヲ委細ニ書ベシ、或ハ稱號アル人ナラバ其號ヲモ書ベシ、讀終リテ各拜、喪主立テ神主ヲ箱ニヲサメ持カヘル、其後墳ヲツキ、小石碑ヲ建ベシ、〇中略

墓所ヨリ神主ヲ奉ジテ歸リ、故ノ處ニ座ヲカマエ、神主ナホシテ、酒ヲソナヘテ燒香シ拜シテ祭文ヲ讀シム、讀ヲハリテ祭文ヤク、皆是ニ同ジ、

痛惟

尊靈奄忽棄捐、既安廣其處原、敢捧神主歸于靈筵、朝夕奉祀、罔敢弗虔、伏惟靈德俯鑒、謹告、

〔野中良繼傳 土佐國群書類從所載〕慶安四年辛卯四月、丁母憂、哀毀踰禮、衣衾棺槨、必誠必信、到六月葬於采地本山、其間行程七里、山路嶮巇、徒步而從柩、其議一如文公家禮、致喪三年、於其葬也、或穿壙、或彫石、役夫殆千人、夜以繼日、東都流言、良繼信耶蘇學、築城采邑、以謀反、邦君時在東都、遠召良繼、良繼馳赴東都、人皆危之、良繼曰、予之葬母、共爲子職而已矣、若夫非意之來乃天命也、何懼之有、既而官符辨其異僞、嫌疑遂釋然、近世儒葬之行、亦以良繼爲權輿、

〔先哲叢談 三〕山崎嘉、字敬義、小字嘉右衛門、號闇齋、〇中略嘗有某喪、用儒禮不依佛式、寺僧來見曰、子不通國俗、爲此非禮、改則已、不改則我不許瘞埋、闇齋疾呼弟子曰、姑殯之屋中、余詰朝束裝、赴關東訴渠

頑嚚、寺僧以爲不可爭遂枉從其意、

〔鵞峯文集七十四〕泣血餘滴

昔朱文公遭其母祝孺人之喪、折衷儀禮士喪、而制作家禮、後學無不由之、本朝釈敎流布闔國、爲彼徒被惑無知儒禮者、故無貴賤、皆葬事無不倩浮屠、嗚呼痛哉、近世有志之人、雖偶注心於家禮、然拘於俗風、而雖欲爲之、而不能行者亦有之、今余春齋○林丁母之憂、而其葬悉從儒禮行之、因叙其次序、灑涙以記之如左、取高柴親喪泣血之言、而號曰泣血餘滴、

明暦二年丙申三月二日辛巳申酉之交、余母荒川氏諱龜終於寢、初其病間遺言於余及春德曰、喪葬禮宜任汝意、余白家君春○道曰、古禮有云、父在則子不爲喪主、然遺言如此、且喪葬事繁、慮勞貴體、願余爲喪主行之、家君許之、詳載事實、　五日甲申、略○中及黄昏余白家君曰、靈柩可發、家君來柩前告別、垂涙入寢、余使門生殊睦者二三輩留侍家君、既而發引、略○中既到葬地、置凳子於壙邊、而安靈柩於其上、令清隆爲有司、道代清隆持魂帛箱、役送者四人、舁兩卓子出置靈柩前、一卓盛奠供、菓餅酒菜、一卓置香爐香合燭臺硯筥、而燃松明以照壙邊、余遣使价以謝會葬門生、而後余及春德向壙前、使清隆灌酒於壙左以祭后土、使春信讀祝文、其詞云、

維明暦二年歳次丙申三月庚辰朔越癸未日、哀子春齋林恕、敢昭告于土地之神、今爲先妣荒川氏營建宅兆、神其保祐、俾無後艱、謹以桒盛淸酌祇薦于神、尙饗、

讀了埋祝文、古禮或焚之、按家禮未葬以前、先祭后土有祝文、臨葬又祭后土有祝文、今書其一、此祝文昨日制之、遂延及今日、不改其干支者、爲存欲用柔日之本意也、神主祝文亦如此、　其後余詣靈柩前、上香再拜、次春德、次春信春常上香再拜、次荒川長好井清隆等再拜、其後窆靈柩於灰隔板內而西首、古禮北首、今隨地形之便宜如此、　加銘旌於柩上、柩前後左右五寸許之間、鋪炭末石灰、柩上鋪石灰五寸許、而其上並鋪片木十株許、長三尺六寸、四角面各三寸、但今尺、而加大板厚一寸於其上、以爲灰隔之蓋、打釘堅閉之、而實土三尺、其傍埋魂帛、古禮魂帛者虞祭之後埋之、今隨時宜如此、　臨窆余及春德等以下哭泣仆地、既而起、春德進出神主

於槨內、使祐晴書之、春常持祝文到余前、余讀之、（古禮喪主不必讀之）其詞云、

維明暦二年歳次丙申三月庚辰朔越癸未日、哀子春齋林恕、敢昭告于先妣荒川孺人、形歸窀穸、神返室堂、神主既成、伏惟尊靈、舍舊從新、是憑是依、

讀了春齋春德春信春常等、拜神主而後納之於槨、（中略）○於是奉神主入書院、暫休而後使長好道雲等護神主先歸、而後余及春德春信春常等、乘輿而歸家、留清隆止宿守葬地、假構竹籬、

（余及春德等、歸路欲徒步以從神主、然慮家君之可待而不能然也、家禮註云、出墓門、尊長乘車馬、然則不為非禮歟、）

余及春德等、歸家謁家君、而後假安神主於深奧處、而鋪新席設卓子、夜既闌、（余始歸私室、而寢於外、）六日乙酉、早朝余及春德等、沐浴而上香供花、（家禮不記供花之事、然古本家禮圖有花品、且先妣常愛花、故供之、）拜神主獻齋膳、擬虞祭、設酒茶菓誦祝文、其詞云、

維明暦二年歳次丙申三月庚辰朔越乙酉日、哀子春齋林恕、敢昭告于顯妣順淑孺人荒川氏之靈曰、日月不居、奄及虞祭、夙興夜處、哀慕不寧、謹以柔盛庶品、哀薦祫事、尚饗、

（今按、古禮葬日初虞、遇柔日再虞、遇剛日三虞、其後遇剛日卒哭、是士之禮也、卒哭者、先儒以為沒後百日也、想夫三月而葬、則三虞之後、漸可及百日也、然天子九虞、諸侯七虞、大夫五虞、且葬有遲速、則卒哭必不可當百日歟、今隨國俗而葬之、甚速而葬事夜既深、故暫且一虞而已、未詳何日可再虞、何日可三虞、故略之、嗟俗風之不可革也、古禮之不可復也、無如之何、朱子所謂行之有時、施之有所、可不畏乎、）

祭畢赴葬地、使清隆築墳墓、其前立小石碑、經旬而成墳、（中略）○

余平生交際之人不為少矣、就中河州太守井上正利、最好儒學、不信浮屠、常拒邪說、而潛心於程朱之書、數年前謂余曰、喪祭者儒家之大事也、近世知之者鮮矣、豈可不歎乎、於是與余相議、參考儀禮家禮、其中可行於今者若干條抄出之、作倭字諺解、以藏於巾笥、余今不幸而遭家艱、哭泣無節、然守三日不怠之禮、而喪葬之儀、聊用儒禮、則與太守所曾議者、不為無益也、可以謝焉、

〔先哲叢談（後編二）〕西健甫、名順泰、字健甫、號西山、（中略）○以元祿元年戊辰十月三日歿于江戶、歲三十一、

棺歛以儒禮葬于下谷養玉寺、

〔源烈公御葬送記〕瑞龍山御裝束所御次第

一瑞龍山御棺御著之御當朝、御裝束所江口刻揃に而一同相詰、綿服半袴著用、但御棺昇井脚踏持麻上下、

一御棺口刻小野坂下御左右にて、此時土神祭掛役人石橋內御長屋前に御出迎平伏○中略御小姓頭總裁青山量太郎等一同御駕籠を改、御魂帛詰物等を改、詰綿を取り、御椅子を相改、御葬式之御場所へ御先へ遣す、

一御引續上公御裝束所へ被爲入、御二之間江著御、御靈柩江御道中之通但三七菜汁御膳御備、

一御燭臺御左右江一基宛出之、御香爐御香案出之、上公江御左右申上、上公御喪服被爲召、御上香御一拜、直に御本膳、御二膳、御三膳、御土器、御鉢、御酒注、御上香御一拜、御肴、御吸物、御湯、御蒸菓子、御干菓子、御茶、右御備相濟、御上香御一拜、畢而御尊骸爲御見送、御方々樣より被遣候面々綿服半袴

一拜、右相濟順々引入、御手長在水戶御小姓頭御小姓頭取御小姓役之、畢而直に御壙江被爲入候樣に篤と御普請方江申合、御手長一同に御先江登、此節御供御近習之面々改服、御棺之左右ニ相詰、御神主御供は、初より詰居候事、

御葬儀御次第

一御棺御登山、但量太郎御山役人江差圖、御葬送之節御支度相調候御左右有之節、御神主之祝者井執事、何も手水、此時御山役人燭臺に燭を照、大燭臺十二本、井小燭臺四本、

一御小納戶遠藤介九郎綿服半袴石壙之下に而御銘旌を受取、御棺之先へ立、御小納戶村松彥六、綿服半袴石壙之下にて御長刀を受取、御鞘をはづし、御山役人江渡置、御壙之四方を祓ひ、畢而御山役人より御鞘を受取、如元御鞘をはめ、御長刀持人に返す、但御長刀持、御壙下に扣居、御魂帛御輿、忌垣際內幕之外に暫御扣、其間に御棺を壙上に居ゑ、脚踏之上に置、棒を拔、持人退、但御棺昇脚踏持麻上下、總裁代石河幹次郎綿服長袴御銘旌を受取、杠之儘御棺之前に立置、此節御祝文役御給仕何れも撤劒、御小姓頭取皆

川八十吉、（絹服長袴）御小姓門奈千之介、（絹服長袴）御椅子机持出之、御小姓頭取八十吉、御椅子受取、御棺之前御椅子机之上江飾之、御褥を敷、（但御白小袖ハ、御椅子江御向ケ掛、）御小姓（千之介、巳之太郎、絹服長袴、）御神主を載奉る机持出し、御椅子之前に置、御小姓（千之介、巳之太郎、）御菓子載る机持出、御小姓頭取八十吉、御小姓巳之太郎、御土器載る机持出、御小姓千之介、御香案持出、（但御霊輿御通行丈明置、）此時御扣之御霊輿、内幕之外御左之方に置、御小姓（千之介、巳之太郎、）御燭臺持出、御香案之上左右に置之、御小姓頭取八十吉、御香爐御香合足打に載、御香案之上に置之、足打引入、御山役人御祝文机持出、御香案之西に置之、上公御下乘、御竹杖御突被遊、御霊柩御供被遊、御扣所江被為入、（但御小姓儀、御壇下迄罷出奉迎、御扣所ヘ以前出来置、）御代之面々、并御家臣布衣以上、壇下指掛より登、畢而各列座、（但縫殿量太郎絹服長袴、御山役人を以、御代拜初江御左右、各出席之時手水指ニ圖之、御葬地御拜場御合圖之儀、總て縫殿持前之事、）御小姓千之介、御簾上之、御小姓頭（絹服長袴）御神主を御霊輿より出し、机上に奉安置之、（但御詰物ハ御装束場にて取、假積之置、御霊輿に乗奉り、御山にて假積計取、）御小姓頭取、御魂帛箱を御霊輿より奉出、御椅子上に寄掛置、總裁代幹次郎、御箱之蓋を取、御椅子卓之上に置之、御白小袖之両御袖を返す、（但御白小袖両御袖を返し、服召たる様の形にす、）御箱の蓋も、御椅子卓の上に置之、（但此節御霊輿は下る、）御小姓頭取、御土器を（御三方に載、）持出、御香案の向机上に置之、御小姓、御酒注（御三方に載、）持出、御香案の向机上置之、御小姓頭取、御干魚（片木に載、三方に置、）持出、御香案の向机上に置之、御小姓、御干菓子（緑高に盛、三方に載、）御神主の前机上に置之、御小姓、御蒸菓子（緑高に盛、三方に載、）御神主の前机上に置之、御小姓、御水菓子前同断、御山役人、祝板（御箱に載之、）持出前同断、此節總裁量太郎より、上公江御拜の御左右申上、上公御喪服被為召、御手水被遊、御撤劔、御香案の前江御進御一揖、御上香御一拜、御復座、御簾中様、銳君様御始、御子様方、并御連枝様方御代拜迄、順々上香一拜、御山役人、自拜の香案香爐香合載之持出、總裁量太郎、自拜の御左右申、御家老より布衣以上自拜、畢而（但上香ハ無之事、）御山役人出、自拜の香案引入、御棺を下候前、總裁量太郎より、御棺下候段上公江御左右申上、次ニ御年寄江御左右申候、此節御小姓頭取、御小姓頭總

裁量太郎御幕內ニ殘る、御棺を壙に下す、御小姓頭手傳、總裁代幹次郎、御名旗之杠を去り、御大工頭、中上下壙中に而受取、此節御納物有之候へハ持參候樣、總裁量太郎より、小十人目付へ申候事、御銘旗展置候後、御小姓頭取御小姓出、御幕內外共上之、總裁量太郎より上公江御左右申上、上公御壙之內御拜見被遊、幷御子樣方御一同御場所江被爲入、御拜見被爲濟、御扣所江入御、夫より御年寄幷布衣以上面々御壙內拜見、畢而御幕內外共に御小姓頭取御小姓出下之、土神祭始候樣申通、

土神祭御次第

一總裁代原市之進、熨斗目長袴御山役人江申、御左右次第、祝者執事何も手水、中奧御小姓入谷六郎衞門、熨斗目長袴御菓子載机持出、土神之前ニ置之、中奧御小姓山川勝之進、服同前御土器載机持出、六郎衞門香案持出、六郎衞門、勝之進、御燭臺持出、御香案之上左右ニ置之、勝之進、御香爐御香合足打ニ載持出、御香案之上ニ置之、足打引入、御山役人、祝文机持出、御香案之西ニ置之、御山役人、火鉢持出、祝文机之次に置之、此節土神祭御名代、階下指掛に被詰間、總裁御山役人江申含可ニ左右、御名代熨斗目長袴手水、香案之前ニ置、上香御一拜、六郎衞門御土器に三方載を取、御名代之左に跪、御小姓頭伊藤久內、熨斗目長袴御酒注に三方載を取、御名代之右に跪、御名代御土器を取酒を受、香案之前地上に酹み、其御土器を御香案之上に置之、直に座を起而机前に居る、勝之進、御土器を持出、御名代之左に跪、久內、御酒注持出、御名代右に跪、御名代御土器を取酒を受、三方に載机上に備て御香案の前に御復座、久內、御酒注を元の所へ置退、御手長退去、市之進、御祝板持出、御名代之左に跪、御祝文を讀、畢而字頭を我方になして、御香案上置之退、御名代一拜退、○中略土神告畢之段、總裁代市之進、御山役人江申含、題主掛之總裁江申通、

題主式御次第

一御槨之釘打候音畢而、御壙上之手木は引候、右釘畢而御前之幕を內外共に、御小姓頭取八十吉、

御小姓巳之太郎〈絹服長袴〉出而揚之、總裁量太郎〈服同上〉上公〈江〉御左右申上、上公御喪服被為召、御手水御撤劒、御香案之前に御著座御一揖、御上香御一拜、上公御座を御起、御神主机之前ニ御進、八十吉、御硯箱持出、上公之御右に置、總裁量太郎御神主を取、上公之御右に跪、御神主の蓋を取、跗を外し、先づ陷中の方を上公に奉渡、上公王の字〈江〉點を御加へ、又御粉面の方を奉渡、點を御加へ畢而、總裁量太郎、御陷中御粉面を跗に合、御神主を机上に置之、幹次郎、御魂帛の蓋を掩、千之介御硯筥引入、上公御座を御起、机前に御跪、八十吉、前方より備置たる御土器〈三方に載〉を取、上公の御左に跪、鐵壽、御酒注〈三方に載〉を取、上公の御右に跪、上公御土器を御取、御酒を御受、〈三方に載〉机上に御備、御香案の前に御復座、鐵壽、御酒注を元の所に置退、御小姓頭取共退、幹次郎、御祝文持出、上公の御左に跪、御祝文を讀畢而、字頭を我方になし、香案の上に置退、上公御一拜御退去、御裝束所に被為入、〇中略巳之太郎、御靈輿之御簾上之、鐵壽八十吉手傳、御神主を御靈輿〈江〉為召而平伏退、御裝束場〈江〉被為入、幹次郎、御魂帛之蓋を掩ひ、箱の儘御大工頭へ渡納之、御誌石を下す、八十吉千之介、御神主机引入、千之介巳之太郎、御倚子并机引入、於御裝所、御詰綿御韜に而掩ひ、御支度出來次第御發駕之事、禮畢、

〔忍辱雜記上〕葬禮儀式

先哲筆記云、葬禮儀式、良定聖冏贊、泥洹之道、並無緣集等具記、是則諸宗通用儀式也、宗儀不同、化儀雖異、外隨世間喪制之儀、內修釋門法事之福、俱是一致、而良定等不編其本、却稱淨土一家之儀、附會臆說、牽合經文、鎖細陋說、唯非五三、恐繁不錄、書中所記、雖不無少補於後人、間又害於宗門、見者斟酌、葬禮儀如下記云、且又釋氏葬儀、不混俗禮、釋氏要覽下、〈四十八丁〉佛祖統紀三十四、〈十九丁〉百丈淸規等往見、今日南海寄歸傳二云、又復死喪之際、僧尼漫設禮儀、或復與俗同哀、將為孝子、或房設靈几、用作供養、或披黲布、〈林音云、上倉敢反、顧野王云、今謂物將敗顏色為黲々也、說文淺靑黑也、從黑參聲、〉而乖恒、或留長髮而異則、或拄哭杖、或寢苫廬、〈上式〉

（麼反、下呂猪反、）斯等咸非敎儀、不行無過、理應爲其亡者淨飾一房、或可隨時權施畜幔、讀經念佛、具設香華、奠使亡魂託生善處、方成孝子、始是報恩、豈可泣血三年、將爲賽德、不餐七日、始符酬恩者乎、斯乃重結塵勞、更嬰枷鎖、從闇入闇、不悟緣起之三節、從死趣死、詎證圓成之十地歟、然依佛敎、苾芻亡者、觀之澤死、當日與向燒處、卽以火焚之、當燒之時、親友咸萃、在一邊坐、或結草爲座、或聚土作臺、或置甎石以充座物、令一能者誦無常經、半紙一紙、勿令疲久、（其經別錄附云）然後各念無常、還歸住處、寺外池內連衣並浴、其無池處就井洗身、別著乾者、然後歸房、地以牛糞淨塗、餘事並皆如故、（中略）○百丈淸規云、初入龕、或法眷尊長、或只本寺首座、如有遺命遵行、舉請小師侍者親隨人、安排洗浴著衣、（直裰）淨髮入龕、遺偈貼龕左、維那領小師、炷香請首座入龕佛事、安排寢室、置龕爐燭几筵供養、維那出初念誦、（往見）次大悲呪、次楞嚴呪、回向等、復次移龕、三日掛龕法堂下間、置龕用麻布幃幔、前列几案爐瓶素華、香燭不絕、二時上茶湯粥飯、供養諷經、（乃至）鎖龕佛事等、復次出喪、初喪司提調喪儀、（乃至）小師隨龕後、鳴大鐘諸法器送喪、起龕念誦、（如文）喪司維那進燒香、引小師拜請起龕佛事、請眞亭掛眞奠茶湯、俱有佛事、兩序大衆門列、俟龕出已、山門維那、向內合掌中立、舉往生呪（彌陀大呪）或四聖號、（或釋迦藥師阿閦寶生、或阿閦寶相無量壽微妙聲、）大衆齊念、主喪領衆、兩分出左右、俟散雪柳、齊步並行、毋得挨肩交語、各懷悲感、（乃至）喪司維那知客俟行喪䞋等、復次茶毗、喪至涅槃臺、喪司維那、俟都寺上香茶了、進前燒香、引小師拜請秉炬佛事、山門維那念誦云、是日則有新示寂堂頭和尚、化緣既畢、遽返眞常、靈棺遍遶於拘尸、性火自焚於此日、仰憑大衆資覺靈、南無西方極樂世界、大慈大悲阿彌陀佛、十念衆和畢、上來稱揚聖號、恭贊化儀、體格先宗、峻機不容於佛祖、用開後學、悲心仍攝於人天、收幻化之百骸、入火光之三昧、茶傾三奠、香爇一爐、頂戴奉行、和南聖衆、次舉大悲呪回向云、（上來念誦諷經功德、奉爲堂頭和尚、茶毗之次、增崇品位、十方三世一切佛、）次山門知客、舉楞嚴呪回向同前、次鄉人舉經、大衆同諷畢、首座領衆歸寺赴齋、小師鄉人法眷、守化收骨、齋罷鳴僧堂鐘集衆、仍備儀從迎骨、回寢室安奉、請安骨佛事、掛眞供養、諷經二時、上粥飯上茶湯、

〔鹽尻 四十五〕水戸相公久昌寺に被仰出法式

一凡爲僧者、自引導於葬處、乃限父母師長及僧徒、如其餘送葬、不可赴其處、是佛制、而律有明文、然近世以送葬爲僧徒之職、習以爲常、不覺是非、甚至檀越之死爲僧家之福、嗚呼法威相貳甚於此、向後葬斂、當率大衆於佛殿行之、

一不論有緣無緣、及斃於道路、其葬本山者、住持當資其冥福、

〔扶桑略記 四推古〕廿九年辛巳二月廿二日、聖德太子薨于斑鳩宮、〇中略 一云、〇中略 葬送之儀、同於乘輿、陪從之人、各擎雜花、釋衆讃唄、道之左右、百姓各擎時花、或失聲大哭、或佛歌連韵、不待官告、素服皆著、荼毘之後、諸國百姓、遠來囘墓、相聚叫哭、日夕不絕、

〔續日本紀 十九孝謙〕天平勝寶八歲五月壬申、奉葬太上天皇〇聖武於佐保山陵、御葬之儀如奉佛、供具有師子座、香爐、天子座、金輪幢、大小寶幢、香幢、花縵、蓋繖之類、在路令笛人奏行道之曲、是日勅曰、太上天皇出家歸佛、更不奉謚、所司知之、

〔醍醐寺雜事記〕李部王記云、延長八年九月廿九日、丑時院〇醍醐御病大漸、〇中略 四刻上西首右脇登霞、春秋卌有六、 十月十日庚子、御葬送(私云、儀式繁多、抄之極略、)堯孝子及右大臣從御輿後、皆在行障內、御前僧四十口在行障前、天台西塔院主仁照、奉仕御導師、基繼僧都、奉仕呪願、 十一日、天漸明、辰四刻到醍醐寺北山陵、諸寺八十六所、夾路設幕、鑿鐘念佛、 十二日、山作所、於山陵立卒都婆三基、

〔類聚雜例〕長元九年五月十九日丙申、令向山作所給〇後一條御葬之間、迎火者十五人秉燭左右相分進向、各束帶、不給當色、但素服藁著之、炬火盡滅火退留、(資道經長朝臣等不留、)迎火等相替左右行列、到一門外各滅火退出、資通經長等入門內、立葬場前庭、御輿同入、暫留葬場東庭、(立床子一脚、舁居其上、駕丁等暫退出、先例、鳥居內至于葬場殿、敷筵道、而不敷、如何、)行障猶蔽御輿、(此內步障持入自一門、相分引亘、來垣內面、先例立垣外、敷葬庭云々、)次御輿長等撤却小屋形等、舁御棺奉送葬場殿、(北枕、)次駕丁等舁御輿、(黄幡安小屋形內、)到舉物所、次供御盥、(左中辨經輔朝臣供之、)次御厨子所供御膳、(高坏十二本、加打敷、經輔朝臣陪膳、四位五位役供、)次

於北庭御導師呪願畢、山作所行事等供筵道、長筵 次御輿長等舁御棺奉遷貴所、〇中略 經輔朝臣取合資道經長朝臣等所持之火、插村御棺奉茶毘、

〔後深心院關白記〕應安七年二月二日戊戌、舊院〇後光嚴 今夜遷御泉涌寺、出御戌刻云々、〇中略 傳聞今夜出御之儀八葉御車、〇中略 渡御泉涌寺、寄御車於法塔、奉遷御棺於御輿、備供具頗調百味、當寺住持以下僧衆、先唱楞嚴呪、其後光明眞言、奉舁龕赴茶毘所、力者二人舁御輿、僧六人相副其傍、〇中略 經廊下到觀堂前、件所儲一字、爲茶毘所、於此所又僧衆大行道、誦楞嚴呪光明眞言等、次茶毘、供奉卿相雲客、列立見其儀、〇中略 曉更各分散云々、

〔後愚昧記〕應安七年二月二日、新院〇後光嚴 御葬禮也、〇中略

泉涌寺儀

御幸至寺門、大衆參向山門下、鳴鐘鼓、於門前出御牛、昇御車於佛殿、撤之歟山門間敷 所役僧奉口御棺、此間供奉之輩、佇立山門下、依無其所也、下御之後、參入堂中、御車暫立山門下、堂中之儀以錦張之、白木御輿奉安佛殿、其御前備供具、毎膳燃燈燭、錦旗四旒立四方、大衆諷經、次所役僧進出讀祭文、佛事了出御堂中、大衆前行經回廊、僧等唱光明眞言、參仕之人々供奉、入觀堂門到山作所、〇中略 立火屋、檜皮葺 僧門口參入行次第事、此間大衆又諷經、事了人々退出、

〔後光嚴院崩御記〕應安七年正月廿九日、寅刻御年卅七ニテ崩御ナリ、後光嚴院トゾ尊號ハ申セル、〇中略 二月二日、東山泉涌寺ヘ御葬禮、儀式後伏見院御例、又アマタトリアツメラルヽ例也、御供人人歩儀嚢沓、〇中略 サテ泉涌寺ノ儀式、御車ヲ大門ヨリ入テ法堂ノ前ニ寄、法堂ノ佛前ニ置テ供具ヲソナフ、御前ニ御位牌ヲ立、供具ノ上ニ錦ヲカザル、玉ノ御輿ヲスヱ、四方ニ錦ノ旗ヲ立、御車ニ安樂光院ノ僧二人參セラル、サルホドニ御車ヨリ錦ニテツヽミタル御棺ヲオロシ奉テ、彼御輿ニ入タテマツル、此時ハ供奉ノ人々外ニ立給フ、ヒトヘニ今度ハ僧ノ沙汰ト也、サテ兩寺ノ長老、

燒香シテ後僧疏ヲヨム、大衆楞嚴呪一卷讀終テ、御輿ヲ御力者舁立奉ル、衆僧六人、左右ノ腋ニ參ル、光明眞言也、歩儀卿相雲客、ナク／＼御共申サル、南ノ廊下ヲヘテ後火屋へ入奉ル、

〔親長卿記〕文明三年正月三日、今日御葬禮(○後花園)治定云々、(○中略)申刻許先寄御車、(○中略)寄御車於悲田院佛殿、(旅成陣知形相殘也)後方奉出御棺、奉渡龕、次於佛前庭中、僧衆(七十餘人)諷經、(錫杖)暫奉移火屋荒垣中、僧衆之外人不入也、(力者一兩在之)自垣外奉拜見、悲淚難休、此間雪飛、暫室町殿(○足利義政)御退出、事畢知恩寺諷經、次御比丘尼(安禪寺殿、眞乘寺殿、大聖寺殿、[illegible]各舊院皇女也、)衆有諷者、次人々燒香、禁裏幷舊院女房出現、有燒香、次退出、

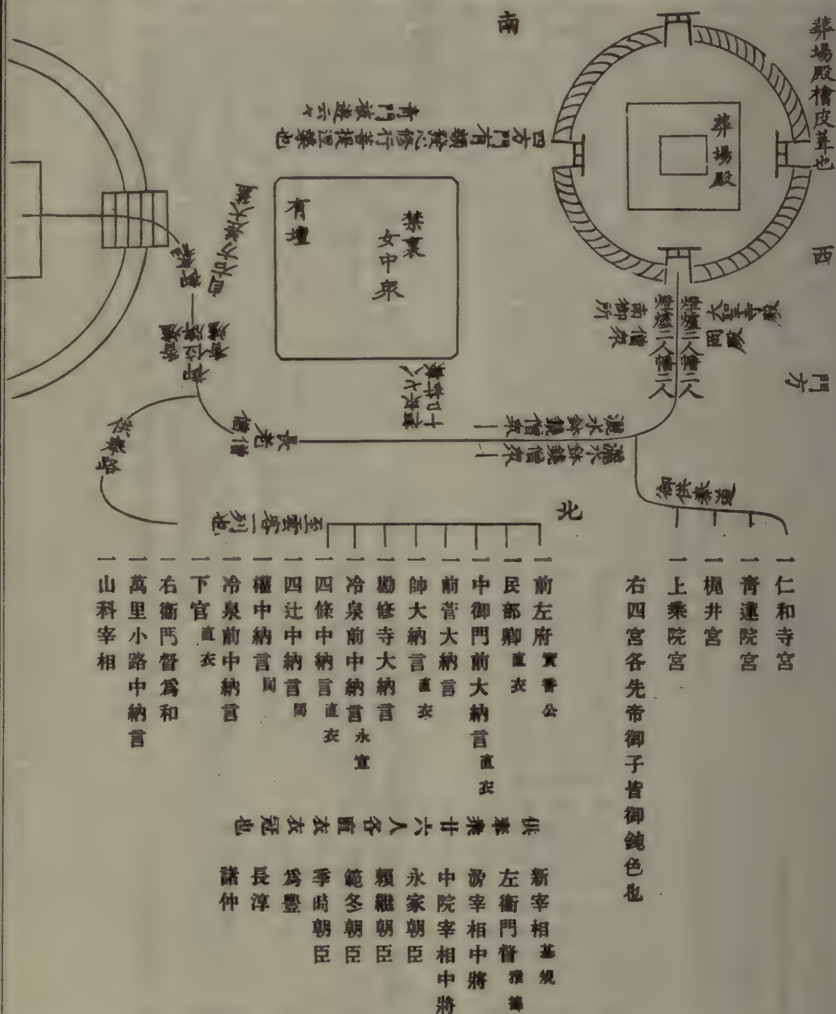
〔山の霞〕三日(○文明三年正月)申の刻に、悲田院にて御葬送(○後花園)の儀あり、(○中略)代々泉涌寺にてぞ後の御わざありしに、此たびの急劇に彼寺炎上し侍るにや、然るべき老僧も侍らずさて、元應寺の長老攝政院(惠恩)仰を承る、まづ御車を迎へ奉りて、僧百餘人、堂前にたちわたりて陀羅尼をみてらる、又本堂より西にむかひて御葬所へ御幸の時、錫杖をはじむ、其後四智讚十重禁をよまる、

〔和長卿記〕明應九年十一月十一日壬戌、今夜御葬禮(○後土御門)也、(○中略)傳聞、寺(○泉涌寺)中之儀、先於總門外税牛又奉手引、先經葬場殿北面、(寺家依哀微無山門、仍不經其內、)東行、至艮南折、指寄御車於佛殿西面壇上、先後乘僧(雲龍院)退下、次御車寄、大臣(花山院前左府、與禁中同役、)參進卷御簾給、(但寺官人令却、既欲奉出御棺時分也、仍大臣以其由計、即退去、立加公卿列給、公卿列佛殿北方壇上云々、)先立廻御屏風於壇上、有下御之儀、一向又黑衣沙汰也、奉舁御棺、([illegible])於佛殿內、奉乘寶輿、(御棺共奉乘也、)次撤御屏風、次供九備菜、次讀疏、(雲龍院讀之、兼日所當儲草也、)次欲奉舁出寶輿時分、勅使馳參問事、(左中將爲季朝臣、兼於寺中[illegible]參也、爲相計其時分也、)勅答甘露寺中納言(爲凶事傳奏)申之、此後僧衆行事、奉舁寶輿、出佛殿、至葬場殿、卽入北面涅槃門、火爐三匝、念誦等終時分、又勅使參向問事、(藤原資直參之)勅答同前、次寶輿舁居爐上之時、僧衆皆出葬場殿、卽閉涅槃門、既登煙之時分、第三度勅使參向、勅答之人又同前、(○中略)今夜天氣快晴、寒嵐無聲、奇特之處、登霞之時節、紫雲聳空之由、有演說之人

〔和長卿記〕大永六年五月三日乙酉、今夜御葬禮(○後柏原)也、(○中略)至泉涌寺、(○中略)總門東方有辻固構番屋、

內藤藥師寺兩人云々、漸曉鐘時分、御車徐及二三町之由告來之間、各更下馬場、一二町步行而奉迎御車、前左府以下、各如初供奉、（松明等同前）御車於總門前脫牛、奉手舁、後乘僧下駕、先是門跡宮々（仁和寺宮、青蓮院宮、加持井宮、上乘院、新門主等、）總門內南方參會御蹲居、御車至涅槃堂、（用佛殿也）供奉衆各蹲居、（略松明）次差寄御車於壇上、左右立步障、（前○御○屛○風○也、猶○以綸○方○霞○外、）前左府、登壇上、褰御簾退下、下御之儀、又一向僧衆之沙汰也、即奉移御龕之後撤步障、空車北方口口、先是供奉衆退去、而北方到北郭跡壇上、東西行列立、（弘上南面）門跡宮々同西方列立、（西上南面、大臣上上也、）涅槃堂中御龕巍然、次供九備菜、（左右八十四合云々、又供御膳、其數濟々、）壇下（涅槃堂也）僧衆左右列立、次僧讀疏、次讃、（聲明）此時分勅使參、○中略次寶輿出、（即奉昇御龕也）先行道四人、懸燈籠於肩二行、（以杖先也）次僧四人二行、擎幡、（唐錦幡也）前行、其次一僧持位牌前行、（小松谷也、衛亭邸也、）其大鉢小鉢鐃等二行、其次衆僧二行相分、皆誦光明眞言前行、（方百七十餘人）其次寶輿、（龕以赤地唐錦張之、力者數輩著淨衣奉昇、自山上召寄云々、）一僧指懸天蓋於寶輿、（同以唐錦張之）其次宮々門跡御供奉其次臣下大臣以下至雲客供奉、（僮僕皆在本列之所）到葬場殿北方、令入涅槃門給時、各北方蹲居、宮々同奉昇入于門內火爐三匝之時、燈籠幡蓋同三匝、次燈籠出門、燒香机左右置之、幡葬場殿四方樒角懸之、（外方）蓋猶在內、僧衆出門、皆東方列立、即鎖涅槃門也、此後各退去歸立本所也、暫而勅使又馳參、○中略次住持下炬、（立燒香机前也、行道持燈籠立、）下炬畢、火屋場炬火屋內、立倚子二脚、二僧相坐、茶毘間令奉行、次僧衆楞嚴會行道、尤殊勝也、行道畢僧衆退去、此後御比丘尼寺々有渡諷經、此時分予退出、各又有退出之人々、先是宮々門跡還御、不及御燒香之沙汰、臣下同不燒香、○中略又香匠同在火屋內云々、著折烏帽子之影、幽見之間、人々成不審之處、後役仰相談畢、

〔二水記〕大永六年五月三日、今夜可有喪禮御幸、（後柏原也、）○中略御車奉寄法塔之前、則奉移御龕、隔人不能見、供奉衆各北方列立、（委注畫）頃之御幸、（僧衆前行如圖）先是各蹲居、（此間暫時小雨下、則晴、奇特也、）御龕過前御之後、皆起揚、即供奉、（御車後方）諸門跡、（御室、青門、梨門、下河原殿、）同令供奉給、（各前左府之先也）入御葬場殿之後各蹲居、少時還本列而立、御殿之外三匝、了奉安御龕於爐歟、程遠不見、頃之火氣揚、皆拭紅淚了、僧衆法事了欲退之程各退散、


葬場殿檜皮葺也
葬場殿
南
西
門方
北
禁裏女中衆
長老僧
一仁和寺宮
一靑蓮院宮
一梶井宮
一上乘院宮
右四宮各先帝御子皆御鈍色也
一前左府實晉公
一民部卿直衣
一中御門前大納言直衣
一前菅大納言
一帥大納言直衣
一勸修寺大納言
一冷泉前中納言永直
一四條中納言直衣
一四辻中納言同
一權中納言同
一冷泉前中納言
一下官直衣
一右衛門督爲和
一萬里小路中納言
一山科宰相
供奉衆廿六人各直衣衣冠也
新宰相基規
左衛門督雅綱
源宰相中將
中院宰相中將
永家朝臣
賴繼朝臣
爲冬朝臣
季時朝臣
爲豐
長淳
諸仲

見聞貴賤、如雲如霞、前後不分明、太以狼籍也、予不合期、仍不及乘物、兩三輩誘引、令步行歸洛了、于時卯半刻也、

〔後櫻町院御凶事雜記〕御葬送之儀

經路頭、令到御寺御、於竹欄內邊放御牛、後乘僧下車、廳官御車副等附轅引之、　次引廻御車、簟於龕前堂、　次奉移御棺於寶龕、大臣被褰御車御簾、此間公卿殿上人居連床、　次奉安置於龕前堂、　次有勅使、　次御法會　次渡御山頭、公卿殿上人、從御後供奉、寶龕入菩提門、御三廻之後鎭座、公卿殿上人居連床、　次御法會、此間有第二度勅使、此後之儀、一向爲僧中沙汰、

御葬送式

壹番鳴鐘、大衆集會、二番鳴鐃、大衆出仕于龕前堂、　次御車著御、御車寄前、御乘添長老下車、　次放牛廻轉　次入御于龕前堂、諸衆平伏、　次大臣被褰御簾、　次御棺奉移寶龕、出御于正面、　次葬場使御問答

龕前堂御作法

先葬主進於中央燒香、直請宣疏師、　次宣疏師到御導師前問訊、直到中央燒香、斯時行者捧宣疏、宣疏(師長者侍者捧之)　次宣疏師高聲唱讀、唱讀了行者撤之、宣疏師歸本位、　次葬主進中央燒香、直到御導師前、慇懃問訊歸本位、　次御導師進中央燒香、從者相從、龕前堂御作法修之、御作法了御導師歸本位、

次鳴磬　次舉經大悲神呪出音、大衆同音、　次讃頭出音、大衆同音合鈸、　次舉經光明眞言出音、大衆同音、　次幡行燈等行列　次大衆行列　次寶龕出御(自正面)

次御幸

行燈、同幡、同灑水、鑰、鈸、鐃、燭臺、　御湯威儀僧　大衆、燒香、宣疏、奠湯、　挑灯

香爐　(藏司維那)　葬主　御導師、御位牌、寶

行燈、同幡、同灑水、鑰、鈸、鐃、燭臺、　御湯威儀僧　大衆、燒香、舉經、奠茶、　挑灯

龕、天蓋、

山頭作法

先行燈、幡、灑水、鐃、鈸等、直進荒垣之內、隨于寶龕逆繞三匝、天蓋隨之、　次大衆群立（北京之僧東頭、南都之僧西頭、）次御導師、奠茶師、奠湯師、宣疏師、前住衆、擧經、葬主、維那、藏司等、著座本位、　次御位牌奉安置中央机、　次葬主進於中央燒香、直請奠湯師歸本位、　次奠湯師進於中央、斯時侍者捧湯、奠湯師受之謹薰香小揖、唱法語、獻供、獻供了歸本位、　次葬主進於中央燒香、直請奠茶師歸本位、　次奠茶師如作法、奠湯師、　次葬主進於中央燒香、直請御導師、山頭御作法修之、斯時侍者捧鋤子、御導師唱法語、法語了歸本位、　次山頭使御問答　次鳴磬、擧經、十重禁出音、大衆同音讀經、讀經了擧經、讀廻向文、廻向文了供奉公卿以下御退出、　次大衆退散、於御法事堂、安牌諷經奉修行、　次山頭四方垂幕、奉移御龕、　次御密行、長老中老役者圍繞、

〔天保諒闇記下〕御當夜次第書

一御當日廿日午之刻、御導師院參如別記、

一御當日之申之刻比、御先へ登山之御名前、御用御奉行御附御目附、

右登山之節、役者法喜院前へ出迎、直に龕前堂山頭御廟御道筋見分之上、夫々宿坊へ案內致候事、

一力者六十人、夕方參著、舍利殿南之局へ差置支度在之、二番鐘之時、龕前堂左外之溜へ案內之事、

一酉之刻前、宿坊へ赤飯之折、夫々相贈候事、

但地下方丈ニ而休息之分、赤飯差出候事、

一勸家雜掌中先達而來山、役者宿坊尋問示合之事、

堺町御門出御之注進一番提灯、龕前堂山內通行中觸入方丈、此時鳴鐘、

一兩鐘大衆方丈參會

一寺町五條之橋著御二番之注進提灯以前申觸入方丈、此時又兩鐘ニ而、大衆龕前堂へ出仕、

一諸宿坊へ案內、役者代肝煎へ申達、

先御葬場使龕前堂山頭使大門へ、次女中方先達之宿坊へ、御著之御方黑御所、御見送大臣宮方堂上方、

右龕前堂へ、二番鐘ニ而御案內之事、

一二番鐘之時御法事奉行へ御案內、御作法場等悉備之、四方之衞士禁之、奉行僧之下知、

一寺門傳奏、山傳奏、御來山使、其前ニ御待請、

一御著次第、供奉之御方、龕前堂西後より又々廻床御案內、

一御車龕前堂竹矢來之內著御、四五間手前ニ而、法橋昇階開扉、御導師御車より下、先ヅ著曲錄、畢暫又休息、次放牛回轉之儀有之、此間舍人牛を引て、寺門之役人へ莊り之品悉引渡、兼而請取書認所持引替、御車寄セナリニ有牛ハ小屋へ引入候事、北面之掛香爐幷御香袋、寺內役僧請取、長持へ納之、

但長持用意之事

一回轉之儀、凶傳凶奉へ申上、舍人數十人、御車を寶龕へ引著、一統平伏、

一次緞子幕を垂、屏風寺內之沙汰、次大臣へ御案內、大臣西南より御入堂昇階捲簾、幷大臣御歸座事、

但此所ニ而大臣公卿、暫宿坊へ御入御休息、肝煎僧案內、

一大臣御退き引續御車內之三金具机等皆具役者取出し納長櫃、此時凶傳凶奉寺傳、堂內左右之壘に御著座、次奉移御寶龕、役者之沙汰、兼而棟梁へ密々相圖示合之事、

一御移被爲濟畢、次御寶龕出御之時、
　但御塞り解計りは寺傳へ申上
一勅使凶傳へ御案內、御問答有之、勅使御退出事、
一御作法場香爐之火等見繕、御當夜奉行之下知、
　但御移相濟、御導師へ用意を伺、堂內中央之幔上は寺傳へ申上候事、尤御休息之大臣公卿御著座御案內可然、
一御導師役僧悉著座、揃之上御作法相始候儀、寺傳へ申上、奉傳任御指圖候事、
一次御所司代御名代之座へ役者御案內
一御揃之上、寺傳依御差圖、以行者御作法相始候段、御導師へ告之、
凶傳凶奉、寺傳、堂內御著座疊返敷、
一寺傳へ伺、山頭使山頭へ役者御案內、
　龕前堂御作法之事
　　但右作法之間、山頭御道筋、白木燭臺燒之事、并山頭香爐之火見繕、數絹此時敷之、皆奉行僧之下知、無失念調度、入口竹矢來之下、奉行僧立迎、
一先喪主問訊離位、中央不揖燒香、直到宣疏前、請宣疏、宣疏合掌受之、葬主之見還座、
次宣疏出中央、至御導師前、慇懃問訊、御導師合掌受之、宣疏直到中央机前、一揖燒香、西堂時侍者無之此時行者戴疏盆、進疏師之左方捧之、宣疏取之高聲讀、畢行者撤之、畢疏師歸座、
次喪主請御導師、作法同宣疏御導師離位進中央燒香、侍者隨從龕前堂之作法有之、還位之後、行者鳴磬擧經大悲呪出音讀經中、行者洒鑰鈸鐃等之役へ渡之、畢讃頭出音、大衆同音鈸合鈸中略畢、
　但女中方等、山頭へ御案內之事、
次擧經光明眞言始、大衆同音、次第行列、二行尤行列之具花瓶等、役人へ行者渡之、

寶龕正面へ出御

但御位牌机并御膳之机傍ニ寄之、出御之示合彙而可有之、

一光明眞言出香之比、追付出御之旨寺傳へ申上、凶傳凶奉御示合、次山頭使山頭へ御進、凶傳之沙汰御案內、尙公武供奉之御方へも可通歟、寺傳凶傳凶奉、御先へ山頭へ御案內、

山頭へ行列進次第

先行燈四ツハ、山頭大机之右ニ置進、

次幡四流は、荒垣之內四方之隅へ立掛置、東之口へ進、

次洒鑰鈸鐃は、垣之口左右暫立列如圖、

次華瓶燭香爐茶湯は、中央ニ進、行者ニ渡ス、

但大衆席（北方、南京東頭所ハ北京西頭、如圖、）

威儀僧進、次第加大衆、

但（南方東頭奠主擧經維那、北方御導師奠茶奠湯宣疏、）主、

燒香之役直進中央、左右之机ニ置、一燒了一揖、退加大衆、

御位牌直進中央、御尊牌机ノ下ヨリ奉安置加大衆、

寶龕奉見著御、洒水ヨリ次第ニ逆繞、天蓋奉隨從、三匝了、（二反中歎）洒水等之役、如元荒垣之外左右へ立列、寶龕東ヨリ御入、天蓋ハ後方奉擁加大衆、（從僧ハ東ノ口へ退）立列ノ調ヲ見テ、行者磬三丁止言四（四）四一

一一、突了而行者道具ヲ搬机、役僧入口、同時一揖加大衆、此時寺傳へ御作法始由申上候也、

但凶傳凶奉寺傳、荒垣ノ疊ノ上ニ著座、

先葬主進中央、燒香了請奠湯師、奠湯師見喪主之歸座問訊、進中央机前、（五間許）向御導師問訊、立直リ普通問訊叉手シテ立、侍者隨從、但無燒香、行者湯盞載盆進侍者、侍者以右手取之、以左手取湯盞、右

手差添、又行者持瓶盛盞、侍者以盞轉湯茶奉師、師捧兩手唱法語了、辨備隨從侍者中央机右方燒香問訊シテ歸座、

次奠茶作法（同ニ奠湯作法ニ、但左ニ備、）

次葬主請御導師如以前

次御導師出中央進燒香、隨從侍者五間許退立、行者直進木鋤、揖取之唱法語了、又燒香了歸座、

次寺傳へ申上、山頭使凶傳御問答有之、

次行者磬三丁、擧經十重禁、出香了廻向文、

次大衆一同退散

次正面之白幕ヲ垂

次十重禁始之頃、山頭相濟、總門番所ニ相達、末々ノ供廻リへ可申事、

但役者手札ヲ爲持番所へ遣ス

御尊牌幷金紙花納御長持

但金紙花、從海會堂御殿へ廻ス事、

維那藏司奉守護、御法事堂へ奉安置、南北之大衆出仕、奉安牌諷經、十重禁

大臣方諸門跡公卿女中方、御退散宿坊御入、山頭へ長持入、用意之品兼而送リ置、

大衣五帖色取リ合、針六本、糸、白綾三匹計、白布二匹入用、

御移替之儀、能々兼而示合可有事、長老中入幔幕內御移替、寺門役者之取計、棟梁力者從僧十餘人之事、口口時之計也、

此間傳奏暫御休息可有之

山頭より舍利殿へ御詰、御密行前、御先へ御案內、

御廟之式

御轅著御、御石棺へ奉納了、

　但大衣等取除キ示合可有心得事

人拂寺傳へ申上、依御差圖所司代へ申達、所司代御簀屋之前ニ御進、謹而平伏、御納棺之御樣子御見分有之歸座、兩傳凶傳凶奉御拜、次御石蓋漆喰、公武御柝如前、相濟平伏、御砂盛、平伏役者、

一觴謹而奉指金紙華了、事之由寺傳へ申上、亦如以前公武御拜有之、

次御机三ツ具足御莊付了、長老中老等掩土、諷經執行大悲呪、

次堂上方御拜香了、御納棺相濟、公武於大方丈御休息可有用意、御湯漬差出候事、

所司代御奉行御附、於景福殿御休息、湯漬差出候事、

御納棺被爲濟候上、大門開候樣申付候事、

　但番所々々へも可申達、尤役者之手札爲持遣候事、

御納棺被爲濟候段、舍利殿之武家方へ早々可申入、宿坊へ御引取之事、

御圓輿は、御位牌殿南之陰ニ置可申事、兼而棟梁へ可申入、

御廟へ御入之上、山頭幕等莊嚴幷ニ佛具、不殘長持へ入方丈へ運び候事、兼而役外之僧へ申通置取計候事、

〔扶桑略記二十五朱雀〕天慶三年二月廿四日、天台座主大僧都尊意卒、〇中略臨終前日、剃髮沐浴、〇中略含藥叡大德等曰、葬送之法、不擇日時吉凶、不用陰陽鎭地、唯加持淨水、誦五字呪、洒其點地、結四方堺、又我弟子等、卅九日間、集居舊房、不可念佛、各住自房、修學莫退、明日及子寅剋、悉脫上下內外之衣裳、更著淸淨新潔之法衣、洗手嗽口、步出乘輿、赴習禪房、無惱入滅、闍維之間、聊無臭氣、來集之人、皆稱奇異、

〔慈惠大僧正御遺告〕天祿三年五月三日、初記沒後事、〇中略

一葬送事
墓地且可點、（若未點前命終者、可取北方勝地、）棺存生可作、（若未作前命終者、終日早作、夜內可入、不可撰吉日時、）命終三日之內、必可葬之、不可延引、遺弟等不可著素服繩帶、努力々々、不可背敎、墓所高屋板垣等、如例作法、
入棺所可役人々
靜安（更有）伊谷（亙運）良陳（安眞）源漸　妙雲　昌應
燒所
行事　靜安　覺禪君（此君極峯而有相約、仍所定也、）道朗　良運　陳常　安眞　源漸
雜役　道保　宿久
拾骨所
入棺燒所人々中可勤之
右窣都婆生前欲作運、若未運之前命終者、且立假窣都婆、其下堀空際三四尺許、置骨於穴底、上可滿土、〇下略
〔太平記　四十〕將軍薨逝事
斯ル處ニ、同（〇貞治六年）九月下旬ノ比ヨリ、征夷將軍義詮、身心例ナラズシテ、〇中略同十二月七日子刻ニ、御年三十八ニテ忽ニ薨逝シ給ニケリ、〇中略サテ非可有トテ、泣々葬禮ノ儀式ヲ取營テ、衣笠山ノ麓、等持院ニ奉遷、同十二日午刻ニ、荼毘ノ規則ヲ調ヘテ、佛事ノ次第嚴重也、鎖龕ハ東福寺長老信義堂、起龕ハ建仁寺澤龍湫、奠湯ハ萬壽寺桂岩、奠茶ハ眞如寺淸誾西堂、念誦ハ天龍寺春屋、下火ハ南禪寺ノ定山和尙ニテゾオハシケル、文々ニ悲淚ノ玉詞ヲ瑩キ、句々ニ眞理ノ法義ヲ被宣シカバ、尊儀速ニ出三界苦輪、直到四德ノ樂邦給ケント哀ナリシ事共也、
〔吉田家日次記〕應永九年五月三日乙酉、既ニ御事切レケリ（〇吉田兼熙）ト、人々告之了、雖爲白晝、不移時

急奉盗出浄寶寺、御板輿也、以時衆雖可奉舁之、白晝有憚之間、未御事終分テ、以夫力者奉仕、自幕間出御、此間予（○兼熙子兼致）以下跪地上、但御出之儀不拜見、神職之身無力事也、兼之不居神職之間、一向如兩僧奉懸手、

〔萬松院殿穴太記〕廿一日（○天文十九年五月）には、御葬りの事（○足利義晴）有べしとて、（○中略）秉炬（又下火トモ云）は妙安和尚、奠湯は東福寺の寂龍和尚、奠茶は嵯峨臨川寺孫西堂、山頭念誦は子建西堂、擧經湖月西堂、何も火屋の内を三返廻りて、内にて大悲呪を讀て、外にては楞嚴呪を讀る、次に御所々々の諷經、智恩院報恩寺等の諷經有て、諸佛事果ぬれば、なさけなくも歎きの數をこりつみて葬し奉る有樣、御身は忽に化して、暮天數行の煙と立のぼり、御骨はむなしくとゞまりて、卵塔一掬の塵こ成ぬる有樣を見奉る人々は、目もくれ涙に伏まろび、たづきも知らぬ有樣たとへん方ぞなかりける、

〔甲陽軍鑑十九〕天正三年乙亥四月十二日に、信玄公御とぶらひこれあり、宗旨は禪宗關山派、本寺は都妙心寺也、其東堂衆をもつて、七佛事と云ふ事有り、その次第は、鎖龕は藍田和尚、掛眞は東谷和尚、起龕は說三和尚、念誦は圭首座、葬衆は瞰首座、奠茶は速傳和尚、奠湯は高山和尚、導師は快川和尚とぞ聞えし、道六間廣く、兩方に虎落をゆひ、いなばきを敷、其上に布をしき、其上に絹をしき、勝頼公、典厩、穴山殿、仁科殿、葛山殿、望月殿、逍遙軒、御親類衆、各御龕に手を懸、御供なされ候、御位牌は、御曹司信勝御持有、其年九歲にて御とも被成候、侍大將衆直參衆各御とも也、又被官衆は虎落より外を御とも仕り候、東堂達のなされ事、長禪寺高山和尚の奠湯ばかり承り覺え候故如此、

一服反魂死諸葛、作龍呑却盡扶桑、

〔幽齋尊翁御葬禮記〕于茲細川兵部大輔源藤高尊翁、（○中略）御葬禮は、小倉の城下なるべしとの御遺訓なればとて、いそぎ迎の船よそひ有、結緣の御僧、紫野玉甫和尚、南禪寺慶安和尚、天龍寺、相國寺、建仁寺、出世七人、其外の貴僧、百五十餘人、都より招請あり、九月十三日、豐の小くらに著給ひぬ、御

葬禮は同十八日午の上刻と定りければ、〇中略御龕漸かん前堂にすはりぬれば、机に向て右の方に喪主念誦維那あり、同少間を置、施主おはしませり、左の方に堂頭和尙あり、起龕鎖龕の行ひ終りて、火屋に移り給ひ、三度の行導納ぬれば、總見院玉甫和尙は牌前に至り、座具をのべ香をたき引導の儀式あり、奠茶は南禪寺、奠湯は天龍寺なり、施主御燒香事すみ、諷吟の諸宗は、家々の勤をなし、前豐州太守兵部侍郎二位法印泰勝院殿徹宗玄旨大居士尊靈成道正覺と廻向して、各立去ぬれば、跡は空敷野邊となつて、有爲の轉變は、今目前にあらはれ、泪此原の草露に爭ふ、時に慶長十五の年、九月十九の夜、末松宗賢涙と共に謹書之、

〔嚴有院殿御葬送日錄〕五月〇延寶八年廿六日、今夕御葬禮、〇中略御棺御廟所ノ御門へ入セラルヽ時、稻葉美濃守、堀田備中守、幷松平因幡守、御門外ニ蹲居シ、直ニ御門內へ供奉ス、大岡五郞右衞門、及人見友元、設樂七左衞門等モ、其下ニ平伏ス、御供行列ノ衆、酒井雅樂頭、大久保加賀守、松平因幡守、板倉石見守、松平山城守、內藤若狹守、三枝攝津守、稻葉石見守、大森信濃守、奧番頭遠山半左衞門、御小姓衆、小納戶衆、矢部四郞兵衞、鈴木修理、石川細阿彌等ハ、御廟マデ供奉ス、此外供奉ノ衆ハ、護國院前ニ留リ、直ニ退散ス、御棺御廟所上ノ壇へ舁上ゲ奉リ、小構ノ上ニ安置シ奉ル、御駕籠ノ衆ハ、御拜殿ノ傍ニ殘シ置、其餘新組ノ者共、皆御門外へ出ス、毘門御棺ニ向テ御引導アリ、御正面ノ案ニ三具足ヲ供ジ、僧正以下衆僧、誦經行道燒香、衆僧唱唄、伶人奏樂、畢テ各退散ス、此間雅樂頭、美作守、加賀守、備中守、松平因幡守以下、御廟石壇ノ下、白砂ニ蹲居ス、板倉石見守、松平山城守、御門ノ兩傍ニ侍坐ス、大岡五郞右衞門以下、御拜殿左ノ傍ノ邊ニ侍ル、人見友元モ衆僧ノ間ニ侍リ、御儀式ヲ窺ヒ奉ル、御引導事畢テ、御廟所石壇ノ下ニ疊ヲ敷キ、御名代雅樂頭拜禮アリ、其後御拜殿中央ノ板敷疊ヲ敷キ、役僧七五三ノ御膳ヲ供ズ、御膳ノ事、內ノ板閣ノ外ニ、假ノ御供所ヲ構へ、天野五郞大夫等コレヲ調フ、事畢テ毘門退出、僧正以下ノ衆僧伶人等退散ス、其後御拜殿前ノ白砂ニ、緣取

ヲ敷キ、雅樂頭、美濃守、加賀守、備中守、因幡守、石見守、山城守、奥ノ三人衆、大森信濃守、大岡五郎右衛門、奥ノ番頭、御小姓衆、小納戸衆等、次第ニ拜禮各退散ス、加賀守ハ御棺藏メ奉ルコトヲ鈴木修理等ニ申含メ、本坊ヘ參ラレ、御葬儀畢ラセタマフ旨ヲ二ノ丸ヘ注進セラル、

〔御葬送之次第〕三月十五日、(〇文政十年)御入棺(〇一橋治濟)之當日辰刻、於御葬所封地之作法有之、御差圖之刻限、凌雲院前大僧正、林光院、東漸院、爲御迎到神田橋御屋形有待合、御出棺之刻、御棺暫留置、前大僧正、林光院、東漸院、誦經畢而、前大僧正御先江罷歸、次御棺御進發、林光院、東漸院、供奉于御棺之左右、

御入棺之前、寺社御奉行其外武家、宿坊江來集被待合、有注進被相詰于龕前堂邊、御靈棺御入于龕前堂、衆僧伶人等、蹲踞龕前堂之前、

次御靈棺安置之後、御位牌直之、　次御膳獻備莊嚴畢而、啓御案內於一品宮、　次衆僧著座　次一品宮御著疊　次凌雲院前大僧正、登高座光明供修之、　次諸天讚畢而、前大僧正下高座、　次始經、此間前大僧正獻供作法有之、畢而復座、　次一品宮、御廟地於御扣所御待合、　次庭上行列(如行列書)御靈棺暫留置、四智讚畢而、衆僧光明眞言唱之、同音之時、伶人奏樂先進、　次御靈棺御進行、御廟地御入、莊嚴等畢而、衆僧著座、　次武家著座　次啓御案內(武家參迎)　次奏樂　次一品宮御廟堂江御入、被爲倚曲錄、　次武家復座(止樂)　次燒香　次奠湯奠茶　次起龕鎖龕　次歎德　次一品宮御引導(兩執當陪從、一人御持之、一人挾持之、)御燒香、畢而被爲倚曲錄、　次始經、(安樂行品)行道畢而復座、　次一品宮御著疊　次奏樂、武家御廟堂外敷出南之方江參迎、　次御名代御參堂、御拜禮畢而御退出、武家御迎如參迎、　次內府樣御名代、次第全如前、　次奏樂　次一品宮御退出、武家御迎如參迎、御會釋、　次武家拜禮畢而、衆僧伶人退散、　次垂御廟回之幕、

此時御棺納石槨、以石灰詰之、畢而寺社御奉行宿坊江退去、(但御城江御注進)有之、次御棺之上、平石置之、畢而武家退去、次埋御棺、畢而以打敷覆之、御圍扉之鍵、自小普請奉行執當江渡之、小普請奉行等不殘退散、

次御廟所請取、役僧附置、兩執當諸事指揮之、畢而退去、

〔江戸繁昌記 二〕葬禮

士大夫葬儀、國有例典、家有所受、非作者所得而知也、庶人遇喪、懸簾旌凶、伍家匍匐、弔客便往、踰日而葬、殯祖無就遠之漸、棺槨從家之貧富、喪主以下、縗麻大功之親、儀服帶孝、剪紙束髻、豈括髮遺法乎、編笠在首、豈免經遺樣乎、燈籠揭書、蓋照幽路之意也、知生者、知死者、畢會于葬、其旦幹人先走寺、張懸紙于門、書曰某街某氏功德院也、乞兒群、迎僧往、既而強飯數桶、運土瓶茶碗、車栽輸來、幹人此爲迎、上本堂位置禮具、書記執筆對簿、早有送客先靈柩至、或徑通名去、或有一人而數名者、既而柩往、舁之上堂、置于兩楹間、主人就東階、客就西階、挾楹而坐、楹內兩邊、傭僧羅列、鳴鐃誦經、和尚謦咳、徐々出來、從容向柩、舉拂而謂曰、夫惟本是何所馬骨、今逝復向何天、將巡四國爲猿狙耶、將浮江河爲蛇鱣耶、鱣乎我能噉若、和尚元不嫌羶、拂一拂曰、去來何所在、煨薯一竈烟、喝、賓主以次拈香、事畢矣、延客側室、主人稽顙而拜、獻茶供飯、一時混雜、梵娘幹事、賓皆袖飯而出、舉投之乞兒、

〔日本風土記 二〕喪事

其喪、舉家悲泣、不飲酒食肉、以白布置衣裹頭、不拘富貧、倶置龕子、令亡人合掌坐于龕內、外縫以紙糊之、上書大乘妙法蓮花經七字、逼龕封貼、却將白布盤繞于龕上、用絹段爲彩、親友聞喪、詣龕而弔、次選日殯出、預于坟所、編一竹城、外以白布絹段根結于城、分其東西南北四門、倩八人、頭盔衣甲、手執鎗刀、扮爲門神、分守四門、俟其殯出、用杜擡龕、皆用白布裹杜、使孝子親擡、如止生一子、女壻外甥代之、主親皆扶殯而行、殯前排紙旛二三十竿、旛上書其大乘妙法蓮華經七字、外設香亭一座、名曰設孤臺、令一人在前撒銅錢而行、名曰買路錢、撒地之錢、任其貧乞者拾之、富貴之家、令一義男爲從殯、將亡人平昔所好而食之類、置一圓食籠、令從葬者頂首而行、殯至坟所、按吉方擇門而退、擡繞三回、正中安下、俟親友送殯者至、喪家預買草履千餘隻、待親友至坟所、請卸自履、皆穿喪家草履、入竹

城詣、龕合掌鞠躬參謁畢客出、仍穿自履、喪家草履復卸原所、親友事畢、請僧唱經、俱以禮物酬謝訖、再有乞丐至、厚薄賞之俱完、次將竹城周圍、架起乾柴門神、孝子各執長竿以火焚之、柴盡復添、白衣草履之物盡毀于內、務燒三日三夜、以爲至孝、另將灰骨和泥、送在寺中、按于神腹、前從葬者令入寺內、燒香奉佛、永不令歸、貧者無力可焚、亦于竹城內埋之、畢挈家人水藻灘、以祓不祥、色衣而歸、以取吉利、

自葬

〔德川禁令考寺社四十二〕文政二卯年七月

修驗自身葬祭之事

松平越前守御預所越後國蒲原郡塚野目村修驗伺　土居紀伊守

御書面之趣、令承知候、松平越前守御預所役人伺書等致一覽候所、塚野目村修驗相願候旨鳳閣寺よりも申越、右ニ付支配所并所役人ニおいても故障筋無之、自身葬祭之儀、菩提寺得心ニ候はゞ不苦候得共、元來修驗中絕之上、素一社之別當をも不相勤、除地も無之候はゞ、院號相名乘候儀、一派之內ニ候はゞ格別、宗門帳其外、是迄之通可取扱旨御指圖有之候方と存候、被差越候伺書其外も、書類令返却候、

水野左近將監

文政十亥年

石川主水正掛　裝笠之助出

但州石橋村修驗大乘院家內共一統引導之儀伺

書面當山修驗大乘院親妻子家內不殘一統引導之儀、容易ニ難成筋ニ候得共、菩提寺示談納得之上於村方も一同故障之筋無之上は、願之通承屆、證文取之可被差出候、右者寺社奉行中江掛合之

上申達候、以上、

年號闕寅四月

修驗自身葬祭家內迄相濟候例之事

上州利根郡下澤村本山修驗三寶院儀、前々より其身幷弟子は、手前致滅罪、妻子は私領同郡月夜野村眞言宗壽命院引導受來候所、川越ニ而差支有之候間、以來家內不殘手前滅罪いたし、宗門人別帳を除、壽命院印形を除、一判を以差出度旨、壽命院加印之願書差出候間、奉行所江伺候所、左之通御下知、

信濃印

書面三寶院家內滅罪、幷宗門帳自分印形之儀、雙方得心之上、連印を以願之通可被申付候、尤寺社奉行中江掛合之上申達候、以上、

寅四月

〔川村雜記〕水戶自葬式御觸書

自葬之式

病者命終候はゞ、家の內を靜にして、蒲團を敷、尸骸を移し、清き衣服を爲著、其前に常の屏風を立、傍に兩人居るべし、其後沐浴せしめ、新手拭にて身を拭、清衣を著せ髮結、但新衣服は分限に應じ、垢付ざるを用ひ、經帷子等は不用、紙にて蒲團を作り其上を掩ひ、其儘絹木綿等にて面を覆ひ、手足を隱し、屏風の前へは、常々著用仕たる上下袴、又衣服にても卓子に載置、香爐香合燃火を置、酒菓子を備、此時親類一同及び朋友皆燒香拜し、夫より棺を傍へよせて、前に掩たる紙衾を棺の底へ敷、其內へ靜に尸骸を入、此時存生の時の幽髮など納むべし、珠數米錢等は不納、又座敷へ直し、命終日より葬日迄、朝夕常の料理を供へ、終身の別れ、又不逢之仁なれば、何程にも哀を盡すべし、

扨墓の地へ人を遣し壙を堀らしめ、棺を出す前に膳を供へ、家を出て高張二張位牌卓供物を爲持、著服は人々禮服にて葬送すべし、寒中も忌の人徒跣なり、葬地に至り、壙の前に席を敷、棺をすゑ、前に酒菓子を備へ、香爐香合燃火位牌を置、土神を祭る、忌服なき人祭るなり、席に酒菓子を備へ、拜して祝詞を讀候事、主人以下は棺前燒香拜し、棺を靜に下し、土を覆ひ、主人手を洗ひ拜して、位牌を卓の正中に直し、燒香拜して祝詞を讀、祝詞讀畢て懷中して退く、表に位牌を奉じて歸り、右の座敷に位牌を直し、酒を備へ燒香拜之、

其後五十日の內、毎日膳をするゑ燒香拜す、酒菓子供物は心次第、○中略

自葬式の儀は、往古より掟にて、貴賤となく各祭る式にて候所、漸々佛門の法になづみ、父母先祖を祭る迄、破戒不如法の僧を迎、經文を爲讀、戒名迄も金銀を出して貰ひ受、自分祭の誠なるを取失ひ、父母先祖に事へず、金銀を費し、奢侈を極め候儀のみ歟、葬式祭の禮は心得候者もあらず、右樣の事ども元來佛法の惡にも無之、自然の弊風にて、如此淺間しく歎敷風俗に落入候儀ト被爲思召、如何にも忠孝の風習に相成候樣被遊度、被爲在御深慮、非常之御改正被仰出候以來、自葬式に相成候樣、人々心がけ、父母へ誠敬を盡し、存生の厚恩、萬が一に報候樣致べく候、未聞未見の賣僧に經文をよませ、破戒の僧に引導爲致候よりは、右の掟に相復候はゞ、父母先祖の神靈、眞實に被爲饗べきなり、仍而自葬式被下候ものなり、

天保十五年甲辰正月

右に付某寺院書付之寫

水戶殿御領分、常陸國に有之候當方門徒共、去冬御領分自葬と稱し門徒共死亡之節、宗門之規則を差置、旦那寺之吊を不爲受、名主共にて取置致候趣、其上末寺共へも還俗致候樣、支配目代、或は村役人等より精々申勸め、不承知申立候得者、後難を恐れ、不得止事、末寺は還俗を願出候得者、直

に聞濟に相成、俗名に爲改、鄕士格等に被仰付、本堂幷寶物の類は取上に相成、本堂鐘樓を初め被取潰、住所計改而被下候趣、右廢寺之內、宗祖之舊跡も有之處、追々末寺共及滅亡候儀、日光御門主にも深く歎敷被存、寺社奉行青山大膳亮江、其段歎被仰出候處、聞置に相成候事、

〔鈴木叢書十五〕伯家神事式

神道葬祭略次第

一既氣絕後、其體病床之儘、東首南面令安臥、頭掛白布、頭邊置守護之刀、靈體前設机、焚香供燈明、傍男一人令守護、

一氣絕十二時過、靈體沐浴髮結、令著淸淨衣服、靈床下敷薦、其上設疊、如元令安臥、頭掛白布、守護刀焚香燈明等如元、

一靈床次間(或緣側)敷薦、其上設置机(白木八足)靈璽串硯筆朱墨、其前祭主座等、○中略

一祭主著風折烏帽子淨衣、於便宜所手水、靈床進、次間(或緣側)間隔向靈體一揖、次ニ机前著座、執靈璽串謹靈號誌、(靈體實名大人以朱筆書之)訖覆宮絹等安置机上、二拜三種祓(三反)拍手、二遷靈祝詞三種祓拍手二拜(如初)退下、

神號之儀、追而自本官家可授、

一靈璽机之儘、遷別淸間、下敷薦安置南面、幣仕役人供燈明(此燈不消十四ケ日)六饌物、

饌物白木高坏二本立(或三方)

盛飯　野菜
海草　海魚　各盛土器
酒　時菓
餠　川魚　同上

一祭主再進靈璽前、著座奉幣、如恒式、訖退下、
一家主親族等、進淸間外、靈璽遙拜、訖幣仕役人撤幣饌物、
　自今以後六十四ヶ日、靈璽於同間祭之、不混穢人饌物、日供家主間隔遙拜、三十ヶ日過、穢解後、
　家主沐浴、入淸間供之、令拜儀、
　日供高坏一本或三方
　　盛飯　野菜
　　　酒
　　海草　干肴
一氣絕二十四時過、靈體令納比登岐、中納風折烏帽子淨衣白差貫等、自其時家舍可爲穢、○中略
　遷靈祝詞
掛毛畏岐其靈體實名大人乃靈前仁、祭主某申氐白佐久、汝命波年號月日生坐給氐、今年年號月日乃
今日爾至麻氐、豐葦原瑞穗乃國乃國郡住所其稱號家爾在世坐氐、世嗣姓名等始、家內族類爾至麻氐、厚
岐惠乎冠利、依之氐敬奉仁、今日不意顯事乎世嗣姓名仁仰氐、幽事乎知食止欲氐、現身乃壽死給比奴、
是乎見氐家內乃族類等、哭泣岐歎乎言止毛無其甲斐志氐、靈體波夜見乃國仁鎭麻利氐、永隱給氐、世乎去
坐、靈魂波日乃若宮仁到給比、靈璽乎今時此檜仁奉遷留、平耳久介安耳久介遷給比氐、常磐堅磐仁鎭坐氐、
子孫八十連仁至麻氐、家業無怠代々繁榮留事乎夜乃守晝乃守爾護幸給倍止恐美恐美母白須、
〔行治神道葬祭拾式錄〕吉田家葬祭式
先沒期文曰大觀成就上天妙果无上靈寶神道加持○中略　次櫛髮如常　次棺任官位分限　覆衣或用布　次裝束之
事、其官位隨相應用之、但存生之不持物屬　次八枝之榊下枝、五色之幣付、五枚五流　次麻袋三角入穀米　次祓串一本
　次中臣祓一部　次入棺押符三元三行三妙加持　次棺前其人之官位姓名書之、女人者、其人之名字實名、夫有之者、其人之名字實名ト書
璽ト書之、○中略　次須太陪前設机、机上、御榊御菓魚味等如常、御酒散米榊瓶菓子等、　次拜法如常　次五重加持　次觀神此時供御

靈膳、散ニ供米榊葉須大陪之上ニ　次中臣祓一座同音　次拍手役人一同拍手　次退下

〔神道葬祭家禮〕入棺之式

一正體行水

一男女共仁髪乎結、手足乃爪乎切流、

次著白張淨衣風折烏帽子、著足袋手仁笏或扇子於持津、女波千早於著氏、收奉正體火壺中、

官位ナキ者ハ、大忌衣ヲ著シ、或ハ白キ衣白キ帶肩衣袴ヲ著ス、女モ白キ衣白キ帶白キ上著ヲ著ス、

尸者唱曰

鎭魂賜江　鎭魂賜江

次火壺之前仁設案、供靈供御酒御肴御菓子、

靈供ハ三方ニ飯汁煮物干魚切テサン積ニシテ、中盛漬物、大根瓜茄子ノ類也何レモ土器ヲ用ユ、御酒ハ瓶子二ツ、三方ニ載テ、御肴ハ干魚ニテモ生魚ニテモ、御果子ハ三方ニ四季ノ果子ヲ盛ルベシ、

右ノ通リニシテ、出棺マデ毎朝供之ベシ、毎夜土器ニテ燈ヲ立オクベシ、

次宣唱自分任意

〔行治神道葬祭拾式錄〕遠州佐久良池社神葬祭式鯨主小池竹山日向(慶應茂睦)

入棺後凶拜告辭

御身神退奴留留依氏、爲便無久哀乍毛、御尸乎○茂睦父茂似柩留斂奉眞世、涙乎垂氏殯志侍利、孝子姓名、哭泣哀母申、

如此辭ヲ柩ニ向ヒ微音ニトナフ、是ヲ告辭ト云、

柩ヲ葬所ヘ出サスル時、柩ノ前ニ燈明ヲアゲ、食膳酒盃ヲ獻ズ、食膳ハ飯ヲ高盛ニシ、海山岡野ノ物ヲソヘ、御酒ヲモ同ク獻ジ、凶拜シテ又告辭セヨ、

今日乃此時爾、哀爾不堪禮止母、御柩乎勵志出奉武止須、此與利後、御形波黃泉爾歸坐氏母、御靈波此屋爾長久久久、平生乃如坐給倍止孝子姓名、哭泣哀母申、

如此告辭シ、又凶シテ起ベシ、

〔和漢習合葬祭記略〕葬具整ヒタル時分ニ入棺ス、其時尸ヲ沐浴シ、髮ヲ結ヒ、衣服ヲ替ル事ヲナサズ、コレハ荷田翁ノ說ニ從ヘリ、其說ハ葬里神官慣終記ニ出タリ、○中略サテ尸ヲ薄キ褥ニ包ムカ、又包マズバ、棺ノ中ヘ當人ノ衣服ヲ敷キテ、其上ニ坐セシメ、狩衣差貫小袖ノ類ヲカイ物トナシ、尸ノ動カヌヤウニナシ、烏帽子扇ナドヲモ入ルヽナリ、此時ノ心得ヘ、諸家ノ說ニ多シ、必見ルベシ、サテ刀劔ノ類ハ入レズ、含飯或ハ瞑目握手充耳ノ類モ略セリ、○中略棺前ニ机二脚ヲ一脚ニテモ置キ、一ツニハ靈璽ヲ居エ、燈ヲ點ケ、一ツニハ足打カ白ヘギニテ、飯或洗米、酒水魚野菜山果海藻ノ類ヲ備フ、土器ニ盛リ、或ハ木葉ヲ敷ク也、供物ハ定數无シ、心ニマカス、此時ヨリ飯ノ外ハ、皆生物也、此時マデハ、平常ノ食料器物ヲ用フト云說モアリ、何レカ宜シカラム、可考、

〔早懸略記〕內宮神葬名目ヲ早翔ト云、葬禮ノ法ハ、決而不用也、其由緣ハ、一日半時モ死人ヲ家內ニ止置事、神地恐多、土地一統ノ觸穢ニ拘ル事故、息引取ト云ヘドモ、一日一夜ノ間ハ、至未息引取、病中ノ取扱介抱第一也、一晝夜程ノ間ハ、身體ニ火氣モアリ、又親族タル人、成丈養生介抱スルハ實心ノ至ル處ナリ、折々藥ナド進參ラスル也、諸事夫ニ順テ可知、別テ水ヲ折々進ムベシ、尤榊葉枝ニテ、口中ヘ少シヅヽソヽギ入參ラスベシ、家內者勿論、親族緣類ノ者迄、病氣見廻トテ入來人々挨拶モ、御病氣大切ニ及タル由、嘸御心遣可成由申之、又他所ヨリ其法ヲ不知人、緣ニ付使者等差越カ、又懇意ノ獵來、御悔申ナド述之ト雖モ、夫ニハ構ハズ、奏者、成程謹義大切ニ及候、遠方ノ所、辱

ト答ル法也、他所ノ辨ナク來ル人ヘ、一々申聞スニ不及、古來ヨリ土地ノ式ナレバ、所ノ者ハ兼テ能々心得居ル事也、此式古ヘヨリ內宮神地ニ限リ、外ニテ此法無之、誠ニ唯一ノ難有事ヲ可思可察也、古老口傳ニ、廟所ヘ病人ヲ送リテ土ヲカクル迄ハ、早懸ノ式ニテハ穢無キ也、去間神地ニテ改葬ナドハ不相成也、

早駈濟テ家ニ歸、忌中所ニ入テ、忌中ノ挨拶等、相タガヒニ申述ル也、

右故墓所ニテ土カケノ人、一七日ノ穢也、

一病人大切ニ及バヽ、早懸之用意專一也、早朔當日、以使者親類緣家懇意ノ家々ヘ、何誰今日及大切候、此段御屆申候ト告爲知可申事、○中略

一入棺ノ時、病人衣裝、當人有位無位ニモヨリ、祭主ノ意ニ任ス、衣冠狩衣布衣素袍麻上下、何レニテモ衣服、春夏秋冬時節分限可應、又清淨ニ白晒木綿等ニテ、アラタメ仕立著セ申シ可然、笏扇持タセマヰラスル、刀ハ別ニ製スル方吉、金物ハサビ出、夫ヨリ外ヘクサルモノユヱ、可有心得事也、入棺シテ上ノ蓋ヲセヌ內、親族盃事有之、尤土器ヲ用、夫濟テ蓋ヲ打、入棺ノ節取計ハ、病人敷物白絹又白木綿ニテ、綿ヲ夏冬トモ澤山ニ入レテ、身ノ痛ヌ樣ニ夫ニ坐セシメ、フトンノ四隅ヲ持、血緣ノ人々五六人ニテ、心靜ニスツホリト棺ノ中ヘ納奉ルベシ、尤情愛ニテカナシミニタヘ兼ル人モ有ベキカナレドモ、肝心ノ事故、名代ニサセルナラバ、隨分人ヲ見立叮嚀ニスベシ、下賤ノ手ニカケ、麁末ニシテハ不宜也、右ユヱ敷物ハ隨分大キクユツタリト拵置事也、中ノ詰メ物ハ、祭主ノ意次第ニスベシ、綿スリヌカニテモ可然、棺ニ前後上下左右印スベシ、

(伊勢早駈次第)吾神宮ニ、近古以來速懸ト稱スルモノハ、葬禮ノ觸穢ヲ遁ンガ爲ニ、未死ノ由ニテ家ヲ出シ野ニ送ル事ナレバ、定レル式ノアルベキヤウモナシ、唯如在ノ禮ヲ專ニ取行フノミ、殯斂ノ禮モナク、尸ハ臥蓐ノマヽニテ、枕几枕火等ヲモ設ケズ、頭邊ニハ湯藥飲食ヲ薦メ不問語(トハズガタリ)

ヲナシ、其樣病中ニ異ラズ、

又沐尸ナドノ事モナク、著衣ハ其身相應ノ時服ナリ、但尸ヲ動スコトヲ畏レテ、尸ヘハ常ノ小袖バカリヲツケテ、冠服ノ類ハ、棺ノ中ヘ入テ送ルモアリ、

衾ハ白絁カ布ニテ、單被二條ヲツクリ、一條ハ尸ノ下ニ薦キ、一條ハ尸ノ上ヲ覆ヒツヽムナリ、但シキフスマハ納綿ヲモ用ユ、○中略

入棺ハ、尸ヲ衾ニツヽミテ棺ノ內ヘヲサメ、傾キ動カザルヤウニナシテ、蓋ヲヨク封ジ、前ノ方ヘ某官姓名生年死日ナドヲモシルスナリ、モトハ銅版ニ彫リテ棺ノ內ヘ入シコトナレドモ、遠懸ノ事ナレバ、如此取計フナリ、槨ノ四方上下ヲ白布カ繩ニテヨクカラミ、壙ヘ入ルカツテノ宜キヤウニナシ置ナリ、前ノ方ヘハシルシヲツケオクベシ、

〔行治神道葬祭拾式錄〕引馬諏訪社神主葬祭式

杉浦信濃守從五位下藤原朝臣國頭府君　元文五年庚申夏六月庚午朔癸酉卯上刻卒

先孝子、國滿隔衾際、捧衣招魂、　次門表以白布書喪家也、　次爲調棺槨衣巾葬具等之沙汰　次亥刻殯斂、安內寢上座、隔轜車、　次挑燈　次孝子著縗麻喪冠、哭拜奠供物、供米御酒干魚　次孝子設席終夜侍側　次親族哭拜、隨孝子侍、　次門弟子隔席哭拜　次家臣以下禮拜　次撤供物

〔行治神道葬祭拾式錄〕濱松庄小池村神明社神主竹山日向秦茂睦葬祭行事

竹山太郎右衞門父○茂睦茂似　十月十四日卒、先死者北枕あをのけに寢させ、枕元あんどう、　次孝子沐浴、著麻裏烏帽子、　次孝子茂睦隔衾際、捧衣招魂、

次高机裝此時

手拭　裝束　匿巾　帷付衣　染袷　染綿入

葛　中啓　牌作以瓦　單衾白布一幅ニテ四尺ニ作ル　羽織

烏帽子　白布子　手巾白一尺　日巾二寸　大刀白木ニテ鍔入ダ作

（白單物帷子　下帶上帶　踏皮　大刀）

次魄靈修封、死者寢上ニ置、　次魂靈修封　次高机設靈座　次御燈　次裝束烏帽子笏中啓高机飾　次哭拜奠供物（供米御酒干魚、各柏葉包、）　次祭文　次入棺（此時單衾之正中、死者安座、手ヲ組、單衾四所之角ヲ頭之上ニ而結入棺、右捧置品々ニ而詰ル、）（魄靈笏等不殘入棺、）　次棺額板（書ニ桑茂似）比止岐　次棺封ヲ付ル　次棺臺前後鳥居四方井垣　次棺奠供物哭拜　次小寺下堀村安福寺（倍）案內　次孝子旗書（二流）　次第四木書（各小旗一本二字宛）　次葬所坑堀外棺　次安福寺來入向孝子　次向棺拜禮　次安福寺向孝子問葬祭品

〔鈴屋遺言〕沐浴は世間並にて宜し、沐浴相濟候はゞ、如平日髪を剃候て、髪を結可申候、衣服はさらし木綿の綿入一つ、帶同斷、袷にても、單物にても、帷子にても、其時節の服たるべく候、麻の十德、木造の腰の物、尤脇指計にて宜候、隨分麁末にて、只形計りの造り付にて宜候、棺中へ晒し木綿の小布團を敷可申候、隨分綿薄くて宜候、總體衣服、隨分麁末なる布木綿を用可申候、㧞稿を紙にていくつも包み、棺中所々死骸の不動樣に詰め可申候、但丁寧にひしとつめ候には不及、動き不申樣に所々つめ候て宜候、

〔喪祭私說〕初終

死于適室、（死于適室者、唯家主爲然、餘人則各死于其所居之室中、或病困臥于他室、不可動擡者勿遷、）既絕乃啼、（有遺言則書之、氣絕男女擧哀、略撤垢衣衾、以素單衣覆之、○中略）乃易服不食、（妻子以下、皆脫衣徒洗、去華飾、婦人髽、諸子三日不食、親戚尊長强之、少歛稀粥可也、○中略）執事者、設屛風及席遷尸、（設席東西、隨室之宜、屛風圍之、遷尸臥于席上、覆以素單衣、暑月則設牀簀、第置水盤、若亡者尊幼則各于其室、）乃設奠、（執事者以卓子置香爐酒茶之類、奠于尸東、侍者朝夕設茶湯之具、皆如平生、）主人以下代拜盡哀、（主人以下各以服次入拜、盡哀乃代、夜則諸子親戚、寢於尸近側、男女異室、子弟使僕、晝夜代護尸、不絕香燭、若暑月令使僕以巨扇扇尸、以至歛、）食時上食、（子親戚執事爲之、食具皆用蒸器、日三次、以至遣、普按今世習浮屠之法、一切祭祀、無用魚肉者、流俗之弊、固不足責、然有志于禮者、當初喪之時、乃外實魚肉、世人驚怪、以爲異事、或反致燕犒之議、故自初終至五旬忌閔、姑從俗禮、宜用素膳以避嫌疑、且哀戚致禮、不必備物可也、）執友親厚之人、至是入拜可也、（實臨尸拜、盡弔主人、主人出拜無辭、若非所尊者、請喪代拜亦可、○中略）

厥明（死之第三日也）執事者、設沐浴襲歛之具、（按沐者漢人常事、故亦施之於死者、我邦今世之人、平居無沐髮者、但俗於襲時、特以沐浴號稱、而實亦不用沐、今從俗姑存其稱、）

而省其儀、

○中略

襲具

時服、一襲 帶、一條 公衣裳、一稱 儀刀、一雙 搢扇、一柄 幎目、用熱絹夾縫之、方八寸、內充以絮、可以覆面、四角有繫、于後結之、或麻布、無綿也、 握手、長八寸、廣三寸五分、熱絹縫之、如囊、以單手、繫于腕結之、 假髻、長尺、廣五寸、制如握手、有繫結于附、蓋平時髻、或便髮施、故設此髻、握手、假髻、俱用布亦可、凡布帛制度、皆用今尺、後倣之、

斂具

充囊 糊紙爲囊、大小長短數十百計、實以穀皮、大氐以穀皮五斗爲度、用代斂衣、 紙褥、用紙糊合製之、穀皮代綿、以加七星板上、狹濶隨宜、用代斂衾、充褥紙褥、皆用穀皮者、以其能防溼也、 布絞 用白麻或棉布四幅作之、每幅長七尺、以直者二幅、乘橫者二幅、爲十字、合處皆縫之、餘皆不縫、

乃沐浴 侍者以湯入、舉尸而浴、拭以巾、解髮櫛之、撮爲髻、剪爪剃鬚、其髮爪盛于囊、俟斂納于棺、浴水井巾櫛、掘屏處潔地而埋之、善按禮沐浴在死之日、此用第二日(二日一本作三日)者、蓋以浴易發臭氣也、且今所行襲斂之儀簡、則隨浴隨斂、亦無妨矣、其浴所用湯、取微溫可也、必勿使過熱、 襲 侍者設襲床、遷尸於其上、悉去病時衣、先襲時服、結帶、乃襲公衣裳、佩儀刀、搢搢扇、設幎目、握手、假髻、 斂 侍者盥手、鋪布絞、遷尸於其上、穩處、拱手安頓其體、各執絞納于棺中、隨收絞端、乃實生時髮及所剪爪于棺角、又攝其空缺處、塞以充囊、務令充實、不可搖動、愼勿以金玉珍玩置棺中、啓盜賊心、既畢、主人以下憑哭盡哀、婦人退入室、乃召匠加蓋下釘、若漆用漆與者、至此覆柩以衣、 奉柩遷于廳事、執事者設席、役者遷柩其上、屏風圍之、 乃設奠、置卓于柩前、焚香、茶菓酒肴隨宜設之、

〔喪禮儀略〕病者命終ラバ、內外ノナリヲ靜メ、正寢トテ家ノ內ノ者、座敷ヘ尸骸ヲ遷ス、但家ノ主人ニ非ズンバ、常ニ居タル所ニ居ベシ、下ニ蒲團ヲシキ、尸骸ヲカキノセ、枕ヲサセ、南首ニフサシメ、新シキ著物ヲ襲オク、其傍ニ親類カ、又ハ親シキ者一兩人ヲ付置ベシ、其前ニ屛風ニテモ幕ニテモ張テ、內ノ見ザル樣ニスベシ、サテ沐浴シテ、新シキ手拭ニテ身ヲ拭ヒ、髮ヲユヒ爪ヲ剪ル、剪タル爪ハ、紙ニ包ミ、棺ノ內ヘ入ベシ、膝々ノ仁者、新シキ白小袖ヲ著スベシ、通禮ニハ白帷子ヲ用ユルモノナリ、此時病中ノフルキ著物等ヲ悉ク去テ、新キ著物ヲ用ユ、前ノ座ニ新シキ席ヲシキ、其上ヘ尸骸ヲナホシ、此時モ南首ニス、紙ニテ衾ヲ廣ク作テ其上ヲ掩フ、是モ膝々ハ新シキ蒲團ヲ用ベシ、是ヲ小斂ニ擬ス、其後幎目巾ニテ面ヲ覆ヒ、握手巾ニテ手ヲ

ツヽミテ大歛ニ擬ス、其後靈座トテ、尸骸ノ前ニ、其人ノ常ニ著タル肩衣袴ニテモ、亦ハ著物ニテモ卓子ニノセ、其上ニ魂帛ヲオキ、又其前ニ卓子ヲ置キ、其上ニ香爐香合燭臺ヲオキ、酒茶菓子ヲソナフ、靈座ノ右ノ方ニ銘旌ヲ置ク、此時親戚朋友、皆燒香シテ拜ス、其後棺ヲ尸骸ノ傍ニヨセ、先ニ尸骸ヲ掩ヒタル蒲團ニテモ紙衾ニテモ棺ノ底ニ鋪テ、四方ノハシヲ棺ノ外ヘタレ、其内ヘ尸骸ヲ抱キイレ仰キ臥シム、先ニ切タル爪ヲモ此内ヘヲサメ、(若シ存生ノ時ノ齒髮ナドアラバ、此時棺ノ内ヘイレル物ナリ、)四方ヘタレタル衾ノハシニテ尸骸ヲ掩ヒ、棺ノ内ヲ平ニシテ蓋ヲシ、棺ト蓋トノ間、少モ罅隙ノ無樣ニ釘ニテ固ムベシ、(但シ歴々ハ棺ノ内アキタル所ヲ布カ綿ニテ塞テ、尸骸ノ動カヌ樣ニスベシ、)其後棺ヲ又故ノ處ヘナホシ、銘旌ヲ棺ノ右ノ方ニタテヽ、命終ノ日ヨリ葬ムルマデニ、一日ニテモ數アラバ、朝夕ノ常ノ料理ノ膳ヲソナフベシ、是ヲ朝奠夕奠ト云、○中略

幎目巾之圖(○圖略、以下同)

白布今尺ニテ七寸七分四方ニテ、四方ノ角ニ帶ヲツケ、面ヲ掩テ後ニテ結ブ、或ハ二重ニシテ內ヘ綿ヲ入ルヽモヨシ、歴々ハ白キ絹ヲ用ベシ、

握手巾之圖

數二ツ　白布一幅長サ今尺ニテ七寸七分ニシテ、幅ノマン中ヨリ二ツニ裁ツ、四ノ角ニ帶アリ、兩手ヲ包ンデ帶ヲ結ブ、是モ歴々ハ絹ニテ二重ニシテ綿ヲ入ベシ、

魂帛圖

白帛ニテ圖ノ如ク結ブ、通禮ノ者ハ、白紙ヲ長クツギテ結テ魂帛ニ用ベシ、

銘旌圖

絳キ帛ニテツクル、廣サ一幅、長今尺ニテ四尺五寸許、(但周尺ノツモリ也、)竹ニテ杠ヲツクリ、木ニテ趺ヲ作ル、男ハ氏名乘、(是モ位階又ハ稱號アル人ナラバ、委細ニカキ付ベシ、)女ハ氏名ノ下ニ、之柩ト云二字ヲ書、通禮ニハ右ノ

長サニ赤キ紙ヲツギテ、午粉ニテ氏名乘ノ柩ト書ベシ、

〔鵞峯文集七十四哀悼〕泣血餘滴

明暦二年丙申三月二日辛巳申酉之交、余(○林春齋)母荒川氏(諱龜)終於寢、(中略)及其屬纊戒內外、設屏風於寢奥、敷席加蒲團、遷尸、覆之以衾、置枕南首、(猶用生者之禮也)而使近侍老女二三輩居其傍、使家僮二三人護之、余及春德、亦不離其邊、及夜而復家君(○道春)作其詞、遣一人、持其所嘗經服上衣、左執領右執腰、余代家君、焚香讀其詞、(古禮升屋行之、今於尸傍爲之、)其詞云、

嗚乎哀哉、配我以來既四十八年、宜家宜人、閫軌淑焉、季春初二、空房嗒然、是日何日、啼涙漣々、懸戒巫陽、招魂于天、魂歸來兮、東有蝦夷、毒箭控弦、魂歸來兮、南海漫々、長鯨呑船、魂歸來兮、西有羯虜、擾亂山川、魂歸來兮、北胡韃馬、飛如鷹鸇、魂歸來兮、欲上天而雲不可以穿、欲入地而隧不可以及泉、魂歸來兮、汝有室、汝有筵、魂歸來兮、決不歸來、使我悁々、嗚呼魂而有靈兮、何不乘此香烟、嗚呼哀哉痛哉、唯願窈窕之來前、明暦二年丙申三月二日、林道春硯與涙同滴以書、

讀了哭擗無數、既而家君及余春德、幷春信春常等皆易服、縗衣素服、(斬衰齊衰等之制、今俄難詳之、雖素者、本朝古來喪服、縗衣是也、況朱文公亦居喪、服雖素之例有之、則彼此不爲無據、)乃命工治棺、訃告親戚、其後陳襲衣、乃設沐浴之具、既而沐浴畢、著明衣、襲白服、結白帶、著綿襪、而幎目巾握手巾、加白帽、而飯含、(用米錢、)事終而抱尸復初座、而仰臥之、加單被於其上、以擬小斂、絞布之制未詳、且有不忍爲之意、故略之、(古禮幎目巾握手巾等、皆有制法、然今用先妣所調置之具、)於是置靈座、設魂帛、主銘旌、不作佛事、

靈座(尸前設架、架上置衣服、其前置魂帛、其前設卓子、卓上設香爐香合蠟燭、供酒茶菓、)

魂帛用白絹一匹結之、(按魂帛象人形、以帛造之、故雖立之、今以擬板爲首之心、以細竹爲兩足之心、○圖略)

銘旌(以絳帛爲之、廣中幅、長八尺、用周尺、以竹爲杠、加於靈座之右、其制如傘架、粉書隨其生時所稱曰某之柩、○圖略、)

(今按、銘旌所書、於男女有所異、尺長短於貴賤有不同、詳見家禮註、今所用者、稱我家之分、而准士禮之例、餘皆倣之、又按儀禮士喪禮註、有銘旌之事、其制與家禮註相異、今暫從家禮、)

三日壬午、朝奠、食時上食、（寢膳、）夕奠、（余及春德等拜魂帛上香、三奠皆然、但朝夕用茶果、不供膳、○中略）今夜棺成、（○中略）於是擧棺於寢內、以大斂、鋪石灰於棺底三寸許、而加紙於其上、而鋪七星板、（板厚一寸許、有七孔、）而鋪大綿衾於其上、而垂其四裔於棺外、而置木枕、枕之制、中窪而左右高、爲不使尸首動搖也、既而抱尸以容之於棺內、而仰臥之、斂衣如前、掩以單被、而實生時齒髮於其傍、以絹綿塞其空缺、而收衾裔之垂棺外者、先掩足、次掩首、次掩左、次掩右、令棺中平滿而加蓋、打釘而脗合、令無些罅隙、且塗瀝靑、而置凳子兩箇於屛風內、而安棺於其上、以白布覆棺上、而設靈座、立魂帛、備奠供、而立銘旌於其右、今夕余與春德私議、白家君奉諡先妣曰順淑孺人、　四日癸未、朝奠、食時上食、夕奠、皆如昨日、（上香拜禮如昨、）余及春德相議謂、國俗不能久殯、（○中略）議發引之事、然及晩以雨猶未止、故不克葬、　五日甲申、朝奠、食時上食、夕奠、皆如昨日、（上香拜禮如昨、○中略）今夕行葬、

〔吉事略儀〕當日事定後直御座（北首）

近習僧綱凡僧之中、撰其人六人（若八人）參進役之、御于御筵者、四人舁上御筵、（左右各二人）二人拔取下御疊、（上下方各一人）其筵奉直北首、若自元爲北首者、只可拔取御疊、若又乍座有事者、奉臥閑漸御膝等可引舒、奉舒間事、能可用意、荒奉舒、脈肉有露顯事、若御于御疊者、切放御帖筵奉舁上、取弃下薦等可奉直也、若又當日可有入棺者、如薦不可及撤之、

（裏書）切放之者、筵之閉緖ヲ切也、不可切薦端也、（ウシトラノ角ヨリ切ハジメテ、ヤガテソノ角ヘ切マハル、）

或說云、ウシトラノ角舁人ハ、スコシタチサガル、鬼門ヲサル心也、

奉掩御衣

自元著御衣袈裟者、其下薄御小袖一領、若爲夏帷可奉著、於厚御小袖御袙御宿衣等類者、可拔取之、可奉引覆今御衣、若不著御衣袈裟等者、先今御衣可奉著、次其上御衣袈裟奉著之、（御手漸舒之奉著之例也）是不奉覆御衣者、必御足現形之故也、若自元如御裳著者、勿奉覆御衣、御念珠自元持御者、尤可也、

若不審奉貫御腕、

立廻御屛風

（裏書）如尋常時儀立之、若御于御障子內者、非此限、

尋常時者、屛風裏返事不可有之儀也、世人如此、依致非義也、

供燈（奉折數）

（裏書）御枕方去一間許、向北挑之、夜陰有事者、自元所擧燈也、若爲日中者、打火擧之、至于禮畢時不滅之、

若夜ナラバ、自元アルトモシテアルベシ、ソノタグヒノ火ヲバ皆ケツベシ、晝ナラバ打火ニテアラムズレバ、ケツベカラズ、

或說云、二□□□□□御枕ノ火ヲオコシツク、トモシビキエバ、トモシツケンレウナリ、

燒名香

近邊便所以大火舍燒之、自元有不斷香者便用之、不然移付御枕燈火、同至于彼時不滅之、

安吉酢

（裏書）夏時經一宿有非常香、仍無水氣酢入鉢（大土器五坏許）儲安御鼻近邊、寒時日數非幾者勿安之、

安吉酢者、必非入鼻穴、置鼻邊也、其故自鼻穴臭香出故、爲塞彼也、

堪念誦近習禪僧等、番伺候近邊、（御屛風外）

可誦呪、勿無人、是後朱雀院御時、番人等白地起去間、有奇恠事之故也、

御入棺儀（中略）○

侍六人被撰定、近習者四人舁御棺、二人取布脂燭（若松明）可前行、

（裏書）此火用便宜之所、不用御枕上同火、

此火者枕上火也、布脂燭ニハ必付此火也、此大儀也、略之時ハ用便所火更無障、至他家火無忌

事ヲ云ハムト也、

御棺事略〇中

夏時可經兩三日者、入甲折櫃土器粉三合香二合、非外人侍五人可持參也、（先例灰粉鹽等有之、然而今度可被略之、）

裏書　兩粉ヲバ自胸邊下至尻邊廻テ、押カヘシテ敷也、香計ヲ爲合敷也、

御入棺役人六人、若八人、（以紙捻爲腰帶者、稱人上結、）開明障子、（若被懸簾者、二人可褰、）於簀子傳舁入、置御傍、隨所便宜、有如香雜物者取入之、即開明障子幷戸、（爲蔀閉下之、）

奉移御棺

先撤覆幷綱料布

次撤棺蓋

次入散香土器粉

次奉移御體

役人六人舁筵、（四角幷左右傍）作筵奉入之、若筵左右差出棺上者、役人一人以利刀（可召侍刀）始自良角終于同角切之、（件筵切入御筵下跡方）

裏書　付有尤可也、身體之良ガ故也、且筵端差出、切之間有其煩歟、若敷物者、白布二幅縫合、而自筵可奉移臥也、

裏書　若下敷□□絹布類也、有下敷等作筵□□□御棺方ノ中ニ立人タケカタカタヨリウシロニツク、

裏書　或說云、筵ヲバキラズ、ウラノ方ヘヲリ入ルコトモアリ、

次入御枕

略儀平生御時枕可入之、（置御首方也、本體羅御枕也、）

裏書
御枕自本御筵之上ニアレバ、御體遷之時ヤガテ入、別ニハ不入也、

次奉掩野草衣、書梵字、以字方得上、

不可拔取本御衣、爲夏者可拔取之、

裏書
引覆曼荼羅、號野草衣也、

裏書
御跡方ヨリヌキトル

次散土砂、

役人中堪事人可散之、御頭御胸御足等、三箇所野草衣上散之、

裏書
知眞言諸人也

裏書
私有用心次第、以圓石書寄量品、分著也、尤可也、

次入御物、

御護、火葬之時、御護中有秘藏御本尊、可撰留、是故實也、御持經、入宮、此外御物等存略不可入、抑御法衣、雖事定後可奉著也、仍不及副入、宮々幷人々、阿末加津不可入、

裏書
阿末加津土造、以外僻義也、阿末加津者、作黄檗人形也、其長五寸許也、略儀無是、

次覆蓋、

次覆帊、

次緘之、

緘樣可用二所異結、自御棺蓋足内方通之、火葬之時即解無煩之故也、

次如元舁居御棺、

本臥給所如元北首奉舁居也、若所便狹者、暫取去燈、事了之後、如元可立燈臺也、

御浴殿御手水御膳等、有先例可略之、

〔忍辱雜記 上〕入棺儀式

先哲筆記云、俗士問僧、剃亡者何義、僧答云、是乃表出塵義、作沙門形、俗士敢問、若爾者何故不被袈裟衣、著白布俗服乎、僧云所云白布者、乃是經衫也、其功德甚深、新制之、汝不知言、俗士云、經衫功德甚深、不敢是疑、而是非沙門所服法衣、頭作沙門、身被俗服、是則得不令亡者爲蝙蝠僧送冥途乎、拍手大笑、僧默然矣、余憶俗間謗當、僧答暗昧、今時僧家不可不知詳、夫雖亡者髮者、乃表出家入道儀相、而不著袈裟依律制也、新被布衣(直綴)順釋家葬儀也、是非俗衣、亦非經衫、俗士不知宜也、僧不辨無知也、(經衫更有由緣)佛祖統紀三十四(十九丁)曰、律明三衣、唯許傳受、未聞佛祖被亡軀而從火葬、末代無知、多行非法、若從茶毘火化之法者、不當披搭自取燒衣違律之過、(略文)是故雖長老上人、亡體不搭袈裟也、今時葬儀、剃髮不著袈裟此謂也、又百丈淸規下一(五十七丁)云、維那提督著衣(直綴)入龕、置延壽堂、鋪設椅卓位牌、(文)是故亡僧制著淨衣新衣、今時葬儀、著新布衣此謂也、僧宜辨知、(今日先哲之意、白布衣卽直綴變衣也、有人云、俗士火土、不被袈裟、未受戒故、)問亡者必咸可令剃髮乎、答未必然也、或剃或不剃、但從其意樂而已、用意問答曰、問或人云、在家婦女、若命終者、令之剃髮此義是也、爲耶、答可從意樂、若有遺言則可剃髮、夫陀羅尼文字、觸死體之得益、見在坐敎、出家功德、亦莫大焉、縱使死後作出家形、何不結善緣哉、以是故云爾耳、(已上)但轉經念佛、覓之得脫以可至要、

〔鹽尻 二〕亡者ノ盤ニ水手向ル　或人云、凡そ亡者の盤に水を手向る事は、佛法に效へる事か、予按ずるに、是我國上古の習俗か、日本紀十六に、鮪臣が死せしとき、影媛哀傷の和歌を詠じて、玉笥に飯盛、玉椀に水盛抔云ひ、其葬の時、水喰みもりみな酒の詞あり、是我國へ佛法來らざる以前の事也、

施餓鬼　佛氏といへども、餓鬼の外、佛菩薩等に水手向る事なし、今の俗は、我が祖先の靈を以て、賤しき餓鬼となして祭る者多し、思はざるの甚しきに非ずや、

〔貞丈雜記十六凶事〕死人の額に、白紙を三角にしてあつる事あり、年中行事の繪卷物の內に、凶事に非る時、至て賤しき者と見ゆるが、黑き三角なる物を額にあてたる體をゑがきたり、是ひたひゑぼしといふ物なるべし、〇中略常には黑き紙をたゝみて作り、死人には白紙にて作り用たるがゑぼしの代りなるべし、

〔无礙雜考一〕童戲

兒額烏帽子西行が歌のこと、すでに友人高田松屋の漫筆に載たり、このゑぼしにおのれも亦辨說あり、試にいふべし、舞童の額にあつるものは、此烏帽子のもとなるべし、幼帝御元服以前に用ひ給ふ、空頂黑幘さやらんまうす物のたぐひなりといへる說もあれど、庶人の是を擬し奉らむはおほけなし、惠命院僧正の海人藻芥に、諸門跡の兒の裝束のことをいひて、袍幷に舞裝束の時は、髮をびんづらに結也、本結の上に、ほすがたとて、金にて打たる物を付也とある、はすがたといふもの、舞童の額にあつるものなるべし、今はこれを天冠といふと聞けり、また葬送の時、額に紙三角にして付ることも、江戶近き寺手などにもあり、大人はせず、只童にかぎるなり、

〔今昔物語十九〕內記慶滋保胤出家語第三

今昔、口口天皇ノ御代ニ、內記慶滋ノ保胤ト云者有ケリ、〇中略川原ノ有ル所ニ至ニケリ、見レバ、河原ニ法師陰陽師ノ有テ、紙。冠ヲシテ祓ヲス、此ヲ見テ馬ヨリ忩ギ下リテ、陰陽師ノ許ニ寄テ云ク、〇中略其紙冠ハ何ノ料ゾト、陰陽師ノ云ク、祓殿ノ神達ハ法師ヲバ忌給ヘバ、祓ノ程ト暫ク紙冠ヲシテ侍ル也ト、

〔權記〕寬弘八年六月廿二日甲子、卯剋參院、近候床下、依御症危急、〇一條一心中竊奉念彌陀佛、奉廻向極樂、上皇時々又念佛、權僧正幷僧都深覺明救隆圓院源尋光律師尋圓等、又進候念佛、僧正爲追魔障、只奉仕加持也、辰剋有臨終御氣、仍左大臣〇藤原道長示右大臣以下皆令下殿、暫之令蘇生給云々、卽諸卿等參上、午剋上皇氣色絕、依左丞相命、下官〇藤原行成初不穢倩廻思慮、不穢無可出仕之理、卽申案內、

觸穢、廿五日丁卯、自世尊寺參院、亥四刻御入棺作之、在西北小門、此時刻主典代幷後院人等共昇之、經藏人町前幷花德門仙華門等代戶、置之殿南簀子敷上、殿上人傳昇之、左兵衞少尉橘義通、文章生藤原章信等、秉燭前行、伊豫介廣業朝臣引導、(不持白杖、與延長例違、)昇置夜大殿南戶內御床南頭、權僧正尋光隆圓兩僧都、尋圓律師、幷右宰相中將、內藏頭等、奉仕此役、源藤中納言幷予、入自二間御障子、亦候、

〔榮花物語 三十三 きるは侘しと歎女房〕うち(○後一條)の御なやみ、日をへておもらせ給て、(○中略)遂に四月(○長元九年)十七日の夕方うせさせ給ぬれば、所がら院(○後一條母后彰子)も宮(○後一條后威子)も、同じさまにておはしませば、きこえさせわづらひて、かくてのみはいかでかとて、御せうとの殿ばらぞ、下の御つぼねに、御ぞにおしくゝみてゐておろし奉らせ給、(○中略)れいのさほうに御めのとこも、のりたふのいよのかみ、實綱、憲房、義通などつかうまつる心ちどもおもひやるべし、兼房の中宮のすけ、いひつゞけてなくこゝろのおぞろ〳〵しきもあはれなり、むかしはかくくらゐにてうせさせ給ふは、まさなきことおほく、所せかりけれど、いまの世はさるきびしきこともなし、

〔台記〕天養二年八月廿二日乙未、酉刻待賢門院崩、(三條高倉第)上皇(○鳥羽)先之坐同所、病急告法皇、卽幸、臨終、法皇打磬哭泣、然後群臣哭、或曰、法皇不待使者告、自然臨幸云々、　廿三日丙申、待賢門院先入棺、次幸仁和寺三昧堂、其儀如生存、但群臣步行、卽安置石穴云々、西方當大將軍王相方云々、然而依御遺言、猶奉渡云々、有議定云々、

〔高倉院升遐記〕治承五の年の春のはじめ十四日のあかつき、ねざめの御枕をきたになしてたまの御ありかもにしにうつさせ給しかば、雲とやなり雨とやならせ給ぬらん、夢かゆめにもあらぬかとおもひあはせんかたもなく、まどひにまどひをそへて我になして我にもあらず、あけゆく鳥のこゑもおしまず、をのがきぬ〴〵いづちすてゝかくれさせたまひぬるぞと、たゞありあけの空をながむれば、みどりのかすみばかりうたてたちのぼり、いさごをたゝきてつちのそこ

へいらんとすれば、きなるいづみそこふかくして、かへらぬ水のうき世のあはさはいひながら、なみだの川のめのまへにかゝるうきよをわたるべしとは、きしうつなみの思ひよらざりし物となげくにかひなし、

〔明月記〕建久三年三月十三日、未明雜人云、院○後白河已崩御、或說云、亥刻許御氣絕了、○中略今夕御入棺云々、○中略入棺役八人靜賢、親能、教成、範綱法師、能口、業忠、資時入道、今一人不定云々、

〔明月記〕天福二年○文曆元年八月七日癸酉、及黃昏有弘來云、○中略今日奉返御枕、○後堀河可放御座筵、此役隆盛朝臣、律師隆信、隆宗子、二品猶子、繁茂父子、總四人、他事無沙汰云々、　九日乙亥、御入棺明日歟、其役人大略、隆盛範輔僧都、隆信、信繁入道、繁茂、行綱入道、忠時等歟、

〔後光嚴院崩御記〕應安七年正月廿九日、寅刻、御年卅七ニテ崩御ナリ、後光嚴院トゾ尊號ハ申セル、

同卅日御出家、御戒師泉涌寺長老、賢恰上人御剃手安樂光院長老、見月上人

〔後愚昧記〕應安七年正月廿九日、今曉寅刻許、新院○後光嚴崩御治定之由、自局告送之、　二月二日、今夜亥刻、吉時戌云々新院御葬禮也、去月晦日有御入棺之儀云々、如役人非俗人沙汰、泉涌寺僧沙汰也、實音卿說云々彼寺長老善知識也、

〔後成恩寺殿記〕正長元年七月廿一日、今夜有北首事、○二十日稱光崩三條大納言公保、長政朝臣勤之、廿二日、所役上人長政、永盛、實雅、雲客爲之、同等朝臣、長、持經、範景、以上垂纓云々、如何、登等舁居御棺、以赤地錦裹之、先規皆生絹也、應安以來之例也、於其所俗中可奉入棺之處、泉涌寺僧侶一向奉仕之、近代之例也、其後納御服御引直衣、鈍色御冠、御念珠、等、了供御手水幷御膳、陪膳實雅朝臣、役供登長持經等云々、今日有御浴湯之義歟、可尋、先規每度事也、

〔親長卿記〕文明二年十二月廿六日、亥刻許、中御門中納言宣胤實連朝臣等來、示告云、法皇○後花園只今令損御心地、被召御醫師云々、予倒衣馳參、已御大事之體也、暫清宮內卿、明茂卿等參入、各御中風之由申之、又暫照珠法印參入、同申御中風之由、可進御藥之由被仰之、御正念已失了、予奉懷御後、種々御

藥雖進之不被聞召入、御喉令煩給、灸治等所々雖有御沙汰不叶、主上○後土御門室町殿○足利義政御臺等有御參、予申云、元三大師等御立願等可然之由申入、主上尤之由有仰、已被染御筆、可被立勅使之由有仰之處、卯剋許已御命終、上下愁傷悲歎、○中略廣橋大納言等祗候、先御善知識雖被相尋、泉涌寺寺衆等一人モ不在京、實無可然之仁、知恩寺參入申念佛、　廿七日、知恩寺猶祗候、御法事御葬禮事等、可爲如何哉之由人々有沙汰、無泉涌寺寺僧云、就勅願寺可被仰元應寺、坂本邊住持移住云々、仍被下人、住持江州邊在國可召上、前住先可參入云々、就御佛事、二條太閤○持通參入定申條々、素服人々已下事、自室町殿被出御點、予、菅宰相、左大辨宰相、秦仲朝臣云々、舊記等人々不所持、仍每事鬱々、終日祗候、

〔和長卿記〕明應九年九月廿六日戊寅、今日主上○後土御門可有別殿之由依傳聞、予聊持病急馳參、衣冠、如風聞御病事、自今曉猶重御之間、任例可有別殿、仍相儲黑戶、人々馳走之時分也、○中略黑戶上段構切板等、此間之御座者御三間也、申斜剋有別殿、主上御草臥也、御著御冠計、乍御座疊奉舁之也、自御三間出北面簀子、入黑戶西面妻戶、奉居黑戶上段、各退去、兼懸儲御紙帳幷本尊等、　廿八日庚辰、今曉丑剋許、自局有使者云、主上漸可有御事之樣也云々、仍著衣冠馳參、既有御事也、男女歷々祗候、予參御座間、拜龍顏而退、南首西面臥御、般舟院西堂、自昨夜祗候、仍御臨終之御十念等奉授之、淨華院長老、御知識之事自兼日雖有御契約、今夜不祗候之間、此西堂自然爲御知識之條、尤爲宿緣歟、抑當代就武家無道之政務、國之用途、民之力無之間、今度不及御讓位之沙汰、於今者可爲踐祚之條、尤無念之事也、今夜戌剋許、有御北首之事、公卿侍從大納言、殿上人予、可存知之由傳奏被相命之間、令存知畢、且者正長度稱光院御例、公卿侍從大納言○藤原實隆父公保公也、雲客予長政朝臣予時四位少納言仰今夜祗候、自然之先規也、其儀侍從亞相御枕方、御枕共東方へ奉引廻予奉捕御足、御膝上之方兩方ヲ兩手ニテ抱持テ、西南方へ奉引廻之間、北首成御、兩人退去之後、内々兼備相寄、西面ニ奉成也、公卿直衣卷纓予衣冠卷纓但裝束者、今曉馳參時之體也、○中略後聞北首之事、自不奉觸手

於玉體者先例也、故每度疊共奉舁之、成北首之儀也云々、今度侍從亞相所存者、依無正長所見、如此分云々、仍予隨彼命、同依不得所見也、然者今度之儀、不可爲例歟、　十月四日辛酉、今夜御入棺也、可候所役之由蒙催之間、入夜參仕、(衣冠、卷纓、)御棺等泉涌寺寺官之沙汰也、雲龍院等參仕、先有御沐浴之事、此儀先例雲客沙汰也、中古以來、被付黑衣、爲其沙汰之間、俗中不知之分也、葬所之儀、亦同前云々、應安度後成恩寺關白御記旨、幷正長度東山左府所存等、皆以爲此分也、今夜內々所見分者、黑戶御座間撤疊以下、於板敷上敷御茵一枚、御浴湯、般舟院僧衆、自去廿八日祗候之間、相共致其沙汰也、御浴後御服納御弘蓋、予於常御所御庇、自勾當手請取、持參黑戶、渡付雲龍院、御帷二、(一御湯帷也、一浴後著御之御服也、)御下袴、御襪、(已上三色皆白布也、)次又御直衣、御大口、(赤、不斷著御御大口也、)御念珠等之三色、同納弘蓋、持參黑戶、同渡付雲龍院、御弘蓋爲令淸不渡僧手、卽持參常御所畢、御浴湯中、御冠猶著御也、卽御直衣等者、無著御之儀、御入棺之時、同奉入御棺也、御棺之事、今度寺官等、以數日可遲延之故、實號御棺奉入桶也、(有蓋、以絹悉皆張之、)後聞御浴湯之儀、古者爲臣下之沙汰間、事不及巨細、以方之水浸樒葉、御座上ナガラ奉洒之、坐面ヲ取放テ、筵ニ奉居入御棺云々、如此之儀事大樣間、近例被付黑衣輩者、事爲巨細也、仍浴中不知之由也、其意趣見別、御入棺儀畢、板上敷御茵、(御浴湯之時御茵通用、)其上奉安御棺、(西面、)四方立廻御屛風、(不斷御會時、被立四季御屛風也、裏方ヲ內ニ成、繪方ヲ外ニ成テ立也、)其廻疊如元敷之也、

次供御膳、(小預之沙汰也、)西面御屛風外、置白木棚、(藏人源諸仲置之、)　次陪膳(頭辨光守朝臣)候御前、次役送(侍從公音)於黑戶東簀子跪取御膳、(小預立疊上、渡役送人、)入同東面妻戶、至陪膳前跪渡頭辨、頭辨取之奉居棚上、次第奉居如前、御膳數四膳、御菓子一膳、已上五膳、(本膳常膳、並有御菓子、)陪膳居了聊退候、暫而進寄撤之、(自末撤如常也、)次御手洗、役送之人同前、先藏人源諸仲、持參御楾盥御手拭、(御手拭在楾上、)於東面簀子渡公音、公音取之渡頭辨、頭辨先取出楾置疊上、御盥置之、(屛風之前也、先是藏人撤白木棚、)次取楾(先取蓋置疊上、)進寄、三度落水後置楾於本所、次御手拭持參、頭辨取之、居左右手掌上候、(左右手在盥中央程、)其後懸御手拭於盥端聊退居、卽又進寄撤御盥、如元入加楾推出、

（御手拭猶在盥端）公音取之退出東妻戸、於簀子渡藏人、藏人取之置僧衆祗候之間也、

〔二水記〕大永六年四月五日、未刻許、主上（後柏原）有御絶入、各馳參仰天此事也、暫而被取直了、且安堵也、

六日、午後又有御絶入、上池院候御脈、勝事之由申之、頃之被取直了、護摩修法今日結願也、御惱依御危急如此、（以上五ヶ日也）半夜奉移玉體於小御所、（北間）各愁涙難押、乍疊奉舁之、（疊下二木ヲ三本渡シ、左右前後舁之、）御懸廊依狹少、清涼殿紫宸殿等其道也、　七日、卯刻遂以崩御也、（御年六十三）近臣只惘然、悲涙哭聲、皆以消魂、臨此期又奉移記錄所訖、智恩院長老祗候、有御十念稱名、殊御高聲也、正念御臨終、御往生無疑者也、頃之有御北首事、（以御枕爲北、本南枕御也、）帥大納言（公條）前督大納言（和長）等行事云々、此儀不奉見、　十一日、戌刻有御入棺之事、（御棺從雲龍院沙汰也）先之有御沐浴儀云々、（爲僧衆沙汰之間不奉見、）範久朝臣取御服（御直衣、夏御袴、生御袷、御念珠、御血脈等、各居御莒、）一度授之、（御冠御枕、自本副玉體、）等授泉涌寺長老、長老取之奉入御棺歟、如此儀、一圓爲僧衆行事之間不見之、頃之事闕之由示之、仍催御膳之事、頭辨資定朝臣參進供御膳、（先之備以精、置案二脚於御前、備御膳料也、）督少納言長淳（衣冠）役送、（小預之役庭上奉仕之）五前次第、（第一盛、第二御飯、第三口、第四口、第五菓子、）供了卽撤之、此後供御手水、（以椽手洗御手揮等、以精持參、授長淳、）橘資定朝臣先取御手洗置御前、（北面也、先例以西面爲御前歟、然而此記錄所御座分只一間也、爲狹少之間、爲北面立御屏風、）次取椽（盆泌）撤入水、（二三度、其由許也、）次取御手拭懸御手洗端、則撤之、長淳取之授藏人以緒了、近臣少々祗候奉見之、殊更拭涙痕訖、

〔菅別記〕大永六年四月七日庚申、曙天時分、御足漸冷、御（後柏原）之由有相告人、仍各參小御所、人々皆呑氣體也、（中略）○御導師又參進而奉授十念、御息底（仁）受給畢、民部卿以土器水浸水灑御口之時、御息卽絶畢、（稱故實事）此後安樂光院住持（泉涌寺住持也）被參之間、（自長橋告示也）卽令候記錄所也、良暫而民部卿（藤原元長）謁予云、漸北首御事可令沙汰、帥卿同可申之由也、卽兩人參記錄所、民部卿先是被相談逍遙院（藤原實隆）云、御座壇上一向狹少、疊難引廻之間、幸就雨儀故放帖面、面許可奉引廻云々、逍遙院可宜樣被申、仍召寄小刀一柄、民部卿、帥大納言以小刀被切疊端、（四方緣）予卽隨剪放疊面、次三人相共奉引廻、卽北首東面也、（南方卽內侍所爲御跡之間、尤難不庶幾、无力次第也、）次御屏風立廻、（以裏爲中方）次帥卿自女中御帷（白）取來、民部卿先上（仁）所

奉覆之御衣撤之、奉打懸御帷也、（本御服之上也）即所撤之御服者、帥卿被進女中畢、次御屏風前方（御枕）置御經机一脚、（撤經）居置香爐香合等也、此以後僧衆祗候、自雲龍院同一兩人參、明應度（○後土御門）北首之儀、逍遙院（予時侍從大納言）予兩人之沙汰也、其樣者無別儀、公卿者御枕共被引廻、予者奉捕兩御足、同時奉引廻畢、後日此儀相違之由、民部卿被相難畢、今朝之儀、彼卿之所意爲本意歟、予以殘命又逢此事、兩朝之儀頗無念之次第也、可謂耻辱、　十一日甲子、今曉可有御入棺之儀處、俄有相違之儀延引、可爲晚天也、日時未刻勘文云々、晚天宜歟、曉天之儀者、有僧衆申子細、（異香以外也、片時爲急云々、○中略）今夜御入棺、其儀如例、僧家沙汰也、沐浴入棺畢、如例御屏風立廻、平生御會等之被用鴈御屏風云々、今夜御服之所役藤少納言範久朝臣、於小御所勾當內侍被出之、今度不納弘蓋、御茵上、御直衣、御大口、（常舊御服也）御帷二、御茵下袴、御襪（三色皆白色也）等、積重被出、範久朝臣取之渡、付僧云々、

明應度、既居弘蓋、勾當兩度被出畢、初舊御服、（御直衣、御大口、）次新御服、（御帷二、御下袴、御襪等也、予雖害參此所役了、仍弘蓋不渡僧手、只御服共許僧取之、弘蓋如元返上了、女中故實也、今夜依帥大納言意見、不居弘蓋、居御茵云々、近比放埒之樣歟、太不可然、居御茵之故實、一切不見及、言語同斷歟、）

次御膳、配膳頭辨資定朝臣、役送長淳、自北御所東庭上小預指出御膳、長淳簀子上跪取之、持參而渡頭辨云々、乍居（跪也）取之、居並白木棚上、（兼藏人先置白木棚於御屏風前也）御膳四膳、御菓子一膳、以上五膳也、暫而進寄次第撤之、役送一々取之如初、次藏人撤棚、次御手洗楾盥、（蓋上置御手拭）藏人橘以緒於簀子渡役送之人、長淳取之、持參渡頭辨、頭辨持參御屏風前、（先是先取出楾置帖上、御盥許持參也、）次取楾、（先取楾蓋置帖上、御手拭猶在蓋上）進寄三度落水、後置楾於本所、次御手拭居左右掌上進寄候、（左右手盥中央程指出也）其後懸御手拭於盥角上引退、又聊進寄撤盥、如元入加楾推出、役送進寄取之、退渡藏人、藏人渡僧衆方畢、此已後各退出云々、

〔扶桑拾葉集二十七〕後陽成天皇升遐の記　平時慶

下官御手を給りて御氣色をうかゞひ奉るに、やゝしばらくありて、ねぶりましますやうにして、する〳〵と引入させ給ひぬ、○中略上達部殿上人、くれまどふこゝちしてふししづみぬ、やゝあり

て御ゑとねおしよせ、御屛風引かたへ、ゑぞきぬ、○中略御葬禮の事は、日えりして來る廿日○元和三年八月と聞ゆ、其程は元の御所にまします、御前僧照珍、夜もすがらともし火かゝげ、稱に法華經讀誦の事あり、夜も明ぬれば御手洗まゐりぬ、御膳常のごとく奉る、御磬をきかねばかりなり、日々に參り御燒香つかうまつる、御院號の事、諸家へ仰出さるゝ、其中より殿下より勘進せらるゝをさだめられて、後陽成院と號し奉る、

〔宣順卿記〕承應三年九月廿日、今朝勾當内侍越前へ以使御氣色伺申之處、早使歸有御事之由申、驚入落涙、暫絕言語、依所勞不參内、千々萬々如斯之時節、所勞無念事也、資熙輕服暇之中也、禁裏御門外迄參、未穢分也、併内侍所ヘカコフ也、聞昨夜自子刻許御增氣、明方ニ崩御、御歲二十二歲○後光明以之外御熱氣云々、御疱瘡ハ不宜出樣ト云々、御氣色ニ御膳等モコヽロヨクアガリ給ト云々、本院○後水尾女院○後水尾后東福門院和子御愁歎、無御正體云々、御實母京極殿○基繼歸女壬生院同事云々、近習輩晝夜參候、諸家每日參内云々、今夜有御北首事、乍疊奉昇也、近習沙汰也、自今朝朝夕供御膳、魚チ供ス御膳頭中將宗良朝臣、手長雅房、○中略自今日禁中御造營停止、　廿一日、本院小御所御入棺、雖爲來廿五日、先今夜密々奉入箱、御服ソノマヽナガラ奉置夜御殿厚疊上、御箱橫御北首、箱長四尺許、勸前大、三條西黄、持明院前黄、園宰、頼直、基賢、季從等朝臣、昭房等沙汰也、奉入箱之後不供御膳、　廿五日、晩頭資熙參内、亥刻許退出、語云今夜有御入棺事、白生絹ノホヽヒアリ、アハセ、長四尺許、幅二尺四五寸許、深サ二尺許、白木也、内黑塗、外白絹ヲ以テ張ル、廻リ悉鐵釘ヲ以テトヅル、布ヲ以テ御棺ヲカラメ、臺上ニ御棺ヲ載セ、北首西面奉安厚疊上、御棺ノ前ニ、前ノ一字僧昔之、四方立廻御屛風、裏ノ方チ内ニ取シ、繪ノ方チ外ニナシテ立ルナリ、先有御沐湯事、其體許也常ニ著御ノ御冠御引直衣御袴伽羅、何哉ラン僧書タル一紙等奉入御棺、公家衆沙汰也、資熙暇中、依テ不沙汰也、カラゲナドハ僧沙汰ナリ、供御膳五膳、御精進一二三ニ飯アリ、二三ニ常ノ御サバノ御膳ノ如シ、何モ無汁、一ノ飯ハ、コノロ、タ桶ノ大サナリ、御菜五種ヅヽ、御菜一膳五種居之、五膳ナガラ高盛、四方フチナシ、トザメ左リザマヘ、白机二脚置御屛風外、其上供御膳、撤了有御手水事、常住ノ御楾盥陪膳頭中將宗良朝臣、手長藏人左少辨雅房、六位藏人源義純、御屛風外

懸繪像、釋迦、則懸御屏風、西面、其前御机一脚置之、有御香爐、常住之香爐也、御机左右立高燈臺、常住之燈臺也、又置一脚、香爐燈臺等置也、此分泉涌寺僧持參也、同間柱懸繪像一幅、僧衆誦御經、自今夜僧衆候御座間、公家衆候次間云云、凶事傳奏清閑寺中納言、奉行職事頭中將宗良朝臣、廿六日、自今朝舊主不供御膳、十月十九日、傳聞御葬禮以前、諸家御燒香可有憚事也、近臣ハ各別也、遠臣ハ可憚也、子細ハ夜御殿ニ奉置御棺也、御常ニ宮御所ヘモ不參、叢夜御殿ヘ不參事可憚事也、御棺ハ夜御殿ヘ奉置也、攝家門跡方御燒香不參給、鷹司大納言殿ハ無差別御燒香給、

〔大江俊章記〕寶永六年十二月十七日、酉下刻崩御〇東山之由申渡有、廿二日、表向御入棺ノ沙汰ナリ、非藏人總詰參仕、凶事傳奏日野中納言輝光卿奉行烏丸辨光榮參仕、申刻弘御前ヘ出御、堂上ノ沙汰ナリ、弘御所上段御疊ノ上ニ槨ヲ置、兩方ニ疊積上、棒ニテ釣上、御棺槨ニ入ル、槨ノ底ヘ石灰入、四方上とも石灰入ル、上北面院藏人計參、手傳ス、御槨西向、御所一間卷簾、菊燈臺兩方、卓机御香爐、兩間垂簾、泉涌寺僧參勤、虎溪長老、春端長老、貫道長老、其外龍僧十人計、御槨ヘ繩布カケ勤とも有、

〔御入棺次第〕文化癸酉年〇十年十一月十一日、酉刻衆僧參向之上、萬般御示合之事、次任寺傳御差圖、御入棺〇後櫻町之道場莊嚴之事、但不勤尊裹之儀、硯宮同上、外入口便宜之所ニ置之、次莊嚴相調候段、寺傳ヘ申上、此時院傳、凶傳、凶御奉行、御內見之事、其上可始作法之旨、寺傳ヘ申上、宮方堂上方女中方、御聽聞所ヘ御入、次衆僧出仕、入道場平伏、進著座之事、次御導師起座登半疊、次平僧一人出外陣、取硯宮、進而置高壽西堂之前而復座、次平僧出外陣、持一軸、附果海西堂而著座、次御導師、衆中ニ有氣色時、高壽西堂持硯箱、到導師之右磬臺之邊蹲居、仰硯宮之蓋、承加持物、謹而昇上段、開入屏風、進御棺之前、奉書御前之兩字幷蓋上之御頂上之三字、次果海西堂持一軸、昇上段、入閉屏風、御棺之後掛屏風、但在硯箱、用經籠、次兩師以白布通鐶結之、御棺符付覆御絹、兩人歸座之事、

次導師打磬、十重禁出音、讀誦了奉懇念回向、　次心經三卷、慈救呪（二十一遍）導師出音、奉祈宮中靜謐了、導師退出、　次於溜間休息、藥石被下候事、此間宮方堂上方女中方御燒香、　次香花備替、不斷經開白、寺傳へ龕相始候事、　次修法了導師歸座、長老中老次第奉御燒香退出、

一衆僧之內、龕僧七人相勤候事、

御入棺僧交名十三口

大順長老　僧鎧長老　潛海長老　高壽西堂　果海西堂　光國西堂　元澄西堂　眞曉西堂

周旭西堂　正繼首座　正運律師　良應維那　壽峯律師

御入棺用意

本尊釋迦三尊一幅　白木佛堂一　不動尊一幅　鋞鍵一　前机一脚　前具一通　脇机一脚

塗香一器　洒水一器　散杖一本　香包（五種香入）一　柄香爐一握　磬（臺幷打一本）一臺　半疊一帖　菊

燈臺二本　土器二十枚　白木閼伽桶一口　同盤一　折敷一枚　花桶一口　樒三十本　抹香

箱（盛形散香）一　硯箱（筆墨小刀符切紙糸針鋞鍵等）

已上入櫃二荷、承仕行者等、先達而參入於勸修寺、

〔言成卿記〕天保十一年十一月十九日、仙洞（○光格）崩御、恐懼奉痛哭了、　十二月七日、午刻狩衣奴袴、（勿論吉服）家來尋常、（下﨟）上參故院御燒香、六角三位自餘兩三輩、不許參會、六角參會第一之間、彼卿命非藏人、參會交名一紙（杉原）令書付、（官位號）以非藏人被乞評定面會、東久世三位一紙被差出、各御燒香廟旨演說承知、尙祗候被爲誘引之旨、同卿被示云々、頃之祗候源宰相被爲誘引、先御香御兎池尻前大納言、勸解小路前大納言御燒香、此間六角以下洗手、經廣御所北幷西簀子等、從坤角次第參進、（香包持參）於圍外一拜、膝行參進御棺前南方、向御香爐奉燒香、肅拜念誦、了膝行右廻退下、御燒香相濟之旨、從第一六角以非藏人被答評定了退出、（過日從武傳依有沙汰也、尤雖不參一向不及沙汰云云、御葬送迄所勞籠居、逢雖不參說、不及沙汰云々、）

〔言成卿記〕弘化三年正月廿六日、主上○仁孝御違例御急病之趣、恐懼愁歎、娩慄慟哭了、從番頭右衛門督、助所勞可參被示之間、押參勤了、以兒令言上了、禁中騒動難啓當番以表使窺御機嫌云々、御容體如此云云、

去廿二日ヨリ、御風氣ニ被為在候處、御持病之御痰被為差起候、不輕御體に被為在候事、

各御機嫌伺參上、直謁于近習番頭、可伺御容體云々、勿論日々可伺也、本番所人々同樣、面謁近習當番番頭可令承云々、當番御用多之時、公卿人可申云々、　廿七日、御違例御機嫌伺附御帳了、　二月二日、當番幷詰等參仕、伺御違例御氣色了、內藏頭名代了、尋御容體於番頭、昨今御同樣云々、午半刻、依召參集之事、屆于春宮權大夫、第一卿也、第一卿被屆議奏云々、申刻御對面被召云々、切袴之儀五人宛可參進云々、入深山御間、至大澤御間、奉向于御寢間、奉拜玉體、心中慟哭、愁淚難留、了、自下薦退去了、一同向于役所、謁于三條大納言、御對面御禮申入了、今酉刻迄、近習一同可參集、從議奏卿被沙汰云々、予參集之事申第一了、戌刻頃、主上被召御船之間、近習一同可參御前云々、專商量ハ殿上人云々、各參進奉仕之、安御船於花鳥之間了退去、先是近習參合、一同近習小番御免、諸之人云々、被召御船之前、臨期御對面、公卿可入御寢間之內、殿上人閾之外云々、御暇乞之御對面、誠ニ畏入事也、次第參進、予依公卿昇御寢間、奉拜玉體、落淚屢泓位袍袖、殘意徹骨髓了、拭淚退御前了、各御對面了、御船奉安置花鳥間了、各退出、殿下左大將法親王議奏昇立之、公卿殿上人已留御前、奉為召玉體於御船云々、秘密之儀云々、子半刻比、御無難被為召御船云々、是上之恐悅也、殿下一先今安心給云々、

六日、於省中相番廻文到來、○中略別進之文、

主上今六日寅之刻崩御、

十一日、戌刻比、被召御前云々、口刻參進、御內棺奉仕了、御束帶之具、大行天皇(仁孝)御在世中著御、節會方御服、御冠御笏御帖紙等、有御內儀御物被納云々、御入帷之儀被納云々、御石帶無文巡方、天保十二後正廿七、御諡號著御之分、被納御棺云々、近習御棺御用奉仕之輩御燒香、一聚宛奉燒香了、各退下了、御燒香御禮番頭被申上云々、殿下褒詞有之、賜夜食了、丑刻比退出了、　十四日、御入棺、午半刻著奴袴、屆于番頭右衛門督了、酉刻御入棺、近習之輩、被召舊主御前、御

入棺儀式始、（從是不及諸云々、小番御免人々且御前云々、予等預御入棺之儀、不及諸也、）先被奉閉御棺之外蓋云々、次懸澁帋云々、了酉半刻許、御棺渡御清涼殿、

〔言成卿記〕慶應二年十二月廿五日、內藏頭日々御機嫌伺參內、退出之上、主上（○孝明）御樣子、密々奉傳、（○中略）

風聞異實今曉丑刻許御大切云々、恐懼千萬、血淚迫喉、心底如闇夜、然而御次第事可有之間、秘密云々、

廿七日、卯半刻參內、（直衣切袴）主上御不豫、以外御容體、先附于御帳、伺御機嫌了、謁于近習番頭御容體竊、最早無是非御容體云々、（○中略）今日御對面、弘化度指袴之儘、參于御前之間、其心得之處、可著用奴袴、議奏被示趣、依之著奴袴、亥刻許御對面、先兩役、次王公、次近習當勤、次近習小番御免、自御二間從北長押折御三間、（殘五人宛三人）入其御間、膝行一人宛昇御寢御間閾、（向南自御後拜玉體）殿上人御拭敷下云々、一拜濕袖、飮泣愁愁、退御咫尺、已御違例中御對面云々、第一按察卿議奏面會、御禮申上云々、　三十日、申刻許、御船申口迄、力者持來云々、兩役當勤御役經歷小番御免、今日阿野相公羽林計云々、各自申口一御間（江運送、重シ、六拾貫余程云々、）各白羽二重抱襷云々、（小番御免不經御役者不及奉仕云々、○中略）戌半刻過被召御船云々、

三年正月十日、今日御入棺云々、

〔日本書紀〕（十一仁德）太子（○菟道稚郞子）薨之經三日、時大鷦鷯尊（○仁德）摽擗叫哭、不知所如、乃解髮跨屍、以三呼曰、我弟皇子、乃應時而活、自起以居、

〔日本書紀通證〕（十六）是我邦招魂之法也、（○中略）楚辭註、古者人死則、使人以其上服、升屋履危、北面而號曰、皐某復、遂以其衣三招之、乃下以覆尸、此禮所謂復、而說者以爲招魂、曲禮曰、復曰、天子復矣、註招呼死者之魂、令還復體魄、冀其再生也、故謂之復、

〔榮花物語〕（二十五嶺の月）三月（○萬壽二年）つごもりに、花とともに別させ給ぬ、（○三條后娍子、中略）月たゝば、まつりなど

いひて、むつかしかるべければ、いかになどおぼしめして、ついたち三四日の程に、そうりう院のにしの院といふ所におはしまさせ給やがてその夜に、くわんといふ事せさせ給に、こと人まゐりよるべきにあらず、宮々入道のきみ大藏卿〇相任、通任、並娍子兄弟、などつかうまつり給、哀にめでたし、

〔榮花物語二十六楚王の夢〕すべてかぎりになりはて、させ給ひぬ、〇後朱雀妃藤原嬉子御年十九、あないみじ、あなあさましとおぼしめす、殿の御まへ〇嬉子父藤原道長は、やがてさしのきて、あさましくてふさせ給ぬ、かずへのすけ守道、おはします、たいの上に、御衣よをもてのぼりて、よろづを申つゞけまねき奉る、〇中略秋の夜といへど、人のとかくねぶるこそありけれ、やがてかくてあけぬ、衣ばし御枕もなにも、おなじ様におはしまさせつれど、夜をへだてぬれば、いと淺ましう思しめしながら、御木丁御屛風など、さまことにたてさせ給ひなどして、殿の御まへにも、うへの御まへ〇道長妻倫子にも、御となぶらをとりよせて、ちかうかゝげて見たてまつらせ給へば、いさゝかなき人ともおぼえさせ給はず、しろき御ぞのうすらかなるひとかさね奉りて、まだ御おびもせさせ給へり、〇中略御ぐしのいとこちたうおほかるを、いとゆるうひきゆはせ給ひて、御まくらがみにうちおかれたる程、いとおどろ〳〵しうねさせ給へるやうなるを、殿の御まへ、うへの御まへ、いまぞなかせ給ふ、〇中略くれにはやがてをさめ奉りてこそは、御車におはしますべければ、うへの御前は、御帳のうちに入らせ給ひて、なく〳〵見奉らせ給ふ、かくてうせさせ給ひぬれば〇産ニ由リテ薨ズルヲ云フむつかしう思しめさるらんとて、小式部のめのと、よろづにおりたちて、御ゆどのせさせ奉る、こたみばかりの御みやづかへと思ひつゝ、いひつゞけなく聲ぞいみじきや、うへの御まへの、御身をさぐらせ給ふに、いとひやゝかにおはします、これこそはれいの人にかはらせ給へる事はありけれど、殿もうへも、われをすてゝは、いづら〳〵となきまつはせ給ふ事かぎりなし、御ぞなどきかへさせたてまつらせ給へり、

〔榮花物語二十九玉の飾〕萬壽四年九月十四日のさるの時にうせ給ぬ、（○三條后妍子）御ぞのいとあざやかなるうへに、とのゝ（○妍子父藤原道長）御ころもけさを、うへ（○道長妻倫子）とりおほはせ給て、あざやかなる御ぞひきかづきてふさせ給へり、御ぐしはゐだけばかりにやそがせ給へらむとみえさせ給、ゆひぎはのかみよりそがせ給へるなりけり、きれたる御ぐしをとらせ給て殿の御まへ、三位僧都に是見給へ、かくこそはながくおほしたてまつりたりつれとて、ひきたてさせ給へるほど六尺ばかりにぞ見えたる、いとめもくれ、あはれとみたてまつりてなきまどひたるに、御戒の師もやがて此僧都ぞつかうまつり給ける、いとよくたもつとの給はせつる程は、かくやはおもひまゐらせつる、あさましうあへなきことを、ひと殿のうちゆすりみちたり、（○中略）うへの御前、きえ入てふさせ給へり、關白（○道長子頼通）どの、御湯などまゐらせ給ひて、あつかひきこえさせ給、御となぶらまゐらせ給ても、いとゞいみじき御聲なり、（○中略）やがてそのをりぞ二火つかうまつる、女房えつかうまつらねば、大納言中納言、これつねこれのりなどのつかうまつる、さるべき御ぐなどいれさせ給、

〔源氏物語四夕顔〕いま一たび、かの（○夕顔）なきがらをみざらんが、いといぶせかるべきを、（○中略）あたりさへすごきに、いたやのかたはらにだうたてゝ、おこなへるあまのすまゐいと哀なり、みあかしのかげほのかにすきてみゆ、その屋には、女ひとりなくこゑのみして、とのかたに、法しばらの二三人物語しつゝ、わざとのこゑたてぬ念佛ぞする、（○中略）いり給へれば、（○源氏）火とりそむけて右近（○夕顔侍婢）は、屏風へだてゝふしたり、いかにわびしからんとみ給ふ、おそろしげもおぼえず、いとらうたげなるさまして、まだいさゝかかはりたる所なし、

〔河海抄二夕顔〕聲たてぬ念佛

萬歳身後抄云、喪家佛事次第、葬送以前、無言念佛、以歸立之刻限佛事勤之、佛經供養事、歸立之時、葬送以前之日數、雖何ヶ日分、今夜可勤果也、無言念佛、得十五劫億之由見聖敎、

〔今昔物語十五〕左近少將藤原義孝朝臣往生語第卅二
今昔一條ノ攝政ノ殿ト申ス人御シケリ、其御子ニ兄ハ右近少將擧賢ト云フ、弟ヲバ左近少將義孝ト云ケリ、〇中略少將疱瘡ヲ煩テ內ニモ不參ナド云ケル程ニ、兄ノ擧賢ノ少將モ同ク煩テ寢殿ノ西東ニ臥テナム共ニ煩ヒケル、母上ハ中ニ立テゾ行テ見給ヒケル、兄ノ少將ハ只三日重ク成テ失ニケレバ、枕ナド替テ例ノ失タル人ノ如ク葬シテケリ、〇中略其後三日ヲ經テ母ノ御夢ニ兄ノ少將中門ノ方ニ立テ極ク泣ク、母臺ノ角ニシテ此レヲ見テ何ト不入給シテ此クハ泣キ給フゾト問ケレバ、少將參ラムトハ思ヘドモ不參得也、我レ閻魔王ノ御前ニシテ罪ニ被勘ツルニ、此レハ未ダ命遠サカリケリ、速ニ可免シトテ被免ツレバ返來タルニ、急テ枕ヲ被替ニケレバ、魂ノ入ル方ノ違テ活ルコトヲ不得シテ迷ヒ行也、心疎キ態セサセ給ヘルトテ、恨タル氣色ニテ泣ト見ル程ニ夢覺ヌ、母夢覺テ後思シケムコト何許ナリケム、

〔大江俊矩記〕寬政十二年四月十二日、申刻計、奉行甘露寺辨參入、其後御入棺〈〇溫仁親王〉之儀有之、廣橋前大納言、〈伊光〉淸閑寺別當、〈昶定〉風早三位、〈實秋〉三條中宮大夫、〈公修〉櫛笥中將、〈隆邑朝臣〉今城中將、〈定成朝臣〉河鰭少將、〈公陳朝臣〉廣橋侍從、〈在經朝臣〉高松刑部大輔、〈公祐朝臣〉甘露寺辨、〈國長〉日野西辨、〈延光〉外山勘解由次官、〈光施〉小森差次藏人、〈丹波賴季〉予、藤島新藏人、〈藤原助功〉等十五人從此事、先各手水、了參御內儀方、經書御居間幷西廊下參候御在所、〈是院宮御居間歟〉妙法院宮、聖護院宮、內府公、圓臺院宮、久君、入江御所、其外中宮女房達四五輩被候、先廣橋應妙門御命奉移御棺、〈是御水舟歟、所謂御槨也、有白生絹覆、尤厚御疊有之、西面也、〉其儀懸白布繩於御棺、〈所謂椁也〉貫白木棒二本於件繩、各奉舁之、其時御疊二帖速撤之、御先へ持行、移小書院、敷御大棺之下、三卿藏人侍者等從之、家司職事、奉舁御槨、奉移小書院、奉納御棺、〈所謂槨也〉予時三卿藏人侍者等敷入御疊、了各奉舁御槨、共ニ奉納之、奉納了拔棒取繩、其後妙門有被納之物、次加蓋、〈サン蓋アリ〳〵ナリ〉其後奉納御槨於御大棺、其儀先放御大棺下方橫板、入丸棒於其內、〈所謂コロナリ〉次加棒於御槨、〈繩因在此御棺下方、有環掛之、〉各舁之奉納於御大棺、

次拔棒如元、加横板、以千切〆之、入隅木、次流瀝青於件兩隅、次加瀝青蓋、其四端流瀝青、(件瀝青、於非藏人口邊庭上仕丁煮之、入釣鍋數遍往來、)能引流瀝青了、加蓋於其上、(アリサン如前、)次奉懸白生絹、次以御屏風南北東等圍之、已上之事、廣橋以下新藏人迄十五人奉仕之、了歸出便所、妙門、聖門、內府公、久君、圓臺院宮、入江御所、女房達、皆被候之也、吾輩預之、甚結構成時宜也、

〔新朔平門院御凶事書留〕弘化四年丁未年十月十三日、今夜戌上刻、女院崩御之旨被仰出、先是御違例御大切、追刻崩御之事、禁中(江)被仰進、御使八條三位、後舟橋二位參侍、內實去十日夜御大切、昨十二日夜、被爲召御船云々、依自十二日禁中(與)御別廓ニ相成、御廊下通裁切、御築地結界出來、

〔榮花物語(二十七衣の珠)〕やがてかぎりになり給ぬ、(○藤原長家妻、中略、)御屏風などのたてざまれいにかはりて、あはれにおさましくかなしうゆゝし(○中略、)またむつかしうてうせ給へれば、(○產ニテ死スルヲ云フ、)御ゆどのなどして、やがてちご君もおなじ物にいれ奉りて、かきそへて御ふところにいだきたる樣にて、ふし奉るほど、おほかたたれもさかしう見たてまつるべきにあらず、またまゐりよる人もすくなし、

〔榮花物語(三十鶴の林)〕との、御まへ、(○藤原道長、中略、)四日巳時ばかりにぞ、うせさせ給ひぬるやうなる、(○中略、)夜なかすぎて、ひえはてさせ給ける、御棺はなやみそめさせ給し日よりつくらせ給へれば、やがて入棺えたてまつりつ、いみじう御聲ども、まさなきまでおはしまさふ、

〔行親卿記〕長曆元年八月二日辛未、今日主殿內方逝去、及晚更令改著衣、(有袴、)四日癸酉、子四點入棺、(令書法服、令沐浴、義公勤之、重高汲室町三條小路井水、(癸方來、)經乳院居折敷、加小木枝挾之、義公取之、入自下邊三度、有祠、勤其事人々、主殿、淡州、義公、行信、實友、)事了後令北首、(反几帳、)

〔定家朝臣記〕天喜元年六月十一日己卯、鷹司殿(○藤原道長妻倫子)令薨給、　十五日癸未、戌刻酌御浴料辛方水、(紙屋川云々)子刻御入棺、春宮權大進隆經、玄蕃頭範光、淡路守重經、兵部丞親房、幷僧法橋雅圓、阿闍梨

皿高奉仕之、

〔殿曆〕永久二年四月三日戊申、今日北〈○藤原師實妻麗子〉御心地無術御坐歟、自未刻許不覺御也、〈○中略〉子刻許御入滅、親女房余〈○師實孫忠實〉等悲歎無限、頃之改御座北首奉成、改疊奉移筵、有枕燈、改御衣スヽシノ無綿御衣ヲ令著立障子、其外親女房候、

〔明月記〕正治二年七月十六日庚午、午時許、入道前左大臣〈兼雅公〉薨逝云々、十七日辛未、御葬送來廿日當時留七條殿上女房四人、尊長法眼、其外皆渡此殿云々、又〈云其日奉剃御髪御出家之儀云々、〉

〔碧山日錄〕寬正元年七月六日庚辰、春公之父常久、字昌連、〈○中略〉易其簀逝矣、〈○中略〉遂俾諸僧浴之、以殮棺也、

〔將軍義尙公薨逝記〕廿六日〈○延德元年三月〉の巳のをはりの程、終に雲がくれし給ひぬ、今なん御ことゝきれさせおはしますとの程なれば、女中の御ことは申におよばず、そのこがたにも、つねに御身近くめし、宮づかへなれたてまつる人は、せう〳〵參りて見たてまつりぬ、御陣の御ことなれば、つねのおましも所せきにしの方のものゝ、きはに御座をうつされて、北を御まくらにてそらさまにぞ臥給ひぬ、〈○中略〉さてむなしき御からを見たてまつりつゝ心をもなぐさむやと、廿七日より日ごとにまうでつゝをがみまゐらせしに、廿八日には御屛風ひきたてゝ、御かほに物うちかけ奉りしをのけ奉り、しばしがほどさぶらひて見奉りしにも、さしてかはり給ふ所もなくぞわたらせ給ひける、廿九日には、はやものにをさめ奉りて、御こしにめさせ、御持佛堂にすゑ奉らせ給ひつゝ、聲たてぬ念佛僧など、御かたはらにさぶらひ、番の人せう〳〵うこうす、

〔萬松院殿穴太記〕五月〈○天文十九年〉四日戊辰の辰の刻に、御年春秋四十と申に、臨終正念にまし〳〵て、御事きれさせ給けり、〈○足利義晴、中略、〉今日〈○七日〉未刻に、等持院の僧衆まゐりて、御沐浴の事、等持院蔭凉軒御髪をそらる、なほよくそり奉りて、御うしろの壁に夢窻國師の御影を掛、御受戒有て、國師の

拜塔にならせ給ふ、墨染の御衣袈裟御帽子などさせ奉る有樣、目も當られず涙にむせぶ計なり、其後御骸をうちにこめて、金屏(淨光院殿賛之、狩野法眼書之、扇面なり、)一雙を表をそとへなして立らる、高机に打敷を敷て、眞中に御位牌あり、○中略左右の腋には、四六廿四の供御、蠟燭五挺たちたり、雪柳四本を花瓶に立て右に置る、卓臺の上には茶湯を左右に供し、香爐香合を中にするゑたり、

〔甲陽軍鑑十四〕一内藤修理内方の母死去なり、此隱居一向宗なればとて、甲州の內、とゞろきと云ふ寺の一向坊主悉く來る、さる程に餘宗のごとく、死人の膳、いかにも見事に內藤申し付らるゝ時、一向宗の出家たち申すは、我宗のならひにて、御阿彌陀樣へ能く食を進上申せば、わき〳〵へはいらぬ事にて候と申して、亡者にむけず、內藤修理申さるゝ、それは何として、さやう法外なる立派なりとあれば、上人阿彌陀こそ肝要なれ、わきへ食をそなふるは、まよひの心にて、一向宗から餘宗ををかしく存ずるといはるゝ、內藤修理申すは、亡者かつへば如何とふたれば、上人答て云く、阿彌陀樣へさへ食を備ふれば、それが悉くの衆生へ施しになるといはるゝ、內藤修理手を合て、さても殊勝也、他宗にちがふて造作も御座なき御宗旨哉、一尊の施し、萬人にわたるとは珍敷き、先づ重寶なる一向宗かなとほむれば、上人悅んで、さる程に我宗ほど殊勝なるはなしと上人いんげん也、然れば內藤修理、自身上人の膳をするゑ、殘り百人餘りの坊主達に一切膳をするゑず、是れはいかんと坊主達申して膳をこへば、そこにて內藤修理申さるゝは、やら御口のちがうたる事哉、上人さへまゐり候はゞ、脇々の坊主たちは、はら一はいかと存知て如此と申す、其後は坊主達佗言して、亡者にも膳をするゑ、みなの坊主も餘宗のごとくに執り行ふは、內藤修理理窟の故、一向宗耻をかく也、

〔俳諧一葉集遺語人〕一惟然手記云、○中略申の刻過て、埋火のあたゝまりのさむるが如く、次郎兵衞が抱きまゐらせたるによりかゝりて寢入給ひぬと思ふほどに、正念にして終に鷹穪につき給ひ

けり、〇芭蕉時に元祿七甲戌十月十二日申の中刻、御歲五十一なり、卽刻不淨をきよめ、白木の長櫃に收めまゐらせ、其夜直に川舟にて、伏見まで御供し奉る、其人々には、其角、去來、丈草、乙州、正秀、木節、惟然、支考、之道、呑舟、次郎兵衞、以上十一人、花屋仁左衞門が京へ荷物を送る體にて、長櫃の前後左右を取まき、念佛誦經、おもひ〳〵に供養し奉る、八幡を過る頃、夜もしら〳〵と明はなれけるに、僧李由の下り給へる舟に行あひければ、いざとて乘うつり、相倶にはかなき物がたりして、ほどなく京橋に著、夫より狠谷通りにかゝり、いそぎにいそぐほどに、十三日巳の時過には、大津の乙州が宅に入奉りけり、乙州は伏見より先立て急て歸り、座布を掃除しきよめ、沐浴の用意す、御沐浴は、之道、呑舟、次郎兵衞也、御髮の伸させ給へば、月代には丈艸法師まゐられけり、御法衣淨衣等は、智月と乙州が妻縫奉る、淨衣白衣にて召させまゐらすべき筈なるを、翁はいかなることにや、かねて茶色の衣裝こそよけれと、すべて茶色を召れければ、智月尼のはからひとして、淨衣も茶色の服にこそせられけれ、さて送葬は十四日とさだまり、かれ是日沒になりにけり、

〔大江俊光記〕元祿四年閏八月十八日、息游軒八月十七日丑半刻計被終、〇中略廿日、暮時分ニ古河ニ而鮭延寺禪宗ニ葬ル、箱ニ入、茶ニテ詰候由、死體行水、白帷子二著、上ニ一ツオホウ、髮如常、終テ劒一腰、箱ノ內へ入候由、

〔大江俊光記〕元祿十六年八月十日、八時分、ふや町より半介來、淸心樣御指詰候間、早く可參由申來ニ付、未熱中ニ候へども、籠ニ而八過參、最早御絕候て、御面御手足冷シ、上下著、指燭ニて御面體拜、

十二日、昨夜淸心公御死骸、御箱へ奉納候由申、笹ニ而御頭上ニ湯ヲソヽギ、御衣召せ、白平包ニ而包、箱へ納了、日比被仰候物共箱へ入、筑前石見うぶかみつものを御箱ノ內へ入、

〔大江俊光記〕寶永三年三月十四日お樂指詰り、最早不及療治、〇中略知時期辰刻ニ候へども、巳刻計ニ靜ニ成て被終、顏一寸拭うすげせう、まゆ作り、髮スベラカシ、白小袖、白布帶、扇、白布平包ニテ包

箱ニ入、釘ニてメ、繩ニてからげ了、葬禮亥刻初夜ニ出ツ、勘文、小槻雅樂頭

〔大江俊章記〕寶曆八年四月廿一日、病娘連々衰、無レ賴爲レ體、心中辛苦難レ忍見、　廿三日、曉子半刻終焉、○中略枕直シ爲二北首一、立二假位牌一白木、以二白布一覆レ牌、銘予書レ紙押レ之、○中略戌半刻入棺、以二手拭一小曲物ニ湯を入、新手拭、顏をふく髮を結、下髮、垢付もの去レ之、其外きのまゝ染小袖、尤作レ眉、化粧雖レ可レ飾不レ堪レ事、不レ得レ止略レ之、仍納二其具、油元結白粉紅櫛笄等、常用ノ具、白帷子麻布新調新脚白帶麻布ひさへ、志ごきなり、引鼻紙楊枝枕落齒髮、手廻常々寵愛之品納レ之、以二麻布三幅之單衾、綿衾ノ代なり、三尺に三はゞ裹二遺骸一衣服之上納レ棺、扨屛風を引圍、前ニ設レ机、燒レ香土器、實に大てんほう也、立レ花櫁一本燒レ明備二枕膳一飯別火、てほうにて庭にてたく、世俗習也、靑菜、わらにてくゝり、生味增生鹽各用二土器一、足付二扮葉一也、出棺後捨二四辻一、

〔大江俊興記〕寶曆十二年九月六日、子刻御終焉○俊興養父俊章後、暫時見合、以二白帷子一奉レ覆二御顏一、吳服多放レ之、うすく御召のまゝにす、御枕を北へ直す、屛風引廻し、御枕ノモトニ奉二燈明一供二香華一、御香土器朝夕御膳、常之通魚物供レ之、俊興俊冬陪膳、　七日、亥半刻、密々ニ御入棺、予拜奉レ告レ之、以二手拭一小曲物へ湯を入、新手拭、御顏をふく、御髮を結申、冠下地元結端不レ切レ之、白御袷白御帶丸くけ烏帽子狩衣トクサイロ指貫麻布にて用末廣御枕、クシワくゝり枕、頭巾、櫛具、御落齒、御落髮、御鼻紙袋、御鼻紙、楊紙、目がね、耳口、御硯箱、きせる筒、きせる、多葉粉入、御手拭、たび、杖、御手廻常々御寵愛之品々納レ之、ゆたんにてもめん三尺三はゞ包、御棺中、すりぬか、おがくず、灰櫁等を以て詰レ之、　八日、朝夕御膳、常之通魚物供レ之、俊興俊冬陪膳、　九日、朝夕御膳等、昨日之通、　廿七日、今夜葬送、戌刻、御出門以前、隱居南間ニて、御位牌ヲ御輿ニ奉レ移、俊興勤レ之、御位牌白木也、御追號書レ之、白布ヲ以覆、是ヨリ本家座敷トコノ前、西向奉レ移、客燒香奉レ拜、一家親類中、有台衆中燒香、

〔大江俊矩先考卒去喪中雜々日記〕寛政四年十二月廿三日、巳半刻御終焉、○大江俊冬後暫時見合、以二白帷子一奉レ覆二御顏一、吳服多放レ之、薄く御召のまゝにす、御枕直二北方一、引二廻御屛風一、供二花一櫁一本竹筒香用二土器一、大てんほう也、燈水用二土器一母公予袴、肩衣、律等候二御傍一、御膳如レ常備レ之、予陪膳妻扶レ之、供二魚肉一　廿四日、一亥刻、追付內々

入棺ニ付、燒香奉拜、母公予律、各燒香拜畢、親族中被居合衆中(松尾筑後守殿已下)暇乞燒香、次家來共各奉拜、

一亥半刻內々御入棺、予奉拜告、(可有御入棺由)先奉沐浴、其儀手洗入湯、(小曲物也、如形略之、)以手巾(麻布新調)奉拭御顏、次結御髮、(冠下地也、白元結端不切、)畢奉御服、白御袷御帶、(丸ク)狩衣(萌木紋小葵、節父公御幼年、於陽明殿御拜領也、)指貫(依不具用麻布、如形略之、)烏帽子、(竪烏帽子也、)末廣、御足袋(御狩衣以下不奉著略也、)御鼻紙、指烟管、烟草入、已下御手廻常々御持用之品共悉納之、以三尺平敷、(麻布三幅)奉裹御遺骸、奉納御棺中、〇中略次奉納箱書前字、加白布覆、(今夜不打釘、依內々也、打釘後爲穢故ナリ、)事訖(後矩、右近、帶刀、伊兵衛從之、)引廻御屏風、御棺前設机、安置御牌、(白木有覆)供華燈水如前、

廿五日、戌刻前、御入棺、(前宵豫有此事、仍此時打釘於御棺耳、)此後不穢人、不同居同火、(用下數物草履等、)御棺以左繩(紙卷)十文字ニ結之、其上加覆、事畢奉移安本家座敷床前、(西面)數薄疊、其前設机、(有白打敷、)安御位牌、供香華、已下事猶前、

先是於本所供御膳、(俗謂枕飯、別火、於庭以土器炊之、菁菜生味噌生鹽、各盛土器、御膳足付扮桀也、出棺後捨四衢、俗習是云々)

刻限先予燒香奉拜、次母公、淸俊院殿、直丸殿、律等同前、畢在合親族中、主稅助殿、木工助殿、大隅殿、新四郎殿、各燒香、次家賴向一統、人別奉拜、(於下部ハ自地下拜之、)畢予拜奉告之、(可出御門由)

〔大江俊矩先妣御事雜誌〕文化二年四月十四日、亥刻御終焉、〇大江俊冬妻暫時後直御枕、(北首西面)以白帷子奉覆御顏、御服多取放之、薄令御召儘、引廻御屏風、供花、(樒一本竹筒、但依深更難調、明朝供之也、)燈(用土器、)水、(同上、)予、(衣袴)律、樂、越前、靖齋殿、おみを殿、帶刀等、候御傍、(帶刀早速呼寄來也、)

一御膳如常備之、予陪膳、妻手長、(供魚肉、)御入棺迄如此、

十五日、一暇服屆差出後、表門閉之、(北門閉置、從是日々如此、)

一神棚大黑荒神、悉以紙張之、後是十三月之間、如此閉置也、

一戌刻計、內々御入棺也、仍其以前燒香奉拜御遺骸、予以下各燒香了、親族中暇乞燒香、次家來共迄悉畢御入棺也、

但明夕酉刻御入棺故、夫迄者密々儀也、仍御棺蓋不閉之、打釘以後爲穢、自前々之定也、

一御入棺之儀、先予奉拜告、(可有御入棺之由也)次奉沐浴、其儀手洗入湯、(新調小曲物也、如形略之、)以手巾奉拭御顔、(手巾用庸布)次結御髮、(如形略之)次奉御服、白御袷御帶也、(白御かいどり略之、御帶亦用庸布、)御鼻紙、指烟管、烟草入、以下御手廻常々御持用之品共取集、御落髮、御落齒、御身仕廻之具、御足袋、御脚布等、悉納之、以三尺平敷奉裹御遺骸、(御服之上裹之也、庸布三幅單也、)奉納御棺中、○中略次奉納箱、○中略書前字七文字掛繩、○中略其上加白布覆、(今夜箱蓋)(不打釘、依內々之儀也、打釘後爲穢故也、)事訖(後矩、山口靖齋殿、近藤帶刀等從之、)引廻御屛風、御棺前設机、(白布打敷)安置御位牌、(白木也、予書之、)供香華燈水、如前、

十六日、酉刻御入棺、(前實儀密々有此事、仍此時打釘於御棺耳、)此後不穢人、不同居不同火、(用下數物草履等)御棺以左繩(紙卷)十文字結之、其上加覆、(白布也、用庸布、)事訖加轅奉移本家座敷、(敷薄疊、南面、)御棺前設机、置香爐、(机實白木臺也、有白打敷、香爐齒物也、燒物皿)

(途中置御棺前後、置御墓所之物也、)

先是於本所供御膳、(俗稱枕飯、別火、於庭以土器炊之、青蓮植以之著生球嘗生鯛、各盛土器、御膳足付扮葉也、出棺後捨四衢、是世俗之習云々、)

〔言成卿記〕天保十四年五月九日、祖母藤向殿違例之處、午一點及危篤、(血死期也、)慟哭了、(勿論未所勞之甚、不及言)十日、屆書被出、(家僕書之、可有別記、)昨九日夜死去屆也、(陽明御屆紙云々、)各雜掌掌領之儀略之、予時死者爲北首西面云云、枕上案白木机、其上燈明香爐、(ボデン)壹本花(別盞水向)被供之、亡者令著白晒布服了、十二日、今晚亡祖母入棺、(亥刻)晡時親昵人々被來、西大路三位、油小路少將、地藏院(高雄住侶西大路三位息)戌刻頃、家公予以下、至眷屬親昵人々幷家僕侍女等申永暇、及吉刻入棺、(家公予等略體○中略)入棺前地藏院修法、了入棺儀式、親昵等奉納亡者於棺中了、(白羽小袖附帶、扇子紙、草履杖等類、被納棺中了、)先是地藏院直筆曼荼羅等類張棺中、死者納體了、供覆曼荼羅云々、(覆死體云々、以梵字五枚云々、)上供了閉蓋、供槨蓋(覆蓋也)次供白布覆、了安置本所、棺前立白木位牌、○中略前供香花燈明已下事、如遺骸出現之時、家公已下奠香了、入棺無難事訖、十三日、寺門僧來誦經、

〔將軍德川家禮典附錄 六〕安政五年八月八日、公方樣、(德川家定)○御養生不被爲叶、巳下刻薨御被遊候、

九日

一御內棺江被ㇾ爲ㇾ納候ニ付、和泉守、酒井右京亮、御側衆始、御小性御小納戶、各染帷子麻上下著用、御休息間江伺公、

一御內棺蓋不ㇾ致以前、和泉守奉ㇾ伺、御前御左之方ニ御刀御小性、御右之方御脇差御小性持ㇾ之罷在、相濟而退座、

古事類苑

禮式部二十

葬禮二

古事類苑

禮式部二十

葬禮二

殯斂

〔運歩色葉集　毛〕殯（モガリ）（造喪屋殯之、日本紀、）

〔倭訓栞　前編三十三毛〕もがり　日本紀に殯をよめり、喪許の義なるべし、一説に、もあがりを略す、

〔日本書紀　一神代〕一書曰、伊奘諾尊、欲見其妹、乃到殯斂之處、

〔日本書紀通證　三〕正通曰、殯斂之處、假斂死體之處也、（直指曰、謂之加里毛我利、是假喪許之義也、論語註、吳氏曰、殯於堂曰殯、瘞於野曰葬、）

〔日本書紀　二神代〕一書曰、天稚彥之妻子、從天降來、將柩上去而於天、作喪屋殯哭之、

〔日本書紀通證　六〕玉木翁曰、〇中略　殯者假斂、未葬之名、（今按殯、喪阿我利也、（中略）今俗號事曰阿我利、是也、）

〔日本書紀　八仲哀〕九年二月丁未、天皇忽有痛身、而明日崩、〇中略　爲无火殯斂、（无火殯斂、此云褒那之阿餓利、）

〔日本書紀通證　十三〕無火殯斂（謂殯斂不置燈燭、令人不知也、）

〔令義解　九喪葬〕凡〇中略　殯斂之事（謂斂於戶內、殯於客位、是並從別式、）

〔令集解　四十喪葬〕釋云、殯斂之事、孝經始死於牖下、浴於中霤、飯於牖下、斂於戶內、殯於客位、祖奠於庭、又云、禮爲死制、槨周於棺、棺周於衣、衣周於身、衣卽斂衣衾被也、

〔北史　九十四倭國〕貴人三年殯、庶人卜日而瘞、

〔古事記　上〕天若日子之父、天津國玉神、〇中略　乃於其處作喪屋、

〔古事紀傳　十三〕喪屋、まづ喪てふ言は、麻賀事（マガコト）の切りたる（ツヽマ）にて、〇中略　死は有が中にも凶事なる故

に、其時の事を凡て母と云て、喪字を當たり、かくて喪屋は屍を斂置て、其事どもを行ふ所なり、〇中略上代には、凡人のも喪屋を作りしなるべし、

〔古事記 仲哀〕於是建内宿禰大臣白、我天皇、〇中略猶阿蘇婆勢其大御琴、自阿至勢以音〇中略未幾久而不聞御琴之音、卽擧火見者既崩訖、爾驚懼而坐殯宮、

〔古事記傳 三十〕殯宮は、阿良岐能美夜と訓べし、〇中略城は墓の紀に同じ、されば新に死たるまゝにて、未葬りあへざるほど、且姑く收置處を阿羅紀と云て、天皇などのは、其宮を阿羅紀能宮と申せるなり、

〔高橋氏文考〕殯宮を阿賀利之美也と申すも、其處より御魂神の天に揚ります由なるべし、萬葉集の歌に、高市皇子命の殯宮を、神宮ともよめり、

〔喪葬私論〕殯宮、もがりの宮、又かりもがりとよめり、古事記、天若日子崩りませし時、喪屋を作るといふ、此事成べし、書紀にまさしく殯宮を設し事は、仲哀天皇崩せし時、豐浦の宮に殯し給へる事をしるされたるが始なれども、神武天皇崩じ給ひて、後十九ヶ月を經て葬し奉れば、この間正宮に御坐しますべくもあらず、殯宮に移し奉りしとしるべし、〇註略殯宮の體制いまだしらざれども、心あてに思へば、今の龕廬堂これに比すべし、正宮一宇にしてめぐりに大垣あるべし、されば大あらき共云也、なき御からを御棺にをさめ、槨に入れて殯宮にうつし奉り、饌を供じ哭泣し、誄白し奏樂などして、生時につかうまつる如くして情をつくす也、この殯宮他所に立たる事もあれど、宮北あるは南庭に設くるを尋常とすべし、元明天皇よりこなた殯宮をつくらず、この禮を廢し、とく葬し奉るは簡便に從ふもの也、但この殯禮を設くる事は天皇に限りて、王以下つくる事を得ず、孝德天皇制を下し給へる也、

〔文公家禮 喪禮 四〕大斂

司馬温公曰、周人殯于西階之上、今堂室異制、或狹小、故但於堂中少西而已、今世俗多殯於僧舍、無人守視、往々以年月未利、踰數十年不葬、或爲盜賊所發、或爲僧所棄、不孝之罪、孰大於此、

〔日本書紀神代二〕天國玉聞其哭聲、則知夫天稚彥已死、乃遣疾風擧尸致天、便造喪屋而殯之、○中略而八日八夜、啼哭悲歌、

〔先代舊事本紀三天神本紀〕饒速日尊、便娶長髓彥妹御炊屋姬爲妃、令姙胎矣、未及產時、饒速日尊既神殞去坐矣、而不復上天之時、高皇產靈尊、詔速飄神曰、吾神御子饒速日尊、所使於葦原中國、而有疑思耶、故汝能降可復白矣、于時速飄神命、奉勅降來、即見神殞去坐矣、則反上復命云、神御子者、既神殞去亡坐矣、高皇產靈尊以爲哀泣、則使速飄命將上於天上、處其神屍骸、日七夜七、以爲遊樂哀泣、歛於天上矣、

〔古事記上〕天若日子之父、天津國玉神、及其妻子聞而降來哭悲、乃於其處作喪屋、○中略日八日夜八夜以遊也、

〔古事記傳十三〕上代には、殯時もむねと樂せし事、此餘も古書にあまた見ゆ、○中略喪に如此樂せしは、何の所以ぞといふに、まづ人の死たるは、彼天照大御神の天石屋に隱坐て、世の闇夜になれりしに類たる故に、萬葉二に、天武天皇崩坐しころの歌に、天原石戸を閉、神上上坐奴とよみ、又三に、河内王を豐前鏡山に葬し時の歌に、豐國乃鏡山之石戸立、隱留計良思なごよめるも、此意を思へり、其時の故事をまねびて、歌樂て其人を復此世に還りたまへと招禱る意より起れり、そは鎭魂祭儀にも、彼故事をまねぶ儀あるにてさとるべし、

〔令集解四十喪葬〕古記云、遊部者、在大倭國高市郡、生目天皇之苗裔也、所以負遊部者、生目天皇之孽圓目王、娶伊賀比自支和氣之女爲妻也、凡天皇崩時者、比自支和氣等、到殯所而供奉其事、仍取其氏二人、名稱禰義余比也、禰義者負刀幷持戈、余比者、持酒食幷刀、並入內供奉也、唯禰義等申辭者、輙不使知人也、後及於長谷天皇○雄略崩時、而依闕比自支和氣、七日七夜不奉御食、依此阿良備多麻比岐、

爾時諸國求₂其氏人₁、或人曰、圓目王娶₂比自岐和氣₁爲ㇾ妻、是王可ㇾ問云、仍召問、答云然也、召₂其妻₁問、答云、我氏死絶、妾一人在耳、卽指₂負其事₁、女申云、女者不ㇾ便ㇾ負₂兵供奉₁、仍以₂其事₁移₂其夫圓目王₁、卽其夫代₂其妻₁而供₂奉其事₁、依ㇾ此和平給也、爾時詔、自₂今日₁以後、手足毛成₂八束毛₁遊詔也、故名₂遊部君₁是也、

〔伊勢物語上〕むかし男有けり、人のむすめのかしづく、いかで此男に物いはんと思ひけり、うち出ん事かたくや有けん、ものやみになりて、しぬべき時に、かくこそ思ひしかといひけるを、おやききつけて、なく〳〵つげたりければ、まどひ來りけれどしにければ、つれ〳〵とこもりをりけり、時はみな月のつごもり、いとあつきころほひに、よ。ひ。は。あ。そ。び。を。り。て。夜ふけてやゝすゞしき風ふきけり、〇下略

〔三のしるべ上〕あそびとは、管絃歌舞のたぐひをいふなり、伊勢物語に、女の死て喪にこもりをる男のやうをいへるところに、よひはあそびをりてとあるを見れば、いにしへ人は、神代よりいひつたへたる敎をたふとびまもりて、今の京となりての後までも、かく儒佛の書の敎によらざりしことあり、喪にあそぶは、わが御國の古禮なり、さるは棺の前にておもしろき事すれば、死たる人のめでゝ、此世にかへりやくるとて、悲しみのあまりになすわざなるべし、

〔波夫理和射乃考〕殯宮マタ喪屋ニテ、其所ニ集ヘル人ノ歌舞スルガ禮ニテ、喪ニ遭タル人ノ家ハ甚悲メリシ狀ニ聞ユレド、庶人ハイカナリケン詳ナラズ、唯後漢書東夷列傳第七十五卷ニ皇國ノ事ヲイヒテ、其死停ㇾ喪十餘日、家人哭泣、不ㇾ進₂酒食₁、而等類就歌舞爲ㇾ樂、三國志魏志ニモ、其死有ㇾ棺無ㇾ槨、封ㇾ土作ㇾ冢、始死停ㇾ喪十餘日、當時不ㇾ食ㇾ肉、喪主哭泣、他人就歌舞飲酒、北史卷九十四列傳第八十二ニモ、親賓就ㇾ屍歌舞ナド記セルハ、ナベテノ風俗ヲ云ルモノナメレバ、庶人モ然有ケン事測度ツベシ、

〔日本書紀孝德二十五〕大化二年三月甲申、詔曰、〇中略凡王以下及₂庶民₁、不ㇾ得ㇾ營ㇾ殯、

〔喪祭私說〕治葬

按家禮三月而葬、邦俗葬禮、唯浮屠是聽、不復知有先王之禮、幸不火化、則以速葬爲務、謂斂葬稍緩、則亡者體失依託、魂迷中有、往々朝死夕窆、其甚至有一二時而葬者、雖鄙愚可笑殘賊可憎、而習染之久、無如之何、故今姑以死之第三日爲葬期、是禮所謂大斂之日、記曰三日而斂者、俟其復生也、三日而不生、則亦不生矣、今竊存古意以從俗耳、

〔寐のすさみ追加上〕死者三日にして殯する事、誠に古來の道なり、或家の婢女、疾にて死ければ、例の桶に入て寺に送しに、大雨にて墓の坑鑿がたく、桶ながら眠藏におきける、その翌日、白き帷著たる者、よろぼひ出て佛壇へ來し故、若き同宿などあはて騷て逃まどひける、住持出て是をたゞし聞けば、彼婢女蘇りて、桶をやう／＼におしひらきて出たる也、食事などして頓て本復しぬ、髮は既に剃ぬれば、比丘尼になりて遁世しけるとぞ、此たぐひや、ある事にて、折節聞ける事なり、

〔日本書紀八仲哀〕九年二月丁未、天皇忽有痛身、而明日崩、〇中略竊收天皇之屍、付武内宿禰、以從海路遷穴門、而殯于豐浦宮、爲无火殯斂、〈无火殯斂、此謂褒那之阿餓利、〉

〔日本書紀十三允恭〕五年七月己丑、地震、先是命葛城襲津彥之孫玉田宿禰、主瑞齒別天皇〇反正之殯、則當地震夕、遣尾張連吾襲、察殯宮之消息、時諸人悉聚無闕、唯玉田宿禰無之也、吾襲奏曰、殯宮大夫玉田宿禰非見殯所、則亦遣吾襲於葛城、令視玉田宿禰、是日玉田宿禰方集男女而酒宴焉、吾襲擧狀具告玉田宿禰、宿禰則畏有事、以馬一匹授吾襲爲禮幣、乃密遮吾襲而殺于道路、因以逃隱武内宿禰之墓域、〇中略天皇更發卒圍玉田家而捕之乃誅、　十一月甲申、葬瑞齒別天皇于耳原陵、

〔日本書紀十九欽明〕三十二年四月壬辰、是月天皇遂崩于内寢、時年若干、　五月、殯于河内古市、　九月、葬于檜隈坂合陵、

〔日本書紀二十一用明〕元年五月、穴穗部皇子、欲奸炊屋姬皇后、而自强入於殯宮、〇敏達寵臣三輪君逆、乃喚

兵衞、重璅宮門、拒而不入、〇中略穴穗部皇子謂大臣與大連曰、逆頻無禮矣、於殯庭誄曰、不荒朝庭、淨如鏡面、臣治平奉仕、卽是無禮、方今天皇子弟多在、兩大臣侍、誰得恣情專言奉仕、又余觀殯內、拒不聽入、自呼開門七廻不應、願欲斬之、兩大臣曰、隨命、

〔日本書紀 二十三 舒明〕十三年十月丁酉、天皇崩于百濟宮、　丙午、殯於宮北、是謂百濟大殯、是時東宮開別皇子、年十六而誄之、

〔日本書紀 二十五 孝德〕白雉五年十月壬子、天皇崩于正寢、仍起殯於南庭、以小山上百舌鳥土師連土德主殯宮之事、

〔日本書紀 二十九 天武〕朱鳥元年九月丙午、天皇病遂不差、崩于正宮、　戊申、始發哭、則起殯宮於南庭、　辛酉、殯于南庭、卽發哀、　甲子、平旦諸僧尼發哭於殯庭、乃退之、是日肇進奠、卽誄之、　乙丑、諸僧尼亦哭於殯庭、　丙寅、僧尼亦發哀、　丁卯、僧尼發哀之、是日百濟王良虞代百濟王善光而誄之、次國々造等隨參赴各誄之、仍奏種々歌舞、

〔日本書紀 三十 持統〕元年正月丙寅朔、皇太子率公卿百寮人等、適殯宮〇天武而慟哭焉、納言布勢朝臣御主人誄之、禮也、誄畢衆庶發哀、次梵衆發哀、於是奉膳紀朝臣眞人等奉奠、奠畢膳部采女等發哀、樂官奏樂、　庚午、皇太子率公卿百寮人等、適殯宮而慟哭焉、梵衆隨而發哀、　三月甲申、以華縵進于殯宮、此曰御蔭、是日丹比眞人麻呂誄之、禮也、　五月乙酉、皇太子率公卿百寮人等、適殯宮而慟哭焉、於是隼人大隅阿多魁帥、各領己衆互進誄焉、　八月丙申、嘗于殯宮、此曰御靑飯也、　丁酉、京城耆老男女、皆臨慟哭於橋西、　己未、天皇使直大肆藤原朝臣大嶋、直大肆黃書連大伴、請集三百龍象大德等於飛鳥寺、奉施袈裟人別一領、曰此以天渟中原瀛眞人天皇〇天武御服所縫作也、詔詞酸割、不可具陳、　九月庚午、設國忌齋於京師諸寺、　辛未、設齋於殯宮、　十月壬子、皇太子率公卿百寮人等幷諸國司國造及百姓男女、始築大內陵、　二年正月庚申朔、皇太子率公卿百寮人等、適殯宮而慟哭焉、　辛酉、梵

衆發哀於殯宮、三月己卯、以葬緩進于殯宮、藤原朝臣大島誄焉、八月丙申、嘗于殯宮而慟哭焉、於是大伴宿禰安麻呂誄焉、丁酉、命淨大肆伊勢王奉宜葬儀、十一月戊午、皇太子率公卿百寮人等與諸蕃賓客、適殯宮而慟哭焉、於是奉奠、奏楯節儛、諸臣各擧己先祖等所仕狀、遞進誄焉、己未、蝦夷百九十餘人、負荷調賦而誄焉、乙丑、布勢朝臣御主人、大伴宿禰御行、遞進誄焉、直廣肆當麻眞人智德、奉誄皇祖等之騰(ヒツギ)極次第、禮也、畢葬于大內陵、

〔續日本紀 文武二〕大寶二年十二月甲寅、太上天皇(持統)崩、辛酉、殯于西殿、

〔日本紀略 村上三〕天曆三年九月廿九日己巳、此曉太上天皇(陽成院)崩于冷泉院、(春秋八十二)即夕奉移圓覺寺、

十月三日壬申、今夜奉葬陽成院太上天皇於神樂岡東地、

〔類聚雜例〕長元九年四月十七日、天皇(後一條)崩於晝御帳前、廿日戊辰、相府命云、人々云、於禁中爲不被行發葬之禮、有以御車可奉遷他所之儀云々、廿二日庚午、關白相府、依女院御消息、令參弘徽殿給、頃之歸出給、可奉遷上東門院(後一條母后宮)之由有院宣者、(中略)及戌刻入糸毛御車、(以生絹爲雨皮、下御簾、以手作布卷御車輪、以御簾等懸簷、)入自上東門前、式乾門下撤放牛、(關白相府御牛)後院藏人召繼等引之、入自同門幷徽安門等寄清涼殿北面、同四刻御輿長房朝臣、經輔朝臣、章經朝臣、定經朝臣、義通朝臣、良宗、憲房、橘義清等、(御輿長十二人之中、擇近習輩爲此役云々、)舁御棺、(藏人後經、良章等、探紙燭在前云々、)經殿北幷東等廂、入自夜大殿東戶、暫居御所傍、先以申方水御沐浴、畢次御入棺云々、子四刻、權左中辨資通朝臣、右中辨經長朝臣等、著藁履、探續松、通自鬼間進向夜大殿東戶下、前大僧正慶命、權少僧都濟祇等、取兩人所持之松、燒付御在所御殿油、(自晏駕日不滅御殿油也、)(先例作役人親自燒付、而去寬弘八年有僧都隆圓、律師尋圓等傳燒之、依彼例被行也、)兩人探松左右分立、兼房等舁御棺、出自本道奉乘御車、(是先撤放御車居黑戶內、以御爲御枕、以布綱結付御車、)跡、藏人所雜色衆等付御車轅、資通經長等、相分立御車前、藏人所衆五六人、乘燭候御車邊、(炬火者雖被定、兩尙書之外今夜不乘燭矣、)御輿長等追從御後矣、(或付御車)前大僧正慶命、大僧正永圓、權僧正明尊、僧正尋光、權大僧都教圓、權少僧都良圓、濟祇、權律師遂昭、阿闍梨良光、著藁沓候御車後、又關白、

左大臣、內大臣、中宮大夫、權大納言、新大納言、民部卿、前左衛門督、右衛門督、權中納言、通權中納言、定左宰相中將、左兵衛督、右宰相中將、左大辨、右大辨、備中權守、三位中將、及昇殿舊臣等、皆著袍冠緌、著藁沓、採白杖步行、此間降雨殊甚、仍扶持者、各指笠相從、自弘徽登華兩殿西路北行、於徽安門外懸御車、出納二人道御車、從式乾門幷縫殿寮南東等出、自上東門同路東行、到京極大路、更南折南行、入自院東門、寄東對東面南一間、撤此間高欄矣、先前大僧正覺命取合資通經長等所持之松、進御所、燈御殿油、盛油於土器、大折櫃居御床北邊、次兼房等昇御棺入自同門、奉安大床子上、北枕、退出、閉南一間障子、以御几帳四本立御床四邊、掩御棺、當番僧等候南廂座、今夜供奉僧等、自御臨終日結番祇候、濟祇幷近習侍兩三、候西廂座、關白、相府、內府、中宮大夫、權大納言、新大納言、右宰相中將等、宿侍、此外、殿上人等多宿侍云々、民部卿、權中納言通依不堪行步、留大宮邊云々、又藤大納言候昭陽舍、左衛門督弘徽殿矣、

〔兵範記〕保元元年七月二日辛丑、今日申刻、法皇鳥羽崩御於鳥羽安樂壽院御所、春秋五十四、○中略入夜御入棺、○中略次奉移御塔、網代御車、著御所東面、簷懸簾、臨官等付轅、各著藁沓御車副二人、爲遣牛、殿上人炬火前行、各著藁沓下北面者十餘人、同炬火在御車邊、五宮六宮七宮令相從給、○中略經御堂東庭幷御塔西林中、於御塔門駐御牛、撥放御車床、昇入御塔壇上、有導師呪願儀、次奉入殯、先是權右少辨惟方、參御塔行雜事、渡御之後、殿上人以下不入門內、又雜人一切停止、終夜奉殯之、○中略御車牛等、賜導師呪願了、　三日壬寅、參鳥羽殿、奉殯御塔事自夜前營之、午刻事終、人々退下云々、

〔親長卿記〕文明二年十二月廿六日、卯刻許、已御命終、○後花園　廿八日、今晚自舊院奉盜出聖衆寺、世人號白雲、堅固密々不及例沙汰、御板輿安禪寺御比丘尼御所御輿也御力者等、俄難出來之間、雲頂院力者知恩寺力者等相交四五人參了、知恩寺長老寺僧等參御共、廣橋中院亞相予以下數輩、自閑路參御寺了、卽有御沐浴、御帷等事、安禪寺殿御沙汰云々、被付用脚、　自今夜有不斷光明眞言、予祇候、　廿九日、及晚參御寺、誦陀羅尼、　三年正月一日、參御寺、聖衆寺、世人號白雲、誦光明眞言、自去年十二月廿九日不斷有之、　入夜退出、　二日、參御寺、　三日、早參御寺、今

日御葬禮治定云々、

〔續百一錄〕元文二年四月十一日、仙洞（〇中御門）御養生不被爲叶、唯今崩御之旨及言上候由、十六日、來十九日、舊院御入棺以後、御葬送迄之內、在所江御燒香可爲勝手次第、右之通傳奏衆被申渡候、

〔弘化諒闇記〕（中）弘化三丙午年二月二日、主上（〇仁孝）御違例之處、不被爲叶、御養生、今六日寅刻崩御之旨被仰出、（〇中略）同十四日、自今日觸穢、（〇中略）大行天皇今夜（酉刻）御入棺、遷御于清涼殿、（〇中略）（予時丑刻）自今夜祗候七人宛參勤、（泉涌寺僧）

〔言成卿記〕弘化三年二月十四日、御入棺、（〇中略）（仁孝、）酉半刻許、御棺渡御清涼殿御備云々、先御枕火、五位職事二人執之、御劍實德朝臣、御香爐實愛朝臣、法親王前行、（心中有念修歟）次御棺、（殿下議奏傳奏近臣等奉昇、予預件役、了、重如磐石云々、）亥半刻許、奉移御棺於清涼殿、安置晝御座、（北首西面）引廻御屛風、（以給爲外）方御簾懸之歟、設了退去歸番所、（女院准后等非常付等衆、多分參彼御所、不拘御棺御用云々、）殿下御安堵、一統精勤之旨令褒詞給云々、從御內儀賜菓子食物類、了各退出、予候宿侍、了、（今晚御棺御用之人々、參遷御棺邊之間卷纓、歸番所垂纓、於予ハ依武官卷纓也、雲客被下御簾之間卷纓云々、文官公卿垂纓云々、）素服之人々、各到奉燒香云々、　十八日、巳刻許、衣冠奴袴著用、具內藏頭、（衣冠奴袴）參內、大行天皇御燒香也、（近習之輩、勝手ニ可參云云、何ヶ度ニテモ無子細云々、未勤之輩、十七十八十九三ヶ日中可參上、有沙汰云々、〇中略）內藏頭御燒香參上之旨、以端非藏人屆于議奏之處、三條大納言承知、猶可有沙汰云々、御塞之趣云々、（〇中略）御塞了、未勤勝手ニ御燒香ニ可參本所云々、（但素服之人ニ可尋合云々）則予內藏頭等、於萬杉戶邊卷纓、（先是御燒香參上御時宜、素服之人ニ令尊慮、則被爲誘引、）源三位中將誘引、經西簀子入鬼間到母屋、經本尊後膝行、奉向御棺前奉燒香、（持香囊、扇置傍所、）正念念佛、心中奉供養、奉謝天恩了、（落淚濕袖）膝退左廻退出、內藏頭同予作法、

〔言成卿記〕慶應二年十二月三十日、天皇（〇孝明）崩御、　三年正月十日、今日御入棺、　十一日、廻文到來、

小番御免之輩、永々詰苦勞之事、勝手可退出旨、久世前宰相被申渡候、御燒香之儀者、御葬送之日迄ニ、勝手可有參上旨ニ候、仍申入候也、

正月八日　宗弘

十三日、大樹〇德川慶喜參內、御棺前御燒香云々、十六日、廻文到來、御燒香勝手ニ可相願旨、廣橋大納言被申渡候、願込之儀者、先議卿ヘ相屆、次以非藏人御本所素服之人ヘ相尋、其上參上之旨ニ候、仍早々申入候也、

正月十五日　定章

廿三日、午後衣冠奴袴垂纓參內、爲大行天皇御燒香也、參上之旨屆議奏之所、唯今女房塞、猶可被爲沙汰云々、良久御塞解、勝手可被爲參上云々、以非藏人素服之人ニ、御都合時分可被爲沙汰賴遣之處、只今御都合宜、勝手ニ可參云々、仍於萬杉戶內改卷纓、經西簀子入鬼間、參進御棺前、斜進御棺前受多羅與御棺之間上先一拜、膝候持參自分香包奉燒香、肅拜存高恩、心中光明眞言三四五遍、自然愁情沃濕袖、膝候退拔揚詰人、經本路退出、於同所垂纓直退出、于時申刻比云々、今日入道准后七十九、御歲御燒香御參云々、御元氣者也孫大納言殿門流人々等、頗奉扶持云々、

〔日本書紀二十二推古〕十一年春二月丙子、來目皇子薨於筑紫、仍驛使以奏上、爰天皇聞之大驚、則召皇太子蘇我大臣謂之曰、征新羅大將軍來目皇子薨之、其臨大事而不遂矣、甚悲乎、仍殯于周芳娑婆、乃遣土師連猪手令掌殯事、故猪手連之孫曰娑婆連、其是之緣也、後葬於河內埴生山岡上、

〔日本書紀二十六齊明〕四年五月、皇孫建王八歲薨、今城谷上起殯而收、天皇本以皇孫有順而器重之、故不忍哀、傷慟極甚、詔群臣曰、萬歲千秋之後、要合葬於朕陵、

〔日本書紀二十九天武〕九年七月戊戌、納言兼宮內卿五位舍人王病之臨死、則遣高市皇子而訊之、明日卒、天皇大驚、乃遣高市皇子、川島皇子、因以臨殯哭之、百寮者從而發哀、

〔萬葉集二挽歌〕高市皇子尊城上殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌
八隅知之、吾大王之、天下、申賜者、萬代、然之毛、將有登、一云、如是毛安良無等、木綿花乃、榮時爾、吾大王、皇子之御

門乎、一云、刺竹、皇子御門乎、神宮爾、装束奉而、○下略

〔萬葉考二〕神宮爾、こゝは殯宮をいふ、過ましては神と申すことにて、此上下に神佐扶跡、神葬などいふとひとし、装束奉而、巻三皇子の殯宮の事に、白細布、飾奉而と有に同じ、

〔萬葉集十三挽歌〕萬歲、如是霜欲得常、大船之、憑有時爾、涙言、目鴨迷、大殿矣、振放見者、白細布、飾奉而、内日刺、宮舍人方、一云者雪穗、麻衣服者、夢鴨、現前鴨跡、雲入夜之、迷間、朝裳吉、城於道從、角障經、石村乎見乍、神葬、葬奉者、○下略

〔萬葉集古義十三下〕白細布飾奉而は、白布して殯宮を飾れるを云なるべし、○中略麻衣服者は、アサキヌケルハと訓べし、古喪服には、白麻衣を用ひしこと、既く二巻に書紀を引きて具云へり、

〔萬葉集十三挽歌〕磯城島之、日本國爾、何方、御念食可、津禮毛無、城上宮爾、大殿乎、都可倍奉而、殿隱、隱在者、朝者、召而使、夕者、召而使、遣之、舍人之子等者、行鳥之、群而待、有雖待、不召賜者、劒刀、磨之心乎、天雲爾、念散之、展轉、土打哭杼母、飽不足可聞、

〔萬葉集古義十三下〕大殿乎都可倍奉而は、殯宮を造り仕へ奉りてといふなり、略解に、陵を造ることゝせるは、いみじきひがことなり、陵を大殿とはいかでか云べき、隱在者、隱りおはしませばと云なり、去坐ばといふにはあらず、○中略群而待は侍字の誤なりと云り、ムレテサモラヒと訓べし、

○按ズルニ、上ノ二首ハ、共ニ高市皇子殯宮ノ時ノ歌ナルベシト契冲云ヘリ、

〔萬葉集二挽歌〕日並皇子尊殯宮之時、柿本朝臣人麻呂作歌一首幷短歌○歌略

〔萬葉集二挽歌〕明日香皇女木缻殯宮之時、柿本朝臣人麻呂作歌一首幷短歌○歌略

〔榮花物語二十六楚王の夢〕すべてかぎりになりはてさせ給ひぬ、○後朱雀妃藤原嬉子、中略日暮ぬればいそぎたちて、いらせ給ふべきぎしき、もてまゐりたるも、又とよみたり、さるべき人々して入たてまつる、○中略さてひつぎに入たてまつりて、ふたかためなどしたてまつる程は思ひやるべし、○中略かくな

らせ給事は、萬壽二年八月三日御産ありて、五日うせさせ給て、六日夕に法興院にわたらせ給也けり、御車かきおろしておはします、たいの南の東の方よりいでさせ給べきなりけり、さて御くるまにかきのせたてまつる程、大方、殿の御まへ〇嫡子父道長も、物おぼえさせ給はで、ふしまろばせ給、關白殿、内のおほい殿〇道長子、頼通、教通、などは、御わらうづといふものはかせ給ひながらこそ、立おどりなかせ給ふ、〇中略御車は四位五位つかうまつれる、殿の御まへ、御車のしりにあゆませ給ふ、いと哀れにかたじけなくみえさせ給ふ、〇中略法興院と此とのと遠からねど、殿の御まへおはしましやらず、まとはせ給へば、かたつ方の御手は、關白殿とらへ奉らせ給ふ、かたつ方は、三井寺の僧都かゝへ奉らせ給ひて、御こしをば内の大い殿おし奉らせ給ふ、さるべきむつまじき殿ばら、殿おはしませば、みなつかうまつり給へり、いみじき事は、山座主のつえにかゝりて、えあゆみやらで、なく〳〵つかうまつり給へる程も、よろづおろかならずみえたり、道すがらあはれにいみじくておはしましぬ、ほこ院のきたに、べたう坊といふ屋に、御車ながらかきおろしておはしまさせ給、その傍なる屋にぞ殿はおはします、〇中略女房おはしますやうにさぶらひて、萬御だいなどれいのさほうにまゐりすゑたり、殿の御前、御とのごもらぬまゝに、うちおはしましつる、御くるまのまへ板といふ物におしかゝりて、なに事にかあらんうちなきて、なく〳〵の給つゝ、あかさせ給、其後あかつきには懺法、よさりには御念佛と、さるべき僧どもぐ。しつゝ、御車をまはらせ給、おものなどきこしめす、御まかなひは御めのとご式部の君、なく〳〵つかうまつる、あはれにかなしき事おほかり、

〔中右記〕永久二年十月一日壬寅、申時許、從院有召、急事者、仍馳參、雖御物忌參北面方、民部卿大藏卿又參入、殿下〇藤原忠實令參給、大外記師遠、明法博士信貞、依召參集、仰云、今日未刻中宮〇堀河后篤子内親王巳崩給了、〇中略後聞今夜中宮、渡御雲林院掌侍堂、只如御平生時、未入棺、先用常御車、女房二人候御車

後、亮仲實朝臣以下兩三人祗候云々、依御遺言也、冬節以前被忌也、
　裏書云、今夜中宮密々渡御雲林院邊小堂之間、人々騎馬云々、
後日民部卿被談云、如此之時、先例猶步行也、賢子中宮（○白河后）崩、三條皇居之後、葬禮以前、渡御經成朝臣四條宅、口時人々步行、昔後冷泉院母尙侍（○藤原嬉子）薨給之後、葬禮以前、渡法興院僧房給時、人々步行云々、先々如此、今度騎馬之條、不得心者、　二日癸卯、或人云、今夜中宮、奉殯雲林院堂侍堂中、地本建立小堂、其中作壙、壙中乍御棺奉收云々、今日御入棺者、
〔御湯どの、上の日記〕天正八年九月廿九日、大すけ殿、（○正親町妃誠仁親王御母）にわかに御かくれ候て、みやの御かた、（○誠仁親王）まづくわんじゆ寺へなる、まづ玄ん大すけどのは、までのこうじへぬすみいだし候、中々御あへなきなど、は申もおろかなる事にて、うへわたくし、みな〳〵御なみだにむせばれ、ことのはもなき事どもせひなし、やがて宮の御かた、二條へくわん御なる、
〔僧綱補任上〕大和尙鑑眞
天平寶字七年五月六日、結跏趺坐、面西而化、（春秋七十七）絕氣之後三日、頂上猶煖、由是久不殯殮、至於闍維香氣滿山、平日語曰、我若入滅之後、三日頂煖、當知第二地菩薩、
〔日本靈異記下〕重斤取人物又寫法花經以現得善惡報緣第廿二
他田舍人蝦夷者、信濃國小縣郡跡目里人也、（○中略）寶龜四年癸丑夏四月下旬、蝦夷忽卒而死、妻子量言、丙年之人、故不燒失、點地作塚、殯以置之、
〔日本靈異記下〕用寺物復將寫大般若建願以現得善惡報緣第廿三
大伴連忍勝者、信濃國小縣郡嬢里人也、（○中略）寶龜五年甲寅春三月、倏被人讒、堂檀越所打損而死、（檀越者、即忍勝之同屬、）眷屬議曰、令斷于殺人之罪、故輙不燒失、點地作冢、殯收而置、
〔文德實錄四〕仁壽二年二月乙巳、參議正四位下兼行宮內卿相模守滋野朝臣貞主卒、（○中略）遺誡子孫

云、殯斂之事、必從儉薄、徂歿之後、子孫齋供而已、

〔三代實錄十五清和〕貞觀十年閏十二月廿八日丁巳、左大臣正二位源朝臣信薨、○中略殯斂之日、人多不知、平生於北山嶺下、造立一屋、中從一床、居棺其上、固閉四壁、令人畜不據犯之、

〔日本紀略六圓融〕天祿元年五月十八日戊午、申刻攝政太政大臣從一位藤原朝臣實賴薨、年七十一子刻以尋常車、奉移法性寺艮松林寺、　十九日己未、葬送太政大臣、

〔親信卿記〕天祿三年十一月一日丁巳、酉剋許、太政大臣○藤原伊尹薨、　二日、奉移大安寺、　五日、御葬送、

〔權記〕寬弘七年四月五日甲寅、故左京大夫室家尼、戌剋入滅、年六十二、臨終念佛、　十一日庚申、送京兆室於山寺、順朝教律師闍梨觀緣供奉送彼寺云々、　十六日乙丑、尼今夜葬送、

〔榮花物語二十七衣の珠〕やがてかぎりになり給ぬ、○藤原寬子、信家女、中略はかなく夜もあけぬれば、さりとてのみやはとて、陰陽師めして、事どもとはせ給、とかく世のつねのさまにうらなひ奉らむ事は、いとほしくおぼされて、たゞさるべくをさめ奉らむとぞおぼされける、されば そのまゝにの給はすれば、九月○萬壽二年十五日のよぞ、法住寺にゐてたてまつりて、その月の廿七日に、をさめたてまつるべうきこゆ、○中略かくて十五日になりぬれば、○中略御車のしりに、大納言殿、中納言殿、○齋信、長家、さるべき人々はあゆませ給、いへばおろかにてえまねびやらず、北の方の御車や、女房たちの車などひきつゞけたり、御ともの人々など、かずしらずおほかり、ほうぢうじには、つねの御わたりにも似ぬ御車などのさまに、僧都の君、○齋信弟尋光御目もくれて、えみたてまつり給はず、さて御車かきおろして、つぎてひと〴〵おりぬ、

〔今昔物語二十七〕有光來死人傍野猪被殺語第三十五

今昔□□ノ國□□ノ郡ニ、兄弟二人ノ男有ケリ、○中略其祖死ニケレバ、棺ニ入テ蓋ヲ覆テ、一間有ケル離タル處ニ置テ、葬送ノ日ノ遠カリケレバ、日來有ケル程ニ、自然ラ髴ニ人ノ見テ云ケル樣、

此ノ死人設タル所ノ夜半許ニ光ル事ナム有ル、佐キ事也ト告ケレバ、〇下略

〔元亨釋書十一感進〕釋維範、京兆人、渉顯密、晩入高野山居南院、嘉保三年二月三日、沐浴淨衣、結定印唱彌陀而寂、年八十六、遺命曰、我死不須茶毘、待小祥啓棺見之、門人如命殯小廟室、至期諸徒開棺、支體儼然、爪髮倶長、

〔山槐記〕永曆元年七月九日乙酉、今曉寅刻許、内大臣公敎薨、〇中略於三條高倉亭薨、〇中略明曉可渡八條堂、其後十三日可有葬云々、　十三日己丑、今夜内府葬送觀音寺云々、

〔玉海〕文治四年二月十九日乙酉、内府方女房、帥周章走來、告大臣殿〇藤原兼實子良通絕入之由、余〇兼實劇速而行向見之、身冷氣絕、一塵了無憑、　廿二日戊子、此夜内府渡嵯峨邊小堂、唯同平生之出行、網代車、車副二人共人各騎馬、侍等步行、　廿八日甲午、此日内府葬送也、堂與葬場、其間可謂咫尺、仍每事有便宜云々、

〔宇治拾遺物語二〕今はむかし、せいとくひじりといふ聖のありけるが、母の死たりければ、ひつぎにうち入て、たゞひとりあたごの山にもちて行て、大なる石を四のすみにおきて、そのうへにこのひつぎをうちおきて、千手だらにを片時やすむ時もなく、うちぬる事もせず、物もくはず、湯水ものまで、こはたえもせず誦し奉りて、此ひつぎをめぐる事三年になりぬ、その年の春、ゆめともなくうつゝともなく、ほのかに母のこゑにて、此だらにをかくよるひる誦給へば、我ははやく男子となりて、天にむまれにしかども、おなじくは佛になりて告申さんとて、今まではつげ申さゞりつるぞ、今は佛になりて告申なりといふときこゆるとき、さ思つる事なり、今はさやう成給ぬらんとて、とりいでゝ、そこにてやきて、骨とりあつめてうづみて、上に石そとばなどたてゝ、〇下略

〔鹿苑院殿薨葬記〕一薨逝等事
應永十五年戊子五月六日酉剋薨、御年五十一　同夜潛自北御所御賀□屋云々奉盜出子等持院、其儀密々也、御

張輿自座主被獻之、御平日所被乘用也、力者六人、(單直垂)同被進之、座主則被奉送等持院之後、則此御房(北山)御退出、諸大名以下思々如此歟、御茶毘可爲來十日、日次不宜故也云々、

〔鹿苑院殿をいためる辭〕六日(○應永十五年五月)と申に、はやたのみすくなき御事にて、(○中略)かぎりある夕づくよのひかり、ほどなくかくれ給ぬれば、(○中略)かくて寅刻に、しのびたる涙にて、等持院にわたしたてまつらんとて、僧ども御こしにめさせ侍し程の御ありさま、なく〳〵みたてまつりしに、申ばかりなくて、さしもあからさまの御出にも、めおどろくばかりこそ見えさせ給しに、ひきかへたる御さま、ことの葉なくぞおぼえ侍し、さて十日、御わざあるべきにて侍れば、その程はよるよる燒香にまゐりて、いまだかはらぬ御かたちの殘らせ給ほどぞかしとおぼえて、御まへに陀羅尼となへなどしてすぎゆく程に、九日の夜は、こゝによひばかりの御名殘にて、あけなばむなしき烟とたちのぼらせ給はん事のいとゞかなしくおぼえ侍て、夜もやう〳〵深行に、かくてしもあるべきならねば、御寺よりまかりいで侍しかども、つゆのまもまどろまれ侍らず、

〔あしたの雲〕こゝに左京のかみにて、あまたの國領したるなにがしの朝臣(○大内政弘)おはしけり、(○中略)長月(○明應四年)の中の八日の夜、つひにむなしくみなし侍りぬ、人々あしをそらになしける心まどひもことわりなり、彼雙林のもとの夜半のなげきも、かくこそはとおぼゆ、かぎりあれば、やがてそのあかつき、まづなにがしの寺まで出しはべるに、道すがら有明の月うすぐもりつゝ、物心ぼそきに、誰とは知らず、打なく聲などいはんかたなし、さてをさめ侍ることは、廿二日の明がたなるべし、

〔大猷院殿御實紀十九〕寛永九年正月廿七日、亥刻大御所(○德川秀忠)の靈柩を、西城より增上寺のかりの御ましにうつしまゐらせ、土井大炊頭利勝、幷に近臣十人ばかり供奉す、

〔嚴有院殿贈大相國公御葬送日錄〕延寶八年庚申五月六日、征夷大將軍右大臣源家綱公、御病重く

ナラセタマヒテ、御世ヲ大納言綱吉君ニ讓ラセタマフ、都鄙マデモ驚キサワゲドモカヒナク、ツヒニ八日未ノ刻ニ薨ジサセタマフ、今大君二ノ丸ニ御坐タマヒテ、天下ノ事ヲモ謀リタマヒ、先大君ノ御送葬ノ事ヲモ仰下サセタマフ、〇中略十四日、今日酉ノ刻、御棺御本丸出御ニヨリテ、御道筋辻固被仰付、（但十二日被仰付、〇中略）今大君、申ノ刻御本丸江渡御、休息ノ間御棺ノ前ニテ御燒香アリテ還御、今夜堀田備中守、酒井河內守、石川美作守、內藤若狹守、本丸二ノ丸ニ勤仕ス、申下刻、大久保加賀守、東叡山ヨリ凌雲院僧正、實正院、信解院、護國院、覺成院、（袍裳衲袈裟）五人ヲ同道シ、御棺ヲ迎ヘ奉ルタメ、北ハネ橋ヨリ登城ス、（行列略ス）ハ御棺御休息ノ間出御ノ時、鈴木修理、御車持參シ、御棺ヲ載タテマツリ、上ノ棟蓋ノ御飾ヲオロシ、御小姓衆小納戸衆御車ヲ引出シ、御縁ヨリ棟蓋ヲカザリ奉リ、御駕籠ノ者、御中間八十餘人舁奉リ、北ハネ橋ヘ御出ノ時、橋ノ上ニテ御棺ヲ小榻ノ上ニヲロシ奉リ、凌雲院僧正以下五人讀經シ、事畢テ凌雲院信解院ハ御先ヘ歸リ、實成院護國院覺成院ハ供奉ス、〇中略御棺戌ノ刻ニ本坊黑書院御上壇ヘ入セラル、御棺前江御盤供七五三ヲ供ヘ奉リ、衆僧參集リ、凌雲院導師ニテ光明供修行ス、日光御門跡、病氣ナレドモ扶ケ出ラレテ燒香拜セラル、御棺前ニ今夜ヨリ僧衆八人ツヽ勤番、御小姓衆小納戸衆、隔番ニ勤番ス、光明供畢テ、酒井雅樂頭、稻葉美濃守、大久保加賀守、土井能登守、松平因幡守、三枝攝津守、稻葉石見守、及板倉石見守、松平山城守、大岡五郎右衛門、其餘大森信濃守、遠山半左衛門、御小姓衆、小納戸衆、巡々ニ拜シ奉ル、但シ四品以上ハ御下壇、諸大夫以下ハ御縁ノ間ナリ、雅樂頭以下退出ノ後、加賀守黑書院廊下ニテ、石見守、山城守、五郎右衛門連判シ、注進ノ狀ヲ調ヘ、御棺入御ノ儀式、品々ヲ二ノ丸ヘ申上ル、御右筆杉浦半左衛門、小島次郎左衛門役之、夜中黑書院御廊下入口ニ、書院番衆六人ツヽ不寢ノ番ヲ勤ム、コレヨリ日々如此、十五日卯上刻、凌雲院僧正以下ノ衆僧、本坊黑書院下壇江參集ル、後夜ノ勤行懺法ヲ修行ス、大久保加賀守、板倉石見守、松平山城守、大岡五郎右衛門、御下壇東ノ間ニ侍座ス、三枝攝津

守、稻葉石見守、大森信濃守、遠山半左衛門、及御小姓衆小納戸衆等、御緣ノ門、假緣ニ列座、御上壇ノ內ヘ、御茶御膳御菓子ヲ供シ奉ル、御小姓衆役レ之、御存生ノ時ノゴトシ、今曉加賀守、本坊書院ニテ、人見友元法眼ニ、御中陰御法事中日記スベキノ由上意也ト申渡ス、故ニ黑書院下壇ノ御次ノ間ニ友元モ伺候ス、勤行畢テ、加賀守石見守、山城守、五郎右衛門拜禮、其後稻葉石見守、朽木和泉守、酒井壹岐守、大森信濃守、遠山半左衛門、御小姓衆小納戸衆、巡々ニ拜禮ス、但シ三枝攝津守、二ノ丸ヘ出仕ニヨリ、早ク拜禮退出、次ニ御小姓衆、御膳ヲ撤ス、衆僧退出、勤行畢テ、加賀守、石見守、山城守、五郎右衛門連判ニテ、勤行畢ノ由ヲ二ノ丸江注進ス、午ノ上刻、本坊黑書院江衆僧參集ル、御小姓、御茶御膳御菓子ヲ供シ奉ルコト今朝ニ同ジ、凌雲院光明供ヲ修行ス、衆僧錫杖ヲ唱フ、但シ御門跡、痢氣重キニヨリ出席ナシ、御法事畢テ、堀田備中守、松平因幡守、內藤若狹守、內藤上野介、米津周防守參拜、其後加賀守、石見守、山城守、五郎右衛門拜禮、今朝ニ同ジ、阿陪美作守、久世出雲守、酒井日向守、大久保安藝守來テ拜禮アリ、信濃守、半左衛門、及御小姓衆小納戸衆拜禮ス、中奧落髮ノ衆、晝ヨリ曉マデ御廊下ノ末ニ勤侍ス、每日如レ此、今日拜禮アリ、御右筆落髮森新兵衛、大橋左兵衛、御廊下ノ末ニ侍ルコト階日ナリ、內藤若狹守ハ、稻葉石見守ニ替リテ寺中宿坊ニ一宿ス、但シ內藤若狹守、三枝攝津守、稻葉石見守三人ハ、一人二ノ丸ニ宿シ、一人上野ニ宿ス、每日如レ此、奧ノ番頭酒井壹岐守、內藤上野介、米津周防守、朽木和泉守四人、皆々一人ハ二ノ丸江登營、二人ハ上野ニ一宿、每日如レ此、御法事畢テ、加賀守、石見守、山城守、五郎右衛門連判注進、今朝ニ同ジ、未ノ刻酒井雅樂頭、本坊黑書院ヘ參拜、加賀守、石見守、山城守、五郎右衛門本坊ヘ出ヅ、雅樂頭退出ノ後、加賀守等四人御葬地巡見ス、申ノ上刻、本坊黑書院ヘ衆僧參集ル、初夜ノ勤行例時アリ、御小姓衆御茶湯ヲ供ス、加賀守以下諸役人本坊ヘ參ス、今晝ニ同ジ、勤行畢テ酒井河內守、石川美作守參拜、加賀守以下拜禮、今朝ニ同ジ、勤行畢テ二ノ丸ヘ注進今晝ニ同ジ、十六日卯ノ上刻、黑書院ヘ衆僧參集ル、後夜ノ勤行懺法、昨朝ニ同ジ、實成院導師タリ、加賀守以下役人出座拜禮、注進昨朝ニ同ジ、午ノ上刻、黑書院ヘ衆僧參集ル、凌雲院光明供ヲ

擇日時方角

修ス、衆僧錫杖ヲ唱フ、加賀守以下役人出席、諸儀拜禮注進、昨晝ニ同ジ、御法事畢テ、井伊玄蕃頭拜禮、未ノ刻稻葉美濃守、土井能登守、黑書院へ參拜、今晚大雨ニヨリ、阿部美作守御葬地巡見、申ノ上刻、黑書院へ衆僧參集ル、初夜ノ勤行例時アリ、加賀守以下役人出席、諸儀式拜禮注進、昨日ニ同ジ、石川美作守參拜、(但シ松平因幡守、石川美作守、毎日參拜、廿六日マデ相同ジ、)○下略

〔文昭院殿御實紀 一〕寶永六年正月十日、はや御大漸におよばせ給ふ、○德川綱吉　廿二日、靈柩を北刎橋より發引あり、○中略　道は一橋より護持院の側をへて、筋違橋より廣小路にいで、山の仁王門よりかりの御ましに入奉り、上段に安し奉る、御迎には淩雲院僧正實觀、信解院惠順、勸善院慈仙、東漸院宣英、圓珠院宣濟參りき、かくて七五三幷に常の御饌を獻じ、導師准三宮公辨法親王、光明供つかふまつらる、福聚院慶海錫杖、覺王院大僧正最純をはじめ讀經す、是より毎日後夜日中初夜の勤行、准后つかふまつり給ひ、衆僧出座かはる事なし、　廿八日、山にて大葬行はる、よて午刻、淩雲院僧正實觀封地の法を修し、申刻七五三の御膳を供し、終て公辨法親王燒香し給ひ、衆僧諸夫讚光明供とり行ふ、酉刻靈柩をかりの御ましより、塋域にうつし奉る、

〔續修東大寺正倉院文書 十四〕具注曆斷簡

天平勝寶八歲曆日　凡三百五十五日○中略

葬日　啓殯發故殯埋同用

斬草日　其葬日亦斬草吉、非其葬日得斬草啓殯、

九坎日　其日不可葬起土種蒔蓋屋凶○中略

正月大○中略

六日庚申木破　歲後療病壞垣葬吉

七日辛酉木危　歲後葬吉

〔吉事略儀〕兼日以吉日可被點其地方角土用日時等事、（○中略）

御入棺儀

云此事日日禮事、暫不被載三箇日內字指日可被注置也、有三箇字者、猶有日次沙汰、留殘人、或違遺言、（九條相府有遺言）或迷進退之故也、其時兼被相定者、召陰陽師被問日時事、更不可有之、

依違遺言、一條攝政（○藤原伊尹）有此害、所謂短命也、

〔簠簋內傳二〕十干之事

戊巳、（○中略）不致葬禮、不療諸病、不親病人、不弔死人、

十死一生日　正酉　二巳　三丑　四酉　五巳　六丑　七酉　八巳　九丑　十酉　十一巳　十二丑

不弔人日　辰巳午未申酉戌亥子丑寅卯

右此二箇日取出死人、致葬禮等凶、敢莫弔死人、故甚禁之、

〔全國民事慣例類集（葬埋）〕死者アル家ニハ、其組合集會、萬事ノ世話ヲ爲シ、翌日葬埋スルヲ例トス、丑寅ノ日、或ハ友引ノ日ヲ忌テ延縮スルコトアリ、（上野國群馬郡）

死去ノ後、早キハ二十四時、遲キハ三日、又ハ四日ヲ經テ埋葬ス、寅日五墓日十死日ハ葬埋セズ、若シ此日ニ當レバ一日ヲ延シ、或ハ縮ム、（羽前國置賜郡）

〔鹽尻三〕葬禮に夜を用之事、上代格に成て、我國久しき風俗也、

〔類聚雜例〕長元九年四月十七日、天皇（○後一條）崩於晝御帳前、　十九日丁卯、內大臣、藤大納言、（頼宗○中略）右大辨（經輔）等參會關白御直廬、（凝華舍）被定雜事、（○中略）

一先帝可奉遷他所哉否事

彼此被申云、自禁中被行發葬之禮、頗可有事憚、奉移他所之後、自衙備葬禮、可有御葬送歟、但無日次者非此限矣、

一可奉遷之所事
人々被申云、一條院宜歟、但頗損殊以甚云々、若然者無便歟、先令見彼院損否之後、可被左右歟、卽仰式部大輔資業、美作守定經(件朝臣別當也)朝臣等、遣見彼院、此間相府命云、一條院若無便者、法成寺如何、或云、無遷座寺家之例、無便歟、或云、先帝時々幸臨、爲叙位任官之地也、專不可准他寺、奉遷有何憚乎、又被命云、自清涼殿以吉方可定御葬所歟、將自遷座之所可取吉方歟、其事一定之後、可定奉遷之所歟、右衞門督申云、應和四年、中宮(〇村上后安子)崩於主殿寮之後、奉遷東院、而道光偏自東院以吉方爲御葬所、其後保憲、遷座所及御葬所等、自主殿寮可取吉方之由奉勘文云々、卽披覽彼年邑上御記、道光有不覺行之文、然者問陰陽師之後、可被定其所云々、頃之資業朝臣等歸參、申云、北對頗雖宜、東西北又廂等不全、可無便遷御者、〇中略召大外記賴隆眞人、被仰此間雜事可勘申之由、

廿一日己巳、召陰陽助時親、被問先朝奉遷他所幷御葬日等、申云、戌刻御入棺、子刻奉遷他所、來月十九日可奉葬、如時親申被行、　廿二日庚午、相府令式部大輔資業朝臣問陰陽助時親云、奉遷先帝於他所、今日如何、令申云、今日吉日也、今日之外、忽無宜日歟者、又被仰云、自遷座所以吉方可點御葬所歟、將自清涼殿可取吉方歟、尋先例共可避其忌云々如何、令申云、如先例共可避也者、重被仰云、可奉遷之所、大略一條院、若法成寺等之間也、若自件兩所點御葬所其便如何、令申云、御葬所自兩所可點申方也、然者御在所一定之後可定申歟、又被仰云、御葬送事、時親可奉仕也、可進其勘文者、令申云、未傳習之事也、仍奉勘文、今夕有其憚者、重被仰云、所申不當、早可勘申者、次被定可奉遷之所、旁有其憚、未被一定之間、關白相府、依女院御消息令參弘徽殿給、頃之歸出給、可奉遷上東門院之由有院宣者、卽以此由被仰時親、　五月十三日庚寅、此日內府幷權大納言、新大納言、民部卿、右衞門督、中納言、定右大辨等、參會關白御直廬被定雜事、

一御葬所事

彼此被申云、先遣陰陽師幷可然之人々、巡檢方角幷可便之後、可被左右歟、○中略

一於奉藏御骨之寺、一周忌間、可修護摩幷御念佛事、○中略

及晩景資業朝臣時親等歸參申云、巡檢神樂岡東邊、自一條以南、自上東門末以北、自御在所申方有便所、以其地可爲山作所也、又御幸路雖有岡中吉田社前、其程不幾、頗雖有作路之煩、作岡南路爲御路、無事憚歟、

〔明月記〕天福二年○文暦元年八月九日乙亥、御入棺、○後堀河明日歟、○中略山作所方角皆塞、北一方無憚、仍被召能眞不知其字、僧都長殿僧正弟子也觀音寺邊所領、御佛事此御所、依賀茂社領可憚之由貞應同申、猶不審之由議者等申、仍於他所可被行之、抑雖非御葬禮、出御口所被修中陰佛事有例歟、極以不審、所聞及密密本盜出奉渡其所、更御葬禮常例歟、極以不審、

〔宗建卿記〕享保十七年八月廿七日、殿○近衛家久仰云、昨夜一品宮被申談云、明後日廿九日舊院○靈元御葬送、然處或人云、東寺寶泉院云々廿九日未也、泉涌寺自院中巽方也、未日葬巽方、是友引也、載簠簋作晴明也之由、件事六條局大乳母人等被聞之、甚不可然、可有御延引哉之旨、强而被申、一品宮仍被申談之由也、殿御答云、友引之事、古來無其沙汰、重復日者被避之、且今度既日時賀家勘進之、於朝廷不用陰陽道說、而何被用妄說乎、雖然女房信此說、御延引强而被申之儀無據歟、猶被申武家傳奏之上、於省中自被傳奏被聞此事候はゝ、又與彼宮被申談、可及言上之由、仍今日午後、殿下令參內給、再應可被尋賀家者也、抑被案此事之處、疑泉涌寺僧侶、照田院大輪御葬送欲爲來月之旨有之歟、彼大輪、來月者月番住持職也、於月番者勤引導師、於施物甚有益、仍企此事歟、甚以不可然、言語同斷事也、以私欲妨重事、若雖及來月、於引導師者、可宛今月住持僧者也、殿下甚令怒給、後聞今日於省中、關白被命賀家、陰陽師保篤被尋友引之事之處、曾以陰陽家無此事、且簠簋稱晴明之撰、近來於眞言宗多用之、賀家當家不用之、是僞書也、如此陳申云々、依之不及延引御沙汰、

後日見₂小右記₁、有₂方忌事₁、長德五年十月九日、略之葬送有₂方忌₁事、古來之儀歟、今度稱₂方忌₁非₂無₁謂者也、

〔天保諒闇記上〕路頭行列

御葬送御道筋　幸德井勘進

丁。之。方。ニ。口。ヲ。被₂爲₁明、夫ヨリ堺町通ヲ被₂爲₁成、右堺通ヲ三條迄、三條通ヲ東へ京極通迄被₂爲₁成、右京極通ヲ南へ五條通、夫ヨリ東へ被₂爲₁成、伏見街道ヲ御順路、泉涌寺へ被₂爲₁入候事、

〔榮花物語二十六楚王の夢〕すべてかぎりになりはてさせ給ひぬ、〇後朱雀妃藤原嬉子御年十九、あないみじ、あなあさましと思めす、〇中略あけぬれば、よしひらめしにつかはしたれば參りたり、さるべき事ども、關白殿〇藤原賴通なく／＼問はせ給、〇中略けふこそは、まづをさめ奉らせ給ふべき日にてさふらふめれ、さてもかくておはしますべきにあらねば、いづ方にかゐて奉るべきとはせ給へば、法興院はよき方に候めり、こよひほこゐんにおはしますべう申す、御さうそうは、この月十五日と定め申て、岩かげにせさせ給ふべきなど、こまかなる事も申つるも、あはれにかなしき御事共にも、ねんじあへず、うへのきぬのそでも、玄ぼるばかりなり、

〔榮花物語二十九玉の飾〕萬壽四年九月十四日のさるの時にうせ給ぬ、〇姸子、三條后、中略さてのみやはとて、もりみちめして、事共とはせ給へば、〇中略さてとかくの日、あすにこそ候めれ關白殿〇藤原賴通、姸子兄御忌日なれど、それはいませ給ふまじ、女院〇藤原彰子、姸子姉一の御いみの日の今なんさらせ給べき、それにははたあたらせ給はず、さらではえとみにせさせ給はじと申す、さらばさにこそはあなれ、おぼろけにやはみえさせ給はざりしとてもなかせ給、祇園のひんがし大谷と申てひろき野侍り、そかたになんおはしますべきなりと申せば、さはあすまかりてぞ、さべきさまに、つかうまつるべきとおほせごと給てまかでぬ、

〔新朔平門院御凶事書留〕弘化四丁未年十月十三日、今夜戌上刻女院崩御之旨被仰出、○中略

御内棺日時

十月十九日乙丑時申○中略

十月十五日　　　陰陽權助保源

陰陽寮

擇申御入棺日時

今月十九日乙丑時亥

弘化四年十月十六日　　權暦博士賀茂朝臣保行

權助兼播磨守賀茂朝臣保源

助兼暦博士賀茂朝臣保救

陰陽寮

擇申御葬送日時

十一月十二日戊子時酉

弘化四年十月十六日　　權暦博士賀茂朝臣保行

權助兼播磨守賀茂朝臣保源

助兼暦博士賀茂朝臣保救

御出車御方角事

戊之宮ヨリ癸之宮ニ至而、王相所在ニ而不宜、酉之御門ヨリ被為出、或者右御門之南北之内ニ口ヲ被為明、夫ヨリ御出車ニ相成候而茂、御差支無御座候、

御葬送御道筋之事

西之御門、或ハ南北之内ニ口ヲ被爲明、夫ヨリ御出車ニ而、直ニ南江中立賣御門ヲ西江、室町ヲ南江、夫ヨリ三條通ヲ東江、京極通ヲ南江、夫ヨリ五條通ヲ東江、伏見街道ヲ御順路ニ、泉涌寺江被爲入候テ可然事存候、

陰陽權助保源

十月十五日

〔榮花物語三十鶴の林〕夜中すぎて、ひえはてさせ給ひける、○藤原道長、中略、又の日陰陽師めしてとはせ給に、七日の夜せさせ給べし、ところはとりべのとさだめ申てまかでぬ、

〔定家朝臣記〕天喜元年六月十一日己卯、巳刻鷹司殿○藤原道長妻倫子令薨給、春秋九十、　十五日癸未、依召參御宿所、御葬送事、今日被定、仍彼文書等可尋獻之之由口口也、早旦召漏刻博士信口先被問御入棺御葬送日時、申云、今日可有御入棺、來廿二日御葬送者、則令獻勘文、頃之右府民部卿源大納言參給、有御葬送定、讃岐守家經執筆、布衣於御宿所南庇簾中有議定、寢殿東庇也事了午刻作御棺、於辛方作之、西對西廊北頭云云、

〔殿暦〕永久二年四月三日戊申、今日北、○藤原師實妻麗子子刻許御入滅、　四日己酉、今日召陰陽師、陰陽大夫知俊仰陰陽助家榮令召進、須召光平泰長家榮等、雖然公家忌惟重、仍仰家榮令召進也、是先例也、巳刻許、陰陽師日時持來、余開見之、御入棺今日戌刻也、造始棺時午、仍仰行事重仲朝臣、御葬送他雜事載此勘文、　十七日壬戌、召陰陽師家榮、内々問萬事、申云、忌者自本御所有方角忌、但葬送日、出門ヲ當吉方、家内ハ王相大將軍、更無憚、

〔兵範記〕久壽二年六月二日戊寅、今明依復日、左府○藤原賴長北政所後事、不可有沙汰云々、又戊己日同有憚歟、　三日庚辰、左府御邊事依、内府幷新中將等、依御衰日同無沙汰、　五日辛巳、依重日左府北方事、又無沙汰、　六日、今日於左府毎事有沙汰、有成朝臣執其文筆云々、○中略漏刻博士賀茂周憲、獻次第雜事勘文、山作所相當三鏡方、乙泰親難申云々、　八日甲申、今夕左府北政所御葬禮云々、自一

條富小路被出云々、今朝家司有光朝臣職事盛業向山作所、行事菩提樹院四至内府堂傍北山云々、件所自終焉在所今月相當三鏡方、乙無憚之由周憲注申、森親大難之、遂無改定被點地云々、

〔新撰長祿寛正記〕同年〇寛正四年ノ夏ノ比ヨリ、公方〇足利義政ノ御母君高倉殿、御不例ノ事有リ、〇中略同八月八日ノ曉、高倉ノ御所ニテ御他界アリ、將軍家ノ御歎キ、可申樣更ニナシ、同日申刻御沐浴有、土御門三位有盛參リ、時刻ヲ計ヒ申、

〔鵞峯文集七十四哀悼〕泣血餘滴

明曆二年丙申三月二日辛巳、申酉之交、余〇林春齋母荒川氏龜諱終於寢、四日癸未、余及春德相議謂、國俗不能久殯、禮曰、吉事用剛日、凶事用柔日、今日柔日也、及昏可葬、乃白家君、〇道春家君領之、因考家禮註及丘氏儀節、書后土神主祝文、貼於版、版高五寸、長一尺、用今尺、議發引之事、然及晚以雨猶未止、故不克葬、五日甲申、今朝余謂春德曰、古禮三月而葬、且卜遠日、孝子之情固當然、今從國俗者、無奈之何、昨日之雨、於我輩可謂幸也、今日剛日也、然則葬可期明日、然陰晴不可知焉、且他妨不可圖也、若近隣有失火、則周章不可言也、不如今夕行葬、春德無異論、於是白家君、家君曰可也、

〔大江俊矩先考卒去喪中雜々日記〕寛政四年十二月廿三日、巳半刻御終焉、〇大江俊冬、中略、葬送日時遣迎院尋遣處、來廿五日戌刻可然旨也、十二銅遣歸ル、

〔大江俊矩先妣御事雜誌〕文化二年四月十四日、亥刻御終焉、〇大江俊冬妻十五日、遣迎院へ葬送日時令考處、明十六日戌刻可然旨申來、十二銅爲持遣也、

〔言成卿記〕天保十四年五月九日、祖母藤向殿違例之處、午一點及危篤、血死期也勤哭了、〇中略

一入棺幷送葬日時勘文、命陰陽師勘給云々、

入棺來十二日時亥云々

送葬來十四日時酉云々

出棺

〔榮花物語 二十五みねの月〕三月 ○萬壽二年 つごもりに、花とともにわかれさせ給ひぬ、○三條后妍子、中略 月たゝば、まつり ○賀茂祭 などいひて、むつかしかりぬべければ、いかになど思しめして、ついたち三四日の程に、そうりう院の西の院といふところにおはしまさせ給ふ、

〔小右記〕正曆六年 ○長德元年 四月十一日丁亥、民部丞國幹告送云、入道關白殿 ○藤原道隆 去夜亥時許入滅云々、遣賓朝臣又告送云、戌時許入滅者、時年四十三 廿四日庚子、關白葬送云々、人々云、賀茂祭以前、吉田祭日、有此事如何、

〔榮花物語 四みはてぬ夢〕四月 ○長德元年 十日、入道どの ○藤原道隆 うせ給ひぬ、中略 大殿の御そうそう、まつり ○賀茂祭 すぐしてあるべし、その程もいとをりあしういとをしげなり、中略 大殿の御さうそう、まつりすぎて、四月のつごもりにせさせ給べし、小一條の大將 ○藤原濟時 もおなじをりなり、あはれにいみじき事どもなり、

〔中右記〕保安元年八月六日、甲戌、忌夜行、八月々 夜故民部卿 ○藤原宗通 喪送也、去月廿四日壬戌入棺也、鳥邊野、 已及十五日、有此事、極熱之頃、誠雖不便、依無日次、及今日也、八月放生會以前、故小野宮中納言祐家卿、寬治元年七月廿八日薨、八月三日喪送例者、彼人々之後家幷女子、其後無事、予今見故也、仍可用放生會以前之由、家榮兼日所來談也、

〔行治神道葬祭拾式錄〕引馬諏訪社神主葬祭式

杉浦信濃守從五位下藤原朝臣國頭府君　元文五年庚申夏六月庚午朔癸酉卯上刻卒 中略
甲戌之日早朝奠供物、　次申刻粧葬具、　次酉上刻謁祭主、　次祭主出來、於喪家門前倚胡床、　次孝子出迎拜祭主、祭主答拜、　次祭主出輿、諸祠官從之、轜車者間列　次孝子向魄車拜禮、畢出喪家、　次魂車自上堂出、先魄車、　次孝子先魄車輓美津奈、親族後魄車持美津奈、孝子及親屬杖左手

〔行治神道葬祭拾式錄〕濱松庄小池村神明社神主竹山日向秦茂睦葬祭行事

竹山太郎右衛門十月十四日卒、○中略

十五日辰中刻　安福寺市野村宗安寺江案內　次安福寺市野ヨリ歸、品品葬具等之沙汰、　次午

刻　次品品調畢宗安寺江案內　次神供（供米、干魚、）酒二膳　次祓修行　次玉串拜　次祝詞　次撤神

供　次各物拜退　次宗安寺乘入（飯一汁三菜）　次棺ノ前ニテ勤　次苑所江行列、此時渡諸人江杖、

〔喪祭私說〕主人以下成服、（諸子親戚、各著裏服、服卽俗所謂伊盧、○中略）發引前奉柩朝于祖、（執事者撤奠、役者擧柩詣祠室前、主人焚香盡哀、乃奉柩遷于故處、此禮蓋象平生將出必辭尊者也、室家狹隘、難於遷轉者、略移動以向祠室可也、）乃設遣奠擧哀、（酒肴茶菓之類、執事者隨宜設之、主人焚香再拜盡哀、告以靈轜將往卽幽宅、載陳遣禮、永訣終天、主婦兄弟以下代拜盡哀、遂撤奠、）送葬及期遷柩就轎、（俗以未時若未半申時爲出柩之期、及期婦人皆避、召役夫擧柩遷之、就轎乃載、以索維之、令極牢實、主人視載、善按、朱子家禮奉魂帛升靈車、別以箱盛主、置帛後、邦俗不用靈車、乃使幼者奉位牌先柩而行、夫主未返神、而特奉之、蓋無謂也、今既無靈車、則姑從權宜、轎主及淨研新筆墨、以置轎內柩側、墓標亦同載以隨可也、）

〔源烈公御葬送記〕御靈座御次第

御座處へ御香案淸之御香案共出置、御卓を直す、御左右申上、大君（○水戶慶篤）鼠色御無紋御小袖、同色御無紋御長上下被爲召、淸メ之御上香御一拜有而、御本膳御手長持出、大君御受取御備、御二之御膳前ニ御同斷、三之御膳前ニ御同斷、明キ御三方御手長持出、御盞御順ニ被爲取、御三方へ御載被遊持入、御飯御鉢御手長持出、御受取御盛添被遊、御手長御飯御鉢持退、御土器前ニ御同斷、初獻御肴ニ付、御手長御酒を持出、御土器を被爲持、御手長御酌致し直に持退、御上香御一拜、御棺前に御同斷、二獻御肴前に御同斷、御上香御一拜、御吸物前ニ御同斷、御三獻、御肴前に御同斷、御箸立御上香御一拜、右相濟入御、御子樣方ニハ、右御備之內、御脇ニ被列座、御順々上香一拜、御中入（但御手長ニ而）（御膳垂、御膳上御蠟燭土ん取、）御左右申上出御、御椀之蓋、御手長持出、御受取御三方持入、御湯御手長持出、御盞へ御湯被爲請御備、御手長御三方を持入、前文御品々御順々御撤被遊、御茶菓子前ニ御同斷、御手長持出、御受取御備、御濃茶御自身御立被遊御備、御上香御一拜、御後菓子前ニ御同斷、御手長御受取御備、右相濟御上香御一拜入御、御菓子御茶等ハ御手長之者追而撤之、

御出棺次第

一御出棺ニ付、大君〇德川慶篤幷御簾中御方御棺拜被遊、御引續御庶子方御息女方にも御棺拜有之、相濟上臈老女等御棺拜有之畢而奥締り解け、鋭君御方御名代奥御番頭、絲服上袴松姬方名代御小姓頭取、服同斷九郎麻呂殿名代前同斷、八代姬方名代前同斷、餘一麻呂殿名代、正姬方名代、廿二麻呂殿名代、隨姬殿名代、信之允殿名代、政所御方名代、右何れも御小姓頭取勤之、順々出席、上香一拜有之退、御家老、大寄合頭、若年寄、寺社奉行、奥御番頭、御側御用人、御用人、御小姓頭、右之面々壹人づゝ、絲服麻半袴ニ而御棺拜仕、但上香無之引續御供之御家老一同罷出、別段御棺拜仕退、御供之若年寄御側御用人之內、御用人御小姓頭迄一同に罷出、別段に御棺拜仕退、

但御供之族は、御供之服ニ而拜供、各扣場ニ相詰候、

一右相濟而、御小姓頭取、御小姓、奥醫師、中奥御小姓、御小納戶、中奥御番、御次御番、御次詰、御棺拜仕候、

一若年寄御用人出席、御小姓頭取御小納戶、御香案御燭臺御備物之御卓御香爐等、御入側へ移之、

但七八人ヅヽ一同に罷出、總裁代同斷、

一總裁御魂帛御箱へ奉入、押竹あて、蓋を掩ひ、綱を結ひ、棘覆を掛け、假に御備物の卓上に奉安、

一御小納戶、御椅子に掛有之御小袖疊み紙に包御椅子に載、御入側へ持出、御宮之中江納、

但奥坊主、御椅子箱張致、棘覆を掛、棒を通し、持人に渡、

一御小納戶御靈牀奉納之

但御柩を奉圍候白張御屛風も引入

一総裁御銘旌之跗をはづし、奥坊主へ渡之、御棺之御先江立、

一御棺、御取立之者入込、御搦有之、

但御普請奉行幷元締手代始、御抱中人迄、御持同心麻上下著用罷出、御棺棘覆を取調、釘を打、御蓋はぎ目、漆ニ而塗之、白大蒲團ニて包み、御槨へ奉入、

一御棺、御座敷內より御車へ奉移、山水之間迄被爲入、御連臺へ奉乘、白棘御覆掛之、御棺臺江奉居、

但御玄關に而御日覆を掛、御香裝附之、

一山水之間に而、總裁御棒之先、左之方へ御先と認之、奥坊主硯箱出之

一御召之御輿、御目付方より出、中奥にて奥坊主請取、御本間御疊之上に居置、御襖立切之、

但疊之上へ白縁御席敷之

一御小姓頭取、御神主を御輿之內へ御臺之儘奉入、

但御神主は、以前別御間江御屏風を引廻し納之、總裁御詰綿を出置候事、

一總裁、御魂帛箱を右御輿之內江奉入、

但御輿之開閉は、御小姓頭取勤之、

一御輿を御小姓頭取始にて手を添奉り、御座所外にて御持同心ニ渡す、直に奉舁、御近習向奉守護、御棺之御先へ御立、但御目付御玄關迄御先を引於御玄關、御持同心より御輿御駕籠之者江渡之、

一御出棺御供揃之段、御目付より御小姓頭取へ申上之、御輿御棺、御玄關より出御、

但御殿中御小姓頭御目付御先を引、御小姓頭取御小姓御小納戸等奉守護之、

一大君御喪服被爲召、御庶子方にも御一同御引續御玄關より出御、竹杖被爲突、大手御門より御乘輿被遊候、

一大手橋北御堀際江、諸大夫之御家老始、布衣以上之面々寄合指引迄罷出、大手腰掛北より布衣以上之隱居罷出、備前守屋敷前江上之寄合より御留主居物頭迄罷出、其外諸士之面々等、御通棺御道筋江罷出居、御見送申上拜伏仕候、

〔吉事略儀〕御葬送

時刻御素服人々著之、○中略

御佛供養

御前僧參集、可有眞言供養、（三綱以下取布施）於例時者、茶毘了人々歸參、御所之儀可被行也、

垂御車、（上白不可裏、書略之時儀也、）

簾簀可懸之、（下簾閉付簾、不可裏反、）疊引立、筵引懸前後閫上、

（首書）役人著素沓往反、御所之例也、

（首書）或説云、前後之簾ニ白木ヲ渡シテ懸簾不裏反、下簾閉付也、且儀禮周禮皆所見也、裏様ハナカエワニ至テ裏ナリ、或生絹様絹也、裏輪様如何、答ヤヲ先裏也、其ヤヲツヽミタルヲヒラヘハサグルナリ、ヒラヲ内外ヘ通テツヽムニハアラズ、此最秘事也、

奉乘御棺、（以御前爲御跡）

役人六人奉乘之、舁御跡人二人乘御車、自前下人々御棺綱結付前後手方、

懸御牛

御車副六人、（裝束白張、不可平禮）牛飼持榻、

爲高野者、貴所若及丁餘者可爲御輿、（簾如御車儀、簾可懸御輿前）之、役人傳舁居御所中、

次奉乘御棺、御跡方舁上、深舁入之、件方役人廻御輿外、（奉乘御輿之時、舁御跡人不通御輿內、只廻前入手舁居之也、）

次奉舁出御輿於簀子、力者六人奉舁之、如平生儀、役人候御輿左右、於高野五宮、

三綱以下、（先々勤仕前駈輩、人數可在御定）取松明二行先行、

可然近習僧綱、以布脂燭付日比御枕燈、於簀子上、御前駈中第一﨟移付續松、於高野雖御輿之時、

倚々乘松明前行、

侍一人持日者火舍、(生火在御前邊火舍也)燒名香等在御車邊、(香等裹紙入生絹袋懸頸)

雖爲高野、侍候火舍儀不可相違、

御棺役人六人、候車近邊、

貴賤緇素扈從

所々人三佛乘、略儀可改止之、且有其例也、

御出以後、本御所掃除之、

留守人仰侍、以竹箒拂御寢所等、件塵箒等流川、(弃塞方川也)若無川者弃山野、

〔吉事次第〕御葬送事

剋限ニ上下ノ人素服ヲキル○中略

次御佛供養

例時僧參テ行フ

次御車ヲヨス(御車ヨセニ御屛風ヲタツ)

ツヽムマシ、前後ノ軒ニ白キ木ヲワタシテ簾ヲ懸ク、ウラカヘサズ、

次御棺ヲ御車ニ乘奉ル

役人六人、舁出シテノセ奉ル、御グシヲトビノ尾ノカタニシ、御アシヲ轅ノ方ニス、

御棺ノ布ノ綱ノ末ヲマヘウシロシテ、左右ノホヲタチノテガタニムスビツク、ヒトムスビ、

次御牛ヲカク

サモアル僧一人、脂燭ニシヤロノ御枕ノトモシ火ヲツケテ、ダイマツニ移シツク、サフライ一人、タイマツヲ持テ移シトル、コノ火ハ脂燭モタイマツモ、カマヘテケスマジ、再燃ス忌ナリ、

次出サセタマフ

其スナハチ御所ニ殘リ止リタル人、竹ノ箒ニテ御寢所等ヲハラフ、其塵箒ヲバ河ニ流ス、フタガリノ方ノ河ニハナガサズ、川ナキニハ山野ナドニスタ、
其後御枕ノトモシ火ヲケツ〇中略

鬼門ヲ通ラヌ事
艮ノスミヲ鬼門トテ通ラヌ方也、御座ヲナホス時モ入棺ノ時モ此方ヲスギズ、

御枕ノ火ヲケサヌ事
鉢ニ火ヲイカシヲキテ、若キユレバソレヲトモシツク、コト火ヲ用ヒズ、

火舍ノ火ヲケサヌ事
香ヲヒネリ付テ、御ソサノ折マデケサズ、

御枕ノ火ヲ脂燭ニ付テ、松明ニトモシツクルオリモ火ヲケサヌ事、
タイマツ持タル人、近クヨリ脂燭ヲモフトクアハクヒネリテ、ヨク心得テ、キエヌヤウニハカラフベシ、

御棺ノ綱フタカヘリ結バヌ事
御棺ヲカラグルニモ、御棺ノツナヲ御車ノホヲタテニ結付ルニモ、フタカヘリトユハズ、タヾ一ムスビスル也、

御引カヘ用ヌ事
遠キ所ナレドモ、一牛ニ引カヘハセヌ也、總テ何事モ再ハセヌ也、

〔幕朝故事談〕公方家
外櫻田神田、此兩御門を御成御門と唱へ、兩山御參詣の節は、必此門より御成被遊候事なり、
右故此兩御門よりは葬禮は不出御定なり、丸の中屋敷より葬禮出候節は、先呉服橋御門より出

す事なり、

〔隨意錄 一〕人家有死喪、則出棺之日、直傭僧巫以禳其死氣、是不經之甚也、先王之禮、君臨臣之喪、以巫祝桃茢祓其穢氣、則有焉、臣子之於君父、特憂哀慕之不至矣、而敢忍禳之乎、

〔權記〕寛弘八年七月八日己卯、今日御葬送○一條也、寅四點地鎭、大炊頭光榮朝臣奉仕云々、○中略亥時四刻、人々著素服、○中略同刻御輿長等、舁御輿置中殿北西渡殿板敷上、元在此西庇、主殿司居所也、爲取吉方、并片庇、今以壞却也、○中略舁置此所之後、暫撤小屋形須々利、御輿長等、八人御輿長參進夜御殿南戶、奉舁出、須放二間南障子、并母屋西第一間障子、爲奉舁出之道也、○權左中辨經通朝臣、右中辨重尹朝臣、秉燭供奉御棺前、件人在炬火人十二人中、加之、四位二人、五位十人、理義、信經、行資、實房、季標、賴貞、隆光、賴任、定佐、行義等十人、○本定侍中也、件二人、時刻已至、奉進御輿之後、與御輿長等參進夜殿庇、于時權少僧都隆圓、律師尋圓、轉取二人所持續松、入殿內炬付出而傳授、奉舁置於大床上、覆須々利、次覆小屋形、件御輿、前在西、後在東、御入滅并入棺之日、不返御枕、權僧正慶圓呪願、前權大僧都院源導師、事了荷擔御輿、御前僧廿口前行、次御輿長等荷下御輿、駕輿丁等荷擔、自後殿西分經西北舍東北、自乾方築垣壞出御於一條路、

〔類聚雜例〕長元九年五月十九日丙申、及曉景左衞門府生坂上時通、令人夫壞院○上東門院、後一條院御所東墻一本、爲御輿路、自御在所○中略同刻○戊一刻駕輿丁等、布衣烏帽、皆著當色、自一條院持來御輿等、○中略暫候東墻外、同四刻、入自壞路、寄殯殿東階、御輿長等、皆著當色、傳舁安階間廂內、東西行、暫撤却小屋形須々利等、權左中辨資通、右中辨經長朝臣等、著當色採續松進東廂內、權少僧都濟祇、取兩人所持之松燒付御殿油返授、自晏駕日不滅御殿油也、兩人採松下立東階左右、次兼房朝臣、經輔朝臣、章任朝臣、定經朝臣、義通朝臣、良宗、憲房、橘義清等、舁御棺安御輿中、四枕次覆須々利小屋形等如元、此間關白相府、并內府以下近習上達部祗候、被行事、次前大僧正慶命御導師呪願權僧正明尊等、進階前導師呪願、次御輿長等舁下御輿、駕輿丁等二十人傳荷之、本數四十人也、相替可供奉之、又此間行障等可持立、而有議不入院內、於墻外可儲禮也、御輿長等近副御輿、持笠者四人、分立御輿四角、藏人所衆四人、各以笠居高坏持之、皆著當色、燒香者四人相添之、各以名香合薰等、納生絹袋懸頸、行路間燒之、皆著當色、藏人二人、雜色二人役之、於墻外行列、

（後中記）仁治三年正月廿五日戊申、顯朝朝臣奉書到來、今夜四條院御葬禮可供奉之、秉燭之後、著衣冠、(卷纓上括)參閑院、良久供奉人參集、仍寄絲毛御車於油小路南北門、公卿列立門外腋、內大臣(家公)(闕)被寄御車、役人實淸、顯氏、光成、宗保等朝臣、敎房入道、印禪僧都、藤原正國、平繁隆等、奉移御棺、人々多落淚、遣出御車之間、公卿以下列立、行列儀、經藏人五位六位秉松明先行、次御車、公卿左大臣殿、經五條辻入御泉涌寺、

（龜山院御葬禮記）嘉元三年九月十七日辛酉、今夜龜山院御葬禮也、(以下略之)上皇(○後宇多)有御目、仍予昇堂上、奉仕御車寄、(被儲御屛風、唐紙、不及板敷、)此間上皇御蹲居、予卷御車簾、(設戶被撤之、御棺長之間、可有障礙故也、)立御屛風之後、自南方簀子降庭上、於上皇御前蹲居、經其御前還入南方、忩退下直廬、撤下袴上紙、(□□略組□□)予忩歸參、於御厩東南、著藁沓、(卷紙)插指貫、(自直衣之中引上之、)(儲)此間乘御已了、於中門外懸御牛之間也、予南方敷床子候之、御牛懸了促啓蹕、上皇令步行給、次予起、宮々令過給之間、聊少磬折、次步運、

（伏見上皇御中陰記）文保元年九月三日、寅刻法皇有御事、　四日、今日有御葬禮事、(山作所深草也、一向上人沙汰云々、)(御火葬、)先是昨日淨金剛院長老本道上人參候、於御終焉之所有御入棺之儀、即奉渡御持佛堂御聽聞所了、今日戌刻(時刻陰陽定擇申歟)奉寄御車(庇)於御鞠壺織戶內、西園寺大納言(實衡)候御持佛堂北西、立御屛風、上人等奉移入御棺於御車、此時上皇(○後伏見)降地御平伏、(御簾役忠冬朝臣、御沓光業朝臣、)諸竹園同以令平伏給、引出御車於中門外、懸御牛、自西北唐門令出御、上皇於門內令留御、竹園出門、令到安樂光院給、

（親長卿記）文明三年正月三日、今日御葬禮(○後花園)治定云々、暫退出、及晚(未刻許)參御寺、先是淸智僧正(御導師事、俄被仰出、不合期歟、但僧正衣裝等所持之間、極官事、有御免者可參云々、他人無領狀、仍以去年十二月中旬日次宜下、)參入、有御經供養、題名僧依俄事人々故障、仍無參仕之輩、例有無可尋知、表白之後、御導師退出、次室町殿(○足利義政)有御參、爲御供奉、申刻許先寄御車於正面間、(正面間御車不入、仍築地三間許撤却之、)御車寄日野前內大臣、(勝光公、蹲居簀子、)此間人々著藁沓蹲居御車前、(轅左方)奉昇出御棺、(僧衆沙汰也、)奉移御車、(僧一人乘御車後、自門外乘之云々、)被出御香呂、(自簾中女房[illegible]出之、舊院女房可然之由有沙汰、實隆朝臣)

(被金々進之、中々北面書藝之々入、)取續之、渡北面兩人、北面下臈、(盛重、守時、)取之、候御車後方左右、次北面上首兩人、(康興、親繼、)取松明、(以灯明火付松明、先規也、)進出、殿上人(政爲朝臣、泰仲朝臣、)等、同取松明先行、(自門外留之、門內取之、)上北面(忠弘、前內府諸大夫男也、)前行、次御車進出給、

〔和長卿記〕明應九年十一月十一日壬戌、今夜御葬禮(後土御門)○也、可有御用之間、雖非當番、內々祇候、又不供奉之輩者、近臣遠臣共、皆爲御用心可祇候之由、有番頭之催也、予雖可供奉、僮僕以下事不具之間、故障尤無念、秉燭時分人々參集、各被參集黑戶、暫而事具之間、諸卿下殿、則黑戶砌下四本懸南方列立、(東上北面、下殿之時節、於砌下各被著履、女房用意、或說、於門外著之由有沙汰、猶可尋可否、)次御車指寄東面妻戶、(不懸牛、手引也、)面方御簾懸軒、後方御簾如常、有御下簾、御車副臨期撤半疊、(御棺直被敷云々、)此後花山院前左大臣被寄御車、(其儀進立妻戶前、貫于捲御簾、以皮緒被結之、其後下殿、)次有覲御之儀、(一向黑衣之沙汰也、凶事傳奏元長卿示云、殿上人少々爲所役分可候其邊云々、雖有其儀、兼日無其儀、臨期內々祇候、書□□雖被相示、無存知之人歟、)先立廻御屛風於妻戶南北脇、(御車與妻戶之間、副戶立廻之也、)次僧衆舁御棺、奉乘之、此間六位藏人二人指脂燭、(左方藤原貴直、右方諸仲、)脂燭殿官兩人自砌下出之、藏人跪簀子取之候、僧衆三人入御車中、搦著御棺於車手形、(搦緒自派在御車中、猶寺官以故實、內々持參白差縄、丁寧奉搦之畢、)次脂燭人退去、次香爐香合入御車、(僧衆入之、此間於御前燒香之御具也、)次出炬火、(其儀炷付御前燈明、[illegible]出脂燭自御屛風中南方僧出之、諸大夫取之、炷付于松明、此後脂燭投捨庭上、不吹消者故實云々、)次撤御屛風、次御香爐役者進寄、(左方家幸朝臣、右方濟繼朝臣、)[illegible]跪妻戶左右、次自簾中被指出御香爐、(御香爐居□島盆、盆中香爐外被盛燒香、燒香或被切之、或切目也、)家幸朝臣取之、召諸大夫一人授之、次又被取、(其儀同前、)濟繼朝臣取之、又召諸大夫一人授之、其後兩雲客下殿、次後乘僧下殿、(於門外可乘云々、)

抑自簾中出香爐事、先規女房之沙汰也、雖然黑戶之儀、爲黑衣沙汰之間、女房不出行、仍予幸令祇候其所之間出之了、依簾中不知其人分也、

次御車出、(人手引也、門下可□□、)於此時分諸臣蹲居、出御時更平伏、抑雖非供奉之臣、內々祇候之輩、出御時節下殿而相加列也、此事先例云々、仍各如此、內々祇候輩、兵部卿、(敎國、)予、永宜朝臣、公音等也、式部卿宮內卿御參內、有御下殿庭上蹲居、路次壞北御門東方築墻也、(築地、)爲出御之路、(此事有先例、但至正長、大略以北御門爲出御之路、雖然、)

於今度者、以小御所新主御殿之間、此御門專爲吉事之門也、故以有例壞築墻、爲路次也、出御之御門、武田大膳大夫警固、

〔二水記〕大永六年五月三日、今夜可有喪禮御幸、〇後柏原也、秉燭之後、著直衣、依遠路不重大帷、今夜各不同也、持檜扇、著藁沓、各參小御所、各雜色一人取松明、僮僕事注左、甲乙人顚狽籍、無所于列立、今夜下冷泉、甘露寺、中院、飛鳥井等、相伴出仕、〇中略有湯漬一盞、了則參小御所、車寄東北群集、少時各參入、戌刻已可有御出也、仍前左府以下至雲客一列而立、南上西面此時御車奉引出、不懸牛手引也、先是諸卿蹲居了、次第奉相隨、於築垣小築地亥方二間許、今日被壞之、於此懸御牛、云々、外懸牛歟、路次正親町西行、室町南行、近衞東行、東洞院南行、從六條河原經法性寺至御寺、泉涌寺、警固、武士在門內外、內內藤、外藥師寺、御車奉寄法塔之前、〇中略

凶事條々〇中略

御車副四人、皆著冠者、牛童子二人、各水干、已上副御車也、地下前駈四人、各五位歟、前行、先持御香爐、次取松明、各二人相並步行、次長淳諸仲等、取松明前行、於築垣外兩人共擲松明、候供奉、兩人供奉最末也、御牛舊例三疋云々、今夜二疋也、〇中略

御位牌事、度々例武家令持給云々、仍雖爲黑衣中、可擇其人事可然歟之由各相議、仍今夜公綿、小松谷、菊亭故大納言季事公二男、

〔和長卿記〕大永六年五月三日乙酉、今夜御葬禮、〇後柏原也、自暮天各參集、〇中略御車寄者小御所北面新造、畢僧衆自記錄所經小御所東面簀子、奉舁御棺到車寄、先是大臣堂上褰御熊、明懸度捲御簾、以皮緒結之、今度儀不見也、下殿、次左右立廻步障、屛風也、即此間被用物也、次駕御、次炬火自簾中出、僧出紙燭也、諸大夫取之付松明、後紙燭投地畢、不吹消法也、如此之儀、一向不知之樣也、近所之人申含畢、傳奏兼可申付也、次燒香、所役之雲客舁簀子、左長淳、右諸仲、自簾中所出取之、召諸大夫渡之、左右共香爐也、居盆、盆中爐燒香也、次雲客二人下殿、著藁沓、初淺沓也、即取松明、御車左右前行、先是諸卿蹲居小御所北面庭上、南上西面也、御車不懸牛、各手舁也、御車出時節各平伏、路次禁中御對所東、即西折、經北御門內對屋北面、到釜殿東方、壞築垣、今爲出御路、此所迄雲客取松明也、又於泉涌寺、自門雲客如前可取松明之

由凶事傳奏被相示、予舊記等窺見、大略不得所見之上、寺家儀者、悉皆爲僧衆沙汰間、云彼云是、寺家之內松明不取也、後得所見者、可隨其時者歟、

〔宣順卿記〕承應三年十月十五日、今夜御葬禮○後光明也、申刻許著束帶、色目如常、不重大帷、不卷纓、各同前、參內、予依所勞不供奉、尤無念、各參集、申下刻許人々下殿、下殿之時、於砌下各被著履、乘燭之後、御車新調飾物白寄常御所南階、御役殿中也、仙洞弘御所、不懸牛手引也、打板南へ一丈四五尺バカリ、西園寺右大臣實季公被寄御車、其體カリハ捲御簾下殿、次有觀御之儀、近臣雲客舁御棺奉乘也、

御路常御所中ヨリ爲通路、不經簀子、御路之間不取脂燭、常御所ト相口之間、簀子ニ敷筵道、立燭御屛風、常御所下格子、階間一間下之、格子撤之、柱懸掌燈、階間バカリ

次香爐花立燈臺入御車、

近臣雲客入之、此間在御前、御佛具也、此外之御香爐ニ入之、香ヲタク爲ナリ、花立ニ造花ヲ入、燭臺蠟燭、

次出炬火、其儀炷付御前灯明、常御所、此間灯明也、猶脂燭頭中將宗良朝臣傳季定朝臣資熙、右兩人授諸大夫、攝家諸大夫上北面也取之炷付于松明、

御香爐授諸大夫、攝家諸大夫也此御香爐新調也、先ニ不下殿人々下殿、此後撤御屛風歟、泉涌寺僧一者一人

御後乘、於門外可乘也

公卿列立、北上東面御車出、又手引也、於門下可懸牛云々、先是女中乘輿前行、布衣二人ツヽ召具、輿數十二、

先諸臣蹲居、出御時更平伏、不供奉之輩下殿、攝家大略參內、殿下、前攝政殿、內大臣殿、九條殿、太閤、中納言殿、鷹司大納言殿、路次壞南築地、常御所南階、融ニ少東方、北方無御門、北方ハ本院女院御殿之方也、爲出御之道、此御門之警固大岡美乃守

〔大江俊矩記〕文化十年閏十一月三日丙申、亥刻崩御、○後櫻町仙洞御諱智子御寶算七十四　十二月十六日戊寅、御葬送之儀、

刻限叢御車於南階、○中略次奉移御棺於御車、其儀殿上人二人、於西簀子取續松、藏官自御下進之參夜御殿邊、親近公卿一人、先例多僧沙汰取合兩人所持之續松、燃付御枕火返給之、

〔言成卿記〕天保十一年十二月廿日、未半刻、予著衣冠奴袴、○中略參故院、○光格就御葬送親王相丞御參、陪膳御雁也、○中略未半刻前、奏移御棺於御車云々、○中略頃之王公各賜御料理也、祗候雲客、幷予已下留守、○中略頃之御車過予前給、此間平伏了、殿下以下被從御車也、諒闇傳奏奉行武傳、勿論被申御見送、各群立候御門內、於此所御乗副僧侶一口奉乗副也了御車引出於假御門外、懸御牛、其後次第供奉步儀、事了殿下御昇殿、法親王各昇殿、予等昇殿、○中略于時酉半刻比也、戌刻比、殿下以下王公各御退出也、○中略御出車昇殿之後、於祗候候所右衛門以下至予輩九輩、御料理拜領、依勝手御出車後拜領了一汁五菜也、御菓子羊羹五切、其後御菓子硯蓋盛一蓋、從御內儀表使持出、從大宮御所陪膳、予以下四輩へ恩賜云々、畏存之旨、以表使御使立ニ御禮宜可言上、予爲總代申入了、

〔榮花物語二十九玉の飾〕萬壽四年九月十四日のさるの時にうせ給ぬ、○三條后妍子、中略その日になりぬれば、つとめてより宮司さべき人々まゐりこみて、さま〳〵おぼしおきておほせらる、道つくりのゝしる、とのゝ御前○妍子父藤原道長はちからなくおぼしめされて、えあゆむまじからんずらんとなかせ給、日くるゝまゝに、いそぎのゝしるにつけても、宮司ども泪にむせてつかうまつる、女房たちも、つねの行啓のめでたかりつるを思あはするに、あさましう涙におほぼれまどふ、やがてそのをりぞ二火つかうまつる、○中略女房車よついつゝぞまゐる、われも〳〵となきまどひて、こたみの御ともにといひつゞくれど、さのみあるべき事ならねば、さるべきかぎり參るなんめり、さて御車にのせたてまつりてかきいだす程、この御こゝろどもおしはかるべし、○中略ねうばうの日比きぬども、きくやもみぢやとしかさねたるうへに、ふぢのくろものかさなるほどぞまが〳〵しきや、つねの行啓にあらず、おしかへしたるなり、ありさまもあはれにかなしきに、あきをかぎりと思

べきにや、くもりなくめでたきに、つゞきたちたる御ありさまなどもいみじうこそ、夜もすがら人々ところ御ありさま、女房のきぬの色さへ見えわかるゝ月なれば、おのづから物の心しりたる人は、あはれにたえがたく、世のつねなきことをさへ、とりかさねおもひつゞけて、女房のくるまをみておもひけり、

ふぢごろもかへす〴〵もかなしきはなみだのかゝるみゆきなりけり

〔春記〕長暦三年十月七日甲子、參河守〇源経相、中略、寅三剋許氣息已絶了、　十日丁卯、爲出參州可毀東築垣也、近日土用間也、小兒可忌避哉否、又王相猶在西、十二日可移此方、予宅在東、仍可忌其方哉否由、以時成遣問之、予自去七日候中納言殿也、時成傳存秀報云、如此之時、更不云土用、又小兒等更不可忌、又王相事在西只暫也、御忌留本所歟、仍更不可忌者、然而小兒有恙、毀彼垣之間、暫可移西屋邊之由示了、　十一日戊辰、爲出參州毀門南掖垣也、此間小兒送西方曹司了云々、葬送所六婆羅蜜南野云々、

〔兵範記〕久壽二年六月八日甲申、今夕左府〇藤原頼長北政所御葬禮云々、〇中略、諸事任式法、更無省略云云、〇中略、步障行障、被裹車之儀如常、彼本所破却乙方築垣被出申、自一條東行、自堤南行、自近衞東行、經河原尙東行、至于菩提樹院內府堂、其山作所、在其北山邊云々、

〔今昔物語〕二十下毛野敦行從我門出死人語第四十四

今昔、右近將監下毛野敦行ト云近衞舍人有リ、〇中略、漸ク年積テ老ニ臨ム時ニ、法師ニ成テ、西ノ京ノ家ニ住ム間、家ノ隣ニ有ケル人、俄ニ死ニタリケレバ、此ノ敦行入道、此ヲ訪ハムガ爲ニ彼ノ家ノ門ニ行テ、其ノ死人ノ子ニ値テ、祖ノ死ノ間ノ事共ヲ訪ヒ云ヒケルニ、其ノ子ノ云ク、此死人將出サムト爲ルニ、此家ノ門ノ極メテ惡キ方ニ當テ侍レドモ、然リトテ何カハ可爲キトテ、方惡クトモ此門ヨリ可出ニ侍ルト語ルニ、入道此ヲ聞テ云ク、其レハ極メテ惡キ事ニコソ侍ナレ、其達

ノ御爲ニ最モ可忌キ事也、然レバ己ガ家ノ隔ノ墻ヲ令壞テ、己ガ方ヨリ出シ進リ給ヘ、心直ク御坐テ、年來己ガ爲ニ、事ニ觸レテ情篤カリキ、然レバカヽル時ニ其恩ヲ報ジ不申ハ、何事ヲ以テカハ報ジ申サムト爲ルト、死人ノ子共此ヲ聞テ云ク、糸不便ナル事宣フ人ノ御家ノ方ヨリ死人ヲ將通サム事ハ、總テ可有事ニモ非ズ、忌ム方也ト云トモ、只此門ヨリ可將出キ也ト、入道ノ云、其達僻事ナ宣ヒソ、只己ガ門ヨリ出進リ給ヘト云テ返ヌ、○中略妻子共聞テ、希有ノ事ヲモ宣ヒケル人カナ、極メテ穀ヲ斷テ世ヲ捨ケル聖人也ト云トモ、此ル事云フ人ヤ有ル、○中略糸奇異キ事也ト口ロニ居並テ云ヒ合ヘリ、其時ニ入道ガ云ク、○中略彼ノ死人生タリシ時ノ事ニ觸テ我ニ情有キ、何ニシテカ其恩ヲ不報ラム、由无シ事ナ云ソト云テ、泣者共ヲ呼テ、中ノ檜垣ヲ只壞ニ令壞テ、其ヨリナム死人車令出ケル、其後此事世ニ聞テ、可然キ人モ下姓ノ人モ、入道ヲ讃メ貴ケリ、實ニ此ヲ思フニ、難有タ慈悲廣大ナリケル心ナリ、天道此ヲ哀ミ給ヒケルニヤ、彼ノ入道ノ身ニ恙ガ无クテ、九十計ニテナム死ニケル、其ノ子孫皆命長ク福有テ、于今其下毛野ノ氏、舍人ノ中ニ繁昌セリ、

〔大江俊章卒去之記〕寶曆十二年九月廿七日、今夜葬送、○中略戌刻出棺、予（○大江俊興）燒香拜告之、御棺於玄關、（輿者白張）燒門火、予著藁沓、携竹杖、御棺之傍ニ隨行、

〔大江俊矩先考卒去喪中雜々日記〕寬政四年十二月廿五日、戌刻前御入棺、（○大江俊冬、中略）畢、予拜辭告之、（可由御出門）撤御机御位牌等、（此後本所安置）奉載御棺於臺、（ながえさいふ）次御出門、（此時予如形取松）予從行御棺傍、于時燒門火、

〔大江俊矩先妣御事雜誌〕文化二年四月十六日、酉刻御入棺、○中略酉半刻過御出棺也、自座敷北椽昇出御輿、（自後昇出之也）經中門代出門給、（此時予如形取松）予從行御棺傍、于時燒門火、

但燒香之儀了、御棺上加雨皮、此時雖不雨下令用意、故卽用是、如軒張、（以竹張是也）出之、四隅以紙綱結之也、

〔最樹院殿御葬式之記〕文政十年二月廿日、儀同殿（○一橋治濟）かくれさせ給ひぬ、○中略廿六日には、肥後守忠英朝臣に、御葬送の事よろづとり行ひ給ふべきよし仰ごとあり、さて出おはしますべき道の事どもさだめさせ給ひき、神田橋の亭、西物見所のわきに、假門作りて、それより出おはして、○下略

○按ズルニ、曾我物語ニ、祐成時致兄弟ガ、富士野へ首途ノ時、吾等ハ死ヲ決シタレバ既ニ死者ナリ、正門ヨリ出ン事ハ汚ラハシトテ、小門ヨリ出タル事ナドアルヲ思フニ、初ハ宿星ノ方ヲ避ケ、小門或ハ墻垣ヲ毀チモシテ柩ヲ出シヽガ、後ニハ轉リテ、正門ヨリ出スヲ忌ム事ト成レルガ如シ、

〔言成卿記〕天保十四年五月十四日、今晩光慶院殿葬送、（酉刻）從寺門送葬也、（從里亭宿坊密葬）申半刻比、親昵人來集、地藏院修行誦經了、晡時家公著御素服、予吉服狩衣切袴、家公予親昵人々奴婢悉燒香了、良及出棺吉刻、先御棺前燈明移點蠟燭、（前火也、於從里亭葬送者移松明、而寺門迄密葬之間、小丸挑燈ニテ密々副棺前、到宿坊行粧之時點松明云々、）墓前香爐撤之、令持之、（於宿坊著素服者、以綱懸頸云々、）前机撤却、（燈明移點前火之後、消燈明、更打火點燈明云々、）棺勤揚舁之、於書院案棺於蓮臺、（檜也、屋形者密々遣宿坊云々、）以繩搦棺於轅云々、以雨皮裹之、（俗ノカツハ也、）先是家公御乘輿、（召具供、可有雜記、）出棺、予居門內棺邊前給之時、平伏奉見送、宿坊迄密行之間、俗供（下﨟）上棺邊前後左右ニ群行、於宿坊人々著衣裳、從宿坊到龕前堂、（阿彌陀堂云々、）此行粧、家公令供奉給云々、（御草鞋御竹杖等、令遣宿坊給云々、）予不向寺門、（依輕服也、）侍女等悉向寺門、見送見物云々、（出棺了、棺安置之所、以竹帚掃除、且棺安置之跡へ、小時置石云々、皆世俗說也、）戌半刻過、於宿坊行粧相整、向于龕前堂、家公令供奉給、亥刻過、侍女等歸宅引導式唯今墓所密行云々、亥半刻比、家公還御、萬端無滯事訖云々、先是親昵人々被歸了、（諸事可有雜記、爲家公令商量給、予見聞而已、殊凶事在所忌憚、旁粗記已、）

當家先々例、葬送雖歷代君、多分從宿坊行粧、中古如此、於祖父君者、格別明君、厚恩爲莫大、依之家公被存恩儀、自里亭被奉葬送、今度雖御母儀、元來妾腹、自里第葬式之儀、先代へ可有恐、旁從寺門

葬式云々、萬事粗被爲准據廣知院殿御例云々、

〔將軍德川家禮典附錄六〕安政五年八月十八日

一御棺(○德川家定)御左御刀御小性(二人落髮)御右御脇差御小性(二人落髮)御途中龕前堂之内、幷御廟迄替々勤之、

一御先立和泉守、御棺北詰橋御渡越、御幕張有之内(江)御入棺、右御幕張内ニ而、御晏懸候上(江)白綾御覆奉掛之、假御門御出棺、竹橋之方を御向に御棺奉居、此節假御門外ニ而、田安中納言殿、酒井雅樂頭拜伏、於御棺前誦經拜禮行事有之、畢而御出棺、

但下總守、本多越中守、稻垣長門守、御側衆、北詰橋御門外御假屋より御出棺御見送り相濟、御用部屋(江)罷出、

一御側衆北詰橋御門外ニ而、御見送り相濟歸參、御出棺相濟候段言上之、

一御出棺相濟候ニ付、爲伺御機嫌、田安殿刑部卿殿より使者被差出之、謁御側衆、御臺樣、本壽院樣御機嫌モ、御側衆ヲ以被伺之、御出棺以前、東叡山御先(江)相越、宿坊において衣冠著之、

一和泉守、御供安藤對馬守、酒井右京亮、御供之御側衆、(各淺黃無地長袴著之)御駕籠臺へ相廻り居、御出棺之節拜伏、夫より東叡山迄御先立、和泉守、御供安藤對馬守には御棺御脇、酒井右京亮、御側衆一人御棺御跡ニ致御供、懸り御側衆一人、御棺御脇ニ致御供、

一下總守、本多越中守、稻垣長門守、(白帷子麻上下)御天守臺下御門内(江)相廻り居、

一辰下刻、御休息間御駕籠臺より御出棺、(此節老中御先立無之)御先(江)御小納戸二人、次ニ御香爐二、御左右ニ落髮之御小納戸四人、替々北詰橋御門外、御晏御取建所御幕張内迄持之、御同所御門外ニ而、御香爐御供之御同朋(江)相渡、御途中持之、猶又東叡山龕前堂前邊ニ而、最前之面々持之、龕前堂ニ而、御先番之御小納戸二人御香爐請取、

〔故實拾要　八〕崩御
凡崩御アルノ時ハ、籠ノ僧トテ、洛東泉涌寺ヨリ僧來テ、御尊骸ノ傍ニ候ジテ、御入棺御葬送被レ執行一ノ間、御經ヲ讀誦スル事也、御入棺御葬送ノ事ハ、日時定メアル事也、此時凶事ノ傳奏、此事ヲ掌ル也、御入棺アッテ是ヲ御車ニ奉レ載、額白ノ牛二疋ニ懸テ泉涌寺ヘ奉レ之、此時御車ノ中ニ立二燈火一、件ノ籠僧、御車ノ内ニ立二燈花一、同車シテ御路次御經ヲ讀誦ス、又御車ノ前、北面ノ侍著二烏帽子狩衣一、松明ヲ秉テ二行ニ歩行ス、殿上人等御車ノ左右ニ列ス、大臣公卿御車ノ後ニ供奉也、裝束ハ衣冠卷纓也、此裝束ハ、鈍服トテ鈍相ノ服新調ノ物也、大刀ハ黑塗、平緒又常ノ平紐ニアラズ、黑骨ノ扇ヲ持、草鞋ヲ著、竹或桐ノ杖ヲ突、供奉アル事也、

〔鈴木叢書　十五〕神道葬祭略次第

行列次第

先松明（白丁二人左右二行、如常持之、）　次白杖（長四尺、白丁二人同上、）　次眞賢木（長八尺、左右之枝白紙四手如幣付、持人風折烏帽子白張上下藁沓、）　次松明（白丁二人如初、）　次祭主（着二風折烏帽子淨衣淺黄差貫笏淺沓一、從者雜色二人白丁笠傘持之、）　次松明（白丁二人如初、）　次香爐（以瓦造之、四寸角白木臺居、持之人風折烏帽子、白張上下藁沓、）　次比登岐（白丁舁之、人數不定、）　次袴脚二（白丁二人左右持之）　次從者（雜色四人、白布袋入傘、白丁二人青竹杖持之、）　次松明（白丁二人如初、）　次家主（着二風折烏帽子淨衣白差貫笏藁沓一、從者如二祭主一、）　次親族（着用服、可レ歴二其身柄一、）

〔行治神道葬祭拾式錄〕吉田家葬祭式

行列之式

先松明（白丁二人四人、或相應之人數、松明不レ取節者用二挑燈一、）　次加護弓矢（但紙四羽）　次大刀（入レ袋）　次幡（二流）　次榊四手（五色、或青白、或白、）　次供米　次太麻岐神（榊之被串）　次幣　次宣命　次神鈴　次四神矛（但旗書文、左青龍、右白虎、前朱雀、後玄武、如レ位圖レ樣、）

〔神道葬祭家禮〕出棺行列

炬二（津、然レドモ炬用ヒガタキハ、白張ノ圖行燈ヲ用ユベシ、）　榊枝（三方ニ載テ持レ之）　喪護（宣唱師ノ事、則戸者也、白キ衣、無紋ノ肩衣袴ヲ着ス、）　幡二（津、白絹布ヲ用、長サ四尺、）

左右ニ持之、火畫炬四津、白キ圖行燈ニテモ、前後左右ニ持之、右ニ大刀左ニ短刀持之、或ハ刀脇指ニテモ持ツベシ、白キ衣、無紋ノ肩衣袴ヲ著ス、家之老士近從之士左右ニ供奉、白キ衣、無紋ノ肩衣袴ヲ著ス、子孫親族、白キ衣、無紋ノ肩衣袴ヲ著ス、炬二津、白キ圖行燈ニテモ左右ニ持之、御膳、三方ニ飯汁煮物、干魚、切リサン積ニシテ、中盛ハ口物大根、瓜、茄子ノ類、何ニテモ何レモ土器ヲ用、御酒、瓶子二ツ、三方ニ載テ、御肴、干魚ニテモ、生魚ニテモ、三方ニ載テ、御果子、盛物四手ニ懸ズ右ニ弓、左ニ靱入矢ヲ持之、右ニ鎗、左ニ薙刀持之、炬二津、白キマル行燈ニテモ左右ニ持ス、御馬、衣白布前ノ葬器ヲ持、火畫ヲカツク者モ、白キ衣、無紋ノ肩衣袴、或ハ袴バカリヲモ著ス、但用意シガタキモノハ、家ノ有無ニシタガヒ、時ノ宜キヤウニスベシ、

故朋友幷奴僕

〔和漢習合葬祭記略〕祭文ヲ讀ミ、拜揖畢リテ出棺ス、刻限ハ酉刻ヨリ後ヲヨシトス、行列如左、

イ高張挑燈　高張挑燈
ロ銘旌
ハ墓表
ニ榊
ホ辛櫃
ヘ靈璽
ト高張挑燈　高張挑燈
チ柩
リ蓋
ヌ大刀
ル刀
ヲ鎗或長刀
ワ傘　挑燈　挑燈
カ葬主
侍持刀
中間二人香取ヨ鋪設持
家族親昵其餘會喪ノモノ群行

〔行治神道葬祭拾式錄〕濱松庄小池村明神社神主竹山日向秦茂睦葬祭行事

竹山太郎右衛門、十月十四日卒、

十五日葬所江行列、此時渡諸人江杖　先大旗一本　次矛二本　次的射挑燈一ツ　次供物　次花香　次旗四本　次鳴物　次はい　次棺　次衣笠　次杖　次傘木履　次矛二　次大旗　次親族美津奈持　次諸人

〔家世實紀　二十〕寬文十二年三月廿七日、土津様○保科正之御骨骸、見禰山へ御葬送、○中略御行列ハ、御先御歩行目付貳人、御燈籠二本、松明二燃、御道奉行貳人、同心六人、小頭二人、足輕八人、物頭黑河内太郎左衛門、御子柴七郎右衛門、組頭原田主馬、乘馬組付十人、御横目二人、御弓五張、御長柄四筋、御旗二流、小頭一人、御馬二疋、口取四人、鞋籠二ツ、御纓一流、長櫃二棹、才領一人、御

鐵炮二挺、御直鑓一本、御長刀一振、御側鑓一筋、御牀几、御早立御鐙櫃二ツ、御挾箱同樣、御裝箱一ツ、御傘、御臺笠、御沓、御歩行目付二人、御側圓城寺彥九郎、西鄉賴母、丹羽勘右衞門、御歩行小頭一人、御歩行四人、御刀筒持之、小番四人、御供番四人、燈籠四本、松明二燃、中間頭二人、御小道具頭一人、御柩舁人御前十人、御跡十人、御刀御小姓組神尾八之允、御脇指佐脇彌之助、御杖堀勘兵衞持之、御草履取二人、中間頭一人、六尺十人、總奉行友松勘十郞、同副奉行戶枝彥五郞、御用懸リ役人向井新兵衞、小番二人、燈籠二本、松明二燃、原田兵左衞門、村田與大夫、御供番四人、殿樣喪服御著用、御歩行ニ而御見送、井澤茂右衞門、小原猪左衞門、御歩行目付二人、御小姓拾五人、御伽衆福田良庵、內藤良齋、横田三友、松野勾當、大森固庵、齋院春意、田中三let、御用部屋役人大東兵大夫、藤澤傳八郞、村越百助、西倉權九郞、荒木藤七郞、原田仙太郞、御茶辨當御茶水、御茶道頭橋爪久悅、坊主三人、燈籠二本、松明二燃、長櫃二棹、舁人四人、御臺所頭二人、御料理人十五人、手明十人、押鑓二本、組頭生駒五兵衞、組付十人、物頭望月新兵衞、杉浦淺右衞門、足輕八人、小頭二人、挑灯二ツ、御歩行目付二人、如此順々ニ相立、御壙迄之道筋、坂之半ニ御出被遊候比、既ニ日暮に相成候、(○下略)

〔喪祭私說〕送葬

及期柩行、(役者兩行、執提燈前導、燈四或六、)主人以下歩從、(重服在前、輕服在後、服各爲叙、僕隸在末、婦人從與否、從其土俗可也、)尊長次之、無服之親又次之、賓客又次之、(皆步從、賓客或先往於墓所、或出郭拜辭而歸、)塗中遇哀則泣、(若墓遠則每舍朝夕設奠於柩前、夜則主人兄弟皆宿柩傍、親戚共守衞之、)

〔鵞峯文集(七十四哀悼)〕泣血餘滴

明曆二年丙申三月二日辛巳申酉之交、余(○林春齋)母荒川氏(諱龜)終於寢、五日甲申、及晚天未晴、泥土不乾、淸隆歸告曰、灰隔既成、於是將發引、門生等十餘人欲從葬、不能辭之、使先到別墅、及黃昏、余白家君(○道春)曰、靈柩可發、家君來柩前告別、垂淚入寢、余使門生殊睦者二三輩留侍家君、既而發引、

張燈一人　長刀一人(擬方相)　銘旌中村祐晴擎之(雜色肩衣袴)　魂帛箱岸田淸隆持之(前同)　神主櫝荒

川長好持之同前　張燈二人　靈柩早川道雲素服護之、步卒三人副之、匹夫八人舁之、以布覆之、掛綱索、有棒四本、

凳子二人　張燈一人　春齋、小臣二人、步卒三人履奚一人、徒步隨衣素服芒鞋、　春德、小臣二人、

步卒二人、履奚一人、徒步隨衣素服芒鞋、　春信、小臣二人、步卒一人、履奚一人、隨色肩衣素服、　春

常、同前小臣二人、履奚一人、春信春常、徒步請隨行、然以幼年故、因家君命、先到別墅、婦人四五人、徒步

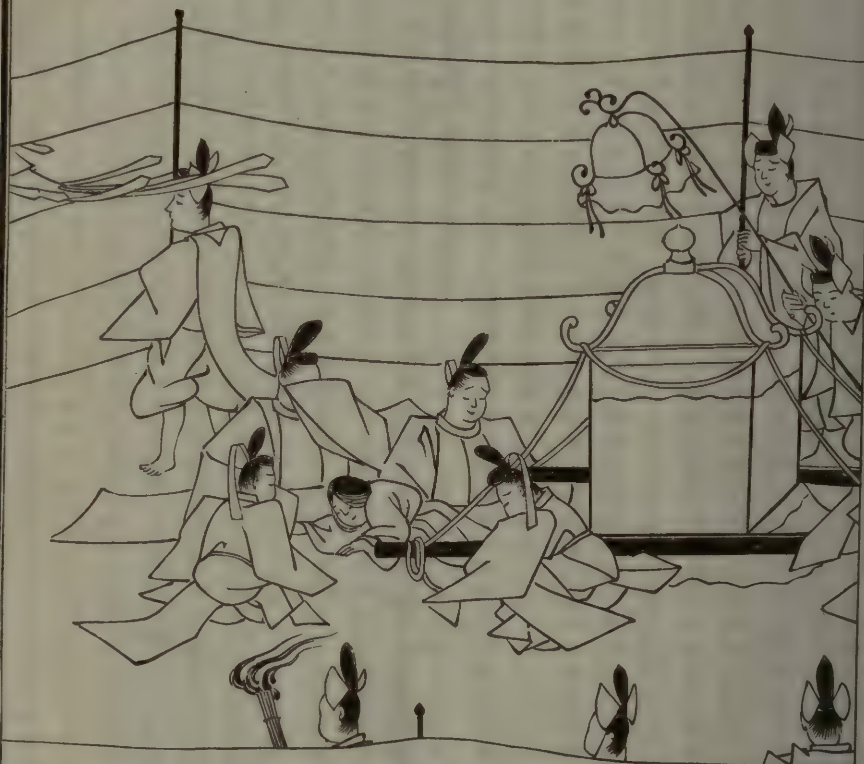
古禮有大輿、竹椅、功布、魌頭、靈翣、香案、明器、食案、靈車、功布翣、婦人布幃以從行、今略之、古禮用父喪竹杖、母喪桐杖云々、然問喪云、父在不敢杖、故今從之、

〔權記〕寛弘八年七月八日己卯、今日御葬送一條○中略一也、○中略出御於一條路、自大宮路北折、自世尊寺北路西折、自達智門路末、斜指船岡南西脚、更北折、添紙屋北上、於船山作所、○中略其行障十六基、所乘持之、燒香者四人、所乘持高坏、又所乘四人、懸香於頸相副、藏人所內藏允藤助清、大學允三善孝行、左兵衛尉宮道式光、高橋清通等、各持之、其蜜置於高坏、步障八條、差下部小舍人等持之、藏人左兵衛尉橘義通、文章生藤章信、雜式左兵衛尉藤賴職、陸子同鍵永、黄幡、主典代內藏屬宗岳時重持之、此幡延長在小屋形內、天曆六年藏人所人持之、康保四年出納伴康雄持云々、

眞書行障持者、彈正忠大中臣宣輔、元候藏人所者、時重、知貞、左馬允紀周留、縫色、藤、以康、縫色、平、義忠、少內記、藤、明範、右兵衛尉、平、國成、文章得業生、藤、通道、文章生、橘、經遠、文章生、藤、實行、文章生、藤、賴義、平、□□

〔類聚雜例〕長元九年五月十九日丙申、及晚景、左衛門府生坂上時通、令人夫壞院上東門院第○後一條院藏所東墻一本、爲御輿路、○中略次御輿長等舁下御輿、駕輿丁等二十人傳衛之、本數四十人也、相替可供奉之、又此間行障等可持立、而有議不入院內於墻外、可備禮也、御輿長等近副御輿、持瓮者四人、分立御輿四角、藏人所乘四人、各以瓮居高坏持之、皆著當色、燒香者四人相副之、各以名香合薰籠、納生絹袋、懸頸行路間燒之、皆著當色、藏人二人、雜色二人役之、於墻外行列、先黄幡、黄絹幡、書眞言、付白木竿、出納雜時持之、次炬火者十二人、爲先下輿、左右行列、皆著當色、實進趣長等在最後、次御前僧廿人、爲先下輿、左右行列、皆著生絹當色、衣袈裟等也、次步障、行障左右各四條、條別長各六丈五幅、以帛絹縫之、小舍人幷後院藏人召使等卅人、著衣冠當色等、左右相分持之、儀則五人、各以白木竿爲柄、前後引塞、次火輿、輿內立小臺、居油坏、於其上明火、駕丁二人、布衣烏帽著當色、衛之、步障內立、行障外、次行障、以帛絹縫之、長各五尺、餘五幅、藏人所雜色以下十六人、著當色、持之、御輿左右各五人、前後各三人、次御輿、在行障內、次香輿、□之中、中央居香爐、引火舍、其四角立罌花瓶等、供花持人如火輿、在行障外步障內、次御膳辛櫃二荷、各加生絹覆綱等、御厨子所仕丁等、布衣烏帽子著當色荷之、預乘等著衣冠當色等副之、在步障內、次可有御輿物辛櫃、而不行列、如


用明天皇御葬送圖
太子傳繪卷所載



何、次關白、相府、內大臣、藤大納言、權大納言、新大納言、左右宰相中將、右大辨、右兵衛督、三位中將等、各著衣冠、(卷纓)藁履等、持白木杖、行列步障內、(左相府內府扶持右閣人在此內、自餘步障外、)諸司官人已下史生已上各衣冠、(不給當色、)乘燭相分行列步障外、又兩相府御隨身等、同乘燭追從步障外、又民部卿、右衛門督、權中納言、(通)權中納言、(定)左兵衛督、備中權守等、行步步障外、此外諸大夫等不可勝計、(皆著衣冠藁履等、卷纓、持白杖、)自上東門路東行、自堤上南行、自神解小路末斜渡河原、自神樂岡南路東行、自圓成寺西路北行、(此間諸寺夾路立幡鳥居、供香花燈明念佛、)總百五十餘寺、漸令向山作所給之間、迎火者十五人、乘燭左右相分進向、(各束帶、不給當色、但素服袍著之、)炬火皆滅火退留、(資道經長朝臣等不留、)迎火等相替左右行列、到一門外各滅火退出、

〔中右記〕大治四年七月十五日辛卯、今夕太上法王(○白河)御葬送也、○中略戌刻御出、前火顯重朝臣、忠長朝臣前行、其路從姉小路西洞院大炊門大宮一條、從西大宮南行、(中御門近衛)從道祖神大路北行、更從一條東行一町許、至御墓所香隆寺乾野、堀川院御墓所近邊云々、御墓所、衣笠岳之東下、(諸寺參仕○中略)室町西北門之北腋築垣破、自北對西妻出、

裏書云、下人談云、御輿長□殿上人不伺、御輿或先或後、頗以不便也、又兵衛佐公行、依勤前火役前行參入之間、其人馬皆引入荒垣內、狼藉無極、雜人喧嘩也、

〔龜山院御葬禮記〕嘉元三年九月十七日辛酉、今夜龜山院御葬禮也、○中略路次行列、

先松明役下北面六人、(各立左方之人々、左手持松明、立右方之人人、右手持松明、是凶事之例也、下﨟爲先、)次御車、燒香役下北面四人、各持火舍、候御車左右、(各二人)轅輪等邊、　次召次所二人、各二行相並取松明、(或不取松明不圖也、今度依建久文永例取松明、)次上皇、(御烏帽子直衣、被下御括、著御御沓、○後宇多)權大納言西園寺中納言以下候御供、各在御傍也、御隨身三人、(下括、如元帶劍、)取松明在御前、　次天台座主覺雲法親王、(椎鈍青鈍堅織物指貫上括、著藁沓、房官二人取松明先行、又僧綱一兩、鈍色候御供、)　次園城寺長吏順助法親王、(行粧同前、但令著表袴給、猶被用藁沓也、)　次慈道法親王、(同前、是又被用表袴、被仰云、當流慈鎮和尚以一不用指貫、仍所著表袴云々、)此外良助法親王、(前座主、號常蓮院、香染表袴、如常、著藁沓、被參會山作所、依所勞不能供奉云々、被所被示合也、)　次予、先驅四人、(惟氏、春衡、行俊、師親、各布上括、著藁沓、取松明、)雜色

長秦清勝取松明在傍、侍二人又在後、　次西園寺大納言、次萬里小路大納言、次民部卿、次源中納言、次三條前中納言、次二條前宰相、次五辻二位、次高二位、次高倉前宰相、次中御門宰相、次高倉三位、(永定)前左兵衛督、(親氏)以上雜色二人取松明、(侍少々在後)　次殿上人(雜色一人取松明)　路人數也

〔和長卿記〕明應九年十一月十一日壬戌、今夜御葬禮也、(○後土御門、中略、)行列様、先諸大夫二人取松明前行、次召次二人(左右)次廳官二人(紀俗富、中原盛顯、)左右前行、(不秉松明)次御車副四人、次御車、次諸大夫二人、(持香爐、左右相從)　次廳相從、(此等人々供奉者、以院號之故也、近代主御之時、早定院號者、凡以澗中之分、爲行葬送之禮也、爲天子之分時、大葬雖被行之故也、)　次圓滿院宮御供奉、(第三宮也、此事先例不詳、由有御沙汰、殊大臣之口被相計之間、尤無故實也、但花山前左府依外戚、不及所存歟云々、凡又今度供奉、以澗中之例爲如此歟、天子之時、其例不審云々、抑應安度、仁和寺宮幷加持井宮以下五人參會也、雖澗中猶如此、)　次公卿花山院前左大臣、(衣冠卷纓、被相從法中之後、諸人有不審之氣、)侍從大納言、(直衣上括卷纓)民部卿(衣冠卷纓)前權大納言、(同上)按察、(同上)中山中納言、(直衣卷纓、今日先申直衣了、又爲輕服、同申除服宣下、亡者在室之時、不可及除服之沙汰云々、)勸修寺中納言、(直衣卷纓)山科中納言、(直衣卷纓)甘露寺中納言(同上)三條中納言、(衣冠卷纓)源宰相中將、(直衣卷纓)藤宰相、(衣冠卷纓)飛鳥井宰相、(同上、以上皆上括也、)中御門宰相、(衣冠卷纓著夏袍、尤不審、)雲客家幸朝臣(衣冠卷纓)濟繼朝臣(衣冠卷纓)藤原資直、(束帶、縵纓如常、其外不作衞府、○中略)路次正親町西行、室町南行、近衞東行、東洞院南行、至七條河原、(懸浮橋)東行、法性寺南行又東行、鍋良小路前東行云々、女中皆參會、(依夜陰也、正長度、御車與公卿之間、先女房車與相交歟、今度無其儀、)女中衆、二位尼局、大典侍局、同權大典侍局、三位尼局、(安禪寺殿御母儀)勾當內侍局、中內侍局、播磨局等也、新內侍局、雖爲舊主之人、依無人候小御所、無念之由也、雖然內侍一圓可打明御所之儀、不可然之由侍從大納言依被申也、無餘儀哉、

〔大江俊光記〕元祿九年十一月廿五日、今晚本院(○明正)御所、泉涌寺へ御葬送、酉半刻程ニ出車、(牛二疋)御先へ雜色、松明下北面、(裝束)次御車、次公家衆供奉狩衣、(諸司)小笠原佐渡守、總後之由傳承、(○中略)御路筋ハ、御門北へ御上リ、石藥師通中筋江下、寺町へ御出、五條橋御通、女中ナガヘ三町、アジロゴシ三町有之由、はりま御局御供之由、

〔萬葉集(二挽歌)〕靈龜元年歲次乙卯秋九月志貴親王薨時作歌

〔厩戸皇子及妃御葬送圖 太子傳繪卷所載〕







梓弓手取持而、大夫之、得物矢手插、立向、高圓山爾、春野燒野火登見左右、燎火乎、何如問者、玉桙之道來人乃、泣淚、霈霖爾落者、白妙之、衣埿漬而、立留、吾爾語久、何鴨、本名言、聞者、泣耳師所哭、語者、心曾痛、天皇之、神之御子之、御駕之手火之、光曾、幾許照而有、

〔萬葉集古義二下〕手火之光曾は、御葬送の御供に、火をともしつれてつかへまつるを云るなり、手に取持義にて、手火と云り、神代紀に、伊弉冊尊曰、吾夫君尊何來之晩也、吾已湌泉之竈也、雖然吾當寢息、請勿視之、伊弉諾尊不聽、陰取湯津爪櫛、牽折其雄柱、以爲秉炬見之者、則膿沸虫流云々、秉炬此云多比、これ手火といふ事の見えたるはじめなり、字鏡に、炬火太比と見ゆ、さて葬送に火をともすことは、仲哀天皇紀に、殯于豐浦宮、爲無火殯斂、無火殯斂、此謂褒那之阿餓利、これ尋常の殯葬には火をともす故、ことにかく云るなり、門火といふものも此たぐひなるべし、和名抄に、周禮云、褒設門燎、俗云門火、こゝだてりたるは、そこばく照てあるをいふなり、

〔榮花物語二十五みねの月〕その日、〇萬壽二年七月十一日、小一條院女御葬送、に成ぬれば、院、〇小一條院、の御車にさうぞくせさせ給、〇中略、御さきに火ともしばかりにて、御車のしりには院おはしませば、大藏卿、入道侍從など、源しむ阿闍梨など、大原の入道君など、よろづそむかせ給にしかど、またいかでかはとて、つかうまつらせ給、御さきに僧ばかりさきだてゝ、あみだのひじりの南無阿彌陀佛とくもくざう〇くもくさう、蠶觀本作二字、へはるかにこゑうちあげたれば、さばかりかなしき事のもよほし也、〇中略、よろづいみじくしのびたまへれば、人ごゑもせず、みそかにおはしすぐるほど、一條の程にてぞ、よろづれいのさほうの事どもをしおかせ給へり、

〔榮花物語二十六楚王の夢〕日のくるゝまゝに、法興院の内の、のゝしりさわぎたり、〇後朱雀妃藤原嬉子葬送、中略、御車につきたる人々、御さきに火ともしたる人など、すべて二三十人の程の人のさうぞくは、みなおなじさまにしたり、〇中略、月もくもりなくめでたし、なにごともいみじうしと、のへさせ給へり、世

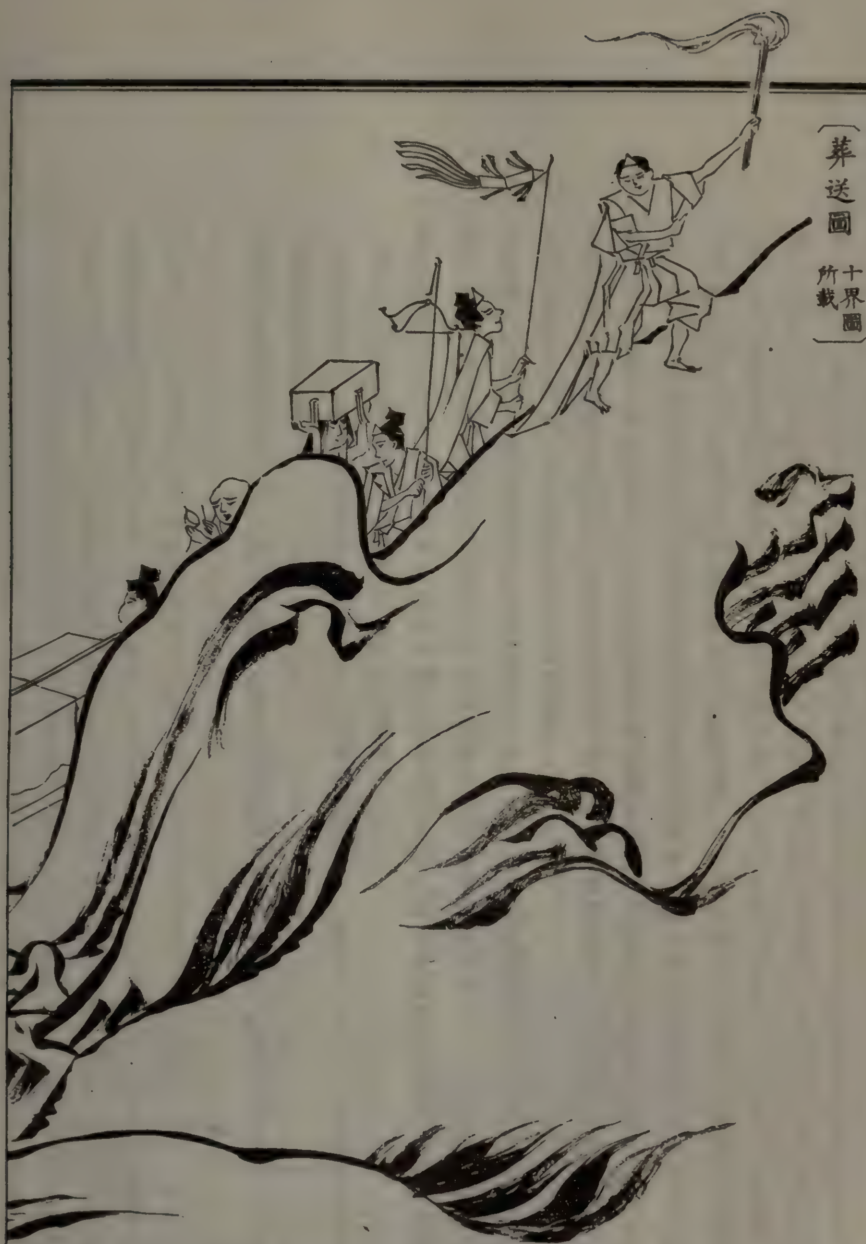
中の人は、一條のおほぢより、かく道はらひおはしますほどなども、世中の人などいみじき見物に思ひたり、〇中略おはしますほどの有さま、いへばおろかにいかめし、西は大宮よりさしすぎ、東は京極をきはにつゞきたちたるを、又おはしましつる法興院までぞ名殘はつゞきたる程をおしはかるべし、又世中を昔見たる女おきな、まだかゝるまうなる事みずなどぞなく〳〵申思へる、

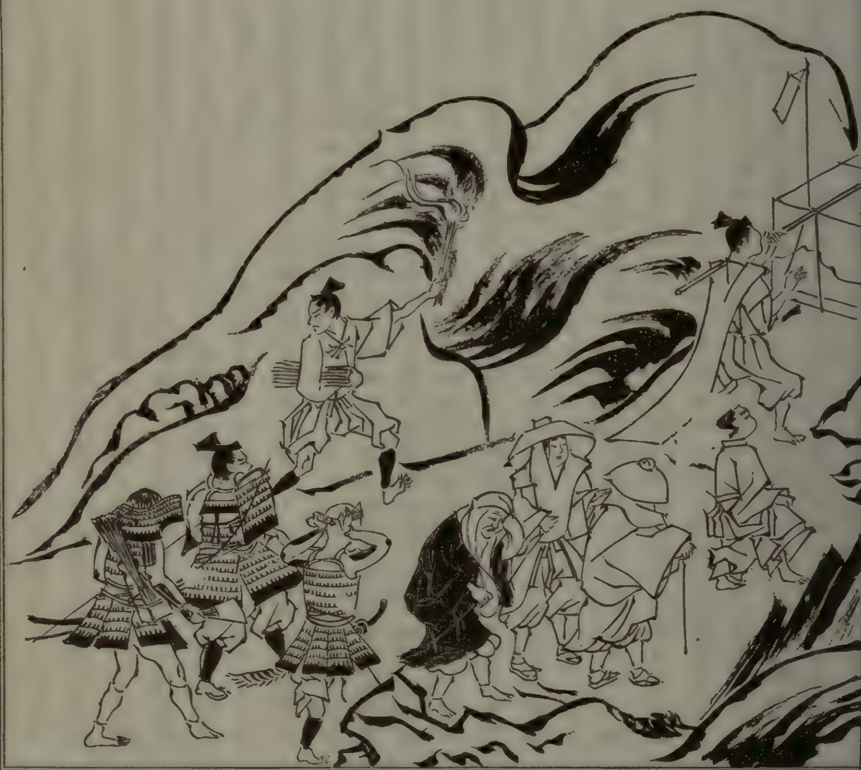
〔大江俊光記〕正德二年五月十二日、今夜、新上西門院〇靈元后房子御葬送、泉涌寺へ御執行、般舟院ニて御法事在、御送葬行列、

下北面十人　上北面代四人　廰官二人　御車　公卿十人　殿上人十二人　傳奏油小路大納言　奉行烏丸光榮　般舟院泉涌寺武家番在

〔明月記〕正治二年七月廿日、今夜七條殿〇藤原兼雅御葬送云々、〇中略見物青侍等語云、亥時許令出行、八葉車、簾懸樒等如例、下簾亦例下簾云々、宗雅顯季朝臣步行、先陣令相具侍七八人武士等、又尊長法眼、同相具武者數十騎、但乘輿云々、御車後、國行、清光、業清、□□等之輩、諸大夫六七人不儲見侍等在御車近邊云々、自餘之人參大臣殿御共之由風聞、

〔萬松院殿穴太記〕御葬禮〇足利義晴方の奉行は、松田九郎左衛門尉賴隆催したり、門役は松田對馬守盛秀也、先御先へ、まろ鴾毛の太く逞きに黑鞍置て、純色の鞦かけ、鐙のうちに至るまで黑塗なり、鐙はかけやう有と見えたり、先例にて、伊勢同名の者、御馬を引べかりしに、折節煩ふ事共ありて、御厩舍人に牽せて、伊勢次郎左衛門尉貞清一人、素服にて御馬に添ひて、火屋を三度廻りて後、此御馬をば秉炬の人の取が例にて、妙安和尚の中間に渡せば、則乘てぞ出にける、此馬は若狹國守護武田伊豆守信豐進上して、其後波伯部次郎左衛門尉貞盛、丹波入國の時被下之、歸路之後、又御厩に被立て、御秘藏比類なくして、波伯部鴾毛とぞ申ける、次に炬松は力者持たり、鉢は行者打之、


葬送圖 十界圖所載



次に赤地の金襴幡四流(書二文字)持者四人持之、鈸は出世の人の附べかりしに、出世の人なくして、平僧四人勤之、鼓も長老なければ、西堂四人是を打、燭臺、香爐、花瓶、湯瓶、茶湯、掛眞、雪柳四本、何も平僧十一人して次第に持之、先例は出世の人の勤仕なれ共、當時人なき故にや、平僧の沙汰になり、御位牌は御家督の爲持給ひ、諸大名供奉すべかりけるに、亂國のうちなれば、御猶子慈照寺の院主瑞耀尊丈ぞ爲持給ひける、ぜんの綱には諸侯の衆とりつき侍り、御龕は力者四人舁之、次に衆僧は、阿彌陀の大呪を唱へて歩みつれたり、

〔あしたの雲〕葬送(〇多々良政弘)の儀式は、遺命に任せて、何事も事そがればべるとなり、しかれども事のさま、ことの葉及べきにあらず、常に人のすゝめる、大(〇大丞内義)下念誦などいふ事はなし、勝雲寺英巖和尚參して、しかしかの事は在世に勤られ侍しかば、たゞ燒香諷經まで也、保壽寺雙參和尚、大慈院西湖禪老などを始として、諸寺諸山の僧達、所もなく立こみつゝ、鈸鼓のひゞき雲にこたへ、貴賤かなしびのよそほひ霧にむせび、數千人の人々、藤の衣にやつれたる中に、家を繼給へる別駕のあるじ、はたちばかりにて、すがた淸げにものものしく、何事かは彼朝臣におとり給ふべきとぞ見えける、色ふかき袖に、位牌などさゝげもちてねりわたり給ふにぞ、みる人淚せきあへざりける、

〔幽齋尊翁御葬禮記〕巳の刻も移り、午の刻にもなれば一番に烏帽子白張をきたる者六人にて秉炬をかたげ來る、其樣わらをつかね、丸竹のすにて卷、白き布にて包み、所々を同じき布にていわへ、長サ一丈許也、次に大なる香爐をわくに入て、ゆくゆく沈香をわりくべたれば、異香四方にみてり、其次に靈公平生秘藏ありし月毛の駒に、ひたひに銀のすみとり紙をあて、白き手綱をゑりかけ、木地の鞍をかけ、力革を腹帶にくゝりて、無紋の鞍鐙をかけ、白き馬絹をもて總體をつゝみ、沓をうち、はづなをつけて、舍人四人にて引て、烏帽子に白きすあう四幅袴、短刀をさし、股立をと

り、草鞋をしめはく、其次に弓鑓長刀挾箱杖沓傘袋大刀刀御骨桶、いづれも白き絹にて包、烏帽子白張のもの持之、御位牌は玄蕃頭殿御息、當年八年なりけるが、肩にのせ申、名代の侍持之、御龕は四方作り、五色をもて色どり、はくにてみがき、金のかなものを遣ひ、所々を金襴にて包み、玉のやうらくをさげ、風鈴を掛たれば、日にかゞやき風にくわして粲然たるひゞき耳にみてり、か口幡を指、燈籠をとぼし、天蓋をさしかけ、花をちらし、役者の僧二行につらなり、佛具をたづさへ、大鼓小鼓をならし、どらにやう鉢をつき、りんを打、經をよむ、其折しも一村雨のふり過て、程なく空はれければ、原のけしき都に、風ひやゝかにして、おのづから極樂の相あらはなり、せんの綱に隨所の大小名、すべて五十餘人、綱先は松井佐渡守、綱本は大塚源左衛門入道、かんの後は長岡中務大輔、侍廿餘人を達らる、御女中の輿七十二丁、先立の女房八十七人、いづれも白き絹かづき、其次に尼公四人、墨染の衣を著し、數珠つまぐり、杖にすがる、凡行列の左右をかたむる侍、五六百もやあらん、忠興公は冠を召、にぶ色のそくたい、知の御大刀をはき給ひ、青色の中啓を持、草鞋をふんで、しほ〳〵してあゆみ給ふ、其粧人に越給ふ、威光に感じてみな信をなせり、御供の禪門三十餘人、其烏帽子素襖をきたる侍雜兵共に千もや有べき、

〔大猷院殿御實紀〕八寛永三年十月十八日、大御臺所○徳川秀忠妻淺井氏御葬禮○中略行列は、一番大松明、左右に大香爐、奉行の僧二人、持者二人、侍二人づゝ、そふ、次に春湖存榮、次に左大番西山太郎兵衛昌綱渡邊孫三郎富次、右に大番多賀角左衛門常次、黒澤木工助定幸、次に左右灑水の僧一人づゝ、花籠の僧五人づゝ、次に左日天、右に月天、左開敷二本、右未舗二本、次に紗籠二本づゝ、次に左右幡五流づゝ、鈸一雙づゝ、もつ僧二人、鉦の僧一人づゝ、鐃の僧一人づゝ、二番、大香爐一雙、僧一人づゝ、奉行の僧一人づゝ、侍二人づゝ、左隨應寺、右心法寺、左八木忠三郎豊政、本間忠左衛門忠直、右三田左兵衛守長、大井新右衛門政景、次に灑水僧一人づゝ、次に花籠僧五人づゝ、次に左開敷一本、右未敷

一本、次に左右幡五流づゝ、鈸一雙づゝ、鉦一づゝ、鼓一づゝ、三番、左右灑水僧一人づゝ、奉行僧一人づゝ、侍二人づゝ、玩然說道、松平金兵衛某、板橋輿五右衛門政重、遠山小右衛門景次、辻忠兵衛久昌、花籠僧五人づゝ、左開敷一本、右未敷一本、紗籠二本づゝ、幡五流づゝ、鈸一雙づゝ、鉦一づゝ、鼓一づつ、鐃一づゝ、四番、左右大香爐、奉行僧一人づゝ、侍二人づゝ、葉說知道、長鹽甚太郎某、宇都野作右衛門正信、竹內源右衛門吉勝、小野源十郎高盛、次に左右灑水僧一人づゝ、花籠僧五人づゝ、開敷一本、未敷一本、紗籠二本づゝ、幡五流づゝ、鈸一雙づゝ、鉦一づゝ、鼓一づゝ、鐃一宛、五番、結大華長老五十人、奉行僧一人づゝ、侍二人づゝ、門說貞殘、市岡佐大夫正次、筒井甚十郎某、朝比奈傳次郎員正、石野六左衛門廣吉、六番に、大香爐一づゝ、奉行僧一人づゝ、侍二人づゝ、呑札九億、覓新太郎正成、横地善太郎某、富士又市信久、加藤淸三郎正重、次に左右灑水僧一人づゝ、開敷一本、未敷一本、紗籠二本づつ、幡五流づゝ、鈸一雙づゝ、鉦一づゝ、鼓一づゝ、鐃一づゝ、七番、奉行僧左右一人づゝ、侍二人づゝ、長葉雲牛、本多右衛門某、靑木太兵衛吉永、芝山孫作正知、荒川又次郎吉元、左右大香爐、僧一人づゝ、灑水僧一人づゝ、花籠五づゝ、開舖一本、未舖一本、紗籠二本づゝ、幡五流づゝ、鈸一雙づゝ、鉦一づゝ、鐃一づゝ、八番、大香爐、左右一づゝ、奉行僧一人づゝ、侍二人づゝ、天胡學須、秋山平十郎某、佐橋兵次郎吉政、山田市兵衛某、中山茂左衛門忠勝、左右灑水僧一人づゝ、花籠僧五人づゝ、開敷一本、未敷一本、紗籠二本づゝ、幡五流づゝ、鈸一雙づゝ、鉦一づゝ、鼓一づゝ、鐃一づゝ、九番、御調度奉行僧、左右一人づゝ、侍二人づゝ、祖白岩徹、加藤助三郎正光、覓助右衛門政次、松平次右衛門政成、山岡傳右衛門景信、十番、奉行僧左右一人づゝ、侍二人づゝ、林正法吟、長谷川九兵衛忠勝、板橋勝三郎政郡、神谷作左衛門正船、富永彥四郎直哉、大香爐、左右一人づゝ、灑水僧一人づゝ、花籠僧五人づゝ、開敷一本、未敷一本、紗籠二本づゝ、幡五流づゝ、鈸一雙づゝ、鉦一づゝ、鐃一づゝ、十一番、能化香衣僧二行、十二番、奉行僧一人づゝ、侍二人づゝ、大香爐、左右一人づゝ、灑水僧一人づゝ、花籠僧五人づゝ、開敷一本、未敷

一本、紗籠二本づゝ、幡五流づゝ、鉦一雙づゝ、鉦一づゝ、鼓一づゝ、鐃一づゝ、十三番は、導師の大傘、挾箱二つ、曲錄、乘替輿、本尊天蓋、僧三人、三衣僧一人、左竹篦僧一人、右團扇僧一人、柱杖僧一人、拂子僧一人、小松明僧一人、奉行僧左右一人づゝ、侍二人づゝ、血脈僧一人、沓行者一人、露拂左右持幢童一人づゝ、執綱左右一人、導師の執蓋侍二十人、素襖袴を著す、後に執綱一人づゝ、十四番、左右奉行僧一人づゝ、侍二人づゝ、左右大香爐僧一人づゝ、灑水僧一人づゝ、開敷一本、末敷一本、紗籠二本づゝ、幡五流づゝ、鈸一雙づゝ、鉦一づゝ、鼓一づゝ、鐃一づゝ、十五番、結大華長老五十人、左右大香爐僧一人づゝ、花籠僧十二人づゝ、次に靈牌、次に御膳、次に左右大香爐僧一人づゝ、次に御龕、左右執綱、次に類家、次に天蓋、次に執蓋、白張十人、次に執綱、白張四人、次に僧一人、次に供奉白輿なり、御龕の前には伶工數十人、皆鳥兜を著し、樂を奏し、鐵砲百挺、弓八十挺、長柄百本、みなその隊長、所屬をひきつれ、歩行士百人從ひ、御跡より宮仕の女房輿六十挺、おの〳〵簾中より香をたき薰じ滿たり、

〔大江俊矩先考卒去喪中雜々日記〕寛政四年十二月廿五日、戌刻前御入棺、○大江俊冬、中略、

一先白張箱提燈二張、（太助、治助、）次青侍二人（佐内、佐介、）並行、次御棺（白張四人舁之）左右青侍二人（木下帶刀、同數馬、）副行、次紋付箱提燈二張、（伊兵衞、定七、）予、（無紋小袖、但張布黑染上下、携二竹杖一、著二藁沓一、）若黨一人、（若松、袴羽織、）下部一人、（吉助、）次直丸、（紋付箱提燈二張、青侍二人、下部一人、）次久保新四郎、（紋付箱提燈一張、若黨一人、草履取一人、）一鎗、一筯、笠籠、（雇者）

山口相模守、本間按察使等、群行見送、

〔玉峯院凶事之記〕寛政十二年八月十五日、京極宮年寄石見者、○中略、終養生不叶、今日申刻死去也、十六日、酉刻於二寺門一葬送也、寺は二條通、河原町東へ入北側、善導寺寺中淸光院宿坊也、列行如左、

松明（看板）松明（看板）　長刀（麻上下）　箱提燈（白張、看板）箱提燈（同、看板）　香爐（麻上下）　輿　侍（麻上下）輿舁者四人（羽織）侍（麻上下）　草履取（看板）　箱提燈（紋付、看板）　北小路大學

助名代近藤帶刀（麻上下）　若黨（羽織袴）　草履取（看板）　箱提燈（紋付、看板）　掛下三大夫（近藤芳之丞）　名代田中左内　若黨（羽織袴）　草

警固

履取看板

〔大江俊矩先妣御事雜誌〕文化二年四月十六日、酉半刻過御出棺也、○中略

一先紋付箱提燈二張、雇者、次青侍二人、伊介、麻上下、岩吉、同、次白張箱提燈二張、雇者、次御棺、白丁四人舁之、左右侍二人副行、帶刀、麻上下、猪吉、同、次紋付箱提燈二張、理介、清介、予無紋袷、白羽二重、黑染布上下、携桐杖、若黨、沓、箱提燈一張、若黨一人、次山口縫殿、本間秀丸並行、箱提燈二張、若黨一人、次久保貞四郎、箱提燈二張、若黨一人、道具挾箱、次清俊院名代本田虎次郎、箱提燈一張、次笠籠持一人、雇者、

〔拙齋喪事記〕行列

名旌　香爐　棺　中間檜挾箱　木牌　引馬　沓籠　合羽籠　喪主青山量太郎、中間檜挾箱　佐藤量平　佐々木鐵三郎　青山量四郎　親類門人以下總送リ人　跡押服部次郎四郎騎馬　中間檜挾箱　以上

〔後光嚴院崩御記〕應安七年二月二日、東山泉涌寺ヘ御葬禮、○中略路ノ程ハ侍所警固ヲ申、十騎ノセイ也、

〔應仁記三〕後花苑院崩御之事

正月○文明元年三日、於悲田寺御ハテノ御葬、○中略右京大夫勝元ハ當管領赤松次郎正則當職ナリ、諸家ノ辻堅、取分浦上美作守則宗所司代ナレバ、嚴重ノ御警固ヲ申ケリ、

〔宣順卿記〕承應三年十月十五日、今夜御葬禮也、○中略、後光明、今度泉涌寺葬場以下奉行、山口但馬守、自御葬送御法事中之警固、松平伊賀守、同出雲守、本多內記、松平市正也、

〔幸充日次記〕享保十二年八月六日己丑、靈元院太上天皇御葬送、○中略

一御葬送之節、御先ニ町奉行本多筑後守、向井伊賀守、幷院御所附武家二人、中井主水大工頭、等參、押ヘ所司代牧野河內守、各騎

一傳聞後水尾院崩御御葬送之例云々○中略

一御道筋御用掛本多筑後守、泉涌寺警固松平紀伊守、人數三百人、總火消稻葉佐渡守、○中略兩寺見廻中井主水、御道奉行小堀仁右衛門、兩寺目付北條新藏、大島久左衛門、阿部甚三郎云々、

〔幸充日次記〕寛延三年四月廿三日乙未、仙洞御所○櫻町崩御、　五月十七日戊午、中町寺町ヨリ東ヘ四筋竹屋町上ル邊自病家依急病招予、黃昏參步、寺町家並灯小行燈、如盆中、先是午許、築地內遍候處、禁中御門者閉ニ南方、猿樂門之內、板ニ而構、界外有假番所、濟輩出入門之加例、堂上以下樂人下部迄也、侍以上者、門ニ輛轅之輩不可參入之札立之、且內侍所之御買物者、賀茂ヨリ調進、但可爲買得、其外內侍所附之衆者、桂川以外之野菜之害之所雖叶、東川以東、西者堀河以西ニ而調之、且淀津モ、近所者三日不鬼網ト云、魚肆モ三日不賣事之由傳聞、備前邊者、却而町々立戸愼由、九州邊者、極而遠國故停止モ日數少事也、御道筋蒔砂、手桶新調、杓添出置、白張挑灯家々燈之、但其道筋以下明十八日寺町三條迄一見歸宅、笠源云、大坂邊者、御停止十四日云々、鷺ケ峯木屋云、自身番如洛中云々、近在モ立番所云、

〔榮花物語〕二十六楚王の夢萬壽二年八月三日御產○後朱雀妃藤原嬉子ありて、五日うせさせ給て、六日夕に法興院にわたらせ給なりけり、○中略かくて十五日になりぬれば、○中略其また曉に、けびいしどもめして、京極よりのぼらせ給て、一條より西ざまにおはしますべく、道つくりはらはすべきよしおほせごとの給はせて、いはかげには、よろづはこびつかうまつるべきよしのおほせ事のたまはすとても、御なみだをのごひあへさせ給はず、

〔鹿苑院殿薨葬記〕一薨逝等事

應永十五年戊子五月六日酉刻薨

一同十日御茶毘等之事○中略

赤松爲侍所奉警固等持院、

〔新撰長祿寛正記〕同十一日○寛正四年八月、中略、等持院ニテ七佛事ノ御茶毘○足利義政也、中略京極大膳大夫

淸〇持當職ニテ、大勢ヲ引率シテ寺門ヲ守護セラル、

〔總見院殿追善記〕十五日〇天正十年九月御葬禮の作法、諸人目を驚すところなり、〇中略羽柴小一郎長秀、警固の大將として、大德寺より千五百丈の間、警固の武士三萬計、路の左右を守護して、弓鎗鐵炮を立續く、

〔文昭院殿御實紀〕寶永六年正月廿二日、靈柩〇德川綱吉を北刎橋より發引せらる、〇中略御道のあたりには家々挑灯を出し、水桶をならべ、窓に蓋をなし、辻々の警衛は北刎橋より竹橋までは、松平兵庫頭乘紀、阿部伊豫守正春、竹橋より一橋までは、松平內膳正宗長、遠藤主膳胤親、靑山下野守忠重、濱口伯耆守重元、一橋より筋違橋側まては松平肥後守正容、酒井雅樂頭忠相、松平豐前守重休、本多山城守忠次、筋違橋より山門までは、松平加賀守綱紀、藤堂和泉守高敏、戸田能登守忠眞、本多吉十郎忠孝、山門よりこなたの横小路五百九十間の地には菱垣を結びたり、

〔文恭院樣大御所樣薨御一件〕覺

一御出棺之御道筋へ挑灯水桶出可申事

但提灯は紋付有無は無構、常之を出可申事

一御道筋之屋敷前へ、家主罷出候ニ不及事、

一窓蓋可仕事

右之通向々へ可被達候

二月

大御所樣御出棺之節御道筋固

矢來御門ヨリ竹橋御門迄、本多越中守、　同所御門番、內一人ヅヽ非番、牧野遠江守、松平石見守、

竹橋御門ヨリ一橋御門迄、松平市正、　和田倉御門番、內一人ヅヽ非番、酒井石見守、松平志摩守、

一橋御門ヨリ本庄伊勢守屋敷角迄、松平下總守、　本庄伊勢守屋敷角ヨリ、稻葉丹後守屋敷脇迄、
有馬甚太郎、　神田橋御門番、内一人ツヽ非番、黑田甲斐守、鍋島攝津守、　稻葉丹後守屋敷脇ヨリ、
筋違御門際迄、松平隱岐守、　筋違御門際ヨリ井上筑後守屋敷際迄、松平肥後守、藤堂和泉守、　井
上筑後守屋敷際ヨリ上野黑門迄、松平越前守、
右之通可被相勤候、固之場所等、御目付へ可被談候、
右之通可被相達候

此度御出棺之節、御道筋屋敷、門建致窓蓋、屋敷前は見計家來可差出候事、
一御道筋固大名有之候事
一屋敷横小路見計家來差出、提灯幷手桶差出可申候、右人數は御徒拂にて引、
御通棺相濟、如最前相固メ、龕前堂江被為入候ハヾ、御遠固之方見合、人數引取、

〔塵添壒囊抄十三〕土葬事付四種葬禮事
就葬禮、佛ハ火葬ト見タリ、日本上古帝皇、多以陵アリ、天竺ニモ、土葬ノ儀アル歟、上古多土葬也、今
モ山門ニハ皆土葬ヲ用ト云ヘリ、凡葬法ニ四種アリ、諸經要集云、葬法ニ有四、一ハ水漂、二ハ火焚、
三ハ土埋、四ハ施林ト云々、五分律云、若火燒時、安在石上、不得草土、恐傷虫故、四分律云、如來輪王ノ
二人ハ悉火葬、餘人ハ通前、又五分律之屍應埋之、所謂王法ニハ不許施身、復恐夏燒殺虫、故令埋之、
自餘无難、水林亦得ト云、仍昔多被用陵也、

〔秦山集雜著甲乙録六〕始死三日改服、置棒二本於下、四角立柱四本、下敷竹簀、上掩竹簀、中坐屍、上下四方
以布卷圍之、腰以下在土中、腰以上在土上、蓋土藏之、高可三尺四尺築之、此上古葬法也、至聖德太子、
堀地八角、藏屍其中、以竹簀蓋之、掩土稍高於平地、是理穴之始也、至孝德天皇、輕神道益失古法矣、

〔醍醐寺雜事記〕醍醐天皇崩事貞信公記并淑光日記文

延長八年、從七月中旬不豫、〇醍醐 略九月廿二日壬午、天皇有讓位事、廿九日、未剋崩於右近府、(春秋四十六)十月十日庚子、亥四剋奉葬於醍醐寺北笠取山西方、方四面八十町、東西八町、南北十町、穴深九尺、方廣三丈、校倉高四尺三寸、縱横各一丈、一說云、十一日寅二剋令著於山陵、同日戌二剋奉入於御倉云々、

〔太平記二十一〕先帝崩御事

主上〇後醍醐苦ゲナル御息ヲ吐セ給テ、妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者、是如來ノ金言ニシテ、平生朕ガ心ニ有シ事ナレバ、秦穆公ガ三良ヲ埋ミ、始皇帝ノ寶玉ヲ隨ヘシ事、一モ朕ガ心ニ取ズ、只生生世々ノ妄念共ナルベキハ、朝敵ヲ悉亡シテ、四海ヲ令泰平ト思計也、〇中略思之故ニ、玉骨ハ縱南山ノ苔ニ埋ルトモ、魂魄ハ常ニ北闕ノ天ヲ望ント思フ、若命ヲ背、義ヲ輕セバ、君モ繼體ノ君ニ非ズ、臣モ忠烈ノ臣ニ非ジト委細ニ綸言ヲ殘サレテ、左ノ御手ニ法華經ノ五卷ヲ持セ給、右ノ御手ニハ御劍ヲ按テ、八月〇延元三年十六日ノ丑剋ニ、遂ニ崩御成ニケリ、〇中略葬禮ノ御事、兼テ遺勅有シカバ、御終焉ノ御形ヲ改メズ、棺槨ヲ厚シ、御座ヲ正シテ、吉野山ノ麓、藏王堂ノ艮ナル、林ノ奧ニ、圓丘ヲ高ク築テ、北向ニ奉葬、寂寞タル空山ノ裏、鳥啼日已暮ヌ、土墳數尺ノ草、一徑淚盡テ愁未盡、舊臣后妃、泣々鼎湖ノ雲ヲ瞻望シテ、恨ヲ天邊ノ月ニ添ヘ、覇陵ノ風ニ夙夜シテ、別ヲ夢裏ノ花ニ慕フ、哀ナリシ御事也、

〔宣順卿記〕承應三年十月十五日、今夜御葬禮〇後光明也、〇中略傳聞、寺中之儀、差寄御車於龕前堂廟、(自北方入、)(御車於此邊脫牛手引也、寺家依衰微無山門、)先後乘僧退下、次御車寄、右府(同輿、參議歟、)〇中參進卷御簾給、(公卿列龕前堂南方、北上東面、)先立迴御屏風於廟、(同幕引之、)有下御之儀、諸臣沙汰也、奉昇御棺、(諸寺僧昇居、)於龕前堂廟內、奉乘寶輿、(龕八方也、)次撤御屏風、備鳩備茶、讀疏、(成光寺讀之、)僧衆行事、奉昇寶輿、(力者、)出龕前堂、至葬場殿、(四方有鳥居、)入西面門、(諸臣門外留、)火爐之邊而昇居爐上、(火葬御體也、諸臣奉燒香、)念誦終之後、奉昇御棺、(泉涌寺力者バカリ、)昇居御廟所、(石之權ニ奉入土葬也、此御路之間依狹少、十人許令供奉云々、)

奉土葬云々、賓塚廿四五輩、立寄戒光寺暫休息、有湯漬一盞云々、召具者共強飯酒等出之、丑刻許乘輿歸宅、

〔鳩巣小説下〕後光明帝、御幼年ノ時ヨリ御學問ヲ御志フカク、〇中略崩御ノ後、於泉涌寺御火葬ノ旨ニ相極申候、御平生御志之合申候公卿、德大寺殿、〇公信三條殿、〇實秀小倉殿、〇實起三人ハ、御殯所ヘ被出候事モ、何方ヨリ讒申トモナク、遠慮有之ヤウニ御沙汰アリ被差扣候、夫故御葬禮ノ義ナド、一向頓著モ不被申候、常々御肴ノ御用相勤候、魚屋八郎兵衛ト申者、御火葬ノ事ヲ深ク嘆キ、下々ニオサヘモ、平生ノ志ヲバ死後ニモ相立候樣ニ仕モノニ候、儒學御好不遊サレ候テサヘ、玉體ヲ火葬ニ仕事勿體ナキ事ニ候、我等一身ヲ捨候テ、此火葬之事ハ相止候ヤウニ可仕トテ、日夜仙洞〇後水尾女院御所杯始馳廻リ、且又泉涌寺出家衆ヘ申談、心力ヲ盡候テ申歩行候、理屈マデモ無之、狂癡ニテ相果候モノハ、下賤ノ者サヘモ火葬ニ不仕候、此義無御聞屆御火葬ナサレ候ハバ、以後國家ノ御爲不吉ノ事ドモ可有之ナド種々ノ義ヲ申歩行候、其趣爰彼所ヨリ仙洞ヘモ相達シ、泉涌寺ヨリモ奏聞有之候テ、御火葬ノ義相止ミ申候、八郎兵衛事、定テ天下ノ奇男子ト申ベク候、

〔同天詩史下〕太上天皇崩、公〇水戸德川齊昭聞之、又建葬祭之議於幕府、又寄書謀於關白藤公、〇鷹司政通公深感公之忠、畫入乙夜之覽云、藤公以爲葬祭之禮、雖遽復古、至於諡號則不可不奉也、乃議之於關東、又使公贊成之、幕府不敢違、遂奉諡曰光格天皇、〇按、諡號之議、必有京師公卿慨然倡之者、而藤公用之也、然其顛末不可得而詳、亡幾泉涌寺災、公欲因以廢其佛刹清其地、又謀於閣老與藤公、事遂不果、公之斯擧、皆出於忠孝之誠、而自其忌者而觀之、則益忌焉、

〔言成卿記〕慶應三年正月廿七日、今晩大行天皇〇孝明御葬送、泉涌寺云々、〇中略酉刻御出棺云々、御枕火御前火之事無之云々、是迄御多端作法之間、移御枕火於御前火、殿上人取之、今度御埋葬之間、不及其儀云々、龕前堂稱御車寄、百味食供進有之云々、山陵東山頭云々、〇中略子刻頃著御泉山、御式濟未天明、

〔輔世卿記〕慶應三年正月廿七日、今夜酉刻御葬送也、○中略今夜著二御泉涌寺一、子刻計云々、御車舍御作法濟、御石棺御納濟言上卯半刻、供奉之面々退出翌日卯刻後、

〔言成卿記〕慶應三年正月一日、入レ夜現任一同右大將觸廻文到來、

御葬送、是迄御茶毘之分ニ而、自二山頭一御密行ト被レ稱候得共、以來表向御埋葬、山陵御築造可レ被レ在旨ニ付、現任一同所存可レ申上一、殿下被レ命候旨、廣橋大納言被二申渡一候、仍申入候、早々御廻覽、明日午刻迄可二返給一候也、

戸田大和守建言一紙被二相渡一候間、入二見參一候也、

正月一日　家信

攝家并役人衆之外、現任一同云々、加承順達了、

戸田大和守建言寫

今度御陵御製造之儀、取調進達仕候樣、廣幡大納言被二仰出一候、奉レ畏候、中古佛法渡來以後、御製造之形樣も變革仕遂に淳朴之風、刻薄殘忍ト相化シ、奉レ始二持統天皇一、御茶毘之事、世々御常例と相成、乍レ恐萬乘之玉體を一旦灰燼に奉レ委、九輪石之御塔、御表と仕候儀、數百年來之御定例と相成、遷延今日ニ至候段、恐懼悲歎之至、有志輩同一揆ニ御座候處、後光明天皇御新喪之御時ヨリ、御火葬被レ廢候得共、其後御代々樣御龕前堂へ入御式被レ爲レ濟、夫より山頭堂にて御茶毘之御作法有レ之、其所より御廟所迄、寺門僧徒共御密行と奉レ稱、御表向御火葬、御內實者御埋葬と申御儀ト奉レ存候、元來卑賤之凡夫ニ而も、生ハ始、死ハ終、始終臣子忠孝之道ニ於而最重大之事ニ奉レ存候故、其身分ニ應じ、禮節ヲ重候儀ニ御座候所、無二勿體一も一天萬乘之大君をして、表裏不合之御禮節有レ之候御儀ニ而者、四海臨御之御體裁ニ於而、乍レ恐御瑕瑾ニも可レ被レ爲レ渉と痛哭仕候、且御先代樣より尊號ニ被レ爲レ復、諸國御陵も御復古ニ相成候御時節ニ相成候得者、○中略斷然內外一致、御埋葬之御禮儀ニ被レ爲

復、御茶毗無實之御規式、一切御廢止ニ相成候樣仕度事存候、○中略此段奉伺候以上、

十二月　戸田大和守

〔權記〕長保元年十二月五日甲寅、傳大夫消息云、后宮○一條后藤原定子者朔日子丁許崩給、須早令奏其由、而依遺令避日次之間、延及于今、今日戊刻御葬也、遺令云、天下素服擧哀停止之、○中略又葬禮不異凡人、亦不可用火葬者、

〔榮花物語七鳥邊野〕長保二年十二月十五日のよるになりぬ、○中略あさましくてかいさぐりたてまつり給へば、やがてひえさせ給にけり、○一條后定子、中略、

けぶりとも雲ともならぬ身なりとも草ばのつゆをそれとながめよ、などあはれなることゞもおほくかゝせ給へり、此御ことのやうにては、れいのさほうにてはあらでと覺しめしけるなめりとて、帥殿○藤原伊周、定子兄いそがせ給、鳥べのゝ南のかたに二町ばかりさりて、たまやといふ物をつくりて、ついひぢなどつきて、こゝにおはしまさせんとせさせ給、よろづいとこころせき御よそほしさにおはしませば、事どもゝおのづからなべてにあらず、おぼしおきてさせ給へり、○中略そのよに成ぬれば、こがねづくり御いとげのくるまにておはしまさせ給、○中略やがて御車をかきおろさせ給て、それながらおはします、

〔榮花物語二十五みねの月〕萬壽二年三月つごもりに花とともに別させ給ぬ、○三條后妍子、中略四月十四日にをさめたてまつらせ給に、御ゆいごんよのつねのさまにておはしまさせ給まじきなめり、○中略西院にはその日になりぬれば、さるべき御有樣、日一日いそがせ給、西院のいぬゐの方についぢつきこめて、ひはだぶきの屋、いとをかしげにつくらせ給て、そこにをさめたてまつらせ給べきなりけり、○中略さてその屋に御ゐつらひをいみじくせさせ給て、やがて御くるまながらかきすゑておはしまさせ給、御となぶらあかくかゝげて、きこしめし物などまゐりすゑたり、萬かくと今は見

たてまつらせ給て、みや〳〵院など、よろづをの給はせつゝなかせ給ふさまなど、いといみじういふにもおろかなり、さて人々夜あけぬべしなど申せば、いでさせ給て、おはします屋のつま戸うちかたむる程、さしのきたる人々のこゝちだに、いといみじうあはれにかなしきに、まいてこさわりにいみじうみえさせ給、雲けぶりとならせたまはんは、あさましながらも、いふかたなくてやませ給を、これはあはれにいはんかたなし、女房たちなど、こたみばかりこそ、御ともにまゐらめと、皆えたひきこえさせてまゐりつれど、いとはるかに見やりまゐらせて、のきてなん車どもひきたてたるに、おはします程のとづるおとに、あるかぎりこゑをあはせて、いひえらぬおとなひ共なり、月いとあかくて、御とものほうしぞくの人はかぎりあれば、何事も思ひたえて、いそぎかへるありさま、祭のかへさなどの心ちして物さわがしく見ゆ、（〇中略）又の日の二日ばかりありて、宮の内侍命婦など、人のもとに、いかなるこゝちしてかへりけんなどとひたる返事に、

おもひやれむねやはあくるおとたかみたまのよどのゝとをとぢしより、とぞいひやりける、

雲霞とならせ給も、げにいみじき事なれど、これはさまかはりて、いみじきことのさまなり、

〔榮花物語（五浦々の別）〕神無月（〇長徳二年）の廿日餘りのほどに、京には北方（〇藤原道隆妻）失給ひぬ、（〇中略）後の御事ども例のさまにはあらで、櫻本といふ所にてぞ、さるべき屋造りてをさめ奉りける、哀に悲しともおろかなり、

〔榮花物語（十六本の雫）〕ぢじう大納言（〇藤原行成）のひめぎみ、ついたち（〇治安元年三月）ごろよりいみじうわづらひ給て、かぎり〳〵さみえ給へば、大なごんも、きたのかたも、えづこゝろなく覺しなげく、三位中じやう（〇行成增長家）も、わかきおほんこゝちに、いとあはれにおぼしたり、（〇中略）いまはあさましうかひなく見なしたてまつりてあれど、たゞれいの人のねいりたるやうにもてなさせ給へり、（〇中略）かくて日ごろになりぬれど、いろもかはり給はぬぞいさゝかあはれにかなしかりける、さて七日八

日ばかりありて、きた山なるところに、たまやといふ物つくりて、よさりゐてたてまつらせんとて、つとめてよりその御いそぎをせさせ給にも、なみだのみつきせぬものにて、日くれぬれば、いまはとてゐていでたてまつるほど、たれかはやすからん、中じやうのきみ、もろともにといでたち給へど、にうだうどの〇藤原兼家の御忌日なりければ、大なごんどの、せちにとゞめたてまつり給て、われひとりぞおはする、きた山によろづの御てうどもはこびて、しつらひすゑたてまつり給、大なごんの御こゝちいふにもおろかなれば、えまねばず、

〔榮花物語二十七衣の珠〕中納言殿〇藤原長家は、いまは御こゝちおこたらせ給へど、うへ〇長家妻、藤原齊信女、の御ありさまのいみじきに、我たひらかにおこたりにけんこともくやしうおぼさる、〇中略大納言殿〇齊信も、母北方も、つとゝらへたてまつりて、物もおぼえたまはぬほどに、やがてかぎりになり給ぬ、〇中略九月〇萬壽二年十五日の夜ぞ法住寺にゐてたてまつりて、その月の廿七日に、をさめたてまつるべうきこゆ、〇中略かの法住寺には、そのきたのかたのだいもんに、その日のうちについぢつき、ひはだぶきのやいとをかしげにて、そこにぞをさめたてまつりける、よろづの御しつらひどもして、御くるまながらにかきおろしてをさめたてまつる、

〔台記〕久壽元年五月廿九日辛巳、今日入道中納言家成卿薨、年四十八、天下無雙之幸人也、　三十日壬午、傳聞葬家成卿於東山塔中、非火葬云々、

〔台記〕久壽二年九月十五日己未、今旦關白〇藤原忠通室薨、従一位藤原宗子、准后、　十六日庚申、或曰、夜前安置關白室於塔中、不火葬、左衛門督重通卿行之事、

〔山槐記〕安元元年九月十一日己丑、亥剋女子十九逝去、數月所勞、於乳母家有此事、　十二日庚寅、今夜亥剋、女子葬船岡西野、最密儀土葬也、乳母賴成朝臣、偏致其沙汰也、雑人三口所令籠也、於西隣賴成宿所可行佛事也、

〔今昔物語二十七〕於播磨印南野殺野猪語第三十六

今昔、西ノ國ヨリ脚力ニテ上ケル男有ケリ、夜ヲ晝ニナシテ、只獨リ上ケル程ニ、播磨ノ國ノ印南野ヲ過ケルニ、日暮ニケレバ、可立寄所ヤ有ルト見廻シケレドモ、人氣遠キ野中ナレバ、可宿所モ无シ、只山田守ル賤ノ小サキ庵ノ有ケルヲ見付テ、今夜許ハ此庵ニテ夜ヲ明サント思テ、這入テ居ニケリ、〇中略夜打深更ル程ニ、髴ニ聞ケバ、西ノ方ニ金ヲ叩キ念佛ヲシテ、數ノ人遙ヨリ來ル音有リ、男最怪ク思テ、來ル方ヲ見遣レバ、多ノ人、多ノ火共ヲ燃シ列テ、僧共ナド數金ヲ打チ念佛ヲ唱ヘ、只ノ人共多クシテ來ル也ケリ、漸ク近ク來ルヲ見レバ、早ク葬送也ケリ、〇中略然テ此庵ヨリ二三段許ヲ去テ、死人ノ棺ヲ持來テ葬送ス、〇中略多ノ人集リ立置テ、皆葬畢テツ、其後亦鋤鍬ナド持タル下衆共、員不知出來テ、墓ヲ只築ニ築テ、其上ニ卒都婆ヲ持來テ立ツ、程無ク皆拈（シタヽメ）畢テ、後ニ多ノ人皆返ヌ、〇下略

〔古今著聞集八好色〕山に慶澄注記といふ僧有けり、件の僧の伯母にて侍ける女は心すき〴〵しくて、好色はなはだしかりけり、年比のおとこにも少しも打とけたるかたちをみせず、事にをきていろふかく情ありければ、心をうごかす人おほかりけり、病をうけて命をはりける、念佛すすめけれども申に及ばず、枕なるさほにかけたる物をとらんとするさまに手をあはせけるが、やがて息たえにけり、法性寺邊に土葬にしてけり、

〔嚴有院殿贈大相國公御葬送日錄〕五月〇延寶八年廿六日、今夕御葬禮、〇中略加賀守ハ、御棺藏メ奉ルコトヲ鈴木修理等ニ申含メ、本坊ヘ參ラレ、御葬儀畢ラセタマフ旨ヲ二ノ丸ヘ注進セラル、御棺納メ奉ルニ付テ、大森信濃守、松平傳左衞門、大久保兵九郎、大久保市郎右衞門、坂本小左衞〇衞上下恐有誤脫須田市兵衞、甲斐庄三郎右衞門、矢部四郎兵衞、鈴木修理、石川細阿彌、右十人、御廟所上ノ壇ニ留リ、御戶ヲ堅ク鎖シ、四郎兵衞同心二人、修理組御被官、御手大工頭、同心頭、同小頭、白帷子、御手大工二

十人、同心五十人、袴ノ上ニ色衣ヲ著シ役レ之、御棺ヲ藏メ奉ルニ、諸人モノイハザル樣ニ預メ申含メ、御石槨ノ上ニ、厚板ヲ六枚敷並テ、圖ニ有レ之ワクヲ建テ、御棺ノ上覆ヲ撤シ奉リ、四方ノ鐶ニ繩ヲ通シ、短キ棒ニテ舁奉リ、厚板ノ上ニ居エ奉リ、棒通シノ臺ヲ取替ヘ、藏メ奉ル時ノ臺ヘ上ゲ、四筋ノ繩ヲ鐶ヨリ引通シ、右ノワクヘ掛ケ、御棺ヲ釣上ゲ、敷板ヲトリ、繩一筋ヲ修理同心五人ツヽ扣ヘ奉リ、御棺ノ隅々ヲ御被官四人窺ヒ奉、矢野四郎兵衛扇ヲ持、修理鈴ヲ持テ下知ス、鈴ノ相圖ヲ以テ、繩ヲ緩メ藏メ奉ル、納箱ヲ御棺ノ前ヘ入レ、石灰ニテ固ク封ジ、幷厚板ヲ撤シ、ソノ上ヲ錦ニテ覆奉リ、御棺ノ上覆ヲ安置シ奉ル、事畢テ加賀守來リ、委細ニ窺ヒ奉リ、所々ノ扉固ク鎖シ、御門ヲモ鎖ヲ固メ、丑ノ刻各退散、上ノ壙ノ鎰ハ加賀守預カリ、御門外所々ノ番所々々、御小人晝夜固ク勤番ス、但御蓋石ハ御贈官御院號ヲ書キ加フベキタメ、今夜ハ覆ヒ奉ラズ、假ニ板蓋ヲ覆ヒタテマツル、

〔最樹院殿御葬式之記〕文政十年二月廿日、儀同殿○將軍德川家齊父治濟かくれさせ給ひぬ、五日○三月けふの未下刻に御葬送、○中略御廟堂の前にて御棺を西面にまはし、白布の幕をたれかこみたりしかば、肥後守朝臣、攝津守朝臣初め奉り、みな御拜殿の南の方へ之りぞかせ給ふ、さてたくみ所の者參り、御棺の轅を取のけ、くるまにのせ奉り、かくれの方にてこれをひき、御廟穴の上に居ゑ奉り、さまざまの莊嚴なし奉り終りぬれば、山の衆徒は、御廟堂御門の左右にかためて坐す、○中略次に御別當、御膳具をおろし奉り、御廟堂にめぐらしたる幕をたれ、御棺納の役人、麻上下著て參り、御晏をとりのけ奉り、御棺にやぐらを組たてゝ、大なる繩もて結からげ、さて御廟堂のうしろの山中に、十餘丈ばかり置て、之やちといふもの立て、繩もてくゝりおろす、そのほどらひ見はかりて、村松伊勢、鈴をとり、夫を沙汰し、納おはりて後、やぐらを取のけ、御棺と御銅棺とのあはひに、炭の粉をいれて納め奉りぬ、この時攝津守朝臣、大夫尉、大夫將監、金森甚四郎、土佐守、皆立ならびておはしたりしが、かう納奉りしを見給ひ、攝津守朝臣より、肥後守朝臣へ聞え奉りしかば、肥後守朝臣

見そなはし給ひて歸らせ給へば、攝津守朝臣以下、みな宿坊へまかりぞかせ給ふ、又此由を御城へ申させ給ひてまかでさせ給ふ、そのゝち石灰にてつめ、其上に椵の木の蓋をし、煉土をうち、小石に晒し布の打敷をしき、其上に御晏を居ゑ、かねて屋形の工ざころの下司よりたくみ所へ奉りたりし御扉の鍵を、宗左衛門知貞請とりて執當へわたし、さてのち役人みなまかではてぬれば、戌の刻ばかりなりけり、

〔大江俊光記〕元祿四年閏八月十八日、息遊軒、(○熊澤了介)八月十七日丑半刻計被終、(○中略)廿日暮時分ニ、古河ニ而鮭延寺(禪宗)葬ル、箱ニ入茶ニテ詰候由、(○中略)土葬、上ハ芝土ニテ馬レウホウノヤウニ、北南五尺計、西東三尺計ニツキ、前ニ自然石ニ息遊軒墓ト計ホリ付、南向北首南足ニ葬候由、子息所ニテ三日之間、香茶菓備候由也、

〔忍辱雜記下〕火葬等

先哲筆記云、或云茶毗、或耶維闍毗、正梵云闍鼻多、此云焚燒、(○中略)又泥洹之道言、火葬比釋尊茶毘儀式、此義甚謬、若言火葬比釋尊茶毘之儀式、土葬又倣如來之葬法乎、不揣其本、局情臆談、不知取用云云、私云、虎關濟北集二十(三丁)云、火葬爲竺法、殊不知支那古亦有之、列子楊朱篇云、焚之亦可、沈之亦可、瘞之亦可、露之亦可、多云、葬之種、火爲始也、故知不火葬竺法、(已上中略)又火葬、本朝卽元興寺道照和尙、持統天皇始之、

〔釋氏要覽(下送終)〕闍維、或云茶毘、或耶維闍毘、正梵云闍鼻多、此云焚燒、

〔鹽尻(三十九)〕列子、儀渠之國、其親戚死、聚柴積而焚之、燻則烟上、謂之登遐、(按するに、夷狄の火葬、概かくの如きか、釋氏の火化のみにあらず、)

〔塵添壒囊抄(十三)〕延壽堂ノ事

茶毘處ヲ禪家ニハ延壽堂ト云、自餘人ハ無常堂ト云、

〔安齋隨筆 後編 一〕令の喪葬令に、雖得營墓、若欲大藏者聽、集解に、古記云、若欲大藏者聽、謂全以骨除散也、若以骨置墓所、任其意也、義解に注無之、大藏の字不審、或案云、大は火の誤と、火藏卽火葬也と、

嘉樹按、此時火藏未專、漸釋道照より始まる、文武四三なり、天子火葬、大寶三十二持統を始とす、令の成れるは大寶四年也、貞丈案、大藏は火藏の寫誤にて、火藏は火葬なるべし、令集解の文、以骨除散也とあり、死骸を割き開て、骨を除散することあるべからず、火葬は骨を除散するなれば、火葬を誤て、大藏と寫したること疑べからざる歟、大寶令を定られし比、既に佛法盛に行はる、佛家に茶毘の葬あり、文武四年、道照遷化火葬あり、此年律令成れり、令に古令新令あり、古令は大寶令なり、今傳るは新令、是養老の令なり、養老の令なる故、火葬のことあるはづなり、

○按ズルニ、伊勢貞丈ノ説ニ、喪葬令ノ大藏ヲ以テ火藏ノ誤ト爲シ、卽チ火葬ノ事ト爲シタルハ、未ダ其安當ナルヲ覺エズ、令集解ノ古記ニ、若欲大藏者聽、謂全以骨除散也、若以骨置墓、亦任其意也、トアルニ據レバ、其地ニ預メ一大穴ヲ鑿チ、火葬ノ後ニ、其骨ヲ墓ニ收メズシテ之ヲ粉碎シ、親疎ヲ擇バズ皆此ニ藏スルヲ謂フカ、

〔和事始 五 禮樂〕火葬、損軒翁云、屍を焚ものは、浮屠の法にして、西胡の俗也、中華に浸染し、和國に流傳して、これを行ふ事すでに久し、習て以て常として、見る者恬然としてこれをあやしまず、豈かなしまざらんや、それ孝子は、親の肌膚を愛す、故に死後に至ても、これが爲に棺槨衣衾をなし、其葬所をトてこれを安厝し、死せるに事ること、生たるに事るが如くす、父母の全く生付たる身體髮膚なれば、子たるもの全してこれを歸すを孝と云べし、然るに父母死して後、其形體を焚傷に至るは、則其不仁なる事、又甚しからずや、孝子は其親死しても猶生たるが如くす、然るに親死して、忽に其屍を焚は、其親を死せりとするに忍びざるの心何にかある、宗廟宮室に火災あるだにも、猶且匍匐してこれを救ふ、然るをいはんや火を取て其屍を焚をや、たとへ不孝の子ありて、其屍

を野中に棄て、狐狸にくらはしめ、蠅蚋姑に嘬はしむといふとも、猶みづから其親の屍を焚にまされり、蓋葬とは藏なり、其形骸を藏る故なり、すでに火を以て其屍を焚は、藏る所のもの何くにかある、

〔火葬辨論〕火葬ト云コトハ、唐ニテモ日本ニテモ、上古ハ忌ミ惡メリ、罪人ノ屍ヲ燒コト也、我朝ニハ欽明天皇ヨリ佛法渡リ、文武天皇ヨリ火葬始マレリト也、世ノ俗（ナラバ）シトテ、人々イミジト覺ユルハ哀ムベキ哉、親ノ御身ヲ刃ヲ以テ細々ニ切裂、或ハ筵ニ包ミ川ニ流セナド丶アラバ、假令父母ノ遺言ナリトモソレニ順ハンヤ、マシテ火ヲ以テ四肢百骸五臟六腑マデ散々ニ燒亡シ、葬タ顏ハ何ノ面目ナルゾヤ、死罪ノ打首ヲ刎ルト火ニアブルト、孰レカ重キト思フゾヤ、又我數年秘藏シタル大切ノ道具ヲ打クベ、或ハ泥ノ中ヘ投ゲ入ンハ、ソレサヘ殘念ニテ不快アルベシ、況ヤ大切ナル父母ノ御身ヲヤ、火ニ打クベテ心安ハ如何ナル心ゾヤ、假令父母愚痴ニシテ火葬ヲ好ミ玉フトモ、孝子ノ心忍ビ難カラン、惟火葬ハセザルモノト云法式ニハ非ズ、人心ノ自然也、又佛法ニ水葬ト云コトアリ、川ヘモ流シタル也、コレハ常世ニナキコト故ニ、人々聞ト驚入、中々沙汰ソ限リト思フコト也、火葬モソレニ同キニ、是ハ世上ニ有リ觸レタルコト丶テ、常底ノコトニ思フハ、扨々愚夫ノ曉シ難キ也、○中略禪學ナドスル者、コレヲ執著ノ迷ト云ヒ、親ヲ火葬シテサツハリトシタコトカナト思ヒ切ハ、禪學虎狼ノ心ニテ、薄情云バカリナシ、然ルニ理昏ケレバ、ヨホド孝ナル人モ、麁上下著シ、イザ御骨拾ヒ申スベシトテ、親ノ燒タルヲ自ラツキ崩シテ、骨少許ヲ怪シキ壺ナドニヲサメヌルコト、不仁不義、猶云ニ不足、深ク可愼、麁上下著スルハ殊勝ニテ、親ノ形骸ヲ崩シヌルハ虎狼ノ心ナラズヤ、道ヲ不知ハアサマシキ者ニゾ、或者火葬ノ體ヲ見ルニ、賤シキ者ノカラダハ燒ニクケレバ、鎗ニテ突、槌ニテ打碎キ燒、サテ〳〵痛マシク胸フサガル也、孝子イカヾ思ヘルヤ、

〔病間長語 二〕火葬ハ宋の比より盛に行る、我邦にては文武帝の時に、釋道照が弟子どもが、その師を火葬せしより始りて俗となれり、儒家の子たるものは、此ことすまじきことなり、

〔先哲叢談 二〕野中止、字良繼、小字傳右衞門、號兼山、土佐人、世仕國侯、○中略土佐民俗、葬以茶毘、數禁之而不止、兼山令曰、從今後凡有罪者之死、當焚其屍而葬其遺骨、於是火化自止、

〔土津靈神言行錄 上〕寛文三年七月二十五日、遣佐藤友松 後改勘十郎於會津、而命奉行菅勝兵衞、赤羽市右衞門、巡行領内、○中略火葬者不孝之至、能教戒之、　十一年十二月十八日、亥下刻終于正寢、

行狀 山崎嘉作

其略曰、○中略若靈神 ○保科正之禁火葬、則采大祖程明道以後之善政也、

〔土津靈神言行錄 下〕及公 ○保科正之之治會津也、本乎人倫正乎風俗、○中略民尙焚屍、習以爲常、敎諭禁止之、然又慮寺院地狹而不使瘞埋、故賜諸人葬地於三所、而遂其志也、因茲諸人自知火葬之非、又知立碑表、○中略加旃以松脂石灰之類貯官庫、有欲厚葬之者、則應其求而授之、是以工匠知棺槨之制、役卒亦練三物、習築埋也、凡士庶知厚葬者、自公之時始矣、

〔非火葬論 安井眞祐〕佛法日に盛なるに付て、貴賤ともに火葬にする事を美目と思ひて、次第に盛になりもて來りて、中古以來は、六十餘州火葬せざる所はまれなり、○中略屍をば家の内におくことを一時もうるさき事に思ひて、としおそしとあわてふためき、例の火葬場へもち行て、年年歳歳、焚けがしたる火坑の内へなげいれつゝ、棺槨をば杖棒にてたゝきわる、其音道をゆく者の耳にさへ心にこたへて忍びがたし、蒭薪つみかさね、席こもうちおほうて、一片の烟と焚すつる事、とかくいはんかたもなし、○中略

右非火葬論一卷、識者同歎、余 ○上野安中藩主板倉勝明家亦有此弊、讀之廢卷歎息者久之、同宗松山侯、爲予同志之人、及其先君之終也、相議命從臣永止之、今刻此卷、併識以示子孫云、

安政丙辰八月朔　甘雨亭主人識

〔令義解賦役〕凡丁匠赴役身死者給棺、在道亡者所在國司以官物作給、並於路次埋殯、謂殯者斂也、言殯欲假葬、待家人至、立碑幷告本貫、若無家人來取者燒之、謂內閒既告、道路有程、待其迎接、過限不來者、即於當所燒也、

〔令義解軍防〕凡行軍、兵士以上、若有身病及死者、〇中略其屍者當處燒埋、

〔尺素往來〕葬禮茶毘之儀式者、沐浴、入龕、鎖龕、起龕、點茶、點湯、下火、山頭龕前念誦、轉龕、舉哀、掛眞、舉骨、入骨、唱衣、轉骨、祭文、諷經等也、

〔吉事略儀〕御葬送

御車到貴所税駕

於鳥居前去一許丈搅放牛、引向立榻、於高野爲御輿可奉舁居、如御車前方向鳥居、仁和寺高野若御所埒內、若有便宜貴所者、不可有鳥居、仍於貴所十許丈税駕可有、呪願了宜可舁放床也、

導師呪願法用上構奉此也

奉移貴所

引寄御車於鳥居際、舁放床入鳥居內、寄貴所移也、侍御車副等可舁之、以薦尾爲先舁之、役人舁下御棺奉居薪上、北首、御車即舁出鳥居外、若爲御所埒內者、舁退埒外、如元舁居輪相具御牛、御導師呪願、略儀之時無舉物時也、

舉御棺蓋插薪於四角

先四角各薪一筋差之、人々舉蓋、始差自艮迄于乾、次御棺內四面差廻薪松等、無始方、以前駈上臈續松火、燃移御所火也、始自艮迄于乾、次第付之、不渡北方、

奉茶毘

御入棺役人可奉持之、近有侍運寄薪物等、宮々幷近有僧綱凡僧等、近候貴所邊可誦眞言、

茶碗了、先破却貴所板敷幷爐四面壁等、行事召工破之、爐具運置便宜所、以湯滅火、以水沃近邊灰、如元敷板敷、其上敷紫帖爲座、北上
宮々以下近習人々著座
山作所行事進折敷十枚各敷二紙一枚箸十雙置人々前、折敷箸等員數、可隨人數、
拾御骨
各取箸、上首人夾上大長骨、先拾首骨、次人同以箸夾移之、如此次第夾下、置最末人前折敷上、敷紙上
其後各拾盡之也、此所可被立御塔若御堂者、少々殘御骨爲墓、不然之時、大略可拾取、
納御骨於茶碗瓶子
行事持參之竈所役、最末人傳取之、持參上首已下前、次第移入所拾御骨、
次加入土砂
行事付竈所役人進之、宮若可然僧綱、取之加入之、
覆蓋白瓷入白革袋帖、生白絹緘之爲緒、
片方長殘之、結中央十文字緘之長方和奈而成之而、其末袋曾婆加良美天、短緒仁眞結之也、以件
和奈人々懸頸也、略○中
事了人々、以草爲人形手祓歸參本所始例時、
山作所行事、壞貴所荒垣鳥居等、分御近邊無緣寺之採鋤覆土其後築墓立石率都婆、立迴釘貫植松、
四面堀溝、
〔吉事次第〕御葬送事
早旦ニ山作所ヲハジム略○中　次御車貴所ニ至テ、御牛ヲハヅシテシヂヲタツ、　次導師呪願御
車ノ前ニナラビキテ作法ドモス、　次御棺ヲ貴所ノヤニ移シ奉ル　次ハフリタテマツル　次

御骨ヲヒロフ　次茶碗ノ瓶子ニ入テ、土砂ヲ加ヘ入テ蓋ヲ覆ヒ、白キ皮ノ袋ニ入ル、　次サモアルベキシタシキ人、御骨ヲカケテ三昧堂ニ藏メ奉ル、　次人々歸リ參ル　次例時ヲハジメオコナフ

〔續日本紀　三文武〕大寶三年十二月癸酉、從四位上當麻眞人智德、率諸王諸臣、奉誄太上天皇、持統〇諡曰大倭根子天之廣野日女尊、是日火葬於飛鳥岡、

〔山陵志　一〕夫古之俗、其狎乎鬼神而瀆齋盟、所以求福於冥寞之間、固民性蒙昧之爲、而遷乎佛教之行、據是攬衆志、獲國權、擧喪祭之紀、莫不咸爲之所亂、而自持統之喪始行火葬、其爲弊也世以甚矣、列子、楚之南有炎人之國、其親戚死、朽其肉而棄、然後埋其骨、乃成爲孝子、秦之西有儀渠之國、其親戚死、聚柴積薪而焚之、燻則煙上、謂之登遐、然後成爲孝子、此上以爲政、下以爲俗、而未足爲異也、夫然則眞學之衰、固有如是者、而佛之所生身毒國、或與儀渠同俗、故亦行火葬也、後世浮屠氏皆不之譏、奉以爲典章者、乃不深思之過也、持統帝之時、宇治之僧道昭、其死始行火葬矣、然稽者方外之士、固不足怪、今至其用諸大喪、不亦悲乎、〇中略夫喪祭、禮之大經也、而天下離世多難、至乃園陵廢、春秋闕、如此之極、命也、謂之何、既自臨大喪、而火其葬、黜靈車、赭梓宮、堂々禮典委灰燼、幾何其不化爲夷蠻哉、

〔續日本紀　三文武〕慶雲四年六月辛巳、天皇崩、　十一月丙午、從四位上當麻眞人智德、率誄人奉誄、〇中略、即日火葬於飛鳥岡、　甲寅、奉葬於檜隈安古山陵、

〔續日本紀　八元正〕養老五年十月丁亥、太上天皇、元明〇召入右大臣從二位長屋王、參議從三位藤原朝臣房前、詔曰、〇中略朕崩之後、宜於大和國添上郡藏寶山雍良岑造竈火葬、莫改他處、

〔續日本紀　十七聖武〕天平二十年四月庚申、太上天皇元正〇崩於寢殿、春秋六十有九、　丁卯、是日火葬太上天皇於佐保山陵、

〔三代實錄　三十八陽成〕元慶四年十二月四日癸未、是日申二刻、太上天皇清和〇崩於圓覺寺、時春秋三十一、〇中略遺詔火葬於中野、不起山陵、　七日丙戌、是夜酉四刻、奉葬太上天皇於山城國愛宕郡上粟田山、奉置御骸於水尾山上、

〔醍醐寺雜事記〕李部王記云、天曆六年八月十五日、太上天皇(○朱雀)崩、廿日、御葬送、(○中略)亥時陵所諸寺、夾路設幕念佛、院殿上四五位人、招迎火候外陣邊、御輿入南門、公卿退著幄、其山作之司左中將藤原朝臣朝成、乃至僧二口奉仕荼毘事云々、其上物幷御輿等、於内墻北燒之云々、

〔榮花物語〕(九石蔭)寬弘八年六月廿二日のひるつかた、あさましうならせ給ぬ、(○中略、一條、)御さうそうは七月八日とさだめさせたまへり、いみじうあつき程に、こゝろよりほかに程へさせ給を、中宮いみじうおぼしたり、(○中略)かくて八日のゆふべ、いはかげといふ所へおはします、ぎしきあり樣めづらかなるまでよそほしきに、さはこれこそは、きはの御ありさまなりけれと見物に人思へり、殿の御まへをはじめ奉りて、いづれの上達部殿上人かは、のこりつかふまつらぬはあらん、おはしましつきては、いみじき御有さまと申つれど、はかなき雲霧とならせたまひぬるは、いかゞあはれならぬ、ながき夜といへど、はかなうあけぬれば、曉がたには御骨など、そちの殿などとらせ給て、こととはてぬれば、大藏卿正光朝臣おひたてまつりてかへらせ給ほどなど、いみじうかなし、かへらせ給みちのそらもなし、みな一條院に夜ふかくいらせ給ぬ、たかまつの中將、

いづこにか君をばおきてかへりけんそこはかとだにおもほえぬかな

公信の内藏頭

かへりてもおなじ山路をたづねつゝにたるけぶりやたつとこそみめ

〔小右記〕寬弘八年七月十二日癸未、參院、相逢春宮大夫(○藤原齊信)藤中納言(○藤原隆家)等清談次云、故院(○一條)御存生日被聞中宮左府、又被仰近習人々云、可被行土葬禮、又御骨可奉埋圓融院法皇御陵邊者、而忘却不行其事、相府思出又歎息、仍御骸骨暫奉安置圓成寺、過三ヶ年(大將軍在西方)可奉移圓融院法皇陵邊、亦一周忌間、於圓成寺被修阿彌陀護摩、(六口伴僧)又未奉移圓融院之前三ヶ年間、以五ヶ口僧可被奉仕念佛者、

〔權記〕寛弘八年七月廿日辛卯、左丞相（道長○藤原）御宿所、食後更被參殿上東廂、丞相被示春宮大夫（齊信）源中納言（俊賢）藤中納言（隆家）、余（○藤原行成）幷前權大僧都院源、權大僧都隆圓、前權少僧都尋光、權律師懷壽、尋圓云、圓融院法皇御陵邊、可奉收之由御存生（○一條）有天氣、（去九日、早且於山作所丞相云、土葬○幷法皇御陵側可奉置之由、御存生所被仰也、日者總不覺、唯今思出也、然而云云而無益、事已定也云々、）然而有方忌之間、暫安置圓成寺御室、

〔類聚雜例〕長元九年五月十九日丙申、山作所行事等供筵道、（長筵）次御輿長等舁御棺、（○後一條）舁遷貴所、（北枕、路間行障敷御棺、遷御後、立頭中鳥居左右垣外、）兼房朝臣、經輔朝臣、章任朝臣、定經朝臣、義通朝臣等、以生絹結冠額、舉御棺蓋插薪、次經輔朝臣、取合資通經長朝臣等所持之火、插付御棺、奉茶毘、（始自艮至于乾、次第付之、北方不渡之、）前大僧正慶命、權少僧都濟祇、右宰相中將、右大辨、右兵衛督等、同候行事、六位藏人等雜役、（先例東西開門、仍雜役人自東門往還、而此度不開兩門閉之、壞東垣爲要路、）又僧正尋光、權少僧都延尋良圓等、依相府仰、近候貴所邊念佛、（此間上東門院別當濟政朝臣、爲御使參入、其後御使連々也、中宮無御使、是無所見歟、）自事漸欲畢間、行事藏人貞章、向舉物所、令燒御物等、御檔机一脚、（納雜具等、）御冠筥二合、（在御冠、）唐匣一合、（納雜具等、）御泔坏幷臺御硯筥一合、（納雜具等、）御脇息一脚、御手巾箱一合、（在蓋、）御衣筥一合、御枕二顆、御冠形一頭、御大櫃一具、御靴一足、御插鞋四具、御手水大床子幷雜具等、御座六枚長筵等、（已上自一條院送之、）御輿一具、（大香輿相具、）御膳幷御手水具等、（御手洗打敷拔實御臺一雙、御手巾筥等、已上今夜所具、）大床子一脚、御車、（被壞、以上自上東門院送之、）漸及別匝之間、以行障等立廻貴所屋四面、此間關白、幷內府、藤大納言、權大納言、新大納言、臨竈所被行事、及辰剋奉舉茶毘、事畢先破却貴所板敷壁等、以酒滅火、慶命尋光延尋良圓濟祇等、呪土砂散御葬所上、其後權大納言、新大納言、前大僧正慶命、權少僧都濟祇等、給御骨、經輔兼房朝臣等、採折敷祗候、以御骨（一升許、）奉納茶垸壺、加納呪砂、以眞言書一卷（梵本、）結付壺上、（以白革纏壺上、以茶垸器一口爲蓋、生絹爲其緒、）左中辨經輔朝臣奉懸之、奉渡淨土寺、此間上下道俗、莫不拭淚、次式部大輔資業朝臣、美作守定經朝臣等、向御葬所、採鋤覆土、其後人夫等從此役、御墓上立石率都婆、藏陀羅尼、其廻立釘貫、又右衛門尉季任、令人夫堀塘其廻、令殖樹云々、去夕所役人々、皆載定文、仍不注其名、次事畢關白相府以下歸路

云々、於鴨河作車牛祓、只以草人形不備祭物

〔長秋記〕大治四年七月十五日辛卯、法皇○白河御葬送、○中略至高隆寺西北野御墓所、近野間而止于時清庭御所案御棺、件清庭御所在外荒垣内鳥居西脇、三間板葺片庇屋也、自殿上当軒覆白生絹、又簾代懸同絹、不知案内事也、此間前火二本、在清庭舎北前、依禮部命役人自外鳥居外退帰了云々、次供御手水、棙手洗貫簀、堀川院御時無貫簀御手拭臺如常、御輿長等役供、陪膳法印覚猷、後三條院度、覚尊座主奉仕例云々、件等物具只取雙、乃罷出了、次供御膳、御厨子所預久仲調備之、高坏十二本、用様器、有打敷等也、供儀如先、乃罷之、堀川院度六本也

後法印云、不立御箸、只居雙、乃罷出了、

次導師呪願事了

次奉移貴所竈所也、豫自清庭殿北面当貴所南面敷筵道、用廣筵御輿長十二人舁御輿、付貴所、以行障挟内垣中東西頭、歩障二帖引廻貴所四面、

長元嘉承両度、以歩障無引廻儀、只及天明納御骨時、以行障竈所四柱ニ結付、而今般如此、

次召入前火、持者取之立貴所北方、役人不到、是留鳥居外歟、只蔵人所官人許令持火入次開御棺蓋、積御體廻折松薪等、上置嚢、又不覆、治部云、於男開棺蓋葬、於女入薪、又覆蓋、次取前火、付小松、宗章朝臣勤仕、付薪、自乾方始、終于艮方、此間與右兵衛督、偸入清庭遙見、両親王法印、法性寺法眼三井寺近候念佛、爐西南庭敷疊御座也

〔後光嚴院崩御記〕應安七年二月二日、東山泉涌寺へ御葬禮、○中略火屋ニい、マハリニ假イガキヲタテ、其中ニ幔ヲ引ク、火屋ハウス檜皮ナリ、御前ニ鳥居ヲ立、御棚アリ、御位牌ヲ立、両ノ脇ニ大香爐ニ沈ヲタク、スグニ御棺ヲ入奉テ、御輿ヲバトリノケ、長老ヨリテ又焼香シテ、薪ニ火ヲタイ松ニテツケラレ給、又其間、又楞嚴呪一巻ヲハリテ光明眞言、サテ供奉ノ人々、火ノモユル程ニ、ナクナクガヘラレケルニヤ、

〔山の霞〕文明二の年十二月廿六日、夜半ばかりより、法皇(○後花園)御中風の御所勞いできましくて、終に辰の刻ばかりに崩御ならせ給ふ、(○中略)三日(○文明三年正月)申の刻に、悲田院にて御葬送の儀あり、(○中略)ほどなく烟となり給へるを見參らせけるに、白樂天が石火光中寄此身とつくれりしも眼前におぼえて、

立のぼる後のけぶりとなるまでに雲ゐに高き名をのこすかな

〔後水尾院崩御記〕後方朝臣記、延寶八年八月十九日乙亥、今朝寅上刻、太上法皇圓淨、(○後水尾御俗名政仁)終崩御也、(○中略)申刻般舟院陽空長老來駕、口狀書一通持參、前例多候間、此度仙洞御火葬(實)願候、深草安樂行院ニ治御骨、骨堂も後陽成院崩御之時分出來、其以後破損ニテ、雨露モ掛リ候體、如何ニ候間、此度之事願之由、御灰ヲ泉涌寺ニ治申也、

口上書、

後土御門院　嘉樂門院(○後土御門母后信子)　後柏原院　後奈良院　豐樂門院(○後奈良母后藤子)　正親町院　後陽成院　中和門院(○後水尾母后前子)　如此御代々御火葬連綿相續仕候

〔基量卿記〕貞享二年二月廿二日、只今御事切(○後西院)之由也、　廿四日、依仰以清閑寺大納言、有栖川宮、平松前中納言等へ相尋條々、(○中略)

一御土葬歟、御火葬歟、御遺言無之歟之事、

有栖川平松、同申無之ト、平松申云、御平生非御一身上事、於人上も、火葬之儀不宜由内々被仰候間、若御素意ニ不叶候歟、

〔宗建卿記〕享保十七年八月六日、法皇崩御、(○靈元院)　十一日、仰云、天子火葬之事、古來有之、自何代被始哉、且殉葬之事如何、予言上、火葬勿論候、古來天子多分火葬候、及近代却而無之候、雖然於今有其由、於今度定可有其由候歟、

〔榮花物語 二十六 楚王の夢〕あさましうつきのあかくめでたきに、そこらの人々まゐりこみたるに、〇後朱雀妃藤原嬉子葬送との〇嬉子父道長の御こゝろのあはれにかなしきに、そこらの人もえしのびあへざりけるに、煙にてあがらせ給ふにも、やがてなびきて、いづれの雲とも御らんじわくべくもあらぬにも、御むねふたがりて、さだかにも御らんぜられず、かゝるほどに船岡の南の方に火のうちほのめきて、たゞならずあはれなる事ぞ見ゆる、人々見やりて、あはれかれみよや、はや又かくもありけるはなど、みやりさわぐに、ある者の申すは、かんの殿に、小左衛門とて、いみじうらうたきものにとりわきおぼしたりしが、日頃かれもわづらひて、え参らざりしに、此うせさせ給日ぞまゐりて見たてまつりて、まかでにけるまゝに、同じ日やがてうせにけるが、をりしもこそあれ、こよひしもこのわたりちかうするなりけり、人々哀なりけるよしをいひおもへるに、女房車もたしかにとひきゝて、いみじうあはれに見やる、

〔續日本紀 一 文武〕四年三月己未、道照和尚物化、〇中略 弟子等奉遺教、火葬於栗原、天下火葬從此而始也、世傳云、火葬畢、親族與弟子相爭、欲取和上骨斂之、飄風忽起、吹颺灰骨、終不知其處、時人異焉、〇又見扶桑略記、

〇按ズルニ、續日本後紀承和七年五月藤原吉野奏言ノ條ニ、菟道稚郎子、遺敎シテ散骨セシメ給ヒシコト見エ、扶桑略記推古天皇二十九年二月厩戶皇子薨去ノ條ニモ、荼毘ノ文字見エタレドモ、共ニ疑ハシケレバ取ラズ、又多武峯緣起藤原鎌足改葬ノ條ニ、堀取遺骨、又ハ奉葬御骨、等ノ語アリ、或ハ火葬ナルベキカ、然レドモ亦遽ニ斷ジ難シ、記シテ疑ヲ存ス、

又按ズルニ、萬葉集二卷、柿本朝臣人麻呂妻死之後泣血哀慟作歌幷短歌トアル下ニ或本歌曰、〇中略 宇都曾臣念之妹我灰而坐者トアリ、萬葉代匠記ニハ之ヲ註シテ、はひしてませば、灰となりていませばなり、〇中略 此妻の身まかりたるは四年〇文武 以後なるべしト云ヒ、萬葉考ニハ、或

本に灰而坐者と有は、亂れ本のまゝなるを、或人それをはひにてませばとよみて、文武天皇四年三月に、始て道昭を火葬せし後にて、これも火葬して灰まじりに坐てふ事かといへるは、あやまりをたすけて人まどはせるわざ也、火葬しては古へも今もやがて骨を拾ひて、さるべき所にをさめて墓とすめるを、此反歌は、葬の明る年の秋、まゐでゝよめるなるを、ひとめぐりの秋までも、骨を納めず捨おけとせんかは、又此妻の死は、人まろのまだ若きほどの事とおもはるゝよしあれば、かの道昭の火葬より前なるべくぞおぼえらる、さて其灰の字をあやまりとする時は、是も本文の如き心詞にて、珠蜻仄谷毛見而不坐者とぞ有つらんを、字落しなるべし、トアリ、卽チ契沖ハ之ヲ火葬トシテ、道昭物化ノ後ナランド云ヒ、眞淵ハ道昭物化以前ノ事ナレドモ、火葬ニアラズト斷ゼシナリ、又同書三卷ニ土形娘子火葬泊瀨山之時柿本朝臣人麻呂作歌トアルハ、代匠記ニモ考ニモ、共ニ道昭物化以後ノ事トセリ、

〔皇朝史略 三文武〕外史氏曰、夫喪親之終、孝子之所盡心也、故聖人爲之衣衾、爲之棺槨、殯殮之葬埋之、又爲之祭祀之禮、事亡如事存、所以使爲子者盡心也、自佛法東流以後、始有火葬之事、雖天子之貴、歷世行之、況庶人乎、夫生而事之、死而焚之、是刑其屍也、有人子之心者、安忍刑父母之屍哉、然流俗相承、恬不知怪、以謂爲其親滅罪、甚哉其惑也、而作俑始于此、可勝歎哉、

〔中右記〕保安元年九月廿六日甲子、今夕西御方御葬送也、　廿七日、早旦奉送木幡墓所、定助得業、奉懸骨也、是依爲親人也、○中略

土用之間也、而於火葬者不忌之由、陰陽助家榮密々所示送也、以柴先敷地、於其上火葬也、又如鳥居柱不堀立、假令立也、後朝墓以柴作也、送骨於木幡時、先修諷誦於淨妙寺、山守三人等與祿、是近代作法者、仍給小物了、

〔本朝世紀〕久安四年正月五日甲子、今日正二位行民部卿藤顯賴卿薨、　十三日壬申、今夜葬故顯賴

卿於嵯峨野常磐林之西北云々、當日拂曉、自九條第渡、故丹後守爲忠入道堂、於件堂備葬禮云々、然間戸部葬車出了後、件堂忽燒亡、是下人取炬火投棄之間、無守護之人故也、堂塔數字一旦燒失、與葬火同時燃云々、頗奇怪事歟、

〔玉海〕文治四年二月廿八日甲午、此日內府〈○藤原良通〉葬送也、堂與葬場、其間可謂咫尺、仍每事有便宜云云、用火葬之儀、內府平生之時、常曰、火葬有功德、土葬不甘心云々、余又存此旨、仍用火儀也、不用薪用藁也、是近代之意巧、第一之上計云々、

〔吾妻鏡 八〕文治四年十月十日壬申、巳剋窟堂聖阿彌陀佛房、詣勝長壽院禮佛、退出之後、於路頓滅、〈年八十四歲〉希有事、則爲當寺供僧良覺沙汰入棺、亥剋葬送、以藁火葬云々、

〔將軍義尙公薨逝記〕九日〈○延德元年四月〉には、等持院にして、後のみわざまします、かみ樣の御かた、御所御所、その外の女中、公家少々、大名外樣奉公のともがら、殘りなうぞ見え侍し、〈○中略〉次のやくにゑたがふ僧たち、あるひははちつゞみをならし、あるひははたてんがいをさしあげ、同音に南無おみとほや、とゝぎやとやととなへつゝ、すゝめり、御位牌をば、□□□ぞもたせ給ふべきに、日野左大辨參議政資、細川右京兆政元、御くわんの善の綱かたにかけ奉り、火屋の中に入給ふ、これを見參らせ侍るもの、たかきもいやしきも、みなこゑのかぎりをしますなきの、しり袖をゑばらぬはなし、諸佛事どもはてぬれば、情なうあらましき薪の下につゝみこめ奉りつゝ、煙は空になびくを見まゐらせても、猶さらぬ命ぞつれなく侍る、同じ日、御起骨の御さほうなどもましまます、

〔大猷院殿御實紀 八〕寬永三年十月十八日、大御臺〈○德川秀忠室〉御葬禮、〈○中略〉下火は增上寺廣度院了的、文文句々の法文を演說す、鎖龕以下の諸役、壽經寺、傳通院、新知恩寺、大光院、光明寺、靈巖寺、淨國寺、東漸寺、善道寺、淨福寺、結城弘經寺、飯沼弘經寺、勝願寺、大善寺、大巖寺、蓮馨寺、大念寺等の僧衆これを

役し、沈香を三十二間餘につみかさね、一時に火をはなてば、香烟十町餘に及べり、（今麻布に、がぜんぼう谷といへる地名あるは、此ところなりといへり、）駿河大納言忠長卿、及び京極若狹守忠高、松平仙千代丸、その外在府の輩、みな裝束を著し從へり、茶毗規則終りしかば、法の諡を奉り崇源院殿と申す、

〔甲子夜話 一〕彥坂九兵衞訪來り、談話のついで、彼が祖先のこと申出し中に、憲廟（○徳川綱吉）潛邸の御時、酒井雅樂頭（○忠清）に懷深くおはしましき、然るゆゑにや、大統繼せ玉ひし後、雅樂頭病死しけるが、腹切りて死せりと風聞す、九兵衞が祖、此時大目附にて有しを御前に召れ、御目付北條新藏と同じく命せられ、急ぎ雅樂頭宅に趣て、彼が死骸の樣體見屆來れとの仰なり、（○中略）兩人件の趣を大學頭にいふ、大學頭答て、（○中略）假令死骸見玉ふとも、病死の外他儀なし、（○中略）二人立歸り其次第を言上す、其時言甲斐なき事どもなり、如何樣に候とも、踏込死骸を見屆罷來れと御氣色はげしくの玉ふま丶、二人また雅樂頭が宅へ馳行に、はや雅樂頭は葬送取行ひ、其棺門へ出るに遇ひぬ、然るゆゑに馳歸り、又其よしを言上すれば、憲廟御氣色殊に損じ玉ひ、然らば葬所へ參り、死骸を堀出し、踏碎きて罷歸るべしと命せらる、二人遂に雅樂頭の寺に行きて、上意の趣申述たるに、葬送に從へる臣等謹て申は、雅樂頭遺言の旨により、既に火葬し畢るとなり、（○中略）大學頭の上使に答申して速に出葬せしも臣等が火葬して其由を答しも、すべて此頃の人のありさまは、感歎にも餘りある事どもなり、

〔三人懺悔冊子〕六郎ざゑもん殿、御とんせいの時、三さいになり給ひしひめ君、いとけなきわか君をふりすて丶、御とんせい候ひし程に、女子のとかく御ほうべん候て、御はごくみ候ひしが、此上らうさまも、おかぬわかれの思ひにや、びやうしやうならせ給ひ候て、此程はゑよく事をたやし給ひ候て、はや御たかい候て、今日三日になりたまひ候、此きんだち御なげき見申候に、中々にめもくれ心もきゆるばかりにおぼえ候也、あれに見えて候、松の本に對し申候て、このをさなき人

納骨

は、二人ながら、まい日なく〳〵たび所へ御參り候、○中略げにある木の下に、人をだびして見え候程に、○中略木かげにいとけなき二人のものつくばひゐたり、あれそれよと思ひて申やう、上らうたちは、いかなる御事なれば、かやうの所に御わたり候ぞととひ候へば、其返事をばいはで、あらうれしや、われらがはゝの御はかにて、けふ三日になり候程に、骨をひろひ候所に、けふしも御そうの御とほり候事うれしさよ、恐ながら御きやうあそばして給候はゞ、御りやくにて候はめとかきくどき申あひだ、その時めもくれ心もきえて、さらに夢うつゝとも思はず候ひし也、○中略竹と木とのはしをもちてこつをひろひけるが、○中略是ら母のこつをば、このふたに入れもちて、我がやどの方へはゆかずして、よそへまかり候程に、又立かへりて、そなたはいづくへわたり給ふぞと申せば、是は法恩寺と申御寺に、みやこよりたつとき上人御くだり候て、七日の御せつほうにて候が、今日はや五日になり候、人々參り候程に、われらもまいり、御ちやうもん申、此御こつをもをさめばやと思ひ候て、扨御寺へ參り候と申候ひし程に、○下略

〔全國民事慣例類集 葬埋〕葬式ノ節、手傳ト稱シ、村内毎戸一人(大抵下男等ナリ)ヲ出シ、茶毘(指棺チス)或ハ葬具ノ飾物ヲ携ヘ、及ビ奔走ノ用ニ供シ、兼テ喪ヲ吊セシム、維新前ハ、一般火葬スルノ風習ナルヲ以テ、葬式ノ當日、村内毎戸、藁二束ヅヽ軒前ヘ出シ置、手傳ノモノ行々之ヲ集メ、火葬場ニ至リ焚料トナス、從前ハ必ズ毎戸出スベキ例ナリシガ、追々減省シ、十年前ニ至リテハ、藁ヲ出ス者、百戸中五六十戸ニ過ギザルコトヽナレリ、(羽後國秋田郡)

〔忍辱雜記 上〕納骨作法

先哲筆記云、世人納火葬骨、謂之灰寄、良定曰、灰寄死骨事、是摸世尊茶毘等、是亦大謬也、夫納遺骨者、郎子孫兄弟朋友哀情追思耳、何得以凡夫火葬比大聖世尊化儀、可謂薰猶共圃、玉石倶焚矣、又無緣集云、於納骨時、誦四奉請幷舍利禮、又云、盛骨之器、書佛此夜滅度如薪盡火滅分布諸舍利而起無量

塔文云々、不知是何行法乎、若其爲呪願回向、專可以念佛幷誦經、何意指定令誦舍利禮、且書方便品偈乎、蓋起自比釋尊茶毘之謬解、嗚呼取三學分外之凡夫眞骨、比萬德圓滿之聖人舍利、妄作非法莫甚焉、而今時僧家、習爲法式、傳爲明文、可笑可悲也、夫若臨收骨時、稱名誦經可呪願回向、若其骨匣可書法名幷年號月日、莫順妄作矣、本邦在家、納以死骨高野山、爲結善緣、或死他鄕、送其燒骨故鄕、是故骨匣書年號等也、

〔塵添壒囊抄十六〕骨專納高野事〇付東寺勝實御筆感得事下略

〇按ズルニ、骨ヲ高野ニ納ムルコト冢墓篇ニ詳ナリ、

〔安齋隨筆前編八〕骨壺、諸國にて農民土を掘て、石棺に掘り當る事あり、棺の內に小キ壺あり、高さ大抵六寸ばかりの陶器なり、藥をかけず、スヤキにて固し、色うす黑し、兩方の腹少し平にして、兩方ともにウヅマキを大に文に付る、赤土器の尻にある文の筋のごとし、兩の腹少平きは横に伏せ置べき爲也、此物處々にて掘り得しを繪圖にしたるをあまた見つ、壺の尻は丸し、平らかならざる故、立て置く物にあらず、又其眞物をも見し事もありき、是死人を火葬し、其骨を納めし壺なるべし、或は此壺を得て、花瓶に用ゐる人もあり、千年の古物なり、此其本は葬具にて凶器なれば、座席の飾として弄翫すべき物にはあらず、忌むべし、吉凶を分るは禮也、ものゝいまひにはあらず、禮を正す也、

〔吉事略儀〕御葬送

拾御骨〇中略

有由緖僧綱、若凡僧奉懸之、參高野新御堂、暫奉昇退御佛、放板敷、奉納之、如元奉居御佛、

母屋佛壇下、深堀穴、底幷四面疊大石、奉安之、其上覆石、可塗石灰、非常大事若出來之時、不可滿頭、不可損壞之故也、

〔醍醐寺雜事記〕李部王記云、天曆六年八月十五日、太上天皇〇朱雀崩、廿一日、朝奉遷御舍利醍醐寺

東、左中將藤原朝臣朝忠奉持、律師鎮朝、醍醐寺座主定助法師陰陽助平野宿禰茂樹、相從奉安云々、

〔小右記〕寛弘八年七月九日庚辰、巳刻許、資平自院（〇一條）御葬送所來云、只今事了、（〇中略）御骸骨、參議正光（參議奉仕此役、往古不聞）奉懸頸、前大僧都院源相副、可奉置金輪寺、而依日次不宜、暫安置禪林寺邊寺云々、十日辛巳、源宰相云、院源歸參、仍可候御骸骨所之由仰遣大僧都明救所云々、或云、明救被行阿彌陀護摩云々、黃昏退出、入夜景齊朝臣來云、副御骨權僧正慶圓、有可參入定、而申行步難耐之由不參云云、初定日、內藏頭公信可資候御骨、而依衰日不從候云々、是或所申也、　十一日壬午、院御骨初定可置金輪山、而改定尙安置圓成寺、過三箇年可奉置圓融院者、但相副御骨之人々、廿日可歸參云々、十二日癸未、故院御存生日、被問中宮左府、又被仰近習人々云、（〇中略）御骨可奉埋圓融院法皇御陵邊者、而忘却不行其事、相府思出又歎息、仍御骸骨暫奉安置圓成寺、過三箇年（大將軍在西方）可奉移圓融院法皇陵邊、亦一周忌間、於圓成寺被修阿彌陀護摩、（伴僧六口）又未奉移圓融院之前、三箇年間、以五箇口僧可被奉仕念佛者、　十四日乙酉、日來下臈上達部及殿上人、連日參圓成寺云々、奉訪御骨歟、不得其心、

　廿日辛卯、傳聞故院御骸骨、日來奉安置圓成寺、今日吉日、仍作如小韓櫃物（深盞）納御骨囊、作如倉代物（方二尺、一面有戶、）納辛櫃、辛櫃上造小屋居實形安置戶內、三箇年後、又更可奉移御存生之時御本意處云云、（御本意處、是圓融院御陵邊、）此御骸骨逗留件寺、又初爲埋金輪山、源中納言及陰陽師（光榮朝臣）他人々相共臨其處點定、畫繪圖造石卒都婆設置宮定雖未及鎮謝、已定其所了、天下云、是凶怪歟云々、以彼事可爲驗、至遺言不可被忌大將軍王相方者也、

〔權記〕寛弘八年七月九日庚辰、源中納言、權大僧都深覺、（□物在左大臣休息所）相共向圓成寺、令掃除暫可安御骨（〇一條）之處、辰剋終事了、藤納言、余、（〇藤原行成）兼隆、相公、公信、長經、廣業、及慶圓僧正、院源、隆圓、尋光、尋圓等、奉拾御骨、入之白壺、（四升許）僧正念誦光明眞言、大藏卿相公懸之頸、與前僧都院源奉移圓成寺、　十七日戊子、參圓成寺、源相公、昨相約同道、到中御門末同車參向也、院御骨奉安置此寺、（仁和寺法皇御室在塔西、僧房）

南端也、大藏卿宰相、左近少將朝任朝臣、式部丞成順、左衞門尉賴國等、自去九日祇候、又院源僧都迎候院、明救僧都相替祇候、修阿彌陀護摩、　七月廿日辛卯、辰刻左武衞相公被過、同車參圓成寺也、先是左京大夫長經朝臣參、參入者不著座、大藏卿相公候御在所、相公云、明救僧都、日者所奉修阿彌陀護摩、今朝結願退出云々、暫之源中納言、內藏頭公信朝臣、自一條院參、自早朝後院藏人大學屬內藏忠親、修理職小工大江宗吉、率工十人、於東堂奉仕可奉納御骨小堂、堂方一間、其樣如三昧堂、無庇、三面佐久利皮女、一面有戶、四角角木上葺板如塀上、其上四角置口形、中置葱花形、堂內置押覆桶、桶上押紙源納言、余、大藏卿、左兵衞督、內藏頭等、相共見之、又催促、此間東宮大夫源宰相被參、又藏人少納言能信參、左京權大夫兼貞朝臣、又相公日者候、仍爲其陪從、　左近少將朝任、式部丞成順、左衞門尉賴國等、日來候此寺、源公職、院殿上人、宮內乳母子、冷泉院判官代、今朝參入著座、　申終作事了、工部舁之置御在所南妻、大藏卿、朝任、成順、賴國等參上、轉舁置御在所南戶外、成順賴國退下、以上二人穢、自七八日可計廿日也、次開戶舁出本在戶內廚子一基、寺僧等舁出之、　大藏卿朝任二人、舁小堂入戶內、相公　開堂戶取出桶、更以奉納御骨壺入件桶、白瓷壺、茶垸器爲蓋、共以白革袋裹之、納斗五升、　事了大藏卿朝任穢、自今日可計卅日、作穢事、歸參院被定也、東寺阿闍梨安尊代明救僧都、自今日又奉仕護摩、件僧六口僧都奉仕時、伴僧如此、　御在所廊廿二間、其屋北妻爲壇所、明救者於御在所南戶外奉仕、而五口僧自今日可候、仍以北妻爲壇所、御期年間奉奉仕也、酉刻歸參、春宮大夫自東門被參、源納言自西門下車云、左丞相今朝命云自寺歸參人々、密々自廊可入云々、此間黃昏御念佛也、事了左丞相御宿所食後、更被參殿上東廂、丞相被示春宮大夫、齊　源中納言、俊　藤中納言、隆　余、幷前權大僧都院源、權大僧都隆圓、前權少僧都尋光、權律師懷壽尋圓云、圓融院法皇御陵邊可奉收之由、御存生有天氣、去九日早旦、於山作所丞相云、土郭幷法皇御陵側可奉置之由、御存生所被仰也、日者總不覺、唯今思出也、然而云々、而無益、事已定也云々、　然而有方忌之間、暫奉安置圓成寺御室、是仁和寺法皇御室也、華山法帝又御存生御此所、仍曰御室也、　自今年經三箇年、至其冬十二月長先不成勘文、豫推明年月日、無忌之日無食穢、僧俗無身忌、無指障之人各一人、以夜漏可奉遷彼御陵近側便宜之地、聽不及廣、密々行之、此卿

相僧綱皆蒙舊恩、可致懇誠之人々也、仍相共議也、此間內藏頭公信朝臣又來、在此座末、但兵部卿、忠右宰相中將、經左兵衛督、實源宰相、賴等、雖在此座、見不可入議中之氣色、豫退者、大藏卿、正右大辨道方朝臣、伊與介廣業朝臣、左近少將朝任等、雖不預此座、必可候彼役之由可令告知云々、嗚呼人命不定、吾生奈何、君恩必欲報、天命必可祈者也、事了歸宅、

〔類聚雜例〕長元九年四月十七日乙丑、天皇〇後一條崩於晝御帳前、　五月十三日庚寅、此日內府、〇中略右大辨等、參會關白御直廬、被定雜事、〇中略

一御骨可奉藏御葬所歟、將可奉遷他所歟事、

同被申云、見先例多奉渡寺邊者、相府命云、若可然者、圓融院宜歟、但今明年有大將軍忌、其間可御坐何所哉、人々被申云、御葬所近邊寺宜歟、卽召式部大輔資業朝臣被仰云、召具陰陽師時親幷檢非違使一兩、罷向自御所申方、可巡檢御葬所幷奉遷御骨之寺々及行路便宜、但賀茂四至內寺無便歟、慥可尋問之、

一於奉藏御骨之寺、一周忌間可修護摩幷御念佛事、

人々被申云、須自御葬送後朝被行件事等也、而大略見日次、連々不宜、頗雖延引、廿五日許被始如何、但於御念佛者、御葬送夜可被行、必不可求吉日者、〇中略及晚景資業朝臣時親等歸參申云、〇中略淨土寺內、有故僧正明救舊室、奉遷御骨甚有便宜、件寺卽爲賀茂四至外之由、土民等所稱申也者、

五月十九日丙申、以御骨許一升奉納茶垸壺、〇中略左中辨經輔朝臣奉懸之、奉渡淨土寺、前大僧正殿命在御前、權少僧都濟祇、內供雅圓、伊豫守章任朝臣、美濃守義通、右衞門佐貞宗、前丹後守憲房等參御供、

〔皇年代略記〕後冷泉治曆四年四月十九日庚申、崩於賀陽院、四十四、五月五日丙子、火葬船岡乾原、御骨安置仁和寺、

〔中右記〕大治四年七月十五日辛卯、今夕太上法皇〇白河御葬送也、〇中略

裹書云、奉拾御骨人々、仁和寺宮、長尾宮、法性寺座主、新法眼行慶、內大臣、治部卿、藤宰相長實、大貳

經忠已上八人、○中略

凡拾御骨之間、人々從者、亂入荒垣中、多奉見也、如是狼籍無制止人、誠以不便之由所傳聞也、　十六日、山陵事、辰刻也、仁和寺宮二人以下奉拾御骨、藤宰相長實、奉懸御骨奉送香隆寺、仁和寺宮二所、法性寺座主、新法眼、大貳經忠以下舊臣扈從、治部卿留御墓所、沙汰山陵云々、院御使出雲守經隆參入、鳥羽御塔中ニ可奉收也、是御遺言也、而及明年大將軍在南、仍如往年堀川院御時例、暫可御香隆寺也、及明年御骨可御件寺也、

〔長秋記〕天承元年七月九日癸卯、白河院御骨、被奉渡鳥羽御塔云々、○中略當日申時、供奉人著衣冠參會、治部卿能俊、申請觸穢、卷纓權中納言長實奉懸御骨、尾張守顯盛朝臣、左中將成通朝臣、備前守忠盛朝臣、北面者安藝守資成、大夫尉資遠、檢非違使季則等也、檢非違使盛兼本數也、然而依假不參、資成以下布衣也、入香隆寺御所、取御骨壺懸、裹絹如本物尚存役人皆昇堂上、出寺南行、不經幾程、許十町騎馬奉懸御骨、自是以後、他人々先後相雜不從伴、後聞治部卿又騎馬云々、雖不參御供、民部卿相率忠基敎長參門下、出御後歸洛、其身不穢云々、至御堂奉納畢、其儀所本被儲方四尺石筥也、底居大石鑿穴、其所安御骨壺、其上覆石蓋、其上置土、其上置銅御經、銅紙塗金字、銅筥、其上又置土、其上置金台兩阿彌陀佛像、安銅小塔中、其上覆石蓋、土底埋置、次第納置事、預以繩釣下居也、此後四面戶、以方尺等自裏打塞、工等自蓋階出外、指階下畢、依無供僧不讀經幷眞言、二人法親王、○覺法、聖惠、幷白河皇子、被參會鳥羽、皆不入堂中、禮部密語、法師子無役也、見御骨只今日許也、父子間有何禁忌哉云々、天明日出、事畢還云々、親王遙稱上皇仰不穢云々、後聞供奉人皆騎馬云々、

〔長秋記〕天永四年三月廿二日、堀河院御骨、自香隆寺令渡仁和寺御、○中略及酉時奉突埋、此後立石塔、三重其內安置法花經四卷經種々要文陀羅尼等、

〔兵範記〕久壽二年八月一日丙子、今日近衛院御葬送也、　二日丁丑、寅刻事了被拾御骨、行事行雅役、

後院獻壺折敷梠箸等、權僧正、大納言、右宰相中將、右京大夫、光隆朝臣、定隆、賴季等役之、次右京大夫奉懸之奉渡知足院、於彼院不動堂長使法印副御骨、自禮堂直入內陣、奉安本佛帳內、巳刻大納言歸向御葬所、築陵植樹被堀隍、宇治法印留知足院被致安置沙汰、

〔吉續記〕文永十年六月廿一日辛未、今日先院後嵯峨御骨、遷御法花堂也、○中略入法華堂內人々、可爲三十日穢云々、不入門內人々、三箇日穢也、御骨遷御儀、帥中納言奉懸御骨於頸前行、供奉人公卿花山院前右府、直衣上括殿上人宗親朝臣、親朝朝臣、永茂朝臣、仲直朝臣爲季、下北面五位行實同信友、已上布衣上括云々、

〔增鏡十一今日の日陰〕嘉元も三年になりぬ、萬里小路殿の法皇、龜山○中略又なやみとて龜山殿へうつらせ給ふ、○中略九月十五日の明ぼのにつひにかくれさせ給ひぬ、○中略法皇は五十七にぞならせ給ひける、御骨もこの院に法花堂をたてさせ給へば、龜山院とぞ申べかめる、

〔伏見上皇御中陰記〕文保元年九月五日、今曉前大納言經親卿、舊院執權也、於深草出家、卽直參御茶毗所、午刻事了之間、以御骨伏見奉懸頸、奉納後深草院法華堂云々、

〔後奈良院御拾骨之記〕弘治三丁巳年九月五日崩御　十一月廿五日卯時御拾骨傳奏廣橋殿

先傳奏廣橋大納言殿、長一尺四寸、橫四寸之板、絹ワナニ結、御肩ニカケテ板ワナニ乘、其上長橫四寸之御骨之桶、一尺四方之絹覆、御火屋御入之時、泉涌寺大工棟梁烏帽子上下御幕ヲアグル、內御入有テ御幕オロス、傳奏卽艮ノ方南向立在、次二尊院良純長老、當時門中之一和尙之長老之故也御火屋御入時、御幕之上下如先、是ハ乾ノ方南向立在、次遣迎院正慶論師、御拾骨之役者、御火屋入時、御幕ノ上下如先、是ハ御骨之御桶一尺四方、絹バカリ覆、兩手捧入ルナリ、御火屋之內、已上三人、餘ハ不入、御拾骨之役者ハ、御爐之正前行向、作法云々畢、

御役者論師長短之箸ヲ取、御拾骨ノ先、傳奏渡、後長老渡、



長老請取傾頭、又役者カヘス、役者請取、各御爐三迎之次第、傳奏論師長老三迎畢、各幕之上下ナシ、傳奏ハ卽直深草安樂行院御骨奉納也、

論師之御拾骨者、直伏見般舟三昧院マデ、兩手捧持佛前奉納、上下衣五條之袈裟著スルナリ、

〔山槐記〕永曆元年十二月六日庚戌、宮內卿師綱朝臣語曰、美福門院(〇鳥羽后得子)御骨、奉渡高野御山、依御遺言也、而鳥羽東殿、故院(〇鳥羽)令起立御塔二基、御一基被納故院御骨、今一基此女院御料也、然而可置高野之由有御意趣云々、而彼御塔三昧僧(天台僧也)六口、幷故院御塔三昧六口、合力奉留御骨、訴申何被貴弘法大師、可被賤傳敎大師哉、故院令定置御事、今更改易不當之由申之云々、仍遣重方被仰子細之處、申云、然者可分置御骨於兩所、此儀又以外事也、御骨雖不御坐、御塔三昧僧者、不怠之由能々被仰含、仍去二日遂奉渡高野畢云々、

〔榮花物語 二十一 後悔大將〕御骨〇藤原教通妻は、内供の君、さるべき人々ぐしておはす、との〇教道家にはまちたてまつらせ給て、あまうへ〇教通妻母まとはせ給、おなじことさよみなきたり、あはれにゆゝしかりける正月なりや、

〔榮花物語 三十 鶴の林〕とのばら、さべきそうなどあつまりて、御こつ〇藤原道長ひろはせ給て、かめにいれて、右中辨のりのぶ、かけたてまつりて、定基そうづもろともに、こはだにゐてたてまつりつゝ、さべきさしごろの人々みなまゐる、さてとのばらかへらせ給て、御だうにみなおはしましぬ、

〔行親卿記〕長曆元年八月九日庚午、今夜主殿内方、葬送船岡西方、〇中略天明後拾骨、先淡州義公拾之、設土瓶子甚少歟、而無益、乃打挫骨骨入之縫囊白單云々、令懸前瀧口長則、送山法華堂、於河邊作車洗手足耳目、禊除歸三條、

〔大神宮諸雜事記 二〕長久五年〇寬德元年十一月六日、臨時勅使、〇中略官幣奉納之程、俄雷電鳴響天、大雨如沃、卽令驚恠之程、彼此云、祭主請預官幣、叅下之程、以今月二日、字伊栗野ニシ天、戒者法師乃上道之間、彼等隨身乃物、衞士奪取天走前コト已了、時法師路邊留居、待付祭主天訴云、前陣龍侍執幣爲、被奪取物中裹物一丸、同被押取已了、彼不淨ノ物也、早被糺返者、問云、何者ゾト、法師乃云、安西郡之住人、字賀介藤原惟盛加妻加骸骨也、依存生之遺言天、比叡乃法華堂爲安持上也ト申畢、乍驚鈴賀川山中追付天、召問衞士男之處、實正之由陳申了、〇中略若依如此穢天、所雷電大雨歟ト云々、

〔定家朝臣記〕天喜元年六月十一月乙卯、鷹司殿〇藤原道長妻令薨給、廿二日有御葬送、〇中略平旦事了、奉埋御骨仁和寺北云々、美濃守業敏朝臣奉懸、僧侶兩三候御供云々、件所豫被行散供、尋代々例也、藤宰相經季、爲勅使參葬所弔問云々、

〔中右記〕永久二年四月廿二日丁卯、今夕京極殿、〇藤原師實妻麗子有御葬送事、〇中略御骨中宮大進重仲布衣朝臣奉懸、暫奉置故重任堂、是依被避大將軍方忌、明年許安置件堂者、

〔殿曆〕永久二年四月廿三日戊辰、卯時許事了、御骨〇藤原師實妻麗子をひろひ奉る、〇中略余〇藤原忠實脫素服乘

車、還路にて於河流許、有手禊事、先例也、

〔吾妻鏡 二〕治承五年〇養和元年閏二月四日庚戌、戌剋入道平相國〇淸盛薨〇九條河原口、盛國家、自去月廿五日病惱云々、遺言云、三箇日以後可有葬之儀、於遺骨者、納播磨國山田法華堂、每七日可修如形佛事、每日不可修之、

〔法然上人行狀畫圖 四十二〕翌年〇安貞二年也正月廿五日の曉更に、西山の粟生野の幸阿彌陀佛のもとにわたしたてまつりて茶毘をなすに、〇中略遺骨をひろひ、寶瓶にをさめたてまつり、幸阿彌陀佛にあづけおきて、おの〳〵退散しぬ、そののち正信房の沙汰として、彼芳骨ををさめたてまつらんために、二尊院の西の岸の上に雁塔をたて、貞永二年正月廿五日に、正信房御骨の御むかへに、粟生野の幸阿彌陀佛のもとにまかりむかふところに、幸阿彌陀佛は、御骨を庵室のぬりごめにふかくをさめおきたてまつりて、鎭西に下向しにけり、かぎをたづぬるに、ぬりごめをひらくべからざるむね、かたくいましめおきて、鎰をあづけおかれざるよし、留守のものこたへ申あひだ、仰天きはまりなし、相伴ところの門弟二十八人、面々に力をつくして、おして戸をひらかんとするにかなはず、むなしく歸なんとする時、御在世ならば、湛空が參じたるよし申いれんに、などか見參にいらで、むなしく歸るべきとなく〳〵くどき申されけるに、ぬりごめのくるゝなるやうにおぼえければ、門弟の中に、ちかく侍る信覺といふ僧に、いま一度戸をひきて見よと正信房申されければ、信覺たちよりて戸をひくに、相違なくあきにけり、歎申おもむきを聞食入られけるにこそとて、歡喜の涙をながし、御骨をむかへたてまつりて、塔中にをさめたてまつりぬ、

〔日蓮上人註畫讃〕示寂第三十

弘安五年九月、〇中略御ゆいげんの時、日朗等にの給はく、我死せば、死骸をかめに入、身延山におくれ、日朗のたまはく、一日半日の道ならば仰に任すべし、道すでに四五日におよぶ、しかもはうば

分骨

うじうまんの國なれば、御存生の間さへ道やすからず、たゞたびし奉り、御ゆいこつをのこさず身延山におくるべしと申上給へば、聖人もつともそれも可然と仰ければ、此御遺言に任せ、池上にて葬送申、身延山におくり給ふなり、

〔重編應仁記　一〕寬正四年夏ノ比ヨリ公方家〈○足利義政〉ノ御母君高倉殿御不例ニ因テ爲御祈禱靈社靈佛ヘ御立願アリ、〈○中略〉同八月八日ノ曉於高倉御所御母君御逝去有之、〈○中略〉卽御法號ヲ勝智院殿從一位萬山性壽大禪定尼ト稱シ奉リヌ、〈○中略〉扨モ勝智院殿ノ御骨ヲバ、日野殿ノ爲御沙汰高野山安養院ニ被仰付、奧ノ院ヘ納メ奉リ、同十八日、非常ノ大赦ヲ被行、罪人數多被免許、

〔全國民事慣例類集　葬埋〕旣ニ絕命ノ後、〈○中略〉棺ニ入レ火葬ス、翌朝白骨ヲ拾取シ、佛壇ニ置クコト、男ハ四十九日、女ハ三十五日ニシテ、終ニ墳墓ニ納ムル習俗ナリ、〈越中國婦負郡〉

〔全國民事慣例類集　休業〕三日目ニ灰葬ト唱ヘ、火葬ノ骨ヲ拾テ葬リ、其翌日ヨリ家業ニ就ク例ナリ、此間ハ門戶ニ裏返シノ簾ヲ垂レ、喪ヲ表スルコトナリ、〈三河國額田郡〉

〔文應皇帝外記〕嘉元三年秋、上皇〈○龜山〉病龜山宮、九月望、上皇崩、〈○中略〉闍毘後、藏仙骨於三所、淨金剛院、南禪寺、金剛峯寺、且順顧命也、

〔中原師夏記〕應安七年三月廿六日、舊院〈○後光嚴〉御遺骨被奉納所々、深草法華堂、天龍寺、〈金剛院〉天王寺、〈難波津〉高野山、泉涌寺、安樂光院、

〔後深心院關白記〕應安七年二月十五日辛亥、詣安樂光院、奉拜佛舍利、舊院〈○後光嚴〉御遺骨、〈入箱以錦裹之〉幷御位牌等有之、備供具、予以光明眞言念佛等奉廻向、可悲々々、　三月廿日乙酉、仲光來相語云、故院御仙骨、被收深草法華堂之外、又被收金剛院、可爲御塔頭之儀之由、武家內々令申云々、當院住持、此四五日之程、罷向泉涌寺、奉請取云々、金剛院者、故光嚴院爲御塔頭、春屋和尙構之歟、而相並御坐、可有便之由、武家申之云々、　四月十一日丙午、傳聞藤中納言、自高野上洛、今朝歸宅云々、卽遣人之處、爲

奉舊院御骨、密參詣高野、路次窮屈以外候、相扶可參申候、御使殊畏入之由返答云々、

〔親長卿記〕文明三年正月九日、舊院(○後花園)御初七日也、連日依惡日延引云々、先早旦詣悲田院、右衛門督季春同道、今日拾骨也、一向僧衆沙汰也、(酒海二、手箱一、錦袋筥一、用意也、)予金吾不拾御骨、(今日日野大納言勝光云、參仕之人、不可拾御骨、爲先規云々、予不見舊記、後引勘之處、參仕公卿殿上人、悉拾之、勿論也、彼卿依何事如此命哉、人々又無覺悟、無念也、)長老忍悲上人入錦袋被懸頸、(先規執柄懸之、今度號神宮傳奏不參、已御葬禮供奉也、爲之如何、)殘御拾骨入酒海、(今度新調小器也、)畢、裹薄衣安置佛前、有御受戒之儀、事畢予退出、參御寺、(仙骨入白壺、昇入御寺、安御位牌前、)即退出、　廿三日、今日舊院第三七日御佛事也、○中略今日被分散仙骨、(安置泉涌寺佛殿方丈室、院同鄰、棟各別之間、被分散之、)

〔神事雜類抄〕舊院(○後花園)仙骨、伏見大光明寺地藏殿之築山ニ、先年奉納由云、明後日十日般舟三昧院之石塔可奉渡之、如此一身燒灰仙骨一箱ニ入口被置之事候、既可堀起申之上者、可爲卅ケ日穢限存候、御所存可爲如何哉、且以可被注申旨被仰出候也、恐々謹言、

長享二七月八日　忠富

舊院玉骨、先年被安置大光明寺築山、然來十日、可被遷申般舟三昧院之石搭云々、此條可被守改葬法歟、爲全分御灰者、卅箇日穢勿論候乎、　兼俱

〔和長卿記〕明應九年十一月十二日壬戌、今朝卽御收骨、(○後土御門)儀也、上卿甘露寺中納言、(爲內傳奏、)事即有分散儀、一分如例、上卿納筥懸頸云々、(今度如何哉、)奉籠深草法花堂、(此法花堂者、昔者安樂行院内一堂也、於本院者退轉、此一堂相殘許也、仍堂修行衆帶法花堂云々、)又一分雲龍院、又一分般舟院、皆寺僧賜之、又一分山國常勝寺被籠之、雖然寺僧不參之間無其沙汰、比丘尼御所々々、於火屋面々取給之、雖非先規不及制之云々、已上又傳聞分、可無其實歟、

〔源平盛衰記三十九〕時賴橫笛事

橫笛ハ泣々都ヘ歸ケルガ、ツクヾヾ物ヲ案ジツヽ、如何ナル瀧口ハ悲キ中ヲ思切、カク心ヅヨク世ヲ背ゾ、如何ナル我ナレバ蜘ノ貝ノ風情ゾ、難面クナガラヘテ由ナキ物ヲ思ベキゾト思ケレ

バ、桂川ノ水上、大井川ノ早瀬、御幸ノ橋ノ本ニ行潜タリケル、朽葉色ノ衣ヲバ柳ノ朶ニヌギ懸、思フ事共書付テ同ジ枝ニ結置、歳十七ト申ニ河ノミクヅト成ニケリ、法輪近キ所ニテ、入道此事ヲ聞、河端ニ趣、水練ヲ語テ淵ニ入、女ノ死骸ヲ潜上、火葬シテ骨ヲバ拾ヒ頸ニ懸、山々寺々修行シテ此彼ニゾ納ケル、イカニモ都近ケレバコソ斯ル憂事ヲモ見聞トテ、高野山ニ登ッヽ奥ノ院ニ卒都婆ヲ立テ、女ノ骨ヲ埋ッヽ我身ハ寶幢院ノ梨坊ニゾ住シケル、

〔玉海〕文治四年二月廿九日乙未、後聞葬禮○藤原良通事了、慈德寺法印以下、拾其骨納土瓶、其一渡淨明寺、右馬權頭兼親掛也、經圓行宗兩闍梨、經泰等相具也、

〔萬松院殿穴太記〕御收骨の事あり、○足利義晴御起骨の佛事は江心西堂勤らる、擧經は湖月西堂なり、御骨は攝津國多田院と、高野山へと、分て籠められ侍り、高野へは千本の楊明坊請取て籠奉るとかや、

散骨

〔續日本後紀 九仁明〕承和七年五月辛巳、後太上天皇○淳和顧命皇太子○恒貞曰、○中略重命曰、予聞人没精魂歸天、而空存冢墓、鬼物憑焉、終以爲祟、長貽後累、今宜碎骨爲粉散之山中、於是中納言藤原朝臣吉野奏言、昔宇治稚彥皇子者、我朝之賢明也、此皇子遺敎、自令散骨、後世效之、然是親王之事、而非帝王之迹、我國自上古不起山陵、所未聞也、山陵猶宗廟也、縱無宗廟者、臣子何處仰、於是更報命曰、予氣力綿惙、不能論決、卿等奏聞嵯峨聖皇、以蒙裁耳、　戊子、此夕奉葬後太上天皇於山城國乙訓郡物集村、御骨碎粉、奉散大原野西山嶺上、

水葬

〔律疏 賊盜〕凡殘害死屍、○註疏略及弃屍水中者、各減鬪殺罪五等、○註略弃而不失、及髡髮若傷者、各又減二等、○疏略卽子孫於祖父々母々、家人奴婢於主者各不減、○略疏皆謂意在於惡者、謂從殘害以下、並謂意在於惡、如無惡心、謂若遺言水葬、及遠道屍柩、將骨還鄉之類、並不坐、

古事類苑

禮式部二十一

葬禮三

禮式部二十一

葬禮三

官給

〔令義解 九 喪葬〕凡百官在職薨卒、〇中略 親王及太政大臣、散一位、治部大輔監護喪事、(謂監視也、護助也、)左右大臣、及散二位、治部少輔監護、三位、治部丞監護、三位以上、及皇親、(謂不限有位無位、凡七歲以下是無服之殤、比於成人、禮數既異、即不合示禮制也、餘條亦准此例也、)皆土部示禮制、(謂職員令、贊相凶禮、是也、)內親王、女王、及內命婦、亦准此、(謂准此者、廣承當條之文、即下條以女准此者、亦同此例、其女司掌以上、及散事、同職事官例、即下條亦准此、其外官及使人、於所在身喪卒者、國郡官司、遣使監護也、)

凡皇親及五位以上喪者、並臨時量給送葬夫、

凡親王及三位以上、暑月薨者、(謂六月七月、)給氷、

凡官人從征行、(謂不限內外、但從征行皆是、其番上者、不在此限也、)及使人所在身喪、皆給殯斂調度、(謂賻物之外別給、但物多少、待式處分、〇雜律疏議所引喪葬令、調度下、有遞送至家四字、)

〔令集解 四十 喪葬〕古記云、皆給殯斂調度、謂不限高下給之、其數從別式、〇中略 京官六位以下、不給殯斂調度也、問外官不限高卑、皆給殯斂調度并賻物、京官六位以下給賻物、唯殯斂不給、若爲其理、答外官所以殯斂給者、以去家懸遠、故加給耳、〇中略 問國史生若爲、答同京官史生、不限有位无位、皆給殯斂調度也、

〔魏志 二 文帝〕延康元年十一月癸卯、令曰、諸將征伐、士卒死亡者、或未收斂、吾甚哀之、其告郡國、給槥櫝殯斂、送致其家、官爲設祭、

〔令義解三賦役〕凡丁匠赴役身死者給棺、在道亡者、所在國司、以官物作給、並於路次埋殯、謂殯者斂也、言斂而假葬、待家人至也、立牌、幷告本貫、若無家人來取者燒之、謂凶問既告、道路有程、待其迎接過限不來者、即於當所燒也、有人迎接者、分明付領、

〔三代實錄十八清和〕貞觀十二年十二月廿五日壬寅、制、○中略太宰府及管內國司卒死者、停殯斂料、只賜賻物、諸賻物之上、兼賜葬料者、同從停止、

〔續日本紀一文武〕三年七月癸酉、淨廣貳弓削皇子薨、遣淨廣肆大石王、直廣參路眞人大人等、監護喪事、皇子天武天皇之第六皇子也、

〔續日本紀十二聖武〕天平七年十一月乙丑、知太政官事一品舍人親王薨、遣從三位鈴鹿王等、監護葬事、其儀准太政大臣、

〔續日本紀三十五光仁〕寶龜九年五月癸酉、三品坂合部內親王薨、遣從四位下壹志濃王等、監護喪事、所須並官給之、

〔日本後紀二十四嵯峨〕弘仁六年六月癸亥、業子內親王薨、遣使監護喪事、賻絁卅一匹、布五十端、錢二百貫文、皇帝之第一女也、

〔續日本紀二文武〕大寶元年七月壬辰、是日左大臣正二位多治比眞人島薨、詔遣右少辨從五位下波多朝臣廣足、治部少輔從五位下大宅朝臣金弓等、監護喪事、

〔續日本紀十一聖武〕天平五年正月庚戌、內命婦正三位縣犬養橘宿禰三千代薨、遣從四位下高安王等、監護喪事、賜葬儀准散一位、命婦皇后之母也、

〔續日本紀十二聖武〕天平七年十一月己未、正四位上賀茂朝臣比賣卒、勅以散○此間恐有脫字位葬儀送之、天皇之外祖母也、

〔續日本紀十二聖武〕天平九年七月丁酉、勅遣左大辨從三位橘宿禰諸兄、右大辨正四位紀朝臣男人、就右大臣○藤原武智麻呂第、授正一位、拜左大臣、即日薨、遣從四位下中臣朝臣名丶等、監護葬事、所須官給、

〔續日本紀二十淳仁〕天平寶字元年正月乙卯、前左大臣正一位橘朝臣諸兄薨、遣從四位上紀朝臣飯麻呂、從五位下石川朝臣豐人等、監護葬事、所須官給、

〔續日本紀廢帝二十七〕天平神護二年三月丁卯、大納言正三位藤原朝臣眞楯薨、○中略 賜以大臣之葬、

〔續日本紀光仁三十五〕寶龜十年十二月己酉、中納言從三位兼勅旨卿侍從勳三等藤原朝臣繩麻呂薨、詔遣大和守從四位下石川朝臣豐人、治部大輔從五位上藤原朝臣刷雄等、就第宣詔、贈從二位大納言、葬事所須官給、并充鼓吹司夫、

〔日本後紀桓武五〕延暦十五年七月乙巳、右大臣正二位兼行皇太子傅中衛大將藤原朝臣繼繩薨、遣使監護喪事、葬事所須令官給焉、詔贈從一位、繼繩者、右大臣從一位豐成之第二子也、

〔續日本後紀仁明十九〕嘉祥二年正月丁丑、散位從三位百濟王慶命薨、有勅贈從一位、遣從四位上豐江王、從五位下美直王、從五位下藤原朝臣緒數、從五位下飯高朝臣永雄、監護喪事、

〔三代實錄清和九〕貞觀六年八月三日丁巳、是日仁明天皇女御正三位藤原朝臣貞子薨、○中略 遣參議大藏卿正四位下源朝臣生、散位從四位下弘宗王等、監護喪事、

〔日本書紀允恭十三〕十四年九月甲子、天皇獵于淡路島、○中略 爰男狹磯抱大蝮而泛出之、乃息絶、以死浪上、旣而下繩測海底六十尋、則割蝮實眞珠有腹中、其大如桃子、乃祠島神而獵之、多獲獸也、唯悲男狹磯入海死之、則作墓厚葬、

〔日本書紀雄略十四〕九年三月、紀小弓宿禰等、即入新羅、行屠傍郡、○中略 大將軍紀小弓宿禰値病而薨、五月、於是采女大海、從小弓宿禰喪、到來日本、遂憂諮於大伴室屋大連曰、妾不知葬所、願占良地、大連即爲奏之、天皇勅大連曰、大將軍紀小弓宿禰、龍驤虎視、旁眺八維、掩討逆節、折衝四海、然則身勞萬里、命墜三韓、宜致哀矜、充視喪者、又汝大伴卿、與紀卿等、同國近隣之人、由來尙矣、於是大連奉勅、使土師連小島作冢墓於田身輪邑而葬之也、

〔日本書紀十五清寧〕元年十月辛丑、葬大泊瀨天皇于丹比高鷲原陵、于時隼人晝夜哀號陵側、與食不喫、七日而死、有司造墓陵北、以禮葬之、

〔日本書紀二十敏達〕十二年十月、恩率參官臨罷國、○百濟時竊語德爾等言、計吾過筑紫許、汝等偸殺日羅者、吾具白王、當賜高爵、身及妻子、垂榮於後、○中略德爾等晝夜相計、將欲殺時、日羅身光有如火焰、由是德爾等恐而不殺、遂於十二月晦、候失光殺、日羅更蘇生曰、此是我駈使奴等所爲、非新羅也、言畢而死、屬是時有新羅使、故云爾也、天皇詔贄子大連、糠手子連、令收葬於小郡西畔丘前、

〔土津靈神言行錄上〕寛文十一年十一月、是月令云、諸士死而無所歸、則宜助其葬、　十二年四月三日、令云、步卒死于江府、則宜與金葬之、死者腰刀衣類、則可遺于妻子、不可漫之、

辭官給

〔續日本後紀十七仁明〕承和十四年十月戊午、二品有智子內親王薨、遺言薄葬、兼不受葬使、　十一月己巳、尙藏從二位緖嗣女王薨、○中略薨時遺命不受葬使、

〔文德實錄五〕仁壽三年六月癸亥、一品太宰帥葛原親王薨、○中略朝廷監喪葬儀如常、王家推謝、專從儉薄、不敢違遺令也、

〔三代實錄六淸和〕貞觀四年二月廿五日甲子、无品有子內親王薨、淳和太后奏請不被任葬儀司、詞旨懇切、因而不任、輟朝三日、內親王者淳和太上天皇之女也、

〔三代實錄七淸和〕貞觀五年正月十九日壬午、無品大原內親王薨、不任緣葬諸司、以喪家固辭也、皇帝不視事三日、內親王者日本根子天排國高彥尊天皇○平城之皇女、

〔三代實錄七淸和〕貞觀五年正月廿一日甲申、無品純子內親王薨、不任緣葬諸司、以喪家固辭也、皇帝不視事三日、內親王者嵯峨太上天皇之皇女也、

〔三代實錄七淸和〕貞觀五年七月廿日庚戌、无品善原內親王薨、不任緣葬諸司、以喪家固辭也、皇帝不視事三日、內親王者桓武天皇之皇女也、

埋骼胔

〔三代實錄十一清和〕貞觀七年十一月廿八日乙巳、無品大井內親王薨、不任緣葬司、以喪家固辭也、

〔三代實錄十三清和〕貞觀八年六月十六日己丑、無品高子內親王薨、喪家固辭、故不任緣葬之司、

〔三代實錄四十九光孝〕仁和二年六月廿九日丁丑、是日三品紀伊內親王薨、不任緣葬之所司、以喪家固辭也、

〔續日本紀十二聖武〕天平九年四月辛酉、參議民部卿正三位藤原朝臣房前薨、送以大臣葬儀、其家固辭不受、

〔續日本後紀十三仁明〕承和十年七月庚戌、致仕左大臣正二位藤原朝臣緒嗣薨、依例遣使監護喪事、遺言不受焉、

〔文德實錄六〕齊衡元年六月丙寅、左大臣正二位源朝臣常薨、　丁卯、贈正一位、朝廷依舊遣監喪贈位使等、依有遺令、喪家確辭不受、

〔續日本紀四元明〕和銅二年十月癸巳、勅造平城宮司、若彼墳壠見發掘者、隨即埋斂、勿使露棄、普加祭酹、以慰幽魂、

〔類聚國史百七十三災異〕大同三年正月乙未、遣使埋斂京中骼胔、

〔類聚國史百七十三災異〕大同三年二月丙辰、勅、○中略頃者疫癘、死者稍多、屍骸無斂、露委路傍、甚乖掩骼埋胔之義、宜令諸國巡檢看養、一依先格、所有之骸、皆悉收斂焉、

〔日本紀略嵯峨〕弘仁九年四月丙子、是日詔曰、○中略令左右京職收葬道殣、掩骼埋胔、

〔續日本後紀十二仁明〕承和九年十月甲戌、勅左右京職東西悲田、並給料物、令燒斂島田及鴨河原等髑髏、總五千五百餘頭、　癸未、太政官充義倉物於悲田、令聚葬鴨河髑髏、

〔文德實錄二〕嘉祥三年十一月丙申、詔曰、○中略出羽州壤、偏應銅龍之機、邊府黎甿、空被梟禽之害、邑居震蕩、蹈厚載而不安、城櫓傾頹、想艱虞而益恐、○中略崩墻毀屋之下、所有殘屍露骸、官爲收埋、務申優恤、

改葬

○下略

〔三代實録 清和 十六〕貞觀十一年六月廿六日壬子、勅曰、○中略 而今旱雲渉旬、農民失望、班幣以遍群神、屈僧以祈之、雖然冥感未通、嘉應難至、朕之不德、百姓何辜、責躬寅畏、未知攸濟、其朕服御常膳等物、並宜減撤、左右馬寮秣穀、一切權絶、命左右京職、收葬道殣、掩骼埋胔、○下略

〔三代實録 陽成 四十三〕元慶七年正月廿六日癸巳、令山城近江越前加賀等國、修理官舍道橋、埋瘞路邊死骸、以渤海客可入京也、

〔昆陽漫録 五〕除骴

周禮蜡氏、下士四人、徒四十人、掌除骴、骴は骨の肉あるもの、除は埋みさるなり、これにて先王の仁政の及ぶ所見るべし、今升平の時にして、水死の尸ねは、埋め葬る人もなく、甚だ哀むべし、蜡氏の官を置きて埋めなば、誠に御仁政の一端なるべし、

〔延喜式 五 齋宮〕凡齋王將入大神宮之時、自九月一日迄卅日、京畿内伊勢近江等國、不得奉燈北辰及擧哀改葬、

〔日本書紀 推古 二十二〕元年九月、改葬橘豐日天皇、○用明 於河内磯長陵、

〔日本書紀 用明 二十一〕二年四月癸丑、天皇崩于大殿、七月甲午、葬于磐余池上陵、

〔續日本紀 孝謙 十八〕天平勝寶二年十月癸酉、太上天皇、○元正 改葬於奈保山陵、天下素服擧哀、

〔續日本紀 光仁 三十二〕寶龜三年八月丙寅、遣從五位下三方王、外從五位下土師宿禰和麻呂、及六位已下三人、改葬廢帝、○淳仁 於淡路、乃屈當界衆僧六十口、設齋行道、又度當處年少稍有淨行者二人、常廬墓側、令修功德、

〔續日本紀 桓武 三十九〕延暦五年十月甲申、改葬太上天皇、○光仁 於大和國田原陵、

〔日本後紀 桓武 十二〕延暦廿四年四月庚戌、任改葬崇道天皇司、

〔類聚國史 帝王三十五〕大同元年十月辛酉、令天下諸國、以今月十一日素服舉哀、改葬皇統彌照天皇、〇桓武 也、庚午改葬皇統彌照天皇於柏原陵、天皇〇平城 御前殿東廂下、群臣於前庭舉哀、春宮官屬於坊內、並朝夕二時文武百官素服一日、各在所職、不就哭位、

〔日本書紀 九神功〕爰伐新羅之明年春二月、皇后南詣紀伊國、〇中略 適此時也、晝暗如夜、〇中略 時有一老父曰、傳聞如是怪、謂阿豆那比之罪、問何謂也、對曰、二社祝者、共合葬歟、〇中略 乃開墓視之實也、故更改棺櫬、各異所以埋之、

〔日本書紀 二十敏達〕十二年十月、德爾等、〇中略 殺日羅、更蘇生曰、此是我駈使奴等所爲、非新羅也、言畢而死、屬是時有新羅使、故云爾也、天皇詔贄子大連、糠手子連、令收葬於小郡西畔丘前、〇中略 收縛德爾等、置於下百濟阿田村、〇中略 乃遣使於葦北、悉召日羅眷屬、賜德爾等、任情決罪、是時葦北君等、受而皆殺投彌賣島、日羅移葬於葦北、

〔多武峯緣起〕天智天皇八年己巳十月十日乙卯、內臣〇藤原鎌足 病急、帝臨私亭、親問所患、〇中略 同十六日辛酉、薨于淡海之第、年五十六、〇中略 有定惠和尚、〇鎌足子 在唐時夢云、吾身忽居談峯、父大臣告言、吾今上天、汝此地建寺塔、修淨業、吾降神當嶺、擁護後葉、流布釋教、定慧和尚、爲起塔婆先公墳墓之上、攀登清涼山、移取寶池院十三重塔、以靈木一株、或云栗木云々 爲其材木、定惠和尚、鬮儲十三重塔材木瓦等、欲歸朝處、依乘船狹、一重之具、留棄渡海、定惠和尚歸朝、謁弟大臣不比等、問言、大織冠聖靈御墓所何地哉、答攝津國島下郡阿威山也、和尚言、平生有約契、即具大織冠御約言幷在唐間夢狀、大臣聞之信伏、稽首涕泣不已、和尚引率廿五人、參阿威山墓所、堀取遺骨、手自懸頸、即落淚言、吾是天萬豐日天皇〇孝德 太子、宿世之契、爲陶家子、役人荷土、共攀登談峯、和尚舉請談峯、奉瘞御骨、其上起塔歎言、材瓦不備、所願何遂、漸及十二重、歎息無措、夜半雷電霹靂、大雨大風、忽然天晴、明朝見之、材瓦積重、形色無異、知飛來也、和尚感然伏地、見聞奇異、經年之後、塔南建三間四面堂、號妙樂寺、此乃定惠和尚之所建也、今講堂是也、以

之爲多武峯寺之草創耳、

〔文德實錄一〕嘉祥三年五月壬辰、追贈流人橘朝臣逸勢正五位下、詔下遠江國、歸葬本鄉、(○中略)初逸勢之赴配所也、有一女、悲泣步從、官兵監送者、叱之令去、女晝止夜行、遂得相從、逸勢行到遠江國板築驛、終于逆旅、女攀號盡哀、便葬驛下、廬于喪前、守屍不去、乃落髮爲尼、自名妙冲、爲父誓念、曉夜苦至、行旅過者、爲之流涕、及詔歸葬、女尼負屍還京、時人異之、稱爲孝女、

〔權記〕寬弘八年七月十一日壬午、酉剋向松前寺、亥四剋改葬先妣(○藤原行成母)幷源中納言(○行成外祖父保光)御骸骨、去長德元年正月廿九日、先妣卽世、同年五月九日納言又薨逝、先妣瞑目、當在世之日、納言素不許火葬、仍於件寺垣西之外、造玉殿安之、卽是納言在世日被行事也、納言定(○定恐在誤)世之時、又思遺言、同安御骸於此山岳之閑地、不得日辰、于今未改葬、去五日、招大炊頭光榮朝臣、示語可遂此事之由、依彼朝臣許諾此日改葬也、季信朝臣、理義朝臣、輔忠朝臣、茂信等從、余向寺、寺預僧邦祈、又知此事、剋限已至、先到北舍代下、令季信朝臣指火兆御棺、又到西倉代下、令輔忠朝臣、邦祈、幷理義朝臣等指火、遲明各事了、　十二日癸未、曉更以松脂幷油等、燒遺骨令成灰塵、卽入其灰於小桶、到鴨川(當近衛御門路末)投之。〇流水、令入海中、(于時辰剋許)小解除歸宅、

○按ズルニ、灰ヲ流水ニ投ズトハ、骨ヲ留メテ其殘餘ノ灰ヲ投ズルモノナラン、下文源平盛衰記併セ考フベシ、

〔小右記〕長德五年九月廿八日丁未、來月十日故女御(○婉子女王)改葬事可行、其料石卒都婆造立、今日令給料物、(三石)招禪林寺口師申合女御改葬雜事、　十月九日戊午、明日故女御改葬、依有方忌、下官(○藤原實資)相從依可忌避、　十日己未、今夜故女御改葬地鎭事、仰奉平宿禰、以身代令行、石卒都婆今曉令運禪林寺、件事委附彼寺座主珍覺律師、以僧二口令親將納骨壺草等付高昭送彼寺、守隆朝臣高昭等、爲令見改葬事所差遣也、但不染穢氣色只餘二口僧、仍二口僧供、打造釘貫工及夫食等同送遣、可修

諷誦於禪林寺、

〔宇槐記抄〕仁平元年九月廿二日、故小河殿（○藤原忠實母全子、久安六年十一月薨）御骨、月來避王相方忌、御西法華堂、今日奉埋木幡、則是改葬也、仍余（○忠實子頼長）有十日假、三長（○頼長子兼長、師長、隆長）有七日暇、依公家御衰日不獻假文、依改葬事、去夜禪閤（○忠實）違方吉田邊、

〔源平盛衰記三十一〕貞能參小松殿墓附小松大臣如法經事

貞能ハ（○中略）ニ京ノ戀シク候ヘバ、歸上テ、敵アラバ討死シテ、同クハ骸ヲ都ニサラシ侍ベシ、敵ナクバ、又コソ歸參ラメトテ、只一人都ヘ歸上リ、法住寺ノ邊ニ一宿シタリケレ共、人々モ引返シ給ハズ、家々ハ今朝（○壽永二年七月二十五日）皆燒拂給ヌ、何ニツケ、イヅクニ有ベシ共覺エザリケレバ、貞能、小松殿（○平重盛）ノ御墓ニ參テ、夜深ルマデハ忍音ニ念佛申シ、頓證菩提ト回向シテ後申ケルハ、君ハ加樣ノ事ヲ兼テ被知召テ、熊野權現ニ御祈誓候テ、疾ク失サセ給ケルニヤ、此世中如何成立候ベキ、賢人ノ大臣トコソ君モ臣モ思奉シ事ニ侍シカ、草ノ蔭マデモ遠キ守トナラセ給テ、御一門、今一度都ヘ返入給ヘトテ、生タル人ニ物ヲ云樣ニ、淚ヲ流シテ申ケリ、（○中略）其後墓堀起シ、水ニ流スベキヲバ賀茂河ニ入レ、持スベキヲバ持セテ、甲斐々々敷ハ云タリケレ共、泣々福原ヘコソ下リケレ、（○中略）貞能後ニ聞エケルハ、西國ノ軍破レテ、下野國宇都宮ヘ下向ス、彼宇都宮ハ、外戚ニ附テ親シカリケレバ、尋下テ出家シテ肥後入道ト云テ、如法經ヲ書寫シテ、大臣殿ノ後生ヲ弔奉ケリ、

〔參考源平盛衰記三十一〕按小松寺舊記、貞能依宇都宮朝綱薙髮、法名以典、世號肥後入道、後至常州那珂郡、埋重盛遺骨於寺、（寺號小松寺）又於行方郡若梅村、結茅閑居、終其身云々、

〔吾妻鏡四〕元曆二年（○文治元年）八月卅日庚辰、二品（○源頼朝）御素意、偏以孝爲本之處、未盡水菽之酬、而平治有事、嚴閤（○頼朝父義朝）夭亡給之後、以每日轉讀法華經被備沒後追福、而今極榮貴給之故、今被企一伽藍作事、可安先考御廟於其地之由、存念御之間、潛被伺奏此由、法皇（○白河）亦叡感勳功之餘、去十二日仰

判官、於東獄門邊被尋出故左典厩首、相副正淸(號鎌田二郎兵衞尉)二首、江判官公朝、爲勅使下之、今日公朝下着、仍二品爲令奉迎之、參向自稻瀨河邊給、御遺骨者、文覺上人門弟僧等奉懸頸、二品自奉請取之還向、于時改以前御裝束(練色水干)著素服給云云、

〔吾妻鏡 五〕文治元年九月三日癸未、子剋故左典厩御遺骨、(副正淸首)奉葬南御堂之地、路次被用御輿、慈眼房專光房等、令沙汰此事也、武藏守義信、陸奥冠者賴隆御輿、二品(著御素服給)參給、御家人等多雖供奉、皆被止郭外、只所被召具者、義信賴隆惟義等也、武州者、平治逆亂之時、爲先考御共、(于時號平賀冠者)賴隆者、亦其父毛利冠者義隆、相替亡者之御身被討取訖、彼此依思食舊好、被召拔之云云、

〔法然上人行狀畫圖 四十一〕上野國より登山し侍ける並榎の竪者定照、ふかく上人念佛の弘通をそねみ申て、○中略ことを山門にふれ、衆徒の蜂起をすゝめ、貫首(淨土寺僧正圓基)にうたへ、奏聞をへて、隆寛幸西等を流刑せしめ、あまさへ上人の大谷の墳墓を破却して、死骸を鴨河にながすべきよし結構す、つひに勅許ありしかば、嘉祿三年六月廿二日、山門より所司專當をつかはして廟堂を破却せんとす、○中略その夜、法蓮房覺阿彌陀佛等、妙香院の僧正(良快、月輪殿御息)の禪室に參して、この事しばらくしづまれりといふとも、山門のいきどほりなほむなしからじ、はやく改葬すべきよしを申入るゝに、この義もともよろしかるべしと仰られければ、やがてこよひ人しづまりてのち、ひそかに御棺の石の櫃の蓋をひらくに、面像いけるがごとくして、異香芬馥せり、貴しなどもいへばさらなり、おの〳〵隨喜の淚をぞながしける、西郊にわたしたてまつるに、路次の障難をおそれて、宇津宮の彌三郎入道蓮生、鹽谷の入道信生、千葉の六郎大夫入道法阿、澁谷の七郎入道道遍、頓宮の兵衞入道西佛等、出家の身なりといへども、法衣のうへに兵杖を帶して御ともに參じければ、家子郎等などあひしたがひける程に、軍兵濟々として前後にかこめり、遺弟以下、御ともゝ參ずる人一千餘人、おの〳〵淚をながし、かなしみをぞふくみける、嵯峨にわたしおきたてまつ

りて、在所を隱密すべきよしおの／＼佛前にちかひて退散しにけり、こゝに山徒本意をとげざる事をいきどほりて、なほ遺骨のゆくへをたづぬるよしきこえしかば、同廿八日の夜、忍のびて廣隆寺の來迎房圓空がもとにうつしおきたてまつりて、その歲もくれにけり、翌年安貞二年也正月廿五日の曉更に、西山の粟生野の幸阿彌陀佛のもとにわたしたてまつりて荼毘をなすに、紫雲そらにみち、異香もともはなはだし、諸人渇仰のおもひいよ／＼切なり、荼毘所の西にあたりて、もとはひとつ、すゑは三またなる松あり、紫雲彼松にかゝりて、みどりをかくすほどなりけり、紫雲の松となづけて、いまにあり、かの荼毘所のあとには堂をたて、、御墓堂と號して念佛を修す、いまの光時寺これなり、

〔古今著聞集八孝行恩愛〕山に慶澄注記といふ僧有けり、件の僧の伯母にて侍ける女は、心すき／＼しくて好色はなはだしかりけり、〇中略病をうけて命をはりける、〇中略法性寺邊に土葬にしてけり、其後廿よ年をへて建長五年の比、改葬せんとて墓をほりたりけるに、すべて物なし、猶ふかくほるに、黃色なる水のあぶらのごとくにきらめきたるぞ涌出ける、汲ほせども干ざりけり、其油の水を五尺計りほりたるに猶物なし、底に棺せんと覺ゆる物鋤にあたりければ、堀出さんとすれどもいかにもかなはざりければ、其あたりを手を入てさぐるに、頭の骨わづかに一寸ばかりわれ殘て有ける、好色の道罪ふかきことなれば跡までもかくぞ有ける、其女の母をも同時に改葬しけるに、遙にさきだち死にたりける者なれども、その體かはらでつゝきながらにありける、

〔台德院殿御實紀四十五〕元和三年三月九日、京より東照大權現に正一位の御追贈宣下ありしかば、御所〇德川秀忠こと更御感悅大方ならず、 十一日、久能山の神柩を、下野國日光山にうつしまゐらせらるゝにより、土井大炊頭利勝は、江戸より駿州に趣く、 十五日、かねては三年が間、久能山に神靈を安置し、宰相賴宣卿の祭祀を受たまひ、その後日光山に御垂跡あるべしとの御あらま

しなりしかど、三年を待せらるべきにあらずと思召旨有て、頼宣卿へ議せられ、日光山神廟經營をいそがせ給ひしかば、このほどはや成功せしにより、けふ神柩を發引せらるべきに定まる、大僧正天海は、先達て登山し、其他山門の碩學、東關の僧綱凡僧悉くまゐりあつまる、寅刻本多上野介正純、土井大炊頭利勝、松平右衛門大夫正綱、板倉內膳正重昌、秋元但馬守泰朝等三百餘騎、雜兵一千人を具して御迎に參る、すべて大織冠鎌足公、和州多武峯に改葬の先蹤によることゝて、大僧正天海、みづから鋤鍬とりて其事を行ふ、　四月八日、靈柩を日光山奥院巖窟中に安置し奉る、大僧正天海、兩部習合の念想を密凝し、五眼具足の印明を授進らす、すべて今度の御事、天海大僧正うけたまはりしは、大職冠鎌足公を攝津國阿威山より和州多武峯にうつしける時、定恵和尙執行ひしためしによれり、かつは天照大神宮も倭姬命に神託ありて、五十鈴の川上に志づまりまし、八幡宮も行敎和尙の三衣に御影をうつされて、豐前の宇佐より山城の男山にはうつらせたまひける、神迹聖縱、かれといひこれといひ、古今めでたきためしを引てとり行はれける所とぞ聞えし、又御遷宮行はるゝため、京よりは梶井門跡最胤法親王、正覺院權僧正豪海參向あり、奉幣使は淸閑寺宰相共房卿、宣命使は中御門宰相尙長卿、阿野宰相實顯卿、奉行は廣橋頭辨兼賢、烏丸右中辨光賢、著座には廣橋大納言兼勝卿、三條大納言實條卿、日野大納言資勝卿、西園寺中納言公益卿、冷泉中納言爲滿卿、西洞院宰相時慶卿、被物の殿上人は正親町少將季俊、水無瀨少將兼俊、北畠少將親顯、藤谷少將爲賢、藤右衛門佐永慶、高倉少將嗣良、園少將基音、東坊城少納言長維、綾小路侍從高有、竹內刑部少輔孝治、樋口侍從信孝、平松侍從時庸、土御門左衛門佐久脩、唐橋民部少輔在村、壬生極﨟孝亮、差次藏人某、淸藏人賢忠、堂供養の著座、廣橋三條日野三大納言、四辻宰相季繼、奉行は柳原頭辨茂光、竹屋左少辨光長等登山す、諸大名みな御宮前に石燈を進獻す、　十四日、夜神位を假殿にうつし奉る、　十六日、夜神位を假殿より本社にうつし奉り、大僧正天海密法を修

す、御追號の宣命使中御門宰相尙長卿宣命をよむ、天皇我詔旨止良万、故柳營大相國源朝臣爾詔倍止勅命乎聞食止宣、振威風於異邦之城比、施寬仁於率土之間須、行善敎而德顯留、身既沒而名存勢利、崇其靈氏、東關乃奥城爾大宮柱廣敷立氏、吉日良辰乎擇定氏、東照乃大權現止上給比治賜布、此狀乎平介久安介久聞食氏靈驗新爾、天皇朝廷乎寶位無動久、常磐堅磐爾夜守日守爾護幸給比氏、天下昇平爾、海內靜謐爾、護恤給倍度恐美恐美毛申賜者久止申、御贈位の宣命は阿野宰相實顯卿これをよむ、宣命、東照大權現贈正一位勅宣、抑太政大臣御諱、幼少之從昔、敵之園陣仁間連、其園於遁連、若年之從時心武久、長年志而古代之名將爾越而、武威於日本仁輝志、逆亂於治、庶民安閑之思乎成須、是彼朝臣我忠功多利、依而在世之忠義尾感志、神靈登仰、東之守護神无多羅事尾勅命有而、宣旨尾宣理宣給布、淸閑寺宰相共房卿、奉幣の事つかうまつる、院使は西洞院宰相時慶卿、女院使は平松侍從時庸、この日御所、日光山にのぼらせ給ひ、公卿殿上人拜謁せらる、

〔日本書紀十四雄略〕坂合黑彥皇子、深恐所疑、竊語眉輪王、遂共得間、而出逃入圓大臣宅、○中略縱火燔宅、於是大臣與黑彥皇子、眉輪王、俱被燔死、時坂合部連贄宿禰、抱皇子屍而見燔死、其舍人等、闕名字也收取所燒、遂難擇骨、盛之一棺、合葬新漢槻本南丘、

〔日本書紀十五顯宗〕穴穗天皇○安康三年十月、天皇父市邊押磐皇子、及帳內佐伯部仲子、於蚊屋野為大泊瀨天皇見殺、因埋同穴、　元年○顯宗二月壬寅、詔曰、先王遭離多難、殞命荒郊、朕在幼年、亡逃自匿、猥遇求迎、升纂大業、廣求御骨、莫能知者、詔畢與皇太子億計泣哭憤惋、不能自勝、是月召聚耆宿、天皇親歷問、有一老嫗進曰、置目、知御骨埋處、請以奉示、置目、老嫗名也、○中略於是天皇與皇太子億計、將老嫗婦、幸于近江國來田綿蚊屋野中、掘出而見、果如婦語、臨穴哀號、言深更慟、自古以來、莫如斯酷、仲子之尸、交橫御骨、莫能別者、爰有磐坂皇子之乳母、奏曰、仲子者、上齒墮落、以斯可別、於是雖由乳母相別髑髏、而竟難別四支諸骨、由是仍於蚊屋野中、造起雙陵、相似如一、葬儀無異、

〔日本書紀 十八安閑〕二年十二月己丑、是月葬天皇于河内舊市高屋丘陵、以皇后春日山田皇女及天皇妹神前皇女合葬于是陵、

〔日本書紀 十八宣化〕四年二月甲午、天皇崩于檜隈廬入野宮、時年七十三、十一月丙寅、葬天皇于大倭國身狹桃花鳥坂上陵、以皇后橘皇女及其孺子合葬于是陵、皇后崩年傳記無載、孺子者、蓋未成人而薨歟、

〔日本書紀 二十一崇峻〕四年四月甲子、葬譯語田天皇○敏達於磯長陵、是其妣皇后所葬之陵也、

〔日本書紀 二十七天智〕六年二月戊午、合葬天豐財重日足姬天皇○齊明與間人皇女於小市岡上陵、是日以皇孫大田皇女葬於陵前之墓、

〔續日本紀 三文武〕大寶三年十二月癸酉、奉誄太上天皇、○持統中略、是日火葬於飛鳥岡、壬午、合葬於大內山陵、○天武陵

〔榮花物語 二十七衣の珠〕むつかしうてうせ給へれば、○後朱雀后藤原嬉子產ニテ薨ズルヲ云フ御ゆどのなどして、やがてちご君も、おなじ物にいれ奉りて、かきそへて、御ふところにいだきたる樣にてふし奉るほど、おほかたたれも、さかしう見たてまつるべきにあらず、またまゐりよる人もすくなし、

〔日本書紀 九神功〕爰伐新羅之明年春二月、皇后南詣紀伊國、○中略適是時也、晝暗如夜、已經多日、時人曰、常夜行之也、皇后問紀直祖豐耳曰、是怪何由矣、時有一老父曰、傳聞如是怪謂阿豆那比之罪也、問何謂也、對曰、二社祝者、共合葬歟、因以令推問巷里、有一人曰、小竹祝與天野祝共爲善友、小竹祝逢病而死之、天野祝血泣曰、吾也生爲交友、何死之無同穴乎、則伏屍側而自死、仍合葬焉、蓋是之乎、乃開墓視之實也、故更改棺櫬、各異處以埋之、則日暉炳爍、日夜有別、

〔日本書紀 二十三舒明〕以三十六年三月、○推古中略、大臣○蘇我蝦夷將殺境部臣、而興兵遣之、境部臣聞軍至、率仲子阿椰、出于門、坐胡床而待、時軍至、乃令來目物部伊區比以絞之、父子共死、乃埋同處、

〔大江俊興記〕明和三年三月十日、豐次郎義、今曉寅刻比ゟ俄病氣甚不出來、○中略卯刻比相果、病姓子

厚葬

クサ也、殘念々々、

一正行院江人遺、先存生之體ニ而、宿坊迄遣、夫より葬送之義相催、尤先達而、小兒之格式有之候故、其由申遣ス、墓所、秋幻童子之墓所江合葬之由申遣、今日日柄惡敷、明十一日暮、早々可送之旨申談置也、

〔過庭紀談五〕凡ソ夫婦一壙ノ内ヘ並ベ葬ルヲ合葬トモ祔葬トモ云、婦人ヲ舅姑ノ墓ニ並ベ葬リテ、別ニ墓ヲ起スヲモ祔葬ト云、又婦人ノミナラズ、男子タリトモ、先祖父母ノ墓ノ傍ニ葬ルヲモ祔葬ト云、又父子兄弟、其外ノ親族、或ハ師弟ノ類ニ至ルマデ、オモダチテ主タル人ノ墓ノ側ニ從ヘ葬テ、別ニ墓ヲ起スヲ從葬ト云、君ノ墓ノ側ニ臣子タル者ヲ葬テ、別ニ墓ヲ起スヲ陪葬ト云、又何ノワケ有リテ同姓異姓ヲ論ゼズ、ウチ混ジ一所ニ葬テ、一ツ塚ヲ起スヲ義塚ト云、

〔榮花物語後悔大將二十一〕この月〇萬壽元年正月の十四日に、御さうそうあるべし、〇藤原敎通妻、中略、さて御車よせたれば殿、〇敎通大納言どの、〇藤原公任内供の君など、むつまじくおぼす人々などしてかきのせたてまつり、このたびばかりのことゝおぼしめせば、さの、御車に、さの人のあるかぎり、五位十人ばかりつけさせ給、御心の内はこれあるまじき事なり、世にやんごさなきには、藏人へたる人をこそすめるに、後のそしり有なんとおぼしながら、なほ御心ざし、また世におはしながらへ給はましかば、みくしげどの、人なみ〳〵におはしまさましかば、いかにめでたき御ありさまならましなどおぼさるゝに、なに事も忘のこさせ給ふべきやうもなし、殿、大納言どのなど、えもいはぬものをきさせ給て、御くるまの忘りにあゆませ給、辨もつかまつらんと覺しの給へど、御いみの日なるにあはせて、まだゆゝしうおぼして、とゞめたてまつらせ給、

〔總見院殿追善記〕十五日、〇天正十年十月御葬禮之作法、諸人目を驚すところなり、先棺槨をば金紗金襴を以裹之、軒の瓔珞、欄干の擬寶珠、皆金銀を鏤、八角の柱、丹靑を盡し、八面の間、紋桐を彩色なり、沈

香を以佛像を刻彫し、棺槨の中へ納たてまつる也、彼蓮臺野縱橫廣大に作らせ、四門の幕、白綾白段子、方百二十間の中火屋あり、如法華堂造也、總廻に埒を結、羽柴小一郎長秀、警固大將として、大德寺より千五百丈の間、警固の武士三萬許、路の左右を守護し、弓箭鎗鐵炮を立續、葬禮場には、秀吉分國の人數は云に及ばず、合體の侍悉馳集、其外見物の貴賤、雲霞のごとし、御輿の前轅は池田小新、後轅は、羽柴御次丸昇之、御位牌は相公弟八男御長麻呂、御大刀秀吉持之、彼不動國行也、兩緋に相連者三千餘人、皆烏帽子藤衣を著す、五岳を始として、洛中洛外の禪律八宗九宗の僧侶、幾千萬といふことをしらず、威儀を調へ、三衣を刷ひ、叉手間許、集會行導、五色の天蓋は日にかゞやき、一樣の旗は風に飜り、沈水の煙は雲の如く、燈明の光は星に似たり、供具盛物、龜足造花に至まで、七寶壯嚴せり、寔九品淨刹もかくやとばかり、三千の佛弟子五百羅漢も目前にあるがごとし、佛事役者之次第、鎖龕怡雲大和尚、掛眞玉仲大和尚、起龕古溪大和尚、念誦春屋大和尚、奠湯明寂大和尚、奠茶仙岳大和尚、取骨竹澗大和尚、秉炬咲嶺和尚大禪師、

其偈曰、四十九年夢一場、威名說什歷存亡、請看火裏烏曇鉢、吹作梅花遍界香、喝一喝

其時秀吉、御次麻呂相共に燒香し、十月十五日巳刻、無常の烟となし奉る、誠是一生別離の悲なり、誰有てかこれを歎かざらむ、

〔續視聽草四集七〕豐公葬式之記

慶長三戊戌年八月十八日未ノ刻、城州伏見城におゐて薨じ給ふ、尊骸は同八月廿九日夜、洛陽東山阿彌陀が峯豐國山の後の山也に茶毘し奉る、高野山木食興山上人と、叡山の座主導師なり、○中略御葬式者、翌年二月十八日、御道筋者、酉上刻伏見御城御出棺、大和大路北江、七條通り東江、大佛江入らせ給ふ、此間左右に矢來をかけ、壹町毎に四箇所土臺をつき、此上にて篝をたき、其兩側に挑灯透間なく、人家軒毎に天幕をうたせ、道には白砂を敷、總門より龕堂まで疊を敷詰め、其用意嚴重なり、御龕は鈴を八方に造り、

金銀瑶珞を垂れ珠玉を鏤め、美麗を盡す、當日前まで四日登城なり、翌日より三日之間雜人之拜見を許す、右御式之跡、雜人拜見群集す、黑田甲斐守、片桐主膳正、飯田主殿頭差添、其外五十人ツヽ非常を制せらる、御道場者大佛殿の東に假屋を立、正面四間之龕堂をたて、左右に棧敷を掛る、御棧敷の左之方者勅使朝拜殿一位、下ニ德川殿其外大小名、右之方者秀賴公、政所殿、淀殿、其外前田殿初大小名、御導師者木食興山上人、其外諸侯不殘納經拜禮す、

右之通借用寫置候以上

〔人見雜記〕舜水、〇中略明人、卒前に及び、遺言せし趣あり、處士の身、隨分薄葬したきものなり、去りながら明朝恢復もあらば、兒孫等我柩を迎へ取るべし、其時日本の耻辱にならぬ程にはなし置玉ふべしと云り、水戶公も其趣に隨ひ、厚く葬事を調へたまふと、實養兩父君の話なり、

〔北溪隨筆〕上世死ヲ送ル道甚厚、天子ノ崩御ナルヤ、天下ノ民ヲ集メテ、數年ヲ經テ山陵ヲ作ル、庶人ニ至テモ准之、葬送ノ厚キコト風トナレリ、所々アル塚穴ナド云モノニテシラレタリ、上古壽百歲二百歲ヲ持ツトキニハ、シカアリテモ手ニ及ビタルナラン、人壽漸クツヾマリ、人事漸ク多キ世ニ至リテハ、墳墓ヲ作ルニ財力ツキテ、上下共苦樣ニナリタレド、風俗ニナリタルコトハ止メガタキモノユヱ、彌增ニ盛ニナリタルナラン、天下ハ力ツクコトニ弊苦ム、此折節佛道渡、成佛ノ說ヲトナヘ、此身ハ假ノモノ也、ハヤク朽テ跡ヲノコスベカラズ、佛ニ供、寺ヲ尊テ、タマシヒ天堂ニ生ルヽト云コトヲ說、ナニガ厚葬ニクタビレタル處ヘ以テ來テ說ル故、アリガタキ法ナリト上ヨリ下歸之、カケマクモ畏、天子ノ御身ヨリ、薄葬ノ令ヲ下シ玉ヒ、喪ヲ短スルノ遺詔ナド被下、ハテハ火葬ニサヘスルコトニナリタリ、

〔喪葬私論〕薄葬從儉約と遺詔し給ふ事は、推古天皇崩じ給ひし時、五穀不登、百姓甚飢たれば、興陵勿厚葬とて、竹田皇子の陵に合葬せさせ給ふ、持統天皇も停素服擧哀、百官釐務如常、喪葬務從儉

約と遺詔し給ふ、元正、嵯峨、淳和の帝も同じ遺詔あり、淳和天皇は國忌荷前をもとゞめ玉へり、聖武の帝は佛道に入給へば、葬送の儀、佛を用させ給ふ、嵯峨の帝は別に送終とて儉約の制を立給へり、これ皆聖帝の遺詔にして、人民を煩はし給はぬ御いつくしみより出たる事なれば、頗御美事なれども、萬乘の君かくのみ葬を薄し、喪を廢し、情を奪て簡便に從がはしめ給はゞ、天下の百姓たれか喪をつとむるものあらん、終に孝道を失ひ、愼終追遠の禮永くすたれぬべし、然るを後世效ふて遺詔の例とし給ふはいかにぞや、(我ともがらに至るまで遺訓によりて葬送は儉約に從ふもよしとすべし、從て居喪の禮を失ひ哀を忘れんは罪淺からぬなり、)

〔日本書紀二十二推古〕三十六年三月癸丑、天皇崩之、(時年七十五)即殯於南庭、　九月戊子、始起天皇喪禮、是時群臣各誄於殯宮、先是天皇遺詔於群臣曰、比年五穀不登、百姓大飢、其爲朕興陵、以勿厚葬、便宜葬于竹田皇子之陵、　壬辰、葬竹田皇子之陵、

〔日本書紀二十七天智〕六年二月戊午、合葬天豐財重日足姬天皇(○齊明)與間人皇女於小市岡上陵、(中略)皇太子(○天智)謂群臣曰、我奉皇太后天皇之所勅、憂恤萬民之故、不起石槨之役、所冀永代以爲鏡誡焉、

〔續日本紀二文武〕大寶二年十二月甲寅、太上天皇(○持統)崩、遺詔勿素服擧哀、内外文武官釐務如常、喪葬之事、務從儉約、

〔續日本紀八元正〕養老五年十月丁亥、太上天皇(○元明)召入右大臣從二位長屋王、參議從三位藤原朝臣房前、詔曰、朕聞萬物之生、靡不有死、此則天地之理、奚可哀悲、厚葬破業、重服傷生、朕甚不取焉、朕崩之後、宜於大和國添上郡藏寶山雍良岑造竈火葬、莫改他處、謚號稱其國其郡朝庭馭宇天皇、流傳後世、又皇帝攝斷萬機、一同平日、王侯卿相及文武百官、不得輙離職掌追從喪車、各守司視事如恆、其近侍官并五衞府、務加嚴警、周衞伺候、以備不虞、　庚寅、太上天皇又詔曰、喪事所須、一事以上、准依前勅、勿致闕失、其轜車靈駕之具、不得刻鏤金玉繪飾丹青、素薄是用、卑謙是順、仍丘體無鑿、就山作竈、芟棘開

塲、即爲喪所、又其地者、皆殖常葉之樹、即立刻字之碑、　十二月己卯、崩于平城宮中安殿、　乙酉、太上天皇葬於大和國添上郡椎山陵、不用喪儀、由遺詔也、

〔續日本後紀九仁明〕承和七年五月庚辰、停五日節、以後太上天皇〇淳和不豫也、　辛巳、後太上天皇、顧命皇太子〇恒貞曰、予素不尚華飾、况擾耗人物乎、斂葬之具、一切從薄、朝例凶具、固辭奉還、葬畢釋縗、莫煩國人、葬者藏也、欲人不覩、送葬之辰、宜用夜漏、〇中略夫人子之道、遵教爲先、奉以行之、不得違失、　癸未、後太上天皇、崩于淳和院、　戊子、勅遣左近衛少將從四位下橘朝臣岑繼、及四衛府監尉志已下三十二人於淳和院、監護裝束山作養民司等、遺詔不受矣、

〔續日本後紀十二仁明〕承和九年七月丁未、太上天皇〇嵯峨崩于嵯峨院、春秋五十七、遺詔曰、余昔以不德、久忝帝位、夙夜兢々、思濟黎庶、然天下者、聖人之大寶也、豈但愚憊微身之有哉、故以萬機之務、委於賢明、一林之風、素心所愛、思欲無位無號、詣山水而逍遙、無事無爲、翫琴書以澹泊、後太上皇帝陛下〇淳和寄言古典、强我尊號、再三固辭、遂不獲免、生前爲僞、歿後如何、因玆除去太上之葬禮、欲遂素懷之深願、故因循故事、別爲之制、名曰送終、曰夫存亡、天地之定數、物化之自然也、送終以意、豈世俗之累者哉、余年弱冠、寒病嬰身、服石變熱、頗似有驗、常恐夭傷不期、禁口無言、是以略陳至志、凡人所愛者生也、所傷者死也、雖愛不得延期、雖傷誰能遂免、人之死也、精亡形銷、魂無不之、故氣屬於天、體歸于地、今生不能有堯舜之德、死何用重國家之費、故桓司馬之石槨、不如速朽、揚王孫之贏葬、不忍爲之、然則葬者藏也、欲人之不得見也、而重以棺槨、繞以松炭、期枯骨於千載、留久容於一壙、已乖歸眞之理、甚無謂也、雖流俗之至愚、必將咲之、豐財厚葬者、古賢所諱、漢魏二文、是吾之師也、是以欲朝死夕葬夕死朝葬、作棺不厚、覆之以席、約以黑葛、置於床上、衣衾飯唅、平生之物、一皆絕之、復斂以時服、皆用故衣、更無裁制、不加纏束、著以牛角帶、擇山北幽僻不毛地、葬限不過三日、無信卜筮、無拘俗事、謂諡誄飯含呪願忌魂歸日等之事、夜刻須向葬地、院中之人、可著喪服而給喪事、天下吏民不得著服、而供事今上者、一七日之間、得服衰経、過此早釋、

〈擧其近臣出入臥内者、應著素服、除亦准此、〉一切不可哀臨、挽柩者十二人、秉燭者十二人、並衣以麁布、從者不過廿人、〈謂院中近習者、〉男息不在此限、婦女一從停止、穿坑淺深、縱横可容棺矣、旣已下了、不封不樹、土與地平、使草生上、長絕祭祀、但子中長者、私置守冢、三年之後停之、〈○中略〉他兒不效此、後世之論者、若不從此、是戮屍地下、死而重傷魂而有靈則寃悲冥途、長爲怨鬼、忠臣孝子、善述君父之志、不宜違我情而已、他不在此制中者、皆以此制以類從事、　戊申、擇山北幽僻之地定山陵、〈○中略〉卽日御葬畢、

〔續日本後紀 二十 仁明〕嘉祥三年三月癸卯、奉葬天皇於山城國紀伊郡深草山陵、遺制薄葬、綾羅綿繡之類、並以帛布代之、鼓吹方相之儀、悉從停止、

〔文德實錄 十〕天安二年八月甲子、夜葬大行皇帝〈○文德〉於田邑山陵、殯葬之禮、一如仁明天皇故事、但有方相氏、

〔三代實錄 三十八 陽成〕元慶四年十二月四日癸未、是日申二刻、太上天皇〈○淸和〉崩於圓覺寺、〈○中略〉遺詔火葬於中野、不起山陵、使百官及諸國不擧哀停素服、亦勿任緣葬之諸司、喪事所須總從省約、

〔續古事談 一 王道后宮〕寛平法皇〈○宇多〉ハ、コトニ儉約ヲ好ミ給ケリ、御アトノ事、葬禮ノ事ナド仰セラレオキケルニハ、筵ニテ棺ヲ裹ミテ、葛ニテコレヲカラゲヨトゾノ給ケル、重明親王李部王記ニカキ給ヘルナリ、

〔增鏡 三 藤衣〕隱岐〈○後鳥羽〉には、〈○中略〉延應元年といふ二月廿二日、六そぢにてかくれさせ給ひぬ、〈○中略〉ちかき山にて、れいのさほうになしたてまつるも、むげに人ずくなに、心ぼそき御ありさま、いとあはれになん、御骨をば能茂といひし北面の入道して、御ともにさぶらひしぞ、くびにかけたてまつりて、宮こにのぼりける、

〔太平記 三十九〕法皇御葬禮事
此時ノ新院光明院殿モ、山門ノ貫主梶井宮モ、共ニ皆禪僧ニ成セ給テ、伏見殿ニ御座有ケレバ、急

ギ彼〇光嚴遷化ノ山陰ヘ御下リ有テ、御茶毘ノ事共取營セ給テ、後ノ山ニ葬シ奉ル、哀レ仙院芝山ノ委鎭ナラマシカバ、百官泪ヲ滴テ、葬車ノ御迹ニ順ヒ、一人悲ヲ呑テ虞祔ノ御祭ヲコソ營セ給フベキニ、浩ル御事トダニ知人モナキ山中ノ御葬禮ナレバ、只徒ニ鳥啼テ挽歌ノ響ヲソヘ、松咽デ哀慟ノ聲ヲ助ル計也、

〔時慶卿記〕文祿二年正月六日、過シ曉、院〇正親町をば盜出シ奉リ、泉涌寺ヘ成シマヰラセ候、乍御忍ト申、北面さへ不付奉、公卿雲客ノ事ハ不及申、誰ノ計トハ知テドモ、太上天皇御在世ノ御時世ノ御覺コトナリシニ、今朝ノ御幸、彼寺僧一兩人供奉申、金物モナキ俄ノ張輿ニ乘セ奉リシ事、御痛敷サ、又ハ計申セシ人ノ行衛ヲソロシ〳〵ト見シ人ハ申候、

〔續日本紀十聖武〕神龜五年九月丙午、皇太子薨、　壬子、葬於那富山、時年二、〇中略爲太子幼弱、不具喪禮、但在京官人以下、及畿內百姓素服三日、諸國郡司、各於當郡擧哀三日、

〔文德實錄一〕嘉祥三年五月辛巳、嵯峨太皇太后〇橘嘉智子崩、　壬午、葬太皇太后于深谷山、遺令薄葬、不營山陵、

〔文德實錄十〕天安二年五月乙亥、是日宮內卿從三位高枝王薨、高枝、四品中務卿伊豫親王第二子也、〇中略不蓄財產、遺令薄葬、

〔三代實錄四十六陽成〕元慶八年九月廿日丁丑、恒貞親王薨、不任葬司、以喪家不經奏聞殯斂既訖也、〇中略遺命薄葬、務從率儉、

〔續日本紀三十一光仁〕寶龜元年十月丁酉、從二位文室眞人淨三薨、一品長親王之子也、歷職內外、至大納言、年老致仕、退居私第、臨終遺教、薄葬不受鼓吹、諸子遵奉、當代稱之、

〔續日本紀三十六光仁〕天應元年六月辛亥、大納言正三位兼式部卿石上大朝臣宅嗣薨、〇中略臨終遺教薄葬、薨時年五十三、時人悼之、

經久而葬

〔河海抄二夕顔〕類聚國史云、弘仁八年八月、從三位橘朝臣常子薨、延暦年中、授從四位下、宮車晏駕、○桓武出家爲尼、太上天皇○嵯峨敬重之、叙從三位、及于病篤遺言、氣絶則以席裹葬、莫須時日棺斂、薨時年三十、

〔文德實錄九〕天安元年九月丁酉、正四位下右京權大夫兼山城守長岑宿禰高名卒、○中略平生令子孫云、吾家清貧、曾無斗儲、毛於瞑目之日、必從薄葬之義、卒於官、時年六十四、

〔三代實錄十四清和〕貞觀九年三月九日己酉、前陸奧守從五位上坂上大宿禰當道卒、○中略當道家行廉正、輕財重義、在任有清理之稱、境内肅如、民夷安之、居貧无資、臨於棺斂、所有布衾一條、而遺愛在人、至今見思、　十月十日乙亥、右大臣正二位藤原朝臣良相薨、○中略遺言令薄葬、單衾覆棺、

〔三代實錄十五清和〕貞觀十年閏十二月廿八日丁巳、左大臣正二位源朝臣信薨、○中略時年五十九、遺命薄葬、殯斂之日、人多不知、平生於北山嶺下造立一屋、中置一床、居棺其上、固閉四壁、令人畜不據犯之、

〔大鏡五太政大臣伊尹〕このおとゞは、一條攝政と申き、○中略いとわかくて、うせおはしましたる事は、九條殿○藤原師輔の御遺言をたがへさせ給へるけとぞ人申ける、されどいかでかは、さらでもおはしまさむ、御葬送の事をむげに略定にかきおかせ給へりければ、いかでか、いとさはとて、れいの作法におこなはせ給ふとぞ、それはことわりの御心わざぞかし、

〔春記〕長暦三年十月七日甲子、參河守○經相卽世日也、寅剋許家女來、告參州病急由、○中略寅三剋許氣息已絶了、○中略今日、戌剋可入棺、葬送十日也、恒例立名代行此事也、勘文中可入之物等不過差太少者、希有之事也、

〔日本書紀三神武〕七十有六年三月甲辰、天皇崩于橿原宮、時年一百二十七歳、明年秋九月丙寅、葬畝傍山東北陵、

〔日本書紀四安寧〕三十三年○綏靖五月、神渟名川耳天皇○綏靖崩、其年七月乙丑、太子○安寧卽天皇位、　元

年十月丙申、葬神渟名川耳天皇於倭桃花鳥田丘上陵、

○按ズルニ、前帝ノ崩後ヲ承ル天皇ハ、其ノ殯斂中ニ、先ヅ踐祚卽位ノ禮ヲ行ヒ、然ル後崩後凡ソ一箇年ヲ經テ前帝ヲ葬ルコト、上代普通ノ例ナリ、

〔日本書紀四孝安〕八十三年八月、觀松彥香殖稻天皇（○孝昭）崩、元年正月辛卯、皇太子（○孝安）卽天皇位、三十八年八月己丑、葬觀松彥香殖稻天皇于掖上博多山上陵、

〔先代舊事本紀七孝昭〕八十三年天皇崩、明年八月葬於腋上博多山上陵、

〔日本書紀四孝元〕七十六年（○孝靈）二月、大日本根子彥太瓊天皇（○孝靈）崩、元年正月甲申、太子（○孝元）卽天皇位、六年九月癸卯、葬大日本根子彥太瓊天皇于片丘馬坂陵、

〔日本書紀四開化〕五十七年（○孝元）九月、大日本根子彥國牽天皇（○孝元）崩、十一月壬午、太子（○開化）卽天皇位、五年二月壬子、葬大日本根子彥國牽天皇于劒池島上陵、

〔日本書紀七成務〕六十年（○景行）十一月、大足彥天皇（○景行）崩、元年正月戊子、皇太子（○成務）卽位、二年十一月壬午、葬大足彥天皇於倭國之山邊道上陵、

〔日本書紀九神功〕爰伐新羅之明年二月、皇后領群卿及百寮、移于穴門豐浦宮、卽收天皇（○仲哀）之喪、從海路以向京、十月甲子、群臣尊皇后曰皇太后、是年也大歲辛巳、卽爲攝政元年、二年十一月甲午、葬天皇於河內國長野陵、

〔日本書紀八仲哀〕九年二月丁未、天皇忽有痛身、而明日崩、於是皇后及大臣武內宿禰、匿天皇之喪、不令知天下、則皇后詔大臣及中臣烏賊津連、大三輪大友主君、物部膽咋連、大伴武以連曰、今天下未知天皇之崩、若百姓知之、有懈怠乎、則命四大夫、領百寮令守宮中、竊收天皇之屍、（○中略）是年由新羅役、以不得葬天皇也、

〔日本書紀十三安康〕三年八月壬辰、天皇爲眉輪王見弒、三年後乃葬菅原伏見陵、

〔日本書紀十七繼體〕八年〇武烈十二月己亥、小泊瀨天皇〇武烈崩、元無男女、可絕繼嗣、　元年〇繼體二月甲午、是日卽天皇位、　二年十月癸丑、葬小泊瀨稚鷦鷯天皇于傍丘磐杯丘陵、

〔日本書紀二十一崇峻〕四年四月甲子、葬譯語田天皇〇敏達於磯長陵、

〔日本書紀二十敏達〕十四年八月己亥、天皇病彌留、崩于大殿、

〔日本書紀二十六齊明〕七年正月壬寅、御船西征、〇中略七月丁巳、天皇崩于朝倉宮、　八月甲子朔、皇太子〇天智奉從天皇喪、還至磐瀨宮、是夕於朝倉山上有鬼、著大笠臨視喪儀、衆皆嗟怪、　十月己巳、天皇之喪、歸就于海、於是皇太子泊於一所、哀慕天皇、　乙酉、天皇之喪、還泊于難波、　十一月戊戌、以天皇喪殯于飛鳥川原、自此發哀至于九日、

〔日本書紀二十七天智〕六年二月戊午、合葬天豐財重日足姬天皇〇齊明與間人皇女於小市岡上陵、

〔和長卿記〕明應九年九月廿八日庚辰、今曉丑刻許、自局有使者云、主上〇後土御門漸可有御事之樣也云云、　十月四日辛酉、今夜御入棺也、　十一月十一日壬戌、今夜御葬禮也、

〔鹽尻一〕衰世天子の踐祚　後土御門院明應九年に崩御、朝廷衰微の日なりしかば、殯葬の御備なかりし故、靈柩徒らに內裏の黑戶に置奉りし事既に四十餘日、漸にして泉涌寺に葬り奉る、

〇按ズルニ、後土御門天皇ノ御葬送延引ノ事ハ、用途ノ條ヲ參看スベシ、

〔松平記二〕永祿九年七月四日、故三好修理長慶の御葬禮有、三箇年かくし申候得共、最早松永が萬事儘なれば、終に河內國眞觀寺にて御死骸を葬禮申、三年の間納置申候間、殊之外損じけると聞えし、

〔甲陽軍鑑十二〕一四月〇天正元年十一日未の刻より、信玄公御氣相あしく御座候て、〇中略既に死脈うち申候につき、信玄公御分別あり、〇中略それがしとぶらひは無用にして諏訪の海へ、具足をきせて、今より三年目の亥の四月十二日に沈め候へ、〇中略三年の間、ふかく謹しめとありて、御めをふ

さぎ給ふが、〇中略おの〳〵御遺言のごとく仕候へども、家老衆談合のうへ、諏訪のうみへ沈め申事ばかり不仕、三年め四月十二日、長篠合戰一月前に、七佛事の御とぶらひ仕り候、

〔總見院殿追善記〕秀吉御次丸を供し、重て上洛、本能寺相公、〇織田信長御腹をめされし所に分入、涙を押へ、暫愁歎限なし、秀吉所生元來貴にあらず、然を相公第五男御次麻呂を猶子として下さるゝ、此上は秀吉も同袍合體の侍なり、御葬禮なくば有べからず、されども歴々の年寄衆、殊御連枝多し、依之一端その憚を存し、既に六月〇天正十年より冬十月に至るまで、聊の法事をも行はず打過ぬ、猶々是をおもふに、昨友は今日の怨讎、昨花は今日の塵埃なれば、誰か來日を期せん、誠に下賤下劣の貧士貧女も其跡を弔習ひあり、況人君においてをや、今此事を相勤ずは、千變萬化の世間の行未測がたし、仍十月初より、龍寶山大德寺において、一七日の法會を催す、〇中略就中十五日御葬禮の作法、諸人目を驚すところなり、

〔續視聽草四集七〕豐公葬式之記

慶長三戊戌年八月十八日未ノ刻、城州伏見城において薨じ給ふ、尊骸は同八月廿九日夜、洛陽東山阿彌陀が峯豐國山の後の山也に茶毘し奉る、高野山木食興山上人さ、叡山の座主導師なり、〇中略御葬式者翌年二月十八日、御道筋者酉上刻伏見御城御出棺、大和大路北江、七條通り東江大佛江入らせ給ふ、

〔豐臣秀吉譜下〕慶長三年八月十八日、前關白太政大臣從一位豐臣秀吉、薨於伏見城、享年六十三、遺言曰、我卽世則先姑秘之、淺野長政、石田三成、速赴筑紫、使朝鮮在陣諸將悉歸本朝、退兵而可也、〇中略言畢而瞑、葬於洛東南邊阿彌陀峯、藏甲冑兵器于棺中、木食興山上人監經始之事、築墓其嶺、構祠其麓、

〔義演准后日記〕慶長四年四月十三日、今夕太閤御所、伏見御城ヨリ大佛阿彌陀ガ峯ニ奉移之、隱密也、上人御迎ニ參云々、社頭之遊カ、重て可尋之、

遠葬

〔家世實紀二十〕寛文十二年〇壬子十二月十九日、土津様〇保科正之御逝去、廿二日、土津様御遺體江戸御發輿、十二月晦日、土津様御遺體會津御著輿、
延寶元年〇癸丑三月十四日、御骨骸、三之丸假屋より猪苗代御假屋へ御移、廿六日、殿様猪苗代へ御著、廿七日、土津様御骨骸、見禰山へ御葬送、

〔日本書紀四孝靈〕百二年〇孝安正月、日本足彥國押人天皇〇孝安崩、九月丙午、葬日本足彥國押人天皇于玉手丘上陵、元年正月癸卯、太子〇孝靈即天皇位、

〔日本書紀四開化〕六十年四月甲子、天皇崩、十月乙卯、葬于春日率川坂本陵、

〔日本書紀六垂仁〕九十九年七月戊午朔、天皇崩於纒向宮、十二月壬子、葬於菅原伏見陵、

〔日本書紀十二履中〕六年三月丙申、天皇玉體不悆、水上不調、崩稚櫻宮、十月壬子、葬百舌鳥耳原陵、

〔日本書紀十五仁賢〕十一年八月丁巳、天皇崩于正寢、十月癸丑、葬埴生坂本陵、

〔日本書紀十八安閑〕二年十二月己丑、天皇崩于勾金橋宮、時年七十、是月葬天皇于河內舊市高屋丘陵、

〔日本書紀二十一崇峻〕二年四月癸丑、天皇崩于大殿、七月甲午、葬于磐余池上陵、

〔日本書紀二十一崇峻〕五年十一月乙巳、馬子宿禰、〇中略使東漢直駒殺于天皇、是日葬天皇于倉梯岡陵、

〔日本書紀二十五孝德〕白雉五年十月壬子、天皇崩于正寢、十二月己酉、葬于大坂磯長陵、

〔續日本紀三十稱德〕寶龜元年八月癸巳、天皇崩于西宮寢殿、丙午、葬高野天皇〇稱德於大和國添下郡佐貴鄉高野山陵、

〔續日本紀三十六光仁〕天應元年十二月丁未、太上天皇〇光仁崩、〇中略明年正月己未、正三位藤原朝臣小黑麻呂率誄人奉誄、上尊諡曰天宗高紹天皇、庚申、葬廣岡山陵、

〔日本後紀十三桓武〕大同元年三月辛巳、天皇崩於正寢、四月庚子、葬於山城國紀伊郡柏原山陵、

〔類聚國史三十五帝王〕天長元年七月甲寅、平城天皇崩、己未、葬楊梅陵云々、

〔續日本後紀 九仁明〕承和七年五月癸未、後太上天皇（淳和）崩於淳和院、戊子、此夕奉葬後太上天皇於山城國乙訓郡物集村、

〔續日本後紀 十二仁明〕承和九年七月丁未、太上天皇（嵯峨）崩于嵯峨院、春秋五十七、遺詔曰、〇中略葬限不過三日、戊申、卽日御葬畢、

〔續日本後紀 二十仁明〕嘉祥三年三月己亥、帝崩於淸涼殿、癸卯、奉葬天皇於山城國紀伊郡深草山陵、

〔文德實錄 十〕天安二年八月乙卯、帝崩於新成殿、甲子、夜葬大行皇帝於田邑山陵、

〔三代實錄 三十八陽成〕元慶四年十二月四日癸未、是日申二刻、太上天皇（淸和）崩於圓覺寺、七日丙戌、是夜酉四刻、奉葬太上天皇於山城國愛宕郡上粟田山、

〔扶桑略記 二十二光孝〕仁和三年八月廿六日丁卯、天皇聖體乖豫、〇中略是日巳二刻天皇崩於仁壽殿、九月二日壬申、葬山城國葛野郡後田邑陵、

〔玉海〕建久三年三月十五日丁亥、此日後白河院御葬送也、〇十三日崩、雖爲重日、依遺詔所被行也、（第三日可行之由被仰置云々）其儀待賢門院建春門院等例云々、

〔敎有卿記〕應永五年正月十三日、午剋法皇崩于伏見仙洞、（御年六十五、追號崇光院、御遺誡云々、）十七日、卯剋以御葬禮儀、被送申大光明寺、信俊朝臣奉行也、兼日可勘進日時之由仰前陰陽頭在弘朝臣、勘申云、來十九日、廿二日、廿七日、但數日延引不可叶歟、然者十七日（毛）頗雖爲不快、可被宥用歟云々、此子細被仰國師（空谷、元來當宗御歸依之上、御落飾之時、爲御戒師之間被仰之、）之處、來廿二日、武家御衰日之間、每月爲御祈禱有觀音懺法、殊年始御祝著之時分、難奉行之由被申、切之被延引件日以後之條、玉體漸御損色之間、先今日以御葬禮之儀、被送申大光明寺之後、可有御入龕、其後事不可被知聞之由被治定了、來廿三日、又可被葬申山作所者、凶事可及兩度之條有憚歟、其儀剋限、各布衣著藁沓參候庭上、次寄御輿、次乘御御輿、到大光明寺、卽御入龕、奉安本佛殿、次各退出、自今夜御龕僧（禪僧）六人祗候、

〔迎陽記〕應永五年正月廿三日辛未、傳聞今日伏見法皇〇崇光御葬禮也、已及十一日、昨日爲室町殿御誕生日、空谷國師可有執沙汰之間、昨日以後可然之由被申計云々、於大光明寺有其儀、所作人等如此、

御茶毘佛事之衆

下火國師　鹿苑院　起龕德叟　雲居庵　鎻龕心岩　等持院　收骨椿庭　楞伽院　奠主月庭　大光明寺

〔榮花物語〕十二玉村菊一條殿のあまうへ〇源雅信妻穆子ひごろ御心ちれいならずおぼさるれば、殿のうへ〇穆子女、藤原道長妻倫子、わたらせ給て見奉らせ給ふに、この御事れいの御なやみには似させ給はず、〇中略傳殿〇倫子妹夫藤原道綱も常にまゐり給て、あけくれさぶらはぬ事をなげかせ給ふ、つひにむなしくならせ給ぬれば、あつかひきこえさせ給へるかひなく、かなしと思しまどはせ給ふ、〇中略かくてかのあまうへのおきてさせ給ひける事は、わがみかど〇後一條の御事はじめに、かくなりなん事のをりふしもくちをしき事なれば、しばしはさるべきさまにて、山寺などにをさめておかせ給へ、雲けぶりとも、此世のだいじののちに、心やすくせさせ給へと聞えおかせ給へれば、げにあはれに、よくも思しの給ひけるかなとて、さやうにぞ思しおきてさせ給ひける、九日ばかりにぞ、さやうにおはしますべかりける、そのほどはにうくわん〇入棺といふ事してぞおはしまさせ給ける、あけくれの御物まゐり御てうづなど、むかしのさまの事ども、いみじうかなしく思しめさるゝ、程に、〇中略かくて九月〇長和五年にぞ、あまうへ觀音寺といふ所におはしまさせ給ふ、うへの御前も御おくりにおはします、さてそこに、さべきさまにてをさめ奉らせ給、御はてまで御念佛つかうまつるべく、そこら僧共によろづをおきてさせ給、

〔言成卿記〕弘化三年六月十一日、秉燭前相公〇西大路隆明薨去、去昨十日容體書幷薨去届等、武家へ被出云々、

無屍而葬

發格云々、河端丸太町歷[illegible][illegible]亭、雖極密、於眞實於此亭葬去之旨、一門人々内々三位被爲噂云々、依之葬禮相構云々、右外表之處、於本宅梨木町葬去之旨也、何樣之例非無云々、但此頃土用中、仍近日可有密葬、是又於密葬ハ、自丸太町亭出棺、本葬土用後自本宅出棺云々、

〔言成卿記〕天保十四年八月十四日、若王子前大僧正盈源、昨十三日遷化、眞實去十日遷化、然而先御持僧御理、擬其後依所勞隱居願、稱後華光院、後住附弟法性院〇若王子相續、其後披露、仍經時日、昨十三日遷化發格云々、不便々々、扨於本葬者、配下觸達等も有之、急ニ難遂行、依之今晩密葬云々、家公○山科言知予等行向、○狩衣家公未半刻比云々行向給、予申刻比行向了、正親町中將裏辻大夫等被行向云々、戌刻比、家公以下燒香後華光院棺前、出棺前修法始、了亥刻前出棺、密葬也、後住若王子、吉服而取竹杖云々、侯人以下吉服、家公予以下出門外出棺見送、了葬當院山嶺、

〔日本書紀〕七景行四十年、是歲日本武尊、○中略崩于能褒野、○中略即詔群卿命百寮、仍葬於伊勢國能褒野陵、時日本武尊化白鳥、從陵出之、指倭國而飛之、群臣等因以開其棺櫬而視之、明衣空留、而屍骨無之、於是遣使者追尋白鳥、則停於倭琴彈原、仍於其處造陵焉、白鳥更飛至河内、留舊市邑、亦其處作陵、故時人號此三陵曰白鳥陵、然遂高翔上天、徒葬衣冠、

〔源氏物語〕五十二蜻蛉かしこには、人々おはせぬ○浮舟をもとめさわげどかひなし、○中略かの心しれるどちなん、いみじく物を思給へりしさまを思出るに、身をなげ給へるとは思ひよりける、○中略しのびてありしさまをきこゆるに、いふひと○右近もきえいり、えいひやらず、きく○浮舟母心地もまどひつゝ、さはこのいとあらましとおもふ河にながれうせ給にけりと思ふに、いとゞ我もおち入りぬべき心地して、おはしましにけんかたをたづねて、からをだに、はか〴〵しくをさめんとのたまへど、さらになにのかひ侍らじ、行へもしらぬ大海の原にこそおはしましにけめ、○中略この人々ふたり○右近侍從して、車よせさせて、おましども、けぢかうつかひ給し御てうどゞも、みなながら、ぬぎおき給へる御ふすまなどやうの物をとりいれて、めのとごの大とこ、それがをぢのあざり、そのでしのむつまじきなど、もとよりしりたる老法師など、御いみにこ

もるべきかぎりして、人のなくなりたるけはひにまねびていだしたつるを、めのと母君は、いといみじくゆゝしとふしまろぶ、大夫うどねりなど、おどし聞えしものども、參りて、御さうそうのことは、殿〔大將〇薰〕にことのよし申させ給て、日さだめられて、いかめしうこそつかうまつらめなどいひけれど、ことさらにこよひすぐすまじ、いとしのびてと思ふやうあればなんとて、此車をむかひの山のまへなる原にやりて、人もちかうもよせず、このあないしりたる法師のかぎりしてやかす、いとはかなくてけぶりははてぬ、

〔橘窓自語 上〕丹波國龜山の在々の村にて、死者を密葬して、後に葬禮をおこなふ時をばからだびといへり、空茶火の心なるべし、

〔令義解 職員一〕治部省

卿一人、掌二本姓一、(中略)喪葬、

諸陵司

正一人、掌下祭二陵靈一、謂十二月奉二荷前幣一是也、喪葬、凶禮、諸陵、及陵戸名籍事上、佑一人、令史一人、土部十人、掌レ贊二相凶禮一、謂凶禮者、送レ終之禮、卽土師宿禰年位高進者、爲二大連一、其次爲二少連一、並紫衣刀劍、世執二凶儀一、其文多、故不レ載也、員外臨時取充、謂此長官之職掌、而於レ此注者、隨レ便起レ事、无二別例一、使部十人、直丁一人、

〔令集解 職員四〕喪葬凶禮、釋云、喪謂在レ家起レ哀也、葬謂送葬之也、喪葬之禮、謂二之凶禮一、朱云、喪葬凶禮者、未レ知此文只爲二一人一歟、若爲二臣下一歟、何、私案依二喪葬令一、皆可レ知二臣下喪葬一、〇中略、土部十人掌レ贊二相凶禮一、(中略)釋云、喪葬令、三位以上及皇親喪、皆土部示二禮制一、古記云、問、贊二相凶禮一、有レ限以不、答、喪葬令、三位以上及皇親喪、皆土部示二禮制一也、禮云、贊二相凶禮一者、就二手治二死者一也、與二凶禮及凶事一儀式全異也、員外臨時取充、(中略)釋云、此正職掌也、而注二土部下一者、是隨二便注一耳、穴云、臨時取二充人一、亦不レ見二其色一也、

〔禮記 雜記 下〕孔子曰、少連大連善居レ喪、三日不レ怠、三月不レ解、期悲哀、三年憂、東夷之子也、

〔令義解 職員一〕喪儀司

正一人、掌二凶事儀式、及喪葬之具一、佑一人、令史一人、使部六人、直丁一人、

〔延喜式 十一 太政官〕凡親王及大臣薨、即任裝束司及山作司、或任主行所及山作所、輕重隨品高下、事見葬記、

〔喪祭私説〕初終

立喪主、凡主人謂長子、無則長孫承重、以奉饋奠、主婦、謂亡者之妻、無則主喪者之妻、護喪、以親戚執友知禮能幹者為之、凡喪事皆稟之、司書司貨、以子弟或使僕為之、司貨置二曆、其一書凡喪禮當用之物及財貨出入、其一書親賓賻禮祭奠之數、凡喪事合當用之物、及所用之人、護喪當與相助者、議擬為之備、

〔全國民事慣例類集 葬埋〕死者アレバ、即日葬埋スルヲ例トス、葬送ノトキ、六役ト唱ヘ、相續人ハ色著尋常上下ノ色ヲ異ニスル者ヲ著シ、位牌ヲ持チ、二三男或ハ孫ハ、柩ヲ舁キ、娶ハ水桶ヲ持チ、娘孫娘ハ飯盆ヲ持チ、或ハ土掛ケト唱ヘ、塋穸ニ臨ミ、第一番ニ土ヲ覆フ例ナリ、志摩國答志郡

〔日本書紀 十四 雄略〕九年三月、紀小弓宿禰等、即入新羅、○中略値病而薨、○中略大連○大伴室屋即為奏之、天皇勅大連曰、大將紀小弓宿禰、龍驤虎視、旁眺八維、掩討逆節、折衝四海、然則身勞萬里、命墜三韓、宜致哀矜、充視喪者、又汝大伴卿、與紀卿等、同國近隣之人、由來尚矣、於是大連奉勅、使土師連小鳥作冢墓於田身輪邑而葬之也、

〔續日本紀 二 文武〕大寶二年十二月甲寅、太上天皇○持統崩、　乙卯、以二品穗積親王、從四位上犬上王、正五位下路眞人大人、從五位下佐伯宿禰百足、黃文連本實、為作殯宮司、三品刑部親王、從四位下廣瀨王、從五位上引田朝臣宿奈麻呂、從五位下民忌寸比良夫、為造大殿垣司、

〔續日本紀 三 文武〕大寶三年十月丁卯、任太上天皇○持統御葬司、以二品穗積親王為御裝長官、從四位下廣瀨王、正五位下石川朝臣宮麻呂、從五位下猪名眞人大村為副、政人四人、史二人、四品志紀親王為造御竈長官、從四位上息長王、正五位上高橋朝臣笠間、正五位下土師宿禰馬手為副、政人四人、史四人、

〔續日本紀 三 文武〕慶雲四年六月辛巳、天皇崩、　壬午、以三品志紀親王、正四位下犬上王、正四位上小野朝臣毛野、從五位上佐伯宿禰百足、黃文連本實等、供奉殯宮事、　十月丁卯、以二品新田部親王、從四

位上阿部朝臣宿奈麻呂、從四位下佐伯宿禰太麻呂、從五位下紀朝臣男人爲造御竈司、正四位下下毛野朝臣古麻呂、正五位上土師宿禰馬手、正五位下民忌寸比良夫、從五位下石上朝臣豐庭、從五位下藤原朝臣房前爲造山陵司、正四位下、大上王、從五位上采女朝臣枚夫、多治比眞人三宅麻呂、從五位黃文連本實、米多君北助爲御裝司、

(續日本紀八元正)養老五年十二月己卯、崩于平城宮中安殿、○元明　庚辰、從二位長屋王、從三位藤原朝臣武智麻呂等行御裝束事、從三位大伴宿禰旅人供營陵事、

(續日本紀十七聖武)天平二十年四月庚申、太上天皇○元正崩於寢殿、　辛酉、以從三位智努王、石上朝臣乙麻呂、從四位上黃文王、從四位下大市王、正四位上紀朝臣麻路、從四位下藤原朝臣八束爲御裝束司、六位已上八人、從三位三原王、從四位上石川王、道祖王、從四位下紀朝臣飯麻呂、吉備朝臣眞備爲山作司、六位已下八人、從五位上阿倍朝臣島麻呂、外從五位下丹比間人宿禰若麻呂爲養役夫司、六位已下十人、

(續日本紀十九孝謙)天平勝寶八歳五月乙卯、是日太上天皇○聖武崩於寢殿、　丙辰、遣使固守三關、以從二位藤原朝臣豐成、從三位文室眞人珍努、藤原朝臣永手、正四位下安宿王、從四位上黃文王、正四位下、橘朝臣奈良麻呂、從四位下多治比眞人國人、從五位下石川朝臣豐成爲御裝束司、六位已下十人、從三位多治比眞人廣足、百濟王敬福、正四位下鹽燒王、從四位下山背王、正四位下大伴宿禰古麻呂、從四位上高麗朝臣福信、正五位上佐伯宿禰今毛人、從五位下小野朝臣田守、大伴宿禰伯麻呂爲山作司、六位已下二十人、外從五位下大藏忌寸麻呂爲造方相司、六位已下二人、從五位下佐味朝臣廣麻呂、佐々貴山君親人爲養役夫司、六位已下六人、

(續日本紀三十稱德)寶龜元年八月丙午、葬高野天皇○稱德於大和國添下郡佐貴鄕高野山陵、以從三位藤原朝臣魚名爲御前次第司長官、從五位下桑原王爲次官、判官主典各二人、從四位下藤原朝臣繼繩

爲御後次第司長官、從五位下大伴宿禰不破麻呂爲次官、判官主典各二人、皇太子〇光仁在宮留守、

〔續日本紀三十六光仁〕天應元年十二月丁未、太上天皇〇光仁崩、〇中略是日以正三位藤原朝臣小黑麻呂、從三位藤原朝臣家依、大伴宿禰伯麻呂、從四位上石川朝臣名足、從四位下淡海眞人三船、豐野眞人奄知、正五位下葛井連依、紀朝臣鯖麻呂、從五位下文室眞人眞老、文室眞人與企、文室眞人於伊、紀朝臣作良、紀朝臣本、外從五位下上毛野公大川爲御裝束司、六位已下八人、三位大伴宿禰家持、高倉朝臣福信、從四位下吉備朝臣泉、石川朝臣豐人、正五位下大神朝臣末足、紀朝臣犬養、從五位下文室眞人高島、文室眞人子老、紀朝臣繼成、多治比眞人濱成爲山作司、六位已下九人、從五位下縣犬養宿禰堅魚麻呂、外從五位下柴井宿禰道形爲養役夫司、六位已下六人、從四位下石川朝臣垣守、從五位下文室眞人八島爲作方相司、六位已下二人、從五位下文室眞人忍坂麻呂、從五位下多治比眞人乙安爲作路司、六位已下三人、

〔榮花物語一月宴〕五月〇康保四年廿五日にうせ給ぬ、〇村上、中略、御さうそうの夜は、つかさめしありて、百官をおしかへして、このみちかのみちとあかちあてさせたまふに、つねのつかさめしは、よろこびこそありしか、これはみななみだをながすも、げにゆゝしくかなしうなん見えける、いづれの殿上人上達部かは、のこらんとする、數をつくしてつかうまつり給ふ、殿上には、人たゞすこしぞさまれる、

〔權記〕寛弘八年六月廿二日甲子、午刻上皇〇一條氣色絶、〇中略此日、左大臣、春宮大夫、中宮大夫、源中納言、候南廂西第一間、因舊記等破定御葬送幷御法事雜事等、內藏頭公信朝臣、候同廂西階下、亦伊與介廣業朝臣、同候執筆書定文、〇中略其定文云

御葬雜事

御入棺人々　公信朝臣（內藏頭別當左中將）長經朝臣（左京大夫皇后宮亮）廣業朝臣（伊與介前學士）朝任（左近少將元藏人）資業（右少辨東宮學士）成順（判官代式部大丞）惟任（同上）季任（判官代主殿助）

秉燭二人（可レ儲二布燭一）義通（藏人左兵衞尉）章信（藏人文章生〇中略）

御輿長　公信朝臣　景齊朝臣（散位）兼貞朝臣（左京權大夫）長經朝臣　廣業朝臣　輔公（左衞門佐）泰通（美作介）

朝任　資業　成順　惟任　季任

駕輿長卅人（可レ用二寄人一）行事惟任　主典代內藏屬時重　大膳屬忠時〇中略

山作所　行事爲義朝臣（左衞門權佐中宮大進攝津守）國擧（但馬守、元後院別當、但非二殿上一）高橋國忠（元所出納）

御竈所　公信朝臣　廣業朝臣　輔公　泰通　資業

迎火十五人　行事季任、相平朝臣（左馬頭）賴宗朝臣（右中將）朝經朝臣（左中辨）顯信朝臣（侍從）說孝朝臣（左大辨）資平朝臣（侍從）忠經朝臣（左少將）生昌朝臣（播磨介）爲盛、則光、中尹（右衞門權佐）貞光、廣政、定輔（以上六人藏人大夫）

〔中右記〕大治四年七月十五日辛卯、今夕太上法皇（〇白河）御葬送也、（〇中略）

御入棺所役　先御湯殿

藤宰相　藤遠明　藤相公（長實）三位經忠　基隆朝臣　宗章朝臣　顯盛朝臣　清隆朝臣

忠隆朝臣　忠盛朝臣　敦長朝臣（推參云々）

定

御葬送雜事

一造二御棺一事

行事　基隆朝臣　朝隆　爲重

御入棺　基隆朝臣　成通朝臣　顯盛朝臣　宗章朝臣　清隆朝臣　忠盛朝臣

秉燭一人（可レ儲二布脂燭一）　顯重朝臣　忠長朝臣

造御輿事

香輿火輿各一基　行事　基隆朝臣　朝隆朝臣　爲重

御輿長十二人　基隆朝臣　宗章朝臣　成通朝臣　顯盛朝臣　淸隆朝臣　忠隆朝臣　忠盛朝臣　敎長朝臣　長輔　爲重　駕輿丁卅八人(可用總下部)

一燒香事　平範家　平信範　藤有元　藤信重

盆持　大江季國　高橋國政　藤宗茂　源行正　行事　藤有盛

一步障八帖(步障行障、今度生絹也、先例練絹云々、)持夫

一黃幡　已上行事　藤遠明

一炬火十二人　實房　說定　行佐　盛季　國隆　忠遠　惟忠　忠能　盛行　淸兼　能兼

光行　淸雅　通兼　行事　資賢

一御前僧　行事　忠隆朝臣

一御膳　行事　平範家

一山作所　行事　忠盛朝臣　爲重

竈所　基隆朝臣　顯盛朝臣　忠隆朝臣　宗章朝臣　忠盛朝臣　長輔

迎火十五人　行宗朝臣　宗能朝臣　實衡朝臣　忠基朝臣　重通朝臣　公行　通基　忠賴

兼後　家信　經隆　雅國　雅敎　光房　資賢

大治四年七月八日顯盛朝臣書之　治部卿與奪

〔玉海〕建久三年三月十五日丁亥、此日後白河院御葬送也、〇中略　廂御車、(車副二人)炬火六人、北面下﨟、(大夫尉公朝、定康、造酒正尚家、前大和守親盛、檢非違使章淸、俊兼、)燒香四人、同北面下﨟、(左衛門尉藤能兼、同實重、平基保、同資保、皆左衛門尉也、〇中略)舁入御棺於車役人、(中將親能、基範、少將敎成、忠行、資明、法師、範綱法師、能盛法師、業忠、範淸等云々、)

〔四條院御葬禮記〕散狀

公卿　前內府御車寄　帥大納言　西園寺中納言　藤中納言　前右衞督　左大辨宰相

殿上人　敎繁朝臣　親雅朝臣　基明朝臣　永季朝臣　資康朝臣　光顯朝臣

上北面　知廣

下北面　前火豐原寧長　前火藤原定重　前火源康衡　前火藤原信泰　燒香大江成豐　燒香大江成能

御隨身　秦久弘　秦久方

御壺召次　幸若　幸松

御牛飼　石鶴丸〇中略

奉行人　雅清卿　宗房朝臣　安部維範陰陽師

役人　光俊朝臣　家時　家定　信繁　宗全　玄基　繁雅法師　良慶　已上棺付

下北面　永親　度繁　保景　有季　資季　長季

召次長　賴武　賴次

御牛童　太郎丸

〔園太曆〕貞和四年十一月十二日乙巳、正親町前大納言公蔭卿來、明日法皇〇花園御葬禮、一向沙汰每事省略也、然而御輿寄一人不候者、輕忽歟、可祗候之由被仰、本望勿論也、若可結構事歟、可爲何樣候哉旨談之、如此之時結構不思寄、雖垂之條本儀歟、打梨可參之由示之、　十三日丙午、傳聞法皇御葬禮今日也、太子堂長老□□上人沙汰之、御平生叡慮云々、正親町前大納言公蔭寄御輿、一向重沙汰也、先御入棺歟、其後出御、不及如燒香沙汰、淸水谷前宰相成經卿、殿上人重顯朝臣、隆右、北面秀邦御供、其外無參仕人、

〔天保諒闇記〕上天保十一年十一月十九日、酉剋上皇〇光格崩御、實昨十八日夜子剋、廿一日被仰出、

御凶事傳奏　葉室中納言　同奉行　裏松左少辨
諒闇傳奏　廣橋大納言　同奉行　甘露寺頭辨〇中略

御葬送所役

御簾　左大臣　御枕　實德朝臣　有容朝臣　御棺昇　公正朝臣　實麗朝臣　三具足
爲知朝臣　保美　御火舍　在久朝臣　公恪朝臣　劒將　基萬朝臣
〔弘化諒闇記 中〕弘化三年丙午年二月六日
御凶事傳奏　高倉前大納言　同奉行　勸修寺左少辨
諒闇傳奏　廣橋大納言　同奉行　甘露寺頭右大辨〇中略
御葬送并御法事御用掛　町奉行田村伊豫守　般舟院勤番　水口加藤能登守　同御賄方　設
樂八三郎　泉涌寺勤番　亀山松平紀伊守　同御賄方　都筑金三郎　兩寺御掃除方
多羅尾久右衛門　同御普請方并見廻兼帶　中井岡次郎　兩寺見廻御入用之儀諸事吟味懸リ御入用取調役　在
京御普請役壹人　京都火之番御法事中詰切　膳所本多兵部大輔　勤番并火之番故障之儀有之節代
織田安藝守　御法事ニ付御名代　高家大友豐後守二月廿四日上洛　御葬送御先へ　田村伊豫守
同供奉　御附明樂大隅守
同押　所司代酒井若狹守　御目附石谷鐵之丞　同松平勘太郎
同御跡　町奉行伊奈遠江守　御留主　御附渡邊筑後守〇中略
御葬送御列奉行　西池監物　人見中務　德岡典膳　飯室左衛門權尉　山下兵庫允　田中左
兵衛尉　山本左近將曹　瀧沼貢
傳奏ヨリ長野對馬守　奉行ヨリ谷口式部丞
〔明月記〕天福元年九月廿六日丁卯、參ニ舊院、〇後堀河后藤原竴子、中略、御葬送之儀、庇御車、御車副二人、聽官四人、侍男六人

取松明前行、次公卿殿上人已下云々、　卅日辛未、及日入參舊院、○中略役人　御車寄、源大納言、權中納言、　前火、景範、宣季、季有、衆三人、　脂燭、燃付御枕上灯、灯移松明人光國、　燒香役四人、不知其名、　同料炭持四人、廳召使、　御棺役人、如元、良圓、覺胤、惟長、高嗣、顯朝、光國、　留守者、俊清、能親、　山作所行事前周防守顯嗣、非院司也、○中略　擧物行事顯嗣　侍景範　雨皮張從仕丁抑留云云　御棺役人不足之間、良圓門弟等寄加之、　歸參人々、權中納言、藤中納言、二位宰相、修理大夫、高三位、但早出

〔基量卿記〕延寶六年六月十五日、入夜關白左府右府等、種々有評議、御葬送○後水尾后德川和子以下事、自禁中仰次第、如何樣とも可致沙汰由稻葉美濃守申之、依御葬送以下法事、傳奏萬里大納言、奉行熙定也、

〔新朔平門院御凶事書留〕弘化四丁未年十月十四日

一御凶事傳奏　中山中納言忠能卿　奉行　廣橋侍從胤保○中略

御車御簾右大臣、御枕火恭光朝臣、昇御棺爲行、哲長、御香爐季知朝臣、光德、三具足具慶朝臣、夏長、御前火上北面代俊璘朝臣、義脩朝臣、燒香同孝光朝臣、長義、持火舍同貞行、常敬、御車寄幷押出景文宿禰、弘鹽、長益、裕益、葬場使實麗朝臣、山頭使大江俊常、

供奉之外、武傳德大寺大納言、御世話廣橋大納言、寺門傳奏勸修寺大夫、以上泉山へ參向、○中略

御葬送御當日、泉涌寺參向御本所總人數、

女中方十二方、三仲間十三人、以上乘輿、針妙七人、仲居五人、使番十四人、青侍十五人、刀指十六人、下部百四十六人、押二人、御列外供奉、藪土佐守、鎌田近江介、御先廻執次藤木主稅大允、勘定戶田右衞門尉、助井上主馬、仕丁頭二人、預り六人、刀指二人、下部四十四人、押一人、物持十八人、○中略

御葬送御車方交名

童子吉田彌一、藤原康起、藤木仙納、藤原得福、語合吉田彌乙、藤原正良、同藤木仙童、藤原喜重、御車副岩佐賴母、源光知、岩佐主稅、橘光能、岩佐主馬、藤原光賢、中澤左近、橘安親、總司主水、藤原正常、平井勘解由、源文致、岡田隼人、源壽平、舍人平井主殿、源宗景、河邊兵庫、藤原爲親、平井右近、源泰定、安田監物、源尙章、楾持吉田新九郞、藤原乾重、語合吉田種次郞、藤原福重、榻持芥川彥之進、源友良、芥川佐兵衛、源眞宰、掛竿持吉村三之丞、藤原美啓、掛杖持佐々木淸兵衛、紫竹三五郞、雨皮持北岡仙次郞、手繩持八人、牛飼四人、牛助人夫廿五人、但手奉之輩加勢人夫共

〔兵範記〕久壽二年六月八日甲申、今夕左府〇藤原賴長北政所御葬禮、〇中略但馬權守仲賴炬前火、史大夫賴兼持黃幡、諸大夫七人炬火、散位敦周、範資、淸賴、經憲、親憲、憲賴、範忠、有官六位四人燒香、大舍人助仲賴、兵衛尉政時、仲盛、重行、已上近衛將監侍四人持笠、貞淸、以寬、長政、宗家、已上中略迎火者十一人散位政業、大內記進明、皇后宮權大夫敦任、馬助忠正、兵部少輔忠能、散位高基、淸職、重範、以長、親業、知經、竈所役六人散位盛憲、親能、賴佐、憲親、雅兗、信實任、

〔駒井日記〕文祿四年四月廿三日寅、秀保樣〇羽柴秀長男御葬禮御中院之事、從大上樣北政所樣御理被仰候處、如何樣共、心の儘に被仰付候へと、北政所樣御請取の御書、幷小少將にも御直に被仰聞由、卽關白樣も、右の段尤に被思召候由、大上樣大和宿老衆江爲御使拙者相越、御葬禮來廿八日相定候、御用意の役者、

一籠同せんのつな　一庵請取　一火屋　藤堂佐渡　一かんせん堂　羽田長門　一
鳥井五同額共々　すきわか越後　一幕あら垣　宇田下野、本田因幡、　一はた天蓋同ちや
うちん共　治部法印　一總廻の垣　村田彥六　一地形橋同道共々　村田長介　一燈燭
小堀新介　一千五百人　いろ著大和衆　一五百人間五町　辻がため大和衆

〔利家夜話下〕卯月〇慶長四年八日、三十五日、寶圓寺にて御葬禮〇前田利家御座候、御刀は村井勘十郞、御傍

はなれず有之候は、其上豐後も上方に有之候間、彼是勘十郎可然と出羽七右衛門、前田對馬にて持申候、

一持肩肥前樣御名代前田對馬　一先は脇田善左衛門　一御位牌笹原出羽　一沈之柱御香竹田宮內　一天蓋神谷信濃　一御腰物村井勘十郎

右之通に目錄にて上方へ登申候

一天蓋の儀に付、出羽と信濃と申分仕候、寶圓寺御出、其外家老衆罷出暖に候、されども無綷濟申候、其謂は信濃申候は、天蓋おもく候間、家頼にもたせ可申候と申候を出羽聞て、不可然候よし申候に付ての事也、

一御遺言にて、鬚を剃申候は出羽、信濃、勘十郎、兩三人なり、髮を切申候者も御遺言の通、主水、左大夫、孫平太也、其外之儀、肥前樣御指圖に候、

〔大猷院殿御實紀十九〕寬永九年正月廿七日、亥刻大御所〇德川秀忠の靈柩を西城より增上寺のかりの御ましにうつしまゐらせ、土井大炊頭利勝、幷に近臣十人ばかり供奉す、僧一人も具せられず、諸人群集すれども、御供する事を得ず、松平右衛門大夫正綱、勘定頭伊丹播磨守康勝二人、萬事を奉行し、持弓頭內藤外記正重、持筒頭高木筑後守正次、與力同心を引つれて警衛す、

〔文恭院樣大御所樣薨御一件〕

御出棺御葬送御法事御靈屋
御寶塔御普請御遺物御用掛　水野越前守

御出棺御新葬
御遺物御用掛　林肥後守

右於奥被仰付候

二月朔日

〔家世實紀二十〕延寶元年三月廿七日、土津樣〇保科正之御尊骸、見禰山へ御葬送、

土津様御尊骸〇中略今日御葬送に相成候間、兼而相定候通、吉川惟足、服部安休、西東左内、紀齋宮等、神事を司り、友松勘十郎、戸枝彥五郎執事と成り、郡奉行木村忠右衛門、組付有賀文左衛門、傭者有賀小市郎、神社役人蓮沼儀右衛門斗葬事ト成リ、物頭車次郎兵衛、郡奉行山家吉右衛門、沼澤傳之丞、督石司と成り、御横目鈴木小左衛門、大沼市郎左衛門、監察と成り、御勘定頭常磐太郎右衛門、赤羽吉左衛門、出納を司り、會所役人春日平七郎、武井善右衛門、楡井吉右衛門、吉田市十郎、同屬と成り、山崎嘉右衛門、文章司と成り、大森固庵、同禅と成り、村越百助、同屬と成り、向井新兵衛、雜事を司り、御臺所頭楠九兵衛、松田仁兵衛、膳宰と成り、御茶道頭橋爪久悅、茶役司と成り、御用部屋役人大東兵大夫、藤澤傳八郎、書司を司り、石方役人田原與五左衛門、督石と成り、御普請方役人志賀吉左衛門、高津市兵衛、經營を司り、御歩行弦木喜大夫、松平伊兵衛、三物を製する事を司、甲賀之者安惠又七郎、山口磯大夫、松脂を製する事を任じ、溝口長九郎、內田五兵衛、饗司と成り、簗田平內、素服渡之役と成り、村上六藏、森七兵衛、稍食と成り、御大工鷹谷彌十郎、村松長三郎、津吉金左衛門、樋口甚兵衛、池上菜、工匠長と成り、諸才領ハ小池庄左衛門、平野喜兵衛、安藤金兵衛、壁塗師ハ左官渡邊五右衛門、同屬三十郎、總右衛門、八右衛門、針工ハ仕立師土橋源四郎、張工ハ張付師上嶋勘之丞、竹山久左衛門、銘々受前之御用取計、

〔將軍德川家禮典附錄六〕安政五戊午年八月八日

御出棺、御葬送、御遺物、御寶塔、御普請、御法事總奉行、被仰付之、

和泉守〇老中松平乘全

右於御用部屋掃部頭〇大老井伊直弼申達之、

御出棺御葬送御遺物御用、被仰付之、

酒井右京亮〇若年寄忠毗

役僧

右於同席老中申渡之

八月九日

一左之通申渡之

寺社奉行 松平豐前守
板倉周防守
大目付 遠山隼人正
御勘定奉行 土岐下野守
小普請奉行 淺野備前守
御目付 松平久之丞
津田半三郎
駒井左京

於東叡山御葬送御法事御用被仰付之

右於芙蓉間掃部頭老中列座申渡之

〔醍醐寺雜事記〕李部王記云、天曆六年八月十五日、太上天皇〈○朱雀〉崩、廿日御葬送、御前僧廿人、大僧都禪喜呪願律師、鎭朝爲御導師云々、

〔權記〕寬弘八年六月廿二日甲子、定文云、御葬〈○一條〉雜事、〈○中略〉

御前僧廿口

權大僧都明救　深覺　隆圓　前權少僧都尋光　權律師尋圓　懷壽　實哲　證空　莊命

日歛　定基　尋增　朝晴　仁盛　智算　融碩　祈統　法修　院慶　定暹　弘源　嚴因

〔類聚雜例〕長元九年四月十七日、天皇〈○後一條〉崩於晝御帳前、五月十七日甲午、關白相府幷內府藤大

納言、○中略三位中將等、於殿上侍所、被定御導師呪願御前僧幷御法事之僧百僧等、資榮朝臣執筆御遺言云、御車牛等賜導師唄呪願云云、

〔玉海〕建久三年三月十五日丁亥、此日後白河院御葬送也、○中略御遺言云、御車牛等賜導師唄呪願云云、

〔天保諒闇記上〕天保十一年十一月十九日、酉刻上皇○光格崩御、實非十八日夜子刻廿一日被仰出、○中略

法中所役

御導師果海長老新善光寺　御乘副　奠茶師誓鎧長老壽命院　奠湯師冠松西堂　宣疏師陽岳西堂橋柳寺　擧經明寅西堂善能寺　葬主照樹西堂成興寺

〔天保諒闇記下〕御葬送○光格御當日御導師參内御同車之式

一御導師御參内之節、爲持候長持へ三ッ具足、御經壽量品之卷、同机壹脚、金紙花入候事、

但右長持御紋付之油單、宰領之青侍、麻上下著之者壹人附添候事、

一御導師晝九ッ時方丈出輿、路次ハ御車御道筋敷砂之上を通り候事、尤御番所其外道筋公武共、宮方御攝家之外ハ乘打也、但行列奉行と號し、布衣壹人若黨草履取り召連、行列之先ニ立、行合之公武ニ、御導師參内之由御斷申入候也、

一御所入口之御門ニ而、立番之役人へ相斷、繩張爲解通候事、

一寺門傳奏勸修寺殿へ著、尤御導師下乘者、表御門御玄關之眞中程ニ而下輿候事、

一御導師幷侍者兩人法橋迄は、從勸家非時御料理被下候、近習以下、寺門より辨當爲持候事、

但法橋幷布衣之分、御内玄關ニ而休息、尤たばこ盆火鉢御茶等出る、

一七ッ時過御所より御案内有之、勸家之雜掌狩衣著、御導師御案内申附候、其節御導師御所御門前迄乘輿、夫より常之參内之通、御塀御表門くゞりより椽側へ上げ、御障子之内にて右之佛具取出し御輿へ上候事、其後供奉之人數不殘先へ差返し、尤侍者兩人、乘物ハ叩口之御門外ニ相

殘置、御導師御入車後、侍者方先へ退散なり、跡に法橋壹人、行列奉行之布衣壹人、白丁之下﨟壹人、御紋付提灯爲ㇾ持相殘置候事、

一御奥ニ而御出棺前御導師御作法相濟、其後御催有ㇾ之御出棺也、尤御車ハ前ニ御車寄へ廻し在ㇾ之、此時御供奉之大臣、御車之御簾を被ㇾ卷、御車へ御入棺也、右畢御佛具等入ㇾ御香、傳奏より御導師へ御渡被ㇾ成候、其後御導師侍者法橋等、元之御廣椽に退出、布衣壹人ハ、最初より夫迄ハ階下之庭上圓座著相待、夫より雜掌附添庭上へ出御、假門前に而御出車を奉ㇾ待、尤御假門前へ舍人御車添等、手挽にて奉ㇾ牽出、

一御門外御築地之下に御附之御番所建、則御附之武家より通達有ㇾ之、御導師附添法橋幷侍者布衣、其外下﨟等は、如何致候哉と布衣之者へ御附より御尋有ㇾ之、其時布衣より返答申上候は、侍者兩人幷下﨟等は、御導師御入車後先へ差返し、法橋壹人、布衣壹人、幷に白丁之下﨟壹人、右之通相揃、御車脇に付添、泉涌寺迄御供奉仕候義、先格之旨申上候、其後御附之武家、御導師之直對有ㇾ之、其上寺門傳奏へ御尋有ㇾ之候、則寺傳幷に御附御導師、右三人御立合にて、先格之義、御附之武家御承知有ㇾ之、則其場所にて法橋布衣右兩人へ名前を御尋、御帳面に兩人之姓名下書記し、被ㇾ成候事、

一御導師御入車之節、傳奏勸修寺殿御立會御下知有ㇾ之、其時布衣より御榻持へ差圖致し、御車之後へ榻を懸させ、掛鐵銓等念入見屆、夫より御掛竿杯へ差圖致、懸ヶ竿兩方へ持分爲ㇾ持置、夫より法橋上階致、御簾を卷上げ、竿にて押へさせ、御扉を開き置、法橋降階致、夫より布衣御導師之用意物袋入、布衣之袖中に隱し、御垂衣御垂綻を開き、御車之隅へ竊に入置、畢て御導師を御入車致させ候事、

但右用意物之竹之筒へ水を入、幷に食物等少々紙に包、其外火打ほくち付木等袋に入持參

候也、

一御導師御入車相濟候て、又法橋上階御扉をしめ、海老錠を懸けて、其上を晒布切を懐中より出し、錠の上を結留め下階、畢御簾を垂れ、それより御列奉行の舍人へ御下知有レ之、御牛を懸、畢御行列役へ御下知之上、段々に御先御巡々御進被レ成候事、

但御導師入車前より、御見立之堂上方、不レ殘御車際ニ御平伏被レ成、御車行迄御待被レ成候、幷に御供奉之堂上方は、御築地之内御幕之内に、床机にて御出車を御待被レ成候、

一法橋布衣兩人白丁壹人、挑灯爲レ持、御車御右脇に付添歸る、

但泉山迄御供仕候體にて、御途中より見合、御先へ懸け拔罷歸候事、

一龕前堂へ著御之節、法橋布衣之侍等、何れも入口にて待請、御著車之節、御車際伺公、其時法橋御車之後より上階、御扉を開き、御導師降車、直に休息所へ入候事、其時御香弁御車之内より出し候用意物入レ袋、布衣請取、方丈へ持參候、其後御車を龕前堂へ奉レ牽入レ候事、

〔榮花物語三十鶴の林〕萬壽四年十二月四日うせさせ給て、〇藤原道長ついたち七日の夜御葬送、御年六十二にならせ給けり、儀式ありさまに、夜もたゞふけにふけもてゆく所々の念佛僧、奈良、三井寺、ひえ、石藏、仁和寺、横河、法性寺、すべていひもやらずかずをつくしたり、山座主御導師つかまつり給ふ、なほはじめをはりみちびきたてまつるべきにこそ有けれ、さきだちたてまつるやうもあらましかばと、まづかなしくなみだをながし給、さてえつかまつりやり給はず、よふけてなりやみ、いとおづかなるに、いひつゞけ給ふことも、いとゞしきなみだのもよほしなり、

〔行親卿記〕長暦元年八月九日戊寅、今夜主殿内方、葬二送船岡西方一、〇中略舜世明世兩闍梨、爲二導師呪願一舜世離レ下二橋一勤二導師一、仍給レ車云々、

〔春記〕長暦三年十月七日甲子、參河守〇源經相、中略寅三刻許氣息已絕了、十一日戊辰、此間事、太以無レ力、

一切無合力之人、毎事不具者、導師呪願無其人、廣澤別當尋源、并慶範等間云々、故致行子也、蓮觀稱故障云々、

〔定家朝臣記〕天喜元年六月十一日己卯、鷹司殿令薨給、十八日丙戌、被定御葬送御前僧廿人、并御念佛十六人、所役人々等、〇中略呪願大僧正給、牛、導師眞範給歟、

〔中右記〕保安元年九月廿六日甲子、今夕西御方御葬送也、日野南廿五三昧地爲其所、予先騎馬行向彼所、沙汰、依爲山寺、省略諸事、導師呪願、本寺僧永嚴、東大寺定助得業、申時雨頗止、終夜時々小雨、曉更事了、曉頭先供養佛經、龍僧六人、長賢、永嚴、定助、東大勝意、蓮清、山人、奧阿彌陀堂廊爲其所、

〔吾妻鏡四〕元暦二年〇文治元年二月十九日癸酉、合戰之間、廷尉〇源義經家人繼信被射取畢、廷尉大悲歎、請一口、袷衣、葬千株松本、以秘藏名馬號大夫黑、元院御厩御馬也、行幸供奉時、自仙洞給之、毎向戰場駕之、賜件僧、

〔鹿苑院殿薨葬記〕應永十五年戊子五月六日酉刻薨、〇足利義滿、中略、

一役者交名事

下火　鹿苑院當住大岳　起龕　雲居庵中山　鎖龕　相國寺前住無求　奠茶　大德院在中　點湯　相國寺當住東啓　掛眞　天龍寺前住瑩叟　擧經　相國寺歡西堂誠中、念誦　南禪寺當住玉海　起骨　大光明院月庭　初七　大智寺圓鑑　喪主　等持院院宗御喪以下總奉行也　已上

〔重編應仁記十八〕去程ニ同年〇永祿八年六月九日、北山等持院ニ於テ、故公方義輝卿御葬送ヲ執行フ、〇中略七佛事ノ儀式有リ、其次第、鎖龕南禪寺禪琳長老、念誦ハ相國寺慶雲院建西堂、掛眞天龍寺當住、起龕天龍寺雲居庵策彥西堂、奠湯建仁寺春澤和尙、奠茶東福寺獻甫和尙、秉炬鹿苑院仁恕和尙、看經相國寺雲頂庵賢中和尙、葬主相國寺當住惟高妙安和尙也、

〔萬松院殿穴太記〕代々〇足利氏の御葬禮は、北山等持院にて有しに、今は亂れたる世の中といひ、又こ

勅使　院使

の日來、入城の御事のみ御心に被掛し御勢ひの末なればとて、城山の麓にて葬禮し奉る、〇足利義晴廿一日の寅の刻に、先龕を唐人の間に奉置て、嵯峨の間にて御佛事ある、喪主は等持院の住持たるべきに、當仕出世の人なしとて、俄に相國寺法霖長老を請せられたり、梅升龕前堂の左に立、諸佛事勤仕の人々をひとり／＼香を燒て賞せらる、鎖龕は天龍寺天用和尚、龕前の念誦は子建西堂、掛眞は雲頂院仁如和尚、起龕は梅熟和尚、起龕念誦は寅西堂、道號子建、

〔玉露叢三十二〕延寶八年五月廿六日ノ晩、御葬送有之、〇徳川家綱、中略、御葬送之御導師ハ毘沙門堂門跡、諸天讃ハ寒松院、鐃ハ護國院、鈸ハ松林院、九條錫杖ハ等覺院、四智讃ハ明靜院、洒水ハ福聚院、薫香ハ圓珠院、遊城院、奉納筥ハ禪智院、燒香ハ長樂寺權僧正、鎖龕ハ喜多院權僧正、起龕ハ宗光寺權僧正、奠湯ハ千妙寺權僧正、奠茶ハ信解院、嘆德ハ凌雲院僧正、始經ハ眞光寺權僧正也、觀理院、寶成院、寂光院、妙道院、普門院、津梁院、現龍院、覺成院、教成院、護光院、修禪院、唯心院、明王院、養壽院、櫻本院、元光院、吉祥院、常德院、東漸院、寶勝院等相勤ム、

〔類聚雜例〕長元九年四月十七日、天皇〇後一條崩於晝御帳前、　五月十九日丙申、今夜御葬之前、御使可有歟如何、相府仰云、見先例、延長八年有御使、天曆六年無所見、若諒闇之外無御使歟、

〔玉海〕建久三年三月十五日丁亥、此日後白河院御葬送也、〇中略今日予〇藤原兼實參內宿候、亥一點被獻勅使、頭中將實明朝臣、無別御詞、只御不審之由也、及深更又被獻藏人左衞門權佐長房各歸參、無爲奉納之由令申云々、

〔明月記〕建久三年三月十三日、御葬送〇後白河明後日、　十五日、丁亥今夜勅使事、頭亮所案二人也、而長房所持委細、江記延久三人之由有所見、然者可有三人歟、仰云、火葬之時、殊依不凶多可及度々、今度只可爲二人、頭中將、五位藏人長房、〇中略入夜頭中將參入、爲勅使也早行向彼邊、可待渡御之由殿下被仰、後使長房可參云々、

〔增鏡十一今日の日蔭〕十七日〇嘉元三年九月に、御わざの事〇龜山御葬せさせ給ふ、〇中略內よりの御使に、はじめ

長親朝臣、雅行、有忠朝臣など、三たびまゐる、ふるきれいなるべし、

〔伏見上皇御中陰記〕文保元年九月四日、今日有御葬禮事、〇中略山作所御使、初度左中將源國資、第二度右少將藤原敦行、第三度右少將藤原俊繼、

〔敦有卿記〕應永五年正月十三日、午刻法皇〇崇光崩于伏見仙洞、　十七日、卯刻以御葬禮儀、被申送大光明寺、〇中略御茶毘之間、被進御使於山作所例也、是唯今何事之祗候哉之由也、而今度於傍御拜見之間、無不審之間不被進之云々、

〔和長卿記〕明應九年十一月十一日壬戌、今夜御葬禮也、〇後土御門、中略、凡三度使三人也、今度爲兩人、但無人之時、一人而勤三度使之例有之云々、其詞或何事之御程ゾヤ、或イヅレノ御程ゾヤ、兩端也、今度如何樣ト申哉可尋記之所、件等之儀、粗相尋參仕人記之、忽不觸愚眼之間、定時宜可相違歟、

〔二水記〕大永六年五月三日、今夜可有喪禮〇後柏原御幸也、〇中略勅使初度、左少將濟俊、第二度、第三度、藏人橘以緖各束帶劔笏、向民部卿傳奏相揖、仰云、何ンノ御程ゾ、毎度如此、返答之趣可尋、〇中略凶事條々、

一向勅使返答事、初度只今奉移御龕、二度只今奉安御龕於爐、三度、失念可尋、

〔菅別記〕大永六年五月三日乙酉、今夜御葬禮也、〇後柏原、中略、次僧讀疏、次讚、明譽此時分勅使參、姉小路少將濟俊、著束帶、帶劔、到群列所、相對民部卿仰勅、其詞不聞民部卿返答、又不聞、使即退去、次寶龕出、〇中略暫而勅使又馳參、又民部卿如前出逢、今度橘以緖也、劔如常、次住持下炬畢、〇中略後聞三度勅使又極薦參云々、今度勅使參向、毎々遲々歟、明應度第一番勅使、寶輿奉昇出時分也、第二度使下炬念誦終時分、第三度使火屋登煙時分也、其時傳奏、今之傳奏同人也、不同之儀如何、

〔基量卿記〕貞享二年三月七日、今夜戌剋、後西院御葬送也、〇中略葬場使無之、依非諒闇也、且先例之由殿下被計申、

〔宗建卿記〕享保十七年八月六日、法皇〇靈元崩御、　九日、今日内々殿下仰云、葬場使可有之哉否、予申云、享保五年、承秋門院御葬送夜、内々被尋問官外記處、非諒闇時ハ、無其沙汰之由申之、仍無使、殿下

又仰云、此事有證文哉、何故諒闇限有使、是不審也、猶可被考者也、　十日、今日殿下於省中仰云、昨日被仰處事々如何之由、仍葬場使之勘物入御覽了、經賴卿記長元九年五月十九日、（略）之小右記寛弘八年七月九日、（同上）殿仰云、無御使歟之由候ヘバ、是又不一定歟、此外葬場使沙汰有之哉否、予申云、大治四年、白河院御葬送夜、自新院（鳥羽、白河院御孫也、）有御使、殿仰云、是依爲御孫有御使、於然者、今度於有御使有何難乎、件勘物、諒闇之外無御使事注書、以此子細先年官外記申其由歟、仍此勘物、殿下內々被入叡覽之由也、

〔幸充日次記〕寛延三年五月廿三日

一葬場使（○櫻町御葬）　宗城朝臣（難波左中將）　山頭使　江藏人（北小路大江俊章）

七月三日癸卯、（泉涌寺ニ而）引導之後、山頭使問云、執事候哉、凶事傳奏答云、掩土（エントコトオハル）事畢云々、

右之通ニ御座候由、北小路前極﨟被申候、（右山頭使之勤方之事、問置候處、北小路隼人正ヨリ到來ニ付、記之于此、）

〔後櫻町院御葬送山頭使雜記〕文化十年後十一月廿日甲寅、自坊城辨恷文到來、如左、

來月十七日、後櫻町院可有御葬送于泉涌寺、山頭使之事被仰下候、仍先內々申入候也、謹言、

後十一月廿日　俊明（○坊城）

藏人大炊助殿（○細川常顯）

卽請文相贈　廿二日乙卯、參近衞殿、山頭使被仰下候趣御屆申上、向廣橋家、山頭使被仰下ニ付、可預世話、宜願存旨申置、向極﨟差次新侍中等亭、右ニ付心添賴入、且兩小路家書留令借用、　廿五日戊午、向園家少將家、葬場使被仰下、故可預世話賴入、被面會、可聞合事共相尋處、未治定間、從跡可被示云々、　廿九日壬戌、今日於宮中、謁廣橋前亞相、（胤定）山頭使覺悟條々、山頭之舊圖等附之相尋、今日小番ニ而事多故、猶熟覽之上、從跡可被示被預置、　十二月十一日癸酉、葬場使山頭使內見也、（此日大見分之由、依之武傳御四事傳奏奉行、所司代町奉行附武以下參向也、）　兼日傳奏被示、辰剋計出門、午剋前參向泉涌寺方丈、（○中略）暫

時之後、傳奏奉行以僧侶被招、彼僧誘引圍同道至葬場、爲見了圍少將直退出、次可向山頭旨傳奏奉行被示、同道、於山頭御當役可立向處傳奏被示、如安永八年圖、其儀傳奏出菩提門、經丞相座前幷西方可被立後方、予先雖可立、其期可難知間、見傳奏被進來計程相進、立定而可申詞云々、又寶龕渡御之時、蹲居候旨有之故、先其通之覺悟候旨答、又退出之時、經公卿座前哉被尋故、先年經座由故、先其通之覺悟候旨答了、又役者悲田院西堂申云、進此處事、宿坊へ兩度可有案內、二度目之時、誘引之僧可來、其時可進東山門下葬場、御作法央之頃、又可有案內誘引、其時可進山頭云々、　十二日甲戌、廣橋左少辨、被面會度由以使被相招、即刻行向之處、先日父卿へ以書付尋申置條々返答被示、如左、

一人車記久壽二年弔喪使例被爲見云、入門立、此時卷纓解劒止笏云々、此時雖入門、當時傳奏奉行僧侶之外不入門內故、不及申立、

一此時於其處卷纓解劒止笏、今度於宿坊可卷纓止笏云々、

一可立向場所、待案內進山頭事等、與凶事傳奏可申合、

一申詞書付之通、イヅレノオンホドニサフラフヤ、此通、

一同聲甲乙事、可爲微音、聞及程云々、

一同申時承時、書付之通、淺磬折可然由也、

一立向時裾之事、晴者可垂裾、雨儀者不垂由也、

一雨儀之時書付之通、可爲手傘事、

一衣體書付之通、尋常束帶淺沓事、

一召具之事、葬場使同通令召具不苦候、葬場使者、雖四位非職也、山頭使者、雖六位職事故、同樣不苦、任先例減候而も不苦、可任所意云々、

一纓之事、宿坊迄者可爲垂纓由也、

一雜色色目事、何色ニテモ不苦候事、
一帖白檀紙、檜扇笏、普通之通候事、
右何レモ陽明家（近衛○）不及伺旨、亞相被示由被傳、禮謝申述了、申刻計從坊城辨一封到來、御用之儀候間、唯今早々可參旨也、卽刻參內之所、以書付被示如左、
退出之節、雜色可經殿上人連床之後之事、白丁於竹柵入口可留之事、
如此故、門內雜色四人共召連不苦哉相尋處、勅使之事故、何人召連候而も不苦、十人計も被召連哉之由被戲示、　十六日戊寅、申刻參內、（傳奏奉行被示）尋常束帶（○廣橋中略）中門外下乘、（葬場使申合）於宿坊卷纓止笏、（廣橋示）受案內進東山門下葬場、御作方央之頃、又依案內參著山頭、（役者申合）但山頭庭上、具雜色四人令候床子後、白丁留柵門外、（傳奏奉行示○中略）寶龕渡御于山頭之時、予於床子前蹲居、（先例）御引導畢又有案內、（役者申合）予起座引裾、兩儀不垂裾、（廣橋示）見傳奏出菩提門、計程相進、於大臣床子後程、向傳奏卿申申詞、（御凶事傳奏申合）其詞、イヅレノオンホドニサフラフヤ、（可爲先例之通、廣橋示）承傳奏答、直經公卿座前退出、（先例）雜色經殿上人連床後退、（傳奏奉行）入宿坊垂纓取笏、（廣橋）直歸參言上、（不攙時刻、傳奏奉行）

挑灯青侍（麻上下）　挑灯（白丁）　雜色（蘇芳上下）　雜色（執挑灯）　雜色白丁（挑灯）　沓持
途中　輿（輿丁四人）　笠籠押（麻上下）（從宿坊至山頭）　某
挑灯青侍（同）　挑灯（同）　雜色（同）　雜色（同）　雜色白丁（同）　傘持

一辨當上下十七人前、兩度用意申付、未刻人留以前、先著申付、又握食皮包各令懷中、（今度參向遲故便宜也）
〔後櫻町院御凶事雜記〕文化十年十二月十六日、後櫻町院御葬送于泉涌寺也、兼日被仰下、予爲山頭使、申刻參內、葬場使基茂朝臣、（園少將、尋常束帶卷纓劒、不帶兵具、）山頭使（源常顯、尋常束帶、）參仕之旨届議奏卿、酉半刻計、當番議奏烏丸大納言被相招、葬場使唯今可有參向被申渡、次予同被申渡、卽刻同伴參向泉涌寺、（不經御道筋、用便路、）入宿坊戒光寺、（入大門於中門外下乘、寺僧誘引入休所、）次予於宿坊卷纓止笏、（取扱如本坊、三寶、多葉粉盆、高茶臺等也、）赤飯出、（盛杉折、赤飯一重、）

染一重、兩御使一組宛出、三貫へキ添陪膳召具、汁入魂也、暫而撞一番鐘、是御出棺注進之時云々、此後認等相催、其後子刻頃撞二番鐘、是五鐘迄、被爲成注進之時云々、又暫時之後、從方丈案內有之由、寺僧當時無住也、先住之弟子攝州壽福寺也、可被參進由告、葬場使卽令誘引也、暫而同僧歸來、告予參進、同誘引、令取御紋付挑灯前行、予從之參進、此時雜色四人、二人擔舁白丁四人也、白丁止牛途、著東山門下床子、閉門扉、西設床子、南北行、子半刻頃、御車著御于葬場、御作法二時計也、凡寅刻過頃、又有案內、僧侶誘引、葬場御作法央過頃云々、參進于山頭床子、敷薄帖、有屋根、雜色四人從在後方、如此雖令治定、有間違、子細人而已留此處、余者出門外、一葬場御作法畢、先女房之轅輿等夥多、舁居于山頭巽方、其後御行列、先僧侶執執物前行、次寶龕三井寺力者百卅人奉舁、渡御之時、予於床子前蹲居、次大臣公卿以下各著床子、大臣令著給時、雖可磬折、御使故、可立遷歟、不尊置處、予令蹲居之間、令著給、仍無煩、次僧侶作法有之、御引導終、直傳奏卿出菩提門、經大臣座前幷右方、予見之引裾計程相進、於大臣床子後程、向傳奏申、申詞、其詞、イヅレノオンホドニサフラフヤ、鐘音聞及程也、傳奏答、御ダヒノホドニサフラフ、中時承時、予淺磬折也、畢傳奏被退、予經公卿床子前退出、雜色經殿上人違床後退、次入宿坊、垂纓執笏、暫休息、直歸參、經御道筋、予時天明、附議奏卿烏丸大納言令言上、無滯相勤畢也、卽退出被示、卯半刻頃歸宅、

〔言成卿記〕弘化三年三月四日、葬場○仁孝使右中將實愛朝臣束帶、細大刀、紺地平緒、爲警固中之間、帶劔昇殿云々、御出車之後、葬場使發遣云々、○中略寅剋過御車著御、葬場使在注進、○中略傳聞葬場使翌五日卯半剋歸參云々、○中略山頭使藤常德云々、

〔補世卿記〕慶應三年正月廿七日、今夜酉剋御葬送也、○孝明、中略、今夜葬場使三條西左少將公允朝臣、於山頭使者、今度山陵依御再興被止之、不及參向也、

〔玉海〕安元二年七月十日癸丑、此日前建春門院○後白河后平滋子御葬禮也、○中略及晚參內、先欲參院之間、門前物忩、仍直參內、○中略此間御葬送之所、可被遣勅使哉否、有其沙汰、遣人之以前被遣勅使事、只保元許也、被保元例、改間遣人之許、源中納言、彼時參行職事、□藤中納言、彼時勅使、惟方入道、彼時伺候院、余未不參前、待問之云々、小時兼光參進、申關白云、今夜勅使事、問源中納言之處、御使兩度、晝一度、晚頭一度云々、抑遣人之以前可有勅使歟、何強被用保元例

哉、天暦長保、尤相叶歟云々者、已上雅頼答又申云、問遣忠親卿之處、已參院了、使者空歸了、重遣尋者、殆可及曙天、又惟方入道之許、光雅内々遣尋之處、只答消勅使之由、不申子細云々者、爰關白頗被案煩歟、無分明之答、余乍恐進申云、先保元之例、何強被逐用哉、總代之例、或葬禮以前奏遺令、或葬送夜奏之、未聞其禮了歴數日之後奏遺令之例、○中略又御葬送之所、可被遣勅使、是尤可叶道理、○中略保元之例事倉卒、萬事不可為例歟、若欲遣勅使者、遺令奏以前於理有妨、若欲不遣勅使者、我朝未聞國母葬禮之時不遣勅使之例、云彼云是、進退惟谷、不如今夜被奏遺令者、本儀今夜奏遺令、又可御倚廬云々、而今日依為歸忌日、有憚、不可御倚廬、乃明後日廿二可御之、因之同日可奏遺令之由、依保元例、先是雖定了、是則頭辨長方朝臣申殿下及法皇所定行云々、而勅使事、急沙汰出來之間、事皆違亂、長方朝臣、只今在家、不能遣召云々、抑毎事今日可被行之、定儀所司等、而臨期延引、是又有禁忌者歟、於不吉事者、能々可被尋行歟、關白答云、此儀尤可口奏長方朝臣不申行此儀、太遺恨也、又我遣不仰此由、自他之失、悔而無益、但於今者、此儀不可叶、上卿已下加倍者、天殆可明、所詮只可遣勅使哉否事如何者、余案之、夜未及深更、可應召之者、上卿外記史許也、附關被付國之時、供奉所司無煩、警固事、六府參入、又不可有其程歟、只先可被申此子細於本所、於被獻弔喪禮之勅使上者、何如待遺令之使歟、於一夜之中前後者、不可及後代難事歟、被遂保元之例之條、余猶不甘心、儀不叶例、不似之故也、然而不能強請、只依存忠述恐心而已、余申云、保元一定被獻弔喪之勅使否、猶未分明歟、鳥羽院、七月二日申刻崩御、戌刻御葬送云々、事太卒爾、路又遼遠、疑是為問安否所被獻之勅使歟、不審猶殘、此條於作本所之人者、雖只見有勅使之由、不可知禁中之子細、雅頼卿其家不遠、重可尋問歟、件兩度御使、為問安否御使歟、為弔喪家之勅使歟、分明可申之由、重可被遣問也、若一定為弔喪禮之勅使者、今夜無左右可被獻勅使也、於理雖不可然、先規令存之故也、若不遣勅使者、縱雖存道理、我朝都無此例、始不可貽其例之故也者、關白然諾乎、以此旨重可問雅頼卿之由被仰兼光了、小時兼光參上申云、右宰相中將實守申云、依此事不審、内々被取遣故右大臣公能記披見之處、出御之所、勅使藏人左衞門佐忠親參上、謁大將歸參了云々者、弔喪禮之勅使條、已顯然也、是至其期之故也、尚可待源納言報歟如何者、關白云、然者早可獻也、右近中將通親為勅使、豫被儲也、兼光又申云、其詞如何、關白云、何有殊仰詞哉、只御不審由也、卽兼光退下、仰通親朝臣參入了、此間關白被示云、葬禮無止事

供奉會葬

也、縱雖無理、予默止哉、只一向被遂保元例、何難之有哉、余申云、素所申是也、於今夜不被奏遣令者、不可及實儀者、卽余退出了、凡今夜事、頗無案敕如何云々、

〔基量卿記〕延寶六年六月十八日、葬場〈○後水尾院后德川和子〉使兩人、〈初度使問、道程令行去給哉之事也、其闕、寬永二水記云、何之御程ゾ、向傳奏、如此云事也、二度御棺納二王中哉之事、於火葬者有三度使云々、〉松木中將、差次藏人、可然山也、裝束可爲束帶事、〈則松木差次、召禁中下知了、〉

〔實久卿記〕弘化三年七月廿三日、故女院、〈○光格后欣子內親王〉中略、今夜奉葬于泉涌寺、〈○中略〉今夜葬場使實德朝臣、山頭使丹波賴永等參向、

〔中右記〕寬治八年〈○嘉保元年〉二月五日丁未、今夜陽明門院〈○後朱雀后禎子〉有御葬送事、〈○中略〉御出之間、從一院有御使、大宮權亮道時朝臣、又於鳥部野邊、重從一院有御使、左京權大夫俊賴朝臣、

〔長秋記〕大治四年七月十五日辛卯、法皇〈○白河〉御葬送、十六日壬辰、去夜自上皇〈○鳥羽〉以御使訪御墓所給事三度云々、最前使右少將公敎朝臣、參葬場殿、第二度使右少將公隆朝臣、天明間參淸庭、御葬了程也、皆治部卿答云々、第三度使中務少輔經政云々、〈○又見中右記〉

〔喪葬私論〕葬送の禮も上古の事はしり難し、聖武天皇の御葬は佛法により給へば本朝の古禮としがたし、〈○中略〉群臣すべて倍從すべし但新帝皇太子の御葬所に會し給ふをみず、〈天武の御葬には、皇太子も供奉せられしなるべし、〉

〔令義解九喪葬〕凡百官在職薨卒、當司分番會喪、〈謂此五位以上喪、故云薨卒、云在職、卽是散位者非也、〉

〔和漢習合葬祭記略〕葬主、黑染布狩衣、同指貫、亂緖藁沓ニテ、竹杖ノ末ヲ上トシ本ヲ下トシタルヲ左手ニ把ル、握ル所ハ紙ニテ卷クナリ、〈母ノ喪ニハ桐ノ杖ナリ、〉黑染ノ服、竹杖ナド、全ク漢風ナレドモ、狩衣烏帽子モ撰唐ノ物ナレバイカヾハセム、〈ムクノ實サバシノ烏帽子、黑紙黑骨黑墨目ノ扇ナドハ、京地ニテハイマダ用ヒ難ズ、但シ扇ハ尋常ノ末廣ナ紙モ骨モ墨ニテ塗リ用フルナリ、又當今ニテハ堂上地下トモニ、喪服ハ此墨染布狩衣袴ニ限ルヨシ也、〉コレゾ喪服ナレバ、モシ他人ノ導師ノ時ニハ、導常ノ服ヲ用フ、〈亡者ノ供ハ、雨天ナラズトモ草履ヲ用ヒズシテ、足半〈アシナカ〉一名尻切レヲ着キ、退シ殿立チテトラヌモノヽヨシ故實家ノ說ナリ、葬主ノ召具ハ此事无シ、〉

〔伊勢早駈次第〕前後ノ供奉人ハ、拜賀ナドノ如ク、晴ノ出立ナレバ、モトヨリ葬禮役人ノ通ニ笠ヲ著、杖ヲツクコトモナシ、但夜陰ハ松明ヲ乘ルベシ、何レニモ其位職相應ニ取計フナリ、無位ニテモ、神宮家ナドノ叙爵セヌ童形ノ人等ハ、六位ノ格ニ取計フコトナリ、又女子ハ未嫁ノ時ハ父ノ位、嫁テ後ハ夫ノ位ニシタガフコトナレバ、其心得ニテ取計フベキナリ、傘持等常ノ如シ、多分ハ朱傘ナレドモ、官長等ニハ衣笠ヲ用ユルモ然ルベシ、何レニモ拜賀ニ用ユルホドノコトハ用ヒテヨシ、婦人モ晴ノ出立ナレバ、朱傘ヲ輿ノ上ニサシカケサセ、輿ワキニハ市女笠ニ被衣カヅキタル女房立ノアルモ然ルベシ、袋持ナドモ、女ノ出立ニハアルベキ事ナレドモ、水持ナドト云コトハ葬禮ニ限ル事ナリ、イヅレモ白布ノ淨衣ヲ著セテ、葬禮ノ出立ニスル事ハ然ルベカラザル事ナリ、

假服ヲウクル親族モ喪服ヲ著セズ、狩衣、直垂、其身相應ノ裝束ヲ著スルナリ、但神事ニ從フ時ノ服ハ斟酌アルベシ、子タルモノハ葬地ニ至リテ白布ノ直垂ニ著替ユルナリ、凡禰宜以下諸職掌人遭喪時、不敢觸穢及著素服ト云式文ニ據レバ、葬禮ニテモ素服ハ著スベキコトニモアラヌヤウニ思レヌレドモ、前々ヨリ如此ニ用ヒ來レリ、勿論傍親ノ喪ニハ常ノ服ナリ、女ハ白布ノ衣ヲカヅク事ナレドモ、今ハ多分白布ノ手巾ヲカブリ侍ルナリ、又多分ハ晒布ヲ用ユレドモ、生布ヲ用ユル方然ルベキ事歟、又色直シトテ、其喪服ヲ除服ノ後ニ染メテ、常用ノ直垂等ニツクリテ參宮ニモ用ユル輩多シ、甚以テ不可說ノ事ナリ、麁布ヲ以テカケナガシニスベキ事ナリ、又白布ノ手ヌグヒヲ用ユル事ハ元來喪服ノ略ニテ、男ハ衿ノ上ニカケテ直垂、素襖ノ如クニ前ヲウチ合セ、女ハ頭ニカブル事ノヤウニ承ツタヘ侍レドモ、今時ハ其差別モナキヤウニミヘタリ、

〔全國民事慣例類集葬埋〕葬儀ノ飾ハ、死者血屬ノ内ニテ、必ズ棺ヲ舁擔スルコトナリ、而シテ其血屬近キ者後ヲ舁シ、之ニ次グ者前ヲ舁ス、(父ノ棺槨ノ如キハ、次男前ヲ舁シ、長男後ニ在ガ如シ、)之ヲ要スルニ其家督ヲ

譲リ受ベキ者、棺後ヲ舁スルヲ以テ恒例トナスコトナリ、(河内國河内郡)

送葬ノトキ、(○中略)男子ハ上下、女子ハ被布(カツキ)ヲ著スルコトナリ、(下野國下都賀郡)

火葬ヲ行フ者ハ、葬禮ノ當日ハ男子ノミ送リ、其翌日灰葬ニハ婦人ノミ送ルヲ例トス、(越前國敦賀郡)

送葬ノ途中ハ、近親ノ者皆上下ヲ著シ、帶刀免許ナキ者ト云ヘドモ、此時ニ限リ一刀ヲ帶スルコト一般ノ通例ナリ、(佐渡國雑太郡)

葬埋ハ死去ノ翌日ニ爲スコトナリ、親類ハ勿論、一町一村、皆禮服ニテ會葬スル習慣ナリ、(若狹國遠敷郡)

〔小右記〕寛弘八年七月八日己卯、今日院(○一條)御葬送也、有所愼不參入、九日庚辰、後聞中納言時光參院、候御供、行歩難耐、自途中退歸云々、十日辛巳、曉頭參院、皇后宮大夫(公任)參會云、請左府御宿所談、被命云、兩人不候御葬送、不可然云々、就中中將必可候也、頗有不快之氣色云々、無指職掌之人、有故障者、爲之如何、可無譏責歟、十五日丙戌、不候御葬送御共之事、一日以委旨談東宮大夫、卽達相府、有和順氣之由有示送也、

〔榮花物語十日蔭の鬘〕十月(○寛弘八年)廿四日、冷泉院うせさせ給ぬ、(○中略)御さうそうのことなど、よろづにおほ殿のみぞおきてつかうまつらせ給、内(○三條)にはわが御かはりとおぼしめして、宮々に御おくりせさせ給べうおきて申させ給も、いみじうあはれにめでたし、

〔榮花物語十三木綿四手〕寛仁元年五月九日のひるつかた、あさましくならせ給ぬ、(○三條、中略)十一日に御葬送せさせ給、一條院のおはしましゝ、いはかげにおはしけり、(○中略)宮たちの三所(○敦儀、敦平、師明)あゆみつゞかせ給へるぞ、いみじうあはれにかなしき、

〔玉海〕建久三年三月十五日丁亥、此日後白河院御葬送也、(○中略)右大臣已下步行于御車後、他人不供奉、仁和寺宮已下、一町許扈從、其後先陣被參自閑路云々、是爲停路頭狼籍也、

〔増鏡八飛鳥川〕十八日〇文永九年二月に、藥草院におくりたてまつり給ふ、〇後嵯峨御葬仁和寺の御室、圓滿院、聖護院、菩提院、靑蓮院、みな御ともつかまつらせ給ふ、〇中略經任の中納言は、人よりことに御おぼえありき、年もわかからねば、さだめてかしらおろしなんとみな人おもへるに、なよらかなるかぎりぬにて、御骨の御つぼもちまゐらせてまゐれるを、思ひのほかにもと見る人思へり、

〔増鏡十一今日の日陰〕嘉元も三年になりぬ、萬里小路殿、の法皇、〇龜山又なやみとて、龜山どのへうつらせ給ふ、〇中略九月十五日の明ぼのに、つひにかくれさせ給ひぬ、〇中略さてしもあらぬならひなれば、おなじ十七日に、御わざの事せさせ給ふ、ことわりといひながら、いといかめしう人々つかうまつりたまふ、あじろひさしの御車、前右大臣殿よせさせ給ふ、ゑぼしなほしはかまきにてまゐり給ふ、院のうへ〇後宇多も、庭におりさせ給ふ、法親王たち三人、山の座主、聖護院、十樂院法親王などは、わらうづをぞたてまつる、上の山まで御供せさせ給ふ、上達部には前右大臣公衡、西園寺大納言公顯、萬里小路大納言師重、源中納言有房、三條前中納言實躬、宗氏の二位、重經の二位、爲雅の宰相、經守、爲行、親氏などなり、殿上人は賴俊朝臣、忠氏、爲藤、國房、經世、秦忠、光忠、みな狩衣の袖をゑぼりまゐるけしきさへ、あはれをそへたり、院も御供にひきさがりてまゐり給ふ、花山院權大納言、西園寺中納言、土御門大納言、御子親實の少將、御大刀持て御供せられたり、よそほしかりつる御ありさまも、いと程なく只時のまの煙にてのぼり給ひぬれば、たれもたれも夢の心ちして、ほの〴〵とあけゆくほどに、おの〳〵まかで給ふ、三條大納言入道公貫、萬里小路大納言師重などは、とりわき御心ざしふかくて、御茶火のはつるまで、墨染の袖をかほにおしあてつゝさぶらひ給ふ、

〔後愚昧記〕應安七年二月二日戊戌、今夜亥刻、吉時云々新院〇後光嚴御葬禮也、〇中略

供奉人

前内大臣(留前右大將門前邊云々)帥大納言、西園寺中納言、藤中納言、前右衞門督(數書)左大辨宰相、

以上布衣上括著薬沓、但不突白杖云々、白杖事、古來有沙汰事也、但多分不突候歟、

(親長卿記)文明三年正月三日、今日御葬禮(○後花園)治定云々、(○中略)供奉公卿室町殿、(足利義政)(御烏帽子直衣上括、依明德例、御供奉云々、依亂中御歩行不可然之由、管領勝元右京大夫頻雖制止申、無御承引、御供奉云々、尤可然歟、)日野前内大臣(烏帽子直衣上括、諸大夫一兩輩召具、)帥(直衣上括、小雜色二人、)日野大納言(資綱、白張布狩衣上括、雜色一人、今日之儀沙汰也、)廣橋大納言(綱光、衣冠上括、未拜賀、)予(白布布衣上括、小雜色一人、)右衞門督(季春、同予、)左衞門督(雅光、直衣、雜色二人、)右兵衞督(雅康、衣冠、未拜賀、小雜色一人、)菅宰相(顯長、白布布衣、)右大辨宰相(春房、白色唐綾狩衣、モヘギ)殿上人政爲朝臣(白布狩衣)秦仲朝臣、實隆朝臣(已上同)各著薬沓、(或卷紙或不卷云々、予細見之、建久三山槐記、)藤宰相(永職、薄色狩衣上括、電大口、)象顯(藏人權右少辨、東御、)季光(藏人右少辨、薄色狩衣、)已上三人室町殿御共也、今日行列不正、雜人群列之故也、

(東山院御凶事記)寶永七年正月十日、今晩御葬送、(○中略)俊光供奉、狩衣わらぢ、なよ竹半紙にて卷、サカサマニツク歩行、吉服素服狩衣思々也、

(基量卿記)貞享二年二月廿二日、只今御事切(○後西院)之由也、　廿四日、清閑寺大納言寬申、(○中略)

一八條殿(十五歲)　御供、幷御著用御衣服事、

仰云、尤可爲供奉、衣服之儀者、可有有栖川宮例、於有栖川宮例爲素服者、於八條殿も可爲素服也、

重裝束由也、

一圓滿院(十一歲)　同前歟、但女中ニ相交、御小袖ニ御袴計歟之事、

仰云、可爲女中之內、幼年之人勿論之由也、

(言成卿記)慶應三年正月廿六日、從陽明門流御示條々、(○中略)御葬送(○孝明)供奉、

(吉服)公卿殿上人

一著衣冠單、參內、垂纓淺沓、參本所之時改卷纓、(木白挾)

雖爲武官不懸緌之、(於六位者不撤)不具隨身、

但隨身兵仗、大將等之者爲格別、
一極臈可憚青色事
一御出棺期下殿、先指貫插之、(自表衣中引上之、)次着藁沓、列立于庭中、自假門外執杖、(或令家僕持、)可突右手、(有家說、人單左手、無子細、)
一禮節之事、御棺令過列前給之時各平伏、(或蹲居、所所同之、)父子家禮如常、總於隔人者、不及禮節如常、
一御車舍之義訖、御陵前坂口迄供奉相濟、休所へ立寄候迄、藁沓可被着候事、
一歸路洗足、可被捨杖於路頭候事、

〔榮花物語一月宴〕后の宮(○村上后安子、中略、)やがて消入らせ給ひにけり、かくいふ事は應和四年四月廿九日、いへばおろかなりや、○中略 二日ありて、さかくし奉んとおぼしおきてたるにも、儀式有樣、あはれにかなしう、いみじき事かぎりなし、内々に奉りつる糸毛の御車にぞ奉る、世の中のさるべき殿上人上達部など參り送り奉る、殘すくなく見えたり、萬よりも式部卿の宮の(○爲平親王)御車のおりにあゆませ給ふこそ、いといみじうかなしけれ、○中略 御供のをさこ女、いとうるはしきさうぞくどものうへに、えもいはぬものどもをぞきたる、

〔榮花物語二十六楚王の夢〕日のくるゝまゝに、法興院の内、のゝしりさわぎたり、(○後朱雀后藤原嬉子葬送、中略、)さるべき上達部みなまゐりこみ給て、さすがに元座にはつき給はぬ物から、さるべき所にたちさまよひ、くれざいもくのうへなどにおはしならばせ給へり、○中略 ましひら、時はとりのときをよき時とて、そゝのかし申せば、せう〳〵の事だにいかゞはある、ましてさばかりよそほしき御ありさま、いとゞところせげなり、さるべき四位五位六位などの御ともにつかうまつる、さすがにひのしやうぞくをしたるものから、うへにうたてげなる物をきたり、○中略 御ともの女房車おほくもあらず、ふたつぞつかうまつりたる、それもからぎぬうるはしうきたるがうへに、また藤の衣を

きて、それもなみだにこぼるばかりなり、御念佛の僧ども、山がた、ならがた、さるべき所々、かずしらずむれまゐりこむ、〇中略關白殿〇藤原頼通は、御いみの日にあたらせ給へれば、とまらせ給ぬ、内の大い殿〇頼通弟教通ぞおはします、それも猶いま〳〵しきこそぞかし、されどとの、御まへ〇頼通父道長のおはしますがうしろめたさに、つかうまつり給なるべし、あはれにかなしともおろか也、

〔後幹記壬生家凶事部類所引〕天明三年十月十二日庚午、新女院〇後桃園后近衞維子今晩戌半剋崩御、　十一月十一日戊戌、私用ニ而參內、廣橋亞相面會、〇中略相尋之事之分、

杖之事

男帝之御時竹、太后宮御時桐紙卷之事、先年之樣子可承候事、布衣ニ爲持事、素服人ハ持事、〇中略

錦小路ヘ相尋候事分被示如左

杖紙ニテ卷樣之事、御流ニテ卷候哉之事相尋之處、石野前黄門ヘ被相尋候ヘバ、五寸計擧程卷由也、但陽明家ヘ直ニ被伺候處如右也、

〔續日本紀一文武〕三年六月丙午、淨廣參日向王卒、　丁未、命直冠已下一百五十九人、就日向王第會喪、

〔續日本紀一文武〕三年九月丙子、新田部皇女薨、勅王臣百官人等會葬、天智天皇之皇女也、

〔續日本紀一文武〕三年十二月癸未、淨廣貳大江皇女薨、令王臣百官人等會葬、天智天皇之皇女也、

〔續日本紀十二聖武〕天平七年十一月乙丑、知太政官事一品舍人親王薨、〇中略命王親男女悉會葬處、

〔榮花物語二十五嶺の月〕その日〇萬壽二年七月十一日小一條院妃葬送に成ぬれば、〇中略院〇小一條院は故宮〇三條后娍子の御ともにも、此女御の御おくりも、ひたゝけてあゆませ給事、またなきことになんおはしましける、〇中略女のさいはひさは、これをこそいはめ、一生いくばくもあらぬに、世中のめでたき事には、太上天皇とこそは申めるに、かくおりたちてあつかひ聞えさせ給に、いさいみじくかたじけなく、めで

たき御事なりや、

〔源氏物語 四十御法〕はるぐとひろき野の所もなくたちこみて、かぎりなくいかめしきさほうなれど、いとはかなき煙にて、ほどなくのぼり給ぬるも、○紫上れいのことなれど、あへなくいみじ、空をあゆむ心地して、人にかゝりてぞおはしましけるを、○源氏見たてまつる人も、さばかりいつかしき御身をと、物のこゝろしらぬげすさへなかぬはなかりけり、御おくりの女房は、まして夢路にまどふ心ちして、くるまよりもまろびおちぬべきをぞもてあつかひける、○中略十四日にうせ給て、これは十五日の曉なりけり、

〔今昔物語 二十二〕大織冠始賜藤原姓語第一

大臣○藤原鎌足身ニ病ヲ受ケ給ヘリ、天皇○天智大臣ノ家ニ行幸シテ病ヲ訪ハセ給ヘリ、大臣遂ニ失給レバ、其葬送ノ夜、天皇行幸シテ山送セムト有ケレバ、時ノ大臣公卿、○此下恐有二脱文一有テ、天皇ノ御身ニテ、大臣ノ葬送ノ山送、例无キ事也ト度々奏シケレバ、泣々ク返セ給ヒテ、諡ノ宣旨ヲ下シテ、此ヨリ大織冠ト申、

〔榮花物語 三十鶴の林〕その日○萬壽二年十二月七日藤原道長葬送つとめてより、よるまで雪いみじうふる、さるべき人人、れいのさうぞくのうへに、あやしのもの共きて、雪きえあへずふりかゝりたるも、さまぐにあはれにかなし、よろづ事そぎて、たゞかたのやうにとおほせられけれど、事かぎりありて、人のつゞきたちたるほど、十廿町ばかりありぬべし、

〔おちくぼ物語 四〕大納言、其日より臥て、又重くくるしうし給ふ、今は塵ばかりも思ふ事なければ、死なん命も惜からずといひ臥たまへり、○中略終に七日に消入給ひぬ、十一月の事なりけり、○中略彼とのには、御いみなき日とて、三日と云ふに、をさめ奉り給ふ、大將殿の御送りに、四位五位いとおほくあゆみつゞきたり、げにのたまひしやう、死の幸、かぎりなしといふ、

〔兵範記〕久壽二年六月八日甲申、今夕左府〇藤原頼長北政所御葬禮、〇中略

扈從公卿　左府、(著御輕服)右衛門督、(公)中納言大將、(兼)中納言中將、(師)已上步行、內覽之人、如此之事步行
之例、未曾聞云々、

同殿上人以下濟々焉、其中新中將隆長朝臣、侍從師光、散位盛憲、親能、皇后宮大進憲親、同少進雅
亮、僧實任等、著素服、〇中略

大臣(裏書)二人幷左右大將遭喪、未曾有例云々、就中左府爲內覽臣、被供妻葬送、更無其例、又右大將〇頼長子師長拜任以後、未供奉行幸、不從吉事公事等、今遭繼母喪不制申云々、於爲實妣母者、非沙汰限歟、

〔吾妻鏡 二〕治承五年〇養和元年十二月十一日癸丑、帥公日慧入滅、日來煩腹中、今夜則葬于山內邊、武衞御哀傷之餘、自令向其茶毘所給、是園城寺律靜房日胤門弟、顯密兼學淨侶也、去五月尋先師舊好、令參向之間、有御歸依云云、

〔長興宿禰記〕文明八年六月十五日壬午、日野前左府勝光公(昨日辭左府云々)薨、四十八歲　十九日丙戌、前左府葬禮也、於千本歡喜寺令土葬、淨土宗智恩寺沙汰之、一家人々、傳奏廣橋亞相以下、內々被向葬所云云、

〔碧山日錄〕寬正元年七月六日庚辰、春公之父常久、字昌運、〇中略易其簀逝矣、　十日甲申、就建仁之喪塲、有昌運之闍維、吾徒相會者二百餘員、春公單縗徒跣執紼、見者爲之流涕、諸法事畢、歸東山之第、

〔重編應仁記 一〕寬正四年八月八日ノ晚、於高倉御所御母君〇足利義政母御逝去有之、〇中略同十一日、〇中略於等持院七佛事ノ茶毘有之、〇中略公方家モ、纔ニ舊ノ綱ヲ御肩ニ置セ給ヒ、御孝行ノ御勤、親切ニ見エ事ル、御茶毘終テ、公方家ハ方丈ヘ入御有テ、召替淨衣、被著御道服、御看經數刻アリ、其後眞如寺ヘ入御有テ、御直垂ヲ被召、花ノ御所ヘ還御アリ、

〔新撰長祿寬正記〕同十一日、〇寬正四年八月、中略等持院ニテ七佛事ノ御茶毘也、〇足利義政母、中略公家ニハ、日野殿、

廣橋殿、烏丸以下ノ御一門、武家ニハ、管領細川右京大夫、治部大輔、山名京極、山名相模守、同兵部少輔、富樫介、細川陸奥守、佐々木四郎、其外奉行頭人悉參列ス、三寶院殿、淨土寺殿ノ門跡、同諸比丘御所モ、御輿ヲ舁テ參ラル丶、

〔晴富宿禰記〕明應五年七月十三日戊午、勸修寺中納言政顯卿、被送使者、儀同三司、〇政顯父教秀連々所勞、十一日薨去候、息女數輩中、懷妊之人、可致葬禮之供奉之條可爲如何哉、尋之前官務、於門前出逢、依御懷妊供奉御斟酌之事、不及覺悟、假不能引勘、但不可有供奉之由、云先規云法度不承及、凡於御親之供奉、不能左右事歟之由存之旨返答云々、

〔言繼卿記〕天文十九年五月廿一日乙酉、今晩於慈照寺、萬松院〇足利義晴御葬送有之云々、公家飛鳥井前大納言、藤大納言、日野大納言、新中納言、永相朝臣、晴賓等也、〇中略此外御比丘尼衆、南御所、入江殿、通玄寺殿、寶鏡寺殿、總持寺殿、五山十札、諸衆悉參云々、

〔幽齋僧翁御葬禮記〕御葬禮は、同〇慶長十五年九月十八日午の上刻と定りければ、國中はいふ迄もなく、遠境の寺院、老若男女、袖をつらねて入來る事引もきらず、〇中略辰の一點の頃ほひ、直山の座主の御房、山伏五百もやあらん、夥敷法螺を吹立、あしばやに通られたるは、名におふ大峯葛城よりかけ出たるかくやらん、如何なる惡魔も恐つべくといかめしくぞ見えたる、

〔枯尾花上〕芭蕉翁終焉記

十二日〇元祿七年十月申の刻ばかりに、〇中略義仲寺にうつして、葬禮義信をつくし、京大坂大津膳所の連衆、披官御者迄も、此翁の情を慕へるにこそ、まねかざるに馳來るもの三百餘人なり、

〔文恭院樣大御所樣薨御一件〕水野越前守殿御渡候御書付寫

阿部信濃守

御葬送之節、無襲衣冠卷纓、精卷之大刀を佩、末廣持候事、

神主位牌

但冠の緒は、こよりかけに可ㇾ仕候、廣七黑骨白骨は無差別、可ㇾ爲勝手次第候、

一御出棺御供之面々、布衣以上は、熨斗目長袴、布衣以下は、熨斗目半袴可ㇾ著事、

但熨斗目は、無地にても、腰明きにても、且又上下も、小紋にても、無地にても、可ㇾ爲勝手次第事、

御出棺幷御葬送ニ付て、上野御先へ相越候面々は、衣冠布衣素袍著し可ㇾ被ㇾ在ㇾ之候、

一御出棺御供相勤、直ニ御葬送御供も相勤候面々は、靈前堂江被ㇾ爲ㇾ入候以後、衣冠布衣素袍著替候て、御葬送御供相勤候事、

〔最樹院殿御葬式之記〕文政十年二月廿日、儀同殿〈○一橋德川治濟〉かくれさせ給ひぬ、〈○中略〉兩僧都は御棺の左右に從ひ奉りて、御棺を出し奉る、〈○中略〉次に三御館の名代、内々の口迄參る、〈○中略〉次に熊本〈○細川〉久留米〈○有馬〉福岡〈○黑田〉をはじめ内々の御ゆかりえるもの、名代參る、

〔半日閑話〕一安永六年丁酉七月三日、優人市川八百藏〈中車〉死す、都の者會葬する者數千人、古來俳優の者死してより、かゝる盛なる事をきかず、冶遊の少年淫蕩の婦女、考妣を失へるがごとし、法號實應中車眞解淨士と云、

〔神道葬祭家禮〕神靈ヲ箱ニ封ジテ、先祖ヲ殘ラズ附祭ニスルコト、神代ヨリノ傳來ナルハ、神道ヲ學ビ、志深キ者ハ行フコトナリ、父ノ封ジオキタルトテモ、其子孫神道ヲ學バズ、道理ヲ辨ヘザル者ハ行ヒガタク、心ニ疑ハシク思ヘバ、却テ不敬ニナルベシ、父母兄弟妻子ノ死テ後、其度々ニ神職ノ人ニ賴ミテ封ジオクコトモ、其人ノ分限ニヨリ成リ難キコトアリ、コレニヨリテ靈匱ヲコシラヘ置テ祭ルベシ、

靈匱、檜木ニテ柱ノ如ク造ル、竪八寸、横三寸四方、臺八角五寸四方、厚サ三寸、

靈璽ヲ長九寸五分ニシテ、一寸五分ハ臺ヘ雕入ベシ、左スレバアラハレタルトコロ八寸ニナルナリ、

右靈璽、上ヨリ二寸下ゲテ圓キ鏡ヲ雕入ベシ、其下ニ某氏官位某姓某名乘神璽ト書ベシ、後ニ生年生日死日行年何十歲ト一行カ三行ニ書ベシ、尤祖考妣ヨリ一靈ヅヽ靈璽ヲ立置ベシ、

一又此靈璽ノ外家アリ、扉ヲ付ベシ、臺ハ足ツキナリ、寸ニカマハズ、扉ニ鏡ノ見ユル所ニ小キ穴ヲアケオクベシ、

〔和漢習合葬祭記略〕靈璽、コレハ服中假ノ祠堂ニテ祭ル所ノ假ノ靈璽ナリ、木ニテ作リ、姓名君ト書キ、背ニ歿去ノ年月日ヲ記ス、マタ假ノ璽ナレバ、月日ハ書ズトモ有ルベシ、サテ此物笏ノ形ニ作ルト劒ノ形ニ作ルト二說アリ、弊地ニテハ笏ノ形ヲ用フ、長サ八寸、幅ハ恰好見合スベシ、此寸法ニハ吉田家ノ傳モ有リ、他家ノ說モアリ、コレモ博覽家ニ就テ正スベシ、此靈璽ヲ納ルヽ櫝ノ事ヲ魂車トカ或ハ靈車名ヅケテ、輿ノ如ク作リテ、二人ニテ舁クト、俗ノ位牌ノ厨子ノ如ク作リテ絹ニテ張リ、前面ニハ帨ノ如キ物ヲ懸ルト二樣アリテ、何レモ宜シクハ有レド、後日ニ假ノ靈壇ニテ祭ル時ノ爲ニトテ、出來合ヒノ札宮ヲ用フ、サレド其人ノ心ニ任スベシ、マタ病人ノ息絕シ時、直ニ靈氣ヲ然ルベキ品ニ移シ、祠堂ニ安ジ置テ、葬送ニハ靈璽ヲ柩ニ從ヘ行カザルヲ善シトスル說モアリ、何レカ是カラム定メ不得テ姑ク多分ニ從ヘリ、喪ヲ去リテ後ニ製スル靈璽ノ事ハ、下ニ云フベシ、祠堂ヲ作リ神主ヲ置テ祭ル事ハ、全ク漢風ニシテ、彼蘇我大臣(蝦夷)ガ、己ガ祖廟ヲ建テ、八佾ヲ舞ハセシナドヨリ外ニハ、古書ニ所見无シト先達ノ說ハ有レドモ、今ハ世間一統、此物无キ家ハ有ラザレバ、今モカク行フナリ、後日ニ靈璽ヲ替ルナドハ、殊ニ儒法ニ因リタル事ナラム、此等モ識者ニ就テ正スベシ、

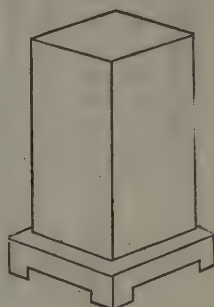
〔行治神道葬祭拾式錄〕吉田家葬祭式

靈札之事

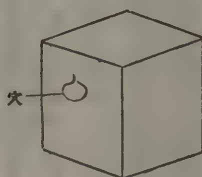
靈號ニ預ル人々者、靈神ト止調、未被授靈神號人者、官位姓名ヲ書テ祭、或實名－－－魂ト調者也、

〔鈴木叢書十五〕伯家神事式

靈璽串



檜長八寸、巾一寸六分角、或四寸中八分角、



寸法可應串

筥覆白生絹、前ニ靈號書下、小机立四寸八分、餘ハ可應覆筥、

〔早懸略記〕位牌、神靈代也、當人平生神拜ニ用キラレタル笏ノ形ニ拵、廟所迄持行也、白絹ニテカブセ袋スル、持歸リ忌中所ニテ祭之、カタノ靈代也、○中略代々家ニ祭來御靈代、當人平生神拜ニ用ヰラレタル笏ヲ、其儘實名位階ヲ書用キル也、裏ニ姓氏生歳月日、卒年月日ヲ記入、棺前認メ當人ノ前ヘ持行、御靈ヲ是ニ止メ給ヘト申、口傳臺ヲ一重二重ニテモ付サセ清メ置、袋ヲ縫、スツホリトカヅセ祭也、袋ハ大和錦ノ類、又赤色綾ニテモ、裏ハ、白絹ニテモ布ニテモ見計、誠ニ大切ノ品トハ此事也、女儀ナレバ、笏ノゴトク拵ル也、

〔垂加流葬祭式〕垂加翁御靈ハ、惟足翁ト相談ニテ、存生ニ出雲路民部ニ封ジサセ、自身勸請シ、先祖

ヲモ封ジ込玉フト也、銅ノ箱五寸四方、高サ八寸、蓋ハ二三分程下ヘシヅメ、銅ニサンヲシテ、下ヘ落入ヤウニス、底モ三四分上ゲ、中ニ穴ヲアケ置、扨榊ヲ五分ニケヅリ中ニ立、埴土ニテ廻リヲツメ、柱ヨゴレル故ニ、別ニ一本拵置、木口ニ心ヲ書、上ハ蓋ニ盃ニシ、底ノ穴ノ處ハ細クシテ、外ヘ三分ホド出シ、センヲ指シ、初ノ柱ハ拔替ル、扨蓋ヲシテ銅ノ縁ヲ内ヘタヽキ伏セ、重ネテアケヌ樣ニスル也、翁ニ直ニ垂加靈社ト彫付テアリ、上家ハ四角ニシテ二枚扉、屋根ハ四方軒ニシテ上ニ寶形アリ、前ニ三四寸ノ丸鏡、裏形ニ鳥居ノ中ニ、淨衣烏帽子著タル老人、梅花ヲ指出シ、下ニ女姓跪ヅキタル處也、是誕生ノ時、母ニ夢想ノ體也、鳥井ハ日吉社也、鏡ノ上ヲ惟足翁ヨリ來ル靈社號ノ紙ニテ包メリ、初ハ宿ニ有シガ、後ニ下御靈社内ニ社ヲ建置レシニ、新社トテ公儀ヨリ咎ラレ、雨宮近江守殿ヘ民部參リ、申分立テ別儀ナシ、然レドモ垂加翁別社入ザルコトヽテ、下御靈庚申相殿ニシ玉ヘリ、

〔神道葬祭家禮〕神體勸請ノ傳、別ニ橘家傳アリ、垂加翁曰、神道之喪禮、如遷宮之儀也ト、垂加翁神去玉フ時ハ、肩衣袴ヲ著シ、乘物ニテ常ニハレナル方ヘ行タマフ時ノ粧ノ如シ、門人前後ニ供奉ス、黒谷ノ山葬所ニ廻リニ幕ヲ打、其内ニ穴ヲホリ棺ヲ埋テ、廻リヲ炭ニテ詰、上ニ石碑ヲ立テ、銘ニやまさきかゑもんはかト書ベシトノ遺言ニテ、其通リ行ヒシトナリ、垂加翁、卜部兼連ヨリ垂加靈社ノ神號ヲ受タマヒ、存生ノ内、ミヅカラ神靈ヲ封ジ玉ヒテ、下御靈ノ社内庚申ノ社ノ相殿ニ祭オキタマフ、今ニ正月廿二日備タ鏡餅ノ開、二月廿二日十一月廿二日祭禮アリ、供物ハ鹽ゴマメ飯ヲ供フル也、カロク祭ルコト靈社ノ遺言也、是モ亦考フベシ、故神道ヲ尊信シ深ク志アルモノハ、存生ノ時ヨリ、吾ガ神靈ヲ封ジ置テ毎日拜スルユヱニ、死シテ後モ子孫コレヲ祭ルナリ、存生ノ時封ゼヌ常人ノ神體ハ、死シテ後早速、勸請ノ傳ヲ受タル神職ノ者ヲ頼ミテ、右ノ通ノ箱ニ封ジテ祭ルベシ、此神體ヲ封ズル間ハ棺ニ膳ヲ供フベシ、封ジヲサメテ後ハ、右ノ箱ノ神體ヲ主

トシテ膳ヲ供フベシ、古ヨリ神道ニテハ、吾ガ神靈ヲ封ジオケバ、先祖ノ神靈モ殘ラズ附祭ニシテ、一所ニ膳ヲ供ヘ祭ルコトナリ、

〔喪祭私說〕神主

擇栗作之、上爲圓首、高七寸七分、濶二寸、厚八分、剡上三分、圓首、凡器物制式、皆用今匠尺、後倣之、爲勒前爲頷而判之、前面厚二分半、長七寸、上斜剡作璫形、後身頷長七分、下斜剡作璫形、以斷前面、除頷其厚五分半、頷下刻陷中、深二分半、濶六分半、長四寸、竅其旁、徑二分半、通于陷中、離趺面四寸六分、合之植於趺、趺方二寸五分、厚八分、鑿之洞底、以受主身、○中略

主櫝　檜木作之、板厚三分、平頂四直、高九寸、濶七寸、深四寸六分、皆用內矩、蓋座厚九分、蓋檣四方、兩各八分、剡爲圓形、中以板隔爲兩局、各壘小櫝、櫝前上下設潛以嵌戶、如今書廚制、戶板二寸五分之下、鑿兩圓孔、徑二分、兩竅相距二寸九分、竅下一寸、以置一小木、以便開閉、皆飾以黝漆、櫝下臯于高五寸、濶八寸、長一尺二寸、桐木作之、不用漆飾、○中略

座蓋　座以薄板三片相合、安於趺之兩旁及後面、比主稍高、面頂俱虛、趺之四邊、各寘於板少許、可令蓋、蓋亦以薄板爲之、四片相合、有頂、可以罩趺上、板稍前面、皆一觀緻、俱以漆飾之、或不加漆飾、亦可、

陷中書式　裁厚滑紙、大如陷中、凡不問尊卑男女、皆書曰姓某諱某神主、題畢嵌定、不用糊粘、務令貼合、不可拔動、

主面書式　裁厚滑紙、大亘前面、凡諸孝皆以家君稱、旁親祔主去家室字、惟以君稱、諱尊等、皆然、但中下殤、從己所稱、但不用某奉祀主祀等字、題畢貼于主面、以代粉面、

陷中

姓某諱某字某稱某號某神主

主面

某壁號家室君神主

書後、是編主面書式、粉乎吾萬年先生、嘗聞先生、采當時儒之說、折衷以立一家之法、蓋謂朱子家禮、主面書屬稱及主祀之名加贈、易世更之、夫生有封爵、不能不書、死有追贈、不能不更、然主已神之所寄、而子孫晨夕致敬之久、則其改題也、原出乎不得已、我邦士流、生已無封爵、乃追贈之典、固所不與、今乃省屬稱及主祀之名不書、則雖易世不用改題、事簡而心亦安焉、祖先之稱、用府君孺人、在我邦

士庶不免僭僞、近儒有以家君室君稱之者、甚得允當、旁親祔位雖卑等、亦書曰君、似是過稱、然既以不改題爲要、乃今日己之卑等、是異日皆爲子孫之尊行、且旁不題主祀之名、則姑如過稱亦無害焉、但若中寫下寫、祭不及子孫、乃從主者所稱可也、陷中嵌紙、古制所無、主已不改題、則前板亦宜直書、不更用紙代粉面、但方書題時、敬愼之至、心手畏縮、反易致字形參差、若陷中運筆甚苦、阻閡最難保無脫誤、而鑿鑿之役、固所不忍焉、不若用紙之書寫平易、改換自由、而心舒手熟、自免差謬、且禮俗之壞既久、安知異時無子孫順孝、家敗嗣絕、諸主散失、不復收藏、當是之時、孰能一々刊削瘞埋、以揜其醜哉、識者所以寒心、乃若一紙所貼、剝而焚甚易、雖路人亦能爲之、既爲空主、則祖先之神、與夫孝子順孫、歷年崇敬之情、亦可少安慰矣、君子方無事之日、不能不爲後世慮、陷中主面、俱用紙者以是也、先生又有一制、不必別作神主、唯用世俗所謂位牌、大與神主準者代之、裁紙如陷中主面、書法若前式、題畢糊陷中、紙面貼主面、紙背隨糊其四隅、以貼牌面、蓋慮或有水火盜賊、而身老人寡、不能盡遷者、就剝主面、奉而避之、萬無失墜、是其制與俗不異、人家易行、併足以存不廢之戒、乃命行于家法云、以愚觀之、前制固悉斟酌之方、而後制兪得時俗之宜、乃家素有神主者、須一從前制、至於窮鄉士庶有志者、欲新立祠室奉神主、則不如隨便用後制之最愈、今述所聞、以備考據、

〔葬禮儀略〕神主圖式

上ノ兩角、周尺ノ五分ヲ削テ首ヲ圓クス、一寸ノ下横ニアリニシテ、粉面ノ頭ヲ入ルトコロヨリ下判テ二枚ニス、其一分ハ前ノ粉面ニテ、二分ハ後ノ陷中ノ方也、然ラバ粉面ノ厚サ四分ニシテ、陷中ノ方ノ厚サ八分也、前後ヲ合テ趺ニタツレバ、趺ヨリ上ノ高サ一尺八分、趺ノ高サヲ入テ一尺二寸也、面ハ胡粉ニテヌル、粉面ト云、陷中ハ後ノ厚サ八分ノ方ノ眞中ニ陷カニホル、長サ八寸或ハ六寸、或ハ一尺横一寸、深サ四分也、其兩旁下ヨリ七寸二分、是ニ竅ヲホリ中ニ通ズ、竅ノ廣サ四分ヤワリニホルベシ、若シ世カハリテ後孫ノ世ニナラバ、粉面ノ顯考ノ字ト奉祀ノ者ノ名トヲア

ラヒ落シ、顯祖ト書カヘ、維奉祀ト書改ムベシ、高祖曾祖モ同例也、但シ陷中ハ書改ル事ナシ、神主ハ周尺ニテ制ルベシ、其外ノ喪具ハ、今尺ニテ書ス、今尺トハ木匠尺也、周尺ハ、カネ尺ノ六寸四分ヨリ少シ短キモノナリ、

座蓋圖

座蓋ハ神主ヲ入ル箱也、薄板ニテ作ル、座ハ後ト兩方ト三方ニテ、前トヤネト無シ、高サ神主ヲ入テ神主ヨリ少シ高キ程ニ、廣サ深サハ神主ノ跗ノ四邊少シ寛キホドニス、蓋ハ四方ニシテ、ヤネヨリ只前面ニ一竅アリ、座ノ上ヌキニスル也、座蓋トモニ漆ニテ黒クスベシ、

新喪ノ時ハ、□多クシテ能制リガタシ、先神主ノ箱ヲコシラヘ、葬禮オハリテ後、座蓋ヲ作ルベシ、別ニ櫝幷ニ韜藉ナドノ制法有、今座蓋ハ、制法ノタヤスキニ従フ、心アル者ハ家禮ヲ考テ制法スベシ、

〔鵞峯文集七十四哀悼〕泣血餘滴

明曆二年丙申三月二日辛巳申酉之交、余母荒川氏諱龜終於寢、五日甲申、春齋、春德、春信、春常等、拜神主而後納之於櫝、

神主書式

陷中
荒川氏龜媼神主

粉面
顯妣順淑孺人荒川氏神主　　孝子林恕奉祀

高一尺一寸、横三寸、厚四分、并後一寸二分、前後合之植於趺、身出趺上一尺八分、并趺高一尺二寸、

顯妣順淑孺人荒川氏神主
孝子林恕奉祀

（高一尺二寸、横三寸、厚八分、幷前一寸二分、剡上五分爲圓首、寸之下勒前爲頷、而判之、爲二片、而其一分居前、二分居後、前四分、後八分、陥中在後、前面以粉塗之、陥中長六寸、或曰一尺、横一寸、深四分、竅其旁以通中、如身厚三之一、謂圖徑四分、居二分之上、竅在七寸二分之上、前粉面書屬稱、屬謂高曾祖考、稱謂官或號行、如處士秀才幾郎幾公、陥中以書爵姓名行、書曰故某官某公諱某字某第幾、神主粉面左旁、題主祀之名、曰孝子某奉祀、改書奉祀於右[illegible]、加贈易世、則筆滌而更之、外改中不改也、）

櫝式（家禮有圖、然無寸尺法、如此大體恰好、櫝內外頂座皆黑漆、○此下有圖、今略、）頂厚一寸、高一尺八寸、（但周尺）横一尺、左右脇各八寸、座高五寸、

（今按家禮註云、神主其下左旁、曰孝子某奉祀、然見神主圖式、則奉祀在右、朝鮮李退溪自省錄論之、蓋神主之右、卽是向彼者之左也、由是圖與註有異歟、然曰神主其下左、則左乃是神主之左、而非向者之左、且神道尊右、則奉祀者、豈以己名可記於其右哉、今姑據註不據圖、猶可考焉、）

（又按神主幷櫝之圖式、詳見家禮、其式皆用周尺、神主寸尺精密、今詳記之如右、櫝有式無寸尺、故據神主寸尺廰斷之、以隨宜恰好、他日埀韜其制、如斗帳、又設籍、皆用緋色、其制式據家禮、）

〔泰山集甲乙編雜著二〕垂加翁、火儒法神主、父祖附靈社、族人爲懸物祭之、懸物亦未爲是、繪像尤非是、或旁書官姓名、是亦神主之類、神主又位牌之類、伊勢卜部、皆有御正體之故實、此爲至極、○中略嘗問舜水明○人西土用家禮之神主否、曰不然、貴人神主大、賤人神主小、以此想得、隱元作諸家靈牌、亦隨貴賤有大小、伏義至堯舜數聖神主、不知當時如何作也、時無筆墨紙、必不與後世同、我朝開闢以來、有神體之法、噫盛矣哉、

〔下學集器財下〕位牌（イハイ）

〔塵添壒囊抄十六〕位牌事

過去ノ人名ヲ書クイハキト云ハ何ノ字ゾ、位牌ト書也、位牌ノ上ニ物故ト書ニ付テ、物沒同ト云ヘドモ、位牌ニハ必ズ物ヲ用ト云說アリ、其故アル歟、但シ位牌ト云事、禪家ニ好用ル儀歟、正道ノ古所ニ无事也ト云ヘリ、先代ノ中比ヨリ、早アリケルニヤ、

〔南留別志二〕今の俗に用ゆる位牌は儒家の制なり、明の會典に雲首の式有、今の儒者は家禮の法を守る、程朱の法にて古禮には非ざる也、神主の制など寒酸に過たるゆゑ、明には用ゐざる

なり、まして世祿の國には用がたく覺ゆるなり、

〔塵尻 四十五〕水府相公久昌寺に被仰出法式

一近世富人、死則不論門地下賤、妄費財物高大其名誌、莊飾其牌位、而無士庶夫別、向後石誌牌位、共可堅守所定之制量、

〔園太曆〕延文三年六月四日、今日將軍〇足利尊氏五七日佛事、如此間乾峯和尚爲導師云々、去夕贈官位事、尋參仕外記康隆注送之、又圓忠有示旨、〇中略圓忠送狀、位牌書樣、幷羽林著服等條々談之事、

贈官位、去夜巳刻到來候、位牌と申候物、如此可書改候、僧家寺號已下事者如此候、此上官位摸樣、可爲何樣候哉、可被示下候也、〇中略恐々謹言、

六月四日　圓忠判

進之候

條々申入候了、御贈官位、去夜沙汰進之候、目出候、位牌事、被任僧家候之外、不可有子細候、但日來存儀一紙被注出候、若可被用唐名者、可爲御心得、傍々被注付候也、〇中略恐々謹言、

六月四日　妙悟

左府如何　已下僧家之樣

贈左大臣從一位長壽寺殿仁山義公尊位

官位上下可爲何樣候哉、寺號道號法名爲妙義、

故征夷大將軍贈從一位行左大臣

唐名開府儀同三司

唐名左僕射或左丞相

五日、今日贈左府五七日佛事云々、位牌事、昨日就問返答之、而圓忠注出分、不叶愚意之由有傍難云云、去夕有示告人、仍今日以使者遣圓忠示所存了、所詮故征夷大將軍贈從一位行左大臣源朝臣仁山義公尊位可宜歟、將又贈左大臣從一位歟、此條々可在賢慮之旨示了、　六日、今日圓忠法師送狀、彼位

牌事、落居之篇目注送之、故令申之條、本意之由報了、〇中略抑寺號事、讃州禪門者、號淨妙寺、武衞禪門者、號大休寺、是則先代、最明寺、法光寺、皆以載寺號於位牌云々、故雖今更難休之由其沙汰候了、但和漢眞俗混全不可然候之間、注疏各別書顯了、爲散御不審獻短册候也、內々可得御意候、恐々謹言、

六月六日　　　　行忠判

左馬助入道殿

故征夷大將軍贈從一位行左大臣源朝臣長壽寺殿仁山義公靈位

彼御位牌、粗傍難觸耳有候之間、昨夕人々申候き、今注給之旨、更無子細候歟、愚意之所存、難申達候者、本意之由候、

〔太平記三十五〕北野通夜物語事附青砥左衞門事

西明寺ノ時賴禪門、密ニ貌ヲ窶シテ六十餘州ヲ修行シ給ニ、或時攝津國難波ノ浦ニ行到ヌ、〇中略既ニ日昏ケレバ、荒タル家ノ垣間マバラニ軒傾テ、時雨モ月モサコソ漏ラメト見エタルニ立寄テ、宿ヲ借給ケルニ、內ヨリ年老タル尼公一人出テ、〇中略我ハ親ノ讓ヲ得テ、此所ノ一分ノ領主ニテ候シガ、夫ニモ後レ、子ニモ別テ、便ナキ身ト成ハテ候シ後、總領某ト申者、關東奉公ノ權威ヲ以テ、重代相傳ノ所帶ヲ押取テ候ヘドモ、京鎌倉ニ參テ、可訴訟申代官モ候ハネバ、此二十餘年、貧窮孤獨ノ身ト成テ、麻ノ衣ノ淺猿ク、垣面ノ柴ノシバ〳〵モ、ナガラウベキ心地侍ラネバ、袖ノミ濡ル露ノ身ノ、消ヌ程トテ世ヲ渡ル、朝食ノ烟ノ心細サ、只推量リ給ヘト、委ク是ヲ語テ、淚ニノミゾ咽ビケル、斗藪ノ聖、熟々ト是ヲ聞テ、餘ニ哀ニ覺テ、笈ノ中ヨリ小硯取出シ、卓ノ上ニ立タリケル位牌ノ裏ニ、一首ノ歌ヲゾ被書ケル、

難波潟鹽干ニ遠キ月影ノ又元ノ江ニスマザラメヤハ、禪門諸國斗藪畢テ、鎌倉ニ歸給フト均

ク、此位牌ヲ召出シ、押領セシ地頭ガ所帶ヲ沒收シテ、尼公ガ本領ノ上ニ副テゾ是ヲ給タリケル、

〔鹿苑院殿薨葬記〕應永十五年戊子五月六日酉剋薨

一御位牌事

新薨　鹿苑院准三宮從一位大禪定門　尊靈位

等持寺御位牌銘如此云々

新捐館　鹿苑院殿准三宮大相國天山大禪定門　台靈

〔萬松院殿穴太記〕高机に打敷を敷て、眞中に御位牌あり、〇足利義晴紙にて包みたる上に、新捐館萬松院殿贈一品左相府曄山照公大居士昭儀とぞ書れたり、絹一幅を御位牌のたけにして上にきせ奉る、

〔東照宮御實紀附錄十七〕永祿五年、西の郡攻取れし頃、刈屋へたちよらせられ、かさねて御母公傳通院殿に御對面おはしまし、水野右衛門大夫忠政も拜謁し奉る、その時岡崎殿廣忠卿大納言の靈牌を拜し、御淚にむせび玉ひぬ、御母公の御願によて、一寺を創建ありて、尊牌を安置し玉ひ、五拾貫の地を寄附せられ、尊牌の裏に御みづから御筆をそめられ、この牌永世崇尊し奉るべき旨しるし置せ玉ひぬ、人々御孝思の篤を感じ奉りけるとぞ、

〔大猷院殿御實紀八〕寬永三年九月十五日、大御臺〇德川秀忠室淺井氏薨せらる、御よはひ五十四、〇中略十八日、この夜大御臺の靈柩を三緣山にうつし、靈牌を增上寺廣慶院方丈に安置す、〇中略けふより事にあづかる輩、寺に伺候し、西鄕若狹守正員方丈を勤番す、

〔泰山集雜書甲乙錄七〕吉田殿上野參拜、惟拜東照宮而歸、不拜他殿、曰他殿皆有靈牌穢氣也、故不拜、其忌齋如此之嚴、而墓上立社何耶、

〔宮川舍漫筆三〕芭蕉翁位牌

予が緣者なるものは、下谷二丁町に居住して、松村といへる者なり、〇中略ばせを翁の時は、松村家

は姪の世にて有し也、右ゆゑ翁終焉之後、翁の位牌并手澤の手道具を始、種々の品等有之ところ、池魚の災にかゝりて、殘りなく烏有の員に入りし事、惜むに餘りあり、今は唯位牌肖像、并桃青之石印二顆、幸ひに持傳ふ、されば翁の流を汲む俳士、往々尋來、尊牌を拜するもの少からず、○圖略

〔大江俊矩先妣御事雜誌〕文化二年四月十四日、亥刻御終焉、　十五日、御棺前設机、敷白布打敷、安置御位牌、白木也、予書之、○中略　御位牌書樣左之通、

表　眞玉院清貞倫子　　裏　文化二年乙丑四月十四日

五月一日

一御位牌申付　　佛師　河原町通荒神口下ル西側　菱屋卯左衛門

清光院殿形之通也、昨日宿坊ヨリ取歸、即手本ニ遣置也、

表　眞玉院清貞倫子　　裏　本間氏女、故民部權大輔俊冬(大江氏)室、文化二年乙丑四月十四日死、

〔善庵隨筆一〕今日ノ例、人死スレバ剃髮シテ、寺僧ヨリ戒ヲ授ケテ弟子トナシ、葬埋スルコトナレバ、

授菩薩戒儀要解云、梵網云、衆生受佛戒、即入諸佛位、又云、若不受此戒名、名爲外道邪見人輩、畜生無異、木頭無異、○中略

生前ノ俗名ニテハ、佛弟子メカヌ故、別ニ歿後ノ名ヲ製シ、コレヲ戒名トイフナラン、シカシ佛典ニ授戒ノ儀ハアレドモ、名ヲ授クルコトハナシ、故ニ內外ノ二典ニ、戒名ノ字所見ナシ、然レバ戒名トイハンヨリ、俗ニ從ヒテ法名又ハ法號ナド、生前ニ用フル所ノ稱ヲ歿後ニ移シテ、法名法號トイフノ穩ナルニ如カズ、

〔忍辱雜記下〕法名戒名道號

先哲筆記云、亡者授號、應云法名、云戒名非也、凡授號作方、云道號、云譽號、隨導師意、追授者器、具略不

定也、或取經義、或假外書字、無有定法矣、

〔忍辱雜記下〕蓮社號

要覽上云、昔晉慧遠法師、雁門人、住廬山虎溪東林寺、招賢士劉遺民宗炳雷次宗張野張詮周續之等爲會、修西方淨業、彼院多植白蓮、又彌陀佛國、以蓮華分九品次第接人、故稱蓮社、乃至又稱淨社、乃至夫社者、白虎通云、王者所以有社、何爲天下求福報土、人不土不食、土廣不可遍敬、故封土以立社、今釋家結慕緇白、建社祈福、求生淨土、淨土廣多、遍求則心亂、乃確指安養淨土、爲棲神之所、故名蓮社淨社、儞、（倣誤）（傳六、竹窓隨筆二、往生集、可見、）蓋慧遠法師者、漢土念佛會開士也、以是故本朝淨業僧侶、倣此嘉號、則有白蓮社、（敬蓮社、共錄西上人弟子）旭蓮社、（白旗上人門人）盛蓮社、（蓮勝上人弟子）西蓮社、（了實上人弟子）大蓮社（聖冏禪師弟子）等、從爾以降、永爲白旗派之標號者也、

譽號（又阿號者、始自後乘坊重源大德矣、）

先哲筆記云、宗門譽號、始白旗寂慧上人上足定慧上人、自號良譽、斯乃本導師五種嘉譽之高判矣、○中略夫譽者讃美歎德之義、稱揚念佛行者之謂也、○中略

寺號院號殿號

先哲筆記云、靈名加院號者、未詳其本、有人云、院號自有二義、一義云、院號本是非佛家號、和朝古今天子受禪之後、指其御所稱號某院、崩御後亦爾、又攝家淸家等高貴、或稱某院、或稱某寺、又城主國主等、爵位某室家子息之貴族、隱退之後、落髮之後、稱以院號、沒後亦爾也、乃是和朝古風也、故知非佛家之號也、一義云、院號寺號、共是僧伽藍之異名、而釋家所居之目也、由來既久、是以豪家貴族之歸入釋門、便改俗稱而稱其院、或沒後稱號、以標歸依佛法之人也、已上

居士

先哲筆記云、居士者、羅什三藏釋云、外國白衣、多財富樂者爲居士、長水師曰、博聞强識、不求仕宦、居財

大富、秉志廉貞、故名居士、物觀疏六之上六丁 法華實贊十之四十一丁 名義集二之二十三丁 等處々義同、又祖庭事苑三之二十五丁云、凡具四德乃稱居士、一不求仕宦、二寡欲蘊德、三居財大富、四守道自悟也、又菩薩經云、有居財之士、居家之士、居法之士、居朝之士、居山之士、通名居士、已上 佛祖統記四十六之二十三丁云、居士者、西域學佛道者之稱也、已上 依已上說、或隨一德、或具四德、多少存意、並非無德號、○中略 佛家加之靈號、若非在位有德人、不爲、然近世不論賣人農夫、任施主請漫授與之、是無法之甚也、有人曰、念佛行者、既稱信士、何不稱居士、報云、據實而論、人中上々人、居士之稱、何憚有之、顧世譏嫌、則可知差別、謂居士、外伐內德兼備之人而稱之、信士不拘外相、唯有內德則稱之、又居士內外兩宗共用之、信士局內教之名也、

〔隨意錄 六〕僧徒作諡號、於富貴人、則皆稱曰居士、蓋是原乎維摩居士乎、然不中之稱也、居士與處士同謂未仕之士也、處士之稱、則出於孟子、居士則見於記玉藻、不知僧徒、則以居士爲何謂耶、

〔忍辱雜記 下〕大姉號

問云、靈名下置大姉、何意焉、又有本據耶、答云不揀母女姉妹、敬其人而稱之耳、但非中下人之號也、須別尊卑而與授焉、太子瑞應本起經上曰、○中略 菩薩追呼曰、大姉且止、○中略 行事鈔下之三云、善見曰、喚婢爲大姉、不得云婢、已上 業疏三之下云、大姉者、先長之美號、已上 孚信錄七、引碧巖六卷及傳燈錄十五云、○中略 大姉云、作麼作麼一乘齊證無生法忍等、已上 谷響集二云、客問、婦人稱大姉、其義如何、有典據耶、答、如男子稱兄敬之也、涅槃經中、佛稱諸天女言諸姉、○下略

〔安齋隨筆 後編十〕寺院號　死人に追號を何寺何院と云は、其人存生の時、後世の爲に佛院を建立したる故、其寺院の號を稱する也、是攝政關白將軍家等高貴の人は、寺院を建立し給ふ故に此號あり、存生の時、寺を建立せられずとも、死後に位牌を置く所を建立して、それを何院と號するもあり、皆高貴の人の上の事也、凡下の人の院號を稱する事は、曾てなき事也、今世は武家少祿の者も、皆院號を稱すは、かたはらいたき事なり、それさへなるに、金子を出せば、商人浪人の類にても、

寺僧の院號を賣り物にする也、又云、物を知らぬ儒者は、將軍家の御追號を文に書くに、大猷院を大猷君、或は猷廟と書き、常憲院を常憲君、或は憲廟と書く類あり、御追號は勅號なり、何ぞ私に院の字を削り云へるや、上を蔑如するの罪輕からず、其文異國の風に似て宜きがごとくなれども、此國の禮に背けり、禮を知らざるは儒の道にあらず、儒者は唯文辭を異國風に作る事のみを好て、此國の風に違ひ、禮に背く事は心つかず、愚かと謂べし、

〔鹽尻 四十五〕水府相公久昌寺に被仰出法式

一以香火寺名爲創建檀主號、乃本朝中古之風、而名卿鉅公之稱也、然近世僧徒、不論士庶、謾授院號、是大訛也、向後堅禁之、且夫院號之下安殿字、乃叢林禪徒所傳謬、而甚無義理、向後縱雖有官爵者有故稱院號、不徒加殿字、

〔鹽尻 三十五〕我國往古、廷臣功ありて死すれば、誄辭をたまひ號とせり、謚は不比等以來也、東三條攝政、入道して如實と法諱ありしより、大方釋氏法名を授けし、

〔鹽尻 三十九〕昔我國、任太政大臣而執終之臣、多有封謚、〇中略中世より浮屠に入、謚封の事やむ、寺院の號を稱するは、東三條攝政兼家に始れり、法興院と號す、

〔德川禁令考 寺社四十二〕寛政元酉年二月

尾張殿御城附より問合

百姓之父母院號居士號之儀

百姓之亡父母江、新規院號居士號差免候儀、

書面眞善寺より直右衞門之父母江、院號居士號差免候段、新規之儀ニ付、可相斷旨村方江御申渡有之上は、寺法ニ拘り候共、眞善寺、強而可申立筋ニ無之候間、得と利害御申聞、其上にも致難澁候はゞ、猶又問合有之方と存候、

〔德川禁令考寺社四十二〕文化三寅年二月

百姓之法名ニ院號居士號大姉號、先前より附來候分は爲削取候ニハ不及事

石川左近將監

大久保安藝守殿

新義眞言宗ニ而者、百姓之法名江、院號居士號大姉號附候而も不苦筋ニ候哉、不相成候事ニ候はば、壹箇村之檀頭ニ而、代々院號居士號大姉號附來候而も、吟味ニ相成候而は、是迄附來候分も不殘爲削取候方ニ可有之哉、御問合仕候、以上、

文化三寅年三月

御書面、百姓之法名江、院號居士號大姉號附候儀、新規ニハ容易ニ難成候得共、先祖より由緒等有之附來候分ハ、附直ニ御申付候ニハ不及筋と存候、

四月

〔德川禁令考寺社四十二〕天保二卯年四月

葬式石牌院號居士等之儀ニ付御觸書〇中略

墓牌之儀も、高臺共四尺を限、戒名江院號居士號等、決而附申間敷候、尤是迄有來之石牌者、其儘差置、追而修覆等之節、院號居士號等相除、石牌取縮候樣可致候、

右之趣、御料私領寺社領共、不洩樣可觸知者也、

四月

右之通可被相觸候

〔相州鎌倉松岡過去帳〕

正治元年　正月十三日

賴朝公嘯源大禪定門（左馬頭源播磨守義朝三男）

弘長三年癸亥十一月廿一日

相模守平時賴最明寺道崇大禪定門

〔近江國番場宿蓮華寺過去帳〕敬白

陸波羅南北過去帳事

元弘三稔癸酉五月七日、依京都合戰破、當君〇光嚴、兩院〇後伏見、花園、關東御下向之間、仝九日、於近江國馬場宿米山麓一向堂前合戰討死自害交付、荒々注文事、

越後守仲時　二十八歳　櫻田次部大輔入道淨心　四十七歳

同苅田彥三郎師時　三十四歳　高橋參河守時英　四十一歳

同孫四郎業時　三十四歳　同又四郎範時

同五郎盛時　二十一歳　同孫四郎左衞門元時　〇十七歳中略

同法名帳事

時阿彌陀佛　淨阿彌陀佛

師阿彌陀佛　英阿彌陀佛

業阿彌陀佛　範阿彌陀佛

盛阿彌陀佛　元阿彌陀佛〇下略

〔重編應仁記〕一寬正四年八月八日ノ晚、於高倉御所、御母君〇足利義政母御逝去有之、〇中略卽御法號ヲ、勝智院殿從一位萬山性壽大禪尼ト稱シ奉リヌ、

〔重編應仁記〕十八去程ニ同年〇永祿八年六月九日、北山等持院ニ於テ、故公方義輝卿御葬禮ヲ執行フ、御贈官有テ、卽御法名ヲ光源院殿一品贈左相府融山大居士ト崇號シ奉ル、

〔阿部家夢物語〕天文四年乙未極月五日ニ、於尾州森山ニ、清康樣被御腹を召、從其大樹寺玉譽聖人樣之御前ニ而、道甫樣之御戒名を請取申、同七日ニ大樹寺を罷立、〇中略今橋迄、同十日に罷著之處に、過去清康樣之御菩提之儀御尋有、旁々へ彼御戒名を進ひろめ申也、

〔相州兵亂記三〕氏綱逝去之事

天文十年ノ夏ノ頃、氏綱不豫ノ事アリ、〇中略終ニ同七月十九日、空ク成リ玉ヒケル、一門ノ歎キ申計ナシ、則湯本早雲寺ニテ一片ノ烟トナシ奉ル、別稱ハ春松院殿快翁治公居士ト名付申、

〔總見院殿追善記〕將軍〇織田信長の威氣、天下に衣被し、古今に獨歩す、上は上皇を安じ奉り、下は下民を憐む、仍忝も勅使をたて贈官を給ふ、總見院殿大相國一品泰巖大居士と號し奉るもの也、

〔定慧圓明國師虛白錄〕國泰寺殿雲山龍公大居士〇豐臣秀吉法號肖像〇中略

大明日本、振一世豪、佩國王印、賜天子袍、鳳翔千仞、鶴舞九皐、太平路海濶山高、別々永視、兒孫累枝葉、年松上結蟠桃、　慶長戊戌〇三年仲冬日　祥雲寺比丘南化虔欽贊

〔台德院殿御實紀四十二〕元和二年四月、〇中略この月江戸增上寺にも、靈廟を營造せられ、〇德川家康廟僧徒法諡を奉りて、安國院殿德蓮社崇譽道和大居士と稱し奉る、

〔鹽尻一〕我尾府下永安寺は、淺井備前守長政卿の菩提道場なりと、今は誰忍ぶ人なきぞあはれなる、永安寺殿貞庵道松居士、忌日六日牌子空しく殘れども、卒年さへ覺束なく侍にや、

〔牛日閑話四〕徂徠法號、淸淨院根譽知善居士、三田長松寺　金谷法號、物道靈常心院仁譽義道居士、同寺春臺法號、廓淸齋萬了宗傑上座、谷中天眼寺　白石法號、慈濟院釋淨覺、　南郭法號、解脫院大同義觀居士、

〔先哲叢談後編二〕山鹿素行、素行以貞享二年乙丑九月二十六日、歿于淺草田原街家、〇中略法謚曰月海院瑚光淨珊居士、

〔大江俊章記〕享保三年十一月一日、今卯下剋、大夫樣○大江俊光御カクレナサレ候ナリ、○中略今夜皆ヨリヤヒ、御カイ名ヲ定ナリ、樂善堂逢元樣ト名付タリ、

〔大江俊章記〕享保六年四月廿三日、午剋計、德大寺殿御裏是前攝政家熈公御子、右大臣家久公御姉、御腹ハ女一宮、是法皇御所宮ナリ、御死去云々、　廿日、入夜德大寺殿御裏御葬送、○中略法名靈性院殿慈空了惠大姉ト號由、

〔鸚鵡の花下〕近松門左衞門が法名

今昔操年代記卷の下に、近松の事をのするも甚つばらなり、その中に、○中略名阿耨院穆矣日一具足居士と見ゆ、柳亭主人曰、近松が自筆法名有、それに阿耨院穆矣日一具足居士とあり、日蓮宗故に、日字を付たるを、二字をあやまりて一字とすといへり、世人のいまだしらざることなれば、今こゝに記す、

〔續百一錄〕元文六年○寛保元年十月廿九日、御葬送、○日野家酉ノ刻過御出門、

從一位前權大納言藤原資時卿觀影證眞大居士

〔三哲小傳〕賀茂縣居の大人は、○中略明和六年十月晦日、齡七十三にて身まかられぬ、江戸品川東海寺なる少林院のうしろの山にはうふりて、玄珠院眞淵義龍居士と法のおくり名す、

〔安齋隨筆前編九〕遺言辭院號、　予七十歲に近くなりぬ、やがて死べし、故に寺の和尙へ遺言の文を書て示しぬ、其文に云、拙者死去候節、追號之事、院號居士號等、長き稱號、堅御無用候、唯何と成とも二字名御附可被成候、殊に寺院號は、攝政關白將軍家等、其寺院を建立被成候ニ依而、其寺院の號を稱し候事に候、假令其寺院建立し給はずとも、建立せらるべき程の高貴の人には、寺院號を稱し候、是故實にて候、我等ごとき賤き武士の身として院號稱しける、かたはらいたく候、依之右之段申入置候、

高からぬ身にははづかし人なみに我なきあとの長き名のりは

天明元年七月十九日　伊勢平藏貞丈自書判

〔玉峯院凶事之記〕寛政十二年八月十五日、京極宮年寄石見者、勢州龜山城主石川主殿頭家臣、岡角左衛門女也、〇中略今日申刻死去也、殘念至極、可悼可悲、年齢七十四、諡號當春、詩仙堂當住東洲撰考、如左、玉峯院桀泉無染、

〔言成卿記〕慶應三年十月廿八日、申刻過、家公薨奏、〇中略御院號、普明照院烟岳暎徹、件御院號、御在世中次男若王子僧正へ被仰付、彼僧被附奉置之由今日被語、予一向不知、而予勘ニ、宮之御院號ニ若無之哉、寺門清淨華院へ尋之處、於彼寺御納宮ニ無之云々、左スレバ可無子細存了、後日油小路中將隆晃被語云、女二宮准后御方姫宮御同號之由、彼朝臣御附故被知事也、多々逝去宮御院號一々不覺次第、於同寺宮御院號不爲御同號、子細無歟、仍件御號定了、

〇按ズルニ、忠仁公、昭宣公及ビ敬公、義公ノ如キ諡號ハ、姓名部ニ在リ、故ニ此篇之ヲ闕ク、

古事類苑

禮式部二十二

葬禮四

訃

古事類苑

禮式部二十二

葬禮四

〔下學集 下 態藝〕訃音（從外告人死之謂之訃音也）

〔塵添壒囊抄 八〕委觀事 付訃音ト云事

外ヨリ死ヲ告ヲ訃音ト云、玉篇曰、訃（芳付反）告喪ヲ也、

〔喪祭私說〕初終

訃告於親戚朋友（護喪司書爲之發書、若無則主人自訃親戚、不訃朋友、自餘書問悉停、以書來弔者、並須五旬忌盡答之、舊按朱子家禮、訃告在治棺後、我國喪期迫促、習俗不可拘攣、則訃告爲最急、）

〔日本書紀 二十八 天武〕元年三月己酉、遣內小七位阿曇連稻敷於筑紫、告天皇喪於郭務悰等、（○天智）（○唐使）於是郭務悰等、咸著喪服、三遍擧哀、向東稽首、

〔日本書紀 三十 持統〕元年正月甲申、使直廣肆田中朝臣法麻呂與追大貳守君苅田等、使於新羅、赴天皇喪、（○天武）九月甲申、新羅遣王子金霜林、級飡金薩基、及級飡金仁述、大舍蘇陽信等、（○中略）奏請國政、（○中略）筑紫太宰便告天皇崩於霜林等、卽日霜林等、皆著喪服、東向三拜、三發哭焉、

〔續日本紀 三 文武〕大寶三年正月辛未、新羅國遣薩韓金福護、級韓金孝元等、來赴國王喪也、　閏四月辛酉朔、詔曰、新羅國使薩飡金福護表云、寡君不幸、自去秋疾、以今春薨、永辭聖朝、（○中略）其福護等遙涉蒼波、能遂使旨、朕矜其辛勤、宜賜以布帛、

賻

〔新朔平門院御凶事書留〕弘化四丁未年十月十三日、今夜戌上刻、女院崩御之旨被仰出、先是御違例御大切、追刻崩之事禁中へ被仰進、御使八條三位、後舟橋二位參侍、內實去十日夜御大切、昨十二日夜被爲召御船云々、依自昨十二日禁中ト御別廊ニ相成、御廊下通裁切、御築地結界出來、

〔類聚名義抄三〕賻（防付反、オクル、）

〔伊呂波字類抄於辭字〕賻（弔喪）

〔段註說文解字六〕賻（助也、从貝、專聲、符遇切、）

〔令義解一職員〕治部省

卿一人、掌本姓、婚姻、祥瑞、喪葬、贈賻（謂、官位曰贈、財貨曰賻、（中略）賻貨者、凡人本司申太政官、官下此省、省更勘申、自大藏省下給也、）事、

〔延喜式十一太政官〕凡親王及大臣薨、（中略）○送葬之日、勅使二人、（一人持詔書、一人持位記、若無贈位者、一人持賻物、數其使人位階、隨亡者高下、）一就弟子弔贈、其中納言以上、及妃夫人薨時弔賻、亦准此、（事見儀式）

〔令義解九喪葬〕凡職事官薨卒賻物、（謂、京官及國司並同也、送死物曰賻也、）正從一位絁卅匹、布一百廿端、鐵十連、正從二位絁廿五匹、布一百端、鐵八連、正從三位絁廿二匹、布八十八端、鐵六連、正四位絁十六匹、布六十四端、鐵三連、從四位絁十四匹、布五十六端、鐵三連、正五位絁十一匹、布卌四端、鐵二連、從五位絁十匹、布卌端、鐵二連、六位絁四匹、布十六端、七位絁三匹、布十二端、八位絁二匹、布八端、初位絁一匹、布四端、皆依本位給、（謂、不論職事高下、唯依位階給也、）其散位三位以上、三分給二、五位以上給半、太政大臣絁五十匹、布二百端、鐵十五連、親王及左右大臣准一位、大納言准二位、若身死王事、皆依職事例、其別勅賜者、不拘此令、其無位皇親、准從五位、三分給二、（謂、准散位從五位、假散從五位給絁五匹、而無位皇親三分給二、即給三匹之類、下文云、減數不等、從多給故、）女亦准此、減數不等、從多給、（謂、大納言以上、本位高者從位給、若卑者依職給之類也、）凡賻物兩應合給者、從多給、

〔令集解四十喪葬〕八十一例云、凡采女及內侍所掌女孺身死、賻物並准職事、其无位者准初位給減數、

〔令集解四十喪葬〕治部省例、大寶元年五月一日、太政官處分、官人賻物者、依正位注物數申官、七月四日勅

裁、僧綱賻物者、僧正准正五位、大少僧都、律師、並准從五位給之、外位、神龜五年格、內位減半給之、女減三分之一也、

〔續日本紀 九 聖武〕神龜三年十一月己丑、五位郡司身卒、始賜賻物、

〔續日本紀 三十三 光仁〕寶龜五年八月甲申、勅、外國五位已上身亡、本居者、自今以後、宜割當國正稅給其賻物、

〔享祿本類聚三代格 六〕太政官符

應賜外國官人賻物事

右檢承前例、外國官人卒死賻物、皆以京庫物賜、今被右大臣宣偁、奉勅理不可然、自今以後、宜改其例、以當國正稅給之、但新任未赴任所身亡者、依舊給於京庫、永爲恒例、

延暦八年八月十一日

〔享祿本類聚三代格 六〕太政官府

應給在當國五位已上幷國郡司賻物事

右檢寶龜五年八月十七日格偁、五位已上、身任外國賻物、宜當國正稅准物宛給、又同八年三月廿六日格偁、諸國郡司五位賻物、宜以當國正稅給之、又延暦八年八月十一日格偁、檢承前例、外國官人賻物、皆以京庫物賜、右大臣宣、奉勅理不可然、自今以後、宜改其例、以當國正稅給、○中略諸國依此等格直給賻物、所司因循行來尙矣、而中間以降、徒勞下符、待符之間、不穏宛給、因玆助喪之賜、不資殯斂、送葬之家、遂闕支用、今被右大臣宣偁、贈賻之義、爲厚人終、贈不及尸則非禮也、宜件等賻物、當卒死時、依格令給、莫更下符、但所用物、加別錄言上、

天長元年九月二日

〔享祿本類聚三代格 六〕太政官符

應賻物料商布停收施藥院進穀倉院事

右太政官去天長元年六月廿日下民部省符偁、諸司主典已上卒死之日、例給賻物料事有恒例、而至給物實避忌經日、喪家之費、卒難支給、今被右大臣宣偁、奉勅宜件料、特令交易充殯斂者、須仰所出國、始自今年、每年交易、附貢調使進施藥院、其直幷運賃料、同用正稅者、今得施藥院解偁、院中雜事、觸類繁多、而重行賻物、不堪兼攝者、正三位行中納言兼右近衛大將春宮大夫良岑朝臣安世宣、奉勅宜始自來年、令收穀倉院、

天長四年六月五日

〔類聚符宣抄六〕右大臣宣、少納言已下召使已上、病料喪料、二親喪料厨家式例、已有等差而先前之例、外記執申、更下上口事有稽滯、既乖救急、自今以後、料主修請文出厨家、厨家從作宣旨、依例宛給、立爲恒例、

元慶八年七月十七日　　少外記高岳五常奉

〔政事要略五十九〕延喜例藏人所

臨時給喪病料法　出納喪料、商布五十三端、黑米三石五斗、病料黑米二石五斗、　小舍人喪料、商布廿二端、黑米三石、病料黑米二石、　已上給穀倉院、

〔日本書紀天智二十七〕八年十月辛酉、藤原內大臣鎌足〇薨、　甲子、天皇幸藤原內大臣家、命大錦上蘇我赤兄臣奉宣恩詔、仍賜金香爐、

〔日本書紀天武二十九〕十一年七月己酉、膳臣摩漏卒、天皇驚之大哀、　壬子、摩漏臣、以壬申年之功、贈大紫位及祿、更皇后賜物、亦准官賜、

〔續日本紀文武一〕三年六月丙午、淨廣參日向王卒、遣使弔賻、

〔續日本紀文武一〕三年六月庚戌、淨大肆春日王卒、遣使弔賻、

(續日本紀一文武)四年三月己未、道昭和尙物化、天皇甚悼惜之、遣使弔賻之、

(續日本紀一文武)四年四月癸未、淨廣肆明日香皇女薨、遣使弔賻之、天智天皇女也、

(續日本紀二文武)大寶元年七月壬辰、是日左大臣正二位多治比眞人島薨、〇中略遣三品刑部親王、正三位石上朝臣麻呂、就第弔賻之、

(續日本紀三文武)大寶三年閏四月辛酉朔、詔曰、新羅國使薩飡金福護表云、寡君不幸、自去秋疾、以今春薨、永辭聖朝、朕思其蕃君、雖居異域、至於覆育、允同愛子、雖壽命有終人倫大期、而自聞此言、哀感已甚、可差使發遣弔賻、〇中略是日右大臣從二位阿部朝臣御主人薨、遣正三位石上朝臣麻呂等弔賻之、

(續日本紀八元正)養老四年八月癸未、是日右大臣正二位藤原朝臣不比等薨、帝深悼惜焉、爲之廢朝、擧哀內寢、特有優勅、弔賻之禮、異于群臣、

(續日本紀十聖武)神龜五年十月壬午、僧正義淵法師卒、遣治部官人監護喪事、又詔賻絁一百匹、絲二百絢、綿三百屯、布二百端、

(續日本紀二十四淳仁)天平寶字六年十月己未、夫人正三位縣犬養宿禰廣刀自薨、賻絁百匹、絲三百絢、布三百端、米九十石、夫人者讃岐守從五位下唐之女也、聖武皇帝儲貳之日、納爲夫人、生安積親王、年未弱冠、天平十三年薨、又生井上內親王不破內親王、

(續日本紀三十一光仁)寶龜元年十月丁酉、從二位文室眞人淨三薨、一品長親王之子也、〇中略遣使弔賻之、

(田邑麻呂傳記)大納言坂上大宿禰田邑麻呂者、〇中略二年〇弘仁五月二十三日薨、于時年五十四、卽日賜絁六十九匹、常例五十九匹、更加一十匹、調布一百一段、常例一百段、更加一段、商布四百九十段、常例三百九十段、更加一百段、米七十六斛、白米三十八石、黑米三十八石、常例五十一石、更加二十五石、役夫二百人、左右京各五十人、山城國愛宕郡百人、柏原天皇〇桓武第八皇子葛井親王者、大納言女從四位下春子女御之所生也、仍殊加賜之、〇中略同二十七日、葬於山城國宇治郡栗栖村、今俗呼爲馬背坂、于時有勅、調備甲冑兵仗劒鉾弓箭糒鹽、令合葬、

香奠

〔三代實錄五十光孝〕仁和三年六月八日庚戌、從四位下行信濃守橘朝臣良基卒、○中略良基雅素清貧、家无寸儲、中納言在原朝臣行平賻以絹布、乃得殯葬焉、

〔下學集下器財〕香錢禮錢之義也、備中所言也、

〔壓添壒囊抄十〕香錢事

當時僧齊ナンドニ出ス料足ヲ香田ト云ハ何ゾ、香田ト書ハ當字歟、香錢ト書也、錢ヲテントヨムハ宋音歟、錢ノ字ニ、テンノ音ナシ、誤テ宋音歟ト書也、香奠ナルベシ、宋朝ノ市ニ物ヲ賣ニ、幾錢賣ト云ハントテハ、イクテントト云也、當時禪家ニ禮錢ヲ云詞也、喩バ香代ナンド云同心也、抹香輕物ナレバ、彼ノ代物ト云テ卑下スル詞也、禪家ノ詞ニハ香奠ト云、即香ノカヘ也、

〔貞丈雜記九書札〕一佛事などの時、香の代物を香奠とも香典とも書けども、奠の字を用るをよしとす、典の字はおぎのるとよみて、物を買取る事なれば、香典と書けば、香の代物と云事になるなり、奠の字はまつると讀字にて代物の心なし、

〔多々良問答〕御香賽香典香資等事

作善などの事に送候折紙に此分候、勿論候總而追善などに不可限候哉、法事ニハ雖テ如此可稱候條無子細候哉被仰出度候、又被物捧など申も候、是又物によりて、可持候哉、勿論候如何樣成をかやうに可口候哉、

○按ズルニ、此書ハ多々良義隆ヨリ三條西實隆公ニ問ヒシモノニテ、傍書ハ即チ實隆ノ答ナリ、

〔言成卿記〕弘化三年二月廿四日、廻文到來、○中略

御中陰○仁孝事中、近習之輩、七日々々中、兩寺參詣之事、番割議奏卿へ示談、別紙之通候事、

西寺獻備物

公卿方金貳百疋　殿上人方金百疋

三月六日、今日兩寺參詣、(○中略)備進物兩寺貳百疋宛持參、(當日觸ニ改之承知、於般舟院承知者、泉涌寺百疋減少、於般舟院者、備進相濟之間、不能取替也)

御香奠　金二百疋
(二重彫臺　白紅水引)
下札　山科左衛門督

藤谷三品、冷泉羽林等同伴、(○中略)相番高野左衛門佐參詣、被語云、兩寺備進物、公卿御香奠貳百疋、過日雖被觸、公卿殿上人推並、金百疋ニテ宜旨、昨夜從議奏有沙汰旨、相番廻文(料紙付、戌刻比)彼朝臣到來、則藏人右少辨ヘ順達之旨被語、然而式部權大輔、予、藤谷三位等、當院御香奠既貳百疋備進了、取替モ如何之間、其儀不及沙汰、於泉涌寺者、壹方減少、金百疋可令備進、件兩卿與申合了、於當院乞料紙仕立了、

安永例、公卿二百疋、殿上人百疋、然而寶曆例、公卿殿上人百疋、依件例如此云々、(今度藏米取之人ハ、雖近習、蓏獻上ニ相成云々、)

十二日、家公般舟院御著座、御衣冠、(○中略)蓏御備進云々、(巳半刻許御歸宅、)午後御狩衣御奴袴、泉涌寺御參詣、(於般舟院御著座之節、御自分御燒香、令泳拾云々、)蓏貳拾斤御獻備云々、(小番御免、蓏云々、)十九日、卯半刻、予內藏頭等狩衣奴袴、(○中略)先參般舟院了、內藏頭、持參蓏十斤供進之、別段未勤備進物、雖無沙汰、於參詣者、可有供備義也、(於予者、去六日御香奠備進、依之今日無備進勿論也、)先奉燒香了、內藏頭同斷、御非時拜領、此間御法會始云々、

〔天保諒闇記下〕御寄納物左之通

一白銀拾枚　女院御所御香奠
一同拾枚　新女院御所右同斷
一同拾枚　准后御方右同斷
一同三枚　女一宮右同斷

右之通御獻上、但禁裏御所、

右後桃園院御喪儀之節ハ如是、此度(○光格)ハ未知、

〔弘化諒闇記 中〕泉涌寺へ御香奠

大樹公 依御先例奉納無之 右幕下 白銀三百枚　御簾中 同五十枚

四七日奉納　三月十六日

紀伊大納言二十枚　水戸中將十枚　尾張中將二十枚　紀伊一位二十枚　尾張前大納言二十枚　水戸中納言十枚　尾張貞愼院十五枚　水戸簾中 ○日數缺、中略、

御香奠白銀二百兩宛 五十萬石以上　同百兩宛 二十萬石以上　同五十兩宛 十萬石以上、幷三家方庶流、廿萬石以上嫡子、　同三十兩宛 五萬石以上、幷廿萬石以下嫡子、　同二十兩宛 萬石以上　同十兩宛 御名代、幷萬石以下高家其外、　金二百匹宛 御代官

二月十九日大目附へ

先帝 ○仁孝 崩御ニ付、四品十萬石以上より、京都へ以使者御香奠獻上之儀、安永八亥年、後桃園院崩御之節通可被差上、尤委細酒井若狹守へ可被相伺候、獻上相濟以後、月番之老中へ可相屆候、

右之趣可被相觸候

二月、

右書付伊勢守渡之

〔弘化諒闇記 下〕御廟所之式

一將軍樣御香奠之儀者、桃園院樣御代より御獻備無之、爲御日供料、現米廿石宛、永々每年、二條御藏より御寄附有之候事、

一御三家以下御香奠獻備之儀者、日限御定之上、其時日使者御扣、留主居付添、用達一人ヅヽ相添來、於舍利殿著帳ニ付、使者名札等受取候事、勿論使者之前ニ、附臺目錄臺居へ置、相揃候而待居事、

一舍利殿東北之方ニ而、無地金屛風立切、御香奠受取所を設置、使者相揃候上ニ而、役者兩人罷出、順席帳面を以、使者方呼出之節、銀臺用達持參、御目錄臺使者方持出、役者兩臺共受取、其節受取書引替候也、○中略

右相濟候事趣、傳奏幷御掛り武家方へ役者より御案內申上、御差圖之上、使者方へ右之趣申入舍利殿北之唐戶口ニ而、順席帳面を以、一人ツヽ呼出し、玄關へ爲詰候事、

一使者方長上下小サ刀帶、順々玄關へ罷居、呼出候を相待居候事、○中略

一御三家附臺、御法事堂上、入口之落椽ニ而取次僧受取、御牌前ニ持參、使者椽側正面唐戶口に居り平伏、其時披露御名前を申、何の何守殿御香奠と披露申上、其時使者謹而平伏、直ニ膝退して落椽より玄關へ退出之事、

一諸大名之附臺は、御法事堂之內迄使者持參、取次僧受取、御牌前へ直置、使者は椽側唐戶口之北之柱際橫正面に居、平伏如前、披露相濟、膝退して落椽より玄關へ退出、

一御三卿御香奠使者、二條大御番組頭衆より相勤候事、

但御三家は唐戶口正面之拜也

〔榮花物語〕二十六楚王の夢日頃かれ○宮人小左衛門もわづらひて、えまゐらざりしに、此○後朱雀后藤原嬉子うせさせ給日ぞまゐりて見たてまつりて、まかでにけるまゝに、同じ日やがてうせにけるが、○中略殿の御まへ○嬉子父道長にほのきこしめして、あはれとふべかりけることにこそ有けれ、物などをやるべかりけるものを、○中略法。事。に。だ。に。か。な。ら。ず。物。つ。か。は。さ。ん。と。お。ぼ。し。め。し。け。り。○中略かの小左衛門がりは、のちに物などつかはしたれば、左衛門內侍いとあはれにおもひけり、

〔言成卿記〕弘化三年七月十二日、於₂省中₁廻文到來、

前新淸和院御葬送翌日、獻上物之事、寬政兩度例取調候所、御由緖之御所へ獻上之趣ニ候間、議

卿へ令示談之處、今度不及獻上之旨被示候、仍申入候也、

七月十二日　　基豊

　　　　　　　建通

前新清和院御中陰中、初中結之外、兩寺參詣、備進物勿論之事、

但獻備物葩公卿二十斤殿上人十五斤

寛政二度家例之通相備可然存候事

七月十九日、廻文到來、其文云、

八月二日、先詣般舟院、葩十斤備進、過日近習第一公卿二十斤、殿上人十五斤、家例之通可備進被示、聊雖違閣、當家文化恭禮門院御事、天明祖父公御上階後、葩十斤令備給、近例現然之間、十斤治定了、御燒香了、御非時拜領、了退出、直詣于泉涌寺、葩十斤備進了、

〔碧山日錄〕寛正元年七月六日庚辰、春公之父常久、字昌運、〇中略易其簀逝矣、十六日庚寅、細川左司馬賢公來弔、出泉貨五緡、爲淚從也、

〔新撰長祿寛正記〕同十一日、〇寛正四年八月等持院ニテ七佛事ノ御茶毘也、〇足利義政母、中略畠山尾張守モ爲代官遊佐新左衞門尉ヲ以テ、御香奠百貫文ヲ被進獻、

〔萬松院殿穴太記〕けふ穴太の御所〇足利義晴葬所へは、所々より香奠を參らせらる、細川右京大夫晴元かたぎぬこばかま百貫文を持參す、佐々木左京兆義賢は烏帽子上下にて三貫文を持參す、細川播磨守元常、同名右馬頭晴賢、佐々木民部少輔德綱は、皆十貫文を持參し侍りぬ、

〔玉露叢〕二十寛文九年八月九日ニ、松平土佐守ニ、上使堀田備中守ヲ以テ、御香奠銀子三百枚ヲ玉フ、是父對馬守卒去ニ付テナリ、

〔家世實紀〕二十寛文十二年十二月十九日、土津樣〇保科正之御逝去ニ付、從公方樣御香奠白銀五百枚御頂戴、

從公方樣御老中久世大和守樣爲上使御香奠白銀五百枚御頂戴被成候ニ付、御老中樣方へ爲御禮、一柳平左衞門被差出、又甲府宰相樣館林宰相樣より爲御香奠白銀貳拾枚宛、尾張中納言樣紀伊中納言樣、水戶宰相樣よりも、夫々御贈有之、其外諸家よりの香奠御受納無之、此後千代姬君樣より銀貳拾枚に枝柿一箱御添、御臺樣より本多十藏殿御使にて銀貳拾枚、女院樣より、久保和泉守殿御使にて、甚御愁歎被遊旨御悔之上、銀三拾枚被口尤攝家之御方始、公家衆より御弔之御使者被遣之、

〔嚴有院樣薨御覺書〕御香奠納候覺

銀二百枚尾張中納言殿　同斷紀伊中納言殿　銀百枚水戶宰相殿　黃金二枚尾張中將殿　同斷紀伊中將殿　黃金壹枚水戶少將殿　銀三十枚千代姬君樣ヨリ　同二十枚安宮樣　同十枚尾張中將殿御簾中　同五枚水戶少將殿すゑ姬樣　同五枚松平左京大夫　同同松平攝津守　同同松平出雲守　同同松平刑部大輔　同同松平播磨守　同三枚松平豐後守　同同松平大學頭　同同松平肥後守　同三十枚廿五萬石ヨリ五十萬石迄　同廿枚十五萬石ヨリ廿四萬石迄　銀十枚十萬石ヨリ十四萬石迄　同五枚五萬石ヨリ九萬石迄　同三枚壹萬石ヨリ四萬石迄　同十枚三拾萬石以上總領　同五枚廿九萬石ヨリ拾萬石以上之總領　同壹枚布衣之面々三千石以上之面々

御香奠納候日は、來月十八日ニ可限之、御堂へ使者可差出刻限、

一壹萬石以上之使者　五ッ時分ヨリ四ッ時迄ノ內

一三千石以上之使者　四ッ時分ヨリ九ッ時之內

右之外之使者、九ッ時分ヨリ八ッ時迄之內、壹萬石以上之使者ハ、白帷子長袴著之、其外ハ半袴著之、

〔大江俊光記〕元祿二年十月四日、豐後殿、〇中略菊坊屋敷ニ而被果、今夜戌刻阿彌陀寺へ葬禮、　六日、

豐後へ香典ニ鳥目三百、阿彌陀寺ノキハク院へ遣、

〔大江俊光記〕元祿十六年八月十二日、今夜六半、阿彌陀寺へ母公御葬禮、十三日、筑公、某、樂、律、康之助、おさい、おちよ、寺墓ニ而拜、休息して歸、兄弟共香典鳥目三百ヅヽ、其外二百ヅヽ、卅日、進藤文平より飛脚、清心公へ香典金一歩到、墓參致させ了、

〔幕朝故事談〕諸侯

加賀守〇前田治脩死去の節、御香奠銀五十枚、御悔の上使の節被下、上使者奏者番也、〇中略佐渡守〇治脩養子齊敎は、病中奏者番の上使一度也、御香奠も又奏者番、三十枚也、

〔大江俊矩記〕寬政九年六月十日、松尾へ香奠四人組合、越中、伊豆、大隅、予、金貳百疋南家へ贈之、

〔言成卿記〕弘化三年三月十五日、今晩日野故儀同實愛公葬送云々、十六日、故儀同へ供進物、家公予、豐姬等供進、家公予等紙十斤宛、豐姬白檀貳抱、

〔御城書〕萬延元年庚申八月廿九日

上使　内藤紀伊守

白銀五拾枚　中納言樣江

天璋院樣〇德川家定室ヨリ御使　御用人岩佐攝津守

白銀拾枚　中納言樣江

右ハ前中納言樣御逝去ニ付、爲御香奠今日被進之候、

〔類聚名義抄〕一弔トフラフ

〔伊呂波字類抄〕止辭字弔｜喪也

〔倭訓栞〕前編十八とふ　亡人のために薦福するをとふとも、とぶらふともいへり、追遠の義、弔問の意あれば也ともいへり、なきあとをとふともいへり、

〔拾芥抄 下末 諸事吉凶日〕不弔喪日

甲子辰　庚申戌　丁卯酉　己酉　或說云、戊巳幷辰午日可忌之、可避重復幷衰日云々、問病同之、

〔書簡故實〕弔狀之事、不封事、定たる法にはあらず、唯端を切候はゞ其儘卷て上包したる可然候と也、何事にても重言を不可書、端書も無之、

〔貞丈雜記 九 書札〕一とぶらひ狀は、（人死したる時、人の方よりとぶらひ遣す狀也、今の悔狀なり、）返事をせぬ法也、然れども返事する事も有、書札禮節に云、とぶらひの文も、程遠き所には返事をする也、書終て月日の下に判をばせずして、判の通りに細字にはゞかりと計書也、是第一の習也云々、

〔令義解 九 喪葬〕凡京官三位以上、（謂散位亦同、卽以下准此、）遭祖父母父母及妻喪、四位遭父母喪、五位以上身喪、（謂一位以下也、）並奏聞、（謂治部申官、官轉申聞也、）遣使弔、

〔新儀式 五 臨時〕三等已上親喪服錫紵事（付弔問事、不視事、固關事、）

天皇聞食二等已上親幷大臣喪之、（三等親幷納言以下、或有御弔問、或無、但有功後胤、侍讀舊臣、殊降恩問、）太政官未奏聞以前、遣使口令弔問、（遣殿上侍臣、還參於閤門外、付他藏人令奏返事、弔喪人當日不參內裏之故也、）官無忌之日時、付內侍奏之、卽下御簾、

〔儀式 十〕弔喪儀

其日遣勅使二人、（隨亡者品位臨時定之、）勅使到門外、喪家設榻二基於殯室堂上、北面東上、（隨處而設之、不必用此制、）前立高机一基、其上置筥、訖喪家行事者開門、左右相分迎之、勅使依次就座、訖勅使一人、披宣命文宣制、（其詞臨時制之、）訖行事者進受宣命文、納机上筥退去、勅使下座、擧哀三度、喪家答哭、訖勅使引出、

〔日本書紀 十三 允恭〕四十二年正月戊子、天皇崩、時年若干、於是新羅王聞天皇既崩、驚愁之、貢上調船八十艘、及種々樂人八十、是泊對馬而大哭、到筑紫亦大哭、泊于難波津、則皆素服之、悉捧御調、且張種々樂器、自難波至于京、或哭泣或歌儛、遂參會於殯宮也、　十一月、新羅弔使等喪禮既闋而還之、

〔日本書紀 十九 欽明〕三十二年四月、是月天皇遂崩于內寢、　八月丙子朔、新羅遣弔使未叱號失消等、奉哀

於殯、是月未叱號失消等罷、

〔日本書紀二十四皇極〕元年正月乙酉、百濟使人大仁阿曇連比羅夫、從筑紫國乘驛馬來言、百濟國聞天皇(○舒明)崩、奉遣弔使、臣隨弔使共到筑紫、而臣望仕於葬、故先獨來也、　三月戊午、新羅遣賀騰極使與弔喪使、

〔日本書紀二十五孝德〕白雉五年十月壬子、天皇崩于正寢、○中略是歲高麗百濟新羅遣使奉弔、

〔日本書紀二十九天武〕九年十一月乙亥、高麗人十九人返于本土、是當後岡本天皇(○齊明)之喪而弔使、留之未還者也、

〔日本書紀三十持統〕三年四月壬寅、新羅遣級飡金道那等、奉弔瀛眞人天皇(○天武)喪、　五月甲戌、命土師宿禰根麻呂、詔新羅弔使級飡金道那等曰、太政官卿等奉勅奉宣、二年遣田中朝臣法麻呂等相告大行天皇喪、時新羅言、新羅奉勅人者、元來用蘇判位、今將復爾、由是法麻呂等不得奉宣赴告之詔、若言前事者、在昔難波宮治天下天皇(○孝德)崩時、遣巨勢稻持等告喪之日、翳飡金春秋奉勅、而言用蘇判奉勅、即違前事也、又於近江宮治天下天皇(○天智)崩時、遣一吉飡金薩儒等奉弔、而今以級飡奉弔、亦違前事、○中略汝道那等、奉斯所勅、奉宣汝王、

〔弘化諒闇記中〕弘化三丙午年二月廿三日、關東使有馬兵部大輔、所司代同伴、參內參院參殿、大行天皇(○仁孝)崩御ニ付、御伺御機嫌使也、(依諸大夫同御差支、奏者所公卿同ヘ參上、)御暇賜物、如去九日、

去十二日江府發駕、廿一日上洛、明廿四日發駕歸府、

〔日本書紀二十九天武〕九年七月戊戌、納言兼宮內卿五位舍人王病之臨死、則遣高市皇子而訊之、明日卒、天皇大驚、乃遣高市皇子川島皇子、因以臨殯哭之、

〔百一錄〕延寶三年閏四月廿六日、女三宮御薨御、　五月十三日、爲女三宮御悔、從幕下(○德川家綱)上使畠山下總守上著、　廿五日、畠山下總守院參、女三宮御悔言上、直ニ今日被下御暇了、

〔日本書紀二神代〕天稚彥在於葦原中國也、與味耜高彥根神友善、故味耜高彥根神昇天弔喪、時此神容貌、正類天稚彥平生之儀、故天稚彥親屬妻子皆謂、吾君猶在、則攀牽衣帶、且喜且慟、時味耜高彥根神、忿然作色曰、朋友之道、理宜相弔、故不憚汚穢、遠自赴哀、何爲誤我於亡者、則拔其帶劒大葉刈、以斫仆喪屋、此卽落而作山、今在美濃國藍見川之上喪山是也、世人惡以生誤死、此其緣也、

〔日本書紀十九欽明〕十六年二月、百濟王子餘昌、遣王子惠王子惠者、威德王之弟也、奏曰、聖明王爲賊見殺、十五年爲新羅所殺、故今奏之、天皇聞而傷恨、硒遣使者迎津慰問、

〔日本書紀二十五孝德〕白雉四年六月、天皇聞旻法師命終、而遣使弔、幷多送贈、皇祖母尊〇皇極及皇太子等、皆遣使弔旻法師喪、

〔日本書紀二十九天武〕九年七月癸巳、飛鳥寺弘聰僧終、遣大津皇子高市皇子弔之、　十一月丁亥、遣草壁皇子訊惠妙僧之病、明日惠妙僧終、乃遣三皇子而弔之、

〔續日本後紀四仁明〕承和二年三月丙寅、大僧都傳燈大法師位空海、終于紀伊國禪居、　庚午、勅遣內舍人一人、弔法師喪、幷施喪料、後太上天皇〇淳和有弔書曰、眞言洪匠、密敎宗師、邦家憑其護持、動植荷其攝念、豈圖崦嵫未逼、无常遽侵、仁舟廢棹、弱喪失歸、嗟呼哀哉、禪關僻在、凶聞晚傳、不能使者奔赴相助茶毘、言之爲恨、悵恨曷已、思忖舊窟、悲凉可料、今者遙寄單書弔之、著錄弟子、入室桑門、悽愴奈何、兼以達旨、

〔西宮記臨時一裏書〕延喜六年六月六日、左大臣〇藤原時平談語、及給故典侍勅書等事云、先例給葬家勅書納楊宮、大臣問吾曰云々、大臣曰、先例勅命使出柩庭所讀詔書、可有其儀、昭宣公〇藤原基經薨時、柩先至小野墓所、勅使大江朝臣□至彼所以不家中□□儀云々、國經執傳宣命臨柩讀之云々、

〔左經記〕長元八年八月六日丁巳、去夜右兵衛督倚室卒去、寅刻入棺、今夜可移德大寺云々、爲重日之中、依可參釋奠不弔、

〔兵範記〕久壽二年六月八日甲申、今夕左府〇藤原頼長北政所御葬禮云々、〇中略茶毘之間、少納言成隆朝臣權亮爲本宮〇頼長養女、近衛后多子、弔喪使參彼所、右大將〇頼長子師長被相逢、其詞云、只今程何樣ニカ、大將被執申、左府殿御返報云々、次權亮歸參本宮、啓御報旨云々、

件使儀、束帶帶劍正笏如例、於本宮奉弔喪詞進參向、於彼所鳥居外、卷纓解劍留笏、參入茶毘所申逢之、承返報歸參本宮之間、又垂纓帶劍正笏、啓返報云々、此作法等、且依舊例、且左府仰云々、

〔玉海〕文治三年二月十日壬午、傳聞故三條宮〇以仁王子宮、名道性入滅入條院、爲生年十八、究竟法器人云云、十四日丙戌、參八條院、且是爲弔故三條宮息仁和寺宮道性事去十日入滅也、今日日次不宜、然而去十日聞及、即以使者申了、仍更不忌日也、

〔玉海〕文治四年二月廿日丙戌、此間爲訪〇藤原兼實子良通薨公卿以下濟々來云々、

〔勘仲記〕弘安六年六月四日、傳聞前大納言伊頼卿薨去、六十二歲〇中略當家依因緣甚好深、今夕爲訪遺跡遣青鳥了、

〔建內記〕永享十一年二月十八日丙申、今日弔右中辨明豐朝臣父喪、自門外示之、出逢門內、予立門外謁了、彼朝臣凶服也、布直垂淺墨ニ染之、

〔續百一錄〕延享二年閏十二月廿五日

口上覺

利根姬君樣御逝去ニ付、關東爲伺御機嫌、來廿六日廿七日兩日之內、巳刻ゟ未刻迄之內、牧野備後守殿江御行向被成可被仰置候、且御畫形之御方抔者、御使者ヲ以可被仰入候、此旨各迄可申入候、〇中略

口上覺

利根姬君樣御逝去ニ付、先格之通、關東江御飛札被仰入可然由候、此旨各迄可申入由兩傳被申

付二如此候、尤眤近之御方様江、御傳達可レ被レ成候、以上、

閏十二月廿五日　　葉室――

久我――

烏丸前大納言様御家來中

〔將軍德川家禮典附錄六〕安政五年戊午八月八日

一公方様〇德川家定薨御ニ付、田安殿、宰相様〇德川家茂御機嫌被二相伺一之、被レ謁二老中一、

一同斷ニ付、刑部卿殿より使家老を以、宰相様御機嫌被二相伺一之、謁二老中一、

一同斷ニ付、日光御門跡より使僧を以、宰相様御機嫌被二相伺一之、謁二老中一、

一同斷ニ付、掃部頭老中若年寄、宰相様御機嫌被二相伺一之、

一同斷ニ付、御臺様本壽院様御機嫌、掃部頭老中若年寄、御留守居を以相伺之、

一同斷ニ付、溶姫君様御始、御方々様御機嫌、御附御用人を以相伺之、〇中略

一公方様薨御ニ付、宰相様爲レ伺二御機嫌一、病氣幼少隱居之面々ハ、掃部頭老中宅江使者可二差出一候、

一在國在邑之面々者、掃部頭老中へ使札可二差越一候、

右之通可レ被二相觸一候、〇中略

八月九日　總出仕

十日　總出仕

十一日　萬石以上之面々

右之通、宰相様爲レ伺二御機嫌一出仕候様可レ被二相觸一候、

〔御城書〕萬延元年庚申八月廿九日

一御奏者番松平駿河守ヨリ、前中納言様〇德川齊昭御逝去ニ付、中納言様〇齊昭子慶篤江、御悔之爲二上使一可二

進獻贈遺

相越旨、唯今被仰出候、依之西丸退出、直ニ御屋形江參上之旨申聞候、右ニ付御禮品之儀、承合候處、御先格之通被遊候樣、御著服之儀者、染帷子麻半袴著用之由御座候、

〔玉川砂利〕靑樓中の町の茶屋に不幸ある時は、互に美濃紙一帖づゝ悔み使ひに贈と云、これにて障子をはりかへて、翌日より商賣をはじむ、戶をたて簾をかくるは、たゞ一日なり、

〔古今和歌集哀傷十六〕藤原の敏行朝臣の身まかりにける時に、よみてかの家につかはしける、

紀のとものり

ねても見ゆ寢でも見てけり大かたは空蟬の世ぞゆめにはありける

藤原のたゞふさが、むかし相知りて侍りける人の身まかりにける時に、弔ひにつかはすとてよめる、

閑院

さきだゝぬくいの八千度かなしきは流るゝ水のかへりこぬなり

〔艸山集十四五言古〕弔石齋喪母幷序

僕聞令親老安人、於某日入金粟堆、山人以處窮僻、莫曾知焉、不得爲助執紼、可堪爲知己道哉、昨書生某自洛歸具傳令之言、蒙大憂之中尙不敢忘、極感垂愛之重矣、抑久不得款奉、襞積之多、如雲如雨、雖欲言之、公今有意觀之乎、故不多及、卒遽鄙言一章以代生芻、不知讀之終篇否耶、

石公侍老母、老母垂九旬、自甘菽水奉、欣然不憂貧、曾聞嬰足疾、羸々常在裀、公能竭其力、漸得屈而伸、吾不見公久、安否無復聞、忽聞人來告、石公喪老親、吾驚且疑妄、切問方知眞、仲由躬負米、曾參自采薪、公豈不欲之、欲之更無因、吾母亦衰甚、今晨懼來晨、已省復屢省、況其阻九泉、哀毀勿滅性、公身非一身、兒孫在膝下、努力且加飧、

〔續百一錄〕元文二年四月十一日、仙洞御門〇中御養生不被爲叶、唯今崩御之旨及言上候由、十七日

此節爲窺御機嫌議奏衆始而御菓子獻上之由候近習之輩も獻上候而可然哉之由仍御所存無是候ハヽ於兼潔參可催候條今日中御相番中御所存承度候也、

四月十七日　兼潔

廿五日、禁裏樣江御菓子近習一統御獻上ニ付羊羹一折拾棹代文銀三十五匁八分、三十一ニ割、御一方樣分一匁一分五厘五毛ヅヽ、

〔言成卿記〕天保十一年十二月九日、入夜議奏按察被招近習宿頭外山三位言渡被聞、相番參宿一統へ被申傳、其議故院格○光崩御後、爲窺御機嫌明後十一日、禁中大宮等へ手輕御菓子近習一統組合獻上之事、御葬送翌日廿一日、爲窺御機嫌御所々々准后御方等へ參入、御中陰中獻物可有之、於敏宮者不及參入獻物等候事、　十日、廻文到來、故院崩御後、爲伺御機嫌明後十一日、禁中大宮へ近習一統組合御菓子獻上之事、井籠饅頭百一荷宛、兩御所へ獻上之事、議奏へ示談治定候事、

〔言成卿記〕弘化三年二月六日、主上○仁孝今六日寅刻崩御之旨、飛鳥井中納言被申渡、　七日、廻文到來、取要崩御ニ付、御所々々准后敏宮等御機嫌伺、御菓子獻上一兩日中、

井籠饅頭百一荷

催女院左大辨宰相、東宮新宰相中將、准后左三位中將、敏宮平三位、右等云々、

〔言成卿記〕慶應三年正月二日、前○孝明崩御爲窺御機嫌伺親王准后へ一兩日中御菓子獻上、可爲弘化三年度之通之事、○中略

後聞井籠拂底ニ付、羊羹五棹宛獻上ト云々、

〔言成卿記〕天保十四年三月廿二日、今日申渡一件、三條大納言今日近習第一園池三位へ被申渡、條條被觸出一紙書寫了、

就三位局○仁孝母后東京極院薨去爲窺御機嫌今明日中禁中東宮等へ可令參入之旨、三條大納言被申

遺物

渡候、且禁中東宮等へ、近習一統組合、御菓子獻上可然、東宮へは今明日中獻上可有之、禁中獻上之日限、自跡可被示旨、尤小番御免親族中云々、
但御菓子之色目、并籠饅頭百宛ニテ可然事、
三月廿二日

〔輔世宿禰記〕慶應二年十二月廿三日、關白殿御三男俊君御方、御疱瘡之處、御養生無御叶、昨夜逝去、〇中略仍明曉参上、不取敢令伺御安否、自兩人御菓子料金五百匹令獻之、

〔言成卿記〕慶應三年十月廿六日、家公眞實及御大切、　廿七日、冷泉菓子、油小路同、西大路同、油小路侍從同、各見舞附物アリ云々、　十一月十五日、從高倉家使者、〇岡本監物中略
菓子一折上層干菓子七十、下蒸菓子五十、順律破也、裏中安否尋問被賜云々、痛却也、

〔徒然草下〕身死して、たからのこる事は、智者のせざるところなり、よからぬものたくはへおきたるもつたなく、よきものは心をとゞめけんとはかなし、こちたく多かる、ましてくちをし、我こそえめなどいふものどもありて、あとにあらそひたるさまあし、後は誰にとこゝろざすものあらば、いけらんうちにぞゆづるべき、

〔天保諒闇記下〕御寄納物左之通
一御屏風三雙
内唐松孔雀　鶴澤探索筆　金銀花鳥　吉田元陣筆　菊萩　鶴澤探索筆
一御硯箱黑塗高蒔繪一箱　一御机大小二脚　一御香爐唐金鶴　一御香箱梨子地銀　一御ふく一重　一御机御桃地一巻　一御よるのものひらおりものまろ三　一御ふとん御へりさりもみ二　一御ゆかた一重　一御厚疊二帖　一御まとね一　一御棉つのだらひ　一御手ぬぐひかけ　一御みす拾間　一御ゆどの具御ふね御なかひ一荷　御まやく二本　一高

とうだい白木二 一黒ぬり御紋付御長持一 右一紙御書付
一御劍平絹包永一腰 右一紙ニ御書付
一御茶口星野宗以一臺 右一紙御書付
一金子百貳拾兩 御遺金
右之通此度御寄納有之候也
〔玉露叢二十九〕延寶六年十月二日ニ、東福門院○後水尾后和子ノ御遺物トシテ、御手鑑、御掛物、大猷院殿自畫自讃御卓、御屛風一雙雅樂助筆、十炷香具ヲ進ゼラル、
〔玉露叢八〕寛永九年壬申正月廿四日ニ、秀忠公薨御、春秋五十四歲、台德院殿ト號シ奉ル、○中略
一御一門方其外諸大名衆、及御旗本中ヘ御遺物アリ、所謂、
一銀子一萬枚宛、松平肥前守利常、松平陸奧守政宗ヘ、
一同五千枚宛、越前宰相忠昌、松平宮內大輔忠雄、佐竹右京大夫義宣、上杉彈正大弼定勝、細川越中守忠利、松平長門守秀就、加藤肥後守忠廣、淺野但馬守長晟、松平右衞門佐光之、京極若狹守忠高、鍋島信濃守勝茂、藤堂大學頭高次、加藤式部少輔明成、松平新太郎光政、 以上十四人
一同三千枚宛、松平越後守光長、松平阿波守忠英、松平土佐守忠義、生駒壹岐守高俊、有馬玄蕃頭豐氏、寺澤志摩守廣高、南部信濃守利直、 以上七人
一銀子二千枚宛、毛利甲斐守秀元、丹羽五郎右衞門長重、京極丹後守高廣、宗對馬守義成、立花飛驒守宗茂、伊達遠江守秀宗、 以上六人
一同千枚宛、松平出羽守直政、松平石見守輝澄、 以上二人
一金子五百兩、細川三齋ヘ、
一銀子五百枚宛、松平大和守直基、松平右近大夫政繩、松平土佐守直富、中川內膳正、黑田甲斐守長

與、一柳監物、稻葉民部少輔一通、古田兵部少輔、松浦肥前守鎭信、池田備中守、加藤出羽守泰興、稻葉淡路守、有馬左衞門佐、　以上十三人

一銀子三百枚宛、黑田市正、金森出羽守、松倉長門守、片桐出雲守、山崎甲斐守、木下右衞門大夫、島津右馬頭、秋月長門守、織田出雲守、小出對馬守、龜井大刀、大村松千代、遠藤伊勢守、本多因幡守、分部左京亮、市橋伊豆守、毛利伊勢守、織田辰之助、京極修理亮、戶川土佐守、　以上二十人

一同二百枚宛、五島淡路守、桑山左衞門佐一直、片桐石見守貞澄、久留島越後守、靑木甲斐守一治、小出大隅守、土方木工助、平岡石見守、織田丹後守、蒔田權之助、長谷川式部、建部三十郞、池田內藏助、伊東丹後守長實、織田越後守、谷大學頭、　以上十六人

一中宮御方へ金二千枚銀一萬枚　一高田御方へ金一萬枚銀一萬枚　一天樹院殿へ金五萬兩銀二萬枚　一金子百枚松平新太郞母儀へ　一同千枚同人內室へ　一金二百枚 一銀二千枚 松平越前守忠昌內室へ　一金二百枚 一銀二千枚 加藤肥後守忠廣內室へ　一金二百枚 一銀二千枚 松平長門守秀就內儀へ　一金百枚 一銀千枚 細川越中守忠利內儀へ　一右同斷松平阿波守忠英母儀へ　一右同斷松平右衞門佐光之母儀へ　一右同斷京極丹後守高廣內儀へ　一右同斷加藤式部少輔明成內儀へ　一金子百枚松平土佐守忠義內儀へ　一右同斷有馬玄蕃頭豐氏內儀へ　一右同斷有馬左衞門佐內儀へ　一右同斷大久保加賀守母儀へ　一右同斷市場どのへ　一右同斷毛利甲斐守秀元內儀へ　一右同斷小出大隅守內儀へ　一右同斷鍋島信濃守勝茂內儀へ　一金二千兩尾州相應院殿へ　一右同斷紀州水戶御兩所ノ御母儀養珠院殿へ　一右同斷水戶賴房卿御養母英勝院殿へ　一右同斷一位どのへ　一金子二百枚常高院殿へ　一同百枚中務祖母良雲院殿へ　一右同斷晴雲院殿へ　一銀子二百枚おまんどのへ　一右同斷おふうどのへ　一高松殿簾中へ金千枚銀千枚　一九條殿簾中へ金百枚　一九條大將簾中へ金千枚銀千枚

右之通御遺物、幷ニ御旗本中ヘモ領知ノ御遺言有シト也、可ㇾ尋ㇾ之、

〔孕石家秘錄〕忠豐公之爲ニ御遺物、御刀高田、御掛繪、巨豐人、寛文十年八月、原平四郎爲ニ御使者ニ拜ニ領之、幷本性院ヘ歌書、連歌新式詠紹巴筆、御使者深尾四郎兵衞ヲ以テ被ㇾ成ㇾ下、今年忠豐公御一周忌に付而也、

〔玉露叢二十三〕寛文十二年二月廿一日ニ、佐竹修理大夫遺物トシテ公方家ヘ御刀、長光、代金二十三枚、御茶入、無宗衞肩衝、御臺所ヘ御屛風一雙、雲村筆、代銀五十枚、ヲ獻上ス、同日ニ松平甲斐守遺物トシテ、公方家ヘ御刀、左安吉、代金三十枚、御掛物寒山十得、顏輝筆、御臺所ヘ軸物後光嚴院殿宸筆、代銀十枚、ニヲ獻上ス、

〔玉露叢二十四〕寛文十三年四月三日ニ、隱元禪師遷化、行年八十二歲、○中略同月廿三日ニ、隱元禪師ヨリ送物トシテ、本庵ヨリ使僧慶峯ヲ以テ五百羅漢圖謝恩偈自筆二色ヲ獻上、

〔俳諧一葉集人〕遺語之部

翁○芭蕉かねて遺命の通り、木曾殿○義仲の右の方に埋葬し奉りけり、○中略

御遺物○中略

一紙縷袈裟佛頂禪師より附與　一被風　一鉢一口　一木硯、樫木にて旅硯也、　一古今集序註一部　一百人一首一部　一新式一部　一奥之細道一部○中略

右紙縷袈裟より以下七品は、兼て惟然に御附與の御約諾のよしに候故に、直に惟然に附與、

一御頭陀一○中略

紙に包たる布裂五寸に六寸計、上包に狹の細布とあり、進上清風と有、又外に和歌の古短册二枚、松島蚶潟の繪二枚、右の內、紙に包たる五寸に六寸の布裂、幷松島蚶潟の畫、もし御支無ㇾ御座ㇾ候はゞ、御形見に下拙に被ㇾ仰付ㇾ可ㇾ被ㇾ下樣奉ㇾ希候、生涯寶物に仕度候、

去來

〔名目抄 喪服〕喪場殿（サウバドノ）　荒垣（アラカキ）

〔鹽尻 十七〕葬場ハ謂尸佗林、又云鶴林、皆出於佛書、

〔翻譯名義集 三 林木〕尸陀（正云尸多婆那、此翻寒林、其林幽邃而寒也、僧祇云、此林多死屍、人入寒畏也、法顯傳名尸摩賒那、漢言棄死人墓田、四分名恐畏林、多論名安陀林、亦名晝暗林、）

〔行治神道葬祭拾式錄〕吉田家葬祭式

先沒期文曰、（大願成就、上天妙果、）无上靈寶神道加持、

次定靈居地、（深八尺、或九尺、廣五尺四方、但可依時宜、）南面、（或東面、或西面、）

建幕串張注連、掲帷幕之法五段、無物見、乳凡六十四、四方各十六、

東西南北建鳥居、各有四神額、東方阿奈太鬼神、南方阿奈御氣津神、西方阿奈太田神、北方阿奈底立神、

天門引注連、天門柱各榊四手附、敷筵道、絹或用布、凡器用式例、稱家之有無、凡有司者、皆白張或袴著肩衣、

〔神道葬祭家禮〕葬地（波）有山葬、有野葬、有島葬、各選其地、深鑿靈坑、第一濕地不淨ノ地ヲ除クベシ、一靈居（乃）地方一丈、建幕串張帷幕、幕（乃）法四幅、長三丈四尺、無物見、乳凡六十四、一方（南）有口、如此張之、

〔喪祭私說〕厥明（謂死之明日、）擇地之可葬者、（有祖塋則祔葬其次、若塋狹及有所妨礙、則別擇地可也、）遂穿壙（穿地直下為壙、深一丈、廣狹從宜、）作灰隔、（用板如槨之狀、釘合四隅、不計板之廣狹、凡三層、而墻高於棺三寸許、以為度、不用蓋底、內距棺四方、各三寸許、以受灰砂、穿壙既事、布石灰細砂黃土拌勻者於壙底、築實厚四五寸、若及泉則厚尺以上、從宜而築、先置灰隔一層於灰上、乃於四方旋下土貼之、留餘二層以待柩至、如水泉迸出不止、或旁土易崩者、三層俱下、以備之亦可也、子弟一人、須先往監視、隨宜制方、謹按朱子家禮云、灰隔出內以瀝青塗之、厚三寸許、中取容棺、墻高於棺四寸許、乃於四旁旋下四物、亦以薄板隔之、炭末居外、三物居內、築之既實、則旋抽其板近上、復下炭灰等而築之、及墻之平而止、據此灰隔所以隔棺與三物、而築板所以隔二物與灰、我邦諸先儒、所謂灰隔、實備築版之用、與家禮異、蓋灰砂之牢固、為無木根水蟻之患、瀝青炭末、我邦不必用、則一圓板足矣、意以其制依灰隔也、相傳以是稱之已、讀者宜審之、）

〔喪禮儀略〕病者命終ラバ、○中略墓ノ地ヘ人ヲ遣シテ壙ヲホルベシ、廣サ灰隔板ノ入ホドニ、深サハ灰隔ノ土ギハマデ二尺計アルホドニホリ、壙ノ底ニ炭ノ末ヲアツサ一二寸ホドニシキ、其土ニ石灰細沙黄土ヲマゼ合セタルヲシキテ固クツキカタメ、灰隔板ヲイレル、サテ板ノ四方ヲヨクツキカタム、歷々人葬ル時ハ、其マハリニ布幕ヲハルベシ、

〔吉事略儀〕御葬送

點地等事、平生御時被定了、地鎭幷日時方角等、沙汰不可有之、

當日早旦、貴所幷荒垣一廻、

雖貴人、山家近邊之時、略一廻常例也、

鳥居一基造之（三綱一人、侍一人、可爲行事、）

自餘屋々等可略之

貴所屋（新御所云、高野云、仁和寺若御所郷内、有便宜之地者、貴所屋外不可有鳥居荒垣等、）

點地所子午妻立之、高一丈四尺、廣一丈五尺、長二丈、有棟、四角立柱、屋中央有鑪、長九尺、高二尺五寸、弘三尺、有緣、緣下塗白壁、四方有板敷、四角居足桶各一口、入水、具杓箒夾木竹管等、鑪內敷薦二枚、其上敷筵二枚、其上積炭、炭上積薪、屋東西各南北行、積薪炭松葉等、屋上覆絹、鑪下敷絹布、板敷下引物布等、略儀無之、

鳥居一基

高一丈三尺、廣一丈二尺、懸八幅粉張絹幌、爲高野者、幌可爲生絹、練張有其煩歟、且又用生絹先例之故也、

荒垣一廻

丈尺隨所便、高六尺五寸、以榑爲切懸、以繩拵之、其上引白手作布（以五反爲一幅）東方切懸一間取放、構之爲閑

路、雖最略儀、風雨之難難知、仍必造貴所屋、又垣一廻可有之、止雜人群集之故也、有垣者、必其上引布定例也、

酒五斗、油一斗、折敷十枚、（各敷紙一枚、）箸十雙、（以若竹、長一尺一二寸許也、）茶碗（在白瓷盞、）土器一口、（入白單袋、白生絹縅緒等、）土砂、（齎葬所并加入土器料、）

已上貴所近邊儲之

〔類聚雜例〕長元九年四月十七日、天皇（後一條）崩於晝御帳前、　五月十八日乙未、陰陽助時親、令資業朝臣申云、明日寅刻、可鎭山作所地也、其祭文可奉書誰人署乎、相府仰云、先例如何、時親申云、以故一條院御骨奉遷圓融院之時、地鎭祭文奉書先帝、故冷泉院御時祭文、奉書三條院者、仰云、必奉書御子歟、若不御坐之時如何、令申云、御子御坐時必奉書、不然者可書加別當之人歟、仰云然者可書、左中辨經輔朝臣署者、（件朝臣雖非別當、依為藏人頭所被仰也、）　十九日丙申、以寅刻陰陽師時親鎭山作所、（鎭料等任支度、自後院行之、）其後式部大輔資業朝臣、美作守定經朝臣等、奉檢非違使并工夫等、行山作所事、（人夫召京職、內等、○中略）山作所、（行事式部大輔資業朝臣、美作守定經朝臣、出納紀爲賴、）四面立切懸為荒垣、（方各三十六丈、高六尺、以手作幔引其上、）南面立鳥居、（高一丈三尺、廣一丈二尺、懸弔絹幔、）荒垣內又立切懸為內垣、（方各廿四丈、高同前、以生絹幔引垣上、）南面又立鳥居、（丈尺同前、懸弔幔、）外門西腋立四間平屋一宇為葬場殿、（高八尺、廣七丈八尺、間頗寄南垣立之、南西兩方懸切懸、以弔絹幔懸四面、又覆屋上、以長筵敷滿板敷上、中央間敷高麗端二枚、為御座、）懸內垣中央作貴所屋、（廣一丈五尺、長二丈、高一丈二尺、子午為妻、以弔絹幔覆屋上、以同絹幅額引四面、以手作綱付四角、張之、屋中構爐、爐底敷筵、〓上敷手作、手作上敷絹、其上積薪、爐四面引弔幅額、四方數、其下引手作幅額、）大桶入水居爐四角、（各具杓等、）內外垣內敷白沙、外門外左右立七丈幄、（右幄葺苫、構板敷、四面引幔、為公卿座、左幄只敷筵疊等、引幔、為御前僧座、）作山作所體、頗雖違先例、依寬弘八年例所行云々、事畢行事資業朝臣、以所用絹布材木等分給近邊寺々云々、淨土寺（行事伊豫守章任朝臣、）寢屋母屋中間三面（東西北、）左久利波女志天南面立戶、其內敷滿長筵、中央立白木床子一脚、（高二尺、方二尺、）其上立障子張、（以白絹張之、在錦縁、帳內奉繪佛像云々、）以御骨壺奉安帳內、以香染帷懸南戶、以北廂為護摩壇所、以西廊為僧房、以南廊為人々宿所、

〔和長卿記〕明應九年九月廿八日庚辰、今曉丑刻許、自局有使者云、主上〇後土御門漸可有御事之樣也云云、十一月八日己未、今日泉涌寺葬場殿、爲見物人々同道、〇中略葬場殿檜皮葺也、北面有御車寄、其在所山門跡西南角也、檜皮葺殿舍一間四面也、棟寶形也、以金彩玉、其中有火爐口六角白壁四方有門、白木作鳥居也、扉幷脇壁皆檜墻也、四方有額、以金彩字、東門額發心、南門修行、西方菩提、北方涅槃、以涅槃門爲入御門云々、

〔後愚昧記〕應安七年二月二日戊戌、新院〇後光嚴御葬禮也、〇中略到山作所、其構立鳥居、搆荒檜墻、其內張絹幔、其內立火屋、檜皮葺

〔幸充日次記〕寛延三年四月廿三日、仙洞御所〇櫻町崩御、五月廿日辛酉、泉涌寺參詣、百味右之方在假屋之中、花足、餅饅頭等■之、上色々造花立之、薬銀磨、左右之段數打敷置之、向之方■少々有之、疊者上ゲ候而有之、於没先供百味、御法事有之乎、御車右之方假小屋入置、黒塗眞鍮金物也、火屋俗云龕前堂、常者云四門名目之由、右之坂上平々之所也、假堂ニ白木之透垣、四方丸白木之華表、有■額、中金磨、四方彩色、没而先奉入龕、行門、次發心門、次菩提門、次涅槃門奉通、有法事云々、予參掛之、自小坂上打見所、涅槃門也、右廻リ菩提門、又右廻リ修行門也、又右廻發心門儲、自發心門之方下山、下之堂而八方龕奉拜之、八方龕黒塗撒金々物、觀物也、但掛流故歟、龕相奉拜、傳聞是物者、不被爲召、御車之内入許、別有棺槨、夫共掩土石槨云々、葬場殿者、波□□之由、御廟所假覆有之、御石塔供養迄右之通也、等拜見、牛左之方入小屋、人々群聚、委曲難見別、角背越斑月額等之由、所見薄赤茶黒之斑角、右長左短見而已、一覽歸路、

〔天保諒闇記下〕御當夜次第書

龕前堂、山頭御廟、御法事堂、

右御普請出來之上、掛役人中、寺門へ引渡之事、

一龕前堂、山頭、御法事堂前へ莊嚴之事、

一同日習禮之事

一御當夜御當日早朝、龕前堂御廟御路筋御法事堂、其外見詰役前之下知御場所番手當、

但御盛物御膳、御當日早朝獻備、幷御廟白幕金襴可引之、用之物共ニ有之、可心得、

一行列圖、壇大門南之柱西向掛之、

一未刻より往來鑑札ヲ以通路之事、番所へ示合可有之、

但龕前堂入口之番士へ、御當夜御用手當入差掛呼入ハ、差支無之様示合之事、

一兩儀之節、傘持壹人宛、龕前堂山頭へ入可申事、

一龕前堂より山頭迄、兩脇提灯幷木燭臺凡三間插壹本之割、御掃除方より有之、

但提灯之分、山頭火を入候事、兼而示合可在、尙木燭臺之火御作法前歟、可依時宜、

一筵道敷詰之事、寺門之下知、筵道ハ薄口口前ニ敷、絹ハ龕前堂御作法机之前ニ敷之、

一龕前堂より大路橋迄、紋附之提灯一式、大路橋所司代警固より下知之事、

一御當日本門入、傳奏御登山、御場所御內見、行者御出迎、龕前堂出張、先へ龕前堂、次山頭御道筋、御廟御見分之上、御休息御退出之事、○中略

山頭之式

一龕前堂より山頭迄、筵道三枚通敷之、其上敷敷絹、（生絹五幅）縫合敷之、御道中左右燭臺四本（白木六角鐵火皿付）立之、大挑灯百三拾本立之、

但銀之蠟燭也、右燭臺挑灯、兩側入交ニ立候事、

一凶事傳奏、同御奉行、寺門傳奏、龕前堂御作法、追付相濟候前、役者より右之段御案內申上、夫より行列御催前ニ、山頭へ御越被成候事、

一女官方女中方、山頭御作法相濟候上、御宿坊へ御入被成候事、

一山頭御作法之間、凶事傳奏同御奉行、寺門傳奏、御荒垣之內に而、御作法御聽聞被成候事、

一御引導師御作法畢、次諷經、次廻向文畢、此時幕を垂、役者凶傳、同御奉行、寺傳へ御案內申上、凶傳勅使前へ御進御問答之事、

一諸門跡并公卿等、山頭御法事過、於宿坊饗應、

一御廟前參勤之僧侶、并中井岡次郎召具棟梁、其外手代共、入而口段御寶龕奉移御轅、尤白綾を以御棺を御轅に結付る、力者數十人奉舁、且御棺重き故、隱人を以、力者之手代ニ助交、是より御密行也、此時御供奉ハ、御導引長老中老役者、并兩傳武傳寺門傳凶事御奉行、武家ハ御所司代、御附衆御供奉也、○中略

一御廟所御石槨へ奉納之節、中井主水棟梁手代勤之、

一御廟所迄御供奉之堂上方、御詰番之衆地下等迄、其夜於方丈饗應之事、

一御所司代、御廟所より直に退出御休息之事、

一兩町奉行在京御目付、并に御掛御目付衆已上、山頭之御法事畢、直に爲御番は舍利殿椽側に候、尤幕張屏風を引、御休息所を設、早速赤飯煮染等相調候而、木具やき著等添出す、

但其夜御警固之御目附方、與力同心、町與力、同心其場所休息所并雜掌御供上下共休息所夫夫へ、右之通赤飯煮染等折に入爲持遣候、且又右之通御所司代番所へも、御箇所共爲持遣候事、且又前例町は兩御役所御目付方立合御固有之候處、此度は番方與力同心被相勤候也、

一御附之武家ハ、於方丈饗應有之事、

〔天保諒闇記下〕龕前堂莊嚴之事

龕前堂

梁行五間、棟行拾壹間、九柱、兩雁木、天井張、屋根檜皮葺、稱熨斗包、獅子口、破風、狐格子、

一水引五張

長壹丈九尺貳張、四丈五尺八寸壹張、貳丈六尺壹張、

右四張リハ下リ貳尺

長四丈八寸、下リ三幅ニ而、五丈七寸壹張、但是ハ正面ニ用

但右之水引ハ、堂内四方ニ引廻ス、

一幡四拾流長壹丈四寸五分幅壹尺貳寸

但柱毎に貳流宛懸之

一滅金之華幔代貳拾掛

但柱中間に懸之

一中央御位牌檀机高四尺、長五寸、横貳尺六寸、

一御盛物机八脚壹間四方机六脚、壹間半机貳脚、高四尺、厚壹寸五分、

但左右四脚宛

一同雁木六ッ高三尺、横貳尺六寸、長七尺六寸、

一金襴打敷七枚幷地敷五枚内貳枚ハ長拾七丈四尺三寸、下リ三幅ニ而、又貳枚ハ五尺七寸、又貳枚ハ長貳丈貳尺七寸、下リ四幅七尺六寸、又壹枚ハ長貳丈六寸、下リ三幅五尺七寸、

一五具足金橋龍頭大卓之用

一大香爐壹口但蓋有之儀

一三具足、御位牌前、

一御盛物百貳拾合但金濃擧足

一鳩備栄百三拾但金濃彩色紺青菊御紋付

一御膳七五三二點心但右同斷

御本膳御金箸御高盛六合、二御膳御汁高盛四合、中盛重箱、二御膳御汁、小高盛二合、

中盛二合、小押緣高御菓子、心之御膳二膳、御茶湯八合、

右彩色龜足作リ候事

一滅金燭壹五拾本内拾本ハ高貳尺五寸、四拾本ハ高壹尺七寸、

但眞切壺共

一同高燭臺四本高六尺、渡リ七寸、八角、

但中央机之前ニ立

一金濃蠟燭百挺内金濃五百目掛蠟燭八丁、但中央作法場立、

一磬幷臺撥共壹口

一鐃幷撥共壹口

一鈸貳雙

一鐃幷撥共壹口

一疏盆

一御茶湯器幷金濃サント土器

一黒塗之盆貳枚、但行列用、

一御位牌幷練絹之覆長壹尺、幅九寸三分、

一曲彔拾脚

但御導師、奠茶、奠湯、金疏、奉經、喪主、其外前住方著之、

一道具机貳脚長六尺、横四尺五寸、

但是ハ磬鐃鐃鈸等並之

一脚榻四脚長四尺、横六寸、高貳尺八寸、但黒塗、

一勅使座連床貳脚但疊入兩覆有、尤四方へ緞子之幕を引、

一圓東御名代座達床、右同斷、但是ハ御所司代御座所
一御門跡方達床、右同斷
一堂上方達床長貳間、幅貳尺貳寸、高壹尺六寸、
　但是者其時之御供奉之堂上方、御人數多少有之候ニ付、數不定、
一武家方平座疊入
一篝四箇所鐵ニ而焚
　但是者來迎院被官林佐右衛門、戒光寺被官小林又三郞、右兩人往古より役家也、尤薪は右兩人より持出候也、右料物者、其節御賄方より御渡被成候、且右兩人、從光明院尊儀御葬送之時より、代々兩家相勤來候、
一御手水桶臺杓共貳箇所
一毛氈長五尺六寸、幅三尺貳寸三分、
一提灯幷掛竿長壹丈三尺、渡り貳寸、八角、
一金蓮華作り華拾本但是ハ五具足ニ用○中略
御行列用左之通
一御寶龕
一天蓋幷小幡四流、四隅ニ付、
一金紙貫燈籠四張高貳尺六寸、但棒四本、
一大幡四流長貳間之棒四本、太サ五寸五分廻り、
一朱香箱貳ツ
一酒水器敷杖貳本有

一鐃二口〔緒紐付〕
一柄香爐貳握
一敷筵數帖
右之通リ
一御車宿リ壹箇所〔梁行貳間、桁行四間、板葺假リ屋、○中略〕
　山頭之式〔○中略〕
一山頭場荒垣〔東西拾三間、南北拾五間、〕
　但總場之間數ハ〔東西五拾間南北廿五間也〕
一白綾幕四張〔長拾四間貳尺八寸、五幅、〕
　但荒垣を引廻す
一幕串〔五間四方、立柱拵釘有、〕
一御假建物〔三間四方〕
　但兩儀ニハ板葺ニ而建之
一白綾幕〔拾三串、引廻五間四方、長拾壹間三尺、〕
一金襴水引〔長拾三間巾貳尺〕
　但御假屋に引廻す
一脚榻四脚〔黒塗、長壹尺、幅六寸、高貳尺八寸、〕
　但内貳脚ハ御寶龕乘、又貳脚は御白轅を乘、
一御轅〔白木〕
　但鈗六ツ付

一中央大卓長脚打敷（長五尺、横貳尺六寸、高三尺四寸、）

一燒香机貳脚打敷（長貳尺五寸、横壹尺五寸、高三尺、）

一三ッ具足壹莊　但金指唐金龍頭

一磬幷臺撥とも　朱塗雲龍形

一道具机壹脚、打敷有、（長七尺、横五尺、高四尺、）

但雨覆有、如㆓龕前堂㆒、

一湯瓶貳口　一大香爐壹

一木鋤壹握　一白布貳疋

一回向文　付臺

右同斷

一御位牌机打敷（長五尺、横貳尺、高四尺、）

一連床　南ニ舊門跡、北公卿、

但雨覆有、如㆓龕前堂㆒、

一武家連床壹脚　南之方如㆓龕前堂㆒

但建ハ御名代席、其外平座疊入如㆓龕前堂㆒、

一勅使座連床

但如㆓龕前堂㆒幔幕引、

一筵道　從㆓山頭㆒至㆓御廟所㆒敷㆑之

但板之内ハ臨期撤㆑之

一脚榻三脚（白木、長四尺、横六寸、）

一曲祿拾脚 如二龕前堂一
一蠟燭八挺 五百目掛金濃
　但從前堂作法大燭立之
一手水桶幷臺杓共貳箇所
一篝四箇所 龕前堂前之出口入口ニ爲レ焚
一庭燎拾餘箇所
　但是は山頭より御廟迄御密行筋所々燎之、
　御廟所之事
一御石槨御假屋 三間四方檜目、柱四本、戸有、
　但檜皮葺也
一白綾幕貳張 長拾貳間貳尺、四幅、
　但御假屋引廻貳通上下入
一白地金襴水引 長拾三間貳尺
　但御假屋向方引廻
一机壹脚金襴打敷　一三具足 小形 壹莊
一金紙華　一大挑灯幷燭臺
一鋤鍬拾挺宛　一塵取いかき
一苧繩貳筋 長三丈五尺、太サ四寸廻リ、
〔弘化諒闇記下〕山頭荒垣四門額御筆者
後陽成院　中和門院　後水尾院　青蓮院宮

東福門院　妙法院宮
後光明院　聖護院宮
明正院　近衞家熙公
後西院　曼殊院宮
靈元院　新上西門院　東山院　持明院中納言
承秋門院　中御門院　新中和門院　櫻町院　青綺門院　桃園院　有栖川中務卿宮
恭禮門院　後櫻町院　後桃園院　盛化門院　光格天皇
仁孝天皇　持明院右兵衞督

〔新朔平門院御凶事書留〕御葬送儀
御牌面御筆者　妙法院天台座主二品敎仁入道親王
山頭四門額同　知恩院二品尊超入道親王

〔萬松院殿穴太記〕佛事果て、上野民部大輔信孝、伊勢守貞孝兩人、素服して玉の御輿〇足利義晴を舁出し奉る、火屋は西の門に向て、方七間四面に、高サ一間、横三寸ばかりなる板を、左まへに、ひがきの如くうちて、上中下にぶちあり、かはら木には板を打たり、四方に一間半の口をあけ、其通には高サ二間の鳥居有、四方に額を打たり、東は發心門、南は修行門、西は菩提門、北は涅槃門、眞中に火屋有、四角方一間半、高サ二間、屋根はのし葺に破風を打たり、小壁の程は板なり、柱にはぬきもなく、すそをひろげてたてたり、火屋の穴は、龕の入程に四方に堀て、角を置たれば八角に見ゆ、四方にはこし口あり、白壁ぬり、塗りてぬりたり、大工は相論有て、鹿苑院と慈照寺の大工を召合て作らせらる、〇中略火屋のあらがきには、白き絹に、ゑばうちを布にしたる幕をはれり、〇中略錦の天蓋幡、龕下の水引等は、寺に留りぬ、

〔幽齋竹翁御葬禮記〕御葬禮は、同十八日、〇慶長十五年九月午の上刻と定りければ、〇中略御館より東にあたりて、野がみが原とて、方八町ばかり廣き野邊あるを、垣ゆひまはし、北に龕前堂を建、南に火屋あり、寶形作り、ひはだぶきにしつらひ、くわんを箔にてみがきたれば、日にえいじて輝事、秋の稻妻のごとし、四ツの柱を、青き段子をもて卷立、軒の水引は、紫空色の絹を用たれば、やう〳〵にして風にひるがへるさま、たとへば紫雲のたなびくにことならず、龕垣を卒都婆形に切て、三段に貫を通し、四方に四ツの花表を立、紺色綠青をもて色どりたる金字の額を掛たり、方四十八間、いはゆる都卒の內院に表する成べし、火屋と龕前との間、一百九十間をへだて、右の方中間に當て、六體の地藏菩薩をゑがきたる御影の前に香燈明をそなふ、龕前堂の所に高き机を飾、紫の打敷をひろげ、御位牌を直し、香爐香箱ちやつくり花ろうそくを備、色々の菓子を供せり、垣の內は尺地も無く敷物を敷、垣の外はろうそくを並立て、辻堅の諸士、一間に一人づゝ、鑓を持せ、屬從一人をめしぐす、僉白き小袖に上下を着し、股立を取、其以下は無紋の羽織を着し、手ごとに杖をもつ、長岡式部少輔、澤村大學介、益田藏人入道、三人肩を並べ、境の內をめぐり、諸家の出家、其外の諷吟、夫夫の法位に任せ、座配の札をさゝせらる、是にしたがつて小士六人、隙なく內外を順見して、行儀を正、亂語をしづむ、西のかたにかりやかたを設、御女中のおはする所とす、其外に諸用を辨するに、した小屋あり、見物の者は、辻堅より一間ばかり退て、一面に並びをれり、

〔大猷院殿御實紀〕八寛永三年十月十八日、大御臺〇德川秀忠室御葬禮、あらかじめ麻布野に茶毘所を設け、左右大竹をもて埒をゆひめぐらし、下にこもをしく、御寺より此所まで千間が間、こもの上に白布十反をしき、二間ごとに龍幡をたて、南方に燭をかゝぐ、茶毘屋百間四方、檜をもて垣をつくり、丹をぬり、こもをしき、白絹をひき、逢空信入覺行究竟の四門をたて、各門に額をかけ、方每に幡十本づゝ、四方四十流、火屋內構六十間、四方の垣外構と同じ、こもの上に綵をしき、泥涅饒從眞證

業成の四門をたて、二方に百味を供じ、四隅に紗籠を設、火屋の内に、淸淨舍、安樂殿の額をかけ、火屋の右に、歡喜堂、利人堂、柔歡堂、轉痴堂、濟飢堂、大悲堂をたて、佛具を陳設せり、又右に龕前堂あり、額をかけ百味を具す、龕は錦を以てつゝみ、廣濟果遂至德還至の四門あり、鳥居をたて額をかけ、内に淨業寂滅の二門あり、白張著百人にて御龕をもつ、錦の天蓋をさしかけ、在府諸大名家士、垣の内千間の間、一間毎に一人づゝ警衛し、外は足輕警衛す、火屋の外は先手頭、五十間百間をへだてゝ、弓銃を置て警衛し、目付の輩巡視して指揮す、

〔紳書 一〕岩根氏物語、桂昌院殿（○德川綱吉母）御逝去の披露は、六月（○寶永二年）廿二日也、此日の八時に、葬送の場所の普請の差圖極り取掛るに、又七時に十五六間の廊下、又爰かしこの好み出きたりて、中々出來べしとも覺えねど、心得たりと申て木寄をするに、木は六過に著す、夫より屋根はやね葺ふき量、木は大工削、一夜掛りて屋根も何も出來たれど、屋根板は小屋より初め積り計來れば、跡より云來る所は不足なるを、町人の役に來る者に功者有りて、增上寺の破損小屋にある屋根板を請取得てふき立し程に、未明に出來たり、役人中の座敷、女中の座敷、僧衆の座敷に、雪隱小用所一一に附て、戶障子あり、疊しき詰て、一夜に出來たり、凡金四千兩餘の入用也、山門より御葬所迄、木綿七幅に並べて敷つめ、左右に木綿の幕四重五重、内に金襴の幕なり、凡地に敷木綿貳千八百反、都合木綿の入用二萬八千反也、御葬所にも内金襴、外は木綿幕打しきて、其夜挑灯二百八十計、柄を盡く金襴にて卷く、御挾箱御輿等の柄、金襴にて卷ずといふことなし、蠟燭二萬挺餘入用也、廿三日の夜は、棺槨を又石槨に入て、石灰を以てつめ、その上に砂礫を敷たり、扨其明日、空棺を又々飾立て誠の御葬禮を行はれし也、其日雨降て彼金襴の幕をも打程に、側によりて探て見るに、其地厚き事いふ計りなし、雨少も通らず、雨は唯流落たり、扨其幕をはじめ、小屋何も車善七と云乞食に被下法也とて、取拂て彼に賜はりたり、何萬兩の金銀が、一夜を用盡されし餘りに、光りわた

葬具

りて哀れげもなかりしと也、

〔古事記上〕爾其大神〇須佐能男命出見而告、此者謂之葦原色許男、卽喚入、〇中略鳴鏑射入大野之中、令採其矢、故入其野時、卽以火廻燒其野、〇中略於是其妻須世理毘賣者、持喪具而哭來、

〔古事記傳十一〕喪具は、師の波夫理都毛能と訓れたるに依べし、書紀に、祓具を此云波羅閉都母能とあると同格なり、喪は母と訓べき字なれども此は葬せん料の具なるべければなり、

〔和漢習合葬祭紀略〕葬具ニツキテ云フベキ事ドモ

高張挑燈、白張无紋ナリ、念ヲ入ルレバ四本、略スレバ一本ニテモ宜シ、本儀ハ松明ナレドモ、弊里ニテハ用ヒ難シ、

銘旌、紅絹カ朱紙ニテ作リ、胡粉ニテ姓名之柩ト書ス、葬送ノ幡ノ事、古書ニ見エタレドモ、其製法傳ハラズ、又何ノ用タル事ヲ知ラザレバ、今諸家ニ用フルハ、皆似テ非ナル無用ノ長物トモ云フベキカ、其幡ニ書ク文ナド、皆宜シトモ思ハレズ、青龍白虎云々チ書スルナドハ、殊ニ非ナルベシ、サレド古昔ニ用ヒシ物ナリトテ、諸家ミナ此品アルガ故ニ、漢風ノ銘旌ヲ習合シテ用フベキカ用フベカラザルカ、恣意ニ決スル事能ハズ、識者ニ問ヒテ定ムベシ、〇中略

榊、三尺餘ノ枝ニ麻ト紙トヲ付ル事常ノ如シ、コレハ祭神ノ具ナレバ葬儀ニハ用ヒザル方然ルベキカ、今暫ク諸家ノ式ニ從ヘリ、此モ亦識者ニ問フベシ、

辛櫃、白木ニテ作ル、大小ト脚ノ有无ハ、喪主ノ心ニ任ス、棒ハ麻繩カ白布ニテ結付ル也、對舁ニスレバ殊ニ宜シ、此中ヘ墓ニテ供ズル洗米酒水魚ナドヲ入ル也、水ハ大土器カ茶盌ニ盛ル、但シ酒ト水トハ、途中ハ竹筒ナドヘ入ルヽ方宜シ、飯水ノ類ハ、俗間ニ盌ナドニ盛テ膳ニ居エタルヲ主婦ノ手ヅカラ持行ク事、彼影姬ノ歌ニモ協ヒテ古風ナルベケレド、サテハ餘リニシドケナク見ユルガ故ニ、今ハ辛櫃ニ入レテ丁ニ持タスル也、サレド古風ヲ好マム人ハ、右ノ如ク爲ムモ可カ

ルベシ、○中略

高張挑燈、白張无紋、コレモ一本ニテモ宜シ、コレハ柩ニ付クナリ、別ニ雲畳ニモ有ルカタヨロシ、時ニ隨フベシ、○中略

蓋、丸カ八角ニ作リ、上ハ白絹カ紙ニテ張リ、下ノ鰭ハ紅絹カ朱紙ニテ付ケ、頭ヘ紐ヲ付ケテ竿ニ繫グ也、大キク作ルベシ、小クテハ柩ト恰好セズ、コレハ用ヒザル家モ有リ、イヅレカ宜シカラム、イマダ考ヘ得ズ、

大刀、刀、鎗、或長刀傘、此品々ハ用ヒザル家多シ、コレモ能ク考フベシ、又此物ドモハミナ異物ニハアラズ、木又ハ竹ニテ作リ、白布ノ袋ヲカクルナリ、傘ハ常ノ手傘ヘ柄ヲ接ギテ袋ニ入ルヽ也、コレハ甚略ニ過タル如クナレドモ、異物ヲ用フル事ハ、有財家ナラデハ爲シ難ク、又禮記檀弓ニ、孔子謂爲明器者知喪道矣、備物而不可用也云々、塗車芻靈、自古有之明器之道也、マタ竹不成用、瓦不成味、木不成斲、琴瑟張而不平、竽笙備而不和、有鐘磬而无簨虡、其曰明器、神明之也ナド云ヘルニモ叶ハンカ、

後按、此長刀ノ類ヲ、林春齋、物茂卿ナドハ、彼儒風ノ方相ニ擬スト云ヒテ、柩ノ前ヘ列スル也、タトヒ方相氏ニ擬スル心ニハ非ズトモ、用ヒテ古意ニモ背カザラム、

〔早懸略記〕一玉垣一重、俗ニモジト云、尤屋根付也、四方格子打也、前ノ方、滿中三ツ割一分程明ケ、誌木ノ見ユル樣ニスル也、高三尺計、又二尺七八寸ニテモ、横二尺、是モ一尺七八寸ニテモ見計、玉垣ニ白布一巾ニテ幕ヲ張ル也、玉垣ノ外ヘ、榊ノ枝ヲクルリト指立ル、玉垣ノ内ノ見ヘヌ樣ニ榊ヲサス、

但前ノ方ハ榊不差、三方計也、

一於太一、此オダト云ハ棺ヲ乘セル物也、廟所ニ至リ、シバラクノ內乘物ヨリ是ヘウツス也、

後　前　形如此也

右モジ、榊、於太、此三品、前ヨリ場所近邊ヘツカハシ置也、

一誌木一、二寸角、長一尺五寸許見合、是ハ石碑立ル迄ノカハリ也、

此誌木モ、玉垣ト同樣、場所ヘ先ヘツカハシ置也、

一辛櫃一、長サ二尺許、横ハヾ深サトモ一尺計ニテモ、隨分手ガルニ形ヨク可拵、檜杉ニテモ、棒モ白木也、　中ヘ入ル品、祝詞二通、土器四枚、洗米少、御酒少、竹ノ筒ヘ入テ、鋪設二枚、

一木綿、榊、御幣也、一尺四五寸ヨリ二尺迄ノ榊ノ枝用之、

幣美濃紙ニテ製付ル、麻苧一結付ル、

右青竹ニテ筒ヲ拵、尤臺付コケヌ樣可作、夫ヘ差也、

一位牌、神靈代也、○中略

一供水、此供水器ハ、平生當人用キラレタル茶碗也、白木三方、又白木具ニテモ、清淨水可用、榊葉一枝添ル、家族廟參ノ輩、是ニテ御靈代ヘ水ヲ手向奉ル也、忌中ノ間、廟參毎ニ水榊改カフル也、

一蓋一、此骨木ニテモ竹ニテモ大サ棺ヲ覆程ニスル也、此サガリ紅絹又緋綾ニテモクルリトフクメンニ取也、祭主ノ心任ニリツハニスベシ、

一白張高挑燈二張、廟所ニ立ル、尤モジノ前、

一長柄傘（常ノ傘チタヽミナリニ白布ノ袋カケナガラ長柄付ル）一基、同モジノ後左、

一長刀（形ヨク木ニテ拵ヘ、布ニテ袋カケル、）一振、同モジノ後右、

一キヌガサ、玉垣ノ後、中ヘ立ル也、

右早懸ノ具也

〔喪祭私說〕造葬具

素轎提燈之類、可從葬者、依俗制之可也、但幡幢天蓋影燈之屬、不必用焉、方俗或以轅輿代素轎、亦可

從其用、轜輿者、當設天蓋及柩衣、善按今世葬儀原明季遺制、世以爲浮屠之法者非矣、然今棄轜提燈之外、概而斥之者、蓋以無用外飾徒爲觀美也、非儉親也、凡從葬之具、道路所列、宜一從俗制、勿妄標新奇以招譏議、近日學者、有作銘旌者、雖合古制、而我邦禮廢之久、世無能知者、卒用之以駭衆矚、不免矯詭、殊失先王從俗制禮之意、切戒勿爲、

〔喪葬私論〕葬送の禮も上古の事はしり難し、聖武天皇の御葬は佛法により給へば本朝の古禮とゝがたし、こも心あてに思へば殯宮におはしましゝ御榔を擂輿にのせ奉り、供奉の輿丁にかゝせて、方相氏は前に有て行べし、喪葬令をみるに、親王一品鼓一百面、大角五十口、小角一百口、幡四百竿、金鉦鐃鼓各二面、楯七枚とあれば、天子はこれに倍すべし、香輿、火輿、御前火等もあるべし、

〔令義解九喪葬〕凡親王一品方相轜車（謂方相者、蒙熊皮、黃金四目、玄衣朱裳、執戈揚楯、所以導轜車者也、轜車葬車也、）各一具、鼓一百面、大角五十口、小角一百口、幡四百竿、金鉦鐃鼓（謂鉦者、似鈴柄中上下通也、鐃者、如鈴無舌有柄、執鳴之而止擊鼓也、）各二面、楯（謂所以自扞葬者也）七枚、發喪三日、（○中略）二品、鼓八十面、大角卅口、小角八十口、幡三百五十竿、三品四品、鼓六十面、大角卅口、小角六十口、幡三百竿、其轜車鐃鼓楯鉦、及發喪日、並准一品、諸臣一位及左右大臣、皆准二品、二位及大納言、准三品、唯除楯車、（○車字恐衍）三位、轜（○此下恐脫車字）一具、鼓卌面、大角廿口、小角卌口、幡二百竿、金鉦鐃鼓各一面、發喪一日、太政大臣、方相轜車各一具、鼓一百卌面、大角七十口、小角一百卌口、幡五百竿、金鉦鐃鼓各四面、楯九枚、發喪五日、以外葬具及遊部、（謂葬具者、帷帳之屬也、遊部者、終身勿事、故云遊部也、）並從別式、五位以上及親王、（謂無位皇親）並借轜具及帷帳、若欲私備者聽、（女亦准此）

〔令集解四十喪葬〕或云、轜謂葬屋也、車謂載之、（○中略）一云、轜謂葬屋也、車謂載轜之車、下文見也、跡云、轜謂喪屋、造載於車、車載轜行車也、又說云、轜謂喪屋、抑合求禮記也、朱云、穴云、轜與車二色者、私同、見下文也、或云、轜俗云、小屋形也、轜與車二色也、有釋背、

〔日本書紀二十五孝德〕大化二年三月甲申、詔曰、（○中略）夫王以上之墓者、（○中略）其葬時帷帳等用白布、有轜車、

上臣之墓者、○中略其葬時帷帳等用白布、○中略下臣之墓者、○中略其葬時帷帳等、用白布帷於上、○中略庶
人亡時、收埋於地、其帷帳等、可用麁布、
〔釋日本紀十四述義〕轜車私記曰、如匝反、說文、喪車也、釋名、輿棺之車曰轜、其蓋曰柳、或曰紫甲、其旁曰藝、
〔日本書紀通證三十孝德〕轜車キクルマ岐謂棺也、令曰、親王一品方相轜車各一具、字書、轜又作輀、喪車也、
〔日本書紀二十九天武〕十二年六月己未、大伴連望多薨、天皇大驚之、則遣泊瀨王而弔之、仍擧壬申年勳績、
及先祖等每時有功、以顯寵賞、乃贈大紫位、發鼓吹葬之、
〔幸充日次記〕享保四年正月九日壬午、禁裏御葬送之節、御車之音、末細鳴テ而、物悲敷聞ユル様ニ拵、反常車作
之故實ト云々、
〔權記〕寛弘八年七月八日己卯、今日御葬送也、○一條、中略、御輿長等舁御輿、置中殿北西渡殿板敷上、○中略
件御輿、大床上在五間小屋形、懸帷、先後立小障子、左右在高欄、其下又有須々利、
〔類聚雜例〕長元九年五月十九日丙申、駕輿丁等自一條院持來御輿、○後一條御葬等、○中略暫撤却小屋形須
須利等、○中略橘義清等舁御棺安椰中、西枕次覆須々利小屋形等如元、
〔榮花物語二十九玉の飾〕萬壽四年九月十四日のさるの時にうせ給ぬ、○三條后妍子、中略、御くらゐもさらせ給に
しかば、御輿あるべきにあらず、故女院○圓融后詮子四條宮○遵子などの御れいにて、絲毛の御車にてさ
覺しめしたり、
〔後中記〕仁治三年正月二十五日戊申、今夜四條院御葬禮、○中略仍寄絲毛御車、行事所車、長元裹御車、今度不裹之、
〔後愚昧記〕應安七年二月二日戊戌、新院○後光嚴御葬禮也、亥刻出御、八葉切物見車、懸下簾、前後不卷之、簾中車簾懸之、
〔公名公記〕永享五年十月廿七日丙子、今夜御葬禮也、○後小松、中略、戌刻自東門出御云々、御車、八葉、自妙法院宮被進云
云、御簾如常、被懸御下簾、
〔親長卿記〕文明三年正月三日、今日御葬禮、○後花園治定云々、○中略申刻許先寄御車、下簾如常、大八葉、先規庇御車歟、如何、

〔和長卿記〕明應九年十一月十一日壬戌、今夜御葬禮也、○後土御門、中略、御車、以生絹裹之、小八葉也、先例出納所預置之賀茂祭錦毛車云云、故爲隱過差以絹裹之、

〔二水記〕大永六年五月三日、今夜可有喪禮御幸也、○後柏原、中略、凶事條々、

一今夜御車、明應之度、乘御之御車也、從雲龍院加修理獻之、

〔幸充日次記〕寛延三年四月廿三日、仙洞御所崩御、御寶算三十一、奉稱櫻町院、○中略、

一御車、山田氏役也、今度入札而他人作之、雖然山田モ立加云々、其後塗萬仕立者寺町妙滿寺寺中而仕例也云々、　五月十五日丙辰、五條橋試之車、重目相量乘之、常車、牛而被令牽之云々、橋板者横板一寸餘際而一面打付、敷古疊令蒔砂、

〔天保諒闇記下〕御車光格御葬御廳御役○二條左大臣

御屋體梁行外法七尺五寸九分桁行外法壹丈壹尺　車軸長サ壹丈三尺貳寸九分總高サ壹丈三尺五寸五分

外ニ兩軸壹尺四寸宛　地より沓居上迄四尺五分

〔言成卿記〕弘化三年三月四日、安置御棺○仁孝、於御車、網代御車、在下簾御簾、

〔新朔平門院御凶事書留〕御棺槨寸法

御車組立寸法傳奏依御乞修理職ヨリ注進

御屋體　桁行一丈、梁行六尺九寸八分、車軸長一丈二尺二寸四分、輪關之間、幅九尺六寸五分、總高サ一丈三尺四寸八分、地ヨリ沓居迄三尺九寸三分、○中略、

御車御屋體外法御左右御前後明キ寸法、繪圖之通、○圖略、

〔榮花物語二十一後悔大將〕この月○治安四年正月の十四日に、御さうそうあるべし、○藤原數通妻、中略、くれぬれば、その○通數の御車に御裝束す、御くるまのわなどに、きぬひき○ひき一本作まきなどするを見るにも、つねのありさまはかくやありしなど、いみじき事どもおほかり、

〔榮花物語二十七衣の珠〕やがてかぎりになり給ひぬ、（○藤原長家室、中略、）かくて十五日（○萬壽二年九月）になりぬれば、こたみの御ありきの、れいのやうにありけれど、御くるまにものまきなどして、（○下略）

〔類聚雜例〕長元八年六月廿二日甲戌、先齋院申刻卒去給云々、　廿五日丁丑、及晩景參先齋院、戌刻出自北門、（判官光業秉燭、作布衣、著當色、）亥刻許到蓮臺廟、（件所御在所、被點云々、）先去葬所一町許、備葬禮、（車張雨皮、輪卷手作、）

〔中右記〕保安元年八月六日甲戌、今夜故民部卿（○藤原宗通）葬送也、（○中略）喪禮之事、檳榔毛車、（不乘、但有雨皮、）

〔萬松院殿穴太記〕玉の御輿は鹿苑院にて大工塗師唐紙師に至るまで參りつどひて、こよなう造出して、廿二日の朝天に慈照寺に渡さる、

〔倭名類聚抄十四葬送具〕香輿　喪禮圖云、香輿、（俗云、香乃古之、）

〔箋注倭名類聚抄六葬送具〕按香輿、見類聚雜例、榮花物語月宴卷、又按明李言恭日本考云、殯出用杠擡龕、使孝子親擡、至親皆扶殯而行、殯前排紙旛二三十竿、外設香亭一座、名曰設孤、設孤蓋燒香之譌音、是則所謂香輿也、

〔榮花物語一月宴〕二日ありて、とかくしたてまつらんと覺しおきてたるにも、（○村上后安子御葬）ぎしきあり樣あはれにかなしう、いみじき事かぎりなし、（○中略）奉りたまへりけるもの、さまなどのいみじさよ、かうのこしひのこしなど、みなあるべきわざなりけり、

〔小右記〕寛弘八年七月九日庚辰、巳刻許、資平自院（○一條院）來云、只今事了、昨日亥四點出御（御輿香輿火輿、在御輿前後、）御葬送所、（巖陰長坂東云々）

〔類聚雜例〕長元九年五月十九日丙申、自二條院持來御輿、（○後一條御葬）等、（火輿香輿行障步障等相具、於一條院調具件物等、）（○中略）於墻外行例、（○中略）次香輿、（輿中中央居鍍爐、引火舍、其四角立同花瓶等、供花、持又如火輿、（駕丁二人）在行障外步障內、）

〔萬松院殿穴太記〕穴太の新坊より、むなしき御から（○足利義晴）を東山慈照寺に出し奉る、（○中略）斯くて御。輿。を石山の間に、西向にかきすゑ、香爐を設て、御供の人々燒香して退ぬ、

〔常憲院殿御實紀一〕延寶八年五月廿六日、東叡山にて御葬禮〇徳川家綱行はる、行列は挑火、灑水、薫香、〇中略次に挑火香、小納戸大久保兵九郎忠直、松平傳左衛門利正かはるがはる役す、

〔文昭院殿御實紀一〕寶永六年正月廿八日、酉剋靈柩〇徳川綱吉をかりの御ましより埜城にうつし奉る、壽昌院覺純、普門院慈潭、四智讃を誦し、伶人樂を奏す、行列は少老久世大和守重之、大久保長門守教寛、左右にたつ、〇中略次に香爐、小納戸二人かはるがはるもつ、〇下略

〔最樹院殿御葬式之記〕文政十年二月廿日、儀同殿〇一橋徳川治濟隱れさせ給ひぬ、〇中略御供立は、まづ一番に提灯白、次に馬、〇中略具足、長刀、次に香。爐。左右二側、假同朋持之、

〔倭名類聚抄十四葬送具〕火輿　喪禮圖云、蠟燭輿、今按俗云、火輿是、

〔箋註倭名類聚抄六葬送具〕按火輿、又見類聚雜例、榮花物語月宴卷、按類聚雜例云、火輿、輿內立小臺、居油坏於其上明火、則知不用蠟燭、蓋古今其制不同也、

〔類聚雜例〕長元九年五月十九日丙申、御輿長等、舁下御輿、〇後一條御葬、中略次火輿、輿內立小臺、居油坏於其上明火、駕丁二人、布衣烏帽著當色、衛之、歩障內立行障外、

〔幽齋尊翁御葬禮記〕御葬禮ハ、同十八日〇慶長十五年九月午の上刻、〇中略幡をさし、燈。籠。を。と。ぼ。し。天蓋をさしかけ、〇下略

〔嚴有院殿贈大相國公御葬送日錄〕御棺中門ヲ出御、〇中略玻璃御提灯　玻璃御提灯　御棺、

〔文昭院殿御實紀一〕寶永六年正月廿八日、山にて大葬〇徳川綱吉行はる、〇中略行列は、〇中略御代參使土屋相模守政直、次に香爐、小納戸二人かはるがはる持つ、次に琉。璃。燈。二、次に靈柩、

〔名目抄喪服〕歩障ホシヤウ天子大行之時用之、行障同上

〔倭名類聚抄十四葬送具〕歩障　喪禮圖云、白布帷、以障婦人、今案俗用歩障是、

〔倭名類聚抄六屏障具〕行障　唐鹵簿令云、行障六具、

〔箋註倭名類聚抄六 部 障具〕通典皇太后皇后鹵簿、有行障六、卽其事也、雲溪友議、載唐陸暢詠行障詩云、碧玉爲竿丁字成、鴛鴦繡帶短長馨、強遮天上花顏色、不隔雲中笑語聲、按行障又見儀式賀茂祭、內匠寮式、

〔類聚雜例〕長元九年五月十九日丙申、御輿長等、舁下御輿、（○後一條御葬、中略、）次步障、（行障外左右各四條、條別長各六丈五幅、以帛絹縫之、小舍人井後院藏人召使等雜人、著衣冠當色等、左右相分持之、條別五人、各以白木竿爲柄、前後引塞、○中略、）次行障、（以帛絹縫之、長各五尺餘五幅、藏人所雜色以下十六人、著當色持之、御輿左右各五人、前後各三人、）次御輿、（在行障內、）

〔定家朝臣記〕天喜元年六月十一日乙卯、鷹司殿令薨給、廿二日壬寅、有御葬送、○中略、行障廿九條、

〔中右記〕保安元年八月六日甲戌、今夜故民部卿葬送也、○中略、有行障、

〔名目抄裏 服〕黃幡（カウハム）

〔萬葉集二 挽歌〕一書曰近江天皇（○天智）聖體不豫、御病急時太后奉獻御歌
青旗乃、木旗能上乎、賀欲布跡羽、目爾者雖視、直爾不相香裳、

〔萬葉集抄四〕青旗者、葬具にはべるにや、常陸國風土記に、信太郡と名づくる由緣を記して云、黑坂命征討陸奧蝦夷、事了凱旋、及多歌郡角枯之山、黑坂命遇病身故、爰改角枯號黑前山、黑坂命之輸轜車、發自黑前之山、到日高見之國、葬具儀、赤旗青幡、交雜飄颺、雲飛虹張、瑩野耀路、時人謂之幡垂國、後世言便稱信太國云々、

〔類聚雜例〕長元九年五月十九日丙申、於墻外行列、（○後一條御葬）先黃幡、（黃絹幡、書眞言、付白木竿、出納並時持之、）

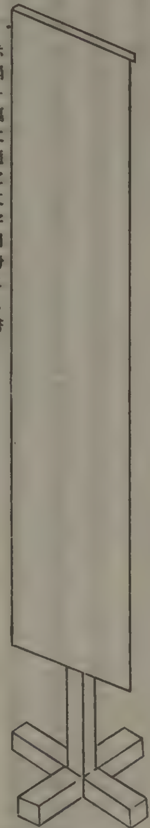
〔定家朝臣記〕天喜元年六月十一日乙卯、鷹司殿令薨給、廿二日丙寅、有御葬送、○中略、黃幡、主稅笇師忠國、

〔兵範記〕仁安元年九月廿四日甲子、棺（○藤原基實）覆生絹八尺四幅半、黃幡料白生絹一丈、已上取具、卽調置了、

〔萬松院殿穴太記〕御葬禮〇足利義晴方の奉行は、松田九郎左衛門尉賴隆催したり、門役は松田對馬守盛秀也、〇中略赤地の金襴幡四流、〇杏二文字持者四人持レ之、

〔大猷院殿御實紀八〕寛永三年十月十八日、大御臺所〇德川秀忠妻御葬禮、〇中略行列ハ一番、〇中略紗籠二本づゝ、次ニ左右幡五流づゝ、〇下略

〔喪祭式〕銘旌



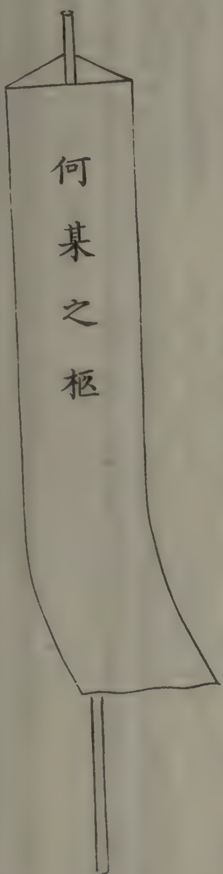
赤絹一幅丈適宜文字胡粉にて書く

故□□氏□□俗稱□□名柩

故□□夫氏婦人□□妻氏氏柩

〔津和野舊記〕葬儀要略

一旗一本柩の前に爲レ持可レ申、小旗は柩に付ヶ候事、



右之通御家老以上木綿旗、御中老番頭三役人ハ紙旗、寄合以下紙小旗相用可申候事、

小旗



〔倭名類聚抄 十四葬送具〕棺 四聲字苑云、棺、音官、一音貫、和名比止岐、所以盛屍也、屍音與尸同、訓或通、死人形體曰屍也、

〔箋註倭名類聚抄 六葬送具〕景行紀棺槨、或同訓、神功紀槨訓比川擬(ヒツギ)、榮花物語楚王夢卷、亦云比川擬、皆比度岐(ヒトキ)之轉也、按比度岐、古單云擬(キ)、孝德紀棺及棺椁訓擬、又轜車訓擬久留萬(キクルマ)是也、或謂之於久都岐(オクツキ)、萬葉集多見、天智紀同訓、在地下故云奧(オクツ)、津助語、謂之比度岐者、以收藏人屍有是名、

〔日本釋名 下雜器〕棺 ひつは人也、ととつと通ず、死せる人の入木也、

〔類聚名義抄 三木〕棺 音官、一音貫、ヒトキ、 柩 舊音同上、在棺 櫬 支覲反、親音、ヒツギ、空棺、 〔同 七穴〕窆 疋驗反、ヒツキ、ウツム、チサム、

〔下學集 下器財〕棺 斂屍箱也、

〔倭名類聚抄 十四葬送具〕槨 野王曰、槨、古博反、與郭同、和名於保土古、周棺者也、

〔箋註倭名類聚抄 六葬送具〕今本玉篇木部云、椁棺、椁槨同、上不載此文、按周禮閭師注、椁周棺也、禮喪大記注、椁謂周棺者也、說文椁作𣝗、云、葬有木𩫖也、釋名、槨廓也、廓落在表之言也、

〔類聚名義抄 三木〕椁 音郭、マカリキ、エツリ、オホトコ、 槨 俗 槨 同

〔魏志(三十倭人)〕其死有棺無槨

〔家禮(中喪禮)〕初終

司馬温公曰、棺欲厚、然太厚、則重而難以致遠、又不必高大占地使壙中寬、易致推毀、宜深戒之、椁雖聖人所制自古用之、然板木歲久、終歸腐爛、徒使壙中寬大不能牢固、不若不用之爲愈也、孔子葬鯉、有棺而無椁、又許貧者還葬而無椁、今不欲用、非爲貧也、乃欲保安亡者耳、

〔平他字類抄(地儀平聲)〕龕(モコシ)

〔下學集(下器財)〕龕(人坐小室也)

〔塵添壒囊抄(十六)〕龕字訓事

龕ト云ハ則棺ヲ云歟、棺ヲバヒツギトヨム、龕ヲバモコシトヨム、〇中略喪ニ乘ル輿ナレバ爾云歟、モトハ喪字ノ訓也、

〔釋氏要覽(下送終)〕龕子(音塔、唐韻云、龕塔也、)今釋氏之周身、其形如塔、故名龕、(方志云、受也、廣雅云、盛也、此名蓋異俗也、)南山鈔云、作絹棺覆尸、此爲無龕子、故制若船篙子以竹爲骨、白絹輓之、周禮曰、周尸曰棺、棺寬也、釋名曰棺關也、白虎通曰、所以有棺者、以掩藏形惡也、　安龕柩(音舊)白虎通云、在棺曰柩、柩究也、久也、不復彰也、釋名曰、柩究也、送終隨身之制、皆究備也、釋氏則云設利羅、此云骨身、卽全身舍利也、

〔鈴木叢書(十五)〕神道葬祭略次第

一氣絕二十四時過、靈體令納此登岐、〇中略比登、(以松白木造之、內外削、臥座寸法等、可任家主之意、中敷白綠薄疊也、)同覆、(白布)於保土古、(白木、四本柱、屋根長片木板、四方白幾簾、格好可准比登岐、)長柄(白木、長短不定、可准於保土古、)袴脚(二、白木、高不定、)

〔行治神道葬祭拾式錄〕吉田家葬祭式

比都器之(高三尺八寸、八角作、但材厚吉シトス、)次於保止古稱比都器、上設寶珠形、八之角有八蕨手、其端有八之八咫烏、各著幡八幡、書吐普加身依美多女(トフカミエミタメ)各一字、(或華幡、或玉幡亦用之、)次須太階臺之四方有鳥居、餘井垣也、四

鳥居著五十鈴、前後各十二、左右各十三、次鳥居有額、前額阿奈元氣神某姓名靈社神號、後額人元人妙神力加持、左額天元天妙神變加持、右額地元地妙神通加持、次須太陪之左右、著美津奈二筋、（前長五尺餘、合兩端結之、其端子掛之兩肩、後者親戚列左右持之、）次幾奴加佐、八角作之、上設寶珠形、八角有八蕨手、其蕨手各著幡威瓔珞、下以絹擁之、中央有大幡、天津祝詞乃太祝詞乃事於以天導申須至利賜陪、（大字十三、小字七、合廿字、大幡二書ナリ、）

〔和漢習合葬祭紀略〕棺ハ厚板ヲ以テ臥棺ニ製シ、瀝青ヲ注ギ、灰隔等ヲ作ルベキ事ナレドモ、微力ニテハ辨ジ難ケレバ、是マデハ甕ヲノミ用ヒタリ、甕モ藥掛ケノ品ニテ、石ノ蓋ヲ用フベキ事ナレドモ、ソレサヘ出來難キ家ニテハ、素燒ノ甕ニ、松カ檜ノ厚板ニテ蓋ヲ作リ、覆テ後、蓋ノ上ニ檜ノ方木ヲ並ベオク也、カヽレバ皆坐棺也、○中略入棺畢リテ座敷ヘ臺ヲ置キ、其上ヘ棺ヲ荷フ輿ノ如キ物ヲ置キテ棺ヲ居エ、上ヘヨリ火燵櫓ノ如ク大キニ作リタルヲカブセ、其上ヘ白布ヲ油單ノ如ク縫ヒタルヲ掛ケ、屋根ヲノスル也、屋根ノ作リカタ、又棺ニ欄干ヲツクルナドハ、喪主ノ意ニマカス、

〔神道喪祭家禮〕葬器之法

一火䑓、（ヒツギ、高四尺、四方貳尺四寸、）四角仁可作、材波用柀、板波以廣厚爲善、

一覆絹、（長五尺四幅、）貴人波用白綾、中人以下波用白布、

一火䑓乃臺、任棺大小、此上仁置火䑓、

一火䑓臺皆用柀、神代卷曰、柀可以爲顯見蒼生奧津棄戸將臥之具、以不易朽木也、

一火䑓乃中江敷疊、貴人波以白綾作縁、其外下人波以白布、

〔早懸略記〕棺尤堅棺也、凡高四尺、四方二尺四寸位、板ノ厚サ一寸位ヨリ見合、隨分厚キ方ヨシ、木ハ柀松等ヲ用、恰好病人ニ依事也、餘リ大キ過テハ、病人ノ爲ニモナラヌ也、

乘物、廟所マデ棺ノ儘病人ヲ送節ノ乘物也、平生用キラレタルニテモ可然ナレドモ、別ニ形ヲ拵ル方ヨシ、拵方左ニ記ス

棺ノ四方ヲ前後左右トモニ乘物ノ形ヲ拵板ヲアテ、棺ノ外ヨリ見エヌ樣ニ包ム也、○中略屋根モ同樣表類ニテ包テモ、又板ニテ拵テモヨシ、隨分恰好能ク細工スベシ、骨ハ木ニテモ竹ニテモ拵ル也、右四角紐ニテ、シッカリトクヽル、上ハ棺ヨリ細引ノ類ニテ棒ヘクヽル也、紐上ヘ出タル處ハ、見ヘヌ樣金物ノ樣ニ細工ニテカクス、

〔伊勢早駈次第〕棺槨ハ杦其外雜木何ニテモ、ヌケブシナドノナキ板ヲエラビ用ユ、其ウチモ棺ハ厚板ニテ內ヘ水ノ漏入ヌヤウニ堅固ニツクリ、槨ハウス板ニテモ見分宜キヤウニツクル、棺ト槨トノ間ヘハ、赤土ト石灰トヲ二人アハセテツメルナリ、又槨ヲ用キザルモアリ、○中略野送ハ柩ヲ常ノ輿ニ乘テ送ルナレドモ、如此ニテ葬地ニ至ラザルサキニ輿ヲ下スコトナレバ、取扱ニ煩シキ故ニ、臺ヲツクリテ、棒二本ニテ白布カ繩カニテ槨ヲ臺ヘクヽリツケ、槨ノ上ヘハ板ニテヤネヲツクリテ覆ヒ、四方ヘハ白絁カ布ノ帳ヲ垂テ、轅輿ノヤウニ仕立テ、其儘ニテ葬地マデ送ルモアリ、又棒一本ニテ槨ノ上ヘツケ、肩輿ニ仕立ルモアリ、

〔喪祭私說〕治棺護喪、命匠擇木、爲棺、柀爲上、(日本紀神代紀載、柀可以爲蒼生棄戶之具、柀此云磨紀、今俗用槇字、)檜次之、其制方直、厚一寸三分、高三尺、廣二尺一寸、横一尺九寸、皆外矩也、底鋪石灰、厚二寸許、加七星板、底四隅各釘鐵環、動則以大索貫而擧之、若木有裂文釘隙、當以松脂補塞、按古者臥棺之制、今不復存、意其制重大、不便移動、家貧人寡者不易遽致、且我邦墳墓寄在佛寺、不得廣占地、故從俗就簡、以坐棺代之、○中略按今世澆漓、幸不火化、亦以薄葬爲務、習染成風、恬不之恠、使其間有孝子、棺制窒儀、欲量禮而行、或家貧勢禁不得伸志、余爲之議曰、微力之人、不必拘舊制、以世俗所用瓦棺若木桶、亦可也、蓋以有三物也、夫三物、經歲之久、結爲金石、螻蟻盜賊、皆不得進、故棺或可隨權略制、至三物則孝子情慮所係、至大至重、決不可

闕矣、

〔喪禮儀略〕棺圖〇圖略

前ノ高サ今尺ニテ一尺六寸、横モ一尺六寸、長サ五尺五寸、後ノ高サ一尺三寸、横モ一尺三寸、板ハ油杉又ハ檜ヲ用ユベシ、板ハ厚キニアカズ、棺ハ僅ニ身ヲ容ル程ニ作ル物也、人ノ大小ニ依テ棺ノ大小有ベシ、右ノ尺寸ノ積リヲ以テ其人ノ大小ヲ計リテ作ルベシ、柩衣トテ、白キ布ニテ棺ノナリニヌフテ上ヘウチキスル物アリ、是ハ喪主ノ心マカスベシ、棺ハ葬具ノ最モ肝要ノ物也、心ヲ盡シテヨク制ルベシ、

壙ノ中ノ四方ヲ、板ニテ四角ニツクル、前後左右、棺ヨリ廣事五寸ヅヽ、蓋アリテ底無シ、底ハ炭末石灰ヲシク、高サハ棺ヲ入テ、其上五寸計餘ルホドニス、棺ヲ入テ後蓋ヲシテ釘ニテウチカタム、

若灰隔ヲ作ルニ力ナキ者ハ、灰隔ヲハブキ、棺計ニテ葬ベシ、

〔吉事略儀〕御棺事

御平生之時、以吉日於可然閑所可被造之、長六尺三寸、廣一尺八寸、高一尺六寸、下二所可有管足、有蓋有加津良如辛櫃、蓋内外可被塗之、不可漏之故也、又寸法或商量御身體被造之、

裏書
棺寸法隨人皆可替、依先例注之云々、

御棺覆

生絹四幅縫合之、上下一尺許垂之、

裏書
或儀如辛櫃覆縫之

布綱二筋

四丈白布二段、各帖四倍、先帖二重、次又折二二重、推折𥿻覆上敷物、先例多無之、而鳥羽院御時聊有議有之、今度任常儀不可有之歟、但可依御定、

裏書
不合口帖也、異常途、

首書鳥羽院御棺內三方、被蒔眞言種子、下方御足蒔蓮華、仍下敷許、被用二幅帛袷、長五尺五寸絹ノ敷物也、

仍被止御筵、

〔日本書紀一神代〕一書曰、素戔嗚尊曰、韓鄕之島、是有金銀、若使吾兒所御之國、不有浮寶者、未是佳也、乃拔鬚髯散之、卽成杉、○中略尻毛是成被、○中略乃稱之曰、○中略被可以爲顯見蒼生奧津棄戶將臥之具、

〔日本書紀通證五〕私記曰、死者臥化、故云將臥之具棺槨也、直棺曰、是上古臥棺之明證也、重遠曰、古来用坐棺、此云臥、則取伏藏之義耳、今按上古坐棺未見其證、今驗發古塚者、多是石棺、治之以朱、其尸南首、伸手脚而臥、或有藏銅器物者、但今世士庶多用坐棺、蓋取其便也、又聞省中遺營、忌被不用、蓋出于此、爾雅、被黏、疏、被一名黏、郭璞曰、黏似松、可以爲船及棺材、作柱埋之不腐、又人家常用作桶板、甚耐水、黏説文作樧、音杉、

〔新撰姓氏錄左京神別〕石作連　火明命六世孫、建眞利根命之後也、垂仁天皇御世、奉爲皇后日葉酢媛命、作石棺獻之、仍賜姓石作連公也、

〔古事記中垂仁〕其大后比婆須比賣命之時、定石祝作、又定土師部、此后者葬狹木之寺間陵也、

〔古事記傳二十五〕石祝作、祝字は、棺の誤なりと師の云れたる、信に然るべし、草書より誤れるならむ、○中略註伊斯紀都玖理(イシキツクリ)と訓べし、和名抄に、四聲字苑云、棺所以斂屍也、和名比止岐、また野王云、槨周棺者也、和名於保土古とあり、此棺も槨も、共に上代には比登紀と云、於富登許と云は、やゝ後の名と聞ゆ、又比都紀と云は、比登紀の轉れるなり、又槨をも、ヒツキと訓り、槨とは棺に屍を納たるを云、又常には紀(キ)とのみも云り、書紀景行卷に棺櫬(ミキ)、ミは御なり、孝德卷に棺槨、また棺(キ)などあり、同卷に轜車(キクルマ)とあるも、轜車の訓なり、轜字裝車と注す、紀は、奧津城(オクツキ)などの城にて屍を藏むる構を云、奧津城は、萬葉に多く見えて、人を葬せる處を云、天智紀に、丘墓(オクツキ)とあり、奧とは地下を云なり、比登紀とは、人屍を納るゝ故に云なり、さて書紀神代卷に、素戔嗚尊云々、被可以爲顯見蒼生奧津棄戶將臥之具、とあるに依るに、內棺は、上代より木以造れりと見ゆれば、此に石棺とあるは、外槨なるべし、己さきに大和國を見めぐりし時、十市郡安部村の近き處に、窟のあるを、やゝ深く入て、奧に石槨の上は屋根の形に作りて、高さも堅も横も六尺ばかりなるが立るを見つ、此は正しく上代の貴人の墓と見えたれば、石棺と云るは、かゝる物なるべし、なほ外なる總ての石槨までをかけて、皆伊斯紀(イシキ)とぞ云けむかし、姓氏錄左京神別に、石作連、

○中略また山城國神別石作、火明命之後也、また攝津國神別石作連云々、また和泉國神別石作連云々など見ゆ、和名抄に、山城國乙訓郡石作郷、以之都久利尾張國中島郡石作郷、以之豆久利などもあり、さて石棺を造る工は、世に舊よりも有つらむを、此御世に更に其部を定められたるなり、此御世に、始めて石棺を作れりと云にはあらず、かくて天智紀に、六年春二月、合葬天豐財重日足姫天皇與間人皇女於小市岡上陵、是日以皇孫大田皇女、葬於陵前之墓、皇太子謂群臣曰、我奉皇太后天皇之所勅、憂恤萬民之故、不起石槨之役、所冀永代以爲鏡誡焉とあり、されど此後もなほ此事止たりとは見えず、

〔古事記 中仲哀〕於是息長帶日賣命、○神功皇后於倭還上之時、因疑人心、一具喪船、御子○應神載其喪船、先令言漏之御子既崩、

〔古事記傳 三十一〕喪船は柩を載たる船なり、

〔鹽尻 五十三〕今野俗謂棺稱船、按隋書東夷列傳○倭國曰、及葬置屍船上、陸地牽之云々、今所稱是也、船戸神之號、宜致思乎、

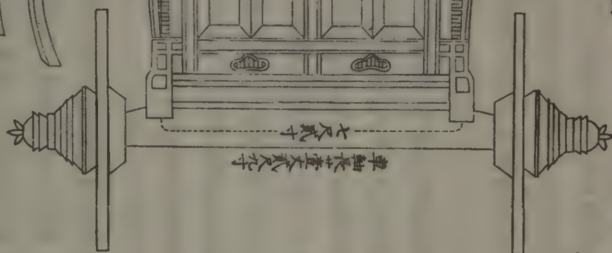
〔日本書紀 仁德十一〕爰太子○菟道稚郎子薨之經三日、時大鷦鷯尊、摽擗叫哭、不知所如、乃解髮跨屍、以三呼曰、我弟皇子、乃應時而活、自起以居、○中略乃且伏棺而薨、

〔三代實錄 陽成三十八〕元慶四年十二月四日癸未、是日申二刻、太上天皇○淸和崩于圓覺寺、○中略正向西方結跏趺座、手作結定印而崩、寢儀不動、儼然如生、念珠猶懸在於御手、梓宮御棺、其制同輿、以聖躬坐崩、遂不頽臥也、

〔和長卿記〕明應九年十月四日、今夜御入棺、○後土御門也、御棺等泉涌寺寺官之沙汰也云々、御棺事、今度寺官等、以數日可遲引之故、寶號御棺奉入桶也、有蓋、以絹悉皆張廻畢、十一月八日己未、今日泉涌寺葬場殿爲見物人々同道、○中略寶輿八角之龕也、柱黑塗、棟寶形、以金彩玉、八方以唐錦張之、四方有鳥居、面方有金鎗鎖之、轅白木也、以生絹縫裹之、大幡四本皆唐錦也、有龍首天蓋、同以唐錦張之、於錦者自禁裏

〔後櫻町院御葬送御車幷御棺圖〕

御屋體正面圖　御前ノ方明放シ
御後ノ方扳唐戶四枚折



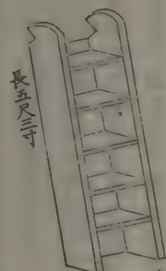
御屋體橫之圖　總高サ地ヨリ御屋體烏衾迄
御車トモ一丈三尺五寸程

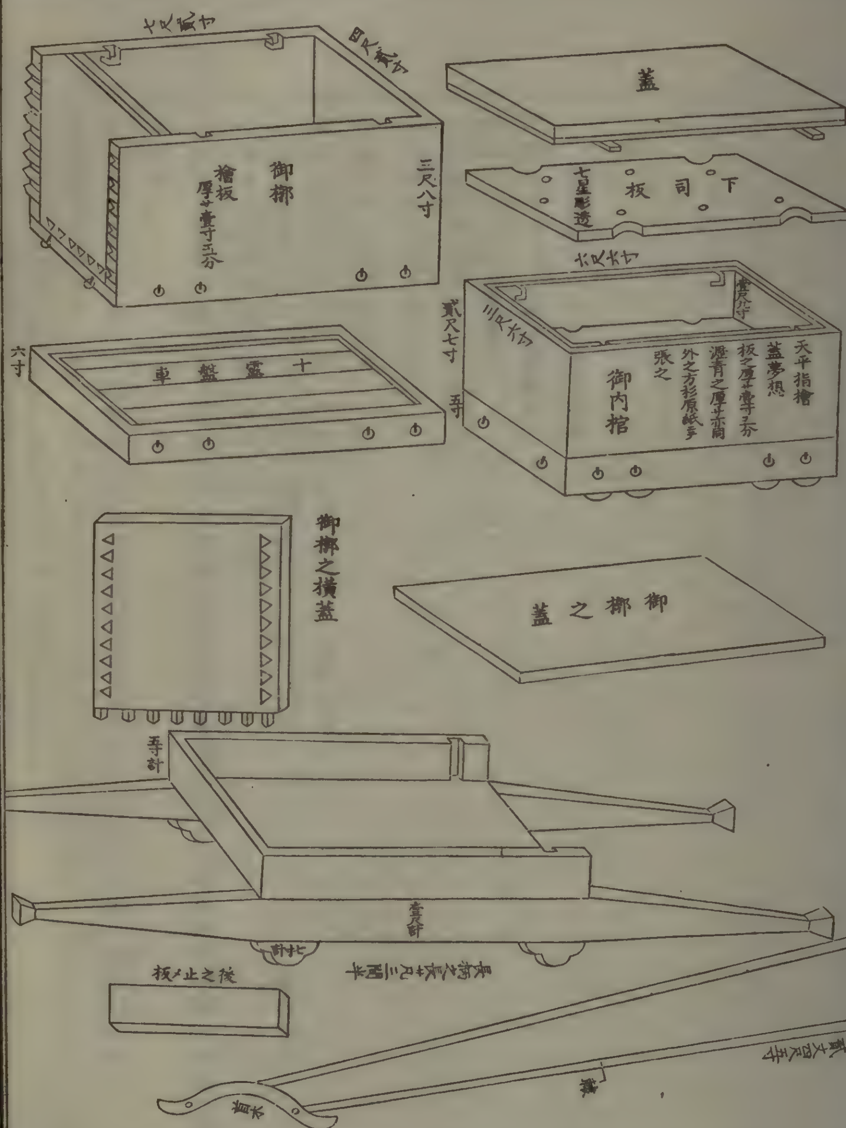
御後
御前
網代
網代
網代
御物見窓
鏡戶
網代
網代
網代
網代
網代

榻



棧




七尺貳寸
四尺貳寸
蓋
御槨
檜板
厚サ壹寸五分
三尺八寸
下司板
七星彫透
六尺七寸
壹尺八寸
三尺六寸
貳尺七寸
天平指檜
蓋夢想
板之厚サ壹寸五分
外之方杉原紙ヲ張之
御内棺
六寸
御槨之横蓋
御槨之蓋
五寸許
壹尺許
七寸許
後之止メ板
貳丈四尺五寸

被出之云々、凡事之體驚目了、於當時者、嚴儀疊重也、日暮歸宅、

〔菅別記〕大永六年四月十一日甲子、今曉可有御入棺〈○後柏原〉之儀處、俄有相違之儀延引、可爲晩天也、〇中略又有不慮之儀、御棺寸法相違之間、俄桶可用意也、仍自然用本時刻云々、〈自一昨夜、俄龍頭以下玉體ニ一圓腫張之儀出來、仍雖目寸法相違也、〉

〔宣順卿記〕承應三年十月十五日、今夜御葬禮也、〈○後光明、中略、〉於龕前堂廂内奉乘寶輿、〈八方寶也、棟黑塗、柱黑塗、寶形以金彩玉、〉〈八方以唐錦張之、四方有鳥居、有金鑰鎖、大幡四本、天蓋等有之、事之體驚目云々、〉

〔天保諒闇記下〕御棺〈○光格〉寸法〈長サ六尺五寸高サ貳尺三寸臺下上ニ幅三尺七寸以上内法〉　總高サ三尺六寸　御臺車共

御槨寸法〈長サ七尺七寸高サ四尺貳寸幅四尺九寸御臺共以上外法〉　總高サ四尺八寸　御臺車共

御棺〈右目方〉六拾貳貫目

右口〈右目方〉百三拾五貫目

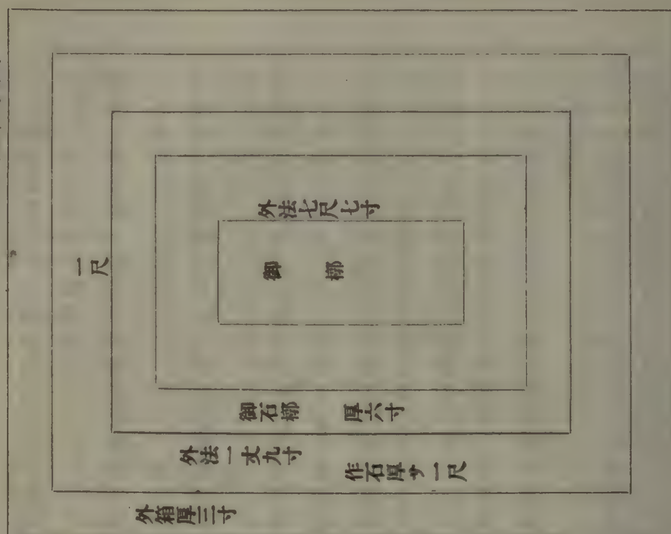
右御臺車〈右目方〉貳拾六貫目

御槨〈右目方〉八拾貳貫目

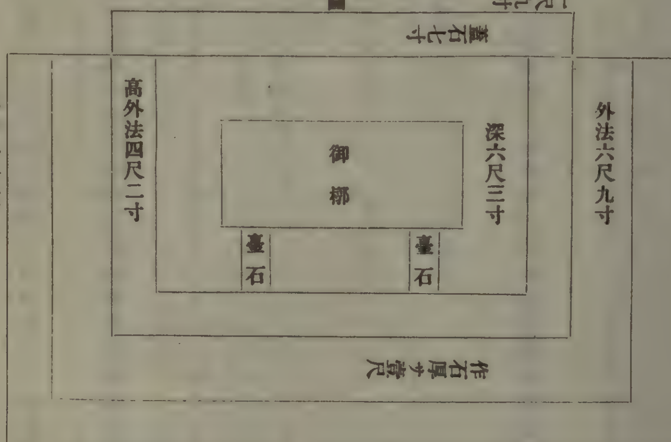
右御臺車〈右目方〉三拾四貫目

目方凡〆三百三拾九貫目

木口ノ圖


外法一尺四寸
外法七尺七寸
御槨
一尺
御石槨
厚六寸
外法一丈九寸
作石厚サ一尺
外箱厚三寸

深サ圖


一尺九寸
臺石七寸
外法八尺二寸
高外法四尺二寸
御槨
深六尺三寸
外法六尺九寸
臺石
臺石
作石厚サ壹尺

〔新朔平門院御凶事書留〕御棺槨寸法

御棺

外法長四尺八寸、同幅三尺三寸五分、同高三尺四寸六分、但此內御蓋車六寸計檜板削上一寸五分、標生一寸五分內外總紙張、

御槨　外法長五尺五寸、同幅四尺五分、同高四尺六寸三分、但此內御蓋車五寸五分計目方合貳百九拾六貫目餘、

非常御手當御轅寸法　內法長六尺、同幅四尺餘、長柄長サ一丈七尺、橫長柄一丈三尺餘、宇子木數本枕共、

〔大江俊矩記〕寬政十二年四月十二日甲午、御入棺〇溫仁親王儀有之、〇中略

一御棺三重也、二重ハ於御小書院奉納之、御臥棺也、

一大棺ノ大サ、長凡七尺許、幅凡四尺許、高亦凡四尺許、

作尺各目分量也、非憶聞之、仍加凡字、以下倣之、

一大棺之內、四方上下塗瀝青、其厚凡一寸五分許、板ノ厚亦凡一寸五分許、

一爲之內無瀝青、板厚似大棺、其大可推知、

一爲大棺共、有前上之兩字、御入棺以前、妙法院眞仁法親王御染筆也、御椑亦被書此兩字歟、依有覆不寫之、

〔日本書紀二十二推古〕二十一年十二月辛未、皇太子〇聖德召近習先者、謂之曰、先日臥于道飢者、其非凡人、爲必眞人也、遣使令視、於是使者還來之曰、到於墓所而視之、封埋勿動、乃開以見、屍骨既空、唯衣服疊置棺上、

〔元亨釋書十感進〕釋增賀、平安城人、諫議大夫橘恒平之子也、〇中略長保五年六月九日、集徒曰、西方佳期、

今其不遠、即設講筵談論深旨、又令弟子念佛、自入靜室、坐繩牀、誦法華、結金剛印而滅、年八十七、臨終語徒曰、吾歿不須闍毗、只要窆埋、過三年開壙見之、弟子依顧命、作大桶輿殯寺後、後三年十一月、春秀等啓壙、全身不壞、趺坐儼如也、但衣朽弊、

〔榮花物語三十鶴の林〕ついたち(○長元元年十二月)四日、巳時ばかりにぞ、うせさせ給ひぬるやうなる、(○藤原道長、中略、)御棺はなやみそめさせ給し日よりつくらせ給へれば、やがて入棺したてまつりつ、

〔行親朝臣記〕長暦元年八月二日辛未、今日主殿內方逝去、　四日癸酉、今日午四點造棺、(俗諺云、於家中不造云々、)仍占吉方、於藤重寺西邊造之云々、

〔定家朝臣記〕天喜元年六月十一日乙卯、巳刻鷹司殿令薨給、　十五日己未、午刻作御棺、(於辛方作之、西對西廊北頭云々、)

〔殿暦〕永久二年四月四日己酉、巳刻許、陰陽師日時持來、余黙見之、(○中略)造始棺(○藤原師實妻麗子)時午、仍仰行事重仲朝臣、

〔兵範記〕仁安元年九月廿四日甲子、棺(○藤原基實)料板四枚、賜直物令交易、堀川仰左近令造始、寸法長六尺、弘二尺、高一尺六寸、敷物練絹、長六尺三幅五巻、野草衣同絹、長八尺四幅兩巻、(可書眞言梵字、)棺覆生絹、八尺四幅、(平、)黃幡料白生絹一丈、已上取具即調置了、

〔萬松院殿穴太記〕七日辛未、(○天文十九年五月)寅の刻に、穴太の新坊より、むなしき御から(○足利義晴)を、東山慈照寺に出し奉る、桶に入ながら御輿にめさせて、相國寺の力者にかゝせ、御先へは僧衆奉公の輩、同朋なども少々參りたり、(○中略)上野民部大輔信孝、伊勢守貞孝、兩人素服して、玉の御輿を舁出し奉る、(○中略)玉の御輿は、鹿苑院にて、大工塗師唐紙師に至るまで參りつどひて、こよなう造出して、廿一日の朝天に、慈照寺に渡さる、

〔幽齋尊翁御葬禮記〕御葬禮は同十八日(○慶長十五年九月)午の上刻と定りければ、國中はいふ迄も無く、遠

境の寺院、老若男女、袖をつらねて入來る事ひきもきらず、〇中略御龕は四方作り、五色をもて色どり、はくにてみがき、金のかなものを遣ひ、所々を金襴にて包み、玉のやうらくを下げ、風鈴をかけたれば日にかゞやき、風にくわして、粲然たるひゞき耳にみてり、

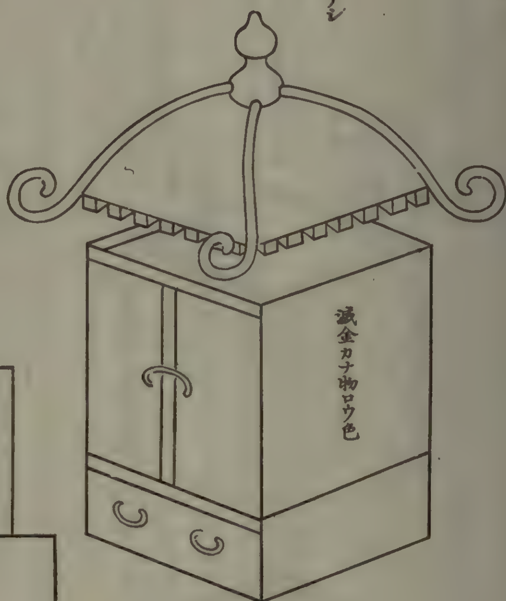
〔鵞峯文集七十四哀悼〕泣血餘滴

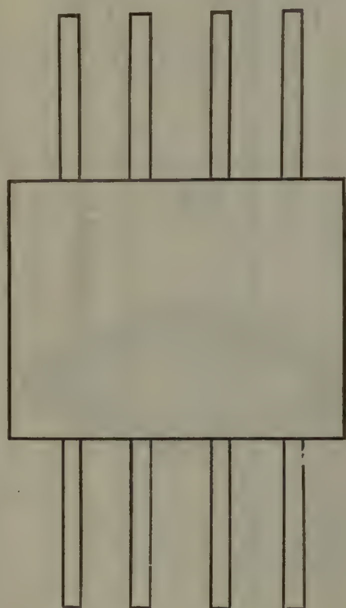
明暦二年丙申三月二日辛巳申酉之交、余〇林春齋母荒川氏諱龜終於寢、三日壬午、今夜棺成、以檜板造之、擇木精密、無孔無節、内外皆塗灰漆、而合板釘穴、皆用瀝青溶瀉之、瀝青者松肪也、板後高一尺三寸、横一尺三寸、前高一尺六寸、横一尺六寸、棺寸尺雖用周尺、然所記於此者、以今尺記之、爲使工匠易解也、古制棺外四隅打鐵鐶、懸索持之、

今按家禮注云、棺制方直、頭大足小、僅取容身云々、然其寸尺長短大小未詳、去年乙未、朝鮮學士石湖李明彬、與春齋筆談曰、棺制上高下低、上廣下狹、其大小從死者之形云々、然則彼國所傳聞中華之制法者可知焉、故今據家禮、併校明彬之言以造之、又按家禮注云、擇木爲棺、油杉爲上、柏次之、土杉爲下、今不用杉柏、用檜者隨時宜、而檜之性亦爲入土中久不朽[illegible]也、想夫擇木要其堅緻、未必決[illegible]何木也、嗚呼棺者葬具之[illegible]要也、不可不盡心者也、

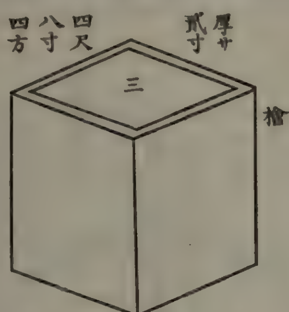
〔快晴紫雲錄〕今十日〇寶暦元年閏六月申ノ上刻、御息所ヨリ、御座敷之内、御車ニテ御棺〇德川吉宗ヲ奉引下、同所御庭ニ而、御用懸リ之御役人、奉受取之、御棺ヲ取立、其ヨリ御行列ニ而、山里御門吹上大道通リ、矢來御門迄之間、疊幅三間通リ敷詰、其上ヲ御棺ヲ奉引、尤表ノ土間ニ、手子鳶ノ者二百人相詰、轆轤ニテ卷上ゲ、矢來御門迄は、公方樣〇德川家重大納言樣〇德川家治及奥女中、御棺ニ奉附添、奥ヨリ矢來御門迄、手子鳶之者頭分廿七人ニテ取直シ、御門外ヨリ上野迄、右二百人ノ鳶之者奉舁之、此内百人計リハ、御駕籠ノ者黑鍬等ノ輕キ御扶持人、又百人ハ御用聞町人願ニテ當日被召抱分ニテ御棺ヲ奉舁、右二百人共ニ、晒帷子一重、淺黄麻上下一具ヅヽ被下置著之、舁棒檜九寸廻リ拾貳筋、所所箱ヘ當リ摺ル所ヘ、銅ノ板ニテ卷キ、舁人無言ニテ、道ノ廻リメ〻〻〻ハ、拍子木ニテ知ラセ候ニ仕候、御尊骸御裝束ニテ納之、ホウレイ綿ヘ朱ヲ交ゼ、此朱ノ入數四斗七升八合、〇中略御出棺途中ニ而、次第ニ重リ、筋違橋御門外ヨリ、舁人不覺息遣ヒ強ク、立上野黑門前、御棺ヲ暫時居置、息ヲ

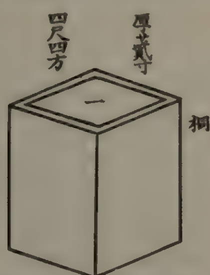
御龕之圖

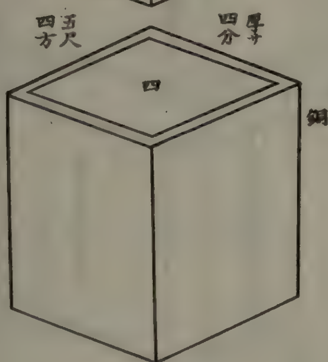


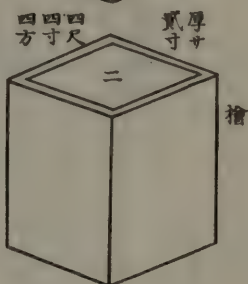


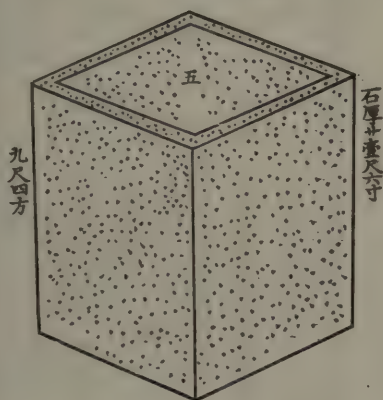
御槨之圖

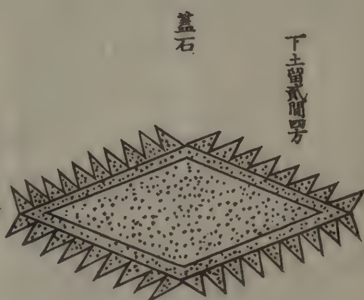

四尺八寸四方
厚サ貳寸
三
檜


四尺四方
厚サ貳寸
一
桐


五尺四方
厚サ四分
四
銅


四尺四寸四方
厚サ貳寸
二
檜


九尺四方
石厚サ壹尺六寸
五


蓋石
下土留貳間四方

休メ、夫ヨリ上野ヘ被爲入、〇中略此外箱槨〇四方ノ間々ヘ、カンスイ石ニ而詰之、但石一ツニ法華經之文字一字ツヽ書之、此石數凡六萬五千餘ニテ詰、此間々ヘ石灰込詰之、〇中略此内ヘ入候黃金拾壹箱、ホウレイ綿六駄、御用ニ而被取寄、〇中略

御石槨蓋石之御銘文

前征夷大將軍右大臣正二位源朝臣吉宗之墓

貞享元年甲子十月二十一日誕生、在位凡三十年、辭職七歲寬延四年辛未〇寶曆元年六月廿日薨、六十八、勅贈太政大臣正一位、賜號有德院、葬于東叡山、　從五位下守大學頭藤原信充拜書

〔大江俊章公卒去之記〕寶曆十二年九月六日、子刻御終焉、　七日、亥半刻、密々ニ御入棺、〇中略御棺者、實ニ壺也、平日依御好如此、底に有七星板、穴七ツアリ、板之下へ灰を入、蓋松、厚一寸三分、内外さん二所あり、おさしぶたにして、さんにておちちやんにてぬる、厚さ五分計、扨納箱、松板、蓋相之物也、書前字、大字、打釘以左繩、紙をまく、十文字に能いる樣にする、わへ、横なわ入、あぶなからぬ樣認、白布の覆をかけ事終、

〔玉峯院凶事之記〕寬政十二年八月十五日、京極宮年寄石見者、〇中略終養生不叶、今日申刻死去也、十六日、申刻密々入棺、棺八分板、内はきめ隅々等瀝青流、むそう蓋、無章

〔言成卿記〕天保十四年五月十日、棺槨輴等造作、幷墓地買得、石塔彫刻等、家公令下知家僕給云々、十二日、今晚亡祖母入棺、棺槨寸尺等可有譜記一件、略之、一寸五分板云々、棺底入石灰、其上ニゲス板アリ、穴七ツアリ、稱七星云々、

〔山陽遺稿三〕阿雪傳

阿雪者、大坂俠女子也、〇中略自撰法名曰正慶、〇中略築室難波村老焉、買一棺懸之門、日會客飲酒、一日胃暑出死街上、市人皆識是正慶也、爭告其家、寄尸平昔所買酒家、而斂以其棺、埋于幽泉寺、得年七十五、

〔忍辱雜記上〕經衫本據

先哲筆記云、良定言、經衫(キヤウカタビラ)中比日本紀州始也、（已上）余問之密宗僧、彼云、吾宗有加持衣覆死尸之修法、乃依神變加持經說也、蓋本出密宗學之顯教歟、依具縛因緣、在其理有云々、私云、經衫文事、余亦有所聞、而近世制度不正、甚至頭巾脚半等書種々文、悉是後人謬作、古法所無也、蓋禪家付爲非法、故呵云、書經文於布衫、名爲經衫、以爲死人之服、非法甚也、儒家者流亦責之、是則由不知內有加持護法之修力、知其一不知其二、俗徒不足斷、余曾作之辨释、如別記、今日經衫、或書經絺綌、（要解）或經帷子、（寶鑑）或經衣（佛事編）也、不空羂索神變眞言經六曰、若有衆生、億劫具造四重五逆十惡等罪、身壞命終、墮阿鼻獄者也、若此亡者、隨其身分屍骸衣服、爲（子登云、唱書二）通眞言者、身影映著、即得解脫、捨所若身、直生淨土、（已上）顯密圓通成佛心要集卷末、供佛利生儀（五臺山道段作）中、擧光明眞言、已子注言或用紙帛等、書此諸眞言、置亡人屍上或骨上、甚妙、故偈云、眞言梵字觸屍骨、亡者即生淨土中、見佛聞法親授記、速證無上大菩提、（已上）大寶樓閣經上曰、若讀若誦、（此陀羅尼）若受持、若佩身上、若書衣中、（乃至）決定當得不退轉無上菩提、（已上）又子登法印、擧密經三文、即明觸屍功德、（佛事編）貞極上人引道理文證、而示經衣利益、（隨文略讀）各據宗儀、並不可舍、

〔鹽尻 四十五〕水府相公久昌寺に被仰出法式

一近世書經文布施、以爲死人之服、名曰經衫、是大訛也、然書于布衫、以纏臭骸、遂至焚燒以爲灰燼、非法之罪、莫斯爲甚、向後堅禁之、

〔榮花物語 二十五 嶺の月〕三月（○萬壽二年）つごもりに、花とともに別させ給ぬ、（○三條后娍子、中略、）やがてその夜に、くわんといふ事せさせ給に、（○中略）入道の君、（○娍子兄相任）御身に、（○娍子遺骸）たふとき事どもかきあつめさせ給、

〔兵範記〕仁安元年九月廿四日甲子、棺（○藤原基實）料板四枚、（○中略）野草衣同絹、（○練絹）長八尺、四幅兩卷、（可書眞言梵字）

〔玉海〕文治四年二月廿二日戊子、先是申刻有入棺事、（○藤原良通）佛嚴上人書野草衣梵字云々、

〔權記〕寬弘八年六月廿五日丁卯、亥四刻御入棺、（○中略、一條、）后宮儲君、又他宮之御形代、各有緣人々、密々

入之例也、

〔類聚雜例〕長元九年四月廿二日庚午、先以申方水御沐浴畢、次御入棺、○後一條 云々、先是仰後院令調薄物薄色御直衣白生絹單重、同御袴入御棺、御冠御錫紵、中宮并一品宮齋院等御阿末加津等同加入、先例兄弟御阿末加津入之、而新帝御阿末加津、依有事憚不入云々、

〔中右記〕大治四年七月十五日辛卯、宮々人形被入御棺○白河云々、新院○鳥羽ハ不被入云々、是子并兄弟ハ必入也、孫者不入之由、陽明門院崩之時被沙汰切、此本院不令入給云々、

〔宗建卿記〕享保十七年八月六日、法皇崩御、靈元院 十一日、仰云、○中略殉葬之事如何、予言上、○中略殉葬之事、於異朝者、秦始皇、多後宮之人殉葬候、我朝垂仁天皇御宇被停止候、雖然以芻靈易之候事由言上了、 十六日、先日被尋下火葬殉葬之事、私考内々獻之了、

〔定家朝臣記〕天喜元年六月十一日己卯、鷹司殿令甍給、 十五日癸未、今日依仰參京極殿、令作御形代、長七尺計、以紙作比々奈、令著束帶幷冠、作御衣切、

○按ズルニ、後世友引ノ日ニ死タル人、及ビ止ムヲ得ズシテ友引ノ日ニ葬ル時ハ、棺中ニ人形ヲ入ルヽ事アリ、理齋隨筆ニ、今の俗、人死して七日の中に丑寅の日あれば、友を引とて、小き人形を七ツ埋めて墓所にをさむ、斯して友を引くを除くまじなひとす、是も又殉死の事をまなびし者なるべしトアリ、

〔廣益俗説辨遺編寶貨三十〕六道錢の説
俗間人を葬るとき、金銀錢を棺に入るを六道錢と云ならはす、
今按るに、此事諸佛經にもかつて見えず、漢の世よりこのかたはじまると見えたり、○中略あたら錢貨をわけもなく地中に埋めてすつること、尤なげかはし、○中略かゝる弊習をわきまふる事なきは、學を講ずる者希なるが故なり、

〔骨董雜談中〕六道錢の事

用途

我邦今の俗に、死者の棺中へ六道錢とて錢を納る事有、漢土にも此事あり、歐陽玄が睽車志曰、漢以來、葬者瘞錢、後世里俗、稍以紙寓錢爲鬼事、

〔古今事文類聚續集二十六〕王璵用紙錢

唐王璵、專以祠神位宰相、漢以來葬喪用瘞錢、後世俚俗、稍以紙寓錢爲鬼事、至是璵乃用之、

〔寺社方書〕六道錢之義御觸元文之度御觸書之內

一世上葬禮之節、金銀錢、或ハ六道錢、土中江埋捨候事、無益之儀ニ候、然共俗習之義、急々相止がたく可有之ニ付、其所之寺院より、右無益之道理、寄々旦方共へ說聞セ、向後土中へ埋候事、相止させ候積り、

右之通、町々へ申聞セ、相止させ候樣可心得候、

四月

〇按ズルニ、寬保二年四月亦此令アリ、

〔好古日錄末〕假貸喪具

京師坊間喪具ヲ貸ス、衣服器用立ニ辨備スベシ、兩京新記ニ、次南曰豐邑坊、南街西通焉平門、此坊多假貸方相送喪之具ト、古今異域同情ナラズヤ、

〔續日本後紀九仁明〕承和七年五月癸未、後太上天皇〇淳和崩于淳和院、〇中略以絹五百匹、細布百端、調布千端、商布二千端、錢五百貫、鐵八十廷、鍬二百口、白米百斛、黑米百斛奉宛御葬料、發五畿內及近江丹波等國夫一千五百人以供御葬所、

〔續日本後紀十二仁明〕承和九年七月丁未、太上天皇〇嵯峨崩于嵯峨院、戊申、以商布二千段、錢一千貫文奉充御葬料、卽日御葬畢、

〔三代實錄三十八陽成〕元慶四年十二月四日癸未、太上天皇〇淸和崩於圓覺寺、五日甲申、以大藏省商布

二千段、貞觀錢一百貫文、奉レ進二圓覺寺一、

〔和長卿記〕明應九年十一月一日壬子、傳聞御葬禮〇後土御門之儀、用脚未二到來一之間、無二定日一云々、　七日戊午、西入道、自二江州一爲二御燒香一上洛、〇中略於二勾當局一有二盃酌之事一、于レ時凶事傳奏甘露寺中納言參會、御葬禮之日次事、今日武家奉行松田豐前守、齋藤遠江守等、用脚萬疋下二行寺家一云々、寺官有下請二取狀一之由被レ申之間、明日御衰日也、仍只今日取レ之事、仰二陰陽寮一之由也、卽勘文持二參之一、來十一日戊刻云々、勾當卽被二披露一了、　八日己未、今日泉涌寺葬場殿爲二見物一人々同道、寺家之儀、尤嚴重、寺家粉骨之至極也、武家用脚只一萬疋下行云々、寺家之難レ治、不レ堪二推察一、正長度稱光院二萬疋也、猶以最少之儀、不レ可レ然之由有二沙汰一歟、今度猶折中、尤愁傷、

〔諸家系圖纂二十九下宮神系圖〕佐々木宮神主

敦實親王三世之孫、從四位下成頼、始住二近江國一、主二佐々木宮神事一、自レ是子孫世々號二佐々木一、〇中略佐佐木家、賜二菊御紋一、　清原記、人王百四代後土御門院、明應九年九月廿八日崩御、于レ時禁闕殊外依二御不如意一、御葬送延引之處、佐々木高頼朝臣、奉レ調二進其料一、太子勝仁親王感二其至忠一、賜二菊桐御紋幷後光嚴院宸筆三略秘鈔一、加レ之聽二昇殿一、

〔宣順卿記〕承應三年十月十五日、今夜御葬禮也、〇後光明、中略抑天子崩御之時、近代早定二院號一、以二洞中之分一被レ行二葬送禮一也、爲二天子之分一時、大營難レ被レ行故也、依二洞中之分一、廳以下輩供奉、〇中略御葬禮已下御百ケ日迄下行、自二大樹一御沙汰也、雜用之沙汰人小川藤左衞門、

〔源常顯記〕文化十二年五月廿八日戊午、來月二日巳刻御凶事〇後櫻町院御葬下行米、於二二條御藏一相渡候間、受取人可レ差出一、尤前日印鑑可二差出一、從二出納青侍一申來、　六月一日庚申、明日下行米出ルニ付、家來印鑑爲レ持遣二於出納一、　二日辛酉、去冬山頭使下行米三石、今日於二二條御藏一被二渡拜領一了、尤如レ例家來木村矢柄印形持參受取了、

〔弘化諒闇記下〕御下行之事〇仁孝御葬事

一米三百石臺所　一同百石下僧下人　一同貳拾石當分掃除　一錢七百七拾六貫文臺所　一銀三百貳拾文僧中御布施　一貳千貳百拾六貫文諸僧行者分　一五拾貫文肝煎役者加布施　一拾壹貫文殿中導　一三拾貫文同下僧百四十人詰僧　一銀百枚御塔供養御下行　一米三百石御百ヶ日御下行　一錢三百貫文右同斷

〆米七百貳拾石但常時相場　銀四百貳拾枚　錢三千六百七拾七貫文但常時相場　右金高合

一山科家へ御裝束料御布施渡候上、於泉山相渡候御例也、雜色請取ニ被參候、

一力者六十人之儀者、從往古御下行百貳拾石、於泉涌寺御渡被成候、右請求ニ參候節、長吏宮ヨリ御副使者罷越候、力者之長竹王、竹徳、兩人之法師、帶刀罷越候、尤寺院相濟候上、右副使兩人呼出シ御渡被成候事、

〔親信卿記〕天祿三年十月八日甲子、巳刻許、乳母右京死去、送東故右京亮平野茂木女也、　十一日丁卯、葬送、此間事、不付松筭上人令送、行錢米等、

〔駒井日記〕文祿四年四月廿三日寅、秀保樣〇羽柴秀長男、中略、御葬禮來廿八日相定候、〇中略

一葬禮五十日迄の御中院共共御具付、金子六拾枚之分也、

〔家世實紀二十〕寛文十二年十二月十九日、土津樣〇保科正之御逝去、〇中略

延寶元年三月廿七日、土津樣御尊骸、見禰山へ御葬送、　十月十一日、御墳之御普請皆出來に相成申候、

此御入用之米金、寛文十二年十二月より、延寶元年十月迄、三千四百九十三兩壹分、米千八百八十五俵、人夫拾三萬貳千八百五十一人相懸り申候、

〔甲子夜話續編十〕仙臺侯、近頃打續キ主人不幸ナリ、某和尚ノ語リシハ、イツモ國元ヘ歸葬アリ、其トキコノ都ヨリ彼ノ領邑マデノ道中ニ在ル橋々、大小五十一アルヲ皆々掛ケカユル舊例ニテ、ソノ橋ヲ掛替ザルハ、其側ニ別ニ橋ヲカクルコトヽゾ、大造ナルコトナリ、歸葬ノ入目、例七萬兩ト云フ、

〔秦山集雜著甲乙錄二〕重遠曰、神代卷、有奧津棄戸之語、因有往吉我國庶民水葬、素尊用枝棺水葬止之說、恐非也、奧津只言遠處耳、非必言海也、萬葉集、墓謂於幾津起(オキツキ)、字作奧槨、又作奧城、豈遠野築埋之義歟、册尊葬有馬村、天稚彥葬美濃國、皆非水葬也、人傳出雲國造自古水葬、蓋遠鄙一種卑賤之俗、非必往古之習也、○中略出雲國造、死棄於海中、當入職人、神豫託言之、皆在其族人、罷職退而死、繼職人無服忌、是太古法也、故傳云、出雲國造振古不死焉、

〔續視聽草初集九〕神祇伯家葬送古圖

神代卷下に、天稚彥を鳥に準じて葬禮する時は、ゝき持といふものあり、葬喪記には最後には、ゝき持行とあり、古を考るに、上人は埋め、下々は水葬と見えたり、土葬の時、まきを以て棺をつくる、朱を以てつめる事唐流也、下々は皆炭を以て粉にしてつめるなり、綿にてもつめる、神代に綿つくりと云物をこしらへ、蓋をしめ、みな炭を以つめる、石を置て土をませる也、拐松を植る也、後えるしの石を立るは、佛法による也、唐流也、雲首牌は明の世の神主なり、是は上に雲の形あり、葬禮儀式は、先は、ゝき持族をつくり、女につれたる緣のものを先へ立る男計なり、女出ず、次こ檜の棺井手をつくる、=○=此棒を井手と云、悲しみの歌をうたふは、佛法渡りて後の事也、輿腋には同姪也、三位以上は簇じるしを持す、三本の一本は父方の筋目、一本は一生の行跡、一本は何の病にて死て、何方へ葬るといふ事を書、輿の跡より臈男かたへつりたる一ツ也、最後になき女をつる

る、其次は、ゝき持也、拐葬の出る内は不穢るといふは日本流なり、生たる者の如し、膳を供ずる也、死人になりかはりて、其供へものを喰をものまさといふ也、

〔秦山集甲乙錄六雜著〕葬有綏靖帝之法、孝德帝難用西土之法、吾道衰矣、

〔南留別志五〕今を見れば、古の葬には鼓角を用ゐたり、三代實錄には方相の事有、僧をば借らぬやうなり、

〔隨意錄二〕辛酉秋、紀平洲卒、平洲素號如來先生、予〇冢田虎亦會其葬、衆僧行佛事、且老僧對柩引導之曰、我授與汝一句、乃唱成佛之句、予竊謂、此先生夙既得如來號、而覺道者也、豈今而受凡僧之一句乎、

〔隨意錄八〕君上有喪事、則國中禁聲音之事、其日數有等殺、然僧家葬祭、皆鳴鐃鈸、諷梵唄、或奏樂者何也、〇中略我方之俗、則鐃鈸之器不知是胡物也、偏以爲佛之事、而信之者亦可笑也、

〔鹽尻四十二〕孝德天皇詔りして、凡そ死せる者の髮を剃、所々猥に埋むる事を禁せられしも、末世には知る人なし、

賢按今の庶人悉く剃髮させる事は、切支丹御吟味已來、浮屠氏の手に渡り宗旨改の掟より旦那寺髮剃といふ事始しよし、其以前は百姓共、村はづれの入會の地へ穴を堀、同穴とて一所に葬し事也、尤銘々墓印の石牌等もなし、板佛といふことのあれども、是も上へ建るものにてなし、埋候上へ入て土中へ埋る事也、

〔續日本後紀九仁明〕承和七年五月癸未、後太上天皇〇淳和崩於淳和院、〇中略是日於建禮門南庭放弃鷹鷂籠中小鳥等、

〔續日本後紀十二仁明〕承和九年七月丁未、太上天皇〇嵯峨崩于嵯峨院、〇中略放弃主鷹司鷹犬及籠中小鳥、

〔日本紀略淳和〕天長七年七月戊寅、大納言正三位良岑朝臣安世薨、贈從二位、太上天皇製挽歌二篇、

〔榮花物語月宴一〕ときどきにつけてかはりゆく程に月日も過て、康保四年になりぬ、月比うち〇村上

にれいならずなやましげにおぼしめして御物忌などしげし、○中略されどつひに五月廿五日にうせ給ぬ、東宮○冷泉くらゐにつかせ給、哀にかなしきことたとへんかたなし、めでたうてりかゞやきたる月日のおもてに、むら雲のにはかにいできておほひたるにこそにたれ、又こゝのへのうちはさもし火をかいけちたるやうにもあり、あさましういみじともよのつね也、こゝらの殿上人上達部たち、あしてをまどはかしたり、我きみの御やうなる君にはいまはあひたてまつりなむや、われもおくれたてまつらじ〳〵とあしずりをしつゝ、ぞなき給、春宮の御事、まださもかくもなきに、よの人みな心々に思さだめたるもおかし、おとゞはみなしりておはすめるものをと、よろづ御のちの事どもいといみじ、御さうそうの夜はつかさめしありて、百官をそしかへしてこのみちかのみちとあかちあてさせたまふに、つねのつかさめしはよろこびこそありしか、これはみななみだをながすもげにゆゝしくかなしうなん見えける、いづれの殿上人上達部かはのこらんとする、數をつくしてつかうまつり給ふ、殿上には人たゞすこしぞとまれる、村上といふ所にぞおはしまさせける、その程の有さまいはんかたなし、夏夜もはかなくあけぬれば、みなかへり參りぬ、いみじけれども、おりゐのみかどの御ことはたゞ人のやうにこそありけれ、これはいと〳〵めづらかなる見ものにこそ世人申おもひける、そのゝちつぎ〳〵の御ことゞもいみじうめでたき御事と申せども、おなじ樣にて月日もすぎぬ、宮々御かた〴〵のすみぞめぞもあはれにかなし、おなじ諒闇なれど、これはいと〳〵おどろ〳〵しければ、たゞ一天下の人からすのやう也、よもやまのしゐしばのこらじと見ゆるも哀になん、

〔基量卿記〕貞享二年二月廿二日、只今御事切○後西院之由也、　廿四日、依仰以清閑大納言、有栖川宮、平松前中納言等へ相尋條々、○中略

一御寺之儀ハ、御遺言無之歟之事、

同申無之由、是ハ不及尋、内々有子細所存之趣、兩傳ヘ申入由清閑寺申之、

此次清閑寺大納言窺申、○中略

一御大刀御車ヘ被入事、後水尾院時不被入、後光明院之時被入候、此度如何、

仰云、於後水尾院者、爲御落飾、於御俗體者、可被入事也、此度勿論之事也、

〔言成卿記〕天保十一年十二月十二日、就故院○光格御葬送、親王相公令參院給、右爲陪膳未半刻可參院云々、○中略且陪膳、相○相上下恐有脱字朝臣、予、大宮少將、兵部大輔、葉室侍從等云々、則御請申入了、　廿日、參故院、就御葬送、親王丞相御參、御陪膳御雇也、○中略頃之王公各賜御料理也、祇候雲客幷予以下御留守、兩朝臣等相父陪膳奉仕、頗繁多奔走如雷電、混雜難謄、晡時供奉王卿朝臣各下殿云々、酉半刻比御出車、○中略戌刻比、殿下以下王公各御退出也、陪膳御雇退出之事、○中略御留守右衞門督已下月卿雲客五輩、已被詰候、御出車後、昇殿之後、於祇候所、右衞門督已下、至予饗御料理拜領、依勝手御出車後拜領了一汁五菜也、御菓子羊羹五切其後御菓子硯蓋盛一蓋、從御内儀表使持出、從大宮御所陪膳予已下四輩ヘ恩賜云々、畏存之旨、以表使御便宜ニ御禮宜可言上、予爲總代申入了、分配拜領了云々、

〔仲資王記〕建永二年○承元元年七月廿八日壬寅、姬宮御氣色絶了、予即招藥上聖人、爲戒師出家了、　廿九日癸卯、裹書云、曉天奉渡大谷堂了、御車如例、聊依密儀也、○中略小人御事、不似普通例歟之由、法印行舜被計也、然間□□息小僧三人祇候北首御所、可奉訪後御菩提也、七歳以前、無葬禮無佛事故也、普通之例、納袋墮山野了、而此事者悲歎之餘、奉案置東山堂了、　八月四日丁未、□覺朝僧都訪來、其次云、七々御佛事不可有歟、然而猶可被尋親範卿入道歟、□□事由猶前齋宮御方次女房高倉被入道外孫也内々被尋遣之處、七歳以前、葬禮幷七々御佛事、無先例之由所被申也、

裹書云　今夕被尋民部卿入道親範卿之處、七歳以前無葬禮幷七々御佛事之由所被申也、鳥羽院御時、自宮○通仁親王四歳有此御事、□納袋置東山、無御佛事云々、又前白河院御時、□□院春宮有御陵仁

(和寺四院、實仁親王)○七歲崩御、其度御佛事有無之條、猶被問公卿、依爲春宮、有七々御佛事云々、凡七歲已前被行之儀者、口傍親有其恐事歟云々、仍明日初七日也、自本思惟之上、御佛事彌不可有歟之由下知了、密々念佛有何事哉、例時懺法不可然歟、但被始之後、可止之由又難申歟云々、自本無籠僧之儀、予息三人令祗候、其中阿闍梨二人者、日來御看病、三人小僧、參加奉沙汰計也、

〔左經記〕長元七年九月十六日壬寅、巳刻許、頭中殿被光臨、相示云、右武衛蒙恩之後、此兩三日神心相違、時々反亘、今朝俄以薨、彼家中悲歎無限、先日卒死長女未葬、在彼家、在此事、如此之時以誰先可葬乎、答云、未見聞事也、悲之又悲也、頃之被歸去了、　廿一日丁未、今夜故右兵衛督、葬香隆寺邊、幷其女子葬大谷寺邊云々、女子事、漏刻博士公信、武衛存日約束勤仕、武衛事、陰陽允行國勤仕之、父子同日葬送、未見未聞之事也、但女子兼日持到大谷寺云々、

〔吾妻鏡二十四〕建保七年(○承久元年)正月廿八日己丑、戌刻將軍家(○源實朝)奉葬于勝長壽院之傍、去夜不知御首在所、五體不具也、依有其憚、以昨日所給公氏御鬢、用御頭奉入棺云云、

〔基量卿記〕元祿六年二月十二日、御神事之內、去比大炊御門前大納言(○經光)室死去之間、一昨日令葬送、行列等旗天蓋等令立也、源中令引導、內侍所前經過、甚以不可然由武家申之、此儀又如何、珍事珍事、　三月廿一日、傳聞大炊御門右大臣(○經光)喪、依不遠慮事籠居、武家計申云々、閉門之由也、

〔全國民事慣例類集(葬埋)〕杵築町ハ、神地タルヲ以テ、市街中公ケニ死人ヲ舁行スルコトヲ禁ズ、依テ死者ヲ駕籠ニ入レ、病人ノ名義ニテ檀那寺ヘ連レ行キ、然シテ沐浴シ葬式ヲ行フコトナリ、依テ大概取急ギ、二日位ニハ埋葬スル例ナリ、(出雲國神門郡)

宇佐神領ハ致祭(春秋ニ七日間ヅヽノ祭)中ハ葬式スルヲ許サズ、斂棺シテ家ニ留ル法ナリ、(豐前國宇佐郡)

〔江家次第(十四踐祚)〕卽位

后宮出車事

或云、在五中將、○在原業平爲嫁作后○清和后高子出家、相構其後爲生髮到陸奧國、向八十島、求小野小町尸、夜宿作島、終夜有聲、曰秋風之吹仁付天毛、阿那目阿那目、後朝求之、髑髏目中有野蕨薇、在五中將涕泣曰、小野止波不成、薄生計里、即斂葬、

〔羽尾記〕海野能登守ハ、○中略ソノ年○天正七年十二月晦日夕方、ジアイノ少女死セリ、シカラバ僕從ヲシテ寺ニ送ラントス、然共攝津守、大手ノ門ニカド松タテ、歲末ノ祝ノ折カラナレバ、門番ノ者ドモ是ヲ見テ、アナイマ〳〵シノ事カナ、サル者ヲバ門松ノ内ヲバ通スマジト散々ニノヽシリケル、從者通レズ空シクカヘリ、主人ニ斯ト告ケル、能登守、元來心タケク短兵ナル者ナレバ、キクヨリ早腹ヲ立、ナンジヤウ通レヌ事カアラン、サラバ我送ラント彼屍ヲ懷中ニオシ入レ、カケ走リ大手ノ門ニ行向ヒ、カドマツヲハタトニランデ、高聲ニ曰、コノ門松アレバ、染死人ヲバ通サヌ、カクテ六ツカシキ松ヲトリノケンニハシカジトテ、散々ニ引破リ投捨ケル、番ノ者ドモ、能登守ガ勢ニ恐レ伏テトホシケル、

〔秦山集雜著甲乙錄一〕伊勢鴨用被棺、坐而如生、衣裳隨生時官位、○中略三公棺內、吉服衣冠束帶、坐如常、束棺不開、然後入寺、入寺之後、僧徒行事、此當時所聞也、

〔秦山集雜著甲乙錄二〕伊勢長官死、其送葬經日、故七日御饌不上、

〔秦山集雜著甲乙錄八〕親黨葬法、雖佛有職存焉、故數十代子孫繁昌、近代破乃祖之法、用浮屠厚葬、而今西本願寺無子、養鷹司家之子、職傳、所說無不驗焉、

〔殿曆〕永久二年四月十七日壬戌、亡者有家時、無家中掃除、又有家中人不沐浴、

〔幸充日次記〕享保四年正月九日壬午、禁裏御葬送之節、○中略御路次所々ニ而不問語ト云事有、泉涌寺出家御車後乘、此何所抔中也、香點燒、中々騒儀之事也云々、土御門家不聞許被勸由、往年聞之、然共泉涌寺僧正說云々、依之常々不問者不許云便謗歟、

〔寶石類書百二十二喪葬〕御車牛ヒキカヘ不可用

守覺法親王記、御ヒキカヘモチキヌ事也、トホキトコロナレドモ、ヒトツウシニテヒキカヘハセヌナリ、スベテナニゴトヲモ二タビセヌナリ、

〔南留別志 四〕體矢とて冥途の見やげに持行く物なりといふは、子路が纓を結べる心なるべし、

〔倭名類聚抄 十四 葬送具〕琀　唐韻云、琀〈胡紺反〉玉送終口中玉也、

〔日本書紀通證 三十 孝德〕飯含無以珠玉〈飯含見後漢梁商傳、註口實也、唐韻含玉送終口中玉也、文公家禮飯含註、以匙抄米實于尸口之右、幷實一錢、又於左於中亦如是、〉

〔箋註倭名類聚抄 六 葬送具〕廣韻作琀、送死口中玉、按含玉見周禮大宰及典瑞賦、說文、琀、送死口中玉也、玉篇、送終口中玉也、孫氏蓋依之、釋名、含以珠具含其口中也、按孝德紀詔曰、含無以珠玉、然是詔全用魏文帝終制、則知史家潤色、其實皇國無有是制、源君擧之恐誤、

〔倭名類聚抄 十四 葬送具〕門燎　周禮云、喪設門燎、〈力弔反、俗云門火、〉　顏氏家訓云、喪出之日、門前燃火、

〔箋註倭名類聚抄 六 葬送具〕門燎　周禮云、喪設門燎、〈冢宰之屬、閽人職云、大祭祀喪紀之事設門燎、此所引蓋是、〉　顏氏家訓云、喪出之日、門前燃火、〈所引風操篇文、按顏氏所言、拘忌者、遇喪厭勝術耳、源君引之、爲送葬之門燎者誤、〉

〔艸山集 十 佛事〕爲尊中起龕

乘此寶乘、直至道場、遠觀法界、別無方、此土從來常寂光、雲起太虛何處去、滿池明月自淸涼、尊中子未後唱曰、妙法蓮華無來無去、仍詳此句以餞行裝、

爲宜翁起龕擧火

百念灰冷、一身雲輕、不動而動、無明卽明、白牛行處、大道坦平、宜翁去來、寶處在近、此是化城耳、便引行擧火把云、脫俗十歲、隨我逍遙、志深蒼海、氣高雲霄、行業三學、生涯一瓢、不遺夕死之恨、猶喜聞道之朝、四土風光寸心具、五百險難一步超、以火把打圓相云、宜翁上座、還看這圓融無礙之相、麼火不能燒、水不能漂、

眞珠童子掩土

掌中眞珠、夢裏空花、等閑弄來、埋₌此烟霞₋、渾然美玉、不₌勞₋琢磨₋、是法住₌法位₋、薩達磨分陀利伽、

〔豐永郷葬事略記〕土佐國長岡郡豐永の郷は、方十里計りの最も嶮しき山里なるが、土人病に罹り、〇中略命盡て死するに至れば、身近きもの、死人の枕を蹴外し、少しく寢所を移せり、扨墓を定むるに、彼蹴外したる枕を持行て、爰ぞと思ふ所に彼の枕を居ゑ置、地神樣より七尺四面買取申とて、錢四文を四方に投て定むるなり、是地神を穢さぬ爲なりといふ、夫より墓を堀る事常のごとく、扨石取りといふもの有りて、棺のうへに覆べき大石をとる也、其墓堀り又石取りにも饗應あり、死人の裝ひ、大方高知近邊更ることなく、棺に納る時、身近きもの死人に向ひ、普請をするぞよ、相普請ではないぞよといひかくるなり、是をいはざれば、其年家作はもとより、葺替造作、田地開發などの類いさゝかもならずとせり、棺は桶もあり、四角なる座棺もあり、六角八角おもひ〳〵にて、又常の如き伏棺もたま〳〵はあれども、多くは臺なく垂て舁なり、或は五色などの紙にては飾もあり、上に著物など覆へるを、他所にては出棺の時、身近き女取納る事なるが、此郷にては墓所まで覆ひ行く、棺を家より出すには、かならず戸尻より出すなり、抑外所にては其家の坪にて列を立て、棺を舁き三度ばかり其坪を廻る事なるが、此郷にては棺をば坪中へ居ゑ置て、携はれる人其棺を廻るなり、扨位牌持花籠幡天蓋など、他所に異なる事なし、鉦打といふもの有て、鉦を叩き行く、棺舁二人を本役とて、身近きもの、又は名の子筆の子（名の子とは、名を付てやりたるもの也、筆の子とは、初褌を贈りたる子なり、ともに前里に契約子といふものゝ如し、）などいふものゝ役なり、皆紙にて作る梵字を書たる額付け札なす、是を額守りといふ、此本役當り前の者なれば、たとへ三ッ五ッばかりの小兒にても又女にても備はるなり、少しく肩を入るれば、脇より介錯して行事なり、次に靈供物とて、握飯を持行もの有、水持とて水を持行者あり、ともに身近き女の役也、又弓持といふものありて、竹の弓矢を携へて付

添ひゆく、墓所に至れば、かの水持は跡にさがり扣へゐるなり、棺を納るとき、彼弓持、覆ひ來し著物を弓の先にかけてとり除け穴に納め、かの大石を其上に直す、これ棺朽ても上の引けざるやうに拵へたるもの也、夫より杖笠を置事などは常のごとくなるが、彼枕をも上に居置なり、此時水を手向かくるとて、彼水持人をしてよびよするなり、常に水汲をば呼ばざるもの也といふは、此事なりといへり、扨埋葬いまだ終らざるうち、彼の弓持一番に立還り、家に至り大音にて、宿借り申さうと言入るゝなり、其時留守居のもの內より、三日跡に人質を取られて、宿借す事は出來申さぬと答ふれば、又弓持、然らば艮鬼門の方へ世直り中直りの弓を引うといひつゝ、矢を番ひて家の棟を射るとし、弓も蹈折りて投げ越すなり、扨墓所に行たるもの追々に立還り、かねて設け置たる、ごまぜといふものをまたげ、箕の先より米を取り喰ふなど、前里も同じ事なるが、是よりかならず門と口の柱を廻りて內に入り、燒香念佛などしてかへる、此念佛は家の清めにする事也ともいへり、

〔鹽尻　五十三〕神代卷、有伊弉冊尊神退之後、諾尊至海濱、灑去身之濁穢之事、說者徒知爲我國祓禊之起原、而似忘我國葬事之故、謹按魏志倭人死已葬、則擧家詣水中澡浴、似練沐云々、晉書亦謂之云、已葬擧家入水、澡浴身潔、以除不祥、是實合我故、知我古俗皆如此、故傳云、諾尊始祓除、以此見之、則諾尊投杖投帶投衣等、亦我古俗、葬事畢則舍衣帶及杖履故事也、今世會葬之人、脫草履者、其遺風也、

〔雍州府志　六　土產〕齒牙藥

凡本朝京師邊有五三昧、主土葬及火葬之者、是稱御坊、此事始僧徒勤之、倭俗僧謂御坊、近世僧徒使葬場之土人爲之、故今雖束髮人、又稱御坊、

〔玉川砂利〕上野の御本坊にても院々にても、正月の重詰は、牛蒡、豆、款冬、芹、荒和布なり、これは御坊にまめで富貴せり、あらめでたやといふ事なりとぞ、浪花にて平日に荒和布を食はず、送葬の跡に

て食ふなり、これもあらめでたといふ事となん、跡を祝ふ心なり、

〔花徑樵話 地六十六〕竹杖挂瘞上

吾奥州仙臺封內、及ビ伊達信夫ノ諸縣ヲ始メ所々ニテ、新葬ノ墓上ニ竹ヲ立ツ、コハ埋葬ノ刻、先棺上ニ立テ、後土ヲ覆フナリ、然レドモ何ノ爲ニスルトイフコトヲ知ル者ナシ、諸國又〻然リ、樋軒偶記卷三ニ云、藩制〈○水戸〉三日ヲ過テ葬ル、古禮ニ比スレバ甚ダ速ナリト云ヘドモ、世ノ朝ニ死テタニ葬ルモノニ比スル時ハ頗緩ナリ、凡ソ人死テ三日ノ間ハ、蘇生スベキ理アリ、故ニ三日ノ間ハ葬ルベカラズト義公〈○徳川光圀〉仰アリシト云〈○中略〉故ニ三日ヲ過テ葬ル事ナリ、小鶴村如意輪寺ノ住僧曾テ語リシハ、人死テ速ニ葬ル、萬一土中ニ再生スルアランニハ、可哀ノ甚シキ事ナリ、故ニ窆棺シテ上ニ節空ノ竹ヲ立テヽ埋メ、寺僧ハ夫ヨリ三日ノ間墓前ニ讀經シ、節ヌキノ竹ニ耳ヲ當テヽ、若シ生息スルヤ否ヲ聞クベシト師ノ僧ヨリ傳ヘタリ、父母ノ墓ヲ拜セルモ同意ナリ、然ルニ今ハ竹ヲ立ルト雖、節ヲヌカズ、何故ニ立ルト云ヲ知ル人ナシ、可悲事ナリト云ヘリ、トアルニテ其蘇生ヲ知ル爲ノ物ナルコトヲ見ルベキナリ、何トゾ此風俗ヲ再興シ、且水戸藩ノ制ニ倣テ、三日ノ緩アリタキモノナリ、〈○中略〉偶記ニ又云、予ガ所管ノ民、葬埋ノ禮ニ薄ク、只念佛供養僧ノミヲ以テ亡者ノ追善トス、墓地甚ダ狹クシテ、人ノ墳ヲ發テ葬ルモノアリ、骸骨累々トシテ、一穴幾人ヲ葬ルト云ヲ知ラザルニ至ル、予甚ダ是ヲ悲ミ、數年前、新ニ墓地ヲ授ケ、如此ノ惡俗、牛馬ノ屍ヲ捨ルト齊シキ事有マジキ旨ヲ敎ユ、近時見ルニ、予ガ巡行スルトキ、路傍ニ墳墓アレバ皆掃洒シテアリ、僻地樸俗ノ化シ易キ事如此、若シ善人アリテ是ヲ敎ヘバ、一變シテ道ニ至ルト云モ難カルマジキニヤト云コトモアリ、實ニ風俗ヲ移易スハ、君子ノ難ンズル所ナリ、小宮山氏ガ功、豈少々ト云フベケンヤ、

〔全國民事慣例類集 葬埋〕村方ハ講仲間ト號スル者アリテ、互ニ葬埋一切ノ事ヲ營ミ、中ニ就テ

月番ヲ立テ、奉行ト號スル役アリテ、萬端ノ指令ヲ爲シ、何人ト云ヘドモ其指令ニ違フ能ハズ、葬送ニハ、近親ノ者柩ヲ擔舁スルコトナリ、葬埋ハ丑寅ノ日ヲ忌ム、故ニ時日ノ定メナシ、然レドモ多クハ翌日葬埋スル例ナリ、出棺ノ後三日ノ拂ト號シ、神主山伏ヲ招キ、祓除セシム、此日仲間ヲ招キ饗スルコト定例ナリ、(駿河國安倍郡、有渡郡、)

三原郡千草組(七箇村アリ)ノ舊習ニ、大陰暦十二月晦日ヨリ正月三箇日迄ハ、死者アレドモ葬埋ヲ爲サズ、遺骸ハ沐浴式ヲ行ヒ、棺槨(寢桶ノ二種ヲ用ユ)ニ斂メ、地切レト唱ヘ、細引或ハ縄等ヲ以テ屋梁ニ釣リ置クコトナリ、地切レトハ、既ニ葬埋セシ意ナリ、即今ハ深夜ニ假埋メヲ取行フコトヽナレリ、(淡路國三原郡)

〔非火葬論〕父母にてもあれ、兄弟妻子にてもあれ、息のかよふほどは誠にすきまの風をもいとひ、此をなで、かしこをさすりて看病せしも、其息のたゆるや否や、支體の冷るをまたず、あらく／＼しくもてあつかひ、牛蒡大根を洗ふが如く、膚も破るゝばかりすり洗ひ、極寒の比にても、ぬれ身に其まゝ薄き帷子一重をきせて棺の中へ推入れ、ぬれ髪を亂れながら剃こぼち、布にて首をつゝみ、乞食の持ぬるやうなる布袋を頸にかけさせ、くゝめ縄とやらんを足よりくびにかけ、重罪人の如くきびしくからめて、棺の中に蹲らせたるありさま、見るも中々うとましげなり、

古事類苑

禮式部二十三

天皇服喪上

古事類苑

禮式部二十三

天皇服喪上

天皇ノ喪ニ遭ヒタマフ時、有服一等二等ノ親(傍親ヲ除ク)及ビ外祖父母ノ爲ニハ錫紵ヲ服シタマフ、錫紵ハ淺黑ノ細布ナリ、其餘有服四等以上ノ親ノ爲ニハ帛衣ヲ除キテ用キタマハズ、三位以上ノ職事官、及ビ散一位ニ於ケルモ亦同ジ、又廢朝ノ事アリテ、親疏貴賤ニ從ヒテ三日一日ノ差アリ、是ハ令ニ載セタル所ナレド、之ヲ歷史ニ徵スルニ往々此制ニ遵ハザルモノアリ、其事ノ疑似ニ涉リ、決シ難キコトアルトキハ、諸道ニ命ジテ勘文ヲ進ラシメ、大臣以下故事ニ明ナルモノヲ集メ議定セシム、而シテ天皇服喪ノ中ニ於テ特ニ重キモノヲ諒闇トス、諒闇或ハ亮陰ニ作ル、信默ノ意ニシテ謹愼ノ謂ナリ、蓋シ諒闇ノ字ハ綏靖天皇紀ニ始メテ見エテ、爾來皇考ノ爲ニシタマヒシアリ、桓武天皇ノ光仁天皇ニ於ケル、朱雀天皇ノ醍醐天皇ニ於ケルガ如キ是ナリ、皇妣ノ爲ニシタマヒシアリ、村上天皇ノ母后藤原穩子ニ於ケル、後奈良天皇ノ御生母藤原藤子ニ於ケルガ如キ是レナリ、皇祖父ノ爲ニシタマヒシアリ、後鳥羽天皇ノ後白河天皇ニ於ケル、後陽成天皇ノ正親町天皇ニ於ケルガ如キ是ナリ、御養父ノ爲ニシタマヒシアリ、仁明天皇ノ淳和天皇ニ於ケル、後花園天皇ノ後小松天皇ニ於ケルガ如キ是レナリ、御准母ノ爲ニシタマヒシアリ、靈元天皇ノ後水尾皇后德川和子ニ於ケルガ如キ是レナリ、皇弟ノ爲ニシタマヒシアリ、後櫻町天皇ノ桃園天皇ノ後ヲ承ケタマ

天皇服喪制

ヒシヲ以テ、父帝ニ擬シタマヒシ如キ是レナリ、而シテ花園天皇ノ皇兄後伏見天皇ノ猶子トナリ、爲ニ諒闇ヲ行ヒタマヒシヲ以テ、皇考伏見天皇ノ爲ニ之ヲ行ヒタマハザリシハ異例ナリ、諒闇ノ例ハ古來此ノ如ク數種アリト雖モ、皆父母ニ於ケル禮ヲ行ヒタマフモノニテ、一朞十三月ノ間服喪シタマフベキナレド、萬機ノ暇ナキニ由リ、日ヲ以テ月ニ易ヘ、錫紵ヲ服シタマフコト十三日ニ止マリ、其餘ノ月日ハ心喪ヲ服シ、一朞ノ後ニ大祓ヲ行フ、是ヲ諒闇ノ終闋トス、而シテ著服ノ間ハ天皇別室ニ御シタマフ、是ヲ倚廬ト云フ、板敷ヲ地上ニ下シ、布帽額ノ蘆簾ヲ垂レ、其御調度ノ如キモ概シテ華飾ヲ撤シ質素ニ從フ、

凡ソ國喪アルトキハ固關警固等ノ事アリ、音奏警蹕ヲ停止シ、神事佛事節日公事ノ如キモ常ニ異ナル事多ク、又侍臣等ニ素服ヲ賜ヒテ喪ニ居ラシムルナリ、要スルニ本篇ハ服紀ニ關聯スルヲ以テ、彼ニ詳ニシテ此ニ省ケルモノアリ、參照スベシ、

〔令義解九喪葬〕凡天皇爲本服二等以上親喪服錫紵、（謂、凡人君即位、服絶傍朞、唯有心喪、故云本服、其三后及皇太子不得絶傍朞、故律除本字也、依儀制令、子爲一等、故稱二等以上、即外祖父母亦同、依同令、皇帝不視事、與二等親同、故其天皇爲考妣、令條無文、依式處分也、錫紵者、細布、即用淺墨染也、）爲三等以下（謂、四等以上、即五等之內、無服親故也、依儀制令、三等親喪、皇帝不視事一日、即四等親喪、雖得視事、而除帛之制、亦一日爲限也、）及諸臣之喪、（謂、儀制令、皇帝不視事是也、）除帛衣、（謂、白練衣、）外通用雜色、

〔令集解四十喪葬〕古記云、本服、謂天皇即位則絶服期、准（○准恐誤字）有心喪之時服錫紵、退則脫耳、錫紵謂黑染之色、若自不臨者不服耳、然案禮天子絶傍朞、今檢令文、本服五月以上、則明令意於高祖父母亦絶服期也、三后亦同、何者、案名例律議親條注云、太皇太后本服七日以上親、皇后本服一月以上親故、但於皇太子者、且特合勘也、問、以文稱本服、何知絶服期也、答、若不絶服期者、文稱臨五月以上服親喪可云、本字不合稱、故絶服期可知也、跡云、天皇絶服之人故稱本服也、穴云、太上天皇亦同也、二等親、謂下條有服紀之節、二等親皆見、其於外祖父母於二等親爲良也、（○中略）古記云、問、諸臣之喪有限以不、答、且可謂五位以上也、一云、案儀制令、右大臣以上、若散一位喪、皇帝不視事三日、百官三位

以上喪、皇帝不視事一日、依此耳、一云、不見限、臨當時廣云耳、

○按ズルニ、喪葬令ニ云フ所ノ本服ハ、儀制令ニ云フ所トハ異ニシテ、傍親ニアラズシテ服アルモノヲ指スニ似タリ、而シテ傍朞ハ原來傍親ニシテ、朞年ノ喪ヲ服スベキモノヲ云ヘルナレド、義解ニ云ヘル所ハ、二等ノ傍親ノ服アルモノヲ指セルナランヽソハ令ノ二等親ハ唐ノ期親、即チ朞年ノ喪ヲ服スベキ親屬ニ當レバナリ、唐律ニ期親トアルヲ、我律ニ毎ニ二等親トシタルニテ知ルベシ、又三代實錄ヲ檢スルニ、貞觀十三年十月五日ノ條ニ、喪葬令義解ノ文ヲ釋シテ、服絶傍朞者、是戴德喪服變除、及白虎通之文也トアリ、戴德ハ恐クハ戴至德ノ誤ニテ、唐書藝文志ニ戴至德喪服變服一卷トアル書ナルベシ至德ハ唐人ニテ冑ノ姪ナリ、サレドモ其書ヲ得ザレバ、考フルニ由ナシ、白虎通ニハ、天子諸侯絶朞トアリテ傍ノ字ナシ、正シク傍朞ノ字ノ見エタルハ、唐ノ名例律稱期親ノ條ノ疏議ニ、皇家絶服旁期ト云ヒ、鬪訟律告祖父母父母ノ條ノ疏議ニ、論服相犯例準傍期、在於子孫不入期限トアルガ如シ、(通典卷九十三ニ、周制諸侯絶旁周トアルモ、即チ傍朞ニシテ、唐ノ玄宗ノ諱ヲ避ケシナリ、)朞ハ一年ナリ、一年ノ喪ハ令ニ在リテハ、君父母夫本主ニ限リテ、二等親ニハ一年ノ喪ナケレバ、傍朞ノ二等ノ傍親タルコトヲ知ルベキナリ、サテ二等以上ニシテ傍親ナラザルハ、父母、子、祖父母、孫等ナレドモ、父母ハ、義解ニ依式處分トアリテ、此文ニ攝セラレズ、又外祖父母ハ四等親ナレドモ儀制令ニ據リテ本服二等ト同ジト爲セリ、

〔令義解六儀制〕凡〔○中略〕皇帝二等以上親、〔謂有服之親、其子婦者、雖是二等、非有服者、故不在此例、案喪葬令、服紀者、兄弟子七日、又假寧令、七日服三日、今偏執令文、爲姪孫喪、皇帝不視事三日、即與職事官給假三日、何以爲別、君臣禮數、清濁無差、一日萬機、理豈合然、然則伯叔姑兄及姪孫、雖俱居二等、而服紀懸隔、尊卑自別、不可偏守等親、以一概論、即稱不視事三日者、唯爲三月以上服故也、至於姪孫喪、皇帝不視事一日、理以爲允也、〕及外祖父母、右大臣以上、若散一位喪、皇帝不視事三日、〔謂依喪葬令、從發哀日始計、至三日、其親王亦同、給葬具及賻物、親王與散一位同故也、○中略〕三等親、百官三位以上〔謂散位者非、○中略〕喪、皇帝皆不視事一日、

〔令集解二十八儀制〕釋云、皇帝二等以上親者、曾高祖亦同二等耳、重於外祖父母故、〔○儀制令五等親ノ條ニハ、曾祖父母ヲ

三等親トシテ、高祖父母、外祖父母ヲ四等親トス、案以上謂皇子也、但皇考妣者、臨時制耳、朱云、皇帝二等以上親、及外祖父母、謂今帝之親等也、先帝之親不云、或云師云、曾高者入二等親、爲重外祖之故、在穴、中略○釋云、依喪葬令、以發喪日爲喪日耳、師說云、親王亦同、何者給葬具條、及賻物條、親王同散一位、故穴云、不視事三日、謂發喪日細事、喪葬令天皇服條釋也、問、二等以上親、及外祖父母、不見發喪之日限、未知起自何日哉、私答、天皇爲本服二等以上親喪服錫紵、此自遭喪日始服、服限依此條、然則自知喪服錫紵日、不視耳、讀同三等親亦同、抑是發哀之日、不發哀色亦相准、跡云、問、喪不視事者、未知起何日而忌乎、答、以擧哀日爲始、言喪聞始日是也、朱云、皇帝不視事三日者、若此日內有國忌日、日他日等者、猶計三日內也、不更日延、凡計三日、以聞喪日爲始者、後度說云云、見別記也、額云、後求可說者何、古記云、問、皇帝三等親未知等外何、答、一品准一位、外准三位以上、○中略釋云、百官三位以上、謂職事官也、○中略古記云、百官三位以上、謂散位及致仕亦同、穴云、百官三位以上、謂亦京官、於外國者、合知發喪之日、不者有放此耳、私案、喪葬令云、京官五位以上、身死並奏聞、遣使弔者、故知京官三位以上奏聞是也、不及於外國三位也、又時行事治部奏聞停記事散三位、或云、皆同、故上云、散一位、或云、不入兩說也、餘見是云也、

〔法曹至要抄 喪服下〕一皇帝不視事事

儀制令云、文見上○故略

案之、稱不視事者、百官雖理務、皇帝不聞政不視事、三日一日之日數、只心喪之限也、

〔西宮記 臨時四〕喪服

帝王雖隨以日易月之制、一周間依不臨朝、不服位袍、著黑橡衣、神事之日、著紅色、卽位日者著禮服、周康王時制也、見尙書成王顧命篇也、

〔北山抄 四〕御服事

姪孫雖二等、依以日易月制、不服錫紵歟、

〔伊呂波字類抄 利畳字〕諒闇リヤウアン

〔名目抄 喪服〕亮闇リヤウアン 天子喪ニ于父母ニ時、一天著ニ輕服ニ、止ニ美服ニ也、

〔榮花物語 七鳥邊野〕天下らうあんになりぬ

〔源平盛衰記 三〕諒闇事

諒闇ハ、神武天皇崩ジ給ケレバ、綏靖天皇ヨリゾ始ラレケル、天子ノ親ミニ奉別ヌレバ、四海ノ内一天下、皆禁忌ナレバ諒闇ト云也、

〔塵添壒囊抄 八〕諒闇事 付亮字意事

天子ノ御忌ヲ諒闇ト云ハ何ゾ　國主ノ崩ニ限テ諒闇共諒陰共云也、諒陰ヲバ、マコトニモダスト讀也、諒ニ陰トハ、天子ハ日々ニ萬民ノ訴ヲ斷給フベキヲ、一向ニ默シテ不聞食故也、

〔尚書註疏 十說命〕王宅憂、亮陰三祀、傳 陰默也、居憂信默、三年不言、

〔狩倉考 二〕君臣養父母服紀徵考

一天皇其皇考ノ崩ズル時ニ方リテハ、一周ノ間諒闇ナルコト、國史ノ文ニ明ナリ、日本紀ハ年代浸遠ニシテ、法式イマダ具ラズ、續日本紀以下ヲ閱スルニ、孝謙ノ聖武ニ於ケル、桓武ノ光仁ニ於ケル、平城ノ桓武ニ於ケル、仁明ノ嵯峨ニ於ケル、文德ノ仁明ニ於ケル、淸和ノ文德ニ於ケル、陽成ノ淸和ニ於ケル皆然リ、其皇考ニ非ザル帝ノ位ヲ繼ギ給ヒシハ、義人臣ノ養子ニ同ジ、而シテ其先帝ノ崩後ヲ繼ギ、或ハ其在位ノ間ニ太上天皇崩ジ給ヒシ時ノ古例ヲ考フルニ、持統天皇ハ、天武天皇ノ皇后ニシテ、文武天皇ハ、天武ノ皇孫ナリ、而シテ持統ノ皇太子ニ立チ給ヘリ、文武ノ大寶二年十二月、太上持統崩ジ給ヒ、翌三年正月朔ハ廢朝ナリ、其十月天皇小安殿ニ御シテ、遣新羅使及新羅王ハ見給ヒタレドモ、其翌慶雲元年正月朔、大極殿ニ御セラレシマデハ受朝ノ事ナシ、

是一周ノ諒闇ナルニ似タリ、然レドモ此間國史簡略、載セザルコト多ケレバ、強テ證トモシ難シ、又文武天皇ハ、元明天皇ノ皇子ナリ、慶雲四年六月ニ文武崩ジ給ヒテ、元明位ニ卽給フ、六月十五日ニ崩ジ給ヒテ、其廿四日ニ東樓ニ御シ給ヒ、其翌和銅元年七月朔ニモ臨朝ノ文ナシ、自餘ノ文モ諒闇トハ見エズ、但是ハ子ノ跡ヲ母ノ繼ギ給フナレバ、他ノ例ト爲ベキニ非ズ、又元明天皇ハ元正天皇ノ嫡母〇嫡母恐生母誤ト見エタリ、而シテ元正ノ養老五年十二月ニ、太上元明崩ジ給ヒ、翌六年正月朔ハ廢朝ナリ、其翌七年正月朔、中宮ニ御セラレシマデハ出御ノ文ナシ、是一周ノ諒闇ナルニ似タリ、但元明ハ元正ノ實母〇實母非、從祖姑也、ナルモ量リ難ケレバ、是モ強テ證トシ難シ、又元正天皇ハ、聖武天皇ノ姑ナリ、聖武ハ元明ノ時ヨリ皇太子ニ立チ給ヒ、元正ノ時モ同ジク皇太子タリ、而シテ聖武ノ天平二十年四月ニ、太上元正崩ジ給ヒ、翌二十一年正月朔ハ廢朝ナリ、其四月ニ東大寺ノ佛殿ニ、御セラレシ事ハ兩度見エタレドモ、一周ノ間臨朝ノ文ナシ、五月朔ニ至リテモ臨朝ノ文ハナケレドモ、元正ノ崩御ヨリ天平十一年正月マデハ十箇月ニ及ベルニ、猶廢朝ナレバ、是多分一周ノ諒闇ナルベシ、又孝謙天皇ハ、天武天皇ノ曾孫ナリ、光仁天皇ハ、天武ノ皇兄ノ天智天皇ノ皇孫ナリ、而シテ寶龜元年八月ニ孝謙崩ジ給ヒ、其日諸臣策ヲ定メテ、光仁ヲ立テ皇太子ト爲シ、其十月卽位シ給ヒ、翌二年正月朔、大極殿ニ御シテ朝ヲ受ケ給フト見エタレバ、是ハ諒闇ニ非ザルコト明ナリ、又淳和天皇ハ、仁明天皇ノ叔父ナリ、而シテ仁明ヲ以テ皇太子ニ立テ給ヘリ、仁明ノ承和七年五月ニ、淳和崩ジ給ヒ、其九月ノ重陽、翌八年正月朔ノ朝賀、並ニ諒闇ト云ヲ以テ廢セラレ、其六月朔ニ至リテ、初メテ紫宸殿ニ御セラル、是ハ一周ノ諒闇ナルコト明ナリ、此等ノ例ヲ案ズレバ、其皇考ニ非ザレドモ、豫メ其帝ノ皇太子ニ立チ給ヘバ、皇考ニ同ジキト見エタリ、但百官素服ノ月數ナドハ、臨時ニ定メラレテ、代々異同アリ、且桓武天皇ノ如キハ、天應元年十二月、其皇考光仁天皇崩ジ給ヒシニ、延曆元年同二年マデノ正月ノ朝賀ヲ停メ給ヘリ、如此ナレ

バ其時ノ冲旨ニ任ゼラル丶事ト見エタリ、又宇多天皇以後ノ事ハ、其系譜モ異同アリテ、實ヲ定メ難ク、年月モ間書違ヘタル事多クシテ、明證ニ取難シト雖、三條院ハ、冷泉院ノ皇子、後一條院ハ、冷泉ノ皇弟ノ圓融院ノ皇孫ナリ、三條ヨリ位ヲ後一條ニ禪リ給ヘレバ、後一條ハ三條ノ皇太子ナリシト見エタリ、而シテ後一條ノ寬仁元年五月、三條崩ジ給ヒシカドモ、糸束記ヲ見ルニ、翌二年正月ノ節會ニモ出御アリ、其外寬仁元二兩年ノ事跡、諒闇トハ見エズ、是ヲ以テ察スレバ、其時ノ定ニシテ、人臣ノ例ニハ取難シ、人臣ハ本ヨリ一般ノ法アルベシ、其法明ナラズト雖、養父母ノ服紀ヲ擧タル文ノ所々ニ、如此ナルハ實父母ニ同ジト云ヘル文ナケレバ、縱ヒ功田功封ヲ傳受タリトモ、實父母トハ同ジカルベカラザル歟、

乙卯之春　荷田在滿奉

〔後成恩寺關白諒闇記〕諒闇事、可下母屋御簾歟、將又可垂庇御簾歟、先例可勘文明三、殿朝五ケ日之由宣下云々、上皇崩御之卽日、於内裏下御簾、朝餉御手水間以下格子下之、御殿格子不必下之、應安明德度、下御殿格子、殿朝事、可勘之由、見故殿御記、停止音奏警蹕事、下知之、上卿仰外記、今案音奏者、内豎奏時、近衛宿申等事歟、或葬禮以後有之御葬禮以前有遺詔奏、使院司殿上人、卷纓帶劒、上卿著陣、遺詔使申詞云、某院遺詔曰、葬官素服擧哀國忌山陵停止、外記著軾申上卿、上卿以職事奏聞、勅答被聞食之由也、上卿召外記仰之、遺詔使不承勅答退出、故實也、見月輪殿御記其後宴飲作樂美服等停止事宣下之、固關事仰官方、警固事召仰六府、若將警固中者、不及仰也、治承五年、不被仰固關警固、依關東之亂、日來警固故也、仍倚廬還御後無開關解陣云々、文明三年正月儀、自然相當也、

〔諒闇和抄〕遺詔奏事

遺詔とは、先皇の仰おかれたる事を奏聞する儀也、まづ上卿陣座につく、遺詔使陣外四足門外門にむかふて立に參る、外記出むかふ、使遺詔のむねを申、その詞、某院遺詔に、任葬司、山陵、國忌、擧哀、素服等、とゞめらるべきよし也、○中略遺詔使はこのむねを外記に申て、御返事をまたず、まかで侍る故實さぞ、

たま〳〵御返事を承りたる儀もあり外記陣の座に參り、軾に著て遺詔の旨を上卿に申す、上卿職事をまねきて、此旨を奏聞す、職事歸りいでゝ、今日より廢朝五日、遺詔にまかせて任葬司以下停止、一朞の間、宴飲作樂美服を著る事をとゞむ、又警固固關、例のまゝに行ふべきよしを仰す、上卿外記を召て、今日より廢朝五日、又任葬司以下とゞむるよしを仰す、廢朝とは天子の朝にのぞみたまはぬこと也、廢朝と仰られぬれば、外記心して音奏とゞむべきよしを內豎に仰する也、此事大外記師遠いはく、只音奏ばかりをとゞむる時、殊に仰下さる、廢朝ある時、只廢朝のことばかり仰下さる、音奏を止る事は仰下されずといへども、外記件の旨を存して、音奏止むべきよしを內豎に仰するよし、承久二年三月七日、中御門右府、記しおかれ侍る、音奏とは、聲をたてゝ、奏する事也、昔は時を奏する時聲をあげて奏しける、又瀧口の問籍とて、名のりをたかく申事などもとゞめらるゝ也、故に、順德院のかゝせたまふ禁秘御抄には、廢朝三箇日と仰られぬれば、音奏警蹕をとゞめ、禁中に物音なしとぞ侍る、警蹕は御膳を供する時、陪膳の稱するをし〳〵の事なり、さて廢朝は五箇日なれども、此音奏は御中陰をはりて、もとのごときよし仰下さるゝ事也、廢朝より御簾をも下す事也、御殿の廂の御廬なり又上卿、辨を召て、素服擧哀、一朞間宴飲作樂美服を著る事とゞむべし、又三箇國の關國司に付て固めしむべきよしを仰す、宴飲作樂は節會又音樂をとゞめられ侍る也、一朞は亮闇一周の間なり、亮闇をみものおもひと訓り、三關は近江國相坂、美濃國不破、伊勢國鈴鹿、この三關を固めしむる也、辨退て、史に仰て其事を沙汰せしむる也、次上卿外記を召て、諸衞の參否をとふ、是左右近衞府、左右衞門府、左右兵衞府のすけ以下、さぶらふやいなやをとふ也、御讓位の時などは、六府左右馬寮兵庫寮などをも召す也、此時などは三寮はめさず、たゞ六府のみを召仰するよし、大外記師遠、中御門右府へ申けるよし、彼公大治四年七月十五日の日記にみえ侍る、外記さぶらふ人々を申、上卿めしてかためまもるべきよし仰する也、三關をかたむるは京中のしづか

なるべきため、警固を仰するは不虞にそなふる也、これらを仰て、上卿はまかで侍ること也、

解陣以下の事

上卿仗の座にさぶらふ、もし今日いろの素服をぬぎたる人ならば、まづ吉書をたまふべし、先例也、扨職事陣に出て開關解陣の事を仰す、上卿外記を召て諸衛の參否をとふ、外記さぶらふ司々を申、上卿官人に仰てこれをめす、さぶらふ司小庭に立、上卿陣解くべきよしを仰す、次上卿、辨を召て、三箇國の關、國司に仰て開かしむべきよしを仰す、辨退きて、史に仰て、宣旨を國司に下さしむ、上卿衞府の人ならば、解陣開關事を仰て後、白地(アカラニマニ)陣座を立て、宣仁門外立蔀の邊にて、弓箭を撤し、纓を垂て陣の座に歸りつく、(衞府の上卿にあらずは、白地に立に及ばず、)次職事又軾につきて、亮陰のあひだ、殿上の侍臣、橡袍聽著べきよしを仰す、上卿、外記を召て、此事を仰て後まかり出、

音奏以下の事

音奏警蹕とは遺詔の所に委く申侍ること也、警蹕は御膳の時をしをしを稱する也、これらをとゞめられたるを、御中陰もみて侍る故に、けふより、もとのごとくせよとの事を仰下さるゝ也、上卿陣座につく、職事この事を仰す、上卿外記を召て仰す、外記內豎に仰す、職事又藏人に仰て、晝御座の廂の御簾をまかしむ、今日此事を仰らるゝにて、御凶事にかゝりたる事、一とほりすむ、これより一させを過て、りやうあん終の大祓の事あるなり、

亮陰終の事

あくる年の御忌月にいたりて、兼日上卿陣の座につきて、大祓の日時をかんがへしむ、當日早旦、藏人御殿(清涼殿也)の御裝束をあらため、皆吉にふくす、參議壹人、外記史をひきゐて、朱雀門代にむかひて大祓の事を行ふ、(幄をうちて座をまうけたり、)むかしは式部兵部彈正なども此所にむかひけるよしみえたり、いまは參議辨外記史のみなり、參議以下皆吉服に卷纓なり、事はてゝ、各纓を垂る、辨はかへ

り參て、大祓終るよしを藏人に付て奏す、（下侍にて申よしみえたり）次御禊の事あり、御殿の廂に半帖を供す、（吉方にむかふ）掃部寮宮主の座を庭中に鋪て、その前に葉薦一枚をしく、時刻出御、吉御引直衣、紅御袴、吉の御冠なれども猶卷纓なり、執柄（吉御裝束卷纓）御前の圓座にさぶらふ、宮主庭中の座につく、藏人橡の御衣以下白き裹につゝみて、柳筥の蓋にするゑて、（高坏なり）內藏寮官人にたまふ、官人宮主の前の葉ごもの上に置、次御贖物を供す、入形散米二坏なり、藏人頭御陪膳に候じ、五位藏人役送たり、主上人形をもて御身をなでたまひ、散米をちらしたまふ、次宮主大麻をたてまつる、頭の藏人つたへ取て持參す、もたしめながら御氣（イキ）をかけましまず、藏人頭宮主にかへしたまふ、宮主祝申てまかづ、次御贖物をてつす、次藏人頭、御前へすゝみて御纓を垂れたてまつる、（或入御の後簾中にてたれらる、童帝の御時、御冠の沙汰に及ばず、）執柄以下、座にてみづから纓をたる、次入御、此後あまねく纓をたるゝ也、次御禊の御裝束をてつす、宮主內藏寮官人、橡の御衣を相ぐして河原にむかふ、次吉書の事あり、まづ執柄內覽あり、次晝御座にて御覽あり、まづ官方、次藏人方、（幼主の御時、攝政に覽するばかりなり、）辨藏人陣に於て上卿に下す、次大床子の御膳を供ず、四位の殿上人御陪膳にさぶらふ、（○中略）又大祓のうち三箇日、僧尼服者參內を憚るよし舊記に沙汰あり、今もはゞかる事也、此事いかなる故にや、心得がたくこそ、

〔日本書紀（四綏靖）〕神日本磐余彥天皇（○神武）崩、時神渟名川耳尊（○綏靖）孝性純深、悲慕無已、特留心於哀葬之事焉、其庶兄手研耳命、行年已長、久歷朝機、故亦委事而親之、然其王立操厝懷、本乖仁義、遂以諒闇之際、威福自由、苞藏禍心、圖害二弟、

〔續日本紀（三文武）〕慶雲四年六月辛巳、天皇崩、遺詔、擧哀三日、凶朝一月、　壬午、以三品志紀親王、正四位下犬上王、正四位上小野朝臣毛野、從五位上佐伯宿禰百足、黃文連本實等、供奉殯宮事、擧哀著服、一依遺詔行之、

〔續日本紀（十七聖武）〕天平二十年四月庚申、太上天皇（○元正、聖武姑、）崩於寢殿、春秋六十有九、　丁卯、勅天下悉素

服、　六月癸卯、令百官及諸國釋服、

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶六年七月壬子、太皇太后〇文武后藤原宮子娘、帝祖母、崩於中宮、　七年正月辛酉朔、廢朝、以諒闇故也、

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字四年六月乙丑、天平應眞仁正皇太后〇聖武后藤原安宿媛崩、〇中略天下諸國、擧哀三日、服期三日、

〔續日本紀三十稱德〕寶龜元年八月癸巳、天皇崩于西宮寢殿、春秋五十三、　乙未、天下擧哀、服限一年、　九月壬午、停一年服期、天下從吉、

〔續日本紀三十六光仁〕天應元年十二月丁未、太上天皇〇光仁、桓武御父、崩、春秋七十有三、天皇〇桓武哀號、摧咽不能自止、百寮中外、慟哭累日、詔曰、朕精誠無感、奄及凶閔、痛酷之情纏懷、終身之憂永結、而欲諒闇三年以申罔極、而群公卿士、咸倶執奏、宗廟不輕、萬機是重、不可一日而曠官也、伏乞准後奈保山朝廷〇元正總斷萬機、一同平日者、朕以霜露未變、荼毒尚深、一旦從吉、甚非臣子、宜天下著服六月乃釋、乃從今月二十五日始、諸國郡司、於廳前擧哀三日、若遠道之處者、以符到日爲始施行、禮日三度、初日再拜兩段、但神郡者、不在此限、　辛亥、勅曰、昨緣群卿來奏、天下著服、以六月爲限、但朕孝誠無効、慈陰長違、結慕霜葉、無復承顏之日、緬懷風枝、終虧侍謁之期、終身之痛每深、罔極之懷彌切、宜改前服期、以一年爲限、自餘行事、一依前勅、

〔續日本後紀九仁明〕承和七年五月癸未〇八日後太上天皇〇淳和崩于淳和院、春秋五十五、〇中略令五畿內七道諸國、始自九日未四剋、國郡官司著素服、於廳前擧哀三日、每日三度、　七月癸未、令五畿內七道諸國、諒闇之間停釋奠祭、

〔續日本後紀十仁明〕承和八年五月丙申〇二十七日令諸司於朱雀門大祓、爲除後太上天皇之服也、

〔皇年代略記仁明〕承和七年五月八日、淳和天皇崩、非當帝二親、雖爲叔父、依擬父帝亮陰、十一於清凉

著喪服云々、

〔椿葉記〕御猶子のれいは、仁明天皇は、さがてんわう第二の御子にてわたらせ給ふを、御舅の淳和天皇の御ゆうしにして、くらゐにつかせ給ふ、嵯峨いまだ御座ありしとき、淳和崩御なりしを、御子の儀なれば、天下諒闇になり侍き、

〔續日本後紀十二仁明〕承和九年七月丁未、太上天皇〇嵯峨崩于嵯峨院、春秋五十七、　八月癸亥、詔曰、廼者遭家不造、惨結兢惶、剱舄纔存、橋山之慕彌切、天地改色、諒闇之居弗寧、〇下略

〔續日本後紀十三仁明〕承和十年正月庚寅朔、廢朝賀諒闇也、　七月辛丑、修嵯峨太上天皇周忌齋會、〇中略丙辰、是晦日也、公卿率百官祓于朱雀門、始就吉禮也、

〔皇年代略記仁明〕同年同月〇承和九年七月　十五日、父帝嵯峨天皇崩、雖擬祖帝、依爲實父亮陰、

〔三代實錄一清和〕天安二年八月廿七日乙卯、文德天皇崩於冷然院親成殿、　九月四日壬戌、東宮〇清和、文德皇子、成服、群臣百僚從之、命五畿七道始著素服、擧哀成禮、〇中略公卿及侍臣已下、於東宮喪服之限、以日易月、十三日而釋之、　七日乙丑、宣詔內外云、朞年之遏密、惟從易月之制、率土黔黎、須有心喪、宜禁飲宴作樂美服、

〔三代實錄三清和〕貞觀元年八月廿九日壬子、大祓於朱雀門前、以心喪禮畢、始從常儀也、

〔三代實錄三十八陽成〕元慶四年十二月四日癸未、是日申二刻、太上天皇〇清和、陽成御父、崩於圓覺寺、時春秋三十一、　五日甲申、帝遷自清涼殿御常寧殿、近於中宮所居也、是日頒告內外曰、太上天皇崩、有遺詔停素服擧哀之禮、宜知遵行、又曰、喪制所行、雖據遺詔、率土黎元、何無心喪、宜禁宴飲作樂著美服、

〇按ズルニ、修喪ノ事、本書載セズ、

〔日本紀略宇多〕仁和三年八月廿六日丁卯、今日巳二剋、光孝天皇〇宇多御父、晏駕于仁壽殿、　廿九日庚午、令五畿七道擧哀三日、喪服之期、以日易月、但朞年之內、禁宴飮作樂美服等、　四年八月廿九日、未

剋、於朱雀門大祓、爲明日就吉也、

〔日本紀略 二朱雀〕延長八年九月廿九日己丑、未剋太上天皇〇醍醐崩、天下諒陰、

承平元年〇延長九年九月卅日甲寅、於朱雀門前大祓、

〔日本紀略 五冷泉〕康保四年五月廿五日癸丑、巳時天皇〇村上崩於淸涼殿、六月二日己未、停止素服擧哀宴飮作樂美服、

安和元年〇康保五年五月廿七日己酉、於朱雀門大祓、依諒闇閑院〇闕下恐脱擧字也、

〔日本紀略 九一條〕正曆二年二月十二日癸丑、今日法皇〇圓融、一條御父崩、年三十三遜位之後八年、十九日庚申、依遺詔停素服擧哀國忌山陵、但天下諒闇、天皇及侍臣侍女著素服、三年二月廿四日戊子、於朱雀門大祓、依諒闇了也、

〔日本紀略 十一條〕長保三年閏十二月廿二日己丑、東三條院〇一條母后藤原詮子崩于行成卿第、年四十廿四日辛卯、令奏遺令、又素服擧哀可令停止者、子細天皇令著錫紵給、〇中略天下諒闇、四年十二月廿四日乙酉、於朱雀門前大祓、依諒闇畢也、

〔日本紀略 十二三條〕寬弘八年十月廿四日癸亥戌剋冷泉院太上皇〇三條御父崩于南院、春秋六十二、十一月十六日乙酉、天下諒闇、

長和元年〇寬弘九年十月十二日丙午、諒闇了大祓、

〔榮花物語 十日蔭の鬘〕かゝるほどに、十月〇寬弘八年廿四日、れいせいゐん〇三條御父うせさせ給ぬ、あはれにかなしなど、きこえさするもをろかなり、〇中略よのなかみな諒闇になりぬ、てんじやう人のつるばみのうへのきぬのありさまなども、からすなどのやうにみえてあはれなり、よろづものゝはえなく、くちをしともをろかなり、一てんかのもの、なげきにしたり、〇中略たゝむ月〇十一月の大じやうゑ御はらひなど、いみじうよにいそぎたちにたり、うちにも御服、たちぬる月〇十月にぬがせ

給て、れいせんゐんの御はてもせさせ給て、いまはこのことを、いみじきことにの、しらせ給、

〔殿暦〕嘉承二年七月十九日癸卯、抑今日禁色幷音奏著飯給事不可有事也、父崩（○此日堀河帝崩、鳥羽御父、）時無此儀、雖然不御服身上、諒闇有無、上皇（○白河、）無左右仰、又世間人諒闇有無難量由風聞、仍余倩思量、若諒闇儀不可有由有仰時、更奏時卷簾仰下禁色、無其謂、仍先准擬讓儀、先仰下之後、一定之後、止音奏等、其有便、仍所量行也、　廿三日丁未、午剋許、參御前退出、戌剋許、參堀河院、又參一院、是諒闇有無事也、仰云可有也、仍退出了、　廿四日戊申、今夜侍宿、自院參內裏、於宿所欲著束帶間顯隆來、上卿源中納言基綱卿奏遺令、其詞如常、余聞了、余又召顯隆仰云、固關警固由仰上卿、次又可有諒闇由同仰了、其詞云、飲酒作樂著美服事可止、仰上卿了、次令下御簾止音奏、

〔皇年代略記六條〕同（○永萬元年七月）廿八日、父帝（○二條院、六條御父、）崩○亮陰、

〔百練抄高倉八〕安元二年七月八日、建春門院（○後白河后、平滋子、）崩御、（○卅五、帝母后、）天下亮闇、

治承元年（○安元三年）七月十日、諒闇畢大祓、

〔百練抄安德九〕養和元年（○治承五年）正月十四日、太上天皇崩于六波羅賴盛卿亭、（○年廿一、號高倉院、安德御父、）奉葬清閑寺、

壽永元年（○養和二年）正月十七日、諒闇大祓、

〔愚昧記〕建久三年三月十三日、左兵衛督能保送使者（○左衛門尉仲業也）云、只今候院之輩兩人告送旨候、其中一人申云、已崩御云々、（○後白河、後鳥羽御祖父、）今一人云、危急御云々、聞食及乎、只今欲馳參也、答云、不聞定跡之間悅承了、扶所勞欲參入也、僮僕來集候間、自然懈怠、日出之後參上云々、執柄（○藤原兼實）被示此間事、被示云、諒闇有無如何、今度大略可被追大治例也、而與件年不相似事候歟、彼者曾祖也、是者祖父也、加之當今（○後鳥羽）登祚事、法皇詔旨也、就中其間事甚深也、諒闇事、又必不限父母歟、淳和上皇崩之時、仁明天皇有諒闇事、叔父猶如此、況祖父乎、是依恩重歟、大治無諒闇事之條、鳥羽院令著重服之故、其儀依

不相叶歟、今度如何、予答云、有仁明例之上、大治鳥羽院重喪一期、爲在位之間者、可有諒闇之由已見了、但帝者爲祖父、重服之條、先規雖不分明、有太上天皇同正帝之文、鳥羽院之例足准據、有諒闇事、自叶物宜哉、博陸有甘心氣、又命云、無左右諒闇之間、被行之例可勘申之由可仰下歟、將先諒闇有無事可被尋歟、予又答云、先可令勘申有無事歟、就勘申之旨被仰下可宜也、嘉承堀川院御事之時、諒闇雖不及異儀、幼主之間、聊有豫議歟、彼猶如此、況今度殆可爲新儀之故也、關白承諾、則召宗頼朝臣仰云、可有諒闇哉否、可勘申之旨可仰外記辨官者、又云、帥直參上歟、申云、未參候、被示云、重可召遣者、此後暫有言談事不委記、被問云、可參內哉、答云、相扶所勞參入、但有可詣入事者可參內歟、重示云、外記勘申之間、定有可申合事歟、令參入可宜也、次又云、今ハ可參內也、祇候無益歟、則被退出了、○中略 次關白召宗頼朝臣、令進勘文三通也、但二通籠一禮紙、一通有別紙如何、不可然歟、關白取之披見、籠三通於一紙內(禮紙一枚投遣之、而宗頼不取退者如何、)指遣之、予取之、披禮紙押文、於右披見之、一通見了卷之、示內府(○藤原忠親)云、且欲進如何、內府承諾、仍授之、又披見了如初授內府、內府初又見了被返授之、予取之置禮紙上左方、次又披見了、押卷禮紙授內府了、彼人披覽之間、執柄被命云、此事如何、答云、如以前令申也、可候歟、然間內府又見了、卷禮紙(三通)被返授之、予取之奉關白、被問內府、內府申云、仁明之例已存、尤可候歟、此後各以相議之、可有諒闇之條有三理也、一者仁明之時、爲叔父有諒闇、況祖父乎、二者大治鳥羽院重服也、以之思之、爲在位之間者、可有諒闇也、三者奉爲主上重恩也、

〔玉海〕建久三年三月十三日乙酉、此日寅刻太上法皇(○後白河)崩御于六條西洞院宮、○中略 右大臣(○藤原兼雅)云、昨日口謁便宜奏諒闇及議口之由、雖無殊勅答、天氣似宜云々、與左大將參入、余(○藤原兼實)內々示合亮闇之間事、有服膺之氣、召宗頼朝臣、仰非父子之間、有亮闇之例可問之由、即又仰可參內裏之由、先是職事等參入、皆令參內裏了、巳刻余退出參內、(大將相伴)大外記兩大夫史等參入、各仰勘文事、(宗頼於弓場殿邊仰)之、余參朝餉、小時退直廬披亮闇記、抄出當凶事等、(大將相共抄之)此間左內兩府(○左大臣藤原實房、內大臣藤原忠親、)參入、(直衣)

左大臣、於院御所可被參內之由面觸也、內大臣命其子忠季朝臣令告也、(其使逢路頭云々、)兩府共坐御殿南廣庇云々、未剋余參御所、宗頼朝臣、持來師尙朝臣師直廣房等勘例、見了返給、余出鬼間招兩府、(仰藏人召之、圓座三枚、半帖令敷之、)宗頼持來勘文三通、余如形見之與左大臣、左大臣每見一通且與內大臣、各一見了返與余、余示合可有亮闇哉否事、左大臣云、承和例符合之上、大治(四年白河崩)上皇(鳥羽)著御一年之服、若爲帝王者、亮闇無疑、祖孫之間、其例如此、况當今(後鳥羽)傳國之間、法皇之恩難被謝、以此等之儀思之、尤可有亮闇歟、內大臣大略同之、百千事無益、只以登極之次第、必可有此儀歟、大治之例雖可比、猶就重可被仰諒闇之由歟、余口大治之例不可比、彼者曾孫也、(崇德)是祖孫也、(後鳥羽)彼者上皇(鳥羽)現存之時也、是先帝(高倉)晏駕之後也、彼者無傳國恩、是有登極之詔、三箇之條、差異如此、何况大治無亮闇者爲帝不快也、承和有亮闇之爲君最吉也、承平半年之心喪者、只以謂祖孫依厚禮也、今度者服紀不齊之上、有讓國之子細、云彼云是、尤可有諒闇歟、兩丞相共諾、余召宗頼返給勘文等、仰云、任承和例、可天下亮闇、可勘申代々例之由可仰外記者、此後皆與人々言談各以退出了、(中略)秉燭之後、遺詔使前丹後守仲經朝臣參陣、付大外記師直奏之、外記申上、例在陣上卿付藏人頭宗頼奏之、宗頼以女房告余、余於鬼間邊宗頼問之、宗頼申云、太上法皇遺詔使申云、可停止素服擧哀者、余云、非官可停事不被申歟如何、宗頼云、依不審尋上卿之處、外記不申云々、余云、先例有如此之事、只使之失、此旨可令聞上卿也、御返事仰聞食之由、(先例也)又依遺詔可止素服擧哀、象又一閲之間、可停止宴飲作樂之由可仰上卿者、宗頼向陣仰之、次行固關(付圖切)警固等事云々、

〔百錬抄十後鳥羽〕建久三年三月十三日乙酉、寅時法皇(後白河、後鳥羽御祖父、)崩于六條殿、准仁明例可有亮陰之由被召仰了、　四年三月十五日壬午、諒闇終由大祓也、主上又有御禊、

〔百錬抄十三後堀河〕貞應二年五月十四日、太上法皇(後堀河御父守貞)崩御、奉號後高倉院、葬北白川、天下亮闇、元仁元年(貞應三年)五月廿四日、諒闇終大祓也、

〔增鏡三藤衣〕おなじころ○天福元年四月中宮○後堀河后藤原竴子も位さり給ひて、さうへき門院ときこゆなる、○中略九月十八日にかくれさせ給ひぬ、そのほどのいみじさ、おしはかられぬべし、ことし廿五にならせ給ふ、○中略とう代○四條の御母后にておはしつれば、天下みなひとつすみぞめにやつれぬ、

〔百錬抄十四〕文暦元年○天福二年八月六日壬申、晝方仙洞物忩、或云、去夜御絶入、○後堀河、四條御父、今朝又有此事、及酉刻已御事切給、春秋廿三、性稟寛仁、政無苛酷、女院○後堀河后藻壁門院、去年崩、諒闇事、一并未満、萬人含悲、

嘉禎元年○文暦二年八月十二日壬寅、諒闇終大祓也、

〔五代帝王物語〕中宮○後堀河后藤原竴子は、同○貞永二年○天福元年四月三日院號ありて、藻壁門院と申、○中略九月十八日、つひにうせ給ぬ、御年廿五、淺猿とも云ばかりなし、○中略上皇○後堀河も此御嘆のつもりにや、同二年八月六日かくれさせ御坐す、御年廿三、をしかるべき御齡なり、代々の帝王、短祚におはします例のみおほかれども、女院の御事に打つゞき、此事の出來ぬる、いかにも子細ある事也、○中略天下諒闇なれども、法勝寺御八講に御幸ありけるに、御車すでに阿彌陀堂の御前へ寄たりけるに、藻壁門院の昔の御姿うつくしげにて、九重堵の第三層とかやにわたらせ給けるを、あれはいかにと思食て、御車寄に攝政のさぶらはせ給けるに、あれは見まゐらするかと仰ありければ、見まゐらせ候と申されけり、餘人は見まゐらせず、不思議にぞありける、其御幸見物しけるもの、中に、供奉人どもの諒闇の裝束にてあるをみて、あはれつゞきたる諒闇かなと申ける、耳にたちて聞えけるが、はたしてつゞきたり、世の吉凶は、人を以ていはすなる事も、思合せられ侍とかや、

〔皇年代略記龜山〕文永九年二月十七日、父帝後嵯峨天皇崩、亮闇、

〔增鏡十三秋のみ山〕御門○後醍醐の御母女院、○後宇多后談天門院藤原忠子十一月○元應元年うせ給ひにしかば、内のうへ、御ぶくたてまつる、天下ひとつにそめわたして、あしすだれとかいとまが〳〵しき物どもかけわたしたるも、あはれにいみじくぞ見ゆる、五節もとまりぬ、若き人々など、さうざうしく思へり、

〔皇年代略記 後醍醐〕元應元年十一月十五日、母后談天門院崩、亮陰、元亨四年(正中元)六月廿五日、父帝後宇多崩、亮陰、

〔大外記師茂記〕貞治三年七月六日戊辰、家君自記錄所退出之次、令向四條中納言隆家卿第給、是法皇(○光嚴、光嚴、後光嚴御父、)御惱事、以外煩敷御坐也、仍被驚申了、被語云、昨日參伏見殿、令待時、右筆始流布御勞、其後御痢病御不食云々、御大事出來者、天下諒闇勿論云々、　七日己巳、今夜丑剋太上法皇崩御、(御年五十二)多年御遁世之儀(御禪體也)也、仍於丹波國山國小庵崩給、自四月比流布御惱及兩三度、其後御不食云云、天下諒闇之條勿論也、　八日庚午、今朝貞應諒闇文書、被尋掃部頭之處、紛失之由返答、今朝彈正延兼、被遣文殿許、元應正中諒闇廻文等、撰進之由被仰也、朽損無其形之由申返事、今日午剋右衞門督忠光卿、(權中納言、)進狀於局務、就天下諒闇事、有可被仰下事、只今間可令參仕云々、不及請文、可參由被答了、同事被仰官務、彼卿諒闇傳奏也、同剋太宰權帥仲房卿尋申云、延久以來凶事奉行職事、不意事付廻注賜哉云々、只今依召參內候、可參申之旨被答了、未剋自殿下(○藤原良基)有假名御事、法皇御事治定、諒闇儀有用意、只今程可有御參、元亨四年、素服公卿以下人數可被注進云々、則可參仕之由以詞被申了、未剋家君著束帶(垂纓)參內給、依召也、勘例等未被用意、先被馳參者也、家君於記錄所以忠光卿御問答、諒闇間事、大夫史量實同祗候、(垂纓)權帥仲房、(直衣上括垂纓)右衞門督忠光卿、(直衣上括卷纓)藤中納言時光卿參內、(直衣上括卷纓)藏人右中辨嗣房、(衣冠上括垂纓)諒闇奉行職事也、

〔後深心院關白記〕應安七年正月廿八日甲午、及曉更右衞門督(顯保)告送曰、只今新院(○後光嚴、後圓融御父、)御事切了云々、　卅日丙申、左大史兼治來、召前語云、今日可有諒闇之沙汰、相具文書可參之由、自執柄被仰之間、只今可參云々、　二月九日乙巳、及晚仲光來語云、今日於太閤(○藤原師良)第、內々被議諒闇事、彼傳奏按察卿向彼亭、兩局猶同參、仲光可令奉行云々、

永和元年(○應安八年)正月十二日癸酉、頭右大辨長宗朝臣來、有勅問事、(諒闇終大赦事、仰局中勘等注奏、)

裏書曰
仰詞
諒闇終大祓事、及來月之條無先規歟、將又正忌以前例、寬弘外無之歟、今度何樣可有御沙汰乎、
余(○藤原道嗣)申詞
諒闇終大祓事於正忌以前者、寬弘例不庶幾、及來月之條、又無先規、短慮輙難計申、被行仗議可被決群議矣、
廿八日己丑、今日諒闇大祓被行之云々、(參議宗泰卿參行云々)

〔皇年代略記 後小松〕四年(○明德)四月廿六日、父帝(後圓融院)崩、天下亮陰、

〔滿濟准后日記〕永享五年十月廿日、申剋仙洞崩御、(御歲五十七○後小松、後花園御養父、)　廿三日、可出京之旨被仰間、押自所勞出京、參室町殿(○足利義敎)御對面、條々仰子細在之、就舊院御事、諒闇勿論歟、舊院御遺勅勅書拜見之處、凡催感淚了、勅書趣、後光嚴院御一流不斷絕之樣、能々可有申御沙汰云々、仍諒闇事、可有其沙汰條、尤御本意一向濕思食云々、又一通勅書、御追號事、可爲小松院云々、以上兩條也、此上ハ雖不能左右、後光嚴院御一流可爲萬歲、繼帝者此子孫、不慮儀不可出來處、既依無王子、伏見殿宮(○當今御事後花園)爲御猶子被繼帝位了、然者强後光嚴院御一流、任舊院御遺勅雖令申沙汰、當今御爲、還而神慮無覺束樣存、如何云々、予御返答、仰誠非無其謂候、但當今已爲舊院御猶子如此御座候、御讓國御重恩ト云、御猶子ト云、御遺勅嚴重ト云、旁諒闇儀無豫儀存、且室町殿樣御爲、自何可然存、其謂ハ觀應年中、光嚴院、光明院、幷時國主(崇光院)以上御三人、南方へ奉取、長御子孫可被斷王位御望之由及御告文云々、其後爲武家御計、後光嚴院安居院共ニ御坐、於開出奉付御位了、其以來公武御契約異他也、仍故鹿苑院(○足利義滿)御代ニ、伏見殿御文書悉被申請、被進舊院了、此御計モ偏ニ後光嚴院御一流、於爲被仰申御計略也、殊又舊院被殘御執妄御遺勅之處、萬一於相違者、御亡魂御恨モ非無御怖畏歟由申處、將軍御同心也、雖然何樣後

光嚴院御一流、崇光院御流、就神慮聊御遠慮事、如仰申關白（○藤原持基）幷前攝政（○藤原兼良）加料簡可被申
意見之旨可申遣云々、
廿四日、就諒闇事尋申一條前攝政、昨日返報、今日到來了、返狀案、
度々預御狀候、恐悅存候、抑法皇晏駕事、如仰驚嘆無極候、五十餘年明主、云御藝能、云御才學、末代
雖有之樣存候、就其諒闇有無事、以御使被仰出執柄、且愚存之趣、取調可被申之由被仰遣候、仍引
勘先規可爲諒陰之條、相叶理致之由申入候了、時宜之趣、曾以不存知候へ共、就多分例申意見不
存私曲許候、諒闇事遺勅之由承及候、云事理、云先例、無猶豫儀之樣存、一紙注進候分、無何懸御目候、
此上用捨ハ可爲時宜候、就被尋下先例、非可存私之間、此分申入候了、先規之樣、又一紙注獻候事、
期面拜候也、恐惶謹言、
十月廿三日　兼長

諡書
且諒闇事、異朝之本文、孝行之至極候歟、奉爲當今可爲御冥加歟、明王以孝治天下之謂候也、
一父帝崩御之時諒闇、神武天皇以來每度無異論、
一雖非父帝、就讓國之恩諒闇例、天智天皇（天武兄）崩御之時、天武帝諒闇、淳和天皇（仁明叔父）崩御之時、仁明
天皇諒闇、後白河院（後鳥羽院祖帝）崩御之時、後鳥羽院諒闇等是也、
一依御猶子之儀諒闇例、仁明天皇以淳和擬父帝諒闇、後鳥羽院以後白河擬父帝諒闇是也、
一爲無服之親、雖無猶子、讓國之寄、依相繼帝位諒闇例、稱德天皇崩御之時、光仁帝諒闇是也、
一實父御現存之中、爲御養父諒闇例又有之、仁明天皇在位承和七年五月八日、淳和崩御諒闇、（是爲擬父）
同九年七月十五日、實父嵯峨帝崩御、又爲諒闇、
一雖異姓他人繼帝位之時諒闇、異朝例連綿、唐堯虞舜夏禹等聚躅也、已上自前攝政注賜分也、

自室町殿就彼尋申、自前攝政御申詞、
諒闇有無事、引勘先蹤之處、天武天皇、并仁明天皇、後鳥羽院等、雖非父帝、或就猶子、或就讓國、皆被行諒闇了、且又稱德天皇崩御之時、光仁爲無服之親、雖無猶子之寄、無諒闇之儀、猶以被行諒闇、況於今度之儀者、云御猶子、云讓國之恩、旁可爲亮陰歟、就中仁明天皇爲擬父淳和被行諒闇、又爲御實父嵯峨帝同爲諒闇、然間當今縱雖爲崇光院御一流分、就御猶子讓國之恩、可爲諒闇之條、不背先規、相叶理致乎、○中略已上前攝政御申詞、
廿二日、自關白就談合一條前攝政御意見、
當今就御實父、爲崇光院御一流、可有御相續哉、又就御猶子、可爲舊院御一流哉間事、爲凡慮難定申者哉、但繼體天皇者、爲應神五世孫、分開帝運給、皇極帝又爲敏達曾孫登天位、又一代中絕者、光仁天皇、後堀川院等是也、然則當今、爲崇光院四世御孫、可有御相續條、凡無異論哉、此上事猶有其疑者、任神慮及御鬮之外、更無治術歟、但若可被任當今叡慮歟如何、以上前攝政、
關白御意見御闕歟、仍被仰付本官三人、於神祇官被取御鬮之處、舊院御一流分治定、仍諒闇之儀必定云々、前攝政內々御意見、當今御踐祚以來、爲舊院御子行來也、今更如此及其沙汰之條、定有子細歟之間、繼體例等ヲ以、崇光院御一流可有何子細哉、猶不審疑在之者、御卜御鬮等申入了、御鬮之儀聊示歟云々、
〔公名公記〕永享五年十月廿五日、舊院○後小松御事、以持明院侍從訪遣執權卿四辻羽林相公等許了、晚鐘之後參內、衣冠、舊院御事爲中人也、四條相公中次也、當番之仁也、諒闇夜前治定云々、主上○後花園爲法皇御猶子之時、諒闇有否先規事、自室町殿○足利義教被尋關白○藤原持基并前攝政○藤原兼良云々、關白召兩局被相尋先例、仍如此勘進云々、穢奧仍先例兩樣之上者、宜在時宜之由關白被申、室町殿仰云、猶以凡慮難計申、宜任神慮トテ、召吉田神主兼富朝臣、諒陰有無、於神祇官取鬮可定之云々、兼富朝臣申云、穢中參神前之條不可叶

云々、又仰云、於神祇官門外取之云々、是又不存知先例之間申之云々、仍仰伯雅兼王、吉田神主兼富朝臣、伊勢祭主云云等、於各宿所取之之處、伯幷祭主闕者、可爲諒闇云々、仍就多分諒闇治定云々、御存日之時、以勅書諒闇幷御追號事、（小松院）被仰置室町殿云々、後日任傳註之者也、

上皇有御事時、當今雖非上皇御子諒闇有否事、

天長元年七月七日平城天皇崩、爲諒闇、

于時帝淳和天皇（先帝弟）

承和七年五月八日淳和天皇崩、爲諒闇、

于時帝仁明天皇（爲先帝養子）

建久三年三月十三日後白河院崩、爲諒闇、

于時帝後鳥羽院（後白河院孫）

文保元年九月三日伏見院崩、非諒闇、

于時帝花園院（後伏見院皇子、猶伏見院皇子也、）

天暦六年八月十五日朱雀院崩、非諒闇、

于時帝村上天皇（醍醐皇子（朱雀同母弟、但爲朱雀院猶子、雖然無諒闇儀、）

〔親長卿記〕文明二年十二月廿六日、卯刻許已御命終、（〇後花園、後土御門御父、）　三年正月一日、年始御祝已下事、公武停止云々、　十二月廿九日、今日諒闇畢大祓也、先有日時定、上卿中院大納言、（通秀）奉行藏人辨兼顯云々、大祓上卿左大辨宰相、（廣光）辨侍光朝臣云々、構外於五靈邊有此事、

〔親長卿記〕長享二年三月九日、早旦民部卿奉折紙到來、女院（〇後花園后嘉樂門院信子）次第無御憑、就此儀條々可被仰談、今日雖爲御衰日（禁裏）忩可參云々、勸修寺同有此仰、加奉返遣折紙了、（〇中略）參内裏番衆所、勸亞相未參、小時相待、午後參仕、兩人參仕之由申入、可參御前云々、於御學問所妻戸内有御對面、仰云、

凶事方事、種々雖有御思案被述是非畢、仍用脚事自江州大樹(足利義熙)自去年九月十二日、于今在陣江州、如是事被申東山殿、〇足利義政可有是非事也、以藤中納言入道御使云々此上重可申東山殿、其間モ無油斷候間、可被申借用御臺、丹波上村、毎年三萬疋在所也、令無沙汰、二萬餘疋許、毎年進之、可被入年紀云々、可被進勾當內侍於長谷云々、所詮是非共可爲亮闇儀、尤省略事等可注付云々、已被出御硯料紙、勸亞相與奪予、予堅固辭右筆了、勸亞相右筆、折引合、書之押筆伺予氣色、予申云、可被申御所存分歟、猶無是非之間、先亮闇方禁中事可被載歟、仍端書云、凶事方禁中如是歟忘却、倚廬御殿、警固固關、遺令奏、先規雖爲各別、可爲同時歟素服等宣下、上卿以下、

倚廬御裝束同御服事

倚廬還御之後、開關解陣宣下上卿事、

蘆簾事先清凉殿可爲母屋庇、先庇五箇間可被替、被仰云、唯階間許可被替、朝干飯臺盤所五箇間之由予申之、仰云、唯朝干飯二間許可替之、殘事不可及沙汰、清凉殿御帳仰、又不可被替云々、鋪設事、更其在所、何所可被替哉未定、

可賜素服公卿殿上人事　女房上臈中臈下臈　權中納言公兼　殿上人未定　各一人

女院方事素服人　予　在數院司

御葬禮供奉公卿　權帥前大納言教忠　予按察前中納言　冷泉新中納言爲廣　侍從中納言　殘忘却

倚廬傳奏中御門中納言永享中御門中納言祖父、後輔傳奏之由予申入　職事頭辨政資朝臣補傳奏之由予申入

五十日之間、予在數等可祗候御寺、於安禪寺殿可有五旬儀云々

大概此條々、此外以詞言上、又被仰條々繁多、不被記盡、

院中御法事權帥　年預俊名朝臣云々

四月廿八日、午剋許、女院聞危急之由、即參入、人々在同席、〇中略暫祗候之後退出、酉剋許、女院已御落居之由告來、　三年四月廿五日、今日亮闇畢、

〔延德御八講記〕抑禁中御八講は、毎度四箇日なるを、この度は五日十座の御願にて、中日を聖忌〇長

（享二年四月廿八日、後土御門母后藤原信子崩、）の當日にあてられけるも、かしこき御はからひにこそ、天下諒闇の事も、母后の御時は、いにしへは每度の儀にあらざるをや、ことさら元應に談天門院の御後、百五十餘年は、母后の御ために諒闇なる事は、一向に斷絕せるにや、その期御傍のよしにて、萬事省略のしきは、まことになさけをくれたるやうなれど、今の世にくらべては、安全豐饒の天下なりしいにしへだに、たえて久しきことをおこされて、諒闇の儀、次第をみだらず、倚廬の御所をかまへ、みす几帳までもあらぬさまにやつしおこなはれける、孝行の宸襟こそ、あはれにもかたじけなくも侍れ、その御心ざしとをればにや、五旬一回のごとし、

〔皇年代略記（後柏原）〕同（明應九年）九月廿八日、後土御門院崩、天下亮陰、

〔續史愚抄（後奈良）〕天文四年正月十二日甲戌、此日豐樂門院（藤子○後柏原后、後奈良御母、）崩、（實者去夜十一日子終剋薨、而今日院號後崩由奏聞、自去年違例、云々、）天下亮陰、

〔時慶卿記〕文祿二年正月五日院御所（○正親町）御危急早參、少焉崩御、辰剋竹園ヲ初、親王門跡攝家淸華諸卿雲客群參、今年七十七歲ニナラセ給フトイヘドモ、御情深慈悲ニ御坐故、惜歎限ナシ、（○中略）主上（○後陽成、正親町御孫、）モ則諒闇ニナラセ給、小御所ヘ渡セマシマス間、イマイマ敷御有樣也、

〔孝亮宿禰記〕元和三年八月廿六日戊午、今日巳刻、院（○後陽成、後水尾御父、）崩御、（御年四十七歲）九月六日戊辰、酉三條大納言祗候、關白殿（○二條昭實）諒闇之事有御沙汰、十日壬申、諒闇奉行柳原頭左中辨被仰出之間、內々示之由有使者、十七日己卯、關白殿其儀、公家衆諸法度、幷諒闇事等御沙汰云々、

一殺生禁斷五畿七道宣旨（從御葬禮七日）
一作樂停止之事宣旨（從御葬禮五十日）
一應停止素服舉哀宣旨
一被行赦宣旨五畿七道宣旨（依罪輕重御赦免）

右一紙自關白殿下被申將軍留書之、

四年八月十日丙寅、頭右大辨大祓日時定之事有談合、十九日乙亥、大祓日時、來廿九日之由頭辨被申、廿五日辛巳、諒闇終大祓、上卿花山院大納言被仰出云々、廿九日乙酉、諒闇終大祓日時定陣儀有之、上卿花山院大納言定熙、奉行職事頭右大辨兼賢朝臣參仕、辨竹屋口口口、大外記師生朝臣、左大史孝亮、六位外記安倍亮盛、史高橋亮春、吉書御覽之事有之、先官方、次藏人方、九月二日戊子、大外記、元日平座、幷諒闇終大祓陣儀方之事有沙汰、

〔基量卿記〕延寶六年六月十五日、女院〇後水尾后東福門院源和子御悩危急之由有沙汰、〇中略予參院、先參内處早令崩給云々、入夜關白左府右府等種々有評議、〇中略可有諒闇由御沙汰治定、傳奏坊城前大納言奉行、予則被仰出承之了、此事近年無之、珍事也、後陽成院御時事、曾以難知由攝家中被仰也、難儀之至也、先御請申了、十六日、向坊城亭、出納來、諒闇方事、大形藏人方申沙汰也、舊記等持參、十七日、抑遺令奏陣儀事、諒闇方之由攝家被存、予へ奉行之事被申渡由也、若此事、凶事葬送已下方傳奏奉行存知之事にては無之候哉、可尋由仰也、柳原大納言、予、攝家中へ申入處、此事必可爲諒闇、即刻警固固關、倚廬渡御之上ハ、勿論之旨存候由被申上、然者予奉行可存知由仰也、則承了、十八日、參内、攝家中御參、武家傳奏參會被申云、今度諒闇方下行之事、武家御申沙汰也、然バ梁田隱岐守、久保和泉守等へも、諒闇方傳奏奉行等も近日參會、内々下行等之事承合可然、猶戸田越州へ令相談、日限自武家傳奏指圖可申由也、心得候由申了、坊亞相同前、

〔基量卿記〕延寶八年八月十五日、申刻法皇〇後水尾、靈元御父、御不豫、以外之由風聞、依馳參之處、少御驗氣云云、則參内、醫師等申、畢竟今明日之中、可有御事哉旨也、各驚入了、諒闇方之事、條々有御尋、先以北首事等、爲臨期可勘進由也、則註一紙進上、則被遣中院亞相、彼卿、園亞相、醍醐三位中將等、件義可存知由也、子刻計退下、十八日、及暮法皇御不豫、以外之由有告説、則著衣冠參内、彌以外之由也、則參院、

又參內、已及寅刻、令絶入御云々、諸人驚歎此事也、內侍所引御注連、伯承之、修理職沙汰之、其義如去去年東福門院(○後水尾后源和子)御事之義、十九日、早天召清閑寺大納言坊城辨、御葬禮以下申沙汰事被仰出、葉室大納言、頭中將等、諒闇倚廬渡御等之義承之了、其後予、新院本院女御等へ、爲御弔儀參入了、從今日臺盤所朝餉下御格子、清涼殿東面垂簾、入下格子、上格子揚之、階間垂簾、上下共ニ撤格子、

〔丹波賴庸記〕寶永六年十二月十七日、新院(○東山)自前夜以之外御大切、今朝少御快云々、(○中略)酉刻參攝政殿、(○近衞家熙)相國公(○近衞基熙)渡御、予侍御前、攝政殿御參院、自相國公以使被窺御機嫌、唯今崩御之旨、從攝政殿被仰進、十九日、巳刻參攝政殿、

凶事傳奏　日野中納言　奉行　藏人右少辨光榮

諒闇傳奏　松木前大納言　奉行　頭左中辨尙長朝臣

右今日被仰出之旨

〔公卿補任(櫻町)〕元文二年四月十一日、仙院(○中御門)崩御(春秋卅七)追號中御門院、五月八日、遺詔奏被奏、行警固固關、上卿三條大納言、使右中將隆英朝臣、辨祐光、諒闇傳奏三條前大納言、奉行兼胤朝臣、

〔宗城卿記〕寬延三年四月廿三日、上皇(○櫻町、桃園父、)自廿一日御不快、至今日大彌留、午時許崩御、四年四月廿七日、今日諒闇終也、

〔公卿補任(桃園)〕寶曆十二年七月廿一日、主上崩(春秋廿二)同月廿七日、智子內親王(○後櫻町)踐祚、(春秋廿三)被准父王(○桃園)天下諒陰、

〔公卿補任(光格)〕天明三年十月十二日、盛化門院(○後桃園后近衞維子、光格御養母、)崩、十一月十三日、遺令奏幷警固固關、上卿三條大納言、辨良顯、遺令使右中將隆久朝臣、諒闇傳奏日野前中納言、奉行賴熙朝臣、四年十月十六日、諒闇終大祓、參議源宰相中將、辨胤定、奉行隆彭朝臣、

〔實久卿記〕弘化三年二月六日壬辰、自去夜伺候、今曉(寅刻)天皇(○仁孝)崩給、(○中略)抑頃年玉體被渡平安、

萬民爲安堵之處、兩三日常膳乖例、已晏駕給、四海諒闇、誠哀哉、予直卷纓、天皇春秋四十七、○中略今日踐祚、傳奏右大將、家奉行俊長朝臣、諒闇傳奏源大納言、基奉行愛長朝臣、凶事傳奏高倉前大納言、永奉行顯彰被仰出了、

〔滋草拾露凶事〕諒闇例醍醐以來

醍醐	延長八年九月廿九日崩	同九年	新主	朱雀御子
村上	康保四年五月廿五日崩	同五年	同	冷泉御子
冷泉	寬弘八年十月廿四日崩	同九年長和元	主上	三條御子
圓融	正暦二年二月十二日崩	同三年	同	一條御子
後朱雀	寬德二年正月十八日崩	同三年永承元	同	後冷泉御子
後三條	延久五年五月七日崩	同六年承保元	新主	白河御子
堀河	嘉承二年七月十九日崩	同三年天仁元	同	鳥羽御子
鳥羽	保元元年七月二日崩	同二	主上	後白河御子
後白河	建久三年三月十三日崩	同四	同	後鳥羽御子○御子、宜作御孫
二條	永萬元年長寬三七月廿八日崩	同二仁安元	新主	六條御子
高倉	治承五年養和元正月十四日崩	養和二壽永元	同	安德御子
後堀河	文暦元年天福二八月廿六日崩	同二嘉禎元	同	四條御子
後嵯峨	文永九年二月十七日崩	同十年	主上	龜山御子
後宇多	元亨四年正中元六月廿八日崩	正中二年	同	後醍醐御子
伏見	文保元年正和六九月三日崩	同二年	同	花園御子
後伏見	延元元年建武三四月六日崩	同二年	同	光明御子

光嚴	貞治三年七月七日崩	同四年	主上後光嚴御子
後光嚴	應安七年正月廿九日崩	同八年永和元	新主後圓融御子
後圓融	明德四年四月廿八日崩	同五年應永元	同後小松御子
後小松	永享五年十月廿日崩	同六年	主上後花園御子○養子
後花園	文明二年十二月廿七日崩	同三年	新主後土御門御子
後土御門	明應九年九月廿八日崩	同十年文龜元	同後柏原御子
後柏原	大永六年四月七日崩	同七年	同後奈良御子
後奈良	弘治三年九月五日崩	同四年永祿元	同正親町御子
後陽成	元和三年八月廿六日崩	同四年	主上後水尾御子
後水尾	延寶八年八月十九日崩	同九年天和元	同靈元御子
東山	寶永六年十二月十七日崩	同七年	新主中御門御子
中御門	元文二年四月十一日崩	同三年	同櫻町御子
櫻町	寛延三年四月廿三日崩	同四年寶曆元	同桃園御子
桃園	寶曆十二年七月廿一日崩	同十三年	同當今姉○後櫻町
後高倉	貞應二年五月十四日崩	同三年元仁元	主上後堀河御子

母后亮陰例

皇太后穏子○藤原氏醍醐后	天曆八年正月四日崩	同九年	主上村上母
東三條院○藤原詮子圓融妃	長保三年閏十二月廿二日崩	同四年	同一條母
建春門院○平滋子後白河后	安元二年七月八日崩	同三年治承元	同高倉母
藻璧門院○藤原竴子後堀河后	天福元年貞永二九月十八日崩	同二年文曆元	同四條母

談天門院〈○後宇多后藤原信子〉　文保三年〈元應元〉十一月十五日崩　同二年　同　後醍醐母

嘉樂門院〈○後花園后藤原信子〉　長享二年四月廿八日崩　同三年〈延德元〉　同　後土御門母

東福門院〈○後水尾后源和子〉　延寶六年六月十五日崩　同七年　同　靈元准母

豐樂門院〈○後柏原后藤原藤子〉　天文四年正月十一日崩　同五年　同　後奈良母

○按ズルニ、本書上文諒闇例ニ、後陽成天皇ノ正親町天皇ノ爲ニ諒闇ヲ行ハセ給ヒシコトヲ脫セリ、

〔滋草拾露 凶事〕雖擬祖父依實父亮陰例

嵯峨天皇〈仁明父〉　承和九年七月十五日崩

子時亮陰　帝仁明天皇〈嵯峨皇子〉

按、去承和七年伯父淳和天皇崩、帝仁明天皇、依爲淳和天皇之養子、天下亮陰、今度又亮陰也、

王代式云、父帝嵯峨天皇崩、雖擬祖帝、依爲實父亮陰、

雖爲實父依兄猶子無亮陰例

伏見院〈花園實父〉　文保元年〈正和六〉九月三日崩

子時非亮陰　帝花園院〈實伏見院第二皇子〉爲後伏見院〈伏見院第一皇子〉御猶子、

王代式云、父帝〈伏見〉崩、依擬祖帝、無亮陰例、〈但服錫紵〉

雖爲養子爲兄弟之間非亮陰例

朱雀天皇〈村上兄〉　天暦六年八月十五日崩

子時非亮陰　帝村上天皇〈朱雀院御養子〉

雖爲叔父依擬父帝亮陰例

淳和天皇〈桓武第三皇子〉　承和七年五月八日崩

于時亮陰　帝仁明天皇（淳和天皇養子、嵯峨天皇第二皇子）
王代式云、淳和天皇崩、非當帝之親、雖為叔父、依擬父帝亮陰、於清涼殿著素服云々、

雖為祖父為亮陰例

後白河院（鳥羽御子）建久三年三月十三日崩
于時亮陰　帝後鳥羽院（高倉第四皇子）
王代式云、准仁明天皇舊例被仰亮陰、

兄崩亮陰例

天智天皇（舒明太子、母皇極）十年十二月三日崩（七年二月、以天武為皇太弟、）
天武天皇（舒明第二皇子、天智同母弟）崩、稱病出家入吉野山、翌（壬申）九月還向倭京、居本岡本宮、二年（癸酉）即位、
王代式云、天智天皇崩、天下亮陰云々（非二親、哀含兄喪、被仰亮陰之例、）
按、此時天皇（天武）出家入吉野山、翌年九月歸大和國岡本宮給、此後被仰亮陰歟、委可考、
平城天皇（桓武長子）天長元年（○弘仁十五年）七月五日崩
于時亮陰　帝淳和天皇（桓武第三皇子）

弟崩亮陰例

桃園院（櫻町皇子）寶曆十二年七月廿一日崩
于時亮陰　帝（桃園姉、櫻町第二皇子）

兄弟非亮陰例

朱雀（醍醐第十二皇子、母昭宣二女）天曆六年八月十五日崩
帝村上天皇（醍醐第十四皇子、朱雀同母弟）
後一條（一條第二皇子、母上東門院）長元九年四月十七日崩

帝後朱雀院一條第三皇子、後一條同母弟

後冷泉後朱雀第一皇子、母道長二女　治暦四年四月十九日崩

帝後三條後朱雀第二皇子、母三條皇女

近衛鳥羽第八皇子、母美福門院　久壽二年七月廿三日崩

帝後白河鳥羽第四皇子、母同崇德

後光明後水尾第四皇子、母基任女　承應三年九月廿日崩

帝後西院後水尾院第六皇子、母四條局

〔神皇正統記花園〕戊申の年、卽位改元、〇延慶元年父の上皇〇伏見世を知らせ給ひしが、御出家の後には御讓にて、御兄の上皇〇後伏見知らせまします、法皇かくれ給ひても、諒闇の儀なかりき、上皇御猶子の儀とぞ、例なきことなり、

〔皇年代略記花園〕文保元年九月三日、父帝伏見崩、依擬祖帝無亮陰、仙服錫紵、

〔皇年代略記後光嚴〕文和元年十一月廿九日、國母陽祿門院〇光嚴后藤原秀子、後光嚴母、崩、無亮陰之儀、

〔槐記〕享保十七年七月十二日、諒闇ノコトハ、久シクナカリシガ、今年イカナル年ニヤ、東山院〇靈元皇子以來也トノ仰ナリ、サアルニコソ、父帝ニアラザレバ諒闇ハナシ、此度モ東山院御存生ニテマシマセバ、東山院中ノ觸穢ニテ、禁中ニ觸穢ハナシ、父帝ナキユヱニ、祖父帝ノ諒闇ニ御座ナサルノ儀也ト仰ナリ、〇家禮ノ承重ノ義ト全ク同ジ、且父母之喪無貴賤一也ノ義モ亦同ジ、　十五日、觸穢ノコトナシ、一兩日モ過ザレバ、萬事ノ儀調ハズ、古ヘモ如此ニテ、急ニ諒闇ニハナリガタキニヤト申シ上グ、仰ニ、古ヘハ其事コトゴトク備ル、卽日諒闇ニテモ、何ノツカエルコトナシ、今ハツカユルコトノミナリ、ソノコト萬事スマネバ、諒闇ノ儀トヽノハズト仰ナリ、　八月七日、諒闇ノコトヲ申シ上グ、〇六日靈元崩サレバトノ思召ガケナキ御コトニテ、別シテ關白ニモ御闇敷マシマス、御忌服ノ筈ナレドモ、別勅ニテ

除服仰ラル、左ナケレバ墊居ナサレテバナラズ、左樣ニテハ中々スマヌコト多シ、九月五日、天子ノ御喪服ヲメサルヲ錫紵ト申スハ、漢ノ文字ニテ候ヤ、イカニモ漢ノ文字ナリト仰ラル、天子ノ御服ヲメサルヽハ、院ノ御送葬ノ日ヨリメサルヽト申スハイカヾゾト窺フ、仰ニ御送葬ノ日、始テ遺詔ノ奏トイフコトアリ、院ノ遺詔ヲ奏シテ、服ヲメスコトナリ、世上御送葬ノ日マデ、御章ゟヤウニ云ハアヤマリアル、シ、

〔古今和歌集十六哀傷〕諒闇明〇仁のとし、池のほとりの花を見てよめる、　たかむらの朝臣
水の面にしづく花の色さやかにも君がみかげのおもほゆる哉

倚廬

〔徒然草上〕諒闇の年ばかり、あはれなる事はあらじ、倚廬の御所のさまなど、板敷をさげ、あしの御簾をかけて、布のもかうあら〳〵しく、御調度どもおろそかに、皆人のさうぞく大刀平緒まで、ことやうなるぞゆゝしき、

〔塵添壒囊抄十六〕色字事付倚廬御所事
倚廬ノ御所トハ、諒闇ノ時ノ天子ノ皇居也、内裏ニ板敷ヲ下、葦ノ御簾、布ノ木瓜、〇帽額大刀平緒、其外人ノ裝束等、皆非常、是ヲ倚廬ノ御所トハ云也、

〔禮記注疏四十五喪大記〕父母之喪、居倚廬不塗、寢苫枕凷、非喪事不言、君爲廬宮之、大夫士襢之、疏正義曰、居倚廬者、謂於中門之外、東牆下、倚木爲廬、故云居倚廬、不塗者、但以草夾障、不以泥塗之也、寢苫枕凷者、謂孝子居於廬中、寢臥於苫、頭枕於凷、非喪事不言者、志在悲哀、若非喪事、口不言說、君爲廬宮之者、謂廬外以帷障之、如宮牆、大夫士襢之者、襢袒也、其廬袒露、不帷障也、

〔後成恩寺關白諒闇記〕天皇渡御倚廬、內匠寮儲承塵、掃部寮以筵役御裝束、見西宮記、先著錫紵、貲布御帶、著御、內侍以神璽等置廬中、次入御、御膳黑折櫃黑飯、〇副白飯中略
御倚廬事、依以日易月之儀、滿十三日還御、而代々例、縮一日還御也、永萬五箇日御坐倚廬、保元十一日、明德七箇日御坐也、用不快例之由有沙汰、文明三年十四日御坐、有例哉、可尋也、男女於門外著素服、〇中略

天皇渡御倚廬事明德度、五月十六日也、廿二日還御本殿、經七箇日、以日易月之謂、以外相違、永萬五箇日御坐倚廬、若可相准歟云々、但事議不定、准據、又不快例也、次奉行定俊語云、本設還御日限事、相尋兩局之處、保元度、經七箇日還御、但或記、十一日之由注之、仍不被用、或記之說經七箇日還御第一、又無日次之故也云々、保元十一日被坐倚廬、無子細之歟、

〔渡御倚廬次第〕長享二年關白○藤原政忠作進

當日未明奉行職事召儲

陰陽師於藏人所令勘日時

造始倚廬　裁縫素服

渡御倚廬　著御御錫紵

諒闇御調度日時同令勘之

職事付内侍奏聞、日時勘文留御所、入柳筥、不加懸紙、凶事之例也、

今日仰下素服人々

奉行職事注折紙下之

公卿　殿上人　典侍　尙侍　命婦

藏人　出納　御厨子所

以上

刻限渡御倚廬

吉服御引直衣、紅生御袴、藏人頭供御草鞋、

近將取劒璽候前後、侍臣曳脂燭前行、

關白候御後

其御路敷筵道、自臺盤所妻戶出御、此間懸翠簾、關白褰、今度關白不參、藏人頭候之、

經御殿南東幷黑戶南東簀子、自倚廬南面第一間入御、關白褰幌、關白不參同前

次主上著御御帳前平敷御座、東面

次近將置劒璽於御帳中御枕方退下、

次藏人頭持參御冠置御前、纓細燕尾置柳筥、居土高坏、御幘同人、

次藏人頭持參錫紵御裝束置御前、

布黑染闕腋御袍、同半臂、下襲、素袴、平絹純色御衵、單大口、柑子色繩御帶、盛柳筥、居土高坏、

次持參內藏寮御裝束置御座傍、

純色綿御衣一重、柑子色御袴一腰、入白生平裹置衣筥、錫紵御裝束外藏寮御衣別置之、度々例如此、

次著御錫紵

御裝束師參進奉仕之、向吉方著御之、

御裝束畢御座

撤本御冠、奉加服御冠、

次取貲布奉結之

臨期藏人持參御櫛髮搔等、居柳筥、御裝束師、如形奉理御鬢了卽返給藏人、

次主上向舊主御崩方、爲報酬著錫紵之由有叡念、是度々例也、

次令脫御裝束給

御裝束師、如元置御裝束於柳筥退下、召藏人撤也、

次女房等參入

非素服人少々、同參候倚廬、

次素服公卿殿上人著本殿上、卽起座出北陣、著素服著倚廬殿上、起座脫素服退出、

次供御膳

六前、白飯上盛黑飯、
陪膳典侍役送皆素服、女房居畢、置御箸、卽撤之、

〔自倚廬還御次第〕

當日早旦、內匠寮奉仕諒闇御裝束、
次奉行職事、召儲陰陽師於藏人所、勘可除御錫紵日時、職事奏聞之、勘文留御所、
刻限素服公卿殿上人參入、各著素服著倚廬、殿上人公卿於陣後邊著之、殿上人於倚廬殿上立蔀外著之、
次奉行職事出殿上、可除素服之由仰之、
次公卿殿上人起座、向北陣外脫素服、○一本此下、有參議辨外記史等、參向朱雀門大祓事、十五字、
其儀皆著時、藏人著脂燭相從、○一本此下、有次大祓行事辨歸參、奏大祓之由、十三字、
次女房同出門外脫
次陰陽師、申時至之由、
此間掃部寮、鋪宮主座幷葉薦一枚於倚廬南庭東邊、○一本此下、有刻限出御、吉御直衣御張袴、吉御冠卷纓、關白候御座左、宮主著庭中座、二十八字、
次著御御座、
次藏人頭、持參錫紵御裝束、居柳筥如先度、
可爲本役人或五位職事
次御裝束師參進奉仕之、
其儀如先度、
明德永享、御表衣御衵大口許著御、自餘略之、今度又可然歟、

次御令脱錫紵給

御裝束師、如元帖之持出之授藏人、藏人授內藏寮官人、給之置宮主前薦上、

置布類、留絹類、

次著御諒闇御裝束、（此段不審）

內藏寮付女房內々進之、御冠自元爲服御冠、不可改、

此間宮主著座

次藏人撤掌燈、

次取前敷御座一帖敷東間、藏人役之、

次主上移著御御座、（建久以來例也）

次供御贖物、

陪膳藏人頭、役送五位藏人、

次宮主供大麻、

藏人頭供之、乍令持陪膳人撫御之、返給如恒、

次御禊畢宮主退出

次本役人撤御贖物、

此間主殿寮奉仕立明、

次主上著御本御座、

次敷直御座、如本舉掌灯、

次宮主內藏寮官人等、相具御錫紵幷臣下素服等、向河原切棄之、○（一本此下、有主上御髻櫃、關白以下髻櫃、十二字、）

次還御本殿、（其儀如渡御時、）

次開關解陣事

上卿著陣

職事出陣仰開關解陣云々、諸衞參陣召仰之如仰、

次召辨三關仰國司可令開之由仰之、辨下知史、

次職事更出陣、侍臣可聽著黑橡之由仰之、

上卿召大外記仰之

次上卿以下退出

（本云）今度初供晝御膳、御精進陪膳役如例、

次出御供朝御膳、陪膳藏人、出御大床子被立御箸、入御之後撤之、

次供夕御膳、四位雲客、

藏人奏、內侍鳴扇如恒、

次殿上臺盤、侍臣以下行之、

〔諒闇和抄〕倚廬渡御の事

倚廬とは、板鋪を土にさげて作る也、土殿と訓り、異國の制、粗禮記（喪大記）にのせたり、先皇の遺詔を聞し召て、此倚廬の御所へ入らせ給ふて、十三日の間、ことにつゝしみたまふ也、天子上皇は、日を以て月に易るとて、一年（十三箇月）をつゞめて、十三日錫紵を著御したまふ也、女院以下は、日を以て月に易たまふ事なし、日數は十三日本儀なれども、日次によりて、延る事も縮る事も其例すくなからず、少々をのせ侍る、承和七年淳和天皇御事の時、主上（仁明天皇）の御叔父にあたりたまふを、父帝になぞらへられ侍りて、十五日倚廬に入らせ給ふ、元慶四年清和天皇御事の時、主上（陽成院）御子として、六日の間錫紵をめす、保元三年鳥羽院御事の時、主上（後白川院）御子として、十一日倚廬にましま

す、明德四年後圓融院の御事の時、主上（後小松院）御子として、七日めにいろより本殿へ還御なりぬ、これらにてもみるべし、さて當日、職事陰陽師を藏人所に召て日時をかんがへしむ、倚廬をつくる、そふくをたちぬふ、倚廬渡御、錫紵著御、又亮闇の御調度をつくる、此五箇條也、職事此勘文を（紙かけなし、御事勘文の例也、）文杖にさしはさみて（或は柳筥にいるゝ例あり）奏聞す、（たゞし御調度の勘文は奏聞せず、代々の例也、）勘文は御所にとゞめてかへし下されず、執柄そふくを著べき、公卿殿上人以下女房などの交名を志るして下したまふ、（人數時に志たがひて多少あり）公卿參りて本殿の殿上にさぶらふ、（むかしは公卿陣の座にさぶらふ、殿上人殿上につく、後代公卿殿上につくさて、殿上人は便宜所にさぶらふ、）時刻出御、筵道を鋪て布單を鋪ず、御引直衣著御の故也、藏人頭、必志そくにさふらふ、近衞の中少將（宰相中將もさぶらふ先例有）二人、劍璽をさゝげて前後にさふらふ、執柄御後に候、但し御引直衣著御のあひだ、御裾にはさふらはれず、たゞ御簾に供せらる、御帳の前の平鋪の御座に著御、近衞將、御劍璽を御帳中におく、（かねて案を設けたり）執柄御傍に候す、（座なし、代代の例也、）藏人頭御錫紵を持參、御錫紵とは御素服也、天子の御素服は錫紵と申なり、（仙洞も錫紵と申、女院以下たゞ御服と申なり、）御冠、（布をしてはる、纓の纓也、柳筥にのせて高杯にすゑ、童帝の御時御冠なし、）御錫紵、（布黒染闕腋御袍、同御半臂下襲、同御表袴、平絹鈍色御衵單なり、御腰黒絹、御大口は平絹柑子色なり、御帯、（わらもてたかによりて、鈍色のおにてまく、）以上柳筥にのせて、大高杯にすゑたり、）次內藏寮御裝束を、又藏人もてまゐる、（これは御宿衣以下なり、）次執柄裝束師をめす、次御錫紵を著御、（後代は裝束師の人めさせまゐらせず、家の人各々まゐりめさせまゐらす也、）次居り御す、綣纓の御冠をめす、（童帝の時は、御冠のさたなし、但し御總角な結あらためるべし、）次裝束師の人、御鬢の具を持參して、かたのごとく御鬢ををさめまゐらす、次叡念の儀あり、先皇の御廟の方にむかはせおはしまして、御位をふませたまひて、御ために錫紵を召て、むくひさせたまふよしを叡心におぼしめしつゞくる事也、次御錫紵をぬがしめたまふ、（さきのごとし）此間職事殿上にいでゝ、錫紵著御のよしを公卿に告示す、（昔はこの時、素服の人々の交名志るしたる折紙を下す也、）公卿殿上をたちて、（無名門の外より、六位藏人志そくをさす、）殿上人これに志たがふ、北陣にむかひて東上北面に立ならびて（殿上人はいさゝかおめりて立なり）劍をとく、（又とかぬ人もあり、纓はもとより巻、又今まく人もあり、）衞府の人、弓箭劍等をとく、笏をてつせず、殿

上人も凡かくのごとし、素服をつくるに、公卿は六位藏人、殿上人は出納これをきする也、素服は黑き布にて、かたのごとき小忌のごとくなるもの也、おの／＼つけをはりて上﨟より次第にかへり入て、倚廬の殿上につく、殿上人便りの所にさふらふ、女房素服をつけてかへり參る、次內膳司御厨子所、御膳を供ず、御臺六本女房御陪膳にさふらふ、白御飯の上に、くろき御飯をくはへたり、黑色に染るは後代のあやまりなるべし、黑はしらげぬよねなるべし、次執柄直廬にしりぞかる、この遲速先例定らず、建久月輪攝政は、御膳すみて後しりぞかる、けふより十三日、此いろにならせらるべきなれども、後代はひそかに常の御所へ歸り入らせたまふ也、素服を賜る公卿殿上人も、むかしは十三日そふくを著てさふらひし也、中頃より後は、吉服卷纓にて番にも參り、又院中以下他所へも參りぬ、近代還御の日まで、出仕せぬことになりぬることそ、こゝろえがたく侍る、

〔諒闇和抄〕本殿還御の事

當日早旦、又亮陰の御裝束を奉仕す、これは晝御座よのつねの御帳を撤して、白木の御帳をたつ、濱床の金物もあかがねを用ゐたり、帷も鈍色の絹をかけたり、師子形狛犬はもとのごとし、大床子も撤したり、晝御座の御疊の端、鈍色なり、御茵もおなじく鈍色也、御硯宮も黑ぬり也、母屋廂悉く蘆簾をかけわたしたり、鈍色の布のへり、帽額も布なり、鈎丸はあかがね也、殿上朱臺盤を撤して黑漆の臺盤を立たり、御倚子を撤して無文圓座を鋪たり、日給の簡もとのごとし、疊はみな鈍色の端さしたり、臺盤所もこれにおなじ、冠間朝餉臺盤所など、みな蘆簾かけわたしたり、これらを亮陰の御裝束といふ也、倚廬の間は、御殿の御格子を下したるを、今日これも上て、此御裝束を奉仕する也、御簾は母屋は卷て廂は猶垂たり、音奏警蹕もとのごとしの日、此御簾はまくべき故也、職事陰陽師をめして、錫紵除御すべき日時をかんがへしむ、奏聞の事など、みな渡御の日におなじ、素服の公卿殿上人、おの／＼參りあつまりて、公卿は殿上につく、殿上人は便所にさふらふ、次職事殿上にいでゝ、素服除べきよしを仰す、公卿

上臈より殿上を立て、殿上人相またがふ北陣にむかひて、藏人主そくなさす素服をぬぎて、渡御の夜、著る儀のごとし、衞府の人人、纓をかけ弓箭を帶し、衞府ならぬ人は纓を垂なざする也、いづれも帶劒の人は帶劒して、本殿の殿上につく也、殿上人これにおなじ、但し便宜所にさふらふ、女房もおなじくそふくぬぎたり、執柄參らる、安元、松殿は渡御日長暦の例著用あり、建久、月輪は還御の日始て亮陰の服を著用、其外もらしぬ、掃部寮、宮主の座、幷に葉薦をいろの庭中御はしのむかひの庭なりにしく、陰陽師時刻到るよしを申す、次御座に著御、まことには、常の御所よりひそかに今の御所へわたらせたまふなり、十三日の間、此所にならせられしすがたなり、次藏人頭、御錫紵をもて參る、渡御の日のごとし裝束師の人參りてぬがせ參らす、まことには、又家の人ぬがせまゐらす、これも吉方にむかはせおはしますなり、御錫紵はもとのごとくたゝみて、裝束師の人もち出て、六位藏人にたまふ、藏人きぬのるいをとゞめて、布のぶんばかりを內藏官人にたまふ、官人宮主の前、薦の上におく、次亮陰の御裝束を著御、內藏寮調進なり橡の御袍、鈍色の御袙、同色御單、柑子色の御袴等なり、御冠は縄纓の御冠を渡御の日めしたるを、一周のあひだあらためられず著御なり、これ代々の例也、童帝の御時、御冠の沙汰なし、宮主庭中の座につく、藏人掌灯を撤す、この事定て故ある事ならんかし、猶たづぬへし、次藏人前敷の御座一帖を南方にしく、宮主の候ずるさほり也もあり、次宮主御祓を修して大麻を參らす、藏人頭とりつたへてこれを供ず、御氣をかけてかへしたまふ、藏人頭宮主にかへす、宮主まかづ、藏人頭御座を鋪直して、掌燈を供ず、もとのごとし、次藏人頭、御贖物を供ず、人形ばかりなるべし、但し散米なり供ずる事、次本殿に還御、近衞のすけ劒璽に候じ、藏人頭脂燭をとる、執柄御後にさふらふ、事々渡御の夜のごとし、錫紵の御裝束、又臣下の素服等は長櫃にいれて、內藏寮の官人宮主等相具して、吉方の河原にむかひてながしすつ、もし此夜まゐらぬ素服の人々あれば、その人のそふくも、この時ひとつに相具して、おなじく流しすつる也、これ先例也、抑本殿にて晝御膳を供ず、陪膳四位殿上人、つねに同じ、

〔續日本紀四十桓武〕延暦八年十二月乙未、皇太后〇桓武母高野新笠崩、丙申、天皇服錫紵、避正殿、御西廂、率皇

太子及群臣擧哀、百官及畿内、以三十日爲服期、諸國三日、並率所部百姓擧哀、但神郷者、不在此限、

〔大日本史禮樂五〕按明月記、倚廬用東對、又玉海、倚廬以東對女房局屋爲其所、據此則東西廂、皆指倚廬也、

〔日本後紀十三桓武〕大同元年三月辛巳、○桓武崩於正寢、春秋七十、皇太子○平城哀號擗踊、迷而不起、參議從三位近衛中將坂上大宿禰田村麻呂、春宮大夫從三位藤原朝臣葛野麻呂、固請扶下殿、而遷於東廂、

〔西宮記臨時四〕喪服

天曆八年正月十日、亥剋坐倚廬、或曰、發喪日可移作廊、(清涼殿北廊)四日四夜坐、不可然云々、○此月四日、村上母后藤原穩子崩、即著素服、二十二日、除素服出倚廬、

〔殿暦〕嘉承二年七月廿四日戊申、卯剋許參朝干飯方、内府○源雅實被候、今日御葬送日○此月十九日堀河崩也、爲事不具、内府被示、例時所晝御座方也、諒闇幷倚廬□御沙汰、猶未無一定、仍爲其沙汰、申時許參院、顯季卿申事御倚廬事、人々申云、不可御倚廬、是服身不御故也、而者云、御所下廊可御者、仍以其由奏院、御返事云、人々隨申可量行者、又公卿素服を著事、又人々不可候由申、仍同奏院、仰云、人々申定可候者戌許事切了參内、仰顯隆召陰陽師泰長、令勘日時、無勘文申云戌、余○藤原忠實著衣冠參御前、大納言公實同著衣冠、抑攝政著衣冠時、只人可著束帶歟、是不知案内歟、頭中將實隆、御劒を持前行、内侍取宮候御後、余候御共、主上○堀河渡給廊之後、余下宿所、○中略御倚廬時、殿上付御可渡便所、雖然今度不可然由人々令申、仍不渡、又御膳用土器云々、　八月五日戊午、主上還給本殿、余著衣冠、内侍二人、取御劒等候前後、於廊御所先有御祓、頭中將實隆陪御膳、其儀主上御倚廬時儀也、

〔長秋記〕大治四年七月十日丙戌、參女院、○鳥羽后待賢門院藤原璋子、中略、予○源師時問別當云、新院○鳥羽可重喪給之由雖有其聞、倚廬事無其沙汰如何、○此月七日白河崩別當云、此間事不知案内、上無示合、御事例不知子細云々、女房見參後退出、參齋院、以師行令奏之、倚廬事無沙汰、倚如此事、尋先例可御沙汰候也、又毎迎七日、

雖非御物忌、外宿人不參候之由故賢所申也、可令存其旨者、仰云、倚廬事、只今別當所奏也、然而不知子細之間、詳不答、汝委相尋可示所存、前關白京極大臣時例可相叶、後度儲倚廬否之由相尋可示者、此後退出、　十一日丁亥、早朝以消息問前關白殿〇藤原忠實倚廬間事、民部卿左大辨返事詞、民部卿左少辨實親等也、無他云々、此間師行以消息傳仰云、夜前所令申倚廬事、早相尋可令申、隨其趣可令尋攝政御也、此間民部卿返事到來云、前關白被儲倚廬〇也、他子息又如此云々、雖私語相交、以此書令奏覽、仰云、以此趣尋遣攝政家云々、居所堅根發故不能早參、臨酉刻參院、家榮朝臣付新中納言奏申云、自十五日入秋節者、王相忌在此殿、而可被儲倚廬者、任先例下板敷事可有憚歟、此事無左右仰進、被仰云、爲姙者不造作之由近年有其沙汰、仍此院度々御產被停作事、而前日被尋仰處、於姙者所在者可被忌、於他所不可忌之由令申、仍令存其旨處、女院御懷姙時、所々造作及御願寺作事、皆以被停申旨、與近代沙汰也相違如何、重可辨申、家榮陳云、姙婦家不造作事、不見文簿、唯是口傳也、其旨故道言朝臣所令申也、然而道子女房懷姙間、法勝寺作事不被留、以此例於他所可無憚之由可令申也、然而近代令忌習給、於今度爭不忌也、然彌下板敷事、有其憚歟、納言申此旨、以同納言被仰下官云、家榮申旨如此、爲之如何、可量申者、下官申云、天喜元年、四條后、母進命婦喪間、以東三條殿被用土殿、然而不下板敷、由故入道所語候也、加之皇帝著素服給時、以清涼殿北廊爲倚廬、件廊本自落板敷也、仍就下儀不候者、雖就不下、院中自本御所板敷落所候者、使令用土殿御、有何難哉、雖無縱先例、強破二憚、不可被下板敷歟、仰云、汝申旨尤可然、臺盤所北廂落板敷也、便被用所可有便宜者、可被用其儀也、抑依無他別當、以雅定卿此方事可令執行、汝於見及事可助成者、此後參女院、相具女子退出、沐浴歸參候院間、以師行被仰云、倚廬事、令尋攝政給處、被申旨不詳、延久度事、委見土御門右府記歟云々者、引見件記可示合也者、及深更退出、　十三日己丑、依夜前仰辰始參院、〇中略　下官進申云、堀川院崩時、院不御倚廬、不著素服之由、故入道左大臣曆ニ見者、兩度令著素服之由、其難不可候歟、仰云、件注出可進、且人々可令見御也者、

仍以所乘能書者、可寫進之由示治部卿、仰云、殿中御裝束倚廬事、一行付康和大相國例可行者、臨曉退出、　十五日辛卯、酉剋參院、先參新院御方、所々御裝束改替程也、不能子細、後可記、漸日沒間、陰陽頭家榮朝臣申刻限、仍新院著御錫紵云々、〇中略院於此中著錫紵、新中納言雅定卿奉仕事乃脱遷御倚廬、東對北第三渡殿爲倚廬代、須任例落板敷也、然而自御所有王相忌、上、姫夫憚在、仍件渡殿北廂板敷近地、仍以折中儀被用御所也、件渡殿三間也、南北兩面懸伊與簾、非蘆簾、其中長押上西一間傍遣戶立紙障子、南西北三間也、敷鈍色廣疊一帖爲御寢所、長押下傍北敷同疊二枚、此外無他事、不張筵、御座皆有緣不下板敷、仍可謂倚廬代也、尋常倚廬懸蘆簾、敷無緣之疊、筋天井東對南面、懸伊與簾下格子、本御所也中渡殿懸同伊與簾、敷鈍色緣疊、是北面人候所也、　廿七日癸卯、後聞新院令除錫紵御、〇中略還御倚廬代、

〔玉海〕建久三年三月十九日辛卯、此日主上〇後鳥羽避正殿御于倚廬也、〇此月十三日後白河崩余〇藤原兼實未明相尋之處、陰陽師未參云々、又職事未見、仍早召具宣遠朝臣、可忩參之由仰宗賴朝臣、在陣中小時宗賴持來日時勘文、是內覽也云々、見了不加禮紙、內事勘文如此云々、返給、只遣倚廬日時也、不覽御調度日時、延久保元等例云々、卽余著直衣參御所、宗賴付內侍奏、日時、差柳宮、或指杖云々、留御所、先例歟、卽工等參入下板敷云々、〇中略次更下宿所休息、秉燭著吉服直衣參御前、召親國問倚廬御裝束具否、申云、皆悉沙汰具了、但御裝束未持參、所相待也云々、此間於御所招能保卿、令見昨日右大臣〇藤原兼雅所持參之御處分帳了、能保云、今日於謁右大臣每事申談、又承了云々、如本付余封誡了、及亥終持參御裝束云々、仍仰親國令問時、申已至之由、此間主上〇後鳥羽著御裝束、吉服御引直衣、綾二御衣、單衣、紅生御袴等也、忠季朝臣信清等候也、內侍二人伊與、辨參上、取劒璽、昔御座御劒、內侍進直取之、候前後、主上經御殿御帳北幷東中障子等、御東面北妻戶下、內侍候同戶內南北腋、頭宗賴朝臣取脂燭前行、頭實明朝臣取御草鞋、余褰御簾、卽實明取璽御筥前行、忠季朝臣取御劒候御後、先宗賴、次實明、次主上、次忠季、次第此定也、其路經臺盤所廊南緣東行、入御自倚廬御所西面北戶、宗賴留戶外、實明朝臣、自褰幌入其中、直進御帳前、其路頗不得心、須自帳北參進也、而往帳後廊

（事不存先規歟、）余參進褰幌卽參入、忠季朝臣相次參入、主上經帳面上、褰取帳之間、御東前敷座（東面）、余經同路御座北間（無座）、此間實明忠季等、置劒璽於御帳中御枕方（南也）、忠季經帳與母屋柱之間、實明經柱外（不知故實也）、各退下、次實明朝臣取御冠（等先是倚廬東面出納儲候、藏人傳進之）、入自倚廬東面南戶（件戶先例不懸物、今日懸帳、可尋之）、經女房候所、經母屋西際御帳幷御座等、置御前（件御冠、纓額口口切上緒土高坏上置柳筥、其上敷布切、此上置御冠也、先例置御座前云々、而間狹歟、其外無所、仍只置之）、上也（御座）、次宗賴朝臣持參御裝束（布黑染闕腋御袍、同半臂、依輕一衣也、同下襲、同布單衣、御袴、平絹鈍色、御相單、柑子色大口、置御筥、居土高坏）、實明朝臣持參內藏寮御衣（鈍色絹御衣一領、御單衣也、其緒厚、同色二御衣一具、柑子色御袴一腰、裹白生平絹、置衣筥）、置御座南傍、次召忠季朝臣、（撤劍璽、只御劍許參上也、）經同路參上、先解吉御直衣、置御帳北邊（依祭也）、次著御裝束（向吉方、乾也）、忠季一人奉仕之、半臂緒只一筋也（長一丈、自中二倍押折也）、仍作二倍引まはして奉結、左方無垂緒也、御帶索也（率減如例）、自左引まはして片䯼ニ奉結也、御裝束了居御、其後撤本冠（替置吉御裝束上、御冠猶同撤之）、奉加服御冠、此間召御梳髮藏人範高置柳筥持參之（經前路也）、々忠季取之、如形奉理髮了、卽返給藏人了、主上著御了、東面御座、忠季朝臣退出了、余竊奏云、向後院御在所方（寅角也）爲報酬著錫紵之由、聊可思食歎念之中之由奏了、依有所思也、主上隨申狀、皆有御祈念、次召忠季撤御裝束、帖之如本置柳筥、取之退下於戶下、召藏人給之、御冠留御所、令置御帳中御枕上方（忠季先置之、其後取御裝束退下也）、次女房等參入、經御帳後候女房候所、少々又候御前、雖不預素服之人參入也、安元如此云々、次實宗卿已下公卿幷殿上人、於北陣外（西洞院面北門小路也）著素服了脫也、歸著陣、其後女房御典侍已下、於同所著之、脫之歸參、男女皆吉服上著之、是先例也、次供御膳（如御裝束自東西陣之也、階緒典侍、役送皆素服女房等也、黑橡單押紫布也、六兩白鈍、盤黑鈍也）、居了之後立御膳、卽撤之了、次余退下直廬、　四月二日癸卯、此日自倚廬還御日也、又有解陣開關等事、被下黑橡宣旨、有御齋會定等、上卿（實宗卿云々）、余今夕著亮闇服（鈍色直衣、指貫無文、冠卷纓如常、衣平絹白也、）、戌剋參內（車如常、但鈍無文青革也、此外無相違、疊如例、）、未還御云々、仍先參倚廬御所、此間陣事、公卿已下、於北陣外脫素服云々、仍女房等同脫之、次頭中將持參錫紵御裝束（去月十九日所召之御裝束也、御冠先是進女房了云々、）次召忠季朝臣奉仕御裝束、依安元例只著御大口御衵表衣等、自餘略了、著御了暫居御、卽脫

之忠季取之退下、留絹額、（御柏大口等也）自餘加紫御帶給宮主、（殘藏人留之）次歸參、著御亮闇御衣、（先是進女房云々）黒御直衣、鈍色二御衣、柑子色御袴等也、御冠相具進之、（元御冠無差別）然而本御冠爲同物、仍不被改之、御裝束了忠季退下、次余仰宗頼令撤掌燈、（藏人役）又以藏人取前敷御座一帖敷南間、（懸幌之間也、御被御座也、向乾也、）即移御、次實明朝臣、自同間供御贖物、（親闕役送）次獻大麻、次宮主奉仕御禊、（錫紵御衣置其傍也）此間撫人形給如常、御禊了宮主退下、次實明撤御贖物、次主上如本著御前敷、（御座如本敷、忽藏人不候、仍隨見參仰忠季令敷之、隨便也、）掌燈如本舉之、（藏人使）次實明忠季取璽劔、次主上還御本殿、其路如渡御、余褰幌、宗頼獻御草鞋、即取脂燭前行入御所、又余褰御簾、（垂簾也）内侍於簾中取璽劔、（御劔直置御座了）次余退出、

〔明月記〕天福元年九月廿六日丁卯、（○此月十八日後堀河后藤原竴子崩）參殿下、（○藤原教實）依召參西御出居、仰云、御錫紵倚廬代事、猶未思得、内府（○藤原實氏）殊可爲嘉承之例之由被催、（兄弟大納言等同歟）彼初踐祚之日也、永萬治承、無是非隨彼歟、是已御即位訖、（永萬治承又同）萬機旬又了、（被二代不然）何被憚之哉之由存也、只今被尋出橘廣房記御覽之處、嘉承江帥可有此兩事之由申云々、彼時無此事、隨江帥申由人多稱之、已以虛誕歟、實不審之由申之退出、　廿日辛未、參舊院、○中略有長朝臣來、仰兩卿之趣、今度事、偏以新儀被行、嘉承永萬治承、御倚廬代無御錫紵、無公卿已下素服、今度有沙汰、故不用彼例、又依七歳（○四條帝御年三）已前不用例儀、以新儀可被行由被定了、○中略同御倚廬代、調進御錫紵、（但無著御、著御帶件云々）猶可有公卿以下素服云々、而今日於院御所、參入人々、又有成不審旨、不御倚廬、無倚廬、殿上公卿著素服、可著倚廬殿上、無其所進退如何者、然者不著殿上直可著陣歟、將可著例殿上歟、又藏人著素服、不著例殿上、日御簡封如何、藏人一人不著而可行歟、將雖給素服、又著吉服可行簡封等歟、兩卿以下不議定中、依新儀大略奏口歟、度度雖往反無開出事、非其仁者、不及委聞、但給素服、更著吉衣事、故入道殿深被難仰事也、今被仰其由事尤以不審、心中思而開之許也、

十月一日、内裏儀、

主上〈○四條〉出御、〈殿下著衣冠、率抱給〉自萩戸中御口中資季以勅題頭辨一人脂燭、入御倚廬代、〈取入廣御所北面、○中略〉

十三日甲申、入夜京極中將〈實持朝臣〉被來問、著袴相謁、夜前深更自倚廬代還御本殿、勅題役如前、先有御禊云々、

〔後深心院關白記〕應安七年二月十四日庚戌、渡御倚廬、〈○此年正月廿九日後光嚴崩、後圓融御父、〉可為來十八日之由雖被議之、是又料足未到之由被延引、來廿四日云々、但猶可依武家料足云々、　廿一日丁巳、傳聞、武家料足、一昨日萬疋致沙汰之間、廿四日渡御倚廬、必定之由有沙汰云々、武家料足總用七萬疋、是貞治之例云々、貞治ニハ諒闇之儀五萬疋、二萬疋ハ天龍寺以下被施入云々、　廿四日庚申、自今日主上〈○後圓融〉渡御倚廬云々、素服公卿先例五人也、而藤氏公卿不出仕之間、依無其仁、平中納言、中院中納言、只二人云々、　三月六日辛未、傳聞天皇去夜自倚廬還御本殿云々、

〔滿濟准后日記〕永享五年十月廿九日、就諒闇〈○此月廿日後小松崩、稱光御父、〉禁中御裝束事、自甘露寺辨忠長方奉書到來、

倚廬御几帳以下料、口三寸竹為召進候由、可有御下知醍醐寺之旨被仰下候也、可得御意候、恐々謹言、

十月廿七日　忠長

大納言法印御坊

請文以理性院僧正奉書申了、竹員數不載之條不審、忠長御教書又一通、

諒闇御裝束御簾料蘆廿荷、來月六日以前、可召進之由可有御下知天王寺旨被仰下候也、可得御意候、恐々謹言、

十月廿七日　忠長

大納言法印御坊

禮紙

倚廬御帳臺以下料竹卅本、來月六日以前、可被召進之由可得御意候、

請文同理性院僧正書遣之了

此廬事申遣天王寺處、鷺島庄内野田役云々、仍重令下知野田給主之由、總目代妙法院僧正申也、竹事不審也、任明德四年後圓融院御例申云々、然者其時天王寺別當故常任院准后良瑜也、竹ハ若爲諸門跡役出之分歟、然者可爲重役如何、

六日、主上〇稱光渡御倚廬殿、卯剋云々、諒闇儀被始之、以内裏二對爲倚廬殿云々、御簾蘆廿荷、并口三寸竹卅本、自天王寺執進之、口三寸竹二十本、自醍醐寺進之了、天王寺蘆廿荷事、自野田村進之了、於竹三十本寺家沙汰之了、明德例同前云々、

〔薩戒記〕永享五年十一月三日壬午、今日後小松院二七日御誦經事、公家始被行之、兼日有其催、仍秉燭之程著束帶、如例、但卷纓相具弓箭重緌等、依警固也、遣詔奏已後、渡御倚廬以前也、仍所用弓箭也、雖警固中、御倚廬之間、武官不可帶弓箭也、參内、于時無人、仍參泉殿、今日番衆右少將雅□朝臣一人祗候、頃之頭右大辨忠長朝臣參入、良久藤中納言參入、今朝以使被示合次第事、所存之旨大概答了、亥半刻許、頭辨告事具之由於藤中納言、納言予〇藤原定親下殿、雖此期、予帶弓箭、凡警固中參内、卽可帶弓箭也、

六日乙酉、今日主上〇後花園渡御倚廬云々、以東卯酉廊女房局也、號二對、爲其所、

〔山賤記〕正月〇文明三年十六日、内裏〇後土御門には御錫紵めし、倚廬の御すまゐなどうけたまはる、〇去年十二月後花園崩、後土御門父、とまをねやとし、つちくれをまくらとするよし、本もんに志るしぬれば、をろそかなる御よそほひ、さぞとおもひやるさへあはれにみたてまつらまほしくて、〇下略

〔親長卿記〕文明三年正月十二日、自賀茂下上送竹、先々可被造倚廬御所竹并葛事、可下知之由勸修寺前中納言諒闇方傳奏歟、催之、仍相觸了、　十六日、倚廬在所事、被用北廂、片方被指繕之由風聞、可尋記、竹事、御賀茂下上、遣藏人方、三十五本、又十五本、遣修理職、

〔和長卿記〕明應九年十二月十一日辛卯、今夜倚廬渡御也、〇後柏原、此年九月廿八日、御父後土御門崩、武家用脚依遲々也、諒闇傳奏勸修寺中納言、奉行職事頭左中辨守光朝臣、關白殿〇藤原冬良、爲御供奉被參、以小御所爲直廬、出御時分、被候臺盤所、倚廬御所、以二對東妻爲其所、諸司雜構御裝束事、以遲引御所構樣、悉皆掃部寮先令沙汰、但筵闇筵計、掃部寮之沙汰也、猫搔、竹等者、自上鴨下賀茂社家沙汰之、竹者白河方沙汰之、猫搔者自賀茂社家一所沙汰之云々、竹御帳一間也、疊二帖敷之、疊緣黑染布也、濃鈍色歟、御帳帷布也、鈍色染也、天井以筵張之、天井ノフチ竹也、以紙捻結著也、御帳東面與南面懸帳、以東面爲本、御帳裏竹小几丁一基立之、帳樣同上、御帳東面南敷薄疊三帖、爲常御座、緣同上、其餘者皆敷廻猫搔、女房以下候其上、但女房座疊一帖、御帳南面方敷之也、四方墻壁皆張筵、天井同御帳天井也、御帳中天井者、出納之所役也、仍張之訖、竹ノフチ竹ノ柱等ハ、御大工沙汰之、倚廬東第一間南面君臣共出入之口也、以半間爲通路、懸帳、鈍色布也、以西第三間南面爲女房出入之口也、不懸帳、御膳等同自此口供御也、御座間後北方、爲番衆之所、御湯殿并御樋等、自此所爲御通路也、番所後方北一間、爲殿上也、猶見圖、

亥終刻許有渡御、自臺盤所妻戸出御、至其程殿下出臺盤所、令立妻戸前簀子給、于時御劒將源宰相中將卷纓、緌、負平胡籙、不持弓、自遺詔奏日于今警固中也、入妻戸、於臺盤所中、自內侍手取御劒前行、先是職事貫首取指燭、爲先下臈、權辨伊長、右少辨尙顯、頭辨守光朝臣等、秉指燭、自高遣戸取之、前行、次御劒將前行、次關白褰御簾給、次出御、御引直衣如恒、次璽將三位中將經名卿、卷纓、緌、負平胡籙、不持弓、拭眉、於妻戸口簾下懸膝於長押上、以片手聊上御簾、自簾下及手取內侍所指出之璽筥、相從御後、次關白、直衣上紙、依爲御引直衣、不被候御裾、只候御後給、次六位等藤原資直、菅原在名、源諸仲、卜部兼將皆帶弓箭平胡籙、等供奉、不取脂燭者例也、仍隨關白後畢、路次馬道傳也、經年中行事障子東、議定所前馬道、御湯殿末西并北馬道等、過對屋渡廊東折東行、經對屋簀子、自倚廬東第一間南面戸入御、關白令褰帳給、路次掌燈筵道等如常、殿下入自同戸令候御前給、南方北面猫搔上也、別不設座、主上御座御帳東面薄疊、南面御著座〇中略御冠著御之後、藤中納言入道、奉結御幘、此時分關白起御前退出、仍予秉燭參直

東庭上

屏中門

殿上

番所

馬道

御懸也

疊

同

同

御帳

小几

帳子

疊

懸帳

關白被候

但無座

御帳柱皆竹也

廻者皆建也

御錫紵以下自此口出入内藏寮官人昇唐櫃居置此庭上

御湯殿

廬、退出之儀見訪之、此間御廟報酬之儀也、予不奉見之間不注之、次素服公卿、聞御錫紵著御之由、起殿上、本殿之殿上也、向北陣、藤原資直、指公卿兩人之脂燭、下殿之時、自庭上指之也、源諸仲、指貫首一人之脂燭、其所同上、次到北陣、北門前、各列立、南上東面、長享度、爲東上北面、又正長度、東山左府記、同東上北面云々、然者今度樣尤不審、公卿甘露寺中納言、列立之後解帶劍、源宰相中將、列立之後、撤弓箭、兩公卿共、藤原資直自出納手取素服、自後令著之、自公方著之、倚顯、藤原資直、已上兩人、出納令著之、次公卿兩人著倚廬殿上、後、於傍則脫素服、○中略、次女房等各著鈍色衣柑子色袴、被參倚廬、卽御膳也、先供黑御飯、黑色御飯一盃計也、同居黑塗臺、無緣也、卽被撤之、是內膳司御膳云々、次御厨子所御膳、小預沙汰歟、其數至于御菓子五膳也、皆御精進、御酒同參畢、自今夜內番衆、相分可候倚廬與御所云々、御所者以男末爲番所、長享以來之例也、先例可尋記之、　廿三日癸卯、今夜自倚廬還御本殿也、予雖非番、內々祗候、今夜關白殿無御參、劒璽將以下如初日、先臣下拜女房素服除脫之儀也、○中略、次主上先御錫紵著御、先是裝束師羽林公音候御前、中納言入道又令參之、御著御之後、今夜御服之數減少、御單半臂等被略之、有御祓、宮主神祇權大副卜部兼永參之、御贖物人形散米兩種也、先例內藏寮寮官令沙汰之處、近例無其儀、仍仰陰陽頭內々令沙汰之、仍今夜安倍有宗朝臣持參之、但此御祓無散米、只人形計也云々、仍仰其分之處、有宗朝臣令忘却歟、渡付散米於寮官退出、既召御贖物之時、散米出來之間、奉行俄驚電、雖然有宗朝臣令退出之間不及力、人形事相談宮主之處、俄令沙汰進人形、其樣裹紙物居小高坏、中不見、神祇之人形分云々、出之、頭辨置御前、御息懸之後撤之、今度散米不置之故、人形許置之、次脫御御錫紵給、則被出寮官、寮官取之置祓座、御懸壺中傍北簷方設其座、其座敷薦也、其上積置御脫御錫紵、御單半臂御表袴御下袴御裾等也、御冠不出、一莾間依可有著御也、次宮主著座、南面、祓畢後退、御服等撤之、此後主上著御諒闇御服、○中略、此後還御、御脂燭以下御殿之設如初、路次又同前、劒源宰相中將、璽三位中將也、

〔二水記〕大永六年五月八日、今夜可有渡御倚廬、○後奈良也、○此年四月七日、御父後柏原崩、中略、

倚廬

二對東以三間四方為其所、天井以筵張之、有竹フチ所々垣同之、以葉薦為下敷、其上敷御座三帖、此外皆薦也、

〔菅別記〕大永六年五月八日庚寅、今日申剋許予參內、為倚廬儀〇此年四月後柏原崩、後奈良御父、等見訪也、中御門前亞相源相公等參會、出納已下馳走之最中也、御帳樣如案相違也、一昨日修理職來尋之間、明應度如形所記置之內、指圖等寫取沙汰分也、御帳構相違之間、分入魂中御庭田等、少々改直事有之也、凡今度疊數多也、先御帳內二帖、號中帖一帖別敷之、御帳內竹小几帳、今度二基也、御帳東面前疊三帖、南北行敷之、御次第平敷也、南面御帳前疊一帖、東西行敷之、女房座也、自餘者猶播也、殿上疊一帖敷之、番衆所疊三帖、不新調之間、數設下行外也、云々小御所末疊敷之畢、御湯殿路、御後架之路者、三箇間也、不及敷帖、倚廬東面無翠簾、明應度同無之、御座間雖被開、撰間明障子可宜之由女中之處、有相應之障子、自御所被出、仰大工立合畢、天井并墻等、以筵張廻畢、如明應指圖、黑塗高灯臺有二基、殿上同有二基、大概分如此、予時源相公羽林出仕以前、以衣冠體猶倚廬儀被見舞處、招予被相談云、御帳內狹少之樣也、一箇間御帳左右腋張筵、其中間立小几帳、劒璽棚在其奧也、東帶上負箭帶劒、更以御帳內出入難自由、如何之為哉云々、難治之至極也、廻思案可調法之由也、寔所見及無餘儀予云、然者所司依無案內、令相違之體、相構而以中帖推寄東帖上、其上小几帳二基、一所相寄、劒璽棚南方御帳端立置之、自外方及手疊劒璽樣、可調法歟之由相命之處、相公承諾之條、內々女中衆大典侍勾當等局申含、所司之沙汰以、置誤之分、渡御事終之後、內々近臣被仰付、可被置改之由申談畢、如此而兩將之進退無事也、不可口外也、

〔孝亮宿禰記〕元和三年九月廿六日戊子、今夜倚廬渡御、〇後水尾也、〇此年八月廿六日、御父後陽成崩、倚廬者被構小御所云々、出御之日者、自清涼殿奏聞江御出也、脂燭殿上人三人、烏丸右中辨光賢、竹屋左少辨光長、日野西右少辨總盛御劍、　十月八日庚子、自倚廬還御有之、奉行頭右大辨兼賢朝臣、璽役花山院中將定

好、御匣中院宰相中將通村、御簾頭辨𠫤實朝臣、脂燭𠫤實朝臣、頭左中辨業光朝臣、左少辨光長、右少辨總盛、上卿日野大納言資勝卿、

〔基量卿記〕延寶六年六月十五日、朝間女院〇後水尾后東福門院德川和子御惱危急之由有沙汰、〇中略予欲令參院、先參內處、早令崩給云々、　十六日向坊城亭、出納來、諒闇方事、大形藏人方申沙汰也、舊記等持參、先倚廬之御指圖持參、後陽成院之時之儀也、先預置了、兩局來、條々申付事無之、猶先例兩局申沙汰事有之候はゞ、注進可申由申付了、內膳司、御厨子所預、小預等來、御膳調進事、舊例可知事歟之由相尋處、先例分明、何時候とも調進可仕由申之、其後參內、今日御衰日故、諸事不及沙汰也、其後參殿下、〇鷹司房輔明日攝家中幷ニ武家傳奏等、於禁中御參會、諸事可被仰談由仰也、則退下、　十七日、坊亞相入來、官務出納來、官務申、官方調進下知等之事、官符宣旨之外無之由申事、出納持參倚廬別圖記之、今度種々有御評議、攝家中、坊亞相予へ被仰渡條々、

今度倚廬事、別殿可被立歟、又任後陽成院例、可被用小御所哉之事、當時法皇〇後水尾御現存之上ハ、少々有御憚之間、表向倚廬渡御倚廬分ニテ御次第等被作進、渡御還御義は、密々沙汰可然、御殿義も黑戶など倚廬代に被用、調進具等は、其まゝ被用、先例、御殿は其まゝ可被用云々、各畏承了、抑黑戶之事、內々被窺天氣、予御使也、則右之旨申上處、仰云、當時黑戶有御內義、一段御勝而等宜候處、自先年被安置佛像、然ば難被取出、佛體安置之跡ニ、被安置御璽候、先例如何、若於有先例可被用、不然ば如何之由仰也、則右之旨攝家中へ申入了、重被申云、佛體安置之跡被置御璽例、御不審之段、御尤ニ存候、當座先例覺悟難仕候、然ば被用御學文所如何可有之候哉、右令申上、仰云、一段可然、然其段被見合、傳奏奉行等可致沙汰由也、則何も寄合御評定其圖記左、〇圖略

右之圖猶委細可記、先被渡仰分如此、凡候御調度等は、如例可設云々、渡御離宮事、御璽可有、以右頭中將兼中將可被仰哉旨言上、則言上、主上(靈元)從一昨日、御內儀ニ御坐、仍參入申入了、御內仰云、先例貫首は勿論也、卿相當時故

障、或病人之故也、然ば非職殿上人取釼璽先例如何、古クハ多內侍候之、或頭中將內侍等候之例分明也、若此度可爲內侍一人哉、攝家被申云、近衞司雖非職、先例從此役事勿論也、內侍事、尤有先例、然ども當時被用近衞司可然由被申、則言上、右之通則勅許也、〇中略

一勘文衆日可致沙汰由也、則召陰陽頭申付了、渡御倚廬日時、遣令日時、著御錫紵吉方、還御倚廬日時、除御錫紵吉方、〇中略

還御後晝御膳之事、先例晝魚味、或一味魚味供之、先例兩樣之由內膳預等申之、則攝家衆窺之處、晝魚味可然、調進供所之事、淸所或臺盤所兩樣也、此度可爲淸所云々、則申付了、〇中略　總今度渡御方幷ニ倚廬殿上ノ設等、一切被停止了、密々事也、依之倚廬殿上事無之也、

一倚廬ねこかい薦、竹ひようそうかづらの事、先例自賀茂下上調進之由、出納申候之間、內々賀茂傳奏烏丸中納言へ申入、可被相尋由申、則於下鴨先例無所見由、上賀茂一通勘例左記之、

倚廬御所竹勘例

一六寸竹八本　陽光院御時

一六寸竹十六本　正親町院御時

一八寸竹十六本　七寸十本　六寸十本　三寸十本

以上四十六本　後陽成院御時

右之趣依時有增減之由、所見之通、粗勘進如件、

延寶六年六月十七日

賀茂社家總代
中大路隼人正淸令判
同
富野右京大夫就久判

烏丸中納言殿

御雜掌

重而ねこがき、ひようそうかづらの事此かづら、常のふぢかづらのよし、非藏人飛騨申之、相尋處、賀茂ニハふぢかづらと書付有之由也、若倚廬殿纔代ニ用事歟、猶可尋、

口上覺

一ねこがき横一間ニ長三間一枚横一間ニ長四間三枚

一ひようそうかづら貳束

右二色之義、社家中先例吟味仕候へば、如此書付、只今出申候、ねこがきは、搆手間入可申候、又かづらも、出シ申役人ニ可申付候、總而竹ノ事等、年久敷義御座候へバ知兼申候、出申役之義、搆申役人等、不覺申旨申候ニ付、急々ニハ出來兼可申候へども、隨分急ニ可申付旨申候、御用御座候はゞ、何程用意可仕候哉、御書被遊可被下候、乍慮外此等之趣被仰上可被下候、以上、

六月十六日　　賀茂神主

人見帶刀殿

下鴨よりは勘例無之候　口上覺書來

自傳奏來下鴨相尋申兩條之義、致吟味候處、用意無之候、ねこがきは五日之中、篤者三日之中、相調可申由申候、竹之義は、一時之間にも調可申由申候、右之通唯今來候て申候間申入候、巳上、

則自是返事可申由申遣了

十八日、攝家中へ窺條々

一幌之事、出納調進可仕候由申也、此度如何之由申之、調進相調候へバ可致沙汰由也、則其通下知出納了、

一本所之素服、公卿雲客も亮闇裝束可著用哉事、勿論同前ニ可著用由也、則內藏頭下知了、○中略

一賀茂社家調進、猫搔竹ひやうそうかづらの事、

此度倚廬代故乍不入、重而調進之時、社家違亂可申歟之間、縱令不入とも、先調進可申付歟之事、

一段可然、其通可沙汰由也、則賀茂傳奏中遣了、○中略
及晩坊亞相同道、依召參殿下、此度之御次第、内々草進事御相談也、則兩人令相談、書付進入了、令遣以下、渡御還御次第、多用大永例也、
乍次而窺條々
晩東面一間可然哉、二間ながら可懸哉、一間可然由仰也、
一蘆簾事、清涼殿朝餉臺盤所勿論、倚廬四面等、盡可申付由仰也、及深更歸家、
出納勘進倚廬圖事記左

諒闇之御用

一九寸三分竹四本　一八寸三分竹九本　一八帖敷四方の分よしすだれ長サ一間半　一れいせいかづら
右之内、かづらは出納所へ上申候内にて、修理職手前をもゆひつけ申者也、竹之義を理申候て不調進、下鴨より小竹廿本あがり候て、修理職兩人方へ遣す也、
よしすだれは、修理職手前より調進、但吉野すだれ、よしにてあみ申候を、堀川町にてかひ候て用申候、一たけにてみじかく候て、半分づゝつぎ申候也、
元和三年後陽成院時圖、○圖略

廿五日
一今日修理職奉行難波相公へ申渡、倚廬代撤疊處打燈械、近比清涼殿長橋等打金、折釘打之、今度依大永例打竹釘、吉事時も必可爲竹釘事、非凶事計也、○中略
一倚廬結番事如何候哉、仰云、今度無倚廬番所之間、此度無沙汰可然之由也、
廿六日、今日早旦設倚廬、當日雖可設、萬事不合期之間、内々今日令沙汰、右頭中將、左少辨、權右少辨

等、爲見訪參入、極臈差次等、爲行事參入、出納父子參、依衣冠不昇階候、庭上其外御藏播部寮等、依著袴肩絹、昇御緣邊設諸具、

一竹御帳臺出納、繪圖之通、中立几帳如圖、帳深鼠色貲布也、

一蘆簾常簾也、以白緒編之、緣布鼠色、是鈍色ニ而、總白白緒、鉤メッキ無紋也、

一劒璽案二脚、墨漆、上塗漆、カキウルシ云々、圖如常、

一御座幷女房等座、疊緣布鈍色、

一燈臺如繪圖○圖略

一御茵內白綾、緣花田色、

一幌布鼠色、如斗帳中ニヲ合也、

廿七日、以菊亭中圍渡御時至之由申之、刻限出御從常御所東第三間、兼常御殿南方撤障子垂簾供掌灯、東面三間先內侍被出御劒、頭中將重條朝臣縫腋、卷纓、老懸、帶劍、壺胡籙、不持弓參進給之、依面候非藏人部屋、臨期參進也、候東方簀子、

次有召、此次可有出御之旨有御尋、予申云、先被出劒、次將左右ニ立定之後、可有出御之旨申之、則被出御、左中將關章朝臣闕腋以下同頭中將參進給之候西方、次殿下直衣無文卷纓參進被褰御簾、次予先起御座之間則卷纓獻御草鞋、兼六位藏人取、內豎持參、依內豎候清涼殿南庭也次出御吉御直衣、赤御袴、御垂纓、御檜扇、爲御引直衣之間、關白不被候

御劒、予同之次南行東折、南行入御倚廬、御學問所也關白被褰幌、予同參進褰幌、左右へ引褰故也撤御草鞋、次著御前敷御座、次劒將璽將參進、安置案上劒、柄西刃東、次殿下著御座右方給、次御裝束師參進對御座候、西面、東帶、不帶劍、縫腋、卷纓、次民部權大輔季任參進、先是予持參御冠、置右方、置柳筥、敷打敷、居土高器、先六位藏人持參渡俊方、俊方持參渡予、先是予入幌候御裝束師南方、爲御陪膳也、次持參錫紵、同前、次季任予參進、先令脫御吉引直衣御袴、著御錫紵、次令著御襪、無紐、以糸縫之、裁縫糸針ハサミ等也、次季任奉仕御本鳥、承令結紙捻ニテ給、臨期奉加御小本結也、此間予帖御引直衣、居最前之錫紵柳筥、退渡役送人、先是極臈持參御髮具柳筥、泔坏御髮搔

耳挿三撥御右御冠御髮具等撤、箱蓋柳筥也、次季任奉加服御冠、獻御檜扇退、次有叡念事、令向御廟方給、但御心計也、無御作法、爲雜髄著錫紵給之由也、次予季任參進、令脫御裝束給、御下著計、次帖御錫紵居柳筥、置御座後方退下、次各於非藏人部屋著素服、人々卷纓、極﨟令著之、公卿貫首迄也、其外殿上人、於次間出納令著之了、各候奥番所、此間御膳、御精進、從清所供之、内膳四膳、御厨子所二膳、御厨子所著衣冠、著素服、卷纓奉之、得選無表衣袴、素服等ニテ供之、命婦掌侍典侍袴單素服等也、略其外供了御膳撤、内膳預兩人方へ撤之、此事預予へ尋、若可爲陪膳女中哉之旨也、予成柄曰、已還御之御膳兩人方へ下之者、以其例此御膳も兩人方へ可撤由申付了、各盤土器居四方、如三方、上ノ方ヲ塗盤ニテ染也、盤白也、次撤筵道布單等事、御膳之間其儀有之、其後も爲御前之儀之間、掃部寮内藏寮雜參進、仍筵道其儘敷置之、布單計撤之、非藏人沙汰之、典予撤之、最内々之儀、不可說不可說、布單ハ下出納了、以非藏人下總介下之、其後退下九ツ半也、以外草臥至極也、今曉臨期、御灯籠無油、予催主油、使方持參油、不可然也、六位所役也、若忘却歟、　廿八日、參内、吉服束帶、卷纓、於御所不著素服、今日より素服之號、近臣分ハ夜相分、參番可然由被仰也、尤無倚廬番所之間、急度不及結番之儀也、是素服之人之中、依有遺臣也、參番之事、尤内々儀也、主上驚可有倚廬御座、甚暑之剋、難堪御之間、密々常之御殿ニ御座也、然共表向倚廬ニ御坐之分也、依西方間設御寢所爲夜御殿、其次間素服人々候也、今日予柳黃門兩人也、終日無事、　七月一日、依當番參内、觸置掌燈之事、菊亭亞相被尋先例、無覺悟候由返答、則召御倉相尋候處、元和度、渡御還御之日、御倉供之、每日御燈不存知由申之、依倚廬殿燈每夜從清所供之、女嬬之沙汰也、近臣取次供之了、明日番へ可申渡之由菊亭被申也、　九日、今日可有還御本殿也、日時勘文、内内進御所了、○中略入夜有召、仰云、今夜還御戌剋也、然共凶事ハ以早爲善之間、酉中剋可有還御由仰也、捉了、則宮主出納掃部行事官、主殿等、兼而令參入東庭透壁外了、入自日華門、候御溝邊、御掛東方、一出御以前掃部座案等事、以藏人令下知出納兼而令設了、剋限可有還御之旨仰之了、先供錫紵御裝束、役送先日、如次著御、御袍計也、下ノ御衵袴脫而著御、單表袴下襲略之、如御次第、臨期召高倉民部令奉仕、○中略今夜始撤倚廬了、九頃計也、

〔其外明日可撤也、〕十日、早天參內、今日撤倚廬、悉出納申請了、先例之由也、劒璽筥今日御內儀へ進上了、諒闇御服御衣御湯帷等、長橋進入退下了、

〔基量卿記〕延寶八年八月廿三日、參內、窺天氣、〔○中略〕退下、午後有召、元和倚廬御指圖事、攝家中被尋之間、從出納召取進上了退下、　閏八月四日、依加番參內、頭中將被談曰、倚廬〔○此年八月十九日後水尾崩〕結番之義、被仰出之、續左、

一番

實通卿　公起朝臣　雅永朝臣　熙定

二番

方長卿　宗顯朝臣　季任朝臣　基淳

三番

伊季卿　有維卿　基量朝臣　基勝

右之通可參勤也、於端本番者、不及參勤之由被申談、心得之由申入了、

五日、又有召、此度倚廬渡御劒璽持、并素服公卿殿上人等弓箭、各申出官物可取出由、頭中將傳之、依之內藏頭、予、〔御服奉行人也〕取出之、弓八張、〔內五丁梨地、三丁黑蒔繪、公卿貫首迄梨地、雲客黑蒔繪也、於宣胡籙者、御藏ニ無之、御凶事之方ニ預置由也、依之從奉行職事、木坂越中、土山駿河守ニ申付由也、予一張申出了、〕　七日、頭中將來、被尋條々、〔○中略〕

一遺詔奏時、警固之事被仰、然者其後武官可帶弓箭也、頭中將、當日御冠御錫紵等、可持參御前、衣服體、可爲如何樣事、

予答曰、警固以後、渡御倚廬、武官帶弓箭條、已薩戒記〔永享五年記〕所見、雖然職事之義、可爲格別歟、藏人頭中將節會以下奉行之時、或堂上之所役時不帶劒、右之時次將盡帶劒也、如此之時、頭羽林不帶劒者、凡侍中之義、奉行公事之時、奔走異他之故、且者候近習之間、不及帶劒歟之旨相存之間、去々

年、予不帶劒弓箭等、其上去々年者、遺詔之日警固仰之後、則渡御倚廬之間、曾以無間隙、依之忩緩事沙汰也、此度義經一兩日之間、可爲差異哉、猶可被尋右相府へ之由申了、

一前敷御座、此度三帖也、事外倚廬狹少、可爲如何哉事、

予答曰、去々年二帖也、先例多是三帖之由見圖（貞治、大永、元和、）雖然去年以外狹少之間、敷二帖略一帖、左相府等令相談如此也、其時宜各所存、母屋設御帳臺、於平敷御座者、廂之御座也、然バ清涼殿晝御座、可爲同前事也、二帖にても不苦事之由一決、故如此之由返答了、

十日、今日渡御倚廬也、　十二日、依倚廬番參內、主上一兩日御坐御三間、是內々之義也、依劒璽等不置倚廬內、奉置小御所上段、廻障子、老年衆、封ヲ付被置之也、次間有掌灯、倚廬內一向無掌灯、各番候清涼殿廊下伺公了、宿如例、　廿一日、依倚廬還御、早旦參內、午下刻出納等參入、奉仕諒闇御裝束、大概如去々年、相違之事等記之、

一御帳臺（白木也、圖等如常、去々年被用吉御帳臺、今年用意云々、）

一廂以下御簾（簾、緣淺黃無文、去々年有紋、今年被改云々、）

一御膳之時、臺盤切盤二脚用意、（一脚今年加增、去々年依無之用高土器了、但有例也、）

右御調度加增之義等、右相府下知云々、

〔丹波賴庸記〕寶永七年正月九日、來九日就倚廬御構、六位藏人不殘可令參勤之旨、自奉行被示之旨、自極﨟被傳之、　十一日、巳刻參攝政殿、次參內、倚廬御所構傳奏松木前大納言、奉行頭左中辨尙長朝臣、行事藏人源仲學云々、催出納等、倚廬御學問所也、二間ニ四間之所切下床、（壹尺八寸許也、）竹柱以筵包、（疊ノ表也、）天井打遶竹以紙捻結之、床ノ下ハ橫筵ニテ包之、御帳臺竹柱筵包、同天井、御几帳黑塗帷鈍色、置物机黑塗、御櫛笥、（黑、）柳筥、ユスルツキ錫、御櫛、（赤木ム子黑ヌリ、）御髮搔、（黑木、）御耳クジリ、（黑木、）御手拭掛、（黑木、）殿上臺盤、（黑塗、）燈臺、（黑塗、）　十二日、申刻參內、今夜倚廬出御、　廿四日、申刻參內、還御本殿、　廿五日、巳刻參內、

今日破倚廬、仍令奉行、

〔緒百一錄〕元文二年四月廿六日

渡御倚廬、○櫻町、此月十一日御父中御門崩、可爲來月九日候、酉刻無遲々可有御參集候也、

四月廿六日　兼胤

日野前大納言殿

坊城中納言殿

高松三位殿

岩倉三位殿

五月四日

來九日倚廬渡御戌刻

同廿二日本殿還御戌刻

右之通に候、但總詰に而は無之候、爲御心得可申傳之由、

醍醐中納言殿

坊城中納言殿

高倉前中納言殿

左大辨宰相殿

十四日

來廿二日可有還御本殿、各申半刻可令參集給候也、

五月十三日　兼胤

日野前大納言殿

坊城中納言殿
高松三位殿
岩倉三位殿

〔中御門院御凶事記〕元文二年倚廬渡御事

一申半刻早參、吉服卷纓
一自今日吉服卷纓事、廣橋頭辨被申渡、
一倚廬(御學問所中段也)御裝束、出納悉設之、出御道東廂ヨリ南廂迄、鈍色布單設之、筵道如常、同東南廂柱毎供掌燈(南座女嬬)出納催之、
一御座南面御座東西、白木燈籠供二基、
一御前指燭事、東廂北口ヨリ出御、仍東南取簀子候事、但還御者、廿二日ノ儀故、入御者内々ノ御事、仍出御脂燭而已也、
一出御以前、臺盤所有奏聞、仍菊燈臺二基出置事、
一出御(戌半刻)退出(子半刻計)
一清涼殿御帳臺日御座以下、今日悉被撤、臺所具納御藏、萬端出納奉仕之事、但臺盤所日給者、奥へ被上也、奉行兼胤朝臣へ相渡候事、
一倚廬ノ殿上者、御學問所東方ニ造之、
一素服ノ公卿殿上人、殿上ヲ下テ向北、於北陣公卿殿上人著素服、已後經長橋絶間新廊下ノ下々道等倚廬著、殿上退出經本路、
一素服者鼠色布、袖ナキ單ロ之モノナリ、出納調進、
一極﨟所役

先素服公卿第一内府前秉脂燭儀、殿上小板敷ヨリ到北陣、公卿雲客立畢、大臣以下公卿ヘ令著素服、後ヨリカヅク云々、前ハサム、右畢殿上人末立加、雲客ヘ出納令著素服、極﨟同事、次更取脂燭參倚廬殿上、北陣ヨリ入平唐門、經弓場長橋絕間廊下穴門通路、渡御倚廬、

一劒將　冷泉中將爲村朝臣　　一璽將　庭田中將重熙朝臣

一脂燭職事　勸修寺辨顯道　裏松辨祐光　源澄仲　　一御服　高倉前中納言永房卿　萬里小路左大辨宰相稙房卿〇中略

倚廬還御

一五月廿二日申刻早參、御裝束之儀無之、渡御より御座候御由也、但筵道布單出納催設之、東面南面柱掌燈事、如渡御、

一倚廬見繕密々事等、御詰非藏人ヘ奉行被命事、

一戌刻計、還御催節、素服公卿、各殿上下テ、長橋絕間廊下穴門ヲ經テ倚廬著、殿上藏人頭、出殿上可脫素服由仰之、公卿經本路出北陣、脫素服退出、

次内々倚廬出御、此以前御座前左右供掌燈、引（不撤）賴亮澄仲役之、掌燈者、便所ニテ内々小舍人ニ命也、

次内々出御、錫紵脫御、役送倭包於南階下内藏寮次賴亮澄仲入倚廬内、御座左右燈臺、聊側寄撤掌燈、平敷御帖、南方ヘ寄ル五六寸計、

次御祓、先從南階行司官御贖物之筥進、役送取之於便所開筥、（竹針アリ是ヲヌク）先散米ノ高坏二基（二度ニ）役送、次人形、（二ッ）次解繩、（二本）各高坏六基（六ヶ度ニ）役送、次南階ヨリ宮主獻大麻、役送取之進手長、撫御畢返給、役送亦右階ヨリ返授宮主、次御贖物悉撤之、（便所納箕、返ニ授行司官、）

次賴亮澄仲、入倚廬內、御帖如已前直ス、且已前撤ス掌燈、御簾ニトモサセ、件供掌燈、（倚廬內）
次還御本殿、一如渡御、此時貫首ヘ脂燭取次賴亮澄仲役之、御草鞋役送如常、
一還御後侍中一統、以表使窺御氣嫌、
一還御後倚廬內掌燈各消之、御裝束其マヽニテ置事、
次開闔解陣儀、奏聞無之、侍中無所役、
次大床子御膳御裝束、例如大床子、但大床子前南北ニ立燈臺一基、
一臺盤所諒闇ノ切臺盤二脚、侍中布障子邊ニ出置、采女二人舁之立鬼間、且鬼間燈臺一基立之、
一孫廂東南柱毎供掌燈、（南座女嬬）其外圓座杉戸等事、例如大床子構、
一大床子役送、并下シ盤殿上食事如例、但臨期無出御事、
一大床子早參、職事候資子、此時各諒闇服著用之事、
一萬事寅刻退出
一今晩御祓等依有之、藤井兼矩、今日兩寺參役ニ而御所ヘ者不參、奉行內意ニ而之事也、
一御祓陪膳、頭辨兼胤、裏松辨祐光、澄仲、
一脂燭、頭辨兼胤、勸修寺辨顯道、裏松辨祐光、賴亮、
一大床子、兼胤、顯道、賴亮、
一倚廬、翌廿三日出納撤之、仍澄仲壹人巳刻參、午半刻退出、

〔實久卿記〕弘化三年三月七日壬戌、申刻計參內、今夜倚廬渡御也、○孝明、此年二月六日御父仁孝崩、申沙汰雜事、（倚廬殿、御所御問答差圖有別記、）戌刻計出御、實德朝臣取御劍、公前朝臣取璽、候前後、職事候脂燭、自南面入御、次裝束師忠愛朝臣參仕、次著御御錫紵、（高倉前大納言奉仕、予候御前、）了有叡念之事、次供御膳、事了內々入御、　十八日癸酉、申刻計參內、今夜自倚廬還御也、戌刻計脫御御錫紵、著御御心喪服、（御引直衣、）予候御前、此後有御祓之事、宮

倚廬御膳

主上詳朝臣奉仕、了還御本殿、一如去七日、於中殿代被供大床子御膳、無出御、

〔諒闇和抄〕亮陰終の事

むかしは先帝の御事〇崩御の日より、魚味をとゞめられ、亮陰一周のあひだ、まなを供せず、建久三年三月十三日、後白川院御事、京極中納言記に、今日より御厨子所魚類を断つ、殿上臺盤又おなじきよし見へたり、冷泉院康保五年五月廿七日、去年五月村上天皇御事朱雀門において大祓亮陰終なり、今日御膳に魚味を供ずるよし九代略記にのせたり、延久六年にも、今日魚味を供ず、朝餉の御膳を供ず、女房御陪膳にさふらふ也、殿上に臺盤を行ふ今は絶にけり養和二年正月には、朝の臺盤猶精進、御復以前のゆへ歟夕の臺盤より魚味をすゑるよし親經卿記にみへたり、かやうに宮中には御精進なれど、臣下はみな魚食をはゞからぬ事にや、月輪禪閤三條左大臣などの記にみへ侍る、むかしはかく一周のあひだ、魚味をきこしめさず、臣下も父母の喪十三箇月のあひだ、魚味をたち侍る、實方中將陸奥守に任じて國にくだるとて、まかり申に内へ參りけるに、殿上に精進物をすゑけるよし、行成大納言記し置ける、去かれども後の代になりては、一周の沙汰に及ばず、大永六年四月七日後柏原院御事、五月三日御葬、八日倚廬に渡御、廿日還御、廿五日御七七日、廿七日主上後奈良院、後柏原院皇子、始て魚味をきこしめすよし隆景大納言記し置侍り、御中陰もいまだみてず、去かし御事の日より五十日になるによりて、魚味聞しめしけるなるべし、又明應九年九月廿八日後土御門御事、同十年九月亮陰終大祓の頃、主上後柏原院、後土御門院皇子、三七日御精進のよし和長卿記にみへたり、亮陰一周の間、魚味聞食すまじきなれども、略せられて中間は聞食ゆへに又亮陰終御忌月ゆへ、二十一日の間、魚味をとゞめられて、御精進ものを聞食、叡慮のあつきを感じ奉るべし、

〔西宮記臨時四〕喪服

天暦八年正月四日、大后〇醍醐后藤原穩子於昭陽舍鎭也、〇崩　十日、玄冠坐倚廬、　十一日、從今日以黒衡重

供御膳、二十二日、除素服出倚廬、二十三日、初以黒漆器臺盤供膳、

〔基量卿記〕延寶六年六月十九日、御厨子所預來、倚廬之中御膳調進之雜具、桶釜等之類、生板等也、元和度、從御臺所方請取候、則古キ書付二枚持參、則留置、先年御道具にて請取候へども、此度清所にて出來不申候はゞ、急ニ此道具申請度候、若清所ヨリ渡事成不申候はゞ、御下行にて申請度由也、則出納令吟味、下行十石申請度由申之、先心得之由申遣了、

御膳御道具

一からびつ但ためぬり金物有　一荷

一三ぢう重箱大小　二くみ

一まな板　一面

一御精進板　一面

右分慥請取申如件

元和四年午十二月七日　髙橋

長はし樣御内

右京大夫殿

土山駿河守殿

裏書
右ハ口ノ御色直御膳調進仕候時ノ御道具

御いろ御所ニ御成の時の御膳道ぐ請取申事

一御からと　二ツ

一三ぢうぢうばこ　二くみ

一御しやうじん板　二枚

一かなわ　二ツ
一三升なべふた共ニ　二ツ
一中おけ　二ツ
以上
右儲ニ請取申仍如件
元和三年九月廿六日　大隅
高橋
土山駿河守殿
山本石見守殿
右ハ倚廬御膳、毎日調進御膳之御道ぐ、
右二板請取留書也、尤右物也、
一五石　高橋
大隅
右倚廬御殿被成御座候內、常之御膳道ぐ替物料、
一五石　御厨子所預
右還御之時、賄御膳道具替物料、
以上
右出納より下行事書付來也
廿日
諒闇御膳事

一文龜元年酉九月廿五日、諒闇御色直六本立供御供之、第一御飯、御菜六坏、内一坏魚味、第二御飯、御菜七坏、内一坏魚味、第三御菜五坏、内一坏魚味御汁物、第四御菜五坏、内一坏魚味御汁物、第五御菜五坏、内一坏魚味御汁物、第六御菓子八坏、

右者十三箇月目供之、依御即位以前如此歟、

高橋紀宗圖調進仕候

一大永六年五月八日、倚廬御所渡御、五本立之御膳供之、第一御菜六坏、第二御菜七坏、第三御菜五坏、第四御菜六坏、第五御菓子八坏、

右御菜御汁物等御精進也、御盤無緣、以薄墨染之、

高橋紀宗圖調進仕候

一同五月廿日、諒闇御色直六本立之供御供之、御膳之次第同右、但一膳ニ魚味一坏宛有之、

右者十三日目供之、御奉行萬里小路殿、

高橋紀宗圖調進仕候

一天文四年正月十一日、ぶらく門院〇後柏原后崩御、

同年二月廿九日、諒闇御膳供之、五之膳供御也、第一御菜六坏、第二御菜七坏、第三御菜五坏、第四御菜五坏、第五御菓子八坏、

右御菜御汁物等御精進也

高橋紀宗圖調進仕候

一同五年正月廿九日、諒闇御色直六本立之供御供之、第一御菜六坏、第二御菜七坏、第三御菜五坏、第四御菜五坏、第五御菜五坏、第六御菓子八坏、

右御菜御汁物等皆魚味也、御奉行萬里小路殿、是亦十三箇月周供之、此度之御膳者、大隅、高橋、

兩人調進仕候、

一弘治三年倚廬御所江渡御、六本立之供御供之、

一諒闇御色直六本立之供御供之、

右兩度之御膳御菜御汁物等御精進供、御色直ニハ如前魚味一坏宛供之、

高橋紀宗衡調進仕候

一文祿二年諒闇御所江渡御、六本立之供御供之、

高橋蓍素服調進仕候

一諒闇御色直六本立之供御供之

右御菜之內、魚味一坏宛供之、御奉行柳原殿、

高橋調進仕候

一元和三年九月廿六日、諒闇御所渡御、六本立之供御供之、第一御菜六坏御飯、第二御菜七坏、第三御菜五坏、御汁物二坏、第四御菜五坏、御汁物一坏、第五御菜五坏、御汁物一坏、第六御菓子八坏、

右御菜御汁物等御精進也

高橋紀宗好蓍素服調進仕候

一同年十月八日、諒闇御色直六本立之供御供之、第一御菜六坏、內一坏魚味御飯、第二御菜七坏、內一坏魚味御飯、第三御菜五坏、內一坏魚味御汁物二坏、第四御菜五坏、內一坏魚味御汁物一坏、第五御菜五坏、內一坏魚味、第六御菓子八坏、

右御奉行廣橋頭辨殿

高橋紀宗好調進仕候

以上

六月十六日　御厨子所預備前守紀宗恒

内膳司御膳次第

文祿二年　内膳司

御倚廬御膳次第（御精進之御膳也）

一番　二番

[illegible]御飯一坏　御菜七坏　御汁物一坏　御高盛五坏

三番

御盃　御高盛四坏

御倚廬直御膳次第（魚味御膳也）

一番　二番

御盃　御高盛四坏　御高盛二坏

三番　四番

御飯　御高盛

五番　六番

御飽羹二坏　御高盛六坏

七番　八番

餛飩二坏　御汁物二坏

九番　十番

御高盛二坏　御平盛三坏

大祓御膳之次第

御倚廬直之御膳と同ジ

御倚廬之御膳次第

一番

[illegible]御飯一坏　御菜七坏

二番

御汁物一坏　御高盛五坏

三番

御盃　御高盛四坏

同年十月八日

御倚廬直之御膳次第御精進之御膳也、内魚一色アリ、

一番

御盃　御高盛四坏

二番

御高盛七坏

三番

御飯　御高盛五坏

四番

御高盛七坏　同魚一坏

五番

御高盛六坏

同四年八月廿九日

大祓御膳次第御魚膳也

一番

御盃　御高盛

二番

御高盛二坏

三番

御飯

四番

御高盛六坏

五番　御飽羹二坏　七番　餛飩二坏　九番　御高盛三坏
六番　御高盛六坏　八番　御汁物二坏　十番　御平盛三坏

御朝餉事

一文祿二年三月六日ニ、御倚廬之御膳上リ申候時、同日ニ御朝餉、御臺所より上り申候分、調進仕候事、

一元和三年十月八日ニ、御色直之御膳上り申候、其時ハ朝餉調進不仕候事、

内膳司

〔基量卿記〕延寶八年閏八月十九日、及暮御厨子所預宗恒來、御膳事也、相違事申遣了、但頭中將使之由也、〇此年八月十九日後水尾崩

一去々年〇後水尾后和子崩晝御膳、以高土器被供之、今年以臺盤可被供由也、先日頭中將被申間、一段可然返答了、然者臺盤所臺盤、長一脚短一脚也、爲如何哉之旨也、若當日計、殿上臺盤可借用歟如何、

予答曰、殿上臺盤事、臣下之臺盤也、以臣下物被用公物條如何、但臺盤所臺盤被切縮、如何可有之由可申由申歸了、

〔基熙公記〕延寶八年十二月廿六日辛亥、平座臺盤、元和度白木也、此度如何、可爲黑塗之由言上之、雖然事急々難調歟之間、臺盤所之臺盤與殿上臺盤兩所之内可被用何哉、余申云、殿上臺盤可然歟、於臺盤所臺盤は、天子著御之臺盤也、不可然之由令申了、未被治定、

賜素服

〔小右記〕寛弘八年七月八日己卯、今日院〈○一條〉御葬送也、有所愼不参入、九日庚辰、巳刻許、資平自院御葬送所來云、只今事了、昨日亥四點出御御葬送所、〈巖陰長坂東云々〉左大臣、〈○藤原道長〉右大臣、〈○藤原顯光〉内大臣、〈○藤原公季〉大納言齊信、中納言俊賢、賴通、隆家、行成、參議兼隆、正光、經房、實成、賴定候御供、俊賢、行成、兼隆、正光給素服、

〔權記〕寛弘八年十月廿九日戊辰、參内、參上殿上、右大將四條納言、左宰相中將源相公等、先被候、納言密語云、來月十六日事、如何案哉、參内給素服事、先例不定也、正暦諒闇時、一條左丞相參内、素服著位袍、又小一條大將在里第請素服云々、彼時依爲院司候圓融院、又長保諒闇、依爲院司候院不參内、不見其儀、可尋先例云々、　十一月十六日乙酉、申刻許參冷泉院、奉謁左府、〈○藤原道長〉奉一條院御喪間記、〈依大臣命書出自私記之中〉歸宅、戌刻亦參院、同四刻御葬送也、此刻院別當源中納言以下院司及侍臣等著素服、内大臣、藤大納言、右衛門督、雖爲院司不著、藤中納言、予、彈正尹、大藏卿、左宰相中將、左兵衛督、及左中辨朝經朝臣等、不著素服、〈但懸纓著履、執白杖如例〉□　十七日丙戌、詣左府、命云、昨日與春宮皇太后宮兩大夫相共於朔平門著素服云、天暦八年、小野宮大臣於八省廊著之云々、或説避方忌云々、然而正暦二年、故一條左大臣出朔平門、彼年大將軍在子不避方忌之由、於是而知、仍出朔平門著之也云々、今案、延長八年十月、出朔平門著之云々、天暦八年、到八省廊、若是有由緒歟、大和守輔尹朝臣云、故一條院御時、圓融院御葬之日、爲藏人見諒闇儀、侍臣之可給素服者、從者受之、公卿可給者、家司受之、共在陣外、時刻已至、各到陣外、雖著之後參入、然未著之前、其服猶在陣外、而昨日侍臣從者、皆隨身之在陣内、不似先例、　廿九日戊戌、右宰相中將被示云、主上御倚廬之日參内著素服、仍今日參入欲除、當衰日如何、答云、申左大臣可被左右、衰日可避忌歟、暫之中將又云、大臣被示、過今日可除云々、

〔左經記〕長元九年五月十七日甲午、書出可給素服〈○此年四月十七日後一條崩〉之男女、給行事所、

公卿七人〈内大臣、(藤原教通)藤大納言、(賴宗)中宮大夫、(藤原能信)權大納言、(藤原長家、以上後一條后威子兄弟、)源大納言、(師房、威子妹夫、)右宰相中將、(藤原兼經、威子姨之子、)右大辨、(源經賴)〉

藏人頭一人左中辨經輔朝臣

藏人七人右衞門佐平宗、式部丞藤原俊經、橘義濟、源重成、大舎人助貞章、木工助藤原隆經、右衞門尉源頼宗、

侍讀三人式部大輔資業朝臣、權大輔擧周朝臣、散位國成朝臣、

口口五人伊豫守章任朝臣、美作守定經朝臣、美濃守義通朝臣、右兵衞佐資任、前丹後守憲秀、此外中宮權亮兼房、尾張守實基朝臣、木工助藤資經、

御厨子所衆二人顯頼、成宗、

出納三人伴時從、佐伯定成、紀爲頼、

女房十八人先藤三位、藤三位、江三位、菅典侍己上乳母、少將内侍、兵部内侍、左兵衞内侍、左衞門命婦、左京命婦、小馬命婦、侍從命婦、中務命婦、左近命婦、兵衞命婦、小左衞門命婦、式部命婦、兵衞命婦、馬命婦、

又中宮、并一品宮、〇章子内親王、威子女、院、〇小一條院同可令著給者、又奉於女院、〇一條后彰子、威子姉、者、只可令著御帶給、之由有議矣、

〔中右記〕大治四年七月十五日辛卯、裏書云、〇中略

素服麻布〇此月七日白河崩

皇后宮　前齋院〇白河皇女禎子　前齋院〇白河皇女悰子　前齋宮〇白河皇女恂子　仁和寺宮〇白河皇子覺法　長尾

宮〇白河皇子聖慧　法眼平等院御弟子〇行慶

院司

治部卿能俊　藤宰相長實　左京大夫經忠　基隆朝臣　成通朝臣　顯盛朝臣　忠隆朝臣

顯重朝臣　忠盛朝臣　爲重朝臣　資賢　藏人四人

非職

宗章朝臣　資遠　爲俊　盛重　盛通　盛兼　季範　頼兼　親康　繁賢

女房三人

廊御方故通季女也　祝緒　美乃

〔明月記〕建久三年三月十五日丁亥、殿上男女房素服事、○此月十三日後白河崩、中略、

公卿、左府、通親卿、不給本所素服、何不着乎、但私着心喪服者如何、自上不給、何事有乎、可儀、　能保卿、實教卿、公時卿、

殿上人職事五人之外、忠季信清高能朝臣、範光云々、

十七日、今日卿相人々相語云、內裏給素服人、其日雖給、以私日次着之、又御倚廬之間、或着位袍、或着吉服、秦通卿、安元給素服着吉服之由自被語之、

〔玉海〕建久三年三月十九日辛卯、此日主上○後鳥羽避正殿御于倚廬也、○中略、余仰下素服人々、

公卿

大納言實宗卿　左衞門督通親卿　左兵衞督能保卿　左宰相中將實教卿　藤宰相中將公時卿

殿上人

實明朝臣　宗頼朝臣　通宗朝臣　信清朝臣　高通朝臣但不參　忠季朝臣　光綱　親国　長房　範光　藏人　非藏人等

御厨子所預

紀久信

出納

女房

帥典侍　伊與掌侍　辨掌侍

〔明月記〕天福元年十月一日、主上○四條、此年九月後堀河后藻原竴子崩、出御、○中略、其後公卿已下於二條西門東腋西上北面着素服、四條中　別當

親俊朝臣、宗平朝臣、資宗朝臣、有說朝臣、資淸朝臣、兼高、忠高、六位藏人等、
〔大外記師茂記〕貞治三年七月十二日甲戌、今日藏人右中辨嗣房尋申局務云、輕服人賜素服例、可被注進、由其沙汰候也、雖引勘候、今間所見不詳之由被申、請文了、今日右衞門督忠光卿、去九日予狀返事賜之、此間就諒闇事、〈○此月七日光嚴崩〉每日出仕候間、依物忌可解怠候由、以詞示之、返狀續九日記、予荒涼所勞之間、不馳參之趣令申了、則達叡聞、〈○後光嚴〉之由載返事、此次被言付狀於局務云、輕服人賜素服例、可令注進候由其沙汰候云々、兼又先日御注進片案可申請候云々、

輕服人賜素服例、可被注進候由其沙汰候也、謹言、

七月十二日　　　　嗣房

四位大外記殿

輕服人賜素服例、雖引勘候、今間所見不詳候、可被得其御意給候哉、恐惶謹言、

七月十二日

輕服人賜素服、御不審之由其沙汰候、兼又先日御注進片案可申請候、謹言、

七月十二日　　　　忠光

四位大外記殿

十三日乙亥、今日自殿下、〈○藤原良基〉以假名御書被尋仰局務云、建久以後、自內裏給素服人數可具注進云々、從見分被注進了、〈○中略〉今日輕服人賜素服例、無所見候由被獻請文於右衞門督許了、今日和布二帖被志遣權帥仲房卿、本意候由有返事、此次一昨日遺詔奏不審條々、注折紙被尋子息藏人右中辨嗣房之處、委細注進之、今日良智僧來予對面、

殿下仰

だいりがたのそふくの人數女房まで、けんきう以後のをえるしてまいられ候、〈○中略〉いさいの

にき候はゞ、しるしてまいらせられ候べきよしおほせ承候、建久以後、内裏より賜素服人數、所見にしたがひ候て別紙にしるし申上候、〇中略かつ〳〵御心候て御ひろう候べしあなかしこ、

勘例注裏

先日遺詔仰詞以下事、折紙一枚進上仕候、被注下候ば畏入候、輕服人賜素服例、雖引勘所見不詳候、先日注進片文、忩可書進上候、先日伺申入候、初七日御諷經等之事、忩有御伺可被仰下候、凡不限初七日、延久建久不同候歟、以何度例可被立候哉、隨被仰下可相觸使ニ候歟、局催不可事行候之間、就散狀可申職事候、每事可參入言上候、師茂恐惶謹言、

七月十三日　師茂上

人々御中　右衞門督忠光卿

〔新葉和歌集十九哀傷〕妙光寺内大臣身まかりて後、三年の服いまだ果ざりけるに、又後村上院の素服をたまはりて思ひつゞけける、　右近大將長親

三とせまでほさぬ泪のふち衣こは又いかにそむる袂ぞ

〔後小松院崩御記〕雲の上も諒闇とて、御悲嘆の體、見たてまつるもあはれなり、かくて舊院〇永享五年十月廿日後小松崩には、御中陰の儀はじまりて、素。服。の。人。々。こ。も。り。ゐ。侍。り。、

〔親長卿記〕文明二年十二月廿七日、知恩寺猶祗候、御法事御葬禮〇此日後花園崩事等、可爲如何哉之由人人有沙汰、〇中略素服人々已下事、自室町殿〇足利義政被出御點、予、宰相〇顯長、左大辨宰相、秦仲朝臣云云、舊記等人々不所持、仍每事斟々、終日祗候、　三年正月三日、舊院〇後花園素服事、予、宰相、左大辨宰相〇廣光、未拜賀、秦仲朝臣等治定、室町殿御點云々、右衞門督〇季春所望云々、橘以量爲人數、但依爲梅宮長者被止之云々、　二月廿七日、早旦右大辨宰相〇春房朝臣、三條少將〇實隆朝臣、令同導參御寺、後花園院御月忌始也、〇中略舊院女房〇上﨟左衞門督、右衞門督、除素服云々、仍如元被著有色之小袖、作眉、予案之天福二年經高卿

記、御中陰已後、被脱素服、舊院御參矣、早々著黒服給歟云々、然者於諸司素服、如予可被脱棄私用意、此間於令著給衣者、不可被脱棄歟、但有先規歟、可尋知事也、

〔和長卿記〕明應九年十二月十一日辛卯、今夜倚廬渡御也、○此年九月二十八日後土御門崩、中略、素服衆事、於散狀被載素服人々也、是可爲如何體哉之由、帥卿、侍從亞相等、於小御所被相談、依關白命人々可書載、

散狀

素服人人　本家素服衆此外也

公卿

侍從大納言　三條大納言　右衛門督季經卿　勸修寺中納言　甘露寺中納言

殿上人

源宰相中將　濟繼朝臣　守光朝臣　永宣朝臣　尙顯　公音　藤原資直

去廿三日可著素服之由宣下、陣上卿中山中納言、職事右少辨尙顯也、

出納　中原職盛

御厨子所預　紀宗圀

典侍　藤原守子

掌侍　菅原松子

命婦　和氣就子

〔基量卿記〕延寶六年六月十七日、抑御厨子所素服事、○此月十五日後水尾后德川和子崩、先例每度之事也、依今度被下素服了、於內膳司者、先例如何之由相尋候處、先例吉服之由、亡父記置候由申之、甚不審事、雖然先例如此之上は、其まゝ可爲吉服由申付了、大外記有座ニ曰、內膳司素服事、三百年以來、記ニ所見無之よし申之、彌以其通ニ申付了、　十九日、今日素服之人々、內々被仰出、則以書付內觸也、此事已於陣

上卿へ下、折紙之上は、內々職事不及催事也、然ども當時之事故、內々觸也、堅固內々故、奉書紙四折、
追申、素服以下は、從內藏頭調進候間、不及御用意候也、
來廿七日、可有渡御倚廬、可賜素服由內々其沙汰候、當日酉上刻可有御參候也、
六月十八日　基量
今出川大納言殿　民部卿殿　藤中納言殿　右衛門督殿　難波宰相殿　頭中將殿
葉川中將殿　藪中將殿　右兵衛權佐殿　權右少辨殿　民部權大輔殿

廿日、今日本所素服人々、以折紙申遣、此事雖爲本所、於素服從禁中給之間、內々申遣了、素服出來次第、奉行右少辨許へ遣、從彼家可分配、父卿基○東園賢へ申含了、參前攝政光平○二條御對面、本所素服事、內內申入了、

就東福門院御事、○德川和子可賜本所素服由、內々御沙汰候也、
六月廿日　基量
按察大納言殿　葉室中納言殿　左衛門督殿　竹屋前宰相殿　右兵衛督殿
平三位殿　右衛門佐殿　下冷泉少將殿　竹屋侍從殿

右本所素服輩、皆女院有子細輩也、折紙奉書如常、於番衆所書付以鳥飼遣了、
廿九日、參內、本所素服事、今度從內藏頭調進、從本所奉行被相渡由也、此事不可然、先例廳官申沙汰也云々、此事則相渡了由申入了、無是非被仰也、右府○一條兼輝勘例一紙、今日禁裏へ進上、

本所素服事
後成恩寺記云、舊院御素服分賜人々事、廳官用意之、明德度、五月四日御葬禮以後也、○中略
右今日以菊亭進上了

七月九日、宮主代鈴鹿石見守、吉田侍從家來、來申云、昨夜被下候臣下素服事、先例宮主へ下候事、舊記等覺悟不

仕候間、御理申入候由則持參、依之出納へ申付、內藏寮官人へ可遣由申付處、出納令領狀了、則相渡

請取歸了、右坊亞相相談之上申付了、　廿二日、有召午剋參內、以菊亭被仰出者勅問事也、○中略

一本所公卿殿上人除服事、可爲消息宣下歟事、

左府被申云、此事近年除服出仕、皆以消息宣下也、然者消息宣下ニテモ子細有間敷候歟、

右府被申云、音奏警蹕事、陣儀被行候者、除服事も陣宣下可然、音奏事、消息宣下之上は、除服事、

勿論可爲消息歟、共以可爲音奏警蹕次第候、

廿四日參內、○中略本所人々除服事、可爲消息宣下云々、　廿九日、大外記來談諸事、應安度、素服人數、

先々前官人除服無之例、幷ニ音奏警蹕事等、勘例持參記之、　八月六日、今日本所人々除服出仕事、

成御教書了、至昨日五旬也、依之內々窺定處、可爲今日由被仰出了、

前攝政

可令除服出仕給由、天氣所候也、以此旨可令洩申給、仍言上如件、基量謹言、

八月五日　　　　左中將基量奉

左京權大夫殿

此古案宣秀卿古案也、是大臣之禮節也、於前攝政者、可有一段禮哉之旨、左右府へ窺候處、可爲同前

由也、仍如此書遣了、左京權大夫は諸大夫也、中川左京云々、○下略

〔基量卿記〕元祿九年十一月十二日、一本所素服人々本義、○此月十日、明正崩、中略、宣下之事也、雖然此度義、一向

院○靈元御沙汰之間、此義も可有如何哉、本義宣下事、院ヨリ被仰出事如何、又院宣之體も先例不見、

除服之時、必可有宣旨也、然者此義者、自禁裏○東山可被仰出哉之旨被仰入處、議奏兩人伺公、素服之

義、自禁中可被仰出、乍然凶事奉行召寄、禁中御門前申渡候義も如何、又行向義も如何之間、宣旨之

趣、庭田評定へ、議奏輩宣旨之趣相達、凶事奉行へ、自庭田評定傳達之樣ニ治定之由、則庭田評定承

了、其後召寄日野辨、傳宣旨趣了、　廿三日、本所素服之輩、各著素服云々、　廿五日、日野西宰相、去比明正院御不豫以外之刻、小女〔二歳云々〕死去、家內爲地穢籠居、依之素服之人數被除、此義爲小女肝要之刻籠居、甚以不可然由武家憤申云々、此後可有如何哉、

〔實久卿記〕文化十年閏十一月七日庚子、辰刻參舊院〔○此月三日後櫻町崩〕當番也、如例自藏人辨以廻文被示如左、〔昨日仰下趣文、今日到來、〕

本所素服可令著給之旨被仰下候、仍內々申入候也、

後十一月六日　　俊明

廿七日庚申、爲詰辰半刻過參舊院、令參集、御燒香如例、今日一番參仕、〔予巳刻酉刻亥刻丑刻等詰候〕今日詰岩倉三位、行弘、壽康、爲起〔故障〕等朝臣不參、從當番被補之、自右衞門督藏人辨素服賜之事、內々以廻文被示了、如左、

素服

參議以上

冠〔布〕　袍〔同〕　差貫〔同〕　扇〔末廣〕○中略

十二月十六日戊寅、未明參燒香、次退出、今日賜素服、自奉行藏人以廻文被示、左纖〔今度素服、久々中絶之處御再興也、〕〔其體如小忌、布纖色也、〕

後櫻町院御服可令著給之旨被下候、仍申入候也、

十二月十六日　　俊明

素服一統名

十一年正月十六日戊申、今朝內裏清祓云々、〔吉田社祝奉仕之云々〕家內今朝火改、鎭守供神供神酒了、未刻計、自藏人俊明以消息除服宣下之事被示、○中略

可令除服出仕給之旨被仰下候、仍先內々申入候也、恐々謹言、

正月十六日

卽刻除服著衣冠、(奴袴)先參舊院、(宜下之後、先舊院江可參集、從番頭卿被示了、)同時除服宣下人々各參集、(祗候一統)次各同伴參內、付勾當內侍御禮申上、(先議奏、次表使如例、)次東宮江御禮申上、

〔大外記師茂記〕貞治三年

代々被仰素服公卿殿上人以下人數事

後一條院

長元九年四月十七日御事　五月十七日、或記云、書出可給素服之男女、給行事所、

公卿

内大臣(大二條殿)　藤大納言(稙宗卿)　中宮大夫(賴信卿)　權大納言(長家卿)　源大納言(師房卿)　左宰相中將(兼經卿、無骨、)　右大辨(經賴卿)

藏人頭

左中辨守經輔朝臣

藏人

右衞門佐良宗　式部少丞藤原□□　橘義清　左衞門尉源賴家　源重成

御侍讀

式部大輔資□　散位國成

御乳母子五人

伊豫守□□　美濃守茂通朝臣　丹後守宣房

此外中宮權亮兼房朝臣、尾張守實基朝臣、木工助藤原資任、御厨子所衆二人出納三人、女房

十八人、

後朱雀院

寛德二年正月十八日御事　二月廿一日天皇(後冷泉)下御倚廬給

素服人々

權大納言師房卿　權中納言資平卿　信家卿　參議藤原經任卿　同能長朝臣　左近中將同行經朝臣(藏人頭)　同經季朝臣　權左中辨源經成朝臣(藏人頭)　左近少將藤原定長　前丹後守同憲房　少納言源經信　藤原顯□　右衛門權佐同實綱　修理權亮　大舍人助橘貞任　木工助　右衛門尉同隆方　圖書　典藥助藤原信賴(非藏人)　大學　大膳進同貞職(同)

此外內侍二人、命婦四人、藏人二人、出納三人、御厨子所預一人、膳部一人、給素服、

後三條院

延久五年五月七日御事　十七日、天皇(白河)御倚廬、公卿侍臣著素服、先被定仰可給素服人々、依寛德例、公卿五人、侍臣十六人、女房八人也、

皇后宮權大夫藤原朝臣(祐家)　治部卿源朝臣(隆俊)　右大辨源朝臣(經信)　右近中將藤原朝臣(宗俊)　右近中將源朝臣(隆綱)

縣(平字無骨)朝臣　公房朝臣　俊實朝臣(有障不參)　師(忠字無骨)　基(忠字無骨)朝臣(有障不參)　公實　伊實　仲定

顯季　宗□　業房　俊淸　致繼　基綱

此外出納二人、御厨子所預一人、女房八人、

同日外記記云、右大臣(師房公)權中納言藤原祐家卿、源隆俊卿、參議同隆綱卿等、給素服云々、

又云、給素服公卿等、內大臣(信長)春宮大夫能長、源中納言資綱、右衛門督資仲、宰相中將基長、右大辨伊房、左兵衛督實季、

堀川院

嘉承二年七月十九日御事　廿四日、今夜天皇〇鳥羽避本殿、遷御倚廬、給素服人々、

内大臣　源大納言俊實　左衛門督雅信　源中納言國信　藤中納言顕通　權中納言宗忠　右宰相中將顕雅　件度侍臣以下名字無所見、

後白河院

建久三年三月十三日御事　十九日、天皇〇二條御倚廬、公卿以下賜素服、

公卿五人、殿上人十六人、内藏人頭二人、五位藏人二人、藏人四人、非藏人二人、出納二人、御厨子所預一人、女房典侍以下八人、

後堀河院

文暦元年八月六日御事　十一日、今夜主上〇四條御倚廬代、

權中納言隆親　實有　參木範輔　實世　有親等卿給素服云々

後嵯峨院

文永九年二月十七日御事　卅日、主上〇後深草入御倚廬、賜素服人々

權大納言實兼　權中納言師親左衛門督　公守皇后宮權大夫　參議具房　經良右中將　等卿殿上人、兩貫首以下、至六位藏人十八人女房等云々、被用延久例云々、

〔續拾遺和歌集十八雜〕美福門院〇鳥羽后藤原得子かくれさせ給ける比、素服の人あまた參りあひたりけるを見て、皇太后宮大夫俊成のもとに遣しける、　清輔朝臣

人なみにあらぬたもとはかはらねどなみだは色になりにけるかな

返し　皇太后宮大夫俊成

諒闇成服

墨染にあらぬ袖だにかはるなりふかきなみだのほどは志らなん

〔續詞花和歌集哀傷九〕美福門院（〇鳥羽后藤原得子）の御ぶくにて侍けるを、宜旨にて程なくぬぎ侍とてよめる、　大納言雅通

心ざしふかくそめてしふぢ衣きつるひかずのあさくも有かな

〔源平盛衰記二十五〕時光茂光御方違盗人事

又殊ニ哀ナル御事アリキ、去シ安元二年七月ニ、御母儀建春門院（〇後白河后平滋子、高倉御母、）隱レサセ給ヒケリ、主上（〇高倉）今年ハ十五ニゾナラセ給ヒケル、不斜御歎アリテ、御殺膳モ御懶キ程ナリケリ、帝王御暇ノ間ハ定レル習ニテ、廢朝トテ、十二月ノ程、萬機ノ政ヲ留メラルヽ事アリ、但孝行ノ禮ハサル事ナレ共、朝政ヲ止ル事、天下ノ歎ナル故ニ、一日ヲ以テ一月ニ宛テ、十二日ヲ以テ十二月ニ准テ、御色ノ服ヲメス、十二日過ヌレバ、御除服トテ、御色ヲ召替ル事ナレバ、此君モ御母儀隱レサセ給テ後、十二日ヲ過サセ給ヒケレバ、公卿殿上人參會シテ、御除服アリケルニ、不斜御歎ナレバ、參リ給ヘル人々モ、間フニツラサノ風情モヤトテ、御母儀ノ御事申出ス人モナシ、

〔増鏡三藤衣〕又のとし（〇貞應二年）五月のころ、法皇（〇後高倉院守貞、後堀河御父、）かくれさせ給ぬれば、天下みなくろみわたりぬ、うへ（〇後堀河）も御ふくたてまつる、きびはなる御ほどに（〇時御年十二）いといみじうあはれなる御事なめり、

〔百練抄十四四條〕天福元年九月十八日己未、及晝有女院（〇後堀河后藻璧門院藤原竴子、四條御母、）崩御云々（〇御年廿五）　廿四日乙丑、右中辨光俊朝臣、爲遣令使參陣、固關警固事被宣下、又諒闇儀也、但主上錫紵事有豫議、嘉承之度、即位以前御別殿、當今已成人之禮也、仍可召錫紵者、　卅日辛未、主上（〇四條）召錫紵、遷御別殿、（以弘徽殿北面爲其所）幼主七歲以前、無倚廬儀、又不召錫紵也、然而依惲永萬養和例、聊被相違也、

〔百練抄十四四條〕文曆元年八月六日壬申、晝方仙洞（〇後堀河）物忩、或云、去夜御絕入、今朝又有此事、及酉刻已

御事切給、春秋廿三、十一日丁丑、故院凶禮也、主上〇時御年四召錫紵御別殿、

〔滋草拾露 凶事〕童帝亮陰例

鳥羽院 五歳 嘉承二年七月十九日父帝 堀河院 崩

六條院 二歳 永萬元年七月廿八日父帝 二條院 崩

安德天皇 四歳 養和元年正月十四日父帝 高倉院 崩

四條院 三歳 天福元年九月十八日母后 藻壁門院〇後堀河后藤原竴子 崩

〔杜氏通典 八十一 禮四十一〕宗室童子爲天子服制議

魏晉故事曰、皇子廣陵王、年十一、孫爲祖服周、當爲臣服從本親服、皇弟吳王、年十、章郡王、年七、又當倚廬服成人禮、著何幘服、應琳議、按禮喪服、諸侯爲天子斬、今廣陵王、列土建國、古之諸侯、宜從臣例、又禮童子不居廬、不杖不菲、廣陵王未冠、吳王章郡王、卑幼不應居廬、古但有冠無幘、漢始制幘、可如今服卷幘、大唐元陵之制、孫爲祖齊縗周年、臣爲君斬縗三年、今伏准遺詔、皇帝服十三日、小祥二十五日、大祥二十七日釋服、臣下並從釋服、皇孫既是齊縗周年服、禮有嫡子無嫡孫、其服並合從皇帝十三日、小祥二十五日、大祥二十七日釋服、釋服後以慘公服至山陵時、却服初齊縗、服事畢卽吉服、

古事類苑

禮式部二十四

天皇服喪下

太上天皇服后妃服皇太子服（併入）

古事類苑

禮式部二十四

天皇服喪下 太上天皇服后妃服皇太子服 附

〔文德實錄 一〕嘉祥三年三月己亥、仁明皇帝〇文德御父崩於淸涼殿、庚子、命京畿七道、擧哀成禮、限以三日、喪服之期、以日易月、辛丑、東宮〇文德成服、公卿百寮從之、四月癸丑、帝〇文德公除、百官吉服、大祓於朱雀門前、

〔三代實錄 一清和〕天安二年八月廿七日乙卯、文德天皇崩於冷然院親成殿、九月四日壬戌、東宮〇淸和成服、群臣百寮從之、命五畿七道、始著素服、擧哀成禮、擧哀之禮、每日三度、限以三日、式部省率百官於冷然院南路頭擧哀、公卿及侍臣已下於東宮、喪服之限、以日易月、十三日而釋之、其遠所者、以詔到日爲期、七日乙丑、宣詔內外云、非年之遏密、惟從易月之制、率土黔黎、須有心喪、宜禁飮宴作樂美服、十六日甲戌、今上公除、百官吉服、仍大祓於朱雀門前、

〔日本紀略 十二三條〕寬弘八年十月廿四日癸亥、戌刻冷泉院太上皇〇三條御父崩于南院、春秋六十二、十一月十六日乙酉、戌刻天皇於倚廬著御服、殿上侍臣皆著之、天下諒闇、廿七日丙申、是日、天皇除素服、著御橡御衣、公卿侍臣同著之、天皇自倚廬還御本殿、

〔百練抄 十四四條〕文曆元年八月十一日丁丑、故院凶禮也、〇此月六日後堀河崩、四條御父、主上召錫紵御別殿、廿二日戊子、今夜主上除御錫紵、還御本殿、

〔公名公記〕永享五年十一月六日、有渡御倚廬〇後花園著御錫紵云々、〇此年十月二十日後小松崩、後花園御養父、實御族父、十八

日、戌刻主上除御鍚紵、還御本殿云々、

〔大江俊矩記〕寛政六年七月七日壬辰

一品宮（○東山皇孫典仁親王、光格御父、）薨去ニ付、從昨六日五ケ日廢朝候、依之被垂御簾、來十一日被上御簾候旨、六條黃門被申渡候、（○中略）

七月七日　常芳

丹藏人殿

新藏人殿

十日乙未、極﨟廻狀、從差次藏人傳來、

從來十二日觸穢候、且來廿一日著御鍚紵、（○光格）八月四日除御、一閔之間、御心喪之事、

右之段、可得相心、頭辨被申渡候、仍申入候也、（○中略）

七月十日　常芳

三人

二十一日丙午、鍚紵著御、早參申刻也、各著下襲、參仕、奉行廣橋頭辨胤定朝臣、諸司同刻參仕、依奉行命御裝束奉仕了、　八月四日戊午、脫御鍚紵、申刻早參、御禊、戌刻早參、奉行胤定朝臣也、

〔日本書紀二十七天智〕天萬豐日天皇（○孝德）後五年十月崩、明年皇祖母尊（○齊明、天智御母、）即天皇位、七年七月丁巳崩、皇太子（○天智）素服稱制、

〔愚管抄一天智〕此御門、孝養の御心ふかくして、御母齊明天皇うせ給ひて後、七年まで御即位し給はず、

〔西宮記臨時四〕天曆八年正月四日、太后（○村上御母藤原穩子）於昭陽舍薨、其後移住淸涼殿北邊廊、殿上侍臣候瀧口所、自子剋內豎不奏、　十日、亥剋坐倚廬、（或日、發喪日可移件廬、四日四夜坐、不可然云々、）即著素服、（鈍色貲布衣袴、同布頭巾束帶）

等也、　十六日、左大臣宣、令解陣開關云々、　二十二日除素服、出倚廬、

〔百練抄十四四條〕天福元年九月十二日癸丑、自去夜女院(○四條御母藻璧門院竴子)御産氣云々、來月御當月也、人以驚云々、　十八日己未、御産氣日來連々、今曉殊物忩之間、寅刻皇子降誕、萬人悅豫之處、皇子有御事云々、及晝有女院崩御云々、(御年廿五)　廿四日乙丑、右中辨光俊朝臣、爲遣令使參陣固關警固事被宣下、又諒闇儀也、但主上錫紵事有豫議、嘉承之度、卽位以前御別殿、當今已成人之禮也、仍可召錫紵者、廿日辛未、主上(三歳)召錫紵、遷御別殿、(以弘御所北面爲其所、)　十月十二日癸未、主上除錫紵、自別殿遷御本殿、宮主兼躬奉仕御禊、

〔園太曆〕觀應三年(○文和元年)十一月十二日壬午、後開陽祿門院(○後光嚴御母藤原秀子)今日御出家、御惱近日危急之故云々、勸修寺宮胤守法親王爲戒師、如此內々儀云々、今年四十二歲歟、　十二月十七日丙辰、今日執柄(○藤原良基)被送狀、廢朝以下事、聊被談之、愚存分載愚報申了、問答續之、(○中略)

抑陽祿門院遺令、廿二日可令奏候、廢朝及來春朔之由、賢慮如何樣候哉、件日卷御簾奏音奏歟ニ候、不可及子細哉、但及兩年間之例候や、候はんずらん、每事新儀、雖不能是非、背初儀之條、無念之間、內々令啓候、必々如例、恐々謹言、

極月十七日 [illegible] 判

錫紵可著御者、先藏寮御服事不可被略候哉、久すも當日兩條沙汰候歟と覺候、又廢朝與錫紵兩條候、同日勿論候哉、如料足心苦存候、無何爲被仰出、以次令啓候、爲恐恐旁可參謝候也、

恐悅之處、恩問喜承了、陽祿門院遺令奏、廿二日候ハヽ、廢朝誠可及立春以後之條勿論候歟、先規不分明者、誠聊雖不審候、無他日次候ハヽ、力不可及候哉、先此段內々可被尋仰奏侍朝臣歟、凡者如此事、以沙汰始撰日次定事、日數相懸之條、不可有巨難存思給候、但廢朝已後、卷御簾事などは、依日次延縮多例候哉、錫紵除御、又三箇日之由雖被定日次、不宜之時、或當日或翌日なども存例

候やらんと覺候、旁如准據可被尋聞食兩局歟、老耄隨日倍增之間、如先規廢忘、當座不及暗誦候、公務陵夷、爲朝家誠不便事候、御輿行尤可爲善政候歟、委細仰猶提存候、旁可參啓候、且可召進歟、

實夏候也、恐惶謹言、

十二月十七日　　公賢狀

廿二日辛酉、抑今日陽祿門院遺令奏也、使右少將藤原隆右、松殿中納言參陣奉之、廢朝三箇日、固關警固事、被仰兩局、又被止音奏警蹕、錫紵來廿八日可著御云々、內藏寮御服未著御、依是料足不合期之故候歟、遺令奏同日常例歟、而錫紵ロロ別日著御有先例歟、〇中略傳聞今日陽祿門院遺令奏、廢朝三箇日、錫紵今日無沙汰、後日可著御之、遺令奏同日也、各別存例云云、　廿八日、後聞今日主上著御錫紵云々、但內藏司御服先公〇公恐誤字仍先著御、其後召錫紵云々、

(百一錄)延寶五年七月五日、戊下刻陣儀始、新中納言殿〇園國子被任准后宣下云々、上卿今出河大納言、今晚新中納言殿薨逝、御年序五十有四云々、今上皇帝〇靈元之御萱堂、園亞相基福卿妹、東園大納言〇基姉公也、〇中略無觸穢諒闇等之儀云々、但三日御廢朝、三日內著御喪服、

(實久卿記)天保十四年三月廿一日甲子、三位局〇勧修寺婧子所勞不被勝、依之可參內自殿下〇鷹司政通示給、已刻計參內、殿下令參給、兩役各參集、午刻計、殿下兩役各御學問所招給、三位局所勞大切、薨去節、今上〇仁孝御實母之儀、如何可被遊哉評定給、群議上、左可被申上示給、

三位局薨去、主上御實母之儀、雖御哀悼尤深、後桃園院遺詔之旨有之、光格天皇厚叡慮被爲在、御繼體之時、被定女院〇光格后新清和門院欣子内親王御實子、依之如今度、的當之先蹤無之、靈元院御代、新廣義門院〇靈元御母國子延寶五年薨去、雖御實母、三ヶ日御錫紵著御、五ヶ月御心喪、花園院御代、文保元年伏見院崩之時、擬祖父帝無諒闇、以日易月之禮如常、於花園院者、爲後伏見院御子、是依御讓國之次第、爲祖父帝之間如此歟、新廣義門院之時、被追此例、雖然此時御代數相重、全不的當、況今度之儀、

尤不相當、依之可爲五十日御心喪哉之事、准后院號等宣下之儀、往年者格別、於今度者、御沙汰不被爲在方、可然哉之事、

殿下令參御前給、須臾兩役各召御前、東宮御元服、來廿六日御延引、來年三月御治定之旨殿下被傳仰、一同謹奉退御前、後刻殿下退御前給、可爲五十日御心喪哉之事、猶左大臣齊信〇二條以下勅問人々、明廿二日可有勅問被仰出、又敏宮、甘露寺家御退出被仰出、申終刻令渡于彼家給、予內々伺候、彼家向、坊城前大納言、依所勞予承之、宮伺御氣色歸參內、付女房申上、寅刻計、三位局、今夜酉刻薨去之旨、武家傳奏披露左兵衛督、今日當番小時聞食、依之自今日三ヶ日廢朝、東宮三ヶ日御愼被仰出、諸臣申示、各伺天氣、付勾當掌侍東宮同御氣色、伺上此後退出、予參殿下亭申入、有子細直歸家、自今日宮中御精進也　廿二日乙丑、巳刻參內、兩役各參集、殿下令參給、勅問人々各參集、左大臣不參、權中納言行向被申之、三條大納言今日當番於小御所下段、昨日之旨勅問之由被申之、小時右大臣尙忠〇九條以下於同所、各無存心、猶可有天氣被申上、左大臣、先是無存心之旨以一紙被申上、三條大納言、殿下へ被申入、小時令言上給之處、三位局薨去、依有思召、五十日之間可有御心喪、但著御期、追可被仰出可被仰被傳仰、諸臣一同申示、申刻計退出、諸臣一同、昨日今日伺天氣了、東宮同伺御氣色、　廿三日丙寅、巳終刻參內、直宿仕、今夜子斜、淸涼殿被上御簾、依蝕、緋終也、明日明後日等凶會日也、依口之間へ上之、予小覲輔世申示之、　廿六日己巳、辰終刻參廟、申刻計、參殿下亭、申入有子細、來月三日戌刻、御心喪御服著御、來五月廿四日戌刻脫御被仰出了、

〔實久卿記〕安政三年七月六日辛酉、申下刻亦參內、亥刻計、武傳兩卿參入、新待賢門院〇孝明御母正親町雅子今日申刻薨去之旨、附右大將當番也奏聞、聞召、依之自今日五ヶ日廢朝、三ヶ日錫紵著御、五ヶ月御心喪被仰出了、新廣義門院、延寶五年薨去之節被追例、今度被治定了、殿下伺定給、內々示給、　九日甲子、巳終刻參內、錫紵著御以下雜事申沙汰、相役各參仕、申刻計退出、　十二日丁卯、申下剋參內、今夜戌剋錫紵著御也、殿下令參給、申沙汰胤保朝臣、戌剋出御、常御所傍間御小座敷也令乾向給、殿下被候御後、右大將、源大納言、予、萬里小路中納言、

爲養母嫡母繼母准母服

左大辨宰相、諸奏加勢候、次間、山水畫間胤保朝臣以下候、其次、西上北面、著御先永祐供、御襪、次著御錫紵、宮内卿永祐等奉仕之著御了、殿下以下各退去、付勾當掌侍伺天氣退出、時亥刻計也、十四日己巳、申剋參内、今夜錫紵、宮内卿永祐奉仕之脫御也、酉下刻出御于常御所傍間、殿下不令參給、右大將以下候、次間、一如十二日、今夜武傳其次間被候、次脫御、宮内卿永祐奉仕之次永祐供御冠、依心喪御服供御座倚、但不著御、了入御、今夜御禊也、同御所供御裝束、戌下刻出御、胤保朝臣供御贖物、獻大麻、宮主良祥朝臣著庭中座、申祝詞、如例、了入御、事了兩役無異申恐賀退出、于時亥刻初也、胤保朝臣、於朝餉簾下奏吉書、付内侍、下新大納言、宗清息

〔新葉和歌集十九哀傷〕新待賢門院○後村上御母藤原廉子かくれさせ給ふて後、三とせまで諒闇の儀にて有ける
を御ふくはてけるとしの五月五日、さうぶにつけて前大納言實爲にたまはせける、

後村上院御製

今更にねにこそたつれ三とせまであやめも志らで過し悲しさ

御返し

前大納言實爲

あやめをも志らですぎこし程よりもけふこそ更にねをばそへつれ

〔中右記〕永久二年十月一日壬寅、申時許、從院有召、急事者、仍馳參、雖御物忌參、北面方、民部卿、大藏卿、又參入、殿下○藤原忠實令參給、大外記師遠、明法博士信貞、依召參集、仰云、今日未刻、中宮○堀河后篤子内親王已崩給者、而今日平座、明日八幡行幸、主上○鳥羽御服有無、早可量申者、被問外記、人々相議被申云、今日平座可被止、明日行幸可延引、又主上御服之事、明法博士信貞申云、可有三ヶ日御錫紵者、申旨頗有不審事等、仰云、平座止之由可仰下、明日八幡可延由可仰下、頭辨各以消息仰下上卿了、行幸上卿右衛門督、又治部卿、只今參平座了、仍又仰下歟、於主上御服有無者、追心閑儘引合本文等可沙汰歟、今日朔日也、追可有一定者入夜陰、人々退出、大略、寛平○宇多中宮温子延喜七年六月八日崩、卅六彼例可相叶歟、是今上繼母皇后崩例者、但温子后ハ養延木帝○醍醐云々、此中宮ハ、只雖繼母、不養今上、如何、延喜七年御記云、中宮崩

依繼母雖可有一日服、依有志三ヶ日著錫紵者、然者彼三ヶ日ハ依御志也、今度ハ只一日御服歟、先先於一日錫紵者、主上不著御云々、此事今日未有一定也、今日止小考定云々、一昨日有考定也、中宮名篤子、後三條院第四女、與太上天皇〇白河同母也、治暦四年爲内親王、九延久元年叙三品、同五年三月十一日卜定賀茂齋院、五月七日退齋院、依後三條院崩也、承暦三年八月准三后、是依爲祖母陽明門院養子女院申請也、　七日戊申、早旦依召參院、雖御物忌候殿上、民部卿、俊大藏卿、爲兼參入、頃而殿下令參給、皆直衣、頭辨實行覽諸道勘文、外記、明經、紀傳、儒宗在直朝臣、明法、是中宮崩後雜事、主上御錫紵有無日數等事也、内々於院殿上被相定也、大藏卿讀申勘文、頗勘文趣不相定也、但法家勘文稱嫡母由、依一月服、可有御錫紵三ヶ日之由勘申也、仍可定申、博士二人、信貞、明兼、大外記師遠被召儲也、人々相議云、已稱一月御服、依以日易月、可有一日也、而稱三ヶ日由如何、明法申云、先儒直本勘文勘件旨也、人々被申云、猶此事不可然、一日御錫紵可有也、仰云、一日錫紵ハ不可服由見延喜御記也、然又故匡房卿、昔年郁芳門院崩給時勘申云、雅明親王延喜七年十月薨、主上服錫紵、一日中除御、天德四年四月理子内親王薨、主上服錫紵、一日中除御、雖一日先例有御錫紵也、依彼卿申、永長元年八月上皇服錫紵、一日中除御也、温子中宮時、依養帝三ヶ日錫紵、只今光平又申云、舊勘文中、媄子内親王寛弘五年五月廿五日薨、九歲主上服錫紵、一日中除御也、如此例雖一日著御者、人々被申云、然者一日著御錫紵、則除御何事候哉、但延喜温子皇后ハ、依養母志三日錫紵之由見御記也、於此中宮者、奉於今上無所養儀、只任法嫡母繼母之儀也、仍可有一月服之故、一日御錫紵可然歟、仰云、然者今夜著御除御可宜者、又仰云、警固固關廢朝日數如何、被問大外記、申云、不論親疎、皇后崩時、皆五ヶ日也、仰云、可有五ヶ日、〇中略晩頭依有陣定、可參内之由有催也、酉刻許參内、依有催也、〇中略頭辨下諸道勘文、民部卿取一通被結申、仰云、可著御錫紵哉否、又日數如何、幷廢朝日數等可定申、一々見下、外記勘文明法明經紀傳儒宗在良朝臣等勘申合五通也、右大辨讀之、申上云、諸道多可有錫紵、但以日易月、仍一日者、又廢朝三箇日、右兵衞督云、日數勅定、

源中納言申云、可依先例、治部卿申云、同右大辨予申云、御錫紵事、同右大辨、但於廢朝者、如此皇后崩時、多五箇日也、仍可有五箇日歟、藤大納言、右大將、同右大辨、民部卿同下官定申、以頭辨被申上、不書、只以詞被申、勘文等同返上之、〇中略今夜主上、於西南廊著御錫紵、則除御、行事藏人資兼者、 九日、入夜頭辨送書、廢朝五箇日可有之由被仰下了、而日次連々不宜及數日也、而今夜無障、被縮日數如何、可奏申者、如此事早可依先例也、但被縮日數常事也、件旨申了、〇又見殿暦

〔日本紀略一醍醐〕延喜七年六月七日壬子、皇太夫人藤原朝臣温子〇宇多后崩、年卅六號七條皇后、天皇之繼母又養母也、有警固事、 九日、令諸道勘申中宮崩後事、天皇著錫紵三日、

〔園太暦〕觀應三年〇文和元年十二月五日、今度官外記匡遠宿禰、師茂、清澄、勘例抄之、〇中略

郁芳門院白河院皇女、堀河院養母、

嘉保三年〇永長元年八月七日御事、八日女院御入棺、

同十五日、令諸道博士勘申郁芳門院崩後雜事、

同十六日諸卿著仗座被定申之、御錫紵三日、廢朝五日之由有僉議、

同日有遺令奏、外記依應德中宮薨時例被行之、但不申山陵國忌事、又警固固關廢朝音奏停止等事、同被仰之、今夜女院御葬禮、

同廿日有解陣開關之事、今日主上〇堀河著御錫紵、同廿二日除御錫紵、

〔玉海〕治承三年六月十八日乙巳、早旦人傳云、白川准后盛子、高倉御養母、入道相國〈平清盛〉女、故中院攝政〈藤原基實〉室、家一所資財庄園、皆爲件人領、生年廿四、去夜薨去云々、 廿九日丙辰、白川殿薨奏贈位等事有其沙汰云々、被問前相國左府等云々、大略淑子例歟云々、宇多養母云々 六月祓如常、陰陽師晴綱、晴時子陪膳行頼、役送信光、已上衣冠

白河殿准后薨逝間事

養母事

中宮温子宇多后、延喜(醍醐)繼母并養母、
九日甲寅、葬禮也、
十日乙卯、右大臣奏諸道勘文、有議曲情從恩、錫紵三日、廢朝五日、今案、爲繼母錫紵一日也、而依爲養母爲三日歟、
郁芳門院堀川院姉并養母
嘉保三年八月七日甲子有事
十六日癸酉、葬禮也、左大臣以下著仗座、被定諸道勘申御錫紵廢朝等日數事、有議錫紵三日、廢朝五日、依延喜七年例也、權中納言大江匡房卿留座行事、院別當右近少將源能俊朝臣、參陣外申遣令旨、諸衛警固固關付國司、
侍從一位藤原淑子宇多養母、贈太政大臣長良女、右大臣藤原氏宗室、延喜六年五月廿八日庚辰薨、
廿日壬午、召中納言源貞恒卿、令行宣命并贈正一位事、參議十世王中務大輔源治朝臣等爲使、又仰穀倉院給絹百疋調布二百段、止葬儀使、抑令勘詔書宣命文等無假母事、而太上法皇〇後白河常稱養母、故宣命文等有此意、位記狀云、當上皇龍潛之時、盡阿渠供養之勞云々、始自今日下簾、不聞朝政三日、
御錫紵事
准養母之義者、三箇日無異議、五箇日總無先例也、祖父母與養母同五月服也、然而錫紵不過三日、
一日又無所據之故也、但無日次之時、或當日著除、或二日著除、或又不憚日時除之、
不視事日數事
爲養母之義者、二等親也、三日不可聞食朝務、若偏爲三位之儀者一日也、爲養母之義者、不可有此儀、
薨奏事
爲養母之義者、尤可被行之、從隨出家之儀猶可被行之、選子內親王長元八年六月廿六日倫子天喜元年六月廿二日睦子永久二年三月七日等也、御服親之人、雖出家之後必奏之、

宣命贈位事

准淑子并代々外祖母等例者、可被贈正一位歟、准女御等例者、可被贈從二位歟、但三位准后人、并有養母之儀者、可被贈正一位歟、

同使事

准延喜六年例者、參議一人四位一人可爲使歟、

件條近例出家人止此儀、永久二年三月七日睦子、（外祖母、有奏無贈位、）保元三年十二月廿九日（追贈母氏、外祖父日）也、公子、（外祖母、）依爲出家人、無贈位宣命等事、但出家人見存、叙品并准三宮、祐子內親王、（延久六年六月十六日叙二品、）惠子女王、（永観二年十一月一日准三宮、）藤原全子、（久安六年正月廿二日准三宮、）皆出家之後也、可被相准哉、可在時議、

當日出家人不用出家歟事

永延三年六月廿六日、太政大臣（賴忠）薨、先下頂髮授戒畢云々、

七月廿日、薨奏有諡號（廉義公）贈位（正一位）等事、

警固固關事

郁芳門院時（嘉保二年八月十六日）諸衞警固、固關付國司、

淑子時（延喜六年五月卅日）無此事、（但養祖母也、）外祖母倫子（天喜元年六月廿二日）睦子（永久二年三月七日）等、同無其事、可准此等歟、

右大略注進如件、

六月廿五日　大外記清原賴業

七月廿一日丁丑、昨日白川殿有贈位事、上卿權中納言實家卿、宣命使右大弁長方卿、位記使橘以政朝臣云々、廢朝三ヶ日、音奏停止事被仰下、賴業眞人云々、昨日贈位之間事、職事甚親不仰官、官人史一人不參、奇異事也云々、

〔百練抄　十後鳥羽〕文治五年七月廿日戊寅、上西門院（○鳥羽皇女恂子內親王、後鳥羽御准母、）崩、（春秋六十四、）　十一月十一日丁

酉、權大納言實家卿參入、奏上西門院遺令、自今日廢朝三ヶ日、

〔百練抄 十二順德〕建暦元年十一月八日、春花門院（○後鳥羽皇女昇子内親王、順德御准母、）崩御、日來御邪氣云々、　十六日、被奏前春花門院遺令、今夕主上著御錫紵、

〔園太暦〕文和元年十二月五日、今度官外記（匡遠宿禰、師茂、清澄、）勘例抄之、（○中略）

遊義門院（後深草院皇女、後宇多院妻后、後二條院准母、日來國母儀、○鈴子内親王、）

德治二年七月廿四日御事、廿六日御葬禮也、

八月四日、北野祭御拜以下如例、

同五日、前遊義門院遺令奏、素服擧哀停止廢朝三ヶ日、固關警固事被仰之、

主上著御錫紵即除御、可爲三ヶ日之由雖有沙汰即除御、　同七日、開關解陣、　同十五日、石清水放生會被付宮寺、

〔基量卿記〕貞享二年五月廿四日、准后（○後水尾宮人藤原隆子、靈元御實母、）一昨夜被薨、昨日大祓被行之間、今日及奏聞、（武家傳奏）則召予參殿下、（○一條冬經）准后依薨去廢朝之事勅問、殿下被計申云、口上也、

一依准后被薨、廢朝之事先例無之候歟、雖然任大臣親王宣下以後、更蒙准后宣下、是爲規模、且又攝關以後、猶准后宣下有之、室町家、依大臣之准后、著關白之上候事所見候、然上ハ准后之儀、誠重事歟、大臣猶有廢朝之上者、三ヶ日廢朝可然歟之間被申上、則及言上處、可爲其通由仰也、則予申沙汰、垂御簾入下御格子了、

〔季連宿禰記〕貞享二年五月廿四日癸未、一昨日廿二日依准后（御匣殿從三位隆子、後西院母公、）薨去、自今日至廿六日、廢朝三日之由被仰出云々、是禁裏伊與御局、今日被示之、抑當今（○靈元）後西院者、別腹御連枝也、仍准后之事、於當今者無御由緒、然今度廢朝之子細者、就准后歟、但又就院中之母公歟、御沙汰之旨難知、

〔實久卿記〕弘化四年十月十三日己未、今日申刻女院〇仁孝后、新朔平門院、藤原祺子、孝明御准母、御薙髮也、戌終剋武傳兩卿、今夜戌剋女御崩給旨言上、依之伺天氣了、子剋計退出、　十四日庚申、女院崩給、今度諒闇有無之事、公卿參議以上有勅問、但關前內大臣、坊城前大納言〇俊同上、予昨夜參、仰左大臣〇九條尚忠亭參入、謂之、以一紙申入了、攝家一同被傳之事、但關白左大將等不被尋下、忠房・實直等朝臣、依幼年同上等申入了、

主上〇孝明御養母喪、雖無諒闇例、近來或諒闇其例不一、今度被處何例可為的當哉、所意被尋下候、

次參內、勅問之事、內府兩前內府等諸大夫召招申入、大中納言參議各第一召設、柏卿列座、〇代闕　三條大納言第一被申渡了、未刻計退出、　十五日辛酉、午終剋參內、相役一同連名申勅答了、

主上御養母御喪、可為諒闇否之事、各於所意者、申述于執柄言上、猶宜在群議矣、

實萬上　光成上

實久上　雅久上

聰長上

左大臣以下、各勅答被申上、酉終剋召御前、〇兩役一同　殿下被候、今度諒闇不的當旨諸卿多申之、依之錫紵三ヶ日著御御治定之旨被仰下、各謹奉之退去、

今度諒闇有無之事、近有天明例、殊被重收養之恩、雖叡念每事愈厚、公卿多申諒闇不的當之旨者、據令條并延喜七年例、及永長元年京極師實公被定申、且被採用享保五年近例、廢朝七ヶ日、錫紵三日御治定之事

各明日可申示、殿下垂命了、亥刻計退出、　十六日壬戌、巳初剋、今日諒闇無之事諸臣申示了、申終剋退出、　十九日乙丑、故女院入夜亥剋御入棺也、自今日七ヶ日廢朝、被下御簾、亦自今日天下觸穢也、　十一月十二日戊子、自去夜伺候、今日故女院遺令奏也、殿下令參給、申承雜事、巳剋計遺令使右少將具慶朝臣陣外參入、外記出逢申遺令趣、先是三條大納言著陣、外記申之、亟相付職事愛長朝臣奏

爲祖父母服

聞、次警固固關被仰之、其儀不及見、(先日殿卿有之間、今度無其儀、)予午剋計退出、(○中略)今夜於年中行事障子南庇著御錫紵(設御座、)予參故女院之間不候、詰、錫紵著御中、被下御簾、(自桃花門東一間被下御簾中、殿上人可卷簾之由、示給了、○中略)先日 十四日庚寅、今夜錫紵除御也、其後有御禊、亦於朝餉有吉書御覽、其後上御簾、

〔三代實錄 二十清和〕貞觀十四年二月卅日庚午、去年九月二十八日太皇太后(○仁明后藤原順子、淸和御祖母、)崩、十月五日葬、自十月計之、至于是月滿於天皇心喪五月之限、仍大祓於建禮門前、

〔日本紀略 一醍醐〕昌泰三年四月一日戊午、皇太后班子女王(○光孝后)崩、(八年卅)號洞院大后、今上之祖母也、二日己未、警固三關、停擧哀、不任葬司、天皇著素服、不視事三日、

〔日本紀略 二朱雀〕承平元年七月十九日甲辰、戌時宇多院太上法皇(○朱雀御祖父)崩仁和寺御室、(春秋六十五) 廿五日庚戌、依法皇遺制、止諸司諸國擧哀素服、天皇服錫紵、 十二月十七日庚午、於建禮門大祓、依法皇心喪滿限也、諸司用吉服、內豎音奏、

〔山槐記〕永曆元年十一月廿三日丁酉、左少將通能雜色、於殿上口邊、傳主殿司云、美福門院(○鳥羽后藤原得子、二條御養祖母、)已令崩給云々、 十二月四日戊申、午刻向右大臣(公能)亭、(○中略)被命云、美福門院崩事、可被行廢朝許云々、是普通后宮儀也、養祖母不可有錫紵之由、法家勘申尤理也、然而服依恩云々、朱雀院幸太后之時、令擧問思食置事御、太后被仰云、不見宮(○村上)在位之時事、遺恨也者、朱雀院爲叶彼御意趣忽遜位、村上踐祚、仍天曆御時爲先院宣、參內人、先可參院之由被宣下、依母后一言、忽有御位事、依難令謝彼恩給、雖無例有忌月云々、而當今(○二條)卽位事、故鳥羽院思食立者、女院自襁褓中被奉養育、依思食彼院事也、而父不卽位、子卽位事、雖有先例、無乍置見存父、其子卽位之例、仍當院(○後白河)有踐祚、相繼當今有卽位、云院云內、彼恩爭可令謝盡給哉、普通儀無術有爵事也、(○中略) 廿一日乙丑、今日美福門院遺令奏聞云々、(去十一月廿二日崩、廿五日御葬云々、被通神今食之間及于今也、)上卿富小路中納言(公通)辨權右中辨成賴參云云、被固關警固、廢朝三ヶ日云々、

〔百練抄十四四條〕暦仁元年十月三日庚申、北白川院〇後高倉院妃藤原陳子、四條御祖母、崩御、御年六十六、廿三日甲子、北白川院被奏遺令、主上召錫紵、廢朝警固如例、

〔續史愚抄中御門〕享保十七年八月六日庚申、法皇〇靈元日來有御惱、而今日俄御增氣、亥刻崩于下御所、御年七十九、　廿九日癸未、故院遺詔奏、上卿新源大納言、通兄使左中將爲香朝臣、此次被行警固固關、上卿同前、已上奉行藏人頭右大辨植房、自今日五箇日廢朝、春宮〇櫻町同御愼、〇中略今夜主上〇靈元御孫中御門依法皇御事著御錫紵、於小御所也、可爲三箇日、奉行植房朝臣、　三十日甲申、敬法門院〇宗子、法諱宗秀、故院妾、東山院母儀、中御門故前內大臣宗條女、崩、七十六歲依此事明日主上御錫紵脫御延引、可被加今一日者、亦此穢氣不可延及于宮中旨被仰云、公卿殿上人等有混此穢　九月二日丙戌、今夜主上脫御錫紵有御褉、但自去月至十二月御心喪云已上奉行藏人頭右大辨植房朝臣、

〔寶久卿記〕弘化三年六月廿一日甲戌、武傳兩卿被參女院、〇光格后、新淸和院欣子內親王、孝明御祖母、辰刻計被歸參、女院御養生不被叶、昨二十日亥刻崩御之旨言上、新大納言被奏之、　七月廿二日乙巳、巳刻參內、依番也、今度依女院崩給、著御錫紵否之事、自過日殿下〇鷹司政通內々示給事有之、昨日被仰出注一紙、殿下當番卿賜之續左、

一就女院崩御著御錫紵否之事、新中和門院〇中御門后、藤原尙子御事時無著御、又敬法門院〇靈元宮人、藤原宗子之時、爲靈元院著御中、依叡慮脫御一ヶ日被延引、先蹤如此、且令條蔑候、今度無著御、可有御心喪之處、亮陰一莽之間、乍御殘念無御沙汰候事、徽宮御同樣可有御心喪之處、諸臣一同、不待除服宣下出仕御時節候故、不被仰出候事、

右今日諸臣予申示了　廿三日丙午、自去夜伺候、殿下令參詣申承雜事、辰終刻計、故女院有遺令奏、上卿德大寺大納言、實遺令使左中將實義朝臣、遺令詞、去月廿日、新淸和院崩給、不被任緣喪雜事以下、可奏聞、警固固關、自今日五ヶ日廢朝也、上卿同上卿、予巳刻計退出、

〔中右記〕寛治八年〇嘉保元年二月五日丁未、抑今夜雖可被奏遺令、〇後朱雀后禎子内親王、此年正月崩、堀河御曾祖母、依常殿下御衰日、來十日云々、又今夜一院〇白河令著錫紵御云々、日數三ヶ日者、太上天皇以日易月也、〇中略又天子於三等親無服者何、主上無著御錫紵、故上東門院〇一條后彰子承保元年十月三日崩、彼時依無御服、被行大嘗會御禊也、今度偏叶其例也、　十日壬子、今夜可被奏遺令也、仍民部卿經信卿、左大辨匡房、晩頭參仗座、入夜之後、本院別當前加賀守藤原家道朝臣參陣外、付外記令奏云、請停止緣喪雜事等者、外記則申上卿、上卿令頭辨季仲朝臣奏、〇殿下令參内給御直廬、使先申殿下、則被仰云、聞食了、依上東門院例、可行廢朝三ヶ日、并固關警固之事者、而上卿重令奏云、請停止緣喪雜事、然者至于荷前者如何、仰云、相尋外記可量行也、大外記定俊申云、前例或請停國忌山陵舉哀素服時、別無荷前之詞、又請停緣喪雜事之時、又無荷前之詞、凡至荷前者、相具國忌山陵事也、別不可被仰下者、被奏此旨、仍只可停止緣喪雜事者、上卿下知、次令内豎召六府、而總左近右兵衞判官許參入、雖不具可警固之由下知、兼先被問名次固關被付國司、又召大外記仰馬寮兵庫、從今夜止音奏等、内豎不奏時、瀧口止問籍、垂御簾、依御物忌、自本垂之、子細可尋知之、大概所聞及記付也、　十四日丙辰、早旦上御簾、入夜治部卿源朝臣俊明卿參仗座、行開關并解陣事、可開關之由成官符遣國々歟、仰廢朝并固關等、依上東門院例三ヶ日可在也、一昨日御衰日之上復日也、昨日凶會之上又復日也、仍及今日也、

〔中右記〕大治四年七月七日癸未、巳時許令崩〇白河、崇德御曾祖父、給了、〇中略殿下〇藤原忠通已令昇殿上給、被仰云、禁中作法、可叶何年例哉、申云、〇藤原宗忠承保元年十月三日、上東門院〇一條后藤原彰子、白河御曾祖母、崩、八十六寛治元年正月十六日、陽明門院〇後朱雀后禎子内親王、堀河御曾祖母、崩、八十二此兩院帝之曾祖母、今叶曾祖父儀、彼時奏遺令、廢朝三箇日、固關三箇日也、准彼時例可被行歟、且又可被問官外記也、　十日、頭辨送消息云、〇中略承保元年十月、寛治八年正月之時、主上皆無御錫紵、是曾祖母依三等親也、但廢朝三箇日、固關警固等許云々、今度何樣禁中之儀可候哉、予答云、可然依件例令申行給可宜也、　十五日辛卯、今夕

太上法皇御葬送也、予依有催、酉時許相具右少辨宗成參內、先於奥座與頭辨言談、而本院使參入者、予著端座、令敎藤実、小外記爲繼出小庭候、予目來藤実云、右近中將成通朝臣、卷纓帶劒參陣外云、去七日太上法皇崩給、遺詔曰、國忌山陵素服擧哀可被停止者、（大外記師遠、此三年有所勞不出仕、仍六位外記申上之間、召寄藤実也、）次官人示頭辨雅兼、頭辨則來藤実、以作詞奏聞、只今殿下御坐殿上、則還來仰云、聞食、任喪司國忌山陵素服擧哀可停止、廢朝固關警固五日、○中略

承保元年十一月、上東門院崩、廢朝（三箇日）寛治八年正月、陽明門院崩、依承保例廢朝（三箇日）件二箇度、帝之曾祖母也、爲三等親、主上不著御錫紵也、今度曾祖父、已叶彼二箇度、仍不著御錫紵也、但太上皇崩給時、廢朝度々五箇日之由、大外記師遠所申也、仍五箇日由、所被仰下之由頭辨所談也、

或又遺令詞、只緣喪雜事之由被申、或荷前賻物古人難歟、

〔吉黄記〕正嘉元年七月六日、早旦參龜山殿、（○後嵯峨）參御前、依承明門院（○後鳥羽后源在子、後深草御曾祖母、）御事、公家可有沙汰事等、可何樣哉之由奏聞之、仰云、今度一向可爲嘉保例、予（○藤原經俊）重申云、承保嘉保、主上可著御錫紵哉否、被召法家勘文、被兩代（○白河、堀河、）已不被召之、此上者今度不可及勘文之沙汰歟、勅定（○後深草）云、不可及勘文、不可著御錫紵之條勿論歟、任嘉保之例、廢朝警固固關之外、不可有別事歟、○下略

爲族曾祖父姑服

〔三代實錄〕（十六淸和）貞觀十一年九月廿一日乙亥、無品基貞親王（○淸和御族曾祖父）薨、帝不視事三日、不任緣葬諸司、以固辭也、親王者、淳和太上天皇之第四子也、

〔三代實錄〕（七淸和）貞觀五年七月廿日庚戌、无品善原內親王（○淸和御族曾祖姑）薨、不任緣葬諸司、以喪家固辭也、皇帝不視事三日、內親王者、桓武天皇之皇女也、

〔三代實錄〕（十一淸和）貞觀七年十一月廿八日乙巳、無品大井內親王（○淸和御族曾祖姑）薨、不任緣葬司、以喪家固辭也、帝不視事三日、內親王者、桓武天皇之皇女、母從四位下藤原朝臣阿子、從四位上大繼之女也、

爲從祖祖姑服

〔三代實錄〕（七淸和）貞觀五年正月廿一日甲申、無品純子內親王（○淸和御從祖祖姑）薨、不任緣葬諸司、以喪家固辭

爲從祖父服

也、皇帝不親事三日、內親王者、嵯峨太上天皇之皇女也、

〔三代實錄 十五 清和〕貞觀十年正月十一日丙午、無品業良親王〇清和御從祖父薨、帝不親事三日、親王者、嵯峨太上天皇第二之子也、

〔後中記〕仁治三年十月六日乙卯、早旦彙持長綱等書札到來、北州〇順德御事、日來有御蚊觸之聞、去月十二日御事切云々、御札雖未到來、自京被進脚力、自道聞其由走歸云々、三院〇後鳥羽、土御門、順德、於旅宮遂以御登霞、雖爲前世御宿業、皆是夢中夢也、思往事不覺淚難禁、然之間自殿下御書到來、今間可參云云、仍周章馳參、以四條亞相之說被聞食此事云々、大嘗會事、內々被仰合召明直、又被尋仰、人君絕傍㫪、三后及太子不得絕㫪云々、天子者以日易月也、以之異凡人之趣歟、承保有上東門院御事、然被行大祀云々、土御門右府記、雖有貽疑給之氣已吉例也、依三等以下親、殆不及御錫紵歟、今度時宜如何、心喪可限本服月哉否事、先儒疑之、錫紵有無事頗不定、又不奉遺詔者如何、讚岐院〇崇德崩御之時、二條院無錫紵之儀、是被奉義絕歟、事已重事也、非短慮之所及、定被決時宜歟、次參修明門院〇順德御母藤原重子謁女房、御悲歎不能左右云々、御中陰事、在一條院御沙汰如何之由女房示之、　十三日壬戌、晩頭自殿下有召、大嘗會御禊以前、錫紵有無事、猶可有評定云々、大外記大夫史明法博士章行幷明直等參候、以勾勘顯雅條々有御問答、於法家難者、如令文者、可有錫紵云々、官外記所存、又以同前歟、於二等以上親者、可有錫紵之儀云々、但仁和大臣多〇源氏薨去之間、主上〇光孝無錫紵者、給姓列群臣位之故歟、承保上東門院崩御之時、土御門右府記、頗雖貽子細、就法家勘狀無錫紵、是三等以下親之故歟、云被云是、難叶今度之儀云々、以顯雅內々先被仰云々、　十四日癸亥、參殿下、吉田黃門祇候、錫紵事、猶有沙汰、以顯雅今朝被申禪定殿下、秉燭之間歸參、不可有錫紵之由、輙難定申之由有御存知歟、且前內府、今日可被參法性寺殿云々、被計申之旨不審、延喜五年九月口惟時親王薨去之時、依令條始有錫紵年來不被行云々、於親王者、舊例不同、於院宮者、未聞無錫紵之例、

爲族祖姑服

〔三代實錄四清和〕貞觀二年閏十月廿日丙寅、無品同子内親王(○清和御族祖姑)薨、帝不視事三日、内親王者、淳和太上天皇之皇女也、

〔三代實錄六清和〕貞觀四年二月廿五日甲子、無品有子内親王(○清和御族祖姑)薨、(○中略)輟朝三日、内親王者、淳和太上天皇之女也、

爲族伯父服

〔日本紀略村上三〕天曆三年九月廿九日己巳、此曉太上天皇(○陽成院村上御族伯父)崩于冷然院、(春秋八十二)　十月四日癸酉、今日依陽成院御事、仰廢朝、依淳和天皇之例五箇日也、

爲伯叔父姑服

〔三代實錄十一清和〕貞觀七年七月二日辛巳、無品重子内親王(○清和御姑)薨、依内親王平生辭讓、不任緣葬諸司、輟朝三日、内親王者、仁明天皇之皇女、母從五位下藤原朝臣道長之女也、

〔日本紀略醍醐一〕延喜十七年八月十五日、光孝天皇第四(○四上恐脱十字)源深子(○醍醐御姑)卒、天皇服錫紵、

〔小右記〕長和二年七月六日丙申、右兵衞督來談、頭辨示送侍從許云、令著錫紵給之日、薨奏之日不同日、例侍乎、薨奏事、可避一上御忌歟、薨奏延及相撲之期、若過相撲之後、有件奏者、音樂事難行歟、如何者、予(○藤原實資)報云、錫紵薨奏之日、不同日之例不能尋得、但延喜五年七月廿八日御記云、美濃守是恒卒去、可止召合事、子三刻服錫紵、因是恒朝臣卒者、今案依御傍親召合停止、天慶六年七月廿七日故殿御記云、元良親王薨、同日相撲召合、廿八日拔出有樂、依非御傍親有音樂歟、抑入道九親王昭平(○村上皇子、此年六月薨、三條御叔父、)御傍親、相撲音樂如何、只可在左相府(○藤原道長)定歟、薨奏之日、尤可避當時一上忌日歟、臨晦頃、辨來談、夜漏漸闌、九宮薨奏事、相府不被命一定、大略無宜日、薨奏之後、可有召合歟、主上(○三條)今年始聞食相撲、有可令有音樂之天氣、而有斯事、薨奏及相撲期、彌不可有音樂歟、他事多談、不遑記耳、　十六日丙午、早朝參謁左府、爲令申中宮御產間有所憚不參之恐、良久清談、次云、今年相撲、可有樂之由有仰也、檢代々例、代始聞食相撲、多無音樂、依或大臣病或風水損等也、邑上九親王(昭平出家)薨、薨奏以前、今日可有相撲召仰、明日可有薨奏者、是内々議定歟、予申云、明日薨奏後御錫紵除給了、雖

迫相撲期、有召仰可宜歟、相府云、薨奏以前、必不可知食薨由、不知食之前有召仰如何者、又申云、服親上達部請假著服、已及天聽歟、至薨奏依有所避、自引旬日、薨以前有召仰不快之事也、相府云、尤可然事也、明日薨奏、同著御錫紵云々、除却後廿日有召仰尤上計也者、未及巳刻歸家、 十七日丁未、右衞門督消息云、昨日參內、左府〇藤原道長被參內、有官奏、被聽昇殿、其後候御前、依入夜所不來也、今日可參太皇太后宮、罷出之次可來者、問遣相撲召仰幷薨奏事等、其報狀云、相撲召仰、廿日可侍云々、薨奏今日可侍也、但錫紵令除給事、日次不宜之時、延及四箇日多其例侍、但縮二箇日令除給事、未見其例侍、而此度二日可令除給也、以無先例之由漏申左府侍、然而何事之有哉者、強雖申侍、左大丞申云、故院御時、雖尋此例無所見由云々者、抑故院御時、下官〇藤原實資依左大辨示送所尋勘也、無縮除給之例、間有延除給之例、彼間廻思慮、御本服內、縱延日數令除給有何事、仍所被延除歟、有令縮除之事、彌可縮以日易月之日數歟、頗非穩便耳、 十八日戊申、侍從云、昨日中納言俊賢卿、奏薨奏、返著杖復陣、此卿先年不返受杖復座、昨戌刻於南廊著御錫紵、今夜可令除給者、縮日令除給、未聞其例、左相國所奏行云々、

〔小右記〕長和四年四月廿六日乙亥、先一品宮春秋六十一、邑上先朝第九女親王、〇資子內親王、三條御姑、薨、 五月十日己丑、今日有故一品宮薨奏事、著御錫紵云々、

〔百練抄後鳥羽十〕建久七年六月廿六日甲戌、被行定惠法親王〇後鳥羽御伯父薨奏、廢朝三ヶ日、著御錫紵云云、

〔百練抄後鳥羽十〕建久八年五月四日丁丑、承仁法親王〇後鳥羽御叔父薨奏也、廢朝三ヶ日、主上著御錫紵云云、

〔百練抄十四四條〕延應元年九月三日己巳、二品親王尊性、天王寺別〇四條御伯父當、薨、年四十六、 十月廿二日戊午、二品親王尊性薨奏也、主上召錫紵、宮主兼躬、奉仕御祓、廢朝三ヶ日云々、

〔季連宿禰記〕元祿八年四月十九日庚戌、獅子吼院宮二品堯恕親王（妙法院御隱居門跡也、前天台座主、）依御入滅、自今朝廢朝也、三箇日云々、彼宮者、後水尾院皇子、仙洞（○靈元）御連枝、（新廣義門院御腹、仙洞御同腹宮也、）帝（○東山）御伯父、

〔基量卿記〕元祿九年正月十九日、自今日三ヶ日廢朝也、是去四日、大覺寺宮（○性眞法親王、東山御伯父、）被薨、依年始不及奏聞、今日奏聞、廢朝義被仰出也、

〔基量卿記〕元祿九年八月三日、故前攝政光平公室死去、（後水尾院第五姬宮、御母東福門院、○東山御姑、）昨夜云々、今日武家傳奏奏聞、自今日廢朝三ヶ日云々、洛中物音停止三ヶ日云々、

〔季連宿禰記〕元祿九年十一月十日癸亥、今日本院崩御云々、未刻許人々稱之、仍大輔御局被馳參仙洞（○靈元）之處、本院之事必定也云々、彼院者仙洞御姉、今上（○東山）御姑也、御諱興子、

一黃昏四位大外記師廉朝臣入來、被示云、只今依使者向正親町大納言之處、被命條々、尚可云傳宣之由有告云々、彼條々記左、

一依本院御事、可為廢朝五ヶ日、（自何日歟、未定云々、）

十九日壬申、今月淸代參之事、以狀尋申伊豫局之處、返事云、來月初可參給云々、今月廿五日遺詔奏、從夫今月中廢朝云々、自去十日廢朝之以前者、只御愼之分也、自廿五日廢朝也云々、　廿日癸酉、

一後西院貞享二年遺詔下行帳、自出納借請之、是為諸司催沙汰所尋見也、今度遺詔奏計有之、錫紵之事不及沙汰云々、

〔章弘宿禰記〕寶永三年七月七日壬戌、一乘院門跡、（二品眞敬親王、今年五十七歲、）今日御入滅云々、日比御病事、終無御快氣、可惜々々、件宮者、仙洞（○靈元）御兄、今上（○東山）御叔父也、廢朝之事可尋記、

〔實久卿記〕文化十五年十月七日壬申、巳刻參院、當番也、宿仕、今晚一品彈正尹美仁親王（○仁孝御伯父）令薨給、依之自今日三ヶ日廢朝、上皇（○光格）自今日三ヶ日御愼、洞中被止物音、內々自今日到十六日御愼之、（上皇御實兄也、）依伺御機嫌、諸家各參院、

〔世俗淺深秘抄上〕一非親王宮々薨時、公家無錫紵儀、又無薨奏之例、雖賜姓猶主上御弟若甥等有錫紵儀、於薨奏者不見及、此事延喜天暦二代御記分明也、然而天子法、以輕用之、仍非親王、若賜姓親昵等、不可有錫紵、由被定畢、出家人同之、

〔類聚國史三十五帝王十五〕淳和天皇天長元年七月甲寅、平城天皇（○淳和御兄）崩、 乙亥、詔曰、頃者上天降禍、先太上皇昇遐、白雲之馭不歸、蒼梧之望已遠、朕以匪德、忝守鴻基、于茲閔凶、永懷哀慕、夫喪紀之制、著自古今、□達禮情、理難降殺、而今公卿、奉遵顧命、恐闕萬機、釋縗之期、祈不踰月、遺瞻之旨、義在難違、所以奪情從彼所請、普告內外、知此意焉、 十二月辛巳、右大臣正二位兼行左近衛大將藤原朝臣冬嗣等言、伏稽舊章、遐觀往冊、元正首祚、品物咸亨云々、今陛下煢然在疚、哀感猶深、其新嘗宴會、既從停廢、恐至元正、復停大禮、春秋之義、卒哭之後、得行吉禮、伏望元日朝賀享賜等事、一隨舊典、詔曰、云々議會之儀、情未忍觀、今卿等所請、理亘專抑、宜以明年元日受朝、朝畢後、服色復素、終于諒月、其享群臣、及樂懸並停、但准舊例、賜節祿也、

〔本朝世紀〕天慶元年十一月九日壬子、今日奏四品勤子內親王薨、（先帝〈醍醐〉第四內親王、今上〈朱雀〉御姉也、今月五日薨、六日葬送、）令陰陽寮定申可奏此事之剋限、（擇申未二剋）權少外記伊福部安近、以奏文奉覽上卿、即返給附少納言源興平朝臣、令持奏文於史生、廻自北方、令參會於南殿西方、與平朝臣渡從階下、會於同西方、內侍代出來南殿北渡殿間、受作奏、參御所綾綺殿奏、（內侍不候、仍上卿令藏人奏件內侍代、又天皇遷御綾綺殿以降、諸附內侍奏文、令持史生、廻自北方、參會於南殿西、少納言廻從階下、相會於南殿與仁壽殿間、附奏於內侍、今日事亦復如此、）外記即召內豎、仰三箇日內不可音奏之由、又藏人右少辨源相職朝臣、蒙宣旨召所司、令勘申天皇可服錫紵之時剋、及剋限有其事云々、但禁省之事、惣所不知也、仍具不注、

〔北山抄四〕上皇皇后崩事（付太子薨事）

天暦六年八月十五日、上皇（○朱雀、村上御兄、）崩、十七日被定行雜事、（○中略）又至御葬日廢務、御心喪三月、（明經道勘）

文云、舜雖非堯子、受禪即位、而服三年之喪者、致臣子之禮也、依漢朝以日易月之制、可有十二日御喪服歟、紀傳勘文云、上皇有喪服節倹之顧命、御心喪之期、可依本服之紀也、明法勘申云、服錫紵三日、不視事三日、御心喪三月云々、外記勘文云、大同天皇(平城)天長元年崩、心喪之期爲限期年、天長天皇(淳和)承和七年崩、御冠以遠江貲布、御簾御座等端皆以布、又不立榻云々、件兩帝非受讓、但天長元年、雖有非年喪之詔、依臣下上表、八月被行神事、至于節會不見被行之由、承和例難准、隨弘仁皇命(嵯峨)以被行之云々、依諸卿定申、本服三月之間、停飲宴作樂、臣下著美服之由、下知官符、唯計日十一月可爲限者、

〔西宮記臨時四〕喪服

天暦八年九月四日丙子、奏雅子内親王〇村上御姉薨狀、即下御簾、西剋著錫紵、此般不供冠、依朞年心喪著重服冠也、七日、除錫紵、此日復日也、

〔日本紀略村上四〕大德元年六月六日辛酉、一品康子内親王薨、〇醍醐第十四皇女、村上御姉妹十一日丙寅、月次神今食、依内裏穢氣幷御錫紵事延引、於八省院東廊有大祓事、

〔續世繼六志賀の御禊〕一品宮とておはしまし丶は、禖子の内親王〇鳥羽皇女とて、賀茂のいつきにたち給へりし御なやみにてほどなくいで給にき、長承二年十月十一日、御とし十二にてかくれさせ給にき、〇中略廿七日薨奏とてこのよし内裏〇崇徳に奏すれば、三日は廢朝とて、御殿のみすもおろされ、なに事もこゑたて丶そうすることなど侍らざりけり、みかどは御いもうとにおはしませば、御ふくたてまつりなどしけり、〇中略みかどは、日のかずを月なみのかはりにせさせ給なれば、三日御ふくとぞきこえける、

〔玉海〕承安二年五月七日乙亥、或人云、齋宮〇後白河皇女惇子内親王、高倉御姉、隱給了云々、十日戊寅、此日齋宮薨奏也、上卿花山中納言兼雅後家事、被付本寮之由被宣下、上卿同自今日廢朝三箇日也、又有御錫紵事、攝政〇藤原基房被參、直衣云々、

〔伏見院御記〕正應三年十月廿七日丁酉、今夕故行覺親王〇伏見御兄弟薨奏也、錫紵廢朝、關白著衣冠祗候、錫紵了、於御殿供贖物、俊光朝臣雅俊等祗候、

〔基量卿記〕貞享二年二月廿二日、及午刻之間、西洞院宰相馳參、唯今御事切了由也、(○後西院、靈元御兄、)主上(○靈元)驚思召、則禁中觸穢之義、種々有御相談、關白(○一條冬經)事申云、御錫紵三ヶ日、廢朝五ヶ日、御心喪三ヶ月、是兄之御服如此、於新院(○後西院)者、勿論無御養子義、(主上、後光明院御養子也、)雖御兄之御服可爲如此歟、於春宮者、可有御著服、乍去御服衣著御之義は、無御沙汰とも可然歟、於觸穢本所往來可有穢氣疑、內侍所御同居之間、爲神慮御敬穢之義勿論存候由言上、則其通治定了、　三月七日、酉刻主上著御錫紵、其儀御學問所從北垂簾、撤疊敷小筵、(二枚、)上敷半帖(繧繝、)一枚、爲御座、立廻大宋御屏風一雙、供高灯臺二本左右、(殿上之燭臺借用之、女藏人掌灯、)御冠御錫紵等、盛柳筥乘高土器、兼設置之、御錫紵御座右方、御冠左方、剋限從常御所御引直衣、(不及著御下襲、)御劒雅豐朝臣、(著單、)御劒尋常之平鞘也、御裾頭中將、御燭定基、(不及脂燭、)予輩近臣少々供奉、殿下同供奉、從御學問所東面入御、殿下被奏御簾、主上著御東面、次永福朝臣、清水谷中納言參進、著御御錫紵、御吉方申之方也、著御之時令居向給、次著御御冠、吉之御冠、置口前之柳筥御錫紵著御了、東面ニ御著座、卽又御衣紋之人參進、令脫御錫紵著御吉之御引直衣、於御冠者服之御冠也、三ヶ日之間可令著給也、次入御、其儀同出御、抑今夜御錫紵著御了則脫御也、御著座之儀無之、則可被脫哉之旨殿下へ被尋下、予爲御使、殿下被申云、非諒闇之間、被向御廟爲報酬、被著錫紵之儀叡念無之候、乍然被著御凶服、乍御立脫御可有如何候哉、暫御座之後召衣紋人、脫御可然歟之由被申之間如此也、又脫御了著御吉御直衣之儀、被尋殿下、被申云、十日爲脫御錫紵出御之剋、吉御引直衣可有著御、然ば今夜入御之時著御可然歟之由也、依之今宵如此也、吉御冠、俊方朝臣密々以御兒被獻御內儀了、御學問所御裝束、入御之後撤之、來十日又可催設由也、右修理職奉行之沙汰也、　十日、秉燭設御學問所御裝束、酉下剋出御、則被著御錫紵、乍立御脫御、其後著吉御直衣冠(御垂纓、)入御、次俊方朝臣卜部兼充等、於淸涼殿東庭下御錫紵、(卜部兼充下之、內藏寮給、置宮主前案上、)次出御晝座、(垂廂簾、張疊、朝晝御座、敷小筵二枚、上敷中帖一帖、左右供掌灯、則殿上灯臺也、)關白不能著座、御劒雅豐朝臣、著單御裾、御簾頭中將、次頭辨供贖物三度、(人形、散米、麻苧等也、)

行事官調進、次宮主獻大麻、頭辨供之、作令持令接御也、則下大麻、次下贖物、右役送宜定、

〔基量卿記〕貞享三年閏三月五日、參內、大聖寺宮、（〇當今（靈元）御妹）今朝薨御、從妙門愛宕迄被不聞之間、各相談令言上了者、未及親王宣下之間、廢朝之義無其沙汰、〇中略及晝從殿下（〇藤原冬經）被下御書、載左、折紙也、

大聖寺宮薨去、廢朝候哉、去々年光照院宮（〇靈元御姉妹）薨去時、於無親王宣下者、不及廢朝由其沙汰候、然而儀制令旨、可有廢朝由裁之候、卽令文注付之候、

儀制令曰、皇帝二等以上親、及外祖父、右大臣以上、散一位喪、皇帝不視事三日、

同令曰、兄弟爲二等、

北山抄云、薨奏事、入道人不奏、但可有御服者奏、以右所見案之、御兄弟者爲二等親、於二等親者、不依親王宣下有無可有廢朝歟、又北山抄、可有御服者奏之由載之、於院中者爲各別儀、其外可有御服者、二等親候歟、殊雖入道、奏旨所見有之上者、旁廢朝不可有異儀候歟、此旨宜奏達賴入候、謹言、

閏三月五日　　判

東園中納言殿

此御書給之間、則參殿下言上之子細、去々年光照院宮時、不及廢朝、其義近年流例也、且又傳奏近日上着可仕、然者內々御沙汰候、卽位受禪等之御返事、自關東可被申之間、旁珍重之時節、廢朝之御沙汰事、重可有之候歟、先此度者被任流例、無御沙汰分、可然哉旨入申之處、然者時宜次第、不付御心分ニ可被成之間、不及申沙汰由仰也、則退下了、

爲從父兄弟姉妹服

〔季連宿禰記〕元祿三年三月五日丙申、輪王寺宮二品天眞親王、今月一日御入滅之由有其聞、自今日洛中三ケ日停音曲云々、件宮者、後西院皇子、御母者東三條殿、仙洞（〇靈元）御甥、當今（〇東山）御從父兄也、今年御廿七歲云々、御病惱危急之期、令敍一品給云々、廢朝有之哉如何、可尋記、翌日尋遣伊豫局之處、三ケ日廢朝之由有示、

〔季連宿禰記〕寶永二年十月一日辛卯、照高院宮（後西院皇子、入道二品道尊親王、今年卅一歲、〇東山御從父兄弟、）去日薨去之事、今日披露、仍自今日（未刻許云々）三ヶ日廢朝云々、

〔季連宿禰記〕寶永三年九月廿二日丁丑、慈受院御比丘尼御所入滅、（後西院皇女也、御母六條御局、〇東山御從父姉妹、）依之自今日廢朝三ヶ日之由有其聞、此宮者無內親王宣下宮也、然廢朝之條不審、可遣尋聞、又洛中止音曲三ヶ日、自今日至廿四日、

爲再從兄弟姉妹服

〔大江俊矩記〕文化十年閏十一月十六日己酉、晩景自萬里小路頭辨、四折壹封到來、如左、（文箱入、仕丁使也、）

踐祚之始、（〇光格）先帝（〇後桃園）已登霞、上皇（〇後櫻町、此月三日、）崩、訓導之恩殊深、今遭此大行、雖以居喪之禮之厚可被報謝、四等之親、無的當之先蹤、然猶叡念不安、因玆五旬之間可有御心喪被仰出候事、（〇中略）

右自御葬送可爲御日取之旨、議奏被申渡候、一列中（江毛）可被示傳候也、

後十一月十六日　華押

極﨟殿

爲三從兄弟服

〔滿濟准后日記〕正長元年七月廿日、今曉卯終、主上（〇稱光、後花園御三從兄弟、）崩御、（御年廿八歲、）皇子一人モ無御座、珍事珍事、崩御在所黑戶也、於彼殿者、可被造替歟云々、　八月四日、新主（〇後花園、）今日（四日）令著輕衣、（號錫紵、）御輕服也、攝政（〇藤原持基、）被參申云々、（錫ハ賜ノ義、紵ハ細布也云々、）

爲子孫服

〔北山抄四〕上皇皇后崩事（付太子薨事）

同（〇延喜）廿三年三月廿一日、皇太子（〇醍醐皇子保明、）薨、有諡號、宣命使、親王公卿各一人也、御心喪三月之間、主上（〇醍醐）著鈍色御衣、（〇中略）五月晦行大祓、計月也、

〔小野宮年中行事〕延長七年十月廿六日辛酉、申一刻下御簾、爲有雅明親王（〇宇多皇子、醍醐養子、）薨之官奏也、同三刻著錫紵云々、亥四刻除錫紵、同刻有御禊、

〔九曆〕天德二年四月十九日、依參議自明卒、天皇（〇村上）著錫紵事、　廿一日、帝除錫紵事、

北朝帝爲南朝帝服

〔日本紀略村上四〕天德四年五月二日庚子、奏理子內親王（○村上皇女）以去月廿一日薨由、卽垂御簾、申剋、於南廊服錫紵、亥二剋除服有禊、

〔權記〕寬弘五年五月廿五日甲申、辰刻无品媄子內親王薨、年九、今上（○一條）第二內親王、母前皇后宮也、

廿六日乙酉、參內、薨奏、御錫紵等供之云々、

〔日本紀略一條十一〕寬弘五年五月廿六日乙酉、奏媄子內親王（○一條皇女）薨由、天皇不視事三日、

〔小野宮年中行事〕延喜十七年正月廿一日辛未、藏人仲陳奏事次申、法師親王子、（不知其名）以去月晦卒、然卒日雖已遠、須隨始聞不可聽朝、仰邦基朝臣召左少史高行、令勘申不視事日限及錫紵事等、高行勘申云、儀制令云、祖父母云々、姪孫二等、又條云、皇帝二等以上親、及外祖父母喪、皇帝不視事三日、喪葬令云、天皇爲本服二等以上親喪服錫紵、義解云、凡人君卽位、服絕傍朞、唯有心喪、故云本服、右大將藤原朝臣等定申、以爲前例爲五月服五日、爲三月服三日、是以日代月之意也、今以姪雖爲二等、准先例更不可有錫紵云々、仰依定申不著服、且依勘文不視事三日、又可太政官奏、而藤原朝臣等申、前例新年始奏之時、不奏凶事、今年未有奏事始、不可奏凶事、請依先例口年以內奏日、使爲不視事之始、更不奉官奏、依請、　廿二日壬申、邦基朝臣奏、左少史高行勘申、昨日勘文失誤、申文勘文曰、義解云、稱不視事三日者、唯爲三月以上服故也、至于孫喪、皇帝不視事一日、理以爲允也、高行申云、昨日只勘申令文、忘却義解文、此依事倉卒所致失誤也、仍改定不視事一日、遣邦基朝臣於右大臣第仰事由、仰高行令進過狀、

○按ズルニ、以上揭グル所ノ血屬ノ系統ハ、服紀篇服紀制ノ下ニ親屬ノ圖ヲ揭ゲタレバ參看スベシ、

〔師守記〕曆應二年八月十九日乙巳、今日依庭中家君參文殿給、（○中略）及晚按察中納言經顯卿爲奉行有御敎書、是崇德、後鳥羽、土御門、順德院、於遠所崩御時、廢朝以下、有無何樣候哉之由被尋申、件度々

爲后妃服

無廢朝幷省略事之由被進御請文了、追號事、隨所見御注進之、後鳥羽、土御門、順德院、御事時、被行事可改行之由、大宮中納言、內々被尋申、御出仕之間不被付使也、吉野院、〇後醍醐、此月十六日崩、去十六日御事之由有其說、實否可尋次、　廿八日甲寅、傳聞自今日武家沙汰、七日止之云々、吉野院去十六日崩御之故也、此間爲尋究實事行沙汰、然而近日有治定說云々、公家御沙汰無停止之儀、是崇德院御例云々、先日被尋申例了、　九月一日丁巳、今日爲按察經顯卿奉行被尋申、後深草院伏見院等萬歲之後、廢朝事則被注進了、　二日戊午、今夕酉始許、爲別當資明卿奉行、有被仰下事、可有御參之由被觸申、家君則著束帶給、令向大理第給、勅問云、院宮崩時、遺令奏以前行幸例、幷雖無薨奏被仰廢朝例等御不審也、可被注進云々、家君御歸宅、今度廢朝以下事、一向自武家計申之間、如此有沙汰、雖背先例、自武家申之間、不及先例沙汰云々、是尤不審歟、先例事、武家不存知也、但先日家君御注進勘例、雖被遣武家、如此申條不審也、　三日己未、今日大宮中納言隆蔭卿進狀云、廢朝事、已治定之上者、今日御燈可被停止候歟、但遺詔奏以前、不可及沙汰候哉、先例不審云々、御返事云、廢朝事已治定之上者、今日御燈可被停止歟事、遺令薨奏以前、被行神事候之上者、遺詔奏以前、御燈不可有憚候歟云々、其外少々先例被注載御返事了、見勘草、　八日甲子、今朝家君令向大理第給、是今日廢朝事可申談、可有御渡旨被申之故也、其次昨日洞院被尋申勘例注出御持參、無御對面、子息右兵衛督參議實夏卿被對面申云々、〇中略今夕三﨟外記師躬參陣、依廢朝幷警固固關事也、〇中略

三﨟外記師躬記

八日廢朝宣下、〇中略今度廢朝以下事、被准御外祖父儀云々、

〔日本紀略四村上〕康保元年四月廿九日甲戌、中宮藤原安子、崩于主殿寮、　七月卅日癸卯、於建禮門大祓、皇后崩後、天皇御心喪滿三箇月、仍被行之、

〔西宮記臨時四〕應和四年〇康保元年五月七日、右大臣、〇藤原顯忠令奏明法博士公方等勘申、皇后崩給喪期

限文、（狀中云、案之以本服三箇月、可爲心喪限者、）令仰云、所疑已以相合、須如此行之、大臣令申云、臣下此期限之間、不可著美服歟、仰云、何除諒闇之外無所見、不制美服、（去四月二十九日、中宮安子崩、）

〔權記〕長保元年十二月五日甲寅、傳大夫消息云、后宮（○藤原定子一條后）者、朔日子了許崩給、須早令奏其由、而依遺令避日次之間、延及于今、今日戌刻御葬也、遺令云、天下素服擧哀停止之、又不任緣葬司、不預國忌、不配山陵、幷此間神事節會等、依例可被行、又葬禮不異凡人、亦不可用火葬者、又御存生之時仰云、御惱之間、依陰陽家申、避本宮遷御權大進道貞宅、道貞雖爲宮司、非舊仕之者、依病避宮之間、暫以移住、若有非常、極可不便、先例三宮暫住他家之時、臨時加賞家々已有其數、若可然可令奏事由、其後不經幾日崩給、此旨不可不奏聞、有事次可洩奏者、卽先參左府御宿所、申此案內、被奏云、前宮亮景齊朝臣令申、不可任葬司、幷擧哀素服山陵國忌等事、可隨停止、神事節會依制可被行、依遺令所奏也者、卽參上奏聞、仰云、聞食、亦奏臨時給事、仰云、所被申可然之由可仰者、卽仰景齊朝臣、又仰左大臣、（○藤原道長）又可下御服、又如此之間、神事節會有無、先例可令勘申、又可令□□□定申、又固關事、幷可給素服擧哀等停止官符事可仰、卽仰左大臣、大臣令申所勞不能候陣、令他上申行、今日卑、依請勘文等事、且被仰大外記、他事召他上卿可仰、卽奏事由、遣召民部卿、右大將、平中納言、藤中納言、掃部助、示藤中將、藏人少將勘當事、申剋左大臣被奏外記勘文二通、（○中略）

又勘申皇后崩雜事被行例事

皇太后藤原順子、貞觀十三年九月廿八日崩、同廿九日諸衞警固□伊勢近江美濃等國司諸關警固、勅曰、今月廿八日、太皇太后崩事、須遣使者警固、然而時在秋收、恐妨農業、況亦牧宰其人、宜停發使、一委國吏、勤令警察者、十月四日、太皇太后遺令、不總天下素服、仍令京畿七道停擧哀幷著素服、五日天皇服錫紵、近臣皆素服、葬太皇太后於山城國宇治郡後山階山陵、是時天皇（○清和）爲祖母太皇太后喪服、有疑未決、於是令諸儒議之、（諸道勘文具見國史、）朝議定心喪五月制服三日者、七日天皇釋服、近

臣隨除、諸衞解嚴、令伊勢近江美濃等國解關者、（已上國史）十月一日、依有太皇太后崩事、自今日至于七日外記政停、但不止諸司者、五日太皇太后葬於安祥寺、具在記文者、七日停警固之事、下符伊勢近江美濃等國、亦諸陣解警固、皇帝自去五日脫錫紵、近侍者隨之、脫素服、又有上宣、召陰陽寮令勘申始政之日、卽釋、八日勘申、（已上日記）太皇太后正子內親王、元慶三年三月廿三日淳和太皇太后崩、有遺令、不任緣御葬之諸司、天皇輟朝五日、太后寢疾綿篤、命左右曰、天長天子、（○淳和）顧命火葬、不置山陵、無國廟之可陪、吾瞑目之日、卽入朽材之櫬、心插嵯峨之山腹、無置守冢、不配國忌、一如先太上天皇之遺制、廿五日葬太皇太后於嵯峨山、諸衞警固、宣告百官及五畿七道諸國、今月廿三日淳和太皇太后崩、旣曰國母、可謂至尊、天下臣民、何無喪禮、然而特有遺命、令停止（○停止二字原缺、今據三代實錄補、）凶禮、宜不著素服幷擧哀、給官符者、四月十五日解陣者、五月廿五日奉爲皇后崩後度者廿人者、皇后藤原溫子、延喜七年六月八日崩、依有遺命、不任葬司、御葬料調布五百端、商布一千段、（大藏）油一斛口口夫二百人、（京職）右大臣口中納言藤原有穗卿、就左近陣座、可警固之由仰諸衞、但伊勢近江美濃等國、給內印之官符、又素服擧哀可停止之由、仰諸司又五畿七道諸國、給外印之官符者、十日使紀傳明經明法等博士、勘申中宮崩時天子御服有無事、而所勘申各異、爰中使式部大輔藤原菅根朝臣、就陣頭傳云、准諸儒勘文、可有三日御服者、外記召繞殿寮仰御服口縫供之由、太屬槻田茂枝申云、依藏人所仰、自內藏寮受費布口口奉之事已了者、十月廿五日、是中宮御七々日態、於極樂寺修焉、公卿擧首參彼寺、仍無政者、

仰云、件例淳和五日廢朝、亦三日可依何例、大臣令申云、遣召允亮內々可被問、內大臣（○藤原公季）被參、依仰口仰內大臣、今日事等可行事、（警固事、神事可止、）固關官符可給、又素服擧哀停止事、同可給官符、仰云、召遣左衞門權佐允亮、可問古勘文中宮可准二等親事若有所見歟、又五日廢朝、三日御服等事、酉四刻、被仰以五日可廢朝、（淳和后例）平中納言參入奏事由、仰云、前太后崩事、仰內大臣之由可仰云々、

爲外戚服

〔續世繼 一星合〕中宮○後朱雀后藤原嫄子、中略、又のとしもおなじやうにまかり出させ給て、丹後守ゆきたふのぬしの家にて、長暦三年八月十九日に、猶女宮○祺子うみ奉り給て、おなじき廿八日にうせ給にき、御年廿四、あさましくあはれなる事かぎりなし、○中略かくて九月九日に、うちより故中宮の御爲に七寺にみず經せさせ給ふ、みかど○後朱雀御ぶく奉りて、廢朝とて、清涼殿のみすおろしこめられ、日のおもの參るも、こゑたてゝそうしなどすることもせず、よろづしめりたるまゝには、ゆふべのほたるをもあはれとながめさせ給、○中略神無月もすぎぬれば、御いみ末になりて、かのうせ給にし宮にて御佛事あり、

〔本朝世紀〕康和五年正月廿五日乙巳、女御從四位上藤苡子薨、　二月三日壬子、權中納言季仲、雖當衰日、依院宣參入、參議家政參入、被行故女御贈位事、元從四位下、今贈從三位、幷廢朝事、三ヶ日無薨奏、廢朝之條、去寛治二年九月、右大臣室從二位源隆子時例也、家政卿給宣命、前常陸介源經仲朝臣給位記、依衰老以外記給之、各參向女御本家、樋口町尻齋宮也、次被仰廢朝事、　五日甲寅、頭辨仰云、廢朝今日滿三ヶ日、而今日皇子御衰日、明日公家御衰日也、奏音奏上御簾條如何、件事不分明、又皇子御衰日、被忌避之條目不分明、但天皇著御錫紵時、令除給之條、或進退日數、或不避日次之由申擧、

〔前新皇嘉門院御凶事記〕文政六年四月三日、就准后○仁孝后鷹司繫子薨去、自今日五箇日廢朝、晝御座可下御簾、池尻前中納言被申渡、則俊常○大江奉仕之、來八日可捲上御簾旨也、

〔公卿補任 元正〕右大臣正二位藤原不比等　養老四年八月三日薨、○中略聖武孝謙二代外祖、○中略帝○元正深悼惜焉、爲之廢朝、擧哀內寢、特有優勅、弔賻之禮、異于群臣、

〔日本紀略 清和〕貞觀十四年九月二日己巳、太政大臣從一位藤原朝臣良房○清和外祖父薨于東一條第、年六十九、輟朝三日、

〔日本紀略 一醍醐〕延喜七年十月十七日辛酉、從三位宮道朝臣列子○藤原高藤妻薨、帝之外祖母也、有薨奏、

廿六日庚午、天皇服錫紵、

〔本朝世紀〕正暦元年七月十五日戊子、此日主上〇除一服御錫紵三ヶ日、御心喪三ヶ月、外祖父〇此月二日薨藤原兼家也、是依諸道儒者勘申也、

〔小右記〕萬壽四年十二月四日庚午、巳時許式光來云、禪閤〇藤原道長、後一條外祖父昨日入滅、而昨夜有搖動氣云々、　六日壬申、關白〇藤原頼通被報云、〇中略明日可行葬送事、同日可有薨奏御錫紵警固固關口歟、心神不覺、可然之樣可申行、〇中略余〇藤原實資報云、因永祚例一々可被准行、〇中略只明日服著錫紵、令除給之日當重日、尋前跡可被行歟、可被縮日數歟、將可被延歟、〇中略前太政大臣〇藤原道長雖臣下外祖父也、隨亦可有三箇月御心喪、御心喪限內也、不可被行節會等、亦先朱雀院踐祚時、法帝〇祖父宇多也七月十九日崩、御心喪五箇月及十一月、仍大嘗會延引、次定謂之、御心喪內不可行如此之事等歟、藤宰相傳云、尤被甘心者、　七日癸酉、以頼隆傳關白消息云、外記勘文如此、可計行者、固關事可付國歟、薨奏可行、且御錫紵除給日數事可定申、心神不覺不能具申者、余報云々、〇中略今日著御錫紵、第四日除可宜歟、外記勘申云、天慶元年十一月十二日記云、四品勤子內親王、今月五日薨、〇主上御姉去九日薨奏、同日服御錫紵、同十一日滿三箇日除錫紵也、而當御衰日、仍及四箇日所除也者、如件勘文、延一日例分明也、天曆八年九月廿日、重明親王薨奏、服錫紵、廿三日除給、已及四箇日、件例注出、又御衰日除給、康保三年十二月廿二日〇壬午中務卿式明親王薨奏、服錫紵、廿四日〇甲申御衰日除給、避復日給也、亦重日除給例、延喜十年二月廿五日〇乙酉均子內親王薨奏、服喪服、廿七日〇丁亥除給、同注出付頭辨、御衰日重日例不宜、前太政大臣御事、能避事忌可被注也、亦日限不滿之例側所覺也、而未尋出、抑日數減例、與延引例、且可在御定者也、事々大概以頼隆相傳、外記勘文一見了返授、又辨云、可然之樣相定可仰下者、依重事所申達也、〇中略關白被報云、以頭辨令問畢、今如此消息、今日薨奏、服御錫紵事、警固固關可行也、錫紵四箇日除給有兩度例、尤從事也、依彼等例、及四箇日除給也者、　十日丙子、中將來云、卯時令除錫紵、

給云々、

〔榮花物語三十鶴の林〕萬壽四年十二月四日うせさせ給て、〇藤原道長ついたち七日の夜御葬送、御年六十二にならせ給けり、〇中略世中の十が九は、みなにぶみわたりたり、いはゞ諒闇ともいひつべし、おほやけよりも、諒闇せよといふ宣旨くだりたればなりけり、

〔中右記〕寛治三年九月廿八日、曉右府〇源顯房北方〇源隆子卒去云々、〇中略今上〇堀河外祖母也、　十月四日、今日有陣定、是天皇御服有無事云々被勘例、於外記紀傳明法明經歟、但延喜年中、親王某薨時例、可被用由僉議已了云々、仍無薨奏幷錫紵之事、但從今日三ケ日廢朝、仍下御簾無音奏、

〔百練抄五堀河〕寛治三年十月四日、諸卿定申源隆子薨事、〇右大臣室作人雖爲當今外祖母、前中宮〇賢子改姓爲藤氏、仍令諸道勘申之、就所養不可有錫紵、但廢朝三ケ日之由被定了、凡爲人養子之者、本生傍親服不可著之由僉議了、

〔中右記〕寛治八年〇嘉保元年九月五日、此曉右大臣〇源顯房、堀河外祖父、薨、年五十八、六條亭、先十餘日勞赤痢病、遂以薨逝、　八日丙午、有政、上卿右衞門公實卿、〇中略有右府薨事、〇中略抑從彼家被申云、賻物別給葬司等被停止者、上卿還著仗座、時範仰云、可贈正一位、賻物別給任葬司等隨申請、警固幷廢朝三日者、

〔百練抄五鳥羽〕永久二年二月廿九日、於院殿上被定主上外祖母薨逝事、〇實季室、去廿四日薨、任延喜七年天喜元年例、錫紵可被行廢朝之由諸卿定申了、

寛治隆子之時、賢子中宮、〇白河后源氏依改姓〇爲藤原師實養女無錫紵、

〔殿暦〕永久二年三月一日丙子、昨日於院、故按察使大納言實季卿妻尼君〇鳥羽外祖母去比死去、仍其間有沙汰云々、　七日壬午、今日按察使大納言妻尼君有薨奏事、〇中略主上〇鳥羽今日錫紵、依不參不委記、

九日甲申、今日主上除御服給、上御簾有音奏、

〔百練抄十一土御門〕正治二年八月廿九日、三ケ日廢朝、是依從三位範子、〇土御門外祖母藤原氏去四日薨也、

〔基熙公記〕元祿十三年六月廿四日乙酉、柳原前大納言以使申云、未明松木前內府〇宗條從昨夜俄有所勞、而及大切間、申案內旨也、仍早々遣使所令問、於于今者事危急云々、京極宮准后等被看病云々、巳刻從柳原前大納言以使申云、於于今者事切旨也、無常迅速々々、松木前內府春秋七十六、帝〇東山外祖父、其身任槐、既年七旬餘、被極繁榮、尤於今生果報無比類、但於東二條准后京極宮等有不快事、定而有鬱氣歟、且又主上有御憐愍有御周章歟、早々雖可參、病後未快之間、以使窺天氣、右府〇近衞家熙亦以有所勞同不參了、天氣別事不御旨、議奏等返答了、午刻久我大納言來云、令右府對面、明廿五日御法樂短冊等、諸家大概詠進了、可爲何樣哉、又於御月次者、可爲延引條、議奏各相談了、於御法樂者、可爲何樣哉者、余以右府令問云、今度事、若及錫紵哉、但爲廢朝哉者、返答云、不及錫紵、只廢朝三ヶ日也、猶上格子之以後可有御愼云々者、余以右府令返答云、御法樂之事、明日被延引、來月以日次可被讀上短冊歟、廢朝中、尤可有延引條勿論歟、於月次和歌、猶以延引勿論歟、諒亞相承諾起座了、而案此事、今度不及錫紵條、若有傍難歟、但對院准后不及此御沙汰、廢朝三ヶ日歟、猶可尋之、外祖父母錫紵之例、所見之分聊注之、但不及委細者也、〇中略

建仁二年十月廿二日癸巳

藏人辨光親來云、內大臣〇源通親爲主上〇土御門御外祖父儀、仍可有錫紵事哉否、被尋例於外記、外記申狀如此、雖盡筆端、又今日行幸行事所始也、何樣可有哉、可量申之由有院仰者、爲外祖父儀者、可有錫紵歟、行事可始、錫紵以後、尋日次可被始歟之由申了、

右續御曆御記可爲準的者歟

〔季連宿禰記〕元祿十三年六月廿四日乙酉、中御門前內大臣正二位宗條公今年七十六歲薨、〇中略抑前內府宗條公者、帝〇東山御外祖父、准后之御父也、京極宮同御外戚也、廢朝日數可尋記、後聞、廢朝之事、自今日三ヶ日至廿六日又至卅日御愼云々、此御愼之事、就御外戚及此義歟、不知子細、御愼之事者、如廢朝間云々、

一後聞自今日三ヶ日、洛中留音曲云々、

一依御外戚之事廢朝之例、前權大納言從一位藤兼綱卿、永德（○永德下恐脱元字）九四爲准大臣、同日出家、同廿六日薨、十月十日薨奏、廢朝三ヶ日云々、以上出公卿補任、私云、兼綱卿者、崇賢門院（○後光嚴后藤原仲子）御父帝（○後圓融）之御外祖父也、

爲臣下喪廢朝

〔藤原家傳上〕内大臣諱鎌足、（○中略）即位二年冬十月（○中略）十六日辛酉、薨于淡海之第、（○中略）上（○天智）哭之甚慟、廢朝五日、

〔三代實錄十四清和〕貞觀九年十月十日乙亥、右大臣正二位藤原朝臣良相薨、贈正一位、天皇不視事三日、

〔季連宿禰記〕元祿十三年正月十一日乙巳、後聞鷹司前殿下（○房輔）薨去之事、今夜傳奏等被奏之、仍自今夜廢朝三箇日之由被仰之云々、（來十三日殿下朝之限也）又自今夜三ヶ日、洛中可止音曲之由觸之云々、

〔大江俊尙記〕正德六年五月七日、何となく東武沙汰不宜ニ付、番所へ示承候處、去月卅日、大樹公（○德川家繼）薨去ニ付、五ヶ日廢朝之由也、

〔兼胤卿記〕寶曆十一年五月十九日、久我前右大臣（○源通兄）所勞之處不叶養生、今日申剋薨去之段、息中將より屆出、兩人詣關白殿（○近衞內前）申入、遂奏聞、自今日三ヶ日廢朝之儀、可寬哉之由申入、如例可沙汰被命、參內附帥言上、廢朝之事寬之、予（時酉半刻許）參內頃之薨去之段被聞召、依之自今日三ヶ日廢朝被仰出之段、帥被傳了、（殿下以書狀申入了）

〔兼胤卿記〕寶曆十一年六月十七日、前大樹（○德川家重）依薨去、自今日五ヶ日廢朝被仰出、治部卿被傳了、

〔實久卿記〕文化十四年五月十五日戊午、關東大樹（家齊公）實母、去八日死去、依之內裏勾當掌侍以取計、自今日三ヶ日被止物音、仙洞同上臈局以取計被止物音了、

〔實久卿記〕天保十五年十一月十八日辛巳、廣大院去十日薨去、今日奏聞、（大樹公（德川家慶）母儀也）依之自今日三ヶ日御愼、宮中被止物音候旨、自相役卿被示了、

薨奏

〔實久卿記〕嘉永六年七月廿六日己巳、未下刻、龍野侍從亭向、大樹公（家慶○德川）容體尋申了、大樹公去廿二日薨去旨言上、依之自今日五ヶ日廢朝之旨、自相卿被示、

〔北山抄六〕薨奏事（入道人不奏、但可有御服者奏歟、親王不論入道幼稚、雖无御服奏之云々、四位已下、其狀可下所司、而近代无其事、）外記插文杖（舊例入宮）覽上卿、（預申事由、有忌者不奏之、）見畢返給、外記取副文杖退出、付少納言、少納言付內侍奏之、或上卿參上、令藏人奏之、奏留御所、給空杖退出、是內侍不候時例也、仍先可問內侍候否、（下御簾事、可有服親王之喪、不聽朝之時等、可必垂云々、見延喜六年十二月廿九日、應和二年十月十八日御記、但雖不服錫紵、或垂之、延喜十七年正月廿一日、藏人奏法師親王卒由、前例新年始奏時、不奏凶事、今年未有奏事、依前年例以內奏日、便爲不視事之始、更不宣奏云々、）上卿見畢、召少納言給之、（九條大臣、依貞信公仰、返給外記、清愼公給少納言、前例多如之、見天慶元年私記、）近例上卿參上、令藏人奏之、奏留御所、給空杖退出、是內侍不候時例也、

天慶元年五月十九日外記記、中納言實賴卿、奏右大臣薨由、召大外記公忠、問舊例、大略申畢、又覽年々日記、卽召少納言俊房給奏文、外記召內豎、仰自今日三箇日間不可音奏之由云々、（天曆七年四月六日、奏大納言元方薨由、外記仰內豎、今日不可音奏之由、）

〔禁秘御抄下〕一薨奏
上卿著陣、外記申其由、上卿以職事奏薨奏之由、仰聞食之由於外記、指薨奏於文杖覽上卿、上卿見之進御前、有御覽、留文返給杖、薨後以吉日奏之、可有贈官位人ハ被仰職事、警固廢朝三ヶ日之由同被仰、止音奏、下御簾也、上古遣公卿、近年無其儀、又薨奏絕畢、上卿仰警固之由於六府、有贈官位時ハ、上卿奏位記宣命、（入宮）御覽後返給、請印後又奏、宣命位記使、諸大夫相具內豎一人向彼家也、薨奏幷位記宣命不內覽也、

〔本朝世紀〕寬和二年五月廿二日己丑、此日有薨奏事、無品內親王（○規子）今月十五日薨、是村上帝皇女、伊勢前齋內親王也、

〔本朝世紀〕正曆元年七月十五日戊子、伊涉卿（○源氏）召外記大春日仲明仰云、可有薨奏之事、（○此月二日藤原兼家薨、）召遣少納言者、仲明還局、召遣少納言、只今參由申上卿、上卿仰云、奏文進者、入文筥進之、上卿覽之、

覽了召外記仰令覽於攝政(藤原道隆)者、仍參彼里第令覽之後、又進上卿、上卿返給外記、仰給少納言、仍授少納言、少納言件奏插文杖、令持史生進內侍所、付內侍令奏、

(左經記)長元八年六月廿二日甲戌、先齋院(村上皇女選子內親王)申刻卒去給云々、　廿九日辛巳、申行先齋院薨奏、依少納言不參、金吾進弓場被奏云々、昨日自或所被示之、一日先齋院御薨奏云々、遁世之人、有御服之時薨奏、先齋院不可有御錫紵、而外記所申行如何者、余(源經賴)云、於親王者、不論入道幼稚、雖無御服奏之云々、

(中右記)寬治八年(嘉保元年)九月八日丙午、今夜藤大納言左大辨(季仲)參仕仗座、(官人源突)申有右府薨奏事、(此月五日源顯房薨)先外記申其由、上卿令藏人右少辨時範奏薨奏候之由、仰聞食了由、外記指薨奏於文杖覽上卿之見了後進御所邊、令時範奏、留御所返給文杖、

(朝野群載二十一雜文)薨奏

太政官謹奏

無位藤原朝臣睦子(藤原實季妻、鳥羽母后苡子母、)

右人去月廿四日卒、今月二日葬、儀制令云、皇帝外祖母喪、不視事三日者、仍錄事狀、謹以申聞、謹奏、

永久二年三月三日

參議正三位行近江權守藤原朝臣公隆

(台記)仁平三年七月一日戊子、先日召大外記師業問曰、公隆卿无出家之聞、薨奏何日乎、申曰、近代无此事、仍不存其由、仰曰、有停止宣旨歟、申曰、雖無宣旨久不被行、仰曰、非有宣旨何廢其禮、早可申行者、其後師業申曰、竊尋日次於陰陽家之處、申七月三日无憚之由、而彼日上卿皆稱障不參、爲之如何、仰曰、余可參入、何求他上卿哉、

太政官謹奏

右人去六月廿日薨、儀制令云、百官三位已上喪、皇帝不視事一日者、仍勤事狀、謹以申聞、謹奏、

仁平三年七月三日

〔季連宿禰記〕元祿八年四月十九日庚戌、獅子吼院宮二品堯恕親王、妙法院御門跡也、前天台座主、依御入滅、自今朝廢朝也、三ヶ日云々、彼宮者後水尾院皇子、仙洞(○靈元)御連枝(新廣義門院御腹、仙洞御同腹宮也、)帝(○東山)御伯父、巷說云、獅子吼院宮去十四日夜歟御入滅也、然而依爲賀茂祭御神事之中被密之、今朝爲披露歟云々、不知實說、薨奏之事、當時不及沙汰、只披露之分歟、或說於法體者無薨奏云々、先例可勘、

〔三代實錄二十清和〕貞觀十三年十月五日丁未、天皇服錫紵、近臣皆桒服、葬太皇太后(○仁明后藤原順子、清和祖母、)於山城國宇治郡後山階山陵、是時天皇爲祖母太皇太后喪服有疑未決、於是令諸儒議之、從五位上行大學博士兼越前權介菅野朝臣佐世、從五位下行助教善淵朝臣永貞等議云、儀禮喪服經、齊衰不杖朞章祖父母、傳曰、何以朞、至尊也、又隱公元年左氏傳曰、弔生不及哀、杜預曰、諸侯以上、既葬則衰麻無哭泣、(○左氏傳註作哭、麻除無哭位、)諒闇終喪也、孔穎達曰、諸侯既葬、則免喪服、諸侯既然、知天子亦爾、不除則群臣莫敢除、故屈己以除之、而諒闇以終制、天下之人皆曰、我王之仁也、屈己以從宜、皆曰、我王之孝也、據此等文祖母服制如此、春秋之義、天子之位至尊、萬機之政至大、故三年之喪、既葬卒哭、除喪卽吉、依此言之、天子於父母尚爾、況祖母乎、然則葬後除喪卽吉、可卽杜之說、問曰、儀禮齊衰朞章、所稱祖父母者、含太上皇及三后歟、將只指凡人歟、答曰、賈公彥疏曰、喪服一篇、總包天子以下喪服之事者、以此言之者、祖父母之文、上至天子、下苞士庶、公彥雖不云后之尊與天子同然、則太上皇及三后、雖經典無文、而天子之文、可以苞之、大學頭從五位上兼文章博士巨勢朝臣文雄議曰、晉隆安四年、孝武太皇太后李氏崩、尚書左僕射(○尚書左僕射下、晉書禮志、有何澄右僕射五字、)王雅、尚書車胤、孔安國、祠部郎徐廣等議、春秋之義、母以子貴、成風者莊公之妾、僖公之祖母、薨於文公之世、文公同於夫人服三年之喪、凡子於父之所生、體尊義重、且禮祖不厭孫、故仲尼書之不復追貶、合情禮故也、於是安帝遂服齊衰朞、百僚亦一朞者、今據檢件文、是古

行三年喪時之禮也、然而本朝制令、三年之喪、降爲一年、周朞之喪、亦爲五月、自茲以下皆有降殺、然則若依晉禮而行之者、今須成五月之服耳、但案唐禮曰、皇帝本服大功已上親喪、皇帝不視事三日、又唐令曰、皇帝、皇太后、皇后、皇太子、爲五服之內親舉哀、本服周者三朝哭而止、大功者、其日朝晡哭而止、小以以下者、並一舉哀而止（其舉哀者皆素服、皇帝舉哀之日、內教及太常並停樂） 又案本朝令條曰、皇帝二等以上親喪、皇帝不視事三日、又曰、天皇爲本服二等以上親喪服錫紵、義解云、凡人君即位、服絕傍朞、唯有心喪、故云本服者、今據此等文而案之、皇朝之令、既同唐典、君上之儀誠異臣下、然則自非別有遺制、殆縮期程者、事須必依新禮三日成服、三日之後、無妨即吉、豈容遂考古禮還爲今疑哉、民部少輔兼東宮學士從五位下橘朝臣廣相議曰、天皇爲太皇太后可服錫紵五月、所以服錫紵者、據喪葬令文也、所以喪期五月者、據儀禮喪服經曰、不杖麻屨者祖父母、鄭玄注云、此齊衰文也、又戴德喪服變除曰、爲祖父母十三月而祥、祥而除、又劉表喪服後定亦同此文、又隋江都集禮齊衰不杖朞、祖父母之喪、又唐開元禮、爲祖父母齊衰不杖周、又田瓊喪服條例曰、天子不降其祖父母、（言天子絕朞喪、唯不降其祖父母等） 然則唐天子、爲祖母太皇太后齊衰朞、國家殊制喪服、降斬衰三年爲一年服、降齊衰一年爲五月服、下至大功小功緦麻、皆從降殺、故喪期當五月、或人疑曰、儀制令、皇帝二等已上親喪、皇帝不視事三日、又喪葬令義解曰、天子服絕傍朞、唯爲考妣、依式處分者、然則皇帝除考妣之外、不應有服、但應不視事三日服錫紵耳、今釋之曰、服絕傍朞者、是戴德喪服變除、及白虎通之文也、說此文者即云、不降其祖父母曾祖父母也、而作義解者、只舉考妣、不及祖父母者、蓋以爲令文條（○條一本作稱）爲二等已上親也、服錫紵者、錫紵是君弔臣喪之服、而非喪服也、唐天子喪服用斬衰齊衰、而國家制令、殊以錫紵爲喪服、至于爲考妣服、此則恐甚輕、故云、爲考妣依式處分者、是則謂喪服所服之衣色也、非謂喪服日月之數也、儀制令、不視事三日者、是只謂不視事之日數也、非謂喪制之日數也、至於喪制、則唐令無文、唯制唐禮以據行之、而國家制令之日、新制服紀一條、附喪葬令之末、夫喪禮委曲、條流千萬、而一條之內、事自不盡、自成此疑也、然則儀制令只說不視事

之日數也、喪葬令只說喪服之衣色也、至于喪制日月、則引禮而准行耳、又疑曰、喪葬令、服紀、爲君一年者、太皇太后旣君也、然則應服一年、今釋之曰、爲君一年、義解云、君謂天子也、又禮曰、爲君之祖母朞、又譙周曰、臣爲君祖母齊衰、又戴德喪服變除曰、君之祖母、與孫之爲祖父母同、據此等文、則君者指謂天子一人也、君之祖母謂太皇太后也、若謂太皇太后爲君、則君之祖母謂誰人哉、若天子爲太皇太后爲君服、則太皇太后於臣下、是君之君也、古今豈有君之君服者哉、若天子爲祖母服、臣下爲君服、則變除參差、吉凶相犯、恐非禮經從服之義、又疑曰、近臣與百僚喪服同耶異耶、今釋之曰、禮記服問曰、君之母非夫人、則群臣無服、唯近臣僕從、准君之所服也、此謂君之母若祖母、非皇太后及太皇太后者也、與今事既異、不可更議、須近臣同百僚、又儀禮喪服經曰、不杖麻屨者、爲君之祖父母、傳曰、何以朞也、從服也、又譙周喪服問（○問一本作圖）曰、臣爲祖母齊衰、據此等文、則唐齊衰朞、故國家當五月、然則百官可服五月、正六位上行少內記都宿禰言道、菅原朝臣道眞等議曰、儀禮喪服經、爲祖父母齊衰朞、本朝喪葬令云、天皇爲本服二等以上親喪服錫紵、義解云、人君卽位、服絕傍朞、唯有心喪、國家別制令、降朞以爲五月、今須皇帝爲祖母太后心喪五月、又據周官司服、錫紵衰、是君弔臣之服、不可爲祖母太后施之、然則先葬暫服齊衰、既葬卽便除之、昔者晉武帝楊皇后崩、依漢魏舊制、既葬、帝及群臣皆降服、時疑皇太子亦應除服否、尙書杜預以爲、古者天子諸侯三年之喪、始服齊斬、既葬除服、諒闇以居心喪終制、傳曰、三年之喪、自天子達士庶、此謂天子絕朞、唯有三年之喪也、非謂居喪衰服三年與士庶同也、周公不云服喪三年、而云諒闇三年、此釋服心喪之文也、皇太子亦配至尊、與國爲體、當復古禮、諒闇終制從之、謹案惠帝爲太子喪其母后、既葬除服、況以皇帝比於祖母乎、誠宜哀戚積於內、而衰服除於外、（○以下原缺、今據類聚國史補、）勘解由次官從五位下安倍朝臣興行議曰、伏見諸儒所議、遠稽唐禮、近酌朝典、論之詳矣、而至制服事、或五月爲限、或三日爲斷、稱所不同、何則夫恩厚者其服重、痛巨者其痛深、故齊縗以上、含悶持久、大功以下、計閏爲數、今若三日爲斷則恐傍降下殺、無復所施、但神化所務、一日萬機、若五月制、則縗麻在身、事

絶臨朝、甚不可也、以愚管思之、機務殷重、祭不可廢、以日易月、權變所宜、然則心喪五月、制限五日、是爲允焉、外從五位下守大判事兼行明法博士櫻井田部連貞相議曰、或人問曰、喪葬令云、天皇爲本服二等以上親喪服錫紵、義解云、凡人君即位、服絶傍朞、唯有心喪、故云本服、其三后及皇太子、不得絶傍朞、故律除本服字也者、今案此義解、天皇於本服二等以上親絶傍朞、但爲三后皇太子不可絶傍朞、可同庶人、何以故者、稱律除本服字者、是爲人主所言文之故也、答曰、檢名例律、六議條云、一曰議親、注云、謂皇親及皇帝五等以上親、及太皇太后、皇太后四等以上親、皇后三等以上親、古律同條云、議親、注云、謂皇親及太皇太后皇太后本服七日以上親、皇后本服一月以上親者、案此等文、除古律三后本服字、新律止計等親、示崇法、是則義解所謂、律除本服字者也、然則稱除本服字者、是爲三后、非帝王事、則知三后者爲等親、不可絶傍朞、人君者爲三后、猶須絶傍朞、爲一日爲權、事異臣下故也、朝議定、心喪五月、服制三日焉、

〔三代實録 三十陽成〕元慶元年二月十四日丙辰、无品平子内親王薨、内親王者、太上天皇（清和）之姑也、是日詔曰、天子絶傍朞、但未審太上天皇以應絶否、宜令博士等權議之、於是從五位上行博士兼越中守善淵朝臣永貞、從五位下行助教船連副使麻呂、從五位下善淵朝臣廣岑、從五位下行直講小野朝臣當岑、外從五位下美努連清名等奏議曰、禮記中庸云、期之喪達乎大夫、三年之喪達乎天子、父母之喪無貴賤一也、期之喪達於大夫者、謂傍親所降在大功者也、其正統之期、天子諸侯猶不降也、大夫所降天子諸侯絶之、不爲服也、正義云、朞之喪達于大夫者、欲見大夫之尊猶有朞喪、謂傍親所降在大功者、得爲朞喪、則著大功之服、故云達于大夫、若天子諸侯傍朞之喪、則爲不服也、三年之喪達于天子者、謂正統三年之喪、父母及適子幷妻也、達于天子者、言天子皆服之、不云父母、言三年者、包適子也、天子爲后、其服朞、以三年包之者、以后卒必三年然後娶、所以達乎天子志、故通在三年中、今據校此文、天子絶傍期、禮制明白也、又堯舜禹三聖、皆揖讓之君也、經籍之中、无貶尊號、太上天皇重不降、然則可絶傍期不

違禮意、

〔菅家文草七〕帝皇〇陽成爲族曾祖姑太皇太后〇淳和后正子製服幷令天下素服議

檢開元禮曰、皇帝本服大功以上親喪、皇帝不視事三日、又曰、緦麻三月成人正服、爲族曾祖姑在室者報、曾祖之姉妹 皇帝所絶傍親無服者、皇帝皇子爲之降一等、又案本朝令曰、皇帝二等以上親、若散一位喪、皇帝不視事三日、三等以上親、百官三位以上喪、皇帝皆不視事一日、義解曰、不視事三日者、唯爲三月以上服故也、然則太皇太后者、皇帝之族曾祖姑、天子之宜無服制者也、故本朝不列五等之親、親遠也、唐制猶絶三月之服、服輕也、明知皇帝廢事、證據無文、天下素服、因循不例、唯太皇太后之尊名、內親王之貴稱、禮制雖無正文、同家宜有別議、

元慶三年三月二十五日　從五位上式部少輔兼文章博士菅原朝臣某定

〔小右記〕寛弘八年七月七日戊寅、大外記敦頼朝臣來談雜事、右府〇藤原顯光被示送云、今日有可定申事、必可參會者、申今明堅固物忌之由、計之御心喪等間事歟、〇此年六月二十二日一條崩 申刻許、召使告可有定之由、等有所勞之由、自內右衛門督示送云、可有御心喪、定例如何、可定申之趣密々可云送者、　八日己卯、昨日案內口遣敦頼朝臣、其返狀云、昨日定事被參卿相、右、〇藤原顯光內府、〇藤原公季右衛門督、〇藤原懷忠左兵衛督、〇藤原實成 其外悉被申故障、右府以敦頼被申案內於左府、〇藤原道長 朱雀院御時、御心喪三月、廢朝四日、陽成院花山時、廢朝五日也、日數不同、仰諸道可令勘申歟者、御返事云、五日是定例也、至于四日、若日次不宜被行歟、如然之事可宜之樣可被申、行程遠重不可被仰者、今日被送遺詔之次、可被召仰歟者、午刻許、敦頼朝臣注送、內藏頭公信歟 被參、被申云、敦康親王令奏云、院遺詔、停擧哀素服葬官、不可置國忌山陵之由、宜令奏者、右府於右仗、以藏人景理朝臣被奏已了、仰云、與法者須任先例行之、然而依遺詔停止哀御之由、宜相觸者、又從今日五箇日可廢朝之由被下宣旨已了、經狀如此者、昨日諸卿定太不審也、依其定所被行歟、陽成院花山院例等依不有憚、只有五箇日廢朝歟、花山院崩給之時、被薄

其禮之由、諸人所申也、雖無口口之儀、可申讓國者也、而者有五箇日廢朝、無御心喪之禮、至陽成院例、依非讓位之事、只有廢朝而已、當時之禮、不似陽成院、尋禪位之跡、可有心喪之限、御本服七日、此間可有御心喪歟、諸卿僉儀、恐心不甘、後代之賢哲必有所定歟、　十一日壬午、參內、皇太后宮大夫行成同參入、頭辨傳勅云、固關可付國司、依御讓位後、未始政之間、不可賜官符、亦可給宣旨、天慶九寬平九年等例、頗可相准者、謹奉之了、抑先日有此定、諸卿定申院御葬送後可被行之由、而誠雖御葬送已過、猶在不視事之內、亦非可被營行之事歟、以此趣示頭辨、答云、尤可然事也、不視事之間、被尋勘行雜事之例、若無可准之事、被奏其由如何者、仰大外記敎賴令尋勘之間、卿廻思慮、斯事左府奏定事也、前日申過御葬後可被定之由、而重答此旨、可有不決歟、仍不令尋勘、只差大外記敎賴令申宣旨趣、卽歸參云、早任宣旨可行之者、固關事、可附國司之由便仰下頭辨了、天慶等例間敎賴朝臣、是史久永勘注付頭辨云々、令寫進其日記了、天慶九年四月廿六日、以是日伊勢國固關使獲奏使到來云々、須依例賜官符、而禪位之後、未有內印政、仍准寬平元年例、只下宣旨云々、今案此日記獲奏例也、既非付國々例、然而以准例所被仰歟、不可奏事旨今世之體多異、擬時頭辨云、院穢引及宮中、仍觸穢參入宮中、近則道方著院座參著內座者、又云、院御骨、初定可置金輪山、而改定何安置圓成寺、過三箇年可奉置圓融院者、但相副御骨之人々、廿日可歸參云々、又云、廢朝五箇日定了、而左相府云、廢朝畢日有忌、仍不可縮行、須加今二箇日可爲御心喪云々、初諸卿定似失道理、更亦依日次不宜以其餘日愁被定御心喪日如何、件御心喪事、兼可被定事也、而諸卿不在其例、只定申廢朝事許、可爲奇也、又被仰諸道可令進勘文歟、此間之事、蹤跡如忘、又云、今日中宮可下居給、光榮朝臣進勘文之後、申云、自御在所下御土殿、有方忌、爲之如何、左府云、凶事無改勘文、更不可改日、又々不可改其處、無爲術之事也云々、深有息氣、今年可重愼也、仍有如此之事也者云々、

〔玉海〕安元二年九月十四日丙辰、藏人中宮大進平基親來、依念誦之間不相逢、以光經傳云、高松院、二〇

（條后妹子、鳥羽皇女、）六條院、（謂故新院）崩御之後、遺令錫紵等之間事、所被問人々也、（前相國、左大臣、中宮大夫、相府、隆季、予、內大等云、）爲申其事所參也云々、其子細注折紙持來、兩明法博士勘文、（六條院御錫紵事也）外記勘例二通、（勘文兩方共）等相副也、

折紙云

高松院崩御、已爲建春門院（後白河后、平滋子、）御事以前、而近日被奏遺令、且可令著錫紵御歟、先後相違之例、不詳之由外記申之、又一切無其沙汰者、爲三等之御服親宮、難默止歟、且無其例之旨、外記同申云、六條院御服日數七日、而以日易月之禮制不相叶、且一條院御宇花山法皇崩御、三條院御宇一條聖主崩御、爲從父兄弟、雖有七日御服、無錫紵之儀、今度逐彼跡、不可著御歟、將可令著給歟、

外記申曰（勘文在別）

諒闇間奏遺詔等、著御錫紵例、嘉祥三年三月仁明天皇崩御、（天下諒闇）同五月嵯峨太后崩、（帝祖母）延長八年九月醍醐天皇崩御、（諒闇）承平元年七月寬平崩御、廿五日天皇著錫紵、天暦八年正月皇太后崩、（天下諒闇）八月廿九日伊勢齋宮雅子薨、（帝姉）九月五日薨奏、著御錫紵、（先被尋諒闇之間也）薨奏錫紵之例、元慶五年正月惠子內親王薨、（帝伯母）廢朝三日之由勘申之、因此例被行之也、件天暦御記云、此故不供冠、依朞年心喪著重服冠也、（錫紵之間事也）同天暦八年九月十四日重明親王薨、（帝兄）廿日薨奏口錫紵、

已上雖有此例等、先後違亂之例不見云々、

六條院御事（勘文在別）

天暦三年九月廿九日陽成院崩御、十月四日被仰廢朝五ヶ日之由、法家雖勘申三ヶ日之旨、依淳和皇后之例、被行五ヶ日、寬弘五年二月八日花山院崩御、（主上從父兄）同十一日被仰下廢朝五ヶ日之由、同八年六月廿二日一條院崩御、（主上從父弟）同七月八日被仰廢朝五ヶ日之由、（已上如此例）又延喜十七年御記云、正月廿一日奏、法親王子去月晦日卒、令左少史高行勘申不視事日限及錫紵事、申云、姪爲二等、儀制令云、二等以上親喪、不視事三日、（後日高行勘申儀勘文、不視事一日者、）喪葬令云、爲本服二等以上親服、

錫紵云々、右大將藤原朝臣等定申云、五月服五日、三月服三日、是以日易月之意也、今姪雖爲二等、准先例、更不可有錫紵、依定申不著給、不視事三日、又天暦四年三月十五日從三位熙子女王薨、主上姪子然而無薨奏、嘉應元年二月廿九日前賀茂齋院僖子薨、主上姪子無薨奏錫紵云々、

章貞勘文云勘文在別、大略許也、

喪葬令云、天皇爲本服二等以上親喪服錫紵、儀制令云、皇帝二等以上親、右大臣及散一位喪、皇帝不視事三日、義解云、於姪孫喪一日、

據此等文、一日不視事、而散一位喪不視事三日、太上天皇、豈輕於散一位哉、不視事三日、相叶先規歟、於御錫紵者、延喜七年六月十日、惟宗直本依中宮御事勘申云、二等親御服一月也、依法論之、三日之內不視政事、舊記云、延喜七年六月八日中宮崩、天皇同十日行廢朝五ヶ日、著錫紵三ヶ日是繼母例也、延長五年九月廿三日、惟宗公方勘文云、爲第八親王喪、至臣下者、衆子喪有一月服、奉於天皇爲二等親、可服錫紵、但本服雖一月、而准勘事理、散一位喪不視事三日也、親王是貴、豈輕於散一位哉、然則三日之內、服用錫紵不視事、議合法意、如斯等狀者、錫紵日數、似可准據云々、

基廣勘文云勘文在別、大略許也、

所引之文、大略同前、申狀又相同、但不載延喜七年例、於延長公方勘文者同載了、此外勘申云、永久二年十月勘申中宮御事也、同繼母者二等之親一月之服也、依設易月制、雖絶本服之期、不視政之事、

可服錫紵之條、何無因准之文哉、儀制令義解、爲三月以上服親、稱不視事三日者、一旦所立之義也、然則不視政事三日之內、服御錫紵、不乖法意者、太上天皇尊崇尤重、廢朝三ヶ日之間、令服御錫紵、自叶法意歟云々、

基親又申云、人々皆被申進可申之由、自是可參左大臣第云々、

余答云、明日雖私事有假寒事、不能引檢文書等、今夜及深更、明後日可申子細者、卽返行文書拔詮書取了、明日十五日可有無言之念佛故答此由也、

基親退出了、外記及明法博士等之許召遣勘文草、翌日夕還也、　十六日戊午、入夜一昨日所被尋問之兩條事、注折紙送基親之許、須書載消息也、而大臣之第來向仰之、其時眼前可申也、追注進是非例也、仍注折紙、職事以消息尋之時、書載消息也、但可隨事體也、其狀曰、

高松院崩御、爲建春門院御事以前、近日奏遺令可著御錫紵否事、如外記勘申者、先後相望之條、雖無所見、於遺令之遲速者、是本院之進止也、全非公家之最、何有望期之難、謂親則二等、謂服又三月、廢朝錫紵、豈可默止哉、抑久壽二年例、用捨在時議、

六條院崩後御服事、任法家勘文可被計行歟、但二等之親、可著錫紵之旨、令文雖明、七日之服、以日易月之禮、先規不詳、太上天皇、縱雖尊崇、於廢朝者、可及五日、至錫紵者、可存本服歟、彼寬弘五年同八年共、雖爲七日之服、已以無錫紵之儀、是於三等者、非服親之限也、而雖爲四等之親、於外祖父母者、代々多有此儀、蓋依准二等之文歟、是則本服重之義也、延喜十七年、雖二等之親不著御之、以日易月之禮制不相叶之故也、以之思之、就本服之輕重、可尋錫紵之有無歟、准據延喜寬弘等之例、無御錫紵有何難乎、若又雖可有其儀、事及三ヶ日歟、一月之服、已用一日、何況於七日之服乎、今所難法家勘文之永久二年例、彼時雖勘申三ヶ日之由、有議猶被用一日了、抑見兩儒之勘狀、注三日之旨趣、殊有所見哉、重可被尋問歟、

今朝召基廣、條々事尋問之、申旨只如勘文、

十七日己未、申刻大外記賴業參入、○中略余召簾前仰雜事之次語云、左大臣○藤原經宗中宮大夫共申云、錫紵可召一日、三ヶ日無謂、又高松院御事、都難被辨者、兩事共可被行之事大繁、准同日薨奏兩度之例、遺詔遺令同日可奏之、又錫紵同日可服御云々、內府同被申、可有一日、三日不可然之由、但高松院

御事以後、依建春門院御事已御錫紵了、於今者不可有其沙汰歟云々、因之服親之崩逝薨卒之時、無薨奏若遺令等、又不著錫紵之例、幷同日被行遺令、及錫紵等之例、可勘申之由、昨日基親下知、未成其草、但豫案之遺令奏同日之例更無之歟、於辨傍親服之例、六久壽二年、及長寛二年、(讃岐院御事)依義絶被聞人々、不被用之例等也、此外不覺悟云々、長寛義絶之儀、倘不甘心、可有遺詔等事也之由、彼時有相傾之輩云々、又語云、漢家之禮者、父之時母喪一年、(二親喪三年也)以之思之、我朝者父之時母后崩者、其喪可有五ヶ月、隨又本朝未有父上皇御坐之時母后有事之例、然者以漢家之儀可准用之、無其沙汰被用一周閔涼闇之儀、無其謂之由、有聞達法皇及博陸之人云々、不知誰人、此事一旦雖可然、頗不叶我朝之儀歟、造服紀令之旨、不載父坐之時可減母喪之旨、只二親共縮三年定一期了、加之冷泉院東宮之時、母后安子崩御、于時父村上帝御宇也、然而即被用一年服了、今天子遭國母之喪、雖父之法皇御坐、何縮其喪、本條所見准據之例如斯、不知物義之徵、申出如此之謬事、愚事云々、　十九日辛酉、錫紵之間事依人々申狀不理、昨日尋申關白(○藤原基房)今朝被送之、有檀紙折紙二枚、一枚左大臣、余、內大臣(○藤原師長)等申狀也、一枚中宮大夫申狀也、一筆以基親手跡書之、即書寫返上了、其狀云、

左大臣被申曰、六條院前高松院御事共、任法家外記勘文可有御錫紵、但若有停止例者、於一事不可有沙汰歟、又無其例者、同時可被奏遺詔遺令歟、薨奏有同日之例、可被准彼歟、重可被問外記歟、

右大臣被申云(子細在一昨日記、仍更不記之、)

內大臣被申云、高松院御事已爲御服親、尤可奏遺令著錫紵歟、頗雖過期、准中陰以後薨奏例被計行何事之有、亦六條院御服事、華山院一條院之時、依非二等之親、有廢朝無錫紵、六條院爲二等親、須有御服、然而依不叶以日易月之義、可被准行寛弘兩度之例歟、而明法博士勘申、錫紵三日之由、詳無本文歟、但至姪孫喪、皇帝不視事一日之由、見令義解云々、若可有御錫紵者、據彼意可限一日歟、左右可在時議耳、

中宮大夫申云、爲六條院幷高松院、可令服錫紵御否事付外記、明法博士勘文、恩意所及、又爲兩院、共當可服錫紵、此中六條院服制殊有議、可被准行歟、倩按事情、廢朝之程限延縮雖有序、服紀之日數、增加猶不詳、彼易月卽減例也、憲章未加日歟、明法博士等今所准申度々勘狀、爲六條院頗乖禮制、共雖爲二等以上例、以上例以服紀相隔之故也、加之依一月之服不視政事、三日之內可服錫紵之儀、曾無本條之明文、唯爲先儒之舊云、因之用捨隨時、彼此易迷、然而時務之例、以近爲先者也、永久二年法家勘文不被據用、所謂殊有議、廢朝五ヶ日、天皇著御錫紵一日也者、爲本服一月、卽以一日爲本服七日、何及三日乎、勘儀制令至於姪孫喪、皇帝不視事一日、付之按之、廢朝以後、豈服錫紵乎、暫准此文之意、御著除可限一日歟、摸彼二年之先規、加此一旦之今案、抑又雖無明文、何强不協時儀乎、其爲姪喪不視事、同令雖存、導爲上皇、德望不輕、然則就天曆寬弘二代例、廢朝五ヶ日、無殊難歟、兩院事重疊之條、舊慣未聞、進退難測、雖然付凡庶儀制、豫案喪葬令古記、其旨歸之、至服假相累時、可從一法者歟、是以如法家舊慣者、縱先有輕服、卽亦遭心喪、若計日爲限內者、不可累著、猶及限外之時、乘日更服之漏之愛、恩慮所存、爲皇帝何亦無此議乎、若然者件兩院喪日、不違本限內也、抑遺詔遺令共未奏、延息之條雖無先例、彼院司等憚世間大事歟、又此後雖令發喪、可無其難、就中於蕘奏者、或有中陰以後例、若又一日之中、及二人已上便因准之、兩院事、一日之中、俱可奏歟者、儀制所當、就高松院哀傷可有御錫紵、至六條院服紀、依彼限內也、又諒闇之間、著御錫紵之例、見外記勘文、

廿五日丁卯、入夜源中納言雅賴、返送錫紵之間文書、又示送云、

此間事、依隆季卿申狀可被行云々、此事大略一同申狀歟、件卿申狀云、新院崩御之高松院服限內、仍不可著錫紵云々、此事有疑、皇帝服絕傍朞、有以日易月之禮、何謂服限內、只依七日服、以日易月不可著也、

十月廿六日丁酉、今日有御錫紵事、(卽日御著除、○中略)

抑高松院本服三月、然者易月之禮可有三日之錫紵、而日內著除加何、是近代雖五日三日之服、六日內著除之例云々、此事不得心、假令三日御服、因日次、或延四日、或縮二日、是例也、一日之內著除、頗可謂容易、一日之服、三日之服、以何可分別哉、但自長承保延之比、多以如此、就中今度六條院、可有一日之錫紵、隨又同日奏遺詔遺令等條、高松院御服及三日者、次第可違亂之故、被行此儀歟、近代事、多失本說、唯以意巧被行之條、又准凡人半減之儀歟、可尋之、

(園太曆)貞和二年四月卅日、抑自仙洞被下御書、依永陽門院御事、(○後深草皇女久子內親王、光明御祖父姉妹、此月二十五日薨、)可有廢朝錫紵否事歟、聊引勘注進所存畢、其時續左、

重仰先例恐相尋可申候云々者、依永陽門院御事、可有廢朝哉否間事、自禁裏尋承旨候、主上(○光明)如當時者、令當五等之外孫候歟、然者不可及沙汰候哉、凡若不被召錫紵之外、近來必不及廢朝日哉如何、三等以上者、廢朝一日多分例候哉、今度儀、不可及沙汰哉之旨、雖思給候、聊申合也、被仰下之旨畏承了、抑依永陽門院御事、公家錫紵御沙汰有無事、於本條者、二等以上親喪有此事、二等以下及諸臣喪、除帛衣外通用雜色云々、故女院者、可令當四五等給候歟、然者於錫紵者、不可及沙汰之條、勿論候哉、廢朝事、本儀與當時沙汰若不同事候哉、仍雖引勘候、未見傍例候、至廢朝之沙汰者、不依錫紵有無候歟、但是又三等已上歟、百官三位以上喪一日之由、令條載分明候歟、如本條者、彼是無沙汰勿論候哉之旨存候、但先例定分明候歟、若可被尋聞食兩局候哉、以此趣可令計披露給候、公賢誠惶誠恐頓首頓首謹言、

四月卅日　　公賢

大宮宰相殿

五月二日、廢朝事、相尋先例可申入之旨先日有勅定、昨日爲朔日之間不持參、今日付女房進上之、其

案寫留續之、

依永陽門院御事可有廢朝否例

八條院（鳥羽院御娘（暲子）二條院准母后）

建暦元年六月廿六日御事

于時帝（順德院）

同年八月八日釋奠無宴座幷三道竪義依八條院御事也、

此外無公事省略歟

殷富門院（後白河院御娘、（亮子內親王）安德後鳥羽二代准母、順德院養母、）

建保四年四月二日御事

于時帝（順德院）

今度一向無沙汰歟

宣陽門院（後白河院御娘○覲子）

建長四年六月八日御事

于時帝（後深草院）

八月五日釋奠被止宴座竪義依宣陽門院御事也、

此外無公事省略

嘉陽門院（後鳥羽院御娘○禮子）

文永十年八月二日御事

于時帝（龜山院）

今度一向無沙汰歟

東一條院後京極殿(藤原良經)御娘、佐渡院(順德)妃、○藤原立子
寶治元年十二月廿一日御事
于時帝後深草院
今度一向無沙汰

安嘉門院後高倉院御娘(邦子)後堀川准母、
弘安六年九月四日御事
于時帝後宇多院
今度一向無沙汰

鷹司院猪隈攝政殿下(藤原家實)御娘、後堀河院妃、○藤原長子
建治元年二月十一日御事
于時帝後宇多院
今日列見、被止宴座幷音樂等
此外無公事省略

明義門院順德院御娘○諱子
寛元元年三月廿九日御事
于時帝後嵯峨院
今度一向無沙汰歟

式乾門院後高倉院御娘、(利子)四條院准母、
建長三年正月二日御事
于時帝後深草院

同年二月七日釋奠、無宴座幷竪義、依式乾門院御事也、

此外無公事省略、

已上件年々遺令奏以下事不被行之乎

此外二等親有故時、無遺令甍奏例猶以存之、兼又其寄御坐女院御事時、被行之次第、略而不及注進者也、

大外記中原師茂

師利注進

承保元年十月六日、被奏故上東門院〇藤原彰子、一條后遺令、廢朝三ヶ日、件女院一條院后、後一條後朱雀院御母儀、當代〇白河曾祖母也、仍重々有其沙汰及勅問、今日被行之、

嘉保元年九月八日、被奏陽明門院〇禎子内親王遺令、廢朝五ヶ日、件女院、後朱雀院后、後三條院御母儀、

永長元年八月十六日、被奏郁芳門院〇媞子内親王遺令、廢朝三ヶ日、堀河院御母儀、

文治五年十月十一日、被奏上西門院〇統子内親王遺令、廢朝三ヶ日、後白河院准御母儀、

承元四年四月十二日、被奏坊門院〇範子内親王遺令、廢朝三ヶ日、後鳥羽院准御母儀、

建暦元年十一月十六日、被奏春花門院〇昇子内親王遺令、廢朝三ヶ日、有御錫紵事、當代准御母儀、

安貞二年十月十八日、被奏七條院〇藤原殖子遺令、廢朝三ヶ日、高倉院后、後鳥羽院御母儀、

暦仁元年十月廿三日、被奏北白河院〇藤原陳子遺令、廢朝三ヶ日、有御錫紵、後高倉院后、後堀河院御母儀、

正嘉元年七月五日、被奏承明門院〇藤原在子遺令、廢朝五ヶ日、後鳥羽院后、土御門院御母儀、

依永陽門院御事、可有廢朝否事、引勘候之處、弘安五年八月廿三日、正親町院〇土御門院御女、今上後宇多院御繼曾祖母、〇覺子有御事之時、廢朝事不被仰候之由注置候、此外相叶今度之儀、所見不勘得候、内々可得御意候、恐恐謹言、

五月二日　清澄

(園太暦)貞和二年九月卅日、仁和寺一品御室(寛性法親王)今夜子剋御入滅、御年五十八、閏九月一日、今日評定延引之由有御教書、一品御室事故歟、(○中略)依仁和寺宮事、廢朝錫紵事被尋例云々、當今(○光明、光嚴弟、)者、上皇(○光嚴)御猶子也、仍今之口令隔給歟、此例清隆後日持來、仍續之、其外不審候間、尋大理卿口爲俊卿奉行被尋云々、

依仁和寺一品法親王御事廢朝錫紵有無例事

無品定惠法親王(今上後鳥羽御伯父)建久七年四月十八日御事、同年六月廿六日有奏、廢朝三箇日、可止音奏之由被宣下、同日御錫紵、

無品承仁法親王(今上後鳥羽御叔父)同八年四月廿七日御事、同年五月四日有奏、廢朝三箇日、可止音奏之由被宣下、(不可有獻例以後敢始之由被仰外記○中略)

右例依仰注進如件

貞和二年閏九月五日　左大史小槻清澄

依仁和寺一品法親王御事、禁裏廢朝、御錫紵可爲何樣哉事、粗引勘先規候之處、御室二品守覺法親王(後白河院皇子、後鳥羽院御叔父、)建仁二年八月廿五日御事、聖護院無品靜惠法親王、同三年三月十二日御事、兩法親王(後白河院皇子、後鳥羽院御叔父、帝(土御門)御從祖父、)御室三品道法法親王、建保二年十一月廿一日御事、(後白河院皇子、後鳥羽院御叔父、帝(順德)御從祖父、)二品道助法親王、寶治二年正月十六日御事、(後鳥羽院皇子、後嵯峨院御叔父、帝(後深草)御從祖父、)件年々廢朝御錫紵事、外記記無所見、口可被得其御意給候哉、師茂誠恐謹言、

後九月四日　師茂請文

一二等法親王者有故時有廢朝錫紵例

高倉院

仁安三年四月廿五日、無品道惠法親王薨、(帝御叔父、鳥羽院皇子、)五月廿一日有薨奏、廢朝三箇日、可停音奏之由被仰之、不可有廢朝以後政始之旨被仰之、今日御錫紵、(○三箇日中略)

後伏見院

正安元年六月七日、二品深性法親王薨、(帝御叔父、後深草院皇子、)

已上件年々、無薨奏廢朝御錫紵等事乎、

閏九月七日　大外記中原師茂

〔園太曆〕文和元年十一月廿九日己亥、天下諒闇(○光嚴後宮藤原秀子、後光嚴御母、十一月廿八日薨、)雖勿論、近來事候多新儀、依內々相問經顯卿、返事續左、

畏承了、先日仰趣、俊冬傳申候、所勞扶得候者、必可參入候、抑陽祿門院御事、驚歎存候、諒闇之條、勿論候歟、但無足候間、每事不遂行候、新嘗祭も遂不被行候、雖無力之時分候歟存候、內府(○藤原公秀)憂喜、一時計會、人間界之習、雖不始于今事候、心事殊察存候、每事可參入言上候、經顯恐惶謹言、

十一月廿九日　經顯上

十二月一日庚子、今日四位大史匡遠宿禰來、召簾前謁之、此間事等談之、其次語曰、天下諒闇勿論歟、而武家聊有申旨、頗及豫義歟、此條曾不可有先規、珍事之至歟云々、　三日壬寅、今朝自武邊內々示曰、天下諒闇事、武家不可然之旨申歟、御裝束已下料足爲方曾無之、仍憑武家之處、雖一塵沙汰難治也、其上公家武家代始、旁無便宜之上、新院(○崇光)御時已有沙汰、爲徽安門院(○光嚴后壽子內親王)御猶子以後、仙院(○光嚴)被定申國母了、今上(○後光嚴)爲新院御舍弟、今更不可有差異、若猶可有議者、尤被仰合可申意見之所、密被治定、臨期議了期被仰合候趣、頗鬱申云々、以外事也、抑及晚博陸被送狗少納言長綱朝臣、予招入內出居謁之、示曰、陽祿門院御事、天下重事不能左右、此上諒闇勿論之所、就無料足被仰武家之所、諒闇公家武家代始不可然、當今爲徽安門院御母子儀、每事可有沙汰之旨申之、此上不能左

右歟、但以生母偏被處于他人之條、頗不便歟、其儀雖爲逆、郁芳門院（〇白河皇女媞子内親王）爲堀川准母、依國母儀、諒闇事粗雖有沙汰、被止其儀、遊義門院（〇後宇多后姈子内親王）爲後二條院擬母、卽如拜禮准國母、有沙汰、因准永長郁芳門院例、亮闇儀不及沙汰、被准彼儀如何者、此儀不可有子細歟、其外皆無存寄事、件兩度例、粗案立事也、武家所存誠雖難知、以天子生母被成他人之條、父母之孝道、依尊卑不可有等差、以折中儀被行、尤可叶物宜哉之旨報了、　五日甲辰、右大辨俊冬朝臣入來、爲博陸使者示云、亮闇之儀、勿論之由存候處、武家有被申之子細、此上不能左右上、且武家申詞、勸修寺前大納言注進如此之上事可爲何樣候哉、殆迷商量、仍所談申也、諒闇禮、於豫義者不及子細被聞食候旨、女院（廣義門院〇後伏見后藤原寧子）已被仰御返事云々、而就輕候沙汰可何樣候哉、可申合之旨、強雖無奉仰之旨、一身商量什難及、仍所談合也云々、此趣一條前關白（〇經通）幷予兩人被談云々、（大外記師茂、左大史匡遠宿禰淸澄等勘例覽之、皆非今度准據歟、）陽祿門院御事殊驚存候間、雖可參申入、依爲初度所加斟酌也、次料足事、依南方幷諸國擾亂、差遣官軍等候間、計會更難事行、抑公家武家爲草創時分候上、歲末數日被閣沙汰候條云、官軍等恩賞事、云諸人愁訴、旁可爲難義、輕之樣有御沙汰條可宜哉、且新院爲徽安門院御猶子歟、御連枝之上者、任彼例可有御沙汰哉之由申之、余返答云、今度天下諒闇儀、曾非不審之限、陽祿門院爲母儀、准三后及院號、內相府又以外祖父之寄、昇丞相宜命也、不及異論、然而武家執奏近風、又不能左右歟、但今上爲徽安門院御猶子儀者、陽祿門院可爲異姓他人之條勿論哉、雖貴賤異事、親子之道、孝行不可有私歟、偏以如無之條尤不便、且爲忘御不孝之罪、爲之如何、就輕沙汰武家所存云、然者就養母准母等、准據有沙汰之條、可爲折中候哉、欲用此儀作儀禮、涉兩端（以徽安門院爲實母、以陽祿門院爲准母、）尤有恐、又偏欲爲徽安門院御猶子、以生母被所他人、不孝譴難遁、進退惟谷、非愚意之所旱、非分儀爲人臣難申左右歟、只以當今叡慮可被一決、而今御幼年難被決大議歟、然者此等條々、併任廣義門院御意、被治定候外不可有他哉之旨相存候由申了、此次俊冬朝臣去春横難、希有而遁虎口之趣語之、

心喪

後冬朝臣隨身例等、後日尋取抄入之、是皆不叶今度准據例、今度官外記（匡遠宿禰、師茂、清澄、）勘例抄之、（○中略）已前十度例、兩局三人注進之、此內德治遊義門院、日來國母儀、及御沒後被改之、聊雖相似、時代不快之間、延喜嘉保治承例之由有沙汰歟、每事被隔正義、被行權義、爲之如何、此事後日官人明宗來、次父明成就御問勘進所存之由申、尋取續之、

被尋下事

右公家依陽祿門院御事、准據儀可爲何樣哉、可令注進由被仰下哉者、謹檢喪葬令曰、天皇爲本服二等以上親喪服錫紵、義解云、謂凡人君卽位、服絕傍喪、唯有心喪、故云本服、又云、其天皇爲考妣、令條無文、依式處分也、錫紵者細布、卽用淺墨染也、儀制令云、二等以上親、皇帝不視事三日、又條云、五等親者、父母養父母爲一等、又條云、服紀者養母五月者、

據檢斯等文、爲二等以上親喪服用錫紵、不視政事三日、但天皇爲考妣令條無文、可依式處分之由明歟、粗訪先規、醍醐天皇爲後母后中宮溫子被奉收養之間、中宮延喜七年六月八日御事候時、以養母之禮錫紵三日、又堀川院以郁芳門院被奉准御母儀之間、嘉保三年八月七日彼女院御事候時、以養母之禮、如延喜七年例之由有所見、或今度可爲御據歟、在聖斷哉、仍言上如件、

文和元年十二月七日　大判事坂上明成

〔令義解　九喪葬〕凡天皇爲本服二等以上親喪服錫紵、（謂凡人君卽位、服絕傍喪、唯有心喪、故云本服、○下略）

〔文德實錄　一〕嘉祥三年三月己亥、仁明皇帝崩於清涼殿、　四月乙丑、是日宣詔內外云、易月之制、雖據舊章、臣子之道、須存心喪、宜仰有司葬年之內、禁宴飮作樂及著美服、

〔三代實錄　二十清和〕貞觀十四年二月卅日庚午、去年九月二十八日太皇太后（○仁明后藤原順子、清和御祖母、）崩、十月五日葬、自十月計之、至于是月、滿於天皇心喪五月之限、仍大祓於建禮門前、　三月四日甲戌、自去年九月二十九日、內豎不奏時剋、以天皇心喪也、是日始奏之、

〔北山抄 四〕上皇皇后崩事付太子薨事

太后　貞觀十三年太后〇仁明后藤原順子崩、天皇〇淸和祖母也、心喪五月、服制三日、違令文、

皇太子　同〇延喜廿三年三月廿一日、皇太子〇醍醐皇子保明薨、有諡號宣命使、親王公卿各一人也、御心喪三月之間、主上〇醍醐著鈍色御衣、〇中略五月晦行大祓、計月也、

法皇　承平元年七月、法皇〇宇多崩、依五月御心喪、被停大嘗會、十二月行大祓、計日也、

〔日本紀略 二朱雀〕承平元年七月十九日甲辰、戌時宇多院太上法皇崩於仁和寺御室、 十二月十七日庚午、於建禮門大祓、依法皇〇宇多心喪滿限也、諸司用吉服、內豎音奏、

〔貞信公記〕承平元年九月廿三日、定法皇〇宇多心喪事、 十二月十七日、申時除法皇心喪大祓行、

〔北山抄 四〕上皇皇后崩事付太子薨事

上皇　天曆六年八月十五日、上皇〇朱雀、村上御兄崩、十七日、被定行雜事、〇中略又至御葬日廢務、御心喪三月、明經道勘文云、舜雖非堯子、受讓卽位、而服三年之喪者、致臣子之禮也、依漢朝以日易月之制、可有十二日御喪服歟、紀傳勘文云、上皇有喪服節儉之顧命、御心喪之期、可依本服之紀也、明法勘申云、服錫紵三日、不視事三日、御心喪三月云々、外記勘文云、大同天皇、天長元年崩、心喪之期[illegible]限葬年、天長天皇承和七年崩、御冠以遠江貲布、御簾御座等端皆以布、又不立桐云々、件爾帝非受讓、但天長元年喪、有葬年喪之議、依臣下上表、八月被行神事、至于節會不可被行之由、承和例頗雖准、隨弘仁皇命、似被行之云々、依諸儒定申、本服三月之間、停飮宴作樂、臣下著美服之由、下知官符、唯計日十一月可爲限者、

〔本朝世紀〕正曆元年七月十五日戊子、此日主上〇一條服御錫紵三箇日、御心喪三箇月、外祖父〇此月二日藤原兼家薨也、是依諸道儒者勘申也、

〔小右記〕寛弘八年七月八日己卯、昨日案內問遣敦賴朝臣、其返狀云、昨日定事、被參卿相、右內府〇右大臣藤原顯光、內大臣藤原公季、右衞門督、左兵衞督、其外悉被申故障、右府以敦賴被申案內於左府、〇藤原道長朱雀院御時、御心喪三月、廢朝四日、陽成院、花山院時、廢朝五日也、日數不同、仰諸道可令勘申歟者、御返事云、五日是定例也、至于四日、若日次不宜被行歟、如然之事、可宜之樣可被申行、程遠重不可被仰者、今日被

除服

送遺詔之次可被召仰歟者、〇中略又從今日五箇日可廢朝之由、被下宣下已了、經狀如此者、昨日諸卿定太不當也、依其定所被行歟、陽成院、花山院例等、依不受禪、只有五箇日廢朝歟、花山院崩給之時、被薄其禮之由諸人所申也、雖無口口之義可申讓國者也、而亦有五箇日廢朝、無御心喪之禮、至陽成院例、依非讓位之事、只有廢朝而已、當時之禮不似陽成院、尋禪位之跡、可有心喪之限、御本服七日、此間可有御心喪歟、諸卿僉議、恐心不甘、後代之賢哲必有所定歟、　十一日壬午、頭辨云、〇中略廢朝五箇日定了、而左相府云、廢朝畢日有忌、仍不可縮行、須加今二箇日、可爲御心喪云々、初諸卿定似失道理、更亦依日次不宜、以其餘日愁被定御心喪日、如何、件御心喪事、兼可被定事也、而諸卿不在其列、只定申廢朝事許、可爲奇也、又被仰諸道可令進勘文歟、此間之事蹤跡如忘、

〔大江俊矩記〕寛政六年七月七日壬辰、一品宮〇東山皇孫典仁親王、光格御父、薨去、自昨夜廢朝、　十日乙未、極﨟廻狀、從差次藏人傳來、

從來十二日觸穢候、且來廿一日著御錫紵、八月四日除御、一閡之間御心喪之事、

右之段可得相心、頭辨被申渡候、仍申入候也、〇中略

七月十日　常芳

三人

〔續日本紀十七聖武〕天平二十年六月癸卯、令百官及諸國釋服、〇此年四月元正崩

〔杜氏通典百一〕周喪察舉議晉

晉武帝太始中、楊旌有伯母服未除、而應孝廉舉、天水中正、〇中略震議曰、本論無姓孝舉古之名實、尋名責實、模格宜高、夫以宜高之賓、必以適俗爲稱、動擬清流、行顧禮典、況齊縗之喪、身有伯叔之痛、腰麻貫經對而不言、不處大夫之位、不統邑宰之宜、時無盟戰、代無寇戎、不受聘使之命、不率師旅之役、喪禮宜備、哀情宜畢、古者周喪過三月而從政、謂若今之職司有公除也、公除之制、蓋由近者多事、在官不

復從禮、權宜之事耳、今當擧者、或出布衣、或在吏次、且貫還之道、在不拘之地、推讓之宜、得順其心、官無推讓之刑、灋無必行之制、平日且猶遜讓、況周年之憂乎、若從公除、則非正官之例也、若從高貫之擧、於情爲慢喪、於擧爲昧榮、考之於禮義、則未聞、今戎車未息、禮制與古不同、今諸王官司徒吏、未嘗在職者、其高足或有一擧便登黃散、其次中尙書郎、被召有周喪、正假一月耳、何至孝廉獨不可耳、爲孝廉之擧、美於黃散耶、如所論以責孝廉之擧、則至朝臣復何以恕之、宜依據經禮分別州國之吏與散官不同、

〔續日本紀三十桓武〕延曆元年七月庚戌、右大臣已下參議已上共奏偁、頃者災異荐臻、妖徵並見、仍命龜筮占求其由、神祇官陰陽寮並言、雖國家恒祀依例奠幣、而天下縞素吉凶混雜、因茲伊勢大神及諸神社、悉皆爲崇、如不除凶就吉、〇去年十二月光仁崩恐致聖體不豫歟、而陛下因心至性、尙終孝期、今乃醫藥在御、延引旬日、神道難誣、抑有由焉、伏乞忍曾閔之小孝、以社稷爲重任、乃除凶服以充神祇、詔報曰、朕以霜露未變、荼毒如昨、方遂諒闇、以申罔極、而群卿再三執奏、以宗廟社稷爲喩、事不獲已、一依來奏、其諸國釋服者、待祓使到祓潔國內、然後乃釋、不得飮酒作樂幷著雜彩、　八月辛亥朔、百官釋服、

〔續日本紀四十桓武〕延曆九年正月丁卯、百官釋服、〇去年十二月母后高野新笠薨從吉、是日大祓、

〔續日本後紀九仁明〕承和七年五月癸未、後太上天皇、〇淳和崩于淳和院、春秋五十九、〇九恐五誤　甲申、天皇於淸涼殿著素服、　壬辰、右大臣從二位藤原朝臣三守已下十一人奏言、臣聞天下大器、群生重畜、一日萬機、不可暫曠、是以周誓牧野、猶抑荼毒之心、漢聽德陽、復絞斬縗之慟、伏惟陛下至孝過禮、痛深衣冠、泣血攀號、不從朝位、臣等謹見遺制曰、葬畢釋縗、莫煩國人者、伏願釋凶服、而垂冕旒、制哀襟、而塞黈纊、則上遵遺詔、下叶舊章、豫承綸旨、宜告內外、不任懇情之至、謹詣闕奉表以聞、　甲午、詔曰、比者昊穹不弔、後太上天皇登遐、龍髯之駕方遙、鳳紼之行靡反、朕甫鍾煢疚、痛結荒衿、懷荼蓼以纏悲、制苴葈而展禮、夫愼終追遠、自有通規、以日易月、唯稱權變、而葬訖釋縗、載在遺訓、群公虔奉確請、莫違憑几之言、

理難拒忤、至公之議、抑當有衍、今屈因心以從權奪、宜告中外、俾知此意、　戊戌、天皇除素服、著堅絹御冠橡染御衣、以臨朝也、

〔大和物語下〕ふか草の帝〇仁明と申ける御時、良少將〇宗貞、良岑といふ人、いみじき時にて有けり、〇中略此みかどうせ給、御はうふりの夜、御供にみな人つかうまつりける中に、其夜より此良少將うせにけり、〇中略御はてになりて、御服ぬぎに、よろづの殿上人河原に出たるに、わらはのことやうなるなん、かしはにかきたるふみをもて來たる、とりてみれば、

皆人は花のころもになりぬなりこけのたもとよかはきだにせよ、とあり、みれば此良少將の手に見なしつ、いづらといひて、もてこし人をせかいにもとむれどなし、〇又見古今和歌集

〔日本紀略宇多〕仁和三年八月廿六日丁卯、今日巳二剋、光孝天皇晏駕于仁壽殿、　九月二日壬申、東宮〇宇多御倚廬素服、群臣從之、仰左右衞門閉宮城諸門、唯開待賢藻壁兩門、　十五日乙酉、卯四剋、釋御縗廬、爲除凶服者、遣使五畿七道以修大祓、　四年八月廿九日、未剋於朱雀門大祓、爲明日就吉也、

九月一日乙未、是日廢務、昨日始脱素服也、

〔源平盛衰記二十五〕時光茂光御方違盜人事

又殊ニ哀ナル御事アリキ、去シ安元二年ノ七月ニ、御母儀建春門院〇後白河后滋子隱レサセ給ヒケリ、主上〇高倉今年ハ十五ニゾナラセ給ヒケル、斜ナラズ御歎アリテ、御寢膳モ御懶キ程ナリケリ、帝王御服ノ間ハ定レル習ニテ、廢朝トテ十二月ノ程、萬機ノ政ヲ留メラル丶事アリ、但孝行ノ禮ハサル事ナレ共、朝政ヲ止ル事、天下ノ歎ナル故ニ、一日ヲ以テ一月ニ充テ、十二日ヲ以テ十二月ニ准テ、御色ノ服ヲメス、十二日過ヌレバ、御除服トテ御色ヲ召替ル事ナレバ、此君モ御母儀隱レサセ給テ後、十二日ヲ過サセ給ケレバ、公卿殿上人參會シテ御除服アリケルニ、斜ナラズ御歎ナレバ、參リ給ヘル人々モ、問フニツラサノ風情モヤトテ、御母儀ノ御事申出ス人モナシ、君モ何トナ

キ様ニモテナサセ給ケルガ、猶モ御氣色處セキノ御タメシナリ、高倉中將泰通朝臣參テ、御衣ヲ進ラセ替、御帶ヲ當進ラセケレ共、結ビモヤラセ給ハザリケレバ、御後ヨリ結ビ進ラセケルニ、母后ノ御名殘ノ色ノ御衣、今ヲ限ト召替ルト思召ケルニヤ、御涙ノトクトクト落ケルガ、泰通ノ手ニ懸リケレバ、堪ズシテ同ク涙ヲ流シケリ、是ヲ見進ラセケル卿上雲客、皆直垂ノ袖ヲシボル、君モ龍顏ニ御衣ノ袂ヲ當サセ給テ、聽テ夜ノ御宿殿ヘ入セ給ヒ、御涙ニ咽バセ給ケルゾ悲シキ、

〔後中記〕仁治三年二月廿日壬申、參左府、〇藤原實中略、又仰云、先日著輕服畢、可有除服宣下、然而踐祚日兼加冠役、如拜賀列、今更被下除服宣下條如何、予〇藤原資經申云、於素服人者、先例被下除服宣下、於著輕服之人者、宜下之條不詳、可依先例歟、引勘可申之由重又有仰、　廿一日癸酉、著束帶先參左府、著輕服人、除服宣下事、先例所見不詳、久壽法性寺殿令著輕服給、除服以前被參內、院、若宜下儀歟之由被申畢、　廿三日乙亥、著直衣參左府、被仰云、御除服宣下事、先例不然、仍不可有之由、禪定殿下令申給之由有仰、元來不可然之由所相存也、　廿七日己卯、自一條殿女房奉書到來、依四條院御事、〇此年正月八日崩尙侍殿可有御除服哉否云々、不可有御輕服歟、粗注申喪葬令文了、不審之餘、猶相尋明法博士章行之處、返狀云、

喪葬令曰、天皇爲本服二等以上親喪云々、義解云、人君卽位、服絕傍朞、唯有心喪、公式令、凡設古事條義解云、凡人君者父天母地、故謂天子者、據案斯等文、天皇者絕服之人也、然而爲二等親王者恭雖設禮數之法、二等親恐爲王者、難存傍親之條、仍本條之中無有明文、只守君臣之禮、不可有服親之由、然是以不可入御輕服之沙汰歟、

〔後光嚴院御記〕貞治四年七月十一日丁卯、今日諒闇畢、〇去年七月光嚴崩大祓日也、〇中略申刻參議左近衞中將定興、左中辨平行知、率諸司行向朱雀門、儲幄屋黃昏間行知朝臣參、以言長申大祓了之由、□下侍中之云々先是殿南庇西一間借次間大床子間也供座、小筵二枚上、供高麗半帖、如常、御被向巽敷之、依吉方也、南庭橘樹東面二丈許設圍爐爲宮主座、

已及暗之間、階間左右供掌燈、主殿宮人左方立明、次朕出座、（紫文二藍直衣、紅打衣、同打衣、白生袴、巻纓、永季奉仕云々、）關白在共、（吉服衣冠下括巻纓、依神木事不出仕、今朝密々參候二間障子内、）先伺見御裝束之儀之處、無子細、但母屋簾上之、如常可垂歟之由仰之、關白諾、即令女孺令垂之、信兼朝臣捲簾、（關白祗候之上者、可候御簾歟、而關白今日非出仕之儀、不候御簾、然而雖非冠常内々祗候之上、衣冠有准據、有先例、尤可候也、）欲獻草鞋、信兼頻存可供之由歟、束帶御禊之時供之、誠雖爲同事、著直衣出晝御座之時不用之、仍仰不可供之由止之、經御前（平鋪如常鋪之、茵著鋪、硯筥不置之、）禊座、（向巽）信兼供贖物、右衛門佐資俊役供（散米）不如常、階膳入當間、可入次間、但御座向巽之間、入西第三間、自朕後方奏、經御座傍之條無便宜、又晝御座間、又御與柱間狹少、進退不宜、是非如何、於當間古賢少難之、然而可依便宜歟、次信兼持參大麻、朕懸手返賜之、次宮主著座、（向巽）内藏官人取裝束置宮主座前、（橡袍、半臂、同下重、柑子色、大口等也、裹生白單、居筥蓋、高坏、言長自御不申出行官人、）宮主白祝了退入、次撤裝束了、吉書可出御歟、但上卿未參之由奏下、強不可守次第、暑氣太無術、仰早速可然之由、此間關白於臺盤所見吉書、即又出座、（今度母屋簾如元上之、）官方行知參進奏之、（插文杖、留居西第三間欄邊、候氣色、予目之、稱唯、次間懸、於長押下捧進之、）予取之置座、退居之後取文見之、（開禮紙、無結緒、引左右端上下、移文於右、以後左右手披見、）手□□祭之置前、（文上爲南上、）行知進給文、下筥子結申、以左中將隆仲朝臣參奏覽、結申之儀等一如前、事了起座還入、次供晝御膳、陪膳隆仲朝臣、役供六位許也、五位不候、仍兼辨備申了由、即朕出若口、立著夕不著之、內侍鳴扇、陪膳同人云々、次女房不供御手水之由、不可及著之由仰之、今日供手水事、舊記無所見、然而從來爲毎日事之上、叶時宜歟、其後有殿上臺盤事、侍臣一兩、（六位等著之）

〔長享三年諒闇終記〕長享三年（○延徳元年）四月、女院（○去年四月、後土御門母后藤原信子崩、）諒闇終、　廿五日癸丑、大祓、於朱雀門被行之、參木左中將公夏卿、右中辨家幸朝臣、右大史安倍盛俊等參之、諒闇終大祓日時定也、上卿中御門大納言宣胤卿、職事頭中將實澄朝臣、（著非色裝束也、）右中辨家幸、左少辨宣秀、權少外記安倍盛俊、（并少内記、右大史等、）參陣之、上卿先有著陣、（大納言後□、）被見吉書、藏人方被下、藏人左少辨宣秀、（上卿宣也、）即起座、次更著陣奧座、頭中將來仰日時定事、次上卿移著、外記召官人令敷軾、次召左少辨宣秀仰勘文事、（即出床上、喚史仰之、）

之、頭中將出無名門取之、奏聞即返下、次上卿歸著陣座、外記如元置日時勘文、（入筥）於上卿前退、次上卿召辨宣秀下勘文、（辨下之）次上卿起座、

擇申諒闇終大祓日時事（陰陽寮）

今月廿五日癸丑　　時申

長享三年四月廿五日

陰陽頭安倍朝臣有宗

暫而被行御禊、其儀天皇（後土御門）御引直衣紅御袴）出御清涼殿、（東面庇也、御簾五ヶ間卷之、）次供御贖物、（出高坏二本、各折敷一、折敷八、以青皮作人形入之、一折敷入解繩紙白米云々、陪膳頭中將實澄朝臣、役送左少辨宣秀、）次宮主（藏人少副卜部兼致）獻大麻、（於清涼殿巽簀子渡之、頭中將役之、乍令持陪膳令撫御之後返給之、）次御禊畢、（於清涼殿東庭敷菅疊二枚、行水四持大麻、卜部兼致著座、其所鈍色御服、柑子色御袴等入宮蓋、居之[illegible]）次撤御贖物、（本役人役之）此間宮主退出、（于時雷鳴風雨甚）次天皇入御、（頭中將候御簾）暫而供晝御膳、（臺盤一脚、頭中將與藏人資直昇之、居晝御座南、又一脚資直與藏人宣賢昇之、居同所、其上兼居御膳、内膳奉膳調進之、内侍所女孺取次之、藏人頭已下内々居御膳之、）刻限藏人資直、於清涼殿南簀子申之、其詞云、（オモノ、長引音、）次出御、（自西戸）立御箸於御飯、即入御、（不抜御箸）次頭中將折箸末退、次以前御飯等撤之、（臺盤不撤之）次藏人宣賢（參也）同所申之、其同所資直、次内侍自簾中被鳴扇、（可有出御之時不鳴之、無出御之時鳴之、）

〔菅別記〕大永七年四月十四日辛酉、今日第二番酉日、賀茂祭日相當、○中略今度諒闇（○去年四月後柏原崩）傳奏中御門前大納言、兼日陰陽頭、諒闇終之日次、今日分勘定畢、雖然今日賀茂祭干支相當、縱雖祭令闕怠、於此日諒闇終之儀難被行之由、入道內府（逍遙院○藤原實隆）頻被申、近代祭退轉之上者、有何事哉之由、傳奏所存也、且又如此之日次延引不可然、日時勘文等及再往事、凡相憚法樣歟之條雖奏申、猶頻於今日者、不宜之由頻就被申入御延引治定畢、後聞諒闇終之日次、來廿日分令勘改畢云々、凡於凶事之儀者、陰陽寮不用儲日、只當日許勘進之故實也、前日有沙汰、今日不可用之儀歟、　廿日丁卯、傳聞今日諒闇終之日也、早旦先有陣議、上卿權中納言、奉行職事左中辨尹豐、日

時定大祓等事仰之、參議中院宰相中將、職事尹豐、外記史等向朱雀門代、(舊者三條也、今依無其所、二條邊計用云々、)有大祓云々、予刂午終許參內、人々少々被參、(近臣衆)長淳今日除服、爲吉曜間、卽著吉服參仕、凡者今日禁色雜袍如舊之陣仰詞已後、各雖可著參吉服之儀、旣以宣下分、今日著參儀近代連綿云々、仍長淳爲其分、甘露寺中納言、(伊長卿、)範久朝臣等、既著吉服參候畢、中御門前大納言祗候、今朝行事藏人、禁中御裝束改換歟、其儀可尋記、未終刻許、關白於直廬(小御所)被著束帶、(卷纓也、)被候鬼間、○中略刻限御服著御、(御物具也、)(卷纓、於御三間著御、冷泉入道就異體儀爲御三間也、)清涼殿孫廂、掃部寮敷御禊座、(半帖、)當御座北方有關白座、東庭敷宮主座葉薦等、當于座巽方(吉方云々)立白木棚一脚、鬼間前簀子行事官立白木棚一脚、其上居置人形散米御贖等、(三種也、)次出御、(○後奈良)先之關白出休所給、經東面簀子入當間、於母屋前(聊北方)立給、褰御簾給、卽出御、(不及御草鞋、)著御御禊座、(東面、)次關白北方著座、(有揖、)次供御贖物、(白木棚上所置之三種、行事官相寄、地下作立次第也、右中辨自一番取之、持參簀子上、○傍注云、如御次第、者、宮主著座以後、可供御贖也、如何、後聞頭辨存誤也云々、)頭辨取之持參御前置之、(人形、)次散米、(紙褁、)如前持參、又頭辨取之並置御前、次御贖物持參如前、次宮主獻大麻、左中辨取之、(自鬼間簀子取之持參、)頭辨持參御前、主上取御之卽返給、(懸御息歟、)頭辨取給之、持退授左中辨、尹豐取之返付宮主、宮主取之持副笏、進立東庭座前也、(不著座、向巽方立、皆不審也云々、)次行事以諸諒闇御服、(橡御袍、御袴二色、)納弘蓋、自御所方持來、(此蓋臨期之儀也、居大柳筥、可被出事也、弘蓋○今度始也、)自階上指出之、內藏寮官立地下取之、(作蓋取之、)置葉薦上退、次宮主懷中笏、持大麻二拜、後脫沓著座、次起座著沓、經座南方進寄白木棚下、置大麻於棚上、取出笏退去、次寮官取御服、(作弘蓋、)退、次撤御贖物、其儀如初供時、次頭辨參進、解卷纓奉令垂、次關白垂纓、(自身解之給、)次頭辨作候簀子、向座下方解纓、尹豐同前、次關白揖起座、令進候母屋前、(如初、)次主上入御、次關白入休所給、宮主內藏寮官人等、相具橡御衣持向河原也、次吉書內覽、(鬼間、先官方、右中辨、藏人方頭辨、)次書御座御劒御硯等、行事藏人橘以緒置之、下﨟藏人奉守之、次出御、卽奏吉書、官藏人方等如恒、次入御、次職事下吉書於上卿、(上卿權中納言、又著陣、)上卿卽下賜辨、次上卿召官人召辨、左中辨尹豐參進軾、仰禁色雜袍如舊之由、辨承上宣、退於腋陣召史仰之、史不及是非存之云々、

此事上卿職事共、大違失歟、先不承仰詞而仰之儀、未曾有也、又禁色雜袍事、可仰外記也、仰史之儀尤違失也、職事兩儀共、可相咨上卿次第也、不然者著軾令仰仰詞分可相談也、又禁色雜袍如舊之儀者、召外記可被仰之由相談而可退去也、上宣之儘、仰史之儀、職事之未練不可過之歟、

次御膳晝御膳、數刻遲々、馬頭盤依見失、刀自等相尋之云々、陪膳頭辨、役送職事六位藏人等也、兼立大床子二脚也、內膳正(五位束帶)御膳持參、御膳唐櫃、於臺盤所前庭一色宛取出之、內膳正立高遣戶沓脫上、取傳御膳、役送之人々取之、自鬼間入、於清涼殿、於大床子東邊渡陪膳、悉居並後申出御也、次出御、(此時御單直衣生御袴也、非御物具、文龜度、爲如此也、登居御大床子上也、)陪膳頭辨、(御前東方一箇間相退著圓座上也、)許、御著後下御大床子入御、次頭辨進寄次第撤畢、役送人如前、(其路又鬼間也、如初、)次夕御膳、陪膳四條中將隆重朝臣也、役送六位藏人三人(以緖氏直、在忠、)也、其儀同前居畢、隆重朝臣退著圓座、今度無出御、暫而隆重朝臣、進寄撤御膳、(內侍定鳴扇歟、)被撤之次第同前、次於常御所有御祓、(六本立也、)此後近習輩有召出、天酌如常、各退出之時、以勸修寺大納言、今日之儀珍重之由各申分、卽以女房被申入、既帶曉鐘歸宅、今日內々不祗候人々、帥卿、西辻中納言、萬里小路中納言、源宰相中將範遠朝臣等也、皆是凶服衆也、今日依有衰日等各不除服歟、以吉日可令除服之故也、

〔實久卿記〕弘化四年二月廿四日甲戌、今日諒闇(○去年二月仁孝崩、)了大祓日時定、上卿源大納言、(基)辨俊克朝臣、奉行愛長朝臣、大祓來廿八日也、(卯刻、)亦今日被復中殿了、申刻計退出、　廿八日戊寅、自去夜伺候、今日諒闇終大祓也、卯終刻、於朱雀門代(建禮門也、)被行之、參議新宰相、(聰)辨光愛、外記史以下參行、辰終刻事了、未刻御禊出御、如先々、(兩役諸候、)次於御座有吉書御覽、官方恭光朝臣、藏人方愛長朝臣、上卿日野中納言、(隆)次供大床子御膳、(今日二ヶ度候之、)戌刻退出、

〔日本紀略(四村上)〕天德元年六月十日乙丑、故康子內親王(○醍醐皇女、)家別當掃部頭藤原在滋、於待賢門付外記申云、今日親王葬送也、(○中略)今日以後三箇日、不可有音樂之由仰內豎畢、

〔日本紀略村上四〕天德二年五月十四日甲午、奏孚子內親王〇宇多皇女薨由、三箇日不可音奏之由仰了、

〔日本紀略一條十一〕寬弘八年六月廿二日甲子、午刻太上皇〇一條崩一條院中殿、春秋三十二、　七月八日己卯、右大臣〇藤原顯光著仗座、〇中略仰敎賴云、今日以後、五箇日不可音奏、又素服擧哀可停止、

〔禁秘御抄下〕一廢朝。

廢朝者、諸司政如恒、天子一人不臨朝政、〇中略世大事、火事、薨奏時有之、依事淺深、或五箇日、或三箇日也、廢朝三箇日ト被仰ヌレバ、止音奏警蹕、禁中無物音、垂清涼殿御簾、第四日可上御簾、而當惡日無沙汰、及數日、第四日上御簾例有之歟、但不可爲例事也、寬治八年〇嘉保元年陽明門院〇後朱雀后禎子內親王御事、二月十日奏遺令、廢朝固關、依上東門院〇一條后藤原彰子例三箇日也、而十二日御衰日復日也、十三日凶會復日也、仍十四日朝被上御簾、又同年顯房公薨五日薨、八日奏、自此日止音奏警蹕帝（堀河）外祖而十日十一日共復日也、仍十二日雖爲凶會日、強不忌、則上御簾畢、近正治、刑部卿三位〇土御門外祖母藤原範子卒時、被用被例、自餘或不然、殊御衰日重日復日忌、凶會九坎日不忌、如此事在時儀也、彼顯房公時、八日警固、十四日解陣也、雖可爲三箇日、依避日次、十二日忩上御簾、雖爲凶會日、及數箇日有憚之故也、於警固者、雖及數ヶ日、依吉日及十四日、或記如此、郁芳門院〇白河皇女媞子內親王、堀河御准母准母儀人也、仍殊重、五箇日廢朝、警固固關如恒、

〔基量卿記〕貞享三年閏三月五日、參內、大聖寺宮當今（靈元）御妹今朝薨御、從妙門愛宕迄被不聞之間、各相談令言上了者、未及親王宣下之間、廢朝之義、無其沙汰、雖然自今日宮中三箇日、鐘大鼓等可停止由被仰出、其通申付了、

〔基量卿記〕元祿九年十一月廿九日、參院、淸水谷大納言同參、廢朝〇此月十日明正崩至今日五箇日相濟、禁中被上御格子、自今日女中敲手、幷淸所呼鐘令時之由也、洞中又同前、貞享後西院之御時、廢朝濟之日ヨリ如此、議奏所存御中陰中停止之由存之、東福門院、後水尾院御時者、依諒闇御中陰濟之刻、音奏

警蹕如元之由陣官下有之、後西院御時者、非諒闇之間、廢朝濟之日ヨリ、女中打手、鐃等打之間、右之子細、從竹內三品議奏申出候處、存違之由也、不可說々々々、

一仙洞(○靈元)御膳、從今宵供魚味云々、

〔兼胤卿記〕寶暦四年五月廿七日、兩人參內、附右大將言上、前住宮、去廿四日薨去之事、(屆書ニ附之、依攝政之命、今夜言上之由申入、)依右自今日三箇日、宮中可被停物音哉相窺、須臾被聞食了、從今日三箇日、宮中被止物音之由被仰出之由、右大將被示了、

〔兼胤卿記〕安永五年五月廿二日、申刻過、中宮寺宮、不叶御養生薨去之由、家司松崎內匠書付差出、關白殿(○近衞內前)御退朝、女御御方(江)御參之間、兩人御局へ參、關白殿へ、右書付入御覽、令披露、自今日三箇日、宮中可被停物音哉、可伺之由、且於院中、御同樣ニ可伺之由申入、參內附冷泉薨去之事、可被停物音之事申入、則被聞召、自今日三箇日、宮中被停物音之由被仰出、

兩人參洞(○後櫻町)中宮寺宮、今日薨去、宮中被停物音、院中も可被止物音哉、附院傳奏窺之、被聞召、被止物音之段被仰出了、

〔實久卿記〕嘉永六年六月三十日癸卯、大樹公御妹、(水戸故齊脩卿簾中)去廿六日薨去、以勾當掌侍取計、自今日三箇日被止物音了、

〔後成恩寺關白諒闇記〕諒闇中、拜賀不舞踏、家例或二拜、山槐記說也、嘉承御卽位日、法性寺殿中將御拜賀、(吉服舞踏)有殿暦云、諒闇中、於內無舞踏、然而依院仰也云々、是別段事也、

〔中右記〕嘉承二年十月十五日丁卯、裏書云、諒闇時、申慶賀人、可有拜哉否事、人々案不同也、右大辨時範云、不可拜、雖參院殿下、皆不可拜者、藏人頭爲房云、於內者不可拜、只奏事由許也、院拜舞踏如例、殿下再拜、一夜參慶作法如此、是西宮記雜類路說之定也者、可尋見事也、

〔長秋記〕大治四年九月十六日、今日平野大原野行幸日時始、行事所上卿治部卿、行事長實、辨師俊、禮

部補院別當、可奏慶否、可拜舞否、〇此年七月白河崩權大納言云、可有拜、雅定卿云、不可有、下官〇師時云、不可有禮、中云、院〇鳥羽已除錫紵給、御心喪之間行無拜哉、下官云、諒闇間內裏無拜、凡人家主重服之時、雖向其家不拜、依此等例不可拜、猶無甘心之氣、遂以藏人奏慶拜舞、不知其由、

〔康富記〕明德四年八月十六日己丑、中院中納言通宣卿、被申拜賀、吉服舞踏如恒、諒闇中、拜賀被舞踏之條先規也、但拜賀初度人、以私儀舞踏有其例、仍今度以別儀有舞踏云々、

〔後成恩寺關白諒闇記〕諒闇中警蹕事

文永九年四月愚曆云、十日、今日被仰音奏警蹕事云々、〇此年二月後嵯峨崩隨身追前、車副警蹕等如恒、昨日依被仰音奏警蹕事也、雖先規不分明、理之在之上、養和信範記云、今日殿下御參內、警蹕前聲如常、是昨日被仰音奏警蹕之故也、蓋先例也云々、

〔基量卿記〕延寶六年六月廿九日、參內、先從右府〇一條兼輝有召、音奏警蹕事、一季之內、被停止之事如何、〇此月十五日後水尾后德川和子崩若解陣之刻、音奏如元可被仰下歟、先例還御之後、或十日或廿日之內有宣下、然共當時陣宣下度々要脚不足之間、解陣刻可被仰歟事、〇中略右府勘例一紙、今日禁裏へ進上、〇中略

音奏警蹕事

倚廬還御後、音奏警蹕被宣下也、被上御簾、此後隨身追前、車副警蹕等如恒、明德度、五月廿三日還御、同六月廿四日音奏警蹕事被宣下、被上御簾、

右今日以菊亭進上了　七月廿二日、有召午刻參內、以菊亭被仰出勅問事也、

一自先日音奏警蹕被停止之了、如元之宣下、近日可有也、陣宣下可然歟、消息ニテモ不苦事歟之由、

左府〇近衛基熙被申曰、音奏警蹕事、凡重事也、若要脚不調者、無是非候歟、要脚無子細候者、陣宣下可然存候、其上消息宣下事、先例唯今無所見候、

右府曰、左府言上之趣、先例陣宣下事、雖今消息宣下事、其類繁多之上ハ、消息ニテモ子細有間

敢候歟、音奏警蹕消息宣下、先例無所見由也、

廿九日、陰陽頭來、音奏警蹕陣儀事日時申付了、　卅日、今日獻上日時勘文、　八月二日、參內、大佛御文庫へ可參也、依之有被仰下事也、其次仰云、音奏警蹕仰詞有御所見、此上は可音奏と可仰由仰也、然而畏退了、○中略又外記來持參宣旨寫、其刻申云、音奏仰詞、貞治度可音奏と被仰候由、師茂記慥所見由、所詮仰詞事、决定可音奏由歟、○中略

停止音奏、

正二位行權大納言藤原朝臣熙房宣、奉勅依被東福門院葬、宜令停止音奏警蹕者、

延寶六年七月廿七日　大外記兼掃部頭造酒正中原朝臣師庸奉

四日、參內請取也、可音奏由宣下陣儀、可爲六日可申沙汰由、以菊亭被仰出畏承了、　六日、未下刻參內、○中略刻限上卿著座奥被移裾了間、予出陣、○中略次以官人召外記、少外記中原□□出小庭、上卿自後著軾、上卿仰云、從今日可音奏、外記唯稱退入、

〔二水記〕大永六年五月三日

凶事條々○中略

一眉事、崩御○後柏原之後、新主御方○後奈良令揮御了、此事先例如何、明應之度事、女中皆失念云々、今度先被拭了、新主渡御日有御眉、渡御倚廬之後、又被拭之、還御本殿之時同之、亮陰中無御眉云々、女中眉終不拭之、崩御之後、皆以淡黛也、若殿上人同之、

〔菅別記〕大永六年五月十七日己亥、今日自大典侍局、御眉事被尋下、明應度倚廬以後、猶被拭哉否儀也、御文、

はれま、まちえ候心ちして、おなじ御事におしはかりまゐらせ候、さては御所さまの御まゆの事にて候、いろの御所のほどは、もとより御まゆ候はず、すぐるりやういん中、御つくり候つる

さ申候人も候、御つくり候はぬと申候人も候、しせん覺えまゐらせ候はぬやらん、いせんは一條殿御しよくにて御いり候つる程に、じせんき、まいらせ候、被遊候事もやと尋まいらせ候云々、〈已下略〉予御返事申云、

御眉事被尋下候、明應度者、十二月十一日倚廬渡御、同廿三日本殿還御候、卽諒闇御服著御候、御眉之事、一廾間猶可被拭哉否、被尋諸卿候、頭辨出殿上相談之時、侍從大納言日野故町廣光卿等、凶事之冠服著御之上者、御眉可被拭之條、可宜之由被申之間被拭畢、凡諒闇、朝廷禮儀之一也、雖御孝行猶以禮儀之姿爲簡要之間、諸事無聊爾之樣御申可然之趣、假名〈御消息〉書載之申入了、仍于今令被拭畢、

〔日本紀略〈五冷泉〉〕康保四年五月廿五日癸丑、巳時、天皇〈○村上、冷泉御父、〉崩於淸涼殿、九月四日己丑、以三品昌子內親王爲皇后、故朱雀院皇女、卽有宮司除目、

〔中右記〕嘉承二年十一月廿九日庚辰、今夕前齋院〈令子〉立后宣旨被下、是准母后儀、先日令入內給、御東對也、〈○此年七月堀河崩、中略、〉

〈裏書云〉諒闇時立后例

昌子內親王〈康保四年九月四日立、朱雀院女、冷泉院后、卽位以前、〉

中宮藤姸子〈寬弘九年(長和元年)二月十四日立、御堂(藤原道長)中女、三條院后、卽位以後、〉

皇后藤娍子〈同年四月廿七日立、大納言濟時女、三條院后、同前、〉

件三后、諒闇之中立后、但非卽位日、

〔園太曆〕延文二年閏七月廿三日、今朝聞、廣義門院〈○後伏見后藤原寧子〉去夜御頓死云々、廿八日、甘露寺前中納言入來、謁之、今年始參內、次來臨之由談之、雜談之次、依女院御事、奏事三七日始〈○始一本作如〉議定卅箇日被止之云々、

仲房卿談遺令奏次第事〈注進之〉

先日面上畏入候、此間旁可參申入候、抑來月二日、可被奏前廣義門院遺令、可奉行之由被仰下候、御次第候者、可被借下候、固關警固廢朝、可爲同日候、委細被注下候者畏入候、他事期參拜候、仲房誠恐頓首謹言、

後七月廿九日　仲房上

丹後守殿

遺詔奏次第

上卿著陣（移端座、令敷軾、）

外記參著軾、申遺詔旨、（去某日、某院崩給、遺詔使某官某朝臣申云、素服擧哀、任喪司、國忌山陵、荷前可從停止、但臨其期、本詞依時被申下、）

次上卿令官人招職事、奏遺詔旨、（其詞如外記申、）

次職事歸出仰云、某院遺詔旨聞食、自今日廢朝何箇日、停止音奏警蹕、固關警固依例行へ、

次上卿徵唯、召外記、仰如職事仰詞、

次令官人召外記、仰云、某院崩給、素服擧哀令停止、

次令官人召内豎、内豎參進、仰司々可召之由、

次六府參列小庭、爲夜陰之時、上卿居向奧方云、誰、司々稱之、上卿仰云、固衞リ仕レ、六府稱唯退出、

次上卿召辨仰云、自今日仰三關固關、

辨退去、上卿令撤軾退出、

八月二日、被奏前廣義門院遺令、上卿權中納言仲房卿、參著右仗座、（直端、）令官人敷軾、本家使左近權中將藤原隆右朝臣、參右衞門陣外、（今度依雨儀立門下、）大外記出迎、隆右申云、前廣義門院遺令云、素服擧哀、山陵國忌可被停止、師茂參軾申此子細、上卿目師茂稱唯退、次上卿招奉行職事藏人次官行知奏聞、則職事歸出、軾仰聞食之由、此次仰廢朝以下事、次上卿召大外記師茂仰云、聞食ツ、此次仰云、任大宮院例、

廢朝幷警固事可行、師茂稱唯、退出門外位、仰勅答於本家使、其後使退出、自今日五箇日、可止音奏警蹕之由可召仰内豎之處、不參之間不及下知、次上卿召内豎、不參之間以官人六府可進之由被仰之、次諸衞左近將監三善基統、殿上六位、左衞門尉代式部少丞藤原懷國、殿上六位、依補日上臈、懷國列基統上歟、尉代一人、以上三人參列小庭、上卿南面居直、以笏被叩疊、次諸衞退、次上卿辨不參之間、召左大夫量實於軾、仰云、依前廣義門院崩給、素服擧哀停止、三關可付國司者、量實稱唯退、次上卿撤軾退出、

〔大外記師茂記〕貞治三年七月十一日癸酉、今日四條中納言隆家卿、進狀於局務云、昨日參伏見殿、被申趣且申入了、諒闇御中陰間、〇此月七日光嚴崩被行事等注賜了、爲悅候、服假人諒闇中出仕輩不審候、以便宜注賜候哉、且件人裝束など、所見候得ば同可注賜候、今夕遺詔奏必定候哉、參らせ候、隆家返事注左、

昨日御參伏見殿之由、承悅仕候、師茂參事、且御披露殊畏存候、服假人諒闇中、出仕例、保元參議朝隆卿右大辨母服、永萬六位史廣房父服出仕候歟、但裝束事無所見候、恐恨候、以諸記可被決候哉、今夕遺詔奏事、只今御教書到來候、定被行候歟、每事可參入言上候、師茂恐々謹言、

七月十一日　師茂文

〔基量卿記〕元祿九年十一月廿三日、大炊御門右大臣〇經光伯母之輕服至廿六日暇濟也、然者御中陰〇此月十日明正崩之間著座之事、除服以前出現如何、又其身觸穢之間、御中陰之御法事之事、除服宣下雖無之、出仕不有苦歟、其身爲穢中之間、除服申上事、先例如何、觀應園太暦例、可被准用歟之事、　廿五日、一條前關白申詞、大炊御門前右大臣爲御中陰御法事之間、除服宣下雖無之、其身爲觸穢之間、爲著座出現事、當時著輕服衣人雖無之、輕服衣之制、古來之定法也、然者著輕服人、除服宣下無之、爲自分改吉服出仕之事如何、又著輕服著座之事も本所之輩ゝ可相混、尤此度右大臣家熙醍醐大納言、輕服候へども、是は可爲各別、明正院御甥也、依公私可有差別由也、又觸穢之輩別勅之義、先例有間敷候、自院別勅宣下

事、是又不可有之、所詮被止大炊御門事、右大臣一人著座、參勤可然歟、尤所勞候ハヽ、菊亭前右大臣、三條前内府、雖何時被仰付可然候、於觀應例別勅之間難准用候、

〔季連宿禰記〕元祿九年十一月十日癸亥、今日本院〈〇明正〉崩御云々、　廿日癸酉、黃昏四位大外記入來被言談、今日於權大納言新嘗祭延引例之事承之、又一昨日、大炊御門前右府殿折紙到來、此事引考無所見之間、只今向彼亭申事由云々、又被語云、〈〇中略〉今度無音奏警蹕之事、是不叶道理、可爲何樣哉之由、同被申云々、　廿一日甲戌、依使者參正親町大納言、以雜掌西池被命云、就遺詔奏事、音奏警蹕禁作樂宣旨者、雖非諒闇有之事歟、但作宣旨、限諒闇哉云々、音奏警蹕之事、當座不覺悟、禁作樂者、宣旨文言一排之樣覺悟、然者禁作樂者、可限諒陰歟、然而不博勘之故、難憶申之旨申了、仍延寶六東福門院〈〇後水尾后徳川和子〉諒闇之時、禁作樂宣旨案、寫覽之了、　廿五日、一遺詔之詞、何樣歟不知之、音奏警蹕之事、尋申頭左中辨之處、今度無此仰詞云々、

〔丹波賴庸記〕寶永七年二月廿五日、午刻藤井戶部來駕、談諸事、臺盤所、近世服者不入、諒闇之間如何、戶部答曰、諒闇之間、出入不可子細歟云々、

〔桃園院御凶事記〕寶曆十二年八月二日、亥刻頃、賴尙より廻狀參如左、

觸穢中輕服者、雖假之内不及引籠出仕、但於有地穢者引籠、穢之限之後、不及除服出仕宣下、押而出仕、重服者、於在官之人者、觸穢終之後、除服出仕復任宣下可有之事、〈自議奏可内意之間、其後職事江披露可被賴、押而披露〉〈被賴間數事、〉但於散位之人者、五旬日數終已後不及宣下、押而出仕可有之、且輕服者觸穢之後、假日數かゝり候はゞ、觸穢中出仕、觸穢終之後引籠、是亦自議奏内意之後、職事江披露可被賴事、

右別紙之通、差次殿へ到來候、明朝早々頭中將殿へ御返可然存候也、

八月二日　賴尙

新藏人殿

喪中遇神事

〔北山抄 一正月〕元日拜天地四方事天暦諒闇年、有御拜云々、此事有疑、九條大臣著吉服拜之、見彼私記、

〔江家次第 一正月〕四方拜事

諒闇設座不拜延久五年諒闇無御拜、依右大臣被申也、寬德同之、

〔北山抄 二一月〕上申日春日祭事

諒闇年、舞人袴不摺、舊例或摺之云々、

〔江家次第 十十一月〕鎭魂祭

依諒闇不用歌舞元慶五、十一、廿二

〔續日本紀 十九孝謙〕天平勝寶八歲十一月丁卯、廢新嘗會、以諒闇〇此年五月聖武崩故也、檢神祇官記、是年於神祇官曹司行新嘗之事矣、

〔續日本紀 四十桓武〕延暦九年六月戊申、於神祇官曹司行神今食之事、先是頻屬國哀、諒闇〇此年閏三月皇后藤原乙牟漏崩未終、故避內裏而於外設焉、 九月甲辰、〇是月無甲辰、類聚國史、日本紀略並作甲戌、當從、甲戌十一日也、奉伊勢大神宮相嘗幣帛、常年天皇御大極殿、遙拜而奉、而緣在諒闇不行常儀、故以幣帛直付使者矣、 十一月己卯、是日當新嘗、而爲諒闇未終、於神祇官行其事矣、

〔三代實錄 一清和〕天安二年十一月三日庚申、停平野〇平野原作大原野、今據一本改、春日等祭焉、〇此年八月文德崩 廿日丁丑、停園韓神祭、自此之後、鎭魂新嘗等諸祭皆停止、

〔三代實錄 二十清和〕貞觀十三年十一月十七日己丑、停園韓神祭、 十八日庚寅、停鎭魂祭、 十九日辛卯、停新嘗會、向上平野春日梅宮大原野等祭、並隨停止、以太皇太后〇仁明后藤原順子崩也、 十二月十三日甲寅、於宮內省修鎭魂祭、東宮鎭魂同日行之、以太皇太后崩故、十一月不修此祭、今日行之、

〔三代實錄 三十五陽成〕元慶三年四月庚申朔、停平野松尾等祭、及賜宴侍臣之儀、以太皇太后〇淳和后正子內親王崩也、 二日辛酉、停梅宮祭、 十四日癸酉、停賀茂祭、向上諸神祭祀、並從停止、緣太皇太后崩也、

〔三代實錄 三十九陽成〕元慶五年二月十一日己丑、是夜園韓神祭如常不歌、緣諒闇〇去年十二月四日清和崩也、 四

月廿日丁酉、賀茂祭、內藏權頭從五位上兼行讚岐介良岑朝臣晨直、奉承祝詞、向社宣旨、其祝詞尾曰、辭別申久、前年爾進禮留齋王波、重喪爾遭太留依天退出志女天岐、今須波諒闇波天天乃後占定天進天、其間波皇我朝廷乎平介久安良介久幸賜比護賜倍止申賜波止久申、

〔三代實錄 四十陽成〕元慶五年九月十一日丙辰、遣散位從五位上興我王、神祇大副從五位上大中臣朝臣有本等、奉幣於伊勢大神宮、發自神祇官、諒闇也、　十一月十二日丙辰、遣散位從五位上大中臣朝臣有本等、奉幣於大神宮、發自神祇官、諒闇也、　廿二日丙寅、鎭魂祭如常、　廿三日丁卯、新嘗祭、所司供祭如常、公卿以下諸衞府舍人已上不卜、但供奉神事諸司七十二人卜食、(○中略)准據承和七九兩年諒闇之例也、　廿四日戊辰、停豐樂之宴、供祭所司、向宮內省、解齋如常、

〔日本紀略 一醍醐〕昌泰三年四月十六日癸酉、停賀茂祭、依皇太后(○宇多母后班子女王)之崩也、

〔日本紀略 醍醐〕延喜七年十一月廿四日丁酉、停賀茂臨時祭、依列子(○醍醐外祖母)事也、

〔權記〕長保元年十二月五日甲寅、傳大夫消息云、后宮者(○一條后藤原定子)朔日子了許崩給、須早令奏其由、而依遺令避日次之間、延及于今、(○中略)申刻左大臣(○藤原道長)被奏外記勘文二通、

大外記滋野朝臣善言勘申、依皇后崩神事停止例事、

貞觀十三年九月廿八日、太皇太后崩、同十一月停園韓神鎭魂新嘗平野春日梅宮大原野等祭、以太皇太后崩也者、同廿九日、大祓於建禮門前者、元慶三年三月廿三日太皇太后崩、同四月停平野松尾梅宮廣瀨龍田賀茂祭等、緣太皇太后崩也者、但至于貞觀十三年、月次神今食鎭魂祭等、十二月被行者、

〔左經記〕長元元年(○萬壽五年)正月十二日戊申、關白殿(○藤原賴通)仰云、召大外記賴隆眞人、可問御心喪(○去年十二月、後一條外祖父藤原道長薨、)之間、御齋會內論議有無之例者、則召賴隆傳仰旨、申云、三代實錄云、貞觀十四年正月十四日、大極殿齋講了、僧綱引名僧參內裏、論議如常、施被罷者、同日外記日記云、八省最勝會ノ宣

命如常、但音樂不調、大納言已下參如例、於内裏不召論議、(去年九月祖母太后崩、今年正月節會停止、)仍又十七日射禮停止云々、寛平三年正月十三日、太政大臣薨、(昭宣公)十四日御齋會了無音樂、(依太政大臣薨也)又停止論議者、日記國史等所注不定也、但寛平例如此、以此由可申者、仰云、昭宣公、是雖非外祖父依薨日近所被止歟、於當時者、已爲外祖父之中、又御心喪之間也、猶被停止宜歟、但又云、相定可一定也、頭中將可來之由可相示者、　十三日己酉、令頭中將(顯基)案内左府(○藤原頼通)給云、内論議有歟、爲當如何者、被申云、無止之度御心喪也、猶准寛平例被止宜歟者、殿仰云、内々奏事由可令仰下者、但馬頭能通朝臣令引御念佛僧等、非時料絹云々、　十四日庚戌、御齋會内論義、依御心喪之間停止云々、仍布施堂事了、僧俗退出云々、抑今日無音樂、但餘事如例云々、今朝大外記賴隆眞人、令余申關白殿云、官政始日時、先々奉御氣色令勘申者也、隨仰令勘申者、被仰云、任先々例可勘申也者、傳聞依貞觀外記日記幷寛平例可停止内論義之由、右府(○藤原實資)奉仰、召仰右少辨家經、令仰下綱所云々、又召仰外記云々、

〔春記〕長暦三年十一月三日庚寅、今夜調樂初也、抑康保元年十月一日御記云、今日依旬事出御南殿、而依故中宮心喪近不擧音樂、中宮四月廿九日崩給、御心喪五六七合三ヶ月也、已隔二ヶ月(八九)又同十月廿五日御記云、今日初於樂所調賀茂臨時祭歌舞、但無唱歌、參入掖陣下者、案此御記似有故歟、何況今月御心喪内(○此月八日、後朱雀后藤原嫄子崩、)也、調樂參入之間唱歌、是臨時興事也、雨濕之時無此事、非指事歟、今朝右府(○藤原實資)被命此由也、仍招經成示此旨等、内々可奏聞之由事也、小時經成云、以此旨奏聞、被覽御記之處果而然、以此旨被仰關白殿(○藤原頼通)早可停止之由被返奏了者、夜深予(○藤原資房)候殿上、良久調樂了、舞人陪從等無唱歌、直參入掖陣下、是如愚案歟、　九日丙申、今日春日祭也、(○中略)昨日督殿命云、祭使所有歌舞如恒、御心喪月内、猶有憚歟如何、須申關白也、而依勘當不能請益云々、不給御馬事、萬人所不甘心也云々、此度不送摺袴、其故者還饗日、被宛上達部殿上人饗、仍不奉摺袴也、件饗久頼所語付也、入夜參内、定親云、今日平野祭也、可奏宣命上卿事、奉仰申關白、依被命召上卿、右衞門

督藤中納言、申障不參入、仍左衛門督參入、只被奏宣命已了、今日發歌笛聲、尤無便事也、御心喪間不可然歟、此由見舊記云々、　十五日壬寅、御前試也、仰云、御前試事、心喪內可有哉否如何、先例多其停止之例、只天曆三年母后煩給之時、并故入道大相國病惱之時被停止、件事類神事心喪、是吾心也、神事之間著尋常衣、即仍猶可有件試歟之由可示關白者、即參入、以隆光朝臣令申此由、被報云、件是無止之神事也、早被行尤可吉者、予即歸參奏此旨了、仰云、此旨可仰行事藏人者、予仰藏人章祐了、○中略明日神態、於神祇官可行之由奏事由、仰右大臣了、以書狀令申也、返事云、權左中辨經長朝臣候內、其使々御者、即仰了、件事先日申關白所行也、是恒例、　十六日癸卯、神態於神祇官可行事、昨日依仰仰右大臣已了、又無御覽童女之事、依御心喪月也、又是臨時事也、先代無此事、圓融院御末時之例云々、　廿日丁未、臨時祭試樂日也、御心喪內可有試樂哉否、先例或他事等指合之間無此事、何况於御心喪月如何、此由先日被問仰關白、而被報申云、是神事也、早可被行也、　廿二日己酉、賀茂臨時祭、有御神樂事、曉更參上、○中略主上○後朱雀早御裝束了、而使未參入、奇恠事也、已及午四點、未聞之事也、仰云、今夜御神樂可有哉否、御心喪之內、件事若臨時舞中者可停止、猶又寄神事者、不可停止歟、降雨并御物忌之時无此事、但中院神事又如之、以此等旨可示關白、又及末時使等不參入之事同可示者、予參關白殿、以人令申此由、是例事也、跡追人不造御前之故也、已無面目歟、報云、御神樂事、早可令行給、○下略

〔水左記〕承保四年九月二日己酉、入夜勘解由次官知綱爲殿御使來、雖爲物忌、予○源俊房於東侍所相遇、御消息云、主上明日可令修御燈御祓給也、而依一品宮良子御喪有御服暇、前々如此御服暇之時、御燈御祓有無、甚以不審也、但後朱雀院御時長曆三年八月廿八日中宮嫄子崩、其年九月御燈御祓被修歟如何、若故殿御記中被注置者可被尋給也者、引見件御記之處、彼年九月三日有御祓之由被注載、其由注別紙奉了、

〔殿曆〕嘉承三年正月一日壬子、寅刻四方拜如常、但依諒闇、寬德度無四方拜由、先二條殿記ニ見、雖然延久六年承保元年件年大殿御記云、四方拜如常者、仍

付彼例、余(藤原忠實)今度拜之、九條殿天曆度有四方拜、但著吉服由見御記、仍所拜也、

〔中右記〕永久二年十月七日戊申、早旦依召參院、雖御物忌候殿上、民部卿(俊)大藏卿(爲)衆參入、頃而殿下令參給、(皆直衣)頭辨(實行)覽諸道勘文、(外記明經記傳儒宗在頁朝臣、明法、)是中宮(○堀河后篤子内親王)崩後雜事、主上(○鳥羽)御錫紵有無日數等事也、内々出院殿上被相定也、(○中略)仰云、今月賀茂八幡行幸、幷伊勢公卿勅使被遂如何、被問大外記、申云、皇后崩月內、件兩事殊所不見也、但皇后宮馨子、寬治六年九月五日崩、十一日例幣延引、例事猶延引、況於臨時之使哉、仰云、然者御幸、伊勢勅使、可在來月歟、但承保元年十月三日上東門院崩給、彼月內有大嘗會御禊、依彼例者、何此月內無大神事哉、彼時無御錫紵也、大嘗會例、不似常事、猶行幸幷伊勢勅使被延可宜者、又仰云、來月廿九日、可有新御願供養也、而皇后宮欲有行啓、但御服三ヶ月之內也、可有憚歟、人々被申云、可有憚也、於女房打出、御服之中美服定無便歟、奉於主上院者以日易月、御除服以後也、不可有憚、於皇后宮者可有憚也、仰云、然者皇后不可渡給者、又來十一月春日祭、皇后宮使可被止者、又仰云、今年五節之間童御覽有無如何、人々被申云、於童御覽者、臨時遊興、如此時多被止也、仍被止可宜歟、仰云、然者不可有御覽、

〔長秋記〕大治五年六月廿九日己亥、自別當許送消息、院(○鳥羽、去年七月白河崩、)六月祓可有否、件旨不分明也、若天永度事記置哉、然者可注送者、於諸宮夜折者、准御贖物例被行云々、予(○源師時)答云々、於夜折其由所見也、於御祓事、明日見日記等可令申者、　卅日庚子、見寬德延久天永等記、諒闇年六月祓事無所見、於凡人不修之由見兩相府御日記、仍以此旨示別當許畢、六月祓出自輿宴云々、(○中略)後日別當被示云、院六月祓停止、前例依無所見也、

〔後中記〕仁治三年正月十一日甲午、今日著布衣參一條殿、大府卿同參會、暫言談、(○中略)予(○藤原資賴)以事次和讒申云、諒闇之時、(○此月九日四條崩)實所女官不昇御殿、況於當時之儀者、殊可有禁斷、輙又不可出入他門之由、可有沙汰歟、則以頭辨被申殿下(○藤原兼經)畢、凡今度儀非短慮之所覃、昨日有北首之儀云々、

〔百一錄〕寶永七年四月十四日、賀茂祭御使上冷泉中將、爲久坊城黄門、裏松參向、傳奏也、本陪從九人、依諒闇、○去年十二月東山崩於禁庭東遊等無之、

〔實久卿記〕弘化四年正月一日辛巳、今曉内裏四方拜、吉御裝束被設御座、無出御、諒闇中、兼日無出御旨被仰下、仍一儀無之、○去年二月仁孝崩

〔玉海〕安元二年十一月十九日庚申、吉田祭也、依亮闇、○此年七月六條崩不奉幣、遣職事、勾當源定季一人、於河原行由祓、陰陽師漏刻博士賀茂憲成、　廿日辛未、今日供恒例四季御供於春日社、又奉幣帛、諒闇中奉幣儀、先例有憚、仍只付幣物於社司也、自今月、每月可奉遣也、依吉日今日獻之、又女房來、廿三日密々詣春日社、無爲可遂之由爲祈申、又以奉幣、仍兩人共修祓、淸信季長朝臣、役國行、共吉服、依密々布衣、余衣冠也、　三年○治承元年正月一日壬寅、寅刻拜天地四方如常、行事勾當源定季、吉服、夜信季書進、次第如例、去諒闇年無四方拜之由、見寛德記等、二東及土記○中略傳聞内裏雖備御裝束、無御拜云々、是又先例也、　二月一日辛未、依諒闇不奉幣於春日、去年十一月今日修由祓、是因殿曆也、而嘉承三年二月同御記、祭當日有由祓、倩案事理、無奉幣、由祓須有當日歟、仍隨彼三年例、今日不行由祓、然而尙神事也、是又先例也、　廿二日壬辰、今日欲被立九社幣、而依幣物不具延引、被定日時、上卿三條大納言實房、辨右中辨經房兼光云々、關白○藤原基房著於直衣被候、余○藤原兼實著亮闇服所參入也、雖奉幣、致齋日非執政及行事之人、著亮闇服祗候、是先例也、抑亮闇年雖被立官幣、私不奉幣、但付幣物於社司、不憚之、是内内事也、而古來或又奉幣云々如何、此事問申關白、被奏云、依著亮闇服憚歟、近代多不奉幣申歟、

〔玉海〕治承五年三月十二日戊子、午刻權右中將光雅爲攝政○藤原基通使來、余○藤原兼實呼簾前、廣庇逢之、光雅云、造興福寺之間事條々、可被計仰之由所仰也者、○中略

一炎災事、任先例可被申三社也、而亮闇中諸社祭不被立幣、此條如何、

答云、此事難題也、凡亮闇之間、不被立氏社幣、未知其故、公家已有奉幣、臣家何憚哉、然而行來已尙、忽難改舊規歟、至于臨時大事者不可默止事歟、但都可被憚奉幣者、又可被發遣之由難申歟、進退

惟谷、思慮已迷、諒闇中奉幣、若有上古之例者、可被准據歟、已爲流例、然者雖不被在、又非疎神事之儀歟、猶訪有識之士可被左右也、

〔北山抄一正月〕八日御齋會始事

貞觀元年、不擧音樂、遏密也、國史近例諒闇年、依供佛事、或不止之、可有議歟、延長六年正月六日宣旨、依承和六年例、停節會樂、但御齋會猶可擧者、彼承和例、依同母弟喪、停止正月諸節樂、但八日御八省奏樂云々、保忠卿記

〔三代實錄二清和〕貞觀元年正月八日乙丑、於大極殿始講最勝王經、以元興寺僧三論宗傳燈大法師位道昌爲講師、不擧音樂、遏密也、〇去年八月文德崩

〔三代實錄三十九陽成〕元慶五年正月八日丁巳、大極殿齋講、以藥師寺僧法相宗傳燈大法師位隆光爲講師、不擧音樂、諒闇也、〇去年十二月清和崩

〔日本紀略九一條〕正曆三年正月八日癸卯、御齋會始、無音樂、〇去年二月圓融崩

〔中右記〕大治四年七月十日、頭辨送消息云、來十九日尊勝寺御八講、幷御念佛等儀、何樣可候哉、〇中略予〇藤原宗忠答云、〇中略尊勝寺御八講不可止也、是御忌日也、非遊興事不可有異儀也、十九日、尊勝寺御八講初日也、是堀川院御忌日也、〇此月七日白河崩

〔愚昧記〕安元三年〇治承元年正月八日己酉、可參御齋會之故著束帶、先參七條殿、先是兩三輩參候、相次多以參上、頃之被始、御講導師範玄也、〇中略會儀如例、但無音樂、依諒闇也、〇去年七月六條崩

〔玉海〕安元三年〇治承元年三月七日丁未、最勝講、依亮闇不可有之由世間云々、此事理不可然、寬德以後、諒闇皆是、大嘗會以前、不被行最勝講、不可爲例、長保例可相叶之處、彼間件講、如每年不被行之、又不被定其月、仍縱雖不被行、難備證據者、以理思之、御齋會神事佛事、除宴飮作樂之外、諸公事皆以後被行之、至行御八講、何因諒闇可停止哉、但保元八月被行之云々、頗不得心事歟、以此子細含賴業云々、

喪中過節日公事

深以甘心、公家御筆御八講、周忌以後可被行云々、此條如何之由、賴業今申出之、余答、以周忌之內可被行之狀、是天曆長保之例、每事符合、又吉例也、隨又御經已可終一部之功、報恩謝德之道、以早速爲先、强爲調過差音樂被過周忌之條、不叶物義者、賴業之以甘心、　四月廿二日辛卯、入夜定能朝臣來、語云、御筆御八講、可被過諒闇之由、關白被申院、院仰人同云々、而上仰云、報恩之道以早速爲先、周朞之內可行之云々、仍自七月五六日之間可被行云々者、此事叶愚案畢、依叡慮叶先規、可感歎々々々、　廿六日乙未、定能朝臣來語云、〇中略諒闇年可被行最勝講哉否、關白被申行之由、世以不爲可云々、可被問人々之由基親所申也云々者、余案此事、更不可被問人々事歟、寬弘以後至于嘉承、皆大嘗會以前也、仍不足爲例、長保朝臣度可叶今度例也、而彼度五月七日、慥以被行之由、見行成卿記、憶事理、又何被傷心哉、無先例、尙以不可被停止、無理也、何況吉例炳焉、可謂勿論歟、

〔北山抄正月一〕同日〇元日宴會事

延長九年正月一日、依諒闇〇去年九月醍醐崩無宴會、太臣以下、就宜陽殿有小飮、外記進侍從以上見參、於本所行之、非侍從亦預、依代始也、(朱雀)祿勘文後日給之、嘉祥三年例也、諸司奏、付內侍所、

〔北山抄二月一〕上丁釋奠事

或云、〇中略諒闇之年、雖從吉服宴停云々、

〔北山抄十一月二〕中寅日鎭魂祭事

諒闇年停否例延長八年不行、天曆八年、康保四年行之、

〔北山抄十二月二〕同日〇十三日點荷前使參議已上事

諒闇年不差擬侍從、御物忌時、下給差文於外記、以後日奏之、見天慶六年私記、

荷前事

同〇天曆八年勘申諒闇年例、元慶四年不出御、承和九年出御、延喜十五年御記、見不出御之例、又可令

勘申者、御記云、當物忌之中、諒闇年不出御、仍不自拜、而承和出御、然則不御失禮也、

追儺事

諒闇年如例行之、但長保三年停此儀、依七々日內也、尋往昔例被定行耳、

〔江家次第八七月〕七日乞巧奠事

諒闇時猶祭天曆八

〔續日本紀九元正〕養老六年正月癸卯朔、天皇不受朝、詔曰、朕以不天、奄丁凶酷、嬰蓼莪之巨痛、懷顧復之深慈、悲慕纏心、不忍賀正、宜朝廷禮儀皆悉停之、〇去年十二月元明崩

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年正月庚戌朔、廢朝、以諒闇故也、〇聖武

〔續日本後紀十三仁明〕承和十年正月庚寅朔、廢朝賀、諒闇也、〇嵯峨　五月癸巳、〇五日停馬射節、諒闇也、

〔三代實錄一清和〕天安二年十一月二日己丑、公卿不就太政官曹司廳、承前例於仗頭賜次侍從已上飲、是日隨停止、以諒闇也、〇文德

〔三代實錄二清和〕貞觀元年正月七日甲子、是日天皇不覽青馬、停節會之事也、十六日癸酉、停踏歌之節、諒闇也、〇文德　十七日甲戌、六衞射禮停而不行、二月丁亥朔、停釋奠之禮、諒闇也、五月五日庚申、停端午之節、諒闇也、

〔三代實錄三清和〕貞觀元年七月廿一日甲戌、存問兼領渤海客使直講苅田安雄復命奏言、客徒今月六日解纜歸蕃、〇中略依諒闇不喚客徒、自加賀國還蕃焉、

〔三代實錄二十清和〕貞觀十三年八月三日丁丑、釋奠停講論宴飲、以勝子內親王〇文德皇女、七月廿八日薨、薨後輟朝三日之限在此日也、

〔三代實錄二十清和〕貞觀十四年正月壬申朔、天皇不受朝賀、以太皇太后崩心喪未畢也、七日戊寅、天皇不御紫宸殿、以停節會也、召左右馬寮青馬各七疋、於內殿前覽之、青馬及鑣人並不裝飾、十六日

丁亥、停踏歌之節、　十七日戊子、不行射禮、

〔三代實錄三十五陽成〕元慶三年四月庚申朔、停平野松尾等祭、及賜宴侍臣之儀、以太皇太后〇淳和后正子内親王崩也、　五月五日甲午、停端午之節焉、

〔三代實錄三十九陽成〕元慶五年正月庚戌朔、天皇不受朝賀、諒闇〇淳和也、　七日丙辰、節會停止、不覽青馬、　十七日丙寅、停射禮、　十八日丁卯、停賭射、諒闇也、　二月九日丁亥、停釋奠之禮、諒闇也、　三月三日辛亥、御齋停止、諒闇也、　四月戊寅朔、停孟夏之宴、諒闇也、親王公卿侍仗下、造酒司侍從厨、聊進酒饌、　五月五日壬子、停端午之節、諒闇也、

〔三代實錄四十陽成〕元慶五年八月十一日丁亥、停釋奠、諒闇也、　九月三日戊申、停御燈燒燈、　九日甲寅、停重陽之節、諒闇也、　十月丙子朔、停孟月之宴、諒闇也、親王公卿侍仗下、造酒司侍從厨、聊進酒饌、

〔日本紀略宇多〕仁和三年閏十一月五日甲辰、停淡路國供御贄、因諒闇〇光孝也、

〔日本紀略二朱雀〕承平元年正月一日庚申、止朝賀小朝拜、依諒陰〇醍醐也、諸節會等停止之、　九月九日癸巳、不給菊酒、

〔日本紀略四村上〕天德元年七月廿七日壬子、依康子内親王薨、停止相撲事、無相撲節、

〔日本紀略四村上〕康保元年十月三日乙巳、今日上卿仰下、明日菊花宴可停止者、　五日丁未、停殘菊宴、依先后崩、〇此年四月村上后藤原安子崩也、

〔日本紀略六圓融〕天祿元年九月九日丁未、重陽宴停止、依緝子内親王薨也、

〔本朝世紀〕正曆元年八月十五日丁巳、今日釋奠祭也、而依前攝政太政大臣〇藤原兼家去月二日薨、至于昨日祭如何、但講論宴座、依承平二年例停止、

〔日本紀略九一條〕正曆二年八月十一日丁丑、定考、依諒闇〇圓融無威儀饗、　三年正月一日丙申、依諒陰無宴座會、　七日壬寅、無節會、　八日癸卯、卯杖付內侍所、

〔權記〕長保元年十二月廿七日丙子、候內、依仰遣召藏人辨大外記善言朝臣、申云、左馬寮令申、明年正月節會停止云々、〇此月五日冷泉后昌子內親王崩若然者白馬事如何、今日白馬列見寮中大事也、隨仰可進止者、此由申左大臣、〇藤原道長左大臣被仰、早可令奏之由者奏之、仰云、爲遣仰此等事於左大臣許、今朝令召道方也、貞觀十四年例、節會雖止、於內殿猶覽白馬、是祖母太后心喪之內也、今太皇太后、雖非服親、崩者之後卌九日之中也、可相定之由欲仰遣也云々、右中辨參入奏事由、卽仰云、靑馬事、幷致賴宗忠維衡等、可遣遠所之事、今日可仰之由等、罷向左大臣家可仰云々、歸參後命、節會雖止、猶於內殿可覽白馬、可遣遠所人々事、只在叡慮之由先日令申了者、〇中略又仰善言朝臣云、左馬寮令申白馬事、節會雖停、於內殿可覽、但列見之間、爲例有射事如宴云々、縱行列見可止他事、　二年正月一日己卯、參內、及酉刻未供御藥、仍仰行事藏人實房催促之、權左中辨爲後取、此間左大臣以下被參、殿上被奏小朝拜事、仰云、節會已停何有拜賀哉、仍大臣以下且著殿上、予勸盃於大臣蓋有命也、暫之三公被參大盤所、次右內兩相共於□新女御上御壺寢有飲事、事了左丞相著仗座、被奏云、節會止、不御南之時、見參奏否共有其例、隨仰將進退、仰云、有先例可令奏、又被奏之、御曆氷様等、依例將付內侍所、仰云、依請、暫之被參御所被奏見參、予轉奏之也、次復仗座、召少納言朝典給之、諸卿無此事以前多以退出、丞相就陣之後、右大臣、內大臣、右大將、宰相中將、被退出、甚違例事也、只左大辨祗候而已也、　七日乙酉、參內、左大臣參仗下被奏云、白馬事、雖止節會依有例、可覽之由先日所承也、但隨近衞等裝束、幷馬飾否、陣有無之事可隨仰、仰云、儲裝束飾如例、但止近衞陣可令供奉本寮、亦大臣被召參上、被仰御裝束之事、仍垂南廂御簾、西第一二三間、鋪疊爲公卿座、廂南第四間設御座、大外記善言朝臣、奉仰再三遣召御馬、申刻纔參來、亦被奏云、左馬寮頭參入、助不候、右馬寮助雖參、頭不參、若左頭右助左右供奉御馬前如何、仰云、依請、卽有勅旁渡御馬、其數如常、右助令申候由遲參、仍被責怠狀、

〔日本紀略十二三條〕寬弘八年八月十六日丁巳、釋奠、依先帝〇一條崩無宴座、上丁依院卌九日之內延引、今

日有駒牽、十二月廿五日甲子、荷前使定、但不定元日侍從、依諒闇也、

長和元年〇寛弘九年正月一日己巳、無節會、依諒闇也、有平座見參、七日乙亥、無節會、依諒闇也、但諸卿參仗座、

〔榮花物語十日陰の鬘〕かゝるほどに、十月廿四日〇寛弘八年れいせんゐんうせさせ給ぬ、〇中略世のなかみな諒闇になりぬ、〇中略はかなくて月日もすぎて、年號かはりて、あくるとし長和元年さいふ、元三日のありさま、たゞならましかば、いかにめでたからまし、たれこめて、殿上にもいでさせ給はずなどして、いとくちをし、

〔小右記〕萬壽四年十二月四日庚午、巳時許、式光來云、禪閤〇藤原道長昨日入滅、〇中略頭辨來、以人相傳云、〇中略余〇藤原實資云、〇中略節會等事如何、七々忌内難被行歟、大入道〇藤原兼家七月二日薨、四十九日内無節會、三條太后十二月一日崩、正月節會停止、七日只牽白馬、誠雖御后位、不御服親、禪室雖云臣下、已是祖父、已蒙准三后宣旨之人也、猶准彼三條太后例、可被行歟、依重被行何如、六日壬申、關白〇藤原頼通被報云、〇中略余報云、〇中略明年正月節會等事、大略申達、忠仁公〇藤原良房九月二日薨、□年十一月豐明節會止、明年正月十六日節會賭射等停、又永祚例前太政大臣〇藤原兼家七月二日薨、八月考定釋奠、過七々忌景晦被行、且三條太后十二月一日崩、正月元日七日十六日節會賭射等止、依御卌九日内也、就中御本服三箇月、及明年十一月太后與臣下尊卑相累、然而太后者不御御服親、前太政大臣雖臣下、外祖父也、隨亦可有三箇月御心喪、御心喪限内也、不可被行節會等、亦先朱雀院踐祚時、法帝祖父也〇宇多七月十九日崩、御心喪五箇月及十一月、仍大嘗會延引、決定謂之御心喪内、不可行如此之事等歟、藤宰相相傳云、尤被甘心者、

〔左經記〕長元元年〇萬壽五年正月十五日辛亥、參御堂、右中辨相示云、射禮幷兵部手番可停止之由、〇去年十二月、後一條外祖父藤原道長薨、奉右府〇藤原實資宣、仰下云々、又被召仰外記云々、是貞觀十四年正月、祖母太后御心

喪、依被停止之例、被仰也云々、　十七日癸丑、有次府府手番、申關白殿被仰云、停止射禮之時、敢不可行、若未聞停止之由歟、爲善者、

〔百練抄 五 白河〕應德三年、自去應德元年中宮崩、〇白河后源賢子、元年九月崩、諸節會幷相撲節等類、宴會悉停止、于今寂莫、

〔愚味記〕安元三年〇治承元年正月五日丙午、今日無叙位儀、依諒闇〇去年七月二條崩也、　十四日乙卯、諒闇年、右近陣幷殿上饗等、不備魚味也、而今日如例年、大將不示此歟、予〇藤原實房以此由示隆亞相、有感氣也、

〔玉海〕治承五年〇養和元年五月一日丙子、騎射饗祿事、大將懸申、日來一切忘却、仍忽致其沙汰、依爲諒闇年、今年無荒手結云々、〇此年正月高倉崩、　四日己卯、此日依諒闇無府荒手結也、　六日辛巳、此日右近府眞手結也、依亮闇不給祿、又不送饗也、長保見實資記、嘉承見宗能記、不賜祿、於饗者如何之由可見也、然而保安故殿大將御時、於初蘿者、被送饗祿、於後蘿者、只送祿袴、不賜饗由有所見、加之諒闇年、又不送饗祿之例存之、就此等案之、不亮闇年猶不賜饗、何況於諒闇哉、仍饗祿共不賜也、又大將職事等不催遣也、左近府又同之云々、入夜府者持來手結、大將加一見返給云々、

〔後深心院關白記〕應安八年〇永和元年正月七日戊辰、無節會、〇去年正月後光嚴崩、　九日庚午、頭左中辨宣方朝臣來、有勅問事、縣召除目事、仰詞幷申詞注裏、

仰詞

縣召除目事、先例諒闇中被行之條勿論歟、但御忌月或除目可有何樣沙汰哉、建久四年、御前初度除服被行歟、若可被准彼儀哉、可被計申矣、

余〇藤原道嗣申詞

縣召除目事、建久四年、御前初度雖爲諒闇中、非御忌月歟、任近例二三月之間可有其沙汰矣、

〔看聞日記〕永享六年三月九日、女叙位八、諒闇中不可有其儀也、〇去年十月後小松崩、祿物事、宣下之時者、勾當

公人等祿被略、大内記宣下持參、祿許可賜云々、女叙位之時、人々祿如本式可賜云々、條々源宰相申、大概記之、

〔康富記〕享德三年八月十八日丁酉、今日御靈祭如例、釋奠停止也、近衞禪閤（六月廿八日薨御、忠嗣）薨給之故也云々、釋奠被行之、至宴穩座可有停止之旨、但鹿苑院大相國（足利義滿）薨給年、兩季不被行之、先例猶可引勘之、

〔基量卿記〕延寶八年十二月九日、禁裏御さりをき也、依諒闇（後水尾）無御煤拂、依之公卿不爲御祝義不參了、

〔季連宿禰記〕元祿十三年正月十一日乙巳、後關鷹司前殿下（房輔）薨去之事、今夜傳奏等被奏之、十四日戊申、晩景自禁裏番衆所有召、即令參、非藏人部屋使所申參之由、大外記同被參之、議奏（今出川右大將）久我源大納言被出逢云、執柄臣親王大臣等薨之後、廢朝以後、近時節會之時、被停止國栖立樂之例、又者不限節會、於他公事宴遊之類、止之例可勘進、是今度依鷹司前殿下薨去之事所被尋仰出也云々、十五日己酉、午刻許、相伴四位大外記師庸朝臣參禁裏、非藏人部屋便宜所、招非藏人申祗候之由、議奏右大將（伊季卿）源大納言（通誠卿）被出逢、昨日所承之事、申御返答、大外記、的中之例不所見之由被申之、寛文紀州大納言（東福門院御叔父）薨去之時、節會被止國栖立樂舞妓等之例、幷大相國薨去之時、釋奠可被止宴穩座哉、沙汰之次第（出中原康富之記）等、此兩條記折紙被出之、其非的中之例、予正保四年、九條攝政（道房公）之例、記折紙出之、（此例又攝政御當職之例也、仍非的中之儀、然而急之儀、早速無所見、仍先注進云々、）兩卿被命可披露之由、次退出、予折紙記左、

廢朝以後近時節會以下事

正保四年正月十一日癸丑、昨夜攝政左大臣薨去、傳聞廢朝三ヶ日云々、今日神宮奏事始也、其儀以後薨奏歟、

雜祓

同十六日戊午、踏歌節會、去十日依攝政殿下薨去、國栖立樂停止之、但舞妓如例、
同十九日辛酉、禁裏和歌御會始、
同廿一日癸亥、舞御覽、（五番）
同廿二日甲子、三毬打、（去十八日延引）

正月十五日　左大史小槻季連

十六日庚戌、依去十一日前殿下（鷹司殿房輔公）事、被停止國栖立樂之由、內々有其聞、舞妓如例云々、（○中略）明日舞御覽、十八日三毬打等、依鷹司殿御事延引之由有其聞、追可尋記、十七日辛亥、舞御覽延引、依鷹司前殿下御事也、十八日壬子、禁裏三毬打延引、依鷹司前殿下御事也、

〔中御門院御凶事記〕元文二年四月十九日（○此月十一日中御門崩）

一藤井新藏人昨日被參、此節菖蒲枕、五月五日ニ獻上之事、鷹司中納言殿へ伺候處、追而御返答可被仰聞之由ニ而、後刻召ニ來參上候處、一條右府前殿下へも御尋被遊候處、未諒闇ニも無之候まゝ、來月五日ニ、菖蒲枕可指上之由也、夫ニ付女御御方へも指上候哉と被相尋候ゆへ、俊光父子、新中和門院（○中御門后近衛尚子）女御之節指上候哉相尋可申入と申、俊章へ相尋候處、成程被指上候山物語也、新藏人へ、女御御方へも獻上候由今朝申遣、

〔日本書紀十三允恭〕四十二年正月乙亥朔戊子、（○十四日）天皇崩時年若干、於是新羅王聞天皇既崩、驚愁之、貢上調船八十艘及種々樂人八十、是泊對馬而大哭、到筑紫亦大哭、泊于難波津、則皆素服之、悉捧御調、且張種々樂器、自難波至于京、或哭泣或歌儛、遂參會於殯宮也、

〔日本書紀二十八天武〕元年三月己酉、遣內小七位阿曇連稻敷於筑紫、告天皇喪於郭務悰等、於是郭務悰等咸著喪服、三遍擧哀、

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶八歲六月庚寅、詔曰、居喪之禮、（○五月二日聖武崩）臣子猶一、天下之民誰不行孝、宜告

天下諸國、自今日始迄來年五月三十日、禁斷殺生、

〔三代實錄 三十九陽成〕元慶五年正月十九日戊辰、下知河內攝津兩國、俾齋內親王擬出神宮、從河陽宮取水路赴難波宮、依例三處祓除、每處經一日、卽便取三島道還向河陽宮、其陪從一百人、檢校幷奉迎等使六十二人、酒食夫馬等類、事々祗供、時屬諒闇、○去年十二月日淸和崩莫用魚鳥、

〔西宮記 臨時一裏書〕天曆八年四月七日、給右大臣、文章博士等申、令歷試得業生菅原輔正文、仰令勸諒闇年○此年正月醍醐后穩子崩課試之例、　同廿五日、右大臣令奏輔正歷試文、副式部省勸申、文章得業生、諒闇之間奉試例文云、元慶四年十二月上皇(淸和)崩、而文章得業生三善淸行、同五年四月廿五日奉試云、仰依件例依請、

〔長秋記〕大治四年七月八日甲申、巳刻攝政、○藤原忠實內大臣、○源有仁權大納言、治部卿、○源能俊候殿上、別當蒙仰問人々云、女院○鳥羽后待賢門院藤原璋子明日出此院、三條殿可渡御家保朝臣宅、三條京極依是產事也、但重喪人、○七日白河崩養產間何樣可被定行哉、可被量申、權大納言治部卿、遙廻今案被造新儀、權大納言被申云、養產者、兒御衣等可存先例、此外事一行可被停止、但當七日夜、上達部等著直衣參仕有何事哉、治部卿申云、夜々尙可被行也、其中五夜事、本所支配、本院御沙汰也、於今付女院聽沙汰、如三夜可被行也、仰云、喪家中儲宴座事、尤有其憚、如權大納言申可被行者、

〔百練抄 十四四條〕文曆元年○天福二年十一月五日庚子、有改元事、天福字、自始世人不受、諒闇相續、爲其徵之由口遊、但諒闇中○此年八月後堀河崩其例希云々、

〔五代帝王物語〕中宮は同○貞永元二年○天福元四月三日院號ありて藻壁門院○後堀河后藤原竴子と申○中略同年九月に御產とてひしめくほどに、○中略十八日つゐにうせ給ぬ、御年廿五、淺猿とも云ばかりなし、御母子ともに月輪の一廟に納奉る、上皇○後堀河も此御歎のつもりにや、同二年八月六日かくれさせ御坐す、御年廿三、おしかるべき御齡なり、○中略天福といふ年號は、大藏卿爲長撰申たりけるを、陣の定の時、諸卿一同したりけるに、賴資卿難申程に、大納言定通卿と仗座にて口論に及けり、つ

ゐに天福と定たれば、同二年打つゞき、上皇(○後堀河)の御事ありて、諒闇相續すること、これぞはじめにて有ける、淺ましかりける年號也、さて十一月五日、文曆とあらたまる、諒闇中に改元の事、遠くは延曆佳例なれども、近くは養和例不吉に覺侍りき、此外は其例も侍らぬにや、

〔親長卿記〕長享二年六月廿五日、早旦參內、(吉服直衣、不卷纓、著諒闇裝束、依不用意也、)月次御連歌也、(諒闇中御會不審、雖然一向被稱爲內々事、有此儀、同內々御月次和歌御會被下題、昨日詠進了、子細同前、○中略)源富仲之外、悉吉服也、

〔宣胤卿記〕長享三年(○延德元年)二月十五日甲辰、自勸修寺亞相以使者云、諒闇御用脚事、(○去年四月後土御門母后嘉樂門院信子崩、)堅可申之由度々被仰下候間、明後日可下遣江州於使者、予書狀同可遣云々、

諒闇中、御服御調度御簾疊以下、悉以可被改候、仍御要脚事、自去年勸修寺大納言巨細申候歟、調進物等、無餘日者不可叶候、早々可有申御沙汰之由被仰下候也、恐惶謹言、

二月十七日　　宣胤

二階堂中務權大輔殿

結城越後守殿(別紙也)

此狀兩通幷二階堂內々狀一通、十六日以使者遣勸修寺許、

廿三日壬子、自勸修寺亞相使者來、諒闇用脚事、以先日之書狀申江州了、此使今日上洛云々、令對面返事之趣聞之、唯難事行云々、珍事々々、二階堂返事到來、難行之趣也、

○

〔中右記〕寛治八年(○嘉保元年)二月五日丁未、今夜一院(○白河)令著錫紵御云々、(○此年正月後朱雀后禎子內親王崩、白河御祖母、)日數三ヶ日者、太上天皇、以日易月也、然者二等親五日歟、但昔淸和御時、祖母順子皇后崩、而依諸道勘文、雖二等親三ヶ日也、今依件例御歟、彼順子皇后沙汰、委旨見國史之由、或人所談也

〔長秋記〕大治四年七月八日甲申、御入棺也、(○白河、此月七日崩、鳥羽御祖父、)辰刻參院、於本院御方被議定崩後雜事、

○中略　新院（○鳥羽）仰云、堀河（○鳥羽御父）先朝御時、予幼若不知子細、成人後、偏蒙上皇（○白河）御恩、一事已上蒙彼仰進止、今當此時、何用祖儀哉、只可用父禮、又喪家事可自專者、於女院（○鳥羽后待賢門院藤原璋子）依御產事可渡申他所、於予留不可他行、權大納言治部卿（○源能俊）固諫申云、謂父子於天子、尙異他、太上皇、是與天子儀同事也、勘遠近例、上皇籠喪家給事、未見文籍、近乃禪皇（○白河）六條院（○後三條）崩給時、出家入道可籠忌之由被執仰、然而良相賢佐、堅諷諫、遂令渡他所給、其例者近、凡不可候之儀也云々、禮部諫予云、京極殿（藤原師實）故入道左大臣（源俊房）民部卿、彼時相議所申破也、近来臣下、不及彼人々、上皇又可令遂禪皇御例也、全不可新議歟、後聞攝政（○藤原忠通）以書札送別當（○藤原實行）許、尙不可令御喪家之由令申給云々、又以師行被仰下官（○源師時）云、予今度、以父子禮欲奉報恩、而人々皆不請、汝之所存如何、奏申云、人々申旨尤可然、被執仰事、又以聖理也、禪位主、遭父母祖父母喪給事、其例不詳、稱無先例者、有其事謂無所爲也、遇無先例之事、稱無先例者、不合時議歟、於今度事、仁明天皇之爲淳和帝著素服例、與當時前關白（○藤原忠實）爲祖父京極大臣（○藤原師實）用重喪之儀、准據可令被量行御歟、重仰云、所申尤可然、今度議合宇治先關白例、其定所令存也、○中略　治部卿（○源能俊）教訓內府（○藤原信長）云、上皇御服、如父子可令用重喪儀給也、故宮薨給時、院仰云、爲我子不用重喪儀者、仍弓纓著黑漆履給、於今度可用給繩纓朱履歟、○中略　禮部退座後予申云、服輕重條、取新院御氣色可令進止給也、禮部申旨、雖理致可然、近代作法、可令隨御定給也、密事ハ院可用給重喪儀云々、然者二舞樣能成歟、只恐案弓纓著黑履、於衣裳濃黑可被染也、內府被同予議、上皇召清隆朝臣（御服所別當也）被仰云、御服裝束可用重喪儀者、御冠繩纓也、可致其用意者、以少納言俊隆、被仰陰陽頭家榮云、近日事注日次可進、三條與京極往還間可用心故也、家榮申云、素服著御日時、當日可勘進也、於自餘事不及勘文、只以折紙注進、矣有何事哉、仰云、只內々可御覽料也、注折紙可進、仍注申、

十二日戊子、及未刻參院、於路次見別當消息云、只今於院御服事可被議定、可參也者、乃參仕入自西門、內大臣、本院御方御坐面談、依定事可暫候之由示給、此後參新院御方、別當相語云、今朝令少納言俊隆問關白云、今度事、延久五年例與（後三條院）

崩給時、讓皇在位著服給年也。康和三年例（京極大相國薨時、前關白孫著素服年也。）相並可用折中儀也者、件年々日記注出可令進、又其間事可令量申者、被申云、康和度事、相尋可注申、延久事無指記、尙可尋覽土御門右大臣記也、於御服事一身難申、尙如前々召人々可聞食申旨也、且可奏此旨、只今可參者、及秉燭關白參給、所召權大納言宗忠、治部卿能俊、別當實行、新中納言雅定、及下官等也、而權大納言被申故障、仍重被其儀、別當由之申可參由云々、相待間乃參仕、衣冠、攝政（直衣）內大臣（直衣）權大納言、治部卿（布衣）別當（布衣）新中納言（布衣）下官（同）著殿上、別當示申攝政云、今度御服事、日來雖有其沙汰、未被一決、重詳定可被申也、御服事、權大納言被申云、本自如令申、以祖禮半年御服之可候也、近來大小雜事、皆上皇決之給、若伊勢宇佐、若齋宮齋院ニ大事出來時、於重喪御身、令致其沙汰御事有憚、又御沙汰誰人可決哉、且可被問明法歟、治部卿被申云、此事本自養父之定可沙汰候由所令申也、前年堀川院度、重喪禮已了、今度重有此禮之條、古今不聞事也、京極大殿御時、前關白殿令重喪給、雖祖父禮、是二條殿御時、爲大殿子御冠不縄纓、履非朱漆、皆輕事之輕故也、何今度重喪儀可候哉、被問法家條吉歟、下官申云、令致祖禮御事、其理可然、不可有異儀、但如御意者、恩養悉深、何輕其喪哉云々、發自叡慮不可及臣下難、但付此儀案先例、仁明天皇淳和猶子也、依讓位恩發素服云々、其例幽玄、章偏不詳、然而伯父祖父之間、何不被准據哉、如此事遍問諸道可被量行歟、權大納言、治部卿、聞此事云、件例尤可被相尋、如被定申有彼例者、何不准哉、此間密々問別當云、堀河院度、新院在位雖爲天下諒闇、七歲以前依非服身、不御倚廬、不著素服之由所承也、其間依不昇故不參內裏、加之給先朝素服故不出仕、如此間不能子細、彼時內裏議定委見給歟、被答云、雖幼主尙儲倚廬著御服給者也云々、此事已乖彼時儀、然而强立理不可執申、近來作法、諸事歸於故也、新中納言同下官申旨、攝政（忠通○藤原）內大臣（有仁○源）申云、大略如人々定申、被問諸道可有沙汰歟、別當奏此旨、歸出仰云、於御服輕重本自有所存、其上殿中鋪設裝束御車幷院司殿上人御隨身等可輕服否、可被量申、又兩大納言被申云、縱發自御意雖令著御重服、殿中御裝束不可

被改、若殿中御裝束被改者、院司殿上人、皆可著輕服歟、御事可被改、御隨身可著服、如此事每事有憚歟、十五日辛卯、酉刻參院、先參新院御方、所々御裝束改替程也、不能子細、後可記、漸日沒間、陰陽頭家榮朝臣申刻限、仍新院著御錫紵云々、後聞御服所別當淸隆朝臣、調備錫紵、○中略掃部寮供御裝束、以御屛風三帖廻立于四面、但乾方開戶、其中敷小筵二枚、其上供半帖、已上皆向乾院於此中著錫紵、新中納言雅定奉仕、事了脫還御倚廬、廿二日戊戌、參新院御方、陰陽頭家榮朝臣被候、語余云、只今可令除錫紵給之由有仰、大略來廿七日日次宜歟、但件事未得心、故何者令除錫紵御、是已御除服議也者、一忌間御服儀不可候歟、予答云、率准帝王儀、以日易月、先除素服、一季之後、可令除服御也、仍有此儀歟、家榮云、然者帝王者一度服、二度御禊候歟、答云、然也、家榮始學此事、雖高才博覽者於是似失、廿七日癸卯、後聞新院令除錫紵御、其儀諸司儲御座如在、十五日御烏帽子直衣上著袍、限乃脫御如本、

〔中右記〕大治四年七月十日、從關白殿○藤原忠通給御消息云、○中略新院○鳥羽御服○此月七日白河崩、鳥羽御祖父、一年之由被仰、此事不心行也、寬治八年正月、陽明院○後三條后禎子內親王崩給之時、法皇○白河御服、孫之儀云々、其例可叶歟、予○藤原宗忠申云、件例凶事之中吉例候、早以其儀可令申行御也、十二日、酉時許、別當送書云、只今可馳參、依院御氣色上啓如件、申承了由、忩出立馳參之間及秉燭、殿下、內府、已上直衣治部卿、別當新中納言、雅皇后宮權大夫、已上布衣人々候殿上、以別當被仰云、新院御服、可及一年之由所思食也、然者御帳帷御簾御座等如何、又殿上人御隨身裝束可被改歟、如此事人々相議可申者、御衣重服一年之議、未有此例也、猶五ヶ日可宜歟、仰云、有中心一年之由所思食也、又人々申云、然者被問諸道、隨勘申可被左右歟、大事之上、又無先例、忽難申切者、人々申云、縱御衣雖重服、殿上人裝束只如常候也、及廣無便之故也、新中納言被申云、萬壽四年十二月、御堂○藤原道長御事時、上東門院、威子中宮等、宮司著服衣歟可被尋也、尤可然、人々申云、又新院世、堀川院崩給時諒闇也、今度重服之儀、及二ヶ度、可無便歟、皇后宮權大夫師時被申云、昔仁明天皇御時、嵯峨太上天皇、承和九年七月十九日崩淳和天皇、同七

五月八日崩承和七年九年共天皇令著素服給、是二ヶ度也、件例雖可然之古儀也、予倩思之、如此凶事ハ、輕様ニ沙汰成宜事也、勅定ニ重々雖被仰下、無術事歟、〇中略密々仰云、此宇治前太政大臣、往年康和之比、祖父有事時、雖祖父年來爲養子、已變孫儀、如實子也、重服也、君臣雖異、其志之間、仍以彼例、雖孫如子可有之由思食者、此事尤可然歟、然而於主上御事者、可異他人也、　十五日辛卯、今夜新院著御錫紵、是如主上御錫紵云々、東北廊自本板敷也、仍御件廊准倚廬也、欲下板敷之處、已去夜依渡御女院、御所當王相方也、御裝束色如凡人重服也、御所懸伊與簾、又服御車被調、御座鈍色縁云々、殿上疊同前、件事院司新中納言雅定卿沙汰也、仍以彼人説所記也、　廿七日癸卯、今夜院有御錫紵除御之事、陰陽頭家榮御祓云々、及十三ヶ日除御一年之儀也、以日易月、十三ヶ月之儀者、

裏書

御錫紵事、相尋陰陽家榮之處示送云、

擇申可著御錫紵日時

今月十五日辛卯時戌、可向御乾方、

大治四年七月十五日　陰陽頭家榮

刑部大輔朝隆奉、仰、但雖承子細、

擇申可被除御錫紵日時

今月廿七日癸卯時戌、可向御巽方、

大治四年七月廿七日　陰陽頭家榮

朝隆奉之、進勘文之後、更著御之後、依仰於東南壺勤仕御祓畢、御裝束御袍闕腋半臂下襲表袴皆太布染黑色等也、但中不被除御冠沓等候也、兼有其儀云々、此定候也、此外御裝束ハ、依爲心喪不被除云々、

〔本朝世紀〕康治二年十月十八日辛丑、入道君仁親王薨六條院、(時年十九)親王者太上法皇(○鳥羽)第三子也、母待賢門院、(璋子)自幼少至今年、足痿頓、加以瘖瘂、不加元服出家、法皇幷上皇(○崇德、君仁兄)有錫紵事、主上(○近衞)幼稚御之間無此事、

〔台記〕康治三年(○天養元年)四月廿六日丁未、親隆來語云、太后(○白河皇女令子內親王、鳥羽准母、)葬雜事、明日可被定云々、法皇(○鳥羽)自明日可令觸穢給、忽依有養母之義、可有五月御服、(衣色、同喪父母、)喪禮偏法皇所令沙汰給也、君子曰、明王以孝治天下、此之謂也、昔喪白川太上法皇、哀容過于禮、今喪太后、又不失節矣、孝道之美豈有所加哉、

〔台記〕天養二年(○久安元年)八月廿二日乙未、酉刻待賢門院(○鳥羽后藤原璋子)崩(三條高倉第)上皇、(○崇德)先之坐同所、病急告法皇、(○鳥羽)卽幸、臨終法皇打磬哭泣、然后群臣哭、廿七日庚子、傳聞法皇著御服、(其色黑)

〔玉海〕安元三年(○治承元年)二月十一日辛巳、或人語云、去比法皇(○後白河)御除服也、而著服之時不召素服、因之無可切流之物、忽被問申相國(○藤原基房)之處、召龜御帶可切之云々、而在憲朝臣申云、御著服之時、只雖不召、求出素服可切之云、是又彌有禁忌、仍隨在憲申狀、日來所召云々、黑御帶ヲ切流之云々、是又新儀也、

〔玉海〕文治五年八月六日癸巳、今日以宗賴朝臣奏院(○後白河)云、(付定經卿申之、然而稱未承、可傳奏之御氣不中、付女房令申云々、)上西門院(○鳥羽皇女統子內親王、後白河准母、)御事、舉哀過禮、人感其御志深、凡太上天皇者、同正帝絕傍朞、然而依養母之儀御著服、又有天養之例、(二條大宮崩御例、鳥羽院依養母御著服、)不能左右、其上御遭喪之條、無例之由天下傾之、其上閉門戶下格子、已經旬日云々、准天子不事親之儀者、不可過三日、數日被閉門之條、事涉禁忌、加之諸奏事等、職事成憚不奏聞、適雖參入無傳奏之人、自門外空歸、大略奏事不通了、旁爲天下大事、於今者上格子彼開門戶、尤宜歟、和讒雖有恐、存忠所其上之者也、

〔吉黃記〕正嘉元年七月六日早旦、參龜山殿(○嵯峨上皇)參御前、依承明門院(○後鳥羽后源在子、嵯峨御祖母、)御事、公家可

有沙汰事等可何樣哉之由奏聞之、○中略此次此御所御錫紵可候歟、御心喪何樣可候哉之由伺申之、勅定云、心喪近年絕了、然而嘉保被召之、大治又雖可爲五ヶ月、一葬猶被召之、任嘉保例被召之條可宜之由思食、仍以雅言今朝尋入道攝政、二條前關白、一條前攝政等、○中略此間雅言歸參、人々御返事、入道攝政被申云、輕服之儀、君臣已絕了、雖不被召不可有難、但嘉保被召之、任彼例被召之條、又何事有乎、前關白被申云、嘉保被召之上、被召之條可叶道理、前攝政雖可被問法家、有嘉保例上、被召之條可宜云々、仍可被召之由有其沙汰、陰陽師有濟朝臣、今朝被召置而退出云々、再三被遣召、良久歸參、以雅言被尋錫紵日次、來十三日云々、作御事又可爲十四日之由申之、　十三日乙丑、今日院○後嵯峨被召錫紵、右少辨雅言奉行之、

〔園太曆〕貞和四年十一月十一日甲辰、未刻許、自仙洞○光明有御書、拜見之所、萩原殿○花園、光明御叔父、有御事之由只今被告申、仍御幸也、　十八日辛亥、一昨日被仰合條々、今日以春宮大夫申入之、○中略

一仙洞御心喪日限事

御猶子儀、此間時宜、先日大略被治定歟、然者御叔父御本服三箇月儀、可然哉、朱雀院御事之時、村上御心喪、御本服三箇月所見注進之、但此兩代御猶子儀、此外無所見歟、

此事又後日、正嘉元年七月十三日、後嵯峨院、著御承明門院錫紵心喪服、雅言卿記尋進之、但今度儀、可相違之旨申入了、

十二月二日、抑今日上皇、著御故法皇錫紵云々、此間被經御沙汰了、其儀猶未一決也、然而於錫紵者先著御、御心喪長短、猶被仰合于法家云々、所詮叡慮者、法皇御養父雖被閣、可有五箇月心喪之由歟、而後伏見院御事時、已著御重喪了、重又著養父御服、不存先規也、只叔父之儀、不可有子細候哉之旨予豫申入了、執事親明朝臣奉行云々、

十二月奉行人親明朝臣記

二日甲子、著束帶參仙洞、御錫紵事爲申沙汰也、　四日丙寅、除御也、

五年四月十三日、上皇（○光明）除御故法皇（○花園）心喪御服事、心喪除御儀、先覽日時勘文、（入筥）卽被返下、次奉仕御裝束、其所□□□御所公卿座、（南間數疊二枚、其上敷牛帖、向御吉方亥方、）垂御簾、供掌燈於簾外、（高燈臺南方、）立八脚於庭上、敷菅圓座於八脚下、次被出心喪御服、（自北面妻戸被出之、居折櫃、在土高坏、）茂經取之下、廳官取之置八脚之傍、次出御、廳官立明、親明參進御前、茂經持參御贖物、親明取之置御前、則出簾外候簀子、次陰陽師在實朝臣、進寄八脚下、廳官灑水御祓了、親明降地取大麻、參御前伺御目、被召大麻被置御贖物上、則取御贖物渡役送、次隨御目奉直御卷纓拔取竹釘了、次入御、

〔園太曆〕文和二年正月十六日、後聞今度御著服雖被問、遂無著御云々、新院（○崇光）御方就陽祿門院（○崇光御母）御事御著服事、可申沙汰候旨、自南方御所（○崇光時在南）被仰下、而奉行廳官以下、太難催出之由申子細之處、於錫紵儀者可被略、心喪御服、黑染御裝束已下可著御、今月十七日以前、可有沙汰之由思食相構候、其以前可沙汰儀之旨雖被仰下、十五日中不及沙汰、五旬御忌十七日、又已廻來、所詮雖過後日、於著御者、不可被闕歟之由被仰下、然者已過五旬、著御可爲何樣哉、又爲心喪著御黑染、不可有子細歟、且內々可談申可然之人々之由、被仰下之間所申談也云々者、此御服以日易月之儀、十三日十日（○十二日字恐衍歟）可著御云々、予返答云、新院御服心喪被用黑染之條、不可有子細歟、稱重喪凶服者商麻服也、黑染者細布服、心喪通用物也、亮陰時賜素服之臣下、於商麻凶服之五旬以後、依宜下雖除之、御一廻中懸志之舊臣猶著黑染、是依心喪通用儀也、此條且貞應亮陰之時、野宮左府所記分明歟、然者御重喪御著始之儀、依難被沙汰、懃著御黑染心喪御服之條、於先規者雖不覺悟、爲臨時勅斷歟、著御只可在時宜哉、次五旬以後著御事、是又先規雖不詳、御一廻十三箇月中也、雖被略者、是又臨時沙汰可在叡慮歟、且輕服輩、雖服日數過、猶著除有其例歟、五旬以後著御、聊似有准據乎、但如此服著御、裁縫大略爲同日歟、遼遠境難儀歟、女工所參彼境之、非其沙汰候條、可爲恣心、此條々可被仰人々、

〔基量卿記〕元祿九年十一月十日、午斜有人告曰、本院〇靈元御姉明正、之不豫以外之由也、驚入之處、基長朝臣自昨日候內、以書狀示達云、彼御不豫及御難治、自禁中追々被進御使由也、午刻過已崩御之由也、

廿三日

一戌刻仙洞、〇靈元於廣御所北西間著錫紵、兼而撤疊設綠緣御座、上敷同綠半帖一枚、御後方引廻御屛風、五尺屛風疊繪四面垂御簾、御座左右供掌灯、高灯臺、殿上被引渡、御座右方置無紋御冠、卷纓、盛柳筥、居土高器、御錫紵置御座左方、唐匣蓋入御髮具、御座中央、不居柳筥、先是院司兼供朝臣、束帶、垂纓下襲、就妻戶奏御錫紵日時勘文、入覽筥、葛籠蓋、入女房奏之、御覽了返給、兼供朝臣給之、於殿上東方下廳官、次出御、吉御直衣指貫白御下袴、御冠御垂纓、令持御扇給、次兼供朝臣依御目退召予、則參進、著衣冠、不重單、公澄朝臣同參進、脫御御直衣、御指貫御下袴、其儘著御、則令著錫紵御錫紵御指貫給、次御袍、次予參進御前方、取吉御冠奉服御冠則退去、次有叡念令向御巽方、聊南歟、御吉方同前也、兼進勘文者、御錫紵著御之御吉方也、於叡念者、令向御廟給之由也、泉涌寺巽御聊南也、依之如此歟、叡念之間甚良久、半時計歟御讀經有之歟、人々感懷念誦之體也、殊勝々々、誠是御報酬之義、陰德之令然處也、可仰々々、次兼供朝臣召予、庭田中納言候御屛風邊、窺御氣色歟、予參進、公澄朝臣同參、脫御錫紵、著吉御直衣御奴袴、於御冠者、其儘著御、三ヶ月依可有著御也、次入御、吉御冠密々就女房、評定譜被獻體也、事了退下、于時亥斜也、

廿七日

一入夜參院、御錫紵除御儀也、戌刻出御、御向方兼進勘文、吉御直衣、御奴袴、於御冠服之御冠卷纓、御座定之後、兼供朝臣向予氣色、予則參進殿、御錫紵御袍、其由計也聊觸御袖、則置柳筥上、次令脫服御冠、奉吉御冠、御垂纓、近臣兼而申出、置御座右方、令著之給則入御也、

〔前靑綺門院御凶事記〕寬政二年三月四日甲申、自去月廿二日至今日、仙洞御所〇後櫻町錫紵著御、今夜脫御、亥刻御祓也云々、〇去月母后二條舍子崩

〇

〔長秋記〕大治四年八月七日、故院〈〇白河去月七日崩〉御月忌、於院殿上被定申女院〈〇鳥羽后待賢門院藤原璋子、白河猶子〉御服事、九日、今夜女院著御服給、寢殿懸鈍色御簾、〈竹青絲縁帽額鈍色也〉御座儀鈍色几帳、紐同色用尋常乎、別當云、萬壽四年上東門院〈〇一條后藤原彰子〉几帳用白木、今度相違、家榮進勘文、於寢殿西渡廊敷紫端帖一帖為著御所、黑橡裳唐衣〈國絹〉黑御衣一領、〈同單〉柑子色御袴、御服所調進、予〈〇源師時〉云、先例用小褂歟、裳唐衣是素服也、十日、女院御著服事、委細不書之、

〔前靑綺門院御凶事記〕寬政二年二月二日癸丑、廻文到來、就大女院〈〇櫻町后二條舍子〉崩御、〈〇正月二十九日〉女院從一昨廿九日九十日之間、御心喪之旨被仰出候、為心得武傳より被示由也、

〔前恭禮門院御凶事記〕寬政七年十一月三十日、女院〈〇桃園后恭禮門院一條富子〉崩御、

十二月十九日丙申

一自中宮〈〇光格后欣子內親王、後桃園皇女〉御所、烏飼侍持來、申御請也、

御輕服著御　來廿五日酉刻

御除服　來三十日酉刻

御禊　同日戌刻

奉行宮司

胤定朝臣

右之通被仰出候、仍為御心得申入候也、

十二月十八日　則賢

資矩

德大寺大納言殿承候

皇太子服

三條中納言殿(中略)○

廿日丁酉、從徳大寺使者來、口状書持來如左、委細承知之旨答了、

來廿五日就中宮御輕服著御、翌廿六日一統窺御機嫌、且御菓子獻上、(仍廿日不及獻上候)著御中一箇度、窺御機嫌可然候事、

中宮大夫殿使
富野外記

十二月廿日

廿五日壬寅、中宮御輕服著御ニ付、未刻參仕、(束帶)奉行頭辨(亮)參仕之旨、奉行ヘ可申入處、唯今内覽ニ被參間、御肝煎日野舟橋等被指圖、被渡御裝束之事ハ、以非藏人被設候間、御座予(○大江俊幹)可相設、萬事可點檢旨也、仍非藏人語合令設也、其後頭辨被來面會、備忘圖等被渡、如圖可設旨也、

中宮著御輕服備忘

先令陰陽師勘日時、覽大夫、(入宮)次經内覽之後啓御所、次宮司奉仕北廂御裝束、其儀各垂簾、西第一間敷筵、其上加半疊爲御座、(向艮方)御座前簾外立燈臺二基、毎間懸燈械、刻限出御于北廂御座、次供御帶、(疊鈍色布、中央以檀紙包之、納御筥居土高坏)亮持參、自北廂簾下附女房、次著御、(女房奉仕之)次令解給入御、(留御帶於御座傍)宮司撤御裝束、

○

〔類聚符宣抄四〕定皇太子服紀事

右、右大辨安倍朝臣安仁傳宣、左大臣宣、奉勅、令義解云、天子絶傍朞、三后及皇太子不絶傍朞、自今而後、宜依此文行之者、

承和十四年三月九日　　大外記朝原良道奉

〔日本紀略村上四〕康保元年四月廿九日甲戌、中宮藤原安子、崩于主殿寮、(年三十八、皇太子(冷泉)母也、)産生之後有此事、五月四日己卯、警固、明經道重勘申皇太子爲母后服制、幷坊司管諸司近習官臣從服、十一月

七日己卯、小除目、今日東宮、自内裏出御左近衞府、新嘗會之間依重服也、

〔日本紀略四村上〕天德元年十一月廿三日乙巳、東宮〇冷泉依伯母〇康子内親王服、鎭魂祭延引、

〔園太曆〕觀應二年三月十三日、入夜大夫參院、先日被仰合東宮〇後光嚴御輕服、及祭禮前日御服滿限日、可爲何樣哉事、〇中略

春宮可有御輕服哉否事

右被仰下偁、宣光門院〇花園后藤原實子者、爲山本入道相國〇藤原公守御猶子、徽安門院〇光嚴后壽子内親王者、春宮御養母之儀也、仍洞院入道大納言、奉爲春宮可爲御外戚從祖伯叔父御稱號歟、依彼入道大納言薨逝、猶可有御輕服哉云々、謹檢令條、服紀者外祖父母三月服、廿日假者、如斯父者、雖爲他人養子、著本生傍親服假、不可有所養傍親服假哉、然者入道大納言家、奉爲春宮御外祖父也、三月御服勿論歟、賀茂祭御神事、尤可有其憚哉、仍言上如件、

觀應二年三月十日　大判事坂上宿禰明成　前豐前守坂上宿禰明淸

被仰下偁、就洞院入道大納言家薨逝事、春宮御方、雖不可有御輕服之儀、依賀茂祭事、若猶可有御憚哉否、可申所存云々、服紀者外祖父三ヶ月、輕服卅ヶ日假之由、令條設文、然者奉爲春宮、可爲三ヶ月御輕服哉、但王法者崇神道、神道者可被奉隨王法之條、先儒所判炳焉之上、如此事、先々爲時議被定下畢、然者用捨之間、須在聖斷哉、仍言上如件、

觀應二年三月九日　左衞門大尉紀伊權介中原朝臣章有

明治三十三年三月廿五日印刷
明治三十三年三月三十日發行



神宮司廳

（白石製本所　製本）

昭和九年四月一日印刷
昭和九年四月五日發行

（普及版古事類苑　全六十冊）

發行者　後藤亮一

發行者　川俣馨一

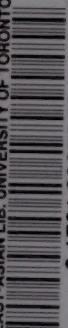
東京市芝區金杉新濱町十二番地

印刷者　和田助一

發行所
東京市小石川區竹早町三十二番地
内外書籍株式會社内
古事類苑刊行會
振替東京三一七〇〇番

發賣所
東京市小石川區竹早町三十二番地
内外書籍株式會社
振替口座東京八九六〇番
電話小石川(85)一〇五四番・三二六九番

單式印刷株式會社印刷


EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03058 8818